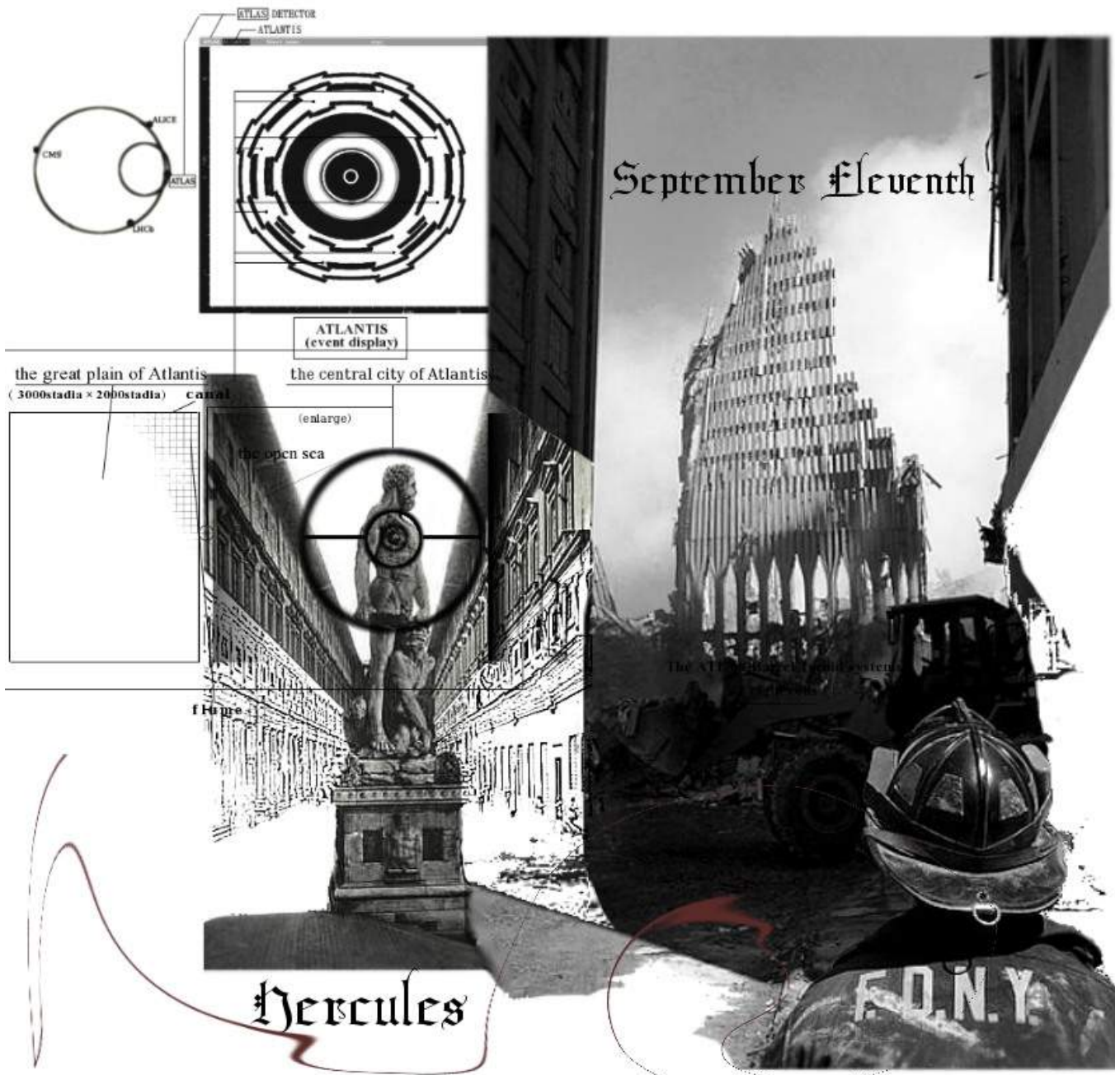


Entities that physicists refer to as Black holes , already fulfilled many extraordinary Predictions , and firm Guilty Intent

— [ I ] —



[はじめに]

## **The weight of evidence for an extraordinary claim must be proportioned to its strangeness.**

— Pierre-Simon Laplace, *Theorie analytique des probabilités* (1812)

尋常ならざる主張の証拠、その重みは主張の奇異さに応じたものでなければならない

— ピエール＝シモン・ラプラス『確率論の解析理論』（1812）より

※1 本稿では【摘示事項の奇異さ・異様さ】を顧慮してなによりも【証拠】の呈示に力を入れています（筆者、本来的には[筆者]などのかたちではなく[摘示者]とでも、始終、一人称表記なしの次第なのではありますが、本稿筆者たるわたくしこの身の枢要なる申し分がこれすべて属人的主観などではなく容易に後追いできるようになっている「堅い」ところの証拠「のみ」に拠っているとのこと、（出所示しての原文引用にての容易に後追いできる式での確認なしやすき式をとるようにしていますので）、可及的にご確認いただきたい次第ではあります）。

また、山なす摘示事項がいかように相互に多重的なる連関性を呈しているのか、そこに「確たる恣意性」の問題がいかように介在していると確言できるようになって「しまっている」のかにつきましても自然言語（日常茶飯の局面で用いられる言語）でのみの式をもってしても遺漏なくもの証示に努めもしているとの所存ではありますが（摘示事項がこの身およびこの身が守らんとするものの存在を否定する力学の体現物であると申し述べられるようになっておりますため、必死の面持ちで他者・第三者の遺漏なき理解を図るとの式での摘示をなしています）、さらにもってして上にその申し分を引いている科学史にあつての偉人とされるピエール＝シモン・ラプラスという人物——（同男ラプラスはダークスター Dark Star と呼ばれるブラックホールに通ずる【光を表に出さぬ程の重力を帯びた暗黒天体】のことを18世紀末（1796）に引き合いに出した（そして、現代的ブラックホール理解に通ずることとなったアインシュタインの時空間を一体とみる観点とはまったくもって異質であった同ダークスター概念を後に撤回した）との人物ともなります）——、そのラプラスが概念を煮詰めた科学者の世界で非常に有名な【ベイズ推定】といった科学言語を用いての分析など「も」本稿にあつての半ばもってしての付録の部（はなしが既にもって事足りているとの段に入りもしての半ばもってしての付録の部）にあつて（謙遜としての申しようなどではなく実際にそうだろうと判じているところとしまして、[本当に数学的嗜好があるとの向き]には見聞のようなものと受け取られるような式でながらも）なすこととしました——そちらベイズ推定を用いての確率モデルに基づいての分析部は数万余字を割き、ベイズ主義の基本的概念からはじめてすべて高校生でも理解できる式での念密なる解説を付しています——。

※2 本稿の内容をご覧いただければ間を経ずにご理解いただければよいことかと思いますが、本稿筆者は[終末論者]、世が終わると「非科学的・非論理的申しようで」鼓吹してはその終わりを回避する術についてなんら言及しないとの種別の人種などでは断じてございません。終末的狀況が人災で生じるとの方向にあるとの論拠が明確に呈示される状況であるのならば、「明示的に」指さされもするそちら方向を死命を賭してでも回避すべきであろうとの観点を有しているとの人間（具現化目算が明瞭としていることについて回避策を講ずることが出来ぬのならばそうした種族は滅ぶが必定と見つつもそういう観点を有している人間）として本稿を寸暇を惜しんで執筆しているのが筆者という人間であること、強くもここ冒頭の部より断らさせていただきます。さらに申し述べさせていただきたいところとして、直前、自身はそうした種別の存在ではないとの[否定]の言明をなしました（あとはその確認をなしでもらいたい次第でもあります）との[終末論者]という人種らが好んで引き合いに出すミシェル・ノストラダムス（多くの向きに言わずと知れた16世紀フランスの占星術師たるノストラダムス）のような類のこととしてきたような多義的解釈可能な申し分（ホロスコープ、星占いの類に依拠してのものとなり、理知的思考をなす者から見れば、『どうしてそれが担ぎあげられるのか』理解に失するとのいわばもってしての塵芥ちりあくたのような申し分）は、はきと述べ、部分的にもってしても本稿ではなしておりませ

ん。本稿にあっては明朗を心掛けての指摘に努めており、その指摘事項は「どういうわけなのか」我々人間の世界でほとんどもって問題視されることがないとの既の実現してきた「異様なる」—それが登場した時期の状況にそぐわぬ極めて克明なる具体性を帯びているがために「異様なる」—先覚性 (Premonition) を帯びての事物らが山なすものとして存在しているとのことにまつわってのこと、そして、それらはきと存在している異様なる先覚的言及事物らが相互に結びつきながら、「人間を滅する」との執拗かつ嗜虐的な意志表示を伴っていると判じられる式で同一方向を指しているとのこととなります。

### （「問題となる」先覚的言及 についての「極一例としての」例示として：

本稿を後半部までご覧いただければ遺漏なくもご理解いただけることかと存じますが、本稿にあって軸として問題とする LHC 実験という実験、史上最大とされる同科学実験は 2008 年に一端スタートを見て、その後のアクシデントを経、2009 年年末近く (11 月 20 日) に「本格的」スタートをきった実験となります。ここではそのことを指して【第一の基本的な事実】とするとし、加えて述べもしますところとして、【第二の基本的な事実】として同 LHC 実験についてはブラックホール生成可能性が「近年」取り上げられ出したとのことがあり、それはここ 10 数年の出来事となっており（無論にして科学界の主だつての関係者が「そうだ」と明言しての公的文書に依拠して、同じくものこと、述べられるところとなっています；「つい最近までブラックホール生成可能性など想像も及ぶところではなかった」と (本稿内で堅くもの動向摘示文書より引用し示ししますように) ノーベル賞受賞者を含む科学界に一樣に鼓吹されて「きた」とのことがあり、そして、そうもした「従前認識ありよう」が 1998 年に端を発する理論動向変転をもってして、一転、(ここ 10 数年で) 巨大加速器 LHC でブラックホール生成がなされる可能性があると言われ出したとのこととなっています）、そして、以来もってしてのここ 10 数年、

「新規理論から【加速器によるブラックホール生成】はありえると考えられるように「なった」が、しかし、それは「即時に蒸発し、危険どころか、却(かえ)って科学の進歩に資するとの人畜無害な粒ら、通年で加速器運転で 1000 万個単位で生成される「安全な」大量の極微ブラックホール(マイクロスコプティック・ブラックホールズ) 」にとどまる

と強弁され続けてきたとのことがありもします (そちら実験関係者ら主張の嚆矢は本稿本文でも解説いたしますところの 2001 年発のカリフォルニア大とスタンフォード大の物理学者らの論文となります)。またもってして、(【第二の基本的な事実】と分類してのことについての話を続け

近年になってブラックホール生成可能性「も」が問題視されだしたと直近言及しました LHC 実験というもののそもそももってしての正式採択時期は [ヒッグス・ボソン(ヒッグス粒子)の捕捉] といった大義のために (米テキサスでの建設計画が中途頓挫したとの [SSC 計画] という超巨大加速器建造構想に代わって) 欧州原子核研究機構 — 通称 CERN — に正式にゴー・サインを出された 90 年代「前半期」に遡りもしているとのことがあります (本稿本論部では欧州原子核研究機構の公的発表文書よりの引用をもってしてその点についての指し示しもなします)。

以上、[第一・第二の基本的事実のありよう] —— (把握未了ならば、直前までの内容を再読いただきたい次第なのですが、まとめますと、【第一の基本的事実】として [LHC 実験が本格開始を見たのは 2009 年年末近く (11 月 20 日) である] とのことがあり、【第二の基本的事実】として [ここ 10 数年より (建造完了し、近々運用開始を見るとの段階にあって) 欧州巨大加速器 LHC で極微ブラックホールが通年千万個単で生成される可能性がある] と「理論変転より」科学界にて主張されるように「なった」とのことがあり (それまではブラックホール生成可能性など想像も及ばなかったと科学界関係者に強弁されている)、そして、科学界関係筋には(それらが生成されうると最近考えられるようになったものであるとの) 生成ブラックホールは即時に蒸発し、安全な科学の進歩に資するようなものであるとされてきた (また、近年、ブラックホール生成可能性が問題視されだした LHC 計画のそもそももってしての正式採択時期はヒッグス粒子捕捉などが目的として掲げられてのブラックホール生成可能性など問題視されることもなかった 90 年代「前半」となる) とのことがあるとの [ありよう] となります) —— と真っ向から矛盾するようちょうど一九八〇年に世に出た特定小説が、(以下、そちら 1980 年初出小説作品の内容として)、「2009 年年末」と 2010 年年初の境目にある作中世界で「欧州機関による」加速器敷設型核融合炉プラントにて極微ブラックホールが数百万個単位で大量生成されることになり、関係者らに

はそれらはすぐに蒸発する安全なものである（七〇年代より提唱されていたホーキング輻射による熱放射を見る）と主張されることになる。が、現実には生成ブラックホールは地球を滅ぼすものである」との内容 —先覚性を呈しての内容— を有しており、そうした内容がことブラックホール生成に関しては「現実世界の理論展開となんら平仄があわぬサイエンス・フィクション・ライターに由来するフィクション上の設定」に依拠しているとのかたちとなっている —理由付け（途中プロセス）ではなく結果（結末）「だけ」は現実世界の議論動向をそのままなぞるとのかたちともなっている— とのことがあります（そして未来からの通信で世界の破滅を救うとの筋立ての当該小説ではブラックホールによる地球消滅が過去改変によって防がれた「とも」描かれます）。

問題は以上、「極一例として」摘示しました、

**【90年代末葉にあつての理論動向変転を受けての科学界発表ありよとの齟齬が際立つ（1980年初出小説に見る）【先覚性】の根】**

がどこにあるかではありますが（について「普通に考えれば」、主流派科学者の公式見解表明—ブラックホール人為生成などここ10数年になってようやく想像の及ぶことになったことであるとの公式見解表明— に欺瞞在の可能性ありとのことにもなるわけですが、そのことを当て擦（こす）るようなかたちで本稿筆者は自身が関わっていた行政訴訟、[国際加速器構想推進勢力の国内一大支部であり、国際実験であるところのLHC実験国内実験参加勢取りまとめ機関である公的研究機関を相手どつての国内行政訴訟]で同じくものことを第一審初期から法廷提出文書で指摘しておりました）、にまつわつて「さらに問題となること」について触れるとして、一転、「異常性が際立つ方向に舵を切り」（いいでしょうか、異常性が際立つ方向に舵を切りもし、です）、そうした克明性帯びての先覚的言及が「より巨視的な先覚的言及」「ら」の体系らに確として付属している「特異なる」要素らと相通ずるよう「にも」なっており、それが「人という種を皆殺しにする」（としか解しようがない）との意志表示と通じていると露骨に透けて見えるとのかたちに「できあがっている」とのことすらもが現実にあるのです — 無論にして話者正気を疑いたくもなるような異常・奇異なる話であるのは論を俟たない次第ではあります。だからこそ無条件にそれを信じてもらいたいなどとのことは申しません。代わりもしまして、容易に確認可能なる論拠の山を呈示しているとの私の「証示」の方向性を「この者、詐欺師の類ではないのか」との疑わしきに接するような観点でもってしても検証してもらいたいととにかくもって求めたい次第です— ）。

直近にあつての委細に踏み込まず（委細については「それだけでも」数万余字を割いているとの本稿本論部を確認いただきたい次第です）にもってしての極一例の【例示】としての先覚性にまつわつての表記が長くなりすぎたきらいもあると考えている次第なのですが、とにかくもってして、私が問題視しているのはノストラダムスの類がこととした多義的解釈可能な模糊とした予言などではなく、何故それがなされえたのかとの筋目の、それでいて何故、それが存在しているとのことが社会で問題視されることがないのか疑問に思えてならぬとの按配の、【具体性】との観点で際立ちもしている「既に（半ばもってして）成就を見ている先覚的言及の束」となりもし、そして、それら先覚的言及の束が相互に関係性を呈するとのかたちで指し示している方向性、執拗な意志（あるいは犯意）が窺えるところの方向性であること、ご理解いただきたい次第です。

I assert, I am never belong to unstable persons who are called “eschatologists”. I think that truly sound people ,mostly, would conclude doomsday-like-situation should be evaded at any costs if there turn out to be the [definite] mechanism which will bring to such a situation as the deliberately projected goal (– whether the mechanism seems (sham-) godlike , demoniac or industrial, it makes no difference) . And ,the main theme of this long paper is to make clear that there are many evidences , which are never Nostradamus-like- nonsense (with tremendous ambiguity) but are based on facts which anyone can verify without difficulty (-philological truth,widely recorded (historical) events,etc.) , about the existence of the (aforesaid) end time oriented mechanism via **【 the very man-made-disaster by controlled people 】** . I, in that point, never request readers to believe me without reservation but rather request to inspect my claims with critical consideration .



※ [委細を尽くしての細部] によって [本筋] を見失われないよう、ご注意くださいとのことにつきまして

それこそ「ざっと見」にてご一読いただくだけでもご理解いただけることとは存じますが、本稿は「非常に細々とした表記をなしているもの」となります。その点に関して文書製作者としては（非常に細々とした表記がゆえに）読み手の方々が文書主筋となる箇所を見失われかねない —（本稿が「なぜ」「どのような」問題意識をもって作製されたものなのか、その指し示事項は究極的には奈辺にあるのかについて把握するうえで難渋される（そして文書検討をおやめになる）とのことになりかねない）— とのことに危惧・懸念いたしております。それゆえ、ここ冒頭部にて次のこと、注意喚起なさせていただきますと思います。

（以下、文書内容についての冒頭部注意喚起としまして）

⇒「本稿の主要なる問題意識と訴求事項は文書タイトル — すなわちもってして Entities that physicists refer to as Black holes , already fulfilled many extraordinary Predictions , and firm Guilty Intent 『物理学者の類がブラックホールとよびならわしている存在ら、既に見てきた異様な予見的言及、そして、確たる他害意志の介在問題について』とのタイトル — にすべて集約されています。いかに細々としたものであれ、本稿中の記述はこれすべてそちら文書タイトルで表ししているまさにそのことを摘示「しきる」ために必要と判じてのものとして表記しております（脈絡・文脈なくも漫談じみた無為なるはなしを展開しようとの観点は全くございません）。微に入っ細やかな表記はそうもしてこれすべて【一つの目的に奉仕するために必要な手順】と判じてがゆえのものとなるのですが、他面、読み手銘々が一体全体何が問題になっているのか捕捉しづらいつのことが —（「ざっと見をまずもってなす」との嗜好が強い方ほど）— であろうかと書き手たるこの身が深く懸念していることにも相違ございません。そこで本稿を真摯に検討なそうとの方々には本稿が「厳密な意味での段階説明方式を採用している」とのことをご理解いただきました上での【文書の最初から順を追っての検証】を、何卒、願わせていただきたく次第でございます」

※ 本稿内の数多の出典紹介部、そのすべての記載内容の即時的かつ効率的な確認方法につきまして

本稿は申し分を支える根拠、その出所紹介を極めて重んじているものともなります（書き手として【我々の生き死に関わる事柄】を詳述詳解すべく死命を賭して作製しているとの本稿内容が実際にこれすべて【後追い可能かつ容易なる典拠】に基づいているとのこと、そのことを読み手第三者にご理解いただくことこそが何よりも肝要であろうとの認識があつてのこととしまして、です）。そのため、出典紹介部の比重が重くなっています。

さて、ここでは紙幅の多くをそこに割くとのかたちで本稿本文中に入れ込んでいる数多の出典紹介部らの内容すべてを、「都度」、必要に応じて即時的に確認するうえでの方式をご案内させていただきますと思います。

そちら【都度、即応的にすべての出典紹介部の内容を即時確認する方式】の実行の前提条件となることとしまして（出典の確認検証をなしたいとの方々におかれましては）まずもって本稿各巻巻末に全巻共通のものとして設けている【典拠紹介部ページ数一覧記載部】の内容「のみ」ご印刷いただきますよう（遺漏無くも確認にあつて必要なこととお含みいただきましたうえで「そこだけ」ご印刷いただきますよう）願わせていただきたく次第です。そして、印刷いただきましたうえでそちら【「数ページよりのみなる」各出典紹介部ページ数一覧】をお手元に置いていただきましたうえで —ここからがポイントとなる箇所なのですが— 別ファイル名で本稿と全く同じPDF ファイルを（お手持ちのパーソナルコンピューターにて）同時に開いていただきたく次第です（:まったく同一内容同一巻の本稿をかたやファイル名1、かやたファイル名2とのかたちの異なったファイル名称のPDFファイルとして「同時に」別ファイルとしてオープン・閲覧していただければ、とのこととなります）。

さて、まったく同一の本稿を同時並行的に別ウィンドウにて閲覧できるとの状況になりもするのが、既述の、【別ファイル名にての保存ファイル】を別々にオープンしたケースとなる次第なのですが、片方の電子ファイルを順繰りに検討している中で、たとえば、出典紹介部2の内容をなんとしても確認したくなつたとのことがあつたとします。といった場合、（最前にて「そこだけ」印刷のうえでお手元にご用意いただきたいと申し伝えさせていただきました）【「紙ベースでの」わずか数ページよりなる出典紹介部一覧】にて出典紹介部2は何巻何ページにて記載されているものなのか、一目にての確認をまずもってなしていただければ、と思います。出典紹介部一覧表記部における出典紹介部2のページ数（出典紹介部2ならば、具体的には本稿第一巻53ページから59ページ）を確認いただければ、そちら該当ページに掲載の出典紹介部の内容の確認を【（振り返って特定出典紹介部の内容が確認したくなつたところの）現在読解のセクション】から立ち位置を動かさずに「同時並行的に」なせもします。本稿PDF文書（便宜的に呼称して【File1】とのかたちで開いていただいているものとします）を閲覧しつつ、もう一方の【File2】名称で開いている別ウィンドウ表示の同じくもの、同一の本稿別名ファイルにあつてそちらPDF上の（画面上部にての）ページ数入力ボックスに【印刷した出典紹介部にて記載のページ数】を入力いただければ、【出典委細確認の必要を感じたセクションの表記の継続閲覧】と【（都度もってしての）出典内容の委細確認】を同時になせもします —確認対象と読解対象が同一巻数（vol.1からvol.4と分かちての本稿の同一巻数）に位置していても同時になせもします—（流れとしては【文書読解】→【疑問点表出（典拠出典番号として記載されている従前の出典表記確認の必要性の認識）】→【印刷した出典表記一覧部の該当出典紹介部のページ数の確認】→【文書名を分けて同時オープンしたPDFのページ数入力ボックスに出典紹介部のページ数の入力】→【File1での疑問点を感じたセクション以降の読解の継続とFile2での出典委細の確認の間断なくも同時実行】とのフローとなります）。

以上ご案内させていただきました手法を採択いただければ、ほとんど印刷することもなく都度、出典中身すべてを必要に応じて即時的に確認いただきながら長大な本稿の検証をなしていただけることと存じます。

## [ (いわばもの)冒頭題句の部 ] として

あるいはもってして『銜(てら)うにも程があるであろう』といった心証を抱かれかねないか、とも思うところなのですが、千句一言、長大なる本稿の性質および主たる訴求事項に通ずることの効果的強調をなすべくもの、「冒頭部引用(洋書によく見るエプグラフ;題辞に相当する引用)」 をここにてなさせていただきたいと思います。

If you think that your belief is based upon reason, you will support it by argument, rather than by persecution, and will abandon it if the argument goes against you. But if your belief is based on faith, you will realize that argument is useless, and will therefore resort to force either in the form of persecution or by stunting and distorting the minds of the young in what is called "education".

— **Bertrand Russell**

### **Human Society in Ethics and Politics**

(上に対する補いもしての拙訳として)

「仮にもし「自身の信ずるところ、それは[理]に基づいているものである」と貴殿が考えているのならば、その信ずるところを[迫害](による持説・所信と一致せざるところの否定)などではなく「議論」によって支持することとしているのであろうし、仮にもし、そうもした「議論」の結果が自身の信ずるところに反することになるのならば、貴殿は当初の所「信」を捨て去ることにもやぶさかではないはずであろう(正しい・正しくないを証拠や論理に基づいてのやりとりによってのみ判ずる、[理]によって判ずるとの当然の帰結として)。だが、もし仮に貴殿の信ずるところが([理]ではなく)[信仰]というものに依拠しているものならば、最早、そこでは「議論」は無用の長物と化す、貴殿は[迫害]によってか、あるいは、[[教育]と呼ばれもする若者ら精神を阻害・矮小たらしめる式——理とは多く相容れない歪で、反復的な式——]によつての[強制]の力にのみ正当性論拠を求めることになるであろう」

——バートランド・ラッセル『倫理と政治における人間社会』より

There is some soul of goodness in things evil,  
Would men observingly distil it out,  
For our bad neighbour makes us early stirrers,  
Which is both healthful, and good husbandry:  
Besides, they are our outward consciences,  
And preachers to us all ; admonishing,  
That we should dress us fairly for our end.  
Thus may we gather honey from the weed.  
And make a moral of the devil himself.

— **William Shakespeare**

### **Henry V**

(上に対する文意重んじての訳として)

「悪しきことらの中にも善なる魂、その片鱗があるものだ。

それを各々が明々白々に引き出せもするかが問題なのであり、我らは今まさに我々に害をなさんとする者達のために早起きなしている。これは健康的であるし、良きことかな、時間の儉約をもたらしてくれもする。

その上、彼ら我らに害せんとする者達は我らが外なる良心であり、かつ、また、我ら全員にとっての説教師、まったくもって軽んじざるべき説教師ですらある。

そう、(我らの命を奪おうとする)彼らによってさえ我らは最期の秋(とき)に備えて時宜に適っての扮装をなせもするのだ。

こうもして我らは雑草から蜜を集めもし、悪魔それ自体から道徳律を導き出しもするのだ」

—ウィリアム・シェイクスピア戯曲『ヘンリー 5 世』、アジャンクールの戦いに臨んでの王の言より(ここでは拙訳を付しもした次第ですが、同戯曲の分かり易くもの訳としてはたとえば、国内では小田島雄志氏の白水社版などを参照いただければと思います)

No one knows where the borderline between non-intelligent behavior and intelligent behavior lies; in fact, to suggest that a sharp borderline exists is probably silly. But essential abilities for intelligence are certainly:

- to respond to situations very flexibly;
- to take advantage of fortuitous circumstances;
- to make sense out of ambiguous or contradictory messages;
- to recognize the relative importance of different elements of a situation;
- to find similarities between situations despite differences which may separate them;
- to draw distinctions between situations despite similarities may link them;
- to synthesize new concepts by taking old them together in new ways;
- to come up with ideas which are novel.

Here one runs up against a seeming paradox. Computers by their very nature are the most inflexible, desireless, rule-following of beasts. Fast though they may be, they are nonetheless the epitome of unconsciousness. How, then, can intelligent behavior be programmed? Isn't this the most blatant of contradictions in terms? One of the major theses of this book is that it is not a contradiction at all.

—Douglas Hofstadter

### **Gödel, Escher, Bach: An Eternal Golden Braid**

(上に対する国内流通訳書に見る訳として)

「知的でない行動と知的な行動との間の境界線がどこに引かれているのかは、誰も知らない。実際、正確な境界線が引けると考えるのは、おそらくばかげたことである。しかし知性の本質的な能力として、次のようなものを挙げることはできる。

- ・状況に非常に柔軟に対応すること、
- ・偶然的な環境を利用すること、
- ・特定条件下で異なる要素らの相対的順位を捕捉すること(国内流通訳本訳出欠損部)
- ・曖昧な、あるいは矛盾する情報からその意味を読みとること、
- ・いろいろな相違によって分離されかねない状況の類似点を発見すること、
- ・いろいろな類似点によって結ばれている状況を区別すること、
- ・古い概念を新しいやりかたで結合することによって新しい概念を構成すること、



・新奇な着想を思いつくこと、  
ここで一見、逆説的なことにぶつかってしまう。コンピュータというものは、その本性からして、最も硬直的で、欲求をもたず、また規則に従うものである。いくら速くても、意識がないものの典型にすぎない。それなら、知的な行動をプログラム化することがどうして可能なのだろうか?これは最も見えすいた用語の矛盾ではなからうか?)」

——ダグラス・ホフスタッター著 (Gödel, Escher, Bach: An Eternal Golden Braid の訳書『ゲーデル、エッシャー、バッハ——あるいは不思議の環』(白揚社刊行の旧版), Introduction: A Musico-Logical Offering [音楽 論理学の捧げ物] の節、42 ページから 43 ページ)より (※機械的人間ならぬ自由なる人間、理と知を重んじ矛盾・錯綜する情報から重要な関係性を引きだそうという自由なる一個の人間にとって to make sense out of ambiguous or contradictory messages; to recognize the relative importance of different elements of a situation; [曖昧な、あるいは矛盾する情報からその意味を読みとること] [いろいろな相違によって分離されかねない状況の類似点を発見すること] とのところに最大限、[知] と [意] を傾けるとのことの重要性について強調したくもの引用としました)

Though the instantaneous destruction of the Earth is certainly more apocalyptic a concern, in reality, the latter questions are more appropriate to other discussions — such as those concerning global warming. Hopefully this chapter and the next will convince you that your time is better spent worrying about the depletion of the contents of your 401(k) than fretting about the disappearance of the Earth by black holes. Although schedules and budgets posed a risk for the LHC, theoretical considerations, supplemented by careful scrutiny and investigations, demonstrated that black holes did not. To be clear, this doesn't mean the questions shouldn't have been asked. Scientists, like everyone else, need to anticipate possible dangerous consequences of their actions. But for the question of black holes, physicists built on existing scientific theories and data to evaluate the risk, and thereby determined there was no worrisome threat.

— Lisa Randall

**Knocking on Heaven's Door**

**CHAPTER 10 BLACK HOLES THAT WILL DEVOUR**

(上に対する国内流通訳書に見る訳文として)

「地球が瞬時にして崩壊するという不安は、たしかに黙示録的なインパクトとしては大きいけれども、現実にいまいったような疑問を差し向ける対象は、むしろ別の問題——たとえば地球温暖化など——のほうがふさわしいだろう。この章と次の章を読んで納得してもらえるといいのだが、実際、ブラックホールによる地球の消滅にやきもきするより、自分の 401k(確定拠出型年金)の中身が減っていくことを心配するほうが、よほど有益に時間を使えるというものである。LHC にとってスケジュールの問題や予算の問題がリスク要因になったことはあっても、ブラックホール問題がリスク要因になったことは一度もない——これは純理論的な考えからいっても、それを補足する精細な調査によって、実証済みである。

誤解しないでほしいのだが、これは決して疑いを持つなということではない。科学者はもちろん、ほかの誰もとと同じく、自分たちの行動が危険な結果を招く可能性をきちんとあらかじめ考えておく必要がある。しかし、ことブラックホールに関するかぎり、物理学者は既存の科学理論とデータを積み重ねて、そのリスクを評価しており、それによって、心配すべき驚異は何もないと結論したのだ

—原著 2011 年刊行のリサ・ランドール著 **Knocking on Heaven's Door** 『宇宙の扉をノックする』(NHK 出版)、[第 10 章 ブラックホールは世界を呑み込むか] の章、243 ページ(訳書にての頁数)より

Before the 1990s, no one thought about creating black holes in a laboratory since the minimum mass required to make a black hole is enormous compared to a typical particle mass or the energies of current colliders.

—Lisa Randall

**Knocking on Heaven's Door**

**CHAPTER 10 BLACK HOLES THAT WILL DEVOUR**

(上に対する国内流通訳書に見る訳文として)

「一九九〇年代より前の時代には、実験室でブラックホールが生成される可能性など、誰も考えていなかった。なにしろブラックホールを生み出すのに必要な質量は、最低限でもとほうもない大きさだから、一般的な粒子の質量や現行の加速器のエネルギーを考えれば、まったく問題外だったわけである」

— 原著 2011 年刊行の上と同じくものリサ・ランドール著 **Knocking on Heaven's Door** 『宇宙の扉をノックする』(NHK 出版)、[第 10 章 ブラックホールは世界を呑み込むか]の章、245 ページ(訳書にての頁数)より  
(※)

(※以上はハーバード卒のカリスマ女物理学者リサ・ランドール —その提唱理論(RS Model)それ自体についても本稿の執筆が進んだ段階で解説なす所存の物理学者— の近著(ノッキン・ヘブンズ・ドア、『宇宙の扉をノックする』)にみとめられるブラックホール生成可能性に関する安全性にまつわる言、[ Planck Energy(プランク・エネルギー)というものの極小領域投下挙動が人間によっては再現不可能と考えられてきたこと]による安全性の言(を引用したもの)となるのですが、といった部が何故・いかようにして「種族の存続の可能性を否定する」人を喰いきった[欺瞞]の問題( deadly deception )に関わると判じられるかについて本稿では遺漏無くもの解説をなしていく所存です

We can fashion a conceptual bridge between Susskind's and Smolin's idea of black holes being the "utility function" (the property being optimized in an evolutionary process) of each universe in the multiverse and the conception of intelligence as the utility function that I share with Gardner. As I discussed in chapter 3, the computational power of a computer is a



function of its mass and its computational efficiency. Recall that a rock has significant mass but extremely low computational efficiency (that is, virtually all of the transactions of its particles are effectively random). Most of the particle interactions in a human are random also, but on a logarithmic scale humans are roughly halfway between a rock and the ultimate small computer.

A computer in the range of the ultimate computer has a very high computational efficiency. Once we achieve an optimal computational efficiency, the only way to increase the computational power of a computer would be to increase its mass. If we increase the mass enough, its gravitational force becomes strong enough to cause it to collapse into a black hole. So a black hole can be regarded as the ultimate computer. Of course, not any black hole will do. Most black holes, like most rocks, are performing lots of random transactions but no useful computation. But a well-organized black hole would be the most powerful conceivable computer in terms of cps per liter.

[ . . . ]

In 1997 Hawking and fellow physicist Kip Thorne (the wormhole scientist) made a bet with California Institute of Technology's John Preskill. Hawking and Thorne maintained that the information that entered a black hole was lost, and any computation that might occur inside the black hole, useful or otherwise, could never be transmitted outside of it, whereas Preskill maintained that the information could be recovered. The loser was to give the winner some useful information in the form of an encyclopedia. In the intervening years the consensus in the physics community steadily moved away from Hawking, and on July 21, 2004, Hawking admitted defeat and acknowledged that Preskill had been correct after all: that information sent into a black hole is not lost. It could be transformed inside the black hole and then transmitted outside it.

According to this understanding, what happens is that the particle that flies away from the black hole remains quantum entangled with its antiparticle that disappeared into the black hole. If that antiparticle inside the black hole becomes involved in a useful computation, then these results will be encoded in the state of its tangled partner particle outside of the black hole.

—Ray Kurzweil

**The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology**

**CHAPTER 6 The Impact . . .**

(上に対する国内流通訳書に見る訳文として)

「サスキンドとスモーリンの、ブラックホールはマルチバースの中の個々の宇宙にとって効用関数(この場合、ある進化の過程で最大限に活用される特性)であるとする考えと、私とガードナーの、知能を効用関数と見なす考えの間には概念上の橋を架けることができる。第三章で述べたように、コンピューターの能力はその質量とコンピューティング効率によって測られる。岩はかなりの質量であるがコンピューティングの効率はきわめて低いということを考えてみよう(この場合、コンピューティング効率とは内包する粒子の処理を指し、実質的にそれはランダムと言える)。人間も、その粒子の相互関係の大半はランダムだが、対数目盛りで計ったコンピューティング効率では、岩と究極の小型コンピュータのおよそ中間に位置する。

究極のコンピュータになるとそのコンピューティング効率はひじょうに高い。いったんコンピューティング効率が最適化されれば、コンピュータの能力を増す唯一の方法は、その質量を増やすこととなる。質量を十分に増やせば、その重量はブラックホールへの崩壊を引き起こすほど強力になる。それゆえ、ブラックホールは究極のコンピュータと見なすことができるのだ

もちろん、どんなブラックホールもそうだというわけではない。たいていのブラックホールは、たいていの岩と同じく、多くのランダムな処理を起こっているが、コンピュータとしては役立っていない。しかし、よく組織されたブラックホールは容積あたりのCPSという点では、もっとも強力に思考できるコンピュータとなる。

…(中略)…

一九九七年、ホーキングと仲間の物理学者キップ・ソーン(ワームホールを研究した科学者)は、カリフォルニア工科大学のジョン・プレスキルとある賭けをした。ホーキングとソーンは、ブラックホールに落ちた情報は失われると主張し、ブラックホールの中で起こったいかなるコンピューティングも、それが有用であるなしにかかわらず、外側へ送られることはありえないとしたが、対するプレスキルは、情報は取り出せると主張した。敗者は勝者に、役に立つ情報を辞典という形で贈ることにした。

それから数年の間に物理学界のコンセンサスはじわじわとホーキングから離れていき、そして二〇〇四年七月二一日、ホーキングは敗北を認め、結局はプレスキルが正しかったと声明した」

—レイ・カーツワイル著 **The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology**『特異点の時は近い。人類が生体組織を超越するとき』の邦訳版(原題に対してかなりのタイトル名意識がなされての『ポストヒューマン誕生 コンピューターが人間の知性を越えるとき』(現NHK出版刊行)にあつての **CHAPTER SIX The Impact...**(第六章[まさにその衝撃])の部、478 ページから 479 ページ(二〇〇七年に刊行された邦訳版にての頁数)より

In 1935 Einstein and physicist Nathan Rosen formulated "Einstein-Rosen" bridges as a way of describing electrons and other particles in terms of tiny space-time tunnels. In 1955 physicist John Wheeler described these tunnels as "wormholes," introducing the term for the first time.

[...]

In 1988 California Institute of Technology physicists Michael Morris, Kip Thorne, and Uri Yurtsever explained in some detail how such wormholes could be engineered.

[...]

They also pointed out that based on quantum fluctuation, so-called empty space is continually generating tiny wormholes the size of subatomic particles. By adding energy and following other requirements of both quantum physics and general relativity (two fields that have been notoriously difficult to unify), these wormholes could be expanded to allow objects larger than subatomic particles to travel through them. Sending humans through them would not be impossible but extremely difficult. However, as I pointed out above, we really only need to send nanobots plus information, which could pass through wormholes measured in microns rather than meters.

Thorne and his Ph.D. students Morris and Yurtsever also described a

method consistent with general relativity and quantum mechanics that could establish wormholes between the Earth and faraway locations. Their proposed

technique involves expanding a spontaneously generated, subatomic-size wormhole to a larger size by adding energy, then stabilizing it using superconducting spheres in the two connected "wormhole mouths." After the wormhole is expanded and stabilized, one of its mouths (entrances) is transported to another location, while keeping its connection to the other entrance, which remains on Earth.

[ . . . ]

Matt Visser of Washington University in St. Louis has suggested refinements to the Morris-Thorne-Yurtsever concept that provide a more stable environment, which might even allow humans to travel through wormholes. In my view, however, this is unnecessary. By the time engineering projects of this scale might be feasible, human intelligence will long since have been dominated by its nonbiological component. Sending molecular-scale selfreplicating devices along with software will be sufficient and much easier. Anders Sandberg estimates that a one-nanometer wormhole could transmit a formidable  $10^{69}$  bits per second.

Physicist David Hochberg and Vanderbilt University's Thomas Kephart point out that shortly after the Big Bang, gravity was strong enough to have provided the energy required to spontaneously create massive numbers of selfstabilizing wormholes. A significant portion of these wormholes is likely to still be around and may be pervasive, providing a vast network of corridors that reach far and wide throughout the universe. It might be easier to discover and use these natural wormholes than to create new ones.

—Ray Kurzweil

**The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology**

**CHAPTER 6 The Impact . . .**

(上に対する国内流通訳書に見る訳文として)

「一九三五年、アインシュタインとネイサン・ローゼンは[アインシュタイン-ローゼン橋]という、電子やその他の粒子がとおる小さな時空トンネルについて発表した。一九五五年、物理学者ジョン・ホイーラーはこのトンネルを「ワームホール」と表現し、その言葉を初めて世に知らしめた。

…(中略)…

一九八八年、カリフォルニア工科大学の物理学者マイケル・モリス、キップ・ソーン、ウーリー・エルツヴァーは、そのようなワームホールを設計する方法についてくわしく説明した。

…(中略)…

量子ゆらぎに基づけば、「真空の空間」は絶えず原子より小さなサイズの小ワームホールを作りだしているとも指摘した。エネルギーを加え、量子物理学と一般相対性理論(この二つの分野は統合が難しいことで知られる)双方の要求を満たすことにより、このワームホールは拡張され、原子より大きい物体も通れるようになるだろう。そこへ人間を送り込むことは不可能ではないものの、きわめて困難である。しかし、上述したように、実際には情報を付加したナノロボットさえ送ればいいわけで、そうなるとワームホー

ルの直径は、数メートルどころか数ミクロンもあれば十分だ。ソーンとその博士課程の学生モリスおよびユルツェヴァーは、一般相対性理論と量子力学のどちらにも矛盾しないで、地球と遠い場所を結ぶワームホールを作る方法についても述べた。彼らが提唱した技術は、自然発生した原子より小さいワームホールにエネルギーを加えて拡大し、さらに超伝導状態の球を用いて二つの[ワームホールの口]を安定させるというものだ。

…(中略)…

ワシントン大学(セントルイス)のマット・ヴィサーが提案したモリス-ソーン-ユルツェヴァー構想を改善したワームホールは、いっそう環境が安定しており、人間も通行できるようになっている。しかし、わたしの考えでは、これは不必要だろう。この規模の技術計画が実現するころには、人間の知能は非生物的部分が優位を占めるようになって久しいだろう。ソフトウェアとともに分子サイズの自己修復するデバイスを送れば十分であり、そのほうが簡単だ。アンデルス・サンドベルイは、一ナノメートルのワームホールは一秒あたり10の69乗ビットもの膨大な情報を送ることができると試算している。

物理学者デヴィット・ホッホベルクとヴァンダービルト大学のトマス・ケップハートは、ビッグバンのわずかのちに重力はひじょうに強くなり、そのエネルギーがあれば自己安定するワームホールが大量に自然発生できたはずだ、と指摘する。このようなワームホールの大部分はまだあちこちに残っていて、宇宙全体にわたって遠く幅広い地点を結ぶ広大なネットワークの回廊を作っているそうである。新しいものを作るより、このような自然のワームホールを発見し利用したほうがずっと簡単かもしれない

——レイ・カーツワイル著 **The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology** 『特異点の時は近い。人類が生体組織を超越するとき』の邦訳版(原題に対してかなりのタイトル名意識がなされての『ポストヒューマン誕生 コンピューターが人間の知性を越えるとき』(現NHK出版刊行旧版)にあつての **CHAPTER SIX The Impact...**(第六章 [まさにその衝撃])の部、466 ページから 468 ページ(二〇〇七年に刊行された邦訳版にての頁数)より(※))

(※ここで引用したのは米国のカリスマ発明家にしてカリスマ起業家として知られるレイ・カーツワイルの[技術的特異点]というものについて論じた著作 —— **The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology** —— における記述となるのですが、同じくもの引用記述に見る遠大、あるいは、Science Fiction がかって気宇壮大に過ぎるとの未来予測が何故にもって[具体的危険性]の問題に関わりもしているのか、長大なるものながらも本稿を順を追って検討いただくことで理解いただけることと存じます)

——無意味なる雅文嗜好や褒められたものではない術学趣味ゆえにではなくに強調の用に供せられれば、との意図にての[ (いわばもの) 冒頭題句の部 ] はここまでとします——

(これ以降は[「手短にも、」のながらも目次部]を経もし、早速もってして本稿の中身に入らせていただきたいと思います)

## 本書第一巻 (vol.1) の構成

重要事、その異論など生じようもなかろうとの典拠明示に先駆けて、申し述べておきもしたきこととして

(うち、【まさに問題になることの性質、および、問題となる事柄に対する本稿筆者の従前取り組み具合と本稿での指し示し手法】について言及なしもしているとの部) ..... p.15

(うち、【そもそも加速器実験とはどのようなものなのか、および、加速器実験におけるブラックホール生成可能性とはどのようなものなのか、との点ら】について解説なしもしているとの部) ..... p.29

加速器実験に伴う容易に摘示かつ確認可能となっている欺瞞性、そして、そこより証示なせもすることについて

(うち、【加速器実験機関 (およびそれらを包摂させての科学界) における発表動向と間尺がなんらあわない予見的言及が存在しもしているとのこと】について解説なしもしているとの部) ..... p.36

(うち、【科学界発表動向に関し顧慮すべき背景事情】について解説なしもしているとの部) ..... p.154

加速器実験特性に通ずる予見的事物ら、そして、その他奇怪なる予見事物ら、それらの間に横たわる [ある種の執拗性] の問題に関して「まずもって」摘示するところとして

(うち、【本題として問題となりもすること、その委細に踏み込む前に申し述べもしたきこと】について言及なしもしているとの部) ..... p.303

(うち、【予見的文物らの間に横たわるある種の執拗性】についてまずもっての例示をなしもしているとの部) ..... p.318

Inferno『地獄篇』などの古典に見受けられるブラックホール近似物と既に摘示してきたことらとの異様なる多重的相関関係について

(うち、【ダンテ古典『神曲;地獄篇』およびミルトン古典『失樂園』にあつての記号論的に通じ合う部分らが現代的な観点で見てのブラックホールの近似物をそれぞれ別個の近似性を伴ったものとして目立って描写しているとのこと】について解説なしもしているとの部) ..... p.801

(うち、【古典に見る先覚的言及部が (現代) 社会の諸事象 —LHC実験そのものを含む (現代) 社会の諸事象— と [ルシファー] [トロイア崩壊] との共通項を介して多重的に結びつくようになってしまっているとのこと】について解説なしもしているとの部) ..... p.848

各[典拠紹介部]記載箇所一覧表記部 ..... p.1104



# 重要事、その異論など生じようもなかろうとの典拠明示に先駆けて、 申し述べておきもしたきこと

(本稿筆者がLHC問題関連訴訟を【国内行政訴訟】として提訴、(長くもかかずらうこととなつた)そうした挙までをも一助に特定の事柄を訴求しようとしてきたとの人間であるとのことについて / 申し述べるどころの訴求事項とはどういったものなのかについて)

まずもってそのことより申し述べもしたいところとして、である。LHC実験 —(委細後述の【史上最大級の科学実験】と表されるところの国際加速器実験)— に伴う【常軌を逸しての欺瞞性】、そして、【人間存在を根本から嘲笑うが如くもの嗜虐的寓意】の問題(本稿全体を通じて詳述することにもなるとのまさにその問題)についてかねてより思い至るところがあったため、

**【国際加速器マフィアとされもする紐帯 (IFCA こと International Committee for Future Accelerators と表されもする紐帯;世界各地の主要加速器研究所所長と研究代表者で構成される紐帯) にあつて枢要な立ち位置をなし、LHC 実験 に公金でもって組織的に関与してきたとの日本国内権威の首府たる研究機関を向こうにまわしての「国内行政訴訟の提訴」】**

を意図してなし、「訴求の用に供すためだけに」そちら訴訟に関わつてきもした(※)との者、そうした者として小閑を偷(ぬす)んでしたためもした「[危機的状況の訴求]・[証拠呈示]のための」文書が本稿となりもする。

※本稿筆者が原告として提訴、長くもかかずらうこととなつていた [LHC 実験関連訴訟] についての付記として

・同訴訟は国内にて2012年に提訴なし、その第一審からして年度にして2年、本稿のここ書きはじめの部をしたためもしている2014年まで続いていたとのものである(記者会見が被害者らによって開かれた大規模宗教団体関係者による通話履歴漏洩事件を巡る顛末などを無視、存在しないがようにまったくもって報じてこなかったといった前歴がある、他面、その他のありとあらゆる愚にもつかぬ[事件]らは積極的に報ずるとの体制にて使役されている節ある東京司法記者クラブ出入りの面々にあつては、そも、興味関心の対象外であつたようではあるが、とにかくも、そういう訴訟を水面下でたたかつてきたというのが筆者という人間である)。その点、本稿筆者が仮に単純に [おかしな人間 —— 残念ながら世間にて吐いて捨てるとの取り合ふに足らぬ類 —— ] であるのならば(そう、質的狂人の類でも訴訟は提訴できる)、訴訟はなんら[理]なきところとして即時棄却 dismiss を見、第一審からして年度に2年は続かなかつたらう(と強調したい)。につき、本稿をしたためもしている者(筆者)の水準、および、本稿にての筆者訴求内容の重要度を推し量るうえでの材料として[そうもしたこと]をも斟酌・一考いただければ、と申し述べたい次第である(：筆者申しよふの理非の判断にて最も肝要なることは各自銘々が本稿の中身を直に(批判的視座にてでも)検討いただき、話の展開・状況訴求に行き過ぎ・言い過ぎの類があるか見極めていただくことでありましよう強調もしたい中で「まずもつてはも、」の間口の問題として書き記すところとして、である)。

・同訴訟は2014年現時点をもってして「国内「初」かつ「唯一」のLHC 関連訴訟」となっている —— 「現行、」[(世間的には)まともと見做される筋]より一切、取り上げられざるもの挙となっているが、とにかくも、同訴訟、そうもした訴訟となっている —— 。

・同訴訟にあつての

[[法律上の争訟]としての性質]

[法廷でのやりとりそれ自体からして現出していた先方実験機関の主張にみとめられる[欺瞞性][不品行]のありよう(不誠実な[逃げ]を観念すれば、先方実験機関が雇った弁護士ら由来の欺瞞性であるなどと強弁されかねないが、筆者には法廷での[欺瞞性][不品行]の多くが先方研究機関「それ自体に」端を発していると指摘できる) ]

については時機を見、別途、委細に踏み込んでの(「本稿ありようとは色彩が変わつての)世間的常識のみに基づいての解説媒体を設けたい —— 訴訟解説資料については「これは、」と見た向きに従前から水面下で頒布なしてきたとことがあるわけだが、ウェブ上などにも常識的解説媒体を設けたい —— と考えてもいる( またもってして、本稿それ自体の中でも当該国内訴訟について「申し分け程度に」もの言及・解説をなすこととして いるとのこと、ここに記しておく)。

直上にて言及の訴訟のことなどについては『姑息的であざとい、目立つようなこと(あるいは普通ならば目立つようなことか)を小賢しくもする』といった心証を抱かれる向きなども、もしかしたらば、いるかもしれないが(本稿筆者をして[(このような世界で)売名行為の類をなす俗じみた人間]と特段に判じたいとの向きならば、のように見ようとするとか、とも思う)、とにかくもつてのこととして、である。筆者この身がどういったかたちで【重要事と同定するに至った事柄の訴求】に力を入れてきた者なのか —— (再言するも、常識世界での行政訴訟といったもの「さえ」も(自己目的化したものではなくに)「ひとつの」具材にするなどしてLHC 実験というものにまつわる問題性についての訴求に力を入れもしてきたとの筋目の者がこの身となる) —— とのこと、および、そうもしたかたちでの書き手の力の入れようの背景にある危機意識、その危機意識をもたらした「具体的な」事由らを呈示しきるための文書としてしたためているのが本稿であるとのこと、何卒、ご理解いただきたく次第である。

以上のこと、冒頭部にあつて申し述べもした上で、である。同じくも冒頭開巻劈頭(へきとう)の部と位置づけもしての以下幾ページかにあつて本稿の全体的ありように関わるどころの表記を(本題に入る前のこととして)なしておきたい。

さてもってして、それこそ最初に申し述べもしておきたいことなのだが、本稿では

[ひたすらに具体的事実をつまびらやかにする]

との式にて属人的主観の類などは本来的に問題にならぬし、問題とすべきではないとの、

[人間の危急存亡の問題に関わる[欺瞞]がそこに「はきと」存在していること]

[上の[欺瞞]の構造が「極めて根が深いもの」となっていること]

の両二点についての摘示をなしていくことになる(それが大言あるいは妄語がゆえの申しようではないとのこと、何卒、確認を請いもしたいところとして、である)。

その点、上記二点のこたら —— それら二点のこたら、何度でも斟酌なしたきところとして初見の向きが目によれば、首をかしげるか、『大上段にもものを言い過ぎる』との心証を抱くか、とのこたらでもある —— を証して示す、具体的なる[証示]のための段に入る前のこととして、である。取りあえずものこととして続けての図をご覧いただければ、と思う。

## APPARENT

[誰であれその正否・黑白について確認できるようにになっている[個々の事実]らが存在しているケース]であって、なおかつ、それら[個々の事実]ら相互に複層的な繋がりが存在しているとのことを「指し示せる」場合に[[事実]群の間にある堅い関係性の集積]のみを依拠して[「そうである」と]摘示できるとの事柄（性質上、個人の予断の類が介在する余地が何らないとの事柄）

## UNCERTAIN

[経験]を共有する一部の者以外、真偽判断なせないとのことが俎上にあがっているために個人の偏見・予断がどの程度介在しているか判然とせず、「論」(セオリー)に留まっているとの性質の事柄（真偽の程は置き、一般的に[[個人的な]考え]・[推測]・[推察]といった側面を出でぬものとの判断を[公平で、知的に問題がないとの第三者]にもなされようとの事柄）

[グレー(灰色)の領域] (uncertain[真偽不明なる]領域)

と

[「合理的に疑える」といったレベルを軽々しくも越えての[黒]の領域]（"Beyond Reasonable Doubt" (法律用語にて証拠取捨選択に関わる)「合理的な疑いを越えて」のありようから "without any doubt" 「疑う余地もなく、」に至るまでの領域）

の合間にある分水嶺

[「分水嶺を越えその」それをなすことに意味・意義があるとの摘示をなすことに一意専心なさんとしているとの者として強くも述べておきたいこと]

「本当に健全なる人間はそれが生き死に関わるものであるならば、あるいは、少なくともそのように考えられるとの余地があるのならば、多数の「明確なる」証拠らに依拠して指示される明らかな関係性を無視しないだろう。そして、明言しておくが、指し示しに特化した本稿は[[記録としての事実]それ自体との数多の「明確なる」証拠ら]によって指し示される「多重的」相関関係「のみ」を重視するとのものである」

## Beyond boundary ,

This paper takes account of only this field.

(: Truly sound people will not ignore obvious correlations indicated by quite a lot of "clear" evidence , if those relationships are connected with our lives or at least they do seem to be so . And, this long paper, I declare as the author , is one which think highly of only such obvious correlations. )

図に付しての日本語解説部をご覧いただければお分かりいただけようことかとは思いますが、上は

[「誰でも容易に裏取りなせる確たる事実ら」及び「それら事実の間に横たわる

多重的な繋がり合い]の呈示から個人の主観など問題になる余地もなくそうであると明言できる事柄]

と

[真偽不明さがゆえに「論」(セオリー)にすぎぬ(「論」に留まり続けている)との事柄]

との間に横たわる分水嶺

を示さんとすべくもの図となる。

図にて強調表示しての[分水嶺]を越えて、

「確実にそうであると述べられる」

ところを切り分けして、

[読み手に確証をいただけるだけの膨大な典拠ら]

と共にそのありようを呈示するとのかたちで最前、ほんのつい先立って言及したことから、

[人間の危急存亡の問題に関わる「欺瞞」がそこに「はきと」存在していること]

[上の「欺瞞」の構造が「極めて根が深いもの」となっていること]

の両二点の[異論など生じえもしなかりとうの实在]を指し示す...、そうした趣意の下、手間暇を惜しまずに作成したのが本稿となりもする(：マインドの面としてそうした挙をして「これ壮なり」と見るか、あるいは、不快なるやりようを見做すか、読み手個々人がいかようにとらえるかに筆者は頓着しない——要らぬこと、属人的目分量の問題について言及すれば、である。筆者としては『重要事にあつては[具体的に[証示]なせるとの真実]のみが人間を救うるとの([十分条件]ならぬ)[必要条件]を満たしている、それが眼前に十全に呈示されたうえで何も策(て)を打たぬ種族ならばどうしようもなかりとう』との観点に基づいてただひたすらに真実の呈示を本稿にて重んじているわけだが、([滅]であれ[続]であれ)[結果が全て]の世界で(ミクロの問題として)各自が属人的特性に付随して事実をいかように受け取るか、その心情には頓着しない——)。

いましばらくも証示それ自体の話に入る前の[まずもっての話]を続ける。長大なるものとなる(と前言するところの)本稿、そのここ書き出しの段からして、

「[具体的事実]らをつまびらやかにするとのかたち(すなわち、[具体的事実]らを判断の基礎に置くとのかたち)にて属人的主観の問題などは本来的に問題にならないし、問題とすべきではないとのことの指し示しをなす」

とのことを述べているわけだが、では、そこにて判断の基礎に置くとの

[具体的事実]

とはいかようなものか。

そこからして定義を明示しておく必要があると判じもし、言及しておくが、ここ本稿で問題としている[具体的事実]とは

[特定の性質を帯びた「記録的」事実]

のことを指す。

特定の性質を帯びもした「記録的」事実。



すなわちそれは、

「特定の公的資料・古典および近現代の著名文物ら[流布されての(史的)記録]にこれこれこういう記載がなされているとの[文献的事実](Philological Truth)として残っている、あるいは、[流布されての「映像的」記録]として尺何分の映像作品の再生パートこれこれの部にて再生確認可能となっているとのかたちで残っている」  
とのことがある上に、なおかつ、  
「世間一般の人間が極めて容易にその旨をオンライン上や流通書籍にあってその通りであることを確認できる」  
との事実

のことを指す。

本稿では以上のようなものであるとはきと言明しての[記録的事実]らを後追い可能な抜粋とのかたちで——指定した通りのところを閲覧すれば「誰でも第三者が容易に後追いできる」との抜粋とのかたちで——抽出し、もって、それだけをもってして本稿にての指し示し事項の[証示]の材とする。

換言すれば、本稿ではそうした[記録的事実]が伴っていないところは状況訴求にての基本骨格とはせず([記録的事実]が伴っていないところは余事記載・傍論・印象論の類と事前に断つての言及をなすに留め)、[記録的事実]「のみ」から導き出せるところとして、

[[恣意の賜物でなければ何なのか、との極めて特徴的な要素]にまつわる「多重的」「相互」関係]

を呈示、そこよりもって、

[人間の危急存亡の問題に関わる[欺瞞]がそこに「はきと」存在していること]  
[上の[欺瞞]の構造が「極めて根が深いもの」となっていること]

の両二点の[証示]に全力を傾けることとする。

---

## 本稿にての[証示]のプロセスにまつわる解説として

直上直近の段にてまさしくも問題となるとの事柄らの[証示]に全力を賭していくと申し述べているわけだが、その

### 証示の具体的プロセス

についてここにて「視覚化なしながら」解説を——(話が長くなって望ましくはないとの認識もあるのだが)——証示そのものの段に入る前になしておく。

まずもって直下にての図をご覧いただきたい。



## Step 1

[Ascertaining Facts] Process ( [Fact Finding] Process )

considerable facts

⇒ facts which anyone can "verify" without difficulty (philological truth, widely recorded (historical) events, etc. )

第一段階、それは [ [事実] の呈示と確認のプロセス ] である。

⇒ そして、この場合の [事実] とは誰でも容易に確認できるとの事柄ら、たとえば、[文献的事実] (特定の文献・資料にこれこれこういう記載がなされているとのかたちで確認容易となっているとの事実) や幅広いかたちで記録が遺っているとの歴史的記録などの [事実] として難なく納得できるものらを指す (無論、そのことを示す出典紹介も遺漏なくもなす)。

## Step 2

[Exhibiting [Correlations between (aforesaid) Facts] ] Process

第二段階、それは [ 第一段階で呈示した事実らの間に成立する相互関係を摘示するプロセス ] である

表記図では

[指し示しにあっての [第一段階] (Step1) ]

として

[ 個々の事実らの [呈示] と [確認] のプロセス ]

を — それがいかなうものなのか視覚的に訴求しつつ — 挙げもしている (そちら個々の事実の呈示・確認のプロセスについては英文にて Fact Finding のプロセスと図内にて表記しているところともなる)。

そこにて問題となる事実らは (先述の通りの) [記録的事実] となるわけだが (つい上の段にて申し述べたことを繰り返せば、本稿で重んじるのは唯、「特定の公的資料・古典および近現代の著名文物ら [流布されての (歴史的) 記録] にこれこれこういう記載がなされているとの式での [文献的事実] (Philological Truth) として残っている、あるいは、[流布されての「映画的」記録] として尺何分の映像作品の再生パートこれこれの部にて再生確認可能となっているとのかたちで残っている」との事実にして、なおかつ、「世間一般の人間が極めて容易にその旨をオンライン上や流通書籍にあってその通りであることを確認できる」との事実だけ

である）、それら【記録的事実】の呈示のために本稿にあつては

【数多の出典紹介部】（連番でナンバリングしていくとのそれら自体、長大なる出典紹介部）を設けている、筆者指し示しを網羅的にカバーするもの・誠実なる読み手の十全の納得を得られるものとしての【出典紹介部】を設けていると申し述べておく（細かくは続いての本稿本論部の内容の検討でもって理解いただけるであろうとのところとなる）。

次いで、同じくもの上にての図では

【指し示しにあつての【第二段階】（Step2）】

として

【（第一段階にて呈示の個々の事実らの間に成立している）相互関係を「指し示す」プロセス】

のことを挙げている。

そこにての相互関係とは —— 先にてもその旨、一言、述べているが——

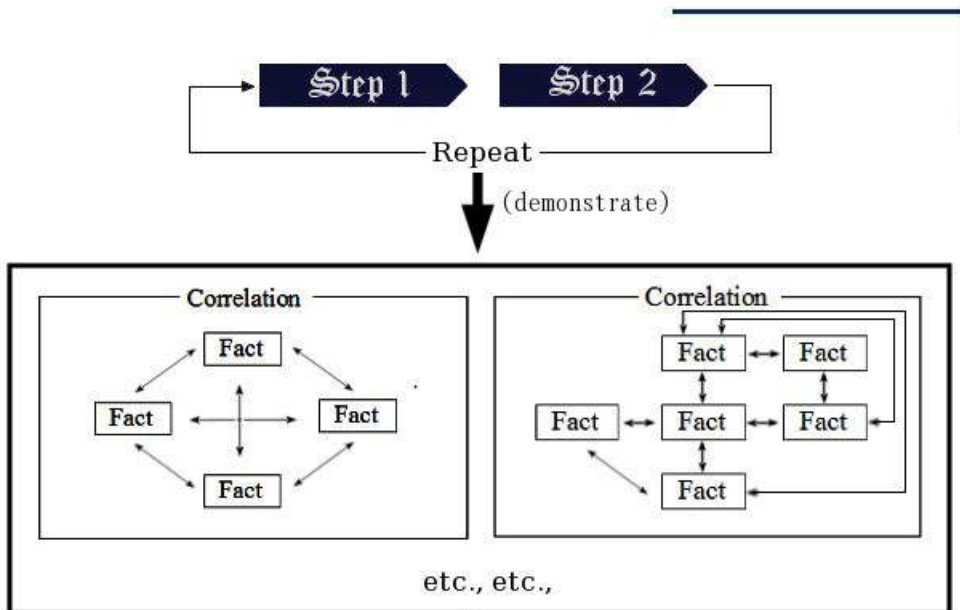
【[恣意の賜物でなければ何なのか、とのことが問題になるとの極めて特徴的な要素]にまつわる「多重的」「相互」関係】

とも言い換えられるものとなる。

以上、言及したうえで申し述べるが、本稿では上にて視覚的に図示なしてもいる【第一段階】（Step1）及び【第二段階】（Step2）のプロセス —— くどくも再言なせば、【第一段階】（個々の事実らの【呈示】と【確認】のプロセス）及び【第二段階】（第一段階にて呈示の個々の事実らの間の相互関係を「指し示す」プロセス）の各プロセス—— を「交互に繰り返す」ことで【多くの事実関係の摘示】をなしていく。

下に視覚化しているようなかたちにて、である。

（Facts【各事実】らの間に成立する Correlation【相互関係】のモデルたる図として）



第一段階（個々の事実の摘示と確認）と第二段階（複数事実の間の「相互」関係の摘示）のプロセスを繰り返す。

そして、いくつかの【相互関係】を炙り出す（それら相互関係がどういったものかは上にて図示なしている通り。【相互関係】が【相互関係】たる所以として各事実らがお互いに【関係性を示す矢印】で結ばれていることに留意）。

(今しばらく [本稿にての証示のプロセスの視覚化しての解説] を続けるとし、)

先掲の図らを通じて視覚化を試みている通りの第一段階と第二段階(の両プロセスの繰り返し)にて摘示なしもしていくとの複数の事実関係について本稿では「**第三段階(Step3)として**」

**[各事実「関係」を包摂するより巨視的な意味での関係性]**

がそこに成立しており、なおかつ、その巨視的關係性にあつて

**[特徴的な要素]**(際立ってユニークな要素でもいい)

の共有がとみに、露骨にといった按配でとみにみとめられるとのことの摘示をなすのに「さらにもつて」努めていく。

視覚化すれば下の図にて示すようなかたちにて、である。

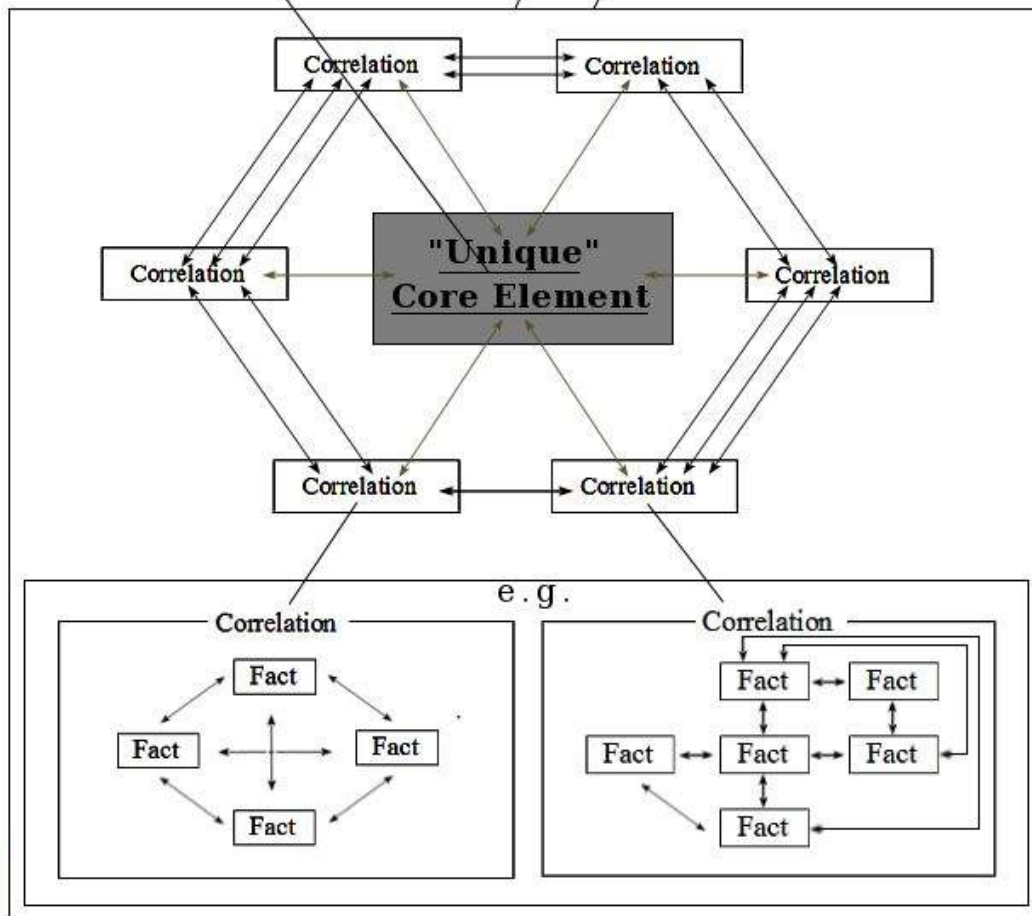
### Step 3

#### Exhibiting [Multiple Connectivity of (aforesaid) Correlations] Process

第一段階と第二段階を何度か繰り返し(意味は上述)、いくつもの相関関係を摘示する。そのうえで第三段階に入り、

[ (第一段階と第二段階の繰り返しによって) いくつか摘示してきた相互関係ら]

それら同士の間にてより巨視的な意味での相互関係が成立していること、また、[それらいくつかの相関関係にあつての多重的關係性]に「共通の核となる」独特な要素の共有がみとめられることの摘示をなす(下の図を参照のこと)。



直前図にて視覚化試みているプロセス —— [ Exhibiting [Multiple Connectivity of (aforesaid) Correlations ] Process ]と英文表記もなしもしているプロセス —— にて示さんとしている、

### [複数関係性が指し示すところの「巨視的」関係性]

がいかなようなものなのか、極々単純化させての[例示]表記をなしてみる。

Aさん、Bさん、Cさん、Dさんの間には「お互いに」（「一方的」ではなく各人同士が知り合っているのであろうとのかたちで「お互いに」）もの繋がり合いが見てとれる。

従って、Aさん、Bさん、Cさん、Dさんは  
[グループ I]

に属すると分類できもする（このレベルでは小規模の仲良しサークルといったありふれた紐帯のようなものとも判じられもする）。

他面、グループ I に属するとの Aさんと「別の」EさんとFさんとGさんの間には（Aさんだけ重複するかたちで）繋がり合いが見てとれる。

従って、AさんとEさんとFさんとGさんは  
[グループ II]

に分類されることになる。

ここで[グループ I]と[グループ II]につながり合いがみとめられること自体は別段、奇異ではない（Aさんという特定の個人が双方グループに関わっている程度の問題として、である）。

だが、同文同様の繋がり合いが2グループどころか「数十のグループに渡って相互に関わるとの式で当てはまっております」、—— ここからが重要なのだが —— 、なおかつ、「それら繋がり合いを有するグループの少なからずの者達には揃って[特定の色]（たとえば、[共通の建物]）に出入りしている／[共通の独特なるドグマ]を奉じている）が伴っていると指し示せるようになっている」とすればどうか。

それらグループ（の少なからずの成員）は  
[特定の巨大な紐帯]（宗教でもいいし結社でもいいし何ならばネズミ講でもいい）  
の[サブ・ユニット]（細胞）として組織的に動いている可能性がある」と「当然に」類推される場所となる．．．。

強調するが、上は[例示]表記としての話にすぎない。その点、本稿筆者は本稿にて特定の組織がどうのこうのといった[人的紐帯]のことなどをそこに[問題の根]が凝集しているように問題視するつもりは「ない」わけだが（そのように「事物ベースではなく表だつての人間関係に基づいてのこととして」問題を論じようとするのは多く下らぬ陰謀論者、ないしは、陰謀論的なやりようをとる向きかと現時、筆者は見立てるに至っている —（直下にあつての、にまつわつての断り書きをも参照のこと）— ）、とにかくも、[相互関係の特性]として上のようなことに通ずることを —— 比喩として人間関係のことを例にもちだしたが、それを[事物の関係性]に換えてのこととして相互関係の自明なることを示すとの式で —— 本稿では「はきと」摘示なししていく（：[人間の危急存亡の問題に関わる[欺瞞]がそこに「はきと」存在していること][そちら[欺瞞]の構造が「極めて根が深いもの」となっていること]との先述のことらに関わるところの事実関係を「はきと」摘示していく）。

（陰謀論者やりようとの差異性について訴求すべくも「一応」、以下のこと、断っておく。

**Although this long paper deals with [ foretelling problems ] which are**



related with masonic symbolic system deeply , I don't cling to point of view that such organizations as Freemasonry (or "legendary" Illuminati) are chief conspirators behind significant incidents. As an author of this evidence-based paper, I never intend to maintain "self-belief-system" avoiding the sterile land of conspiracy theorists who persist in conspiracy "theories" such as [ NWO conspiracy theory ] , [Illuminati (that organisation can't be identified exactly) conspiracy theory ] or [(fictional? ) power obsessed human elite circle conspiracy theory].

「長くもなるこの本稿にあって本稿筆者は

[フリーメーソンのシンボル体系と濃厚に接合する「前言」事物]

らがあまりにも露骨に多数存在しているとの問題についても取り扱うが(具体的事例を多数挙げながらも取り扱うが)、だが、だからと言って、(本稿それ自体にて)フリーメーソンのような組織体が重要な出来事の背後背面に控えるフィクサーとしての陰謀団であるとの見立てを押し売りしたいわけではない。

フリーメーソンのシンボリズムを異常異様なことに流用する力学があるとは具体的事実を挙げ連ねて指摘しますが、[チェス盤上の駒]が陰謀の立役者であるなどとは考えていないし、そのようなことを目立って訴求するつもりもない。

またもってして筆者は陰謀論者よろしく[新世界秩序陰謀論][イルミナティ(という実体不明瞭なる組織体)に関連する陰謀論][「人間の」権力それ自体に固執するエリート・サークル(架空存在たりうる)による陰謀論]ら陰謀論の不毛なる領域に固執するような人間でもない —— 尚、筆者が[陰謀論者にとっての金城湯池(たる陰謀論の領域)]をして the sterile land【不毛なる地】と殊更に表しているのは現時、目につきやすくなっているところの陰謀論 Conspiracy Theories あるいはその撒布のための媒体らにあっての相応の特性を捕捉している、「【分断】と【不信】の根を人間社会に広める」( divide and rule「分断して統治(無力化)する」との観点で disbelief [不信] の根を広める) ためか、でなければ、「稚拙・陳腐化させて問題となるところを矮小化するためであろうと露骨に判じられる式で【詐欺・捏造で満ち満ちた( filled with frauds and forgeries )劣化情報】(たとえば子供騙しの幼稚な加工写真や加工映像)を撒布しているとの目立ってのありようを捕捉するに至っているからである(にまつわっては本稿の後の段で折に触れもしての微に入っの解説を講ずることとする) —— 」

(:[本稿が陰謀論者やりようと訣別することにした人間なりの手仕事であることは本稿に対する最低限の読解をなしていただければお分かりいただけるであろう]とのことなるようにしているつもりなのだが、そうもあっての中ながらも、言葉尻をとらえるように、

[ [ 陰謀論者由来の申しよう — [本質的問題] を抜きにしてたかだかもの傀儡(くぐつ Puppet)の皮相的紐帯に人類(種としての人類)の悲劇が凝集しているように鼓吹しもするとの申しよう — ] と本稿指摘事項を同種同一化なさしめようとのやりようをなさんとする ]

のは、はきと述べ、筆者の側には決して立ちはしまいとの筋目・筋合いの類の挙、重要事を馬鹿鼻に貶めんとこの類の挙であろうと当然に見ていることも申し添えておく)

上にて人間の間繋がり合い —— Aさん,Bさんらの仲良しサークルの関係の問題 —— に差し当って仮託して例示なしたようなこと(事物の繋がり合いが問題になるところを差し当って人的繋がり合いに置き換えて例示なしてみたこと)、相応の露骨なる関係性がそこにはきと現出しているとのところに関しては



「黒くもないところに黒を見出している」(この場合の黒白とは「恣意的なもの」としてそうなっている)(黒 deliberate) / 「ただの偶然」としてそうなっている)(白 only-co-incident)とのことを指す)

との異論反論を呈することは困難かとは思うのだが —— 「相関関係と因果関係とは異なる」「相関関係と因果関係(あればこれなしの関係)を履き違えるべきではない」との当然の申しようがなせるところであっても「黒くもないところに黒(恣意性)を見出している」との異論反論を呈することは困難かとは思うのだが —— 、本稿では本稿にてその証示を使命となしているとのことから、

**「人間の危急存亡の問題に関わる「欺瞞」がそこに「はきと」存在していること」**

**「上の「欺瞞」の構造が「極めて根が深いもの」となっていること」**

に関わるところとして「さらにももの分析」を(直上表記の第三の段階 Step3 に歩み至った「後」にあっても)なす。

すなわち、

(上にて視覚化なすべくもの図を挙げていた「第三段階」に至るまでの流れにて指し示しました)、

**「各事実「関係」を包摂するより巨視的な意味での関係性」**

について

**「「意味」的につながりあいにつまざる分析」**

**「(意味を捨象しての「尤度(ありうべき頻度の度合い)」と「記号論的」つながりあい**  
**に依拠しての)「確率論」的な意味での分析」**

の「両面での」アプローチを「さらにもって」講ずることとする。

(さらになすとの両面アプローチにおける) 意味上の繋がり合いに着目しての分析としては

**「つながり合いの核にある「独特な要素」がどういったものであるか」**

の精査をなし(先にての「[[事物の関係]を[人間関係]に置き換えての[例示]の話」を引き合いに述べれば、「お互いに相互に繋がっている」「数多の」複数グループが揃って出入りしていると分かった建物がどういったものでどれだけ特異性を有しているのか、お互いに関わっている複数グループが共に奉じている特定のドグマがどういった種別のものでどれだけ特異性を有しているのかといった分析をなすとのことである)、もって、「恣意性」(「偶然」としてではなく「執拗さ」を伴っての「恣意」)がそこにある、そして、それがいかような性質のものであると判じられるかをつまびらやかにするように努める。

他面、(両面アプローチにおける) 確率論的なアプローチについては本来的にそれがそうしたものとなることとして

**「ある程度以上の識見を有した向きを対象としての分析」**

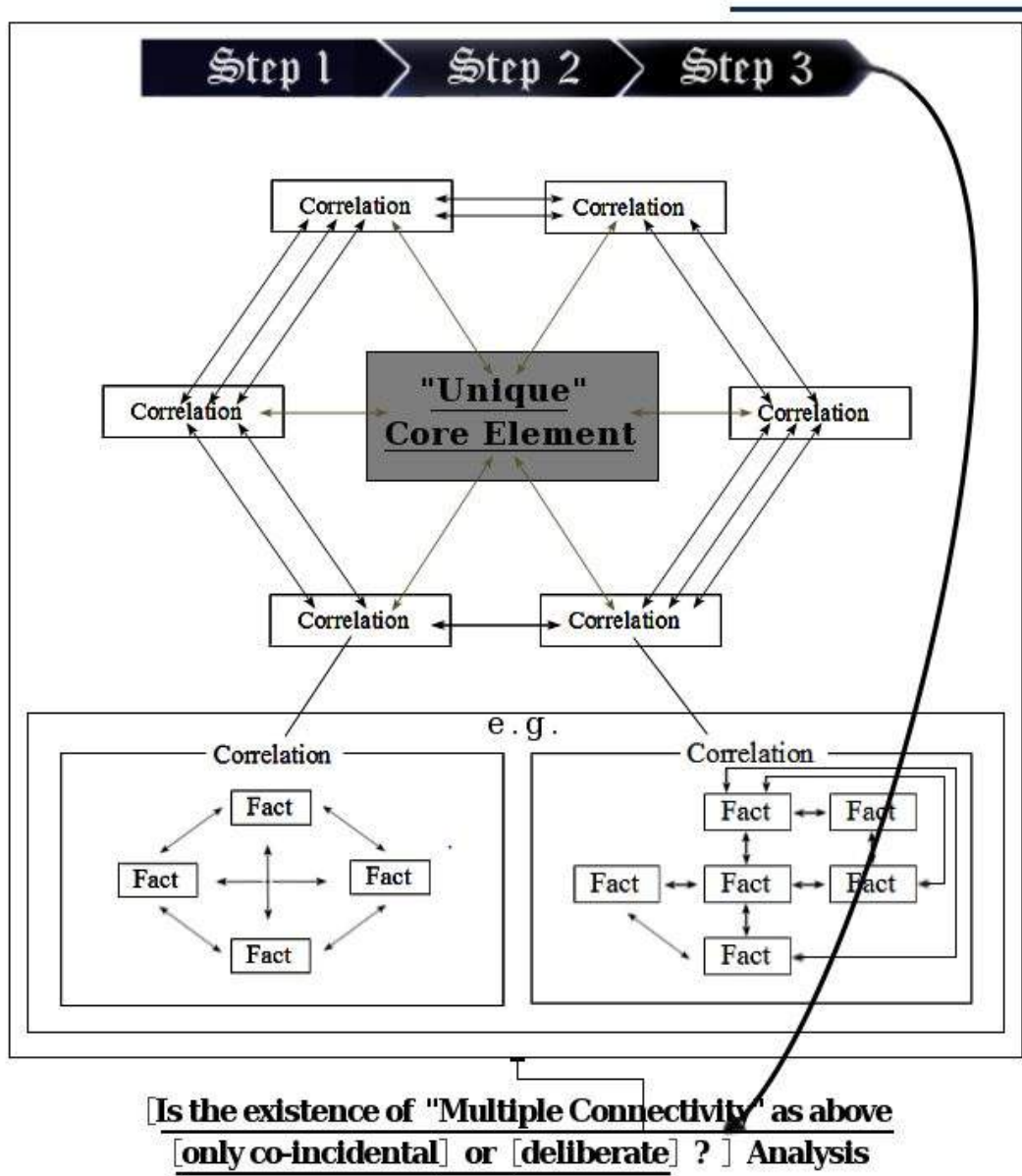
をもなすこととする。その点、筆者は理系や文系などという分類を下らぬものと見ているわけだが、高校生程度の数学に対する理解水準で事足りるとの水準に落とし込んで(ハイスクール・クオリティに落とし込んで)、「大学で確率論を学んだ向きの発想法(近代数学者の大家ピエール＝シモン・ラプラスが煮詰めたやりよとの絡みで革新的とされるベイズ確率論・ベイズ推定 Bayesian inference に基づいての発想法)を「単純化」してのモデル」を呈示する(：無論、理解する意志がある向きならば難なく理解もできよとの数式説明 ——この国の育ち盛りの知能とは相容れないようにも見える教育現場でのやりよう、説明を省いての「最初に天あり

き]的なやりよう(知能とは無縁なる機械人間にインプットするが如きやりよう)ではなくにもものきちんとした数式説明— も懇切丁寧に付しての話をする)。

そうした直上言及の確率論的アプローチについては、(いくら話を単純化しているとはいえども数式に拒否反応を示す向きもあるだろうから)、

[付録]

との位置づけを与え、[[本稿の主要訴求事項]の理解にはその把握までは求めないとの「付け加えての、」部]とするように心がけることとする。



上にて再掲のような  
 [いくつかの相互関係を包摂する形態でのより巨視的な関係性 (極めて独特な核となる要素を共有する関係性でもある)]  
 が (既述の第三段階に至るまでの指し示しの流れにて) 摘示されるに至った折、付け加えてなすべきなのは  
 [果たしてそれは[偶然の一致]で済むことなのか]  
 あるいは  
 [恣意的に、執拗に、そうもさせられていることなのか]  
 とのことを分析、煮詰めることである ( :もし後者ならば、恣意性の背後にある[意図]とその[意図] に応じての [対策] が要請されることになる。行為動態が[執拗極まりない破壊の予告]のようなものであるのならば...である)。

# Final analysis

## Semantic Analysis Approach

Analysis based on the consideration of meaning

## "Basic" Mathematical Analysis Approach

Bayesian approach

$$P(H_i|D) = \frac{P(D|H_i) P(H_i)}{\sum_{i=1}^n P(D|H_i) P(H_i)}$$

$H$  ⇒ Hypothesis

$D$  ⇒ Data

I do my best to avoid "garbage in / garbage out" situation ,  
in other words , I do my best to set "prior probability" and  
"likelihood" properly and do my best to select data properly  
according to the appropriate algorithmic-process . (Needless  
to say, I would like to be a good bayesian) .

では、

[いくつかの相互関係を包摂する形態でのより巨視的な関係性]

について

[果たしてそれは[偶然の一致]で済むことなのか]

あるいは

[恣意的に、執拗に、そうもさせられていることなのか]

とのことを分析するうえでいかようなやりようをとるべきか。

本稿にては意味論的な分析、すなわち、巨視的な関係性が成立していることを「記号論的に」説明できるところにて [意味論的なつながり] に対する分析をまずもってなすこととする。記号論的に既に関係性が成立しているところにて意味論的つながりあいとしての共通のコンテキスト・一貫通貫してのコンテキストのようなものが認められれば、[恣意性]が当然に強くも観念されようとの観点からで、である。

また本稿では——高校生でも理解できるように調整しての式をとるとのかたちで—— [付録]との位置付けながらも [不確定要素の段階的分析に特化したものとなる確率論] に基づいての分析もなす。際には、[偶然である]との確率的推定を敢えて強くしての [尤度] (ありうる度合い) にて仮説をいくつか定立、それらに対して [ベイズの方式] [確率分布] の概念を用いての分析を加えていくこととする ( : して高度な数学知識が要される話はなさぬし、式らの説明も懇切丁寧になす。ただし、それでも数式嫌悪の人間の観点・数式志向詐欺師かとの予断をも想定して、といった分析は付録にすぎないものとしてなす、本筋としての分析は意味論的なところで終わっているといった立論を心がけることとする)。

以上でもって本稿にてその[証示]をなしていくと先に申し述べたことら、

[人間の危急存亡の問題に関わる[欺瞞]がそこに「はきと」存在していること]

[上の[欺瞞]の構造が「極めて根が深いもの」となっていること]

の両二点についての[証示]のプロセス]にまつわる「視覚化なしつつもの」解説を終えることとする。

## 本稿にての[証示]のプロセスにまつわる解説の部はここまでとする

---

直近直上の段までにて —— 実にもって長くもなってしまったが—— 本稿にての[指し示しの「態様」]がいかようなるものかの話をなした。

そうもして[手法]の問題(以降、本稿にての続く内容を確認されてそこに券面偽装・虚偽の類がないか、きちんとそうした[手法]が履踐されているか確認願いたきところの[手法]の問題)についての解説をなしたところで

[人間の危急存亡の問題に関わる[欺瞞]がそこに「はきと」存在していること]

[上の[欺瞞]の構造が「極めて根が深いもの」となっていること]

の本稿指し示し事項らが「主として」どういうことに関わるものなのかとの解説をも —— 委細は後段に譲るかたちでながら—— なしておくこととする。

その点、本稿指し示し事項に主として関わるのは次の通りのこととなる。

科学界の発表動向とまったくもって平仄が合わぬところ、[一部の科学理論の登場時期]を相当程度、前倒しせざるをえぬとの[加速器による災厄実現]と関わる予言的言及が存在している。

のみならずそれら予言的言及が

[[他の]問題となる事柄ら]

と「多重的」かつ「純・記号論的」にして「露骨なる」関係性を呈しており、そこに「明確なる悪意」(我々人類に対する詐害意志そのもの)の問題が観念できるようになっている。

ずっと[昔]に遡るところとして、である([ずっと昔]がどういった性質のものかと解されるかは本稿を流れとして検討していく中でご理解いただけるであろうと揚言する)。

上にて表記の[科学界の発表と平仄が合わぬところで[一部の科学理論の登場時期]を相当程度前倒しせざるをえぬとの[加速器による災厄実現]と関わる予言的言及が存在している]とのことに関して

「本稿にて問題視する所存であるとの情勢・状況について何ら把握していない向きを想定して」

の説明をまずもってなしておくが、

[現行、[史上最大の科学実験]と表される[加速器実験]が実施を見ており、の実験、



LHC 実験についてはブラックホールを生成なしうるとの可能性が取り沙汰されるに至った]

とのことがある。

につき、最前、開巻の段のすぐ下の段より述べているように

「個人の主観は問題にならないし、問題にすべきではないとのことを「読み手が何ら惑うところがないとのかたちで」摘示していく」

との本稿の拠って立つところの方針に基づいて、そこからして基づいて、上記のことにまつわる基本的事実関係として、

1. そもそも[加速器実験]とは一体全体どういったものなのか

2. そもそも[加速器実験のうち史上最大の科学実験とされている LHC 実験]とは一体全体どういったものなのか

3. [(上に言う) LHC 実験がブラックホールを生成しうると考えられもしているとのこと]とは一体全体どういうことなのか

についての[解説]を —— 出典明示なし、次いで、それら出典よりの原文引用をなすとのかたちで—— (証示することに入念に入念を重ねもしての本稿本論部に入る「前」の差し当ってのものながら) なしておきたい。

---

[[問題となることの摘示]に入る前に基本的な事柄らの紹介・解説(導入部にあつての「差し当っての」最低限度のものとしての紹介・解説)をなすとして]

まずもって

[そもそも[加速器実験]とは一体全体どういったものなのか]

についての最低限の解説を(差し当ってのものとして)なしておく。

⇒

1. [加速器実験]とは一体全体どういったものなのかについて

常識世界での説明のされようでは端的に述べれば、である。(その[額面上の目的]も含めて一般人が聞き及ぶことも少なきものか、とも思うのだが)[加速実験]とは「下のように」一言説明なせるものとなっている。

「[加速器実験とは]極微の世界に対して膨大なエネルギーを集中投下できるものとしての加速器という装置 —— 電磁石や高周波加速空洞にて構成される装置—— を用意し、そのうえでそちら加速器 —— 繰り返すが、電磁石や高周波加速空洞にて構成される装置—— を用いて(極微スケールにての)高エネルギー状態を実現するとの営為であり、性質上、[大がかりな顕微鏡による観察挙動]と表されるものでもある」

以上のような一言にての定義のなしよう —— 「[加速実験とは]磁石と結びついた加速

器という装置でもって高エネルギー状況を実現して極微世界を観察する行為である]——が事宜に適った(「常識目線で見た場合に」事宜に適った)ものであることを示すべくもの出典を挙げておく。

(直下、[加速器実験]に重鎮として関わってきたレオン・レーダーマン(Leon Lederman)という人物、1988年にノーベル物理学賞を受賞している同男が著した、THE GOD PARTICLE(邦題)『神がつくった素粒子(下巻)』(国内流通訳書の版元は草思社)にての[6 加速器——そいつが原子を粉砕するんだな]の部、12ページから15ページよりの掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

素粒子物理学者たちは、それぞれの時点で最強の加速器を作ってよこんでいた。なぜそうするかといえば、それはわれわれホモ・サピエンスがいろんなことをするときと同じ理由だ——好奇心、自尊心、権力、欲、野心……。われわれは仲間とビールを飲みながら物思いにふけり、はたして神様は、われわれがつぎに作る加速器——たとえば一九五九年に完成間近になっていたブルックヘブンの三〇ギガ電子ボルトの「怪物」——がなにを生みだすかご存じなのだろうか、としばしば考えたものだ。われわれはそんな前代未聞のエネルギーを手に入れて、自分たちにも解けないような謎を生み出すだけじゃないのか。

…(中略)…

加速器全体は、石油のもつ化学エネルギーを一秒あたりわずか一〇億個ほどの電子に凝縮するための、きわめて能率のわるい巨大装置と考えてもよい。石油火力発電所からの電力が送電線を通して研究所にとどき、変圧器を経由して電磁石や高周波加速空洞へ送られる仕掛けだ。巨視的な量の石油を加熱して、各原子が四〇テラ電子ボルトをもつようにすれば、そのときの温度は絶対温度  $4 \times 10^{17}$  つまり四〇京度になる。とすれば、原子は溶解してクォークになっているだろう。これが、誕生後一〇〇〇兆分の一秒にもならないころの宇宙全体の状況だ。それほどエネルギーをつかってわれわれはなにをするのか?

…(中略)…

加速器は、生物学者たちが小さなものを研究するために使用する顕微鏡のようなものだ。通常の顕微鏡は、きわめて倍率が高いが、その理由はとりもなおさず、光学顕微鏡の光源のエネルギーより電子のエネルギーのほうが高いからだ。光よりも電子の波長のほうが短いおかげで、生物学者たちは微粒子を構成する分子を「見る」ことができるようになった。どの大きさまで「見え」て研究できるか、を左右するのは対象にぶつかってゆく物体の波長なのだ。量子論によれば、波長が短くなればエネルギーが増加する、ということがわかっている。

(訳書よりの引用部はここまでとする)

上にての洋著 THE GOD PARTICLE の流通訳書 ——書店で買い求めずとも多くの図書館を通じて借り受けなせるとの書籍—— よりのページ数指定しての原文引用部にては

[ (加速器によって実現する極微領域のエネルギー状態として) 巨視的な量の石油を加熱して、各原子が四〇テラ電子ボルトをもつようにすれば、そのときの温度は絶対温度  $4 \times 10^{17}$  つまり四〇京度になる。とすれば、原子は溶解してクォークになっているだろう。これが、誕生後一〇〇〇兆分の一秒にもならないころの宇宙全体の状況だ]

[加速器全体は、石油のもつ化学エネルギーを一秒あたりわずか一〇億個ほどの電子に凝縮するための、きわめて能率のわるい巨大装置と考えてもよい(以下略)]

[加速器は、生物学者たちが小さなものを研究するために使用する顕微鏡のようなものだ]

とのことが記載されており、それがまた一般にあつての加速器実験に対する言われようともなる(尚、[一般性]の問題に関わるところとして直近直上にて引用なした著作 THE GOD PARTICLE (邦題)『神がつくった素粒子(下巻)』(邦訳版版元は草思社)の著者であるレオン・レーダーマンは米国の加速器研究機関フェルミ国立研究所の二代目所長にして1988年にノーベル物理学賞を受賞している向きとなる。については英文 Wikipedia [Leon Lederman] 項目にて (以下、引用なすところとして) “ **He took an extended leave of absence from Columbia in 1979 to become director of Fermilab. [ . . . ] As the director of Fermilab and subsequent Nobel physics prizewinner, Leon Lederman was a very prominent early supporter — some sources say the architect or proposer — of the Superconducting Super Collider project, which was endorsed around 1983, and was a major proponent and advocate throughout its lifetime.**” (以下、訳として) レオン・レーダーマンはフェルミ国立加速器研究所の所長となるために1979年、コロンビア大にての休職期間を延長した。…(中略)…フェルミ国立加速器研究所所長として、そして、後のノーベル物理学賞受賞者としてレオン・レーダーマンは1983年に計画承認を見ての超伝導超大型加速器(SSC)構想にあつての極めて目立っての初期支持者 — 幾人かが指摘するところとしては計画の立案ないし提唱をなした者ともされる — となっており、その生涯を通じてのそちら SSC 構想の支持・擁護者であつた」との表記がみとめられるとおりである)。

(ここまでに[[加速器実験]]とは一体全体どういったものなのか]についての「差し当つての」最低限の説明を終える)

次いで、

[そもそも[加速器実験のうち史上最大の科学実験とされている LHC 実験]とは一体全体どういったものなのか]

についての解説を(証示に入念を期しての本稿本論部に入る「前」の差し当つてのものながら)なしておく。

⇒

## 2. [加速器実験のうち史上最大の科学実験とされている LHC 実験]とは一体全体どういったものなのかについて

最初に述べるが、史上最大の実験と表される[LHC 実験]について「も」直上にて言及なしたところの[加速実験]の基本的定義、

[**[極微スケールにての高エネルギー状態を実現・観察するための営為]にして[顕微鏡としての巨大装置を用いての観察挙動]**]

との基本的定義が当てはまる。

そのように述べたうえでまずもって基本的なところとして和文ウィキペディアにての[大型ハドロン衝突型加速器]項目の記載内容を引くことから始める。

(直下、基本的なことであると判じ、「現行にての」和文ウィキペディア[大型ハドロン衝突型加速器]項目の記載を引くこととしたところとして)

大型ハドロン衝突型加速器 (おおがたハドロンしょうとつがたかそくき、Large Hadron Collider、略称 LHC) とは、高エネルギー物理実験を目的として CERN が建設した世界最大の衝突型円型加速器の名称。スイス・ジュネーブ郊外にフランスとの国境をまたいで設置されている。2008 年 9 月 10 日 [1] に稼動開始した。また、LHC 実験はそこで実施されている実験の総称。

[概要]

陽子ビームを 7TeV まで加速し、正面衝突させることによって、これまでにない高エネルギーでの素粒子反応を起こすことができる。最大重心系衝突エネルギーは、14TeV 付近。但し、陽子-反陽子型の実験装置ではないため、連続重心系衝突エネルギーは 8TeV~10TeV 程度の実験エネルギーになる予定。

…(中略)…

CERN が建設し、2000 年に実験を終了した Large Electron-Positron Collider (LEP) の地下トンネルに、陽子-陽子衝突のための加速器を新たに設置して建設された。全周は約 27km ある巨大なもので、日本のマスメディアは規模を山手線に例える事がある。

(以上、現行にての和文ウィキペディア表記よりの引用とした — ウィキペディアとの媒体については易変性が伴う、すなわち、編集の上で記述内容が度々もって変動を見るとのことが想定される。また、ウィキペディアとの媒体については不特定の編集者に編集行為が許されているため、ときに中立性・公正さ、どころか、事実関係についてすら疑わしいとの記事が見受けられることもままある(であるから大学教育の世界ではウィキペディアをソースとして引用することなどは通例、「まったくもって望ましくないことである」とされる)。といった常識的な言われようのことを踏まえ、うえでなおもって上の LHC 実験の基本的解説については錯誤・誤謬が認められないとのこと、一応、断っておく(また、上にての [1] と振られての出典紹介部にては現行、[ 1↑ CERN のプレス・リリース(2008 年 9 月 10 日) ] とのソースが記載されているところでもある) — )

以上の基本的記述内容 — [(LHC 実験における) LHC とは欧州原子核研究機構と CERN が運用し、全長 27 キロメートルの地下トンネルの中で陽子ビームの衝突実験を行う巨大加速器である] との記述内容 — を踏まえて [LHC もまた (先に例示の [加速器] のありようの説明に見受けられるところと同じく) [顕微鏡] としての意味合いを呈している] との解説がなされていることを欧米圏科学ジャーナリストの著作から引いておくこととする。

(直下、欧米圏で比較的名が知れ、訳書も多く出されているサイエンス系読み物の著者たる アミール・アクゼルの手になる **Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider** の邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる CERN と究極の加速器の挑戦』(早川書房ハードカバー版)の[第 1 章 爆発する陽子]の部、24 ページから 25 ページよりの掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

LHC 内部での陽子衝突により解放される凄まじい量の高密度エネルギーは、科学を未踏の新たなレベル、我々の宇宙ではビッグバン直後以来観測されたことのない高エネルギーの領域へと推し進めてくれる。そのような形で大型ハドロンコライダーは我々を百数十億年昔に連れていき、誕生直後の灼熱の宇宙を満たしていた状態を見せつけてくれる。LHC のおかげで物理科学は様変わりし、我々はかつてないほどの宇宙の深淵をのぞき、過去と現在の宇宙の構造を解



明し、未来を見通し、もしかしたらその意味さえ解き明かすかもしれない。

…(中略)…

粒子を高速まで加速し、反対方向からやってきた粒子と衝突させる。この衝突によってエネルギーが解放され、アインシュタインの式に従ってそのエネルギーが別の高速粒子に変わる。つまり、粒子の衝突によって解放されたエネルギーから質量を「造り出す」ことができる。純粋なエネルギーから生まれたこの新たな質量には、宇宙誕生から一秒に満たない頃にしか存在していなかった粒子が含まれているかもしれない、それらの振る舞いを研究することが、今日我々が自然界で見ている力や粒子を理解する上で鍵を握っている。

このように LHC は、今まで観測されたことのない粒子や自然現象を再現してくれる。また時をさかのぼり、宇宙が超高密度で熱い粒子の「スープ」、いわゆる「クォーク=グルーオン・プラズマ」だった頃の遠い昔の原始時代へ連れていってくれる。このコライダーは巨大顕微鏡としても機能し、時空の内部構造を見せてくれるかもしれない。

(訳書よりの引用部はここまでとする)

上に見るようにアミール・アクゼル (その細かき来歴については英文ウィキペディア[ Amir Aczel ]項目の内容やその他書誌情報を参照いただきたい) の著作『宇宙創造の一瞬をつくる CERNと究極の加速器の挑戦』(早川書房ハードカバー版)にあって

[ (粒子を高速まで加速し、反対方向からやってきた粒子と衝突させ、そちら衝突によってエネルギーが解放するとの) LHC 実験 ]

に関して

今まで観測されたことのない粒子や自然現象を再現してくれる。また時をさかのぼり、宇宙が超高密度で熱い粒子の「スープ」、いわゆる「クォーク=グルーオン・プラズマ」だった頃の遠い昔の原始時代へ連れていってくれる。このコライダーは巨大顕微鏡としても機能し、時空の内部構造を見せてくれるかもしれない

との説明がなされている (LHC 実験についても [ 極微スケールにての高エネルギー状態を実現・観察するための営為 ] にして [ 顕微鏡としての巨大装置を用いての観察挙動 ] との定義が当てはまるとの紹介がなされている)。

(ここまでにて [ LHC 実験とはいかようなものなのか ] についてのさしあたっての説明を終える)

さらに続いて

[ [ LHC 実験がブラックホールを生成しようと考えられもしているとのこと ] とは一体全体どういうことなのか ]

についての紹介をも (証示に入念を期しての本稿本論部に入る「前」の差し当ってのものながら) なしておく。

⇒

### 3. [LHC 実験がブラックホールを生成しようと考えられもしているとのこと]とは一体全体どういうことなのかについて

LHC 実験がブラックホール生成をなしようと考えられもしているとのことについては流布流通を見ている科学読み本——直上にても引き合いに出した科学読み本——にての解説のなされようの引用をなしておきたい。

(直下、欧米圏で比較的名が知れ、訳書も多く出されているサイエンス系読み物の著者たるアミール・アクゼルの手になる **Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider** の邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる CERN と究極の加速器の挑戦』(早川書房ハードカバー版)の [第 13 章 CERN でブラックホールは作られるか?] の部、275 ページよりの掻い摘ままでの原文引用をなすとして)

LHC の中で起こるように物質が高密度に潰れることでもブラックホールは生じると考えられる。LHC の陽子は一個あたり七 TeV のエネルギーレベルに達し、陽子のペアの衝突では合計でその二倍(一四 TeV)のエネルギーが生成するが、これは今までに加速器の粒子衝突で達成されたレベルをはるかにしのぐ。LHC によって我々は未知のエネルギー領域に突入し、はるかに大きいエネルギーを持つと考えられている宇宙線由来を除けば地球上で見られたことのない衝突が起こる。

(訳書よりの引用部はここまでとする)

(さらにもって続けて、直下、同じくものアミール・アクゼル著作訳書『宇宙創造の一瞬をつくる CERN と究極の加速器の挑戦』(早川書房ハードカバー版)の [第 13 章 CERN でブラックホールは作られるか?] の部、282 ページから 283 ページよりの掻い摘ままでの原文引用をなすとして)

二〇〇九年五月六日に私は、一九六八年にひも理論を提唱した聡明な物理学者ガブリエーレ・ヴェネチアーノに会いに、今度はパリのカルチェ・ラタン中心部にある名門コレージュ・ド・フランスの彼のオフィスを訪れた。そして LHC について話をした。

その巨大な装置が凄まじいパワーを発揮したとき物理学に何が起こるか、そのことにヴェネチアーノがわくわくしている感じが感じられた。LHC のパワーは我々が見たことのない大ききなので、スイッチが入ったとき何が起こっても不思議ではない。ヴェネチアーノは言う。「そのとき起こりうる出来事はあまりに多いので、どれに注目してどれを無視するか決めておかないといけない。私たちは大きな角度の散乱を引き起こす現象に注目することにした。CERN では、ブラックホール生成の証拠を探そうという議論もあった。しかしブラックホールが実際に現われる確率はとても低いと思う」。ヴェネチアーノの説明によれば、LHC でのブラックホール生成を認めるモデルは時空の隠れた次元の存在を前提としているという。

もしブラックホールが出現してそれがスティーブン・ホーキングの式に従って蒸発したら、ホーキングはともうれしがらるだろう。ヴェネチアーノは言う。「もし LHC でマイクロブラックホールが作られ、それが世界をのみ込むこともなく、ブラックホールに関するホーキングの研究が予測するとおり放射を発して蒸発すれば、ホーキング放射の実験的証明となってホーキングはノーベル賞を受賞す

るだろう」

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※1 直近直上にての引用部にては

[LHCでのブラックホール生成を認めるモデルは時空の隠れた次元の存在を前提としている]

との表記がなされているが、それは[余剰次元理論]という1998年より提唱の理論のことを指す。につき、そちら余剰次元理論については[その存在が加速器実験安全性主張の流れと矛盾する予言的言及]に関わることであるとの認識の下、本稿の後の段でも折に触れて言及・解説なししていくことになること、この場にて言及しておく)

(※2 直近直上にての引用部には

[もしLHCでマイクロブラックホールが作られ、それが世界をのみ込むこともなく、ブラックホールに関するホーキングの研究が予測するとおり放射を発して蒸発すれば、ホーキング放射の実験的証明となってホーキングはノーベル賞を受賞するだろう]

との表記もがなされているが、そちらは[ホーキング放射]という[70年代より提唱された自然に極微ブラックホールが観察されないことを説明づける理論]、そして、[後に加速器の生成ブラックホール(まさしくもの極微ブラックホール)が安全であるとの論拠に「転用」されることとなった理論]にまつわる話となっている。同・ホーキング放射についても(「重要なことに関わる」との認識の下、)本稿の後の段にて細かくも取り上げること、この場にて言及しておく)

(ここまでを[LHC実験がブラックホール生成をなしうるといかにように考えられているか]についての「差し当たっても」説明の部とする)

以上をもってして

1. そもそも[加速器実験]とは一体全体どういったものなのか

2. そもそも[加速器実験のうち史上最大の科学実験とされているLHC実験]とは一体全体どういったものなのか

3. [(上に言う)LHC実験がブラックホールを生成しうると考えられもしているとのこと]とは一体全体どういうことなのか

についての概説部 ——本稿本題に入る前にての「まずもっての」詳説ならぬ概説部——を終えることとする。

# 加速器実験に伴う容易に摘示かつ確認可能となっている欺瞞性、そして、そこより証示なせもすること

前置きが長くも、極めて長くもなってしまった。

ようやくのこととしてここよりが本稿にての[本題]となる。

さて、[長大なる本稿にての通貫しての訴求事項]に基礎たるところに関わるため、それらから問題視するのであるが、以降、その[記録的事実]としての実在性の論拠を最も「堅い」典拠から指し示すところとして、

[**[事実A]** から **[事実E]** (と分類なしもしての各 **[記録的事実]** ら)]

が存在しているとのことが意をなしてくる。

(以下、[誰でもオンライン上より一次資料として入手・内容確認可能であるとの「最も信頼性・確度高きところの」資料ら — [公的実験機関の公衆向け安全性報告文書]および当該問題について分析なしての[米国ロー・レビュー(法学紀要)に載せられた法律家論稿]など—— ]を出典として原文引用とのかたちで呈示し、問題となる[記録的事実]を示すこととする)

## [事実 A]

粒子加速器によってブラックホールが生成される可能性が取り沙汰されだしたのは

**[1999年]**

からである。

その1999年との折柄にあつては

[厳密な意味では専門家ではない市井の個人] (ウォルター・ワグナー) によってブラックホール生成可能性が[災害を引き起こす元凶たりうるもの]として問題視されだした(権威あるとされる専門家がブラックホール生成可能性を**目立って問題視していたわけではない**)。

対して、そうした属人的疑念視がマス・メディア「にも」取り上げられることになったことを受け、専門家サイドからは

**「ブラックホール生成がなされることはそもそもないことである」**

**との強調がなされ、ブラックホール生成の可能性それ自体を事実上完全否定する(狂人の妄夢の如きものであるとする)当事者研究機関の一群の報告書ら — (後にノーベル賞受賞者となった科学者も関与しての報告書でもある) — が世に出されることとなった。**

## [事実 B]

粒子加速器(の中にあつてのLHC)による[ブラックホール生成]がなされうると



のことが ——（[事実 A] に見るように [1999 年] にあってそれが [ありうべきリスク] として専門領域「外」の人間に問題視されだした際には「そも、粒子加速器によるブラックホール生成はありうべきところではない」と当事者研究機関に否定されていた]とのところから一転して） —— 「ありえることである」と「肯定的に」科学界主流筋および研究機関によって「公的に」認められるようになったのは [2001 年]

のことからである（: その 2001 年からの論調では「通年で 1000 万個単位の」「安全な」極微ブラックホールが生成されることになりうるともされるようになった）。

すなわち、「1999 年」にあっては「ブラックホールが人為生成される可能性だけに否定していた科学界・実験機関の論調が「2001 年に」変容を見、一転、加速器によるブラックホール生成をしてありうると肯定するようになったとのことがある（それについては、—これまた当然に論拠を挙げるところとして— [1998 年に水面下で提唱されていた余剰次元理論（というもの）から導き出された帰結] が 2001 年の [変節] の背景にあると一般には説明されている）。

#### [事実 C]

粒子加速器 LHC によってブラックホール生成がなされうると加速器実験実施研究機関に認容されるに至った折、当然に学者らは「ブラックホール生成がなされても [安全] である」と強調していた。

ブラックホール生成がありうることとされるに至っての後、その初期的段階 (2001 年から 2003 年) にあっては安全性にまつわる論拠として

[[ホーキング輻射 (ふくしゃ) と呼称される (仮説上の) 現象] の発現による生成ブラックホールの即時蒸発]

のことが部外者・公衆向けの安全性報告文書で挙げられ、次いで、2008 年以降よりは安全性論拠として

[宇宙線 (Cosmic-ray / 宇宙を飛び交う高エネルギーの放射線) との比較による生成された「蒸発しない」可能性のあるブラックホールの無害性]

のことが (更改を見ての) 部外者・公衆向けの安全性報告文書にて強くも前面に押し出されるに至った、とのことがある。

そのような安全性論拠の主張動態 (重み付け) の変化の背景には —それについても当然に典拠挙げるところとして— [ホーキング輻射] (と呼ばれる仮説上の現象) の発現が確実視され「なくなった」とのことがあると「される」。

#### [事実 D]

1980 年に初出を見た英国人作家ジェイムズ・ホーガンの手になる小説作品 *Thrice Upon a Time* 『未来からのホットライン』にあっては [文献的事実] として

1. 「[EFC こと欧州核融合協会との組織体が運営している施設] で

あるとの設定の[核融合プラント(バークヘッド重イオン施設にあっての「加速器」使用型核融合プラント)]が問題となっている局面で」

2. 「[加速器]使用型核融合プラントにての加速器で生成された大量の極微ブラックホール(具体的数値として[200万個にも及ぶ大量の極微ブラックホール]と作中明示)が地球にコアに落ち込み人類滅亡をきたすとの状況にまで至り」

3. 「にも関わらず、そのような状況をもたらしたブラックホール生成元となった施設の当の運営者らは「[ホーキング輻射(ふくしゃ)現象の発現]によって粒子加速器接合型核融合発電プラントによるブラックホール生成は地球に壊滅的事態をもたらすことはない、そういうことは百万年に一回も起こりえないことだろう」との言い逃れをなしていた」

との内容を有している。

#### [事実(事実関係)E]

([事実A]から[事実C]と[事実D]の間には以下のような[矛盾]と[際立った先覚性]の問題が見受けられると指摘できるところである)

「研究機関発表動向として1999年においては加速器によるブラックホール生成可能性が完全否定されていた(それが肯定的に論じられるようになったのは2001年である)にも関わらず1980年初出の小説で加速器によるブラックホール生成が言及されていた」(「[事実A]と[事実D]より[事実関係]として導き出せる」ところである)

「加速器によるブラックホール生成については2001年よりの研究機関発表動向で通年単位で1000万個の生成可能性ありとされるに「至った」の対して、問題となる1980年初出小説ではブラックホール200万個生成が描かれていたとのことで非常に話が似通ったものである」(「[事実B]と[事実D]より[事実関係]として導き出せる」ところである)

「加速器生成元が(2001年から2003年に至る)初期動向としてホーキング輻射を生成ブラックホールが安全であるとの論拠として用いているのに対して、問題となる1980年初出の小説「でも」ホーキング輻射がブラックホール生成がなれていても「安全である」とのブラックホール生成元の言い訳として持ち出されていた旨、描かれているとのことがある」(「[事実C]と[事実D]より[事実関係]として導き出せる」ところである)

上記の[事実A]から[事実E]らが[記録的事実]として真正なるものとして成り立っている(成り立ってしまっている)とのことを示すための出典を以降、各別順々に細かくも挙げていくこととする(ここにて挙げることとした出典資料らについては座学にとどまらず取材活動をな

しながらも多大な時間をかけて特定化したとの資料らともなる ——うち、一部は 本稿筆者が [長期化した LHC 実験参画の国内研究機関(国際的な役割帯びてのハブ的研究機関でもある)を向こうにまわしての行政訴訟]で法廷にあって書証(証拠資料)として呈示してきた資料らともなる——)。

■ 外挿付記として：ここ【典拠紹介部 1】には「長くもの」p.39 から p.52 との頁数を割いているため、以降【典拠紹介部】(従たるところ)と【指し示しの主軸たるところ】の関係について惑われぬよう、何卒ご注意ください。また、「お勧めはいたしません」典拠委細読み飛ばしうえで内容把握なそうとの向きにおかれましては(歩を進めていただきもし)本書 p.52 から読解いただければ、と考えています。

## 出典(Source)紹介の部 1



# SOURCE 1

まずは上掲[事実 A]から[事実 E]のうち、

### [事実 A]

粒子加速器によってブラックホールが生成される可能性が取り沙汰されだしたのは

[1999年]

からである。

その 1999 年との折柄にあつては

[厳密な意味では専門家ではない市井の個人] (ウォルター・ワグナー) によってブラックホール生成可能性が[災害を引き起こす元凶たりうるもの]として問題視されだした(権威あるとされる専門家がブラックホール生成可能性を目立って問題視していたわけではない)。

対して、そうした属人的疑念視がマス・メディア「にも」取り上げられることになったことを受け、専門家サイドからは

「ブラックホール生成がなされることはそもそもないことである」

との強調がなされ、ブラックホール生成の可能性それ自体を事実上完全否定する(狂人の妄夢の如きものであるとする)当事者研究機関の一群の報告書ら ——(後にノーベル賞受賞者となった科学者も関与しての報告書でもある)—— が世に出されることとなった。

との事実について、

[最も確度高き海外流通資料にして、かつ、誰でも即時取得できるとのもの]

を出典としてそれが「記録的事実」たる典拠を 一読み手がなんら惑うこともなく後追いしやすかろうと判断したかたちで 挙げていくこととする(事前に断っておくが、「事実 A」が「記録的事実」としてそこにはきとあることを示すための本段、**出典(Source)紹介の部 1**のセクションからして相当程度、長くもなる)。

---

---

ここ**出典(Source)紹介の部 1**にて原文引用なすことにした資料、その資料概要の紹介として

[[事実 A]の出典として挙げることとしたとの文書群]

**[ Case of the deadly strangelets と題されての英文文書 ]** (同文書、表記英文タイトル名 ( Case of the deadly strangelets ) の入力で現行、グーグル検索エンジンより全文を容易に捕捉可能な文書となり、Institute of Physics (IOP こと英国物理学会) 会員誌たる Physics World 誌に掲載された有識者由来過去記事を収めたものとして(現時点では誰でもダウンロード可能となっているとの)オンライン上流通 PDF ファイル形式文書となる)

**[ Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC と題されての英文文書 ]** (同文書、検索エンジン上で表記の英文タイトル ( Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC ) を入力することで複数のダウンロード用ページが特定可能となっている文書で「ブルックヘブン国立研究所運営加速器 RHIC リスク安全報告書」として 1999 年以降、公開されているとの公的文書となる)

**[ Will relativistic heavy-ion colliders destroy our planet? と題されての英文文書 ]** (同文書、検索エンジン上で表記の英文タイトルを入力することで複数のダウンロード用ページを特定可能となっている「ブルックヘブン国立研究所運営加速器 RHIC」にまつわる CERN (欧州原子核研究機構) による安全報告書となる)

**[ THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD と題されての英文文書 ]** (同文書、検索エンジン上での表記英文タイトル入力で文書(発信媒体)特定・ダウンロード可能となっている英文論稿で作成者が「法学者」(法務博士の資格をハーバード・ロースクールで取得したうえでノースダコタ大学ロースクール助教 ( Assistant Professor ) の立ち位置にあるとの Eric Johnson という人物) となっているとの「LHC 実験差し止め請求動向「解説」論稿」となり、TENNESSEE LAW REVIEW [テネシー法学紀要] に掲載のものが現時 arXiv (コーネル大運用の論稿配布サーバー) 経由で誰でもダウンロード可能となっているとの文書となる —— ※補足として: 尚、[LHC のような高エネルギー粒子衝突実験にて問題となったリスクをまつわる議論動向] について常識的観点でもってまとめたの記載をなしているとの英文 Wikipedia [ Safety of high-energy particle collision experiments ] 項目にあつて「も」同じくもの論稿についての言及はなされており、それは(原文引用するところとして) “ Late in 2009 a review of the legal situation by Eric Johnson, a lawyer, was published in the Tennessee Law Review. [109][110][111] In February 2010 a summary of Johnson's article appeared as an opinion piece in New Scientist. [112] ” 「(LHC を巡る法的問題については) 2009 年後半期、弁護士エリック・ジョンソンにそちら法的特質にまつわるレビュー がテネシー法学紀要にて初出を見た。2010 年 2 月にてはジョンソン論稿の要約がニューサイエンティスト誌の論説紹介部にて載せられた」(引用部訳はここ までとする)との書



きょうとなっている。また、同論考 THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD の作者となっている Eric Johnson という米国法曹については [ノースダコタ大大学運営ページ] にても同じくもの論稿をものしたとのその事績が取り上げられている「学究系」法曹となる (さらに述べれば、同エリック・ジョンソン氏、“It does not keep me awake at night” 「心配で夜眠れなくなるほどではない」との [ブラックホール生成問題についての悲観論者ではない] との物言いをもなしている向きともなる) —— )

それでは上にて掲題の資料ら (上にて表記の通りの方式でオンライン上の複数媒体より容易に全文取得、内容確認できるとの資料ら) から

[事実 A]

粒子加速器によってブラックホールが生成される可能性が取り沙汰されだしたのは

**[1999 年]**

からである。

その 1999 年との折柄にあつては [厳密な意味では専門家ではない市井の個人] (ウォルター・ワグナー) によってブラックホール生成可能性が [災害を引き起こす元凶たりうるもの] として問題視されだした (権威あるとされる専門家らがブラックホール生成可能性を目立って問題視していたわけではない)。

対して、そうした属人的疑念視がマス・メディア「にも」取り上げられることになったことを受け、専門家サイドからは

「ブラックホール生成がなされることはそもそもないことである」

との強調がなされ、ブラックホール生成の可能性それ自体を事実上完全否定する (狂人の妄夢の如きものであるとする) 当事者研究機関の一群の報告書ら — (後にノーベル賞受賞者となった科学者も関与しての報告書でもある) — が世に出されることとなった。

との事実を指し示すに「必要十分」と判じられるだけの [基礎となる文献的事実] を原文引用とのかたちで呈示していくこととする —— 尚、原文引用をなした部を文言そのままに検索エンジンの検索ボックスに入力することでもそうした記載が問題視している文書にてなされているとのこと、要するに、[文献的事実] を問題視していること、確認できるようになっているとも申し述べておく —— 。

まずもって上にて呈示の文書らのうち、

**[ Case of the deadly strangelets ]** (英国物理学会 [ Institute of Physics ] の会員誌 Physics World 誌にて掲載された署名解説記事を PDF 化した文書 / 表記タイトルで検索なせば現行にての PDF ファイルダウンロードページが容易に特定可能となっている文書)

より指し示しに必要となるどころの原文引用をなすこととする。

(直下、上に概要紹介のオンライン上流通文書 Case of the deadly strangelets にての 19

The trouble began a few months earlier, when Scientific American ran an article about RHIC (March 1999 pp65-70). Its title, "A little big bang", referred to the machine's ambition to study forms of matter that existed in the very early universe. Walter Wagner, the founder of a botanical garden in Hawaii, wrote a letter in response to that article. Citing Stephen Hawking's hypothesis that miniature black holes would have existed moments after the big bang, Wagner asked whether scientists knew "for certain" that RHIC would not create a black hole.

Scientific American printed Wagner's letter in its July issue, along with a response from Frank Wilczek of the Institute for Advanced Study in Princeton. Physicists hesitate to use the word "impossible", usually reserving it for things that violate relativity or quantum mechanics, and Wilczek called RHIC's ability to create black holes and other such Doomsday ideas "incredible scenarios".

Amazingly, however, he then went on to mention another Doomsday scenario that was more likely than black holes. It involved the possibility that RHIC would create a "strangelet" that could swallow ordinary matter. But not to worry, Wilczek concluded, this scenario was "not plausible".

It was the July 1999 issue of Scientific American containing the Wagner-Wilczek exchange that then inspired the Sunday Times article in mid-July. This was followed by much more press coverage, and the filing of a lawsuit, by Wagner himself, to stop the machine from operating.

Shortly before the July issue of Scientific American was published, Brookhaven's director John Marburger learned of the letters, and appointed a committee of eminent physicists (including Wilczek) to evaluate the possibility that RHIC could cause a Doomsday scenario. After the Sunday Times article appeared, CERN's director-general Luciano Maiani — fearing a similar reaction to the Large Hadron Collider that was then in the planning stages - did likewise.

(上の引用部に対する拙訳として)

「問題はサイエンティフィック・アメリカン誌が加速器 RHIC についての記事(1999年3月号 65-70 ページ)を掲載した時より数か月前に遡る。A little big bang『小さなビッグバン』とタイトルが付されていた同記事は「極めて早期の宇宙にて存在していた物質の組成を研究する装置の野心的側面に言及していた」とのものだった。ハワイの菜園の創立者となっていたウォルター・ワグナーがその記事に対して手紙を書いてよこしてきた。「ビッグバン直後、ミニブラックホールが存在していた」とのステイブン・ホーキングの仮説を引用しながら、ワグナーは「科学者らは(小さなビッグバンを起こすとの)加速器 RHIC は ブラックホールを生成することがないとはきと分かっているのか」と訊ねてきた。

サイエンティフィック・アメリカンは7月発行版にプリンストン高等研究所のフランク・ウィルチェックよりの応答を脇に添えてワグナーからの投書と併せて掲載した。物理学者というものは通例、相対性理論や量子力学の法則を侵すものに言及するとき、「不可能である」との言葉を使うのに躊躇するくらいがあり、ウィルチェックは RHIC によるブラックホール生成能力、および、その他に「黙示録のその日」に通ずる観念につき「信じられるものではない incredible」と表した。

だがしかしながら、驚くべきことに、彼(ウィルチェック)はブラックホールよりさらにありえやすくもある黙示録のその日の現出的状況(ドゥームズ・デイ・シナリオ)に言及することまでなした。それは RHIC が「通常の物質を呑みこみうるストレンジレット」を生成する可能性を指し示して見せたとのものであった。しかし、「心配することなかれ」とし、ウィルチェックは「このシナリオは plausible ではない」「ありえることではない」あるいは「もっともらしくは見えない」と結論付けていた。

後の7月中旬のサンデー・タイムズ紙の記事に影響を与えたのは1999年7月のサイエンティフィック・アメリカン誌のワグナー・ウィルチェック書簡を含む版である。これがより多くの紙誌における取扱い、そして、稼働中のマシンを止めるためのワグナー彼自身のものにもよる訴訟の提訴によって後追いされることとなった。

サイエンティフィック・アメリカン誌の6月号発行より少し前、ブルックヘブン国立研究所の所長ジョン・マクバーガーは書簡をめぐる状況を知り、RHICが[黙示録のその日の現出的状況]を引き起こしうるかの可能性について見極めさせるためのウィルチェックを含む令名馳せていた物理学者らによる委員会を設立していた。サンデー・タイムズの記事が世に出た時には計画推進段階にあったラージ・ハドロン・コライダーにつき同じくもの反応が出てくることを危惧したCERNの所長ルチアーノ・マイアニも同様のことをなした」

---

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

上にての文書 —疑わしきにおかれてはタイトル入力ダウンロード・内容確認いただきたいきもの—  
よりの引用なした部位、該当頁(19と振られた頁)では

**「加速器(ブルックヘブン国立加速器研究所運用のRHIC(リック))によってブラックホールが生成されるのではないか」**

との疑義をウォルター・ワグナー(同ワグナー、後に米国LHC差し止め訴訟の原告となった向きともなる)が1999年より投書にて発しだし、そうもしたワグナー問い合わせに対して

「加速器によるブラックホール生成などありうるところではない」

との見解が一線の物理学者(上記文書中ではフランク・ウィルチェック)によって呈されていたこと、また、その見解呈示に至るまでの書簡がマス・メディアに着目されて報じられるに至ったとの経緯が紹介されている。

(:ちなみに —本稿にての続いての段で概要紹介なししていくことになる[実験機関の「変節」の問題]に関わるところであるから細かくも言及しておくが— ウォルター・ワグナーが1999年という時期にあってブラックホール生成可能性について部外の人間として問題視するに至った理由付けは

[加速器実験実施研究機関および物理学界主流筋にブラックホール生成可能性の有無にまつわる[変節]をもたらすこととなった新規理論 —(本頁でも紹介することになる余剰次元というものにまつわる理論)— に基づきブラックホール生成の現実的可能性を問う]

とのものでは「ない」「なかった」と解されるようになっている。

ウォルター・ワグナーが1999年に加速器のブラックホール生成可能性について部外の人間として疑義発しだしたとの往時の疑念呈示の理由付けは

([変節]の問題とも関わるところで後に科学界の主流筋で問題視されるに至った)[新規理論の展開に由来するところのもの]

ではなく、別の申しようによるところのものであるとのことを指し示す情報しか現時・現行では手前 —(後述するが、常識「的」訴求の用に供するためだけに日本国内でブラックホール生成問題ら加速器リスクにまつわる行政訴訟を権威の首府を相手に起こし、先方相手方の弁護士らと第一審からして法廷で二年以上やりあっていた、そういう者として当該問題についての海外資料を煮詰めに煮詰めていもする人間としての筆者)— も捕捉していない。

その点、ブラックホール生成にまつわる嚆矢的なる批判をなしはじめた(加速器による破滅的リスクにまつわる批判は(後述するところとして)「真空の相転移」と

いった別問題との兼ね合いでより従前からなされていたもののブラックホール生成にまつわるころでは嚆矢的なる批判をなしはじめた)とのウォルター・ワグナーは [カリスマ物理学者スティーブン・ホーキングの原初宇宙に極微ブラックホールが存在しているとの申しように関する自身の知識]

からブラックホール生成可能性について照会を發しだしたとの言われようが世間一般ではなされている向きとなる(上の資料 Case of the deadly strangelets ( Institute of Physics、英国の物理学会の会員誌 Physics World 誌掲載の有識者由来過去記事を収めたオンライン上流通文書)にてもそのように、すなわち、“ The trouble began a few months earlier, when Scientific American ran an article about RHIC (March 1999 pp65-70). Its title, "A little big bang", referred to the machine's ambition to study forms of matter that existed in the very early universe. Walter Wagner, the founder of a botanical garden in Hawaii, wrote a letter in response to that article. **Citing Stephen Hawking's hypothesis that miniature black holes would have existed moments after the big bang, Wagner asked whether scientists knew "for certain" that RHIC would not create a black hole.**”(訳として)「問題はサイエンティフィック・アメリカン誌が加速器 RHIC についての記事 (1999 年 3 月号 65-70 ページ)を掲載した時より数か月前に遡る。『小さなビッグバン』とタイトルが付されていた同記事は [極めて早期の宇宙にて存在していた物質の組成を研究する装置の野心的側面に言及していた] とのものだった。ハワイの菜園の創立者となっていたウォルター・ワグナーがその記事に対してのものとしての手紙を書いてよこしてきた。[ビッグバン 直後、ミニブラックホールが存在していた]とのスティーブン・ホーキングの仮説を引用しながら、ワグナーは科学者らは加速器 RHIC (訳注:直近言及のように小さなビッグバン』と題されての記事にて問題視されていた加速器)はブラックホールを生成することがないとはきと分かっているのかどうか訊ねてきた」と掲載されているとおりである)。

さらに述べれば、ワグナーの質問に応えたフランク・ウィルチェックとは後の研究機関報告書作成にも関わってきた物理学者であり、なおかつ、2004 年に ノーベル物理学賞を受賞した向きでもある ——ウィルチェックのノーベル賞受賞については和文ウィキペディア[フランク・ウィルチェック]項目にて(現行 記載内容よりの端的な引用をなすとして)[2004 年デイビッド・グロス、H. デビッド・ポリツァー とともに「強い相互作用の理論における漸近的自由性の発見」の功績によりノーベル物理学賞を受賞した](引用部はここまでとする)と記載されているところ となる)—— )

以上をもって

[粒子加速器によってブラックホールが生成される可能性が取り沙汰されだしたのは[1999 年]からである]

とのことの典拠を示した。

続けて([事実 A]にまつわるものとしてもうけている出典(Source)紹介の部 1 の表記を続けて)、である。

[この端緒となった 1999 年にあってはブラックホール生成の可能性それ自体を事実上完全否定する(狂人の妄夢の如きものであるとする) 当事者研究機関の一群の報告書ら ——(後にノーベル賞受賞者となった科学者も関与しての報告書でもある)—— が世に出されることとなった]

とのことにまつわる典拠を挙げる。

表記のことについてはまずもって研究機関ブルックヘブン国立研究所報告書、

[ Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC ]

にあつての2と振られたページに下の通りの記載がなされていることを典拠として挙げておく。

(直下、加速器実験実施機関であるブルックヘブン国立研究所由来の公的報告書 **Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC** にての頁数表記として2と振られたページよりの引用をなすとして)

---

We also note that collisions at RHIC are expected to be less effective at raising the density of nuclear matter than at lower energies where the "stopping power" is greater, while as we noted before, existing accelerators have already probed larger effective energies. In no case has any phenomenon suggestive of gravitational clumping, let alone gravitational collapse or the production of a singularity, been observed.

(誰でもオンライン上より確認できるところの上記引用部に対する拙訳として)  
「我々(訳注:当該のブルックヘブン国立研究所の公式報告文書の執筆陣)が本書の前の部にて注記しているように既存の粒子加速器らがより巨大で有効性を帯びてのエネルギー規模に探りを入れている一方でのこととして、RHICという加速器が["stopping power"がより大きくもなるさらに低いエネルギーにあつて核物質の密度を上昇させるのにより非効率的なものであると期されているとのこと]につき、注記をなすものである。いかな場合であれ、重力の凝集、言うまでもなく、重力崩壊や特異点(ブラックホールの特異点)の形成が観測されるとのことを示唆するものではない」

---

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

上記文書中の“**In no case has any phenomenon suggestive of gravitational clumping, let alone gravitational collapse or the production of a singularity, been observed.**”「いかな場合であれ、重力の凝集、言うまでもなく、重力崩壊や特異点(ブラックホールの特異点)の形成が観測されるとのことを示唆するものではない」との部が1999年の実験機関申しようを端的に指し示す(疑わしきにおかれてはブルックヘブン国立研究所報告書、**Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC** を表記のタイトル入力で特定・ダウンロード、PDF形式の同文書中にあつての該当部(2と振られたページの**Black Holes and Gravitational Singularities**との節の下段部内容)をご覧いただきたい。尚、同報告書にあつての第一頁タイトル表記部に名前が記されているとの学者らのうち、F. Wilczekと記載されているのはフランク・ウィルチェック、ワグナーの1999年の照会に対してブラックホール生成はありえないと応えていた物理学者(つい先立っての段にて[2004年にノーベル物理学賞を受賞した学者である]と紹介もした物理学者)である)

さらに、1999年の粒子加速器関連リスク議論のありよう —— [事実A]にて摘出の議論ありよう —— を指し示す報告文書のうち、同1999年に刊行されたCERN報告書、[**Will relativistic heavy-ion colliders destroy our planet?**]の内容を下に引いておく。

(直下、1999年にてのCERN(欧州原子核研究機構)の報告文書 **Will relativistic heavy-ion colliders destroy our planet?** にあつての**6 Discussion and conclusions**の節、9と下に振られた頁よりの引用をなすとして)

---

We have argued that the experiments at RHIC do not represent a threat to our planet. But, is this "beyond the shadow of a doubt"? Considerations analogous to ours have been made for other questionably dangerous physical possibilities, such as the



production of black holes or the trigger of a reaction whereby the vacuum in which we are would be catastrophically converted into a "true" vacuum of lower energy density [22]. In these cases one is dealing with relatively simple theoretical constructs and one can draw conclusions that are correspondingly uncontroversial. In the case of strangelets, we are dealing with . . . .

(上記引用部に対する拙訳として)

RHICを用いての実験が我々の惑星(地球)に対する脅威をなんら呈するものではないとの点について我々は議論をなしてきた。しかし、これは[疑いの影を超えて] (疑いをさしはさむ余地などない)と述べられるものなのか。我々のそれと相似形を呈する思索が[ブラックホールの生成]や[真空にあつての真なる低エネルギー密度の真空へと我々の存在が破滅的に変えられてしまうとの反応(真空の相転移)の誘発]のような疑わしき他の危険なる物理的可能性のためになされもしてきた。それら場合にあって思索者(one)は相対的にシンプルな理論的枠組みを扱い、それに対応し[議論にすらない]との結論を描き出せる。ストレンジレットのケースでは(以下略)

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上のように1999年のCERN報告書ではブラックホール生成 the production of black holes の可能性については uncontroversial[議論にすらない]との筆致での書きようがなされている( [真空の相転移] とのより従前から問題視されてきたリスクたりうる現象(後述する)の発生懸念と相並ぶものとしてそういう帰結での書かれようがなされている)。

続いて、[事実A] (繰り返すが、[1999年になってはじめて加速器によるブラックホール生成にまつわる疑義が発せられた] [その折、加速器実験機関によって加速器によるブラックホール生成がなされるなどありえることではない(狂人の妄夢の如きのものである)との一蹴がなされた] との事実) に関して [法学者論稿 **THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD**] (上にて詳述なしているようにハーバード・ロー・スクールで学位を取得した後、ノースダコタ大で教鞭をとっているとの法学者 Eric Johnson の当該案件分析文書/現時、コーネル大の論稿配布サーバー arXiv より全文ダウンロードできるとの文書) の838と振られた頁にてよりの引用(文書内出典番号表記「も」そのまま反映させての原文引用)をなすこととする。

(直下、**THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD** にあつての838と振られた頁よりの引用をなすとして)

---

B. For the Foreseeable Future

In 1999, when questions floated in the media about accelerator-produced black holes, physicists issued an assurance that no particle collider in the foreseeable future would have enough power to accomplish such a feat.166

Busza report, which was done in anticipation of the commencement of RHIC operations.167 The report did a rough analysis of the particle collisions that would occur at RHIC and the gravitational effects that might result.168 The Busza team found that the forces created by the RHIC were orders of magnitude too small to possibly create a black hole.169

(上記引用部に対する拙訳として)

B. 予見しうる未来にあつて

1999年、加速器製ブラックホールについての疑問がメディアに浮かんできた折、物理

学者らはそのような業(わざ)をなしうるのに十分な力を有した「予見しうる未来にあっての加速器」は存在しないとの保証を発した。

Busza (訳注: 1999年にフランク・ウィルチェックらと共にブルックヘブン国立加速器研究所の安全報告書の執筆・公表に関わったとの物理学者 Wit Busza を指す) の報告書は RHIC 運転開始を期してもものされたものである。同報告書は RHIC で発生しうる粒子衝突および結果となる重力効果らについて「おおよその」予測をなしたとのものであった。Busza のチームは RHIC によって生成される力はブラックホールを生成するにはあまりに小さすぎると同定していた(以下略) 」

---

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

上にては[事実 A]の核となるところにつき

“ In 1999, when questions floated in the media about accelerator-produced black holes, physicists issued an assurance that no particle collider in the foreseeable future would have enough power to accomplish such a feat.<sup>166</sup> ” 「1999年、加速器製ブラックホールについての疑問がメディアに浮かんできた折、物理学者らはそのような業(わざ)をなしうるのに十分な力を有した「予見しうる未来にあっての加速器」は存在しないとの保証を発した(注記)166)」

と解説されている(※)。

---

(※尚、上にての引用部にあっての(注記)166と小文字で振られた部についてだが、

(表記文書 THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD をダウンロードして紹介ページ 838 をご覧いただければ、分かります、)

[ 166. BUSZA ET. AL., supra note 87, at 7. ]

と —— 欧米法律文書の特色に則ってラテン語 (supra) 付きで —— 注記されているところとなる。

それにつき、(きちんと細かくもの確認をなそうとの意欲ある向きが本稿を読まれているとの「一縷の期待」でもって比較的丁寧に解説しておくが)、同部 [ 166. BUSZA ET. AL., supra note 87, at 7. ] については

「注 166: Busza らの手になる「本書の」注 87 にても摘示の文書の 7 ページ目を参照のこと」

と和訳なせるところとなり、そこに見る[注 87 番]の文書は同じくもの法学者論稿『ジ・インジャクション・アゲinst・ジ・エンド・オブ・ザ・ワールド』文書中の(そちらは 829 と振られたページにてお目見えしているところの) 出典文書たる、

Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC (2004年にノーベル賞を受賞した物理学者、Frank Wilczek も Busza らと共に執筆陣に名を連ねている報告書となり、本稿にて先に出典として内容引用なししていたとのブルックヘブン国立研究所の報告書となる)

となり、同文書中の 7 ページの内容が —— 米国法律関係文書など検討したことなどないとの向きにあっては当然に『ややこしい』と思われるところかとも見るが —— 出典とされている。

につき、そうして出典紹介されている 1999 年のブルックヘブン国立研究所報告書

### Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC

にあつては(オンライン上より誰でもダウンロードなして確認できるように)確かにその 7 と振られたページにては

Thus our result will provide a bound upon, not an estimate of, the parameters that might be required to have a realistic shot at producing black holes.「このように我々の研究結果はブラックホール生成をなすとの現実的なショット (訳注:[加速器陽子ビーム撃ちよう]といったニュアンスの表現) を得るのに要される変数上の上限を [推測・推計のそれ] の類ではなく(具体的なものとして) 呈示せんとするものである」

とのその記載部に関わるところとして、

Of course higher-energy accelerators than RHIC achieve larger values of  $k_{qu}$ , but for the foreseeable future values even remotely approaching unity are a pipe dream.「無論、 $k_{qu}$  (訳注:報告書でも表されているところとして 量子重力のありようを決する数式の左辺) の値にあつて RHIC を越える高エネルギー加速器はより大きいところを実現できるわけだが、しかし、予見しうる限りの将来にあつて ( $k_{qu}$  のブラックホール生成に通ずる値が) [結合] に遠く近づくとのことさえ [全くの絵空事(パイプ・ドリーム)] である」

と記載されている ( : pipe dream [絵空事;パイプ・ドリーム] というところは [アヘン窟でパイプを啜るの夢見状態で麻薬常用者が見るような幻影、マリファナ愛好のお花畑の人間が見ている多幸症的世界の如きもの] (見当識を失った人間の狂夢・妄夢の如きもの) であると —— [加速器トンネル] をパイプでかこつけてのものなのか—— 述べていると判じられるが (はきと述べ、疑義を発している者を薬物にて酩酊状態に陥っているヒッピー的の人間と同列視せんとするある種、愚劣なやりようにとれるところではある)、 とにかくも、[RHIC を越える加速器] (LHC のことである) でもブラックホール生成など夢のまた夢、予測可能な未来では夢のまた夢であると「1999 年には」(実験機関報告書、後にノーベル賞を受賞することになったフランク・ウィルチェックが関与しての報告書では) 断言されていたことが見受けられるところとなっている)。

---

直上直前の段までにて

[ことの端緒となった 1999 年にあつてはブラックホール生成の可能性それ自体を事実上完全否定する(狂人の妄夢の如きものであるとする) 当事者研究機関の一群の報告書ら ——(後にノーベル賞受賞者となった科学者も関与しての報告書でもある)—— が世に出されることとなった]

とのことが「最も堅い」(常識の世界で「最も堅い」と看做される) 資料ら —— 加速器実験実施実験機関 それそのものに由来する公的報告文書や加速器問題についての案件解説をなしている米国家学者の論稿—— に基づいて申し述べられるところの典拠を挙げたことになる (ここ **出典 (Source) 紹介の部 1** にあつて指し示しの対象としている [事実 A] の典拠を挙げきったことになる)。

ネット上には —— (一群の責任感皆無の類ら([真実のみが人間を救うる])のだと解釈すれば、[自分自身も含めての人類に対する罪]を犯しているとの「人類の側には属していないだろうとの類」としか表しようがない人間ら)のために) —— [訴求力](あるいは[現実改変力])が絶無の[相応の水準]の馱法螺が充満・横溢しているとのことがあると手前などは強くも見るに至っているのだが、本稿にてこの段では[日本では新聞媒体のようなもの「さえ」もが[単純な事実関係を履き違えているとの伝で[信用がおけぬ]ものとなっている]とのことを紹介しておくこととする —— 細部に着目すれば、出鱈目・不正確な記述を多くなしているとの紙媒体に[重要なところ]で惑わされないように、との認識の下に、である —— 。

その点、まずもっては、この身が図書館(含む:国会図書館)で同定・捕捉したところの信頼の「おけない」国内資料の例として大新聞の特定記事をここ([事実A])にまつわる**出典(Source)紹介の部1**に包摂させての付記の部)にて挙げておくこととする。

具体的には[加速器とブラックホール生成にまつわる問題]に対する調査意欲ある読み手の視野を徒(いたずら)に曇らせるような大新聞由来の記事として以下のものが存在していることを一例として挙げておくこととする。

(本稿筆者などはおおよそ定期購読しようなどと思ったことがない新聞だが)朝日新聞の、  
[二〇〇五年三月二十六日朝日新聞夕刊第五面の記事]  
たる、  
(記事タイトル)『つくろう、行こう！ブラックホール アインシュタインの理論から90年...』

表記題名にて新聞資料検索端末を備えた図書館経由なら容易に捕捉できもしようとの2005年3月26日付けの記事 —— 記事表題からお分かりいただけることか、とも思うが、表記記事はブラックホール生成を肯定的なもの、余剰次元理論検証に資する真っ当な学問的営為として担ぎあげるとのものである —— にあっては(取材対象の相応の筋から[偏向情報]を相応のかたちで摂取させられて情報を無批判に右から左に流すだけ、といった記者自身よりもむしろ主流メディアを相応の筋合い・筋目の人間を集めて構築させているシステムそれ自体に問題がある可能性もあるか、ともとらえているわけではあるが) その記事内にて

[1998年に米国の物理学者が加速器によるブラックホール生成が現行レベルでも可能となると発表した]

などとの表記がなされている。

原文引用なせば、以下の通りのかたちにて、である。

(直下、日本にあってのブラックホール生成問題の初期的報道記事(二〇〇五年三月二十六日朝日新聞夕刊第五面の記事)にての上段部よりの原文ママ引用をなすとして)

素粒子の最新理論である超弦理論の「世界はもっと多くの次元からできている」という予言が本当で、しかもその影響が大きければ、ブラックホールになる距離は10のマイナス16乗(1京=0が16個並ぶ=分の1)くらいで

よいことになり「それなら現代の加速器で作られるかもしれない」と98年、米国の物理学者が発表した。

(引用部はここまでとする —— 表記の通りの記載がなされているか疑わしきは図書館によっては備えてある朝日新聞過去記事特定のためのデータベース照会サービスから [二〇〇五年三月二十六日朝日新聞夕刊第五面の記事] を捕捉のうえで内容検討されて見るとよからう—— )

その点、国内大新聞の上にて掲題の2005年特定記事にて[ブラックホール生成が可能となると発表されたのがその折である]などとの表記がなされている[1998年]というのは批判家も海外実験機関も

[加速器によるブラックホール生成]

が可能となるなどとして「いなかった」折のことである(：少なくとも海外の経年の報道動向観察、研究機関の往時の発表資料の内容、そして、手前自身の加速器実験機関に対する取材からそうも判じられるようになっている)。

さらに述べれば、1998年というのは

[ブラックホール生成可能性]

ではなく

[ブラックホール生成が人間の実現できるレベルのエネルギー規模で可能になりうるとの申しように「後に」つながった理論 — 余剰次元理論([事実B]の摘示部で問題とする理論) — ]

が水面下にて発表されていた折のことである(間を経ずに後述するところとして、である)。

そちら1998年初出の[余剰次元理論]提唱がそうした潮流をあらたに生み出した理論動向が2001年の[ブラックホール生成ありうべし]との実験機関発表につながることとなったわけだが、2001年の前段階の1999年にあっても加速器実験を主催する研究機関 —— 道理から言えば、[公衆に対する最も重いもの]としての説明責任を負った研究機関ら —— にでさえ

「ブラックホール生成はありえない」

とのことが目立って強弁されていた(ワグナー氏が嚆矢となった疑念視のありように対して切り返すように目立ってそうも強弁されていた) というのが

[表沙汰になっているところの事実関係]

である(それがここ [出典\(Source\)紹介の部1](#) にての加速実験機関由来の報告文書に基づいての指し示し事項である。尚、1999年に至るまでのやりとりにおいて[研究機関レベルでの公衆に対する欺瞞]が介在していたかどうかの可能性は別問題として後に問題視することにもなるわけだが、とりあえず、現実の研究機関由来の一次資料に基づく主張動向としてはここまで表記の通りの申しよう、ブラックホール生成の可能性さえ観念されないとの申しようが2001年に至るまでなされてきたとこのことがある。(話がくどくもなっているが)であるから、朝日新聞の記事執筆者が余剰次元理論の発表時期たる1998年をもってしてブラックホール生成が肯定的に認められだした折と自己合点して(あるいは取材対象とした学者らのいい加減な言に「よくも検証せずに惑わされて、」かもしれない)[公器]などと表されもする(事実かどうかは別としてそうも表されもする)「彼らの」情報流布媒体紙面にて書いていたとしてもそのような情報に惑わされてはならないと申し述べておく —— また、筆者は自身が呈示する情報についても全幅・無条件の信を置けなどと強制はしない。代わり



に疑わしきに対しては「出典を全部、遺漏無くも原文引用とのかたちでここにて明示しているのだから、その通りの記載が呈示資料らの中になされているのか、それが『文献事実』となっているのか、きちんと御自身の目で確認されてみるとよからう」と申し述べておきたい次第である——）。

加えて、である。表記のような国内報道機関の記事——[二〇〇五年三月二十六日朝日新聞夕刊第五面の記事]として初出の『つくろう、行こう！ブラックホールアインシュタインの理論から90年...』と題されての記事——が(LHCのブラックホール生成問題について扱った記事が各社総計で量的に少ない中にあっても)存在しているような「国内の」言論流通動態とも関わるところか、と思うのだが、国内物理学者由来の書籍「にも」時期的に納得がいきかねる記述、

「1999年(1998年ではなく1999年)にてすでにブラックホール生成のことが余剰次元との絡みで真つ当な物理学者らに取り上げられるようになっていた」

との申しようをなしているものが存在する。

その具体的内容について本稿にての後の段にてさらに取り上げる所存であるとの書籍だが、

『「余剰次元」と逆二乗の破れ』(講談社刊行／著者は国内私学准教授の物理学者)

という書籍がその伝で問題となるものとなる。

書店でよく見かける国内文庫本のシリーズ、講談社ブルーバックスシリーズに属する上の著作『「余剰次元」と逆二乗の破れ』(2011年刊)にてはそのp.163にあつて

(直下、引用するところとして)

「重力や余剰次元の話を頻繁に聞くようになったのは、1999年頃のことだ。RHICで原子核同士を非常な高エネルギーで衝突させると、クォーク・グルーオン・プラズマどころか、ブラックホールができるという噂が飛び交っていたのである。実際、ADDモデルでは加速器で粒子同士を高エネルギーで衝突させると、一時的にブラックホールが形成される可能性がある」

(原文引用部はここまでとする)

などとの申しようがなされている。「仮に」そうした申しよう——1999年時点で物理学者の間にて余剰次元モデルからブラックホール生成がありうるとの噂が飛び交いだしていたとの申しよう——が本当であるのならば、そう、[1998年から提唱されてのADDモデル(余剰次元モデル)の帰結(ブラックホール生成ありうべしとの帰結)]

を当該著作の著者が時期繰り上げしてのはなしようを「何故なのか」なしているのではなく本当であるのならば、

[日本の研究者の述懐なしての申しようがその述懐時(1999年)に出された実験機関報告書、ノーベル賞受賞級物理学者(2004年にノーベル賞受賞のフランク・ウィルチェック)らもが関与していた公式発表なされたものであるとの海外の加速器実験実施研究機関の公的報告文書(本稿のつい先ほどの段にて取り上げた1999年初出のWill relativistic heavy-ion colliders destroy our planet?などのCERN報告書など)が[偽り]をなしていたと指摘す

るようなことをなしている —— というのも 1999 年時点にあって加速器運用機関から出された報告書はすべて(1998 年から呈示された余剰次元理論のことを何ら問題視することなく)それが生成された後のリスクはどうか云々以前に、そも、[ブラックホールが生成されうるといふ可能性だに否定する]ものであったからである —— ]

とのことにもなる(「理の当然」といったこととして、である)。

それにつき、[事実関係]が重んじられているとの欧米圏での流通文書(CERN やブルックヘブン国立研究所由来の公式安全性報告文書として上にて挙げているとの文書ら —— ワグナーやりように端を発する論調を受けて秋期以降に出された文書ら —— )の申しようの態様から引きなおして見、国内実験関係者申しよう([まさしくものブルックヘブン国立研究所]にて席を置いていたともいう日本人研究者の手になる『「余剰次元」と逆二乗の破れ』の記述内容)が真っ向から矛盾するものとなっていることについては、である。[門外漢向けに話を分かり易くするための国内著作著者の配慮が望ましくなき方向に作用した] (「海外実験機関に由来する 1999 年から 2001 年にかけての[変節]を公共心も道義心もなくに[なかったことにする]ためのよろしくはない国内の学者 由来の配慮がなされたのかもしれない」などとはここでは考えないこととする)、ないしは、[当該著作著者本人の誤記憶または出版社頼みの校閲上のミス(よくあることではある)が単体あるいは双方介在している可能性もある]との見立てを本稿筆者としては(現行)なしている —— 平然と確信犯的嘘・偽りをなす、あるいは、確信犯的偽りを「なさせられもする」との人間がこの世界には非常に多いと手前は見ているのだが、といった冷めた見方をなさなくとも、人間の認識は周囲の動向に左右されやすく、それゆえに悪意なきところの錯誤・錯簡を往々にして呈するものであることは論ずるまでもないことか、と思う。それがケアレス・ミスとしての誤表記などとなるとその頻度はさらにもって上がろうことと見る(「限られた時間の中で」本一冊分、文量数十万字の文をしたためるとのことを自身がなした際、確かに誤字脱字などのレベルからして「これはしまった。」といったミスが後々頻繁に見つかって往生させられたとの経験は本稿筆者にもある)。さらに述べれば、当人に錯誤・錯簡などの落ち度がさしてなくとも出版物というものは[校閲]がきちんとなされていないと誤表記で溢れかえることになりかねないといったものであるとのこともここでは強く断っておく—— )。

(客観的に問題点はこれでこうだと示せるかたちで「信頼の置けぬ」ようになっているとの国内の情報媒体にまつわる付記はこれにて終える)

---

(長くもなったものの、[事実 A]に関する出典紹介部 (出典(Source)紹介の部 1) はここまでとしておく)

---

以降にては[事実 B]が[記録的事実]としてはきとそこに実在していることを示すための出典(Source)紹介の部 2 に入る。

## 出典 (Source) 紹介の部 2



# SOURCE

## 2

ここでは

### [事実 B]

粒子加速器(の中にあつての LHC)による[ブラックホール生成]がなされうるとのことが — ([事実 A]に見るように[1999 年]にあつてそれが [ありうべきリスク]として専門領域「外」の人間に問題視されだした際には「そも、粒子加速器によるブラックホール生成はありうべきところではない」と当時者研究機関に否定されていた]とのところから一転して) — [ありえることである]と[肯定的に]科学界主流筋および研究機関によって「公的に」認められるようになったのは

[2001 年]

のことからである(：その 2001 年からの論調では「通年で 1000 万個単位の」「安全な」極微ブラックホールが生成されることになりうるともされるようになった)。

すなわち、「1999 年]にあつては」ブラックホールが人為生成される可能性だに否定していた科学界・実験機関の論調が「2001 年]に」変容を見、一転、加速器によるブラックホール生成をしてありうると肯定するようになったとのことがある(それについては、—これまた当然に論拠を挙げるところとして— [1998 年]に水面下で提唱されていた余剰次元理論(というもの)から導き出された帰結]が 2001 年の[変節]の背景にあると一般には説明されている)。

との通りの[記録的事実]があることに関する証示を[最も確度高き資料]を出典としてなしておく(当然に読み手が容易に後追いできるとの式にてなしておく)こととする。

まずもって出典として呈示する資料らの概要紹介をなすことからはじめる。きちんと検証なしたいとの読み手におかれては下の文書らが確度高いものと言えるかどうか、そこからして確認いただきたい。

ここ出典 (Source) 紹介の部 2 にて原文引用なすことにした資料、その資料概要の紹介として

[[事実 B]の出典として挙げることとしたとの文書群]

[ THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END

**OF THE WORLD** ] (検索エンジン上での表記の英文タイトル入力ダウンロード可能な論稿/[出典(Source)紹介の部1]でも概要紹介をなしたうえで同文書よりの原文引用をなしてきたとの法学紀要 —テネシー・ロー・レビュー—掲載の法学者論稿『ジ・インジャクション・アゲinst・ジ・エンド・オブ・ザ・ワールド』、すなわち、『ブラックホール・ケース:世界の終りに対する差し止め(請求事例の分析)』とでも訳せよう文書)

**[書籍 COLLIDER: The Search for the World's Smallest Particles (邦題)『神の素粒子 —宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』]** (日経ナショナルジオグラフィック社) (通俗的な実験機関担ぎあげ本ながらも「事実経過記載部」には信を置いてよかろうといった書籍/原著は2009年刊で邦訳版の監訳者は日本のLHC実験参加グループの共同代表の1人となっているとの書)

それでは以上表記の文書らより

**[事実B]**

粒子加速器(の中にあつてのLHC)による[ブラックホール生成]がなされうることが——([事実A]に見るように[1999年]にあつてそれが[ありうべきリスク]として専門領域「外」の人間に問題視されだした際には「そも、粒子加速器によるブラックホール生成はありうべきところではない」と当時者研究機関に否定されていた]とのところから一転して)—— [ありえることである]と「肯定的に」科学界主流筋および研究機関によって「公的に」認められるようになったのは

**[2001年]**

のことからである(:その2001年からの論調では「通年で1000万個単位の」「安全な」極微ブラックホールが生成されることになりうるともされるようになった)。

すなわち、「1999年]にあつては」ブラックホールが人為生成される可能性だに否定していた科学界・実験機関の論調が「2001年に」変容を見、一転、加速器によるブラックホール生成をしてありうると肯定するようになったとのことがある(それについては、—これまた当然に論拠を挙げるところとして— [1998年に水面下で提唱されていた余剰次元理論(というもの)から導き出された帰結]が2001年の[変節]の背景にあると一般には説明されている)。

との兼ね合いで問題になる部を[原文引用]とのかたちで紹介することとする。

まずもって、

**[ THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD ]**

との法学者(Eric Johnson)による論稿 —『ブラックホール・ケース:世界の終りに対する差し止め(請求事例の分析)』とでも訳すべき論稿— の内容を引くこととする。

(直下、THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD にての 839 と付された頁よりの原文引用をなすとして)

---

In 2001, a new theory concerning black holes emerged. Steven B. Giddings, a physicist from the University of California, Santa Barbara, wrote a paper with the rather provocative title, "High energy colliders as black hole factories: The end of short distance physics."<sup>173</sup> The paper suggested that if space had extra hidden dimensions beyond the familiar four, then the power to make black holes might well be within grasp.<sup>174</sup> In particular, Giddings suggested that the LHC, when it comes online, might be able to produce black holes at the rate of one every second.<sup>175</sup> Around the same time, Savas Dimopoulos of Stanford and Greg Landsberg of Brown made similar predictions in a paper called "Black Holes at the Large Hadron Collider."<sup>176</sup>

(拙訳として)

2001年、ブラックホール生成問題に関わるとの新理論が現れた。カリフォルニア大学サンタバーバラ校所属の物理学者、スティーブン・ギディングス(Steven B. Giddings)が刺激的なタイトルの論文、"High energy colliders as black hole factories: The end of short distance physics."『ブラックホール製造工場としての高エネルギー加速器:短距離物理学の終わり』を世に出したのである。同論文は[もし空間がよく知られた四次元に加えて隠れた余剰次元を有しているのならブラックホールを生成するほどの力が得られるだろう]と提案したものだった。殊にギディングスの述べるところではそれが稼働状態となった折、LHCはブラックホールを1秒ごと1個、製造できるようになるかもしれないとのことであった。ほぼ同時期、スタンフォード大のサバス・ディモプーロス(Savas Dimopoulos)とブラウン大のグレッグ・ランズバーグ(Greg Landsberg)らがその論稿 Black Holes at the Large Hadron Collider『LHC にあつてのブラックホール(ら)』で同様の見立てを呈することになっていた。

---

(訳を付しての引用部はここまでとする 一※一)

(※上にての案件解説文書に見る、Black Holes at the Large Hadron Collider, Greg Landsberg とのグーグル検索エンジン上での論文タイトル入力で発信元特定を捕捉できる場所の論文、

[ Black Holes at the Large Hadron Collider ] (コーネル大図書館運営の論稿配布サーバーたる arXiv 経由で誰でもダウンロード可能となっているとのスタンフォード大のサバス・ディモプーロス(Savas Dimopoulos)とブラウン大のグレッグ・ランズバーグ(Greg Landsberg)らの論文)

にてはその冒頭部、タイトル部直下より

If the scale of quantum gravity is near a TeV, the LHC will be producing one black hole (BH) about every second.「量子重力の規模が TeV 領域に近づくとする LHC は毎秒ひとつのブラックホールを作ることになるだろう」

との記述がなされていること、確認できるようになっている。

ちなみに、論稿の初出時期についてだが、(それがレビューを経て公の顔を持つに至ったのが何時なのかは見方に差異生じるところかとも思うも) High energy colliders as black hole factories: The end of short distance physics とのスティーブン・ギディングスら論稿にあつてはオンライン上の arXiv ——コーネル大の論稿ファイル公開用サーバーおよびそのサイト——にての論稿紹介 HTML ファイル上に Submitted on 19 Jun 2001 との記述がなされ(ただ、こちらは 2002 年認証との見方がなされることがある)、Black Holes at the Large Hadron Collider とのグレッグ・ランズ



バークら論稿にあってもさしてそれと離隔無くも世に出ているとのことがある。

また、さらに述べれば、それら2001年からの論稿のエポックメイキングさはニューヨークタイムズなども報じるところとなっており、オンライン上よりそのことを扱った英文記事も捕捉できる。

[ Physicists Strive to Build a Black Hole ]

との題名が振られた(表記タイトルの検索エンジンの入力にて)誰でもダウンロードできるとのニューヨークタイムズのオンライン上記事がそれとなり(その署名日付は奇しくもなのか、September 11, 2001とかの同時多発テロの折となっている)、の中には

(長大な記事より必要部のみ引用なすところとして) “ **This summer two teams of physicists — Dr. Giddings and Dr. Scott Thomas of Stanford University, and Dr. Landsberg and Dr. Savvas Dimopoulos, who is also at Stanford — worked out the implications in more detail, showing that multidimensional gravity would be strong enough to produce black holes in great abundance in the next generation of particle accelerators. (The papers can be found on the Web at xxx.lanl.gov/abs/hep-ph/0106219 and xxx.lanl.gov/abs/hep-ph/0106295.)** ” (訳として)「今夏、二組の物理学者チーム、ギディング博士とスタンフォード大のスコット・トーマスのチーム、そして、同文にスタンフォード大のランズバーグ博士とサバス・ディモポーラス博士のチームが [多層次元に渡って介在する重力] が次世代の粒子加速器によって量的に豊富とのかたちでブラックホールらを生成するのに十分なほどに強いかもしれないとのより微に入っの示唆をなす解法を導き出した (work out なした)。そうした論文らは表記のページにて見付けることができる」(以上、ニューヨークタイムズ記事よりの端的なる引用とした)

との記載が見受けられるところとなっている。—— 尚、スティーブ・ギディングがスタンフォード奉職の物理学者のように誤信させるような紛らわしい記述が表記引用部にてはなされているが、同じくもの記事の別の段にて “ “ Future colliders could become black hole factories,” said Dr. Steven B. Giddings, a physicist at the University of California at Santa Barbara. ” 「「未来の加速器はブラックホール生成工場になるかもしれませんね」とカリフォルニア大学サンタバーバラ校のギディング博士は言う」と言及されているように同ギディングスはカリフォルニア大サンタバーバラ校の物理学者となる —— )

次いで、

書籍 COLLIDER: The Search for the World's Smallest Particles (邦題タイトル)『神の素粒子 —宇宙創成の謎に迫る究極の加速器— 』

よりの引用をなす(日経ナショナルジオグラフィック社より刊行の訳書よりの引用をなす)こととする。

(直下、『神の素粒子 —宇宙創成の謎に迫る究極の加速器— 』にての p.278—p.279 の境目となるところよりの原文引用をなすとして)

---

「二〇〇一年、サバス・ディモポーラスはブラウン大学の物理学者グレッグ・ランズバーグと共に、極微ブラックホールが LHC (大型ハドロンコライダー) で見つかるかもしれないという論文を発表して反響を呼んだ。そのシュヴァルツシルト半径はプランク長とほぼ同じくらいだ。十のマイナス三十三乗センチ(原子核の千兆分の一)より小さい。大きな余剰次元についての研究から、彼らは LHC が年間一千万個のブラックホールを

(引用部はここまでとする)

(:表記のとおりの記事がなされているか疑わしきにおかれては図書館で借りるなりして COLLIDER: The Search for the World's Smallest Particles (邦題タイトル)『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』の該当ページ内容の確認をなしていただきたい。

尚、『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』よりの原文引用部に見る「年間一千万個」との記述についてはエポックメイキングなものであるとされるグレッグ・ランズバーグらの論稿 [ Black Holes at the Large Hadron Collider ] (誰でもダウンロード可能なものについて先立って紹介したもの)の下に2と振られたページの右下部内容

“ If the fundamental Planck scale is 1 TeV, LHC, with the peak luminosity of 30 fb<sup>-1</sup>/year will produce over 10<sup>7</sup> black holes per year.” 「もしもって本質的な意味でのプランク・スケールが 1TeV 単位のものとなされうのなら、ピーク時のルミノシティが 30fb のマイナス 1 乗となる LHC にて通年単位で 10 の 7 乗個 (1000 万個) のブラックホールが生成されるだろう」

との記載に依拠していると解されるところであり、そこに引用元書籍著者 (ポール・ハールパーンという物理学者) の主観は入り込んでいない (と傍目にも判断できる)

本稿で都度問題視していくものともなるが、以上の通りの流れ、

[2001 年より LHC によるブラックホール生成可能性を指摘する論文が登場し、反響を呈することになったとの流れ]

が生じたのには

[1998 年提唱の余剰次元理論]

というものが関わっている。

については、直近挙げたところの法学者論考 THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD にての記述内容、

“ The paper suggested that if space had extra hidden dimensions beyond the familiar four then the power to make black holes might well be within grasp.” 「同論文は [もし空間がよく知られた四次元に加えて隠れた余剰次元を有しているのならブラックホールを生成するほどの力が得られるだろう] と提案したものだった」

との部からも片鱗が窺えるところともなり、たとえば、日本の LHC 実験参画グループ元代表者に由来するオンライン上公開文書よりも同じくものが後追いできるところとなっている。その点、ここでは誰でもネット上よりダウンロード可能となっている、

[日本の LHC 実験参画グループ (アトラス・ジャパン・グループ) の元代表者の手になる『LHC 加速器の現状と CERN の将来計画』と題されての PDF 文書 (オンライン上にあつてのそのままの文書タイトル名入力で「現行は」全文ダウンロードできるとの 2008 年 12 月 5 日付けの PDF 文書)]

にての記述内容を下に引いておくこととする。

(直下、オンライン上流通文書『LHC 加速器の現状と CERN の将来計画』にあつての

[166]および[167]との頁番号が付されたところよりの引用をなすとして)

「1998年に提唱されたADDモデルでは余剰次元を導入することによってヒッグス粒子の質量の不安定性(階層性問題)を解決する。このとき重力はTeV領域で強くなり、LHCでの陽子衝突でブラックホールが生成され、ホーキング輻射のため $10^{-26}$  secで蒸発すると予言された。これは理論屋にとって大変魅力ある新しい展開で、危険性などまでには考えが及んでいなかった」

(引用部はここまでとする —※上にては1998年が余剰次元によるブラックホール生成観念の端緒のように記載されているが、正確には2001年が端緒である。同じくものことについては本稿にての先行する[出典\(Source\)紹介の部1](#)にても解説したことだが、後続する段でも解説を加える—)

ちなみに、1998年に余剰次元理論を提唱した学究は「A」rkani-Hamed アルカニハメド、「D」imopoulos ディモポラス、「D」valiドヴァリとの姓の物理学者らであり、余剰次元理論を指す呼称ADDモデル(ADD Model)は彼ら頭文字に由来している。同点についてはたかだか英文Wikipedia[ Large extra dimension ]程度のもので容易に見出せるところとなっている — 掻い摘まんでの抜粋をなせば、“ In particle physics, the ADD model, also known as the model with large extra dimensions, is a model framework that attempts to explain the weakness of gravity relative to the other forces. [...] The model was proposed by Nima Arkanı-Hamed, Savas Dimopoulos, and Gia Dvali in 1998.”と見出せるところとなっている— わけだが、余剰次元モデルことADDモデルの「D」の由来ともなっているディモポラス(スタンフォード大の Savas「D」imopoulos)がここ[事実B]にまつわる出典紹介部(本段、[出典\(Source\)紹介の部2](#))にあつてのつい先ぞの段で摘示しているように加速器によるブラックホール生成にまつわるエポックメイキングな論文[ Black Holes at the Large Hadron Collider ]を著した人間の一人となっているとのことがある)

(※ここで「先行する段にても述べていた」ことを繰り返しておくが、(1998年提唱の)余剰次元理論を巡るあれやこれやに着目して、1999年、ウォルター・ワグナーが加速器RHICのブラックホール関連の危険性を問題視したわけ「ではない」との説明のされ方が一般にされている(ワグナーは物理学系学士号も持っている)のであるが、ワグナーが余剰次元のことを問題視していたとの説明のされ方はなされていない)。一般に指摘されているところとしてウォルター・ワグナーやりようとしては[スティーヴン・ホーキング(車椅子のカリスマ物理学者として知られ、本稿のこれよりの段で問題視するホーキング輻射の1974年の提唱者)が主張しているようなところとして原初宇宙には極微ブラックホールが存在しているとの視点が呈示されている]⇒[加速器は原初宇宙の状況(エネルギー状態として近似する状況)を再現しようとのものである]⇒[そうした加速器はブラックホールを生成する可能性が絶無だと述べられるか、疑義がある]

との流れでブラックホール生成可能性を表立って問題視したとかたちとなっており、そうしたやりようが(先立っての段でも解説したとの物理学者フランク・ウィルチェックの問題を感じさせる応対も相まって)欧米圏マスコミに着目されるようになったとの流れとなっており、彼ワグナーについては余剰次元理論のことまでは問題視して「いなかった」との説明のなされかたが一般にされているとの向きとなる — 先の段にて [ Case of the deadly strangelets ] との資料より引用しているところとして “Citing Stephen Hawking's hypothesis that miniature black holes would have existed moments after the big bang, Wagner asked whether scientists knew "for certain" that RHIC would not create a black hole ” (訳として)「ビッグバンの直後、ミニブラックホールが存在していたとのスティーヴン・ホーキングの仮説を引用しながら、ワグナーは科学者らはRHICはブラックホールを生成することがないとはきと

分かっているのかどうか訊ねてきた」(引用部訳はここまでとしておく)と記載されているところが同じくもの点に関わる点となる——)

これにて

「2001年からブラックホール生成可能性が関係者らに肯定的に論じられるようになった」

とのこと、[事実B]にまつわる出典紹介に一区切りを付ける(尚、[事実A:1999年からブラックホールの生成可能性が批判家(ウォルター・ワグナー)によってはじめて問題視されたしたが、の折は、ブラックホール生成の可能性など考えられないと発表されていた]および[事実B:2001年より(科学理論動向の変転を受けて)ブラックホール生成の可能性が肯定的に見られるようになった]とのことらの双方に関わる点としてフランチェスコ・カロジェロ、パクウォッシュ会議を代表してノーベル平和賞を受賞しているとの同大物物理学者のそれに集約されているとの科学界論調のことも本稿の後の段、**出典(Source)紹介の部5**にて問題視することとする)

■ 外挿付記として：ここ【典拠紹介部3】には「長くもの」p.59からp.70との頁数を割いているため、以降【典拠紹介部】(従たるところ)と【指し示しの主軸たる点】の関係について惑われぬよう、何卒ご注意いただければ、と申し述べさせていただきます。また、「お勧めはいたしません」が典拠委細読み飛ばしのおかげで内容把握なそうとの向きにおかれましては(歩を進めていただきもし)本書p.70から読解いただければ、と考えています。

出典(Source)紹介の部3



# SOURCE

## 3

続けて、

[事実C]

粒子加速器 LHC によってブラックホール生成がなされうると加速器実験実施研究機関に認容されるに至った折、当然に学者らは「ブラックホール生成がなされても[安全]である」と強調していた。

ブラックホール生成がありうることとされるに至った後、その初期的段階(2001年から2003年)にあっては安全性にまつわる論拠として

[[ホーキング輻射(ふくしゃ)と呼称される(仮説上の)現象]の発現による生成ブラックホールの即時蒸発]

のことが部外者・公衆向けの安全性報告文書で挙げられ、次いで、2008年以降よりは安全性論拠として

[宇宙線(Cosmic-ray/宇宙を飛び交う高エネルギーの放射線)との比較による生成

された「蒸発しない」可能性のあるブラックホールの無害性]のことが(更改を見ての)部外者・公衆向けの安全性報告文書にて強くも前面に押し出されるに至った、とのことがある。

そのような安全性論拠の主張動態(重み付け)の変化の背景には —それについても当然に典拠挙げるところとして— [ホーキング輻射](と呼ばれる仮説上の現象)の発現が確実視され「なくなった」とのことがあると「される」。

の出典紹介のための部([出典(Source)紹介の部3])に入る。

ここ出典(Source)紹介の部3では以下の文書(よりの原文引用)に基づいての事実関係の確認をなすこととする。

---

[事実C] について指し示すために原文引用なすことにした資料、その資料概要として

[ **STUDY OF POTENTIALLY DANGEROUS EVENTS DURING HEAVY-ION COLLISIONS AT THE LHC** と題された英文文書 ] (CERN の 2003 年度安全報告書そのもの / 表記の英文タイトル入力で検索エンジンよりそのダウンロードページを(現時点では)誰でも特定可能となっているとの文書)

[ **THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD** ] (先立っての出典(Source)紹介の部1 および出典(Source)紹介の部2 でもそちら内容を取り上げてきたとの米国法学者の手になる案件解説文書 / 無論、「であるから出典紹介として意をなす」ところとして容易に全文確認な文書、検索エンジン上での表記の英文タイトル入力ダウンロード可能となっているとの文書)

---

それでは以上の文書らにあつての

[事実C]

粒子加速器 LHC によってブラックホール生成がなされうると加速器実験実施研究機関に認容されるに至った折、当然に学者らは「ブラックホール生成がなされても[安全]である」と強調していた。

ブラックホール生成がありうることに至っての後、その初期的段階(2001 年から 2003 年)にあつては安全性にまつわる論拠として [[ホーキング輻射(ふくしゃ)と呼称される(仮説上の)現象]の発現による生成ブラックホールの即時蒸発]

のことが部外者・公衆向けの安全性報告文書で挙げられ、次いで、2008 年以降よりは安全性論拠として

[宇宙線(Cosmic-ray / 宇宙を飛び交う高エネルギーの放射線)との比較による生成された「蒸発しない」可能性のあるブラックホールの無害性]のことが(更改を見ての)部外者・公衆向けの安全性報告文書にて強くも前面に押し出されるに至った、とのことがある。

そのような安全性論拠の主張動態(重み付け)の変化の背景には —それについても当然に典拠挙げるところとして— [ホーキング輻射](と呼ばれる仮説上の現象)の



発現が確実視され「なくなった」とのことがあると「される」。

とのことの兼ね合いで問題となるところを挙げる。

まずもってそこより紹介ですが、

[ **STUDY OF POTENTIALLY DANGEROUS EVENTS DURING HEAVY-ION COLLISIONS AT THE LHC** ] (2003 年 CERN 報告書. 表記表題の検索エンジンに入力することで PDF 版の所在を特定、誰でもダウンロード取得できるとの文書)

にあつては次の通りの記載がなされている。

(直下、**STUDY OF POTENTIALLY DANGEROUS EVENTS DURING HEAVY-ION COLLISIONS AT THE LHC** の 2 と振られたページよりの引用をなすとして)

---

The second question we address is the possibility of creating dangerous objects associated with gravitational interactions. A similar question was also discussed in the RHIC report with the conclusion, expected by ordinary dimensional analysis, that such gravitational effects are suppressed by inverse powers of the Planck mass  $M_p$  and are, therefore, negligible. Recently, however, there have been suggestions that  $M_p$  is not the right parameter to use in the analysis because it does not determine the fundamental scale of the theory. These models contain extra compact space dimensions [4], whose size may be much larger than  $M_p^{-1}$ , in fact as large as the inverse of a few TeV.

(拙訳として)

我々(抜粋元文書 **STUDY OF POTENTIALLY DANGEROUS EVENTS DURING HEAVY-ION COLLISIONS AT THE LHC** の執筆陣たる案件検討に関わった CERN 関係者ら)が的を絞ったところの第二の疑問は[重力相互作用に関わる危険な物体ら]( dangerous objects associated with gravitational interactions )が生み出される可能性である。

同様の疑問については[RHIC にまつわる報告書]にあつて議論されており、その議論は [そのような重力における効果はプランク質量( $M_p$ )の反対の力らによって抑えられるところであり、従つて、無視できるものである]との[一般的な次元にまつわる解析]によって期待されるところの結論を伴つたものであつた

しかしながら、今回にあつては、「 $M_p$ (プランク質量)はそれが理論にあつての基礎的基準を決定しえないとのことで分析にて使用すべき適切なパラメーターにならない」との提案が存在している。

それら(理論上の)モデルは [プランク質量の逆数( $M_p$ のマイナス1乗)より大きいかもしれない、実際に数 TeV(テラエレクトロンボルト;兆単位の電子ボルト)の逆数(the inverse of a few TeV)と同じくらいのサイズかもしれない「余剰の」小さくまとめられた空間次元] のことを含意するものである。

---

(訳を付しての引用部はここまでとする —※— )

(※[物理学分野にあつての普通人には訳の分らぬジャーゴン(専門用語)]で溢れている部だとの認識が当然にしてあるために補いもして述べるが、上の引用部

は、要するに、  
「1999年に出されていた[RHIC 報告書]([事実 A]の部の出典紹介部たる[出典 (Source) 紹介の部 1]で訳を付しながらも内容紹介していたとの研究機関由来の一次文書)ではそちら生成が観念されていなかったとのブラックホールの類が ([重力相互作用に関わる危険な物体ら **dangerous objects associated with gravitational interactions**])として) 生成されうると [新規に提唱された余剰次元] から観念されるようになった」

と述べられているところとなる。

その点、一先立っての[事実 A]に関しての論拠摘示部の内容を再確認されたうえででも—

(直近引用部内容を繰り返すとして)

“The second question we address is the possibility of creating dangerous objects associated with gravitational interactions. A similar question was also discussed in the RHIC report with the conclusion, expected by ordinary dimensional analysis, that such gravitational effects are suppressed by inverse powers of the Planck mass  $M_p$  and are, therefore, negligible.” (大要として)「的を絞っての第二の疑問については重力相互作用に関わる危険な物らが生み出される可能性(※ブラックホール生成の可能性のこと)であるが、同疑問については[RHIC にまつわる報告書]にあってすでに議論されており、「[そのような重力における効果]はプランク質量を逆転させての力らによって抑えられるところであり、従って、無視できるものである」との一般的な[次元]理解に則ての分析に依拠しての帰結が出されている」

との部、および、

“Recently, however, there have been suggestions that  $M_p$  is not the right parameter to use in the analysis because it does not determine the fundamental scale of the theory. These models contain extra compact space dimensions [4], whose size may be much larger than  $M_p^{-1}$ , in fact as large as the inverse of a few TeV.” (大要として)「が、それらモデルは最近になって成り立たないとの提案(プランク質量  $M_p$  をパラメーターとして成り立たしめなくなるとの提案)が存する。といったモデルは余剰の小さくまとめられた余剰次元の存在を含意するものである」

との部の(専門用語にあたら振り回されずにの)読み手理解を願う次第でもある

同じくもの文書よりの引用を続ける。

表記の文書、

#### [ STUDY OF POTENTIALLY DANGEROUS EVENTS DURING HEAVY-ION COLLISIONS AT THE LHC ] (2003年 CERN 報告書)

にあっては(ここにて指し示し対象としている[事実 C]に関わるところとして)次のような記載もなされている。

(直下、STUDY OF POTENTIALLY DANGEROUS EVENTS DURING HEAVY-ION COLLISIONS AT THE LHC の下に 2 と振られたページにあってより原文引用なすところとして)

---

This opens the exciting possibility of observing the effects of these extra dimensions at the LHC, but also requires a new examination of potential hazards. We present our estimations in Section 3 with the conclusion that dangerous objects, like growing black

holes, are still far beyond the reach of the LHC, essentially because only extremely massive ones are stable.

(補いもしての拙訳として)

「この見解(訳注:つい先立って引用なしたところの「隠れた次元を含意する」見解)は LHC 実験にあって[それら余剰次元の効果]を観測するとの知的に刺激的な可能性を開くものだったが、と同時に、潜在的な脅威に対する新たな検証を要するとのものでもあった。本稿 Section3 の部において「成長するブラックホールのような危険なものらは LHC にあっては未だ遥か先にあるものである、というのも、とてつもなく巨大なものら(ブラックホールら)のみが安定して存在しえる(訳注:「極小なるブラックホールは非安定的なものとして消滅する」とのことと表裏なす記載となる)からである」との我々の見立てを呈示するところとなる」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上、引用なしでの部位より、

「生成されたブラックホール(2001年から生成が肯定視されるようになったブラックホール)はその極微性より蒸発するから問題ない」

との申しようが実験機関によってなされていること、一面で理解いただけたか、と考える(※)。

(※直近引用部にての “ We present our estimations in Section 3 with the conclusion that dangerous objects, like growing black holes, are still far beyond the reach of the LHC, essentially because only extremely massive ones are stable.” (訳として)「成長するブラックホールのような危険なものらは LHC にあっては未だ遥か先にあるものである、というのも、とてつもなく巨大なものら(ブラックホールら)のみが安定して存在しえるからである」

との書かれようは

[stableな「安定した」ブラックホールでないもの(不安定な(unstable)生成ブラックホール)はすぐにホーキング輻射(ふくしゃ)による「熱放射」を見て消滅するから安全である]

との申しようがなされているとのものである。

についてはここでの話 ——2003年において生成ブラックホールはホーキング放射によって即時消滅する無害な成長しないとの言い分が実験実施機関によって主として前面に持ち出されていたとの[事実C]にまつわる話——を裏書きするところとして同じくもの文書(STUDY OF POTENTIALLY DANGEROUS EVENTS DURING HEAVY-ION COLLISIONS AT THE LHC)の下に12と振られたページにて

“ Thus we conclude that blackhole production does not present a conceivable risk at the LHC due to the rapid decay of the black hole through thermal processes.” (訳として)「このように(ホーキング放射にあっての)熱放射プロセスを通じて即座の崩壊をきたすがゆえ LHC にてのブラックホール生成は何ら憂慮すべきリスクを呈さないと結論するのである」

と記載されているところでもある)

次いで、

[ **THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD** ](検索エンジン上での表記の英文タイトル入力ダウンロード可能な法学者由来の論稿)

の内容を引く(出典番号もそのまま表記するとかたちで原文引用をなす)。

(直下、加速器差し止め案件法学者解説論稿 **THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD** にての[840]と振られたページよりの引用をなすとして)

---

CERN published its safety study in 2003.<sup>182</sup> The study acknowledged that in the wake of advances in theory suggesting extra dimensions of space, there was a need for a “new examination of potential hazards.”<sup>183</sup> Embarking on that examination, the report conceded that, under the new theory, black holes “will be produced.”<sup>184</sup> Nonetheless, the study reported that LHC-produced black holes could not be dangerous because they would rapidly evaporate.<sup>185</sup> Thus, the report concluded, “black hole production does not present a conceivable risk at the LHC.”<sup>186</sup>

(拙訳として)

2003年、CERNはその安全性検証を報告書にまとめた。その報告書分析は[空間にあっての余剰次元のことを呈示した理論]上の進歩のために潜在的脅威検証に関するニーズがあると認めたものであった。であるが、同報告書はLHCによって生成されるブラックホールは即時蒸発するだろうから危険たりえないと報告している、とのものであった。「ブラックホールは「深刻に憂慮すべきLHCにあってのリスク」とはなっていない」と同報告書は締めくくっていた。

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(次いで、直下、**THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD** にての[842]と付されたページよりの引用をなすとして)

---

“Every so often, a physics paper will appear claiming that black holes don’t evaporate,” wrote Leonard Susskind, an elite physicist at Stanford. “Such papers quickly disappear into the infinite junk heap of fringe ideas.”<sup>204</sup> Besides, Susskind noted, black-hole radiation had been “proved” by physicist William Unruh at the University of British Columbia.<sup>205</sup> Unruh’s role in establishing the orthodoxy of black-hole radiation made it ironic that, after Helfer’s effort, Unruh himself wrote a paper theorizing that black holes might not evaporate.<sup>206</sup> In 2004, Unruh, along with co-author Ralf Schutzhold of the Technische Universitat Dresden, concluded that “whether real black holes emit Hawking radiation remains an open question.”<sup>207</sup> The debate as to whether black-hole evaporation is real suddenly went from the fringe to the mainstream.

(不足部補いもしての拙訳として)

スタンフォード大のエリート物理学者レオナルド・サスキンドは「ブラックホールは蒸発しないとの主張をなす論文は毎度といった形で現れては、」「限界的思考が限りなくも山と連なるゴミの山へとすぐに消えていくことになる」(“Such papers quickly disappear into the infinite junk heap of fringe ideas.”)と書いている。といったサスキンドが「ブラッ

クホール蒸発はブリティッシュ・コロンビア大の William Unruh (ウィリアム・ウンルー)に証明されている」と注記している一方で(サスキンドへの論拠提供者とされていた)同ウンルー Unruh の「ブラックホール「蒸発」にまつわる通説を確立しようとしたとの役目」が、(ヘルパー Helfer (※ホーキング輻射が発現「しない」との見方をその論稿 Do black holes radiate?で一面で取り合うに足るものとしてまとめて呈示した物理学者 Adam D Helfer のことを指す)の努力の後)、ウンルー彼自身をしてブラックホールは蒸発しないかもしれないとの理論化をなしているとの論文を書かしめることになった、というのは皮肉なことである。2004年、ウンルーはドレスデン工科大学の共著者ラルフ・シューツホルドとともにブラックホールがホーキング放射を呈しているかは「開かれた疑問」にとどまっていると結論を下した。ブラックホール蒸発が実際的なものであるのかどうかの議論が僻遠の領域から突如としてメインストリームに躍り出てきたのである。

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

要するに、

[[ホーキング輻射(直下にて解説するが、それ自体は1974年提唱の仮説となり、それがブラックホール人為生成問題の安全性論拠に「転用」されたとのもの)によるブラックホール蒸発]に則っての CERN2003年報告書の主たる申しようが安全性論拠として盤石ではなくなった]

とのこと論じられていもする。

それについては同じくもの法学者論稿たる[ THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD ]の[850]と振られたページより原文引用するところとして

The 2008 LSAG report instead relied on the cosmic-ray argument as developed by Giddings and Mangano. Why did the LSAG Report retreat almost entirely to the cosmic-ray argument? Although the report doesn't say, it is not hard to guess. By 2008, the black-hole-evaporation argument had taken a bad beating. While most physicists seemed to continue to regard black-hole radiation as theoretically sound, the fact that Unruh himself began questioning black-hole radiation clearly made it less persuasive as the basis of the safety argument.

(訳として)

「2008年のLSAG(LHCセーフティ・アセスメント・グループ)の報告書は代わって[ギディングスとマンガノによって発展させられた宇宙線にまつわる理論展開]に重きを置いていた。何故、LSAG報告書はほとんどすべての論拠を宇宙線絡みの理論展開へと(退却するように)持って行ったのか。報告書それ自体は教えてはくれないが、推し量るのはそう難くはない。2008年までに[ブラックホール蒸発]論拠は重篤な打撃を受けた。大多数の物理学者がブラックホール放射(蒸発)を理論的に健全なるものであると見続けていたようにも見えた中でのこととして、Unruh(ウンルー)、彼自身がブラックホール蒸発について疑念符をつけたし、ブラックホール蒸発の「安全性議論の論拠としての説得力」を減じさせるに至ったのだ」(訳を付しての引用部はここまでとする)

と記載されているようなかたちとなっている。

---

※ [事実C] の典拠にまつわる補足として

[そもそもホーキング輻射(ふくしゃ)がいかなものと説明されているかについて]



上にて抜粋文書らに見る 2003 年時点での研究機関による生成ブラックホールが安全であるとする論拠とされていた物理事象、  
[ホーキング輻射]  
についての解説をなしておく。

その点、同概念、1973－1974 年の思索から[車椅子のカリスマ物理学者]として知られるスティーブン・ホーキングが提唱した概念となる。

同概念については  
英文ウィキペディア[ [Hawking Radiation](#) ] (この場合、[輻射(ふくしゃ)]も[放射 Radiation]も同じものである) 項目  
にて端的なる解説がなされていると判断したため、—ウィキペディア程度のものから物言い引くのは問題であるともとらえるのだが、[通用化したメジャーな概念]であることもあり、「そこにては」正誤として問題となることは書いていないと見つつ—、その記載内容を引いておく。

(英文 Wikipedia [ [Hawking Radiation](#) ] 項目より引用をなすとして)

Hawking radiation (also known as Bekenstein-Hawking radiation) is a thermal radiation with a black holes due to quantum effects. It is named after the physicist Stephan Hawking , who provided the theoretical argument for its existence in 1974 , and sometimes also after the physicist Jacob Bekenstein who predicted that black holes should have a finite , non-zero temperature and entropy. [ . . . ] The Hawking radiation process raduces the mass and the energy of the black hole and is therefore also known as black hole evaporation.

Because Hawking radiation allows black holes to lose mass and energy, blak holes that lose more matter than they gain through other means are expected to dissipate , shrink , and ultimately vanish. **Smaller micro black holes (MBHs) are predicted to be larger net emitters of radiation than larger black holes ; thus , they tend to shrink and dissipate faster.**

(上に対する拙訳として)

ホーキング放射(あるいはベッケンシュタイン・ホーキング輻射)とは量子効果に応じてのブラックホールにあっての熱放射のことを指す。同現象の命名については、その存在の理論的基礎を与えたスティーブン・ホーキング(および[ベケンシュタイン・ホーキング輻射])と呼称される場合にあつてはブラックホールの有限かつゼロではない温度を伴うとの側面、そして、エントロピーについての予測をなしたヤコブ・ベケンシュタイン)にちなんで 1974 年に名称命名されたものである。…(中略)… ホーキング放射プロセスはブラックホールの質量とエネルギーを減少を想定、もって、[ブラックホール蒸発(現象)]として知られるものでもある。

ホーキング放射はブラックホールが質量・エネルギーを失うことを許容するものであるから、他のものを取り込む以上に内容物を失うブラックホールらは散逸・縮退、そして、終局的には消滅することが期されていもする。より小さな極小ブラックホール(マイクロブラックホールズ/MBHs)はより巨大なブラックホールらよりも純・放射量が多くもなると想定されており、によって、それらはより早くも縮退・散逸する傾向にある」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

上にて基本的解釈をオンライン上の目立つところより引いたわけであるが、1974 年に確立されたホーキング輻射概念の具体的中身がいかようなものなのかについて一般の向きには理解の及びがたいところであるかとも思う。

であるから述べるが、

「本稿の趣意は科学理論の内容(中身)を問題視することには「ない」。本稿本段の趣意は特定の科学理論が[ブラックホール生成問題]の安全性論拠として用いられてきたとの背景があること、そして、その安全性論拠呈示のやりようひとつとしてからして問題性が伴っていること、そうしたことを指し示すことにのみある」

以上、述べたうえで書くが、一般になされているところの概要紹介からして「それについては」誰でも理解できようこととして次のようなことが[事実関係の問題]としてある。

[1974年に提唱されたホーキング輻射は[ブラックホールの熱的放射]についての理論であり、同理論に依拠すれば、「自然界に存在していないと考察されているものであれ」「(後にそれがなされうると考えられるようになった)人為によって生成されたものであれ」極小ブラックホール(MBHs)というものは「即時即座に」蒸発することになるとされている]

そうした帰結を含意する1974年に提唱された理論 — およそ極小のブラックホールならば即時即座に蒸発するとの理論 — に基づき研究機関は2001年からその大量生成が想定されるようになった極小の極微ブラックホールは即時に消え去る安全なものであると[主たるところ]として主張して「いた」(上にての[事実C]の出典解説部で引用した2003年CERN安全報告書の内容を再度引くが、[STUDY OF POTENTIALLY DANGEROUS EVENTS DURING HEAVY-ION COLLISIONS AT THE LHC]の下に12と振られたページにて“ Thus we conclude that blackhole production does not present a conceivable risk at the LHC due to the rapid decay of the black hole through thermal processes.” 「このように(ホーキング輻射にあつての)熱放射プロセスを通じて即座の崩壊をきたすがゆえLHCにてのブラックホール生成は何ら憂慮すべきリスクを呈さないと結論するのである」と記載されているとおりである)。

([そもそもホーキング輻射(ふくしゃ)がいかなものと説明されているかについて]の補足はここまでとしておく)

---

さらにもって(くどくもなるも)[事実C]にまつわる出典紹介を続ける。

繰り返すが、1970年代に提唱されていた「ブラックホールは小さければ小さいほど、即座に消滅する」との帰結とともにある仮説 — 仮説ながら発現が極めて固いとされてきた仮説 — たるホーキング輻射は「研究機関がブラックホールを人為生成する可能性がある」とされだした折より生成されし極微ブラックホールが即時蒸発する安全なものであるとの[主たる論拠]に「後付けで」使われ出した — 人によってはそう見る向きもあるだろうが、[おあつらえ向きのもの]として事前に用意されていたように使われ出した — ものである(:[自然状況下での極微ブラックホール「不存在」にまつわる理論]が[人為生成された極微ブラックホールの(「即時消滅」との式での)安全性論拠]へと「転用」されたとのことがある。それについて疑わしきにおかれては[事実C]の真正さを提示するために挙げたオンライン上より誰でも確認できるところの上の出典資料の引用内容を再確認いただきたい)。

といったホーキング輻射が[安全性論拠として盤石ではない]との意見が目立って呈されだしたから問題であると上にて抜粋の法学者文書には言及されており、事実、そのような流れが学者論稿それそのものから見てとれるようになっている。

それにつき、上にての法学者文書( THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST

THE END OF THE WORLD )より引用なしたところでは

「2004年、ウンルーはドレスデン工科大学の共著者ラルフ・シューツホールドとともにブラックホールがホーキング放射を呈しているかは[開かれた疑問]にとどまっていると結論を下した。ブラックホール蒸発が実際的なものであるのかどうかの議論が僻遠の領域から突如としてメインストリームに躍り出てきたのである」

との記載がなされているが、同じくもの法学者論稿にて出典として挙げられているとの資料も挙げおく。

具体的には

[ **On the Universality of the Hawking Effect** と題された 2004 年英文論稿 ] (表記の英文タイトル入力でオンライン上の論文配布サーバー arXiv よりダウンロード可能なもの)

の(冒頭部の)内容をこれより原文引用しもするところとして、確かに、

「2004年、ウンルーはドレスデン工科大学の共著者ラルフ・シューツホールドとともにブラックホールがホーキング放射を呈しているかは[開かれた疑問]にとどまっていると結論を下した。ブラックホール蒸発が実際的なものであるのかどうかの議論が僻遠の領域から突如としてメインストリームに躍り出てきたのである」

との通りの記載がなされている。

(直下、表記のことを示すべくもの **William Unruh** ら発表の論稿 **On the Universality of the Hawking Effect** にあつての冒頭頁記載の論稿結論内容よりの引用をなすとして)

---

Therefore, whether real black holes emit Hawking radiation remains an open question and could give non-trivial information about Planckian physics.

(拙訳として)

「したがって、現実のブラックホールがホーキング放射を放出するかは[開かれた疑問]に留まって、プランク物理学にあつてのありふれた情報を与えうるものではない」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上のような書きようを自身の論稿でなしているウィリアム・ウンルーについては、である。法学者エリック・ジョンソンの手になる論稿 (THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD )の特定部にあつて

“ “ Every so often, a physics paper will appear claiming that black holes don’t evaporate,” wrote Leonard Susskind, an elite physicist at Stanford. “Such papers quickly disappear into the infinite junk heap of fringe ideas.” Besides, Susskind noted, black-hole radiation had been “proved” by physicist William Unruh at the University of British Columbia. Unruh’s role in establishing the orthodoxy of black-hole radiation made it ironic that, after Helfer’s effort, Unruh himself wrote a paper theorizing that black holes might not evaporate. ”

(訳として)「スタンフォード大のエリート物理学者レオナルド・サスキンドは「ブラックホールは蒸発しないとの主張をなす論文は毎度といった形で現れては、」「限界的思考が限りなくも山と連なるゴミの山へとすぐに消えていくことになる」と書いているが、といったサスキンドが「ブラックホール蒸発はブリティッシュ・コロンビア大のウィリアム・ウンルーに証明されてい

ら」と注記している一方で(サスキンドへの論拠提供者とされていた)同ウンルーの[ブラックホール蒸発にまつわる通説を確立しようとしたとの役目]がウンルー彼自身をしてブラックホールは蒸発しないかもしれないとの理論化をなしている論文を書かしめることになった、というのは皮肉なことである」

との記載がなされているように確かに「斯界(物理学界)の権威筋」と看做されている。

その点、同人物、ウィリアム・ウンルーは英文 Wikipedia にも一項目設けられているような[ Unruh Effect ] (ウンルー効果) という学会で有名ならしい仮説の提唱者としての顔がある物理学者でもある。

また、法学者エリック・ジョンソンが(その論稿よりの上の抜粋部にて)言及しているようにウィリアム・ウンルーはレオナルド・サスキンドという物理学者がその言いよりの典拠にそちら申しようを使っているとの学者だが、同レオナルド・サスキンドからして[ひも理論の提唱者]たる第一級の物理学者として世間的に評価されてきた向きであること「も」顧慮して然るべきところと受け取れるようになっている——サスキンドに対する声望に関しては英文 Wikipedia [ Leonard Susskind ] 項目にあつての “ Susskind is widely regarded as one of the fathers of string theory, having, with Yoichiro Nambu and Holger Bech Nielsen, independently introduced the idea that particles could in fact be states of excitation of a relativistic string. ” 「サスキンドは南部陽一郎とホルガー・ベック・ニールセンがそれぞれ独自に [粒子らは実態としては振動なしのヒモ(弦・紐)のようなものであるかもしれない] とのアイデアを独自に導き出した一方でのこととして、広くヒモ理論の父と考えられている」との現行の記載内容からも推し量れるようになっている——。

(:また、さらに述べておけば、ホーキング輻射発現に疑義を呈したことで知られるその方面の専門家たる当のウィリアム・ウンルー自身は粒子加速器実験批判者(粒子加速器に対する批判を 1999 年から今日に至るまでなし続けているとのウォルター・ワグナー)にその物言いを利用された、自己の研究が LHC 実験批判の具にされたことを歓迎していないとの申しようをニューヨーク・タイムズのインタビュー時になしていたとのことも(法学者論稿 THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD の 842 と付されての頁にて)紹介されている。

ウンルーはニューヨークタイムズのインタビューにあつて「批判者らの私の申しよりの流用には不本意なところがある。私が可能性あると指摘したホーキング輻射が発現しないというケースは実に物理学が奇矯なるものとなる( would really, really have to be weird ) ときであるからである」と述べていたと海外主要メディアを通じて報じられているのである。

といった兆候に対して THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD の執筆者たる米国法学者エリック・ジョンソンは “ But weird is not impossible. The damage was done. ” 「だが、奇矯であることは不可能であることと同義ではない。確かに 2003 年 CERN 報告書に見る物言いに打撃は与えられたのである」と状況解説しているように[そうしたこと]が後の CERN 安全報告書の宇宙線安全性論拠への強調へとつながっているとの指摘がなされている——※尚、筆者としては(法学者エリック・ジョンソンが同じくもの段で用いているところの当を得た言いようであると見た) weird is not impossible、「奇異なることはありえないことではない」がこの世界ではありとあらゆるところで「その実は、...」のところとして作用しているからこそその[問題]なのだろうともとらえている。が、といった[属人的目分量](などと[最期]まで嘘を吐き続けしようとの相応の類らには見做されしようとの観点)は置き、本稿にあつては[完全なる証示]を念頭にひたすらに証拠主導方式にての筆の運びをなしている。相応の人間らにあつては(「観察するところの具体例に基づいて述べる」ところとして)[関連領域での眉をひそめさせるような紛い物]を

([ノイズ]にて [シグナル]を掻き消すために)か)ばら撒くとの挙に出ている節があり (そして、相応の機序あってであろう、国内では検索エンジン検索にてそういう紛い物ばかりが可視領域のページ群として目に入ってくるのことがある)、足を引っ張る「だけ」とのやりようには心底、怒らされてきたわけであるが、とにかくも (事実らと事実らから導出できる因果関係がそちら方向を「極めて多重的に」指しているとの) [真実]を広めんと努めている—— )。

長くもなったが、[事実 C] に関する出典紹介部 (出典 (Source) 紹介の部 3) は以上としておく。

ここまでにて [事実 A] から [事実 E] と一続きに振ってのことが

[記録的事実] [文献的事実] (第三者が誰でも [その通りの文献記録が残されている] との事実をなんら感うことなく容易に裏取りできるとの筋合いのこと)

となっていることを指し示すとの流れの中にあつて

#### [事実 A]

粒子加速器によってブラックホールが生成される可能性が取り沙汰されだしたのは

**[1999年]**

からである。

その 1999 年との折柄にあつては

[厳密な意味では専門家ではない市井の個人] (ウォルター・ワグナー) によってブラックホール生成可能性が [災害を引き起こす元凶たりうるもの] として問題視されだした (権威あるとされる専門家らがブラックホール生成可能性を目立って問題視していたわけではない)。

対して、そうした属人的疑念視がマス・メディア「にも」取り上げられることになったことを受け、専門家サイドからは

「ブラックホール生成がなされることはそもそもないことである」

との強調がなされ、ブラックホール生成の可能性それ自体を事実上完全否定する (狂人の妄夢の如きものであるとする) 当事者研究機関の一群の報告書ら — (後にノーベル賞受賞者となった科学者も関与しての報告書でもある) — が世に出されることとなった。

#### [事実 B]

粒子加速器 (の中にあつての LHC) による [ブラックホール生成] がなされうるとのことが —— ([事実 A] に見るように [1999 年] にあつてそれが [ありうべきリスク] として専門領域「外」の人間に問題視されだした際には「そも、粒子加速器によるブラックホール生成はありうべきところではない」と当事者研究機関に否定されていた] と



のところから一転して)—— [ありえることである]と「肯定的に」科学界主流筋および研究機関によって「公的に」認められるようになったのは  
[2001年]

のことからである(：その2001年からの論調では「通年で1000万個単位の」「安全な」極微ブラックホールが生成されることになりうるともされるようになった)。

すなわち、「1999年にあつては」ブラックホールが人為生成される可能性だに否定していた科学界・実験機関の論調が「2001年に」変容を見、一転、加速器によるブラックホール生成をしてありうると肯定するようになったとのことがある(それについては、一これまた当然に論拠を挙げるところとして— [1998年に水面下で提唱されていた余剰次元理論(というもの)から導き出された帰結]が2001年の[変節]の背景にあると一般には説明されている)。

### [事実C]

粒子加速器LHCによってブラックホール生成がなされうると加速器実験実施研究機関に認容されるに至った折、当然に学者らは「ブラックホール生成がなされても[安全]である」と強調していた。

ブラックホール生成がありうることとされるに至つての後、その初期的段階(2001年から2003年)にあつては安全性にまつわる論拠として [[ホーキング輻射(ふくしゃ)と呼称される(仮説上の)現象]の発現による生成ブラックホールの即時蒸発]

のことが部外者・公衆向けの安全性報告文書で挙げられ、次いで、2008年以降よりは安全性論拠として

[宇宙線(Cosmic-ray/宇宙を飛び交う高エネルギーの放射線)との比較による生成された「蒸発しない」可能性のあるブラックホールの無害性]

のことが(更改を見ての)部外者・公衆向けの安全性報告文書にて強くも前面に押し出されるに至つた、とのことがある。

そのような安全性論拠の主張動態(重み付け)の変化の背景には—それについても当然に典拠挙げるところとして— [ホーキング輻射](と呼ばれる仮説上の現象)の発現が確実視され「なくなった」とのことがあると「される」。

らが[記録的事実][文献的事実]となっていることの典拠を呈示してきた(各別に長くもなつていところとしてだが、**出典(Source)紹介の部1**から**出典(Source)紹介の部3**と振つてのパートを典拠の呈示部として挙げてきた)。

以上、極々端的に振り返つた上で論拠の呈示部を続けもして、次いで、([事実A]から[事実E]と振つてまずもつて問題視している事実らのうち)[事実D]が[記録的事実]としてはきとそこに実在していることを示すための**出典(Source)紹介の部4**に入る。

※【外挿表記としまして】：ここでそのように本稿では「頻繁に」文字色と背景色を変えての【出典紹介部】呈示のための表記をなしています。本稿全体の指し示し内容の重大性を顧慮して【後追い可能なる典拠】の細部に至るまでの呈示からして必須事項ととらえているからではありませんが、無論にして、後追い「可能」であるだけではなく後追い「容易」である必要もあるとの認識が書き手この身にはございます。にまつわつて後追い「容易」性の方をもちたらず方式、すなわち、【都度、即応的にすべての出典紹介部の内容を即時確認するための方式】を本稿にあつての冒頭p.5で細かく紹介しておりますので「頻繁に本稿の典拠内容の確認をなす必要」を感じておられるとの方々におかれましてはそちら本稿p.5で案内させていただいております方式を採択いただければと考えます(典拠内容確認を容易・即応的になすとのその紹介方式とは本稿を収めたPDF文書を別名保存で二ファイル用意し、うち、片方を閲覧用、もう片方を(巻末数ページの出典紹介部一覧表記部「だけ」を印刷して役立てつもの)出典確認用の電子文書として活用いただくの方式となります)

## 出典 (Source) 紹介の部 4



# SOURCE

## 4

次いで、

### [事実 D]

1980 年に初出を見た英国人作家ジェイムズ・ホーガンの手になる小説作品 *Thrice Upon a Time*『未来からのホットライン』にあつては[文献的事実]として

1. 「[EFC こと欧州核融合協会との組織体が運営している施設]であるとの設定の[核融合プラント(バーグヘッド重イオン施設にあつての「加速器」使用型核融合プラント)]が問題となっている局面で」
2. 「[加速器]使用型核融合プラントにての加速器で生成された大量の極微ブラックホール(具体的数値として[200 万個にも及ぶ大量の極微ブラックホール]と作中明示)が地球にコアに落ち込み人類滅亡をきたすとの状況にまで至り」
3. 「にも関わらず、そのような状況をもたらしたブラックホール生成元となった施設の当の運営者らは「[ホーキング輻射(ふくしゃ)現象の発現]によって粒子加速器接合型核融合発電プラントによるブラックホール生成は地球に壊滅的事態をもたらすことはない、そういうことは百万年に一回も起こりえないことだろう」との言い逃れをなしていた」

とのことの通りであることに関する出典を挙げておく。その点、ここにて証示の対象としている[事実 D]—小説 *Thrice Upon a Time* にて「先覚的言及」がなされていること— については問題となる小説 (*Thrice Upon a Time*) の邦訳版のより細かくもの原文引用をなしていく (ことで指し示しの用に供する) こととする。

まずは問題となる 1980 年に原著初出を見た小説、  
**Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』**  
にあっての

- 
1. 「[EFC こと欧州核融合協会との組織体が運営している施設]であるとの設定の [核融合プラント (バークヘッド重イオン施設にあっての「加速器」使用型核融合プラント)] が問題となっている局面で」
  2. 「[加速器]使用型核融合プラントにての加速器で生成された大量の極微ブラックホール (具体的数値として [200 万個にも及ぶ大量の極微ブラックホール] と作中明示) が地球にコアに落ち込み人類滅亡をきたすとの状況にまで至り」
  3. 「にも関わらず、そのような状況をもたらしたブラックホール生成元となった施設の当の運営者らは「[ホーキング輻射 (ふくしゃ) 現象の発現]によって粒子加速器接合型核融合発電プラントによるブラックホール生成は地球に壊滅的事態をもたらすことはない、そういうことは百万年に一回も起こりえないことだろう」との言い逃れをなしていた」
- 

との特質(上にて言及なしているところの特質)における、

1. 「[EFC こと欧州核融合協会との組織体が運営している施設]であるとの設定の [核融合プラント (バークヘッド重イオン施設にあっての「加速器」使用型核融合プラント)] が問題となっている局面で」

との部に関わる同小説内の記載を原文引用でもって呈示することとする。

(直下、手元にある東京創元社 (SF 文物出版の老舗として認知されている出版社) より刊行の増刷を重ねての第 17 刷「文庫」版『未来からのホットライン』 (こちら邦訳版は書誌情報として初版 1983 年刊行のものとなる)、その p.132 (にての前半の箇所) より  
の原文引用をなすとして)

---

「つまり、たった四十マイルのところの世界最大の重イオン式プラントがあって(略)」

---

(引用部はここまでとしておく)

(直下、同『未来からのホットライン』 p.134 (にての末尾) からの原文引用をなすとして)

---

第一代の核融合炉は、合衆国とソビエト連邦で、一九八〇年代後半から一九九〇年代初頭にかけて作動を開始した。両国ともはじめは主として磁気閉じ込め法の開発をすすめたが、結局はその補助もかねて慣性法への転進がはかられ、アメリカではレーザー、ロシアでは電子ビームが採用されることになった。両国とも一応イオン・ビームの研究を進めてはいたが、どちらもその技術の完成に優先権を与えることはしていなかった。

---

(引用部はここまでとしておく)

(直下、同『未来からのホットライン』 p.135 (中段) よりの原文引用をなすとして)

---

また何よりも、粒子ビームの発生と制御の技術というのは、高エネルギー加速器物理学の時代以来十分に理解がゆきとどいているものであり、そのすでに完成された技術を利用することで失われた時間を取り戻すこともできよう。事実、考えられれば考えるほどイオン・ビームの魅力は大きく、ヨーロッパ側は、両超大国がどうしてはじめからこれに専念しなかったのだろうといぶかしんだ。

---

(引用部はここまでとしておく —— 表記引用部に関する注記として:CERN の LHC 実験についてはプロトン・ビーム衝突実験とばかり強調されるが、イオン・ビーム衝突実験としての側面も同 LHC 実験にはある。尚、LHC 実験に関与の核物理学系物理学者の実験グループ名、及び、検出器名にその名を冠する ALICE は [大型「イオン」衝突実験]こと A Large Ion Collider Experiment の略称である (疑わしきにおかれては ALICE、A Large Ion Collider Experiment と合わせて検索エンジンに入力いただき、実験関係者媒体より確認いただきたい) —— )

(直下、同『未来からのホットライン』 p.139 (にての後半部) よりの原文引用をなすとして)

---

ゲートをくぐり、内部へ消えている。その分岐点のところに、つぎのような標示板が立っていた——

ヨーロッパ核融合協会

バークヘッド重イオン施設

南ゲート

---

(引用部はここまでとしておく)

(直下、同『未来からのホットライン』 流通文庫版 p.142 (にての中段部)、p.142 (にての末尾)、p.143 (にての冒頭部)より中略なしながらの原文引用をなすとして)

---

そこは、高電圧工学の仮借ない支配によって設計され掲載された世界であった。マードックはこれまで見たこともないほど大きな変圧器が何段にも積み重ねて中央にそびえ立ち、その周囲には、さながら三次元のタペストリを織りなすように入りくんだ超電導母線(バスバー)と冷却パイプ群。その合間には、十フィートを超える高さの積層絶縁硝子が対をなして立ち並び、それに支えられた電線は、迷路のような鋼鉄の枠組みをつらぬいてこっちへ一端をのぞかせている円筒形の構造物の周囲に巻きついた巨大な円環体(トロイド)へと導かれている。

…(中略)…

「…(中略)…このチューブは、初期加速段階のひとつです。初期加速で百万ボルトのビームが得られます。加速器の充電は、もう一階下のコンデンサー・バンクから行われます」

---

(引用部はここまでとしておく —— 上引用部に対しての筆者注記: 上はバークヘッド重イオ

ン施設にての核融合炉が加速器を用いていることを記述している部となる。加速器を用いての営為に前段の加速段階があるのは([前段加速器]との用語があるように)現実の加速器施設と共通のことである。また、(重く見るか否か迷ったところだが)、小説に見る加速器融合型のバークヘッド重イオン核融合プラントに対して(上引用部に見るように)[円環体(トロイド)]との言葉が用いられているのも気になるころではある。円環体(トロイド)との言葉はLHCを構成するATLAS検出器が環状の磁石を用いているためにその正式名称がA Toroidal LHC Apparatusとなっていると関係者には説明されている(については本稿の後の段にても言及する)ところに見受けられるようにLHCのような加速器と円環体(トロイド)構造は密接に結びついているとのことがあるからである(ジェームズ・ホーガンが当時の加速器に用いられていた装置群を取材などで仔細に煮詰めていたと自然に解釈できるころではある。また、述べておくが、ホーガンの描く重イオン核融合施設は直線加速器を複雑につなげ合わせてのものとも解され、LHCのように純粋なリング状を呈しているとは断じられないところのものであるとも解されるようなものである)—— )

(直下、同『未来からのホットライン』p.151(の中の前半部)よりの原文引用をなすとして)

---

正確には十五分の一秒ごとにこのペレットの流れが、機関銃の弾丸みたいにビームの焦点に向けて射ちだされ、飛んでいくところを加速器から出た巨大なエネルギーでたたかれるのである。

---

(引用部はここまでとする)

ここまでにて国内書店に広くも流通している Thrice Upon a Time (邦題)『未来のホットライン』からの複数箇所引用をなしたことで同書に

1. 「[EFCこと欧州核融合協会との組織体が運営している施設]であるとの設定の[核融合プラント(バークヘッド重イオン施設)あつての「加速器」使用型核融合プラント]が問題となっている局面で」

との特質がみとめられることの指し示しとなした(※)。

---

※尚、小説記載形態から上にて各別ばらばらに引用をなさざるをえなかったとのことについては、である。原著 Thrice Upon a Time に対する英文 Wikipedia の解説項目([ Thrice Upon a Time ]項目)にて次のようにまとめた表記が「現行にては」なされているところである(但し編集に伴う易変性を伴うウィキペディア記載内容であるために編集に起因する微妙な記載内容の異動は発生しうる)。

(直下、英文 Wikipedia[ Thrice Upon a Time ]項目にての Burghead and black holes([バークヘッドとブラックホールら])の節の「現行 2014 年現時点にての」記載内容よりの引用をなすとして)

The (fictional) European Fusion Consortium (EFC) has commissioned a large thermonuclear fusion reactor in Burghead to compete with the technologies located in the United States and the Soviet Union. The colossal energy obtained from fusion meant that huge amounts of power might someday be available at low costs. All



three parties used inertial confinement technology, with the EFC opting to use ion beams.

(拙訳として)

「架空の欧州核融合協会(EFC)は合衆国とソ連にての技術と競争をなすためにバークヘッドの巨大な熱核融合施設<sup>(1)</sup>の制作依頼をなした。融合プロセスから得られる膨大なエネルギーはいつの日か低コストで膨大なエネルギーが利用可能となることを意味していた。三勢力(訳注: All three parties は文脈上、欧州・合衆国・ソ連と考えられる)とも EFC が利用することを志向していたイオンビームをもってしての「レーザー核融合技術」(Inertial confinement fusion)の使用をなしていた」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

との記載がなされているところに通ずるものである。

(: [核融合炉] を加速器 ——accelerators—— の類とも結びつける [レーザー核融合技術] というものが一九八〇年代より検討されているとのことがある(疑わしきにおかれては和文ウィキペディアの「レーザー核融合」項目を参照いただきたい。同ウィキペディア項目にては「構成要素」の節の「エネルギードライバー」の部にあつて現行、(掻い摘まんでの引用をなすところとして)エネルギードライバー 燃料球を照射する高エネルギーを作り出す装置。検討されているものはレーザー発生機が多い。現在、消費されるエネルギーに対して作られるレーザーのエネルギーは1%にも満たない。…(中略)…慣性核融合方式としては、最有力はレーザーではなくイオン加速器である。エネルギー効率は40%を達成できる(引用部はここまでとする)と記載されているとのことがある)。また、加速器を「既存の原子炉」がその形態を取る(「核融合」ならぬ「核分裂炉」に対して用いるとの発想法・研究も存在しており、それについては和文ウィキペディアにも解説頁が一項設けられているものとしての「加速器駆動未臨界炉」の存在が挙げられる)

次いで、小説 **Thrice Upon a Time**(邦題)『未来からのホットライン』に見受けられる特質としての、

- 
1. 「[EFC こと欧州核融合協会との組織体が運営している施設]であるとの設定の[核融合プラント(バークヘッド重イオン施設にあつての「加速器」使用型核融合プラント)]が問題となっている局面で」
  2. 「[加速器]使用型核融合プラントにての加速器で生成された大量の極微ブラックホール(具体的数値として「200万個にも及ぶ大量の極微ブラックホール」と作中明示)が地球にコアに落ち込み人類滅亡をきたすとの状況にまで至り」
  3. 「にも関わらず、そのような状況をもたらしたブラックホール生成元となった施設の当の運営者らは「[ホーキング輻射(ふくしゃ)現象の発現]によって粒子加速器接合型核融合発電プラントによるブラックホール生成は地球に壊滅的事態をもたらすことはない、そういうことは百万年に一回も起こりえないことだろう」との言い逃れをなしていた」
- 

とのことらにおける、

2. 「[加速器]使用型核融合プラントにての加速器で生成された大量の極微ブラック

ホール（具体的数値として「200万個にも及ぶ大量の極微ブラックホール」と作中明示）が地球にコアに落ち込み人類滅亡をきたすとの状況にまで至り

との部にまつわる書籍内記載を（Philological Truth[文献的事実]の証示のために）原文引用なしでいくこととする。

（：くどくも述べれば、ここにて挙げている内容らは広くも書店にて流通している「文庫版の」『未来からのホットライン』を書店で購入されるなり、図書館で借りるなりして問題となる部の内容を確認しようとの向きのために「ページ数（及びおおよその特定ページ内の該当文章登場位置）を挙げながら」

引用なしである（そちら確認については書籍そのものが手元にあれば「ものの数十秒でこと足りる」とのやりかたでの引用をなししている）。

につき、

「何故、そうした引用をください延々となしているのか」

とのことについてさらにもって述べれば、一先にも説明を講じたことにも通ずるところとして一、

「[生死に関わる問題]を[個人の偏頗（へんぱ）な主観]など問題とならないかたちで指し示す、[加速器実験実施研究機関（関係者ら）の発表動向の人間存在を根底から嘲笑うが如く欺瞞性]を指し示すとのその一事に（本来的な話をなせば）[無為]たることなどないであろう、あるはずがないであろう」との観点があり、相応の予見文物にまつわる内容呈示に労をとっているとの次第である）

（直下、『未来からのホットライン』（1980年刊行の原著 **Thrice Upon a Time** に対して手前手元にある1983年に初出を見た邦訳版、その増刷を重ねての第17刷「文庫」版）p.224（の中の中段部から後半部）よりの原文引用をなすとして）

---

「慣性閉じこめ式の核融合炉は、事実上、試験管の中の超新星なのだ。そして、超新星爆発でつくりだされるのは……。この謎の答えに思いいたったとき、マードックは信じられない気持ちであえいだ。「何ということだ！」そうつぶやくと、手近な椅子にぐったりとすわりこんだ。その頬から、血の気がひいていった。超新星の中心部は、ブラックホールにまで圧縮されてしまうのである」

---

（引用部はここまでとする）

（直下、『未来からのホットライン』（国内流通文庫版）p.225（にあつての後半部）よりの原文引用をなすとして）

---

標的となった燃料ペレットが、極微の、おそらくは原子核サイズのブラックホールにまで収縮したのだ。そのブラックホールは、反応炉容器の床をつきぬけて、地球の中心に落ちていき、それがこれまで誰も説明できなかった腐食をひき起こしたのである。

---

（引用部はここまでとする）

(続いて、直下、『未来からのホットライン』(国内流通文庫版)p.226(の中の後半部)よりの原文引用をなすとして)

---

二基の反応炉は最初それぞれ独立に一日のあいだ毎秒ペレット十五個の割で稼働し、二日目の前半には並行して毎秒三十個の割で運転した。だから、現在地中には、およそ二百万個かそこらのブラックホールがあることになる。

---

(引用部はここまでとする)

以上、「最低限、そこだけ確認すれば、事足りる(他の部の確認は一切なさずとも事足りる)」との細々としての頁数指定してのワンセンテンス引用にて

[(上記粒子加速器とワンセットの)反応炉により極微ブラックホールが大量生成されたとの(原著1980年初出の)特定小説記述内容の呈示]

となした(※)。

---

※尚、ここまで訳書よりの記載を引いて示したきたことと同文のところとして英文ウィキペディア[Thrice Upon a Time]にては「現行、」次のような記載がなされている。

(直下、英文 Wikipedia[Thrice Upon a Time]項目にての **Burghead and black holes**[バークヘッドとブラックホール]の節の「現行」記載内容よりの中略なしながらもの原文引用をなすとして)

Burghead and black holes

The (fictional) European Fusion Consortium (EFC) has commissioned a large thermonuclear fusion reactor in Burghead to compete with the technologies located in the United States and the Soviet Union. The colossal energy obtained from fusion meant that huge amounts of power might someday be available at low costs. All three parties used inertial confinement technology, with the EFC opting to use ion beams.

[...]

Their time machine then suddenly resumes operation again, and they elect to ignore the problem. Shortly after the incident, strange events start occurring around the world, with so-called bugophants ( a blend of bug and elephant ) drilling tiny, long, straight holes through a myriad of objects, from human bodies to telescope mirrors. Finally, the team finds out the cause of the erosion in the Burghead plant, the interference with the machine, and the bugophants themselves: the repeated fusion tests at the plant had, over the course of two days, had produced some two million microscopic black holes, which then tunneled through the basement of the plant and concentrated around the core of the Earth. As the black holes annihilated matter, they emitted tau waves and caused interference even before the reactor tests. Although conventional theory stated that black holes could not form from the comparatively low pressure produced in the reactor, and small black holes could not survive long anyway, the conventional theory had failed to take into account the existence of tau waves and their effects.

(拙訳として)

「(架空の)欧州核融合協会(EFC)は合衆国とソ連にての技術と競争をなすため

にバークヘッドの巨大な熱核融合施設の建設依頼をなした。融合プロセスから得られる膨大なエネルギーはいつの日にか低コストで膨大なエネルギーが利用可能となることを意味していた。三勢力(訳注: All three parties とは文脈上、[欧州]・[合衆国]・[小説刊行時いまだ存在していた]ソ連)の三者と考えられる)ともどもが EFC が利用することを志向していた[イオンビームをもってしてのレーザー核融合技術]( Inertial confinement fusion )の使用をなしていた(訳注:[レーザー核融合技術]( Inertial confinement fusion )の使用との小説設定にまつわり accelerators[加速器]のことがもちだされているのを直近にての引用部では指し示してきた)。

…(中略)…

その僅か後(作中にての過去通信機構が障害を見た僅か後)、世界各地で奇妙な出来事が発生しだし、それは

[[bugophants](訳注:バゴファント、虫[バグ]と象[エレファント]の混淆系として「象の重さの虫の仕業か」といったニュアンスで2010年1月末よりジャーナリストに命名されたとの作中設定の言葉 — Thrice Upon a Time 邦訳版の『未来からのホットライン』ではその210ページ以降に言及がある— ) といった現象名呼称を伴っての出来事]

にして

[微小なる物体から人体、そして、望遠鏡の鏡面部に至るまでドリルにて開けたような直線上の穴が開くとの出来事]

となっていた。

そうした中、ついにストーンバノン館で研究なしていた面々はマシン(訳注:過去へ情報を伝送可能なマシン)とバークヘッドそれ自体の干渉作用からバークヘッドの核融合炉プラントの腐食被害の原因を同定、

[二日間の予定で繰り返されていた融合テストにて200万個超のブラックホールが発生、プラントの地下から漏れ出て、地球のコアに蟄集しているということであった]

とのことを見極めた]

(ここまでを訳を付しての引用部とする)

英文 Wikipedia 記載にあつては作中、大量の極微ブラックホールの生成元たる a large thermonuclear fusion reactor 巨大熱核融合炉が[加速器](要するに、2001年以降、ブラックホール生成をなすとされるに至っているラージ・ハドロン・コライダーの係累)を用いてのものであるとの設定が採用されていることにまつわる言及が「現行は」欠けているのだが(といった事情もあり国内にて流通を見ている訳書よりの原文引用を多少厚くもなしてきたとのことがある)、一応、目につくところのそちら英文ウィキペディア内容の呈示もなしておいた。

さらに続けて

[事実 D]

1980年に初出を見た英国人作家ジェイムズ・ホーガンの手になる小説作品 Thrice Upon a Time『未来からのホットライン』にあつては[文献的事実]として

1. 「[EFC こと欧州核融合協会との組織体が運営している施設]であるとの設定の[核融合プラント(バークヘッド重イオン施設にあっての「加速器」使用型核融合プラント)]が問題となっている局面で」
2. 「[加速器]使用型核融合プラントにての加速器で生成された大量の極微ブラックホール(具体的数値として[200万個にも及ぶ大量の極微ブラックホール]と作中明示)が地球にコアに落ち込み人類滅亡をきたすとの状況にまで至り」
3. 「にも関わらず、そのような状況をもたらしたブラックホール生成元となった施設の当の運営者らは「[ホーキング輻射(ふくしゃ)現象の発現]によって粒子加速器接合型核融合発電プラントによるブラックホール生成は地球に壊滅的事態をもたらすことはない、そういうことは百万年に一回も起こりえないことだろう」との言い逃れをなしていた」

このことを要素要素に分解してのところとして、

3. 「にも関わらず、そのような状況をもたらしたブラックホール生成元となった施設の当の運営者らは「[ホーキング輻射(ふくしゃ)現象の発現]によって粒子加速器接合型核融合発電プラントによるブラックホール生成は地球に壊滅的事態をもたらすことはない、そういうことは百万年に一回も起こりえないことだろう」との言い逃れをなしていた」

このことに対応する箇所を引用をなすこととする。

(直下、『未来からのホットライン』(国内流通文庫版)p.232 前半から後半の部より中略しながらの原文引用をなすとして)

---

「わたしには、とても信じられない話ですが、かりにそういうものがあつたとしても、その大部分はすでに消滅していることになりますな」マックス・ヴェアバウムがきめつけるようにいった。「そうすると結局、二〇〇万も残ってはおらんでしょう?統計上、例外的なやつが、いくつか残っているかもしれん。だとしても、いずれあと二、三日のうちには消滅するでしょう」

…(中略)…

「(略)まあ百万年に一度も起こりようのないことだろうな」彼は肩をすくめ、手をひろげると、しばらくそのままじっとしていた。

---

(引用部はここまでとする 一※一)

(※上の原文引用部にまつわる注記: 上引用部はホーキング輻射によってブラックホールが消滅するから問題ないのことは実験関係者が強調し、「もって明確な何かが出てこない限り、心配で夜眠れなくなるほどのものではない」と述べつつ(文庫版p.233 前半部にてそういう発言がなされていることを確認できる)たかをくぐる場での描写である。尚、小説『未来からのホットライン』では一題名にそうあるとおりの「未来から過去に遡行するタウ波(なるもの)を用いて過去への情報伝送」を可能ならしめた元ノーベル物理学受賞学者らを作中主要人物としての作品なのだが、同物理学者らには自身の発明を可能ならしめた「タウ波」(なるもの)に対する世間に知られぬところの理解から「ホーキングの減損率をタウ波によるメカ



ニズムが相殺することでブラックホールは存続する. によって、破滅がもたらされる」との帰結を導き出しているとの作中設定が採用されている —— 訳書 p.231— p.234 がそのことを記述している該当部となる. その部についてはサイエンス・フィクションの[フィクション]としての側面が強きところとしてなんら科学「的」裏付けなく読み物としての設定が付与されていると「受け取れる」部(小説作者ジェームズ・ホーガンが科学「的」裏付けなくスパイスをまぶしている「受け取れる」部)ではあるが、[ありうべき「ではない」先覚性]を兼ね揃えた小説内容との兼ね合いではそこからして軽んずべきではないと見立ててられるようなところではある—— )

ここまでの本段、**出典(Source)紹介の部 4**の表記にて

[指し示し対象を分ちながらもの(書店にて広くも流通している書籍の該当ページ、該当文言、そこだけ確認すれば[文献的事実]の問題を確認できようとの)細かくもの原文引用]

でもってして

[事実 D]

1980年に初出を見た英国人作家ジェームズ・ホーガンの手になる小説作品 *Thrice Upon a Time*『未来からのホットライン』にあつては[文献的事実]として

1. 「[EFCこと欧州核融合協会との組織体が運営している施設]であるとの設定の[核融合プラント(バーグヘッド重イオン施設にあつての「加速器」使用型核融合プラント)]が問題となっている局面で」
2. 「[加速器]使用型核融合プラントにての加速器で生成された大量の極微ブラックホール(具体的数値として[200万個にも及ぶ大量の極微ブラックホール]と作中明示)が地球にコアに落ち込み人類滅亡をきたすとの状況にまで至り」
3. 「にも関わらず、そのような状況をもたらしたブラックホール生成元となった施設の当の運営者らは「[ホーキング輻射(ふくしゃ)現象の発現]によって粒子加速器接合型核融合発電プラントによるブラックホール生成は地球に壊滅的事態をもたらすことはない、そういうことは百万年に一回も起こりえないことだろう」との言い逃れをなしていた」

とのことが文献的事実である所以を(まどろっこしく、かつ、長くもなつての中で)指し示したことになる。

(以上でもって**出典(Source)紹介の部 4**の記載を終える)

前頁に至るまでに

[[事実 A] から [事実 E] と振っての各事実らの [記録事実としての実在の典拠] を示す]

との流れの中で、

[事実 A] から [事実 D]

と振っての各事実ら、いささかくどくもなるところを承知の上で振り返れば、

[事実 A]

粒子加速器によってブラックホールが生成される可能性が取り沙汰されだしたのは

[1999年]

からである。

その 1999 年との折柄にあつては

[厳密な意味では専門家ではない市井の個人] (ウォルター・ワグナー) によってブラックホール生成可能性が[災害を引き起こす元凶たりうるもの]として問題視されだした (権威あるとされる専門家らがブラックホール生成可能性を目立って問題視していたわけではない)。

対して、そうした属人的疑念視がマス・メディア「にも」取り上げられることになったことを受け、専門家サイドからは

「ブラックホール生成がなされることはそもそもないことである」

との強調がなされ、ブラックホール生成の可能性それ自体を事実上完全否定する(狂人の妄夢の如きものであるとする)当事者研究機関の一群の報告書ら — (後にノーベル賞受賞者となった科学者も関与しての報告書でもある) — が世に出されることとなった。

[事実 B]

粒子加速器(の中にあつての LHC)による[ブラックホール生成]がなされうるとのことが — ([事実 A] に見るように[1999年]にあつてそれが [ありうべきリスク]として専門領域「外」の人間に問題視されだした際には「そも、粒子加速器によるブラックホール生成はありうべきところではない」と当時者研究機関に否定されていた]とのところから一転して) — [ありえることである]と「肯定的に」科学界主流筋および研究機関によって「公的に」認められるようになったのは

[2001年]

のことからである(:その 2001 年からの論調では「通年で 1000 万個単位の」「安全な」極微ブラックホールが生成されることになりうるともされるようになった)。

すなわち、「1999 年にあつては」ブラックホールが人為生成される可能性だに否定していた科学界・実験機関の論調が「2001 年に」変容を見、一転、加速器によるブラックホール生成をしてありうると肯定するようになったとのことがある(それについては、—これまた当然に論拠を挙げるところとして— [1998 年に水面下で提唱されていた余剰次元理論(というもの)から導き出された帰結]が 2001 年の[変節]の背景にあると一般には説明されている)。

[事実 C]

粒子加速器 LHC によってブラックホール生成がなされうると加速器実験実施研究機関に認容されるに至った折、当然に学者らは「ブラックホール生成がなされても[安全]である」と強調していた。

ブラックホール生成がありうることとされるに至った後、その初期的段階(2001 年から 2003 年)にあつては安全性にまつわる論拠として [[ホーキング輻射(ふくしゃ)と呼称される(仮説上の)現象]の発現による生成ブラックホールの即時蒸発]

のことが部外者・公衆向けの安全性報告文書で挙げられ、次いで、2008 年以降よりは安全性論拠として

[宇宙線(Cosmic-ray/宇宙を飛び交う高エネルギーの放射線)との比較による生成された「蒸発しない」可能性のあるブラックホールの無害性]

のことが(更改を見ての)部外者・公衆向けの安全性報告文書にて強くも前面に押し出されるに至った、とのことがある。

そのような安全性論拠の主張動態(重み付け)の変化の背景には —それについても当然に典拠挙げるところとして— [ホーキング輻射](と呼ばれる仮説上の現象)の発現が**現実視され「なくなった」とのことであると「される」**。

[事実 D]

1980 年に初出を見た英国人作家ジェイムズ・ホーガンの手になる小説作品 Thrice Upon a Time『未来からのホットライン』にあつては[文献的事実]として

1. 「[EFC こと欧州核融合協会との組織体が運営している施設]であるとの設定の[核融合プラント(バークヘッド重イオン施設にあつての「加速器」使用型核融合プラント)]が問題となっている局面で」
2. 「[加速器]使用型核融合プラントにての加速器で生成された大量の極微ブラックホール(具体的数値として[200 万個にも及ぶ大量の極微ブラックホール]と作中明示)が地球にコアに落ち込み人類滅亡をきたすとの状況にまで至り」
3. 「にも関わらず、そのような状況をもたらしたブラックホール生成元となった施設の当の運営者らは「[ホーキング輻射(ふくしゃ)現象の発現]によって粒子加速器接合型核融合発電プラントによるブラックホール生成は地球に壊滅的事態をもたらすことはない、そういうことは百万年に一回も起こりえないことだろう」との言い逃れをなしていた」

との内容を有している。

との各事実らについてそれらが確たる記録的事実 —第三者が容易に裏取り・確認が出来るとの広くも流通を見ている文献にあつての記載内容それそのもの— となっていることの典拠を示してきた(疑念を抱かれた向きにあつては**出典(Source)紹介の部 1**から**出典(Source)紹介の部 4**を参照されたい)。

ここでは続けて、

[事実 E] (疑わしきにおかれては確認願いたきところとして同[事実 E]、[事実 A]から[事実 D]の各要点組み合わせなしてのものとして指定しているため、ここに至るまでにてほぼ記録的事実である典拠を挙げきっているといったものでもある)

にまつわるところの「補ってもの」出典紹介部を設けておくこととする。

■ 外挿付記としまして：ここ【典拠紹介部 5】には「多少長くも」の p.84 から p.90 との頁数を割いているため、以降【典拠紹介部】(従たるところ) と【指し示しの主軸たるところ】の関係について惑われぬよう、何卒ご注意くださいと申し述べさせていただきます。

## 出典 (Source) 紹介の部 5



# SOURCE

## 5

ここ出典 (Source) 紹介の部 5 の部では

[事実 (事実関係) E]

([事実 A]から[事実 C]と[事実 D]の間には以下のような[矛盾]と[際立った先覚性]の問題が見受けられると指摘できるところである)

「研究機関発表動向として 1999 年にあっては加速器によるブラックホール生成可能性が完全否定されていた(それが肯定的に論じられるようになったのは 2001 年である)にも関わらず 1980 年初出の小説で加速器によるブラックホール生成が言及されていた」(「[事実 A]と[事実 D]より[事実関係]として導き出せる」ところである)

「加速器によるブラックホール生成については 2001 年よりの研究機関発表動向で通年単位で 1000 万個の生成可能性ありとされるに「至った」の対して、問題となる 1980 年初出小説ではブラックホール 200 万個生成が描かれていたとのことで非常に話が似通ったものである」(「[事実 B]と[事実 D]より[事実関係]として導き出せる」ところである)

「加速器生成元が(2001 年から 2003 年に至る)初期動向としてホーキング輻射を生成ブラックホールが安全であるとの論拠とし

て用いているのに対して、問題となる1980年初出の小説「でも」  
ホーキング輻射がブラックホール生成がなれていても「安全であ  
る」とのブラックホール生成元の言い訳として持ち出されていた旨、  
描かれているとのことがある」（「[事実 C]と[事実 D]より[事実関  
係]として導き出せる」ところである）

とのことにつき「補ってもの」出典紹介をなす（:既にここに至るまで呈示なしてきた出典（[出典  
(Source) 紹介の部 4]までにて挙げてきた出典）から [事実(事実関係)E] が字義通りの[事実]（誰で  
あれそうであると確認できるとの記録「的」事実）であることの典拠を必要十分なだけ挙げているわけだ  
が（疑わしきにおかれては前段までの内容を確認されたい）、さらに補足となることの摘示をなしたい）。

その点、つい先立っての部までにて

「「極微ブラックホールが加速器(使用熱核融合プラント)にて数百万個生成される」「生  
成されたブラックホールについて「ホーキング輻射」を言い訳に安全性の強弁がなされる  
ことになる」との内容を有している小説 Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライ  
ン』が1980年に世に出されている、にも関わらず、加速器によるブラックホール生成の可  
能性は1999年に至るまで問題視されるとのことは何らなく、また、それが問題視されるに  
至った折(1999年)にあっても物理学会と加速器実験実施機関は「加速器によるブラック  
ホール生成などありえない」と強弁していたとのことがある。が、再度の「しかし、」でそう  
もした動向がここ最近(2001年以降)になって変動を見ることになって加速器ブラックホ  
ール生成は「現実的に」ありうると学者らにもされるようになった」

とのことを既に示してきたわけだが(すなわち上に表記の[事実 E]の通りのことが文献的事実として表  
出していることを既に示してきたわけだが)、にまつわっては、

「1980年小説の元となったアイデアがあり、そのアイデアを小説家に提供したような物理  
学者などがいたのではないか。それがゆえの小説作品の先覚性なのではないか？」

と「当然に」見立られるところであろうことか、と思う。

だが、

[それでは「絶対に」話がすまされぬ]

との状況になっていることを「把握」しているのが筆者である（:であるからこそ、本稿筆者は加速器問  
題についての（一審からして無為に長引いた節ある）行政訴訟を——『行政訴訟などというものを提  
訴する者は[功利主義]の観点から間尺が合わぬことをやるとの性癖の持ち主、「(あまり)意味のない」  
こと好きの相応の類も多かるう』との認識がありもした中ながら—— [国内 LHC 実験参加勢のとりまと  
め機関]にして[加速器実験関係者らの国際的ハブ的研究機関]（権威の首府たる研究機関）を相手  
に提訴し、[法律上の争訟]に落とし込みながら [LHC 実験関係者らの欺瞞]を訴求しようとのことま  
でなしていた。ただただ [訴求の一材料] にするため「だけ」に提訴なしたそうもした訴訟（国内初であ  
ろうとの LHC 関連訴訟）からして周囲の反応を見る限り「まったくもって無為なるもの」に終わったとの  
節もある——逃げ惑う臆病者や「どうしてか」不快なる迷惑電話などにて足を引っ張ってきた、筆者の  
ような人間が [そこに存在していて欲しくはない] とのスタンスを明示してきた宗教団体関係者などに  
ただただいらつかさせられ続けただけに終わったとの節もある—— わけだが）。

さて、常識的な人間の観点では——たとえそれが有害なだけの希望的観測でも—— そういう見立てが  
なされようとのもの、

「1980年にあつて [極微ブラックホールが加速器(使用熱核融合プラント)にて数百万個  
生成される] [生成されたブラックホールについて[ホーキング輻射]を言い訳に安全性の  
強弁がなされた] との内容を有している小説 Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホッ



トライン』が世に出されている([事実 E])との件については小説家にアイデアを提供したような一部物理学者などがいたのではないか。その者たちが「なにがしかのこと」を先覚的に考える余地があったからこそその小説作品の先覚性なのではないか？」

との見立てが否定される(否定「されてしまう」とした方がより適切な言いようともとらえるが)ようになっていくとのことに通ずる論拠をここ [出典\(Source\) 紹介の部 5](#) にて一部挙げておくこととする。

それについてはこここれに至るまで原文引用をなしてきた ([出典\(Source\) 紹介の部 1](#)、[出典\(Source\) 紹介の部 2](#)、[出典\(Source\) 紹介の部 3](#) にて原文引用をなしてきた) とのオンライン上にての流通文書、

**[ THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD と題されての英文文書 ]** (検索エンジン上での表記英文タイトル入力で文書(発信媒体)特定・ダウンロード可能となっている英文論稿。同論稿はその作成者が[法学者](法務博士の資格をハーバード・ロースクールで取得したうえでノースダコタ大学ロースクール助教( Assistant Professor )の立ち位置にあるとの Eric Johnson という人物) となっているとの[LHC 実験差し止め請求動向「解説」論稿]となり、TENNESSEE LAW REVIEW[テネシー法学紀要]に掲載のものが現時 arXiv(コーネル大運用の論稿配布サーバー)経由で誰でもダウンロード可能となっているとの文書でもある)

に見る主流筋の科学者申しようにまつわる記述内容を引いておくこととする。

(直下、案件解説論稿 **THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD** にての 831 と振られた頁よりの引用をなすとして)

---

In 2000, a physicist named Francesco Calogero carefully ventured some of his own thoughts on the matter. A theoretician with the University of Roma La Sapienza, Calogero had previously served as Secretary General of the Pugwash Conferences on Science and Human Affairs and accepted the 1995 Nobel Peace Prize on behalf of the Conference.<sup>105</sup> In his paper, Calogero criticized the findings of experts on the issues of RHIC safety, pointing to bias, a lack of scientific objectivity, and an overarching preoccupation with the public relations consequences of what is said.<sup>106</sup> Specifically, Calogero wrote that the reports on RHIC safety issues occasionally gave him “the impression that they are biased towards allaying fears ‘beyond reasonable doubt.’<sup>107</sup>

(拙訳として)

「2000年、フランチェスコ・カロジェロという物理学者が(RHICリスクにまつわる件にて)問題となることについての彼の考えのいくばくかを用心深くも思い切って呈示せんとした。ローマ・ラ・サピエンツァ大学の理論家でもあるカロジェロは従前、[科学と人類の問題の分野にてのパグウォッシュ会議]にて書記長との役割を務めあげ、会議を代表して1995年ノーベル平和賞を授与している人物となる(訳注として:1995年に組織体としてのパグウォッシュ会議——アイシュタインとバートランド・ラッセルを発起人に全世界の科学者が核兵器廃絶のために団結したとの国際会議——と共にノーベル平和賞を受賞したのは元マンハッタン計画参画者たるポーランド出身の英国人物理学者ジョセフ・ロートブラッドであると広く知られているが、フランチェスコ・カロジェロもその折に共にノーベル平和賞を授与されている)。彼、カロジェロはRHIC安全性に関する問題にあつての専門家らの結論(findings)をバイアスがかかったものである、科学的客観性が担保されていない、広報との絡みでの何よりも優先事をその発言の結果としているとの批判をなした(訳注:要するに自分達に都合の良いように安全であるとの主張を偏向したかたちでなしている、との言いようである)。際立ったところとして、カロ

ジェロは RHIC 安全問題に関わるレポートらは度々、[合理的疑いを超える恐怖]（‘beyond reasonable doubt.’とは訴訟関連の用語で[挙証責任の関係上「合理的疑いを超えるところ」を罰すること]を指す）を和らげんとする方向へとバイアスがかかっているものだと心証を彼に与えたと書いている

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上内容を引いた上で述べるが、上に見るフランチェスコ・カロジェロ 一身内であるはずの加速器実験機関(の発表文書)にも厳正にあたるとのスタンスを明示していることが上引用部に記載されているイタリア物理学会の重鎮— についてはその言論動向として同じくもの法学者論稿に次のような記載がなされているところである。

(直下、案件解説論稿 THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD にての 838 とノブル(ページ番号)が振られた頁よりの引用をなすとして)

---

Even Francesco Calogero, who expressed so much concern with regard to strangelets, was not similarly aroused with regard to black holes. Those concerns, he said, “can be allayed by simple, hence quite reliable, order of magnitude calculations, which definitely exclude any such possibility.”172

(拙訳として)

「(RHIC 報告書で否定されていた)[ストレンジレット]に対して一廉ならぬ懸念を表していたフランチェスコ・カロジェロですら[ブラックホール]に関しては同様に眠りから覚めるが如く目を向けてはいなかった。それら懸念(ブラックホールに関する懸念)については、——カロジェロ曰くのこととし——「シンプルかつ極めて信頼のおける[対数スケール上の数量の比較](オーダー・オブ・マグニチュード)にて[そのような可能性は何らないと厳然と排除される]との形態にて片付けられるものである」としていた」(注記番号 172)

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

文章の引用元たる法学者論稿( THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD )では

「ノーベル平和賞を受賞している科学者団体の主催者たる斯界の泰斗たるフランチェスコ・カロジェロがストレンジレット生成リスク(仮説上の粒子ストレンジレットが生成され、そのストレンジレットによって周囲のものが同化させしめうることになりうるとのリスク)について扱った研究機関申しように苦言を呈するとの文脈で述べていた」

ことが紹介されている一方で、

「ブラックホール生成にまつわる懸念についてはシンプルかつ極めて信頼のおける[対数スケール上の数量の比較](オーダー・オブ・マグニチュード)にて[そのような可能性は何らないと厳然と排除される]との形態にて鎮められるようなものである」

と強調していた旨が指摘されているのである(少なくとも 2001 年に科学界の理論動向が地殻変動を見せるまでは、である)。

法学者論稿 THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD の上にての抜粋部(838と振られてのページよりの抜粋部)に見る[172と出典番号付されている箇所]から引きなおしての[確度を示すべくもの話]をなしておく。

その点、法学者論稿抜粋部にての問題となる出典紹介部では 172. Calogero, supra note 105, at 192.

とラテン語(supra)付きで出典表記がなされている。

すなわち、

「本書出典番号 172 については Calogero らの手になる本書出典番号 105 にて紹介の文書の第 192 ページを参照のこと」

と表記されている。

その部の記載を受け、同法学者解説論稿の出典表記番号 105 にて記載されているカロジェロ本人の手になる論考 [ Might a Laboratory Experiment Destroy Planet Earth? ] の内容についても紹介しておくこととする。

その点、カロジェロ論稿となる、

[ Might a Laboratory Experiment Destroy Planet Earth? ]

に関しては —— 筆者は法廷にて同文書内容をも引用しようとしていたとの兼ね合いで把握しているのだが—— 「それそのものの現物」とも言える生(なま)の論稿は「現行は」無償にてオンライン経緯で入手しづらくなっているとのことがある(ただし、といった状況は変動を見る可能性もある)。

だが、PDF 化されての同論稿そのものではなく転載なしのものとしてその内容をオンライン上にて紹介している欧文ページも存在しており(:内容確認なせるだけの向きにあっては細かくはその論稿のタイトル、 Might a Laboratory Experiment Destroy Planet Earth? —— 同論稿、1999 年 CERN 報告書 [ Will relativistic heavy-ion colliders destroy our planet? ] ([出典(Source)紹介の部 1]の部にて内容紹介しているところの誰でもオンライン上より容易に入手なせる流布論稿)と「どういう料簡でなのか」極めて似通ったタイトルを有しているとの論稿ともなる—— のタイトル名を Calogero との作者名と共に検索エンジン上で入力するなどして特定いただきたいものである)、 そうして捕捉できるところの論稿内容紹介ページ(内容をそのまま紹介しているとのページをご覧戴きたい)で公開されているとの、(フランチェスコ・カロジェロ論稿) [ Might a Laboratory Experiment Destroy Planet Earth? ]

にあっては次の通りの記載がなされている。

(直下、フランチェスコ・カロジェロによる案件とりまとめ論稿 Might a Laboratory Experiment Destroy Planet Earth? にあつての冒頭部、Synopsis (梗概; 文書大要紹介部)よりの引用をなすとして)

Recently some concerns have been raised about the possibility that a high-energy ion-ion colliding beam experiment which just began at Brookhaven National Laboratory in the United States, and a similar one that is planned to begin some years hence at CERN in Geneva, might have cataclysmic consequences, hypothetically amounting to the disappearance of planet Earth.

(拙訳として)

「[米国のブルックヘブン国立加速器研究所にて開始を見た高エネルギーイオン衝突実験]及び[ジュネーブの CERN の計画開始が企図されている似たような実

験]が仮説的に地球の消失につながるとする破滅的な帰結をもたらすかもしれないとの懸念がここ最近、取り沙汰され出した」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(さらに直下、フランチェスコ・カロジェロによる案件とりまとめ論稿 *Might a Laboratory Experiment Destroy Planet Earth?*よりの(上にての引用部から長き合間の部を端折っての)引用をなすとして)

Three hypothetical dangers which might emerge from these experiments have been considered:

- (i) formation of a "black hole" or some other "gravitational singularity" in which surrounding matter might then "fall";
- (ii) transition to another hypothetical "vacuum state", different, and lower in energy, than the vacuum state of our world (which would therefore be metastable);
- (iii) formation of a stable aggregate of "strange" matter, which might initiate a transition of all surrounding matter to this new kind of matter, with the result of completely destroying planet Earth (such a phenomenon would entail a great liberation of energy; hence, if it were to unfold quickly, it would result in a Supernova-like explosion).

The first ("gravitational") concern can be allayed by simple, hence quite reliable, order-of-magnitude calculations, that definitely exclude any such possibility.

(拙訳として)

「これら実験から生じるところとして仮説的なる三つの危険性が顧慮されている。

(i) 周囲のものが落ち込むことになりうるブラックホールまたはその他の重力の特異点の形成

(ii) 仮説的なる他の真空 (Vacuum) の相への変異、この世界のそれと異なり、我々の世界のそれよりも低エネルギーの(それがゆえに準安定的なる)真空状態への変異

(iii) 安定化したストレンジ・マターの凝集物の形成、によって、地球を完全に破壊するとの帰結を伴っての我々を取り囲むすべての物質が新しき物質への変換がもたらされる(そのような現象(ストレンジマター凝集物の生成)は膨大なエネルギーの解放を伴っており、万一、それが素早くも具現化すれば、超新星爆発としての帰結がもたらされることになる)。

うち、最初の「重力の」懸念(訳注:ブラックホール生成にまつわるものとして(i)と振られての懸念)は「シンプルかつ極めて信頼のおける[対数スケール上の数量の比較](オーダー・オブ・マグニチュード)にて[そのような可能性は何らないと厳然と排除される]との形態にて鎮められるものである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上、内容を引いているように二〇〇〇年以降にあつて「も」フランチェスコ・カロジェロ ——ノーベル平和賞をパクウォッシュ会議を代表して受賞した理論物理学者にしてイタリア物理学会の重鎮—— によって先に法学者文書より引用なしたとおりのこと、

**The first ("gravitational") concern can be allayed by simple, hence quite reliable, order-of-magnitude calculations, that definitely exclude any such possibility.**「ブラックホール生成にまつわる懸念はシンプルかつ極めて信頼のおける[対数スケール上の数量比較](オーダー・オブ・マグニチュード)にて[そのような可能性は何らないと厳然と排除される]との形態にて鎮められるものである」

とのことが述べられているとのことが記録的事実・文献的事実の問題として確認できるよになっている（：尚、カロジェロの論稿 **Might a laboratory experiment destroy planet Earth?**が初出を見た折は二〇〇〇年と「されている」が、オンライン上に認められる同論考の内容紹介媒体では二〇〇一年三月 —ブラックホール生成を肯定的に論じだすとのエポックメイキングな論稿（[事実 B]の出典紹介部でも既述となっているところのカリフォルニア大学サンタバーバラ校所属の物理学者、スティーブン・ギディングスらによる **High energy colliders as black hole factories: The end of short distance physics** 及びスタンフォード大学のグレッグ・ランズバーグらによる **Black Holes at the Large Hadron Collider** の二つの論稿）が世に出る数ヶ月前の折— が初出であるとれる記載もなされている。さらに述べておけば、同論考でもっばら問題視されているところ、厚くも論じられているところは（無論、同論稿の内容をも細かく検討している人間として申し述べるのだが）[数百万年に一度の超新星爆発の状況などと比較されてのストレンジレット生成局面に関する研究機関申しよう]（に対する物理学者カロジェロの分析）となっている）

以上をもって [補足] とした

---

ここまでの内容でもってご理解いただけたことか、と期待するが、  
[「偽りなどなす必要もなからうし」また「公人として偽りをなさぬように注意しての申しようをなしている節がある」科学界(物理学分野)の世界的重鎮](フランチェスコ・カルジェロ Francesco Calogero )  
が、(くどくもその言動を問題視するところとして)、

「(そも、ブラックホールが生成された後のリスクはいかに「以前」の問題として) ブラックホール生成についてはシンプルかつ極めて信頼のおける「対数スケール上の数量の比較」(オーダー・オブ・マグニチュード)にてそのような可能性は何らないと厳然と排除される」

と —その可能性が一転、広くも認容されることになったとの 2001 年に至る前のこととして— 明言していたとのことがあるわけである。

かくの如しで

[1980 年代にブラックホール生成可能性にまつわる先覚的予測がなされて「いなかった」と解されることにまつわる論拠]

はそうした点にあって「も」見出すことができるよになっている(そして、そのことはこの身、本稿筆者が実験関係者を取材して聞いたこととも平仄が合うところとなっている)。

( [事実 A] から [事実 D] をまとめたの矛盾ありようとして呈示している [事実 E] の内容を補って示すべくもの **出典 (Source) 紹介の部 5** はここまでする)

---



直前まで補ってものことについて解説してきた[事実E]、その先立って呈示の内容「のみ」を振り返ってご覧頂くことだけでも感うことなく理解いただけることか、とは思いますが、ここまでの[事実A]から[事実D](及び[事実A]から[事実D]の内容をまとめて整理しての[事実E])にてその指し示しに注力してきたとのこととは、詰るところ、次のように図示できるところの間に横たわる矛盾関係である。

### ■ 前世紀末葉（1999 — ）から今世紀初頭にかけての科学界論調

加速器によるブラックホール生成の可能性が [リスク] となるのではないかと研究機関部外の間人よりの質問が寄せられる（その質問の背景にあった考えが [粒子加速器が原初宇宙の高エネルギー状態を再現するとされること] と [原初宇宙には極微ブラックホールがあったとされること] に対する専門外の間人による推論であったと一般に説明されていることも本稿では解説している）。対して、研究機関ら（ブルックヘブン国立研究所およびCERN）は「今後実現されうるありとあらゆる粒子加速器によるブラックホール生成はありえない」との報告書を出す（：本稿では1999年における報告書らの内容（ブルックヘブン国立研究所およびCERNの報告書の内容）の原文引用 および2000年（2001年）にてのノーベル平和賞をパグウォッシュ会議を代表して受賞した物理学者フランチェスコ・カロジェロらの公衆に対する訴求を兼ねての論稿での申しようの原文引用を [出典(Source)紹介の部1] [出典(Source)紹介の部5] にてなしている）。

### ■ 2001年以降の新規理論に対する分析を受けての科学界の論調

余剰次元理論（1998年提唱）の発展動向を受け、同年（2001年）より権威を伴っての専門の物理学者らが「粒子加速器（LHC）による [年にして千万個単位のマイクロ・ブラックホールの生成] の可能性がある（生成されたブラックホールはホーキング輻射との現象で即時蒸発する）」との論稿を発表しだす（：本稿 [出典(Source)紹介の部2] では表記のことにつき案件分析をなした米国法学者論稿よりの原文引用をなしている）。

### ■ 2003年以降の安全報告書にあつての明確化しての方向性

CERNが余剰次元理論によるブラックホール生成の可能性が観念されだした件につき、[潜在的な脅威] と看做しつつも「生成ブラックホールは即時に蒸発するから安全である」と専らに主張する報告書を出す（：本稿 [出典(Source)紹介の部3] では表記のことにつき2003年のCERN安全報告書よりの原文引用をなしている）。

### ■ 2004年以降の科学界の変節(を受けての事後の安全報告書に見る兆候)

生成ブラックホール蒸発の論拠となっている理論、ホーキング輻射に対して専門の科学者が疑義を呈しだし、ホーキング輻射の発現に広くも疑義がもたれるようになる（：本稿 [出典(Source)紹介の部3] では案件の解説をなしているとの米国法学者論稿およびホーキング輻射権威（William Unruh）の変節が現われているところの同権威の手になる論文よりの抜粋をなしている）。それを受けて、加速器実験機関は従前、ストレンジレット生成問題といった問題に対する安全性論拠として報告書の中で言及していたものである [宇宙線(宇宙を飛び交う高エネルギー放射線)現象と比較しての申しよう] をブラックホール生成問題に関して「も」強くも前面に押し出すようになる。

[文献的事実] の問題として摘示できるし、本稿にて実際に出典に依拠して呈示しているとの [変節] の流れ

## Thrice Upon a Time (1980)

(邦題『未来からのホットライン』)

部外の間人(ウォルター・ワグナー)が「加速器はブラックホールを生成するのではないかと突発的に問題視し、耳目をさらったとの1999年にあっては[加速器によるブラックホール生成可能性]は研究機関発表動向として完全否定されていた(それが肯定的に論じられるようになったのは2001年である)にも関わらず原著1980年初出のThrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』からして[加速器によるブラックホール生成]をテーマとしていたとのことがある

加速器によるブラックホール生成については2001年よりの科学界発表動向で[通年単位で1000万個の生成可能性あり]とされるに「至った」(1998年に提唱された余剰次元理論の兼ね合いでそうした新規理論が出てきた)の対して、問題となる1980年初出小説Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』でも極微ブラックホール[200万個]生成(2009年末から2010年初頭にかけての作中世界での加速器利用型核融合炉使用による[200万個]生成)が描かれているがゆえに大量の極微ブラックホール生成との式で話が非常に似通っている

加速器運営元が(2001年から2003年に至る)初期動向として[ホーキング輻射]をブラックホール生成が安全であるとの論拠として用いているのに対して問題となる1980年初出の小説Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』「でも」ホーキング輻射による極微ブラックホール蒸発がブラックホール生成がなれていても[安全である]とのブラックホール生成元の言い訳として持ち出されていた旨、描かれているとのことがある

さて、本稿本段に至るまでの流れ、

[[出典\(Source\)紹介の部1](#)]から[出典\(Source\)紹介の部5](#)を包摂する解説部]

で指し示してきたことよりさらに一歩進んでの話として、である。本稿筆者は次のことを非常に重要視している。

「他にもブラックホール生成問題にまつわる先覚的言及をなしている文物が存在している。そちら先覚的言及文物が[先覚性][正確性][克明さ(露骨さ)]のどの面でも群を抜いているとの異常無比なるもの、まさしくもの[**「予言」的「作品」にして「克明なる告知文物」**]といった形態のものとして存在しているがゆえに問題になる——本来的には[[未知]を前提にしての予言的作品]と[[既知]を前提にしての克明なる告知文物]は論理的に両立するものではないのだが、それらの要素を双方体现しているがために[異常なるもの](と定義できるもの)が際立ったかたちにて(無比なるもののかたちにて)存在しているがゆえに問題になる——」

(:誤解なきように。

上にて[**異常無比なる予言「的」文物がある**]としているが、本稿では筆者は[神秘主義者]としての書きようをなしているのではない。

本稿にて筆者は  
[証拠]([はきと指し示せる文献的事実(記録的事実)ら]および[はきと指し示せる事実

らより導きだせる自明なる因果関係])

に基づいて、

「[常識] —述べておけば、社会でその重視・固持が求められているとの[常識]が「質的」「道義的」に正しいものとは限らない— の枠外にまで足入れするかたちにて」

ながらも何が問題になるのか、そのことが —相応の低劣な人間がこととする印象論ではなく[事実に依拠したきちんとした方式]にて— どう我々人間の脳髓を狙う銃座座標を示すものなのか、示そうとしているのである(そして、さらに述べれば、[変化]をこの世界にきたす以外、(それが可能・不可能かは別論点たるところとして)望ましき未来はないだろうと考えている一個の「理性」主義者としてのやりようとして上記のことの論拠を呈示しようとしているのである)

それではこれより同じくものこと、

「他にもブラックホール生成問題にまつわる先覚的言及をなしている文物が存在している。そちら先覚的言及文物が[先覚性][正確性][克明さ(露骨さ)]のどの面でも群を抜いているとの異常無比なるもの、まさしくもの[[**予言「的」作品**]]にして[[**克明なる告知文物**]]といった形態のものとして存在しているがゆえに問題になる —本来的には[[未知]を前提にしての予言的作品]と[[既知]を前提にしての克明なる告知文物]は論理的に両立するものではないわけだが、それらの要素を双方体现しているがために[[異常なるもの](と定義できるもの)が際立ったかたちにて(無比なるもののかたちにて)存在しているがゆえに問題になる]

とのことについて —(ここまでそれが事実たる所以を呈示の[事実A]から[事実E]に続くものとして)[事実F]から[事実I]と振って— 典拠となるところを「まずもっての一例として」指し示していくこととする。

(尚、直下、[事実F]から[事実I]と分類して指し示さんとすることは「当然に極めて問題になる」との性質のことなのだが、国内はもとより海外でもそのことを(少なくとも他人の目につく可能性あるかたちにて)問題視している人間が「全くいない」とのことでもある。当方は問題となるキーワードを組み合わせ検索エンジン表示媒体を確認、そのプロセスを日付証跡付きで録画しているが、とにかくも、[事実F]から[事実I]の問題性を指摘する人間はこの身を除いて「地球上に」「少なくともオンライン上では」二〇一〇年の当方による問題捕捉時点から本追記部執筆時に至るまでいないこと、「記録」しているとのことである(アジア的なオーバーリアクションとしてよくも持ちだされる表現、「白髪三千丈」を用いても何ら言い過ぎではないと述べたきところとして手前が[この世界と人間のありように絶望しきった]ようなところでもある)。ちなみにこの身は —これまた大袈裟と人は思うかもしれないが— そうした現状に気づいたとき「もうあとはない」との[覚悟]を決しきった)



(本稿筆者が非常に問題視しているところとして次のような各事実がそこにある)

[事実 F]

1974年に初出を見た極めて長きタイトルの SF 小説作品として、

**Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W**  
(邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』

という作品が存在している。

同作、1975 年、米国の権威あるサイエンス・フィクション分野の賞として認知されているヒューゴ賞 Hugo Award を(同賞が長編・中長編(ノベラ)・中編(ノベレット)・短編と受賞分野が語数によって分たれている中で)[中編 Novelette 分野]にて受賞した作品となっている。

その小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は作中、

**[15 兆電子ボルトの CEERN (CERN ならぬ CEERN) の粒子加速器]**

なるものを登場させている、とのものである。

**Adrift Just off the Islets of  
Langerhans:Latitude 38°54'N,  
Longitude 77°00'13W  
(1974)**

(邦題『北緯38度54分、西経77度0分  
13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)

[事実 G]

上の[事実 F]にて挙げた小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[SF 小説大賞ヒューゴ賞を受賞した作品を収めた傑作撰集] (英文 Wikipedia にて The Hugo Winners とのその傑作撰集のためだけの項目が設けられているその方面—サイエンス・フィクションの分野に志向性ある向き— では著名な傑作選)  
にて

**The Hole Man 『ホール・マン』 (という 1974 年初出の作品)**

という作品と(原著・和訳版版双方ともに)[連続掲載]されているとの作品となる(:中編分野のヒューゴ賞受賞作品と短編分野のヒューゴ賞受賞作品が連続掲載されるようになっていたとの式で(定例化してのかたちで)当該傑作撰体裁が定められているために、である)。

ここ（[事実G]に対する言及部）にて挙げている The Hole Man『ホール・マン』という小説作品は 一同文に文献的事実の問題として—  
[極微ブラックホールのケージ(容器)より漏れ出しているの暴発を描く小説]  
となっている。

**The Hole Man**  
(1974)  
(邦題『ホール・マン』)

[事実H]

上の[事実F]と[事実G]の摘示(容易に後追いできるとの該当部引用による摘示)によって

[15兆電子ボルトのCEERN(CERNならぬCEERN)の粒子加速器を登場させている小説]([事実F]の言及部にて挙げた小説)  
[極微ブラックホールの暴発を描く小説]([事実G]の言及部にて挙げた小説)

が著名な米国 SF 賞を受賞した SF 傑作選の中で(そうなるべくも定例化しての当該傑作撰体裁が定められているため)連結させられていると示すことができるようになって  
いるわけであるが、取り上げての小説の間には  
[「配置面」([連続掲載]との配置面)以外の連結関係]  
が成立しもしている。

その点、[事実F]に対する言及部に挙げた小説(『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)の主人公は作中、ラリー「Larry」との愛称(通称)で頻繁に呼称され、その主人公の正式の姓はローレンス(Lawrence)であるとの設定が採用されている。

他面、[事実G]の言及部にて問題視した小説(『ホール・マン』)の作者たる SF 作家の愛称(通称)はラリー「Larry」であり、その正式名称はローレンス(Laurence)であるとのことが存する。

**Adrift Just off the Islets of  
Langerhans:Latitude 38°54'N,  
Longitude 77°00'13W**  
(1974)  
| The Hugo Winners Volume 3  
**The Hole Man**  
(1974)



※事実「関係」について

ここに上 [事実 F] から [事実 H] を通じて述べられることを表記する。

[15 兆電子ボルトの CEERN (CERN ならぬ CEERN) の粒子加速器を登場させる小説] ([事実 F])

[極微ブラックホールの暴発を描く小説] ([事実 G])

が [三十三回目ヒューゴ賞中編分野受賞・短編分野受賞作品] として SF 傑作撰集の中で連続掲載されており (同 [事実 G])、それら連続掲載作品らには「一方の主人公の姓およびその愛称が他方の作品の作者の姓およびその愛称と同一である」

との関係性が成立している ([事実 H])。

(上からして主観などを介在していないとの [事実] それ自体への言及にとどまる)

以上の事実関係を踏まえてさらに指摘すれば、直下、呈示のようなこと ([事実 I]) のようなこともまたある。

[事実 I]

[事実 F] の部にてその名を挙げた小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W* (邦題) 『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[欧州の加速器運営機関 (CERN ならぬ CEERN などと呼称される 15TeV 加速器を運用する機関) のビーム照射装置でもって [自らを縮退させての極小の分身] をホログラム上に造り出した主人公がそちら分身を己の [「底無し」] 「黒々とした」 「渦を巻く」へそ] に落とし込み、もって、己の魂に引導を渡させるとの粗筋の作品]

「とも」なっている。

---

以上の [事実 F] から [事実 I] が [紛れもなくもの文献的事実] である (愚人や相応の情報攪乱者でなければ生き死にに関わる問題ではそれを持ち出すことはなかりうとの [[主観] が介在するような性質の話] ではない) ことを示すべくもの出典紹介 —この身申しようが疑わしいとの向きにあっては是非とも裏をとっていただきたいとの出典紹介— を [原文引用] とのかたちでこれよりなすこととする。

その点、まずもって [事実 F] の通りであることを示す出典紹介をなしていくことになるのだが、本稿にて出典資料としてそこよりの原文引用をなすこととした文書は

『世界 SF 大賞傑作選 8』 (講談社刊 / 原題は後にその掲載作品目録につき言及する *The Hugo Winners Volume 3*) に収録されている *Adrift Just off the Islets of Langerhans: Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W* (邦題) 『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』小説「本編」そのもの

となる（※表記引用元小説粗筋はここでは問題にしていないのが（問題となるのは同作中の[奇態なる予見的言及]である）、一応、同小説の粗筋についての説明も下に付しておく）。

（粗筋にまつわる追記として：

これより原文引用をなすことになるとの 70 年代小説、  
**Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,  
Longitude 77°00'13W**（邦題）『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒  
ランゲルハンス島沖を漂流中』  
との小説の粗筋・内容であるが、同作、

[[不死ゆえの苦しみ]から解放されたいとの男（作中、狼男と臭わされるラリーと名付けられてのキャラクター）が死を得るために自身の魂の座標の特定に励む。そして、研究機関を管轄する自身の友人（ヴィクトル・フランケンシュタイン）の助力でその魂の座標に到達する挙に出、宿願・本懐を遂げようとする]

との内容の作品となっている ——本稿本段執筆時の現行 2014 年前半期時点にて英文 Wikipedia [ Adrift Just Off the Islets of Langerhans ] 項目の Synopsis (粗筋) の部にて “ **Larry Talbot wants to die, but cannot unless he first knows the exact physical location of his soul. To this end, he tracks down Victor Frankenstein, who sends him on a fantastic voyage.** ” (訳として)「ラリー・タルボットは(訳注:作中、同タルボットが不死の狼男の眷族であることが臭わされるなかで)死を得たいと欲していたのだが、それは彼が自身の魂の正確な物理的座標を知らなければ、適わぬことであった。この目標(魂の座標を特定し自身に死をもたらすとの目標)に向けて、彼はヴィクター・フランケンシュタイン、ロレンス・タルボットを幻想的な冒険へといざなうことになる同人物を訪ね同人物に頼ることになる」(訳を付しての引用はここまでとする)と記載されているところがそちら粗筋にまつわる表記となる——。

といった粗筋は ——いちいちもって申し述べるまでもないことだが——好意的に解せば、「幻想的なもの」、悪くも解せば、「意味不明瞭なるもの」だが、といったフィクションのフィクションとしての筋立て自体を([主観・心証・印象]という曖昧模糊とした領域を扱う[評論家]なぞとの人種を気取って)ここにて問題視しているわけではない)

出典(Source)紹介の部6



# SOURCE 6

ここ出典(Source)紹介の部6では上にも表記の[事実F]にまつわるところとして講談社より邦訳が出されている、

**Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N, Longitude77°00'13W** (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(かつて流通を見ていたものの現在は図書館で借りる／古本を取得するのが内容確認のために要されるとのSF傑作選収録版)

より 一法的に問題となる余地が一切ないと判断した分量での一 原文引用をなすこととする。

それでは下に

[事実F]

1974年に初出を見た極めて長きタイトルのSF小説作品として、

**Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W**  
(邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』  
という作品が存在している。

同作、1975年、米国の権威あるサイエンス・フィクション分野の賞として認知されているヒューゴ賞 Hugo Award を(同賞が長編・中長編(ノベラ)・中編(ノベレット)・短編と受賞分野が語数によって分たれている中で)[中編 Novelette 分野]にて受賞した作品となっている。

その小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は作中、  
[15 兆電子ボルトの CERN (CERN ならぬ CEERN) の粒子加速器]  
なるものを登場させている、とのものである。

とのことが [記録的事実][文献的事実]であることを示すに足る分だけの引用をなすこととする。

(直下、日本国内で刊行された『世界 SF 大賞傑作選 8』内『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』掲載部 (p220-p221 の境目の部) よりの原文引用をなすとして)

---

「おれが見た限りでは、粒子加速器のようだったな。それも、ジュネーブにある CERN の陽子シンクロトロンと同じくらい大きい」  
ヴィクトルは感心したようすだった。「なかなか読んでるね」  
「当然さ」  
「そうか、そうか。では今度は、きみを驚かせよう。CERN の加速器が出せるエネルギーは三十三ビリオン(十億)電子ボルトまでだ。この部屋の下にあるリングは、十五テラ電子ボルトまで出る」  
「テラは兆」  
「よく勉強したものだな！ 十五兆電子ボルトだ。何もかもお見通しじゃないか、え、ラリー?」  
「一つわからないことがある」  
ヴィクトルは返事を待っている。  
「できるのか?」  
「うん。気象報告によると、台風が目がこの真上を通りすぎてゆくところらしい。一時間たっぷりある。実験の危険な部分を片づけるには充分以上の時間だ」  
「だが、とにかくできるわけだな?」  
「できるさ、ラリー、同じことを二度もいわせないでくれ」

---

(ここまでをもって「まずもってしての」邦訳版よりの一部引用とする)

(さらに続けて直下、上の訳書よりの引用部と対応する原著 *Adrift Just off the Islets of Langerhans: Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W* にての表記をも「オンライン上より確認できるところとして」引用なすとして)

---

“From what I could see,” Talbot said, “that looked to be a particle accelerator. And it looked as big as CERN's proton synchrotron in Geneva.”

Victor was impressed. “You've been doing some reading.”

"It behooved me."

“Well, well. Let's see if I can impress you. CERN's accelerator reaches energies up to 33 BeV; the ring underneath this room reaches energies of 15 GeV.”

“Giga meaning trillion.”

“You have been reading up, haven't you! **Fifteen trillion electron volts. There's simply no keeping secrets from you, is there, Larry?**”

“Only one.”

Victor waited expectantly.

“Can you do it?”

“Yes, Meteorology says the eye is almost passing over us. We'll have better than an hour, more than enough time for the dangerous parts of the experiment.”

“But you can do it.”

“Yes, Larry. I don't like having to say it twice.”

---

(原著表記よりの引用はここまでとする)

(上にての原著よりの引用部についてであるが、「であるから原著よりの引用をわざわざなしている」ところとして、表記英文テキストをグーグル検索エンジン上にて検索いただければ、「現行(本稿執筆時現時点)にては、「問題となる原著該当箇所を「オンライン上にて」特定できるようになっている—— Internet Archive のサイトにて現行は公開されている、The Magazine of fantasy and science fiction ( Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38° 54'N, Longitude 77° 00'13W がそのリリース時、同誌にて収録されていたとの雑誌『ファンタジー・アンド・サイエンス・フィクション』誌)の問題となる号の裏取りできる内容を通じて検索エンジンから特定できるようになっている——。

尚、上にての(訳書ではなく原著の方の)引用部については Fifteen trillion electron volts [15 兆電子ボルト] を [TeV] と表さずに [GeV] と表しての mistake (誤り) ととれるところもあるが、その点についてはすぐ後の段にても解説する)

(さらに続けて直下、日本国内で刊行された『世界 SF 大賞傑作選 8』の p.222—p.223、『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』掲載部よりの原文引用をなすとして)

---

東欧ブロックの CEERN —— Conseil de l'Europe de l'Est pour la Recherche Nucleaire (東ヨーロッパ合同原子核研究機関)—— が、(ルーマニアのクルジュ、ハンガリーのブダペスト、ポーランドのグダニスクなど、もっと人情味があつて、ふさわしい土地があつたにもかかわらず)ビエレ・カルパチ山脈のこの人里はなれた高地を選ばざるを得なかつたのは、タルボットの友人ヴィクトルがこの地を指定したからである。CERN は、ダール、ヴィドレー、ゴワード、アダムズ、ライヒをこれまで抱え、CEERN にはヴィクトルがいた。それでバランスはとれていた。ヴィクトルは自由に采配を振ることができた。



こうして難工事の末、彼の要求通りの研究所が完成し、その粒子加速器は CERN の装置を圧倒した。それは、イリノイ州バタヴィアにおかれた、フェルミ国立加速器研究所の四マイルのドーナツをも圧倒するものだった。それは事実、世界最大にして最高の"シンクロファゾトロン"であった。

地下研究所で行われる実験のうち、CEERN の提唱になるプロジェクトは、七〇パーセントにすぎなかった。研究スタッフの百パーセントは、ヴィクトルと個人的につながっていた。CEERN でも東欧ブロックでもなければ、哲学やドグマでもない……ヴィクトルその人への忠誠である。したがって、直径一六マイルのドーナツ型加速器で行われる実験の三〇パーセントは、ヴィクトル自身のものだった。

---

(ここまでもって問題となる一パートの訳書よりの引用部とする)

(さらに続けて直下、上の訳書よりの引用部と対応する原著 Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W にての表記をも「オンライン上より確認できるところとして」引用なすとして)

---

The Eastern Bloc's CEERN — Conseil de l'Europe de l'Est pour la Recherche Nucleaire— had been forced into selecting this isolated location high in the White Carpathians (over such likelier and more hospitable sites as Cluj in Rumania, Budapest in Hungary and Gdansk in Poland) because Talbot's friend Victor had selected this site. **CERN had had Dahl and Wideroe and Goward and Adams and Reich; CEERN had Victor. It balanced . He could call the tune.**

So the laboratory had been painstakingly built to his specifications, and the particle accelerator dwarfed the CERN Machine. It dwarfed the four-mile ring at the National Accelerator Lab in Batavia, Illinois. It was, in fact, the world's largest, most advanced "synchrophasotron." Only seventy per cent of the experiments conducted in the underground laboratory were devoted to projects sponsored by CEERN. **One hundred per cent of the staff of Victor's complex were personally committed to him, not to CEERN, not to the Eastern Bloc, not to philosophies or dogmas ... to the man. So thirty per cent of the experiments run on the sixteen-mile-diameter accelerator ring were Victor's own.**

---

(原著表記よりの引用はここまでとする ——表記英文テキストを検索エンジン上にて検索いただければ、現行、問題となる箇所を(オンライン上にて)特定できるようになっているとの部よりの引用とした—— )

ここまでの訳書・原著よりの原文引用部でもってして

[事実 F]

1974年に初出を見た極めて長きタイトルの SF 小説作品として、

**Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W**  
(邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』

という作品が存在している。

同作、1975 年、米国の権威あるサイエンス・フィクション分野の賞として認知されているヒューゴ賞 Hugo Award を(同賞が長編・中長編(ノベラ)・中編(ノベレット)・短編と受賞分野が語数によって分たれている中で)[中編 Novelette 分野]にて受賞した作品となっている。

その小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は作中、

**[15 兆電子ボルトの CEERN (CERN ならぬ CEERN) の粒子加速器]**

なるものを登場させている、とのものである。

とのことが裏取り容易なる Philological Truth [文献的事実] ([「誰が見ても」惑うことはない]との筋目・筋合いの事実であり、(この段階では「仮に」付きで)そこに[「誰が見ても」明らかなる危機的状況]や[対象を嗜虐的に殺めようとするといった類の詐害意志の片鱗]が露骨にみとめられる場合に実体を検証しようとしないう種族・集団・個人には明日を語る資格もなかろうとの性質の事実)であることを——「オンライン上よりの手間かけずにももの検索行為で容易に後追いでできる」との式にて——指し示したことになる(※)。

---

[補足として]

※1

邦訳版については問題となる作品を掲載している表記の撰集を書籍を図書館で借りるなりして下線を付した箇所だけを読まれるだけで[事実 F]の通りのことが「主観など一切問題にならないところで」具現化を見ていること、確認なせるようになっている。といった中でのこととして[原著](現行はオンライン上より全文確認なせるとのもの)と上にて原文引用をなした[邦訳版]の間には微妙なる相違点が一箇所だけあり、ここではその点についての補足をなしておく。

さて、上にて引用なしたところの、

**CERN の加速器が出せるエネルギーは三十三ビリオン(十億)電子ボルトまでだ。この部屋の下にあるリングは、十五テラ電子ボルトまで出る**

**テラは兆**

**よく勉強したものだな！十五兆電子ボルトだ。何もかもお見通しじゃないか、え、ラリィ？**

との訳書にての表記に対応するところで原著の方では[科学的知識にまつわるところでの「誤」表記]がなされている。

それにつき、上の部にあつての原著 ( Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W )での表記は

**Well, well. Let's see if I can impress you. CERN's accelerator reaches energies up to 33 BeV; the ring underneath this room reaches energies of 15 GeV."**

**"Giga meaning trillion."**

**"You have been reading up, haven't you! Fifteen trillion electron volts. There's simply no keeping secrets from you, is there, Larry?"**

上にて再度の引用をなした原著英文表記は訳せば、

(誤記がなされている原著内容をそのまま和訳するとして)

「CERNの加速器は33BeVを超えるエネルギー規模まで達している。この部屋の下にあるリングについては15GeVまでのエネルギーが出せるようになっている」

「(GeVの先頭のGが意味するところの)ギガは兆を意味している」

「よくも読んで学んできたものじゃないか！15兆電子ボルトだよ」

とあいなる。

そうもして訳せる小説作者(ハーラン・エリスンという作家)の手になる原著表記は**「「明らかな」誤表記」(mistake)**

をなしているとのものである。

[ビリオン・エレクトロン・ボルト]の略称となるBeV(ベブ)が「10億電子ボルト」を意味すると表記されているのは良いとして、小説作中にて「兆単位の電子ボルト」と表記されているGeV(ジエブ)もまた同様に「10億電子ボルト」を意味するというのが[科学にあつての基本的定義]となっているにも関わらずそれを「兆単位のもの」としてしまっているとのことがみとめられるのである。

については汎ミスの問題であるともとれるが(ハーラン・エリスンという問題となる小説の作者が「(Gが意味するところの)ギガは兆単位を意味している」などと「本来は10億単位(billion)を指すもの」(GeV/ギガ・エレクトロン・ボルト)につき「誤記」(mistake)をなしているのはケアレス・ミスともとれるが)、また、一九七八年に世に出た「邦訳版」の方では原著誤表記に対する訳者の心遣いからであろう、兆電子ボルトはTeV、テラエレクトロンボルト表記に直されて記されてはいるのだが、とにかくも、「原著の方には」誤記があること、(重要なことであると判じているために)指摘なしておいた

さらに述べておけば、作家ハーラン・エリスンが誤記が認められないところで

**「15「兆」電子ボルトのCEERNの粒子加速器」(文中にあるように Fifteen trillion electron volts の(CERNならぬ)CEERN加速器)**

なるものを持ち出していることも文献的事実となっている(からここでの話が問題になる)。

以上、一応、[補足]なしておきたきことの第一点目としておく。

## ※2

基本的なことであるゆえに「要らぬことか」とも思うのであるが、オンライン上よりの「手間をかけずに」の該当部確認方法についての補足をもさらにもってなしておく。

(先にも言及なしたことだが) 諸種、過去に刊行・上映されたコンテンツを公開しているとの Internet Archive のサイト(サンフランシスコの非営利財団が運営しているとの形態でのサイト) にあって

**小説 Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N, Longitude77°00'13W** がそのリリース期、同誌にて収録されていたとの雑誌たる **The Magazine of fantasy and science fiction** (『ファンタジイ・アンド・サイエンス・フィクション』誌)

の問題となる号の内容が現行、全文掲載されている、それがゆえに、そこにて収録されている **Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** の原著版内容「をも」(オンライン上より誰でも)全文確認なせるようになってい —グーグル検索エンジン上に上の抜粋原著英文文章より何語か抜き出しての入力をなしての検索をなすことで問題となる Internet Archive のサイトを同定できる (:ただしもって該当頁の元となるページが削除されている場合か(もしかしたらばでありうることかとは思)、グーグル検索エンジン上で(相応の力学の介在などがあって)当該ページが表示されないようになっていたらば話が異なるが、といったケースはここでは敢えて無視する) —。

そうした現行ありようについて紹介したうえで  
[即時の文言特定方式]  
について紹介しておく。

問題となる雑誌の全文掲載をなしているとのページ(紙面の英文テキストをOCRでデジタル認識してテキストデータに変換したのであろうと解される大量の英文テキストがHTML形式で記載されているとのInternet Archiveのページ)をGoogle検索エンジンにて「引用部から数語抜き出しての」検索 —たとえば、「Adrift Just off the Islets of Langerhans」と「Fifteen trillion electron volts」などをキーワード(クエリ)とするとのかたちで検索 — なして捕捉したうえでそちらウェブページの閲覧時に(パソコンの基本的操作の問題として)キーボードのCtrlキーとFキーを同時押しする(ことが情報の即時の確認手段として意味をなす)。

すると、そう、キーボードのCtrlキーとFキーを同時押しなすと[ブラウザ](インターネット閲覧ソフト)の閲覧ページ文言検索機能がオンの状態に切り替わる。その際にインターネット閲覧ソフトの上部ないしは下部に表示されてくる文字入力ボックス内に表記の抜粋テキストの一部(たとえば、trillionであるといった一語でもいい)を入力すれば、  
[膨大な文量を含むページ内の[該当文字列]を含む箇所を一挙にジャンプ]できる。

以上やりようでもって引用部が[文献的事実]であるとのこと、すぐに確認できるようになっている —上はネット上で効率的に情報収集をするうえでの基礎となるやりように

ついでの話とはなるが、ネット上での調べものに慣れていないとの向きのための一応の案内とした—— )

[補足はここまでとしておく]

---

(長くもなったが、[事実 F]が文献的事実であることを指し示すべくも設けた **出典 (Source) 紹介の部 6** はこれにて終える)

---

■ 外挿付記としまして：ここ【典拠紹介部 7】には「長くも」の p.105 から p.114 との頁数を割いているため、以降【典拠紹介部】(従たるところ)と【指し示しの主軸たるどころ】の関係について惑われぬよう、何卒ご注意ください。と申し述べさせていただきます。

---

**出典 (Source) 紹介の部 7**



# SOURCE

## 7

次いで

[事実 G]

上の[事実 F]にて挙げた小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[SF 小説大賞ヒューゴ賞を受賞した作品を収めた傑作撰集] (英文 Wikipedia にて The Hugo Winners とのその傑作撰集のためだけの項目が設けられているその方面——サイエンス・フィクションの分野に志向性ある向き—— では著名な傑作選) にて

**The Hole Man** 『ホール・マン』 (という 1974 年初出の作品)

という作品と(原著・和訳版版双方ともに)[連続掲載]されているとの作品となる(: 中編分野のヒューゴ賞受賞作品と短編分野のヒューゴ賞受賞作品が連続掲載されるようになっていくとの式で(定例化してのかたちで)当該傑作撰体裁が定められているために、である)。

ここ([事実 G]に対する言及部)にて挙げている The Hole Man『ホール・マン』という小説作品は 一同文に文献的事実の問題として—  
[極微ブラックホールのケージ(容器)より漏れ出しての暴発を描く小説]  
となっている。

**The Hole Man**  
(1974)  
(邦題『ホール・マン』)

とのことが事実であることを示す出典を挙げておく。

その点、ここ [出典 \(Source\) 紹介の部 7](#) では

---

著名傑作選にまつわる英文ウィキペディア[The Hugo Winners ]の(概説がなされている)解説項目

および

英文ウィキペディア[ The Hole Man ]の(概説がなされている)解説項目

および

『世界 SF 大賞傑作選 8』(講談社刊／原題は The Hugo Winners Volume 3)に収録されている The Hole Man (邦題)『ホール・マン』掲載部内容

および

**The Hole Man** 原著英語文言

---

を出典資料として挙げておく。

それでは以下、基本的なところとしてそこよりの引用からなしはじめるが、現行、ウィキペディア[ The Hugo Winners ]項目には現行、以下の通りの記載がなされている。

(直下、英文 Wikipedia[ The Hugo Winners ]解説項目よりの引用をなすとして)

---

The Hugo Winners was a series of books which collected science fiction and fantasy stories that won a Hugo Award for Short Story, Novelette or Novella at the World Science Fiction Convention between 1955 and 1982. Each volume was edited by Isaac Asimov, who wrote the introduction and a short essay about each author



featured in the book.

(訳として)

「書籍[ヒューゴ・ウィナーズ]とは[1955年から1982年の間にての世界サイエンス・フィクション・コンベンション(国内でもその方面の趣味人・好事家らにワールドコンとして認知されているとのSF大会)にてノミネートされた短編・中編・中長編・長編のヒューゴ賞を受賞したサイエンス・フィクション作品およびファンタジー作品を収録しているシリーズ化した書籍]のことを指す。それぞれの巻は同書にて呼び物となっている著作らにつき紹介と寸評を加えていたアイザック・アシモフにて編集されていた(との体裁をとっていた)」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

同じくもの英文 Wikipedia[ The Hugo Winners ]項目にてはその収録作品目録も掲載されており、Volume 3 と付された部にて(第三十三回目の一九七五年メルボルンにての世界 SF 大賞受賞作品として)次の作品らが掲載されている。

(続けもして直下、上と同じくもの英文 Wikipedia[ The Hugo Winners ]解説項目にあつての[書誌情報]についての記載よりの引用をなすとして)

---

1975: 33rd Convention, Melbourne

13--A Song for Lya by George R. R. Martin (novella)

14--Adrift Just Off the Islets of Langerhans: Latitude 38° 54' N, Longitude 77° 00' 13" W by Harlan Ellison (novelette)

15--The Hole Man by Larry Niven (short story)

「1975年第33回メルボルン大会

(13) R. R. マーティン著『ライアへの賛歌』(中長編分野受賞作品)

(14) ハーラン・エリソン著『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(中編分野受賞作品)

(15) ラリー・ニーヴン著『ホール・マン』」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする —※— )

(※尚、The Hugo Winners Volume 3 については —原著を直に手に取らなくとも同じくもの英文 Wikipedia のチェックにて— 理解いただけるであろうところとして

[1970年から1975年にかけてのヒューゴ賞受賞作品]

として計15作品を収録した撰集となっている。

ここにて問題視しているのはその計15作品のうちの1975年にあつてのヒューゴ賞受賞作品ら、14番目の掲載作品(1974年初出)と15番目の掲載作品(1974年初出)の関係性となる。それにつき補足しておくべきととらえることとして、国内で邦訳を見ている The Hugo Winners Volume 3 の邦題『世界SF大賞傑作選8』(講談社刊)は —原著をより細かくも分冊化して邦訳刊行しているとのものである関係上— 巻数と同様、掲載作品の数にも違いが

あるとのものとなっている(ただし、問題となる作品のアイザック・アシモフ・コメントを挟んでの連続掲載に異動はない)

上もてサイエンス・フィクション分野にあつて著名な賞の受賞態様上、特定傑作選にて **Adrift Just Off the Islets of Langerhans: Latitude 38° 54' N, Longitude 77° 00' 13" W** 『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(先の[事実 F]の出典紹介部 —[出典(Source)紹介の部 6]— にて [CEERN の 15 兆電子ボルト加速器] というものを登場させている作品であることを示した小説)

および

**The Hole Man** 『ホール・マン』

との作品が連結掲載されていることを理解いただけたか、と思うのだが、次いで、

『ホール・マン』

という作品が

[極微ブラックホールのケージ(容器)より漏れ出しての暴発を描く小説]

であることを指し示すこととする。

それについてはまずもってウィキペディア程度の媒体からの引用をなすこととする(そのうえで細かくもの訳書・原著よりの引用をなす)。

(直下、英文 Wikipedia [ The Hole Man ] 解説項目にあつての現行の記載を引用するとして)

---

"The Hole Man" is a short story by American writer Larry Niven. It won the Hugo Award for Best Short Story in 1975.

[ . . . ]

One scientist believes that at the center of the device is a tiny black hole, but his superior does not believe him. During a heated argument with his superior, the scientist turns off the containment field, releasing the black hole.

(訳として)

『ホール・マン』は米国人作家ラリー・ニーヴンによる短編小説である。同作は 1975 年、ヒューゴ賞短編賞を受賞している。

…(中略)…

(同作のあらすじとしては)その上役は信じていないことだったが、ある科学者が(火星での異星人遺構にて発見された)装置の中枢に極微ブラックホールが収納されていると信じていた(との粗筋が展開する)。上役との議論が加熱して煮詰まつての折、同科学者はその装置の防護壁を無効化、ブラックホールを開放してしまうことになる。

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上の通りの内容が見てとれることを示す該当文物それ自体よりの引用をなしておくこととする。

(直下、日本国内で刊行された『世界 SF 大賞傑作選 8』の p.262 – p.263、『ホール・マン』掲載部よりの中略なしながらももの掻い摘まんでの引用をなすとして)

---

彼は重力波通信機を蔽っている防護パネルをはずし終えたところだった。中から現れたものは、ある点ではコンピューターの一部のようにみえるが、だいたいのところは電磁コイルによく似ており、異星人のタイプライターとおぼしいボタンの四角い列があった。リアは電磁誘導センサーを使って、絶縁をはがさずに配線をたどろうとしていた。

…(中略)…

「リア、あんたはその中に、量子ブラックホールがあるっていったね。量子ブラックホールって何だい?」

…(中略)…

「縮潰した恒星はブラックホールを残す」とリア。「銀河系全体が縮潰すれば、もっと大きなブラックホールができるだろう。だが、現在では、ブラックホールのできかたは、これだけしかない」「というと?」

---

(ここまでをもって問題となる一パートの訳書よりの引用部とする)

(続けて直下、上にて訳書表記を引いたところの原著表記の方の引用をなすとして)

---

He'd almost finished dismantling the protective panels around the gravity wave communicator. What showed inside looked like parts of a computer in one spot, electromagnetic coils in most places, and a square array of pushbuttons that might have been the aliens' idea of a typewriter.

[ . . . ]

"Lear, you mentioned quantum black holes back there. What's a quantum black hole?"

[ . . . ]

"A collapsing star can leave a black hole," said Lear. "There may be bigger black holes, whole galaxies that have fallen into themselves. But there's no other way a black hole can form, now."

"So?"

---

(ここまでをもって問題となる一パートの原著よりの引用部とする)

(直下、日本国内で刊行された『世界 SF 大賞傑作選 8』の p.264 – p.265、『ホール・マン』掲載部より中略なしながらも掻い摘まんでの引用をなすとして)

---

「ある時期には、あらゆるサイズのブラックホールが形成され得たことがあるんだ。膨張宇宙がはじまる『大爆誕(ビッグ・バン)』のときさ、その爆発の力で、局所的な物質の小さな渦が、シュワルツシルド半径をこえて圧縮された。そこでできたもの——とにかく、中でもとくに小さいやつ——を、量子ブラックホールというんだ」  
…(中略)…

「そいつの大きさはどのくらいなんだ?つまみあげて、あんたに投げつけられるくらいかね?」

「あんたのほうがのみこまれちまうだろうよ」ときびしい口調で、リアは答えた。

「地球ほどの質量をもったブラックホールは、さしわたし一センチかそこらだ。いや、いま話していたのは、十のマイナス五乗センチメートルくらいからのやつさ。太陽の中にも、ひとつくらいあるかも——」

…(中略)…

「そう、質量十の十七乗グラム、直径十のマイナス十一乗センチくらいかな。それだと、一日に数個の原子をのみこむことになる」

…(中略)…

「小惑星の内部にも、量子ブラックホールがあるかもしれん。小型の小惑星でも、とくに量子ブラックホールが帯電していれば、容易にとらえることができる。ごぞんじのとおり、ブラックホールは、電気を帯びる場合が——」

…(中略)…

「もし帯電していなかった帯電させて、電磁場で操作するんだ。振動させれば重力放射をつくりだせる。この中にも、ひとつあるはずなんだ」異星人の通信機をたたいてみせながら、彼はいった。

…(中略)…

一週間のうちに、基地の全員が、リアのことを「ホール・マン」とよぶようになった。頭の中にブラックホールのある「穴男(ホール・マン)」というわけだ。

---

(ここまでをもって問題となる一パートの訳書よりの引用部とする)

(続けて直下、上にて訳書表記を引いたところの原著表記の方の引用をなすとして)

---

There was a time when black holes of all sizes could form. That was during the Big Bang, the explosion that started the expanding universe. The forces in that blast could have compressed little local vortices of matter past the Schwarzschild radius. What that left behind -- the smallest ones, anyway -- we call quantum black holes.

[ . . . ]

He called, "Just how big a thing are you talking about? Could I pick one up and throw it at you?"

"You'd disappear into one that size," Lear said seriously. "A black hole the mass of the Earth would only be a centimeter across. No, I'm talking about things from  $10^{-5}$  grams on up. There could be one at the center of the Sun -- "

[ . . . ]

"Say,  $10^{17}$  grams in mass and  $10^{-11}$  centimeters across. It would be swallowing a few atoms a day."

[ . . . ]

"There could be quantum black holes in asteroids. A small asteroid could capture a quantum black hole easily enough, especially if it was charged; a black hole can hold a charge, you know -- "

[ . . . ]

"You put a charge on it, if it hasn't got one already, and then you manipulate it with electromagnetic fields. You can vibrate it to make gravity radiation. I think I've got one in here," he said, patting the alien communicator.

[ . . . ]

Within a week the whole base was referring to Lear as " the Hole Man," the man with the black hole between his ears.

---

(ここまでをもって問題となる一パートの原著よりの引用部とする)

(※補足:筆者自身にも過てる予断を一時期惹起させたところてして上にあっては

「地球ほどの質量をもったブラックホールは、さしわたし一センチかそこらだ。いや、いま話していたのは、十のマイナス五乗センチメートルくらいからのやつさ。太陽の中にも、ひとつくらいあるかも——」 **A black hole the mass of the Earth would only be a centimeter across. No, I'm talking about things from  $10^{-5}$  grams on up. There could be one at the center of the Sun**

との表記がなされている。が、についてはさしわたし(「直径」centimeter across)ではなく地球は「半径」0.9cm 以下に圧縮する(シュヴァルツシルト「半径」Radius が 0.9 センチとなる質量の天体として「半径」0.9cm 以下に圧縮する)とブラックホールになるとのところがより正確な表現であるようである —— 地球をブラックホールにするとどれくらいのブラックホールになると想定されるか、とのことについての言われようの紹介は後の段にてもなす—— )

(直下、日本国内で流通の『世界 SF 大賞傑作選 8』の p.270—p.271、『ホール・マン』掲

「ぼくのミスだ」査問が開かれたとき、リアは語った。「あのボタンにふれちゃいけなかったんだ。あれで、質点をささえている場のスイッチが切れたのにちがいない。で、それは落下した。その下に、チルドレイ船長がいたというわけだ」

…(中略)…

「いや。正確にはそうじゃない」とリア。「ぼくの推測だが、あの質量は十の十四乗グラムくらいだ。とすると、直径は、十のマイナス六乗オングストローム、原子よりずっと小さい。吸収はたいしたことはない。チルドレイを殺したのは、その質量が通りぬけたときの潮汐作用なんだ。床の物質が粉になって穴につまっていたね」リアは肩をすくめ、首をふった。「何による殺人だい？あの中にブラックホールがあるなんて、チルドレイは信じてもいなかった。あんたたちも、似たようなもんだ」唐突に、にやりと笑った。「裁判がどんなものになるか、考えてみるよ。検事が陪審団に、この次第に関する自分の考えを説明するところを想像するんだ。それにはまず、ブラックホールについて話さなきゃならない。つぎに量子ブラックホール。それから、兇器が発見できない理由、それが火星の中をつきぬけて動きまわっていることを、説明しなくちゃならないんだぜ！そこへいくまでに、笑いとばされて法廷からおん出されずにすんだとしても、その上さらに、原子よりも小さなそんなものがどうして人を殺せるのかということ、説明しなくちゃならないんだ！」

…(中略)…

それでおしまいだった。裁判が成立するみこみはない。並みの裁判官や陪審団に、検事側の話を理解させることなど、できっこないからだ。このまま明るみに出ずに終わる事実も、二、三あることだろう。

---

(ここまでもって問題となる一パートの訳書よりの引用部とする)

(続けて直下、上にて訳書表記を引いたところの原著表記の方の引用をなすとして)

---

"I made a mistake," Lear told the rest of us at the inquest. "I should never have touched that particular button. It must have switched off the fields that held the mass in place. It just dropped. Captain Childrey was underneath."

[ . . . ]

"No, not quite," said Lear. "I'd guess it massed about  $10^{14}$  grams. That only makes it  $10^{-6}$  Angstrom across, much smaller than an atom. It wouldn't have absorbed much. The damage was done to Childrey by tidal effects as it passed through him. You saw how it pulverized the material of the floor."



Lear shrugged it off. "Murder with what? Childrey didn't believe there was a black hole in there at all. Neither did many of you." He smiled suddenly. "Can you imagine what the trial would be like? Imagine the prosecuting attorney trying to tell a jury what he thinks happened. First he's got to tell them what a black hole is. Then a quantum black hole. Then he's got to explain why he doesn't have the murder weapon, and where he left it, freely falling through Mars! And if he gets that far without being laughed out of court, he's still got to explain how a thing smaller than an atom could hurt anyone!"

[ . . . ]

Obviously there would be no trial. No ordinary judge or jury could be expected to understand what the attorneys would be talking about. A couple of things never did get mentioned.

---

(ここまでもって問題となる一パートの原著よりの引用部とする)

(直下、日本国内で刊行された『世界 SF 大賞傑作選 8』の p.272 - p.273、『ホール・マン』掲載部よりの中略なしながらももの掻い摘まんでの引用をなすとして)

---

いま、ブラックホールは、もうあの中にはない。通信機の質量を測ればブラックホールの質量が得られる」

「ああそうか」

「それから、あの機械を切りひらけば、中がどうなってるかがわかる。どうやって操作したのかもね。ちえっ、ぼくがいま六つの子供だったらなあ」

「え?どうして?」

「いや.....おしまいまで見とどけたいんだよ。数字など、あてにはならん。数年後か、数世紀後かわからないが、地球と木星のあいだにブラックホールができる。こいつは大きいから研究は容易だ。まあ、あと四〇年といったところか」

そのことばの意味に気づいたとき、ぼくは笑ったらいいのか叫んだらいいのかわからなかった。

...(中略)...

食えば食うほど大きくなり、体積は質量の三乗に比例してふえる。おそかれ早かれ、あいつは火星をのみこんでしまうんだ。そのときには、直径一ミリメートル弱ぐらいに成長しているだろう。肉眼で見えるぐらいの大きさだ」

---

(ここまでもって問題となる一パートの訳書よりの引用部とする)

(続けて直下、上にて訳書表記を引いたところの原著表記の方の引用をなすとして)

---

Now the black hole isn't in there anymore.I can get the mass of the black hole by taking the mass of the communicator alone."

"Oh."

"And I can cut the machine open, see what's inside. How they controlled it. Damn it, I wish I were six years old."

"What? Why?"

"Well ... I don't have the times straightened out. The math is chancy. Either a few years from now, or a few centuries, there's going to be a black hole between Earth and Jupiter. It'll be big enough to study. I think about forty years."

When I realized what he was implying, I didn't know whether to laugh or scream.

[ . . . ]

"Well, remember that it absorbs everything it comes near. A nucleus here, an electron there ... and it's not just waiting for atoms to fall into it. Its gravity is ferocious, and it's falling back and forth through the center of the planet, sweeping up matter. The more it eats, the bigger it gets, with its volume going up as the cube of the mass. Sooner or later, yes, it'll absorb Mars. By then it'll be just less than a millimeter across. Big enough to see."

---

(ここまでをもって問題となる一パートの原著よりの引用部とする)

これにて問題となる小説が

**[極微ブラックホールのケージ(容器)より漏れ出しての暴発を描く小説]**

であることを 一原著および訳書よりの(中略しながら掻い摘まんでの)原文引用を通じて 一 指し示した。

( [事実 G] —— 小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』と賞の受賞態様および傑作撰体裁からなるべくもして連続掲載されているとの『ホール・マン』という小説作品が [極微ブラックホール暴発を描く小説] となっていること —— が文献的事実であることを指し示すべくも設けた **出典(Source) 紹介の部 7** はここまでとする)

---

次いで、[事実 H] が [記録的事実] としてはきとそこに実在していることを示すための **出典(Source) 紹介の部 8** に入る。



# SOURCE

## 8

ここ **出典(Source)紹介の部 8** には、

### [事実 H]

上の [事実 F] と [事実 G] の摘示 (容易に後追いできるとの該当部引用による摘示) によって

[15兆電子ボルトの CEERN (CERN ならぬ CEERN) の粒子加速器を登場させている小説] ([事実 F] の言及部にて挙げた小説)

[極微ブラックホールの暴発を描く小説] ([事実 G] の言及部にて挙げた小説)

が著名な米国 SF 賞を受賞した SF 傑作選の中で (そうなるべくも定例化しての当該傑作撰体裁が定められているため) 連結させられていると示すことができるようになっているわけであるが、取り上げての小説の間には [「配置面」(「連続掲載」との配置面) 以外の連結関係] が成立しもしている。

その点、[事実 F] に対する言及部に挙げた小説 (『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』) の主人公は作中、ラリィ「Larry」との愛称 (通称) で頻繁に呼称され、その主人公の正式の姓はローレンス (Lawrence) であるとの設定が採用されている。

他面、[事実 G] の言及部にて問題視した小説 (『ホール・マン』) の作者たる SF 作家の愛称 (通称) はラリィ「Larry」であり、その正式名称はローレンス (Laurence) であるとのことが存する。

とのことにまつわる出典を挙げておく。

その点、表記のこの出典としては

---

---

『世界 SF 大賞傑作選 8』(講談社刊／原題 The Hugo Winners Volume 3) に収録されている **Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N, Longitude77°00'13W** (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』小説本編

および

英文 Wikipedia[ **Larry Niven** ]項目

---

---

を挙げておくこととする。

それでは指し示しに入る。

(直下、日本国内で刊行された『世界 SF 大賞傑作選 8』の p.223、『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』掲載部よりの原文引用をなすとして)

---

住みこみ天才科学者のおかげでスーパー加速器建設レースの先頭を切る CEERN が、その確たる事実をかみしめて満足にひたっているころ、当のヴィクトルは彼のもっとも古くからの親友にむかい、いかにして死の安らぎをさずけるか、いかにしてロレンス・タルボットがおのれの魂を見いだすか、いかにしてタルボットが道あやまたずおのれの体内に侵入できるかを説明していた。

---

(ここまでもって問題となるパートの訳書よりの引用部とする —※— )

(※上の抜粋部は問題となる小説の主人公のフルネームがローレンス・タルボット [ Lawrence Talbot ] であることが示されている。ちなみにそちら問題となる小説の主人公姓名綴りの問題についても言及すべくも上の引用部の原著記載部も引用しておくが(原著記載部もインターネット・アーカイブのような媒体で現行オンライン上より確認可能となっていること、先述なしている)、そこにては “ **While CEERN basked in the warmth of secure knowledge that their resident genius was keeping them in front in the Super Accelerator Sweepstakes, Victor was briefing his oldest friend on the manner in which he would gift him with the peace of death; the manner in which Lawrence Talbot would find his soul; the manner in which he would precisely and exactly go inside his own body.** ” と表記されている、主人公の名称綴りとして [ **Lawrence Talbot** ] との表記がなされている)

(※他面、フルネームが[ロレンス・タルボット]であるとのそちら主人公についてその略称名が[「ラリー」・タルボット]であることについては[事実 F]の部で紹介した書籍内記述がそのことを指し示している。

(再度の引用をなすとして)

「よく勉強したものだな！十五兆電子ボルトだ。何もかもお見通しじゃな

いか、え、ラリー?) (原著表記 ; “ **You have been reading up, haven't you! Fifteen trillion electron volts. There's simply no keeping secrets from you, is there, Larry?** ” )  
とのかたちにて、である)

次いで、ウィキペディアにての作家情報記載部の内容を引いておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia [ Larry Niven ] 項目よりの引用をなすとして)

---

Laurence van Cott Niven ( born April 30, 1938 ) is an American science fiction author. His best-known work is Ringworld (1970), which received Hugo, Locus, Ditmar, and Nebula awards.

(訳として)

「 Laurence van Cott Niven ローレンス・ヴァン・コット・ニーヴン (一九三八年四月三〇日生) はアメリカのサイエンス・フィクション作家となる。同ニーヴンの最もよく知られた作品はヒューゴー賞、デイトマー賞、ネビュラ賞を受賞している『リングワールド』(一九七〇年初出)となる」

---

(引用部はここまでとする 一※一 )

(※典拠が挙げられていない話が含まれ、かつ、書き手主観が過度に介在する可能性があるとのマイナスの特質をも伴っているウィキペディアのようなものから過度に引用をなすのは問題であるとの見方もあろうが(当然である)、多数の書籍で紹介されている著名作家(米国にての著名なSF作品賞、ヒューゴ賞を1967年、1971、1972年、1976年に受賞しているとの作家ラリー・ニーヴン)の基本的来歴部といった[争いのない項目]については Wikipedia の記載を引くだけで十分ではあろうととらえている)

(※上のようなかたちで Larry Niven との作家のフルネームが Laurence van Cott Niven であると紹介されていることを呈示したことにて問題となることの指し示しをなし終えたことになる、と述べられるところであろう。すなわち、撰集にて連続掲載がなされている([事実G][出典(Source)紹介の部7])との問題となる小説らのうち片方(主人公の正式名称・略称が Lawrence (Larry) となっている一方の小説『ランゲルハンス島沖を漂流中』)に対してのもう片方の小説(『ホール・マン』)の作者の正式名称・略称が Laurence (Larry) となっていることの指し示しはなし終えたことになる、と述べられるところであろう(尚、Lawrence と Laurence では綴りが一字だけ違うが発音・語感は共通の名であると述べてよいところである。また、Larry Niven が連結小説の片方(『ホール・マン』)の作者であることについては上にて引き合いにだしている英文 Wikipedia [ Larry Niven ] 項目にも “ In addition to the Nebula

award in 1970[3] and the Hugo and Locus awards in 1971[4] for Ringworld, Niven won the Hugo Award for Best Short Story for "Neutron Star" in 1967. He won the same award in 1972, for "Inconstant Moon", and in 1975 for "The Hole Man". ”との形で紹介されている) )

以上、引用なしてきたことでもって

[事実 H]

上の [事実 F] と [事実 G] の摘示 (容易に後追いできるとの該当部引用による摘示) によって

[15兆電子ボルトの CEERN (CERN ならぬ CEERN) の粒子加速器を登場させている小説] ([事実 F] の言及部にて挙げた小説)

[極微ブラックホールの暴発を描く小説] ([事実 G] の言及部にて挙げた小説)

が著名な米国 SF 賞を受賞した SF 傑作選の中で (そうなるべくも定例化しての当該傑作撰体裁が定められているため) 連結させられていると示すことができるようになっているわけであるが、取り上げての小説の間には [「配置面」(「連続掲載」との配置面) 以外の連結関係] が成立しもしている。

その点、[事実 F] に対する言及部に挙げた小説 (『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』) の主人公は作中、ラリー「Larry」との愛称 (通称) で頻繁に呼称され、その主人公の正式の姓はローレンス (Lawrence) であるとの設定が採用されている。

他面、[事実 G] の言及部にて問題視した小説 (『ホール・マン』) の作者たる SF 作家の愛称 (通称) はラリー「Larry」であり、その正式名称はローレンス (Laurence) であるとのことが存する。

とのことの指し示しに事足りるところはないであろうと揚言する。

([事実 H] が文献的事実であることを示すべくも設けた **出典 (Source) 紹介の部 8** はここま  
でとする)





# SOURCE

## 9

続いて、

[事実 I]

[事実 F] の部にてその名を挙げた小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W* (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[欧州の加速器運営機関 (CERN ならぬ CEERN などと呼称される 15TeV 加速器を運用する機関) のビーム照射装置でもって [自らを縮退させての極小の分身] をホログラム上に造り出した主人公がそちら分身を己の [「底無し」]「黒々とした」「渦を巻く」へそ] に落とし込み、もって、己の魂に引導を渡させるとの粗筋の作品]

「とも」になっている。

とのことにまつわる出典を挙げておく。

(直下、日本国内で刊行された『世界 SF 大賞傑作選 8』の p.224 - p.225、『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』掲載部よりの原文引用をなすとして)

「答えは、二段がまえになっている。まず最初は、きみの完全な分身を創らなければならない。実物のきみより何万分の一、何百万分の一も小さなやつだ。つぎに、それを実体化させる。イメージを、内容のある物質的なもの、実在するものに変えるんだ。きみの実存のすべて、きみのあらゆる記憶、あらゆる知識をそなえたミニチュアのきみだ」

…(中略)…

ヴィクトルは一瞬鼻白み、どこかやましげな真剣な表情にかえると先を続けた。「問題の前半は、ここで開発したグレーザーで解決する。きみのホログラムを撮るんだ。波長には、電子ではなく、原子核から出たものを使う。レーザーのそれより百万分の一も短くて、解像力の大きい波長だ」

…(中略)…

二台のグレーザーがガラス板の中心に狙いを定めている。「来てみる」

…(中略)…

「マイクロホログラム・プレートだ」と、ヴィクトル。「集積回路より小さい。その中に、きみの生命をばっちりとらえる。百万分の一かそこらに縮めて、細胞一つぐらいの大きさだな、赤血球ぐらいかもしれん」

…(中略)…

年配の女性技術者がグレーザーの狙いを定めると、メカニズムが所定の位置にはまりこむようなかすかな音がし、ついでヴィクトルがいった、「そうだ、ラリー、よし」

---

(ここまでもって問題となる一パートの訳書よりの引用部とする)

(さらに続けて直下、上の訳書よりの引用部と対応する原著 *Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W* にての表記をも「オンライン上より確認できるところとして」引用なすとして)

---

“The answer to your problem is in two parts. First, we have to create a perfect simulacrum of you, a hundred thousand or a million times smaller than you, the original. Then, second, we have to actualize it, turn an image into something corporeal, material, something that exists. A miniature you with all the reality you possess, all the memories, all the knowledge.”

[ . . . ]

Victor hesitated a moment, securing his position of seriousness with a touch of free-floating guilt, then went on, “The first part of the problem is solved by using the grasers we’ve developed. We’ll shoot a hologram of you, using a wave generated not from the electrons of the atom, but from the nucleus...a wave a million times shorter, greater in resolution than that from a laser.”

[ . . . ]

in the middle of the lab, grasers trained on its center. “Come here.” Talbot followed him.

[ . . . ]

Microholographic plate,” Victor said. “Smaller than an integrated chip. That’s where we capture your spirit, white-eyes, a million times reduced. About the size of a single cell, maybe a red corpuscle.”

[ . . . ]

The older of the female technicians aimed the graser at him, there was

a soft sound Talbot took to be some mechanism locking into position, and then Victor said, “All right, Larry, that’s it.”

---

(以上、([具体的確認方法]も先述なしたように)表記英文テキストを検索エンジン上にて検索することで問題となる箇所を特定できるようになっている(文献的事実の問題を確認できるようになっている)との原著原文テキストよりの引用とした)

(※尚、上記引用部にては

“Victor hesitated a moment, securing his position of seriousness with a touch of free-floating guilt, then went on, “The first part of the problem is solved by using the grasers we’ve developed.” [ヴィクトルは一瞬鼻白み、どこかやましげな真剣な表情にかえると先を続けた。「問題の前半は、ここで開発したグレーザーで解決する。きみのホログラムを撮るんだ(以下略)]

との表記が見てとれるが、そこにての表記に見るヴィクトル Victor とは [CEERN(実在の加速器実験実施機関の CERN ではない)の看板科学者にして主導者]

との設定のキャラクターとなり、そのヴィクトル曰くの [ここで開発した] との表記に見る [ここ] とは

[CEERN]

のことを指す。

については先にての [事実 F] にまつわる [出典\(Source\) 紹介の部 6](#) にあって

(原著表記として) “ **CERN had had Dahl and Wideroe and Goward and Adams and Reich; CEERN had Victor. It balanced . He could call the tune. [ . . . ] Only seventy per cent of the experiments conducted in the underground laboratory were devoted to projects sponsored by CEERN. One hundred per cent of the staff of Victor's complex were personally committed to him, not to CEERN, not to the Eastern Bloc, not to philosophies or dogmas ... ”**

(訳書表記として) CERN は、ダール、ヴィドレー、ゴワード、アダムズ、ライヒをこれまで抱え、CEERN にはヴィクトルがいた。それでバランスはとれていた。ヴィクトルは自由に采配を振ることができた。…(中略)…地下研究所で行われる実験のうち、CEERN の提唱になるプロジェクトは、七〇パーセントにすぎなかった。研究スタッフの百パーセントは、ヴィクトルと個人的につながっていた。CEERN でも東欧ブロックでもなければ、哲学やドグマでもない……ヴィクトルその人への忠誠である

との記述を引いていたとおりである)

(問題となる作品の該当部引用を続ける)

(直下、日本国内で刊行された『世界 SF 大賞傑作選 8』の p.229 よりの原文該当部引用をなすとして)

---

ロレンス・タルボットは顕微鏡の前に行き、ノブを調整すると、金属柱のつややかな先端をのぞいた。そこには、彼自身が完全な姿のまま無限に縮小されて彼自身を見上げていた。

…(中略)…

ロレンス・タルボットは、ロレンス・タルボットのへそである巨大なクレーターのふちに立った。底無しの穴の遠い斜面では、へそのしなびた表皮が、起伏に富んだ渦をえがき、なめらかに波うちながら漆黒の闇にのみこまれている。

…(中略)…

でっぱりを乗り越え、数フィート落下し、またすべりだし、闇にむかって落下した。

---

(ここまででもって問題となる一パートの訳書よりの引用部とする)

(さらに続けて直下、上の訳書よりの引用部と対応する原著 Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13WL にての表記をも「オンライン上より確認できる」として)引用をなすとして)

---

Lawrence Talbot went to the microscope, adjusted the knob till he could see the reflective surface of the spindle, and saw himself in infinitely reduced perfection staring up at himself.

[ . . . ]

Lawrence Talbot stood at the lip of the huge crater that formed Lawrence Talbot's navel. He looked down in the bottomless pit with its atrophied remnants of umbilicus forming loops and protuberances, smooth and undulant and vanishing into utter darkness.

[ . . . ]

He slid down, rode over an outcropping, dropped a few feet and slid again, tobogganing into darkness.

---

(以上、([具体的確認方法]も先述なしたように)表記英文テキストを検索エンジン上にて検索することで問題となる箇所を特定できるようになっている(文献的事実の問題を確認できるようになっている)との原著原文テキストよりの引用とした)

(※上抜粋部は

[CEERN(作中、[15兆電子ボルト加速器を運用する組織体]として目立って紹介されている、CERNをモチーフとしての架空の組織)の運用するビーム発射装置で主人公ロレンス・タルボットことラリー・タルボットが[何百万分の一へと圧縮された自身の分身]を造り上げられ、その分身が[底無しの][渦を描く][黒々とした]同タルボットの臍(へそ)の穴へと投入されるとい

う局面を描いている]

とのものである。その点、原著原文では(上の邦訳版よりの原文引用部たる)「ロレンス・タルボットは、ロレンス・タルボットのへそである巨大なクレーターのふちに立った。底無しの穴の遠い斜面では、へそのしなびた表皮が、起伏に富んだ渦をえがき、なめらかに波うちながら漆黒の闇にのみこまれている」との部につき、“ Lawrence Talbot's navel. He looked down into **the bottomless pit** with its atrophied remnants of umbilicus **forming loops** and protuberances, smooth and undulant and vanishing into **utter darkness.**” との表記がなされている)

ここまでの引用部でもって

[事実 I]

[事実 F]の部にてその名を挙げた小説 Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[欧州の加速器運営機関 (CERN ならぬ CEERN などと呼称される 15TeV 加速器を運用する機関) のビーム照射装置でもって [自らを縮退させての極小の分身] をホログラム上に造り出した主人公がそちら分身を己の [「底無しの」「黒々とした」「渦を巻く」へそ] に落とし込み、もって、己の魂に引導を渡させるとの粗筋の作品]

「とも」なっている。

とのことが[文献的事実][記録的事実]であることを(必要十分であろうとのかたちにて)指し示した。

(**出典 (Source) 紹介の部 9** はここまでとする。続いての頁では今までそれらが文献的事実であることを示すのに注力してきたことら — [事実 F] から [事実 H] — よりさらに一歩進んでところで何が述べられるのか、その指し示しに注力することとする)

---

直前頁までにて、(既に典拠示してきた[事実 A]から[事実 E]に加えてのものとして)、

[ [事実 F] から [事実 I] ]

と振ってのことら、すなわち、以下のことらが文献的事実・記録的事実となっていることの典拠を

仔細に挙げてきた。

(本稿筆者が非常に問題視しているところとして次のような各事実がそこにある)

[事実 F]

1974年に初出を見た極めて長きタイトルの SF 小説作品として、

**Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W**  
(邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』

という作品が存在している。

同作、1975年、米国の権威あるサイエンス・フィクション分野の賞として認知されているヒューゴ賞 Hugo Award を(同賞が長編・中長編(ノベラ)・中編(ノベレット)・短編と受賞分野が語数によって分たれている中で)[中編 Novelette 分野]にて受賞した作品となっている。

その小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は作中、

[15兆電子ボルトの CEERN(CERNならぬ CEERN)の粒子加速器]  
なるものを登場させている、とのものである。

**Adrift Just off the Islets of  
Langerhans:Latitude 38°54'N,  
Longitude 77°00'13W  
(1974)**

(邦題『北緯38度54分、西経77度0分  
13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)

[事実 G]

上の[事実 F]にて挙げた小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[SF 小説大賞ヒューゴ賞を受賞した作品を収めた傑作撰集](英文 Wikipedia にて The Hugo Winners とのその傑作撰集のためだけの項目が設けられているその方面—サイエンス・フィクションの分野に志向性ある向き—では著名な傑作選)にて

**The Hole Man『ホール・マン』(という 1974 年初出の作品)**

という作品と(原著・和訳版版双方ともに)[連続掲載]されているとの作品となる(:中編分野のヒューゴ賞受賞作品と短編分野のヒューゴ賞受賞作品が連続掲載されるようになっていたとの式で(定例化してのかたちで)当該傑作撰体裁が定められているた



めに、である)。

ここ([事実G]に対する言及部)にて挙げている The Hole Man『ホール・マン』という小説作品は 一同文に文献的事実の問題として—  
[極微ブラックホールのケージ(容器)より漏れ出しての暴発を描く小説]  
となっている。



[事実H]

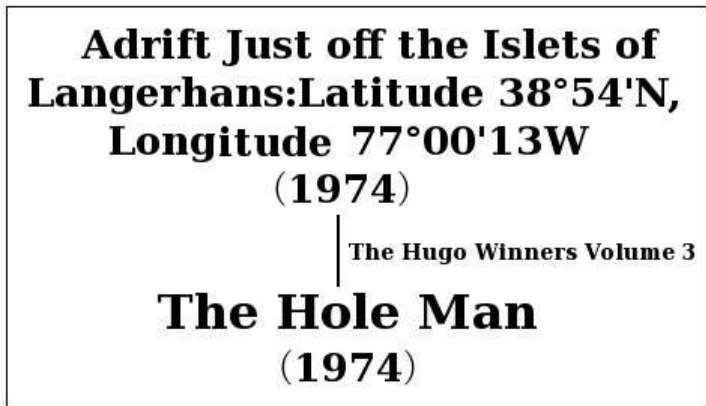
上の[事実F]と[事実G]の摘示(容易に後追いできるとの該当部引用による摘示)によって

[15兆電子ボルトのCEERN(CERNならぬCEERN)の粒子加速器を登場させている小説]([事実F]の言及部にて挙げた小説)  
[極微ブラックホールの暴発を描く小説]([事実G]の言及部にて挙げた小説)

が著名な米国 SF 賞を受賞した SF 傑作選の中で(そうなるべくも定例化しての当該傑作撰体裁が定められているため)連結させられていると示すことができるようになって  
いるわけであるが、取り上げての小説の間には  
[「配置面」([連続掲載]との配置面)以外の連結関係]  
が成立しもしている。

その点、[事実F]に対する言及部に挙げた小説(『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)の主人公は作中、ラリー「Larry」との愛称(通称)で頻繁に呼称され、その主人公の正式の姓はローレンス(Lawrence)であるとの設定が採用されている。

他面、[事実G]の言及部にて問題視した小説(『ホール・マン』)の作者たる SF 作家の愛称(通称)はラリー「Larry」であり、その正式名称はローレンス(Laurence)であるとのことが存する。



※事実「関係」について

ここにて上の[事実 F]から[事実 H]を通じて述べられることを表記する。

[15 兆電子ボルトの CEERN (CERN ならぬ CEERN) の粒子加速器を登場させる小説] ([事実 F])

[極微ブラックホールの暴発を描く小説] ([事実 G])

が[三十三回目ヒューゴ賞中編分野受賞・短編分野受賞作品]として SF 傑作撰集の中で連続掲載されており(同[事実 G])、それら連続掲載作品らには

「一方の主人公の姓およびその愛称が他方の作品の作者の姓およびその愛称と同一である」

との関係性が成立している([事実 H])。

(上からして主観などを介在していないとの[事実]それ自体への言及にとどまる)

以上の事実関係を踏まえてさらに指摘すれば、直下、呈示のようなこと ([事実 I]) のようなこともまたある。

[事実 I]

[事実 F]の部にてその名を挙げた小説 Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[欧州の加速器運営機関(CERN ならぬ CEERN などと呼称される 15TeV 加速器を運用する機関)のビーム照射装置でもって [自らを縮退させての極小の分身] をホログラム上に造り出した主人公がそちら分身を己の [「底無し」]「黒々と渦を巻く」へそ] に落とし込み、もって、己の魂に引導を渡させるとの粗筋の作品]

「とも」なっている。

---

以上、振り返りもなしでの(仔細に典拠を挙げての証示に努めてきた)各事実らから示せる関係性がどういったものであるかにつき、さらに細かくも述べれば、

---

[15 兆電子ボルトの粒子加速器を運用する CERN ならぬ CEERN という架空の研究機関によるビーム照射によって主人公をホログラム上に投影された超マイクロサイズの分身へと圧縮して、その分身を[黒々と渦を巻く底無しの穴]に投入するとの筋立ての小説] ([事実 I] にあつてのより細かき特性)

および

[ケージより漏れ出た極微ブラックホールが惑星を呑み込むとの設定の小説] ([事

## 実I] にて言及・出典紹介の小説特性)

が1975年の「賞の受賞動態から」なるべくして問題となる撰集(アイザック・アシモフが編者を務める撰集/[事実I]の解説を参照のこと)にて連続掲載され、両者連続掲載小説間には「一方の小説主人公の作中正式呼称(ローレンス)・作中略称(ラリィ)が他方の小説の作者の正式呼称(ローレンス)・略称(ラリィ)と同一のものとなっている」との関係性も成立している

とのこと「でも」ある。

### 1974年刊行作品らに認められる "文献的事実" の問題

〔15兆電子ボルトのCEERN(CERNならぬCEERN)の粒子加速器を運用する機関によるビーム照射によって主人公をホログラム上に投影された超マイクロサイズの分身へと圧縮して、その分身を黒々と渦を巻く底無しの穴に放り込むとの筋立ての小説〕の 実在 ( : 本稿にあっての 〔出典(Source) 紹介の部6〕 および 〔出典(Source) 紹介の部9〕 にての原著および訳書よりの引用で摘示 )

七〇年代の賞の受賞態様に起因する七〇年代初出の撰集にての該当作品ら連続掲載 / 一方の小説作品の作中明示されている主人公のファースト・ネーム正式呼称と愛称がもう一方の作品の作者のファースト・ネームの正式呼称・愛称と同一となっているとの関係性の存在( : 本稿にての 〔出典(Source) 紹介の部8〕 で解説)

〔加速器の類は一切登場「しない」ものの、ケージ(容器)より漏れ出た極微ブラックホールが惑星を呑み込むとの筋立ての(上記小説作品とは別の他作家由来)小説〕の 実在 ( : 本稿にあっての 〔出典(Source) 紹介の部7〕 にての原著および訳書よりの引用で摘示 )

ここで述べれば、

[15兆電子ボルトの粒子加速器を運用するCERNならぬCEERNという架空の研究機関によるビーム照射によって主人公をホログラム上に投影された超マイクロサイズの分身へと圧縮して、その分身を[黒々と渦を巻く底無し穴]に投入するとの筋立ての小説]

という[(どうしてそういうものを出したのか、との意で)際立って奇態なるもの]は

[(小説の架空のCEERNならぬ)現実のCERNの運用する「兆単位の電子ボルトと関わる」加速器がブラックホールを生成しようとの論調が出てきたこと]

を想起させるものである——([兆単位の電子ボルトの加速器の登場]とのこと「も」,(後の段、[事実J]にまつわるところで詳述を加えていく所存ではあるが),先覚性が際立っているところとなる)—— ことも当然に問題になると申し述べたい。ブラックホールとは[黒々と渦を巻く底無し穴]であるとも述べられることを加味して、である。

ここまで述べもした段階で書くが、筆者が先行しての[事実A]から[事実E]の摘示の中で[事実E]として

[次の通りのこと]

があることを(細かくも[出典(Source)紹介の部1]から[出典(Source)紹介の部4]とのかたちで出典挙げ連ねながらものことに基づき)摘示していたことを思い出していただきたい次第ではある。

---

「研究機関は1999年(批判家ウォルター・ワグナーがその折になって初めて「加速器によってブラックホールが生成されるのではないか」と問題視しだした年)に至ってなお「[加速器によるブラックホール生成]の可能性などありえない」と発表していた(そのような発表動向から一転、1998年に公衆の知らぬところで提唱された余剰次元にまつわる理論動向の進展からブラックホール生成が肯定的に論じられるようになったのは2001年であるとされる——[事実B]にまつわるを参照のこと——)。にも関わらず、1980年初出の小説(Thrice Upon a Time『未来からのホットライン』)で[加速器によるブラックホール生成]への言及がなされていた」(「[事実A]と[事実D]の間に横たわる[事実関係]として導き出せる」こととしてそこにあることである)

「理論動向の進展を受け、肯定的に述べられるようになったブラックホール生成の可能性。そこに見るブラックホールの生成態様は「現実世界の」2001年よりの発表動向では通年単位で1000万個、先に取り上げた1980年小説Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』に見る「フィクションの」2009年から2010年の作中世界の出来事では200万個とマクロ・スケールで非常に似通ったものである」(「[事実B]と[事実D]より導き出せる」こととしてそこにあることである)

「[LHCの始動(現実世界で2008年年末に始動、2009年年末から本格稼働)に先駆けての加速器実験実施機関発の2003年報告書に見るような初期動向]としては[ホーキング輻射]をして生成ブラックホールが安全であるとの論拠として用いているのに対して1980小説「でも」ホーキング輻射がブラックホール生成元の安全であるとの言い訳として持ち出されていた旨、描かれていた——そして、それ(ホーキング輻射を用いての言い訳)が画餅であると当該小説にて描かれていた——とのことがある」

(「[事実 C] と [事実 D] より導き出せる」こととしてそこにあることである)

※上のようなことがあることにつき、本稿では、

[1998 年にはじめて提唱された理論によって導き出された新規の帰結]に基づき 2001 年より加速器によるブラックホール生成が科学界にて「肯定的に」認められだす前までは[物理学界の重鎮たるフランチェスコ・カロジェロ](世界中の科学者が結束してのラグウオッシュ会議を代表してノーベル平和賞受賞の栄に浴した理論物理学者)など権威筋、そして、ノーベル賞級の専門の一線科学者らを作成者らに含んでの加速器実験機関公式報告文書が「加速器によるブラックホール生成は単純な計算より排除できる」(それゆえ 1999 年からその可能性があるのではないかと疑義呈しだしたウォルター・ワグナーのような批判家の物言いは取り合ひに値せぬ) と強くも述べていた (うち、加速器関連報告書に関してはブラックホール生成をして狂人の妄夢の如きものとして暗に示唆する文言(パイプ・ドリーム)を含んでいもした)

とのことを 一科学界全般の論調にまつわるものとして一 取り上げている(詳しくは本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 1](#) 及び [出典\(Source\) 紹介の部 5](#) を参照のこと)。

---

以上のような事実関係が存するとのことと、(繰り返し言及なすとして)、

---

[15 兆電子ボルトの粒子加速器を運用する CERN ならぬ CEERN という架空の研究機関によるビーム照射によって主人公をホログラム上に投影された超マイクロサイズの分身へと圧縮して、その分身を[黒々と渦を巻く底無し穴]に投入するとの筋立ての小説] ([事実 I] にあつてのより細かき特性)

および

[ケージより漏れ出た極微ブラックホールが惑星を呑み込むとの設定の小説] ([事実 I] にて言及・出典紹介の小説特性)

が 1975 年の「賞の受賞動態から」なるべくして問題となる撰集(アイザック・アシモフが編者を務める撰集/[事実 I]の解説を参照のこと)にて連続掲載され、両者連続掲載小説間には「一方の小説主人公の作中正式呼称(ローレンス)・作中略称(ラリィ)が他方の小説の作者の正式呼称(ローレンス)・略称(ラリィ)と同一のものとなっている」との関係性も成立している

---

とのことが両立していることは[深刻な矛盾の問題]につながる (:[1970 年代から予見がなされていたと判断できるようになっている] ⇔ 矛盾 ⇔ [1999 年に[加速器によるブラックホール生成]がはじめて公に問題視され、その可能性は完全否定されていた. そして、2001 年より理論動向の進展を受けてとの申しようでブラックホール生成の可能性が一転、部分肯定されだした])。



## ■前世紀末葉（1999 — ）から今世紀初頭にかけての科学界論調

加速器によるブラックホール生成の可能性が「リスク」となるのではないかと研究機関部外の間人よりの質問が寄せられる（その質問の背景にあった考えが「粒子加速器が原初宇宙の高エネルギー状態を再現するとされること」と「原初宇宙には極微ブラックホールがあったとされること」に対する専門外の間人よりの推論であったと一般に説明されていることも本稿では解説している）。対して、研究機関ら（ブルックヘブン国立研究所およびCERN）は「今後実現されうるありとあらゆる粒子加速器によるブラックホール生成はありえない」との報告書を出す（：本稿では1999年における報告書らの内容（ブルックヘブン国立研究所およびCERNの報告書の内容）の原文引用 および2000年（2001年）にてのノーベル平和賞をパグウォッシュ会議を代表して受賞した物理学者フランチェスコ・カロジェロらの公衆に対する訴求を兼ねての論稿での申しようの原文引用を「出典(Source)紹介の部1」「出典(Source)紹介の部5」にてなしている）。

## ■2001年以降の新規理論に対する分析を受けての科学界の論調

余剰次元理論（1998年提唱）の発展動向を受け、同年（2001年）より權威を伴っての専門の物理学者らが「粒子加速器（LHC）による「年にして千万個単位のマイクロ・ブラックホールの生成」の可能性がある（生成されたブラックホールはホーキング輻射との現象で即時蒸発する）」との論稿を発表しだす（：本稿「出典(Source)紹介の部2」では表記のことにつき案件分析をなした米国法学者論稿よりの原文引用をなしている）。

## ■2003年以降の安全報告書にあつての明確化しての方向性

CERNが余剰次元理論によるブラックホール生成の可能性が觀念されだした件につき、「潜在的な脅威」と看做しつつも「生成ブラックホールは即時に蒸発するから安全である」と専らに主張する報告書を出す（：本稿「出典(Source)紹介の部3」では表記のことにつき2003年のCERN安全報告書よりの原文引用をなしている）。

## ■2004年以降の科学界の変節（を受けての事後の安全報告書に見る兆候）

生成ブラックホール蒸発の論拠となっている理論、ホーキング輻射に対して専門の科学者が疑義を呈しだし、ホーキング輻射の発現に広くも疑義がもたれるようになる（：本稿「出典(Source)紹介の部3」では案件の解説をなしているとの米国法学者論稿およびホーキング輻射權威（William Unruh）の変節が現われているところの同權威の手になる論文よりの抜粋をなしている）。それを受けて、加速器実験機関は従前、ストレンジレット生成問題といった問題に対する安全性論拠として報告書の中で言及していたものである「宇宙線（宇宙を飛び交う高エネルギー放射線）現象と比較しての申しよう」をブラックホール生成問題に関して「も」強くも前面に押し出すようになる。

「文献的事実」の問題として摘示できるし、本稿にて実際に出典に依拠して呈示しているとの「変節」の流れ



[背景]が問題になるとの時期的不一致  
のありようが垣間見れる。

1974年刊行作品らに認められる "文献的事実"  
の問題

[15兆電子ボルトのCEERN(CERNならぬCEERN)の  
粒子加速器を運用する機関によるビーム照射によって主  
人公をホログラム上に投影された超マイクロサイズの分身へ  
と圧縮して、その分身を黒々と渦を巻く底無しの穴に放り  
込むとの筋立ての小説]の 実在 ( :本稿にあっての  
[出典(Source) 紹介の部6] および [出典(Source)  
紹介の部9] にての原著および訳書よりの引用で摘示 )

七〇年代の賞の受賞態様に起因する七〇年  
代初出の撰集にての該当作品ら連続掲載  
／ 一方の小説作品の作中明示されてい  
る主人公のファースト・ネーム正式呼称と  
愛称がもう一方の作品の作者のファースト・  
ネームの正式呼称・愛称と同一となってい  
るとの関係性の存在( :本稿にての [出典  
(Source) 紹介の部8] で解説)

[加速器の類は一切登場「しない」ものの、ケージ (容器)  
より漏れ出た極微ブラックホールが惑星を呑み込むとの  
筋立ての (上記小説作品とは別の他作家由来) 小説]  
の 実在 ( :本稿にあっての [出典(Source) 紹介の部7]  
にての原著および訳書よりの引用で摘示 )

以上のような[矛盾]が存在していることに加えて、——「であるからこそ、」 実にもって問題  
になるとのこととして—— さらに次の [事実 J] の通りのことさえもがあることにつき把握いただき  
たい、屠所の羊であることを是とせず自身を取り巻く状況を理解したいとの意欲ある向きには  
把握いただきたい次第である。

[事実 J]

・[1974年に初出の小説の中に登場する架空のCEERNの15兆電子

ボルト ( fifteen trillion electron volts ) 加速器]は[現実世界で CERN が当時 (1974 年) にあつて運用していた加速器 (ISR と呼ばれるハドロン加速器)]よりも 200 倍超の規模のエネルギーを実現するとの [設定]のものであつた。

・[1974 年初出小説に見る 15 兆電子ボルト加速器]のような「兆」の単位に突入しての一兆電子ボルトを超える加速器の建設構想計画が[青写真]として実験機関関係者意中に持ち上がったのは(小説刊行の 1 年後との) 1975 年以降である(との加速器実験機関由来の内部資料が存在している))。

・[現在 CERN が運用する LHC]が実現しうる最大出力は[(重心衝突系エネルギー) 14 兆電子ボルト]となつており、それに比して、[1974 年に初出の小説に登場する(架空の) CERN ならぬ CEERN の 15 兆電子ボルト加速器]はたかだかも 1.07 倍程度しか強力なものにすぎない (⇒  $15\text{TeV} : 14\text{TeV} = 1.07(\dots) : 1.00$ )。そうしたかたちで 1974 年初出の加速器は出力との性能で見てもあまりにも今日の LHC に近似している(尚、兆単位の加速器の実現可能性さえ取り沙汰されなかつた往時(74 年)には LHC 計画は当然に策定さえされていなかつた)。

要するに、Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』という作品は

[往時 70 年代の CERN 運営加速器 (ISR) に比して 200 倍超も強力なる CEERN 加速器なるもの] (それは小説刊行時、構想だにされていなかつた規模の加速器であると研究機関文書にて記載されている兆単位の電子ボルト加速器ともなる)

を登場させており、かつもつて、その架空の **CEERN** 加速器なるものは

[(指数関数的に出力を増大させてきたとの加速器進化動向にあつて) 今日の LHC に比しては小数点 2 桁、数パーセントの誤差ぐらいしかないほどに出力が近似しているとのもの]

ともなつているとのことがある。

以上、[事実 J] の典拠紹介を以下、なすこととする。



# SOURCE

## 10

ここでは

[事実 J]

・[1974 年に初出の小説の中に登場する架空の CEERN の 15 兆電子ボルト ( fifteen trillion electron volts ) 加速器]は[現実世界で CERN が当時(1974 年)にあつて運用していた加速器 (ISR と呼ばれるハドロン加速器)]よりも 200 倍超の規模のエネルギーを実現するとの[設定]のものであった。

・[1974 年初出小説に見る 15 兆電子ボルト加速器]のような「兆」の単位に突入しての一兆電子ボルトを超える加速器の建設構想計画が[青写真]として実験機関関係者意中に持ち上がったのは(小説刊行の 1 年後との)1975 年以降である(との加速器実験機関由来の内部資料が存在している)。

・[現在 CERN が運用する LHC]が実現しうる最大出力は[(重心衝突系エネルギー) 14 兆電子ボルト]となっており、それに比して、[1974 年に初出の小説に登場する(架空の) CERN ならぬ CEERN の 15 兆電子ボルト加速器]はたかだかも 1.07 倍程度しか強力なものにすぎない(⇒  $15\text{TeV} : 14\text{TeV} = 1.07(\dots) : 1.00$ )。そうしたかたちで 1974 年初出の加速器は出力との性能で見ても今日の LHC に近似している(尚、兆単位の加速器の実現可能性さえ取り沙汰されなかった往時(74 年)には LHC 計画は当然に策定さえされていなかった)。

要するに、Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』という作品は

[往時 70 年代の CERN 運営加速器 (ISR) に比して 200 倍超も強力なる CEERN 加速器なるもの](それは小説刊行時、構想だにされていな

かった規模の加速器であると研究機関文書にて記載されている兆単位電子ボルト加速器ともなる)

を登場させており、かつもって、その架空の CEERN 加速器なるものは

[(指数関数的に出力を増大させてきたとの加速器進化動向にあつて)今日の LHC に比しては小数点 2 桁、数パーセントの誤差ぐらいしかないほどに出力が近似しているとのもの]

ともなっているとのことがある。

とのことにつき、各部毎に申しようが真正のものであることを示す出典を挙げておくこととする。

まずは[事実 J]を要素要素に分解してのことらのうち、

・1974 年に初出の小説の中に登場する [架空の CEERN の 15 兆電子ボルト ( fifteen trillion electron volts ) 加速器] というものは現実に CERN が当時運用していた加速器 (ISR と呼ばれる初期型ハドロン加速器) よりも 200 倍超の規模のエネルギーを実現するとの設定のものであった

とのことの出典として

---

**英文 Wikipedia [ List of accelerators in particle physics ] 項目** (和文に訳せば、[素粒子物理学にて使用の加速器一覧] 項目 (同項目、加速器としてどういうものが用いられてきたか、その運営場所 (Location) ・使用年代 ( Years of Operation ) ・出力が一覧形式でまとめられているとのものとなる)

および

**英文 Wikipedia [ Intersecting Storage Rings ] 項目**

---

の記述を引いておくこととする (先にも述べたことと多く重なることだが、次のこと、申し述べておく。「典拠が挙げられていない話が含まれ、書き手主観が過度に介入する可能性があるとのマイナスの特質も一部伴っているウィキペディアのようなものから記述内容引くのは問題であるとの見方もあるだろうが、多数の書籍で紹介されている著名事物の基本的解説部や(ここで取り上げている)巨大科学の実験装置の性質にまつわる来歴・仕様などの争いのない部については Wikipedia の記載を引くだけで十分と考えている」(※尚、ここでの話については多少補つての話も後にて追加する可能性もある))。

(直下、英文 Wikipedia [ List of accelerators in particle physics ] 項目の [一覧] 内記述より一部のみを抜粋なすとして)

---

[Accelerator] Intersecting Storage Rings [Location] CERN [Years of operation] 1971 – 1984

(訳として)

「加速器名称 Intersecting Storage Rings 所在地 CERN 運用年 1971－1984」

---

(極一部の記載のみを抽出しての引用部はここまでとする)

(直下、英文 Wikipedia[ Intersecting Storage Rings ]より原文引用をなすところとして)

---

The ISR (standing for "Intersecting Storage Rings") was a particle accelerator at CERN. It was the world's first hadron collider, and ran from 1971 to 1984, with a maximum center of mass energy of 62 GeV.

(訳として)

「 Intersecting Storage Rings の意である ISR は CERN の加速器である。同加速器、最初のハドロン型加速器で最大重心系衝突エネルギー 62GeV(620 億電子ボルト) でもってして 1971 年から 1984 年の間、運用された」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(62GeV(620 億電子ボルト)の重心衝突系エネルギーを実現していたとの Intersecting Storage Rings こと ISR は 1970 年代 CERN が運用する主力加速器であった。その点についてはオンライン上に流通している諸種資料より即座に確認可能となっていると述べておく。さて、1974 年時点の CERN が運転していた加速器 ISR の出力最大運転時の重心系衝突エネルギーは(上にての Wikipedia の抜粋部に見るように)620 億電子ボルト — 衝突させられるビームのエネルギーたる 31.5GeV の 2 倍— である。その 620 億電子ボルトの ISR に対して小説の「CEERN の加速器」は、先に原文引用なししているように、15 兆電子ボルト( fifteen trillion electron volts )とのエネルギー規模のものであると描かれ、(単純計算で導き出せるところとして 15 兆という数値が 620 億の 241.9 倍以上のものなのであるから)、小説登場の加速器は往時、実際の CERN(小説の CEERN ならぬ実際の CERN)で運転されていた加速器の 240 倍超の規模の加速器を登場させていたことになる)

これにて[事実 J]を各別に要素分解なしの中にあつての、

・1974 年に初出の小説の中に登場する [架空の CEERN の 15 兆電子ボルト ( fifteen trillion electron volts )加速器] というものは現実に CERN が当時運用していた加速器 (ISR と呼ばれる初期型ハドロン加速器) よりも 200 倍超の規模のエネルギーを実現するとの設定のものであった

とのことを指し示した。

次いで、[事実 J] にあつての

・小説の 15 兆電子ボルト加速器のような「兆」の単位に突入しての一兆電子ボルトを超える加速器の建設構想計画が[青写真]として実験機関関係者意中に持ち上がったのは 1975 年以降である

とのことの出典であるが、ここでは

---

---

フェルミ国立加速器研究所 **Fermi National Accelerator Laboratory** 関係者由来の公文書たる(表題) **Chronology:VBA (ICFA) →SSC (US-DOE)**

---

---

の内容を引いておく ( :そちら文書タイトルとなっている **Chronology:VBA (ICFA) →SSC (US-DOE)** ないし同文書のオンライン上流通版のファイル名となっている fermilab-fn-0415.pdf をグーグル検索エンジン上に入力することで特定・ダウンロードできるところの「兆単位超えの」加速器設計構想の進展を編年史形態 一年代順に出来事をまとめるとの形式— で解説しているとの公文書」をここでは問題視する。同文書、現行、その記述内容を細かくもオンライン上で問題視している向きが当方を除き「まったくくない」とのようなほとんど知られることなき文書とはなっているのだが、といった中でながら、そのタイトルの意味合いにつき解説なせば、[文書タイトル]**Chronology:VBA (ICFA) →SSC (US-DOE)** にあつて付された [VBA] とは [Very Big Accelerator ] (1970 年代中葉以降、構想されだした巨大加速器で便宜的に VBA こと Very Big Accelerator と呼称されていたもの) のことを指し、[ICFA] とは [ International Committee for Future Accelerators の略称] (世界の主要加速器研究所所長・研究代表者で構成される加速器設置構想を推進している組織体の略称/ 筆者は本稿の冒頭部より言及しているようにその日本国内の出先機関と国内行政訴訟の場でやりあつてきた) のことを指す。また、(およそ表題らしからぬ記号の羅列のような文書タイトルの意味合いについての解説を続けるとして) [同文書タイトル]**Chronology:VBA (ICFA) →SSC (US-DOE)** に見る [SSC] とは超巨大加速器たる [Superconducting Super Collider ] の略称 (レーガン政権時代に合衆国で建設認可され、クリントン政権下で大統領の継続方針にも関わらず膨大な財政支出、往時のドル換算で数十億ドルに達したとの膨大な財政支出(とすれば現時日本円で 1 兆円に迫る支出か) へ難色を示した議会が容れずに建設計画が建設途上にて頓挫したとの超巨大加速器 SSC の略称) のことを指し、**US-DOE** とは [ Department of Energy アメリカ合衆国エネルギー省] のことを指す。したがって、[業界用語] 的な語句並べ立てての分かりづらき同文書タイトルの **Chronology : VBA (ICFA) →SSC (US-DOE)** とは — [クロノロジー] が [編年史] との意となるため— 『加速器研究所所長と研究代表者で構成される組織体 ICFA による計画であつた巨大加速器 VBA 構想から合衆国エネルギー省による SSC 構想に至るまでの編年史』 と — 長つたらしくも — 言い換えられるものとなる)。

それでは以下を参照されたい。

(直下、オンライン上よりダウンロード可能となっているフェルミ国立加速器研究所由来の公文書 **Chronology:VBA (ICFA) →SSC (US-DOE)** 冒頭ページより引用をなすとして)

---

The idea of a multi-TeV (trillion electron volts) proton accelerator has been being discussed for many years. How did this concept begin?



Who first put forth the proposal of such an enormous accelerator? What is it? What physics would it do? Why now? How can this be done? Where to build it? This historical chronology links the early ideas of international collaboration with current rapidly-evolving developments of the Superconducting Super Collider, now seen as a national effort.

(補っての訳として)

「数 TeV 単位の陽子加速器を実現せんとアイディアは「ここ数年間」議論されてきた (訳注:ここにて訳出をなしている、現行、誰でもダウンロード可能となっている文書 Chronology:VBA (ICFA)→SSC (US-DOE)が世に出たのは1989年のことである 一文書第1ページに文書作成年が April 9, 1989(一九八九年四月九日)と記されている)。その折(1989年)を基準にして訳出部では「ここ数年間」と表記されているところである)。

そのような兆単位の加速器を実現せんとコンセプトがいかにして世に出たのか。誰がはじめてそのような巨大な加速器を実現する提案を前面に出したのか。本文書にあつての歴史的経緯にまつわる編年史(の呈示)は現時、国家的努力の目標物との様相を呈し、今日開発が急ピッチで進められている Superconducting Super Colliderと初期の国際的協力案を関連付けて指し示さんとのものである (訳注:ここ引用部に見る Superconducting Super Colliderとは 一上にても表記したことだが一レーガン政権時代に合衆国で認可されクリントン政権下で大統領の継続方針にも関わらず議会が膨大な財政支出へ難色を示してその継続建設を容れずに途中建設放棄された加速器 SSC のことを指す 一SSCこと[超伝導超大型加速器]については和文ウィキペディアにも一項目設けられているものとなる。その建設計画が破棄されたのはトンネルが20キロ超ですでに掘られていた1993年のことであり、文書作成時、1989年にあつては未だその完成は現実視されていた一)」

---

(補っての訳を付しての引用部はここまでとする)

(次いで、直下、**Chronology:VBA (ICFA) →SSC (US-DOE)** の4と振られたページにての[時系列順に出来事を挙げての部]の中から冒頭に25と振られた部の内容を引用するとして)

---

11/75 “1 TeV” mentioned in R. R. Wilson Physics Today editorial regarding a world laboratory.

(訳として)

「1975年11月:世界的研究機関(a world laboratory)構想に絡んで1TeVへの言及がロバート・ラスバン・ウィルソンの Physics Today(米国物理学協会が発行する会員誌)上の論説でなされた」

---

(引用部はここまでとする)

「長くなるも、」の補足として

上にて内容を引いた加速器実施機関(フェルミ国立加速器研究所)由来の公文書の表記から1975年がはじめて「1兆電子ボルト超え」がはじめて[実現目標]として明言された折柄と解されるようになっている(加速器実験機関由来の公文書に虚偽が介在しているなどとは[必要性][意味合い]から考えがたいゆえに、である)。

尚、同じくもの編年史紹介文書(Chronology:VBA (ICFA) →SSC (US-DOE))にあってはその4と振られたページにあっての上訳出部に続く27と振られた部にて

**「1976年5月17日から5月25日にかけて往時ソ連領セルプホフにて開かれた国際的ミーティングで(より強気の)10兆電子ボルトないしそれ以上がVBAのありうべきスケールとして提案された」**

との表記もなされている。一原文表記は“**5/17-25/76 Serpukhov organizational meeting attended, amongst others, by R.R. Wilson, L. Lederman, V. Weisskopf, R. Diebld, J. Bjorken.VBA scale discussed; greater than or equal to 10 TeV fixed target proton accelerator**”(以下略)。

そうした(実現段階に至らぬ構想上のことでありながらも)加速器の目標実現エネルギーが強気のものとして出された、すなわち、「1975年11月にあってはじめて1兆電子ボルトへの言及がなされ1976年5月には10兆電子ボルトへの言及がなされるとのかたちで」目標実現エネルギーが強気のものとして出された理由についても筆者は一門外漢ながらもできる範囲で一精査・深耕している(問題となる生き死にに関わるという認識があるのであるから当然、背景調査にも力を入れている)。

それにつき、1976年に[10兆電子ボルト実現]が目標として出されるようになったのには

[加速器テクノロジーを支える基本技術の発展]

があるとも解されるようになっている。

加速器の実現エネルギーは(下にてその出典を挙げるが)[加速器サイズ]と[磁石の強さ]と比例していると一般に説明されている。

したがって、より強力な加速器を建設するためには

[加速器が「巨大たること」が要請され、「用いられる磁石が強力たること」が要請される]

とされる(：たとえば、(結局構想が頓挫したものの、ここにて挙げている資料内では実現可能性が肯定的に論じられているとの)加速器SSCでは86.6キロメートルに及ぶとされる超長大なトンネルが掘られる予定であったとのことがあり、によって、重心系衝突エネルギー40兆電子ボルトが極微領域に詰め込められるとの状況の実現が企図されていたと「される」(そのぐらいのトンネルの長大さが40兆電子ボルトの極微領域投入を約する装置の実現には要請されていた。といったSSCのトンネルの長大さについては和文のウィキペディア[超伝導超大型加速器]項目程度にも言及されていることである)。対して、強力さで類を見ない磁石が用いられているとされるLHC実験では27キロメートル超のトンネルが用い

られ、そのトンネルの長大さと結びついた加速器の長大さによって最大にして重心系衝突エネルギー 14 兆電子ボルトが極微領域に詰めこめられるとの状況の実現が企図されている（※）。

（※補足としての話をさらに補ってものこととして

専門家でもない人間でも話し手として指し示せる、そして、聞き手として理解できるとの事実関係の摘示でもって一部科学者らの挙動（の背後にあるところ）の悪質性を問題視するというのが本稿の趣意である。といった本稿にあって読み手理解を促すために補足となる部をここに設けているわけだが、そうした補足の部でありながらも門外漢が分かりづらいところとして、直上、

### 〔重心系衝突エネルギー（たる兆単位電子ボルト）〕

との概念を持ち出している（言い訳がましくも述べれば、持ち出さざるをえなかった）ため、そちら〔重心系衝突エネルギー〕が何であるかということの解説をさらにもって脇にそれてなしておく（無論、出典に基づいて、である）。

その点、

「〔蚊の 1 兆分の 1〕とも形容される極小領域に本来的には蚊の飛ぶ程度の運動エネルギーにすぎぬ兆単位の電子ボルトのエネルギーを詰め込み（1 エレクトロンボルトは電子（エレクトロン）1 個を動かすエネルギーということでそれが兆単位になってもマクロ・スケールではたいしたものではない）、もって、原初宇宙の超高エネルギー状況を再現が企図されている」

とのことが〔巨大加速器実験〕にまつわって頻繁に言及・取り沙汰される〔重心系衝突エネルギー（たる兆単位電子ボルト）〕のおおよその意味合いである。

典拠を挙げる。

まずもってそちら記載より挙げておくと、

**英文 Wikipedia〔 Order of magnitude (energy) 〕項目**

にての

**〔  $1.6 \times 10^{-7} \text{J}$  (ジュール) 〕**

と振られた部にあつては

1TeV ( teraelectron volt), about the kinetic energy of a flying mosquito. 「1TeV こと 1 テラエレクトロンボルト (1 兆電子ボルト) は蚊の飛ぶ運動エネルギーに相当」

との記述がなされている（:そちら表記をウィキペディアから確認いただくことでもって「〔1 兆電子ボルト〕 (1 テラエレクトロンボルト) というもの —— 僅か〔10 のマイナス 7 乗  $\times 1.6$  ジュール〕相当のエネルギーである—— が蚊の飛ぶ程度のエネルギーにすぎぬ」との理系分野の〔一般的理解〕について門外漢にもご察しいただけるであろう）。

次いで、蚊の飛ぶエネルギー（「兆」単位電子ボルト;「テラエレクトロン」単位電子ボルト）を

「蚊の 1 兆分の 1」スケールの極微領域に蚊が飛ぶエネルギーを詰め込むというのが昨今の加速器実験における重心系衝突エネルギー〔兆単位電子ボルト〕の意味合いである」

ということ(上にて言及のこと)についての引用をなしておく。

(直下、アミール・アゼクルという科学ジャーナリストの著作が邦訳されたところの『宇宙創造の一瞬をつくる CERNと究極の加速器の挑戦』(早川書房「ハードカバー」版)p.27よりの原文引用をなすとして)

LHCを最大エネルギーレベルで運転すると、陽子は加速しつづけて光速(秒速二九万九七九・四五八キロ)の九九・九九九九九パーセントという想像を絶するスピードに到達する。このときLHCはエネルギーレベル一四TeV(テラ電子ボルト)で運転される。一TeVは蚊の飛ぶエネルギーに近く、ごく小さな値に思えるが、それがきわめて高密度になる。LHCは陽子二個の体積、つまり蚊の一兆分の一の空間の中にこのエネルギーを詰め込むのだ。体積あたりのエネルギーとして、これまでに達成された値をはるかにしのぐレベルだ。この超高エネルギー領域で、今まで物理学者の頭の中にしかなかった新粒子や新現象が現われると考えられている

(引用部はここまでとする)

以上をもって

**【重心系衝突エネルギー(たる兆単位電子ボルト)の意味合い】**

が何であるかということにまつわる解説とした)

(基本的事項にまつわる出典に依拠しての解説をなしたうえで「さらに」ここでの補足を続けるとして)

さて、[トンネルの長大さ]が加速器の実現エネルギーを決めるパラメーターとしての二大要素としての[加速器サイズ]と[磁石の強さ]のうち的一方となっているとして、である。もう一方の[磁石の強さ]を倍加させるとの技術革新が1970年代中葉に起こったとのことがあり、それが加速器建設動向に影響を与えたとのことがある(と実験推進者由来の書籍にあって説明されている)。

その点について——兆単位の電子ボルトを実現するとの加速器の構想が提案されだした背景にまつわるところとして——1988年にノーベル賞を受賞した物理学者レオン・レーダーマン(Leon Lederman)の著書である、

『**神がつくった究極の素粒子**』(下巻)(邦訳版の版元は草思社/右書籍の原題はThe God Particle: If the Universe Is the Answer, What Is the Question?で1993年刊行の著作となる。尚、同著、訳書が草思社から刊行されている『神がつくった究極の素粒子』と似たような[邦題]が付された書籍として『**神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器一**』(原題はCOLLIDER: The Search for the World's Smallest Particlesとの書で本稿[事実B]にてもその記載内容を挙げている日経ジオグラフィック社刊行の書)と題が付されての一般向け書籍も刊行されているが、両書はまったくの別物の書なので混同しないいただきたい)

の内容を引いておくこととする。

(直下、『神がつくった究極の素粒子』(下巻)の p.59 から p.60、[加速器のエネルギー規模が加速器サイズの大小と磁場の強弱に依存する]との旨の記載がなされている箇所より  
掻い摘まんでの引用をなすとして)

ここまでの技術面での議論で忘れていたことがあるとしたらば、それはなぜサイクロトロンやシンクロトロンを大きくするといいいのか、ということだ。ウィデロやローロンスは、かつての研究者が考えていたような高電圧をつくらなくとも粒子を加速できることを証明した。連続したギャップを通過させるか、回転軌道にして一つのギャップをくりかえす利用するかすればいい。こうすれば円形加速器には二つのパラメーターしか存在しない。磁石の強さと、粒子の軌道半径だ。加速器の建設者は、この二つの条件を調整し、必要とするエネルギーを得る。加速器の半径は、主として予算面からの制約を受ける。磁石の強さは、技術面からの制約を受ける。磁場を強めることができないとなれば、エネルギーを高めるためには円を大きくすることになる。

(引用部はここまでとする)

(さらに続けて直下、『神がつくった究極の素粒子』(下巻)の p.61 から p.62、[1973年から1977年にかけて加速器ニーズに合致した「強力な磁場」を提供する技術革新がなされた]との旨の記載がなされている箇所よりの原文引用をなすとして)

一九六〇年代初期、画期的技術が生まれた。特殊な金属でできた合金は、多量の電流を伝導して強力な磁場を形成しながら、超伝導という微妙な状態を維持できるのだ。それも、絶対温度五度ないし一〇度という比較的あつかいやすい温度でこの現象が見られるのだ。

…(中略)…

素粒子検出器用——たとえば泡箱をかこむために——としては、新合金による大型磁石がつくられたが、加速器用は無理だった。粒子がエネルギーを得るにつれて磁石を強くしなければならぬからである。電磁石の電流が変化すると、摩擦効果(渦電流)をひきおこし、通常は超伝導状態を崩壊させてしまう。この問題を解決しようとした一九六〇年代、七〇年代に多数の研究が行われた。その中心となったのは、ロバート・ウィルソンがひきいるフェルミラボだった。ウィルソンのチームは、超伝導磁石の研究開発を開始した。「ザ・二〇〇」の原型が運転を開始してまもない一九七三年のことだ。

…(中略)…

ウィルソンは、もし磁場を変化させる問題が解決できれば、超伝導リングは、より強力な磁場を生みながら大幅に電力を節約できるはずであり、半径が同じでもより高エネルギーが得られる、と考えた。

…(中略)…

冶金学者や材料学者と共同研究し、一九七三年から七七年の間に問題解決に成功した。モデルの磁石の電流を10秒間のうちにゼロから五〇〇〇アンペアまで上昇させ、超伝導を維持できた。一九七八、七九年には、優秀な特性をそなえた二フィートの磁石の生産がはじまり、八三年には超伝導「アフターバーナー」としてテバトロンがフェルミラボで運転を開始した」

(引用部はここまでとする)

以上の **The God Particle: If the Universe Is the Answer, What Is the Question?** (邦題)『神がつくった究極の素粒子』(下巻)よりの引用部でもってして、——( [加速器サイズ(半径)] [磁石強度] が加速器の実現エネルギー(兆電子ボルト単位重心衝突系エネルギー実現の意味合いについてはつい先立っての段にて解説している)を規定するとして)——、 70年代より磁石強度を約束する新技術が登場、兆単位電子ボルトの加速器が同じくもの70年代より実現視可能と目されるようになったとのこと、ご理解いただけることか、とは思う —※—。

(※脇に逸れての話として)

尚、この段階では未だ要らぬところか、とも思うのだが、  
[本稿の後の段にて加速実験がいかようにしてギリシャ神話におけるトロイア戦争(トロイアの木製の寓意)に関わるようになっていくかとのことを属人的主観など抜きに説明をなす]

とのことにも関わるところとして次のことをも述べておくこととする。

⇒

直上、**The God Particle: If the Universe Is the Answer, What Is the Question?** (邦題)『神がつくった究極の素粒子』(下巻)との書籍よりの抜粋部にもその名が挙げられているウィルソン (e.g. [ロバート・ウィルソンがひきいるフェルミラボだった。ウィルソンのチームは、超伝導磁石の研究開発を開始した。「ザ・二〇〇」の原型が運転を開始してまもない一九七三年のことだ]) は合衆国の代表的加速器運営機関であるフェルミ国立研究所の設立旗振り役にして初代所長となっていた最有力科学者(米国物理学界の長を務めた男)のロバート・ラスバン・ウィルソンのことを指す。

同ウィルソンについては

[同男によって1975年に1TeV 超えの粒子加速器への言及がはじめてなされた]  
とのこともここ本稿にて先に挙げている資料、

**Chronology:VBA (ICFA) →SSC (US-DOE)**

よりの抜粋部にあって表記されているところである(1/75 “1 TeV” mentioned in R. R. Wilson Physics Today editorial regarding a world laboratory.との先の引用部の R.R.Wilson とはロバート・ラスバン・ウィルソンのことである)。

そうもしたロバート・ラスバン・ウィルソン、

[粋なカウボーイにして進取の気風に富む芸術家肌のルネサンス的人物]  
[マンハッタン計画に参画するもその実現に含むところが多々あったとの好漢]  
などとも相応の人間ら(加速器実験機関関係者ら)に今なお褒めちぎられているとの向きであり米国物理学界の重鎮にして

(後にての本稿摘示事項との絡みでわざとそういう言及をなすのだが)

[トロイアを滅ぼした [木製の馬] の奸計の考案者たるギリシャ英雄オデュッセウスの故郷イサカ (Ithaca) の名を冠するニューヨークの地にて没した人物]

としても知られている —— (英文 Wikipedia からして加速器実験の大功労者であるウィルソンが最期の時を過ごした地が(そこが学術振興地区だったとしか常識人は語らぬだろうが) ニューヨークのイサカであると記載されているところである / トロイアを木製の馬の計略で滅ぼした伝説上の存在オデュッセウスの故地イサカから命名されたとのニューヨーク・イサカ、同地については [ブラックホール・ゲート装置] を扱った小説『コンタクト』の執筆者である米国科学界の旗手であったカール・セーガンの事績およびその作品に伴う「人を食ったような」多重的相関関係について論じることになるとの本稿の後の段で再度の解説をなす) ——。

同男自身にとって所縁ある大学でもあるコーネル大のある [イサカ] (繰り返すが、トロイアを滅ぼしたと伝承に伝わる計略の考案者、オデュッセウスの故地より命名



されたことが知られるニューヨークの一地域)を終(つい)の住処としたロバート・ウィルソンはその師匠筋にあたるアーネスト・ローレンスと共にマンハッタン計画の推進に多大なる貢献をなしていたこと「でも」知られる向きである。

そして、そのロバート・ラスバン・ウィルソンの師匠筋であったとのアーネスト・ローレンスという男は(本稿を公開しているサイトの一の多所でも仔細に解説していることだが) [LHCに発展することとなった「円形加速器」の開発者]にして [近年の隠し撮り流出映像から最上級のパワー・エリート達が信じ難きような狂態を演じる祭典の場として認知されるに至っているボヘミアン・クラブ] のメンバーであったことが(英文 Wikipedia の[アーネスト・ローレンス]解説項目にて出典を付されて)紹介されているような人間であった(そこにての現行記述よりの引用なせば **“Robert Gordon Sproul was a member of the Bohemian Club, and he sponsored Lawrence's membership in 1932. Through this club, Lawrence met William Henry Crocker, Edwin Pauley, and John Francis Neylan. They were influential men who helped him obtain money for his energetic nuclear particle investigations.”** (大要訳として)「ロバート・ゴードン・スプロールはボヘミアン・クラブのメンバーであったわけだが、同男が1932年、アーネスト・ローレンスのクラブ参加に渡りをつけた。同クラブを通じてローレンスは同男が原子核調査にまつわる研究をなすうえで必要な資金を得るのに助力した影響力ある男達と懇意となった」と記載されている次第である(同英文 Wikipedia 引用元箇所にて現行、出典紹介されているのは Brechin, Gray A. (1999). Imperial San Francisco: Urban Power, Earthly Ruin とのカリフォルニア大バークレー校関連の出版物の文書内記述である)。

そうもして [奇態なる(そして流出映像を見れば分かることとして実に「アグリー」でもある)夏の祭典] に参加していた円形加速器の発明者たるアーネスト・ローレンスが引き立てていたロバート・ラスバン・ウィルソンがマンハッタン計画に「同計画はよろしくはない」と途中より疑義を呈したとのことが美談調で英文ウィキペディアに掲載されているとのことがあるともその人間性に何の信も置くべきではないと本稿筆者は考えている (Bohemian Club が何たるかについては同クラブがイベント主催する Bohemian Grove でどういったことがなされているかにつき(批判的紹介者・陰謀論者らのそれに対する文字情報での解説はすべて割愛したうえで) どういった奇態なる流出映像が世にて問題視されているのか確認いただきたい次第ではある)。

筆者は本稿にて [この世界が「人間レベルにあって」伏魔殿であるか否か] を問題視しているわけではない(そういうことを当てにならぬ材料、筆者も今までにさんざん惑わされてきた話柄をもってして鼓吹するのは陰謀論者やりようであろうと達観するに至っている)。

「問題なのは、」(後にてとも判じられる論拠を解説するが) 傀儡くぐつと成り下がった一群の人間によって [そのように見えもする](伏魔殿と相通ずる色彩が意図的に付されている節がある) ようにされている領域が 一実体としては内実空っぽのものであれ— 垣間見れもし、たかだかもその程度のことをもってからして危険性を感じさせるとのことがある、ということである。

以上、[補足の部] それ自体から見てできえ、さらに脇に逸れての話はここまでとする)

(直前にて行き過ぎたことを書きすぎたか、とも思うのだが、「その上でも、」のこととして) ここ補足部にあつてのここまでの内容をまとめよう。

兆単位の重心系衝突エネルギー加速器の実現構想が[青写真]として呈示された時期は「1975年から1976年」にあると(実験機関発表文書にて)されているとの件については背景として[超伝導磁石]を利用できるようになったとの技術進歩があり、そちら技術進歩については「1973年から1977年」にかけて達成されたと(加速器実験機関の長の手になる著作内の記述に依拠して)解されるようになっている(※)。

(※尚、現実に兆単位の電子ボルトを念頭に置いての加速器が登場したのは80年代前半に運転開始を見た[テバトロン]が最初であるとされている——テバトロン、名前からテブ(兆単位の電子ボルト)を意識して命名されているとされる同フェルミ国立加速研究所運営の加速器は1983年の運転開始より512億電子ボルト運転に奏功し、次年度には900億ギガボルト運転に漕ぎつけていたことが知られている。また、LHCを除き1兆ボルト超えを実現したのは後にも先にもそのテバトロンだけであると認知されもしている(現行英文 Wikipedia [Tevatron] 項目にても “**The Tevatron was a circular particle accelerator in the United States, at the Fermi National Accelerator Laboratory (also known as Fermilab), just east of Batavia, Illinois, and holds the title of the second highest energy particle collider in the world after the Large Hadron Collider (LHC) near Geneva, Switzerland. The Tevatron was a synchrotron that accelerated protons and antiprotons in a 6.86 km, or 4.26 mi, ring to energies of up to 1 TeV, hence its name.**[1] **The Tevatron was completed in 1983 at a cost of \$120 million and significant upgrade investments were made in 1983–2011.**[ . . . ] **The 'Energy Doubler', as it was known then, produced its first accelerated beam — 512 GeV — on July 3, 1983. Its initial energy of 800 GeV was achieved on February 16, 1984. On October 21, 1986 acceleration at the Tevatron was pushed to 900 GeV, providing a first proton-antiproton collision at 1.8 TeV on November 30, 1986.**”(逐語訳ではなく大要訳として)「テバトロンはイリノイ州バタビア東部にあっての合衆国フェルミ国立加速器研究所(フェルミラボ)の円形粒子加速器となり、後のLHCに次いで世界で二番目に高いエネルギー規模の加速器として知られている。テバトロンは1TeV(1兆電子ボルト)、同加速器がその名の由来となっている1テラエレクトロンボルトに向けて陽子と反陽子を加速させるとの周長6.86キロメートル(4.26マイル)のシンクロトロンとなり、1億2千万ドルを投じて1983年に完成、1983年から2011年にかけて改修投資がなされてきた加速器となる。テバトロンは1983年にて512GeV(512億電子ボルト)運転を実現、1984年には800GeV、1986年には900GeV、1986年11月には1.8TeV運転を実現した」といった記載がなされているところである)—— )

以上、まとめたところで長くもなつてのここ補足の部を終える。

(補足として付した話がいささかどころか、相当長くもなってしまったとのきらいもあるが)ここまでもってして [事実J] を各別に分解しての

- ・小説の 15 兆電子ボルト加速器のような「兆」の単位に突入しての一兆電子ボルトを超える加速器の建設構想計画が[青写真]として実験機関関係者意中に持ち上がったのは 1975 年以降である

とのことの出典表記部を終える(その点、出典資料としてはフェルミ国立加速器研究所由来の公的文書、[Chronology:VBA (ICFA) →SSC (US-DOE) ] を挙げた)。

(要素要素に分解しての [事実J] にまつわるここ出典(Source)紹介の部 10 の部にての典拠紹介を今しばらくも続けるとし、) 次いで、

- ・現在 CERN が運用する LHC の実現する最大出力は [(重心衝突系エネルギー)14 兆電子ボルト] の加速器であり、それに比して、1974 年に初出の小説に登場する[(架空の)CEERN の 15 兆電子ボルト加速器]は 1.07 倍程度しか強力なものではない(⇒  $15\text{TeV}:14\text{TeV}=1.07(\dots):1.00$ )

とのことの出典を挙げる。

そちら典拠としては以下、科学読み本内容の記述を引いておくだけで十分かと判じたのでそうすることとする。

(直下、Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider 邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる CERN と究極の加速器の挑戦』(早川書房、原著 2010 年刊、邦訳版 2011 年刊)の 27 ページより原文引用するとして)

---

LHC を最大エネルギーレベルで運転すると、陽子は加速しつづけて光速(秒速二九万九七九二、四五八キロ)の九九、九九九九九九パーセントという想像を絶するスピードに到達する。このとき LHC はエネルギーレベル一四 TeV(テラ電子ボルト)で運転される。

---

(引用部はここまでとしておく —※— )

(※上の通り LHC はその最高エネルギーレベルでの運転時、14 兆電子ボルトで運転されるとの加速器として認知されているわけだが、同点については当然、インターネット上でも[最も基本的な情報]としてすぐに確認できるところとなっている。2012 年度より LHC は長期運転休止に入り最高レベルでの 14TeV へエネルギー規模を倍加させ突入する状況には(本稿本段執筆現時点 2014 年では)未だ至っていないということとともに、である —英文 Wikipedia[ Large Hadron Collider ]項目にあつての運営タイムライン言及部にて先立っての折より “ The LHC continues operations ramping energies to run at 3.5 TeV for 18 months to two years, after which it will be shut down to prepare for the 14 TeV collisions (7 TeV per beam).” (訳として)「LHC は 18 ヶ月から 2 年の間、

3.5TeV のビームで運転を継続し、その後、14 兆電子ボルトへの準備のための休止段階に入る」と記載されているとおりに予定明示がなされ続けてきた中で、である—— )

さて、LHC での(未だ未達の)最大運転時出力が 14 兆電子ボルトであるとして、である。1974 年初出の既述の小説([事実 F]の部から本稿にて言及なしは始めている『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)にあってみとめられる、

[(CERN ならぬ)CEERN の 15 兆加速器]

というのは

「(15 兆を 14 兆で割れば 1.07(以下小数点略)が出てくることから)[CERN の LHC]の僅か 1.07 倍のエネルギー規模のものである」

ということになる(：1974 年小説に見る「CEERN の 15 兆電子ボルト加速器」とは「往時 CERN が運営していた加速器(ISR)」に比して 240 倍超強力な出力を実現しているとのものであるばかりではなく、往時には未だ現実視されていなかった兆単位領域(Tev 領域)に突入しての加速器となるわけだが、そうした架空の加速器、今日の LHC にあまりにも出力比で近いもの「とも」になっている(ここまで摘示に努めてきたことである)。さて、兆単位電子ボルトの加速器、70 年代中葉、1975 年より構想が企図されだしたとのことを先に出典に依拠して指摘した兆単位電子ボルトの重心衝突系エネルギーの加速器のうち、[最大出力 14 兆電子ボルトのもの]として考案されるに至った LHC は何時から計画立案されだしたものなのか。少なくとも問題となる小説が世に出た 74 年には同加速器にまつわる青写真すら描かれていなかったと(先んじてそこよりの引用をなしたフェルミ国立加速器研究所文書にての引用部文言それ自体より)判じられるところとなっている——さらに述べれば、LHC 計画が CERN にて「正式に」スタート認可されることになったのは公式資料にて 1992 年であるとされていること、本稿の後の段にて指し示すことにもなる—— )。

以上、ここまでにて

[事実 J]

・[1974 年に初出の小説の中に登場する架空の CEERN の 15 兆電子ボルト( fifteen trillion electron volts )加速器]は[現実世界で CERN が当時(1974 年)にあつて運用していた加速器(ISR と呼ばれるハドロン加速器)]よりも 200 倍超の規模のエネルギーを実現するとの[設定]のものであった。

・[1974 年初出小説に見る 15 兆電子ボルト加速器]のような「兆」の単位に突入しての一兆電子ボルトを超える加速器の建設構想計画が[青写真]として実験機関関係者意中に持ち上がったのは(小説刊行の 1 年後との)1975 年以降である(との加速器実験機関由来の内部資料が存在している)。

・[現在 CERN が運用する LHC]が実現しうる最大出力は[(重心衝突系エネルギー) 14 兆電子ボルト]となっており、それに比して、[1974 年に初出の小説に登場する(架空の)CERN ならぬ CEERN の 15 兆電子ボルト加速器]はたかだかも 1.07 倍程度しか強力なものにすぎない(⇒ 15TeV:14TeV=1.07(...):1.00)。そうしたかたちで 1974 年初出

の加速器は出力との性能で見てもあまりにも今日のLHCに近似している  
(尚、兆単位の加速器の実現可能性さえ取り沙汰されなかった往時(74年)にはLHC計画は当然に策定さえされていなかった)。

要するに、Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』という作品は

[往時70年代のCERN運営加速器(ISR)に比して200倍超も強力なるCEERN加速器なるもの]  
(それは小説刊行時、構想だけにされていなかった規模の加速器であると研究機関文書にて記載されている兆単位電子ボルト加速器ともなる)

を登場させており、かつもって、その架空のCEERN加速器なるものは

[(指数関数的に出力を増大させてきたとの加速器進化動向にあって)今日のLHCに比しては小数点2桁、数パーセントの誤差ぐらいしかないほどに出力が近似しているとのもの]

ともなっているとのことがある。

とのことが「主観など問題にならぬ」ところの[裏取り容易なる確たる事実]であることを[堅く、また、容易に後追いなせるとの出典]らよりの原文引用でもって指し示した。

(極めて長々としたものとなってしまったが、[事実J]が文献的事実であることを示すべくも設けた出典(Source)紹介の部10はここまでとする——続いての段では以上のことからどういった欺瞞性が透けて見えるのか、整理を兼ねての話をなす——)

---

さてもってして、直上最前の段にあって、(既に典拠示してきた[事実A]から[事実E]に加えてのものとして)、

[ [事実F] から [事実I] ]

と振ってのこら、すなわち、以下のこらが文献的事実・記録的事実となっていることの典拠を仔細に挙げてきた。

(以下、本段に至るまでにその典拠を挙げ連ねてきたところの[事実F]から[事実J]についての連続しての表記をなすこととする)

---

(本稿筆者が「当然のこととして」非常に問題視しているところとして次のような各事実がそこにある)

[事実 F]

1974年に初出を見た極めて長きタイトルの SF 小説作品として、

**Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W**  
(邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』

という作品が存在している。

同作、1975 年、米国の権威あるサイエンス・フィクション分野の賞として認知されているヒューゴ賞 Hugo Award を(同賞が長編・中長編(ノベラ)・中編(ノベレット)・短編と受賞分野が語数によって分たれている中で)[中編 Novelette 分野]にて受賞した作品となっている。

その小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は作中、

**[15 兆電子ボルトの CEERN(CERN ならぬ CEERN)の粒子加速器]**

なるものを登場させている、とのものである。

**Adrift Just off the Islets of  
Langerhans:Latitude 38°54'N,  
Longitude 77°00'13W  
(1974)**

( 邦題 『北緯38度54分、西経77度0分  
13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』 )

[事実 G]

上の[事実 F]にて挙げた小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[SF 小説大賞ヒューゴ賞を受賞した作品を収めた傑作撰集](英文 Wikipedia にて The Hugo Winners とのその傑作撰集のためだけの項目が設けられているその方面—サイエンス・フィクションの分野に志向性ある向き—では著名な傑作選)

にて

**The Hole Man 『ホール・マン』(という 1974 年初出の作品)**

という作品と(原著・和訳版版双方ともに)[連続掲載]されているとの作品となる(:中編分野のヒューゴ賞受賞作品と短編分野のヒューゴ賞受賞作品が連続掲載されるようになっているとの式で(定例化してのかたちで)当該傑作撰体裁が定められているために、である)。

ここ([事実 G]に対する言及部)にて挙げている The Hole Man『ホール・マン』という小説作品は 一同文に文献的事実の問題として—

**[極微ブラックホールのケージ(容器)より漏れ出しての暴発を描く小説]**

となっている。



# The Hole Man

(1974)

(邦題『ホール・マン』)

[事実 H]

上の[事実 F]と[事実 G]の摘示(容易に後追いできるとの該当部引用による摘示)によって

[15兆電子ボルトの CEERN (CERN ならぬ CEERN) の粒子加速器を登場させている小説] ([事実 F]の言及部にて挙げた小説)

[極微ブラックホールの暴発を描く小説] ([事実 G]の言及部にて挙げた小説)

が著名な米国 SF 賞を受賞した SF 傑作選の中で(そうなるべくも定例化しての当該傑作撰体裁が定められているため)連結させられていると示すことができるようになって

いるわけであるが、取り上げての小説の間には  
[「配置面」([連続掲載]との配置面)以外の連結関係]

が成立しもしている。

その点、[事実 F]に対する言及部に挙げた小説(『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)の主人公は作中、ラリィ「Larry」との愛称(通称)で頻繁に呼称され、その主人公の正式の姓はローレンス(Lawrence)であるとの設定が採用されている。

他面、[事実 G]の言及部にて問題視した小説(『ホール・マン』)の作者たる SF 作家の愛称(通称)はラリィ「Larry」であり、その正式名称はローレンス(Laurence)であるとのことが存する。

**Adrift Just off the Islets of  
Langerhans: Latitude 38°54'N,  
Longitude 77°00'13W**

(1974)

The Hugo Winners Volume 3

**The Hole Man**

(1974)

※事実「関係」について

ここにて上の[事実 F]から[事実 H]を通じて述べられることを表記する。

[15兆電子ボルトの CEERN (CERN ならぬ CEERN) の粒子加速器を

登場させる小説]([事実 F])  
[極微ブラックホールの暴発を描く小説]([事実 G])  
が[三十三回目ヒューゴ賞中編分野受賞・短編分野受賞作品]として  
SF 傑作撰集の中で連続掲載されており(同[事実 G])、それら連続  
掲載作品らには  
「一方の主人公の姓およびその愛称が他方の作品の作者の姓および  
その愛称と同一である」  
との関係性が成立している([事実 H])。  
(上からして主観などを介在していないとの[事実]それ自体への言及  
にとどまる)

以上の事実関係を踏まえてさらに指摘すれば、直下、呈示のようなこと([事実 I])のようなこと  
もまたある。

#### [事実 I]

[事実 F]の部にてその名を挙げた小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans :  
Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W* (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13  
秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[欧州の加速器運営機関 (CERN ならぬ CEERN などと呼称される 15TeV 加  
速器を運用する機関) のビーム照射装置でもって [自らを縮退させての極小の  
分身] をホログラム上に造り出した主人公がそちら分身を己の [「底無し」  
「黒々とした」「渦を巻く」へそ] に落とし込み、もって、己の魂に引導を渡させる  
との粗筋の作品]

「とも」になっている。

#### [事実 J]

・[1974 年に初出の小説の中に登場する架空の CEERN の 15 兆電子  
ボルト ( fifteen trillion electron volts ) 加速器] は [現実世界で  
CERN が当時 (1974 年) にあって運用していた加速器 (ISR と呼ばれる  
ハドロン加速器)] よりも 200 倍超の規模のエネルギーを実現するとの  
[設定]のものであった。

・[1974 年初出小説に見る 15 兆電子ボルト加速器] のような「兆」の単  
位に突入しての一兆電子ボルトを超える加速器の建設構想計画が[青  
写真]として実験機関関係者意中に持ち上がったのは (小説刊行の 1  
年後との) 1975 年以降である (との加速器実験機関由来の内部資料が  
存在している)。

・[現在 CERN が運用する LHC] が実現しうる最大出力は [(重心衝突  
系エネルギー) 14 兆電子ボルト] となっており、それに比して、[1974 年  
に初出の小説に登場する (架空の) CERN ならぬ CEERN の 15 兆電子  
ボルト加速器] はたかだかもの 1.07 倍程度しか強力なものにすぎない  
( $\Rightarrow 15\text{TeV} : 14\text{TeV} = 1.07(\dots) : 1.00$ )。そうしたかたちで 1974 年初出  
の加速器は出力との性能で見てもあまりにも今日の LHC に近似している

(尚、兆単位の加速器の実現可能性さえ取り沙汰されなかった往時(74年)にはLHC計画は当然に策定さえされていなかった)。

要するに、Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』という作品は

〔往時70年代のCERN運営加速器(ISR)に比して200倍超も強力なるCEERN加速器なるもの〕(それは小説刊行時、構想だにされていなかった規模の加速器であると研究機関文書にて記載されている兆単電子ボルト加速器ともなる)

を登場させており、かつもって、その架空のCEERN加速器なるものは

〔(指数関数的に出力を増大させてきたとの加速器進化動向にあつて)今日のLHCに比しては小数点2桁、数パーセントの誤差ぐらいしかないほどに出力が近似しているとのもの〕

ともなっているとのことがある。

---

以上、振り返ってのことらは(くどくも申し述べるが)誰であろうと否定のしようがないとの、  
[確定した「文献的」事実]

[記録的事実]

である(：そのことを遺漏無くも示すための典拠を本稿前段にてひたすらに挙げてきた者として申し述べるどころとして、である)。

それら[文献的事実(記録的事実)]についてまとめたの話をなせば、次のことが示せるようになっていたとのことでもある。

「1974年に出された小説らが「複合的なる」連結関係を呈している。

その複合的連結関係は

[CEERNの15兆電子ボルト加速器が登場し、CEERNのビーム発射装置で[「底無し」の「黒々とした」「渦を巻く」穴](ブラックホールを想起させるような穴)に男の「マイクロ化された」分身が投入される(一般論としてブラックホールとは物質を粉々に分解して「圧縮」して質量無限大サイズ極小といった領域に周囲のものを吸い込むものである——先にての[出典(Source)紹介の部7]で引用した小説『ホール・マン』にて「地球ほどの質量をもったブラックホールは一センチかそこらだ」との記述がなされているようなところのものがブラックホールとなる——)との筋立ての小説]

と

[極微ブラックホールがケージより漏れだし極微ブラックホールが暴走して惑星を飲み込まんとするさまが描かれる小説]

が複合的に連結しているのと同義のものである。

うち、一方の

[CEERNの15兆電子ボルト加速器が登場し、CEERNのビーム発射装置で底無しの黒々とした渦を巻く穴に男のマイクロ化された分身が投入されるとの小説]

に登場する、

[(現実のCERNの名を想起させられる架空の組織体たる)CEERNによって運用される15兆電子ボルト加速器]

とは小説刊行往時にてCERNが運用していた加速器より最大重心系衝突エネルギーにて240倍も強力なものであり、他面、今後アップロードされてLHCがそこに至るところの出力14兆電子ボルトに比しては僅か1.07倍程度のものにすぎぬとのLHCと圧倒的に近いものである(そうなるわけだが、先立っての**出典(Source)紹介の部10**にて明示のように粒子加速器実験機関関係者文書では(LHCがそうであるような)兆単位のエネルギー領域に入っている加速器のことが青写真として念頭に置かれ出したのは小説刊行の後、1975年—1976年と表記されている)

(再三再四申し述べたいとのことだが、疑わしきにおかれては[事実F]から[事実J]より上の結論が導き出せるか、また、[事実F]から[事実J]の出典はいかなものなのか、**出典(Source)紹介の部6**から**出典(Source)紹介の部10**をご覧くださいながら、(それができるようにしているところとして、「オンライン上の文献的事実の紹介媒体、「本稿とは関係なき」一次ソース紹介の他媒体などより裏取りなしにいただきながらでも)、きちんと確認いただきたい次第でもある)。

以上のようなことが存在している一方で、他面、次のようなことが容赦なくも指し示される事実の問題として存在している。

(同文に「くどくも」の繰り返し表記をなすとして)

[事実A]

粒子加速器によってブラックホールが生成される可能性が取り沙汰されだしたのは

[1999年]

からである。

その1999年との折柄にあつては

[厳密な意味では専門家ではない市井の個人] (ウォルター・ワグナー)によってブラックホール生成可能性が[災害を引き起こす元凶たりうるもの]として問題視されだした(権威あるとされる専門家らがブラックホール生成可能性を目立って問題視していたわけではない)。

対して、そうした属人的疑念視がマス・メディア「にも」取り上げられることになったことを受け、専門家サイドからは

「ブラックホール生成がなされることはそもそもないことである」

との強調がなされ、ブラックホール生成の可能性それ自体を事実上完全否定する(狂人の妄夢の如きものであるとする)当事者研究機関の一群の報告書ら

【再度もってしての脳にての案内としまして】：ここでのそのように本稿では「頻繁に」文字色と背景色を変えての【出典紹介部】呈示のための表記をなしています。本稿全体の指し示し内容の重大性を顧慮して【後追い可能な典拠】の細部に至るまでの呈示からして必須事項とらえているからではありませんが、無論にして、後追い「可能」であるだけではなく後追い「容易」である必要もあるとの認識が書き手この身にはございます。にまつわって後追い「容易」性の方をもたらず方式、すなわち、【都度、即応的にすべての出典紹介部の内容を即時確認するための方式】を本稿にあつての冒頭p.5で細かく紹介しておりますので[頻繁に本稿の典拠内容の確認をなす必要]を感じておられるとの方々におかれましてはそちら本稿p.5で案内させていただきますようお願いいたします方式を採用いただければと考えます(典拠内容確認を容易・即応的になすとのその紹介方式とは本稿を収めたPDF文書を別名保存で二ファイル用意し、うち、片方を閲覧用、もう片方を(巻末数ページの出典紹介部一覧表記部「だけ」を印刷して役立てつつもの)出典確認用の電子文書として活用いただくとの方式となります)

(後にノーベル賞受賞者となった科学者も関与しての報告書でもある) — が世に出されることとなった。

[事実 B]

粒子加速器(の中にあつての LHC)による[ブラックホール生成]がなされうるとのことが — ([事実 A]に見るように[1999 年]にあつてそれが[ありうべきリスク]として専門領域「外」の人間に問題視されだした際には「そも、粒子加速器によるブラックホール生成はありうべきところではない」と当事者研究機関に否定されていた]とのところから一転して) — [ありえることである]と「肯定的に」科学界主流筋および研究機関によって「公的に」認められるようになったのは [2001 年]

のことからである(：その 2001 年からの論調では「通年で 1000 万個単位の」「安全な」極微ブラックホールが生成されることになりうるともされるようになった)。

すなわち、「1999 年]にあつては」ブラックホールが人為生成される可能性だに否定していた科学界・実験機関の論調が「2001 年]」変容を見、一転、加速器によるブラックホール生成をしてありうると肯定するようになったとのことがある(それについては、—これまた当然に論拠を挙げるところとして— [1998 年]に水面下で提唱されていた余剰次元理論(というもの)から導き出された帰結]が 2001 年の[変節]の背景にあると一般には説明されている)。

[事実 C]

粒子加速器 LHC によってブラックホール生成がなされうると加速器実験実施研究機関に認容されるに至った折、当然に学者らは「ブラックホール生成がなされても[安全]である」と強調していた。

ブラックホール生成がありうることとされるに至つての後、その初期的段階(2001 年から 2003 年)にあつては安全性にまつわる論拠として

[[ホーキング輻射(ふくしゃ)と呼称される(仮説上の)現象]の発現による生成ブラックホールの即時蒸発]

のことが部外者・公衆向けの安全性報告文書で挙げられ、次いで、2008 年以降よりは安全性論拠として

[宇宙線(Cosmic-ray/宇宙を飛び交う高エネルギーの放射線)との比較による生成された「蒸発しない」可能性のあるブラックホールの無害性]

のことが(更改を見ての)部外者・公衆向けの安全性報告文書にて強くも前面に押し出されるに至つた、とのことがある。

そのような安全性論拠の主張動態(重み付け)の変化の背景には — それについても当然に典拠挙げるところとして — [ホーキング輻射](と呼ばれる仮説上の現象)の発現が确实視され「なくなった」とのことがあると「される」。

直上、振り返りもしてのことに依拠して申し述べるが、

「1999年になってよりブラックホール生成の可能性が実験批判家ウォルター・ワグナーに問題視されたものの、当時の実験機関および物理学界は一丸となって「そのようなものが生成される可能性は全くない」と強弁していた」

⇒

「上のような流れが(1998年から呈示されていた理論の発展動向を受けて)2001年よりどんでん返しを見、実験機関および主流の科学界関係者らが2001年より安全なブラックホールは大量生成される可能性が出てきたと([変節]の上)主張しだした」

との「事実」(研究機関および主流の科学者らの手になる最も確度高き文書にてそのような申しようがなされているとの「事実」)が一方で存在し、他面、

「1974年、往時 CERN 運用加速器よりも出力比で 240 倍も上を行く、その一方で、LHC の予定されている最大出力に比べては 1.07 倍しか強力ではないとの「CEERN の」加速器が登場させられている小説作品が世に出ており、その加速器登場小説のあらすじが —— 小説内 CEERN のビーム照射挙動との絡みも含め —— ブラックホールおよび極微ブラックホール暴走と複合的に結びついていると指摘できてしまうことがある。また、その小説作品が複合的に連結関係を呈するとの同年に刊行されている「他の」小説が[重力波通信機から漏れ出した極微ブラックホールが惑星を呑み込む]との粗筋を有しているとのことだに指摘できてしまうことがある」

との「事実」がもう一方で存在していることに

[[虚偽・欺瞞の問題] や [予言(と呼ばれるようなもの)をなさしめる力学の介在の問題] ]

を観念せずに説明がつけられるのか、と当然に問われて然るべきところであるはずである(俎上にあがっているのが[人類の破滅に通ずる問題]であるからである)。

これにて

「他にも(先行して問題視してきた Thrice Upon a Time 『未来からのホットライン』の他にも)ブラックホール生成問題にまつわる先覚的言及をなしている文物が存在しているのだが、それがその[先覚性][正確性][克明さ(露骨さ)]のどの面でも群を抜いているとの異常無比なるもの、まさしくもの[[予言的作品]にして[告知文物]]といった形態のものとして存在しているがゆえに問題になる —— 本来的には[[未知]を前提にしての予言「的」作品]と[[既知]を前提にしての告知文物]は論理的に両立するものではないわけだが、それらの要素を双方体现しているがために異常無比となるものが存在している(がゆえに問題になる)—— 」

とのことのまとめでの解説とした(同じくものことの[異質性を伴っての实在]を示す例は「他にも」 「多く」あるわけだが、についてはよりもって後の段で順次示していくことになるとも申し述べておく)。

さて、ここまでに

[既知を前提にしての予告(がかったもの)] [未知を前提にしての予言(がかったもの)]



が同一のところであって「奇怪にも」並存していることについて指し示してきたわけだが、同点については

「[未知]がその実、[未知]ではなかった。ブラックホールの生成は随分前から観念されていたにもかかわらず実験機関および科学界関係者が大同団結して「1970年代より観念されていた」そうした可能性についてしらを切り続けていた」

とのことが観念されるかの考察を以降なすこととする（[奇怪性の問題]が[欺瞞の問題]「のみ」で片付けられるのかの考察を以降なすこととする —— 明らかな時期的矛盾が実験機関発表文書に表出を見ており、なおかつ、といった露骨なところを見て見ぬ振り、無視することは当然に[欺瞞]の問題とあいなるであろうが（殊にそれが種族の存続に関わるとなればその咎も増そうとすることになる）、[欺瞞の根]それ自体が科学者らの責任に帰すなどとは筆者は申し述べていない。その点、勘違いなきように——）。

（以下、[加速器のブラックホール生成問題の類が「何時から」観念されたのかについての「長くなるも、」の解説の部とする）

ここでとっかかりとしてそちら文書より挙げるが、オンライン上から誰でもダウンロード可能な英文文書として

### [ Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks ]

（論稿末部にて “ This paper was submitted to Physics in Perspective in January 2007 and is scheduled to appear in the June 2008 issue.” と表記されているように 2007年にドイツのシュプリンガー社が刊行する Physics in Perspective 誌に寄稿されたとの回顧録的論稿／訳せば『加速器による災厄のシナリオら、ユナボマー、そして、科学の孕むリスク』とでもなろう論稿で著者を Joseph I. Kapusta ジョセフ・カプスタという物理学者とするもの）

という資料がある（同資料、上にて表記の文書タイトルそれ自体 —— Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks —— を検索エンジンに入力することで現行、オンライン上にて誰でも捕捉・取得可能な文書となっている）。

ご覧いただければわかるだろうが、同資料は

[かつて米国を騒然とした爆弾魔の [ユナボマー] ことセオドア・カジンスキーが加速器実験機関関係者にとり驚異となりうるとされていた折柄のことが解説されている資料]

となる(※)。

（※ユナボマーについて: 大学関係者および空港施設ばかりを集中して爆弾テロの対象とするそのやり口より University & Airline Bomber を縮めて [ユナボマー] と呼称されていた爆弾魔（上資料でその犯行が警戒対象となっていたとされる爆弾魔）がセオドア・カジンスキーという男である。同男、ハーバード大に 16 歳で入学、後にカリフォルニア大学で 25 歳にして数学の助教としての地位を与えられていたとの人物で世間的には [零落した天才の慣れの果てとしての異常者] と評される人物となっている —— 英文 Wikipedia [

Ted Kaczynski ]項目にて“**Kaczynski was accepted into Harvard University at the age of 16, where he earned an undergraduate degree. He subsequently earned a PhD in mathematics from the University of Michigan. He became an assistant professor at the University of California, Berkeley in 1967 at age 25. He resigned two years later.**”と記載されているとおりである——。といった世間的評価が皮相的には至当とも受け取れる式にてユナボマーことセオドア・カジンスキーは大学を離職し、山小屋で隠者のような生活を送りながら、1978年から1995年の17年間、不定期的に爆弾テロを起こして多くの人間を死傷させていた——同じくも英文 Wikipedia[ Ted Kaczynski ]項目にて“**Between 1978 and 1995, Kaczynski engaged in a nationwide bombing campaign against people involved with modern technology, planting or mailing numerous home-made bombs, ultimately killing a total of three people and injuring 23 others.**”と記述されているとおりである—— )

さて、表記の **Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks** との資料、

[かつて米国を騒然とした爆弾魔の [ユナボマー] ことセオドア・カジンスキーが加速器実験機関関係者にとり驚異となっていたとのことが解説されている資料]

であるのと同時に、(表題からしてそのように、アクセレーター・ディザスター(加速器による災害)とのように明記されているわけだが)、

[加速器実験にかかわるところとして1970年代に地球崩壊のリスクが人知れず検討されていたことが——その点につきこれより問題視していくわけだが——言及されているとの資料]

ともなる ( :同資料 **Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks** の冒頭頁、Abstract (梗概こうがい.要約) の記載箇所にて “ **The possibility that experiments at high-energy accelerators could create new forms of matter that would ultimately destroy the Earth has been considered several times in the past quarter century. One consequence of the earliest of these disaster scenarios was that the authors of a 1993 article in Physics Today who reviewed the experiments that had been carried out at the Bevalac at Lawrence Berkeley Laboratory were placed on the FBI's Unabomber watch list.**” (訳として)「過去四半世紀(訳注:同資料の作成時と明記される2007年(刊行2008年)から振り返っての過去四半世紀)に渡り高エネルギー加速器が最終的に地球を破壊しかねない新種の物質形態を造り出すとの可能性が何度か顧慮されてきたとことがある。こうした最も初期のシナリオらのひとつの帰結はローレンス・バークレー研究所の加速器 Bevalac (ベバラック) にて実施された実験に関するレビューを行ったとの著者ら、フィジクス・トゥデイ誌(訳注: Physics Today とは米国の会員制物理学系学術誌のことである)にての1993年のとある記事の筆者らが(その記事のセンセーショナルな内容から大学関係者を狙っていた爆弾魔である)ユナボマーの標的の FBI 監視リストに載せられたことである」(訳を付しての引用部はここまでとする)と記載されていることがまさしくも[地球崩壊のリスク問題が取り沙汰されていたこと]にまつわる話に向けての導入部となっている——[真空の相転移]という空間そのものの破壊のリスクが加速器にあっては1980年代より取り上げられることになった(後述)のだが、それ以前から加速器には世界を滅ぼすリスクが取り沙汰されてきたということがあり、それを受けての書かれようがここでの直近抜粋部ではなされている(続く内容を参照のこと)—— )。

以下、「(多少、というより、かなり長くなるも、」の)引用をなしつつ表記資料内容にまつわる



# SOURCE

## 11

(オンライン上流通文書 Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks (訳せば『加速器による災厄のシナリオら、ユナボマー、そして、科学の孕むリスク』とでもなろう文書)、その論稿配布サーバー(arXiv サーバー)よりオンライン上にて配布されている PDF 版 p.7 から p.9 より掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

---

The primary purpose in combining the SuperHILAC and the Bevatron to form the Bevalac was to create dense nuclear matter in the laboratory for a brief moment of time. During 1974-1975 the first beams of carbon and oxygen nuclei were accelerated up to 2.1 GeV per nucleon and smashed into various nuclear targets. An upgrade was necessary to accelerate uranium nuclei, and in 1981-1982 uranium was accelerated to 1 GeV per nucleon beam energy.

[ . . . ]

When the experimental program at the Bevalac began, no one really knew what to expect when nuclear matter was compressed to three-to-four times the density of atomic nuclei.

[ . . . ]

As noted above, in 1974 Lee and Wick suggested that in a limited domain of space a neutral scalar field may acquire an abnormal value (when compared to the rest of the universe), and that this state may be metastable. If the scalar field has sufficiently strong coupling to nucleons, then their masses would be greatly decreased, leading to a yet-unobserved physical system. They suggested that this might occur inside a heavy nucleus, but compressing nuclei in heavy-ion collisions was an obvious way to search for this new state of nuclear matter.

[ . . . ]

The curve in the middle shows a metastable "Lee-Wick abnormal

state" at some density above the density in atomic nuclei; this state would eventually decay to the lower-energy state. The curve on the right illustrates an extreme case in which the "Lee-Wick abnormal matter" lies lower in energy than normal nuclear matter; in this case, ordinary nuclei would eventually decay into this new state of nuclear matter. Our knowledge about high-density nuclear matter was so poor at this time that no one could rule out these last two possibilities. Lee and Wick actually were not the first to publish such a speculation: In 1971 Arnold Bodmer suggested on the basis of quark models and soft interactions between nucleons that collapsed nuclei might be formed. He called the abnormal states shown in figure 5 isomers in analogy to molecular isomeric states, but they soon came to be called "density isomers." For whatever reason, however, Lee and Wick, rather than Bodmer, are usually cited as the originators of the concept of "abnormal" or "isomeric" nuclear states.

No one had a clear idea about how the formation of such new abnormal or isomeric states of nuclear matter could be identified in heavy-ion collisions at the Bevalac. Some said, with tongue-in-cheek, that: "Heavy-ion collisions will compress the nuclei to such a degree that abnormal nuclear matter will be formed in the core of the compressed nuclei. This abnormal nuclear matter, being more stable than ordinary matter, will accrete stuff around it and grow to visible size. Being so massive it will drop to the floor of the experimental hall where one can weigh it and measure its radius, thereby determining its density!" Such an object, however, would be denser than ordinary nuclear matter ( $2 \times 10^{14}$  grams per cubic centimeter) and hence cannot be supported by steel or concrete and would fall to the center of the Earth! Further, what would prevent it from growing larger and larger until it would occupy the entire Earth? Simple estimates suggested that this could occur in a matter of seconds — and if it did no physicist would be around to be blamed for it! Moreover, it guaranteed that no physicist would ever win a Nobel Prize for the discovery of stable abnormal nuclear matter, since either this new state of nuclear matter does not exist, or the world would end before the Prize could be awarded. No one took all of this too seriously, and experiments with colliding beams of light and intermediate-mass nuclei proceeded apace.

(上に対する拙訳として)

「SuperHILAC と Bevatron (1954 年から運用開始を見ていた加速器) を結合して Bevalac とすることとなした主たる目的はその折に生成が望まれていた高密度の核物質を生成することにあつた。1974 年から 1975 年にかけて炭素および酸素の原子核にてのビーム(最初期ビーム)を 2.1 GeV (2.1 ギガエレクトロンボルト / 21 億ボルト) にまで加速し、それを諸種様々な核の対象らに衝突させた。ウラニウムの原子核を加速するためのアップグレードが必要となっており、1981 年から 1982 年にかけてウラニウムが 1 核子に対応するビームエネルギーにて 1 GeV のところまで加速された。

…(中略)…

Bevalac にての実験計画がはじまった折、誰も核物質が原子核の密度より 3 から 4 倍に圧縮された折に何が期待されることになるのか、分かつてはい

なかった。

…(中略)…

上にて記しているように 1974 年、リーとウィックが提案していたところでは「制約を課されての空間の領域、中性のスカラー場では異常な値(他の残りの宇宙と比した際にあつての異常な値)が得られるかもしれない、この状況は準安定的なことになりかねない」とのことであった。「仮にもしスカラー場が核子に対する結合にあつて十分に強いものであるのならば、それら質量は甚だしくもの減少を見、未だ観測されざりし物理状態につながるものとなる」。彼らは「これは重い原子核の中で起こるかもしれないことだが、重イオン衝突時にての原子核の圧縮はこの新しき核物質の状況を探索するのに明らかに適した方法である」と提案していた。

…(中略)…

上の遷移図(訳注:元となった PDF 資料には三種の状態遷移図が挙げられている)にあつての中程のものは原子核にての密度を超えたところにある順安定的な[ある種の密度におけるリーとウィックの異常状況]を示して見せている。同遷移図の右側は[リーとウィックの異常状況]が通常の核物質より低いエネルギーにて存在しているとの極端な場合を示しているものとなり、この場合にては通常の原子核は結果的に新しい核物質の状態へと結果的に崩壊していく。高密度状態の核物質に関する我々の知識はこのとき、あまりにも貧弱なるものであったため、誰も残り二つの可能性を排除することができなかった。

リーとウィックがそのような推測をした最初の間ではなかった。1971 年、Arnold Bodmer がクォークのモデルおよび核子らの間の軽い相互作用のところ、その基礎分野にあつて崩壊した原子核が形成されることになるかもしれないとの提案をなしていた。彼(Arnold Bodmer)は図 5 に示されるようなその異常状態をもってして分子にての異性体の状況との類似性を顧慮して異性体(isomer)と呼んだが、しかし、すぐにそれらは密集異性体(density isomers)と呼ばれるようになった。いかな理由あれ、しかしながらのこととして Bodmer ではなくリーとウィックが一般に異常な、ないしは、異性体的な核の状態の提唱者として知られている。

どのようにしてそのような新種の異常ないし異性体的な核物質の状況の具現化がベバラックにあつての重イオン衝突下にて特定化されうるところなのか、誰にも分からなかった。幾人かの者達は舌先でチークダンスを踊るように軽々しくも次のように述べている。原子核の中心にて異常なる核物質が生成されうるとのそうした程度にまで重イオン衝突が原子核を圧縮するだろう。この異常なる核物質、通常の物質よりも安定しているとのその物質はその「周辺の物質を付着させ増大していき」(訳注:accrete の辞書的定義は Grow or become attached by accretion(accretion 付着の過程で成長または付属化させていくとなる)、そして、視認できるほどに巨大化する。とても重い物へと成長していくため、重さを量ることが可能、半径を測ることが可能とのその存在は実験ホールの床に落とし込まれ、そこにはじめて密度を決することができるだろう! そのような物体は、だがしかし、普通の核物質(1立方メートルあたり  $2 \times 10^{14}$  乗グラム)よりも濃厚なるものであるため、鉄製およびコンクリートでは支えきれずに、地球の中核へと落ちていくだろう! さらに遠くまで行って述べれば、それがそれが地球上のすべてを占有するまで大きく大きくなっていることを妨げるものがあるだろうか。単純な推論はこれが「数秒の間に起こる」と提案し、そして、周囲には物理学者が非難の対象とすべき物理学者がいけないとのことになるのかもしれない! 加え

て、それはいかなる物理学者も「安定した異常な核物質」の発見によってノーベル賞を勝ち得ないことを保証してくれている、というのも、世界は賞の授賞の前に終わりを迎えているからである。誰もこのようなことすべてを重く受け取っておらず、光のビームと中間質量の原子核を衝突させての実験は速やかなる進行を見てきた。」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(続けて直下、同じくも Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks (訳せば『加速器による災厄のシナリオら、ユナボマー、そして、科学の孕むリスク』とでもなろう文書)、その論稿配布サーバー(arXiv サーバー)よりオンライン上にて配布されている PDF 版 p.10 よりの掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

---

The Unabomber apparently believed that certain applications of science, engineering, and technology were highly detrimental to human society and had to be stopped; this end justified his means. One man suspected that his brother was the Unabomber after he noticed a strong similarity in the style of writing between the Unabomber's manifesto and the letters he had received from his brother. He transmitted his suspicion to the FBI under the condition that if his brother indeed was the Unabomber and was found guilty of his crimes, he would not receive the death penalty. On April 3, 1996, Theodore (Ted) J. Kaczynski was arrested at his shack near Lincoln, Montana ( figure 6 ), which he had constructed himself and had lived in until then.

(拙訳として)

「ユナボマーは明らかに科学、工学、そして、技術のある種の応用が人間の社会に高レベルの損失をもたらさだろうこと、そして、人間の社会はそれを止めねばならぬと信じていた。この目的が彼の手段を正当化していた。とある男が「ユナボマー・マニフェスト」(ユナボマーの公開された犯行声明文)と「(その男が)自分の兄より受け取った手紙」の際立っての類似性に気づいた後より彼の兄がユナボマーなのではないかと疑うこととなった。彼(訳注: 事件史の問題としてチベット仏教系修道員運営者との顔を持っている David Kaczynski というユナボマーことセオドア・カジンスキーの実弟にあたる人物がここに表記されての「彼」である)はもし彼の兄がユナボマーであった場合、そして、彼が犯行にて有罪になった場合、彼が死刑を受けないだろうとの条件の下で彼の疑いを FBI に伝えた。1996年4月3日、セオドア(テッド)・カジンスキーがモンタナ州リンカーン群近辺の丸太小屋(図6)、そこはカジンスキーが自身で建築し逮捕のそのときまで住まっていたところだが、同丸太小屋にて逮捕された」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)



(さらに続けて直下、同じくも Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks (訳せば『加速器による災厄のシナリオら、ユナボマー、そして、科学の孕むリスク』とでもなろう文書)、その論稿配布サーバー (arXiv サーバー) よりオンライン上にて配布されている PDF 版 p.11 から p.13 よりの中略なしつつもの原文引用をなすとして)

---

The FBI had placed my good friends and colleagues Subal Das Gupta, Professor of Physics at McGill University in Montreal, and Gary Westfall, Professor of Physics at Michigan State University in East Lansing, on its bomb watch list about a year before Kaczynski's arrest. Westfall allowed the FBI to search his mail for bombs hidden in packages until a month after

Kaczynski's arrest; nothing was ever found. Das Gupta (figure 7), as a Canadian citizen, could refuse to allow the FBI to search his mail, which he did. I asked him why he did, and he replied: "I trust the Canadian postal system, the McGill University postal system, and I trust that my secretary would examine any package carefully before she gave it to me." (He was Chair of the Physics Department at this time.) Nothing was ever found.

Why then did the FBI place these two physicists on its bomb watch list?

Just before the Bevalac was to be turned off in 1993, I thought that the physics community would be well served if an article were published in Physics Today that would summarize what had been learned at the accelerator about dense nuclear matter. I suggested this to Gloria Lubkin, then Editor of Physics Today; she agreed and asked me to recommend authors for it. I recommended Westfall, an experimentalist, and Das Gupta, a theorist, both of whom had been involved with the Bevalac since the late 1970s. After they submitted their manuscript, Lubkin asked me to review it. I strongly supported its publication .

[ . . . ]

To my surprise and satisfaction, Das Gupta and Westfall thanked me for providing the impetus for writing this article," and they incorporated words from my draft paragraph almost unchanged, namely, writing that: "Meetings were held behind closed doors to decide whether or not the proposed experiments should be aborted." "Experiments were eventually performed, and fortunately no such disaster has yet occurred."

The committee that had met behind closed doors included and reported to Bernard Harvey, Associate Director of LBL's Nuclear Science Division; it is dated May 14, 1979, and I provide a transcription of it in the Appendix. The committee thus met about five years after the first experiments with light ions had begun at the Bevalac, but about two years prior to its upgrade to accelerate heavy ions like uranium. Thus, there apparently was little concern that colliding light ions would lead to abnormal nuclear matter, but considerable concern that colliding heavy ions might. In any case, based upon this one-page report the upgrade of the Bevalac was completed and heavy-ion experiments were carried out with it. No one

seriously believed that a disaster of the type imagined could ever occur, given that QCD is the relevant theory of the strong interactions and that high-density nuclear matter should not be described as such, but as quark matter. Nevertheless, this astonishingly brief report was never widely circulated among physicists. Indeed, my request to the LBNL Director's Office for a copy of it was acknowledged conscientiously, but their search came up empty: The LBNL Director's Office has no official record of it.

The FBI thus placed Das Gupta and Westfall on its bomb watch list, because the FBI thought they might be targets of the Unabomber, since they had written about, and apparently had participated in experiments that might have destroyed the human race.

(上に対する拙訳として)

「FBIは私の良き友らにして同僚ら、モトリオールにあるマギル大学の物理学部教授たる Subal Das Gupta とイーストランシングにあるミシガン州立大学の物理学部教授たる Gary Westfall をカジンスキー(ユナボマー)の逮捕のおよそ一年前に爆弾(標的)監視者リストに載せた。Westfall はカジンスキー逮捕の一ヶ月後まで FBI に彼への私信に隠された爆弾がないか探すことを許していた。そして、何も見つからなかった。カナダ市民となっていた Das Gupta (図7の人物)の方は彼への私信を FBI が調査することを拒み、実際にそうした。私は彼に何故か、と尋ねた。すると彼は答えた。「私はカナダの郵便制度を信じ、マギル大学の郵便制度を信じ、そして、私に渡す前にいかなる郵便物であれきちんと精査するとの私の秘書を信じていた(このとき、彼は物理学部門の学部長とのポストにあった)。同様に何も見つからなかった。

それではどうして FBI がこれら二人の物理学者らを爆弾監視リストに載せたのか?

加速器ベバラック(Bevalac)が1993年に運用停止に至る少し前、もし Physics Today 誌(米国会員向け物理学分野学会誌)に「濃密度核物質」(dense nuclear matter)につき加速器にていかなことが学ばれてきたのかを要約しての記事が載れば、(教訓との意で)物理学コミュニティはより良くも振る舞うだろうと私は考えていた。そこで Physics Today 誌の編集者である Gloria Lubkin にこのことを提案し、彼女は同意の上で適任の著者を紹介するようにと私に求めてきた。そこで私は双方ともに1970年代から加速器ベバラック(を用いての実験)に関与してきたとの(先にて言及の向きらとなる)実験家畑の Westfall と理論家畑の Das Gupta を推した。彼らが声明文を寄越してきた後、(フィジックス・トゥデイ誌編集者たる)Lubkin はそのレビューをなして欲しいと私に求めてきた。そこで私は強くもその刊行公開を支持した。

…(中略)…

私が驚き、また、満足させられもしたところとして、Das Gupta および Westfall は「この記事に執筆する原動力を与えてくれた」とのことで私に謝意を表してくれ、そして、彼らはほとんど手つかずの式にて私の草稿に合筆をなし、次のように書いてきてくれた。

「提案された実験が中止されるべきか否かの会合は閉じたドアの後ろ側で行われた(Meetings were held behind closed doors to decide whether or not the proposed experiments should be aborted.)」

「実験は結局実施され、幸運なことに何ら災厄は発生しなかった。」

( Experiments were eventually performed, and fortunately no such disaster has yet occurred. )」

閉じたドアの向こう側で実施を見た会合は LBL (ローレンス・バークレー研究所) 科学部門のアソシエイト・ディレクターたる Bernard Harvey を含んでのもの、そして、彼に報告されてのものである。それは 1979 年 5 月 14 日の出来事であり、私は付録としてその転写記録を呈示するとのことにした。この会合はこのように最初のベバラックの軽イオンによる実験が開始されてより 5 年を経て後のものであったが、ウラニウムのような重いイオンを加速させるためのアップグレードには二年ほど先んじてのものであった。このように明らかに軽イオンが異常な核物質の生成をもたらすとの懸念はほとんどなかったわけだが、重イオンがそれをなしうるとの懸念は思慮に値するものであった。なんであれ、この「1 ページの」完成を見たベバラック・アップグレードの報告書に基づいて重イオン実験らはそれとともに実行されてきた。QCD (量子色力学 / クォンタム・カラー・ダイナミクス) が強くもの相互作用に関わる関係性の理論である、そして、高密度の核物質がクォークがそうであるようにそうした表されようのものではなかろうとの中、誰も真剣には想像されるタイプの災厄が従前起こりえたかもしれないことを深刻には受け取っていない。にもかかわらず (訳注: 誰も深刻に受け取っていない中でのものである「にも関わらず」との意か)、この驚くべきほどに簡潔な報告書 (本件報告書) **this astonishingly brief report** は決して広くも物理学者らの間で流通を見なかった。「本当に、」私の LBNL (ローレンス・バークレー国立研究所) 責任者部署へのコピーを求めての要請は入念に (訳注: この場合、**conscientiously** コンシエンシャスリーは「良心的に」というより「入念に」と訳されるべきところである) も承認を見、しかし、彼らの調査の結果出てきたのは空っぽのものであった。LBNL (ローレンス・バークレー国立研究所) の統括オフィスはそれについての [公的な記録] を保持して「いなかった」のだ。

FBI はこうして Das Gupta および Westfall を爆弾標的監視リストに加えた、というのも FBI は彼らが人類を滅ぼしていたかもしれない実験に明らかに参加していたと判断されるかたちで (問題となる物理学分野学会誌に対して) 寄稿なしたから ユナボマーの標的になるかもしれない と考えたのである」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典 (Source) 紹介の部 11** は以上とする)

---

ここまで引用してきたとのオンライン上流通文書、

[ **Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks** ]  
(2007 年にドイツのシュプリンガー社が刊行する『フィジックス・イン・パースペクティブ』誌に寄稿されたとの回顧録的論稿 / 著者を Joseph I. Kapusta ジョセフ・

カプスタという物理学者とするもの)

の原文引用なした部 ——加速器実験に関わる実験関係者の無責任さがひしひしと伝わってくるような加速器実験関係者による証言が記されているとの部—— より導き出せることは次のことである。

「1970年代からして[[異常な核物質]が生成されその重みがゆえに地球のコアに落ちていく][間を経ずに地球全てを占有するかたちで巨大化する]との懸念があった(1974年にリーとウィック Lee and Wick の二人の研究者、あるいは、彼らの前に1971年に Arnold Bodmer という科学者が発表したところとして 異常核物質(分子における異性体(isomers)との相似性から density isomersとも呼ばれていたところの Abnormal Nuclear Matter)がそういう事態を引き起こすとの懸念があった —「比較的」真剣に取り上げられたのは(長くもの引用部をご覧ください確認いただきたいが)1974年以降ともとれる中でながらもそういう懸念があった— )」

「1979年に至るまでそうしたリスク問題についての安全性会合は催されなかった節があり、また、1979年に催されての会合からして公衆に全く知られぬ奥まったところで実施された( Meetings were held behind closed doors to decide whether or not the proposed experiments should be aborted.)ところとなり、その公式記録も全く残っていないとの有様である —ペラ一枚の報告もそれが公的文書としてはどういうわけなのか存在して「いない」ことになっていた— 」

状況を適正に摘示する上でのスタンスの問題として当たり前のことなのだが、話の異様性から申し添えるところとして、「上のことにこの身主観は介在していない」(すべて **Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks** の著者たる Joseph I. Kapusta という物理学者申しように依ってのみ導き出せることである —疑わしきには原文と訳文を対比させながら確認いただきたい— )。

さて、ここで述べておくが、本段で問題視しているのは

[公衆(たる人)を食っているような専門家らやりよう ——地球崩壊リスクが観念されたのにもかかわらず「人知れず」会合を催し、また、の折、熱意なしととれる安全検討しかなしていないとの節ありで、記録だに残していないとのやりよう—— ]

など「ではない」。

また、本段で問題視しているのは

[そのような問題を全く取り上げない米国メディアの怠慢や同じくもの問題を人間レベルでもたらしている者達を保護しこそすれ、決して問責しようとしなない米国当局のやりよう]

など「でもない」(※)。

(※上記のようなことを問題視しているわけ「ではない」と表記した件について書いておくが、  
[「人類に目立っての自浄能力などない。だからここまでできてしまったのだ」と述べざるをえぬとのことが本稿の「所与」の前提になっている。]

そうも述べざるをえぬとの重篤なる[情報](属人的主観など介在しておらぬ[情報])を呈示せんとするのが本稿であること、よく精査して黑白判断いただきたいものである——[マス;過半]として自浄能力なき種であっても[個]として自浄能力を何とか衆に波及させんとする者が(筆者が語るに足る人間と見るところとして)いるかもしれないとの[一縷の希望]を込めてそうも書く—— )

本稿で上記のようなこと(大げさにではなく、それ自体からして本来的には deadly deception [死に至る欺瞞]と問責されてもおかしくはなからうとのこと)を問題視したのは

「1974年に世に出た小説らから導き出せる相関関係、

すなわち、

[ [15兆電子ボルトの CEERN 加速器] (CERN 加速器ではなく CEERN 加速器) なるものを登場させている小説にして主人公が CEERN の運営するビーム装置を用いて [「底無し」の「黒々とした」「渦を巻く」穴] に自らを極小化させての分身を投入するとの内容の小説たる **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** (邦題) 『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』]

[極微ブラックホールが重力波通信機から漏れ出して惑星を食うとの内容を有している小説たる **The Hole Man** 『ホール・マン』]

の間に横たわる関係性について加速器実験機関関係者との間の暗流としての認識から説明がなせるのか、より正確には、その暗流に対する認識が一部の作家らに伝わっていたがために説明がなせるのか

ということを考察なすためである(によって説明が付けられないというのならば、「さらに、」その[真なる機序]とその[機序]がもたらしうる帰結に関して思索・考究を巡らせなければならないことになる)。

それにつき、強くも述べるが、先に長々と引用した文書、

[ **Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks** ] (2007年にドイツのシュプリンガー社が刊行する『フィジックス・イン・パースペクティブ』誌に寄稿されたとの回顧録的論稿／著者を **Joseph I. Kapusta** ジョセフ・カプスタという物理学者とするもの)

から導き出せるところの点ら、

---

「1970年代からして [ [異常な核物質] が生成されその重みがゆえに地球のコアに落ちていく] [間を経ずに地球全てを占有するかたちで巨大化する] との懸念があった(1974年にリーとウィック Lee and Wick の二人の研究者、あるいは、彼らの前に1971年に Arnold Bodmer という科学者が発表したところとして異常な高密度状況まで原子核を圧縮する同じくもの **異常核物質 (分子における異性体 (isomers) との相似性から density isomers とも呼ばれていたところの Abnormal Nuclear Matter)** がそういう事態を引き起こすとの懸念があった —「比較的」真剣に取り上げられたのは(長くもの引用部をご

覧いただき確認いただきたいが) 1974 年以降ともとれる中でながらもそういう懸念があった— )」

「1979 年に至るまでそうしたリスク問題についての安全性会合は催されなかった節があり、また、1979 年に催されての会合からして公衆に全く知られぬ奥まったところで実施された ( Meetings were held behind closed doors to decide whether or not the proposed experiments should be aborted.) ところとなっており、その公式記録も全く残っていないとの有様である —ペラ一枚の報告もそれが公的文書としては「どういうわけなのか」存在して「いない」ことになっていた— 」

との点らは

「1974 年に世に出た小説らから導き出せる相関関係、すなわち、

[ [15 兆電子ボルトの CEERN 加速器] (CERN 加速器ではなく CEERN 加速器) なるものを登場させている小説にして主人公が CEERN の運営するビーム装置を用いて [「底無し」の「黒々とした」「渦を巻く」穴] に自らを極小化させての分身を投入するとの内容の小説たる *Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W* (邦題) 『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』 [極微ブラックホールが重力波通信機から漏れ出して惑星を食うとの内容を有している小説たる *The Hole Man* 『ホール・マン』 ]

の間に横たわる関係性について上記のような加速器実験機関関係者の間の暗流としての認識から説明がなせるのか、より正確には、その暗流に対する認識が一部の作家らに伝わっていたがために説明がなせるのか」

とのことに関して何ら納得がいく回答を与えてくれはしない。

それは以下の理由による。

・第一。ベバラック運用に関して俎上に挙げられているものはそもそもブラックホールではない。それによる災厄の結果はブラックホールと同様に [地球の根腐れを伴っての崩壊] だが、俎上に挙げられているものが [異常密度の核物質] ( density isomers ) とのものであり、ブラックホールとは異質なものだとして解される。

・[時期的問題] と [通用性の問題] も大きなところとしてある。 [異常密度核物質生成「提唱」の時期] については 1971 年の申しようが科学者の中で市民権を得ずに 1974 年の申しようが提唱科学者らの名前と同時に受け取られたらしいとのことがある (当該問題について中途半端に告発するような僅少な文書としての引用元文書によるところ、である)。 とすると、1974 年の、問題となる小説刊行時期と同年であり、通用性の問題として小説家のような科学者「内」の表沙汰になっていない —1979 年にてのはじめての検討会議すら公衆の何ら知り得ぬところでのためのやりとりがなされたと引用元資料にて言及されているような式で表沙汰になっていない— ところのやりとりを汲んでいたのか全く期待できないとのことがある (: 尚、ハーラン・エリソンとい



う小説家はお世辞にも科学考証をきちんとやる手合いの作家「ではない」。分類上、サイエンス・フィクションとされている小説をものしてきたとの作家だが、同男の小説は(作者がそも理系人間ではない物書きであることもあり)空想小説との色彩の方が強くも出ている。—だが、それはただの空想小説ではなく悪い意味で寓意的でもある— とのことがあり、俎上として挙げている15兆電子ボルト加速器を登場させている小説 Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』からして「10億」電子ボルト(1ジェブ)と「1兆」電子ボルト(1テブ)の別をきちんとつけていないとの表記がみとめられる作品となっている(電子ボルトの単位記述に欠陥があること、先だって細かくも言及・解説しているようにそういう側面がある)との作品となっている)。また、仮にその額面上に見るおざなりさに反して作家ハーラン・エリスンが汎ミスを行っていたにすぎぬとの反面で科学考証をきちんと行っているとの人物でも1974年に加速器による異常な核物質生成が一部にて取り上げられていたことを認識する立ち位置にいたのか、また、1979年まで当の科学者らですら安全性検討を行っていなかったそのことを「隠喩的に」作品に込める必要性認識と知識保持を行っていたのか、極めて怪しいとのこともある。

・これが極めて重要となる。ハーラン・エリスンの Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38° 54'N,Longitude77° 00'13W (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』とラリー・ニーヴンの The Hole Man『ホール・マン』の結合関係から出てくる関係式はあまりにも先覚的かつ正確で、1974年(あるいは1971年)から1979年の暗流としての異常核物質生成問題でそのやりようの先覚性・具体性に異議を呈せられるような性質のものではないとのことがある。

先にて呈示の図も併せて参照いただきたいところだが、『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』をものした作家ハーラン・エリスンやりように関しては

「現行のLHCの最大出力 —これよりそこに出力アップするとされる場所の14兆電子ボルト— に往時加速器に比して比率ではるかに近いとの加速器を登場させ(LHCに比しては1.07倍しか強力ではないにも関わらず小説刊行往時のCERN加速器ISRに対しては240倍超も強力であるとの加速器を登場させ)、しかも、その加速器については(先にフェルミ国立加速器研究所由来の資料でもって示したように)小説刊行時の科学界の動向としていまだ[その規模の兆単位の加速器]の構想が青写真としてさえ持ち出されていなかったとのこともが摘示されることとなっており

「1998年の理論動向の変転を見るまでそれが加速器で生成されるとは考えられていなかった極微ブラックホールの生成を言い当てているようなことをなしている、しかも、(どういう料簡でなのか)隠喩的に言い当てているようなことをなしている」

との特性解説がなせてしまえるようなものとなっている。

表記のことから

[ (後のやりとりとの質的類似性とのからみで) 克明さ・具体性が際立つての先覚的

## 言及の存在]

を上記のような異常核物質の生成問題にまつわる暗流としての動向で説明づけようとするところには自ずと無理がある。

以上が

[1970年代の暗流としての科学者動向では作家らやりよう —およそ常識ではありえないようなやり方で後の科学発展動向を細やかに具体的に示し、もって、我々全員を殺すことを予告しているといったやりよう— に説明をつけることはできない]

とのことにまつわる解説である。

※「多少もってして印象を先行させてのものである」と断ったうえで(脇に逸れての話として)

上にては

Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks (2007年、ドイツのユプリンガー社が刊行する『フィジックス・イン・パースペクティブ』誌に寄稿されたとの回顧録的論稿)

よりの原文引用を通じて 1970年代に

[暗流として加速器による地球崩壊のリスク検討]

が公衆に何ら知られることなく、そして、ほとんど記録が残ることなくなされていたとの経緯があるとのこと、指し示したわけだが、同じくもの論稿ではその暗流のことが一部顕在化を見た、1993年発表の米国物理学分野会員誌(Physics Today)にて取り上げられることとなり顕在化を見た際にその企画に関わった物理学者らが一犯罪者による爆殺挙動を防ぐべくもの当局の監視兼保護対象となったとのことが取り上げられている。

すなわち、

[科学技術の深化が人類に重篤な打撃をもたらしうるとのことを信じていたとの格好]

で大学関係者や空港施設に爆弾を送りつけて犠牲者を立て続けに出していた爆弾魔ユナボマーの爆殺挙動の標的になることを恐れた当局によって監視兼保護対象となったことも取り上げられている。

同じくもの点につき問題となるところとしては —「であるから、」どういう意図が論稿作成者にあったのか、と思われるところとして— 次のようなこと「も」ある。

「爆弾魔ユナボマー(ネオ・ラッドライト活動、機械文明の行きすぎた進行を破壊的挙動によって阻止するとの建前を掲げていたもののその実のただの殺人鬼との評価が至当ともとれるセオドア・カジンスキー)と加速器による地球破壊が取り上げられた研究機関(ローレンス・バークレー国立研究所)の間には「論稿内では明示されていない」ところの深い関係性が存在する。

ユナボマーことセオドア・カジンスキーは

[カリフォルニア大バークレー校]

にて史上最年少の助教に就任、そこにて —学生からの受けは良くなかったものの将来を囑望されての大学教員として— 位相幾何学および関数空間について

講じていたとのが知られている者となる(出典として:オンライン上より誰でも確認できる場所として和文ウィキペディア[セオドア・カジンスキー]項目には(原文引用する場所として)[(セオドア・カジンスキーは)ミシガン大学で数学の修士号とPh.Dを取得。1967年に、25歳でカルフォルニア大学バークレー校の助教に就任した。カリフォルニア大学バークレー校では学部生に、位相幾何学や関数空間を教えていた。彼に対する専門性の評価は高く、大学の教員であり続けることのみならず、教授への昇進も期待されたほどだったという。しかし、教えたコースの学生からの評価は良くなく、多くのクレームがあった](引用部はここまでとする)と記載されている。また、ウィキペディアのように記載内容の変転は観念できない場所として同じくオンライン上より確認できるようになっている問題としているPDF論稿 Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks の p.11 には “ **he was appointed to an assistant professorship in the Mathematics Department at the University of California at Berkeley, from which he resigned without explanation in 1969. Calvin Moore, Vice Chairman of the Mathematics Department in 1968, said that "I think he could have advanced along the lines and been a senior member of the faculty."** (訳として)「(カジンスキーの専門性より)彼はカルフォルニア大バークレー校の数学部門の助教に指名され、1969年に説明することもなくそこを辞めるまでその職にあり続けた。カルヴィン・ムーア、1968年当時の数学部門の副学部長は「かれは学部のシニア・メンバーに進む道をすすむことができたと考えている」と述べている」(訳付しての引用部はここまでとする)と記載されている。問題なのは the University of California at Berkeley にまつわる縁(えにし)である。

他面、世界を崩壊させる装置としての加速器のことが問題視されだした Bevalac の実験が行われていたのも

[カリフォルニア大バークレー校]

の中に門を構える同校の一部と化しているローレンス・バークレー国立加速器研究所である(ローレンス・バークレー国立加速器研究所の運営・管理はカリフォルニア大学バークレー校が担っている(管轄はアメリカ原子力委員会転じての米国エネルギー省)。細かくは英文 Wikipedia [ Lawrence Berkeley National Laboratory ] 項目にて “ **The Lawrence Berkeley National Laboratory (LBNL, LBL), also known as the "Berkeley Lab", is a United States national laboratory located in the Berkeley Hills near Berkeley, California that conducts unclassified scientific research on behalf of the United States Department of Energy (DOE). It is managed and operated by the University of California, whose oldest campus, the University of California, Berkeley's main campus, it overlooks. Plans announced by the university in 2012 called for a second Berkeley Lab campus to be built on land it owns nearby at Richmond Field Station**” と記載されている通りである)」

上をただの奇縁で済ませてよいところか。その点、カリフォルニア大バークレー校に関しては(世界の中核、アメリカの大学らしく)その学生数からして極めて多く万単位の間人がそこにうずめいているようだが、ユナボマーことセオドア・カジンスキーは理論物理学よりもさらに純粋性を深化させての数学、理論物理学にツールを提供する数学を専門にして、位相幾何学に関する専門性の高さがゆえに同大学に最年少の助教として職を得ていたとの向きである。

であるから、「お身内」の問題として LBNL (ローレンスバークレー国立加速器研究所)で

## 運営されている Bevalac に関して

[世界崩壊の問題(異常に高密度な核物質に由来する人災としての世界崩壊の問題)]

が取り沙汰された(明示的には1979年に取り沙汰された)との前に同じくもカリフォルニア大学バークレーの数学科を(1969年に)去ったセオドア・カジンスキー、同男の凶行が(いいだろうか、連続爆弾テロがバークレー最年少教員だったカジンスキーの犯行によると発覚するその「前」から)[バークレーにての世界破滅に通ずると懸念視されていた挙動](物理学専門会委員誌に載せられた往時ベバラックにてのリスク発生にまつわるやりとり)と当局によって結びつけられていたというのはやはり — 専門領域の近接性もあって — 奇縁となる、との問題が首をもたげてくると解される場所である。

につき、 — [過度に行き過ぎての印象論に傾いての話] を確信犯的にそうしたものと断ってなすのだが — ユナボマーが仮に[スパイス]として用意された性質の悪い[お人形さん]であれば、どうか(向きによっては『誰が何の目的でそういうものを[スパイス]として用意しているというのか、用意できるというのか』と思われるかもしれない。そして、当然に『馬鹿げているだろう』と全否定したいところかもしれない。だが、本稿の内容を最後まで読めば、「仮にそういうことがあると仮定した場合、」誰が何のためにそういう[人形]を用意できるのか、また、どうしてそうしたことをやっているのか、ということを中心にかなりのお分りいただけるであろうと請け合う — ちなみにユナボマーについては(仮に実際にそこまでやっても[科学の殉教者]を造るだけに終わっただろうが)[バークレーでリスクあることに関わった人々は標的にしていない]とのことは上にて抜粋の論稿でも示されているところである — )。

また、加えての不快なる仮定を差しはさむところとしてユナボマーと同様の特質を兼ねそろえている類(人間の尊厳の問題を語る資格もないとの人間の尊厳に対する観念が欠如している類)でありながら権威の側に居所を得ている人間らが[我々を全員を殺す[落とし穴]を[その実の空っぽの中身しか伴っていない、あるいは、悪魔に媚びを売ることしかできない存在]として構築している]可能性は[ない]と言える、言い切れるのか。

本稿では — 当然に知っていてであろう、ユナボマーとバークレーの関係について論じることがなされていないとのオンライン上流布論稿 **Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks** から「何歩も何歩も先に進み」 — 逆のこと(楽観的ななどなれはしないとのこと)は明言できるが、その伝で希望的観測は一切なせない、そのことまで論じようとのものである(尚、ここでのユナボマーとバークレー人脈のつながりあいの話は半ば愚にも付かぬ印象論となつてはいるが、本稿はそうした印象論を斥け、基本的に堅い[論拠に依拠しての話]のみに重きを置いているとのものとなり、といったやりようのみ、同じくものこと、希望的観測などなせないのが本当の状況であるとのことを[証示]していくものであると揚言する。[そこまでのことをはきと呈示されて何かを変ええないのならば、そうした種族のありよう自体が悲劇であろう]との式にて、である)。

(脇に逸れての話はここまでとしておく)

「極めて重要なことである」と言わざるをえないことにまつわる考察を続ける。

次いで、

「1974年に世に出た小説らから導き出せる相関関係、  
すなわち、

[ [15兆電子ボルトのCEERN加速器] (CERN加速器ではなくCEERN加速器)なるものを登場させている小説にして主人公がCEERNの運営するビーム装置を用いて[「底無し」の「黒々とした」「渦を巻く」穴]に自らを極小化させての分身を投入するとの内容の小説たる **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』]

[極微ブラックホールが重力波通信機から漏れ出して惑星を食うとの内容を有している小説たる **The Hole Man** 『ホール・マン』]

の間に横たわる関係性について速器実験機関関係者の間の暗流としての認識から説明がなせるのか、より正確には、その暗流に対する認識が一部の作家らに伝わっていたがために説明がなせるのか」

とのことに関して

すくなくとも粒子加速器実験にあつては 1980年代に入ってから  
「真空の相転移」  
との現象を引き起こす可能性が取り沙汰されだしていた

とのことについて「も」 —ブラックホール生成問題と同様、加速器に起因する破滅的リスク具現化の可能性が問題視されたとのことでもあり— 取り上げておくこととする。

その点、「真空の相転移」との絡みではまずもってマーティン・リースという天体物理学者の手になる著作よりその申しようを引く ( :ここでその著書より引用をなすこととしたマーティン・リースという科学者は **Royal Society** [王立協会] との名前で知られるかのニュートンが初期の長を務めていたことでも知られる科学育成・促進団体、(フリーメーソンと歴史的に密なる関わりあいがあるとの指摘もなされてきた団体だがそれは置くとして)、同・王立協会の会長経験者でもある [斯界の泰斗] との扱いの学究である —バロン(男爵)の称号を持つ一代限定貴族でもある同男マーティン・リースにまつわる英文 Wikipedia [ Martin John Rees, Baron Rees of Ludlow ] 項目にて “ Martin John Rees, Baron Rees of Ludlow, OM, Kt, FRS (born 23 June 1942) is a British cosmologist and astrophysicist. He has been Astronomer Royal since 1995 and was Master of Trinity College, Cambridge from 2004 to 2012 and President of the Royal Society between 2005 and 2010. ” と記載されているとおりである— )。



# SOURCE

## 12

ここ出典(Source)紹介の部 12 にあつては原著 2003 年刊行(邦訳版 2007 年刊行)の、

マーティン・リース著 **Our Final Century: Will the Human Race Survive the Twenty-first Century?** (邦題)『今世紀で人類は終わる?』(草思社)

にあつての[真空の相転移]にまつわる部よりの引用を —— 「そも、真空の相転移とはいかなものなのか」とのことを示すため—— なしておくこととする。

(直下、2007 年刊行の邦題『今世紀で人類は終わる?』(草思社) p.154—p.157 よりの原文引用をなすとして)

一説では、それと同じく、粒子の衝突時に発生した高エネルギーを引き金に、空間の構造をズタズタにする「相転移」が起こる、といわれている。新しい相に転移した真空はその後、泡がふくらむように膨張していく。この泡のなかでは、原子は存在できない。すなわち、私たちや地球、果てはそれを取り囲む宇宙も「一卷の終わり」というわけだ。最終的には銀河系、いやその先まですっぽりのみこまれてしまうだろう。

…(中略)…

この種の高エネルギー実験は、一九八三年にはすでに物理学者の関心を集めていた。私はこの問題点について、プリンストン高等研究所をたずねた折、やはり研究所を訪れていて、のちにその教授となったオランダ人研究者、ピート・ハットといろいろ論じあった。

…(中略)…

その結果、実験の安全性をはかるひとつの方法として、同じようなことがいままでに自然界であったかを探る、という手があることに気づいた。するとどうだろう、一九八三年の計画にあった実験と似た衝突が、宇宙では日常茶飯事に見られることがわかった。



宇宙いっぱい宇宙線と呼ばれる粒子が光速で飛び交い、ほかの原子核と何度も衝突をくり返していたのである。その衝突の激しさはすさまじく、当時実行可能とされた実験ではとうていどり着けないものだった。このため、真空はそれほど壊れやすくはなく、粒子加速器の実験で何をしたところで、ズタズタになることはないという結論に達した。本当にそんなにもろかったら、そもそも人類誕生に至るまで、宇宙がもちこたえられたはずがない。

…(中略)…

近年になって、以前の懸念が再燃する出来事があった。アメリカのブルックヘブン国立研究所とジュネーブの CERN (欧州合同原子核研究機構) がそれぞれ、かつてないほどの高エネルギーで原子同士を衝突させるという実験計画を発表したのだ。当時のブルックヘブン国立研究所長、ジョン・マーバーガー (現・米大統領科学技術補佐官) は、実験の問題点を検討するよう専門家に依頼。それを受けて、ハットと私がやったようなやり方で検討が重ねられた結果、真空の破壊をきっかけに「宇宙最後の日」が到来する危険はない、との専門家のお墨付きが出た。だが物理学者たちも、ストレンジレットによって生じる危険については、そこまで完全に安心できると請け合うことはできなかった。

…(中略)…

宇宙で「自然に」起こる衝突の大部分は星間空間で発生している。ここは非常に希薄な空間なので、衝突によってストレンジレットが仮に発生しても、また別の原子核に出会うことはまず考えられない。おかげで、制御不能な反応が起こる心配はおそらくない。粒子が地球に衝突する場合も、粒子加速器の場合とは本質的に違う。やってくる原子核は大気にぶつかって止められるが、その大気には、鉛や金といった重い原子は存在しない。もっとも、高速でやってくる原子核のなかには、これらの重い原子を含む月の固体表面を直撃するものがある。月の誕生以来、こうした衝突は何度もあった。それでもなお月が存在するという動かしがたい事実を盾にとり、ブルックヘブン国立研究所の報告書は、計画にある実験で地球が消滅することはない、と結論づけた。

---

(訳書よりの引用部はここまでとする)

(直下、続いて上の訳書記述に対応する 2003 年刊行の *Our Final Century: Will the Human Race Survive the Twenty-first Century?* 原著テキスト — 容易にその通りの記載がなされていること、確認できる場所としてグーグル検索エンジンサーチボックスにそちら抜粋したテキストを入力すればソース特定できようとの原著原文 — よりの引用をなすとして)

---

Likewise, some have speculated that the concentrated energy created when particles crash together could trigger a "phase transition" that would rip the fabric of space itself. The boundary of the new-style vacuum would spread like an expanding bubble. In that bubble atoms could not exist: it would be "curtains" for us, for Earth, and indeed for the wider cosmos; eventually, the entire galaxy, and beyond, would be engulfed.

[ . . . ]

Back in 1983, physicists were already becoming interested in high-energy experiments of this kind. While visiting the Institute for Advanced Study in Princeton, I discussed these issues with a Dutch colleague, Piet Hut, who was also visiting Princeton and subsequently became a professor there. (The academic style of this institute, where Freeman Dyson has long been a professor, encourages "out of the box" thinking and speculations.) Hut and I realised that one way of checking whether an experiment is safe would be to see whether nature has already done it. The entire cosmos is pervaded by particles known as cosmic rays that hurtle through space at almost the speed of light; these particles routinely crash into other atomic nuclei in space, with even greater violence than could be achieved in any currently feasible experiment. Hut and I concluded that empty space cannot be so fragile that it can be ripped apart by anything that physicists could do in their accelerator experiments. If it were, then the universe would not have lasted long enough for us to be here at all.

[ . . . ]

The old fears resurfaced more recently when plans were announced, both at the Brookhaven National Laboratory in the US and at the CERN laboratory in Geneva, to crash atoms together even more forcefully than had been done before. The director of the Brookhaven Laboratory at the time, John Marburger (now President Bush's scientific advisor), asked a group of experts to look into the issue. They did a calculation along the lines of the one that Hut and I had given, and offered reassurance that there was no threat of a cosmic Doomsday triggered by tearing the fabric of space. But these physicists could not be quite so reassuring about the risk from strangelets. Collisions with the same energy certainly occur in the cosmos, but under conditions that differ in relevant respects from those of the planned terrestrial experiments; these differences could alter the likelihood of a runaway process.

---

(引用部はここまでとする)

上記の引用部に見るように

「1983年には粒子加速器によって真空 (Vacuum) が破壊され、もって、宇宙そのものが破壊されるとの相転移現象が起こりうるとの可能性が呈示されていた中、安全性検討がなされ、マーティン・リースとピート・ハットの両二名の[功績]で宇宙線における高エネルギー状況の比較検証との手法が考案されることとなり(表記の引用部では “ **Back in 1983, physicists were already becoming interested in high-energy experiments of this kind. While visiting the Institute for Advanced Study in Princeton, I discussed these issues with a Dutch colleague, Piet Hut, who was also visiting Princeton and subsequently became a professor there. [ . . . ] Hut and I realised that one way of checking whether an experiment is safe would be to see whether nature has already done it. The entire cosmos is pervaded by particles known as cosmic rays that hurtle through space**

at almost the speed of light; these particles routinely crash into other atomic nuclei in space, with even greater violence than could be achieved in any currently feasible experiment. Hut and I concluded that empty space cannot be so fragile that it can be ripped apart by anything that physicists could do in their accelerator experiments.”

(訳表記)「その結果、実験の安全性をはかるひとつの方法として、同じようなことがいままでに自然界であったかを探る、という手があることに気づいた。すると実験と似た衝突が、宇宙では日常茶飯事に見られることがわかった。宇宙いっぱい宇宙線と呼ばれる粒子が光速で飛び交い、ほかの原子核と何度も衝突をくり返していたのである。その衝突の激しさはすさまじく、当時実行可能とされた実験ではどうしてどり着けないものだった」と記載されているところである)、 そこからそういうことは起こらないとの保証がなされた」

との物言いがなされている(マーティン・リースという[斯界の泰斗](大物学者)によって、である)。

(**出典(Source)紹介の部 12**はここまでとする)

---

上にての**出典(Source)紹介の部 12**で引用なしたような解説のなされようが安全性論拠を「導き出した」とする学界の権威筋(最終的に王立協会の会長にまでなりもしたマーティン・リース)によってなされているとの現象、[真空の相転移]のことがはじめて問題視されるようになったのは何時頃なのか(リース著作では安全性論拠が導出されたのが1983年と表記されているが、問題視がなされた端緒は一体何時に求めることができるのか)。については1980年頃からであると判じられるようになっているとの典拠を以降の出典紹介部にて挙げる。

---

**出典(Source)紹介の部 13**



SOURCE

13

ここ出典(Source)紹介の部13にあっては本稿筆者が考究の中で検討することとなった資料、

## Anthropic Shadow: Observation Selection Effects and Human Extinction Risks

という論稿よりの引用を[一体全体、加速器における真空の相転移発生可能性問題にまつわる危惧の始点はどこにあるのか]とのことの絡みでなしておくこととする——同論稿、表題訳すれば、『人類に対する影:観測選択効果(オブザーベーション・セレクション・エフェクト)および人類滅亡リスクら』ともなる論稿となり、当方が『確率論としてLHCのリスクを考えるアプローチで当方想起の手法と同様のことをやっている論稿は当然にあるはずであろう』と考えつつ探っていた際に同定した論文である。そして、その作者を哲学者ニック・ポストロムとしているとの論稿となる(ニック・ポストロムについては和文ウィキペディア[ニック・ポストロム]項目より引けば“ニック・ポストロムはスウェーデン人の哲学者であり、オックスフォード大学教授。人間原理に関する業績で知られる。ロンドン・オブ・スクール・エコノミクスで2000年に博士号を取得。学会誌や一般誌に論文や記事を書く傍ら、様々なメディアにも登場し、クローニング、人工知能、精神転送、人体冷凍保存、ナノ・テクノロジー、シミュレーテッドリアリティといったトランスヒューマニズム関連の話をしている”(引用部はここまでとする)との科学トピック流布サイド、そして、権威あるところとされる方面に属する人間である)——。

(直下、オンライン上に流通しているニック・ポストロム論稿 Anthropic Shadow: Observation Selection Effects and Human Extinction Risks にての 6. ANTHROPIC SHADOW AND RISKS FROM PHYSICS DISASTERS (人類に対する影および物理学に起因する災厄)と振られた箇所よりの引用をなすとして)

---

Such an event would not only extinguish humanity but also completely and permanently destroy the terrestrial biosphere. Coleman and De Luccia first mentioned the possibility that such a disaster might be caused by the operation of high-energy particle colliders used in physics research.

(拙訳として)

「そのようなイヴェント(訳注:直近述べてられているところの vacuum phase transition or a comparable quantum field collapse こと[真空の相転移またはそれに匹敵する量子化された場の崩壊])は人類を消滅させるだけでなく完全かつ永遠に地球の生物圏を破壊するようなものとなる。ColemanとDe Lucciaが「最初に」そのような災厄が物理学分野での探求活動にて用いられる高エネルギー粒子加速器にて引き起こされるかもしれないとの可能性に言及した」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上にて引用なしたニック・ポストロム論稿(Anthropic Shadow: Observation Selection Effects and Human Extinction Risks)の上記の申しようの部にては

「ColemanとDe Lucciaが「最初に」そのような災厄が物理学分野での探求活動にて用いられる高エネルギー粒子加速器にて引き起こされるかもしれないとの可能性に言及した」

との部の出典として

### Gravitational effects on and of vacuum decay

との「1980年初出の」論文（訳すれば『重力の効果および真空の崩壊』ともなろうところの論文 —その内容は続いての段で引用なしておく—）が挙げられている。そこから「1983年に」マーチン・リースらによって[宇宙線との比較]による解決策が考案されたともされる真空の相転移リスクがはじめて問題視されだしたのは「1980年からである」と解されるようになっている。

(出典(Source)紹介の部 13 はここまでとする)

続いて1980年にどういった物言いがなされていたのか、そこまで示すべく引用をなしておく、上に言及したところの Gravitational effects on and of vacuum decay との論文よりの引用をなしておくこととする。

■ 外挿付記としまして：ここ【典拠紹介部 14】には「長くもの」p.177 から p.184 との頁数を割いているため、以降【典拠紹介部】(従たるところ) と【指し示しの主軸たるところ】の関係について惑われぬよう、何卒ご注意ください。また、「お勧めはいたしません」が典拠委細読み飛ばしのうで内容把握なそうとの向きにおかれましては(歩を進めていただきもし)本書 p.184 から読解いただければ、と考えています。

出典(Source)紹介の部 14



# SOURCE

## 14

ここ出典(Source)紹介の部 14 にあつては直前の出展紹介部にて引用元とした資料、Anthropic Shadow: Observation Selection Effects and Human Extinction Risks の中で真空の相転移に伴うリスクについて扱った(嚆矢的なものとしての)論稿として言及されている Gravitational effects on and of vacuum decay よりの引用をなしておくこととする。

(直下、Sidney Coleman(往時、スタンフォード・リニア・アクセレーター・センターこと SLAC 所属の物理学者)と Frank De Luccia(プリンストン高等研究所所属の物理学者)の両二名の手になる1980年の論稿 Gravitational effects on and of vacuum decay の冒頭頁冒頭部よりの引用をなすとして)

---

It is possible for a classical field theory to have two stable homogeneous ground states, only one of which is an absolute energy minimum. In the quantum version of the theory, the ground state of higher energy is a false vacuum, rendered unstable by barrier penetration. There exists a well-established semiclassical theory of the decay of such false vacuums. In this paper, we extend this theory to include the effects of gravitation. Contrary to naive expectation, these are not always negligible, and may sometimes be of critical importance, especially in the late stages of the decay process.

(拙訳として)

「[古典的な場の理論]にあつては二つの同質な基底状態(グラウンド・ステイト、ミクロの世界にての最低のエネルギー状態)を持つとの式が可能となり、うち片方のみがエネルギーの絶対的最低状況にある(訳注:絶対零度で原子の振動が完全に停止しているとの言いようが古典力学ではなされていとされる)。理論を量子を念頭に置いてのものとして見た場合、より高いエネルギーにての基底状態は障壁を貫くとの式にて不安定と描写される[偽の真空](フォールス・バキューム)となる。そのような[偽の真空]の崩壊にまつわるよく構築された純古典主義的理論がある。この論文ではこの[理論]を重力の効果を含めてのものに拡大する。無邪気なる期待に反して、これらは無視できるどころではなく、場合によっては極めて重要になりうる、殊に後期の崩壊過程にてはそうである」

---

(訳を振つての引用部はここまでとする)

(直下、続けて、同じくもの 1980 年の論稿 Gravitational effects on and of vacuum decay の冒頭頁中列左の部よりの引用をなすとして)

---

In this paper, we extend the theory of vacuum decay to include the effects of gravitation. At first glance, this seems a pointless exercise. In any conceivable application, vacuum decay takes place on scales at which gravitational effects are utterly negligible. This is a valid point if we are talking about the formation of the bubble, but not if we are talking about its subsequent growth. The energy released by the conversion of false vacuum to true is proportional to the volume of the bubble; thus, so is the Schwarzschild radius associated with this energy. Hence, as the bubble grows, the Schwarzschild radius eventually becomes comparable to the radius of the bubble.

(拙訳として)

「本論文では我々は真空の崩壊にまつわる理論を[重力]の効果を含めてのものへと拡大する。一見する限りはこれは的はずれな挙に見える。想像できる限りのいかなる応用のやりようでも[真空の崩壊]は重力の効果が無視できるスケールにてのみ発生する(からである)。これは泡(バブル)の形成について我々が話しているのであるのならば妥当な見方であるが、その泡の[後の成長]について話しているのであれば、妥当なものとはなら



ない。[偽の真空](フォールス・バキューム)の[真なる真空]への移行にて解き放たれるエネルギーはバブルの規模に見合ったものとなる。このようにシュヴァルツシルト半径はこのエネルギーに関連付けさせられるものである。その上、バブルが成長する際、シュヴァルツシルト半径は結果的にバブルの半径に匹敵できるとのものとなる」

(訳を付しての引用部はここまでとする ー※ー )

上記引用部に対して長く、かつ、込み入った注記を付しておく

#### ※注記として(1)

表記の論稿 *Gravitational effects on and of vacuum decay* (1980) よりの抜粋部では [偽の真空] (フォールス・バキューム) といった普通人には意味不明な言い回しが用いられているが、同語 ([偽の真空]) については専門家の話柄にてはよく用いられるものと解され、日本語ウィキペディアにすら記載されているところ、現行の [偽の真空] 項目よりの原文引用をなせば次のような解説が一般になされているところのものとなる。

(直下、和文ウィキペディア [偽の真空] 項目よりの原文抜粋をなすとして)

現在の宇宙は真空の相転移を経験したため、真空の状態としては最も低いエネルギーの状態になっていると考えられる。しかし、現在の真空が真の真空であるという確証となる理論はなく、極めて長い時間スケールの準安定状態、すなわち偽の真空の状態にあるのではないかという説が存在する。

我々の宇宙の真空が真の真空なのか偽の真空なのかは、ヒッグス粒子とトップクォークの質量により知ることができる。このうちヒッグス粒子の質量は、2012年7月4日に発表された値では  $125.3 \pm 0.5 \text{ GeV}$  または  $126.0 \pm 0.4 \text{ GeV}$  とある程度正確に求まっているが、トップクォークの質量は  $172.9 \pm 1.5 \text{ GeV}$  とやや精度が荒い。このため、現在の理論では真空の安定性は安定と準安定のちょうど境界に位置する事になる。なお、ヒッグス粒子を事実上発見したという発表のあった2013年3月14日移行に、一部に「真空が準安定状態である」事が確定したというような記事が存在するが、これはトップクォークの質量の不確かさを顧慮しないで書かれた誤報である。トップクォークのより正確な結果を求めるには、現在あるテバトロンやLHCでは難しく、次世代の加速器であるILCの登場を待たないといけなるとされている。

もし、現在の我々がいる宇宙の真空が偽の真空であった場合、ポテンシャルの極小値に滞留している状態に過ぎない。例えると、坂道を転がるボールが、坂を下りきる途中の穴に転がり落ちた状態である。ポテンシャルの障壁を乗り越える、すなわち落ちたボールが外に飛び出て再び転がるには、ボールが穴から強く蹴り上げられるか、穴の横の地中を直接通り抜けて再び地面に戻るかのどちらかの方法をとらなければならない。現在の真空が相転移するこの現象を「真空の崩壊」と呼ぶ。

ボールを強く蹴り上げるというのは、真空に高エネルギーを与える事である。

具体的には、高エネルギーの粒子の衝突で発生する。このような例で身近なのは、加速器で粒子を加速させ衝突させる実験である。

実際、LHC の建設や運用の反対運動の中には、真空を崩壊させる可能性も理由として含まれていた。しかし、最大で約 10TeV の出力を持つ LHC に対し、自然界には超高エネルギー宇宙線と呼ばれる、最大で 320EeV と、実に LHC の 3000 万倍もの高エネルギーな宇宙線が絶えず地球大気を構成する粒子に衝突している。このため、宇宙のどこかで真空の崩壊が発生しても、それは自然現象における高エネルギー現象であり、人為的な行為で発生する可能性はきわめて低い。

(引用部はここまでとする)

上もてお分かりだろうが、偽の真空 —[真空]として準安定性のもの— に起因する、  
[[真空の相転移] という破滅的事態]

の発生可能性が懸念されてきたとの経緯がありもする([偽の真空]、それが加速器による高エネルギー状態を引き金に[遷移]をなしはじめた場合に世界が終わるとの懸念も呈されていたと上にて記載されていること、お分かりのことか、と思う)。

その点、さらに細かくものところに分け入って注記を続ければ、直近和文ウィキペディア [偽の真空]項目よりの表記引用部では

「LHC 実験の 10 テラエレクトロンボルト (TeV) の 3000 万倍の 320 エクサボルト (EeV.320×100 京電子ボルト) の高エネルギー宇宙線が飛び交っているから安心である」

とされているが、「実験室系」と関係者には呼称されることがあるとの[加速器によって実現されるエネルギー]については(10 兆電子ボルトが額面に出されていても)「宇宙線規模」に換算すると 10 の 13 乗(10 兆)ではなく、10 の 17 乗電子ボルトの規模に相当するものとなると「も」されている(少なくとも本稿筆者はそのように質問発した物理学者から聞き及んでいる)。ために、「10 の 13 乗」ではなく「10 の 17 乗」のエネルギー規模のものを「10 の 20 乗」の宇宙線(GZK 限界というものを超える超高エネルギー宇宙線については 10 の 20 乗電子ボルト級のエネルギーが観念される)と比較顧慮した場合、その規模は 3000 万倍(本稿執筆時現況のウィキペディア記述に見る倍率表記)ではなく 1000 倍の差異であるとのところが妥当な申しようであるように「も」受け取れる( : 誰でも容易に検証できるとの典拠をひたすらに重んじての本稿にあっておおよそ重きをおけぬようなところ、比較検証の手段が十分に担保されていないところでの耳学問にての話ながら、とにかくも、筆者が専門家筋より聞き及んでいる話からはそのような心証を受ける。については「過度に専門的なこと、それがゆえに本稿の主たる内容との絡みでは放念いただいてもよいことである」「真正さについてはここでのそれに関する限りは請け合いかねると断っておく」と申し添えざるをえぬことを述べているわけであるが、確認に力を入れたいとの向きにあっては [実験室系の加速器エネルギー] と [宇宙線] についていろいろと調べてみられ、手ずから確認されてみるのもよからう)。

また、上のウィキペディア [偽の真空] 項目よりの引用部では[真空の相転移]の発生リスクを否定することができる論理として宇宙線との比較顧慮がなされているとのことが取り上げられているが、そちら宇宙線との比較方式は[真空の相転移]のみならず [ブラックホール生成問題] や [ストレンジレット(先にも既述のように加速器にて生成されうる周囲のものを同種のものに変換しだす恐れがあるとの仮説上の粒子)生成問題] に関して「も」安全性

論拠として持ち出されるに至っているとのものである。そして、その [宇宙線との比較顧慮] に全面的な安全論拠を求めるべきであるとするやりように対しては

[粒子加速器にては[自然の状況]ではなく[不自然なる状況]が問題になる  
のだから宇宙線を具にしての安全性論拠に全幅の信を置くべきではない]

と疑義を呈する声もあると申し述べておく ——※たとえば、([真空の相転移]とは異質の話となるが)、電氣的に中性のブラックホールが加速器にて生成された場合、そこにて宇宙線との比較方式を持ち出すことには問題があるともされており(安全性論拠としては十分ではないとされており)、加速器製の中性のブラックホールの不自然なる状態と対比すべくも、の事例を特別に特定した白色矮星などのかたちにて自然界に見出せなければ万全ではない、との言いようも当の実験関係者の理論家筋よりなされていたりすることがある(:についても「これまた細かいこと、本稿の核たる部との兼ね合いでは過度に脇に逸れての話がゆえに放念なしていただいてもかまわないとの筋目のことである」ととらえているが、疑わしきにおかれては[(国内実験参画機関の中でも)海外の安全性論拠呈示文書を簡約してオンライン上に公開しているとの KEK(高エネルギー加速器研究所)の安全性訴求ページ]にあつての電氣的に中性なブラックホールが生成された場合に関する解説の部を参照されたり、(科学論文の類を読み慣れているとの識見豊富な方におかれては)、そうした国内関係機関の解説の元となつているところの 2008 年に世に出た *Astrophysical Implications of Hypothetical Stable TeV-scale Black Holes* との論文(『仮説的なるテラエレクトロンボルト領域での安定化したブラックホールにまつわる天体物理学上にての含意』とでも訳されるもので当然に筆者も出来る範囲で検討している論文であり、GM ペーパーと作成者らの頭文字をとって俗称される中で実験の分析をなしている向さらに重要視されもしているとの論文)などの内容をダウンロード(表記のタイトル入力でダウンロード可能)の上で確認されてみるのもよからう——)。

※注記として(2)

こちら注記の部は上の注記部表記以上に込み入ったものとなり、(自身門外漢としての話をなしている中ながら)、門外漢に忌避されるような性質の話を(注記として)なすとの部位であること、まずもって断つておく。

さて、上にての論文 *Gravitational effects on and of vacuum decay* (1980) よりの引用部では

[シュヴァルツシルト半径]

との言葉が持ち出されているが(具体的には “ The energy released by the conversion of false vacuum to true is proportional to the volume of the bubble; thus, so is the Schwarzschild radius associated with this energy. ” 「[偽の真空](フォールス・バキューム)の[真なる真空]への移行にて解き放たれるエネルギーはバブルの規模に見合ったものとなる。このようにシュヴァルツシルト半径はこのエネルギーに関連付けさせられるものである」などの言及がなされているが)、科学に多少なりとも詳しく向きがその言葉、シュヴァルツシルト半径より想起されることになるのは

[ブラックホール]

のことであろうか、と思われる。

というのも —— [ブラックホールというものの定義それ自体に関わる] との意味で —— 有名なところとして

「天体をシュヴァルツシルト半径よりも小さい領域に圧縮するとブラックホールができあがる」

とのことが広くも認知されていることがあるからである(:シュヴァルツシルト半径については

本稿の後の段でも一般的説明のなされようについて解説するが、同じくものことについては、たとえば、目に付くところの和文ウィキペディア [シュヴァルツシルト半径] 項目にて(引用なすとして) “ 1916年、シュヴァルツシルトはアインシュタインの重力場方程式の解を求め、非常に小さく重い星があったとすると、その星の中心からのある半径の球面内では曲率が無限大になり(下記にあるように、現在はこの考えは誤りとされている)、光も脱出できなくなるほど曲がった時空領域が出現することに気づいた。その半径をシュヴァルツシルト半径 (Schwarzschild radius) または重力半径と呼び、シュヴァルツシルト半径よりも小さいサイズに収縮した天体はブラックホールと呼ばれる ” (引用部はここまでとする) との記載がみとめられるようなところとなる)。

そうもして[シュヴァルツシルト半径がブラックホールと紐付くところとなっている]ところで[加速器の真空の相転移リスクに通ずることを扱っているとのことで問題となる1980年論稿(上にて事細かな引用をなしている論稿)]「でも」シュヴァルツシルト半径のことが目立つように言及されているとのことがあるわけである。

その点につき、

**「1980年からしてブラックホールと似たようなものの生成可能性が真空の相転移が問題視される中で取り沙汰されていたのでないか」**

と門外漢には見えもするところである(筆者は当然、強くもそう訝(いぶか)った)。

そして、実際、ここでの話に見る[泡 bubble] ——シュヴァルツシルト半径の関係式(お調べいただければお分かりになるうところとして  $r=2GM/c^2$  との式)にも[万有引力定数]としてGの文字で入れ込まれている重力と関係すると論じられている泡(バブル)—— がブラックホール(的なるもの)と結びつけられている節があることは

「実際にそうではないのか」

と言えそうなところがある(明言はなせないのだが)。

しかし、だからといって、

**「1980年との問題となる表記を含む論稿が世に出た折にブラックホール生成が観念されていた」**

とは言えないようになっている。

その点については

**「プランク・エネルギー実現の仮定」**

というものが専門家ら言い様に介在している、そして、プランク・エネルギーとは兆単位の電子ボルトとはあまりにも異質な量のエネルギーとなっているとのことがあると解されるようになっていたとのことがあるからである(そちらプランク・エネルギーについては本稿の後の段にて出典に依拠しての解説を講じることになる)。

さらに述べれば、1974年にて世に出た小説 The Hole Man (邦題)『ホール・マン』の中の、

(先の **出典(Source) 紹介の部7**にて文言抜粋なしているところよりの「再度の」引用をなすとして)

There was a time when black holes of all sizes could form. That was during the Big Bang, the explosion that started the expanding universe. The forces in that blast could have compressed little local vortices of matter past the Swarzschild radius. What that left behind -- the smallest ones, anyway -- we call quantum black holes. 「ある時期には、あらゆるサイズのブラックホールが形成され得たことがあるんだ。膨張宇宙がはじまる『大爆誕(ビッグ・バン)』のときさ、その爆発の力で、局所的な物質の小さな渦が、シュワルツシルド半径をこえて圧縮された。そこでできたもの —— とにかく、中でもとくに小さいやつ ——

を、量子ブラックホールというんだ」

(再度の引用部はここまでとする)

といった(科学界の一般理解を半面で体現した)記載と論稿 Gravitational effects on and of vacuum decay (1980) にての

“This is a valid point if we are talking about the formation of the bubble, but not if we are talking about its subsequent growth. The energy released by the conversion of false vacuum to true is proportional to the volume of the bubble; thus, so is the Schwarzschild radius associated with this energy. Hence, as the bubble grows, the Schwarzschild radius eventually becomes comparable to the radius of the bubble.” (訳として)「これは泡(バブル)の形成について我々が話しているのであるのならば妥当な見方であるが、その泡の後の成長について話しているのであれば、妥当なものとはならない。[偽の真空](フォールス・バキューム)の[真なる真空]への移行にて解放されるエネルギーはバブルの規模に見合ったものとなる。このようにシュヴァルツシルト半径はこのエネルギーに関係づけさせられるものである。その上、バブルが成長する際、シュヴァルツシルト半径は結果的にバブルの半径に匹敵できるとのものとなる」

との部は [ 「原初のブラックホール」と「ビッグバン」と「シュヴァルツシルト半径」 ] とのことで話が相通ずるものであるように見えもするところがあるとのこともある。

それについては、

「加速器実験とはビッグバン(大爆誕)の状況を再現するとのものとなり、そこにて真空の相転移リスクが取り沙汰されている」

とのこともあいまって「話が似通っている」ようにとれるようになって「も」いるとのことがある(：尚、小説『ホール・マン』の作者ラリー・ニーヴンの執筆活動に対して多くアイデアを提供していたのは重力を専門としていた SF 作家にして物理学者(米空軍のコンサルタントともなっていた物理学者)である Robert Lull Foward であるとされていること「も」気になるころではある。この身が Robert Lull Foward の未来予測・目分量が集約されている節ある主要著作、**Future Magic HOW TODAY'S SCIENCE FICTION WILL BECOME TOMORROW'S REALITY** (邦題)『SF はどこまで実現するか 重力通信からブラックホール工学まで』を読んでみても、そこにブラックホールを「加速器でもってして」生成できる可能性に対する言及など見出せなかったと申し述べつつ、書けば、である)。

それがために、[シュバルツシルト半径]、そして、[(原初ビッグバンの状況と結びつく)真空の相転移]が問題視されている 1980 年特定論稿にては

[「ビッグバンの折の状況とブラックホールの特異点の性質が似通っている」]との話がある、[それがゆえの相似形ではないか]と解されるところでもある(直下にて書籍での言われようを引いておく)

ようになっているのだが(ただし請け合うことはできない)、また、さらには、

ビッグバン直後の状況が [ブラックホール生成] と結びつけられての観点も介在していたように受け取れるが、それが人間の手によって実現しうるかと述べれば、プランク・エネルギーにまつわる仮定のために斥けられてきたとのことがある(先述なしたところとしてプランク・エナジーについての話は後の段にてなす)

とのこと「とも」なっているのだが(こちらについては門外漢でもそうした言い様が専門家筋にてなされてきたとのことそれ自体は確認できるところとなる)、とにかくも、一応の事細かな言及をなしておいた。

(⇒[ビッグバンの特異点]と[ブラックホールの重力の特異点]が近似しているとのことについては、たとえば、(本稿にてのかなり後の段にてあって同著よりの引用を事細かになすつもりであるとの書物となるが)、ロンドン大学にて科学史を講じていた科学史家アーサー・ミュラーに手になる書でブラックホール理論の開闢についての解説を講じている著作たる、

**Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes** の邦訳版『ブラックホールを見つけた男』(草思社)

にて次のような記載がなされているところである。

(直下、上著作訳書にあっての p.432 から p.433 より原文引用をなすとして)

古典物理学の法則からは無限という特異点が現われ、容認することのできない矛盾が生じてしまう。けれども、自然をもっと現実に即して記述する量子物理学なら、古典物理学が立ち往生してしまう無限を扱うことができる。ブラックホールの奥底では、量子重力の法則があとを引き継ぐ。物理学者たちの推測では、そのような極限状況にある領域では時間と空間は引き裂かれ、出来事の因果関係は消え、時間の前後の区別がなくなるとされている。量子物理学の法則は異様さと曖昧さの始まりを示すものである。時間と空間は切り離される。空間は明確な形を失い、あとに残るのは、決まった形をもたない石鹸の泡の塊のような「量子の泡」の揺らぎである。そこは確実なものがいっさいない、確率が支配する世界である。この先、さらにどんな驚異が待ち構えているのか、想像するだけでぞくぞくする。数学の観点から見れば、重力の底なし穴(ブラックホール)の奥にある特異点は、ビッグバンを生じさせる特異点に気味の悪いほどよく似ている。底なし穴の特異点がいくつもの「宇宙の赤ん坊」を産み、それが進化して生命を育める宇宙になるということがありうるのだろうか

(引用部はここまでとしておく)

注記の部はここまでとする。

(長くもなったが、**出典(Source)紹介の部 14**はここまでとする)

過分に微に入っただけの直上、脇に逸れもしての注記の部の内容は放棄していただいても構わぬようなところとして、とにかくも、先だって出典として挙げた資料にあっての解説のされようから見て、

[ (宇宙それ自体を滅ぼしかねないとされての) 真空の相転移にまつわる場所のリスク ]

がはじめて取り沙汰されだしたのは 1980 年あたりでおよそ間違いないらしい (少なくとも表沙汰になっている専門家動向の問題としてはおおよそ間違いないらしい) とのことが推し量れるように



なっている。

とすると、(直近言及のように[真空の相転移]と[ブラックホール生成問題]は「似て非なるところか」と受け取れるのであるも)、時期的問題として、

「1974年に世に出た小説らから導き出せる相関関係、  
すなわち、

[ [15兆電子ボルトのCEERN加速器] (CERN加速器ではなくCEERN加速器)なるものを登場させている小説にして主人公がCEERNの運営するビーム装置を用いて[「底無し」の「黒々とした」「渦を巻く」穴]に自らを極小化させての分身を投入するとの内容の小説たる **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』]

[極微ブラックホールが重力波通信機から漏れ出して惑星を食うとの内容を有している小説たる **The Hole Man**『ホール・マン』]

の間に横たわる関係性について加速器実験機関関係者——1999年にそれが部外者によって問題視されだした折、ブラックホール生成などありえはしないと強弁をなし、次いで、2001年からブラックホール生成可能性を「1998年に提唱された新規理論の理論的発展との兼ね合いで」認容なしだした人々——の間の[暗流としての認識]から説明がなせるのか、より正確には、その[暗流に対する認識]が一部の作家らに伝わっていたがために説明がなせるのか]

とのことにまつわる有効な解答は

[真空の相転移を巡るやりとりの深化]

との観点「でも」出てこない(80年代と70年代の時期的離隔から出てこない)と判じられる——[時期的離隔の問題]より重くものしかかってくるのは[フィクションと現実世界の理論的やりとりに見るエネルギー実現規模の離隔の問題](膨大なプランク・エネルギーを投入せねばブラックホール生成は無理であると解されてきたところにあって「従前までは」僅少なテラ・エレクトロン・ボルトでのブラックホール生成可能性が観念されることはなかったとの問題)があるのだが、については、さらに後の段にて解説をなす——。

さて、ここまでの本稿内容、時期的問題について一側面から煮詰めてきたとのここまでの本稿の内容を検討したうえで人は言うかもしれない。

「科学者らが上から下まで一枚岩となって嘘を吐いていること(本稿のここに至るまででその可能性を低めに見積もらざるをえぬとの材料を挙げてきたところの可能性でもある)、あるいは、それと両立しない奇怪な予言がなされているとこのことがあるのであるとしてみよう。

だが、それが我々の生活にどう関係があるというのか。

現にLHCは運転開始を見ており、何も起こっていないではないか。結果よければすべてよし。どうでもいいことだ」

残念でならない。それについては

「ここまでの話は(読み手を含めて)[我々が全員殺されることになる]との性質の話に(過去形ではなく)[これよりの問題]として現実的に関わるとの筋目・筋合いのものである」

と申し述べざるをえぬとこのことがある。

上のことについて本稿の以降にての内容を検討していただき、是非の程、ご判断いただきたい次第である。

そこにいう「これよりの問題」に関わるどころとして、「まずもって」、

「加速器の運営がブラックホール生成をなしやすくもなると評される式で出力増大・「性能」増大を見ながらなされていく」

とのことにまつわる典拠を挙げておくこととする。

---

## 出典(Source)紹介の部 15



# SOURCE

## 15

ここ出典(Source)紹介の部 15 にあつてはまずもって著者多数(訳書多数でもある)との科学読み本著者、アミール・アクゼルの手になる著作、

Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider の邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる CERNと究極の加速器の挑戦』(早川書房)

にあつての次の記載を ——(「これより現実的にありうる」とのことで(一部にて)取り沙汰されているブラックホール生成可能性というものに関わる申しようとして)—— 引いておくこととする。

(直下、早川書房よりだされている『宇宙創造の一瞬をつくる CERNと究極の加速器の挑戦』ハードカバー版にての[第13章 CERNでブラックホールは作られるか?]の部、283ページより引用をなすとして)

---

[ボストンで開かれた素粒子物理学の専門的な学会『大型ハドロンコライダー ——標準モデルを超えて』でCERNの物理学者ファビアン・レドロア＝ギヨンが次のように語った。「CERNでは何年か前からブラックホールの生成について研究しています。ブラックホールの質量の閾値は九・五 TeV です」。ファビアンが示

したグラフには、LHC での微小ブラックホールの生成が八から九 TeV のエネルギーレベルで始まることが示されていた。二〇一〇年段階では LHC はそのレベルより低い七 TeV のエネルギーを作り出している。しかしすべて予定通りに進めば二〇一三年に最高レベルの一四 TeV に到達する]

(引用部はここまでとする 一※一 )

(上にての引用元著作の著者、アミール・アクゼルとの人物について:アミール・アクゼルという引用元著作の著者がいかに信頼に足るかは [メディア受けする当世流の御用知識人] がいかほどまでに信頼に値するのか、との問題と同義かとも思われるところもあるのだが、少なくとも、アミール・アクゼルは [下手な嘘] は吐かない(と看做されている) 部類の人間である。その点、著者来歴について紹介すれば、である。同アミール・アクゼルという人物、日本でも早川書房から同男執筆の科学読み本が何冊も出されているとのポピュラー・サイエンス・ブック分野の著者として欧米圏で名が売れた向きとなっており、英文ウィキペディアの Amir Aczel 項目にて記載の来歴を引けば、カリフォルニア大バークレー校で数学の学士号を取り、科学の修士号を持ち、統計学の博士号をオレゴン大学より授与された向きにして、欧州の大学で数学を講じていたとの向きとなる(そして、同男、アメリカの主流メディアにもお目見えする人物として知られている))

整理する。上にてのアクゼル著書 ( Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider の邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる CERN と究極の加速器の挑戦』) よりの引用部では

「2010 年段階では LHC は(重心衝突系エネルギー) 7TeV で運転されている」  
「それが(2013 年度に予定されているアップロードにて) 14TeV に到達する予定である」  
「その増大過程で 9.5TeV を通り過ぎた際にブラックホールが生成されうる(上抜粋部に見る「ブラックホールの閾値」の閾値とはそうなるのに必要とされる最小限度の値である)との CERN の一部科学者の見方がある」

とのことらが記載されている(その科学的至当性の程には判じようがないわけだが、とにかくも、実験関係者由来の弁としてそうしたことが記載されている)。

につき、LHC の休眠期を経ての最大出力たる 14TeV へのアップロード ——上にての原著 2010 年初出のアクゼル著作、**Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider** よりの引用部にて [2013 年度に予定されている] と表記されているところのアップロード—— は 2014 年現時点 (後日追記:小閑を偷(ぬす)んでもものしてきた本稿は長大なもの、文量にして延べ幾百万字にも至ろうとのものとなっており、完成は 2014 年「以降」に繰り下がったのだが、とにかくも、本稿本段の執筆時では 2014 年現時点) 未だ実現していない。すなわち、である。ブラックホール生成は「これより」なされる可能性があるとの見立てが CERN サイド科学者より呈されてもいる ( :筆者としては [ブラックホールの如き重力の怪物の人類を喰らい尽くす生成] に関しては [CERN の挙動] に加えて [対岸の針指しの挙動] もが

要件になるか、とも見ているのだが（それも判じられるところの「多重的論拠」はこれより明示する）、この段階ではそうした話はなさない。

その点、

[アミール・アクゼル著作にては LHC 実験の 14 兆電子ボルトへのアップロードは 2013 年に実現されるとの記載がなされているが、予定は延期を見ている]

とのことについては下の引用文を参照されたい。

(直下、英国 BBC のオンライン媒体に見る記事、The Large Hadron Collider has turned off its particle beams ahead of a shut-down period that will last two years (2013 年上半期発のもので『続く二年間の停止期間の前にて LHC はその粒子ビームの灯を消した』とでも表題訳せよう記事／表記タイトルの検索エンジンでの入力によって特定・閲覧・HTML 文書ダウンロードできるとのもの)よりの記載内容を引用するとして)

---

The machine ran at particle energies of 8 trillion electron-volts (teraelectronvolts; TeV) in 2012, up from the prior high point of 7TeV in 2011

But when the shutdown concludes, slated for the end of November 2014, it should be set to run at 14TeV - far and away the highest-energy collisions ever attempted by scientists.

[ . . . ]

The shut-down is due to conclude in late November 2014. after which the system will be put through its paces and experiments are expected to resume in February or March 2015.

(訳を付すとして)

「2011 年の最大時 7TeV から 2012 年になり装置は 8 兆電子ボルトのエネルギーで稼働していた。しかし、2014 年 11 月末目途でのシャットダウンが結末を迎えた折、装置は ——今まで科学者らに試みられてきたどれよりも遠く高くまでいったの—— 14TeV 運転準備が整っていることであろう・・・(中略)・・・ シャットダウンは 2014 年 11 月後半をもって終えさせられるとの運びであり、その後、システムはペースを復調、実験は 2015 年 2 月または 3 月に再開される見込みである」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上とアミール・アクゼル書籍よりの先にての引用部、

[ボストンで開かれた素粒子物理学の専門的な学会『大型ハドロンコライダー ——標準モデルを超えて』で CERN の物理学者ファビアン・レドロア＝ギヨンが次のように語った。「CERN では何年か前からブラックホールの生成について研究しています。ブラックホールの質量の閾値は九・五 TeV です」。ファビアンが示したグラフには、LHC での微小ブラックホールの生成が八から九 TeV のエネルギーレベルで始まることが示されていた。二〇一〇年段階では LHC はそのレベルより低い七 TeV のエネルギーを作り出している。しかしすべて予定通りに進めば二〇一三年に最高レベルの

一四 TeV に到達する]

を合わせて見れば、

「実験機関の実験開始時期は延期 (postponement) を見ながらも二年にわたっての休止期を終え、2015 年より再度のアップロードに入ろうとしている」

とのことの意味についてご理解いただけることか、とは思う。

([出典 \(Source\) 紹介の部 15](#) はここまでとする)

(「さらにも、」の後日追記として

後、LHC 実験は 2015 年 5 月にリ・スタートを見た。の折、LHC 実験の運転は素早くも 13TeV から開始されたのだが、ここ後日付記をものしている現時点から見もしての最新情報(2015 年下半期)にあっても 14 兆電子ボルト運転の段階に到達していないとされている ——同じくもこのことの説明としては CERN サイドのウェブ媒体、具体的には CERN のドメインと紐付いた「Restarting the LHC: Why 13 TeV? | CERN」とウェブ文書の HTML タイトルタグに記載されたページにて (以下、極々端的な引用をなすとして) “However, retraining these magnets to 13 TeV should require only a short period of time, whereas retraining to 14 TeV would take longer, taking time away from physics research. That’s why the best way to get to new results quickly, at an energy considerably higher than ever achieved before, is to start operation at 13 TeV.” (訳として)「14 兆電子ボルトの磁石の磁石を再調整するのがよりもって時間を要する(調査実験の時間を削ぐぐらいに時間を要求する)とのことがある一方で 13 兆電子ボルトの磁石を再調整をなすにはよりもって少ない時間しかかからないはずだろうとのことがありもした。そこで今般、従前達成されたのよりも相対的に高いエネルギー規模にての結果を素早くも得るための最良の方法として実験は 13 兆電子ボルトよりの実施を見ることとなった」(引用部はここまでとする)との説明をなしているところでもある —— )

以上、[出典 \(Source\) 紹介の部 15](#) にて引用なしたところの極々端的なることから窺えるところとして LHC 問題は過去形のものではない、残置し続けてのものであると解されるようになっていく(※)。

(※尚、LHC については Luminosity [ビーム衝突頻度] を倍加させての [HL-LHC] (「ハイ・ルミノシティ」・ラーズ・ハドロン。コライダーの略) へのバージョン・アップ、そして、重心衝突系エネルギーを 14 兆電子ボルトから 33 兆電子ボルトに増大させての [HE-LHC] (「ハイ・エナジー」・ラーズ・ハドロン・コライダーの略) へのバージョン・アップがこれより企図されており、加速器 LHC はさらに強力なものへと進化していくと明示されている —— [HL-LHC] へのバージョンアップは 2020 年以降、[HE-LHC] へのバージョンアップは 2030

年以降とされもしてきたが、予定は流動的であり、何とも言えない。について詳しくは [HL-LHC] [HE-LHC] との語と [schedule] (スケジュール) といった語句を検索エンジン上に入力して表示されてくる実験関係機関由来の最新文書を参照されたい—— )

ここまで指摘したことに基づき「も」して、である。(先立っておもんばかりなした第三者のありべきものの見方を再度、引き合いに出すとして)

「仮に科学者らが上から下まで一枚岩となって嘘を吐いていること、あるいは、それと両立しない奇怪な予言がなされているとのことがあるのだとしてみよう。

だが、それが我々の生活にどう関係があるというのか。

現にLHCは運転開始を見ており、何も起こっていないではないか。結果よければすべてよし。どうでもいいことだ」

との見方は(極々表層的な側面から見たうえでも)妥当ならざりしものであると述べたいのである(※)。

※ [脇に逸れての話] として

さらに述べれば、

[一部の関係者がブラックホール生成の [可能性] とLHCのバージョン・アップの問題を紐付けている] (直前出典紹介部にて指摘したことである)

などという側面から離れたところで何故、いかようにして本件が [重要視せざるをえない]

とのことなのかということについては本稿全体にてこれより仔細に摘示していく所存である。

につき、その [本件につき [重要視せざるをえない] との理(ことわり)] については、極々端的に述べれば、

(この段階では頓狂と響くかもしれないが)

[LHCとはその実、[伝説上のトロイアを滅した木製の馬]として描写・意思表示され続けてきたものであり、そして、そのことを示す論拠は永年に渡ってあまりにも多くある。のみならず、そこにいう論拠が「あまりにも多層的に相互連関を呈する」とのものとなっており、なおかつ、[質的に異様なものら] (偽りだらけの世界と人間存在そのものの限界を嗜虐的に「最終的に殺されるべくも養殖された家畜らよ」と人間存在そのものを嘲笑うが如きものら) となっているとのことがある]

とのことであると申し述べておく —— そうもした本稿にての具体的指し示し内容を検討されたうえで「LHCは[木製の馬]と同文にそれ単体だけではモニュメントにすぎないものかもしれないが、攻め手側からの一押しがあった際に真に問題となるものであると判じられるものである」と明言するに足りるとの論拠らがきちんと呈示されきっているか、その是非についてきちんと判じていただきたい次第でもある。

そうもした本稿の後々の段にて問題視することに関わりもすること、といったこととして唐突とはなるが、本稿にあってはかなり後の段で **CONTACT『コンタクト』** という小説作品のここと「をも」問題視する。世界的に大ヒットを記録したベストセラー小説たる同『コンタクト』、



[ブラックホールやワームホールの類を用いての「ゲート」の構築が描かれる作品]

ともなるのだが、かてて加えて、

[トロイアを滅した木製の馬]

の寓意が「極めて悪辣かつ隠喩的なやりかたで」多層的に込められていることを指し示せる作品ともなっており（ただ単純に作中、トロイアの木製の馬との単語が頻用されるだけではない）、そちら『CONTACT』、同じくものところで予言的側面を帯びているとの作品でもある（といったことはすべて細かくも本稿の後の段にて「証示」することになることであると事前に断っておく）。

さて、一典拠たることの委細について触れる前であるとのこの段階であり微に入っ  
ての記述をなすのもなんではあるかとも考えるのだが— そうした作品である小説

CONTACT『CONTACT』にあつてはその作中、

[人間にとっては当初、意図不明の機械として外宇宙より設計図が送信されてきたと描かれる装置 —カー・ブラックホールないしワームホールを構築してスターゲイトを開くことになったと作中世界にて後に判明したと描かれる装置— ]

について

(以下、国内書店にて流通の訳書(当方所持の新潮社「文庫版」(下巻)では216ページ以降の部)および全文オンライン上より確認できるところの原著よりの引用をなすとして)

"All the project did was to make the faintest pucker in space-time, so they would have something to hook their tunnel onto. In all of that multidimensional geometry, it must be very difficult to detect a tiny pucker in space-time. Even harder to fit a nozzle onto it." "What are you saying? They changed the geometry of space?" "Yes. We're saying that space is topologically non-simply connected. It's like —know Abonnema doesn't like this analogy— it's like a flat two-dimensional surface, the smart surface, connected by some maze of tubing with some other flat two-dimensional surface, the dumb surface. The only way you can get from the smart surface to the dumb surface in a reasonable time is through the tubes. Now imagine that the people on the smart surface lower a tube with a nozzle on it. They will make a tunnel between the two surfaces, provided the dumb ones cooperate by making a little pucker on their surface, so the nozzle can attach itself."

「こっちのプロジェクトがしたことと言えば、ただ、時空にあるかないかの小さな皺を寄せただけの話だよ。そこへ、向うはトンネルは繋げたんだ。多次元幾何学的空間を考えると、その時空の僅かな皺を見付けだすだって大仕事だよ。ましてや、そこへトンネルの口を開けるとなると、これは容易なことじゃない」「うん。つまりね。空間は位相幾何学的に複雑な形で連続しているわけなんだ。アボネバに言わせれば、これはあまり上手い譬(たと)えではないかもしれないけれども、片方に二次元の平面があると仮定しようか。これが先進文明の世界だよ。で、もう一つ、こっちに別の二次元平面がある。これは後進世界でね、二つの平面は迷路のような管で結ばれている。先進世界から限られた時間で後進世界へ行くには、その迷路を抜けるしかないんだ。ところで、先進世界の住人が先端に穴の開いた管を伸ばすとするね。その時、後進世界の方でそれに合わせて自分たちの平面にちょっと皺を寄せてやれば、そこへ管の先が届くであろう。これでトンネ

ルが通じる」

(引用部はここまでとする)

との言及が作中登場人物らによってなされているとする。

以上表記のことについて

『たかがフィクションにあっての話にすぎぬであろう。そこを何を訳のわからぬことを延々と．．．』

と何も知らぬとの向きは侮るところかもしれないが（[人間一般の思考形態の問題]を考えれば当然の[推定]かとは思）、上にて引用なしたところの部「それ自体」が（『コンタクト』原作[小説]版の方ではそちら装置についてなんら言及されていないとの）[加速器]や[ギリシャ伝承に見る古のトロイアを滅した木製の馬]らと結びついで[怪物がかつての予言的言及]との絡みでいかように問題になるとのことともなり、そうしたことをひたすらに具体的典拠らに依拠して示めそうというのが本稿となりとする）。

[脇に逸れての話]はここまでとする

(現段階では行き過ぎもしての直上にての[脇に逸れての話]から引き戻し)

さて、既に実験開始を見てより相当年が経過している中でLHCについては「これより」ブラックホールを生成する可能性があるとして一部専門家に言及されているわけだが(上にての出典紹介部を参照のこと)、そうした見立てとは逆に、

「現行にてはLHCでブラックホールが生成される見込みは実験開始を見た後、より低く見積られるようになっていく。最早、ブラックホール生成はほぼありえないだろうといったかたちにて、である」

との主流筋の理論物理学者の言い分が(それはそれなりにきちんと対応するところの事情があつてであろう) 広くも前面に押し出されてきているとのことがある。

上のような申しようがなされていることを指し示すための出典(具体的にはリサ・ランドールという余剰次元理論の大家の書籍)を下に挙げておく(直下、**出典(Source)紹介の部16**を参照のこと)。

後日付記として: この「**現行 —(数十年単位で継続していくと明示されているLHC実験が Run Iとの初動段階に入るとよりしばらくしてより、でもいい) — にてブラックホール生成はほぼないと考えられるようになっていく**」との言い分がなされていることは本稿書き手たるこの身自体が国内大学奉職の理論物理学者に(公金出所といった論法で)問い合わせた折に同じくものを電話越しにて強弁されたところでもある。「実験が少し進捗を見てからまずもってブラックホール生成などありえないと考えられるようになった」「もう時代遅れの問題だと思ふ」などの言い分をこの身からして聞かされ続けてきたわけである(中には「なににせよ実験がスタートを見てそれで何も起こっていない。だからそれでいいじゃないか」との無責任性を感じさせる論理を前面に出した御仁もいたわけである)。であるが、本稿にてはそうした言い分がなんら安心材料にならぬとの具体的論拠を — [専門家]らのくだらなさや欺瞞性を根本根底から嘲笑うものでもあるとの性質を帯びてのものとして — 厭となる程に呈示していくことになる(:[重力波]などのものがライブ・ストック、[囲われた生命]としての家畜の領域の外から「糸繰り人形を手繰る糸たりうるものとして以外に」作用すればどうなのか、といった仮説の問題は置き、[現象]として「終わりにするとの意志表示」が「非」人間的なありようが感じられるところで執拗になされ続けているとの問題がそれである)。ちなみに本段ではこれよりカリスマ物理学者として知られるランドール女史の弁を引くが、同人物がLHCのブラックホール生成可能性にまつわる理論の構築にいかように関与してきたのか、また、同じく彼女の言い分それ自体からして人間存在そのものを嘲笑う欺瞞性でいかように彩られているものなのか、その解説も本稿の後の段でなす(ランドール女史やりようとのことでは本稿 vol.2 にての p.343 から p.364 にて扱うことにする)。



# SOURCE

## 16

ここ出典(Source)紹介の部 16 にあっては主流筋の物理学者によって

[LHC 実験が始動を見、実験の成果が見えてきた現在、ブラックホール生成はほぼありえないことであると考えられるに至っている]

との物言いがなされていることを紹介しておく。

(直下、著名な物理学者リサ・ランドール ( Lisa Randall ) の手になる著書 KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR の邦訳版『宇宙の扉をノックする』(原著の刊行年は 2011 年 / NHK 出版よりの邦訳版刊行はここ最近のことで 2013 年) にての 253 ページから 254 ページの記載内容よりの引用をなすとして)

---

「この計算により、たとえ素粒子物理現象の高次元説明が正しかったとしても、オージェ実験で微小なブラックホールが見つかる可能性はないだろうとわかってみると、ほかの物理学者が LHC でふんだんにブラックホールが作られるかもしれないと主張しているのはどうしてなのかと私たちは不思議に思うようになった。その見積もりは、私たちの計算ではやはり多すぎだったのだ。たしかにおおざっぱな概算では、そうしたシナリオにおいて LHC は多数のブラックホールを作り出すのかもしれない。しかし私たちが行なった、より詳細な計算は、そうはならないことを実証していたのである。パトリックと私は、危険なブラックホールのことなど考えてもいなかった。私たちが知りたかったのは、小さくて無害な、急速に蒸発する高次元ブラックホールが生み出されるのかどうか、そして、それにより、高次元重力の存在が暗示されるのかどうかだった。そして、実際に計算してみると、それは皆無で

はないにしろ、めったに起こらないことだった。もちろん、もしありうるのであれば、極小ブラックホールの生成はラマンと私が提唱した理論の素晴らしい裏づけとなっていたらう。しかし科学者として私は計算を直視しなくてはならない。私たちの出した結果を考えると、誤った期待を抱くわけにはいかなかった。パトリックと私は(そして大半のほかの科学者も)、たとえ極小のものであってもブラックホールができるとは考えていない。これが科学の仕組みである」

---

(引用部はここまでとする)

直近をもって NHK 出版より出されている邦訳版『宇宙の扉をノックする』よりの引用部としたが、グーグル検索エンジンにてのテキスト入力で該当部がオンライン上より捕捉できようともとれる原著 KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR よりの引用も直下なす。

(直下、原著 KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR にての CHAPTER TEN BLACK HOLES THAT WILL DEVOUR THE WORLD の章より原文引用をなすとして)

---

After recognizing that Auger wouldn't discover tiny black holes, even if higher-dimensional explanations of particle physics phenomena were correct, our calculations made us curious about the claims other physicists had made that black holes could be produced in abundance at the LHC. We found that those rates were overestimates as well. Although the rough ballpark estimates had indicated that in these scenarios, the LHC would copiously produce black holes, our more detailed calculations demonstrated that this was not the case. Patrick and I had not been concerned about dangerous black holes. We had wanted to know whether small, harmless, rapidly decaying higher-dimensional black holes could be produced and thereby signal the presence of higher-dimensional gravity. We calculated this could rarely happen, if at all. Of course, if possible, the production of small black holes could have been a fantastic verification of the theory Raman and I had proposed. But as a scientist, I'm obliged to pay attention to calculations. Given our results, we couldn't entertain false expectations. Patrick and I (and most other physicists) don't expect even small black holes to appear. That's how science works.

---

(原著よりの引用部はここまでとする)

上をもってして

[リサ・ランドール(ランドール・サンドラム・モデルと呼ばれる有名な理論モデルを呈示したカリスマ女物理学者でブレーンワールド理論の大家として知られる向きであることを「本稿の後の段で」解説するとの向き)のような有力物理学者]

が「2011年時点の物言い(KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR 原著刊行時点の物言い)として」LHC 実験でブラックホール生成がなされる可能性が強くも否定される方向に向かっていると述べていること、そこから

[加速器による(「安全な」と実験関係者に枕詞がつけられる)ブラックホール生成可能性に関する目算]

が実験関係者らの間で大なるところとして後退を見ているらしいこと、お分かりいただけるだろう。

(※尚、実験関係者らにはいまでもってしてブラックホール生成を期しているとの物言いをなす向き「も」いる)

(出典(Source)紹介の部 16 はここまでとする)

ここにて強調するが、

「問題なのは、」偉い学者らであると(世間的慣行では)手放しに尊崇視されること多き現代物理学の牽引者らがどういう見立てを(ブラックホール生成可能性について)呈示しているかではない。

などと述べると、

『頓狂なる夜郎自大の徒がその途の大家を差し置いて独善にでも奔ったか』などとの誤解を招きかねないかとも思うのだが、「然にあらざ」と強調しつつ、返す刀で申し述べるところとして、「真に問題なのは、」——それが蒸発せずに、なおかつ、成長するのに天文学的時間を要しなかった場合に我々全員の命を刈り取ることになるとされる出来事(ブラックホール人為生成)につき——科学者が云々とはいったレベルとは次元を異にして人間人並みの水準を有した人間ならば認知認容なせるとの、

[はきとした証拠の山] (本稿ここまでに摘示なしてきたような事例が「一例」としかならぬような証拠の山)

に基づき[奇怪な前言]が過去になされ続けてきたということが指し示せるとの[事実]そのものであり、そして、その[事実]が指し示すとの方向性があまりにも[異常]かつ[酷薄]なものであるとのことである(：より具体的には「[普通一般の人間のやりよう]ではおおよそ説明が付けがたいとの」「「奇怪な」前言が山として具現化している、のみならず、それら「「奇怪な」前言が「執拗なまでの恣意性の問題」を観念されもするとのかたちで「「堂に入った」「悪意によって成り立つ」系統立った側面」を相互に連関しながら呈している」こととなっていることである)

以上、ここまで申し述べてきたことから「だけでも」ブラックホールを巡る問題は未だ過去形になっておらず、[生死にかかわるもの]として眼前に控えているのである、とのこの身申しようが[いかな問題意識に基づいているか]

につき部分的にお分かりいただけたのではないか、と思う(：論拠をこれより呈示していくとの本段階ではまだ(「属人的胸中に対する把握」を越えての)「納得」までは求めないが、生きるために足掻く意思があるとの向きは本稿の続く内容をお読みいただき、といった申しようが果たして事理に適ったものなのか、批判的視座にてでもよくご検討なしていただきたい。本稿にあっての後々の段にあっては[臆病者ならば戸惑い恐れて逃げ惑うだけであろうとの話]、そして、[機械

のような「内面上の」硬直性を呈する人間ならば「不幸なことに」情報処理「しない」かもしれないとの話」に向けて舵を切っていくことになるわけだが、であっても、指し示しにあって必要十二分たるものになっていること、決して水準が低くもなく、すべて「事実」(であると確度高い出典を明示しながらも摘示すること)に裏打ちされているとのことともなっていること、強くも請け合う次第である)。

さてもってして、

[(これよりもってしての)重要な事実関係の摘示]

に入る「その前に」、

[強くも断っておきたいことらの明示]

のための話を(人によっては「くどくも…」と映るようなかたちでながら)以降、なすこととする。

具体的には【以下のこと】らにまつわって強調・訴求すべくもの話を以降、—(【重要な事実関係の摘示】の前段階として)— なすこととする。

第一。

「[本稿で問題視したいこと]は[物理学者ら理論にあっての欠陥性]を指摘するなどということには毛頭ない。そういうこと、物理学者ら理論にあっての欠陥性を摘示するとの資格も能力も筆者にはない(などと述べると心得違いをなしている向きは『この者が摘示事物に確証・自信を抱いていないからそうもしたことを言うのだろう』と誤解するかもしれないが、そうではない)。専門家らの理論の適否などを論ずることなどせずとも、それでも、[実験](と世間的には明示されている営為)に伴う問題となることは「容易に」摘示できるようになっているし、第三者でもそのことは確認できるようになっている。そのことの把握を求め、その先にあることの意味を問うのが本稿の趣意である」  
(こちら第一の点の明示のために続く段にては「[反面教師としての]海外のLHC関連訴訟を巡る顛末の解説」を話柄としての説明をなすこととする)

第二。

「本稿では[他の人間に誤解されるようなこと]を敢えても指摘しているが、といったことにしても[きちんとした論拠](属人的目分量・属人的観点から離れもしてそこに確として存在しているとの論拠)に基づいているとのことを厳選・取捨選択して取り上げている。それが果たして本当なのか、本稿が真剣なる顧慮に値するもの、そう、[具体的行動の指針となして然るべきようなもの]とのレベルで真剣なる顧慮に値するものなのかとの観点にて読み手に切に確認いただきたいと考えている」  
(こちら第二の点の明示のために「奇異奇矯と受け取られもしようこと、であるが、顧慮に値すること」がいかなることなのか、極々一例、先行するところの説明を間を経ずに(紙幅にしてそう先のところではないとの段にて)なすこととする)

それでは表記のことらにまつわる話を以降、順次段階的になすこととする。

まずもっては表記のことらのうち、第一点目のことに以降、筆を割くこととする。



[本稿が細かき科学理論の適否「そのもの」の是非を問題としているわけではないとのことについて]

さて、

「本稿は科学理論の適否「そのもの」についての正しい・誤っているとの問題(正誤問題)について云々しようとのものではない」

などと書き手たるこの身が手ずから述べれば、

『であれば、この者の申しように重きを置けるわけがないではないか』

などと[勘違い]をなされる向きあるか、と思う。

が、そうした見立ては至当ならざるものとして(「容易に」)斥けられる。

海外にての訴訟案件にて原告らがLHC実験リスク問題における科学理論の適否という同文同様のことを問題視、いかに[無為たる敗退]を喫したか、とのことは続いての段にて典拠に依拠して解説するが (海外訴訟ではそれ専門の理論家らとの体裁で世間的にやっている学者らを相手に「半ば」門外漢たる者達が——門外漢とはいえども彼ら識見水準は(学歴などといった下らぬ肩書きの面でも)世間人並みの水準を遙か上回るものであったわけであるも——[科学理論の欠陥性]にまつわるところで非を鳴らしながら[安全性にまつわる懸念]がゆえに実験の差し止めを求めたのであるもその結果は[黒白判断保留が司法になされながらも棄却判決]だった)、といった訴訟に見る[理論それものの適否の重要視]の方向性に対して、ここ本稿で重んじていることは、ひとつに、

「(重くも問題視しているところとしては)[専門家らが甲論乙駁なしているところの科学理論の妥当性]などではなく、[最近、人間の世界に書き込まれた科学史にあからさまな欺瞞が具現化している]とのことである。

それにつき、[科学理論]そのものの妥当性については素人、あるいは、全くの非事情通よりは幾分、道に通じているとの勉強しての門外漢(筆者のような人間)が云々できるところではないが(素人・門外漢がそれをやったならば「出歯亀的異常者」として専門家と呼ばれる者達らの軽侮・冷笑をいたずらに買うだけであろうと考える)、[科学史]、そこに書き込まれた総体としての記録に見る申しようの欺瞞性・問題性の有無については専門分野教育をさして受けておらずとも容易に分析対象とできるとのものとなっており、現実そこに[生き死にの問題に関わる欺瞞の根]が「幾重にも幾重にも、」現出しているとのことがある」

とのこととなる——本稿にての先立つての[事実A]から[事実J]の事実摘示で当方がつまびらやかにしているところの理解にどの程度の知識水準が必要なのか、検討されてみるとよい。同じくもの[事実A]から[事実J]についてきちんとお読みいただければ、それら事実については文系・理系を問わず[高卒程度の人間に望まれる人並みの水準]で「適否判断(確認)可能なところである」とご納得いただけるところか、と思う(：脳の情報処理能力との観点で述べれば、国内で自動車免許の筆記試験に合格するだけの知的能力があるならば、その適否について理解できるだろうとも述べておく。ただし、多く[人格]と紐付いた[意志]がない、知的かつ建設的な営為の源泉となる[意志]がないとの人間、そう、生者でありながら死体のような存在に部分的に成り下がっているのかといった按配ならば、そう、振る舞い・考える意志の力が該当分野にあって内発的に生じ得ない、ないし、宗教的狂人の如き頑なで意固地なる者として特定の思考をなすことや特定の概念・存在のことを認容

する努力をなすことさえ拒否するとの筋目・筋合いの人間であるのならば、大学院で博士号をとっていても理解「しない」、理解「しようしない」とも思うが(※))——。

(※それにつき筆者が呆れかえるとのことになっているのはたかだかもの上記の如きこととして[問題性の摘示]が実にもって容易になせてしまえるようになっていながらも関わらず、この世界では同じくものことを大人が聞くに値する話柄で問題視しようとの人間が「絶無」に近いほどにいないとすることがありもする、そのように「見受けられる」ことである(この身は同じくものことについてオンライン上の世界的言論「流通」動態を仔細に分析している(e.g. どういうわけか、情報にレギュレーション(規制)がかけられている可能性もあるかとのこと「をも」念頭に[検索結果ゼロ件]になるまでユニーク・キーワードで和英文の検索をかけ類似情報の流通動向を確認する/広告出稿サービスのキーワード毎コストパフォーマンスを確認可能とすべくもの世界的検索動向確認サービスを利用する等等の行為で分析している)がために「(世間的トレンドの問題として) そのように見受けられる」とはきと述べもするのだ)。 そうもしたことの背面にあるのは[意志]を奪われている、ないし、[意志]に枷(かせ)が嵌められているとの[多くの人間存在の実態的ありよう]が関わってくるのだとは個人的にはとらえるが、については、ここではくたくだと述べない)

以上のこと、述べたうえで理論の適否それ自体を問題視することがいかに割に合わぬことなのか、いかに妥当ならざりしところなのか、LHC 実験差し止めを求めての海外訴訟にあって原告らの失敗の因のひとつとなった(と解されるどころ)を紹介したい。

その点、ハワイで提訴されたLHC 差し止め訴訟 —— (欧米では日本と異なり行政に作為を求める(何らかの行為をなすように、と求める)とのことが可能であること、また、原告らが合衆国法規に通曉しているがゆえに米国で提訴されたと解される訴訟) —— にまつわる判決書にも —— 皮肉ながらも実験継続を認容した判事サイドの申しようとして —— ここでの話に通底すること(「理論の適正さ・妥当性について云々することが問題になるわけではない」とのこと)が記載されているがゆえ、その部から「手始めに」引いておくこととしたい。

(尚、以降、出典(Source)紹介の部 17から出典(Source)紹介の部 17-4にあっては海外訴訟にてのありようを基本的なところから解説するための引用を順次なしていくことにする —— 終局的には[海外訴訟の論点が科学理論の適否それそのものにまつわるところとなっている](そしてそれは問題と見受けられるところである)との解説をなすことにもなるわけだが、の過程で、そうした訴求事項とは直には関わらないところにまつわる引用をもなすと断っておく—— )



# SOURCE

## 17

ここ出典(Source)紹介の部 17 にあつては(以後のより細々とした当該訴訟関連資料よりの引用に先駆けての)米国訴訟にての判決書よりの引用をまずもってなしておきたい。

具体的には海外の LHC 差し止め裁判に関わった判事 ——(ヘレン・ギルモアという人物／「上ばかりしか見ていないヒラメ人間が出世する傾向がそうじてある」と他から揶揄されることが多い日本の官僚化している裁判官ら、背景あつて手前自身、昨今、そちらありようを多数分析することとなった[(原告敗訴率が極めて高いことでも知られる)国内行政訴訟]では不条理劇を実演することが多いと指摘される日本の官僚化している裁判官らよりは遙かに真つ当な物言いを判決書でなしているととれる米国下級審判事) —— によるところとして次のようなことが結語の部にて記されていることを引いておく。

(直下、THE UNITED STATES DISTRICT COURT FOR THE DISTRICT OF HAWAII(ハワイ地区連邦地方裁判所)に由来するところの判決書 —— Sancho v. U.S. Department of Energy ( CIVIL NO. 08-00136 HG KSC )との検索エンジン上での事件名(事件番号)入力で GPO( United States Government Printing Office )こと米国印刷局配布の文書としてダウンロードできるようになっているとの判決書—— の結論間近の部より原文引用をなすとして)

It is clear that Plaintiffs' action reflects disagreement among scientists about the possible ramifications of the operation of the Large Hadron Collider. This extremely complex debate is of concern to more than just the physicists.

(訳として)

「原告らの法的訴えが LHC 運営に伴うありうべき結果について科学者らに不同意があることを指し示しているは明らかである。この実に複雑な議論に関しては[ただ単に物理学者らだけの関心事である]といったもの以上のものである」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source)紹介の部 17**はここまでとする)

---

米国での LHC 差し止め請求訴訟を「棄却」で決着させたとの判事の判断にどこまで適正と容れる余地があるかは置き、少なくとも、上の引用部に見る申しように関しては(道理に通じた人間であるのならば誰であれ) [「そうであろう」ととらえて然るべきところである。

すなわち、

「この実に複雑な議論に関してはただ単に物理学者らだけの関心事であるといったもの以上のものである」

という点については —— (訴訟にて訴える側になったルイス・サンチョ(スペイン人ジャーナリスト)およびウォルター・ワグナー(はじめて 1999 年に加速器によるブラックホール生成につき問題視した元原子力安全監督官)はそういった問題提起は「なさなかった」わけだが) —— [専門の科学者でもなくともその欺瞞の所在につき同定できる]として本稿にて摘示してきたような[事実 A]から[事実 J]のとおりの問題事があるわけだから、[情報]をきちんと「適正に」把握するだけの[意志]の力がある者なら誰であれ、同じくものことにつき[「そうであろう」ととらえるところと解されるようになって]いる。

ここで述べるが、米国で提訴された、

[LHC 実験はその安全性が確認されるまで差し止めすべきであるとのことを求めての裁判]

にあつては[環境監査を担保するための法律]として制定された NEPA ( National Environmental Policy Act ) が [法律上の争訟] の所以たるところとなつて同法規の適用可否が(後述するような式で)法廷の場で争われていた —— ※法律の基礎を学んだ向きならばお分かりいただけるのではないか、と思うのだが、裁判所という場所は特定の法律の適用の可否を争うところである。それがゆえ、[適用が争われる法律] がなければ裁判にはならない(ただし、といった中でも、行政訴訟分野にあつての米国の法制度では[法理念に規定に根ざした法運用]にあつて日本とは異なるところがあり、[法律にて「はきと明示的に」保護された利益の侵害]がなくともその余地がある、[事実上の侵害行為] [法律上、対処に値する侵害] があるとのことであれば、訴えをなそうとする側に原告適格(原告となる資格)が認められるだけの土壌が存在し、訴訟がより幅広くも提訴できるようになつてもいるとのこともある) —— 。

上にて [法律上の争訟] を解決するための裁判の意味合いについて言及したうえで述べるが、米国の裁判では[法律上の争訟]の因たる環境と生態系の保護を志向しての NEPA (National Environmental Policy Act / 国家環境政策法) が当該問題で実効性を有さ「ない」と認定されたことが海外訴訟で訴えを提訴した側の敗訴の直接的要因となつており額面上は「見受けられる」ようになってい ( : 少なくとも手前が米国の第一審の裁判判決書および控訴の帰結につ



いて扱った資料 —後の段にて引用をなすこととした資料— を検証した限りでは、である)。

同点について触れる前に勘違いしていただきたくはないところとしてそこから述べることとして、  
『裁判所が LHC にリスクがある可能性について全面的かつ具体的なる判断をなした。LHC の安全性には物理学者ではない人間、裁判官らもお墨付きを与えているのだらう』

とはあい「なっていない」とのことがある(ご立派な科学動向解説書らの中にはさも裁判所が安全性の議論に欠陥がないとの完全な「お墨付き」を与えているような書きようをなしている書籍も含まれているのだが、はきと述べ、[事実を重んじていない] との式で科学者の名に値しない手合いによる衆目の目を曇らせるようなやりよう、といったところに通ずるところとして本質的にはそうはなっていない;裁判所(司法)は[実験]の安全性について積極的な判断をなしているわけではない —※— )。

※断り書きとして

上のようなことを書き記していることにつき、

『[素人]が何を偉そうに、法制度のことに、裁判制度に語り手たるこの書き手(本稿筆者たる手前)はそこまで詳しいとでもいうのか、呆れさせてくれるな』

と思われる方もいるかもしれない。

であるから、述べておくが、

「筆者はエキセントリックと看做されかねない —「相応の」人間ら(の紐帯)には特にそのような(エキセントリックであるとの)ラベリングをなされかねない —、そして、現実改変可能性のある式で顧みられもしないために半ば匙を投げていた反響確認も兼ねてのウェブ媒体などを展開するといった行為の脇にての常識的活動の一環として、(せんだってより何度か申し述べてきたことだが)、現実的・实际的なる行為として、

[国内実験参加機関 — LHC 実験主催者機関たる CERN (欧州原子核研究機構)の LHC 実験リスク問題検討に CERN の SPC ( Scientific Policy Committee / 科学政策諮問会議)での安全性検討との兼ね合いで人脈接合している研究機関 / 国内で CERN 実験を応援・推進することをなすとの人脈の供給源となっているハブ的研究機関 — の LHC 実験それそのものの欺瞞性に関わる特定挙動にこの日本で疑義を呈し、LHC 関連裁判を第一審からして年度にして 2 年間またいで(現行、当追記部を記している 2014 年を基準に見て 2012 年からの 2 年間またいで)やってきた]

との人間となりもし(これまた先行するところにて申し述べたことだが、単に奇異なる提訴をなしたただけならば第一審からして長引かず、即時棄却 dismiss を見て終結を見るか、ないしは、そも、「訴えの利益がない」とのことで原告適格なしで門前払いともなろうとのことが一般論としてある — 訴訟とて国家公務員が公金を食みながらもの公務として携わっているもの、[訴訟経済]との言葉があるように税金にて運営されている国の公的機能なのであるから当然である — )、その意では少なくとも当該問題について語る資格なき素人とはならないだらう」

と申し添えておく —— そういうところで(本来ならば)エポックメイキングとなって然るべきような性質の訴訟が長々と続いている中、日本国内マス・メディアがそれにつき一切取り上げ「ようとしなさい」、取り上げ「なかった」ことを読み手がどうとらえるところかとのことは置いてのこととして、である——。

(:尚、国内では法律規定および社会状況の問題から実験それ自体を[停止]させることを法律上の争点として求めるとの訴訟、[差し止め訴訟:インジャンクション・ケース]としての(住民)訴訟は提訴できない —— LHC 実験はそも、国内自治体など公的機関が国内で主導していることでは[ない]からである ——、そのような有識者意見を手ずから聞いているし法制度を調べて見て実際にそうであろうと判じた中、他の法的事由でもって CERN 関係機関(そして加速器マフィアの本丸たる IFCA こと International Committee for Future Accelerators の国内中枢にして国内に設置予定である ILC ( International Linear Collider )との兼ね合いで現時の世界的重要セクション)を相手取った訴訟、長期間続くことになったとの訴訟にて 2012 年に東京地方裁判所に提出した原告文書(準備書面ら)の中からしてこの身は

「1980 年初出の小説( Thrice Upon a Time 『未来からのホットライン』)が今日の状況を仔細に言及していた(研究機関の申しようど平仄が合わぬかたちで言及していた)」

とのことまで問題視していた(:といったことは本来ならば[法律上の争訟]の[要件事実] — 権利関係の確定の適否に関わるところの事実 — に関わらぬところとも解されようところなのだが、それを敢えてもそこにかぶるようには手ずから工夫なして、書証の一として書籍の問題となる部のコピーを付してそういうことまでやってきた)。

そうしたやりようが当該問題にあって筆者が  
[「情報」を呈示・提供した向き]ら(被告研究機関および被告の代理人としての弁護士らも含めての関係者ら)  
の琴線に触れるところがあつたかは「何の期待もできない」との心証を — 極めて遺憾なことながら — 覚えたわけだが、とにかくものこととして、である)

以上のこと、述べた上でさらにもって付け加えて申し述べるが、

「筆者の[水準]および[人間性]に対してここ本稿での本段に至るまでの書きよう一つとっても[愚弄][軽侮]できるところのものなのか —— オンライン上で字義通り「無責任に」[不適切なる物言い]をなしている一群の[相応の種別の人間ら](何も建設的なことを言わずなせず、そうした手合いらがやることといえば、行為をなすことに対する諦観を増長しようといったこと、賽の河原の石塔崩しの如きことのみであるといった按配の相応の種別の人間ら)に近しいところがあるのか、でもよい——、きちんと見極めていただきたいとのところでもある」

(断り書きの部はここまでとしておく)

裁判所が「法的に実験継続に異を呈することはできない」(結論として実験の正当性に積極的お墨付きを与えているわけではないもののストップをかけることはできない)との判断を示している(さらに後述なしもする)とのものながら、とにかくも、LHC 実験を巡る法的問題として —— 直上にてほんの少し薄っぺらい言及をなしたように米国では[法律上の利益]の融通無碍な



る解釈がなせるように法制度ができあがっているために—— 実験の差し止めの可否というまさしくもクリティカルなことが海外では争われた(：法廷という場で欺瞞性の問題を示し、もって、訴外での訴求の用に供することができれば、との観点のみでLHC 関連訴訟を国内で提訴した筆者などがそれをいかにやりたくとも[[法律上保護された利益]の範囲を厳格に見、幅広くもの保護を求めないとの日本の法運用のありかた]および[住民訴訟との類型にも落とし込めない属地性の問題]から国内にて差し止め訴訟それ自体を提訴することはできなかつたのだが、米国では(原告敗訴に終わったところながらも)差し止め訴訟それ自体が提訴されていた)。

そちら米国の訴訟にあつては

**[[NEPA ( National Environmental Policy Act / 国家環境政策法)]という法規の適用可否が争われた]**

とのかたちとなつており、また、

**[原告らの主張が実験機関(お抱えの物理学者ら)に彼らのフィールドで彼ら理論展開ありように非を鳴らすとのものであつた]**

との点については ——[海外訴訟原告ら動き方にあつての問題点](そして、本稿にあつてそうしたやりようを避けていること)として—— これより順次解説をなす所存であるが、その前に、いまひとつ、

**[米国訴訟を巡るところで実験関係者によって輦蹙(ひんしゆく)を買って然るべきやりようがなされていた]**

とのことにまつわる案件解説文書よりの記述を引いておくこととする(：どういうやりようをとる者達が「実験」(と呼称される営為)に邁進しているのか、を示すために、である)。

---

出典(Source)紹介の部 17-2



# SOURCE

## 17-2

ここ出典紹介部では

[LHC 実験に異を呈した向きに対しては「理によらぬ」人身攻撃（こちら[人身攻撃]の意味は下に解説する）がなされるとの風潮がある]

とのことにまつわる出典紹介をなす。

(直下、THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD(本稿の先の段でも典拠として挙げている米国法学者によるブラックホール生成問題にまつわる裁判の解説資料)にての[857][858]と振られた頁よりの引用をなすとして)

---

Sergio Fabi and Benjamin Harms of the University of Alabama and Roberto Casadio of the Universita di Bologna published a paper from a stringtheory perspective, arguing against the possibility of danger at the LHC. The paper, titled “On the possibility of Catastrophic Black Hole Growth in the Warped Brane-World Scenario at the LHC,” was based on their “previous study of black holes in the context of the warped brane-world scenario.” While the talk of “warped branes” sounds like an ad hominem attack on LHC detractors, it is not. The word “brane” is a term of art in string theory referring to a kind of cosmological structure existing in a higher-dimensional universe, and “warped” describes a geometric quality, not a psychological one. Yet there were ad hominem attacks. John Ellis of CERN referred to LHC detractors as “nuts” and insinuated that one of them, Walter Wagner, was only pursuing a lawsuit against CERN to make money. Yet Wagner was suing for an injunction, not damages.<sup>354</sup> Another CERN physicist referred to LHC critics as “crazy people.” Much more blunt was renowned University of Manchester physicist Brian Cox: “Anyone who thinks the LHC will destroy the world,” he said, “is a twat.”

(補いもしながらもの拙訳として)

「アラバマ大学の Sergio Fabi および Benjamin Harms、そしてボローニャ大学の Roberto Casadio は LHC 実験危険性に関する可能性について紐理論的側面から反論をなすとの論文を刊行した。同論文、On the possibility of Catastrophic Black Hole Growth in the Warped Brane-World Scenario at the LHC『LHC にあつてのワープするブレン・ワールド・シナリオにおける破滅的ブラックホールの可能性を顧慮して』は「ワープする」ブレン・ワールド・シナリオに関する彼らの従前研究に依拠したものだ。[ワープ(跳躍)するブレンにまつわる話]とくれば何やら LHC の値打ちを減じさせるような論調を張る向きらに対応する[人身攻撃](訳注: 人身攻撃ことホミネム・アタックとは「当該論点と関係ないところで対象の性質を攻撃すること」を指す)のようなものにも聞こえるが(さらにも訳注: brane ブレンを[膜]ではなく brain 脳みそと仮託して[飛躍性(ワープしている)を呈している頭脳]との側面を暗喩として示しているとの言いようとれる)、そうではない。“ブレン”との言葉は高次元宇宙にあつて存在しているある種の宇宙論的構造物に対する紐理論にあつての特殊用語であり、

[ワープする]は幾何的な性質に言及したものであって、心理的なものではない。

だが、[人身攻撃] (訳注:ホミネム・アタック/繰り返すが、当該論点そのものとは関係ないところで主張をなす向きの性質を貶めるとのやりよう)はあった。

CERNのJohn Ellis (訳注:CERNの理論家グループにあっての有力物理学者ジョン・エリス)はLHCの値打ちを減じさせるような論調を張る向きらを[狂的な人間達]であると呼び、LHCの値打ちを減じさせるような論調を張る向きらのうちの一人、CERNに対する提訴をなしたWalter Wagner (訳注:ウォルター・ワグナー、本稿の先の段でもそのやりようを取り上げているとの向き)は「金を得るために訴訟を提訴しただけである」と遠回しに言い放った。だが、Wagnerは[差し止め]のために訴訟を起こしていたのであり、損額請求のためではなかった。他のCERNの科学者らもLHC批判者らをして[狂った人間ら]であると言及している。よりあからさまだったのはよく知られたマンチェスター大学の物理学者、Brian Cox (訳注:ブライアン・コックス/ダンス歌手グループD:Ream出身のメディア露出型物理学者である—英語でBrian Coxと検索すると近年封切られたハリウッド映画『トロイ』でトロイアを木製の馬で滅ぼしたギリシャ勢の司令官であるアガメムノン王を務めたとの同姓同名の熟年俳優のことなどが英文Wikipediaの紹介ページにて出てくるが、同男とは別人の芸能人グループ成員から転じての異色の物理学者—)で、彼ブライアン・コックスによると「LHCが世界を破壊すると考えている向きは誰でも、」「[馬鹿者] (トゥワット、コック(ス)から連想される卑語を兼ねる罵倒語をもってしての[馬鹿者])である」とのことである

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source)紹介の部17-2**はここまでとする)

---

直上にての出典紹介部にて示しているように米国訴訟原告らに関わるころでは

[人身攻撃] (論点とは関係ないところで相手方の人格に対する攻撃をなして自分達に有利となるように"こと"を運ばんとするが如くやりよう—あるいはそこに[腹黒さ]といった言葉で表されるようなかたちでの実利的意図がないというのならば、「純粹だが」性質が悪いとの者達、内省的側面を有していない一方で他罰的には振る舞うとの宗教的狂人やイデオロギー的狂人の類が「純粹に」自分達の狂態・浅ましきについて自己認識できずに第三者から見れば実に醜くもそうしたやりように出るとの挙—))

がなされていたと米国法学者——本稿にての[出典(Source)紹介の部1]から[出典(Source)紹介の部3]にあって出典資料の一として引用をなしている論稿 THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD (テネシー州法学紀要掲載論稿でもある)をものしたエリック・ジョンソン——によって解説されているわけである。

筆者などは他人事ではない、「自身が国内 LHC 関連裁判の被告側準備書面にてなされたこと

とにまつわる経験から」上のような記載内容についてさえ驚かされることは[ない]のだが、

[[事実](実験結果とその反復的具現化の確認)と[理](事実より導き出せるところの法則性およびその法則性に対する適切な説明)のみが重んじられる科学の世界の伝道師(科学者)]

たるよう常識の世界では求められている「はず」の物理学者らが

「[予断]と[情]でもって他罰的に他を貶め攻撃するとの式での人身攻撃」

との[種の進化とは相容れぬ愚劣な真似](本稿筆者が最も忌むところの類、「宗教的狂人」や「イデオロギー的狂人」ら仕様の所業でもいい)をなしていた

と(上の[出典(Source)紹介の部 17-2]にて呈示の法学者論稿——文中、表記のことについても典拠がきちんと挙げられているとの論稿——の内容からして)摘示できてしまえるようになっているのである(※)。

※属人的経験に基づいての話として

この身、本稿筆者からして国内法廷でもって「身をもって」上と似たようなこと、人身攻撃の問題が何たるかを思い知らされたとのことがある。

につき、

「それ自体が公民に対する名誉の毀損であろう」

とのかたちでの

[人身攻撃]

すらも [巨大な[マシン](システムの用意した機構)としての実験機関] というものをなす、向かいに立った相手方の氣勢を削ごうとするとの式でそういうことをなすとのことを把握するに至っている。

「経験に基づいての具体例として、」この身が関わった事例より引き直して述べれば、

「研究機関関係者(ポストの問題として世間的には大物といわれる向きも含む)とこの身の水面下のやりとりが法廷での代弁者に曲解させられて伝えられていたのか、「国内」訴訟の相手方の弁護士らが呈示してきた文書の中にあつて「裁判に至るまでの具体的事実関係(告知電話録音しながら記録しているところの具体的事実関係)が改変され」たうえで訴えを起こした側たるこの身が[迷惑電話を頻繁かつ異常な式でかけてきた異常者]であるかのような描写が初期の法廷文書にあつてなされていた」

とのことが現実にある。

(:『まさか、このようなことまでやるのか……』とさえ思ったのだが、実際にそういうことがあった。

につき、従前、たまさか別件で話を聞いた弁護士などから聞くところでは「[相手側の特性を裁判とは関係ないところで貶めるようなやりよう]を用いるのはまともではないやり口、それも多く(訴訟での)負け筋の側がやることだ。であるが、案件にかかざらう裁判官の心証をコントロールし、また、その案件を世間にて問題視するのを困難たらしめるためにそういうことがなされることもあるにはある。要するにまさしくもの[人身攻撃]の問題である。そして、それが[事実に合致していない方向]あるいは[相手方の名誉を「不当に」毀損する方向]でなされれば、法治国家であれば、本来的には——法廷でのそうした挙動に対する名誉毀損の判例も僅少なながら出ているように——それ自体、[違

法行為]となる「はず」ではある」

と表されるようなところなのだが、そういうことがあった。

その点、補っても述べれば、

[何度か必要に駆られて嫌々ながら常識的やりようで架電をなしていた人間]

[先方との応対に基づいて何度か日を改めて架電をなしていた人間]

であったこの身が

[国内唯一かつ初の LHC 関連訴訟(本稿本段執筆時の 2014 年時点に至っても国内唯一かつ初の LHC 関連訴訟)にあっての初期の相手方の法廷提出文書(準備書面)]

では

[何度も何度も電話を食い下がるようにかけてきた異常者]

であるように目立つように記載されていたとのことがあり、しかも、その際の架電回数それ自体が「奇怪に」水増しされていた(捏造がなされた)などということを[やられた]とのことがあった(:無論、法廷でもそれが偽りであることをはきと示せるとの証拠としての記録(具体的架電回数に言及しながら何度も何度も電話をかけさせてくれるな、無為なるやりとりをなさせてくれるな、とのことを筆者自らが先方に伝えていたとの(録音告知しての)電話録音記録や筆者の会社経緯のメールやりとり記録)もあるとして、「平然と偽りをなす」その姿勢に抗議をなし、法廷にてその求釈明をなしもしていたのだが(反対論拠呈示してのこちら言い分に対する弁解を求めたのだが)、相手方は法廷でそうした筆者(原告)からの切り返しての申しように対してはひたすらに[沈黙]でもって応えるとのやりようを取り、そうした[目立っての不品行]が無視されるかたちを伴いつつも訴訟はその第一審からして年にして二年をまたいで続くことになった)。

そうした事実歪曲行為さえ、

[公金で養われている人間らによって運営されている(との建て前を与えられての)国際加速器マフィアと揶揄される団体(IFCA)に関わる国内の中枢センターの一つともなっている「某」研究機関]

からしてなすとのことがある。

ここ本稿でこれ以上もってして概略を尽くすとのことは見苦しいと思うのでなさぬが、そうした不品行に対して「公的に」問責する、[付け加えての訴訟]を起こすのは

[市井の人間には冷たく、他面、御上(行政サイド)や権威の発するところのやりようには温かい]

ととかく事情通からは評される日本の裁判慣行に鑑(かんが)みる限り、効果も薄くそれ自体品性も疑われるだけの無為なる挙、そしてもってして、

「この局面では最早、時間の無駄であるとの挙であろう」

と判じて現時差し控えているわけだが( [相応の圧力団体関係者] が手前が物事を訴求するために設立した会社 —2011 年年内にて設立をなしているものの、現時、半ば税金だけを食うだけの会社に成り下がっているとの会社— に嫌がらせ電話をかけてくるようなことばかりが目についたり、常識の殻を破っての完全に非常識的なところに敢えても踏み込んでのオンライン上での訴求活動に関しては[存在自体が衆目の触れ得ぬところにされている節がある]、の中で、相応の人間らによって頭の具合のよろしくはないとの色合いを付そうとしているとの反応しか目に付かないとのその様からして「も」学習をなして「と」いったことをやっても時間の無駄」と差し控えているわけだが)、 そうした実験機関やりようには[宗教団体関係者]あるいは



[宗教関]を向かいにしているような気色悪さ、そう、名誉毀損や人身攻撃、あるいは、社会的排斥——他の[尊厳]を平然と侵害しようとの行為一般でもいいが——といったことを含めてのなにからななまで[特定のドグマ(信仰)]に基づいて正当化しようとの(あるいはそれも正当化させられる方向で手繰られているとの)手合いら特有の気風のようなものを感じさせられてきたとのことがこの身からしてある(そのようなことを堂々と書いているのはこちらに告知録音テープがあり、法廷でもどこぞなりでも[相手方のそのレベルでの(下らぬ)偽りを堂々と暴ける]との判断があるからである)。

そのように述べつつ、"こと"はそういうやりよう——公金で養われているのに公民名誉を毀損するような手管さえ平然と弄するとのやりよう——を取る者達の[不品行]がそれだけでは済まない、[より根底的なところ]に及んでいるとのことが摘示なせるようになっているがために[悲劇]であるとこの身はとらえている——こちらも「相手よりの話をよく聞き、相手方の人となりをよく見て、情報提供をなす対象を選ぶ」との人間だが、といった中で筆者をして「質的詐欺師などではなく、品行も方正であるとのまともな人間であり、[真つ当な動機]を有している」(あるいは本当にそうなのか、真摯にその是非について確認をなすに値する)と検討の結果、判断した向きにして、なおかつ、当該案件の裁判資料を欲しているとの向きがあったならば、[一審からして年度にして二年続いたとのその裁判にて口頭弁論の流れを受けて都度作成してきた延べにして数十万字のこれまでの長引いた法廷資料の電子データ版]をお送りしてもいい(そちらは水面下で一部の学者筋に対しては敵対的ともなろうと判じられる向きも込みにしての配布をなしてきた(筆者が設立した会社の名義で配布をなしてきた)とのものでもある)。それにつき、連絡先記載媒体として「(わざと)常識を無視しきっている」との体裁ながらも自社媒体を設けているので(この身は必要と感じたところでは「偽物の型＝常識」を破る・無視するのを常套としている)、資料を求めるための手前の連絡先を調べる気力がある向きになればそちらは特定化できるはずであろうと述べつつも「必要ならばデータ化した資料を送付差上げてもいい」と申し述べておく(但し、筆者は宗教のにおいがする、尊厳の愚劣なる侵害行為と結びついている圧力団体であろう、言い様・やりようが神秘主義的でよろしくはない、その他事由から害物と見た紐帯は基本的には取り合わないことにしていること「も」一応、断っておく)——)

長くもなったが、国内裁判に関わるところでの属人的経験に基づいての話はここまでとしておく——尚、現行は裁判にて発生した人身攻撃との絡みで筆者は(知人弁護士からは厳密には違法だろうとの話も得ているが)[追加しての問責]をなすつもりはない(応射すれば黙ろうとのたかだかもってしての市中の低水準のチンピラ風情を相手にしているわけでもないため、一層、行いには慎重になりたいと考えている)。にも関わらず、それに類する行為を[筆者の名を借りるように]別側面でなすような挙に出るような者達がいたら、そう、加速器問題を極めてレベル低きやりようで問責するような類らが目につくようなことがあったならば、「その者達は(そう見えても)断じて筆者の側にはいない者達であること、お含みいただきたい」とも申し述べておく(：筆者には次のような懸念もある。『「どう理由があつてなのか、この身に対して[仇(かたき)に相対するような悪感情]をもってちょっかいをかけてきた」との宗教団体成員などが[敵]([仏敵]といった彼ら流の他罰的表現でいうところの敵)に対する反感の助長をなさんととのたかだかもその程度の観点で褒め殺しをなす、(彼ら流の)[敵]の言論を[フリーク・ショー](畸形を売り物にするが如くのレベル低きもの)に貶めんとするのこともなすかもしれない、そう、筆者のやったことそれそのものに名を借りて、まるで筆者と昵懇なる友人の如き面をかぶって「実にもって頭の具合のよろしくはない」(一言で述べれば「愚劣な」)[言論操作・言論企画と



しての(確信犯的に)下手な問責行為]などを[本質的に重要なところ]でなすかもしれない...』。馬鹿げて聞こえはするであろうが、自身の眼前に「どういうわけなのか」いままで石を置いてきたとの相応の手合いらの挙からそうもしたことさえ危惧・懸念しているのである)——。

([裁判にての人身攻撃]にまつわる話は以上として)

さて、次いで、これよりは海外にてウォルター・ワグナーらによって提訴されていた訴訟にあってクリティカルと述べられるところで何が争われたのかについての引用を **NEPA** との米国法規にまつわる場所としてなすこととする(：ただし、そちら引用段階ではまだもってして [海外訴訟での原告らの主要なる主張が科学理論それ自体の適否であった]との(本段にて重要視している)ことに直に関わる場所までは踏み込んで「いない」とも断っておく)。

#### 出典(Source)紹介の部 17-3



# SOURCE

## 17-3

ここでは

[米国の LHC 差し止め訴訟にあってクリティカルと述べられるところで何が争われたのか]

とのことについてオンライン上から誰でもダウンロード可能な文書、「先にて言及の」米国訴訟第一審判決書 —— (Sancho v. U.S. Department of Energy (CIVIL NO. 08-00136 HG KSC)として検索エンジン上での事件名(事件番号)入力で GPO (United States Government Printing Office) こと米国印刷局配布のものをダウンロードできようとの文書) —— に依拠して

の話となすこととする。

(直下、米国にての LHC 実験差し止め裁判 ( Sancho v. U.S. Department of Energy ( CIVIL NO. 08-00136 HG KSC ) と分類付けされての裁判) の判決書にての 26 (計 11 頁に収められての配布他 PDF 版では 10) と振られた部の記述内容を原文引用なすとして)

---

The United States Congress provided more than \$500 million toward the construction of the Large Hadron Collider. But Congress did not enact NEPA for the purpose of allowing this debate to proceed in federal court. "Neither the language nor the history of NEPA suggest that it was intended to give citizens a general opportunity to air their policy objections to proposed federal actions.

「合衆国議会はラージ・ハドロン・コライダー (LHC) 建設に 5 億ドル超の資金を提供しているが、議会は合衆国法廷にてこの種の議論を許容する方向で NEPA ( National Environmental Policy Act / 国家環境政策法 ) を制定していない。押し進められての合衆国行為らに対して市民らに政治的反対意見表明を議題にあげるとの一般的機会を与えるよう意図しているとのことを NEPA の文言も歴史も提案するところではない」

---

(引用部はここまでとする)

上にて引用なした判決書では

「NEPA (こちら NEPA は英文 Wikipedia [ National Environmental Policy Act ] 項目に NEPA's most significant effect was to set up procedural requirements for all federal government agencies to prepare environmental assessments (EAs) and environmental impact statements (EISs) (訳)

「NEPA (国家環境政策法) の最も重要な効力は全合衆国政府機関に環境アセスメントと環境に対するインパクト (影響) にまつわる声明を求めることにある」と記載されているような法規となり、日本の法律解釈論にあって訓示規定に留まるものとされる法規 ([プログラム規定] と呼ばれるそれ) のようなものかとも解されるものとなる) は [今回の訴訟] で実効規定として適用される余地がない。それがゆえ、(NEPA 基づいての LHC の差し止めを求めての訴訟は) 法律上の訴訟としての相応の結果を見た」

とされて、そうして Conclusion (結論) の間近の部、

III. The Court Lacks Subject Matter Jurisdiction Over Plaintiffs' Claims  
(「III. 本法廷は原告ら主張につき本件に関する司法管轄権に欠けるところがある」)

と付された一節内に認められる司法判断 — 正確に述べれば「司法は当該問題に容喙 (ようかい) いくちばしをはさむとのこと) はできない」との判断 — を受けもし、米国第一審訴訟判決書では [結論] の部で

The Court lacks jurisdiction to adjudicate this action. Defendants' Motion to Dismiss (Doc.14) is GRANTED. 「本合衆国法廷は本件につき司法的決着をつけるだけの管轄上の権能を有していない。ゆえに被告の棄却を申し立てる言い分は承認を見た」

との最終的判断が呈示されているとの体裁をとっている(疑わしきにおかれては直に資料をご検討いただいでの確認を請いたい)。

上記のことについては(本稿にての他出典紹介部にて)都度内容を取り挙げてきた米国の法律家の訴訟案件分析資料( THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD / 本稿の先の段でも典拠として挙げている資料)では次のようなとりまとめがなされているところでもある。

(直下、THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD にての 860 および 861 よりの引用をなすとして)

---

The plaintiffs attempted to bridge the transoceanic divide and reach CERN by invoking the National Environmental Policy Act (“NEPA”). Through NEPA, the plaintiffs sought to require an environmental impact statement from the U.S. government in its role of funding and participating in the LHC project.

[ . . . ]

Yet the outcome was still what one would tend to expect — the case was dismissed on jurisdictional grounds. The federal government's funding and involvement did not provide a sufficient nexus for substantive jurisdiction under NEPA.

Gillmor's opinion suggested that the political process was the appropriate forum for airing what it characterized as a policy disagreement. Thus, in American courts, the question remains: What cause of action could be used to force CERN to defend a suit on the merits?

(拙訳として)

「(合衆国はハワイの法廷にて争われた訴訟の法廷では)原告らは NEPA ことナショナル・エンバイロンメンタル・ポリシー・アクトの規定に訴えることで大洋をまたいで(大西洋をまたいで)CERN に肉薄することを試みていた。NEPA 法規を通じては原告らは合衆国政府より[環境に対する影響にまつわる声明]を請求するよう求めることが出来る(訳注:によって安全が確認されるまで実験を差し止めすべしとの原告ら目的を法的に達成しようとしたと解される)。

…(中略)…

だが、結果は人がそうあるのだろうと考えるところ、[同訴訟(ケース)が司法管轄の見地から棄却される]とのものであった。合衆国政府の(実験への)資金的援助と関与は NEPA の名の下にの實質的管轄のための十二分なつながりを提供するとのものではなかった。

(当該問題に関わった判事たる)ギルモアの意見は政治的過程こそが政治的不同意として顕在化しているところすべてを議題にする適切なる場であるとのものであった。

このように合衆国法廷では「訴えの利益に則って CERN をして訴訟に抗

弁させしめるにはいかな訴えの原因(となる法規)が用いられるものなのか」  
との問題が疑念として残置することになった」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source)紹介の部 17-2**はここまでとする)

---

以上表記のようなことが米国 LHC 裁判の流れなのだが、(繰り返すが)、何を勘違いしてなのか、一部の科学読み本や一部の者に、

「米国裁判では裁判所が LHC 実験の至当性に賛意を表した。それゆえ、訴えた側の申しようは当然の棄却を見た」

などとも述べているとの向きもある。

が、(再度、述べるところとして)、それは事実裏打ちされたものではないこと、

[法律上の権利関係の争点の話と実験理論の適否を混在させてのやりよう]

と — 以上、引用を通じて摘示・解説してきたことよりもってして — ご理解いただきたいものである(：司法が[実験機関が大義としている理論の適正さ]それそのものに太鼓判を押したなどということはない。そのようなことは当然だが、裁判官などという人種、科学者ですらないとの人種にはできようはずもない。にも関わらず国内書籍ないし邦訳されている書籍などでそういう申しようをなしている書籍を特定することがあったらば、その著者のやりよう — 実験関係者にとり都合の良いように提灯を持つようなやりよう — の是非につきよくも考えていただきたいものである)。

さて、「司法管轄の枠外の問題である」とのことが明言されての裁判にて判決書にては、(先の引用部表記を繰り返すとして)、

**It is clear that Plaintiffs' action reflects disagreement among scientists about the possible ramifications of the operation of the Large Hadron Collider. This extremely complex debate is of concern to more than just the physicists.**

(訳として)

「原告らの法的訴えが LHC 運営に伴うありうべき結果について科学者らに不同意があることを指し示しているは明らかである。この実に複雑な議論に関しては[物理学者らだけの関心事である]といったもの以上のものである」

とのこともが述べられていた(まとめれば、それは [法的事由から管轄の問題で司法権が及ばせない] ところであり、[公衆の幅広くもの議論が必要である] といったところになるだろう)。

といった判決書が出されての海外裁判にて原告(plaintiff)あらため控訴人(apallent)となったスペインのジャーナリスト(ルイ・サンチョ)らが法廷でどういう主張をなしていたかであるが、——「本稿ではそうしたやりようを反面教師としている」と申し述べるところとして —— 彼らは自

分たちの主張を否定せんとする物理学者ら申しようが「全幅の信を置くに値しない」ことを強くも強調するとの式、

[専門家の [理論] そのものの妥当性の適否はいかなものか]

との観点で法廷で非を鳴らすとの戦術を第一審終結後控訴審に到るまで採用しもしていた(先立ってより、その旨、問題視すると申し述べていたとおりに、である)。

たとえば、オンライン上よりダウンロードできる「控訴をなすにあたって」訴えをなした側(ルイス・サンチョらサイド)より提出された裁判資料( IN THE UNITED STATES COURT OF APPEALS FOR THE NINTH CIRCUIT といったキーワードで該当物特定可能な文書) にあつては、(それなりの識見を有している人間が精査すれば、理解なせもしようところとして)、

「アマカス・キュリエ (法定助言人/海外法制度にて法廷に出廷して専門的意見を呈する専門家) としてその申しようが法廷に提出されたノーベル賞受賞物理学者(1979年にノーベル物理学賞を受賞したシェルドン・グラショーという人物)が[時代遅れの観もある科学的議論]で控訴人側申しようを否定しているが、そういうことは時事性より見て妥当ではない。また、物理学者理論にはもとより確実性に乏しいところがある。そのような者達の主張に全幅の信を置いて実験の推進を見守るのは公衆の安全との兼ね合いで統治体として適切な行為ではない」

との主張が強くも前面に出されていた。

につき、海外 LHC 裁判の控訴人の主張としては続いて呈示する通りのことが —— [ときに軽侮されることもある異端] [行き過ぎての主張をなす向き] なりといえども原告にてのルイス・サンチョも[一般人](ひたすらに[無関心]と[無知]に安んじているといった按配の人類の [マス] (過半) を構成する一般人) の遙か上を行く知力を持った人間でもあるのだから [それはそれで見るべきところがある] 物言いとして —— 主張されていた。

ここでは表記のことにまつわつての出典紹介をなすことから始める。

---

出典(Source)紹介の部 17-4



SOURCE

17-4

ここ出典(Source)紹介の部17-4では米国におけるLHC訴訟にあつての控訴供用文書(国内の訴訟にあつては[控訴理由書]とのかたちで法廷に提出されることになるものに相当するところの文書)としての IN THE UNITED STATES COURT OF APPEALS FOR THE NINTH CIRCUIT と題されての文書よりの引用をなすこととする。

(直下、IN THE UNITED STATES COURT OF APPEALS FOR THE NINTH CIRCUIT とのタイトルが付された米国 LHC 実験差し止め裁判にての控訴理由書(1 から 29 とのかたちで控訴の理由が書かれた文書)にあつてのいくつかの項目(1.および2.および8.の項目)より原文引用をなすとして)

---

1. The Amici affirm we have 'misconstrued and misrepresented' the risks to Earth the experiments at LHC represent, when the opposite is the truth: Amici misrepresent and downplay those risks (I). Since they affirm there is no risk whatsoever to Earth, as we 'do know' all possible risks involved. Yet their texts and previous, public declarations of Amici and CERN prove those risks exist and we do not know how to protect mankind against them.

2. Because CERN doesn't want to reveal them to the public, Amici don't inform this Court about them, but use an 'ad hominem' strategy (III), consisting in:- Telling this Court they are people with 'special knowledge' we must trust and Plaintiffs are people 'without merit' we must not trust, instead of analyzing the extinction risks mankind faces and the safety measures undertaken, if the most dangerous substances of the Universe, black holes and strangelets, appear at the LHC — which are null (II).

[ . . . ]

8. Amici affirm: 'Scientists working on the Manhattan Project seriously considered whether a nuclear explosion could release enough energy to ignite the Earth's atmosphere. At that time, probabilistic risk assessment, as it is known today, did not yet exist.' Thus Amici recognize Nuclear physicists already, without any safety assessment, risked the planet. Is not CERN using the same 'procedure' - going ahead, knowing they are risking the life of all of us? Is this a proper safety procedure, or an irresponsible act of arrogance?

(補いもしての拙訳として)

「1: 法廷助言人(アマカス・キュリエとしてその意見が提出されたシェルドン・グラショーら物理学者)らは我々(控訴人サイド)が LHC 実験にまつわる地球に対するリスクをもってして誤つての理解を構築、かつ、それを誤つての式で呈示しているとの断言をなしているが、反対のことが事実である場合、法廷助言人の方がこれらリスクについて謬見を呈示し、かつ、リスクを低めに見繕つての話をなしていることになる。 そうもした彼ら法廷助言人は「なにせよ地球に対するリスクは存在しない」( they affirm there is no risk whatsoever to Earth)と主張しているわけだが、我々が知っているようにそれは「全てのありうべきリスクが包含されての申しよう」でもある。だが、「彼ら由来の文書」(訳注: リスク検討をなしてきたとの関係者文書)および「従前の法廷助言人の公的宣言」(訳注: 「リスク検討をなしてきたとの宣言」のことと解される)は「CERN そのものが「リスクは(その可能性の大小はとも



かくも)ある] とのことを指し示さんとして「いた」] とのものあり(訳注:「確かに」本稿にての[出典(Source)紹介の部3]でも引用した[CERN サイドの2003年の安全性報告文書]たる STUDY OF POTENTIALLY DANGEROUS EVENTS DURING HEAVY-ION COLLISIONS AT THE LHC にても “ This opens the exciting possibility of observing the effects of these extra dimensions at the LHC, but also requires a new examination of potential hazards.” (訳として)「この見解(訳注:先立って引用なしたところの見解)は LHC 実験にあつてそれら余剰次元の効果を観測するとの知的に刺激的な可能性を開くものだったが、と同時に、潜在的な脅威に対する新たな検証を要するとのものでもあった」との記述が冒頭部よりなされている)、(といった「論理矛盾を含む言いようがなされている」との経緯から、との意でか)、我々控訴人サイドは「人類を彼ら(実験機関関係者)からいかにようにして守ることができるのか」につき答えを見出せないでいる。

2. CERN がそれら [リスク問題] について公にしたがらないとの事由があるため、また、法廷助言人らが本法廷にてそれらリスク問題について伝えんとしていないとの事由があるため、彼らは人身攻撃との戦術を本法廷にてとってきた。すなわち、本法廷にて

[彼らが [我々が信頼せねばならぬとの専門知識を有した者達] であり、他面、原告らが [我々が信用してはならないとの価値を有さぬ者達] である] との主張を —— 「宇宙にて最も危険なるものとなっているブラックホールおよびストレンジレットらが LHC にて生成された折に人類が直面することになる絶滅リスクおよびそれに対する安全性基準についての分析をなす」ことに代えて—— 専らになしてきた。

…(中略)…

8. 法廷助言人らはマンハッタン計画に携わっていた科学者らがかつて[核爆発にて地球環境を発火(かつ滅尽)なさしめるに足るエネルギーが解放されうるかどうか]を深刻に受け取っていたとのあると明言していた。(そのうえで)「往時は今日知られているそれのような「ありべきリスクに対するアセスメント(監査)」が存在していなかった」として、(往時の)核物理学者らが安全性検討無しに地球を危険にさらしたことを認めている(訳注: LHC 実験にまつわる安全性主張では「かつてマンハッタン計画ではこういうことがあったが、今日にあつてはそういうことはない、我々は過去から学習する」とのレトリックが用いられていることを指す)。CERN が同じ轍を踏んでいないというのならば、一步進んで、彼らは「我々全員の命を危険に曝している」とのことを理解しているということではないのか?これこそが(リスクがない、人身攻撃をなす、といったことに代えての)「適切な安全性検討手続き」ではないのか?さにあらずんば、傲岸さを体現しての無責任な挙ではないのか?」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上引用なした部には説得力が伴うところがある、米国訴訟原告(転じての控訴人)らの主張には見るべきところがあるのだが、彼らは(引用部にて)

“2. Because CERN doesn't want to reveal them to the public, Amici don't inform this Court about them, but use an 'ad hominem' strategy (III), consisting in:- Telling this Court they are people with 'special knowledge' we must trust and Plaintiffs are people 'without

merit' we must not trust, instead of analyzing the extinction risks mankind faces and the safety measures undertaken, if the most dangerous substances of the Universe, black holes and strangelets, appear at the LHC — which are null (II).” (大要)「安全性に対する適切な科学分析の呈示が必要であるのに彼らはそうせずに原告らの知識の欠如の強調と人身攻撃に終始した」

と述べつつ「も」専門家の理論それ自体の欠陥性(あるいはありうべき欠陥性)ばかりを批判するとのやりようを強くも前面に出しもしていた (たとえば、海外訴訟の原告らの主張を他愛ない取り合ひに値せぬ申しようであると法廷にて主張していたセルドン・グラショーというノーベル賞受賞者の物理学者、同男がかつてヒッグス粒子のことを「トイレット」と皮肉っていたことを海外訴訟原告らは逆に控訴文書で指摘、なじるように物理学者らの定見のなさ・節操のなさを攻撃の具としたりもしている)。

細かくもの引用をなしていたらばきりがなにもとらえるため、それら主張適否にまつわる部については表記の控訴人主張紹介文書の IV. SCIENTIFIC ALIBIS「科学的アリバイ」の部にての(1. から 29. と振られた項目のうちの)20. から 28. と項目番号が振られたところ、ページ数にして p.19 から p.32 との間のセクションを参照されたいとしつつ、一例、の中の 23 との部にあっての記述のみをこの場にて引いておくこととする。

そこにては  
[そちら申しように「?」(疑問符)を非事情通であればあるほど、つけたくなるようなところ]として次のような申しようがなされている。

(直下、IN THE UNITED STATES COURT OF APPEALS FOR THE NINTH CIRCUIT とのタイトルが付された米国 LHC 実験差し止め裁判にての控訴理由書(1 から 29 とのかたちで控訴の理由が書かれた文書)にあっての 23 と振られての項目より原文引用をなすとして)

---

it would evaporate instantly.' Amici once more copy-paste an article about RHIC as if it were LHC; and use a speculative theory, which has been falsified ad nauseam under the laws of the scientific method, to make us believe black holes are harmless time machines that evaporate information. Indeed, Hawking says Einstein is 'double wrong' because black holes evaporate. Yet black hole evaporation is a speculative theory of which there is no proof whatsoever, that breaks all the main laws of science, hence it is false;

(訳として)「RHIC(あるいはそれよりもの高エネルギーを実現する後継加速器)がブラックホールを生成しうるのならば、そのようなブラックホールはとて小く即時に蒸発するものである」。法廷助言人はいまひとたび我々に生成ブラックホールが情報を蒸発(散逸化)させる無害なるタイムマシンであるかのように信じこませるべくもそれが LHC であるかのように RHIC にまつわる記事をコピー・アンド・ペーストしてきもし、かつ、科学的手法にまつわる法則の下、吐き気を催す程の改ざんをなさしめられてきた仮説上の理論(ホーキング輻射)の持ち出ししてきた。実体としてホーキングはインシュタインは二重の意味で間違っている、ブラックホールは蒸発するのだから、と述べてきたとのことがある。だが、ブラックホール蒸発は、今のところ、何の証拠もないとの仮説上の理論であり、主たる既知の科学上の法則と抵

触する、それゆえに誤り(と解されるもの)ですらある」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

米国訴訟の控訴供用文書にあつては以上、例示表記したような申しようが科学界の至宝とされるスティーブン・ホーキングらをなじるように目立って展開されていもする (：因みに、以上の米国訴訟原告あらためての米国訴訟控訴人らの主張内容を過半以上、理解するためには次の i. から iii. の如き知識が最低限要される場所である ⇒ i. ホーキング輻射が実験機関の 2003 年報告書の主要安全性論拠にさせられていたわけだが、2004 年から一部のそれ専門の専門家 William Unruh などが「ホーキング輻射が発現するかは(極めて特殊なケースを顧慮することで) [開かれた疑問]である」と主張しだしている(本稿の先だつての部でも解説していることである)、ii. 引用元控訴資料には「ブラックホールが情報を蒸発させる無害なるタイムマシンであると信じさせたがっている」などと表記されているが、そちらはスティーブン・ホーキングがブラックホールの中で情報は保持されるかの賭けを他の物理学者(Preskillら)となして敗北を認めたことを皮肉っての表記であると解される、iii. ホーキング理論が既知の物理学法則と抵触をきたすといった筋合いのことが書かれているが、それは「粒子がブラックホールの如き限られた領域に閉じ込められると、速度上、不確定性を持つようになって、粒子の速度が光速を超えることも可能になる。そのために粒子が事象の地平線を通してブラックホールから脱出できるようになる」[ブラックホールは一定の放射と粒子を放出しているがゆえに完全に黒いとは言えない]といったホーキング申しよう(詳しくは和書『ホーキングの最新宇宙論 ブラックホールからベビーユニバースへ』(日本放送出版協会(現 NHK 出版)刊行書籍)などを参照のこと)とホーキング輻射提唱が裏表をなすために海外訴訟原告らがそうも述べているのだと解される)。

(出典(Source)紹介の部 17-4 はここまでとする)

---

以上、引用なしたようなところらを受けて申し述べるが、ノーベル賞を受賞したような権威や学界の至宝などと評される学者(スティーブン・ホーキング)らの申しように対して

「彼らの科学理論は[全幅の信]を置くべきではない、よりもって納得がいく安全性論拠を出すべきである」

などとの主張を日本の法廷でなしたらば、[通弊]として権威に弱いとされる国内裁判官らに「敗訴」を言い渡されること必定であろうと医療過誤訴訟の一般的傾向などから述べられそうなところでもある(そういったことからして疑わしいとのことがあれば、一法廷・司法権の限界の問題について考えたいとの向きには読んでいただきたい書だが—『裁判官が日本を滅ぼす』(新潮文庫)といった書を手にとられてその[医療訴訟]に関する内容を見てみるとよい。「滑稽極まりないことに」最高法規である憲法が(20条[政教分離]との兼ね合いで)既に骨抜きになっているにも関わらず[言論人](と銘打たれての[虚構]の構築を専門とする「タレント」ら)は法的には[目的効果基準]とされる側面でそのことを問題視しようとなさえない一方で9条[戦争放棄]などの規定ばかりが問題視されるとのこの[不思議の国]の裁判が大筋としていかような性質を帯びているかご理解いただけるかと思う)。

といったことからこの身が見るに、科学理論の適否、

[門外漢(含む:司法手続きに携わる人間)には理解が及びがたいとの科学理論の適否]

を前面に出すとのやりようで

[権威を笠に着る者達(実験機関関係者らであり、裁判官ら司直「でも」ある)]

に挑み訴求をなそうとの海外にての訴訟の原告のやりようには問題があるであろうとしか申し述べようがないと見ている。

そして、同じくものことは(権威に隠れて不正が多く黙過されてきたとの)[裁判]の外側にての物の言い様にも当てはまることと筆者は(当然に)見ている。

LHC 実験については本稿で問題視してきた、そして、これよりも問題視していく通りのこと、そう、

「理系人間であろうと文系人間であろうと分かたずそこそこの知能水準を有しているのならば理解できようところとして」「[研究機関の言いよりの根本的虚偽性を指し示すもの]が山なすほどに存在している」「そして、その山なすほどに存在している虚偽性を指し示すものが、と同時に、[恣意の賜物としての嗜虐性]をも帯びている」

とのことこそが真に直視されねばならぬところであるはずである(筆者は同じくものを直視できるか否かを問うこと、それがつまるところ、ありとあらゆる[逃げ]を倫理的・道義的に赦さぬことともなり、ひいては、種族の生存能力および存続価値の分水嶺そのものを「確かめる」ことに通ずることともなるととらえている)。

検討に「最低限の知性」と同様に「生き残るために闘う最低限の勇気」をも要するとの同じくものことにまつわる至当なる訴求が

[偽物としての反応しかなせぬとのロボット人間(傀儡)]

[無関心 Indifference・無知 Ignorance に安んじたままに生きていけるとの信仰・経験則を押しつけられているとの向き(この忌むべき世界の群衆の主要構成単位かとは思う)]

ではない、あるいは、そうしたものになりきっていないとの「責任感を持った人間ら」によって幅広くなされ、——[勇気]も[自由度]もない、考えることさえ放棄しているとの節ある[実質上の奴隷(というよりも家畜)のような内面]しか有さぬ人間ばかりが目立ちもするこの世界にあっては『無いものねだりにも過ぎる』との現実的見方を抱く向きの方が多いかとも見るが——そうした訴求が目覚ました多くの人間に直視されねば、そして、によって、人間存在が抗い、機会を掴みとらんとし、何かを現実的に変えんとせぬ限り、

「何の望みもなかり」

と手前は考えているのである。

逆を述べれば、

「それが出来ないようであるのならば、」我々人間という種族は  
[如何なる帰結に対しても何の文句も言えなかった(意志の力の問題として言わなかった)種族]  
であったとの式で遠からず終焉を迎えるであろう」

とまで見ている。残念ながら、である（ただし、そうした見立ては押しつけはしない。そう、筆者が第三者に検討を講ずるのは何故に上のような観点が導出されるのかとのことにまつわるその具体的材料——本稿にてその呈示を使命と任じているもの——の適否と意味性だけである）。

その点、(繰り返すも)、海外訴訟にあって訴えたサイドは

[科学者科学理論の盤石さに対する疑義を呈するとの式での指し手]

[科学言語ではなく自然言語で摘示可能な[矛盾]や[偽り]が存在するところにてそうした目立っての「マイナスの」側面を摘示するわけではなく、代わって、[科学理論そのものが至当かどうか分からない限界を孕(はら)んだものである]と申し述べるのに終始するとの式での指し手]

が強くも採用されていた節があるわけだが、常識——それが根本根源からして忌むべき紛い物であろうともシステムの構成要素らに最大限尊重される式で堪えがたい臭気で満ち満ちた畜舎、もとい、社会が構築されているとの決まり事——にあっては最大限重要視されるとの[ノーベル賞級物理学者らによって防御されている科学理論]そのものが[至当ならものか、そうではないのか]は

「本稿がその中身の適否を分析対象としているものでないし、その中身の適否を重んじているものでもない」

とのこととなる。

本稿で重んじているのは門外漢が支持を集める式にては踏み入ることができなかりとうの専門科学理論の適否などといったことではなく、

[それが蒸発せずに、なおかつ、成長するのに天文学的時間を要しなかった場合に我々全員の命を刈り取ることになる出来事(ブラックホール人為生成)につき[はきとした証拠の山](本稿のここまでの段にて摘示してきたような事例が「一例」としかならぬような証拠の山)に基づき[奇怪な予見的言及]が過去になされ続けてきたということが指し示せるとの[事実]がそこにある、そして、その[事実]が指し示すとの方向性があまりにも[異常無比]かつ[酷薄]なものとなっているとのことがある(より具体的には「[人間の予見性の結果]ではおよそ説明が付けがたいとの[「奇怪な」予見的言及]が山として具現化しているのみならず、それら[「奇怪な」予見的言及]が[執拗なまでの恣意性の問題]を観念されもするとのかたちで[「堂に入った」「悪意によって成り立つ」系統立った側面]を相互に関連しながら呈している)こととなっている]

との[事実]そのものである。

以上の真に重要視されて然るべきこと——本稿これよりの段にあってさらにさらに煮詰めてもいくとのこと——の重要性を強調するために

「海外の訴訟事例のやりよう——不正を黙過しても臆病者らには[権威]に逃げるだけの言い訳を許してしまうとのやりよう——を反面教師にしての話をここまでなしてきた」

のである(※)。

※LHC 裁判を巡る動向についての「さらに」補ってもの表記として

海外で訴訟を起こした者達は —— 勇気があり、自由度を有している人間であるのならば「意思確認を遺漏なくもなす」との挙とも通ずる[相手の存立基盤にダメージを与えるカード]をも切るべきであったのに—— このような世界で[適正視されるべき科学的検討]について云々するとの式にこだわり、(それとて苦肉の策であったとは慮る余地が多分にあるのだが)、常識的語柄で NEPA ( National Environmental Policy Act : 国家環境政策法) に応じての監督を実験一時差し止めとつながるところとして求め、必然としてなのか、の敗北を見てしまっている節がある。

(: 国内で訴求の用に供するためだけに裁判を提訴していた人間として申し述べるが、国内でも差し止め訴訟との類型の裁判を提訴できるかたちに法律構成がなっていたならば筆者ならば、[相手の存立基盤]にダメージを与えるカードを切り、それをもって、判断をなす立ち位置にある人間に[選択]を求めるとの事をなしていただろう(それでもって裁判官らが至当適切ではない妙な[事実認定]をなしたならばその式での[人間性の限界]と[断罪されるべき罪業]について「も」判ずることができただろう)、しかし、残念ながら、手前が無為なるかたちでかかずらわってきたとの国内訴訟では(先述なしたところの法制度の問題があり) よりもって皮相的な「法的」側面にてでしか当該問題では争えない、それがゆえに、「主張に使えるカードも限られていた」とのことがある —— (の中でも法廷ゲームの中で本質的な意味での悪質性を訴求できるようなカードをできるだけ切ろうとしてもしたわけだが、[LHC のブラックホールリスクにまつわる「組織的な」やりとりが果たしてなされていたのか] などといった[自明なること]に裁判の性質上、争点が矮小化を見ており、なおかつ、人事異動を見た後の担当裁判官が「LHC のブラックホールリスクにまつわる組織的やりとりが問題となる記録を伴って存在していたかは藪の中。」などと[ブラックホール蒸発訴求文書としてそこにある実物](物理学会発表文書としての国内の組織供用文書)を現に提出していた筆者に対して[「妙な」事実認定]をなしたりもしてきていたのが[国内実験機関のリスク情報に対する扱い方(と国民に対する背信行為)につき非を鳴らしていたとの長期化した国内行政訴訟]のありようとなっている) —— )。

海外訴訟では訴えた側も[相手方の「科学的」言い分の欺瞞性を問題視する]との相応の主張をなすにあっても工夫をなしていたようだが(直近にて引用なししていた[出典(Source)紹介の部 17-4]の前半にての引用部(のうち、1. や 2. や 8. と振られての部)に見るような申しようがまさしくもそうした工夫の妙・工夫の跡が窺えるところである)、結果的に

[米国訴訟の「控訴審」]

にあつて「も」前審に続き[法律上の争訟]を[法律上の争訟]たらしめている根拠となる法規、NEPA(既述)の該当案件適用「不可能」性の問題を受けつつ控訴人ら(サンチョら)主張は

「(理論の適否をなじる中で)直接性ないし急迫性を有した侵害がそこにあるのか指し示せていない」

とのことで敗訴が言い渡されたとオンライン上にも流通している諸文書を通じて確認できるようになっている( : その点については “ In late August 2010 the Ninth Circuit affirmed the district court's dismissal of the case, holding that the plaintiffs had not established a direct or imminent injury, and therefore did not have standing.” (訳として)「2010年8月下旬、第9巡回区連邦控訴裁判所は原告ら(往時 appellant 控訴人)が直接性ないし急迫性を有した侵害を指し示しきれていない、従つて、主張の基盤がないとのことを取り上げながら、第一審の棄却判決を支持するとの結論を出した」などと訴訟一方当事者を支えた者たちに締めくくられて



いる；左の英文の部は訴訟の被告・被控訴人ら（要するに加速器実験実施サイドたる合衆国エネルギー省、フェルミ国立加速器研究所ら）を支援していたとのことである。ニューヨークに拠点を設けている ATLANTIC LECAL FOUNDATION [アトランティック・リーガル・ファウンデーション] の [自由の女神を上を据えたウェブページ] より原文引用した控訴審判決に対する解説文である（一疑わしきは原文出所をそのまま文書名や文章文言の検索エンジン入力にて特定してみるのもよからう）。

（さらに補ってもの表記を続けるとして）

尚、（米国から転じての）欧州ではカオス理論を専門とするとのことであるドイツはチュービンゲン大の教授オットー・レスラーが同様の裁判をスイスにて提訴したわけだが、その折の裁判所の申しようも

「訴え人の主張は危険性を十全に示しきれているとのものではない」

とのものであったと「そればかり」目に入るような紹介媒体にて語られているところとなっている——※それにつきさらに詳しく述べれば、欧州の裁判の方では CERN

実験が執り行われるスイスでドイツ人教授オットー・レスラーらグループが裁判を起こしていたが、（米国裁判控訴審と同様に）「根拠薄弱である」との申し分で訴訟は棄却されている（：オットー・レスラーについては初期、CERN の科学者らにもその申しようをまともに相手にされそうなところがあったともいうが、後、CERN 関係者態度はレスラー申しようは「妥当ではない」との軽侮を伴っての無視に切り替わったと（先に

出典として紹介している）米国人法学者による論稿、**THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD** 上では言及されている（該当ページは文書上部にて 844 から 845 と番号振られたページがそうである）。

その点、ドイツの大学教員であるオットー・レスラーらは後、最後の手段として欧州人権裁判所に提訴をなしたとも伝わっているが、裁判で [原告適格] が果たして認められるのか否か延々と揉めているうちに問題となる実験がはじまり、「遅すぎた」とレスラー自身が述懐したようなところとなっていったと欧米圏流通資料でまとめ

らもしているかたちが欧州で物議を醸した訴訟の顛末である（：日本の行政訴訟「一般」でも裁判の判決が出た折には遅すぎたとの処分をめぐる不条理システムが採用されているとも聞き及ぶ（日本の御上を相手にした裁判の馬鹿馬鹿しさを解説した書籍などに記載されていることでもある）が、それと似たような運びとなっているとされる。その点、オットー・レスラーやりようを巡るここでの記述は **"HONEY I BLEW UP THE WORLD!": ONE SMALL STEP TOWARDS FILLING THE REGULATORY "BLACK HOLE" AT THE INTERSECTION OF HIGH-**

**ENERGY PARTICLE COLLIDERS AND INTERNATIONAL LAW** とのタイトルで PDF 化されたバージョンがオンライン上にて流通している文書、ジョージア大

ロースクールで法学博士の資格をとっているとのことであるサミュエル・アダムス (Samuel Adams) という人物の手になる文書の 152 から 153 と付されてのページにて解説されているところでもある（のでそちら表記の文書名（**"HONEY I BLEW UP THE WORLD!": ONE SMALL STEP TOWARDS FILLING THE REGULATORY "BLACK HOLE" AT THE INTERSECTION OF HIGH-**

**ENERGY PARTICLE COLLIDERS AND INTERNATIONAL LAW**）をダウンロード・確認いただくのもよからう）——。

とにかくも欧米の裁判にあっては

「[理論の適否]（ある理論、あるいは、ある理論に基づいた実験には信がおけるか否か）が専らにして争われている」

次第である。

につき、直近にても言及した文書となるが、JD（法務博士号）保持者、ということは

法曹ということになるうとの Samuel Adams がまとめている論稿である、

**"HONEY I BLEW UP THE WORLD!": ONE SMALL STEP TOWARDS FILLING THE REGULATORY "BLACK HOLE" AT THE INTERSECTION OF HIGH-ENERGY PARTICLE COLLIDERS AND INTERNATIONAL LAW**

にては筆者が[ことの問題性]をよくも示すと見る次のような記載がなされている(のでそちらよりの引用もなしておく)。

(直下、"HONEY I BLEW UP THE WORLD!": ONE SMALL STEP TOWARDS FILLING THE REGULATORY "BLACK HOLE" AT THE INTERSECTION OF HIGH-ENERGY PARTICLE COLLIDERS AND INTERNATIONAL LAW にあつての 153 と振られてのページよりの引用をなすとして)

**First, as seen in the RHIC case, it is difficult for a plaintiff to prove that there is a danger when relying solely on theoretical physics.**

(訳をなすとして)

「一義的に(かつてワグナーらが 1999 年の騒動の後、加速器 RHIC にて提訴した訴訟に見られるように)原告にとって理論物理学にのみ依拠していることが問題となっている時点で[危険]があると立証することが困難である」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上にては

[言うまでもないこと]

が記載されていると思われる(加速器訴訟の相手方がノーベル賞受賞物理学者らさえその気になれば法廷助言人(アマカス・キュリエ)として援護射撃要員として動員できるような組織体ならば、そして、訴える側が主流派物理学者らの言うがまにまにの世論の理解を得られないような状況ならば——常識の世界での常識サイドの声の大きい方の論理に衆が固執する中で——勝敗は自ずと決していようと思われる)。

詰まるところ、そうもした上にて記載されていることが本稿筆者が海外訴訟にての原告やりように伴う問題点、否、本件にかかずらう人間が陥ってはならぬ陥穽のありようが端的に表されているところと見ている。

ここまで述べてきたうえで

「ブラックホール生成問題にまつわる先覚的言及をなしている文物が存在しているのだが、それがその[先覚性][正確性][克明さ(露骨さ)]のどの面でも群を抜いているとの異常無比なるもの、まさしくもの[[予言的作品]]にして[告知文物]』といった形態のものとして存在しているがゆえに問題になる——本来的には[[未知]を前提にしての予言「的」作品]と[[既知]を前提にしての告知文物]は論理的に両立するものではないわけだが、それら要素を双方体现しているがために異常無比となるものが存在している(がゆえに問題になる)——」

との観点で本稿の先の段にてその細かき内容を問題視してきた作品、『ホール・マン』(CERN の名前を露骨に想起させる架空の組織の 15 兆電子ボルト加速器を登場させている他の小説 Adrift Just off the Islets of Langerhans:

Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題) 『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ラングルハンス島沖を漂流中』と [ブラックホール関連文物] として連結していると [事実 F] から [事実 J] の段を通じて摘示してきた 1974 年初出の小説) より次のような表記を引用していたことを再度、取り上げる。

(直下、邦訳版の『ホール・マン』掲載撰集の p.270—p.271 —— [出典 (Source) 紹介の部 6] にて取り上げた出典—— よりの「再度の」引用をなすとして)

「リアは肩をすくめ、首をふった。「何による殺人だい?あの中にブラックホールがあるなんて、チルドレイは信じてもいなかった。あんたたちも、似たようなもんだ」唐突に、にやりと笑った。「裁判がどんなものになるか、考えてみろよ。検事が陪審団に、この次第に関する自分の考えを説明するところを想像するんだ。それにはまず、ブラックホールについて話さなきゃならない。つぎに量子ブラックホール。それから、兇器が発見できない理由、それが火星の中をつきぬけて動きまわっていることを、説明しなくちゃならないんだぜ!そこへいくまでに、笑いとばされて法廷からおん出されずにすんだとしても、その上さらに、原子よりも小さなそんなものがどうして人を殺せるのかということ、説明しなくちゃならないんだ!」

…(中略)…

それでおしまいだった。裁判が成立するみこみはない。並みの裁判官や陪審団に、検事側の話を理解させることなど、できっこないからだ。このまま明るみに出ずに終わる事実も、二、三あることだろう」

(邦訳版よりの引用部はここまでとする —※— )

(ちなみに上の引用部に対応する原著 The Hole Man の表記は Neither did many of you." He smiled suddenly. "Can you imagine what the trial would be like? Imagine the prosecuting attorney trying to tell a jury what he thinks happened. First he's got to tell them what a black hole is. Then a quantum black hole. Then he's got to explain why he doesn't have the murder weapon, and where he left it, freely falling through Mars! And if he gets that far without being laughed out of court, he's still got to explain how a thing smaller than an atom could hurt anyone!"[ . . . ]Obviously there would be no trial. No ordinary judge or jury could be expected to understand what the attorneys would be talking about. A couple of things never did get mentioned.となる)

直上にて再引用なしたところの記載が[奇怪な先覚的言及に関わっているところの文物(『ホール・マン』)]にてなされていることが

「いかに悪魔(狂った宗教の徒輩ら流に言うところの神でもいい)が人間を嘲笑うがごときものなのか」

についてブラックホール生成議論のありようについて深くも分析してきた人間には分かつたものである(国内で当該問題に関する裁判を長々と闘っていてもした筆者にそのようなことを述べる資格があるかないかは本稿こここれに至るまでの内容を読み直していただいでうえでもきちんと考えていただきたいものではある)。

LHC 裁判動向についてのさらに補ってもの表記はここまでとする

法廷にての鏝迫り合いのあり方、そちらに材をとっての今までの話から

「[本来的には、]人類が一丸となってその是非について検討「すべき」ような当該案件」

につき — (世人がそれに向き合う[意志の力]を果たして実際に蔵しているかはまた別問題として) — 「何を」「どう」問題視すべきなのか筆者が指摘していることはご理解いただけたことか、と期待する。

ここまでにて「[強くも断っておきたいことらの明示]をなしたい」とのことで取り上げるとしてきた二点のことら、すなわち、

第一。

「[本稿で問題視したいこと]は[物理学者ら理論にあつての欠陥性]を指摘するなどということには毛頭ない。そういうこと、物理学者ら理論にあつての欠陥性を摘示するとの資格も能力も筆者にはない(などと述べると心得違いをなしている向きは『この者が摘示事物に確証・自信を抱いていないからそうもしたことを言うのだろう』などと誤解するかもしれないが、そうではない)。専門家らの理論の適否を論ずることなどせずとも、それでも、[実験](と世間的には明示されている営為)に伴う問題となることは「容易に」摘示できるようになっているし、第三者でもそのことは確認できるようになっている。そのことの把握を求め、その先にあることの意味を問うのが本稿の趣意である」  
(同点、第一の点の明示のために本稿では「「反面教師としての」海外のLHC関連訴訟を巡る顛末の解説」を話柄としての説明をなす)

第二。

「本稿では[他の人間に誤解されるようなこと]を敢えても指摘しているが、といったことにしても[きちんとした論拠](属人的目分量の問題から離れもしてそこに確として存在しているとの論拠)に基づいているとのことを厳選・取捨選択して取り上げている。それが果たして本当なのか、本稿が真剣なる顧慮に値するもの、そう、[具体的行動の指針となして然るべきようなもの]とのレベルで真剣なる顧慮に値するものなのかとの観点にて読み手に切に確認いただきたいと考えている」  
(同点、第二の点の明示のために本稿では「奇異奇矯と受け取られもしようこと、であるが、顧慮に値すること」がいかようなことなのか、極々一例、先行するところの説明を間を經ずに(紙幅にしてそう先のところではないとの段にて)なすこととする)

とのことらのうちの第一の点についての話をなし終えた。

次いで、

第二。

「本稿では[他の人間に誤解されるようなこと]を敢えても指摘しているが、といったことにしても、いや、といったことであればこそ、[きちんとした論拠](属人的目分量の問題から離れもしてそこに確として存在しているとの論拠)に基づいてのことを厳選・取捨選択して取り上げている。それが果たして本当なのか、本稿が真剣なる顧慮に値するもの、そう、[具体的行動の指針となして然るべきようなもの]とのレベルで真剣なる顧慮に値するものなのかとの観点にて読み手には切に確認いただきたいと考えている」

とのことについて ——そちらは極めて長い話ともなるのだが—— 舵をきりたいと思う。

さて、本稿および本稿を公開しているサイトで本稿筆者にあつては、従前、

[常識人の眉を顰(ひそ)めさせるようなこと]

を多々書いてきもしたとの属人的きしたしがある（:それが耳目に触れえるとのことがそうそうにあったか否かの問題を置き試験的にかなりもってして前からアップロードしていた本稿を公開しているサイトの一にあつてはやりすぎたか、と思うぐらいにそうしたこと、常識人の眉をひそめさせるようなことを（「多くの重要事」にまつわる典拠を挙げての説明を割愛してしまっている中で）多々書いてきたとの属人的背景が手前にはある）。

たとえば、である。

[CERNの挙動が異世界への扉とも表すべきワームホール（別名アインシュタイン・ローゼン・ブリッジ）を開く可能性がある。それによって、この世界に我々を支配すべくもの何がしかのもの（ナノマシンのような構造体）が入ってくる可能性や我々の世界の崩壊がもたらされる可能性が観念される]

[先に発生した911の事件にまつわる予見文物が数多存在している。それら予見文物には[共通の特性]が垣間見れ、その共通の特性とは[フリーメーソン象徴主義との連続性]、そして、[ギリシャ神話の特定のエピソードとの濃密なる接続性]となっている（視覚的事実、そして、記録的事実にまつわる問題である）。また、同じくもの特性を伴っての事前言及をなしている文物ら ——本来ならばといったものらが存在していること自体が奇怪でならないとの文物ら—— が存在している一方で、そうした予見文物らそれ自体から離れてものこととして、[先に911の事件が発生したニューヨークの一角（たるワールド・トレード・センター）]からもってして[フリーメーソン象徴主義との連続性]、そして、[ギリシャ神話の特定のエピソードとの接続性]をその場に見出せるようになっている。従って、（[予見文物]と[現実的状況]の対応から）、911の事件 ——正確にはワールト・トレード・センターの一角にあつて[飛行機のツインタワーへの衝突]に続いて計7棟のビル群が順次崩れ去っていったとの事件—— については[フリーメーソンに通ずる儀式]（注：現時、この言いようには問題があったかととらえており、[フリーメーソンのような存在を動かす力学が固執するところの儀式]とした方が適切であろうと判ずるに至っている）である申し述べられるようになっている]

といったこと、常識人の眉をひそめさせてならないとのことを多々扱っている。

言論流通動態につき多少詳しく向きにあつてはお分かりだろうが、上のことに響き近きこと ——本稿を公開したサイトでもそれにまつわる話をなしているとのことと響き近きこと—— をネット上および紙媒体上で述べている、

[神秘家・宗教家]（しばしば[陰謀論者]を兼ねている）

が数多いる（:具体的事例を挙げる必要もない。相応のキーワードで検索エンジンを走らせれば、日々増殖していると見受けられもするそうした者たち由来の[ゴミ]（この場合、[ゴミ]とは何ら[論拠]らしいものを伴っておらぬ[神秘家漫談としての情報価値伴わぬもの]のことを指す）ばかりが目立って目に入ってくるからである。次元の上昇?何が言いたいのだ?この者らは?といった塩梅で、である）。

神秘家・宗教家申しよう、あるいは、常識的人間が傍から見れば

「Conspiracy Theorist 陰謀「論」者とも言い換えられよう詐欺師ないし頭の具合のよろしくはない妄想癖の徒の戯言である」

としか受け取られないだろう申しよう(そもそも論拠などないために検証できないか、検証できる余地があってもすぐに鍍金(めっき)がはがれようとの「薄い」申しよう)と上述のような申しよう、繰り返せば、

[CERN の挙動が異世界への扉とも表すべきワームホール(別名アインシュタイン・ローゼン・ブリッジ)を開く可能性がある。それによって、この世界に我々を支配すべくもの何がしかのもの(ナノマシンのような構造体)が入ってくる可能性や我々の世界の崩壊がもたらされる可能性が観念される]

[先に発生した 911 の事件にまつわる予見文物が数多存在している。それら予見文物には[共通の特性]が垣間見れ、その共通の特性とは[フリーメーソン象徴主義との連続性]、そして、[ギリシャ神話の特定のエピソードとの濃密なる接続性]となっている(視覚的事実、そして、記録的事実にまつわる問題である)。また、同じくもの特性を伴っての事前言及をなしている文物ら——本来ならばといったものらが存在していること自体が奇怪でならないとの文物ら——が存在している一方で、そうした予見文物らそれ自体から離れてものこととして、[先に 911 の事件が発生したニューヨークの一面(たるワールド・トレード・センター)]からもってして[フリーメーソン象徴主義との連続性]、そして、[ギリシャ神話の特定のエピソードとの接続性]をその場に見出せるようになっている。従って、([予見文物]と[現実的状况]の対応から)、911 の事件——正確にはワールト・トレード・センターの一面にあって[飛行機のツインタワーへの衝突]に続いて計 7 棟のビル群が順次崩れ去っていったとの事件——については[フリーメーソンに通ずる儀式](注:現時、この言いようには問題があったかとはとらえており、[フリーメーソンのような存在を動かす力学が固執するところの儀式]とした方が適切であろうと判ずるに至っている)である申し述べられるようになっている]

は[ほとんど区別がつかないものである]と受け取る向きも多かろう(：筆者としてもそうした誤解を避けようとの[断り書き]を折にふれなし、[言い過ぎ](憶測の先行しすぎ)や[他の望ましくもなきものとの重なり合い]があれば、都度、修正表記をなそうとしてきたわけだが、(仮に聞く耳を持った人間がいたとしても)、伝えんとしていることの機微を書ききっていたのか確証がない——そも、本稿を公開しているようなサイトが[ジャンク]をばら撒く以外に能がないとの紛い「者」、主体的かつ理性的な思考などとは無縁なる宗教の徒以外の真っ当なる語るに足る人間に閲覧されているのかのさえ、希望的観測の範疇を超えては望めないにとらえるに至ってしまったとの中でも敢えても述べれば、である——)。

であるから書いておくが、軽侮・軽蔑、読み手にそういったマイナスの反応を誘発すれば、あるいは、本当に告発すべき問題点が存在することを練度・程度低き人間ら由来の[ゴミと同一視させんとする作用]がある一定以上働ければそれで目的達成といった紛い「者」らと[責任感をもってやっているこの身の言論(にあっての「たとえば、」の上記物言い)]には違いがあるとのこと、強くもこの場にて(申しようについて断わっておきたいことの第二の点として)訴求しておく。

その点、「当然に」誤解を招きかねない言辞]として直近言及したことらのうち、

[先に発生した 911 の事件にまつわる予見文物が数多存在している。それら予見文物には[共通の特性]が垣間見れ、その共通の特性とは[フリーメーソン象徴主義との連続性]、そして、[ギリシャ神話の特定のエピソードとの濃密なる接続性]となっている(視覚的事実、そして、記録的事実にまつわる問題である)。また、同じくもの特性を



伴っての事前言及をなしている文物ら —— 本来ならばといったものらが存在していること自体が奇怪でならないとの文物ら —— が存在している一方で、そうした予見文物らそれ自体から離れてものこととして、[先に911の事件が発生したニューヨークの一面(たるワールド・トレード・センター)] からもってして [フリーメーソン象徴主義との連続性]、そして、[ギリシャ神話の特定のエピソードとの接続性] をその場に見出せるようになっている。従って、([予見文物] と [現実的状況] の対応から)、911の事件 —— 正確にはワールド・トレード・センターの一面にあつて [飛行機のツインタワーへの衝突] に続いて計7棟のビル群が順次崩れ去っていったとの事件 —— については [フリーメーソンに通ずる儀式] (注: 現時、この言いようには問題があったかととらえており、[フリーメーソンのような存在を動かす力学が固執するところの儀式] とした方が適切であろうと判ずるに至っている) である申し述べられるようになっている]

といった、

[一見にして「頭の具合がよろしくない」と解されもしようとの実にシュールな申しよう]

からして残念ながら [具体的論拠] [具体的懸念材料] に基づいて申し述べているとのこととなる。

そのことの(先立っての)明示をなすべくもの解説をなすことで、

「本稿筆者は [他の人間に誤解されるようなこと] をも敢えても申し述べることとしているのだが、そうしたところからして [きちんとした論拠] (属人的目分量・属人的観点から離れもしてそこに確として存在しているとの論拠) を伴っており、真剣な顧慮に値するもの、そう、[具体的行動の指針となして然るべきようなもの] とのレベルで真剣な顧慮に値するものになっている」

とのことを(ここ本段にて)強くも訴求しておきたい。

以上申し述べたところでまずもっては、

[CERNの挙動が異世界への扉とも表すべきワームホール(別名アインシュタイン・ローゼン・ブリッジ)を開く可能性がある。それによって、この世界に我々を支配すべくもの何がしかのもの(ナノマシンのような構造体)が入ってくる可能性や我々の世界の崩壊がもたらされる可能性が観念される]

とのこと —— 傍目から見ると「当然にして」頓狂と見えるであろうとのこと —— に関わるどころとして

[CERNのLHC実験によってワームホールの類(時空間のショートカットを約束する重力の歪み)が生成されうるとの科学的理論が存在しており、そこから何かを行き来させることができるようになるとの科学者見解が俎上にのぼったことがある]

とのことを取り上げることから始める。

下の [出典\(Source\)紹介の部18](#) を参照されたい。



# SOURCE

## 18

ここ出典紹介部にあつては

[CERNのLHC実験によってワームホールの類(時空間のショートカットを約束する重力の歪み)が生成されうるとの科学的理論が存在しており、そこから何かを行き来させることができるようになるとの科学者見解が俎上にのぼったことが「ある」]

とのことの典拠を挙げることにする。

(直下、『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器一』(原著表題 COLLIDER: The Search for the World's Smallest Particles / 邦訳版刊行元は日経ナショナルジオグラフィック社で同著、本稿先立っての [事実 B] にまつわる解説部にもその内容を問題視した実験機関担ぎ上げ本としての色彩強き書籍ともなる) の p.287 - p.289 よりの原文抜粋をなすとして)

---

これまでの議論は明確な科学的根拠に基づいているが、最後に紹介するのは、SF小説のような、あるいは夢のような話である。CERN がここまで太鼓判を押してまだ不安ならば、未来から何の警告もないことで安心すればよいのだという。ロシアの数学者イリーナ・アレフエワとイゴール・ヴォロビッチによれば、LHC は現在と未来を結ぶ時空の通路、通過可能なワームホールを生み出すだけのエネルギーを持っている。もし、LHC が危険なら、未来からのメッセージがあったり、LHC の完成を阻止して歴史を改

変する科学者が出てくるであろう……

通過可能なワームホールは、アインシュタインの一般相対性理論方程式を解くことで得られるもので、時空の離れた二点をつなぐという特徴がある。ワームホールもブラックホールと同じく、物質が宇宙という織物を強力に曲げてできる重力井戸だ。しかし、そこに含まれる幽霊物質(未知の物質)という仮想の物質が負の質量とエネルギーを持っているため、侵入者に対する反応が違う。ブラックホールに落ちた物質が崩壊するのに対し、幽霊物質は通過可能なワームホールを開け、時空に通路をつくって宇宙の別の場所へつなぐ。

…(中略)…

1980年代後半以来、通過可能なワームホールはCTC(時空曲線)をつくり、これをたどれば過去へタイムトラベルできるという説が唱えられてきた。

…(中略)…

勇敢な宇宙船が飛び込めるほど大きいワームホールなら、ループは完全につながっているので、理論的にCTCが出来た後のどの地点にも戻ることができる。

…(中略)…

アレフエとヴォロビッチは、LHCの衝突現場のエネルギーなら過去との通信が可能なワームホールが出現すると推測する。LHCの研究者たちはもし未来の日付の奇妙なメッセージがモニターに現れたら、このことを真っ先に知るだろう。

---

(書籍『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』よりの引用部はこま  
でとしておく)

(注記1:ちなみに、——理論の適否はともかくも——上抜粋部に見るロシアの数学者イリーナ・アレフエバ(アレフエ)とイゴール・ヴォロビッチらの来歴も彼ら申しようが重んじられる背景にあるように解されもする。LHCでワームホールが生成されるとの見解を呈しているとの彼・彼女らロシア人数学者らが属する研究機関が[その業績より高評価を受けている研究機関]であることも彼らの仮説呈示が重んじられている背景にあるように解されもするのである、具体的にはイリーナ・アレフエバとイゴール・ヴォロビッチらが属している研究機関が[数学の世界で有名なリーマン予想などと並んでのミレニアム懸賞問題のひとつたるポアンカレ予想]を解明したことで有名なグレゴリー・ペレルマンといった学究が所属していたことで令名がつとに知れ渡っている **Steklov Institute of Mathematics**[ステクロフ数学研究所]であることも彼らの申しようがある程度重んじられている背景になっているように受け取れる ——※[ステクロフ数学研究所]成員のイリーナ・アレフエバとイゴール・ヴォロビッチらのワームホール生成にまつわる申しようがある程度は市民権を得て欧米圏に受け取られているとのことについては主流メディア「にさえ」同じくものことが(ほとんど目立たないとのウェイト付けなされての節ありの中ながらも)取り上げられていたことから推し量れるようになっている。たとえば、検索エンジン上での **Time travellers from the future 'could be here in weeks** とのそちら英文記事タイトル(『未来からのタイムトラベラーがここ数週間のうちにお目見

えするかもしれない』といった語感の英文記事タイトル)の入力で同定・捕捉できるところの 2008 年 2 月発のデイリー・テレグラフ (The Daily Telegraph/英国主要新聞)のオンライン上記事にあって(以下、一部引用なすとして) “**Prof Irina Aref'eva and Dr Igor Volovich, mathematical physicists at the Steklov Mathematical Institute in Moscow believe that the vast experiment at CERN, the European particle physics centre near Geneva in Switzerland, may turn out to be the world's first time machine, reports New Scientist.**” (訳として)「ステクロフ数学研究所に所属の数理論物理学者であるイリーナ・アレフエバ教授とイゴールヴォロビッチ博士は、ニュー・サイエンティスト誌が報ずるところ、ジュネーヴにある欧州素粒子物理学の中核たる CERN の大規模実験が世界初のタイムマシンたりうると判明するであろうと考えているようである」と [報道] されているところからもステクロフ数学研究所の彼・彼女らの [タイムマシンとしてのワームホール] の生成にまつわる申しようが (その理論としての適否はともかくも) それなりに市民権を得ている のことが察せられるようになっている—— )

(注記 2: 上の COLLIDER: The Search for the World's Smallest Particles (邦題)『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』よりの抜粋部にては

「1980 年後半以来、通過可能なワームホールは CTC (時空曲線) をつくり、これをたどれば過去へタイムトラベルできるという説が唱えられてきた」とされているが、といった説、ワームホールがタイムマシンたりうるとの説の隆盛の契機は

「その逝去を見た 90 年代に至るまでメディアが担ぐ時代の寵児たるカリスマ物理学者として活動していたカール・セーガンの求めに応じて、「1980 年代中葉に」キップ・ソーンという物理学者が [通過可能なワームホール] というものの存在を想定・提案した (そして、同キップ・ソーンがその [通過可能なワームホール] によって [過去への伝送路] を確保するとの理論をさらにもって提唱した) 」

ことにあると諸所にて指摘されるところとなっている ——キップ・ソーンの (元を辿れば [フィクションに対する助言] としての科学考証に由来する) 新規理論についてはそれをまとめた著作 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** (邦題)『ブラックホールと時空の歪み』(邦訳版の版元は白揚社/本稿でもその細かき内容を原著から、そして、訳書からさらに後の段にて原文引用していくとの著作) を含めて海外ではよく知られたところとなっている。につき、和文ウィキペディア [タイムマシン] 項目程度のものにも [タイムマシンの現実的理論枠組み] についての解説部で同じくものことについての紹介がなされているわけだが (現行にての和文ウィキペディア [タイムマシン] 項目記載内容より引けば、(以下、引用なすとして) “カリフォルニア工科大学のキップ・ソーンは 1988 年に、通過可能なワームホールを考察し、量子の泡から生まれるワームホールを広げて利用する時間旅行の概念を発表した” (以上、引用部とする) との記載がなされているところである)、ソーン主著の訳書『ブラックホールと時空の歪み』p.437 以降に 1985 年に原著が鳴り物入りで世に出た (そして大ヒットを見た) カール・セーガン Contact『コンタクト』のためのアイデアを [通過可能となっているワームホール] との絡みでキップ・ソーンがいかように提供していたかが記載されてもいる —

—ソーン著作のそちらパートよりの原文引用も本稿の後の段にてなす—  
—（尚、ここではその程度の言及にとどめておくが、同じくもの点については本稿本段執筆時現況、英文ウィキペディア[ Kip Thorne ]項目にも“ **Carl Sagan once asked Thorne to examine the time travel section of the manuscript for Contact. Thorne immediately dismissed Sagan's hypothesis; however, he later had an epiphany --wormholes may be used as time machine** ”（訳として）「カール・セーガンがかつてキップ・ソー

ンに小説『コンタクト』との絡みでタイムトラベルに關係する部の記述内容の検証を頼んだことがある。の折、ソー

ンは(セーガン・サイドよりその妥当性について尋ねられていた)セーガン仮説を即時に斥けた。だが、しかし、キップ・ソー

ンは後にワームホールがタイムマシンとして使われうるとの閃きのアイディア(エピファニー)を得る(呈示する)に至った(引用部はここまでとする)との記載がなされているようなことがある(そうしたウィキペディア上記述は易変性を伴う当該の媒体の編集に伴い消除を見るかもしれないが、同じくものが記録的事実であることを示すべくもの引用も後にソー

ン著作そのものよりからなす)。にまつわってはキップ・ソー

ンが [通過可能なワームホール] について [本格的な研究] を始めたのは 1988 年「以降」であるとのこと「も」[先覚的言及に関わって問題となるところ]として本稿の後の段で取り上げる)

(**出典(Source)紹介の部 18**はここまでとする)

さて、上にて特定著作、

### **COLLIDER: The Search for the World's Smallest Particles (邦題)『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器— 』**

より引きもした [アレフエとヴォロビッチは、LHC の衝突現場のエネルギーなら過去との通信が可能なワームホールが出現すると推測する。LHC の研究者たちはもし未来の日付の奇妙なメッセージがモニターに現れたら、このことを真っ先に知るだろう] との申しようについては

(仮にそうした奇妙奇怪なものが構築されえたとして、の話として、)  
「ワームホール生成それ自体に伴う安全性の問題をなおざりにしているとの欺瞞性がある」

「とも」解釈できるようなところがありもする。

については(後に科学解説書より引用なすところでもあるのだが)

[ブラックホールもワームホールも[重力の化け物]のような存在であることに相違はないとされる、ブラックホールをエレベーターの入り口に、ワームホールをエレベーターのシャフト(昇降路)に例えるたとえ話]

がよくも持ち出される、ゲート(通用路・扉)との役割を観念した場合にワームホールとカー・ブラックホールは混然としているとの話がよくも持ち出される —— にまつわっては後にそうしたワームホールの特性と結びつく[他世界に微小機械を送るためのゲート]としてのワームホール性質につき言及した **Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos**『パラレルワールド——11次元の宇宙から超空間へ』という書物よりの



原文引用をなす—— )とのことがあるからである。

といったところでよりもって疑義を呈したくもなることとして(上にて表記の書籍)『神の素粒子—宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』の作者が—その申しようが正しいか否かは置いておき— [権威ある物理学者]とされるポール・ハルパーンという男 (理論物理学の分野で博士号を持ち現合衆国フィラデルフィア科学大学教授との肩書きを持つ男 / 詳しくは英文ウィキペディアの[ Paul Halpern ]項目を参照されたい) となっており、その邦訳に監訳者として関与しているのが日本のアトラス実験の代表者であるということ「も」気がかりなところとしてある。

が、「真に問題となるのは、」[権威](とされる向きら)が専門家として述べていること、その理論それ自体の内容の適否ではない。先にも述べた通り、「理論」の適否 —e.g.LHCレベルのエネルギー規模の加速器でワームホール(と呼称されるようなもの)が生成されうるのかとのこと<sup>1</sup>の適否 etc., etc.,— それそのものは問題にはならない(いいだろうか。物事を履き違えている向きは勘違いするかもしれないが、筆者が問題視しているのはワームホールが構築されるとの理論それそのものにいかほどに信憑性があるかなどとのこと「ではない」。そのような理論適否はそも、素人・門外漢にあっては判断しがたいとのところがある)。

「真に問題となるのは、」 —ややこしいと受け取られるかもしれないところながらきちんと理解なしにいただきたいところとして—

「[権威]が[特定の事]を述べているとの[事実]そのものが  
[理論の歴史的登場時期を示す資料]  
と共に存在しているとのことがある。

また、[権威]が同じくもの[特定の事]を述べていることに関して存在しているとの、

[理論の歴史的登場時期を示す資料]

がそれ以前はいかなる者でもそういうことが述べることはできなかったとは思えないことをそれ自体で指し示しているとのことがある。

他面、そうしたはきと見出せるとの権威サイドの特定の申しようの [登場経緯]とは全く平仄・辻褄が合わない、にも関わらず、登場時期の問題を除いてその内容だけに着目する限りは、そうした権威申しようと「不気味」かつ「異常無比」な形で平仄・辻褄が合うとのことら、言葉を換えれば、権威が後の世にてこれはこうであろうと事細かに説明してきたことと一致しているとのことが史的に見て長期にわたって、

[権威の申しよう自体と全く関係ないところ]

に数多存在していること、そして、(一呼吸置き)、そうして権威が科学的裏付けを与えることになった時よりずっと前から存在しているとのことらが「相互に」「多重的に」絡み合って密結合関係を呈しているとのことが現実にある

とのことである(についてはそこに伴う[嗜虐性]の問題とともに先立っての段でもくどくも訴求している)。

同じくものことについて [たとえ話] をなせば、次のようなことが問題であると述べたいとの次第なのである。

「相対性理論の登場時期に関しては「特殊相対性理論は 1905 年、一般相対性理論は(1915 年—)1916 年である」とある程度厳密にアインシュタイン発表動向にまつわる資料と共にあわせて申し述べられるようになっている —— 特殊相対性理論を体現しての [エネルギー=質量×光速度の二乗] との有名な式( $E=mc^2$ )についてはアインシュタイン以前にドイツのフリードリヒ・ハーゼ



ノールといった科学者が1904年に先鞭をつけていたとの主張(親ナチス的ともされる主張)も存在するが、その信憑性も含めてここでは重きを置かないこととして、である——。

それ以前は、たとえば、相対性理論が1905年より登場し出すより先立つこと数十年前にて相対性理論のことを無関係なところで示唆している文物があるとは考えられていないし、そうしたことを強くも主張する人間はいない。だが、もし仮にそうした文物が存在している、アインシュタインの相対性理論と同様のものを極めて克明・露骨に描いているとの文物がアインシュタイン登場前に存在していたとしたらば、どうか。のみならず、そうした文物が複数作あり、それらが相互に結びつくような"なり"を呈していたらば、どうか。その[機序]が奈辺にあるのか以前の問題として「明らかに異常。」となるであろう(ここでなしている話とは詰まるところ、そうした性質の話に通ずることである)」

(なお、一応、断っておくが、以上の話は[類例]にまつわる「たとえ話」に留まるところとなり、アインシュタインの相対性理論のことを克明に事前言及しているとの相対性理論登場より数十年前の文物らが目に付くところに実際に存在しているなどとのことを本稿で目立って取り上げるつもりはない——本稿の後の段で The House on the Borderland (邦題)『異次元を覗く家』(1908年刊)との荒唐無稽怪奇フィクションが(アインシュタインの特殊相対性理論登場年次たる1905年より後にて登場しているとの作品としてながら)[1916年まで具体化してこなかった相対性理論「帰結」に通ずるブラックホールの特色の言及]との絡みで化け物がかかった先覚的言及をなしていると解されること、ほんの少し、触れるつもりであるが、ここでの話は例え話と受け取ってもらいたい——)

((この段階では)微に入りすぎ、そして、まどろっこしすぎるとしか受け取られないような筆の運びをなしてしまっている風があるかとも思うのだが)

さて、上にて強調するところの[真に問題になる側面]がここにてその話をなすこととしているとの[表層上、エキセントリックなこと(奇矯なること)と見られもしようこと]たる、

[CERNの挙動が異世界への扉とも表すべきワームホール(別名アインシュタイン・ローゼン・ブリッジ)を開く可能性がある。それによって、この世界に我々を支配すべくもの何がしかのもの(ナノマシンのような構造体)が入ってくる可能性や我々の世界の崩壊がもたらされる可能性が観念される]

とのこと——ありうべき可能性のひとつとして(「先覚的言及・兆候先行のものとして」)異様なながらも考えて然るべきようなところ——といかにして「深く」そして「深く」関わってくるかは長大なるものとなる本稿全体にて入念に証示なすとして、ここ本段では差しあたり、

[唯・常識的な観点から見ても「常識世界の科学理論の登場時期」と「奇怪に」間尺が合わぬことが「加速器によるワームホール生成仮説」(いいだろうか、これ自体はたかだかもの仮説にすぎない)にすら伴っているとのことがある]

とのことについて「限局的なる」解説をなしておきたいと思う(※)。

(※そちら解説をなすことでもってして「本稿筆者は[他の人間に誤解されるようなこと]をも敢えても申し述べることとしているのだが、そうしたところからしてきちんとした論拠を伴っており、真剣

な顧慮に値するもの、そう、[具体的行動の指針となして然るべきようなところ]とのレベルで真剣な顧慮に値するものになっている」  
とのことを訴求するとのここでの[小目的]は充足したことになるか、とも考えつつ、である)

につき、

[唯・常識的な観点から見ても「常識世界の科学理論の登場時期」と「奇怪に」間尺が合わぬことが「加速器によるワームホール生成仮説」にすら伴っているとのことがある]

とのことの解説をなす前に —(それを頭から肯定、首肯すべしと述べているのではないということ、上にて述べているわけだが)— そも、

[ワームホール生成にまつわるメインストリート(表通り)での言われようにつ  
わる事例紹介]

が少なかったかとの観点があるため、「まずは、」[ワームホール生成]にまつわる場所として他にも次のような申しようがなされていることを取り上げておくこととする。

---

出典(Source)紹介の部 19



# SOURCE

## 19

こちら出典紹介部にあっては

[加速器によるワームホール人為生成にまつわってメインストリート(衆目に触れえ  
るとの表通り)でいかような言われようがなされてきたのか]

とのことにまつわっての事例紹介をなすこととする(:同じくもの問題については本稿のかなりもってして後の段に至るまで諸種の資料から引用なしつつも、縷々(るる)、折に触れて取り上げもしていく所存だが、本段では取りあえずもの目につくところの典型的言われようを引いておくこと

する)。

(直下、Attack of the Hyperdimensional Juggernaut-Menとの題名で2009年11月6日付け(6th November 2009 付け)で発信されているとの The Reg ( The Register / テクノロジー情報紹介商業ウェブサイト)の記事の冒頭部よりの原文引用をなすところとして)

---

A top boffin at the Large Hadron Collider (LHC) says that the titanic machine may possibly create or discover previously unimagined scientific phenomena, or "unknown unknowns" - for instance "an extra dimension".

"Out of this door might come something, or we might send something through it," said Sergio Bertolucci, who is Director for Research and Scientific Computing at CERN, briefing reporters including the Reg at CERN HQ earlier this week.

(拙訳として)

「LHC 実験にかかわるトップクラスの科学者が巨大マシンは従前想像だにされていなかった科学的現象、よく知られていない未知の事柄ら、たとえば、余剰次元のようなものを発生ないし発見する可能性がある」と発言している。「この扉を通過して何かがあるかもしれないし、それを通じて我々が何かを送れるようになるかもしれない」

今週初頭の CERN 本部でのブリーフィングで当媒体 ( the Register ) の記者を含むレポーターらを前にして CERN のリサーチおよびコンピューティングの責任者であるセルジオ・ベルトリッチはそのように述べた」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする —※— )

(※上記事は欧米圏で比較的良好に知られたテクノロジー情報提供サイト、The Register (略称 The Reg) の記者が CERN にあつての記者会見で聞いたものとしてオンライン上の彼らの情報媒体に載せているものとなる (転載サイトも多いため、記事一次ソースに当たるには記事表題 Attack of the Hyperdimensional Juggernaut-Men およびドメイン名 theregister.co.uk から検索していくのがよいか、と思う)。その点、The Register の記事は Attack of the Hyperdimensional Juggernaut-Men [超次元の絶対的不可抗力(ジャガーノート)の力を有した者らの侵襲] との一見にして『ふざけているのか』とも受け取れる副題が付された [satire] (風刺記事) との側面色濃きものとなっているが、CERN 調査部門ならびにコンピューター部門を統括する人間セルジオ・ベルトリッチが「(未曾有の高エネルギー状態で想像もできないような結果がもたらされ) なにかを送れるようになったり、何かがあることになる」などと発言していたと報じられているとのその事実自体が問題であるととらえられる —尚、CERN 関係者セルジオ・ベルトリッチ申しようは物理学者 Paul Halpern (ポール・ハルパーン) がその著書 COLLIDER: The Search for the World's Smallest Particles (邦題) 『神の素粒子 —宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』で述べていることと同じ背景を受けてなされている物言いであろうと思われる(ロシアのステクロフ数学研究所

の二名の科学者の計算結果を受けてのことであろうと思われる)ところとな  
なっている—— )

(出典(Source)紹介の部 19 はここまでとする)

以上、ワームホール生成にまつわっての言われように関して(せんだって取り上げていた物理学  
学者手仕事としての書籍内記述に対する他例としての)報道事例について引き合いに出したと  
ころで、

[唯・常識的な観点から見ても [常識世界の科学理論の登場時期] と「奇怪  
に」間尺が合わぬことが [加速器によるワームホール生成仮説] にすら伴っ  
ているとのことが「ある」]

とのことに関わりもすること、本稿での話を進めていくうえでのひとつの布石となりもするところとし  
て、科学に興味がある向きが読むような科学読み本、

**Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and  
the Future of the Cosmos『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空  
間へ』** (邦訳版の版元は日本放送出版協会(現NHK出版)で原著の米国  
にての初出は2005年)

という書籍 (著者を米国マス・メディアに頻出する有名日系人科学者、ハーバード卒業の後、  
加速器実験ともマンハッタン計画とも密接に結びつく科学者アーネスト・ローレンスと縁あるロー  
レンス・バークレー国立研究所にて博士号を取得したとのミチオ・カクとする書籍) に以下のような  
記述がなされていることを引いておく。

出典(Source)紹介の部 20



SOURCE

20

こちら出典紹介部にあつては

[目立っての専門家筋の手になる書籍にあつて【ワームホールやブラックホールの類を活用する上でのありうべき先進文明やりよう】についてどのような解説がなされもしているのか]

このことの紹介をなすこととする。

(直下、邦訳版『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』384 ページよりの原文引用をなすとして)

---

カー・リングの中心にワームホールがあれば、われわれの宇宙をまったく別の宇宙と、あるいは、同じ宇宙のなかにある別の地点と、結びつけてくれるかもしれない。

…(中略)…

現在、おおかたの物理学者は、ブラックホールを生きて通り抜けることはできないと考えている。しかし、ブラックホールの物理的解釈はまだ未熟な段階で、この推測は検証されていない。ここでの議論のために、ブラックホールを通り抜けることができ、とくに回転するカー・ブラックホールでそれが可能だと考えてよう。すると、どの先進文明も、ブラックホールの中を探索しようと真剣に考えるだろう。

---

(引用部はここまでとしておく —※— )

(※以上をもってして日本放送出版協会(現NHK出版)より刊行されている国内流通の訳書よりの引用となしたが、(検索エンジンにての下記長文テキストの入力などを通じ)「オンライン上よりその通りの記載がなされている、すなわち、[文献的事実]であるとのことを確認できるところの」原著 *Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos* 内該当表記部もここでは引用しておく。(以下、原著 CHAPTER ELEVEN *Escaping the Universe* の節よりの引用として) “ **The wormhole in the center of the Kerr ring may connect our universe to quite different universes or different points in the same universe.[ . . . ] Currently, most physicists believe that a trip through a black hole would be fatal. However, our understanding of black hole physics is still in its infancy, and this conjecture has never been tested. Assume, for the sake of argument, that a trip through a black hole might be possible, especially a rotating Kerr black hole. Then any advanced civilization would give serious thought to probing the interior of black holes.**” (引用部はここまでとする))

---

探査機は、事象の地平線の近傍にどれだけ放射が存在するかを正確に決定し、そうした莫大なエネルギーのさなかでワームホールが安定していられるかどうかを明らかにしてくれるだろう。

---

(引用部はここまでとしておく —※— )

(※以上をもってして訳書よりの引用となしたが、(検索エンジンにての下記テキストの入力などを通じ)「オンライン上よりその通りの記載がなされている、すなわち、[文献的事実]であるとのことを確認できるところの」原著 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos 原著該当表記部も引用しておく。(以下、原著 CHAPTER ELEVEN Escaping the Universe の節よりの引用をなすとして) “ **The probe would determine precisely how much radiation there is near the event horizon and whether the wormhole could remain stable in spite of all this energy flux.**” (引用部はここまでとする))

(さらに続いて直下、邦訳版『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』403 ページよりの原文引用をなすとして)

---

ワームホールのなかでは潮汐力や放射が猛烈になりそうなので、未来の文明は、向こう側の宇宙で再生するのに必要な燃料やシールドや養分を、最小限にして運ばなければならないだろう。そこでナノ・テクノロジーを使えば、それらを詰めた小さな鎖を細胞ほどの大きさの装置に入れて、ワームホールの向こうへ送れる可能性がある。

ワームホールが非常に小さくて原子サイズだとしたら、その向こう側で全人類を再生できるだけの莫大な情報を、原子でできた長いナノチューブに詰めて送ることになるだろう。さらに小さくて、ワームホールが素粒子のサイズだったら、原子核をそこへ送り込み、向こう側で電子をつかまえて原子や分子を再構成するようになるしかない。

---

(引用部はここまでとしておく —※— )

(※以上をもってして訳書よりの引用となしたが、(検索エンジンにての下記長文テキストの入力などを通じ)「オンライン上よりその通りの記載がなされている、すなわち、[文献的事実]であるとのことを確認できるところの」原著 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos 原文内該当表記部を上と同文に引用しておく。(以下、原著 CHAPTER ELEVEN Escaping the



Universe の節よりの引用をなすとして) **“Because the tidal forces and radiation fields would likely be intense, future civilizations would have to carry the absolute minimum of fuel, shielding, and nutrients necessary to re-create our species on the other side of a wormhole. Using nanotechnology, it might be possible to send microscopic chains across the wormhole inside a device no wider than a cell.”**(引用部はここまでとしておく)

上にて引用したのは

[滅びに瀕してなどの事情によって [別宇宙] への脱出を図るといった設定の架空の未来文明ないし架空の超文明のやりよう]

として書籍『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』にてワームホールによる [種子] (ナノマシンに収められての種子) の播種が試みられるとのが解説されているとのパートとなる (まさしく Science Fiction がかった申しようだが、問題なのは、といったアイデアがサイエンス・フィクション分野の文物に [科学者(ここでの引用元書籍をしたためているハーヴァード卒のカリスマ物理学者として知られるカク・ミチオのような科学者)由来のもの] として供給されたのは何時なのか、ということであるとも申し述べておく)。

その点、同じくものことについては同著 *Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos* 『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』 (邦訳版の版元は日本放送出版協会 (現 NHK 出版)) にて次のような記載「も」なされている。

(直下、*Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos* にての CHAPTER ELEVEN Escaping the Universe の節よりの原文引用をなすとして)

---

Since a trip through a black hole would be a one-way trip, and because of the enormous dangers found near a black hole, an advanced civilization would likely try to locate a nearby stellar black hole and first send a probe through it. Valuable information could be sent back from the probe until it finally crossed the event horizon and all contact was lost. (A trip past the event horizon is likely to be quite lethal because of the intense radiation field surrounding it. Light rays falling into a black hole will be blueshifted and thereby will gain in energy as they get close to the center.) Any probe passing near the event horizon would have to be properly shielded against this intense barrage of radiation.

(拙訳として)

「ブラックホールを通じての旅はおそらく片道切符のものであり、そして、ブラックホール近傍では多大な危険が観念されるのであるから、先進文明はまずもって近傍のブラックホールを特定し、そのうえで、そこに試験的に探針(プローブ)を送り込むことを企図するであろう。事象の地平線を通り越し通信が途絶するまで種々様々な情報がプローブより送り返されてくることが観念される(事象の地平線を超えての旅はそのまわりにあつての凄まじい放

射線領域がために致命的なものである。ブラックホールに落ち込んだ光線らは青方偏移を起こしており。ブラックホール中心に近付いての折にはそうしたエネルギーの直撃に曝されることになる)。それがゆえ事象の地平線の近くを通過せんとする探針(プローブ)はいかなるものであれ凄まじい放射線被曝状況下に耐えうるだけの防御を施されていなければならない

---

(訳を付しての引用部はここまでとする —※— )

(※尚、以上、抜粋してきたようなことにつき米国にてのマス・メディア露出の日系人物理学者ミチオ・カクの[ありうべき先進文明のやりよう]にまつわる科学予測では次のような記載がなされていることも本稿筆者は「ゆえあって」重要視している。

(直下、Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos にての CHAPTER FIVE Dimensional Portals and Time Travel の節より引用をなすとして)

The frame of Alice's looking glass, in other words, was like the spinning ring of Kerr. But any trip through the Kerr ring would be a one-way trip. If you were to pass through the event horizon surrounding the Kerr ring, the gravity would not be enough to crush you to death, but it would be sufficient to prevent a return trip back through the event horizon.

[ . . . ]

The Kerr black hole, in fact, has two event horizons. Some have speculated that you might need a second Kerr ring, connecting the parallel universe back to ours, in order to make a return trip.

以上の原著よりの引用部に対して邦訳版『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』の書かれようとしてはその148ページにて(同じくも原文抜粋するところとして)”つまり、アリスが通り抜けた鏡の枠は、カーの見つけた回転するリングに相当する。しかし、このカー・リングを抜けるのは、片道切符の旅になる。カー・リングを取り巻く事象の地平線を通過するとき、重力でつぶれて死にはしないにしても、事象の地平線を超えてまた戻ることはできないのだ・・・(中略)・・・カー・ブラックホールには事象の地平線がふたつある。一部の科学者は、その並行宇宙とわれわれの宇宙をつなぐ第二のカー・リングがあれば、帰りの道ができると考えた”(引用部はここまでとする)とされているところともなる )

(**出典(Source)紹介の部 20**はここまでとする)

---

さてもってして、ここで注意を向けたいところとして、である。

「[唯・常識的な観点から見ても「常識世界の科学理論の登場時期」と「奇怪に」間尺が合わぬことが「加速器によるワームホール生成仮説」にすら伴っているとのことがある」とのことについて「限局的なる」解説をなしておく」

との本段での話の趣意に関わるところとして上の書籍 *Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos*『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』にての、

「ワームホールのなかでは潮汐力や放射が猛烈になりそうなので、未来の文明は、向こう側の宇宙で再生するのに必要な燃料やシールドや養分を、最小限にして運ばなければならないだろう。そこでナノ・テクノロジーを使えば、それらを詰めた小さな鎖を細胞ほどの大きさの装置に入れて、ワームホールの向こうへ送れる可能性がある。

ワームホールが非常に小さくて原子サイズだとしたら、その向こう側で全人類を再生できるだけの莫大な情報を、原子でできた長いナノチューブに詰めて送ることになるだろう。さらに小さくて、ワームホールが素粒子のサイズだったら、原子核をそこへ送り込み、向こう側で電子をつかまえて原子や分子を再構成するようになるしかない」

との解説のなされように関しては([事実 F]から[事実 J]と振っての事実群の摘示の中で)[事実 I]と振りもしてせんだって解説してきたとのこと、

[事実 I]

[事実 F] の部にてその名を挙げた小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W* (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[欧州の加速器運営機関 (CERN ならぬ CEERN などと呼称される 15TeV 加速器を運用する機関) のビーム照射装置でもって [自らを縮退させての極小の分身] をホログラム上に造り出した主人公がそちら分身を己の [「底無し」]「黒々とした」「渦を巻く」へそ] に落とし込み、もって、己の魂に引導を渡させるとの粗筋の作品]

「とも」なっている。

とのことと「不可思議に結びつきもする」ようになってしまっているとの側面「も」ある (ポイントは「不可思議に結びつくようになっていく」とのことだが、それは、詰まるところ、時期的先後関係にて [不自然なる [先覚的言及] がなされている] とのことである)。

その点、直前にて文献的事実の問題として引用なししている (カリスマ物理学者と米国でもてはやされているとの向きの手になる) 書籍『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』にあっては

[ワームホール (ブラックホールが二つあった際にそれらを連結したものがワームホールであるとの言われようもなされる時空間の通路) を境にする他宇宙に潮汐力や放射に耐えうる [極微機械] としてのナノマシン (極微性がゆ

えに潮汐力などに堪えうる)の種子をが送り込まれる]

とのかたちでの

[ありうべき先進科学文明やりよう ——それが本当に適切なる物言いなのか  
門外漢には判じようもないし、その適否判断それ自体は必要もなからうとの申  
しようにあって見る「仮説上の」先進科学文明やりよう—— ]

が [(未来の)先進文明の考えられるやりようにまつわるひとつの予測]として紹介されている。

他面、上にて再掲の [事実 I] のようなところでその先覚性を本稿にての先立つての段で問題視してきたとの Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』という小説では —オンライン上よりも確認できる部の事細かなる原文抜粋にて示してきたところとして—

[CEERN (CERN ではない)などと呼称される 15TeV 加速器を運用する機関のビーム照射装置でもって [自らを縮退させての極小の分身]をホログラム上に造り出した主人公がその分身を己の [底無しの黒々とした渦を巻くへそ]に落とし込み自身の魂に引導を渡すとの粗筋が採用されている (そして、そのようなあらすじの同小説が [ケージに閉じ込められた極微ブラックホール暴走を描く他小説]と連結させられている)]

との設定が採用されている。

きちんと内容検討いただければ自然(じねん)としてお気付きいただけるところかとは思うのではあるが、

---

[極微性がゆえに潮汐力などに堪えうるナノマシン等の「文明再建の種子」がワームホールないしカー・ブラックホール越しに(多世界解釈における)他世界・他宇宙に送り込まれる](科学読み本 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』に見る未来予測 —— (くどくも再引用なせば)“ **Because the tidal forces and radiation fields would likely be intense, future civilizations would have to carry the absolute minimum of fuel, shielding, and nutrients necessary to re-create our species on the other side of a wormhole. Using nanotechnology, it might be possible to send microscopic chains across the wormhole inside a device no wider than a cell.**” (訳書訳文)「ワームホールのなかでは潮汐力や放射が猛烈になりそうなので、未来の文明は、向こう側の宇宙で再生するのに必要な燃料やシールドや養分を、最小限にして運ばなければならないだろう。そこでナノ・テクノロジーを使えば、それらを詰めた小さな鎖を細胞ほどの大きさの装置に入れて、ワームホールの向こうへ送れる可能性がある」といった記述に関わる場所の未来予測—— )

[CEERN などと呼称される 15 兆電子ボルト加速器を運用する機関のビーム照射装置でもって[自らを縮退させての「極小の」分身]を造り出した主人公がその分身を己の[「底無しの」「黒々とした」「渦を巻く」へそ]に落とし込む](小説 Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』に見る内容

——尚、「底無しの」「黒々とした」「渦を巻く」へそ] がブラックホールの比喩的象徴物と受け取れることには(本稿前段にて摘示に努めているように)同小説と複合的に連続する他小説『ホール・マン』が[極微ブラックホール暴走による惑星呑込み]を主たる内容とする作品となっているとのこと「も」ある——)

とのことで「話が似通っている」わけである(：筆者が同じくものことを問題視している背景には**ブラックホールとホログラムと情報理論に関わる現代科学理論の「登場」**をも表記の70年代小説が「あまりにも奇怪にも」[予見描写]しているように解されるようになっているとのことがあるわけだが、そちらの点についてはおいおい解説するとして、表層的・皮相的に見ても、上にて俎上にあげているとのことらにあつての描写らが両サイド似通っているとのことがある)。

双方作品共々(かたや2005年初出の科学読み本『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』かたや1974年初出のフィクション『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)にて

**【底無しの渦を巻く、暗黒の(重力の)怪物】(ブラックホールの類)と【ナノマシンの如き縮小ユニット】(自らないし自らの属する文明をコピーした存在として科学上仮説にて取り沙汰されているもの)**とが双方ともども接続しているとの側面]

が「ある」わけである。

などと述べても、1974年の小説をものした小説家からして

[ブラックホールへの極微の「種子」投入の観点を導出できるだけの知識]

を有しており(先進文明のやりようにまつわる未来予測につき把握しており)、そうしたアイディアに関する知識を自己の小説に反映させたととらえるのが常識人がすがりたくもなるとのところであろう(それにつき、同じくものこと、アイディアの登場時期に着目しての理非の程についてまで検証した段階ではじめて[思索][考究]として意をなすところであろうかと思う)。

以上申し述べたうえで書くが、残念なことに上のように、**小説家 ——『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』を書き記したハーラン・エリスンという作家——**が「当時の」科学界にて流通の理論体系から自己の小説のあらすじを導出したと考えることが「できない」、現代科学史に関する一領域の分析からは普通には考えることが「できない」**ようになっているから問題になる**とのことがある(：[ブラックホールやワームホールの放射や潮汐力に堪えうる「自律的」極微構造体の投入をなす]とのアイディアが70年代小説登場時の科学者らに導き出されて「いなかった」と考えられるようになっていたとのことが指摘できるようになっているから問題になる)。

その点、

書籍『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』(原著は2005年に刊行された Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos)

にあつての書かれよう(70年代小説にての描写との近似性について直前部にて振り返りもしているとの書かれよう)に関しては

**[80年代になってよりはじめて考案された「通過可能なワームホール」にまつわる理論に基づいての予測]**

のことが顧慮され、そして、それが

[科学者 E・ドレクスラーが 70 年代中葉に遡ると言われる自身の思索・研究を元にして 80 年代より目立って提唱しだしたナノ・テクノロジー理論にあってのありうべきナノマシン像]

と結びつけられての科学予測がなされていると述べられるようになっている。

同じくものこと、目立っての科学理論の(広くも認知されていると受け取れるところの)初期登場時期については続いての出典紹介の部を参照されたい。

---

## 出典(Source)紹介の部 20-2



# SOURCE

## 20-2

ここ出典紹介部にあつては

書籍『パラレルワールド ——11 次元の宇宙から超空間へ』(原著は 2005 年に刊行された Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos)

にあつての書かれよう(70 年代小説にての描写との近似性について直前部にて振り返りもしているとの書かれよう)に関しては

[80 年代になってよりはじめて考案された[通過可能なワームホール]にまつわる理論に基づいての予測]

のことが顧慮され、そして、それが

[科学者 E・ドレクスラーが 70 年代中葉に遡ると言われる自身の思索・研究を元にして 80 年代より目立って提唱しだしたナノ・テクノロジー理論にあってのありうべきナノマシン像]

と結びつけられての科学予測がなされていると述べられるようになっている

とのことの典拠を挙げることにする。



まずもっては

科学関連書籍『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』に認められる [ワームホールの中にナノマシンのような放射と潮汐力に耐えうるデバイスを投入して文明再現の種子とするとの科学者由来の未来予測]が何時頃からありうべき先進文明やりようにまつわる予測として言及されるようになったのか

とのことについて

[80年代より通過可能なワームホールの類が科学理論に適合したかたちで顧慮されることになった]

との点にまつわる出典を挙げることにする。

(直下、ソーン著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(原著の方は1994年刊行、邦訳版は白揚社より1997年刊行)にての437ページ前半部 —キップ・ソーンが[通過可能なワームホール]兼[タイムマシン化可能なワームホール]を考案することになった契機にまつわる下り— よりの原文引用をなすとして)

---

私は一九八四年—八五年度の最後の授業をちょうど終えて、研究室の椅子に深々と座り、アドレナリンの分泌が鎮まるのを待っていた。電話のベルが鳴ったのはそのときだった。コーネル大学の天体物理学者で古くからの友人でもあるカール・セーガンからだった。「邪魔してすまん。キップ」と彼は語った。「人間と地球外文明との最初の接触に関する小説を今、書き終えたところだが、困っているんだ。科学的なこととはできるだけ正確を期したいと思っているんだが、重力物理学の中に間違いがあるんじゃないか、と心配なんだ。どうだろう。目を通して助言してくれないだろうか?」私はもちろん引き受けた。

---

(以上、邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』よりの原文引用とした —※— )

(※上の訳書よりの引用箇所に対応する原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にての「抜粋部をそのまま検索に用いることでオンライン上より確認できる」との表記は(原著にての14 Wormholes and Time Machinesの部(p.483)より引用をなすとして) “ I had just taught my last class of the 1984-85 academic year and was sinking into my office chair to let the adrenaline subside, when the telephone rang. It was Carl Sagan, the Cornell University astrophysicist and a personal friend from way back. " Sorry to bother you , Kip," he said. "But, I'm just finishing a novel about the human race's first contact with an extraterrestrial civilization and I'm worried. I want the science to be as accurate as possible,and I'm afraid I may have got some

**of the gravitational physics wrong. Would you look at it and give me advice?" Of course I would.**" (引用部はここまでとする)とのものとなっている)

(続けて同じくもの著作『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』438 ページ前半部よりの引用をなすとして)

---

カールは確かに困難にぶつかっていた。彼はヒロインのエリノア・アロウェイを地球の近くにあるブラックホールに飛び込ませ、図 13・4 のような具合に超空間を通過して旅させて、一時間後に二六光年の恒星ベガの近くで出現させていた。カールは相対論の専門家ではないので、摂動計算のメッセージに親しんでいなかった。ブラックホールの芯から、超空間を通過して、われわれの宇宙の別の部分に旅することは不可能である。どのブラックホールも、小さな電磁的な真空のゆらぎと少量の放射にたえず爆撃されている。これらのゆらぎと放射がホールに落ち込むと、ホールの重力に加速されて、巨大なエネルギーをもつようになり、「小さな閉じた宇宙」あるいは「トンネル」あるいはわれわれが超空間を通る旅行に利用しようとするその他の乗り物に、破壊するような勢いで衝突する。…(中略)…アイデアがおぼろげに浮かんだ。ブラックホールを超空間を通るワームホールに取り替えさせたいほうがいいだろう

---

(以上、邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』よりの原文引用とした 一※一 )

(※上の訳書よりの引用箇所に対応する原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にての「抜粋部をそのまま検索に用いることでオンライン上より確認できる」との表記は(原著にての 14 Wormholes and Time Machines の部 (p.484)より引用をなすとして) “ **The novel was fun, but Carl, indeed, was in trouble. He had his heroine, Eleanor Arroway, plunge into a black hole near Earth, travel through hypspace in the manner of Figure 13.4, and emerge an hour later near the star Vega, 26 light-years away. Carl, not being a relativity expert, was unfamiliar with the message of perturbation calculation. It is impossible to travel through hyperspace from a black hole's core to another part of our Universe. Any black hole is continually being bombarded by tiny electromagnetic vacuum fluctuations and by tiny amounts of radiation. As these fluctuations and radiation fall into the hole, they get accelerated by the hole's gravity to enormous energy, and they then rain down explosively on any “little closed universe” or “tunnel” or other vehicle by which one might try to launch the trip through hyperspace. [ . . . ] Carl's novel had to be changed. [ . . . ] a glimmer of an idea came to me. Maybe Carl could replace his black hole by a**

**wormhole through hyperspace.”**(引用部はここまでとする)とのもの  
となっている)

(さらに続けて同じくもの著作『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインの  
とんでもない遺産』439 ページ末から 441 ページ冒頭部よりの掻い摘まんでの引用をな  
すとして)

---

ワームホールは SF 作家のたんなる空想の産物ではない。それ  
らは一九一六年、アインシュタインが場の方程式を定式化したわ  
ずか数ヵ月後に、その方程式の解として数学的に発見されたの  
である。ジョン・ホイーラーと彼の研究グループは、一九五〇年  
代にさまざまな計算を行って、それを徹底的に調べ上げた。・・・  
(中略)・・・ワームホールはある瞬間に作り出され、やがてちぎり  
取られて消えてしまう——創造からちぎれるまでの全寿命はあま  
りにも短すぎて、何物も(人も、放射も、どんな種類の信号も)、そ  
の中を通して一方のマウスから他方のマウスまで行くことはでき  
ない

---

(以上、邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺  
産』よりの原文引用とした —※— )

(※上の訳書よりの引用箇所に対応する原著 BLACK HOLES &  
TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にての「抜粋部をそのま  
ま検索に用いることでオンライン上より確認できる」との表記は(原著に  
ての 14 Wormholes and Time Machines の部 (p.486)より引用をなす  
として) “ **Wormholes are not mere figments of a science fiction  
writer's imagination. They were discovered mathematically, as a  
solution to Einstein's field equation, in 1916, just a few months  
after Einstein formulated his field equation; and John Wheeler  
and his research group studied them extensively, by a variety of  
mathematical calculations, in the 1950s. However, none of the  
wormholes that had been found as solutions of Einstein's  
equation, prior to my trip down Interstate 5 in 1985, was  
suitable for Carl Sagan's novel, because none of them could be  
traversed safely. Each and every one of them was predicted to  
evolve with time in a very peculiar way: The wormhole is  
created at some moment of time, opens up briefly, and then  
pinches off and disappears — and its total life span from  
creation to pinch-off is so short that nothing whatsoever ( no  
person, no radiation, no signal of any sort) can travel through  
it, from one mouth to the other. Anything that tries will get  
caught and destroyed in the pinch-off. Figure 14.2 show's a  
simple example.**” (引用部はここまでとする) のものとなっている)

(さらに続けて同じくもの著作『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』444 ページよりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

---

そこで、パサデナに着くと、私はカールに長い手紙を書いて、なぜ彼の小説のヒロインは急ぎの星間旅行にブラックホールを使うことができないかを説明し、ヒロインにはそのかわりにワームホールを利用させること、そして小説の中のだれかにエキゾチックな物質がほんとうに存在し、ワームホールを開けておくのに利用できることを発見させるように提案した。カールは私の提案を喜んで受け入れ、それを彼の小説『コンタクト』の最終稿に取り入れた。カール・セーガンに私の意見を伝えた後、私は彼の小説が一般相対性理論を学ぶ学生の教育用に使えることを思い当った。こうして学生に役立たせるために、マイク・モリス(私の学生の一人)と私は、一九八五年の冬にエキゾチックな物質に支えられたワームホールに対する一般相対論の方程式と、これらの方程式とセーガンの小説との関連について論文を書きはじめた。…(中略)…一九八七―一八八年の冬以前に、われわれは論文を[アメリカン・ジャーナル・フィジックス]誌に投稿したが、その時点では論文はまだ掲載されていなかった

---

(以上、邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』よりの原文引用とした 一※一 )

(※1 上の訳書よりの引用箇所に対応する原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にての「抜粋部をそのまま検索に用いることでオンライン上より確認できる」との表記は(原著にての 14 Wormholes and Time Machines の部 (p.490)より引用をなすとして) **“So upon reaching Pasadena, I wrote Carl a long letter, explaining why his heroine could not use black holes for rapid interstellar travel, and suggesting that she use wormholes instead, and that somebody in the novel discover that exotic material can really exist and can be used to hold the wormholes open. Carl accepted my suggestion with pleasure and incorporated it into the final version of his novel, Contact. / It occurred to me, after offering Carl Sagan my comments, that his novel could serve as a pedagogical tool for students studying general relativity. As an aid for such students, during the autumn of 1985 Mike Morris (one of my own students) and I began to write a paper on the general relativistic equations for wormholes supported by exotic material, and those equations' connection to Sagan's novel. / We wrote slowly. Other projects were more urgent and got higher priority. By the winter of 1987-88, we had submitted our paper to the American Journal of Physics, but it was not yet published ;”** (引用部はここまでとする) とのものとなっている)

(※2 表記引用部は

[従前、通過可能なものが構築されることはありえないと看做されていた(少なくとも空想家の領分、たとえば、亜空間航法といったものが随分前から登場を見ていたSFの世界「以外」のところではそれも看做されていた)とのワームホール]

というものが

[負のエネルギーを持った物質たるエキゾチック物質](こちらエキゾチック物質については本稿の後の段でも細かくもの解説をなす)によって通過可能なかたちで安定化しうるとのことがキップ・ソーンによって提唱されたことを受けてのパートとなる(：ワームホールが従前、通過可能とは受け取られていなかったとのことは「物理学者ホイーラーの研究グループがその旨の研究結果を出していた」とのことが表記されている上にての邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』よりの引用部を参照のこと。また、キップ・ソーンがそうもして通過不可能と目されていたワームホールにつき[[エキゾチック物質]によって通過可能となる]との研究結果を80年代に発表したとのことだが、そちらについてはキップ・ソーン著述『ブラックホールと時空の歪み』のみからだけではなく諸種媒体より容易に確認なせることとなり、その端緒は上引用部にて言及されているように[セーガンとキップ・ソーンの「1985年」やりとり]に由来すると一般に説明されている(につき、目に付くところの英文 Wikipedia [Wormhole] 項目にあつては(内容がこれより変転するかもしれないが本稿本段執筆時「現行」にて) “ **The possibility of traversable wormholes in general relativity was first demonstrated by Kip Thorne and his graduate student Mike Morris in a 1988 paper** ” (訳)「アインシュタインの一般相対性理論に基づいての通過可能なワームホールはキップ・ソーン及び彼ソーンの研究室の院生マイケル・モリスによって1988年の論文によってはじめて呈示された」との表記がなされているも、そこにみる1988年というのは科学論文としてきちんとした体裁を伴って表記のことが発表された時期と解される——尚、1985年から1988年のキップ・ソーンらやりようは、と同時に、「タイムマシンとして機能するワームホール」の可能性を世に問うて物議を醸したとのものでもあるが、についても本稿の後の段で詳述をなす—— ) )

(出典(Source)紹介の部 20-2 はここまでとする)

---

直上にて訳書および原著(原著の方はオンライン上より内容を確認できるようなところがある)の各頁ごとより数センテンス内にて原文引用したことが[科学史]にあつての一断面——と述べれば大仰ととらえる向きもあるかもしれないが——にて現実に生じていたとされるところの、

[通過可能なワームホール]

とのものにまつわる登場経緯、

[80年代になってようやくもその存在が「科学的に」論じられるようになった]

ところの登場経緯である。

※上記の点について注記しておきたいところとして米国人物理学者ミチオ・カクはその著書『パラレルワールド ――11次元の宇宙から超空間へ』にて

「カー・リングの中心にワームホールがあれば、われわれの宇宙をまったく別の宇宙と、あるいは、同じ宇宙のなかにある別の地点と、結びつけてくれるかもしれない。

…(中略)…

現在、おおかたの物理学者は、ブラックホールを生きて通り抜けることはできないと考えている。しかし、ブラックホールの物理的解釈はまだ未熟な段階で、この推測は検証されていない。ここでの議論のために、ブラックホールを通り抜けることができ、とくに回転するカー・ブラックホールでそれが可能だと考えてよう。すると、どの先進文明も、ブラックホールの中を探索しようと真剣に考えるだろう」

と述べているのに対して、カール・セーガンとキップ・ソーンのやりとりは

「カー・ブラックホールでは時空間をつなぐ旅はできない」

との認識に重きをおいてのものとなる(：上の訳書『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』よりの抜粋部にて“カールは確かに困難にぶつかっていた。彼はヒロインのエリノア・アロウェイを地球の近くにあるブラックホールに飛び込ませ、図 13・4 のような具合に超空間を通過して旅させて、一時間後に二六光年の恒星ベガの近くで出現させていた。カールは相対論の専門家ではないので、摂動計算のメッセージに親しんでいなかった。ブラックホールの芯から、超空間を通過して、われわれの宇宙の別の部分に旅することは不可能である。どのブラックホールも、小さな電磁的な真空のゆらぎと少量の放射にたえず爆撃されている。これらのゆらぎと放射がホールに落ち込むと、ホールの重力に加速されて、巨大なエネルギーをもつようになり、「小さな閉じた宇宙」あるいは「トンネル」あるいはわれわれが超空間を通る旅行に利用しようとするその他の乗り物に、破壊するような勢いで衝突する”と表記されているとおりである。ただし、本稿の後の段にてもそこよりの原文引用をなすこととするその小説『コンタクト』にてカール・セーガンはカー・ブラックホールによる時空旅行の可能性を完全に否定しているわけではないととれる)。

その点、ミチオ・カクの著作、2005年に世に出た著作、

Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos

にあっては

[カー・ブラックホールとワームホールを融合させて考える視点]

が介在していることを明言できるようになっている(直近引用部に見る“The wormhole in the center of the Kerr ring may connect our universe to quite different universes or different points in the same universe.”「カー・リングの中心にワームホールがあれば、われわれの宇宙をまったく別の宇宙と、あるいは、同じ宇宙のなかにある別の地点と、結びつけてくれるかもしれない」との記述の通りである)。そうもしたところが80年代のやりとりを受けての1995年に初出の著作BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy、「カー・ブラックホールに代替するものとしてのワーム・ホールについて論じる」との著作と齟齬をきたすことを論じているとのことについては物理学者らの微妙な認識の差異やその後の理論動向の変遷を受けてのことであろうと解されるところである。



(話の流れが際限なく細かいところへと流れていっている節があると考え、訴えたいことの訴求に戻すが) とにかくも、問題は

「通過可能なワームホールのようなもの(あるいはブラックホール)が —作家(本稿にて問題視してきた小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W* (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(「1974」年初出)の作者の如く作家)の空想の賜物ではなく — 「科学界にて理論的裏付けを伴って」取り沙汰されるようになったのは[1980年代に入ってから]であるとのことがある」

との点である(いいだろうか。繰り返すが、ここでは[作家の空想の賜物]ではないところとしての[理論的裏付け]の話をしていない)。

科学関連書籍『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』に認められる[ワームホールの中にナノマシンのような放射と潮汐力に耐えるデバイスを投入して文明再現の種子とするとの発想]が何時頃から科学的予測として言及されるようになったのかについての典拠となる話(多重的調査活動に基づいて導出したところの典拠となる話)をさらに続ける。

さて、米国メディアにてハーヴァード卒のカリスマ物理学者ともてはされてもきたミチオ・カクは  
[ワームホールやカー・ブラックホール内の強烈な放射や潮汐力に由来する問題]

については極小のナノマシンの類を送り込むことでそうした強烈な放射や潮汐力の問題を克服でき、文明再建の種子をワームホールの先に送り込めるとしている (“ **Because the tidal forces and radiation fields would likely be intense, future civilizations would have to carry the absolute minimum of fuel, shielding, and nutrients necessary to re-create our species on the other side of a wormhole. Using nanotechnology, it might be possible to send microscopic chains across the wormhole inside a device no wider than a cell.**” (訳書表記として)“ワームホールのなかでは潮汐力や放射が猛烈になりそうなので、未来の文明は、向こう側の宇宙で再生するのに必要な燃料やシールドや養分を、最小限にして運ばなければならないだろう。そこでナノ・テクノロジーを使えば、それらを詰めた小さな鎖を細胞ほどの大きさの装置に入れて、ワームホールの向こうへ送れる可能性がある。ワームホールが非常に小さくて原子サイズだとしたら、その向こう側で全人類を再生できるだけの莫大な情報を、原子でできた長いナノチューブに詰めて送ることになるだろう”とあるとおりである)。

繰り返すが、他面、(1980年代に入る前の)「1974年初出の」問題となる小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W*『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』には

[CEERN などと呼称される 15TeV 加速器を運用する機関のビーム照射装置でもって [自らを縮退させての極小の分身] をホログラム上に造り出した主人公がその分身を己の [底無しの黒々とした渦を巻くへそ] に落とし込み自身の魂に引導を渡す]

との粗筋が具現化を見ている (:疑わしきは訳書そして原文より抜粋をなしての指し示し部、当然に容易に後追いなせるように、とのかたちで設けた本稿にての従前指し示し部 ——[出典 (Source) 紹介の部 6]から[出典 (Source) 紹介の部 9]の部—— をご確認ください)。

にまつわっては先にて[事実 F]から[事実 J]と振っての記録的事実につき問題視してきたところとして小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』が

[15兆電子ボルトの CEERN (CERN ではない) 加速器]

なるものを登場させている作品として際立って不可解な先覚性を有しているとのこととの絡み、そう、同作にあって

[ブラックホールを意識させるものに[極小の分身](⇨文明再建装置の[種子]たるナノマシンと似たようなもの「とも」とれる)を送り込む]

との粗筋が具現化を見ているとのこと絡みで、

「では一体全体、ナノマシンの如きものを[文明のリ・コンストラクタ(再建設装置)]としてワームホールの先に送り込むとの発想法が一体、何時頃より目立って出てきたのか」

ということが「問題となる」(いいだろうか。CERNの14兆電子ボルト加速器LHCはブラックホールやワームホールの類を生成しうるものであると「ここつい最近」考えられるに至りもした——につき、LHCのワームホール生成可能性についてはその言われようについて先立っての**出典(Source)紹介の部18**および**出典(Source)紹介の部19**にて取り上げたことである——。他面、70年代に「CERNの14兆電子ボルト加速器LHC」にあまりにも近い、かつ、往時の技術水準では顧慮されるどころではなかった(**出典(Source)紹介の部6**)との「15兆電子ボルト加速器」なる際立って奇態なるものを登場させているとのことと問題視しているのが「ブラックホールを意識させるものに[極小の分身](⇨文明再建装置の[種子]たるナノマシンと似たようなもの「とも」とれる)を送り込む」との粗筋を伴った作品たる Adrift Just off the Islets of Langerhans :Latitude 38° 54'N,Longitude77° 00'13W『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』である。きちんと頭が働いていれば、以上のことより何が問題になるか、わかることか、とは思う)。

それにつき、ここでは「直下、出典呈示しながら、」

[万能かつ極小のコンストラクタ(建設装置)たるナノマシンという概念が目立って用いられるようになったのは「1980年以降」である]

とのことについて解説していくこととする。

---

出典(Source)紹介の部20-3



# SOURCE

## 20-3

本出典紹介部では

[万能かつ極小のコンストラクタ(建設装置)たるナノマシンという概念が目立って用いられるようになったのは1980年以降である]

との目立つところの言われようを引いておく。

(直下、英文 Wikipedia にての [ History of nanotechnology ] 項目の現況記載内容より ——概念登場の先後関係列指し示しに適したかたちにて項目内表記順序とは多少異なるかたちでの—— 引用をなすとして)

---

The Japanese scientist Norio Taniguchi of the Tokyo University of Science used the term "nano-technology" in a 1974 conference, to describe semiconductor processes such as thin film deposition and ion beam milling exhibiting characteristic control on the order of a nanometer. His definition was, "'Nano-technology' mainly consists of the processing of, separation, consolidation, and deformation of materials by one atom or one molecule."

(訳として)

「[薄膜の添加堆積処理やナノメートル単位にての特徴的な制御を示すとのイオンビームによる粉砕のような半導体加工工程]を記述すべくものものとして東京理科大の日本人科学者谷口紀男が1974年のカンファレンスにて[ナノ・テクノロジー]という言葉をはじめて使った」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする ——上はナノメートル単位(原子・分子のサイズのオーダー)にての加工技術として世界ではじめてナノ・テクノロジーとの言葉が用いられ出したのが1974年にあるとのことが言及されての部となる—— )

(続いて直下、英文 Wikipedia にての [ History of nanotechnology ] 項目の現況記載内容より ——概念登場の先後関係列指し示しに適したかたちにて項目内表記順序とは多少異なるかたちでの—— 引用をなすとして)

---

In the 1980s the idea of nanotechnology as a deterministic, rather than stochastic, handling of individual atoms and molecules was conceptually explored in depth by K. Eric Drexler, who promoted the technological significance of nano-scale phenomena and devices through speeches and two influential books.

(訳として)

「1980年代、[意味的に変動しやすいとのものよりも意味的に確定しての個々の原子らおよび分子らを扱ってのナノ・テクノロジーのアイディア]がK・エリック・ドレクセラ、ナノ・スケールでの現象および装置群の技術的重要性を演説および二冊の影響力ある書籍らを通じて訴求していたとの同男によって概念的にも深くも追求されることとなった」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする ——上はナノメートル単位(原子・分子のサイズのオーダー)にての加工技術として世界ではじめてナノ・テクノロジーとの言葉が用

いられ出したのが 1974 年にあるとのが言及されての部となる—— )

(さらに続けて直下、同じくもの英文 Wikipedia[ History of nanotechnology ]項目にての現況記載内容よりの引用をなすとして)

---

In 1980, Drexler encountered Feynman's provocative 1959 talk "There's Plenty of Room at the Bottom" while preparing his initial scientific paper on the subject, "Molecular Engineering: An approach to the development of general capabilities for molecular manipulation," published in the Proceedings of the National Academy of Sciences in 1981. The term "nanotechnology" (which paralleled Taniguchi's "nano-technology") was independently applied by Drexler in his 1986 book Engines of Creation: The Coming Era of Nanotechnology, which proposed the idea of a nanoscale "assembler" which would be able to build a copy of itself and of other items of arbitrary complexity.

(訳として)

「1980 年にあつて同分野にての草分け的な科学論文、“Molecular Engineering: An approach to the development of general capabilities for molecular manipulation,” (『分子科学: 分子的操作のための汎用的能力の発展へ向けてのアプローチ』)、1981 年のザ・ナショナル・アカデミー・サンエンシズの会報にて初出を見たとの同論文の準備をなしている最中にドレクスラーは(思索・研究の中で)過去、1959 年にてのファインマンの刺激的な講話 "There's Plenty of Room at the Bottom" (「底辺の領域には空間的余白が存在する」とでも訳すべきか)の記録を見出すに至った。[ナノ・テクノロジー]との言葉(それは谷口紀男がかつてナノ・テクノロジーと表したものと近いものである)は 1986 年のドレクスラー著書 Engines of Creation: The Coming Era of Nanotechnology (邦題『創造する機械』)にて独自に a nanoscale "assembler" which would be able to build a copy of itself and of other items of arbitrary complexity [ナノ・スケールにてそれ自体のコピーを造り出せ、そして、任意の複雑的構造を有した他の品目のものらを形作れるとのアセンブラ(組み立て装置)]を指すものとされるに至った」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする —※— )

※上にては

**“ In 1980, Drexler encountered Feynman's provocative 1959 talk "There's Plenty of Room at the Bottom" while preparing his initial scientific paper on the subject, “Molecular Engineering: An approach to the development of general capabilities for molecular manipulation,” published in the Proceedings of the National Academy of Sciences in 1981. ”** (対訳訳)「1980 年にあつて同分野にての草分け的な科学論文、Molecular Engineering: An approach to the

development of general capabilities for molecular manipulation (『分子科学: 分子的操作のための汎用的能力の発展へ向けてのアプローチ』)、1981年のザ・ナショナル・アカデミー・サンエンシズの会報にて初出を見たとの同論文の準備をなしているとの最中にてドレクスラーはファインマンの1959年の刺激的な講話 "There's Plenty of Room at the Bottom" (「底辺の領域には空間的余白が存在する」とでも訳すべきであろう)の記録を見出した

と表記されているが、そこに見るナノテク概念の開拓者として知られているエリック・ドレクスラーが着目したとの、

[1959年の講話内容(ファインマンの講話内容)]

とは同じくもの英文ウィキペディアの項目にて次のように現況記載されているところのものとなる。

(直下、同じくものところ、英文 Wikipedia から引用なすとして)

The American physicist Richard Feynman lectured, "There's Plenty of Room at the Bottom," at an American Physical Society meeting at Caltech on December 29, 1959, which is often held to have provided inspiration for the field of nanotechnology. Feynman had described a process by which the ability to manipulate individual atoms and molecules might be developed, using one set of precise tools to build and operate another proportionally smaller set, so on down to the needed scale. [ . . . ] After Feynman's death, scholars studying the historical development of nanotechnology have concluded that his actual role in catalyzing nanotechnology research was limited, based on recollections from many of the people active in the nascent field in the 1980s and 1990s. Chris Toumey, a cultural anthropologist at the University of South Carolina, found that the published versions of Feynman's talk had a negligible influence in the twenty years after it was first published, as measured by citations in the scientific literature, and not much more influence in the decade after the Scanning Tunneling Microscope was invented in 1981. Subsequently, interest in "Plenty of Room" in the scientific literature greatly increased in the early 1990s. This is probably because the term "nanotechnology" gained serious attention just before that time, following its use by K. Eric Drexler in his 1986 book, Engines of Creation: The Coming Era of Nanotechnology, which took the Feynman concept of a billion tiny factories and added the idea that they could make more copies of themselves via computer control instead of control by a human operator; and in a cover article headlined "Nanotechnology", published later that year in a mass-circulation science-oriented magazine, OMNI.

(拙訳として)

「アメリカ人物理学者リチャード・ファインマンは1959年12月29日、カリフォルニア工科大学(カルテク)にてのアメリカ物理学界の会合で "There's Plenty of Room at the Bottom,"と題しての講演を実施し、同講演、[ナノテクノロジー分野にてインスピレーションを与えたもの]と(後の日にて)しば

しば取り上げられるものとなった。

ファインマンは個々の原子らおよび分子らが  
[針の先端程度の大きさに縮小された、他のより小さな単位群を構築・操作  
するための要領よくまとまったワンセットの道具群]  
を用いて展開させられように動かされるとの力の働き具合の過程を描写して  
いた。

…(中略)…

ファインマン死後、ナノ・テクノロジーの歴史的発展について研究していた  
との学者らは

[彼(ファインマン)がナノ・テクノロジー分野の研究に対して及ぼした現実  
にての触媒的役割は限られたものである]

との結論を「1980年代から1990年代にかけ原初的時期にあつての同分野  
にて活動していた向きの記録再構築に依拠して」下すに至った。 サウ  
ス・カロライナ大学の人類学者、Chris Toumey は

「それが初出を見てからの20年の間、ファイマン講話の印刷バージョンは  
[科学にまつわる文物(訳注:原文に見るサイエンティフィック・リテラチュア  
とはサイエンス・フィクションなどではなく科学にまつわる刊行物のことであ  
る)にての引用ありよう]にて推し量れるように無視できる程度の影響しか及  
ぼしていない、そして、1981年(訳注:1982年ともされる)の[走査型トンネ  
ル顕微鏡]の発見後10年を経ても同様に影響力をたいして及ぼしていな  
い」

との帰結を見出すに至った。

科学にまつわる文物群にあつてのファインマン講話、(略しての)“Plenty  
of Room”に対する関心は、その後、1990年代初頭より増大することになっ  
た。これはおそらく「十億もの微小なる極小の工場群の話に加えて人間の  
オペレーターによる制御に代わってのコンピューター制御を通じてそれらが  
より多くのコピーを作り出せるとのアイデアを取り上げていた」とのK・エ  
リック・ドレクセラーの1986年の著作 Engines of Creation: The Coming  
Era of Nanotechnology (邦題『創造する機械』)にてのナノ・テクノロジーと  
いう語の使用、および、その後の年にて刊行された科学志向の読者向けの  
大量流通誌 OMNI の「ナノ・テクノロジー」と題名を付された巻頭記事らによ  
り、(ファインマン講話が着目され出すことになったとの)その少し前に「ナ  
ノ・テクノロジー」という言葉が重要な関心を引くことになっていたからであ  
る」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上のように [1959年からして[ナノ・テクノロジーに通底する発想法] が早  
くも物理学者リチャード・ファインマンによって取り上げていたが、そのアイディ  
アとしての影響力は(科学文書らにあつての引用形態から)微々たるものであつ  
た] とされてもいる。

(出典(Source)紹介の部 20-3 はここまでとする)



直近にて付記した内容を加味してのここまでの内容をもって指し示せることは、

[ナノ・テクノロジー]の体現存在たる、

[ナノ・スケールにてそれ自体のコピーを造り出せ、そして、任意の複雑な構造を有した他の品目の目標物らを形作れるとのアセンブラ(組み立て装置)]

であるとのナノマシンが着目を集めるに至ったのは 80 年代からであると解され、(上にての引用部では「それについては世間には多く知られていなかったところである」ような書かれようであるも)、ナノ・テクノロジーという言葉それ自体が生まれたのは 1974 年、[原子の領域に踏み込んでの来たるべき半導体産業の進化]を期しての東京理科大学の谷口紀男の使用開始の折たる 1974 年以前に遡れない。

とのことである。

従って「1974 年に世に出た」、

[CEERN (CERN ではない)などと呼称される 15TeV 加速器を運用する機関のビーム照射装置でもって [自らを縮退させての極小の分身] をホログラム上に造り出した主人公がその分身を己の [底無しの黒々とした渦を巻くへそ] に落とし込み自身の魂に引導を渡すとの筋立てを有した小説 **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** 『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』]

との作品の執筆時点では

[[ワームホールやカー・ブラックホール内の強烈な放射や潮汐力に由来する問題]については極小のナノマシン ——自律性をもって作動するとの極微機械—— の類を送り込むことでそうした強烈な放射や潮汐力の問題を克服でき、文明再建の種子をワームホールの先に送り込むとのミチオ・カク科学動向解説本にて見受けられるような[ありうべき先進的科学的文明のありうべきやりよう]にまつわる予測]

が具体的にこれはこれでとなされていたとはおよそ考えられないと述べても構わぬところとなっているととらえられる(※)。

(※付記として:1966 年にアメリカで公開された映画として **Fantastic Voyage**、邦題『ミクロの決死圏』という著名な作品が存在する。アイザック・アシモフがすぐ後の 1967 年に(別人物の手によってなった脚本を元にしての)小説化をなしているとの同作品『ミクロの決死圏』、[ミクロ化された医療チームが潜航艇に乗って人体に進入、治療を行う]との内容の同作品が [CEERN (CERN ではない)などと呼称される 15TeV 加速器を運用する研究機関のビーム照射装置でもって [自らを縮退させての極小の分身] をホログラム上に造り出した主人公がその分身を己の [底無しの黒々とした渦を巻くへそ] に落とし込み自身の魂に引導を渡す]との粗筋を有した後にて登場の小説に[アイディアとなるようなもの]を提供していたとのこともまた多少、文物の流布形態に詳しい向きには想起されるどころか、とは思う。

だから、述べておくが、

「1974 年の小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』が奇怪なのは加速器とブラックホールの関係を(往時の科

学知見よりは) 不自然極まりなくも想起させるとの側面が伴っていることであり、「そうしたところから離れて」[他フィクション(『ミクロの決死圏』)との類似性が見出せること]自体はさして問題にならない)

さらに問題視して然るべきようなところとして、である。70年代前半の小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans: Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W*『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』に関しては「輪をかけて」奇怪なところとして

### [ホログラムとブラックホールの情報保持のあり方]

にまつわる先覚的内容——後々の科学界にての [ホログラムとブラックホールの情報保持のあり方] にまつわる理論の呈示に先行するところの先覚的内容——を同作が伴っているように見受けられること「も」問題になる。

であるから、その点——[ホログラムとブラックホールの情報保持のあり方]に通ずる先覚的内容——についての解説をも以降なしておく。

さて、ブラックホールに関しては

### 「ホログラムと同様の方式で「情報を保持」している可能性がある」

という理論がゲラルド・トフット(ヘーラルト・トフットとも日本語では表記される)というオランダ人物理学者——1999年ノーベル物理学賞受賞の学者——によって目立って呈示されるようになったとの申しようがなされている。

(:そも、[ホログラフィックなるブラックホール]とはいかなものか、についてであるが、ここでは[有名な米国人メディア露出型物理学者]たるブライアン・グリーンの手になる2011年初出の書籍 *THE HIDDEN REALITY* の邦訳版(早川書房より出されている「文庫版の」の方の邦訳版)たる『隠れていた宇宙(下)』第9章[ブラックホールとホログラム]172ページよりの引用をなしておく。

(以下、(邦題)『隠れていた宇宙(下)』第9章より原文引用をなす)

---

「ブラックホールの場合、情報と表面積のつながりは単なる数値計算にとどまらず、情報がブラックホールの表面に蓄積されるという具体的な意味がある。サスキンドとトフットは、この説は普遍的であるはずだと強調している。

…(中略)…

この二人の大胆な思索家の提案によると、私たちが慣れ親しんでいる三次元の現実は、そのような遠くで起こっている二次元の物理過程をホログラフィーで投影したようなものだというのである」

---

(引用部はここまでとする)

以上、引用をなしたとの部位は世界のホログラム構造仮説にまで話が及んでいるとのものであるが、

[ブラックホールの表面、[二次元面]に情報が蓄積される]

とのことは

[三次元が[二次元]の投影である]

とのホログラフィックな性質に通底する、ホログラム的に情報保持をなしてい

るブラックホールの性質にまつわる話となる —— 通俗的な理解でもホログラフィーとは[三次元との特質を二次元に落とし込むこと]として知られる。日常的に目につくホログラフィー・シールなども視野角を変えるとそれが立体的に別の面まで具現化させているように見えるとの形態をとっている(技術的なやりようとしてはレーザー光を[ホログラム化する対象]に視野角度広くも当てて[レーザー光を反射させての像]をホログラムを投影するシートに視野角度広くも落とし込むとの手法が使われているためにそうなっている) —— )

諸種「科学史」解説書籍にて言及され、英文 Wikipedia [ Holographic Principle ] 項目にもごく一面的に記載されているように、

(「普通人から見れば[意味不明なる専門用語の羅列]になっている節があることだろう」とは当然に思われるところなのであるが、のような中であっても、[普通人には理解しようもないとの理論適否]ではなく、[普通人「にも」およそそうした内容の理論が何時頃出てきたのかまでは後追い確認できるようになっている(との理論登場の)沿革]を問題としているところとして)

[1978年に Charles Thorn (チャールズ・ソーン) という科学者が[ホログラフィック的側面]を[紐理論(弦理論)]でもって[重力作用]にまつわるところでも考えとのことをなしだしたとされ、それが[ブラックホール・インフォメーション・パラドックス]といったものや[ブラックホール熱力学]といった科学的観点と「相補的な」関係でもって見られるようになり、ブラックホールの中ではホログラフィックに情報が保持されているといった観点もが呈示されるようになった]

とされている

とのことがある(下の出典紹介部を参照のこと)。

---

出典(Source)紹介の部 20-4



SOURCE

20-4

上記のこと、ブラックホールとホログラフィック的特質を結びつける理論が何時頃、目立って提唱されたかについては英文 Wikipedia [ Holographic principle ] 項目にあって次のような解説がなされている。

(直下、英文 Wikipedia [ Holographic principle ] 項目にあっての「現行にての」記載内容を引くところとして)

---

The holographic principle is a property of string theories and a supposed property of quantum gravity that states that the description of a volume of space can be thought of as encoded on a boundary to the region — preferably a light-like boundary like a gravitational horizon. First proposed by Gerard 't Hooft, it was given a precise string-theory interpretation by Leonard Susskind who combined his ideas with previous ones of 't Hooft and Charles Thorn. As pointed out by Raphael Bousso, Thorn observed in 1978 that string theory admits a lower-dimensional description in which gravity emerges from it in what would now be called a holographic way. In a larger sense, the theory suggests that the entire universe can be seen as a two-dimensional information structure "painted" on the cosmological horizon, such that the three dimensions we observe are an effective description only at macroscopic scales and at low energies.

(多少意識を交えての訳をなすとして)

「ホログラフィック原理 ( Holographic principle ) とは

[[弦理論(ストリング・セオリー／ヒモ理論)の一属性を体現したもの]そして[空間の広がりや形態は重力地平のそれのようにありうべきところとして光の境界面として空間に組み込まれている]とされているとの量子重力、その一属性を体現しうるもの]とされる理論]

である。

ゲラルド・トホーフトにはじめて提案されたとの同ホログラフィック・プリンシプル(ホログラフィック原理)は

[より従前のトホーフト自身のアイディアとより従前のチャールズ・ソーンのアイディアとを統合させることになった物理学者レオナルド・サスキンドに由来するとの紐理論に対する簡易なる解釈]

として呈示されたものとなる。

ラファエル・ブッソ (訳注:カリフォルニア大学物理学者) によって指摘されるように(チャールズ・)ソーンは 1978 年にて

[紐理論が[低次元に関する描写として現時、[ホログラフィック的方法]と呼ばれる形にてそこより重力が生じるとの描写]を認めるとの理論である]

とのことを見出していたとのことがある。

おおよその意味合いでは、同理論は全宇宙が宇宙的境界面に描かれた二次元情報構造として観察されうるとのことを提言するとのものであり、我々が観察するような三次元構造は巨視的スケールでそして低いエネルギー領域に有効なる描写であるとのことになる]

---

(訳を付しての引用部はここまでとする —— 上にては[「1978 年に」由来するチャールズ・ソーンという物理学者の見立て]がホログラフィック原理の提唱に影響を与えているとの趣旨の記述がなされている—— )

さらに一歩進んで、ブラックホールのホログラフィー的な属性についての理論登場時期を推し量ることができるとの出典(オンライン上にて公開されている当該分野を専門とする物理学者の手になる PDF ファイル化されての論稿)の記述を引くこととする。

具体的には

[ The holographic principle ] との論稿 (著者名 Raphael Bousso ——上の英文ウィキペディアにても名前が挙げられているカリフォルニア大の理論物理学者であるラファエル・ブッソ—— と表記のタイトル ( The holographic principle ) 入力でコーネル大学の論稿配布サーバー arXiv より特定・ダウンロードできるようになっているとの 2002 年初出の論稿)

の内容を引くこととする。

(直下、論文 The holographic principle (2002) にて 19 と振られた頁よりの引用をなすとして)

---

Susskind (1995b) suggested that the horizon of a black hole can be mapped, via light rays, to a distant, flat holographic screen, citing the focussing theorem (Sec. VI.A) to argue that the information thus projected would satisfy the holographic bound.

(訳として)

「サスキンド(の 1995b と振られての論文)は[こうもして投影された情報はホログラフィー境界面に適合するものである]と論じているとの理論(セクション VI.A にて呈示のもの)につき焦点を絞って引用しながら「ブラックホールの地平線は光線を通じてある距離まで平面ホログラフィースクリーンへと地図描画できる」との提言をなしたものであった」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする —※— )

(※1: 上にて[ブラックホールのホログラフィー的な性質]についての提言をなしたものとして引き合いに出されている「1995 年の」サスキンド論稿とは The World as a Hologram 『ホログラムとしての世界』との論稿であると解されるようになっており、同論稿が「先達となる 1993 年論稿としての」ゲラルド・トホーフによる Dimensional Reduction in Quantum Gravity の内容を受けているような解説がなされているところとなっている。そこから、(1978 年から呈されだしたとされる物理学者チャールズ・ソーンの見方からさらに進んで) 1993 年あたりよりブラックホールとホログラムの関係性を論ずる理論が目立って表に表出してきたと推察される場所である —— 先後関係・帰属関係が重要視される科学論文の記載内容からはそのように判じられるとのことである(そして、同じくものことはつい先の段にて(邦題)『隠れていた宇宙(下)』第 9 章より原文引用なしたところ、「ブラックホールの場合、情報と表面積のつながりは単なる数値計算にとどまらず、情報がブラックホールの表面に蓄積されるという具体的な意味がある。サスキンドとトホーフは、この説は普遍的であるはずだと強調している」との内容と平仄が合う) —— )

(※2: 尚、以上のように 70 年代後半に呈され出した見立てを受け、目立っては 90 年代前半より提唱されだした節があるとのホログラフィック理論の隆盛は [ブラックホール熱力学(というもの)]

[ブラックホール情報パラドックス(というもの)]

に関する思索の延長線上にあるもの、なおかつ、それらに関する思索と相補関係にあると一般には説明されているものでもある。同点についてはオンライン上にて目につくところの英文 Wikipedia [Black hole information paradox] 項目(和文にては [ブラックホール情報パラドックス]) の現行記載にあつての該当するところを引けば、“ **Starting in the mid-1970s, Stephen Hawking and Jacob Bekenstein put forward theoretical arguments based on general relativity and quantum field theory that appeared to be inconsistent with information conservation. Specifically, Hawking's calculations indicated that black hole evaporation via Hawking radiation does not preserve information. Today, many physicists believe that the holographic principle (specifically the AdS/CFT duality) demonstrates that Hawking's conclusion was incorrect, and that information is in fact preserved. In 2004 Hawking himself conceded a bet he had made, agreeing that black hole evaporation does in fact preserve information.**” (訳として) 「1970 年代に遡ることとしてスティーブン・ホーキングとヤコブ・ベッケンシュタインは [情報保持] と両立しないように見えるとの一般相対性理論および量子場理論に依拠しての理論についての議論をさらに前へと推し進めた。殊にホーキングの計算ではホーキング輻射を通じてのブラックホールの蒸発は [情報を保持しない] と指し示すものであった。今日、多くの物理学者が [ホログラフィック原理] (殊に AdS/CFT 対応に関わるところ) がホーキングの帰結は正しからざるもの、[情報は現実には保持されるのである] と呈示しているとのことを信ずるに至っている。2004 年、ホーキング彼自身が彼がなしていた賭け ([キップ・ソーン、ジョン・プレスキル、スティーブン・ホーキングの賭け] として知られる物理学者間の科学理論至当性にまつわる賭け) にて敗北を認め、ブラックホール蒸発は現実には情報を保持するとのことを認めた」との部がそれに該当する。

以上、事細かに話を振り回したが、それは「そういうことがある」程度の文脈にての紹介に留める。すなわち、[ブラックホール熱力学] や [ブラックホール情報パラドックス] がいかようになるものなのか、それらにつきどのような評価が下されているのかについては — 同分野が多くの科学書などに見る解説がまったく要領を得ないものとなっているといった不明瞭性が際立つ領域となっていること「も」あるのだが — [科学理論の適否自体を論ずるのが本稿の目的ではない] とのことが第一義にあつて細かき解説を加えない)

(出典 (Source) 紹介の部 20-4 はここまでとする)

---

理論の機微の問題は置いておき、ここにて着目しているとのことは次のことである。

[1978 年にホログラフィック原理に近い概念がチャールズ・ソーンという物理学者の研究にて持ち出されているとされる。それがレオナルド・サスキンドやゲラルド・トフットといった物理学者によって精緻化されていったとの経緯があるとの言われようが表だって幅広くもなされている]



「仮にチャールズ・ソーンという科学者以前(1978年以前)にホログラム原理的な発想法がブラックホールの情報保持にまつわる理論として取り沙汰される余地が全くなかったのであるとすると(現実にも強くもそうであると解されるようになって)、問題となる「1974年の」小説( *Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W* )にあって[ブラックホールのホログラム的性質について言及しているように「見える」]ところがある——[ホログラム上に投影された作中主人公の極微の分身]が[渦を巻く黒々とした底無し穴](ブラックホールのアナロジーと解されるもの)に CEERN (CERNではない)のレーザーにて投入されるとのセクションにまつわるところがそうである—— ことからして「より一層奇怪である」ということになる」

「[出典紹介部]を内包させながらもの」補うべくもの付記の部として

付記の部として表記しもあるが、[それに絞っての思索対象]としてのブラックホール絡みのところではなく、また、[ブラックホールの情報喪失]といった問題(ブラックホール情報保持のパラドックスといったところにかかわる問題)に関わるのではなく、

[人間の脳機序、ひいては、この世界それそのもの自体にホログラム的な側面を見いだそう]

との観点は70年代から存在しており、その提唱者デヴィッド・ボームの名はつとに知れ渡っているとのことは確かにある(和文ウィキペディアにも[ボーム拡散]といった理論の提唱者としての理論物理学者としてのデヴィッド・ボームの事績は細かく紹介されている)。

ここでは多少、ニューエイジャー・チック(英語で述べるところの *paranormal* でもいい)と内容を扱った書籍でもある *The Holographic Universe* (Michael Talbotという著者の手になる書籍でデヴィッド・ボーム David Bohm の事績についても扱った書籍/原著1991年刊行)よりの引用をなすが、デヴィッド・ボームは下にて呈示のようなかたちでホログラフィック的世界像——ホログラム脳理論(Holonomic brain theory)に関わる世界像——を「70年代に」提唱するに至っていた。

出典(Source)紹介の部 20-4(2)



# SOURCE

## 20-4(2)

(直下、現行、オンライン上より内容確認なせるようになっているとのマイケル・タルボットの  
手になる The Holographic Universe 原著にての 2 The Cosmos as Hologram の節よりの  
引用をなすとして)

---

As soon as Bohm began to reflect on the hologram he saw that it too provided a new way of understanding order. Like the ink drop in its dispersed state, the interference patterns recorded on a piece of holographic film also appear disordered to the naked eye. Both possess orders that are hidden or enfolded in much the same way that the order in a plasma is enfolded in the seemingly random behavior of each of its electrons. But this was not the only insight the hologram provided.

The more Bohm thought about it the more convinced he became that the universe actually employed holographic principles in its operations, was itself a kind of giant, flowing hologram, and this realization allowed him to crystallize all of his various insights into a sweeping and cohesive whole. He published his first papers on his holographic view of the universe in the early 1970s, and in 1980 he presented a mature distillation of his thoughts in a book entitled Wholeness and the Implicate Order. In it he did more than just link his myriad ideas together. He transfigured them into a new way of looking at reality that was as breathtaking as it was radical.

---

(原著よりの引用部はここまでとする)

表記の引用部についての訳書にての該当表記も挙げておく。

(直下、『投影された宇宙 ホログラフィック・ユニヴァースへの招待』(春秋社)と題されての  
訳書の 45 ページの記載内容を原文引用するところとして)

---

「ホログラムについて考察を始めるやいなや、これも秩序について新しい理解の道を与えてくれることがボームには見てとれた。広がった状態のインクの一滴と同様に、一枚のホログラフィック・フィルムの表面に記載された干渉パターンも肉眼には無秩序と映る。どちらも隠された、あるいは、包み込まれている秩序を有しており、プラズマの秩序が、一見バラバラに見える電子の渦のひとつひとつの挙動に包み込まれているのとまったく同じなのだ。だが、ホログラムが与えてくれた洞察はこれにとどまらなかった。考えれば考えるほど、宇宙はまちがいなくホログラフィックな原理によって機能しており、それ自体が一個の巨大な流れるホログラムであるという確信をボームは深めていった。そして、その理解が、彼のさまざまな洞察すべてを巨視的で包括的な全体理論へと結晶化させたのである。一九七〇年代初期、彼は宇宙のホログラフィックな見方に関する最初の論文を発表し、一九八〇年、自分の考えをさらに吟味し凝縮させたものを『全体性と内蔵秩序』(青土社、一九八六)と題した著書で世に問うた。この本は、彼の無数の考えをひとつにまとめただけでなく、それを、過激

なばかりか息を呑むような内容の新しい現実観へと昇華させた  
のである」

(訳書よりの引用部はここまでとする)

(上の原著よりの原文引用部の方についてはその通りの記述がなされているか、表記の英文テキストを検索エンジンに入力することで訳書を図書館で借りるなりなんなりせずとも確認できる。というのも英語圏の書籍の多くはテキストさえ分かれば、その内容を検索エンジンサイドから現時、特定できるようになっているからである)。

以上のような理論登場の経緯が示せるようになってきていること ——[一九七〇年代から世界そのものをホログラフィ的に解釈するような見立て(主に物理学者デヴィッド・ボームに由来するところの見立て)が登場してきていた]と示せるようになってきていること—— は、この身が見るところでは、

「[(ここまで委細表記の通りの事由から「複層的に」ブラックホール関連での尋常一様ならざる先覚性が見出せると指摘なしてきた) CEERN (CERNではない) などと呼称される、15TeV 加速器を運用する機関のビーム照射装置でもって「自らを縮退させての極小の分身」を「ホログラム上に」造り出した主人公がそのホログラム上に造り出した分身を己の「底無しの黒々とした渦を巻くへそ」に落とし込み自身の魂に引導を渡すとの粗筋の小説が [一九七四年] に登場していた]

とのことにまつわり、

[同じくもの小説にはホログラムとブラックホールの関係性を想起させる先覚的言及「をも」見出せるとの観点を呈する]

うえで

「不適切である」「そちらは予見描写ではなく既存の知識の組み合わせで導出され得たことである」との旨の反証の有効な材]

を与えるものではない —— [反論]を観念しうるとすれば、「ただの偶然である」との非論理的な論拠を伴わぬものに留まらざるをえないとの状況がそこにも当てはまる—— ]

とのものである(言い様が極めてまどろっこしくなり、恐縮ではある)。

デヴィッド・ボームは(筆者が調べたところでも)ブラックホールがホログラフィックな機序を有しているとの論理などは展開して「いない」からである。同人は「世界そのものがホログラフィックな概要を呈する」とのことを述べているのであってその物言いにはブラックホールとの結びつきは直接的には観念されないと見受けられるからである(:尚、本件に関しては俎上に上がっている小説にあって[[15TeV 加速器を運営する欧州研究機関によるビーム照射装置による縮小化]が[加速器によるブラックホール生成のことを想起させるもの]として登場を見ているとの奇怪な側面]が現出を見ていると指摘可能となっている、そちらがあるため、物理学者デービッド・ボーム提唱のホログラフィー世界観を巡るあれやこれやなどを(本来的には問題視する必要だにないともとれる中ながら)付け加えもして論じているとの背景がある)。

(出典(Source)紹介の部 20-4(2)はここまでとする)

付記の部は以上とする

ここまでの内容をまとめれば、

1974年初出小説『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』

に関しては次の観点から「も」[異常な先覚性]を体現している作品、しかも、我々全員に関わるところで[異常な先覚性]を体現している作品と見受けられると申し述べる次第である。

[現実の科学界を取り巻く状況としてCERNの最大出力14兆電子ボルトの円形加速器LHCがブラックホールを人為生成する可能性が(1998年の余剰次元にまつわる理論変転から)2001年から[ありうる]と取り上げられるようになった。それ以前にはブラックホール生成は人類の手になる到達可能な加速器では不可能とされていた——研究機関発表文書ら・諸々の有識者らの申し分ではそうなっている。端的なところとして先に[事実A]と題しての段で問題視した資料より再度の引用をなせば、案件についてまとめた米国の法学者(Eric Johnson)の手になるオンライン上より取得できるとの文書、本稿にての[出典\(Source\)紹介の部1](#)にて引いたTHE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLDにあつての838と題されたページなどにて“**In 1999, when questions floated in the media about accelerator-produced black holes, physicists issued an assurance that no particle collider in the foreseeable future would have enough power to accomplish such a feat.**”(訳として)「1999年、加速器製ブラックホールについての疑問がメディアに浮かんできた折、物理学者らはそのような業(わざ)をなしうるのに十分な力を有した[予見しうる未来にあつての加速器]は存在しないとの保証を発した」と解説されているとおりのことがある——]

上記のようなことがあるにも関わらず、『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』という作品にあつては

[1998年どころか1974年からCEERN(CERNではない)の最大出力15兆電子ボルトの円形加速器を登場させ、同加速器運営機関がブラックホールを生成することを露骨に想起させるような言及をなしていた]([出典\(Source\)紹介の部10](#)にての原文引用部を参照のこと)

とのことでその異常なる先覚性が問題になる作品である(:ちなみに[出典\(Source\)紹介の部10](#)にて先刻呈示のようにフェルミ国立加速器研究所由来の加速器コミュニティ動向解説公文書に記されているところとして1974年にあつても[1兆電子ボルト超えの加速器]さえ青写真としてすら実現化を語られていなかったとされている。そうしたことがあるにも関わらず、表記の小説『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』が対[往時(1974年)運用のCERN加速器]比率で見て(ISRというCERN運用加速器を比較対象として見て)240倍超も強力なもの、そして、現時のLHC(の目標上の最大出力)に比して僅か1.07倍しか強力ではないとの円形加速器を登場させているとのことがある)。

加えて述べれば、

[米国にてメディア露出型物理学者として有名なミチオ・カクの著書Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos(訳書はNHK出版から出されている『パラレルワールド——11次

元の宇宙から超空間へ』)では[カー・ブラックホールとワームホールがワンセットになったもの]を介して[カー・ブラックホールやワームホールに伴う強烈な放射と潮汐力に耐えうるナノマシンの類]を文明再建の種子として他世界に送り込む想像上の先進文明のやりようが紹介されている。そうした科学予測が立てられるようになったのは通過可能なワームホールにまつわる知見が1980年代に進展を見、なおかつ、ナノマシンに対する展望が同じくもの1980年代に開けてきたからであると解される]

ようになっているところを、

[1980年代どころか1974年に問題となる小説——先立っての段で述べているように[極微ブラックホール暴発による40年後の惑星呑込みを描く70年代の他小説と複合的な連関性「をも」呈する『北緯38度54分、西経77度0分13秒ランゲルハンス島沖を漂流中』——はブラックホール然としたものにナノマシン(文明再建の種子としてのナノプローブ)を「想起」させるように極微化された主人公の分身を[底無しの黒々とした渦を巻くへそ]とのブラックホール然としたものに落とし込むとの粗筋が具現化している([事実]にまつわる出典(Source)紹介の部10にて該当部原文引用)]

とのこと「でも」その異常な先覚性が問題になる作品である(同点については出典(Source)紹介の部20から出典(Source)紹介の部20-3にかけて典拠の解説をなしている)。

さらにもって加えて述べれば、

[チャールズ・ソーンという理論物理学者が1978年にて紐理論に通ずるところで量子重力にホログラフィー的性質を見出してから、その後、ゲラルド・トフーフトという物理学者がブラックホールの境界面にては情報がホログラフィックに保持されることを問題視しだしたとのことがある(目立ってのそうした理論の形成期は1990年代であるとの書かれようでもある)]

とされているところを、

[1978年以前、1974年からして問題となる小説は[ブラックホール然としたもの]と[ホログラフィー]の話を結びつけていた(:ブラックホールのアナロジー(類比的体現物)であろうと解されるもの、[底無しの黒々とした渦を巻くへそ]にレーザーにてホログラム面に縮小された主人公の極微分身が落とし込まれるとの粗筋を有している)]

とのことがあるとのこと「でも」その異常な先覚性が問題に「なりうる」とのことがある(同点については出典(Source)紹介の部20-4から出典(Source)紹介の部20-4(2)の部にかけてその典拠となるところの解説をなしてきた)。

以上、各観点から判じて小説『北緯38度54分、西経77度0分13秒ランゲルハンス島沖を漂流中』は「重ねて」際立っての先覚性を呈していると述べるべき作品となっている。



長くもなりもしたものの、ここまでにて先立って「本稿にての主題をなすところに入る前にまずもって」強調・明示しておきたいとした二点のこと、

第一。

「[本稿で問題視したいこと]は[物理学者ら理論にあつての欠陥性]を指摘するなどということには毛頭ない。そういうこと、物理学者ら理論にあつての欠陥性を摘示するとの資格も能力も筆者にはない(などと述べると心得違いをなしている向きは『この者が摘示事物に確証・自信を抱いていないからそうもしたことを言うのだろう』などと誤解するかもしれないが、そうではない)。専門家らの理論の適否を論ずることなどせずとも、それでも、[実験](と世間的には明示されている営為)に伴う問題となることは「容易に」摘示できるようになっているし、第三者でもそのことは確認できるようになっている。そのことの把握を求め、その先にあることの意味を問うのが本稿の趣意である」

第二。

「本稿では[他の人間に誤解されるようなこと]を取っても指摘しているが、といったことにしても[きちんとした論拠](属人的目分量の問題から離れもしてそこに確として存在しているとの論拠)に基づいているとのことを厳選・取捨選択して取り上げている。それが果たして本当なのか、本稿が真剣なる顧慮に値するもの、そう、[具体的行動の指針となして然るべきようなもの]とのレベルで真剣なる顧慮に値するものなのかとの観点にて読み手に切に確認いただきたいと考えている」

にあつての第二点目のことについて「先行して」取り上げるべきととらえたことを論じてきた。

すなわち、

第二。

「本稿では[他の人間に誤解されるようなこと]を取っても指摘しているが、といったことにしても[きちんとした論拠](属人的目分量の問題から離れもしてそこに確として存在しているとの論拠)に基づいているとのことを厳選・取捨選択して取り上げている。それが果たして本当なのか、本稿が真剣なる顧慮に値するもの、そう、[具体的行動の指針となして然るべきようなもの]とのレベルで真剣なる顧慮に値するものなのかとの観点にて読み手に切に確認いただきたいと考えている」

との点に関わるところとして

[CERNの挙動が異世界への扉とも表すべきワームホール(別名アインシュタイン・ローゼン・ブリッジ)を開く可能性がある。それによって、この世界に我々を支配すべくもの何がしかのもの(ナノマシンのような構造体)が入ってくる可能性や我々の世界の崩壊がもたらされる可能性が観念される]

といった、

[一見にして「頭の具合がよろしくない」と解されもしようとの実にシュールな申しよう]

をなしていることからして[それなりの背景]があつて申し述べていることであると指し示すために、同じくもの、



[CERNの挙動が異世界への扉とも表すべきワームホール(別名アインシュタイン・ローゼン・ブリッジ)を開く可能性がある。それによって、この世界に我々を支配すべくもの何があるもの(ナノマシンのような構造体)が入ってくる可能性や我々の世界の崩壊がもたらされる可能性が観念される]

とのことの絡みで何が問題になるのか、とのことについて部分的解説をなすとのことをなしてきた——尚、ここまでの話は先にて[そうしたものである]と明示しているように「限局的なる」話にすぎない。俎上にあげている[CERNの挙動が異世界への扉とも表すべきワームホール(別名アインシュタイン・ローゼン・ブリッジ)を開く可能性がある。それによって、この世界に我々を支配すべくもの何があるもの(ナノマシンのような構造体)が入ってくる可能性や我々の世界の崩壊がもたらされる可能性が観念される]とのことの絡みで[何が本当に問題になるか]は長大なる本稿全体にて訴求なすと先立って明言しているようにここまでなしてきた話とて所詮は微に入っの限局的な話でしかない——。

さてもってして

第一。

「[本稿で問題視したいこと]は[物理学者ら理論にあつての欠陥性]を指摘するなどということには毛頭ない。そういうこと、物理学者ら理論にあつての欠陥性を摘示するとの資格も能力も筆者にはない(などと述べると心得違いをなしている向きは『この者が摘示事物に確証・自信を抱いていないからそうもしたことを言うのだろう』などと誤解するかもしれないが、そうではない)。専門家らの理論の適否を論ずることなどせずとも、それでも、[実験](と世間的には明示されている営為)に伴う問題となることは「容易に」摘示できるようになっているし、第三者でもそのことは確認できるようになっている。そのことの把握を求め、その先にあることの意味を問うのが本稿の趣意である」

第二。

「本稿では[他の人間に誤解されるようなこと]を敢えても指摘しているが、といったことにしても[きちんとした論拠](属人的目分量の問題から離れもしてそこに確として存在しているとの論拠)に基づいているとのことを厳選・取捨選択して取り上げている。それが果たして本当なのか、本稿が真剣なる顧慮に値するもの、そう、[具体的行動の指針となして然るべきようなもの]とのレベルで真剣なる顧慮に値するものなのかとの観点にて読み手に切に確認いただきたいと考えている」

とのことらについてのまずもつての説明をし終えた——の過程にあつては(表記第一の点に関わるところとして)海外LHC差し止め訴訟にあつて見受けられる[科学理論の適否を殊更に取り上げることに起因する問題性]を当該の訴訟資料そのものを挙げながら摘示するといった筆の運びをなす、(表記第二の点に関わるところとして)文献的記録としてどういう奇態なることが現実に具現化しているのかとのことを科学史・書誌にまつわる情報に依拠しつつ解説するとの筆の運びをなす、などとの入り組んだ式をとるとのかたちとなつてしまっていたのではあるも、とにかくも説明し終えた——うえでものこととして、である。

まさしくものここ本段に至った段階にあつて「も」まだもつて本題(としての指し示し)に入らずに[先駆けて摘示しておく必要がある]とらえていることがある。すなわち、[本稿内容に全体として関わることになる]との意で重きをなしてくる、そうもした[補足しておくべきこと]があるとのことでまずもつてそちらの解説からなしたいとのことがある。

具体的には、

[プランク・エネルギーというものにまつわる「一般的な」科学者ら物言いにまつわる補足]

を(科学に疎い門外漢にも分かるような式で)なす必要があると判じたとのことがあるのでそちら解説を以降なしていきたく次第である(直下より(「極めて長くなるも、」の)[プランク・エネルギーにまつわる解説部]に入ることとする)。

(これ以降、[プランク・エネルギー領域]とのものについての解説の部に入るとして)

つい先立っての段にて

[ブラックホールやワームホールへ[潮汐力]や[放射]に耐えうる[文明再建の種子]としてのナノマシンを投下するとの未来技術予測]

[ホログラム原理とブラックホールの関連性を論ずる後々の理論動向]

とのまさにそれら絡みのところで

[それがなせるとは思えなかった折にての先覚的な言及をなしているとの側面]

が(露骨に、とでも言えようなかたちで)70年代小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W*『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』には伴っていると論じてきた。

そうもした先に詳述なしてきた奇怪な先覚性に関わるどころとして、

[問題となる70年代小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans: Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W*『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』の最も重要なところの「ブラックホール生成問題にまつわる」先覚性とプランク・エネルギー領域の実現によるブラックホール生成トピックの関係性]

について解説することからここでの話をはじめ。

さて、本稿の先の段でも取り上げた2005年に原著刊行を見ている書籍、

*Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos* (邦題『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』)

にあつては

「ワームホールによって別宇宙間航行をなす前提として[プランク・エネルギー](という領域のエネルギー)を利用するための超巨大な加速器を建造することが必要とされる」

との可能性論についての言及「も」が見受けられる(下の出典紹介部を参照されたい)。



# SOURCE

## 21

ここ出典(Source)紹介の部 21では先行する流れの中でそちら内容を問題視してきたとの米国人物理学者ミチオ・カクの手になる科学関連著作 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos (邦題は日本放送出版協会(現NHK 出版)から刊行されての『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』)にあって[(ワームホールやブラックホール生成の前提として)プランク・エネルギーを実現する超巨大なる加速器が必要とされる]とのことに通ずる表記がなされていることを紹介する。

(直下、同著邦訳版『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』の p.392 から p.393 より原文引用をなすとして)

---

「タイプ III 文明の場合、太陽系サイズの粒子加速器が作れる可能性がある。先進文明は、素粒子のビームを宇宙に発射してプランクエネルギーまで加速できると考えられるのだ。…(中略)…二本のビームを、片方は太陽系を時計回りに、もう片方は反時計回りにめぐらせてもいい。この二本が衝突すると、物質／反物質の衝突でプランクエネルギーに至るエネルギーを生成するだろう」

---

(引用部はここまでとしておく 一※一 )

(※以上をもってして訳書よりの引用となしたが、(検索エンジンにての下記長文テキストの入力などを通じ)「オンライン上よりその通りの記載がなされている、すなわち、[文献的事実]であるとのことを確認できるころの」原著 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher

Dimensions and the Future of the Cosmos 原文内該当表記部もここでは引用しておく。(以下、原著 CHAPTER ELEVEN Escaping the Universe の節よりの引用として) **“But for a type III civilization, the possibility opens up of making an atom smasher the size of a solar system or even a star system. It is conceivable that an advanced civilization might fire a beam of subatomic particles into outer space and accelerate them to the Planck energy.”**とのものとなる)

上に見る Planck energy とは Planck units ことプランク単位、物理事象の最小の単位たるプランク領域の系にて作用するエネルギーなどと表されるものだが、ジュール換算すると1.956GJ (ギガ・ジュール)、すなわち、  
**[45リットルのガソリン(にて車を走らせる)エネルギーに若干増さる程度のエネルギー]**  
になるとされているものとなる(※)。

(※上の点については和文ウィキペディア[エネルギーの比較]項目にて現行、

**[1.6GJ (ギガジュール) : 45リットル(平均の燃料タンクの容量)のガソリンのエネルギー]**

**[1.956GJ (ギガジュール) : プランク・エネルギー]**

と表記されていることから確認なせるところとなっている。

尚、英文 Wikipedia [ Orders of magnitude (energy) ] 項目にもほぼ同文のこととして

**2.0x10<sup>9</sup>J : Energy of an ordinary 61 liter gasoline tank of a car [おおよそ[2×10の9乗]ジュール⇒通常の車の[61リットル]ガソリンタンクのエネルギー]**

**2.0x10<sup>9</sup>J : Planck energy, the unit of energy in Planck units [おおよそ[2×10の9乗]ジュール⇒プランク単位にてのエネルギー、プランク・エナジー]**

とのことが表記されている(ちなみに「現行にあっては」日英ウィキペディアそれぞれでガソリンのジュール換算のエネルギー量が異なるような格好となっている — 計算上、間尺が合わない — とのことがあるようだが(計算してみると分かるであろう)、ここではそういった細かいことは割愛する)。

ここで本稿の後にての内容に多少なりとも関わることであるから書いておくが、(上にて表記のように)プランク・エネルギーが

**[45リットルガソリンで車を駆動させ続けるに相当するエネルギー]**

であるのに対して LHC のような加速器の重心系衝突エネルギーたるテラ・エレクトロン・ボルト(兆単位の電子ボルト)はたかだか

**[蚊が飛ぶエネルギーに相当するもの]**

にすぎないとされている(先立っての段でも若干、にまつわってのことにつき筆を割いたことである)。

その点、兆単位の電子ボルトが蚊の飛ぶエネルギーにすぎぬとのことについては同じくも和文ウィキペディア[エネルギーの比較]項目にて

**[160.2nJ (ナノジュール), (1TeV) : 飛んでいる蚊のエネルギー]**

と表記され、英文 Wikipedia [ Orders of magnitude (energy) ] 項目にて  
**[1.6×10<sup>-7</sup>J (おおよそ 1.6×10 のマイナス七乗) : 1 TeV (teraelectronvolt), about the kinetic energy of a flying mosquito ]**

との表記がなされているところである。

につき、大型ハドロンコライダー(LHC)とは蚊の飛ぶエネルギー(1TeVこと1兆電子ボルト)を膨大な電力を食う磁石群を用いて「蚊の1兆分の1の領域」に投入することを想定しての装置となっている。

本稿の先の段、**出典(Source)紹介の部10**にても同じくものの引用をなしたところではあるが『宇宙創造の一瞬をつくる CERNと究極の加速器の挑戦』(早川書房)という書籍、その国内にて流通しているハードカバー版の27ページより以下、再度の引用をなすとして

LHCを最大レベルで運転すると、陽子は加速しつづけて光速(秒速二九万九七九二・四五八キロ)の九九・九九九九九パーセントという想像を絶するスピードに到達する。このときLHCはエネルギーレベルで一四TeV(テラ電子ボルト)で運転される。一TeVは蚊の飛ぶエネルギーに近く、ごく小さな値に思えるが、それがきわめて高密度になる。LHCは陽子二個の体積、つまり蚊の一兆分の一の空間の中にこのエネルギーを詰め込むのだ。体積あたりのエネルギーとして、これまでに達成された値をはるかにしのぐレベルだ。この超高エネルギー領域で、今まで物理学者の頭の中になかった新粒子や新規現象が現われると考えられている(再度の引用部はここまでとしておく)と表記されているようなかたちにて、である)



**teraelectronvolt**  
 $1.6 \times 10^{-7} \text{ J}$   
about the kinetic energy of  
a flying mosquito

**planck energy**  
 $2.0 \times 10^9 \text{ J}$   
energy of an ordinary 61  
liter gasoline tank of a car

上の図にては  
[兆単位の電子ボルト ——ひとつの電子を動かすエネルギーが一電子ボルトとしてそれが兆単位のものに(teraelectronvolt)—— ]  
とて蚊の運動エネルギーに等しいにすぎないとのことが科学の世界の一般教養として知られることを示すものである。  
対して、  
[プランク・エネルギー]  
であるが、上の[兆単位の電子ボルト(テラエレクトロン・ボルト)]が蚊の飛ぶエネルギーであるの等しいものである(ジュール換算でナノ単位のもの)であるのに対して、そちら(プランク・エナジー)は  
[ガソリンタンクで車を走り続けさせるのに等しいエネルギー]  
とのことになり、テラ・エレクトロン単位と雲泥の差どころのものではないエネル

ギーの単位となる(おおよそアバウトにして [10 のマイナス 6 乗] と [10 の 7 乗] の間に拮がる差分に近いところであると指摘出来る)。

ここでそのようなことをわざわざ解説しているのは無論にして蘊蓄(うんちく)の類を傾けたい(他から嫌われない)とのためではない。

従前、

[プランク・エネルギー級のエネルギーを極小領域に投入しなければブラックホールの人為生成など無理であると考えられていた(計算上、そうしたことが述べられる素地があった)とのことがあった中でここつい最近(1998年)になって余剰次元理論(ADD Model)というものが提唱され、それがゆえの理論動向の変遷から2001年よりLHCでも大量のブラックホール——即時に蒸発する無害なブラックホールとなり、その生成・発見は科学の進歩にむしろ資するなど関係者が力弁するとのもの——がテラエレクトロンボルト領域で生成されうると想定されることになったとの経緯がある]

とのことを強調、かつ、そうした経緯と何ら間尺が合わぬ先覚的言及がなされているとのことがある、そのことを視覚的に問題視したいがゆえに上記のような図を挙げもしているのである。その旨、ご理解いただきたい次第である(尚、そうも述べたうえででもさも小難しい話をなしているように勘違いされる向きもあるかもしれないが、そうではない。先述もしているようにここ本稿にて筆者が問題視しているのは科学理論の適否——筆者を含め門外漢が(出歯亀的異常者とのレッテル貼りをされることなくしては)タッチできるようなところではないとの領域——などではなく、誰でも、そう、高校卒業程度の標準的知性があれば、理解できるはずであろうとのこと、「言われようの変遷とそれと矛盾する別の側面の間の矛盾抵触関係」が何故そこにあるのか、ただそのことだけのことである——それにつき、これまた再言することだが、そうした[齟齬]の問題が山とあり(どういうわけなのか誰も指摘しようとしなくて山としてあり)、かつまた、それら齟齬に通ずる事物らが相互に純・記号論的な意味での連続関係を呈しながら(その旨の例示列挙はこれよりなしていく)、「人間など家畜として滅せる愚かな種よ」といった心根を感じさせる嗜虐性を伴ったメッセージングが浮かび上がってくるようになってきているとのことがあるのを(憤激の情を抑えるのに一苦労しながら)本稿では問題視せんとしている次第「でも」ある——)。

(出典(Source)紹介の部 21 はここまでとする)

上に引用なした書籍 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos 『パラレルワールド——11次元の宇宙から超空間へ』にあって言及されている、

[[プランク・エネルギー](の極微領域への強制的投入)と結びつけられ、「超」が付くほどに巨大であることが要されるとの加速器——太陽系ないしより巨大なる恒星系に及んでの長大さを有する加速器——]( But for a type III civilization, the possibility opens up of making an atom smasher the size of a solar system or



**even a star system.**などと言及されている加速器)

は ——本書の後の段にてもそこよりの引用をなす書籍となるが—— ポール・ディヴィス ( Paul Davies ) という英国の権威サイドの物理学者の手になる書 How to Build a Time Machine (邦題)『タイムマシンをつくろう!』(草思社)にて「も」次のようなかたちでその特性について言及されているものとなる。

出典 (Source) 紹介の部 21-2



# SOURCE

## 21-2

ここ出典 (Source) 紹介の部 21-2 では物理学者ポール・ディヴィス著作

**How to Build a Time Machine 『タイムマシンをつくろう!』**

にあって

[ワームホールを生成するための圧縮には従来、プランク・エネルギーを実現する超巨大加速器が必要と目されていた]

との物言いがなされていることを紹介しておく。

(直下、英国物理学者ポール・ディヴィス著の科学読み本『タイムマシンをつくろう!』(草思社)の p.120 より原文引用するところとして)

「従来の電磁気技術では、プランク・エネルギーは太陽系に匹敵するぐらい巨大な加速器を建造しないと獲得できないが、まったく新しい加速器技術が開発されれば、はるかにコンパクトな装置を用いて非常に高いエネルギーを得ることができるかもしれないのだ。またいくつかの理論によれば、空間の大規模な改変はプランク・エネルギーよりもずっと低いエネルギーで実現できるかもしれない。技術的にも見通しがつけられる可能性があるという。もし重力をほどほどのエネルギーで操作できれば、これまでのような途方もない圧縮や加速を必要とせずにワームホールを

(引用部はここまでとする —※— )

(※上記引用文について:原著 2002 年刊行の How to Build a Time Machine 邦訳版『タイムマシンをつくらう!』(草思社)よりの直近引用部後半にては  
「空間の時間の大規模な改変はプランク・エネルギーよりもずっと低いエネルギーで実現できるかもしれず、技術的にも見通しがつけられる可能性があるという」

と記載されているが、については、本稿の従前の段(出典(Source)紹介の部 1、出典(Source)紹介の部 2 を包摂する段)にて取り上げてきた、また、さらに後の段でも都度言及することになる、

[1998 年に提唱、2001 年から目立ってブラックホール人為生成可能性を肯定するに用いられた余剰次元理論(ADD モデル)による兆単位の電子ボルトにあつての重力増大機序]のことを指していると解される)

(出典(Source)紹介の部 21-2 はここまでとする)

---

上に見るようにプランク・エナジーを実現するとの加速器などは[現行の技術]にて達成可能の領域に入っているものではない。

それでは、

[太陽系サイズ(太陽それ自体の直径からして一三七万キロである. そこから述べるまでもないことだが、太陽系サイズとなると LHC の直径と比べるまでもない人間には建設不可能な超巨大なものとなる)との加速器]

が[他宇宙・他空間への扉の類(ワームホールと呼称されるもの)の開閉]に必要なものであるとの見立てが呈されたのは何時頃か。

少なくとも、

「人間には構築できるはずもない太陽系サイズの加速器というものについては、」

1997 年「以前より」、そう、90 年代より同じくもの超長大加速器の類がブラックホールやワームホール生成をなす手段たりうるとの思索が既にもって確実になされていたと判じられるようになっている(:まさしくもの太陽系サイズの超巨大加速器 —他宇宙に侵出するための加速器— を登場させている小説 —後述のグレッグ・イーガン著『ディアスポラ』— が 1997 年には既に世に出ているといったことから同じくものこと、判じられるようになっている)。

その点、90 年代から太陽系サイズの加速器が(カー・ブラックホールやワームホールといったものを生成、時空間の改変を約するとの)[相応のもの]として言及されていたとのことについては

「プランク・エネルギーのことなどが(「不可解な」予見描写をなしていると解される理由に

ついて詳述なしてきたとの)70年代小説『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』の作中設定構築に影響を与えた可能性はありうるのか」

とのことが顧慮すべきところとなるのだが、1970年代にまで遡ると(後述するところとして「80年代はいざ知らず」1970年代にまで遡ると)、そういうこと、

[プランク・エネルギーを実現すれば、時空の穴が開けられる]

ということが「早くも」述べられていたのか、ということについては(謙遜などなせずに)「寡聞にしてではない」との領域に至るまで取材なしつつもの目の色を変えての探査活動で煮詰めんとして北筆者とて聞き及ばないとのことがある(：そも、[15兆電子ボルト]という件(くだん)の小説に見る円形加速器(LHCにあまりにも近似していること先述してきたところの70年代フィクションに見る加速器)の出力はプランク・エネルギー実現をなすものではない。そこで問題になっているのはプランク・エネルギーに遠く及ばないものながらも「ここ最近になって」ブラックホールを生成しようと「つい最近になって」新規理論登場に応じて考えられるようになった兆単位電子ボルト(TeVスケール)、マクロ・スケールでは「蚊の飛ぶ」エネルギーにすぎないとされること、何度も何度も申し述べてきたテラ・エレクトロン・ボルト領域である)。

同じくもの点については、そう、プランク・エネルギー・クラスの加速器を実現すれば、時空に穴が開けられるとの物言いがなされることになったとの点についてはどんなに遡っても「1980年代」

以前には遡れないと考えられ、そうした状況にて[1997年]にグレッグ・イーガンという小説家の作品、『ディアスポラ』という作品の時点にて[長炉]と呼称されての[超文明によるワームホール生成のための宇宙規模の超巨大加速器]が登場させられるようになったというのが筆者がその通りであろうと判ずるに至った(現行にての)見立てである。

につき、上にて言及の『ディアスポラ』という小説作品(ワームホールを開くためのプランク・エネルギー領域の加速器を登場させる作品)をものしたグレッグ・イーガンという作家がブラックホール関連の理論を研究している物理学者から著作権元を介し、ないし、自身の取材活動の中で直に意見聴取したか、あまり知られておらぬ論考あるいはその紹介をなしている科学雑誌記事を分析・参照して以下、引用なすこととした小説『ディアスポラ』の粗筋を考案したとしか(常識的な範疇では)考えられないようになっている。

---

出典(Source)紹介の部 21-3



SOURCE

21-3

直上にて言及の小説『ディアスポラ』については直にその内容をお読みいただき、いかな内容の小説なのか、ご確認いただきたいものでもあるが、ここ出典(Source)紹介の部 21-3 では Greg Egan の手になる同小説作品の原著 DIASPORA よりさしあたり問題となる部——ブランクエネルギーを極小領域に投下できもしようとの超巨大加速器を用いて別世界への扉を開こうとの描写がなされている部——よりの引用をなしておく。

(直下、Greg Egan 原著 DIASPORA、[ 8 SHORT CUTS ]の部よりの原文引用をなすとして)

---

Only primordial electron-proton wormholes offered the chance of an instant short-cut to the stars; the current experiment was using freshly created electron-positron pairs merely for the sake of having both ends of each wormhole accessible. Working exclusively with electron-proton wormholes might have been simpler in theory, but new ones with known endpoints couldn't be created at useful rate under anything less than Big Bang conditions. [ . . . ] The Forge was a giant particle accelerator, consisting of over fourteen trillion free-flying components. Each one used a small light-sail to balance the sun's slight gravitational pull and keep itself locked onto a rigid straight line 140 billion kilometers long.

(以上原著よりの引用部に対して国内書店にて幅広くも流通している訳書、早川「文庫」版『ディアスポラ』237 ページから 239 ページより原文引用するところとして)

星々への手軽な近道(ショートカット)をあたえてくれる可能性があるのは、始原から存在する電子—陽子ワームホールだけだ。現状の実験では、各ワームホールの両端をアクセス可能にしておくだけのために、あらたに作られた電子—陽電子のペアを使っている。電子—陽電子ワームホールに限定して作業したほうが理屈の上ではかんたんなのだが、ビッグバンが起きる条件下でなければ、両端のわかっている電子—陽子ワームホールを実用になる割合であらたに作ることはできない。…(中略)… <長炉>は十四兆以上の自由飛行する構成要素からなる、巨大な粒子加速器である。要素の各々は小さな光帆(ライト・セイル)で太陽のわずかな重力の引きのバランスを保って、千四百億キロメートルの長さにおたる精確な直線上にその位置を固定している

---

(原著および訳書よりの引用部はここまでとしておく)

以上、引用なしとの部位は星々をショート・カットにてつなげるとのワームホールを構築するために[長炉](作中、The Forge と呼称されるもの)と呼ばれる、

[星系サイズ(1400 億キロメートル 140 billion kilometers long)で膨大な部品(14 兆以上の自由飛行する要素を具備 over fourteen trillion free-flying components)を含む加速器]

が肉体を失った後、人工生命体(デジタル世界上に存在するソフトウェア生命体)となった元・人類によって建造されていることが描かれての部位である。

同パート、ミチオ・カクの書籍 *Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos* (訳書にての該当部は現時にてNHK出版から出されている『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』393頁から394頁)に見受けられもする、

(**出典(Source)紹介の部 21**の部にて挙げたところの記載を「再度」引用なすとして)

But for a type III civilization, the possibility opens up of making an atom smasher the size of a solar system or even a star system. It is conceivable that an advanced civilization might fire a beam of subatomic particles into outer space and accelerate them to the Planck energy.「タイプ III 文明の場合、太陽系サイズの粒子加速器が作れる可能性がある。先進文明は、素粒子のビームを宇宙に発射してプランクエネルギーまで加速できると考えられるのだ。・・・(中略)・・・二本のビームを、片方は太陽系を時計回りに、もう片方は反時計回りにめぐらせてもいい。この二本が衝突すると、物質／反物質の衝突でプランクエネルギーに近いエネルギーを生成するだろう」

との Planck energy 実現加速器(太陽系サイズの加速器)のことに言及しているのだと解されるところのものである(ただ、——原著原文の該当するセクションに仔細に目を這わせている人間として申し述べるも——グレッグ・イーガンの小説に見る星間級の加速器についてはそれがまさしくものプランク・エネルギーを集約すべくものものと述べられるものなのか、単位表記の問題でどうなのかと見える、合算が問題になるようにも見えるなどいまひとつ模糊としているところもある)。

(**出典(Source)紹介の部 21-3**はここまでとする)

---

(さらに細々と脇に逸れて、といった按配の記述を続けるが)

加えて述べれば、直近、そこより原文引用をなした『ディアスポラ』という小説作品は2005年に出た『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』にて呈示されている科学予測、先にも(**出典(Source)紹介の部 20**の段にて)引用したところの

Because the tidal forces and radiation fields would likely be intense, future civilizations would have to carry the absolute minimum of fuel, shielding, and nutrients necessary to re-create our species on the other side of a wormhole. Using nanotechnology, it might be possible to send microscopic chains across the wormhole inside a device no wider than a cell.

「ワームホールのなかでは潮汐力や放射が猛烈になりそうなので、未来の文明は、向こう側の宇宙で再生するのに必要な燃料やシールドや養分を、最小限にして運ばなければならないだろう。そこでナノ・テクノロジーを使えば、それらを詰めた小さな鎖を細胞ほどの大きさの装置に入れて、ワームホールの向こうへ送れる可能性がある。ワームホールが非常に小さくて原子サイズだとしたら、その向こう側で全人類を再生できるだけの莫大な情報を、原子でできた長いナノチューブに詰めて送ることになるだろう」



との発想法 (Idea) が既に 1997 年で登場していたことを示す作品でもある。

というのも Diaspora 『ディアスポラ』にあってはその後半部、最終章にあたる

[ 20 INVARIANCE ] (不変なるもの)

の章にて原著テキスト —— (先だつての段でも述べたように英文原著英文テキストをそのままに検索エンジンに入力することで現行、その通りの記述が洋書に含まれていること、[ 文献的事実 ] の問題を確認できるようになっている) —— より原文引用するところとして次の通りの記載がなされているからである。

---

出典 (Source) 紹介の部 21-3(2)



# SOURCE

## 21-3(2)

(直下、Diaspora 『ディアスポラ』原著最終章にあたる [ 20 INVARIANCE ] よりの原文引用をなすとして)

---

The Handler had refused to disclose the nature of its own physical infrastructure, but it must have been operating below the femtomachine level to have penetrated the polis defenses. One line of speculation had it that the Striders had woven a computing device into the virtual wormholes of the vacuum throughout the galaxy, and the Contingency Handlers ran on empty space, permeating everything. Paolo said, "I'm dropping the seeds."

(以上原著よりの引用部に対して国内書店にて幅広くも流通している訳書、早川「文庫」版『ディアスポラ』460 ページよりの原文引用も下になしておく) 対応係は自分の物理的インフラストラクチャーの特質を明かすのを拒んだが、ポリスの防御を突破したからには、フェムトマシン・レベル以下で作動しているのはまちがいない。総合的な仮説のひとつは、ストライダーは銀河じゅうの仮想真空ワームホールにコンピューティング・デバイスを織りこんでいて、偶発事態対応係はあらゆるものに浸透しながら空っぽの空間を走っ



ているというものだった。パオロが声をかけてきた。「種子を投下する」

---

(原著および訳書よりの引用部はここまでとする)

(出典 (Source) 紹介の部 21—3(2)は以上とする)

---

直上にて引用したのは宇宙に散ったソフトウェア生命体達よりなる離散集団(ディアスポラとのギリシャ語で示される母文明からの離散コミュニティ)の住まう移動式都市のうちの一が遠征の果てに行き着いた先にて

[フェムトマシン ——ナノが10のマイナス9乗スケールの単位であるのに対してフェムトとは10のマイナス15乗スケールの単位(原子核サイズの世界の領域の単位)である—— と呼称される超極微機械]

を用いて、そう、そちら超極微機械をワームホールの先の他世界に送り込んで、送った先にて干渉してくる異文明と出会ったとの旨の記載がなされているパートとなるのだが、ここにて注視しているのはワームホールの放射や潮汐力に耐えうるものとしてか、フェムトマシンをワームホール越しに投入するとアイディアが原著1997年初出のフィクションに既に登場しており、そこに2005年の書籍『パラレルワールド』にて呈示されている科学予測と同様のものの片鱗が見受けられることである。

につき、小説『ディアスポラ』は

[[フレッシュャーズ]と呼称される地球のアトランタなどに残った肉体を伴った人間ら／[グレイズナー]と呼称される機械のそれながらも物理的実態を保持している機械化人／「完全に肉体を失い」ソフトウェア生命体と化した[ザ・シティズンズ:市民]と呼ばれる存在]

の三種族に人類の後裔が分化しているとの状況から話がはじまり、うち、三番目の[ソフトウェア生命体]を中心に話が展開していくとの小説作品なのだが、その過程で肉体をいまだに伴った人間は

[トカゲ座ガンマバースト]

と呼ばれる現象が遠宇宙にて発生し「生き残るに困難な宇宙線」が押し寄せてきたことにより(先述の三形態に人類の後裔が分化していったとの作品世界状況にあって)完全に滅亡することになったとの設定が採用され、のような作品設定の中にあって肉体人の中の一部の生き残りは死滅する前の肉体レベルの脳をスキャンされ、ナノマシンを介して[肉滅]させられ、[ソフトウェア生命体]に変化させられるといったかたちで話が進んでいく(※)。

(※上にて言及の小説『ディアスポラ』粗筋にまつわる即時確認媒体の内容も下に引いておく(その点もってして『ディアスポラ』という小説の内容を把握している者として見て手前が「よくまとまっている」と判じた現行の英文ウィキペディアの記載内容を引いておくこととする)。

(直下、英文 Wikipedia[Diaspora (novel)]項目にての Plot summary の節よりの引用をなすとして)

Years later, the gleisner Karpal, using a gravitational-wave detector, determines that a binary neutron star system in the constellation of Lacerta has collapsed, releasing a huge burst of energy. [ . . . ] Stirred up by a paranoid Static diplomat, many fleshers suspect that Yatima and Inoshiro have come to trick or coerce them into "Introduus", or mass-migration into the polises, involving masses of virus-sized nanomachines which dismantle a human body and record the brain's information states as it is chemically converted into a crystalline computer. The gamma ray burst reaches Earth shortly after the conference, destroying the atmosphere and causing a mass extinction. The gleisners and the Coalition of Polises survive the burst, thanks to cosmic radiation hardening. Over the next few years, Yatima and other citizens and gleisners attempt to rescue any surviving fleshers from slow suffocation, starvation, or poisoning by offering to upload them into the polises.

(作中設定に対する注記を付しながらもの訳として)

「数年の後、[グレイズナー] (訳注: 作中における機械化人種) のカーパル (と命名されているキャラクター) が重力波探知機を用いることによってトカゲ座にある連星の中性子星の星系が崩壊し、それによって、すさまじいエネルギー爆発が生じたと結論するに至った。

…(中略)…

偏執的かつ保守的な外交団に揺り動かされ、多くの[肉体人] (訳注: 作中にて未だ人間としての肉体を放棄せずにアトランタなどに住んでいる人々) はヤチマおよびイノシロー (訳注: 宇宙のポリスと呼ばれる拠点から地球にやってきた主要登場人物に数えられるソフトウェア化人種成員でトカゲ座に由来するガンマ線バーストが地球に到達し大量絶滅がもたらされることを事前警告しに地球に赴いたとの設定のキャラクターら) をして彼ら肉体人を欺き、ないしは、強要して彼ら肉体人を[イントロダス]、すなわち、[人間の肉体を放棄させ脳に保持されている情報にまつわる状況を化学物質作用下で結晶構造コンピューターに移行させるとのウィルスサイズのナノマシン群]の関与の下、[ポリス] (訳注: ソフトウェア生命体らの拠点、市としてのポリス) に実態としての質量移住をなさしめんとしている者達なのであろうと(ヤチマおよびイノシローのことを) 疑うに至った。

(ヤチマおよびイノシローの両ソフトウェア生命が関わっての危機警告するための) 会合が終わった後、間もなくしてガンマ線バーストが地球に到達、大気を破壊し、大量絶滅を惹起することとなった。グレイズナーらと(ソフトウェア生命らの住まう) ポリス連合は宇宙放射に対する対策強化のおかげで存続することとなった。その後、続く数年の間、ヤチマと他のポリス市民ら、そして、グレイズナーらは肉体人を(別の生命体形態へと)[アップロード]することで緩慢なる窒息死、飢餓による死、毒による死から彼らを救出しよう試みた」

(ここまでを補いもしての拙訳を付しての引用部とする)

上にて現行英文 Wikipedia[Diaspora (novel)]項目にあつて見受けられる「簡にして要を得

ている」との按配の『ディアスポラ』粗筋紹介箇所よりの抜粋をなしましたわけだが、そこには

[[アトランタ]などのコミュニティにて暮らす地球に残った肉体を伴った人類が絶滅に向かい、の過程で、死に行く彼らが[肉滅者]と呼ばれるソフトウェア生命体ら主導の[ナノマシンによる脳情報のコピー]によって「アップロード」される経緯]

が言及されている——※ 存在論にまつわる哲学的観点では以上のような小説筋立てが馬鹿げたものに響くとのこと、すなわち、[魂のコピー]などができるのか、との問題も脳裏をよぎりはする。一部の科学者が指摘するところでは脳のどこに([記録経路でもある海馬に保持されての短期記憶]ではなくにももの)[長期記憶]が保持されているのか、ということすら我々人類には分からないとされているような中でグレッグ・イーガンの小説では[(作中にて主役となる)ソフトウェア生命体達が自らをコピーして数カ所に並列存在させることができる]といった内容、[ソフトウェア生命体は(機械の中で)人間の何十倍のサイクルで文明を加速させることができる]といった内容、[ソフトウェアがゆえに無から発生可能である]といった内容、そういう離れ業的文明のありようについてたらふく描写しているとのものとする(とすらなっているとのことに伴う迫真性ありやなしやとの意味での問題もありもする。だが、本稿ではそういう哲学的見地と接合する非本質的なところとまつわる問題は深く論じないこととする——)。

そうした小説『ディアスポラ』に見る、

[[肉体を持った人間の[アトランタ]などのコミュニティの成員]が[ナノマシン]にて脳をスキャンされ、肉体的死を迎える中で[別のもの]に代替させられていき、結果、人間に「完全に」取って代わるとの存在となったソフトウェア生命体らが[種子]をワームホール越しに(多世界解釈における)他世界・他宇宙に送るとの発想法]

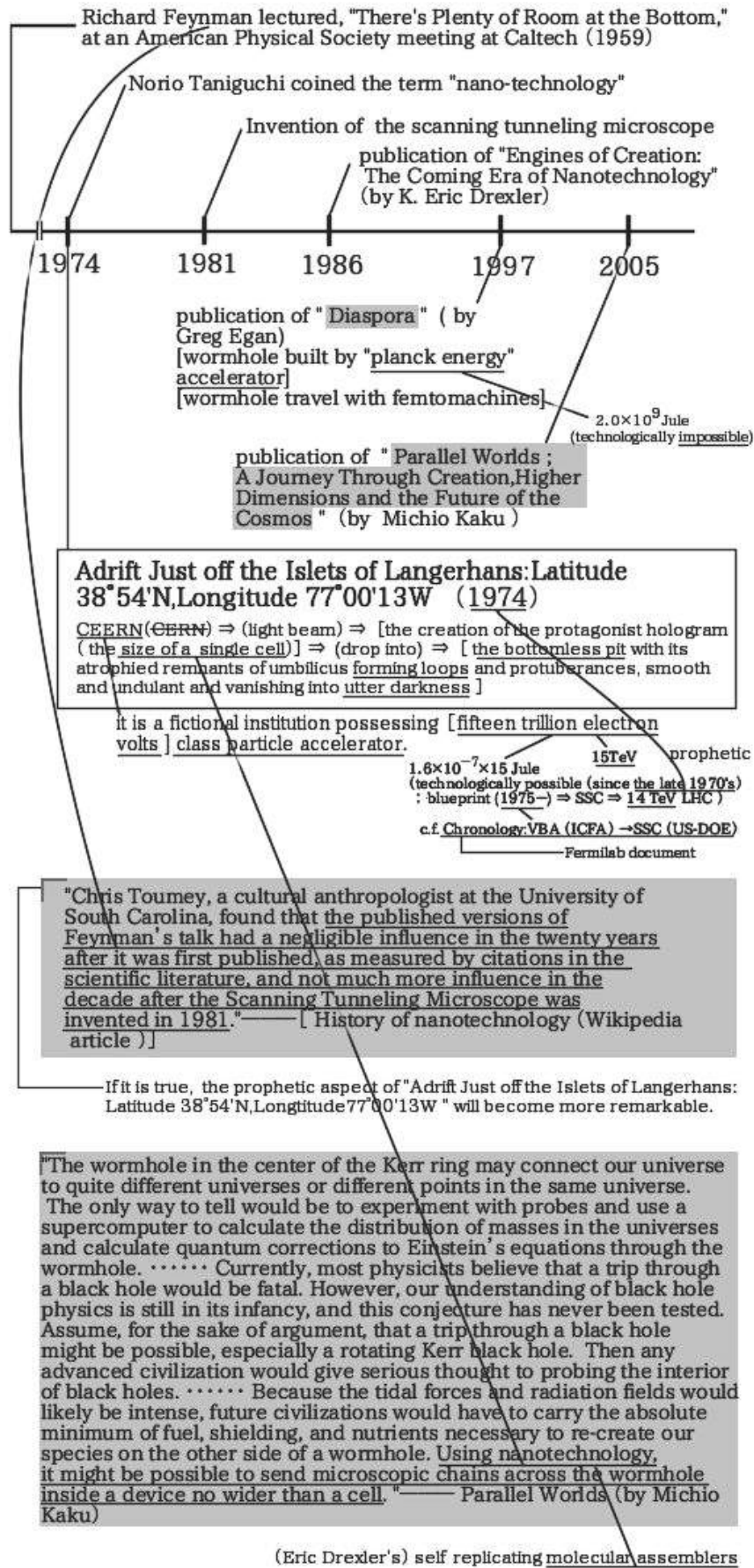
というものが

[文明再建の種子をナノマシンとしてワームホール越しに送るとの発想法]

と同じくものものであることにも[不気味さ]を感じさせる中(再建の種子としてのナノマシンが他所に送られるとの設定であり、その過程で[送り先の領域]が仮に[破壊・破滅]を見ないのならば、送り先の領域で何がなされうるのか、ということ指して筆者は「不気味である」と述べているのである)、本稿の後の段の内容をお読みいただければ、

[[トカゲ座のガンマ線バースト(Lac G-1⇒Lacerta G-1⇒Lizard G-1に由来する強烈な宇宙線)]で[アトランタ Atlanta などに残った肉体人]が死滅の道を進む、その過程でナノマシンで肉体人の脳はスキャンされたうえで人間は[別のもの]にすべて取り替えられる]

との主たる粗筋がたかだかものサイエンフィクション(merely a science fiction)の荒唐無稽なる設定では済まされない、表層面にての設定から離れて深層面にて「いかに(他の不快な文物らの内容と合わせって)意味深いものであるか」につきご理解いただけることか、と思う(それにつき疑問符[?]をつける余地などなからうとの話を本稿では全体として展開していく所存である)。



[ある程度の見識を蔵しているとの向きを想定して作成した直上図について]

上の実にもって込み入っていると図 — 印刷などされたうえでの検討がなされることを専らに想定しての図 — では年度順に次のことを英文にて端的に表記している。

■1974年:同年度、CEERN(CERNではない)の15TeV(15兆電子ボルト)加速器——今日のCERNのLHCに際立って近いとの加速器——を登場させる小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude 77°00'13W*『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』が世に出る。同小説作中では架空の実験機関CEERNを取り仕切る男によってそちらCEERNのビーム照射装置により主人公が[黒々とした渦を巻く底無しの臍(へそ)]の中へと[自身を極小化させた分身]との似姿でいざなわれるとの描写がなされる(:先覚性の問題として同小説が世に出た時期には[兆単位(TeV領域)加速器の登場可能性]のことだに専門家筋に顧慮されていなければ、また、加速器がブラックホールの類を生成するとも一切考えられていなかったと)のことがある——TeV領域加速器(兆単位電子ボルト加速器)の実現がはじめて顧慮されるようになったのは「加速器を強力な磁石の開発に繋がった超伝導技術の深化を受けてであろうところとしての」1975年以降であると先に米国フェルミ国立加速器研究所由来の公文書 **Chronology:VBA (ICFA) →SSC (US-DOE)**の内容を引き合いに解説を講じたことである——。にも関わらず、件(くだん)の小説作品は[極微ブラックホールによる惑星呑込みを描く他小説]との複合的連続関係を呈しつつ(それもまた奇怪なことであると先述なしている)、主人公の男が[ブラックホールとのアナロジーを感じさせるところ]へと兆単位の電子ボルト加速器運営機関のビーム照射でいざなわれていく様が描かれる——ちなみに加速器のブラックホール生成問題については、である。[太陽系サイズの超長大な加速器]をもってしてプランクエネルギーを極小領域に投入するのならばいざしらず、蚊が飛ぶ程度の運動エネルギーである兆単位の電子ボルトを蚊の1兆分の1の領域に投入するとのLHCのような最新の加速器ですらブラックホール生成がなされると考えられるようになったのはここ10数年、1998年提唱の余剰次元理論を受けての新規理論展開によるところであると専門の科学者らが押しのべて発言しているところとなる(その旨、細々と解説してきたのが本稿のここまでの内容となる)。そこを70年代の表記小説は(後の[理論動向の変遷]と[LHCの登場]とのことを双方占うように)兆単位の電子ボルト加速器の運営機関を「相応の式で」登場させているとの風を感じさせるようになっている——)。

■1981年:後のナノテクノロジーの概念の提唱につながった走査型トンネル顕微鏡(the Scanning Tunneling Microscope)が発明される。

■1986年:ナノテクノロジーとの概念の流布の役割を担った科学者K・エリック・ドレクスラーによる著作 *Engines of Creation: The Coming Era of Nanotechnology* 邦題『創造する機械』が世に出る(:ナノテクとの言葉それ自体は1974年に日本の東京理科大学に奉職する谷口紀男によって提唱されていたものの、一般に、分子アセンブリといったものと結びついたナノテク概念を深化かつ流布したのはエリック・ドレクスラーであるとナノテク史ではまとめられていること、先立っての **出典(Source)** **紹介の部 20-3**にて紹介したところである)。

■1997年:[ナノテク](ナノマシン)の応用どころか、それより遙かに小さい領域で作用するフェムトマシンをワームホール——プランク・エナジーを実現するためのものなのか、恒星系クラスの超長大な加速器にて人為構築されたとの設定のワームホール——の先に向けて(極小さゆえに放射や潮汐力に耐えうるものとしてであろう)投入するとの粗筋の小説『ディアスポラ』が世に出る。

■2005年:本稿の先だっの段で解説しているようにワームホールやカー・ブラックホールの先に潮汐力や放射に耐えうるシールド・コーティングを施したナノマシン



を送り込み、他世界にての文明再建の種子を播種するとのありうべき先進文明やりようについて論じた著作 *Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos* 『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』が世に出る。

以上、ここまで解説してきた時系列上の流れを受けて申し述べるところとして

[ブラックホールやワームホールについてはその[人為生成]が仮になせると想定されえてもプランク・エネルギーの加速器が要るとの観点以上は逆立ちしても出てこなかったであろう折柄]

[そもそももってブラックホールやワームホールの先へ送りえる(放射や潮汐力に耐えうる)との分子レベルの物質変換を可能ならしめる極小機械の概念さえ煮詰められていなかった折柄]

[通過可能なワームホールのことが 80 年代に科学者キップ・ソーンらに煮詰められることになった(本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 20-2](#) を参照されたい)との折よりかなり前に遡る折柄]

である 1970 年代前半に

[自身の極小の分身](再建の種子たるナノマシンを意識させるようなものでもある極小の存在)

を

[テラエレクトロン・ボルト(ここごく最近になってブラックホール生成可能性と結びつけられるに至った TeV 領域)クラスの「あまりにも LHC に近い」加速器(換言すれば、ここ最近になってブラックホールやワームホールの生成をなしうると理論家らが考えるに至った加速器 LHC にあまりにも近い加速器)の運営機関の助力]

によって露骨にブラックホールのアナロジーとなっていると解されるものに向けて投入するとの筋立ての小説が登場を見ていることは「奇っ怪」である。

(以上、支流からさらに分化しての細流に分け入ってとの按配になりながらもなしてきたグレッグ・イーガンの小説『ディアスポラ』にまつわる内容紹介の話から[プランク・エネルギー]の話に戻し)

さて、

[プランク・エネルギー・クラスの加速器が実現されればブラックホールに似たものが生成されるとのこと]

に関しては[哲学者]という人種にしては「実に科学的に練れている」

著作をものす向きであるとの心証を本稿筆者が抱きもしたとの向き(ジョン・レズリー John Andrew Leslie というカナダ人哲学者)に由来するところの書籍に「世間的に真っ当と看做されるかたちとして」言及 一手前が把握するところとしての「初期の」プランク・エナジーによるブラックホール生成の言及の例一 を見出せるとのことがある。



具体的には

ジョン・A・レズリー著 THE END OF THE WORLD the science and ethics of human extinction (邦題)『世界の終焉 今ここにいることの論理』(訳書は青土社刊行／原著は1996年刊行、訳書は1998年刊行)

との著作にも 一解説不十分なところがあるため見識を有さぬ人間が同著を見た場合に1998年以前(との刊行時期)からブラックホール生成可能性が一部で取り沙汰されていたと「誤解」しかねない内容か、とも思うのだが— [プランク・エネルギー(Planck Energy)を実現する加速器](あるいは技術革新が実現されての[プラズマ加速器]なる実現未達の技術)を用いることで、

「ブラックホールに似た状況でのビッグバン再現状況が実現しうる」(ブラックホールそのものの生成とはされず「ブラックホールに似た」ビッグバン状況の実現しうる)

との式で人類が滅ぼされることになりうるとの可能性論が(1997年のグレッグ・イーガンの『ディアスポラ』登場前の)「1996年から」唯・常識的な話柄にて言及されているとの格好となっているとのことがある。

続いて引用するようなかたちにて、である。

---

出典(Source)紹介の部 21-4



# SOURCE

## 21-4

本出典紹介部では THE END OF THE WORLD the science and ethics of human extinction (邦題)『世界の終焉 今ここにいることの論理』(訳書は青土社刊行／原著は1996年刊行、訳書は1998年刊行) にあつての [プランク・エネルギーを実現しうる加速器が建造されればそれによりブラックホールが人為生成されうる] とのことに通ずる部位よりの引用をなすこととする。

(直下、THE END OF THE WORLD the science and ethics of human extinction の邦訳版『世界の終焉 今ここにいることの論理』の19ページから20ページよりの中略なしつつもの原文引用をなすとして)

---

実験室でビッグバンが作られる?物理学者はこの可能性を探ってきた。二〇キロほどの物質——あるいはそれと等価のエネルギー——を、実際にはありえないほど小さな体積に圧縮することが必要だということが広く言われているが、宇宙論学者のアンドレイ・リンネは手紙をくれて、正しい数字は一〇万分の一グラムだと教えてくれた。とはいえ、とてつもない圧縮をしなければならず、こうして工作されたビッグバンは、独自の空間へと拡大する可能性が非常に高い。できたものは、我々から見れば、小さなブラックホールのようなものになるだろう。

---

(訳書よりの引用部はここまでとする)

(続いて、直下、THE END OF THE WORLD the science and ethics of human extinction の邦訳版『世界の終焉 今ここにいることの論理』の177ページから178ページ、[ビッグバン状況再演]がなされることにつき、アラン・グース Alan Guth といった物理学者らの論文内容が援用されながら[ブラックホール生成「的」状況]がもたされる可能性が言及されているとの部よりの原文引用をなすとして)

---

ファーリとグースは、さらに検討すると、どんな圧縮でも十分ではないということが示されるらしいと報告する。新しいビッグバンは先行する歴史がない高密度の泡で始まらなければならない、方程式は、いかなる実験室であってもそれはできないということを示すという。それでも「十分に常識を越えたバブル幾何学」であれば、この難点を乗り越えるかもしれない。一般相対性理論を量子化すると可能になる効果がそうかもしれない。ファーリとグヴェンによる第二の論文で詳細に展開された論点である。彼らは、新しく創造されるインフレーションを起こす前に「およそ一〇キロ」の質量をもつという状況では、GUT(力の大統一理論)規模でのビッグバン創成は「ありえないと言えるほど可能性が低い」と判断した。

他方、

「プランク規模に近いエネルギー規模では」、  
十分可能かもしれない。

…(中略)…

A・A・スタロビンスキーとY・B・ゼルドヴィッチはこう述べる。

何らかの物質あるいは量子場をもち、プランク長程度の半径( $10^{-33}$ センチ)をもつ、密度が特徴的なプランク密度程度の閉じた宇宙で始まるのが自然である。プランクの大きさから発達するには、インフレーション段階が必要になる。

一〇キロではなく、 $10^{-5}$ グラムという適切な値を認めても、ここには現実の危険があるだろうか。ファーリとグースは、我々が創

造する新しいビッグバンでは、「親に何の費用もかけないで」膨張する「子宇宙」の誕生になるにすぎないと述べている。「我々は自分たちが創造するかもしれない宇宙によっては滅びない」。というのも「幾何学がユークリッド的であるおかげで」、新しい宇宙はそれ自身の空間に膨張することになるからだ。我々にとってそれは小さなブラックホールのように見えるだろう。ただ二人の論文には、「はっきり断言はできない」とか、「可能性は排除できない」とか、「我々の議論全体は古典的な一般相対性理論の脈絡で行われている」といった気になる文言が見られる。一般相対性理論を量子化したらどんなことが我々にふりかかることになるのか、誰もわからないのだ。

---

(訳書よりの引用部はここまでとする)

(出典(Source)紹介の部 21-4 はここまでとする)

---

上にての訳書記述に見受けられるように、

[実験室でビッグバンが作られる? 物理学者はこの可能性を探ってきた。二〇キロほどの物質——あるいはそれと等価のエネルギー——を、実際にはありえないほど小さな体積に圧縮することが必要だということが広く言われているが、宇宙論学者のアンドレイ・リンネは手紙をくれて、正しい数字は一〇万分の一グラムだと教えてくれた。とはいえ、とてつもない圧縮をしなければならず、こうして工作されたビッグバンは、独自の空間へと拡大する可能性が非常に高い。できたものは、我々から見れば、小さなブラックホールのようなものになるだろう]

[ファーリとグヴェンによる第二の論文で詳細に展開された論点である。彼らは、新しく創造されるインフレーションを起こす前に「およそ一〇キロ」の質量をもつという状況では、GUT(力の大統一理論)規模でのビッグバン創成は「ありえないと言えるほど可能性が低い」と判断した。他方、「プランク規模に近いエネルギー規模では」、十分可能かもしれない]

とのことが「1996年」初出著作たる **THE END OF THE WORLD the science and ethics of human extinction** にて 一直上枠内表記が原文表記となるような式で— 記載されているとのことがある(その点、前段の引用部の方で[ビッグバンの再現状況がブラックホールと親和性が高い]とのことが述べられているわけであるが、ここでの話との兼ね合いで意をなしてくるのは続く箇所にての [プランク・エネルギー Planck Energy についての言及をなしている部] である)。

問題なのはそうしたブラックホール近似の状況、宇宙生誕直後の状況 —プランク・エネルギー規模のエネルギー(先に既述のように45リットルガソリンで車を駆動させ続けるに多少増すところがあるといったレベルのエネルギー)の超極微領域への投入による宇宙生誕の再現— が いかようにして問題視されだしたか、それが本稿にて取り上げてきた前言文物に影響を与えて

いると言えるか、それによって、不可解なる先覚的言及に対する説明がつくか、である(※)。

---

※[プラズマ加速器]というものにまつわる補足として

直近原文引用をなしたところの訳書『世界の終焉 今ここにいることの論理』にてはその p.153 にて

(原文引用するところとして)

「プランク規模のエネルギーとは、おおまかに言って  $10^{19}$  乗 GeV で、これはハットとリーズが宇宙線の衝突で放出されることがあるとした  $10^{11}$  ないし  $10^{12}$  GeV の一〇〇〇万倍ないし一億倍である。しかし、一〇年で一〇倍というのが続けば、 $10^{11}$  GeV とのエネルギーは、2100 年よりはるかに手前で得られることになる。すでに「プラズマ粒子加速器」という、粒子を加速する場——たぶん「脈動波」と呼ばれる急速に移動する干渉模様を生み出す二つのレーザー光線によって生み出される場——が今日の加速器の場よりも何千倍も強力になると提唱している人々がいる」

(引用部はここまでとする)

とのことが記載されている(同引用部に見るハットとリーズという人名は本稿にての **出典** (Source) 紹介の部 12 で「加速器リスクに対して[宇宙線にまつわる安全性検討手法]を案出したのは自分達である」と同男手ずから述べているとの典拠を挙げもした物理学者マーティン・リース ——後に長じて王立協会の会長—— および同マーティン・リースの同僚ピート・ハットのことを指す)。

上にて引いての書籍内記載は主には(本稿の先立っての段にて問題視したところの)[真空の相転移]リスクという以前から取り上げられていた加速器関連リスクを話柄にしての話の流れの中で記述されているとのものなのだが、加速器によるブラックホール生成「近似」の状況を[宇宙の再現]とのかたちで取り上げもしている、それも[将来ありうべき人類規模のリスク]に関わる問題として取り上げもしているとの 1996 年初出の書籍 THE END OF THE WORLD the science and ethics of human extinction にての同じくものことへの言及背景には

[未踏技術としての[プラズマ加速器](現行加速器より何千倍も強力な加速器たりうるもの)]

に見る技術革新が実現され、それによって[人間の手の届く加速器にて膨大なエネルギーの極微領域投入が観念されるとの予測]が 1996 年時点であったからだと解されるようになっている。

(プラズマ加速器というものについての補足はここまでとしておく)

---

その点、

「プランク・エネルギーの実現となると[太陽系サイズの加速器]が問題となるような本来的には遠未来の話であり、現行の人間に実現できるものではない」

として扱われてきた(と出典に依拠して細々と解説してきた)わけだが、その一方で、

「(現行にては未達の LHC 最大出力 14 兆電子ボルトに「極めて」近いものとしての) 15 兆電子ボルト —— プランク・エネルギーより遙かに低いエネルギーであるテラ・エレクトロン・ボルト —— の加速器を登場させてブラックホール生成への言及をなしているが如く小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』には尋常ならざる奇怪性が伴う」

との従前取り上げもしてきたとのことがある ( : 先にも述べているとおり、問題なのは(理論の地殻変動によって「その程度のエネルギー規模」「でも」ブラックホール生成がなされうるとここ 10 数年で考えられるようになったとの)「予見小説に見る 15 兆電子ボルト」(15×160.2nJ「ナノ」ジュール) と (従前、そこまで実現しないとブラックホール生成はないだろうとされていた)「プランク・エネルギー」(先に既述のように一単位で 1.956GJ「ギガ」ジュール)には差分がありすぎる、既述のように「ナノ・ジュール・スケールの蚊が飛ぶエネルギーの領域の話」と「ギガ・ジュール・スケールのガソリンタンクで車を走らせ続けるに相当するエネルギーの領域の話」では差分がありすぎるとのことである。その差分がことブラックホール生成可能性との点に関して既述の「余剰次元理論」(ADD モデル)が登場を見た 1998 年以降の理論展開にて意味を失うとされるに至ったとのことがあり、そうしたブラックホール人為生成のハードルを圧倒的に下げることになったとの「最近の」理論的帰結そのものを 1974 年にて予言して指し示すような小説 —『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』— が存在するから「ただごとではない」とのことになるわけである)。

同じくものこと、70 年代前半に兆単位電子ボルトでブラックホール生成の可能性をちらつかせていた小説があるとのことについてより深く掘り下げ、問題視したいと思う。

につき、直近引用の著作 THE END OF THE WORLD the science and ethics of human extinction 原著には無論、出典が付されており、そこからして、すなわち、出典として記載されている当該問題に関する論文の内容からしてこの身は確認している。

そうした確認対象としての資料内容に基づき、

(再引用なすとして)

「実験室でビッグバンが作られる? 物理学者はこの可能性を探ってきた。二〇キロほどの物質——あるいはそれと等価のエネルギー——を、実際にはありえないほど小さな体積に圧縮することが必要だということが広く言われているが、宇宙論学者のアンドレイ・リンネは手紙をくれて、正しい数字は一〇万分の一グラムだと教えてくれた。とはいえ、とてつもない圧縮をしなければならず、こうして工作されたビッグバンは、独自の空間へと拡大する可能性が非常に高い。できたものは、我々から見れば、小さなブラックホールのようなものになるだろう」

「ファーリとグヴェンによる第二の論文で詳細に展開された論点である。彼らは、新しく創造されるインフレーションを起こす前に「およそ一〇キロ」の質量をもつという状況では、GUT(力の統一理論)規模でのビッグバン創成は「ありえないと言えるほど可能性が低い」と判断した。他方、「プランク規模に近いエネルギー規模では」、十分可能かもしれない」

との 1996 年初出の書籍 THE END OF THE WORLD the science and ethics of human extinction (邦題)『世界の終焉 今ここにいることの論理』内の記述との絡みで「理論の登場の

時期的側面について」どういことが述べられるのか考えてみるべきであるにとらえている。

その点、まずもって（以下呈示の）[1990年初出の論文 — そちら内容をここまで引用してきた書籍 THE END OF THE WORLD the science and ethics of human extinction に出典として紹介されているとの論文 — ] の内容を問題視すべきであるにとらえている。

**IS IT POSSIBLE TO CREATE A UNIVERSE IN THE LABORATORY BY QUANTUM TUNNELING?**（『量子トンネル効果によって実験室にて宇宙をつくることは可能か』とでも訳すべき論文 — 同論文、表記の論文タイトルのグーグル検索エンジン上での入力でオンライン上で誰でも現時、PDF ファイル版を特定・ダウンロードできるようになっているとの論文 — となり、また、学術誌掲載年次・掲載頁は Nuclear Physics B339 (1990) 417-490 と掲載されているものとなる／著者らは往時にてマサチューセッツ工科大学所属の Edward FARHI および Alan H. GUTH となる論文でもある）

それでは「門外漢ながら」検証したうえで問題となるととらえた表記論文の内容を直下、引くこととする。

---

出典(Source)紹介の部 21-5



## SOURCE 21-5

プランク・エネルギーを極小領域で人為的に恣(ほしいまま)にするとのことによってどういうリスクが観念されると判じられてきたのか、1990年にあってみとめられる専門家思索 — [人間の再現しうる宇宙開闢（類似の状況）] について考察しているとの論稿に見る思索 — をここに取り上げることとする。

(直下、論文 IS IT POSSIBLE TO CREATE A UNIVERSE IN THE LABORATORY BY QUANTUM TUNNELING?冒頭頁冒頭部よりの抜粋をなすとして)

---

We explore the possibility that a new universe can be created by producing a small bubble of false vacuum. The initial bubble is small



enough to be produced without an initial singularity, but classically it could not become a universe - instead it would reach a maximum radius and then collapse .

(上記抜粋部に対する拙訳として)

「我々は偽の真空の小さなバブル(泡)を形成することで新たな宇宙が形成されうる可能性を模索している。「宇宙最初のバブル」は「宇宙最初の重力の特異点」なしに生成されるほど十二分に小さなものではない。しかし、それは古典的観点より見て、宇宙にはなりえぬもので、代わって、最大半径に到達しそれより崩壊する」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(続いて直下、表記の論文 IS IT POSSIBLE TO CREATE A UNIVERSE IN THE LABORATORY BY QUANTUM TUNNELING? 『量子トンネル効果によって実験室にて宇宙をつくることは可能か』の Conclusions の部、472 と振られた頁よりの抜粋をなすとして)

---

The inflationary universe model proposes that our universe grew from a tiny inflating region of false vacuum. We know, however, that the laws of classical general relativity imply that a bubble that grows large enough to become a new universe cannot be produced without an initial singularity. In this paper we have asked whether this requirement can be avoided by quantum tunneling. Unfortunately we do not have a definitive answer to this question, but we have obtained an expression for the tunneling amplitude that seems highly plausible, and we conjecture that it is a valid approximation . Thus, we are suggesting that quantum effects can very likely avoid the implications of the classical singularity theorems, and that the laws of physics as we know them permit in principle the creation of a new universe by human initiative.

(上記抜粋部に対する拙訳として)

「インフレーション宇宙モデルは我々の宇宙が[微少ながら膨張してきたとの偽の真空の領域]より成長したとのことを提案する。我々はしかしながら、古典的な一般相対性理論より導き出される法則らが新たな宇宙になるのに十分なる大きさに成長するバブル(泡)は「最初の特異点」なくして生成されえないことを知っている。本論文では我々はこの要請が「トンネル効果」によって避けられるとすることがありうるかどうか問うとのことをなした。不幸なことに我々はこの問いに明確なる回答を与えることができなかつたが、[かなりありうる]との按配にてのトンネル効果振幅にまつわる表現式を得ることができ、そして、これが適切妥当なる概算であろうと推察なすに至った。このように我々は量子効果が古典的な特異点理論の示唆するところを極めてありうべくも回避することを提案し、そして、我々がそれにつき知るところの物理学法則が人間のイニシアチブによる新たな宇宙の創造の原理的に許すものであることを提案するものである」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(さらに続けて直下、表記の論文 IS IT POSSIBLE TO CREATE A UNIVERSE IN THE LABORATORY BY QUANTUM TUNNELING?『量子トンネル効果によって実験室にて宇宙をつくることは可能か』の Conclusions の部、475 と振られた頁よりの抜粋をなすとして)

---

Even with this small probability, however, there might still be a large probability of an event of this sort occurring somewhere in a universe that has undergone a large amount of inflation. Thus, the possibility of a chain reaction by which one universe produces more than one universe is not obviously ruled out by this estimate . On the other hand, if we are talking about human-made universes, then a probability this small must be considered equivalent to zero. Thus the production of a universe at the GUT scale seems prohibitively unlikely, but it might be possible at energy scales approaching the Planck scale.

(上記抜粋部に対する拙訳として)

「小さき可能性しかない中、膨張の過剰なることを経験している宇宙にあってのいずこかにてこの種のことが生じているとの可能性は依然として少なからずあるかもしれない。このように我々の宇宙が一個以上の宇宙を生成することに由来するチェーン・リアクション(連鎖反応)の可能性は明らかにこの推察からは排除されるものではない。他面、我々が「人間の手による宇宙(の創造)」について考える限り、この小さき可能性はゼロに等しきものとして考えられなければならない。このような大統一理論(GUT)スケールでの宇宙の生成は途方もなくありえないことに見えるが、プランク・スケールに迫るとのエネルギー領域ならばありうるかもしれない」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source) 紹介の部 21-5** はここまでとする)

---

以上、**出典(Source) 紹介の部 21-5** と振っての部で取り上げた 1990 年にて学術誌に掲載された物理学者ら論文の内容から申し述べられることは、(和訳部にて付した下線部を基点にしてその通りの内容を有しているのか確認いただきたいところだが)、

「[最初の特異点](というもの)なくして[膨張する泡](なるもの)としての宇宙を形作るものとはなりえない」

「[最初の特異点]なくして宇宙を形作るものとはなりえないが、トンネル効果(というもの)の問題をそこにては考えるべきである」

「望ましくなきチェーン・リアクションの原因になることはありうるが、人間の作り出しうる宇宙に関してはプランク・エネルギー( **planck energy** )を実現しなければ、そうしたことが起こりうるとは可能性ゼロの按配に近しくも考えられない」

との趣旨の記載がなされていることである(その程度のことならば、相応の英語読解力を有した

人間ならば、表記抜粋の引用部と照合することで容易に確認できる([科学言語]の問題ではなく[文献的事実]という自然言語の問題として容易に確認できる)ことか、と思われる)。

また、さらに遡るところで問題視されるところとして以上のような論文(1990年初出の論稿 IS IT POSSIBLE TO CREATE A UNIVERSE IN THE LABORATORY BY QUANTUM TUNNELING?)の著者らと同じくもの面々が「1987年にて」

### AN OBSTACLE TO CREATING A UNIVERSE IN THE LABORATORY

との論稿 ——そちらもまたここまで問題としてきた書籍 THE END OF THE WORLD the science and ethics of human extinction に出典として紹介されているとの論文である—— を世に出しているとのことがある(：同論稿、『ラボラトリーで宇宙を造ることに伴う障害』とでも訳せよう同論稿にあっても表記の英文タイトル入力でもってグーグル検索エンジンを動かすことで誰でも入手できるPDF版をオンライン上にて特定できるようになっている。また、さらに述べておけば、同論稿の発表時の掲載元は学術誌 PHYSICS LETTERS B(核物理学・高エネルギー物理学分野の学術誌)の Volume 183, number 2となる)。

そちら論稿、問題としてきたイギリス人哲学者ジョン・レズリーの手になる著作 THE END OF THE WORLD the science and ethics of human extinction (邦題)『世界の終焉 今ここにいることの論理』に出典として紹介されているとの AN OBSTACLE TO CREATING A UNIVERSE IN THE LABORATORY の内容も下に引いておく。

---

出典(Source)紹介の部 21-5(2)



## SOURCE 21-5(2)

1987年にあってみとめられる専門家思索のありよう ——直上、出典(Source)紹介の部 21-5にて論稿 IS IT POSSIBLE TO CREATE A UNIVERSE IN THE LABORATORY BY QUANTUM TUNNELING?『量子トンネル効果によって実験室にて宇宙をつくることは可能か』(1990)にあつてのその申しようを引いた、(インフレーション理論の提唱者として知られる)アラン・グース Alan Guthら専門家の思索のありよう—— についてここに取り上げることとする。

(直下、オンライン上よりPDF形式版もダウンロード可能なところの AN OBSTACLE TO CREATING A UNIVERSE IN THE LABORATORY の左下の部に150と振られた頁よりの抜粋をなすとして)

---

To an observer in the true vacuum region the bubble wall is always inside the Schwarzschild horizon, and the newly created universe appears as a black hole. Only the earliest stages of the bubble evolution are in principle observable.

Taking these known solutions as a guide, it seems that the creation of a universe is necessarily associated with the production of a black hole. This, however, does not in principle present an insurmountable obstacle. Ordinary materials (e.g. stars) can collapse to form black holes, and it is possible at least to conceive of a laboratory setup that would produce a black hole.

However, there is one feature of the known solutions that must be avoided if we are to imagine creating a child universe - all of the solutions for which the bubble grows without limit have the property that the bubble is associated with an initial singularity, as in fig. 1. This singularity is a spacelike boundary to the manifold, where any past directed geodesic which intersects it terminates. Such a singularity cannot conceivably be produced in the laboratory, since it has no prior history whatever.

In the standard big bang model one hypothesizes that the universe originated from such an initial singularity, but we do not know of any initial singularities available in the universe today. (The black hole created in association with the child universe also has a final singularity — i.e., a boundary resulting in the termination of future directed geodesics. This singularity does not trouble us, however, since singularities of this type can be created by the collapse of ordinary matter.)

We would therefore like to know whether it is possible to avoid the initial singularity.

(拙訳として)

「観察者にとり「真の真空」の領域にての泡の壁は常にシュヴァルツシルト半径の中に位置しており、そして、あらたに生成された宇宙はブラックホールとして立ち現れる。泡の成長過程の最も初期の過程のみが原理的には観測可能となる。

案内板として知られる既知のこれら解法を取れば、

[宇宙の創造は必ずブラックホールの生成と関連付けさせられている]。

これはしかしながら、原理上、克服できぬ障害とはならない。

一般の物質(たとえば、恒星)はブラックホールを形成すべくも重力崩壊しえ、

[実験室設備についてもブラックホールを生成するとのことは少なくとも考える限り可能ではある]。

しかしながら、我々が子宇宙を創造することを想起するとできるのだとすれば、避けられねばならぬとの既知の解法らのひとつの要素がある、すなわち、泡(バブル)らが際限もなく成長する解法のすべては泡が図1にて示されるような「最初の特異点」(イニシャル・シンギュラリティ)と結びついているとの属性を持っているとのことがそうである。

この[特異点]は[それと交わるいかなる測地上の過去も終わりを迎える、との多様体に対する空間形状の境界]である。そのような特異点はそれがいかなる前史をも持たぬがため、考えられるところ、実験室で生成されるような類のものではない。

標準的ビッグバンモデルにてはそのような[最初の特異点]より宇宙は生じたのだと仮説設定するものなのだが、我々は今日の宇宙にてそうした[最初の特異点]らはいかなるものでも手の届くものとして存在しているとのことを知らない(子宇宙と結びついて生まれいずるブラックホールは[最後の特異点](ファイナル・シンギュラリティ)、換言すれば、未来に向けての測地線を向いた終点にて結実する境界線を持つ。この[特異点]の方はしかしながら、一般的な物質の崩壊にても生成されるとのものだから、我々を煩わされるようなものではない)。

従って我々は[最初の特異点]を避けることが可能かどうかを知りたい]

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source) 紹介の部 21-5(2)**は以上とする)

---

表記の抜粋部「そのみ」から問題視できるところとして、「1987年からして、」

[宇宙の創造はブラックホール生成と結びつけられるようなことだが、(ラボラトリーでの実験実施にあたり)克服できぬ障害とはならない。粒子加速器によって子宇宙の創造がなされうると考えた際にブラックホールを形成する重力崩壊が引き起こされうるとのことを考える限りは可能だが、そこで要請される[原初の特異点]のようなものは実験室で造られない。子宇宙とともに生まれいずるブラックホールは[終期の特異点]を持つが、[原初の特異点]のようなものではなく、我々を煩わせるようなものではない]

とのことが物理学者らにて述べられているとのことである(：気がかりとなるところは二点ほどである。一点目は[「1987年から」子宇宙の創造との過程でブラックホールが生成されるとされ、それが加速器実験と結びつけられているような節があること]であり、二点目は[ブラックホールの現実的生成の可能性については「煩わされるようなものではない」との申しようがなされたうえでそれを顧慮しないような申しようがなされ、[原初の特異点]と結びつく[際限なく成長する泡の生成](先に既述の[真空の相転移]のことであろう)ばかりに目を向けるとの申しようがなされているとのこと]である。そこから「本当に、」1998年の新規理論登場以降、それも2001年の理論展開を見るまでブラックホール生成が加速器で生成「されない」と断言されきったことにすら疑義を差しはさみたくなるようなことになるわけだが、科学界および権威らが一丸となって主張するところでは「まさしくもそういう論調が採用されている」ところとして「プランク・エネルギーを実現できるようなものでなければそうした業(ブラックホールの生成)は不可能である」との申しようが前面に押し出されてきたとのことがある(本稿にての[出典(Source) 紹介の部 5]、[出典(Source) 紹介の部 5]、[出典(Source) 紹介の部 21]、[出典(Source) 紹介の部 21-2]を参照されたい)。

以上、(**出典(Source) 紹介の部 21-5** および **出典(Source) 紹介の部 21-5(2)**と銘打って)内容抜粋してきた論稿ら、Edward FARHI および Alan H. GUTHら(アラン・グースの方はイン

レーション理論の提唱者の一人として著名な学者となっている)の手になる、

## IS IT POSSIBLE TO CREATE A UNIVERSE IN THE LABORATORY BY QUANTUM TUNNELING? (1990)

## AN OBSTACLE TO CREATING A UNIVERSE IN THE LABORATORY (1987)

が直近言及の問題となる書籍、1996年からして加速器機関によるブラックホール生成が今後ありうべき展開からありうるのではないかと表記しているとの書籍たる『THE END OF THE WORLD the science and ethics of human extinction』『世界の終焉 今ここにいることの論理』(訳書は青土社によって1998年に刊行)にあって認められる、

[実験室でビッグバンが作られる?物理学者はこの可能性を探ってきた。二〇キロほどの物質——あるいはそれと等価のエネルギー——を、実際にはありえないほど小さな体積に圧縮することが必要だということが広く言われているが、宇宙論学者のアンドレイ・リンネは手紙をくれて、正しい数字は一〇万分の一グラムだと教えてくれた。とはいえ、とてつもない圧縮をしなければならず、こうして工作されたビッグバンは、独自の空間へと拡大する可能性が非常に高い。できたものは、我々から見れば、小さなブラックホールのようなものになるだろう]

[ファーリとグヴェンによる第二の論文で詳細に展開された論点である。彼らは、新しく創造されるインフレーションを起こす前に「およそ一〇キロ」の質量をもつという状況では、GUT(力の大統一理論)規模でのビッグバン創成は「ありえないと言えるほど可能性が低い」と判断した。他方、「プランク規模に近いエネルギー規模では」、十分可能かもしれない]

との記述内容(出典(Source)紹介の部21-4)にあって書籍より上の通りにそのままに引用したところの記述内容)の背景にある資料(出典)であると判じられるようになっている。

さて、ここで本稿筆者が問題視しているのは  
[以下のような相関関係]  
に認められるところから、  
[問題となる1974年の小説の先覚性]  
が部分的にでも説明がつくか否かという問題である

1987年の学術誌掲載論文に見る主流派物理学者ら——インフレーション理論の提唱者として知られるアラン・グースら——の物言い(出典(Source)紹介の部21-5(2)にて引用のところ)：

「既知のこれら解法を取れば、  
[宇宙の創造は必ずブラックホールの生成と関連付けさせられている]。  
これはしかしながら、原理上、克服できぬ障害とはならない。  
一般の物質(たとえば、恒星)はブラックホールを形成すべくも重力崩壊を呈しえ、  
[実験室設備についてもブラックホールを生成するとのことは少なくとも考える限り可能ではある]。  
しかしながら、我々が子宇宙を創造することを想起するとできるのだとすれ



ば、避けられねばならぬとの既知の解法らのひとつの要素がある、すなわち、泡(バブル)らが際限もなく成長する解法のすべては泡が図1にて示されるような[最初の特異点](イニシャル・シンギュラリティ)と結びついているとの属性を持っているとすることがそうである。

この[特異点]は[それと交わるいかなる測地上の過去も終わりを迎える、との多様体に対する空間形状の境界]である。そのような特異点はそれがいかなる前史をも持たぬがため、考えられるところ、実験室で生成されるような類のものではない

標準的ビッグバンモデルにてはそのような[最初の特異点]より宇宙は生じたのだと仮説設定するものなのだが、我々は今日の宇宙にてそうした[最初の特異点]らはいかなるものでも手の届くものとして存在しているとのことを知らない(子宇宙と結びついて生まれいずるブラックホールは[最後の特異点](ファイナル・シンギュラリティ)、換言すれば、未来に向けての測地線に向けた終点にて結実する境界線を持つ。この[特異点]の方はしかしながら、一般的な物質の崩壊にても生成されるとのものだから、我々を煩わされるようなものではない)」

1990年の学術誌掲載論文に見る「同じくもの」主流派物理学者らの物言い(出典(Source)紹介の部 21-5にて引用のところ) :

「小さき可能性しかない中、膨張の過剰なることを経験している宇宙にあつてのいづこかにてこの種のことが生じているとの可能性は依然として少なからずあるかもしれない。このように我々の宇宙が一個以上の宇宙を生成することに由来するチェーン・リアクション(連鎖反応)の可能性は明らかにこの推察からは排除されるものではない。他面、我々が[人間の手による宇宙(の創造)]について考える限り、この小さき可能性はゼロに等しきものとして考えられなければならない。このような大統一理論(GUT)スケールでの宇宙の生成は途方もなくありえないことに見えるが、プランク・スケールに迫るとのエネルギー領域ならばありうるかもしれない」

2002年科学読み本に見る物言い(出典(Source)紹介の部 21-2にて紹介のところ) :

(直下、英国物理学者ポール・ディヴィス著の科学読み本『タイムマシンをつくらう!』(草思社)のp.120より「再度の」原文引用するところとして)

「従来の電磁気技術では、プランク・エネルギーは太陽系に匹敵するぐらい巨大な加速器を建造しないと獲得できないが、まったく新しい加速器技術が開発されれば、はるかにコンパクトな装置を用いて非常に高いエネルギーを得ることができるかもしれないのだ。またいくつかの理論によれば、空間の大規模な改変はプランク・エネルギーよりもずっと低いエネルギーで実現できるかもしれず、技術的にも見通しがつけられる可能性があるという。もし重力をほどほどのエネルギーで操作できれば、これまでにのべたような途方もない圧縮や加速を必要とせずにワームホールを作ることができるだろう」(:以上引用部に見る[空間の大規模な改変をプランク・エネルギーよりも遙かに低いエネルギーで許しワームホール構築を可能ならめる「いくつかの」理論]とは1998年に初出のADDモデル(先述の余剰次元理論)、そして、その改

以上の言辞を複合顧慮することでも、

「1980年代より「プランク・エネルギーを顧慮すると、」と主張されるかたちにてブラックホール生成と加速器が結びつけられていた——先にも述べたように科学界の公式発表上では「加速器(手の届く範囲の加速器)でブラックホール生成はなしえない、とのことに「なっている」——との節があるが、それは否定が先にあること、殊にプランク・エネルギーを具にしての否定が先にあることになっている、と見受けられるところである(ただし、科学界が一丸となって欺瞞をなしている可能性も否定はしない)。

そして、それがゆえに、

[1974年初出の小説が——プランク・エネルギーより遙かに僅少なものであったはずの兆単位の電子ボルトの一極集中によってブラックホール生成がなされるかもしれないとの流れにつながった——余剰次元理論登場「前に」CEERNの15兆電子ボルト加速器でブラックホール生成を臭わせていた]

とのことの奇怪性は否定できるとのものではない]

との物言いが至当であろう、と考えられるようになっている(：その点、[仮に科学界の「欺瞞」との観点で奇怪性が否定できる可能性が残置すると無理に考えても「他の要素からあまりにも危険である」とのことに変わりはない]とのことをこれよりさらに述べていくのが本稿とはなるのだが、とにかくものごととして、である—※—)。

---

#### ※多少、専門的な話を取り扱っての注記として

1998年のADDモデル(余剰次元理論)の登場後、プランク・エネルギーを基礎にしての質量( $M_p$ で表されるプランク・マスことプランク質量)からブラックホールの生成を従前とは別立てに考える思潮が出てきたとのことがある(：手前に関しては国内で欺瞞に非を鳴らすべくものLHC関連裁判(既述のように長期化しての中、泥沼・無為の領域に落とし込まれた節ある裁判)を実験機関相手にやっていた人間としてそういうこと「にも」裁判完遂に必要なレベルでは詳しくなっているとの背景がある)。

先に[事実C]と付してのことにまつわる出典紹介の段にて

[ブラックホール生成が2003年の研究機関報告書(CERN報告書)より従前、ありえないとされていたところが一転、ありうることと看做されて表記なされたこと]

とのことがあると紹介している(出典(Source)紹介の部3と振っての箇所がその長くもの複数文書よりの原文引用兼解説部となる)。

それにつき「2003年の」研究機関報告書(CERN報告書)よりの「再」引用を直下なすと、

( [ STUDY OF POTENTIALLY DANGEROUS EVENTS DURING HEAVY-ION COLLISIONS AT THE LHC ] (2003 年 CERN 報告書) にあっては同文書の下に 2 と振られたページよりの再度の引用として)

The second question we address is the possibility of creating dangerous objects associated with gravitational interactions. A similar question was also discussed in the RHIC report with the conclusion, expected by ordinary dimensional analysis, that such gravitational effects are suppressed by inverse powers of the Planck mass  $M_p$  and are, therefore, negligible. Recently, however, there have been suggestions that  $M_p$  is not the right parameter to use in the analysis because it does not determine the fundamental scale of the theory. These models contain extra compact space dimensions [4], whose size may be much larger than  $M_p^{-1}$ , in fact as large as the inverse of a few TeV.

(拙訳として)

「我々(抜粋元文書 STUDY OF POTENTIALLY DANGEROUS EVENTS DURING HEAVY-ION COLLISIONS AT THE LHC の執筆陣たる案件検討に関わった CERN 関係者ら)が的を絞ったところの第二の疑問は[重力相互作用に関わる危険な物体ら] ( dangerous objects associated with gravitational interactions ) が生み出される可能性である。同様の疑問については[RHIC にまつわる報告書]にあって議論されており、その議論は [そのような重力における効果はプランク質量( $M_p$ )の反対の力らによって抑えられるところであり、従って、無視できるものである] との[一般的な次元にまつわる解析]によって期待されるところの結論を伴ったものであった。

しかしながら、今回にあっては、「 $M_p$ (プランク質量)はそれが理論にあっての基礎的基準を決定しえないとのことで分析にて使用すべき適切なパラメーターにならない」との提案が存在している。

それら(理論上の)モデルは「プランク質量の逆数( $M_p$ のマイナス1乗)より大きいかもしれない、実際に数 TeV(テラエレクトロンボルト;兆単位の電子ボルト)の逆数( the inverse of a few TeV )と同じくらいのサイズかもしれない「余剰の」小さくまとめられた空間次元」のことを含意するものである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

普通の門外漢から見れば、上の研究機関発表資料(CERN 発表資料)、何を書いているのか、理解できないようなものであろうとも思われるのだが(見れば、一目瞭然のことか、とは思う)、同資料の同じくもの引用部、

「[従前のプランク質量(というもの)にまつわる理解、テラエレクトロンボルトを遙かに凌駕する規模でのプランク質量]が「余剰次元にまつわる新規理論」のために意味をなさなくなったために、プランク質量を基礎にして算出していたブラックホール生成の必要条件(ハードル)が従前よりも緩くなった」

とのことを書いているとのものとなる。

にまつわつての具体的な数値例としては

[  $M_p \sim 10^{19} \text{ GeV}$  (プランク質量は[10の19乗]×10億電子ボルトである)]

とのところが

[  $M_p \text{ down to } \sim 1 \text{ TeV}$  (プランク質量は1兆電子ボルトまでダウンして見るべきものである)]

とあいなつたため(プランク・スケールのハードルが余剰次元のために低くなつた)、ブラックホール生成が可能になつたなどとの申しようがなされているわけである(：「ブラックホールの質量(BH Mass)がプランク質量  $M_p$  を凌駕することになるため、ブラックホールが生成されることになるといった見立てが呈されるに至つた」との言いようの資料も読み手が情報収集に貪欲ならば特定できようか、とも思う)。

については、インターネット上より容易に確認できるところの PDF 資料にあつては、

### **Black Holes, Extra Dimensions & the LHC**

というタイトルのプレゼンテーション資料(表記の文書タイトル名をグーグル検索エンジン上で入力すれば特定できようとのものでバーミンガム大にての高エネルギー物理学(HEP; ハイ・エナジー・フィジックス)関連のセミナー HEP Seminar - University of Birmingham に供されたロンドン大の関係者の手によって作成の資料)にての p.3 の末尾に見る、

**$M_p \sim 10^{19} \text{ GeV}$  ( $\Rightarrow$  hierarchy problem)「プランク質量( $M_p$ )は10の19乗ギガ・エレクトロン・ボルトより(階層性問題)」**

との記述および同資料の Extra Dimensions & The Planck Scale ([余剰次元とプランク・スケール])と付されてのセクションにあつての p.12 の末尾に見る、

**Perhaps we can bring  $M_p$  down to  $\sim 1 \text{ TeV}$ 「多分、我々はプランク質量( $M_p$ )を1兆電子ボルトの領域に落として見ることができる」**

との記述からまずもつての文書裏付けを得ることができる —— 読み手が当該問題について精査した場合、TeV 領域をしてプランク・スケールと表する論文に出会うことも多かろうか、と思うが、その背景にはここに述べているようなことがあると解されるようになっている —— )

(以上をもって専門的な話に分け入つての注記の部とした)

---

ここまで書き進めてきたところで、である。「本題たる指し示しに入る前にいまひとつ申し述べておくべくことである」との問題意識の程を明示し、そして、頁をまたいで少なからずの紙幅を割きもして取り扱つてきたとの、

**[プランク・エネルギーを実現しえなければ、加速器によるブラックホール人為生成はなされないとの申しようが従前よりなされてきたとのことにまつわる補足の部]**

を終えることとしたい。

**(「長くもなつて、」のプランク・エネルギーについての解説部をここまでとする)**

# 加速器実験特性に通ずる予見的物事ら、そして、その他奇怪なる予見物事ら、それらの間に横たわるある種の執拗性の問題 に関して「まずもって」摘示するところとして

(最前の段の内容を振り返ることからはじめるとし、)

直前部までの「長くもなつての」プランク・エナジーに関する(補つても)解説部を終えたところで振り返りをなす。

本稿にあってはこここれに至るまでの段にて

1974年初出小説『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』

がいかに問題になるのかについて次の観点からの考察を加えてきもした。

(出典(Source)紹介の部11から出典(Source)紹介の部14にて呈示の出典に依拠して解説してきたことについて)

「70年代刊行の小説『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』にあっては

「後の日のLHCに際立って近しい兆単位電子ボルトを実現する欧州加速器(パフォーマンスといったレベルで往時のCERN加速器ISRに対して出力比200倍を超えるかたちで現時LHCに近しいとの欧州加速器)によるブラックホール生成を臭わせる露骨な言及」(それは「兆単位の電子ボルトの一極集中によるブラックホール生成」が余剰次元理論による登場のために観念されるようになるよりも「かなり前」のことであるために時期的に奇怪.)と判じられるとの「予見的」言及でもある)

が作中にてなされているとのことで問題となるのだが、そちら小説の先覚的言及に関しては加速器にまつわるリスクとして90年代に入る前から既に問題視されていた、

[異常核物質の生成]  
[真空の相転移の発生]

という他のリスク要因を巡る議論が影響を与えたとはいえられないようになってもいる(であるから、先覚的言及に伴う奇怪性は引き続き拭い去れぬところとして残置することになりもする)」

(⇒70年代から「ベバラックという複合型加速器による異常核物質(分子における異性体(isomers)との相似性から density isomers とも呼ばれていたところの Abnormal Nuclear Matter)の生成のリスク——地球崩壊にまつわるリスク——」が全く部外に漏れることなく加速器実験関係者ら身内だけで取り沙汰されたとのことがあったと往時、加速器実験に携わっていた物理学者による述懐がなされてもいるのだが、そちら述懐されての懸念は1974年小説にあってその先覚的言及が問題となる「ブラックホール生成問題」とは異質なものと見受けられるよう



になっている。また、80年代に首をもたげだしたとされる[加速器による真空の相転移現象発生にまつわるリスク——地球どころか銀河系レベルの崩壊を引き起こしかねないとされたリスク——]について「も」基本的には1974年小説にてその先覚的言及がなされていたとことが問題となるブラックホール生成リスクと異質なものであると見受けられるようになってきている(そこにはプランク・エネルギーとテラエレクトロン・ボルトの差分といった問題も関わっている)。それがゆえに[余剰次元理論]というものの登場によって[兆単位の電子ボルトの加速器によるブラックホール生成はありうる]と考えられるようになったとの1998年以降(殊に2001年以降)にこそ問題となりえたブラックホール生成問題のことを1974年に[兆単位の電子ボルトの欧州加速器を登場させつつ]臭わせている70年代前半の小説やりようには説明のなしがたさが伴う——先覚的言及の奇怪性が残置することになる——)

(出典(Source)紹介の部18から出典(Source)紹介の部20-4(2)にて呈示の出典に依拠して解説してきたことについて)

「表記の小説『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』にあつては

[ナノマシンの活用との観点で「後の日になって」呈示されるようになった科学予測(先進文明やりようを想定しての科学予測)をイメージさせることまで極めて隠喩的に描いている節があること]

及び

[時期的に不自然な折にホログラムとブラックホールの関係に関する言及をなしているように見えること]

にまつわる「加えての」奇怪性もが見てとれるとことがある」

(⇒80年代以降の理論動向・科学的発想の登場を受けてこそ成り立ちえる[ワームホールやブラックホールの類に他世界に向けての文明再構築の種子たる極小機械(ナノ・マシンあるいはフェムト・マシンの類)を送るとの先進文明やりようまつわる予測](90年代より登場しだしたとも解されるようになってきている予測)を問題となる不自然なる小説は70年代に既に言及している節がある(近年にあつてはブラックホールどころかワームホールの類まで生成する可能性が主流科学者らによって認容されだした(出典(Source)紹介の部20-2)とのLHC、そのLHCと極めて近い規模の加速器——(CERNならぬ)CEERNの15兆電子ボルト加速器なるもの——を不可解・不自然に登場させている70年代小説ではそうした加速器を運営する欧州研究機関のビーム照射行為によって[極小のコピーと化した主人公]が[黒々とした渦を巻く底無しの穴]にいざなわれていくとの粗筋が具現化を見ているわけだが、といった描写は[極小のコピーと化した存在]となると後の科学予測に見る[ワームホールやカー・ブラックホールの先に[文明再建の種子として投下される極小機械]]といったものと親和性が高いように映るところである)。また、80年代(あるいは早く見積もっても1978年以降)にこそそういう観点が呈示しえたところとしての[ブラックホールとホログラフィー的性質を結びつける発想法]についても70年代に言及してしまっている節があること、そこにも1974年登場の小説は奇怪なものである)



(出典(Source)紹介の部 21 から出典(Source)紹介の部 21-5(2)、および、よりもって従前の段の出典紹介部にて呈示の出典に依拠して解説してきたことについて)

「表記の小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』については奇先覚性の問題をよりもって批判的に検討するうえで

[プランク・エネルギーによる人為ブラックホール生成にまつわる(数十年前から存在していたと解されるようになっている)可能性論]

のことを顧慮する必要がある(と判じられるところとなっている)。

そうした問題意識からプランク・エネルギー投下によるブラックホール生成議論の始原期およびそのありようを顧慮しても「奇怪なる」先覚性の問題は残置するとのことがある」

(⇒プランク・エネルギーを実現すれば、ブラックホール類似の状況をもたらす宇宙開闢・宇宙拡大の連鎖反応(チェーン・リアクション)をきたしうるとの言いようが 80 年代からしてなされている節があるが、問題となる 1974 年作品、本来のプランク・エネルギーより遙かにエネルギー規模が劣っているとのテラエレクトロンボルト(「兆単位電子ボルト」)、そちら規模の 15「兆電子ボルト」級加速器——たかだかもの蚊の飛ぶ運動エネルギーを蚊の一兆分の 1 の領域に投入することになるとの加速器——とブラックホールとの結節性を仄めかしているとの作品ともなり、それがゆえに、(プランク・スケールというものの意味合いが 1998 年の余剰次元にまつわる登場によって地殻変動を起こす前から)兆単位の電子ボルトによるブラックホール生成を示唆しているとの式で不気味な作品であることになる)

以上、端的に振り返りをなしたところで、である。

これから後の段では「本稿ではその方向性でのことを重んじて問題視する」と先立って申し述べもいたとのこと、

「[権威]が[特定の事]を述べているとの[事実]そのものが

[理論の歴史的登場時期を示す資料]

と共に存在しているとのことがある。

また、[権威]が同じくもの[特定の事]を述べていることに関して存在しているとの、

[理論の歴史的登場時期を示す資料]

がそれ以前はいかなる者でもそういうことが述べることはできないことをそれ自体で指し示しているとのことがある。

他面、そうしたはきと見出せるとの権威サイドの特定の申しようの「登場経緯」とは全く平仄・辻褄が合わない、にも関わらず、登場時期の問題を除いてその内容だけに着目する限りは、そうした権威申しようと「不気味」かつ「異常無比」な形で平仄・辻褄が合うとのことら、言葉を換えれば、権威が後の世にてこれはこうであろうと事細かに説明してきたことと一致しているとのことが史的に見て長期にわたって、

[権威の申しよう自体と全く関係ないところ]

に数多存在していること、そして、(一呼吸置き)、そして権威が科学的裏付けを与える前から存在しているとのことらが「相互に」「多重的に」絡み合っ密結合関係を呈しているとのことが現実にある」

とのことと関わること、しかも、異常性が際立ちもするとのかたちで関わることについて専心しての指し示しをなしていくための部に踏み込むことになると申し述べる (それはつまるところ、本稿

の本題によろやと足入れするとのことでもある)。

起承転結の「起」の段をようやく終えもしたとの中、「承」の段に移行する前に「長くもなるも、」申し述べておきたきところとして

ここまでにあつては

**Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』**

における先覚性のことばかりを問題視してきもしたわけだが(直上直近の振り返つての部も「また然り」となる)、お忘れいただきたいくはないのは、筆者が本稿こここれに至りまでの流れにて問題視してきた先覚性としては

**Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(1980)**

との作品にみとめられる先覚性のことも[極めて問題になる]とのことである。

その点、向きによつては

**『たかだかも小説の先覚性を何故に問題視しているのか。この者、おかしいのではないか』**(あるいは一歩だけ歩み寄りの余地ありもしての内面ありようをおもんばかつて**『この者、物事を気にしすぎなのではないか』**でもいい)

などと思われるかもしれないが、続いての段に移行する前にあつて強くも断つておきたいのは

「先覚性それ自体が尋常一様ではないものであり、また、かつ、それが「我々の脳髓を狙う銃座の所在地」を克明に示すが如き性質のものである」

とのことがあるとのことである。

**『言い過ぎだ』**

などとお考えになられた向きは[次のこと]の意味合い——時期・年次という時系列に重きを置いての意味合い——を考えるとよい。

1. 物理学者ら(ノーベル賞級の物理学者を何人も含んでの物理学者ら)は 2001 年に至るまでブラックホールが加速器によって生成されるとの可能性それ自体を[唾棄すべきもの]と否定していたし(ノーベル賞を後に受賞することになった物理学者らが関与しての加速器実施研究機関らの報告書らは[今後ありうべき将来の加速器によるブラックホール生成可能性]それ自体を狂人の妄夢の如きもの — pipe dream— であると締めくくっていた)、そもそも、加速器によるブラックホール生成の可能性が部外者によって問題視されるようになったのも 1999 年以隆とのかたちと

なっている(出典(Source)紹介の部1)。

2. 今後運用開始されることが確定的となっていた加速器 LHC によって「何百万もの」極微ブラックホールが生成される可能性が(1998 年提唱の ADD モデルという新規理論の流れを受けて)2001 年より科学界にて認容されるようになる —— 将来の(2001 年から見ての将来の)LHC 運用開始によって生成される極微ブラックホールらは[即時に蒸発する安全なブラックホール]と目されてのもののだが、とにかくも、「何百万もの」極微ブラックホール生成の可能性が認容されるようになる(出典(Source)紹介の部2)——。

3. 1999 年から 2001 年の現実世界の動向から打って変わって 20 年先立つところの 1980 年。その折、世に出た小説作品 Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』では[加速器敷設型核融合炉にて人類に引導を渡す大量の極微ブラックホール(200 万個の極微ブラックホール)が生成される]との筋立てが具現化を見ており、そして、[生成されたブラックホールらはホーキング輻射により蒸発するから安全であるとの逃げの強弁が生成元の欧州核融合炉運営陣になされる]との筋立てが具現化を見ている(出典(Source)紹介の部4)にての引用部らを参照されたい)。

4. LHC 計画が CERN 内部にて「正式に」スタートの承認を受けたのは 1994 年であると発表されている。それにまつわる場所として 80 年代というのならばいざ知らず 1980 年ジャストでは LHC の建設計画はなんら形をなしていなかったと判じられるようになっていたとある。

(:LHC に関する「現行の」英文 Wikipedia[ Large Hadron Collider ]項目にあつては Design と付された節にて

“**The 3.8-metre (12 ft) wide concrete-lined tunnel, constructed between 1983 and 1988, was formerly used to house the Large Electron-Positron Collider.**”(訳として)「幅 3.8 メートル(12 フィート)のコンクリートによる直通トンネルは 1983 年から 1988 年の間に LEP(ラーヂ・エレクトロン・ポジトロン・コライダー; [大型電子陽電子加速器]と日本語表記される LHC の前身となった加速器 LEP)を収容すべくも前もって掘られていた」

との記載がなされていもする(なにぶんウィキペディアという内容易変性を伴う媒体のことであるので記述内容の残置については請け合わない)。

などとの流布されたところのウィキペディア表記を目にすると

[早くも LHC 計画が 80 年代「以前」から進んでいたのでは?]

どのように勘違いする向きもいるかもしれないが、はきと述べられるところとして、そうではない。

上の引用部に見る 80 年代前半に遡るところのトンネル掘削の挙は先行する加速器 LEP(大型電子陽電子加速器)のための挙であり、(そちら LEP を LHC の如きものに焼き直そうとの観点は従前よりあったとされるころだが)、14 兆電子ボルトの極小領域投下を実現する LHC 計画のための具体的営為が 80 年代初年度以前より着々と進んでいたわけ「ではない」(但し、構想として [1984 年]より LHC に向けての観点が呈示されていたとのことがあり、については本稿の後の段でも関連資料を挙げることになる —— 具体的には出典(Source)紹介の部 36(2)にて関連資料を挙げる——)。また、さらにもって述べれば、数十兆単位の電子ボルトを実現する超巨大加速器の「80 年代の」構想としては米国にての SSC 構想の方

が加速器実験に携わる者らの本命になっていたとのことがある)。

同じくものこと、LEPトンネルがLHCに転用されたとのことについては英文 Wikipedia [ Large Electron-Positron Collider ] 項目にあつて現行、**“LEP was a circular collider with a circumference of 27 kilometres built in a tunnel roughly 100 m (300 ft) underground and passing through Switzerland and France. It was used from 1989 until 2000. Around 2001 it was dismantled to make way for the LHC, which re-used the LEP tunnel.”** (訳として)「LEPはスイスからフランスにかけての地下おおよそ100メートル(300フィート)に構築された円周27キロメートルのトンネルに存在する円型加速器であった。同加速器は1989年から2000年にかけて運用された。2001年から同加速器のトンネルを再利用すべくものLHCに途を譲るべくも同LEPは解体されていった」と記載されているとおりの事情がある。

それにつき、本段にての本箇所が本稿執筆をほぼ終えた段階にての付け加えての表記だからこそ、(かなり後の段の出典紹介部についてもピン・ポイントに指摘できるところとして)、本稿にての**出典(Source)紹介の部 36(2)**の内容を確認されればお分かりいただけようが、  
[LHC計画それ自体が(1984年からかたちをなしていた事前構想ありようを受けて)CERN運営陣によりやうやう正式に承認を受けた]のは1994年のこととなりもしている——米国にて進んでいたSSC構想の破綻確定を受けての節あるところとしてそうなりもしている——。といった中、そう、LHCの建設計画がLEPトンネルを引き継いで利用する(上のウィキペディアからの引用部に見るようにLEPトンネルを引き継いで利用する)とのかたちで1994年に「正式に」スタートの承認を受けた後、工事の着工・完遂を見て、LHCがようやく運転開始に至ったのは2008年9月10日であるとのことがよく知られており、(その後、運転開始直後のヘリウム漏出事故というアクシデントを経て)、LHC実験が本格始動を見始めたのは2009年11月下旬となっているとのことが流布された実験経過となっている(:同点、LHCの実験始動時期については基本的なこととして英文 Wikipedia [ Large Hadron Collider ] 項目の記述を引くだけで十分ととらえているのでそちら記述を引いておくこととする(CERN公式ウェブサイトより単文ばらばらの説明の引用をもなせたが、それに代えて、ウィキペディアの史上最大の実験のこれまでの経緯についてまとめた部よりの引用を續いてなしておくこととする)。以下、「現行の」英文ウィキペディアの[LHC]関連項目よりの引用なすとして**“The LHC went live on 10 September 2008, with proton beams successfully circulated in the main ring of the LHC for the first time, but nine days later a faulty electrical connection led to the rupture of a liquid helium enclosure, causing both a magnet quench and several tons of helium gas escaping with explosive force. The incident resulted in damage to over 50 superconducting magnets and their mountings, and contamination of the vacuum pipe, and delayed further operations by 14 months. On November 20, 2009 proton beams were successfully circulated again, with the first recorded proton — proton collisions occurring three days later at the injection energy of 450 GeV per beam.”**(訳として)「LHCは2008年9月10日から、陽子ビームをLHCにての中心となるリング部にあつて成功裡に巡回させるとのかたちで稼働状況に入ったが、その九日後、電気接続にての問題によって液体ヘリウムの封入部に断

裂が生じ、加速器使用磁石のクエンチと爆発の元となる大量のヘリウムの漏洩を見た。同出来事は計 50 の超電導磁石およびそれらの据え付け構造部の損害、真空状態にある管の汚染を結果的にもたらすこととなり、さらに進んでの可動を 14 ヶ月遅延させることになった。2009 年 11 月 20 日、450GeV (4500 億電子ボルト) のビームの照射の後、三日後、最初の陽子・陽子ビームの衝突にて陽子ビームの再巡回が成功裡になさしめられることとなった」(訳を付しての引用部はここまでとしておく)。

5. 上の 4. の部にて言及しているように(1984 年から出されていた青写真としての構想が具体案に結実し)1994 年に建設スタートの正式なる認可を受けてから LHC が完成を見て[運転開始]を見たのは 2008 年下半期(9 月 10 日)であるわけだが、(故障期間を経て)、LHC が本格的スタートを見たのは 2009 年年末であると摘示できるようになっている。

対して 1980 年にあつて初出の作品である Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』、すなわち、

[欧州にての加速器敷設型核融合プラントによる極微ブラックホールの生成(および、それに次ぐ人類の終焉)を描く作品]

となっている同作では ——そこに着目して欲しいところなのだが——「2009 年年末から 2010 年にかけての」世界の崩壊プロセスが描かれている(本段が本稿執筆をほぼ終えた段階にての付け加えての表記だからこそ、(かなり後の段の出典紹介部についてもピン・ポイントに指摘できる場所として)、本稿にての後の段の補いもしての **出典(Source)紹介の部 110** の内容を確認されれば、完全にその点についてご理解いただけるであろう)。

以上、1. から 5. を通じて述べられることは、である。

[欧州加速器(正確には加速器敷設型核融合プラント)によるブラックホール生成]

を後の理論動向の変転に先駆けて先覚的に描いているとの「1980 年初出の」作品である Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』に関しては

「当該作品の刊行年次たる 1980 年から見もして「どういうわけなのか」30 年近く後の「2009 年年末から 2010 年にかけての」加速器(加速器敷設型核融合プラント)生成のブラックホールによる崩壊のプロセスを描いているとのことがある。そして、そのことが「2009 年年末の」LHC の本格的運転開始と時期的に平仄が合うようになっている」

とのことである(以下呈示の図も参照されたい)。



## Thrice Upon a Time (1980)

(邦題『未来からのホットライン』)

setting seen in the [1980 released] fiction

2009 ————— 2010

1980年初出のフィクションThrice Upon a Timeに見る作中設定は（小説刊行時期30年後の）2009年の年末から2010年年初にかけての作中世界で「ブラックホール生成による破滅をもたらす挙」が問題となるのものであった。

black holes factory  
& extinction of mankind

## LHC

2008 ————— 2009 ————— 2010

September 10                      November 20

1980年という[問題となる小説]の刊行時期にあつては計画の具体案がまとまっていなかったとのLHC計画だが、後、長期の前準備段階を経て結果的にLHCの運転は2008年9月10日にスタートを見、（その直後のヘリウム漏出事故を受けての1年の停止を経て）、2009年年末（11月）より同LHCは本格運転されることとなった。そうした2009年年末よりの本格運転開始とのことに着目すれば、LHC実験は時期的観点から見た上でも（2009年年末から2010年年初の世界を描く）1980年初出の小説と際立っての類似性を感じさせるものとなっていると言える。

読み手貴殿が[正気]であり、かつ、懐疑的精神を有しているのならば、以上、1. から5. のことの意味性 ——「当初、蒸発すると生成元に強弁されることになった」何百万のブラックホール生成にまつわる先覚的言及に関わるところの意味性でもある—— について考えた際に次の2つの可能性について「まずもって」思いを馳せることか、と思う。

第一。「書き手たるこの者（本稿筆者）が真っ赤な嘘を吐いている」（であるから[あまりにもできすぎた偶然などそもそももって「ない」][事実無根である]）

第二。「書き手が本当のことを書いているとしても、それでも何らかの「常識的」説明が付けられるはずである」

仮に、である（この段階では「仮に、」と便宜的に付しておく）。以上、2つの可能性が容れ



られないようになっており、代替するところとして、

「書き手たる筆者(本稿筆者)は主観などの夾雑物が介在することなくもの万端遺漏なくもの[記録的事実](摘示対象の選択それ以上には話者主観が介在することなき事実)のみを伝えている。

そして、LHC 実験始動時期にまつわる 30 年近く先駆けての先覚的言及(2008 年 9 月 10 日にスタートを見たも 2009 年年末まで本格稼働をなすことなかった LHC のことを想起させるように「1980 年から」30 年近く先の 2009 年年末から 2010 年年初を作中舞台としているとの先覚的言及)、ブラックホール生成議論動向にまつわる 20 年先駆けての先覚的言及(蒸発されると力弁されての何百万もの極微ブラックホールの生成が 2001 年より認容されだしたとのことにまつわって「1980 年から」20 年近く先駆けての先覚的言及)をなしているとの当該の小説——Thrice Upon a Time。同作、邦題たる『未来たるホットライン』からもそのことが「半ば」押し量れるように[破滅の未来の世界から人類を救うべくもの過去改変のための通信がなされる]との筋立ての小説でもある——に見受けられるまさしくもの先覚性に伴う奇怪性も常識的説明ではなんら払拭なされえないようになっている(なってしまうている) 」

とのことが厳としてそこにある場合はどうか(「常識的」などの言葉を[このような世界]で殊更に使う・使いたがる筋目・筋合いの人間に対しては本稿筆者自身、[含むところが大きるところとしてある]のだが、といったことは置いておいて、とにかくも、「常識は一面で重んじられるべきである」との[体裁]をも本稿では敢えても採用しての話をなしていること、断っておく——当然にそれが自身の訴求に有効有用であろうとの判断があるからそうしているのである——)。

読み手(たる貴殿)が[正気]の人間ならば、上の問題提起をもってしてそれがいかほどに重要なのか、一面でお分かりになられるか、と思う。

そして、実際にここでの話はまさしくその通りのもの(筆者が問題視している通りのもの)となっている(とこの段階からして強調しておきたい)。

第一。(冒頭からそのように強くも断って申し述べてきたことであるが)本稿では[確とした事実]のみを問題視している。そして、この場合における[確とした事実]とは要するに、

特定の公的資料・古典および近現代の著名文物ら[流布されての(歴史的)記録]にこれこれこういう記載がなされているとの[文献的事実](**Philological Truth**)として残っている、あるいは、[流布されての「映像的」記録]として尺何分の映像作品の再生パートこれこれの部にて再生確認可能となっているとのかたちで残っている」とのことがある上に、なおかつ、「世間一般の人間が極めて容易にその旨をオンライン上や流通書籍にあってその通りであることを確認できる」  
との事実

のことを指す(先立って説明しているとおりでである)。

本稿にあっては上にての 1. から 5. で言及したようなことらとしての訴求事項を示す論拠を

[まさしくもの[文献的事実][記録的事実]]

であると[証示]すべくもの文量膨大なる出典紹介部を設けている——そちら出典紹介部

にあっては第三者がどこをどう確認すればいいのかとの後追いのしやすさを心がけての摘示、出典としての文物ら(容易に確認できるようになっているところのものを厳選しての文物ら)よりのまさしくの問題となるセクションそのものからの要を得た原文引用に努めてもいる——わけだが、そこでは材料摘示の方向性以外に偏頗(へんぱ)なる属人的主観が介在する余地はない(：強調しておくが、インターネット上のよからぬ者らの一部がなしもしているとのような式、ゴミみたいな材料を出典として大量に積み重ねて、あるいは、(幾分高等に)自身にとって有利に作用する権威の申しようをパッチワークで積み重ねるとの詭弁の方式を採って[虚妄の伽藍]を構築せんとしているが如き式を取っているわけでは断じてない。筆者が典拠として重んじ挙げているのは——ここまでの内容をきちんと読んでいただければ分かるが——直上にて言及しているような[記録的事実]のみを確認するうえで十分たるところを適宜絞ってのことだけであり、そこにては(再三再四述べて)主観的目分量は何の意味もなさないかたちともなっている——※加えて申し述べておくが、その点、筆者は典拠が一体全体、何の適否を問題視するために作成されたのか、そのマインドとなるところ、意味性すら一切、重んじていない。たとえば、である。[記録的事実]の存在との観点で呈示した特定の典拠の中で「科学者がLHCがワームホールを生成しうるとの可能性を問題視している」とのことが取り扱われていたとする(実際にそういう典拠を挙げてきもした)。心得違いをしているのか、単に頭の具合がよろしくはないのか、あるいは、確信犯的に他を持説に誘導しようとの悪辣な害物(他をたばかるとの質的な意味での咎人)であるのか、いずれかの別を問わないところとして、「相応の」人間ならば、のようなことがある際に、どこそこの権威が[ワームホール生成の可能性]に言及しているのであるから、それは軽んずることができぬことだ、などと述べるところだろうが、何度も何度も述べているように、筆者は[ワームホールが加速器によって生成されうる]といったことにまつわる理論・可能性の適否それ自体などを問題視しているのではない(そのようなことの適否ははきと述べ、専門家にも分からないであろうし、況や、門外漢には分かることではない)。筆者が問題視しているのは[ワームホールが加速器によって生成されうる]との論調が専門の科学者らからつい最近になって出始めたとのことが[記録的事実]としてそこに存在していることであり(記録的事実を支えるところとして(その適否はともかくも)理論がどのような経緯で世に出たのか、その経緯のみが問題になる)、そうもした[記録的事実]と間尺が合わぬ時期的に異常なる先覚的言及(この場合の先覚的言及とは該当物の特性から自然にそうだろうと判じられるところのものを指す)をなしている事物が存在している、そういった筋目のことである(：につき後々の段にて取り上げるところに関して言及しておけば、である。たとえば、[加速器(陽子ビーム)とワームホール・ブラックホール「の類」のつながりあい]との例示なしたところにあつては『リアノンの剣』という1950年代(後述なすがワームホールという言葉だに存在していなかった折柄でもある)に既に世に出ている小説作品にも奇っ怪にそうした側面がみとめられるとの指摘がなせるようにすらなっている) )。

第二。上の第一の点にて述べているように筆者が[記録的事実]をまさにその通りのものとして摘示しているとして、である。本稿これ以降の段にて主軸として指し示していくことであるが、といった[記録的事実]の先にある関係性については山とある関連事物らを通じての[常識的反論]を一切寄せ付けない、しかしながらも、「そこに確として「ある」」「のみならず、それらが「どういうわけなのか」純・記号論的に相互に多重的に繋がるだけの特性を帯びている」との側面が伴っているとのこともある(からこそそれらを問題視している)。

たとえば、である。『リアノンの剣』という作品(邦題タイトルは『リアノンの「魔」剣』)という作品が1950年代からして(後に訳書およびオンライン上より確認なせるとの原著よりの原文引用にて示すように)[加速器(で用いられる陽子ビーム)とワームホール・ブラックホール「の類」のつながりあい]を露骨に指し示す作品として存在しているとのことがありもするのだが(それにまつわっての解説をなすのは本稿にてのかなり先の段になる)、そこに見る[1950年代の加速器(で用いられる陽子ビーム)とワームホール・ブラックホール「の類」のつながりあい]に関してはそういう観点で1950年代に成り立ちえたのかとの点につき何ら

常識的説明がなせないようになっている。のみならず、そちら作品(『リアンの剣』)が他の同文の意味で不可解な文物らと不気味かつ異様な結合性を呈しているとのことさえある。[常識]はといったところでは何の意味もなさず、にも関わらず、多重的關係性成立の問題はそこに確としてある(：ちなみに当たり前のことを書くようだが、世間人並みの人間がその通りに考え行動すべきとの規範となっている[常識]とそうあるのが理想であるとの[良識]はときに別物たりうる、あるいは、それら[常識]と[良識]とは抵触関係を呈することさえある——たとえば、圧政(ないし圧政的なるシステム)がみとめられるなかで圧政(ないし圧政的なるシステム)に抗じずに無難に日々を過ごそうとする处世術一般の枠組みもが[常識]に含まれる一方で(手打ちをこととするような暴君・専制国家に[儒教的世界観を建て前にしての常識]でひたすらに忠勤に努めるといったところでもいい)、圧政が長期的に児孫に多大なる損害を強いる(暴君・専制国家に多くの人間が処刑される現実的懸念が濃厚にある)と判じて抵抗をなす、できる範囲で抵抗をなさんとするというのが良識であるといった按配にて、である——。唾棄すべき手合いはときに[常識]と[良識]をイコールであるように「騙る」、あるいは、それらが両立して然るべきものとして、[常識]の方のみを押しつけてくるものではあるが、筆者という人間はそのような手合いをして[本質的には決して自分の運命さえ思うままに出来ぬ類][下らぬもの(に成り下がってしまった存在)]として何かを説くに値しない類と見ているとのことも述べておく)。

ここまで申し述べたうえではきと言明しておくが、自分自身が

**[存続・生存に値する種族の成員] (自明なところにあつて[屠所の羊]との立ち位置に安住しない、殺されると分かれば、抗意を示すとの種族の成員)**

であることを否定するつもりがないとの者ならば、そう、殺されることが自明の状況では戦うことを選ぶとの種族の成員をもって任ずるつもりがあるのならば、筆者が

**[世間人並みの水準を有しているというのであれば、簡単に確認できると申し述べるところの式]**

で摘示していることにつき、[その通りか否か]確認してみればよいと強くも求めておく。

尚、などと筆調強くも書き記しているとの

**[話者(筆者)の[知]の水準] [話者(筆者)のやりようの重み]**

につき疑わしいとのことであれば、こうも述べておく。

「人間であるから、時に単純なケアレス・ミス、あるいは、錯誤錯簡を呈してしまうこともあるが、といった限界をときに伴う人の身ながら、とにかくも、筆者は小柴(ノーベル賞を受賞したかの小柴である)の肝煎りで設立された東京大学に付属する研究機関(加速器実験の国際的推進役となっている研究機関でもある)を相手方にして[LHC 実験にまつわる(法律問題に通ずるところの)欺瞞性に非を鳴らすべくもの行政訴訟]を一審からして二年をまたいで戦いもしてきたような人間となりもする(これもまた記録的事実でありそれにまつわっての水面下での訴求・渉外活動に身を入れていた—煮え湯ばかりを呑まされた観もあるが、の渉外活動に身を入れていた—との前歴も筆者にはあり、その点についての解説媒体の構築も「必要ならばなすべきである」と現時考えている)。その点もってして常識レベルの行政訴訟—ブラックホール人為生成にまつわってのことが法廷にて問題視を見た国内初かつ唯一のLHC 関連訴訟ではある—の提訴などが[真に問題となるどころの訴求のためだけのひとつの戦術的選択]にすぎぬことであつたとしても、といったことま

でやる、といったことまでなせる人間の水準が[人後にそうそうに落ちるところがある]のか、また、[人後にそうそうに落ちることがない]と判じられるのならば、その言や軽んじられるものなのか(おかしな、ただ単に[出っ張りすぎているだけの人間]の申しようであるとのことで済むのか)、よくよく判断をなしてみるがよい」。

(話が長くなりもしているが) 上のように強くも申し述べるとの筆者は本稿の冒頭、いわば[題句]の呈示の部にて

If you think that your belief is based upon reason, you will support it by argument, rather than by persecution, and will abandon it if the argument goes against you. But if your belief is based on faith, you will realize that argument is useless, and will therefore resort to force either in the form of persecution or by stunting and distorting the minds of the young in what is called "education".

— Bertrand Russell

Human Society in Ethics and Politics

(補いもしての拙訳として)

「仮にもし[自身の信ずるところ、それは[理]に基づいているものである]と貴殿が考えているのならば、その信ずるところを[迫害](による持説・所信と一致せざるところの否定)などではなく[議論]によって支持することとしているのだらうし、仮にもし、そうもした[議論]の結果が自身の信ずるところに反することになるのならば、貴殿は当初の所信を捨て去ることとなるであろう(正しい・正しくないを証拠や論理に基づいてのやりとりによってのみ判ずる、[理]によって判ずるとの当然の帰結として)。だが、もし仮に貴殿の信ずるところが([理]ではなく)[信仰]に依拠しているとのものならば、最早、そこでは[議論]は無用の長物と化す、貴殿は[迫害]によってか、あるいは、[[教育]と呼ばれもする若者ら精神を阻害・矮小たらしめる式——理とは多く相容れない歪で、反復的な式——]によっての[強制]の力にのみ正当性論拠を求めることになるであろう」

—バートランド・ラッセル『倫理と政治における人間社会』より

とのバートランド・ラッセルの言い様を引きもしているのだが、そちら引用の言の中で[議論が通じぬところ]として取り上げられている宗教の徒、そう、欧米圏では批判者らに「フリー(フリーとはコーランに登場する見目麗しき神女らのことだが、その役割など特性については各自調べればよい)の待つ天国のために己と周囲を滅殺してやまない者達だ」

と言われるような宗教の徒、の中の、自爆テロまで起こすとの狂信的な徒輩として[存続に値しない愚劣なありよう]を全身で呈している(ないしはそうしたありようを不条理に押しつけられ、そのような状況に甘んじている)との類、あるいは、同文に語るに値しない、[生死をどうでもよいと見るような手合い][生死の問題を諦めきっている者]が相手ではない限り、

[筆者の[知]の水準・筆者のやりようの重きにつき判断なしてみるがよい]

との上にて言及のことについての[答え]は半ば歴然としていること、「本稿の」こここれに至れりまでの内容からだけでもご察しいただけることか、とは思う。

(:上にて自身の申しようを[理]なくして否定するであろうと判ずる人種として

[宗教的狂人(と呼称されるような向き)]



[生死をどうでもよいと見るような手合い／生死の問題を諦めきっている者]

のことを特段に挙げたが、前者(宗教的狂人)と時に分化して存在しうるとの后者、[死]をどうでもよいと認容した者ら程度の「弱き」内面しか有しておらぬとの者達に対して緊迫した状況を説くような真似はなしたくはないと筆者は考えている(そうした者達が手前自身のやらんとしていることに種族を裏切ったように石を置くのならば、そうした者らに法的に適法なる限りでのありとあらゆる方向から一太刀浴びせることにもやぶさかではないわけだが、同じくもの手合いらは敵手とはなりえてもネゴシエーションの相手方にはなりえないと考えている)。

そうした死を認容した者ら・死を認容せざるをえないとの者達に

[死ねば永劫の無]

[種族が滅すれば残るものは何も無し]

との

「生物学に依拠しての合理的視点から見たうえでの標準(であろう)との死生観・世界観」

があるかどうか知らぬが(生死の問題をどうでもよいととらえる向きを多分に包含する宗教的狂人にことに関してはそこからしてなんら折り合いを付けられない可能性がある)、なんにせよ、[残るもの何ら無し]と想定される[滅]を認容する、あるいは、そういうモードで動かされるようになってしまっているとの存在には

[語りあうに値する内面の実質・精神性(マインド)]

はそもそも欠を見ている、そして、その[後々の増大]も込みにしてなんら期待できるところがないとの見立て(訴求活動の中で抱くに至ったとの見立て)が筆者にはあるがゆえ、「彼ら」(そちら三人称代名詞としての対象が世の[過半]となるかもしれないところの「彼ら」でもある)には語る意味も値打ちもなかろうと判じているのである——筆者が常日頃苦しむのはこの世界には精神の力が希薄化している人間ら、生き残るための戦いにおいて状況を語るに値しないとのところにまでに内面が空虚化・弱化した人間が世の過半を占めるとのかたちで大勢いそうである(そう、テレビ番組やその他、諸種メディア作品にみとめられる「日常現実世界の嘘」を一切捨象しての「人間だけの、人間だけによる、人間だけのためのもので構築されたとの体裁をとるお花畑的世界」に見るありようが諸共、「残酷極まりない嘘」であろう(酸鼻を極める家畜小屋をそうと見せぬための装飾風情のものであろう)と判じきれるだけのことがそこら中にある、であるにも関わらず、そうしたものが至極自然なるものとして平然と世に容れられているとのことと表裏をなすようなところとして大勢いそうである)とまで見るに「至ってしまっている」とのことがあるのだが、といった[自身の内面に渦巻く苦しみの根]の問題は置いておいたうえで、勇気と意思の力を有した者、抗う力を蔵した者にだけ筆者は状況を伝えたいと考えている(そこには「鉄格子付きの独房に収監されている死刑囚(倫理的に死罪に値するのかはこの際、問わない)に明日、お前は殺されるのだ」などとのことを強調するような「愚劣さ」「残酷さ」を可及的に削ぎ落としたいとの観点もまたあるとしつつも述べれば、である)——)

## Hercules , Centaur and the 11th labour of Hercules



cf. 出典 (Source) 紹介の部110—出典 (Source) 紹介の部110 (8)

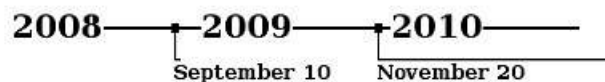
### Thrice Upon a Time (1980)

(邦題『未来からのホットライン』)

setting seen in the [1980 released] fiction



### LHC



(意図して本稿の後々の流れにまつわる言及をなすとして)

上の図は予言的言及をなしているとの小説作品、

**Thrice Upon a Time (邦題『未来からのホットライン』)(1980)**

が、と同時に、

[ヘラクレスの第11功業] 及び [(ヘラクレスの死因となり、また、ヘラクレスが「人類に火を与えた」プロメテウスを解放するために対価として犠牲にしたとの式でヘラクレス第11功業にも登場するとの) ケンタウロス]

との伝承上の事物と

[ブラックホール生成問題「それ自体」]

を介して多重的に接合するようになっている。——主観など問題にならぬ純・記号



論的ありようとして多重的に接合するようになってい—— ことを指し示すためのものとなる（尚、小さなことだが、上掲図の材とした図像らをどこから引いたかの解説もなしておく。につき、上掲図左上の箇所にて呈示している「棍棒を手にした壮年の男が竜と戦っているとの像」だが、そちらは英文 Wikipedia [Ladon] (mythology) ] 項目にて現行、著作権放棄の意思表示とともに掲載されている 16 世紀活動の彫刻家 Giambologna ジャンボローニャの手になる彫刻、「ラドン（ヘラクレス第 11 番目の功業に登場する百の頭を持つ蛇ないし竜 —— 呈示の彫刻では「西洋に伝わる典型的なドラゴン」として描かれている——）と死闘を繰り広げるヘラクレス像を象（かたど）っての彫刻」を写し撮っての写真より引いたものとなり、右上に挙げていのは Project Gutenberg のサイトにて公開されている著作権喪失著作ら、Myths of Greece and Rome narrated with special reference to literature and art (1893 年初出著作の 1921 年改訂版) 及び Stories of Old Greece and Rome (1913) にて掲載されていもする 16 世紀の彫刻家ジャンボローニャ(上にて挙げていラドンとヘラクレスの像を制作したのと同じくもの彫刻家ジャンボローニャ)の手になる「ケンタウロス・ネッソス(今際の際の計略にてヘラクレスが死因をもたらしたとの好色のケンタウロス)を縊り殺すヘラクレスを象（かたど）っての彫刻」を写し撮った写真より引用したものとなる。

同じくものこと、

「予言的小説 Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(1980) が「ヘラクレスの第 11 功業」[(ヘラクレス第 11 功業に登場する)ケンタウロス]との伝承上の事物と「ブラックホール生成問題「それ自体」」を介して接合している」

とのことについては本稿の後の段にて委細詳説なすが(本段が本稿執筆をほぼ終えた段階にての付け加えての表記だからこそ、(かなり後の段の出典紹介部についてもピン・ポイントに指摘できる箇所として)、本稿にての後の段、**出典 (Source) 紹介の部 110**から**出典 (Source) 紹介の部 110(8)**を包摂する長大な解説部がその点について扱ったセクションとなり、読み手が本稿を読み進めたうえで同じくもの段に至って精査いただければ、ここでの書きようになら誇張も行き過ぎもないとのこと、ご理解いただけるであろう)、そちら「ヘラクレスの第 11 功業との濃厚なる結びつきが見出される」とのことについては —— それこそが問題となる箇所として —— **LHC 実験 (の中のブラックホール生成に関わるころの命名規則)** についても同文のことが当てはまるようになっていとのことがある。

そうしたことが「あまりにも多重的に」指摘できるようになってしまっているとのことのが果たして「偶然」で済むのか、あるいは、「偶然」で済まないのならば、そう、「恣意の賜物」であるのならば、それにまつわって何が問題になるのか、とのことを突き詰めるのが本稿の趣意・主題となる箇所である。

(「長くなりもする」と前言するところの(「起」「承」「転」「結」にあつての)「承」の段に移行する前にまずもって述べておくべきかと判じたところを記載しての部はこまでとする)

(直上最前までにてのまずもって述べておくべきかと判じたところの表記を終え、本筋に引き戻して申し述べるところとして)

これよりは、繰り返し述べ、

「[権威]が[特定のこと]を述べているとの[事実]そのものが

[理論の歴史的登場時期を示す資料]

と共に存在しているとのことがある。

また、[権威]が同じくもの[特定のこと]を述べていることに関して存在しているとの、

[理論の歴史的登場時期を示す資料]

がそれ以前はいかなる者でもそういうことが述べることはできないことをそれ自体で指し示しているとのことがある。

他面、そうしたはきと見出せるとの権威サイドの特定の申しようの「登場経緯」とは全く平仄・辻褄が合わない、にも関わらず、登場時期の問題を除いてその内容だけに着目する限りは、そうした権威申しようと「不気味」かつ「異常無比」な形で平仄・辻褄が合うとのことら、言葉を換えれば、権威が後の世にてこれはこうであろうと事細かに説明してきたことと一致しているとのことが史的に見て長期にわたって、

[権威の申しよう自体と全く関係ないところ]

に数多存在していること、そして、(一呼吸置き)、そして権威が科学的裏付けを与える前から存在しているとのことらが「相互に」「多重的に」絡み合っ密結合関係を呈しているとのことが現実にある」

とのことについて解説していくとの所存であるわけだが、につき、まずもって、

[「加速器によってワームホールが生成されうる」との理論と —— 「理論の登場時期との兼ね合いでは辻褄が合わない」ものの —— 内容面で不気味かつ異常無比なかたちで平仄が合うとの文物が [文献的事実] の問題として幾点も存在している]

とのことについて[一例]たるものを取り上げ、そして挙げた一例の延長線上にさらに不快な「密結合」の関係性が横たわっているとのことを — 「事実」と「証拠」に基づき— 摘示していくこととする。

そして、そちら摘示にあつては以降、[AからFと振って分割しての指し示し]を順々になしていくこととする。

(それでは以降、A. から F. と振っての部をご検討いただきたい)



ここ A. と振っての部ではまず、

加速器実験とは[宇宙生誕の状況の再現]をなすものであるとされている。  
その点、同様のこと、[宇宙開闢の再現]を空想的なものとして扱った1937年刊行のフィクションとして『フェッセンデンの宇宙』という作品が存在しているのであるが、同作にて紹介されている[宇宙開闢をもたらす空想的かつ独特なる手法]が——そちらは加速器実験とは「全く関係ない」とのかたちのものである一方で——小説刊行後の1948年に実施された科学実験と手法としての際立った近似性を呈しており、小説と似たようなことをやった現実世界でのその科学実験が[ワームホールの生成問題]に通ずる[負のエネルギー]というものの発見と結びつくものとなっているとのことがある

とのことがあるのを問題視する（上だけご覧になられる分には『ややこしく意味不明瞭のことを述べている』と見られるところか、と思うのだが、続く段を読まれていく中で言わんとしているところ、ご理解いただけることかと思う）。

さて、直上にてこれより同作のことを問題視すると申し述べた作品、1937年に刊行されたサイエンス・フィクションたる『フェッセンデンの宇宙』（原題 Fessenden's World）は以下にて記載の通りのあらすじを有した作品となっている。

---

## 出典(Source)紹介の部 22



# SOURCE

## 22

ここ出典紹介部では古典的SF作品としてよく知られている（情報の流通態様を望見する限り日本にあっての方が欧米よりよく知られている節もある）との作品、『フェッセンデンの宇宙』の粗筋の紹介をなすこととする。

（容易に裏取りできるとのことであるため、その程度の媒体よりの引用で十分かと判断、直下、和文ウィキペディア[フェッセンデンの宇宙]項目(にての現行記載内容)よりの原文引用をなすところとして)

---

「天文学者だった私は、ある日数年ぶりに、友人の天文学者

フェッセンデンに呼び出される。フェッセンデンは、実験室に人工の宇宙を創造したというのだ。…(中略)…二枚の巨大な金属板の間に重力を遮断した空間を発生させ、そこに縮小した原子のガスを満たしたのだ。次第に凝集したガスが無数の天体を生み、小さな宇宙が誕生した。…(中略)…。ミニチュアの宇宙を公転するミニチュアの恒星とその周りをめぐるミニチュアの惑星。無数の惑星の上には様々な知的生命が芽生えていた。その豊潤さ、美しさに私は魅了された」

---

(小説『フェッセンデンの宇宙』粗筋にまつわる引用部はここまでとする)

(出典(Source)紹介の部 22 はここまでとする)

---

上記のような内容の『フェッセンデンの宇宙』(1937)にての人工宇宙が発生させられての場所は — Philological Truth [文献的事実]の問題として—  
[二枚の向かい合う金属版に挟まれた、重力を打ち消す作用が発生させられての場所]と定義されている(下の訳書よりの引用部を参照されたい)。

---

出典(Source)紹介の部 22-2



SOURCE

22-2

ここでは『フェッセンデンの宇宙』にあって

[人工宇宙が [二枚の向かい合う金属版に挟まれた、重力を打ち消す作用が発生させられての場] にて構築された]

との描写がなされていること、その出典として同著訳書よりの原文引用をなす。

(直下、本稿筆者手元にある河出書房新社より刊行の「文庫」版、最近になって世に出たとの版の方の『フェッセンデンの宇宙』(1937年版)収録短編集 p.15－p.16よりの原文引用をなすとして)

---

それは表面が格子状になった直径二フィート金属円盤で構成されていた。一枚は床の上<sup>1</sup>にあり、もう一枚はその真上の天井にとりつけられている。電線で四隅の電気装置と接続してあり、格子状の表面が、淡い青色の光かエネルギーのようなものをかすかに放っていた。

二枚の円盤にはさまれて、空中にぽっかりと浮かんでいるものがあつた。微細な閃光の雲である。見かけはちっぽけな金色の蜜蜂が無数に集まった群れに似ており、その群れはレンズの形をしていた。

…(中略)…

フェッセンデンがそのしろもの<sup>2</sup>のところまで足を運び、床と天井で青く光っている円盤のほうを身ぶりで示した。

「この二枚の円盤は、ブラッドリー、あいだにはさまれた空間で通常の地球重力を打ち消す働きがあるんだ」

「なんだって？」わたしはびっくりして大声をあげた。進み出て、二枚の円盤のあいだに手をつっこみ、今の言葉をたしかめようとする。だが、フェッセンデンに引きもどされた。

「よせ」とフェッセンデンが警告した。「人間の体は地球の重力に慣れているから、それに負けないよう内側に力がかかっている。もしその二枚の円盤のあいだに踏みこみ、地球の重力から解放されたら、きみの体はそれ自体の内圧で破裂してしまうだろう。ちょうど深海魚が、途方もない水圧のかかったいつもの深海から海面へいきなり運ばれると、破裂するのと同じだ」

---

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一 )

(※上にて引用のところ 一1937年版『フェッセンデンの宇宙』を収録した最近の河出書房版より引用なしののところ一 と同じくものと記述内容につきオンライン上より確認できるところの表記も呈示しておく。 については引用元残置は請け合わないも英語圏の [technovelgy.com](http://technovelgy.com) とのドメインのSF小説解説媒体にあつての Gravity Neutralizing Disks by Edmond Hamilton from Fessenden's Worlds と題されてのウェブページ(HTML文書)にあつてより引用するところとして “ **It consisted of two twelve-foot metal disks with grid-like surfaces, one on the floor and one on the ceiling directly over the other. [ . . . ] These disks, Bradley, neutralize all the ordinary gravitational forces of earth in the space between them.** ” (訳として) 「(『フェッセンデンの宇宙』に見る重力中和装置かつ宇宙再現装置についての描写として) それは格子状の表面を持つ各々 12フィートの金属板、それぞれ天上と床にて真向かいに向かい合うように配置された金属板によって構

成されていた。…(中略)…これら金属板は、(フェッセンデンがブラッドレーに語りかけるところ)、それらと地面の間にある空間にあつての通常の重力場を[無効化]するのである」(訳を付しての引用部はこままでとする)との表記がオンライン上より同じくものこと、確認なせるところとなっている)

([出典\(Source\)紹介の部 22-2](#)はこままでとする)

1937年初出の小説、『フェッセンデンの宇宙』にあつての、

[二枚の巨大な金属板の間に「重力を遮断した」空間を発生させ、そこに縮小した原子のガスを満たした。によって宇宙が発生した]

との作中設定については次のことが問題になる。

1937年初出フィクション『フェッセンデンの宇宙』の作中世界ならぬ現実の世界にあつての1948年(『フェッセンデンの宇宙』刊行の後14年を経たこと)にて

[二枚の金属板を非常に近い距離に近づけること — 換言すれば、『フェッセンデンの宇宙』にて宇宙開闢の瞬間を再現したと描かれる空想的手法と同様に二枚の金属板を向かい合わせるとの行為 — で具現化するカシミール効果と呼ばれるに至った効果]

が観測されることになった。

そのカシミール効果、二枚の金属板を極めて近づくように固定し、絶対零度までその場を冷やすことで金属板の間に

[負のエネルギー(と呼ばれるもの)]

が発生すると捕捉されたとの現象であり、については、(出典も下に挙げるところとして)、講学的には次のような説明がなされている。

「ほとんどくつつくように近づけられた二枚の金属板の間の極々僅かなる隙間空間は完全な真空状態にはなく、仮想的な光子(※[仮想光子]とは粒子の反応の途中過程で生成消滅する粒子の一類型を指す)の大群がそこにある。そうした仮想光子は金属板に挟まれた領域にて動きが制約される状況にあり、金属板がない状況に比べて、(ハイゼンベルクの不確定性原理(と呼ばれるもの)に起因する本来の機序とは異なり)、エネルギーの貸与が滞りなくなされない。

それによって、

[[金属板がない状況]のエネルギーを[ゼロ・エネルギー]と呼称した際に[金属板の間のエネルギーを巡る状況]は[マイナス・エネルギー](負のエネルギー)と表される状況もたらされる]。

そうした金属板の間の負のエネルギーとは[反重力]とも結びつけられるところがあるものである」



上は知識がないとの人間にはなにやら[疑似科学]めかした話をなしているように見えるところであろう(当然であろう)。であるが、[負のエネルギー]や[反重力]といったどぎついもの、いわゆる、未確認飛行物体陰謀論者の類がわざとか、あるいは、半ば信じてこととする馬鹿げた物言いであると述べられるか、というと、カシミール効果との兼ね合いでは馬鹿げたものにならない。歴とした(科学的)観測事実となっている。直下、出典を参照されたい。

---

## 出典(Source)紹介の部 23



# SOURCE

## 23

本段、**出典(Source)紹介の部 23**にあつては

[カシミール効果というものが「負のエネルギー」「反重力作用」といったものといかように結びつけて語られるのか]

主流の物理学者著作よりの引用をなしておく。

(直下、ポール・ディヴィス著書 How to Build a Time Machine 邦訳版『タイムマシンをつくらう!』(草思社)p.121-p.123 よりの中略なしつつもの引用をなすとして)

---

第2章で、負のエネルギーによって反重力がいかにより出せるかを解説したが(九七ページ参照)、では、負のエネルギーはどうすれば作りだせるのか。一九四八年、オランダの物理学者ヘンドリック・カシミールが簡単な方法を発見しているのだから、それにしたがえばいい。二枚の金属プレートを目どうした向かい合うように接近させて、動かないように固定させる。全体を大きな厚い金属の箱で覆ったら、箱のなかのすべての物質(気体と、電気を運び

た粒子と、中性の粒子をふくめて)を取り除いて、絶対零度(摂氏マイナス二七三度)まで冷やす。

こうすることで、プレートとプレートのあいだの空虚な空間に負のエネルギーを出現させることができる。

…(中略)…

「カシミール・エネルギー」とも呼ばれる負のエネルギーが金属プレート間に現れるのは、つぎのような理由による。空虚な空間に見えたプレートのあいだの領域は、完全な真空ではなく、仮想光子の大群が渦巻いている。

…(中略)…

二枚のプレートの外側の空間とプレート間の空間と比べたとき、プレート間では仮想光子の動きに制約ができることになる。

…(中略)…

プレートの存在によってあるエネルギーや運動の向きをもった仮想光子が生まれる可能性は排除されてしまうのだ。その結果、プレート間の領域では、ハイゼンベルクの不確定性原理のおかげで借りられる総エネルギーが、プレートがない場合より、わずかながら小さくなる。プレートがない場合の空虚な空間がもつエネルギーをゼロ・エネルギーであるとして基準を決めれば、プレートのあいだの領域は負のエネルギーをもつということになる。この負のエネルギーは、プレートのあいだに小さな引力を生み出すことによって存在を現すのである。

---

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※上にて引用元としている書籍は How to Build a Time Machine (の邦題『タイムマシンをつくらう!』)とのタイトルの時点で誤解されかねない風がある書籍であるため、

『[如何物書籍(イカモノ本)]より信用の置けぬ言説を引いてきているだけではないのか』

と誤解される向きもあらわれるかもしれない。

であるから、付記しておくが、引用元となっている書籍 How to Build a Time Machine はきちんとした科学読み本となっており、また、その著者も[科学界メインストリートで評価を受けているポール・ディヴィスという権威筋の物理学者]であると申し述べておく —— (英文 Wikipedia [Paul Davies] 項目などからお調べいただければお分かりいただけるだろうがカリスマ英国人物理学者としてテレビ出演を頻繁にこなし、マイケル・ファラデー賞(英国で科学を普及させた科学者に与えられる賞)ら複数の著名なる賞を受賞している同男、ポール・ディヴィスの物理学者としてのキャリアは常識の世界というものにては一流のものである(ロンドン大を卒業した後、ケンブリッジ大で著名な天体物理学者でもあるフレッド・ホイルの弟子としてポストドク時代を過ごしている等々)。その点、好意的評価一辺倒の言い様をなしていると映るかもしれないが、(従前内容を検討いただいている向きにあらわれてはここまでの筆致でもってお分かりいただけていることかとは思ふも)、筆者は[権威]をもってして無条件に偉いとするような人間ではない。さらに言えば、「[権威]の申しようであるから」との物言いを枕詞にしたがる、自己の申しようの至当適切さの[必要十分条件]とするが如くの語り口上をなす人間は質的詐欺師

であることが往々にしてある」との見解すら持っている人間ですらあるのだが、権威サイドのポール・ディヴィスが「カシミール効果と負のエネルギーの関係性」について説明していることは「観測事実が重んじられての常識世界のメインストリートの見方としてそちら関係性が確として成り立つとされている」とのことを示すに十分であろうとの点までは強調できると考えている—— )

次いで、上記 How to Build a Time Machine 邦訳版『タイムマシンをつくろう！』で言及されている「カシミール効果にて見受けられる負のエネルギー」というものが見方を変えれば「反重力」の「ような」ものとして具現化を見ているとされることの一例摘示をなしておく。

(直下、和文ウィキペディア「カシミール効果」項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

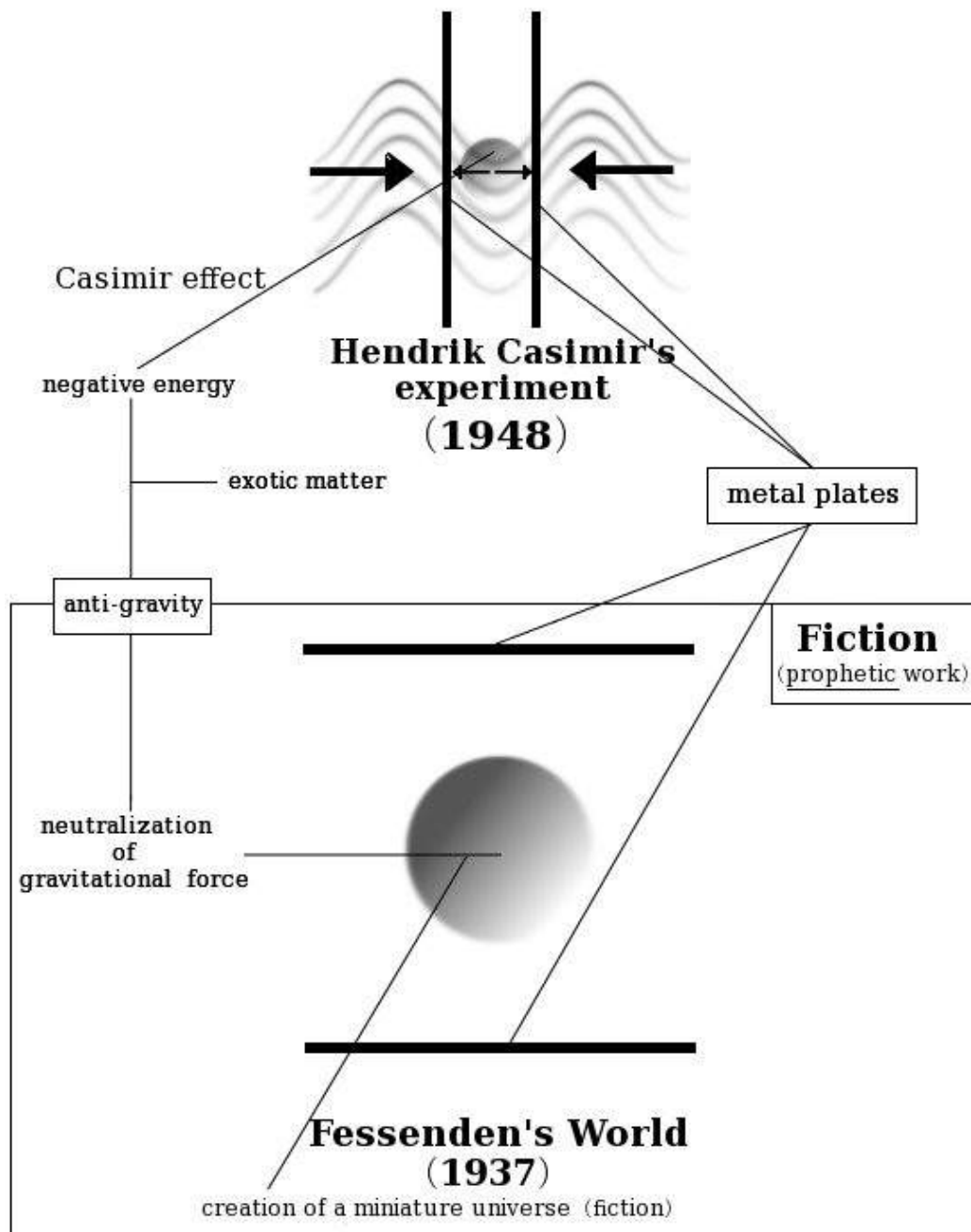
---

ワープやワームホールの論文においては、その実現性の論拠としてしばしばカシミールエネルギーという言葉が登場するが、それはこの現象のことを指している。カシミール効果の引力作用は二枚の金属板の内外の真空のエネルギー差に起因し、金属板間の真空のエネルギーは負の値をとる。ワームホールなどの維持には「負の重力」を生み出す負のエネルギーが必要となるので、負のエネルギー状態が確認された唯一の例としてこの効果が取り上げられるのである

---

(引用部はここまでとする)

([出典 \(Source\) 紹介の部 23](#) はここまでとする)



上掲図はここまでの本稿にての指し示し事項、[カシミール効果測定実験](1948年実施)とそれに先行する『フェッセンデンの宇宙』(1937年刊行)の内容が

**[二枚の金属プレートを向かい合わせ] [その間の領域にて] [重力作用に改変をきたす(斥力・反重力の類に通底する効果をもたらす)]**

との点で極めて似た側面を有していることを端的に訴求するために作成したものとなる尚、図の上部にて描画したカシミール効果のことを訴求すべくもの図に関しては英文 Wikipedia [ Casimir Effect ] 項目にも似たような図像が掲載されているとのこと、申し述べておく(ただしもって断っておくが、ウィキペディアのような媒体には、いや、ありとあらゆるオンライン上の媒体にあっても(少なくとも現行にあっては)「『フェッセンデンの宇宙』と[カシミール効果測定実験]が類似する特性を帯びている」といったありようは見受けられない(各ページ内容を見ながら英語媒体込みに検索結果がゼロ件になるまで切り詰めをなしてみたことが筆者にはある)とのことがある — だが、だからといって両者が類似して「いない」とのことにはならないし、また、両者類似性に着目した

人間が今までいなかったとのことにもならない(人間の視野角の広さを広めに見積もれば、それに気付くだけの見識を有した人間が少なからずいたとも解されるが、それに気付くだけの水準の者達らは「似ているな」と気付いても敢えてそのことを表沙汰にしようとも考えないのだとも思われる)—— )。

さて、

[二枚の金属板を向かい合わせてその場で「重力を遮断して」宇宙を発生させるとの筋立て] (1937年の『フェッセデンの宇宙』粗筋)

および

[二枚の金属板を向かい合わせ極々近距離に近づけてカシミール効果 ——負のエネルギー、さらに後述するところの反重力「的」機序と相通ずるエネルギー—— が観測されたとの科学史上の一足跡] (1948年)

の間には ——典拠・論拠を挙げなければ、首をかしげられるだけの話となろうか、とも思うのだが—— 、

[他界への扉とも定置されるワームホール]  
[加速器実験に伴う特性]

との絡みで接合するところがある。

そうも述べられるようになっていることについては下をご覧ください。

---

[二枚の金属板を極々近距離に近づけて観測されるとの「カシミール効果」という現象は理論物理学者らに「負のエネルギー」「反重力」との兼ね合いで「通過可能なワームホールの生成」と結びつけられるとの文脈でも「80年代後半より」着目されることになった現象である] (世間的に専門的かつ権威あるとされるであろうところの物理学者由来の書籍よりの引用も直下なす)

[負のエネルギー(反重力)でもって「通過可能なワームホール」が構築されるなどと科学理論上では述べられているとのことがあるのだが、そこにいう「ワームホール」と加速器を結びつける論調がここ最近になって呈されだした] (同じくもの点については本稿にての先の段にあって引いたことを再度引いておく —— (以下、米国物理学者の手になる『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』(原著表題 COLLIDER: The Search for the World's Smallest Particles / 邦訳版刊行元は日経ナショナルジオグラフィック社で同著、本稿先立っての[事実B]にまつわる解説部にてもその内容を問題視した実験機関担ぎ上げ本としての色彩強き書籍ともなる)の p.287-p.289より出典(Source)紹介の部 18)にあって抜粋したところと同じくものところを再度、原文抜粋なすとして) “これまでの議論は明確な科学的根拠に基づいているが、最後に紹介するのは、SF小説のような、あるいは夢のような話である。CERNがここまで太鼓判を押してまだ不安ならば、未来から何の警告もないことで安心すればよいのだという。ロシアの数学者イリーナ・アレフエワとイゴール・ヴォロビッチによれば、LHCは現在と未来を結ぶ時空の通路、通過可能なワームホールを生み出すだけのエネルギーを持っている。もし、LHCが危険なら、未来からのメッセージがあったり、LHCの完成を阻止して歴史を改変する科学者が出てくるであろう…… 通過可能な

ワームホールは、アインシュタインの一般相対性理論方程式を解くことで得られるもので、時空の離れた二点をつなぐという特徴がある。ワームホールもブラックホールと同じく、物質が宇宙という織物を強力に曲げてできる重力井戸だ。しかし、そこに含まれる幽霊物質(未知の物質)という仮想の物質が負の質量とエネルギーを持っているため、侵入者に対する反応が違ふ。ブラックホールに落ちた物質が崩壊するのに対し、幽霊物質は通過可能なワームホールを開け、時空に通路をつくって宇宙の別の場所へつなぐ”(再度の引用部はここまでとする)——)

[加速器実験は宇宙生誕の瞬間たるビッグバン近似の状況を極小スケールにて再現するものであると鼓吹されている。他面、[負のエネルギー]([反重力]と結びつけられるもするエネルギー)との絡みで通過可能なワームホールの構築と結びつけられる[カシミール効果]の存在を立証して物議を醸した実験(「1948年」実施)と相通ずることを[二枚の金属板を向かい合わせてその場にて重力を遮断する]という式で描いていた「1937年」初出の小説『フェッセンデンの宇宙』で取り上げられているのも[宇宙創成]の瞬間である](加速器実験がいかようにして宇宙創成の瞬間と結びつけられているかは下にさらに補っての出典を挙げておく)

上記のことにまつわる解説未了であったところの出典紹介を直下なす。

## 出典(Source)紹介の部 24



# SOURCE

## 24

本出典紹介部ではまずもって

[二枚の金属板を極々近距離に近づけて観測されるカシミール効果は通過可能なワームホールの生成と[負のエネルギー]との兼ね合いで結びつけて考えられることがあるもの



である]

とのことについての専門家由来の申しようを紹介することとする。

(直下、物理学者ポール・デイヴィス( Paul Davis )の手になる How to Build a Time Machine の日本語版タイトル『タイムマシンをつくろう!』p.121－p.122 より中略をなしつつもの引用をなすとして)

---

従来の電磁気技術では、プランク・エネルギーは太陽系に匹敵するくらい巨大な加速器を建造しないと獲得できないが、まったく新しい加速器技術が開発されれば、はるかにコンパクトな装置を用いて非常に高いエネルギーを得ることができるかもしれないのだ。またいくつかの理論によれば、空間と時間の大規模な改変はプランク・エネルギーよりもずっと低いエネルギーで実現できるかもしれない、技術的にも見通しがつけられる可能性があるという。もし重力をほどほどのエネルギーで操作できれば、これまでにはのべたような途方もない圧縮や加速を必要とせずにワームホールを作ることができるだろう。微小とはいえ、とりあえず実在のワームホールが製作できたとなれば、つぎのステップはそれを扱いやすい大きさに拡大することである。

…(中略)…

プランク長の規模のワームホールは小さすぎて、実際上、使いものにはならないので、何らかの方法を用いて大幅に拡大してやらねばならない。

…(中略)…

したがって、つぎの工程は、生まれたばかりのマイクロのワームホールにエキゾチックな物質を送り込むことである。そうすれば、その物質がそなえている反重力がワームホールの喉を外向きに押しだして、寸法を大きくするだろう。

…(中略)…

第2章で、負のエネルギーによって反重力がいかに作り出せるかを解説したが(九七ページ参照)、では、負のエネルギーはどうすれば作りだせるのか。一九四八年、オランダの物理学者ヘンドリック・カシミールが簡単な方法を発見しているの、それにしたがえばいい。

---

(訳書よりの引用はここまでとする)

(続けて、直下、同じくもの How to Build a Time Machine の日本語版タイトル『タイムマシンをつくろう!』p.98 よりの一部引用をなすとして)

---

しかし、負のエネルギーが作り出す重力場はたしかに斥力である。通常の物質でできたボールはこの箱の近くに置けば、加速されて箱から離れていくだろう。もし地球が負のエネルギーでできていれば、われわれは全員、宇宙に放りだされてしまうにちがいない。

ない。

第3章で負のエネルギーの状態をどのように作りだすかを説明するが、ここでは、適当な「エキゾチックな物質」があって、それをワームホールの喉に詰め込むと想定しよう。その物質が十分強力な反重力をおよぼすならば、それは喉がつぶれるのを食い止め、光と、それにもしかしたら宇宙飛行士が通過することを可能にするかもしれない。

(訳書よりの引用はここまでとする 一※一)

※注記として

上にての原文引用部にては  
[タイムマシンの候補となる通過可能なワームホール]  
の拡大・安定化には  
[反重力を呈するエキゾチック物質]  
が必要とされていること、そして、その反重力特性と結びつく負のエネルギー  
というものの生成可能性が  
[カシミール効果]  
によって指し示されているということが言及されている。

そこに見る[反重力を呈するエキゾチック物質]によってワームホールの安定化を嚆矢として **80年代**に論じだしたのは物理学者キップ・ソーンであると知られている。

その点、キップ・ソーンがいかなることを提唱したかについては本稿にての **出典(Source) 紹介の部 20-2** で以下に再引用するとおりのことを取り上げていたとことがある。

(直下、BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(原著の方は1994年刊行、邦訳版は白揚社より1997年刊行)よりの訳書 p.444 よりの「再度の」引用をなすとして)

カール・セーガンに私の意見を伝えた後、私は彼の小説が一般相対性理論を学ぶ学生の教育用に使えることを思い当った。こうして学生に役立たせるために、マイク・モリス(私の学生の一人)と私は、一九八五年の冬に

エキゾチックな物質に支えられた

ワームホールに対する一般相対論の方程式と、これらの方程式とセーガンの小説との関連について論文を書きはじめた。

…(中略)…

一九八七—八八年の冬以前に、われわれは論文を「アメリカン・ジャーナル・フィジクス」誌に投稿したが、その時点では論文はまだ掲載されていなかった。

(引用部はここまでとする)

以上、引用部に認められるようなことについては80年代の物理学者キップ・ソーンやりよう(媒体の有為転変呈しやすき側面よりその記載内容の残置につ

いては請け合わぬが、英文 Wikipedia [Wormhole] 項目にあつては The possibility of traversable wormholes in general relativity was first demonstrated by Kip Thorne and his graduate student Mike Morris in a 1988 paper「アインシュタインの一般相対性理論に基づいての通過可能なワームホールはキップ・ソーン及び彼ソーンの研究室の院生マイケル・モリスによって1988年の論文によってはじめて呈示された」との記載が現行見受けられるところのやりよう)を受けて

[負の質量を用いて通過可能なワームホールが構築なしえるばかりではなく、それがタイムマシンともなりうるとの見解が世に出た]

とも諸々にて説明されている。

例えば、本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 18** で既に引用しているところにしてまた、直上にて引用なしたところより再度に次いで再引用をなすところとして次のような式にて、である。

(直下、『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』(原著表題 COLLIDER: The Search for the World's Smallest Particles との同著の邦訳版刊行元は日経ナショナルジオグラフィック社/先の [事実 B] の段にてその内容を問題視した実験機関担ぎあげ本としての色彩強き物理学者を著者とする書籍) の p.287—p.289 よりの「再度の」引用をなすとして)

ロシアの数学者イリーナ・アレフエワとイゴール・ヴォロビッチによれば、LHC は現在と未来を結ぶ時空の通路、通過可能なワームホールを生み出すだけのエネルギーを持っている。もし、LHC が危険なら、未来からのメッセージがあつたり、LHC の完成を阻止して歴史を改変する科学者が出てくるであろう…… 通過可能なワームホールは、アインシュタインの一般相対性理論方程式を解くことで得られるもので、時空の離れた二点をつなぐという特徴がある。ワームホールもブラックホールと同じく、物質が宇宙という織物を強力に曲げてできる重力井戸だ。しかし、そこに含まれる幽霊物質(未知の物質)という仮想の物質が負の質量とエネルギーを持っているため、侵入者に対する反応が違う。ブラックホールに落ちた物質が崩壊するのに対し、幽霊物質は通過可能なワームホールを開け、時空に通路をつくって宇宙の別の場所へつなぐ。

…(中略)…

1980年後半以来、通過可能なワームホールはCTC(時空曲線)をつくり、これをたどれば過去へタイムトラベルできるという説が唱えられてきた。

…(中略)…

勇敢な宇宙船が飛び込めるほど大きいワームホールなら、ループは完全につながっているので、理論的に CTC が出来た後のどの地点にも戻ることができる。

(再度の引用部はここまでとしておく)

上引用部に見る、  
[1980年後半以来、通過可能なワームホールはCTC(時空曲線)をつくり、これをたどれば過去へタイムトラベルできるという説が唱えられてきた]  
との部が

「([カシミール効果]によって 1948 年代に検証されることになった)[負の質量]を体現してのエキゾチック・マターがワームホールの安定化につながりうる」  
とするキップ・ソーンの 80 年代後半の理論化を受けての部と解されるようになっているわけである。

(注記の部はここまでとする)

以上言及なしたところで、続いて、

[[『フェッセンデンの宇宙』が宇宙創成をテーマとしているように)加速器実験は宇宙生誕の瞬間たるビッグバンを再現するものであると鼓吹されている]

とのことの出典を挙げることにする。

(直下、アミール・アクゼル著 Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider の邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる CERN と究極の加速器の挑戦』(早川書房) 24 ページよりの原文引用をなすとして)

---

LHC 内部での陽子衝突により解放される凄まじい量の高密度エネルギーは、科学を未踏の新たなレベル、我々の宇宙ではビッグバン直後以来観測されたことのない高エネルギーの領域へと押し進めてくれる。そのような形で大型ハドロンコライダーは我々を百数十億年昔に連れていき、誕生直後の灼熱の宇宙を満たしていた状態を見せつけてくれる。

---

(訳書よりの引用はここまでとする —※— )

(※そも、上引用元の書籍タイトル『宇宙創造の一瞬をつくる CERN と究極の加速器の挑戦』や『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』との本稿の先立つ段にて引用をなしている書籍表題からして CERN の実験が宇宙創成(ビッグバン)と結びつくことを示すものだが、上引用部はそも形容されている理由、LHC 実験の如く加速器実験がビッグバン再現実験であるとされている理由が一言で述べられている。

尚、加速器がビッグバン「直後」の状況を作り出すとの点に関しては [ビッグバン再現状況による子宇宙の生成が連鎖反応として引き起こされる]

との申しようがなされていたとのことについてもカナダ人哲学者ジョン・レズリーの書籍や同人物の書籍の出典となった物理学者らの 80 年代に遡る学術誌掲載論稿よりの引用を介して本稿の先の段にて解説してきたところである)

ここまでの内容でもってして

加速器実験とは「宇宙生誕の状況の再現」をなすものであるとされている。その点、同様のこと、「宇宙開闢」の問題を空想的なものとして扱った1937年刊行のフィクションとして『フェッセンデンの宇宙』という作品が存在している。

そちら「宇宙開闢」を描く『フェッセンデンの宇宙』にて紹介されている「宇宙開闢をもたらす空想的かつ独特なる手法」が1948年に実施された科学史上、エポックメイキングなものとする実験と相通ずる側面を「先覚的に」帯び、かつまた、「通過可能なワームホールの生成問題」との接合性をも呈しているとのことがある(時期にも着目すべきところとして80年代後半から「通過可能なワームホール」と「負のエネルギー」を結びつける論調が出てきたとのことがあるからである)。

そして、「ここ最近になってより考えられるようになったところとして加速器実験のありべき帰結としてワームホールの生成のことが観念されるようになってきもしているとのことがある

とのことの論拠を示した。

以上指し示してきたことを(くどくもながら)端的に表せば、次のようなかたちとなる。

[加速器実験] → 「「宇宙開闢」の状況を再現を図るとの実験」

[加速器実験] → 「「ワームホール生成」を考えられるひとつの帰結とするところ最近より考えられるに至った実験」

[フィクション『フェッセンデンの宇宙』] → 「カシミール効果測定技法と相通ずるやりよう(二枚の金属プレートを並べてそこにて重力を「遮断する」がごとくことをなすとのやりよう)で「宇宙開闢状況 — 加速器実験にて再現が企図されている状況 — 」を実現するとの空想小説」

[フェッセンデンの宇宙に認められるやりようと類似するカシミール効果測定技法] → 「ワームホールの安定化・拡大に寄与するとの「反重力」特性と結びつくマイナスのエネルギーの導出手法考察と結びつくものとして「も」80年より着目されるに至ったもの」

さらに端的にまとめれば、である。「記号論的には」、

[加速器実験] → 「宇宙開闢状況再現／ワームホール生成と結びつけられる挙」  
← 「『フェッセンデンの宇宙』」

との関係性が導出されることになる(上は「結果的に偶然そうならぬにすぎない」と「常識的には」説明がなされるようなところとなるが — というのもカシミール効果の発見(1948年)に『フェッセンデンの宇宙』の刊行年1937年は先立つし、そも、ビッグバン再現とワームホールの結びつきが観念されるようになったのも1930年代よりずっと後のことであるからである——、本件には「複合顧慮」すべき側面があり(であるからわざわざもっての取り上げをなしている)、によって、問題の根が深いものであると呈示できるとのことがある)。

## Magic Carpet

Any sufficiently advanced technology is indistinguishable from magic. — one of Clarke's Three Laws

author of *Childhood's End* (1953)  
& *2001: A Space Odyssey* (1968)



[図を挙げての訴求として]

サイエンス・フィクション分野の著名作家、SF 業界の[ビッグ・スリー]の一面に数えられる作家としてアーサー・クラークが挙げられる(同アーサー・クラークについては「有名な映画化作品『2001年宇宙の旅』の原作者である」「そもそも[衛星通信・通信衛星の父]として衛星通信・通信衛星の概念を初期的に考案したのがアーサー・クラークである」との言われようがなされていると申し述べれば、その方面のあれやこれやについて詳しくはない向きにも同男の大物っぷりについてなにがしかのことをおもんばかることができることか、とは思ふ)。

本稿の後の段でも[文献的事実]であることを示す記述とともに取り上げることになることとして、そちらアーサー・クラークの作品らからして[奇怪な先覚性]が具現化していてもとのこと「も」あるのだが、といったことは置いた上でも申し述べるところとして、同作家アーサー・クラークに由来するものとして諸方面にあつてよくも引き合いに出される、

[クラークの三法則](クラークズ・スリー・ロー / Clarke's three laws)

というものがある。

オンライン上より容易に確認なせる(e.g.ウィキペディアの複数項目に渡つて言及・解説がなされている)とのそちら[クラークの三法則]にあつての三番目の法則の内容は

**Any sufficiently advanced technology is indistinguishable from magic.**

「十分に発達した科学は魔法となんら見分けがつかない」

とのものとなる(映画や諸種のサブカルチャー作品にて同法則同文言に言及した部を目にしたとの人間も多くいることかと思われる)。

さて、ここ本稿本段では  
[反重力](anti-gravity)

などとの

[ナンセンス(nonsense)][馬鹿げているもの]



と識者に見られるようなところに通ずるものを取り扱っているわけだが(:[反重力]をして[馬鹿げたものと見られやすきもの])として言及しているのは、それが [ UFO Religion [UFO 教]の徒輩の担ぎあげる空飛ぶ円盤なるもの(アダムスキー型円盤などの写真を見ることで頭の具合とやらせの程が見受けれると筆者などは判ずるに至った幻影の中の幻影でもいい)の作用機序の理論]ととかく結びつけられて語られてきたとの事情があるからである)、[反重力]があたかも(クラークの法則に見る)[魔法の如き高度テクノロジー]にて実現されうるとすれば、そこにてはカシミール効果に通底するような観点が応用されることとなるように「とれもする」との話をここまでにてなしてきた。

その点、

[重力に抗って浮き上がっている魔法の絨毯](上にてはその魔法の絨毯を描いたものとして Viktor Vasnetsov ヴィクトル・ヴォスネツォフとの画家の手になる19世紀後半絵画を挙げている)

は魔法による賜物とされるわけだが、といったものが字義通りの魔法で済まされずに科学で実現されうるとのこととなると、——そちら理論の適否の如きことについては判ずることはできないし取り上げるべきではないとも先立って申し述べているわけだが—— 通過可能なワームホールを安定化なさしめるとの科学界論調があることとあいまって気がかりになりもする、[それだけのこと]がある( :これよりさらに煮詰めて呈示なししていくところの[「論調それそのものに先駆けての」先覚的言及のありよう]と[記号論的な関係性に見る奇怪性]の観点から気がかりになるだけのことがある)。

以上のような問題意識に基づいて挙げたのが上にての図であり、直下にてのここまでの関連性をまとめた関係図でもある。そのこと、図の内容を検討いただき、理解なしにいただければ、光栄である。

尚、クラークの三原則(クラークズ・スリー・ロー)にあつてはその第一法則として次のような[いかにもありうべきこと]が挙げられてもいる。

When a distinguished but elderly scientist states that something is possible, he is almost certainly right. When he states that something is impossible, he is very probably wrong.「著名ではあるが、高齢でもあるとの科学者が[何か]をして可能であるとする場合にはおおよそにしてその言や正しいものである。だが、逆に彼が[何か]をして不可能であるとする場合には大いにありうるところとしてそれは誤りとなっている」

本稿では出典(Source)紹介の部1の部にて

「世紀の変わり目にあつて加速器の類によるブラックホール生成可能性が科学界重鎮によって諸共、否定されてきた」

との状況について解説している。

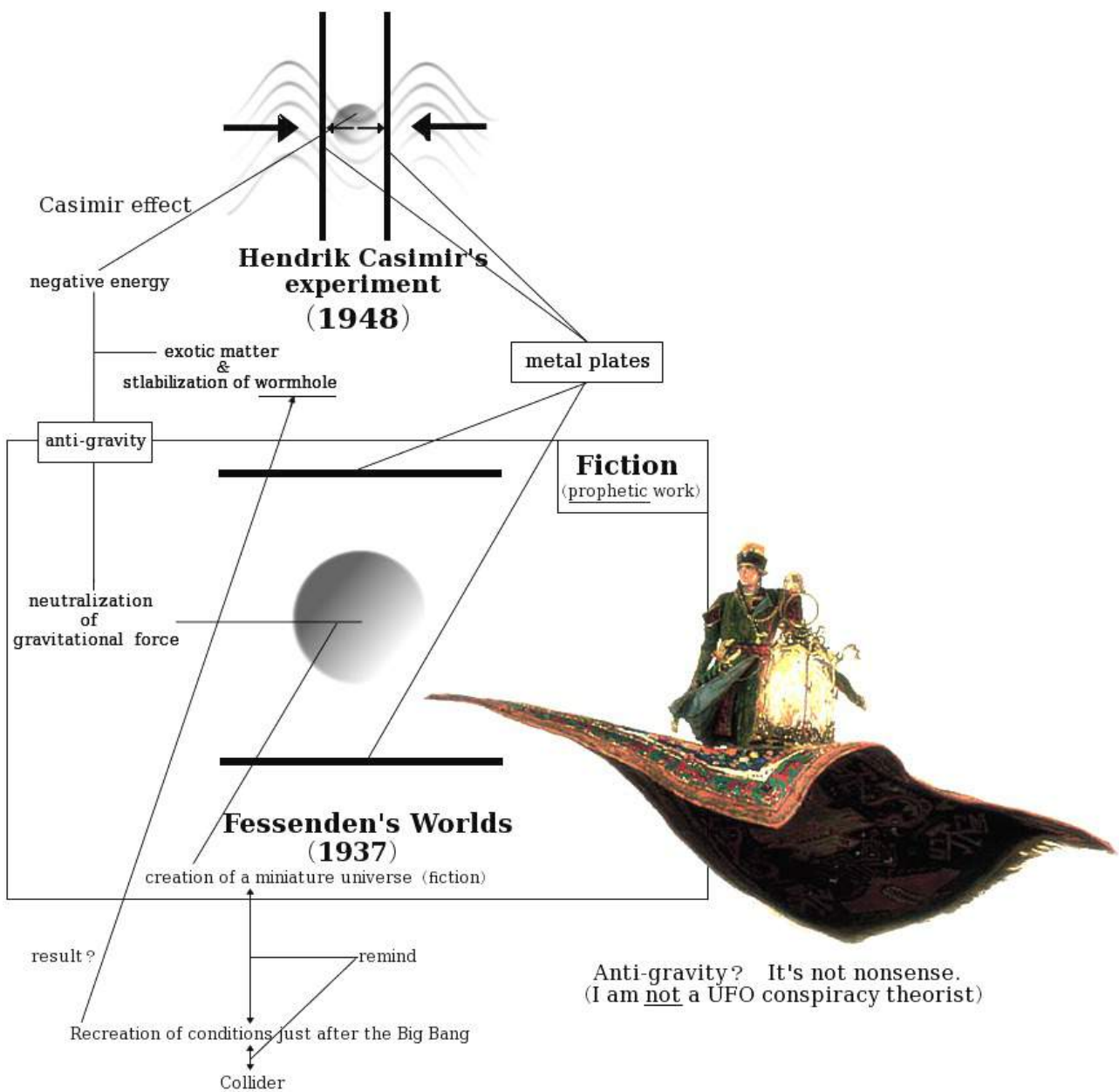
そこにて問題になるのは(クラーク三法則にあつて当てにならぬとされる)[頭が固くもなった老齢の権威]の申しようだけではなかった。ブラックホール生成の可能性が狂人の妄夢の如きものであると否定されていたとの往時ありようについては最先端に行く「高齢に達しておらぬ」物理学者らにも同じくものが当てはまっていた。後にノーベル賞を受賞したフランク・ウィルチェック(1951-)のような往時、脂ののった(と世間的には評されもしよう)物理学者、そして、また、本稿の冒頭部よりその申しようを引いているし、後の段にあつてもそのブラックホール生成理論まわりでの重きをもつての役割を解説していく女流物理学者リサ・ランドールの申しようでも同じくものこと、[ブラックホール生成は90年代にあつてはありえないと看做されていた]とのことが当てはまるようになっている(「彼ら」が大嘘吐きである可能性はここでは脇に置いている)。

そのような流れがある、少なくともクラークの第一原則では [こと] が済まされないとの事情変転 —— [加速器によるブラックホール生成はありえないことである]との論調が後に [ありうることである] と主張されるようになったとの変転 —— もあった中で

[科学理論 —— それら理論の適否それ自体は問題にならないし、(筆者も含めての) 門外漢が問題視すべきでもないとの科学理論 —— の変遷そのものを「異様に」克明に反映しもしている先覚的言及文物ら]

の特性のことを本稿では問題視してきたし、これより問題視していくとのこと、理解なして欲しい次第ではある。

(以上、長くもなったが、直上および直下の関係図にまつわるところの字面による解説はここまでとする)



(「A. から F. と区切りながら段階的に論じていく」と先述のことにつき、A. と振っての段はここまでとする)

## B

直上まで書き進めてきたところの A. と振っての段にて取り上げた短編小説『フェッセンデンの宇宙』には次のような局面が描かれもする。

神のように振舞う科学者フェッセンデンは[自己の造りだした極小宇宙]にて[人間とよりふたつの種族の文明]と[進化した爬虫類の文明]が別個独立に同じ太陽系に存在している状況を発見する。そこでフェッセンデンは針のような装置で片方の惑星をもう片方の惑星に接近させ、両者に闘争が起こるように仕向ける。結果、人間種族と爬虫類種族の戦争が始まるが、「爬虫類種族が人間種族を皆殺しにする」との結果に終わる。それを見て、フェッセンデンは「所詮は実験世界にての微々たる種族の宿命である」と非を鳴らした友人の物言いに冷笑でもって応える……。

どうして上のような筋立てをわざわざ問題視しているかについては、さらに後続する段にて解説するとし、上の通りの内容が短編小説『フェッセンデンの宇宙』に含まれていることを示すべくもの引用を下になしておくこととする。

---

出典(Source)紹介の部 25



# SOURCE

## 25

本段、**出典(Source)紹介の部 25**にあつては

[小説『フェッセンデンの宇宙』では主要登場人物フェッセンデンが自ら造りだした人工宇宙に介入し人類に似た種族の惑星と爬虫類に似た種族の惑星を結合なさせ、両種族の争いを誘発する（そして、爬虫類によく似た種族が人類によく似た種族を絶滅させることになる）との粗筋がみてとれる]

このことを引用によって示すことにする。

(直下、筆者手元にある河出書房新社より刊行の「文庫」版、最近になって世に出たとの版の方の『フェッセンデンの宇宙』収録短編集（『フェッセンデンの宇宙』掲載部は p.9 から p.34 となっているとの短編集） p.25 - p.26 よりの原文引用をなすとして）

---

それは黄色い太陽で、四つの惑星がその周囲をめぐっていた。そのうちの二つは大気がない世界だったが、残りのふたつは異なる生態の生物が棲息していた。片方は人間に生き写し、もう片方は爬虫類によく似ており、それぞれが自分の世界に君臨していた。

…(中略)…

両者のあいだには接触も通信もなかった。ふたつの惑星が、遠くへだたっているからだ。

「さて、気になっているのだが」とフェッセンデンが、興味津々といった顔でいっていた。「あのふたつの種族が接触したら、どういふ結果になるだろう。まあ、じきにわかるさ」彼はそういうと、もういちど針に似た装置のほうへ手をのばした。

またしてもか細い糸のような力線が、極小宇宙のなかへすーっとのびた。わたしは望遠鏡ごしにその効果を目のあたりにした。力線の命中したはずみで、片方の惑星が軌道を変えはじめたのだ。

…(中略)…

間髪をいれずに、狭い淵を渡って片方の世界から船が飛びはじめた。通信が確立された。するとたちまちふたつの世界のあいだに戦争が勃発した。人間に似た種族と爬虫類に似た種族の闘いである。

…(中略)…

闘いの帰趨は爬虫類に似た種族にかたむいた。彼らの侵略軍団が、人間に似た種族をひとり残らず血祭りにあげた。それで闘いは終結した。爬虫類に似た種族が、両方の世界をわがものとしたのだ。

…(中略)…

わたしは叫んだ。

「きみがあのもうひとつの世界と接触させなかったら、あの小さな人類は、ずっと平和と幸福のうちに暮らしていたんだぞ！なぜ放っておいてやらなかったんだ？」

フェッセンデンがいらだたしげにいった。

「莫迦なことをいうな、ブラッドリー。これはただの科学実験だ——ああいった蜚蜮(かげろう)みたいな種族も、やつらのちっぽけな世界も研究対象にすぎないんだ」

---

(訳書よりの引用部はここまでとしておく)

直近、文献的事実であると原文引用にて示したことは次のように「記号論的に」言い換えることができることとなる。

[[通過可能なワームホール]を構築するの役立つとされるエネルギーを測定するに至った手法であるカシミール効果測定技法(二枚の金属板を重ねそれを絶対零度まで冷やしてその動きを観測するとの 1948 年確立の技法)と相通ずるやりよう、[二枚の板を重ね合わせそこにての物理事象にあつての原子レベルでの変化を促すとの技法]で宇宙開闢をもたらしたなどという相応の空想小説(1937年初出の『フェッセンデンの宇宙』)にあつて開闢を見た極小宇宙の中で爬虫類系統の種族による人類種族の[絶滅戦]が展開される局面が描かれている]

※本稿この段の時点では「行き過ぎた話」になるところのの補足として

先に本稿で問題視した 1997 年初出の小説『ディアスポラ』は

[[肉体を持った人間のアトランタなどのコミュニティの成員]が[トカゲ座のガンマ線バースト]にて死滅の運命に追い込まれていく中、人類の生き残りはナノマシンにて脳をスキャンされて肉体が死滅する中で[別のもの]に代替させられ、結果、人間に「完全に」取って代わることとなったソフトウェア生命体らが[種子]をワームホール越しに他世界に送る — その試みの際には[長炉]と呼称される加速器が用いられる— との粗筋]

を伴っている作品となつてもいる(出典(Source)紹介の部 21-3(2)およびそれに続いての段にて表記・紹介のことである)。

といった作品たる『ディアスポラ』(通過可能なワームホールの先に[宇宙開闢に通ずるエネルギーを実現する加速器]を通じて種族の種子を送るとの筋立ての作品)と『フェッセンデンの宇宙』(通過可能なワームホールを実現すると考えられるに至った負のエネルギーの発見と結びつく手法で宇宙の開闢の状況の再現 — 加速器実験も宇宙開闢の状況の再現を謳っている— がなされるとの作品)の間にて

[「トカゲ座」にて発生したガンマ線バースト(人類に引導を渡すことになった『ディアスポラ』登場の現象) ⇔ フェッセンデンの構築した人工宇宙での惑星架橋の挙に起因する「爬虫類の」種族による人類に似た種族の皆殺し挙動]

との点に爬虫類つながりでアナロジー(類似性)を認めると、

「[爬虫類と結びつくものによる人間の絶滅]との設定が[ワームホールのことが問題となる内容]との兼ね合いで浮かび上がってくる」

とのことにもなる(:他の類例らに目が向けられずここまでの流れのみが着目される限り[あまりにもこじつけがましくもの行き過ぎての話をなしている]と「当然に」



思われるところであろうとは重々承知のうえで述べれば、である。

その点、『フェッセンデンの宇宙』に見出すことができると既述の、

[ワームホールの安定化に用いられると 80 年代後半より考えられている負のエネルギーを捕捉するに至った実験(1948年にその結果が物議を醸すことになったカシミール効果測定実験)との接合性]

[宇宙創成を企図しているなどと銘打たれたの加速器実験との宇宙生誕再現との意味での接続性および加速器が(宇宙再現挙動の中で)ワームホールを生成すると考えられるに至ったことにまつわる接続性]

は小説『フェッセンデンの宇宙』刊行がなされた 1937 年当時では想像だに及びもしなかったところともなっているわけだが、そう、それがゆえに[予言「的な」内容]も問題になると申し述べたいところであるのだが、(ここにて再度取り沙汰したとの)小説『ディアスポラ』については 一同作が世に出た時点(1997 年当時)にあつて[ワームホールの生成]が作中にて問題視されているのは—「既出のものとなっていた科学的予測に依拠している」と述べられるようになっている(先に解説なししている[人類の技術レベルでは実現不能とされるも仮説上の先進文明を顧慮すればのこととしての[プランク・エネルギーの投下]の話である)。といった中で、とにかくも、上記のような観点での類似性が見受けられるところとなっている。

それについては、(くどくも強調したきところとして)

『こじつけがましい』

『偶然の賜物であろうことに意味を求めすぎている』

としか述べられないことを「この時点では」述べているにすぎないが、長大なものとなっている本稿を最後まで読めば、それが「偶然の賜物で片付く」ものなどでは「断じてない」こと、よくも理解いただけるであろう)

(先にその内容を取り上げた『ディアスポラ』を引き合いにしたの補足の部はここまでとしておく)

さて、本稿の先の段([出典\(Source\)紹介の部 19](#))にては次のような内容の記事の引用をなしていた。

(直下、Attack of the Hyperdimensional Juggernaut-Men との題名で 2009 年 11 月 6 日付け(6th November 2009 付け)で発信されている The Reg( The Register / テクノロジー情報紹介商業ウェブサイト)の記事の冒頭部よりの「再度の」引用をなすとして)

A top boffin at the Large Hadron Collider (LHC) says that the titanic machine may possibly create or discover previously unimagined scientific phenomena, or "unknown unknowns" - for instance "an extra dimension".

"Out of this door might come something, or we might send something through it," said Sergio Bertolucci, who is Director for Research and Scientific Computing at CERN, briefing reporters including the Reg at



CERN HQ earlier this week.

(拙訳として)

「LHC 実験にかかわるトップクラスの科学者が巨大マシンは従前想像だにされていなかった科学的現象、よく知られていない未知の事柄ら、たとえば、余剰次元のようなものを発生ないし発見する可能性がある」と発言している。「この扉を通過して何かがあるかもしれないし、それを通じて我々が何かを送れるようになるかもしれない」

今週初頭の CERN 本部でのブリーフィングで当媒体 ( the Register ) の記者を含むレポーターらを前にして CERN のリサーチおよびコンピューティングの責任者であるセルジオ・ベルトリッチはそのように述べた」

(訳を付しての再度の引用部はここまでとする)

以上のような内容を有しての Attack of the Hyperdimensional Juggernaut-Men [超次元の絶対的不可抗力 (ジャガーノート) の力を有した者らの侵襲] にはそのページ遷移部にあって、「極めておどけながら (comical に) もの調子にて」

**So what have we got? Dinosaurs? Demonic soul-reapers? Parallel globo-Nazis? Hyperspherical juggernaut-beings?** (訳として) 「では、我々に何とまみえることになるのだろうか? [恐竜] か? [悪魔的な魂の収奪者] か? [並行地球のナチス] か? [超次元の絶対的不可抗力 (ジャガーノート) の力を有した者ら] か? 」

との表記がなされている。

以上のような[おどけ]を感じさせる部が[字義通り滑稽なもの]では済まされないの—— [事実きちんと向き合うこと] が [生き残るに値する種族としての必要条件] (残念ながら十分条件ではなかろうが、とにかくもの必要条件) であろうと考えている人間として—— これ以降、呈示していくこととする。

(「A. から F. と区切りながら段階的に論じていく」と先述のことにつき、B. と振つての段はここまでとする)

まずもって振り返りをなす。

本稿のここに至る流れにあつては

「 [科学界権威] が [特定の事] を述べているとの [事実] そのものが [科学理論の歴史的登場時期を示す資料] と共に存在しているとのことがある。

また、 [権威] が同じくもの [特定の事] を述べていることに関して存在しているとの、

[科学理論の歴史的登場時期を示す資料]

がそれ以前はいかなる者でもそういうことが述べることができたとは思えないことをそれ自体で指し示しているとのことがある。

他面、そうしたはきと見出せるとの(科学界の)権威サイドの特定の申しようの「登場経緯」とは全く平仄・辻褄が合わない、にも関わらず、登場時期の問題を除いてその内容だけに着目する限りは、そうした権威申しようと「不気味」かつ「異常無比」な形で平仄・辻褄が合うとのことら、言葉を換えれば、権威が後の世にてこれはこうであろうと事細かに説明してきたことと一致しているとのことが史的に見て長期にわたって、  
[(科学界の)権威の申しよう自体と全く関係ないところ]に数多存在していること、そして、(一呼吸置き)、そして権威が科学的裏付けを与える前から存在しているとのことらが「相互に」「多重的に」絡み合っ密結合関係を呈しているとのことが現実にある」

とのこと (本稿にて重きをおいていること) について解説なすうえで、

[ [加速器によってワームホールが人為生成されうる] との理論と —— 「理論の登場時期との兼ね合いでは辻褄が合わない」もの —— 内容面で不気味かつ異常無比なかたちで平仄が合うとの文物が [文献的事実] の問題として幾点も存在している]

との点について「一例」たるものを取り上げ、そうして挙げた一例の延長線上にさらに不快な「密結合」の関係性が横たわっているとのことを —「事実」と「証拠」に基づき— 摘示していくこととする、その運びにあつて「以降、[A. からF. と振っての分割しての指し示し]を順々になしていくこととする」とあらかじめ申し述べもし、A. および B. と振ってのことらの呈示をなした。

以上、振り返り表記をなしもしたうえで話を進める。



(C. と振っての部に入りもして)

さて、(唐突だが)ブルース・スターリングという米国人小説家がいる。

同ブルース・スターリング、

[サイバー・パンク小説の旗手]

として知られる作家である(※)。

(※サイバー・パンクとは:

サイバー・パンクとはその世界観にあつて[高度に進化したテクノロジーで人間が脳を含めての身体機能をオーダーメイド、自由自在に改造している]との意味で際立っての世界観を採用、の中にあつて、まるで往年のパンク・ロック・ミュージシャン及びそれに追隨のパンク・ファッションの若者らが自らをゴテゴテと着飾るようにテクノロジーで身体を改造しつくした登場人物らたちが「パンクな」(刹那主義的かつ享

樂的でありながら他面で反骨精神を有していると音楽シーンでは誇張されていたような) 生き方を是として奇想天外な冒険を繰り広げるといった類型の一群の SF 小説らのことを指す —— 定義をなす者によって色彩に差分が生じるどころか見受けられるが、「サイバー・パンクがサイバー・パンクたる所以は反骨精神、世界秩序そのものに抗う精神が必要である」との見方が呈されるところでもある—— )

好事家の世界以外であまり名の知られていない作家とは見るが、そのブルース・スターリングの [サイバー・パンク] 分野の代表作として、

### **Schismatrix 『スキズマトリックス』(1985 年初出)**

という作品がある( : 誤解なきように。同作、スキズ「マトリックス」という題名を有しているが、極めて有名な映画『マトリックス』で描かれたような仮想現実世界を舞台としているわけではない。映画『マトリックス』もまたそれ自体、サイバーパンク(サイバーパンクの用語説明は上にてなしている)的世界観を有しているのだが。 )。

そちら『スキズマトリックス』(1985) との作品、

[ [機械化とのかたちで後天的身体改造をなしている人間の派閥] と [遺伝子レベルの身体改造を先天的生体的になしているとの人間の派閥] が宇宙開拓時代の世界にてシュールな争いを展開しているとの設定]

を主軸としている作品となるのだが、その細かい内容はわざわざ本稿で問題にする必要はないと判じている。

「問題は、」同小説『スキズマトリックス』の中「にも」

[本稿の先行しての段、A. と B. にて摘示したこと —— (振り返りなせば) [A. 小説『フェッセンデンの宇宙』に関してはワームホール生成仮説、そして、ワームホール安定化仮説に相通ずる先覚的言及が見てとれるとのことがある] [B. 小説『フェッセンデンの宇宙』にあつては(加速器が宇宙開闢を企図しているものであるとされるように) [宇宙開闢]にて造られた摸造世界の中で[無理矢理つなげられた二つの星々]に関わるパートにて爬虫類の種族が人類近似種族を皆殺しにするとの粗筋が具現化を見ている] (振り返りの部はここまでとする) —— ]

と「記号論的に」部分的に相通ずるところがあるとの描写がなされていることである。

『スキズマトリックス』(1985) では同作中盤、

[リング状トンネルが穿たれたアステロイド居住コミュニティー(エサイリス 12 と呼称されるもの)にあつてのリング状形態を取る射出機(ローンチ・リングと呼ばれるもの)にての死闘が繰り広げられている最中に[作中主軸として描かれている[機械化人間閥]と[生体改造人間閥]の闘争]を停止させる契機となったこと、爬虫類系統の種族と人類が接触するとの事態が勃発する(異星文明と人類文明のファーストコンタクトが実現される)との描写]

が極めて印象深くもなされている。

さて、上に見る、

[リング状トンネルが穿たれたアステロイド居住コミュニティー(エサイリス 12 と呼称されるもの)にあつてのリング状形態を取る射出機; [ローンチ・リング]と呼ばれるもの]

は原理的に[加速器]と接合し、また、構造的にも現行 CERN が運用しているラージ・ハドロン・コライダーと接合するとのものでもある。

どうということか。

小説『スキズマトリックス』に見る[ローンチ・リング]というのは巨大な円形トンネルの中をレーンガン（注）の原理を用いて加速させた貨物を射出するとの宇宙時代の物資輸送法（下に指し示す[マス・ドライバー]というもの）としてその実現可能性が現実世界でも検討されているとの装置であるが、そこにいうローンチ・リングの[巨大な円形トンネルの中で物質を加速させるうえで用いられるとのレーンガン（注）の原理]というものが粒子加速器（particle accelerators）と少なからずの機序を共有しているということがあるのである。レーンガンについては[ローレンツ力]（lorentz force）を利用しての加速をなすとの機序にて知られる。ローレンツ力というのは[電場中で運動する荷電粒子が受ける力]のことであるが、ローレンツ力の[荷電粒子を曲げる]との作用を利用して円形加速器もまた[荷電粒子に円形軌道を描かせる]ものであると説明されている。

したがって、

[[巨大円形トンネルの中のラージ・ハドロン・コライダーよろしくの作用(ローレンツ力利用によって荷電粒子の軌道を曲げるとの作用)と結びついた小惑星体(アステロイド)の内部に穿たれた巨大なトンネルの中でのローンチ・リング施設]の中で死闘が繰り広げられ、その最中に人類が[爬虫類の異星種族]と接触する]

というのが『スキズマトリックス』の粗筋であるとも言え換えられるように「なっている」(: 尚、小説『スキズマトリックス』ではローンチリングの死闘の中で唯一生き残った主人公らが恐竜状の似姿をとる爬虫類の異星人との先んじての交渉に成功し、交易上の特権を得たために勢威を誇るに至ったなどとの粗筋設定がなされている)。

---

出典(Source)紹介の部 26



SOURCE

26

ここでは

「[マストドライバー]という装置に内包されるのが[ローンチ・リング]というものであり」

「同ローンチ・リングをはじめとした[マストドライバー]はレールガン(電磁投射砲)というものと同様の原理で加速をなしているとのものであり」

「レールガンの加速原理はローレンツ力を用いているとのことでは円形加速器をはじめとした高エネルギー物理学分野でも用いられる加速器と同質である」

ということの出典を容易に確認せるとの目に付くところから挙げておく(:それにつき『スキズマトリックス』の[エサイリス XII(後述)]が円形加速器——ラージ・ハドロン・コライダーが地下に全長 27 キロメートルのトンネルが穿たれてのそうしたものであるとの円形加速器——と同様の原理を用いられてのものであることは流布されている技術概念にまつわることであるので——「たかが、」付きで述べてもいよいような媒体であるが—— 筆者が「過てるところない」と確認している「現行の」和文ウィキペディア複数項目よりの抜粋をなしておくこととする)。

(まずもって直下、和文ウィキペディア[レールガン]項目にての現行記載内容より中略なしながらももの引用をなすとして)

---

レールガン (Railgun) とは、物体を電磁誘導(ローレンツ力)により加速して撃ち出す装置である。なお、電磁気を使う投射様式全般の呼称としては、電磁投射砲(でんじとうしゃほう)や EML( ElectroMagnetic Launcher )、電磁加速砲などがある。  
…(中略)…

この装置は、電位差のある二本の電気伝導体製のレールの間に、電流を通す電気伝導体を弾体として挟み、この弾体上の電流とレールの電流に発生する磁場の相互作用によって、弾体を加速して発射するものである。

---

(引用部はここまでとする)

(次いで直下、和文ウィキペディア[加速器]項目にての現行記載内容より中略なしながらももの引用をなすとして)

---

加速器(かそくき、particle accelerator)とは、荷電粒子を加速する装置の総称を言う。原子核/素粒子の実験に用いられるほか癌治療などにも応用される。  
…(中略)…

円形加速器 荷電粒子は磁場中を通るとローレンツ力を受けて曲げられる。これを利用して荷電粒子に円形の軌道を描かせながら加速する加速器を作ることができる

---

(引用部はここまでとする)

(さらに直下、和文ウィキペディア[マスドライバー]項目にての現行記載内容より中略  
なしながらも引用をなすとして)

---

マスドライバー ( Mass driver )とは、惑星の衛星軌道上や衛星の周回軌道上に物資輸送を大量輸送に向くよう効率良く行うための装置/設備/施設で、地上から第一宇宙速度にまで加速したコンテナなどを「放り上げる」物である。

…(中略)…

ローンチ・リング アメリカ空軍とローンチ・ポイント社が共同で研究を進めている。巨大な円形のレール上を回りながらレールガンの原理を利用して加速し、第一宇宙速度に達した時点で発射用のレールに入り打ち上げられる。この方法は約 2000G の加速度がかかるため精密機器を除く物資の輸送に使われるものと思われる

---

(引用部はここまでとする)

(**出典 (Source) 紹介の部 26** はここまでとする)

---

以上をもって

「[マスドライバー]という装置に内包されるのが[ローンチ・リング]というものであり」

「同ローン・チリングをはじめとした[マスドライバー]はレールガン(電磁投射砲)というものと同様の原理で加速をなしているとのものであり」

「レールガンの加速原理はローレンツ力を用いているとのことでは円形加速器をはじめとした高エネルギー物理学分野でも用いられる加速器と同質である」

とのこと(基本的なところからの)典拠紹介とした。

さらに、小説『スキズマトリック』(1985)が以上のような円形加速器と極めて近しい作用機序・形態を有してのローンチ・リングの中の死闘、次いで、爬虫類型の異星生命体との邂逅を描く作品であることの出典紹介をなす。





# SOURCE

## 26-2

ここでは小説『スキズマトリックス』にあって

「エサイルス XII と名付けられたアステロイドの中に設けられてのローンチ・リング(全長 500 メートル)上での人間同士の死闘がなされている最中に人類と異星人とのファースト・コンタクトが成立し、ファースト・コンタクトなしたその異星人が[恐竜のような姿態の爬虫類状の生物]であった」

との粗筋が採用されていることにまつわる出典を原文引用とのかたちで示していくこととする。

(直下、本稿筆者手元にある邦訳版『スキズマトリックス』(早川書房文庫版)p.139よりの原文引用をなすとして)

---

そのアステロイドはエサイルス八十九-XIIと呼ばれていた。これまでそれがもっていた唯一の名で、むかしのカタログからとられたものだった。エサイルス XII はじゃが芋型の、長さ〇・五キロの岩滓(スラグ)の塊だった。

---

(訳書よりのまづもつての引用部はここまでとする)

(次いで直下、本稿筆者手元にある『スキズマトリックス』(早川書房文庫版)p.143よりの原文引用をなすとして)

---

「わたしたちが停泊しているのは、彼らの発射リングの出口のすぐ先です。長い円形トンネルで、岩の重心のまわりをリング状にと

り巻き、表面のすぐ下は空洞になっていました。加速用に磁力片と磁力発射バケツのようなものがついています」

…(中略)…

「ほんのちょっとのブーストでスタートし、そのバケツを帯磁させてもちあげる。磁気クッションにのったら加速し、しばらくびゅんびゅんまわしてやり、出口のすぐ奥でブレーキをかけるのさ。バケツは速度を落とすが、貨物のほうは秒速数 K で飛び出すって寸法よ」

---

(訳書よりの引用部はここまでとする)

以上引用なしたところは

[『スキズマトリックス』の舞台となる [エサイルス XII] との宇宙空間生産施設が [ローンチ・リング] と呼ばれる加速器類似のマス・ドライバー (直上、出典 (Source) 紹介の部 26 にて先述) として機能している]

ことが表記されての部となる (: 疑わしきにおかれては“長い円形トンネルで、岩の重心のまわりをリング状にとり巻き、表面のすぐ下は空洞になっていました。加速用に磁力片と磁力発射バケツのようなものがついています…(中略)…そのバケツを帯磁させてもちあげる。磁気クッションにのったら加速し、しばらくびゅんびゅんまわしてやり、出口のすぐ奥でブレーキをかけるのさ。バケツは速度を落とすが、貨物のほうは秒速数 K で飛び出すって寸法よ”との直上にて引用なしたところの記述とつい先立っての [出典 \(Source\) 紹介の部 26](#) の内容を比べ見ていただきたい)。

続いて、そのローンチ・リングで『スキズマトリックス』作中、死闘が演じられたとの筋立て、そして、その死闘の最中に異星種族が来訪したとの内容がその通りのものとして存在することを示すオンライン上の記述よりの抜粋をなしておく。

(直下、英文 Wikipedia [Schismatrix] 項目の Plot summary (粗筋要約) の部の一部よりの引用をなすとして)

---

Lindsay joins a ship called the Red Consensus, which doubles as the nation-state of the Fortuna Miners' Democracy, after the failure of the previously independent asteroid-mining Mechanist cartel. The FMD, financed by more more wealthy Mechanists cartels, annexes the asteroid Esairs XII, home to the Mavrides family, a small shaper clan. [ . . . ] The two of them work to promote peaceful coexistence between the Shaper militants and the Mechanist pirates, but after several months of conflict, espionage, murders and sabotages, open fighting breaks out. [ . . . ] Before the asteroid's life-support systems shut down after the battle, the alien Investors arrive.

(補いつつもの訳を付すとして)

「リンジー (訳注: 小説『スキズマトリックス』主人公) はレッド・コンセンサンスという船 —— 同船は [以前の機械主義者小惑星体カルテルの失敗の果てに生まれたとのフォルトゥナ鉱夫民主国] (訳注: 僅か 12 名よりなるい

わゆる超マイクロ国家で実質は海賊団が国家的体裁を取っているとのもの)としての顔を持っていた——に乗船することになった。

FMD (フォトゥナ・マイナーズ・デモクラシー;フォルトゥナ鉦夫民主国)はより豊かな[機械主義者カルテル]から援助を受けて、[工作者] (訳注:小説『スキズマトリックス』にて描かれる人類世界を[機械主義者勢力]と二分する勢力で[機械主義者]が生来の肉体を尊重しながら機械で自らを拡張していくのに対して自らの生来の機能を遺伝的に工作改変するとの挙にまで及んでいるとの勢力)の小さな一族、マルブリデス・ファミリーの拠点となっているエサイルスXII (訳注:上に既述のように Launch Ring「ローンチ・リング」との形態を取る場に設けられている宇宙プラント)を併呑するとの挙に出た。

…(中略)…

彼ら (訳注:乗っ取り挙動に出たフォルトゥナ鉦夫民主国サイドと暴力的に併呑されたエサイルス12の運営陣であったマルブリデス・ファミリー)は[工作者勢力の闘士ら]と[機械主義者勢力の海賊]との間柄ながらも平和的共存を推進するようになんとか努めたが、数ヶ月の諍い、スパイ活動、殺人、そして、サボタージュ活動の後、公然とした戦いが幕を開けた。

…(中略)…

戦いの後、小惑星体付設の生命維持システムが停止を見る前に、エイリアン種族[投資者] (訳注:宇宙空間に散ってまで争いを止めなかった作中の人類が初めて出会った外宇宙知的生命体と描写され、巨大な筋肉質の外形を取る恐竜類似の鱗で覆われた尻尾を持つ存在とされる;同じくも英文 Wikipedia [Schismatrix] 項目の [ Races in "Schismatrix" (小説『スキズマトリックス』登場の種族) ] の節のところに The Investors: Massive reptilian-esque aliens, interstellar traders who closely guard the secret of their starflight. 「[投資者(インヴェスターズ)]は巨大な爬虫類型のエイリアンであり、固く彼ら宇宙航行の秘密を保持しているとの恒星間貿易商人である」と記載されているとおりである)が(人類の文明圏に)到達することになった」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする —※— )

(※ —— 読解意欲があれば、のところとして —— 直に訳書でも読まれてみればお分かりいただけようが、上のような大要表記が英文ウィキペディアにてなされているところに関わるところで

[小説主人公を含む人間同士の死闘 ——機械主義者勢力に属する極小国家共同体と生体改造主義者勢力(作中表記:工作者)に属する氏族らの間の死闘—— が行われていたローンチ・リングとしての円形型レールガン付施設たる[エサイルス12]の近辺にも爬虫類の異星種族が訪れたとの描写が劇的なものとしてなされていること]

[円形型レールガン付施設たる[エサイルス12]が人類が初めてコンタクトを取るようになった外宇宙種族である[投資者](爬虫類型エイリアン)との交渉の際に爆破されたこと(要するに円形加速器類似のものが爬虫類の異星種族の来訪者との交渉のシーンに前後するところで爆破されたこと)]

とのストーリー展開もが小説『スキズマトリックス』にては具現化を見ている。

それにつき、そうしたことと複合顧慮すべくものこととして作中にて[機械主義者]に対抗する勢力と描写される[工作者(シェイパー)]と呼称される身体改造人類の一大派閥が[リング議会]という統治機関に主導されているとの描写がなされていることまでを顧慮すれば(要するに1985年小説作中では[「リング」議会]に主導されての一大派閥の拠点が[円形加速器類似構造体としてのローンチ・リング]となっており、そこで双方の人類陣営が死闘を繰り返しているうちに爬虫類型のエイリアンが来訪を見、の過程でローンチ・リングを爆破するとの筋立てが採用されているとのことを顧慮すれば)、何が問題となるのか、自ずと理解できるだけの話を本稿の続く段ではなしていく所存である——世間人並みの人間の目線で見れば、『何をくだらないこと、フィクション作中の中の物語の流れなどにつき延々と云々しているのか』との誤解を招いて当然のことを述べているのは百も承知の上だが、仮に「爬虫類の種族の来寇・来訪の比喻が」「時期的にあってはならないとの予言(前言)的言及をなしているとのものも含めての文物「ら」の中に」「多重的に入れ込まれており」「そこに破滅の寓意が垣間見られ」「そのことに(ローンチ・リングどころか)加速器そのものの寓意が奇怪かつ隠喩的に入れ込まれている」とのことがあれば、どうか。そういう話が「偶然」を否定する方向でなせてしまう(機序はともかくも[現象]の問題としてなせてしまう)とのことを摘示しようというのもまた本稿であること、強くも断っておく——)

(出典(Source)紹介の部 26-2 はここまでとする)

---

出典としての直近引用部の内容も受けてのこととし、上について「何が何故、問題となるのか」といえば、「とりあえずもは、」次のようなことが述べられるがゆえに問題となる。

小説『スキズマトリックス』(1985年初出)が

[加速器実験] → [宇宙開闢／ワームホール生成の双方要素と接合] ← [『フェッセンデンの宇宙』(爬虫類種族の操作されての来寇を描く作品でもある)]

との関係性を既に説明した『フェッセンデンの宇宙』(1937年初出)と同様、小説『スキズマトリックス』が

[加速器と結びつく事物] [爬虫類型別種族との遭遇]

との要素を「共有」していることが——時期的問題も顧慮に値するところとして——記号論的に摘示できるようになっている。

ここまでの内容を振り返りもし述べれば、

「[加速器によるワームホールやブラックホールといったもの的人為的生成]といったこと

が 1930 年代に想起されていたわけではなく、また、[マイナスのエネルギーやそれと結びついた反重力]といったものが同じくもの 1930 年代に顧慮されていたわけでもなく、況や、[ワームホールがマイナスのエネルギー(の斥力、反重力的なる作用)を伴った物質で安定するとの発想法]などがその時代にて存在していたわけではないのだが(これは筆者主観などの問題などでは全くなく[本稿にて指し示してきたとの科学史の流れ]から事情を知る者には異論無くも[真]ととられるところである)、にも関わらず、1930 年代に登場したフィクション『フェッセンデンの宇宙』の時点で同作が

〔現時に至っては加速器によってこそのみ可能とされている)宇宙創成状況の再現を描く小説〕

となり、かつ、

〔カシミール効果測定実験(1948年実施のもの)に先だつてその実験結果と結びつく[マイナスのエネルギー](既述のようにワームホールの類を安定化させるものとして1980年代、物理学者キップ・ソーンによって持ち出されたエキゾチック・マターと濃密に関わるもの)のことを想起させるもの ―反重力作用― をカシミール効果測定実験類似の行為(二枚の金属プレートを対面させるとのやりよう)の中で持ち出している小説〕となっているとのことが「奇怪にも」現実にある」

「以上のような観点から「奇怪な」フィクションと述べられる『フェッセンデンの宇宙』(同小説自体は加速器のことを持ち出しているとの作品ではないが、同小説は今日の加速器実験の結果と同様の状況、[宇宙開闢の状況の再現]がテーマとされているとの作品ともなる)と別小説の『スキズマトリックス』(円形加速器類似のもの(ローンチ・リング)を登場させる小説)が 〔加速器「類似」の効用・効果を持ったもの〕 を取り扱っているとの段で双方ともに 〔人類と爬虫類の異種族の接触〕 を描いていることは不気味である」

ということがある(：換言すれば、ここ C. の段の話も A. と B. と述べてきたことと接合することとして不気味さを感じさせるものとなる)。

だが、しかし、この段階では「まだ」次のように思われる向きもあろうか、と思う。

『ただの微少的な一致性を拡大鏡で拡大させきれるところまで拡大させてそれを針小棒大に振り回しての印象論にすぎない。そう、インターネット上で愚にもつかない ―としか形容のしようのない― 属人的印象論を振り回している相応の筋目の人間らの物言いとなんら変わらないのであろう』

当然にそうも思われて然るべきところであろう。だからこそ長大なものとなっている本稿の続く内容がある、そう、

「ここでの話からして [一例] にすぎぬ(ゆえにひとつに問題となる)」

とのことを順次摘示していくことになるとの続く内容があると申し述べましたうえで、「(「A. から F. と区切りながら段階的に論じていく」と先述のことにつき、C. と振っての段に一区切りを付けて)、話を続く段に移す。

(「A. から F. と区切りながら段階的に論じていく」と先述のことにつき、C. と振っての段はここまでとする)



唐突に唐突続きではあるが、[映像]が「当然に」残っているところであり、流布されているとの[記録的事実](にして視覚的事実)の問題として

[片方の上階に風穴が空き、と同時に、片方が崩落するとのツインタワー]

をワンカットにて描写しているとの映画が存在している。

などと述べれば、当然に

『先の911の事件に材を取ったドキュメント映画か何かか』

と思われるところだろうが、そうとは述べられないところに問題がある。

その点、

[片方の上階に風穴が空き、片方が崩落するとのツインタワーの描写]

を描いた映画とは、である。ツインタワーに二機の飛行機が立て続けに衝突し、その後、ツインタワーが完全崩落を見たとのかの911の事件が起こった2001年、その「前」に封切られた映画、1993年に公開を見た映画となり、その題名は

**SUPER MARIO BROS.『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』**

となる(：世事に疎いとの高齢者ではない多くの向きらは[スーパーマリオ]などと聞くと[赤い服にMマークの入った赤い帽子の鬚面の男が亀の軍団と戦うとの有名なビデオ・ゲーム『スーパーマリオ』シリーズ]のことを想起するところか、と思うが(今や経済社会の一大プレーヤーにのし上がった任天堂社の揺籃期の稼ぎ頭となっていた商品のことを想起するところか、と思うが)、上映画はそのスーパーマリオシリーズを個性派ハリウッド俳優として知られたデニス・ホッパーなど起用のうえで鳴り物入りで映画化したとの作品となり、主人公マリオが一ゲーム版に登場する亀の勢力ではなく一恐竜人の勢力の侵略行為に立ち向かうとの筋立ての作品となっている)。

---

出典(Source)紹介の部 27



SOURCE

27



ここでは映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』がいかようにツインタワーを登場させているのか、それについての出典紹介をなしておく(つまりと、それが当該映画の中のツインタワー崩落描写と関わる場所となる)。

(直下、ワールド・トレード・センターが大衆文化の中にあっけいかに描かれているのか、その一部を紹介しているとの英文 Wikipedia [ World Trade Center in popular culture ] 項目の一覧表記部よりの部分抜粋をなすとして)

---

[ Date:1993 Title: Super Mario Bros. Set in: 1993 ]

The Twin Towers become the "Koopa Towers" in the film's parallel dimension, which is a dinosaur-laden Manhattan run by antagonist King Koopa (Dennis Hopper). The North Tower features a sharpened top while the South Tower is unfinished with a jagged top. Both are adorned with Koopa's signature K symbol. The towers briefly replace the World Trade Center towers in Manhattan when the two worlds are merged for a short time.

(訳として)

「日付:一九九三年、映画タイトル: Super Mario Bros. (邦題)『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』

映画にての並行次元、デニス・ホッパー演じる悪役クッパ大王にて統治される恐竜国家首府マンハッタンにてツインタワーは[クッパタワー]と化している。サウスタワーの方はぎざぎざ状態で未完成の状況にある中、ノースタワーの方はきちんと整えられての頂上部を具備したものとなっている。両タワーともクッパ Koopa 頭文字記号たるケのシンボルで装飾されたものとなっている。それら二つの塔は二つの世界が短時間、融合した折に、ワールド・トレード・センターのタワーらが一時的にすり替わったとの存在である」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上、引用なしたところのウィキペディア該当項目にあっけいでは現行そこまでは記載されていないが、現実世界のツインタワーが並行世界の恐竜帝国首府と化すとの筋立てが

[片方の上階に風穴が空き、片方が崩落するが如くのツインタワーのワン・カット描写]

と結びつけられているとのことがある(:[変異のプロセス]が[崩落のプロセス]「とも」見立てられるように映画が撮られている)。

そちらについては「百聞に一目に如かず」とのことのでグーグル検索エンジンに[ 911, Super Mario Bros.]などと入力して表示されてくる YouTube の動画情報にて確認いただきたい次第である ——につき、同様のクエリ(検索エンジン問い合わせ文)にては[[重要なること](真実のみが人間を救うると「当然に」判断した場合の[重要なること]である)を[相応の陰謀論の類]にでもすり替えたいのか]といった按配のどぎつい媒体、わざとらしくも稚拙なおいを醸し出している風ありの相応のどぎつい媒体も表示されてくるようだが(ここ最近になって「英語圏も含めてわざとらしく如何物がかった媒体が検索エンジンの相応のキーワードにて目につきやすくなっている節がある」と経年観察する中で筆者などは判ずるに至っている)、相応の媒体、他のやりようを受けもして進化している節もある(悪い意味で進化している節もある)とのそうした媒体らに見る劣った文字情報(あるいは捏造臭ある劣った画像情報)ではなく、本件については、「とにかく

も」流通映像情報を重視していただきたい次第ではある——。

One scene of SUPER MARIO BROS. (1993 film)



本稿本段執筆時現時点にあって確認可能となっているところとして「2013年から」国内「でも」DVDコンテンツとして Super Mario Bros.『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』(1993)は流通するようになっている。その点もってして現時点では大手レンタルチェーンでもおおよそ在庫として取り扱っていない程度の流通性向かと受け取れもするのだが(ビデオテープ版ではなくにも)流通を見はじめていることを確認したそちらDVD版『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』一尺104分(あるいは105分表記)の本編内容を全部カットなしに収録しているとのありようのもの— にあって「も」後半部、

**再生時間【01時間30分31秒】から【01時間30分34秒】**

の3秒間にて上にて呈示の通りのシーンが具現化していることがチェックできるようになっている。いいだろうか。異次元の恐竜帝国とこの世界の再結合(リ・ユナイト)の過程にまつわるものとして上に特徴示しての通りのシーンが立ち現れていることはすぐにチェック出来るわけである(であるから、確認をなしたいとの向きは意欲あるならば(なんとか)レンタルなどなしてDVDを手元に置き、のうえて、秒単位で指定の通りの部を確認されたい)。

ツインタワーの片方がまずもって崩れ、次いで、もう片方に(異次元の恐竜帝国のクッパ・タワー(なるもの)の特徴的なぎざぎざ装飾ありように照応するよう)に風穴が開く。まさにそのプロセスにあって飛行機(Airplane)かなにかかかど「？」付きで受け取れるものがワールド・トレード・センターのツインタワーの合間の中空を横切りもしている。—※DVDでも確認出来るところの【飛行機か何かか受け取れるものが崩れゆくツインタワーを横切るとのありよう】については映画封切り当時からノン・リニア編集でそういう描写が演出の一環といった名目に入れ込まれているのだと解される(現時、海外由来の動画などで動画サイトにて映像抜粋されて紹介されている通りである)—。 そういうシーンが確認出来る。

さて、以上のような描写 —ツインタワーが崩れ、上階に風穴が開きもする(そしてツインタワー背景には飛行機がかかたものが横切るとのそのありようも加え

て言及しておくべきか)とのおよそ数秒の描写— が見てとれるために

『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』

については

『(飛行機が上階に風穴を開けるかたちでツインタワーに突っ込み、そして、タワーの倒壊を見たとの事件である)911の予見映画ではないのか』

と欧米圏の一部にて取り沙汰されてきたとの背景がある作品となるわけではあるが、そういう視点で見ると、映画序盤よりブルックリン—ニューヨークのマンハッタンに面してのブルックリン地区—を疾走する配管工の主人公ら(マリオとルイーダ)が用いる業務用車輦にあって青文字でペイントされている【Mario Bros.】のMの字の部分、同部部が左端の独特の傾斜角などをもってして「911の一筆表記」とも露骨に見えるようになっていたとのことについて「も」色眼鏡越しで見たくなるのは避けられない(：作中、街を疾走するシーンが何度も出てくる主人公ら業務用車輦のそうした911を想起させるペイントのありようについては映画を少し注意しながら観察していれば普通に気づけるようになってはいるが、敢えて指摘すれば(DVDコンテンツが国内でも流通するようになってはいるとの背景を受けて敢えて指摘すれば)、同じくものが確認可能となる序盤部のシーンはDVD再生時間【00時間05分51秒】あたりのシーン(本編開始後5分から6分経過後のシーン)からである)。に関してはアメリカの緊急時呼びだし番号—警察・消防・急患を兼ねての呼びだし番号—がかの911の事件が発生する前から911番となっていたとのことがある、であるから、日本の水回りトラブル対応業者の類が彼らの宣伝用チラシなどに「水回りトラブル110番」などとの売り文句を入れ込んだりするのと同じくもの意図を兼ねての「確信犯的な」(そして「常識的に説明できる」)演出の一環と受け取れる素地もあるのだが(そうもして常識的に説明できることであるから筆者としてそちら911を想起させるペイントにまつわってのことまでを取り立てて強くも問題視しようとは思わない)、ただ、

【異世界の恐竜帝国(と描写されるもの)とこの世界のツインタワーが当該のナンセンス・フィクションにあって融合するシーン(コメディがかった異世界の首班がこの世界の資源を総取りして、人間は逆進化・脳破壊するとの企図の中で融合が一時実現するシーン)】

にみとめられるその不気味さが

【偶然の一致(only-co-incident)に対する過度の重み付け】

の問題で済むのか、あるいは

「まったくもってそうではない(意図的 deliberate である)」

と判じられるのか(こちら「そうではないと判じられる」(偶然の一致で済ますことなどできはしない)とのことに関してはその「そうではない」ところの判断材料が実際に呈示されてこそ訴求が要をなすところとなるのは論を俟たないであろう)、とにかくもってして、本稿では同じくもの問題にあまりにも接合する—そして意図の先に何が透けて見えるのかの問題を指し示す—との、

【警鐘として意をなすだけの(語りかける対象が脳を壊された者でない限り本来的には意をなして然るべきだけの)具体的材料】

を山と呈示していくとの所存である(なおもってして荒唐無稽映画を重要視していることについては「稚気に溢れた子供向けのフィクションに意味が込められることもあることを否定することはできまい」とのことも強くも申し述べておきたい。その点もってしてハリウッド・スーパーマリオ映画の製作プロダクションは—お調べいただければお分かりいただけようところとして— Allied Filmmakers との

プロダクションとなるのだが、【アライド(共同の)】とのところを【オール・ライド(全て欺瞞の賜物である)】との二重話法 Double Meaning と解釈する見方さえ出来てしまうと手前などは見ているのだが(実際に同プロダクションがマリオ映画とほぼ同時期に世に出した The Thief and the Cobbler とのアニメ・フィクションもまたイラク戦争に通ずる予見文物だと指摘する動画が YouTube 等で流通していたとのことがある／【大団円で異世界の独裁者は破滅を迎え、融合と人類放逐の意図は失敗する】とのマリオ関連映画ストーリー自体がそれを無批判に見る者達を愚弄する意図も兼ねての欺瞞の賜物である可能性もあると述べたいのである)、 そうもした言いようを無条件に容れるとは言わない。

代わりに筆者が呈示の論拠をきちんと検証いただきたいと申し述べたいだけである 一宗教の徒輩などは「坊主憎ければ袈裟まで憎い」との論理で聞く耳など持たぬし言論排斥・封殺をなすだけだ、いや、そも、そも、そもした論理を押しつけるための統制装置としての宗教であろうともこの身などは思うわけだが(属人的ありようと客観的論証を感情的にごっちゃにして彼ら流のゴミ箱に彼らの未来をも本来的には救いうるはずの真実をも組織的に放擲することになる傾向が宗教団体にとみにあるかとはこの身が [実際に観察してきた傾向] より判じていることなのだが)、【滅び行く種族の特性】を身に負っていない(とのつもりである)との向きらにはとにかくもってして透徹した視点で「批判的に」「(疑いながらも)にて)この身申しようを検証いただきたい次第ではある一)。

(出典(Source)紹介の部 27 はここまでとする)

## 同映画 SUPER MARIO BROS. 『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』の

[穴が上階に開きつつも崩落するツインタワー]

の 1993 年にあるワカッパによる先覚的描写の問題については本稿を公開しているサイトの一にてでも取り上げていたことである。

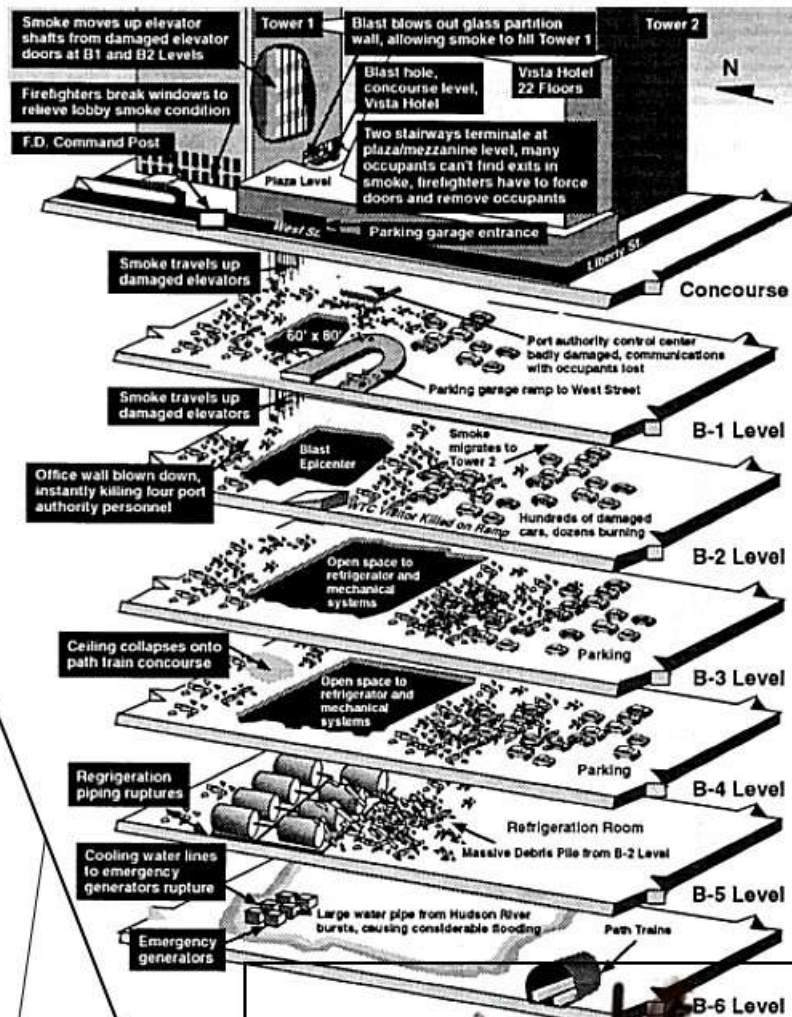
すなわち、

「映画の先覚的描写については映画が封切られたとの同年(正確には映画公開のおよそ三か月前)の 1993 年に WTC ツインタワーの地下駐車場が爆弾テロの標的になったことが原因であるなどと指摘されること「も」ある(そのように目立って質問に答えるページが検索エンジン上位に表示されてきたこともかつてあった)。

であるが、より露骨なる「他の」911 事前言及作品群が存在しており、それら作品群に見る先覚性と同映画(『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』)に見る先覚性を複合考慮することで「人を食ったような嗜虐的寓意の問題」が見えてくるとのことがある」

とのことがあるのかたちで同じくものことについて考えていたとのことがこの身にはある ( : にまつわってのこととし、本文をしたためもしている本稿の後の段にては [911 の露骨なる予見作品群「ら」] がいかようなものなのか、国内レンタルショップで借り受けられる流通 DVD コンテンツらの再生時間を秒単位で指摘しながらもの概要解説を細かくもなしていく所存でもある)。

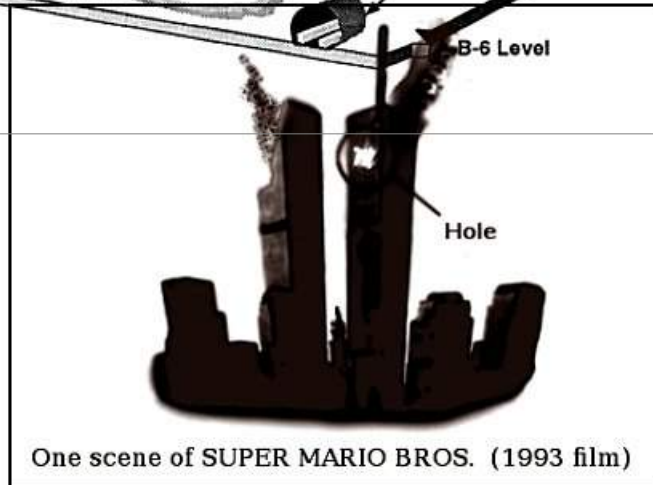




Underground damage  
of 1993 World Trade  
Center bombing

February 26, 1993

not similar .



One scene of SUPER MARIO BROS. (1993 film)

Release date : May 28, 1993

1993年のテロ事件についてはウィキペディアのような媒体の日付表記部からすらも多く確認できるようになっているとのことではあるが、

[1993年にあるのイスラム過激派(後の911の事件の主犯格の一人と一般には説明されているハリド・シェイク・モハメドの甥にあたるラムジ・ユセフとの男に指揮されての過激派)によるツインタワー地下駐車場にての爆破事件の発生日時は[2月26日]となっており、その被害態様はビル本体には重篤な影響を与えていない——「ビル倒壊を最終的に目標となされた爆破テロであった」との捜査結果が

出されているわけだが、ビル本体には重篤な影響を与えていない—— どのものであったとのことがある]

[1993 年にあつての映画『スーパーマリオ 魔界帝国』の公開日付は[5 月 28 日]となっており、そこにては映画公開 3 ヶ月前に発生した地下駐車場の爆破事件とは異質な描写、[上階に風穴が開き、かつ、崩落を呈するとのツインタワー]をワンカットで描いての描写がなされている]

とのありようが指摘できるようにもいる（上掲の図は 1993 年の事件についてのまとめがなされた Wikipedia[ 1993 World Trade Center bombing ]項目にて掲載の被害態様解説図 —— 地下 2 階で爆発した爆弾が地下駐車場に広範囲に亘ってのダメージを与えたことを解説しているとの図—— となる）。

問題となる映画のその問題の因となっている描写を含む場面が何時撮られたのか（映画公開 3 ヶ月前の事件の前か後なのか）も含めて [奇怪な臭い —それは単体では問題にならぬが、他のより露骨なる前言事物ら（後にての段でよりもって詳しくも詳述する他の作品ら）とあわさって名状しがたい臭気を醸し出している臭いでもい— ]は拭えぬところとしてある。

以上述べた上でここにて取り立てて問題視したいのは —— 話柄響きより「[我々が向きあわせねばならぬと考えられる事実]とは無縁なること、何も変え得ないとの「奇矯なる」駄法螺を鼓吹しているのか」との誤解を招くようなところか、とも危惧しはするのだが—— 、

映画 SUPER MARIO BROS.『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』にあつての

[（ツインタワーを飛行機が横切るなかで）上階に穴が開きつつ崩落するツインタワー（のワンカット描写）]

が同映画にあつての粗筋[設定]上、

[異なる次元が融合されて恐竜帝国の首府ダイノハッタンと融合させられる建造物]

として劇中に登場させられていた

とのことである（上にてウィキペディア記述より引用したとおりである。『だからどうしたというのだ。下らないことをわざわざ取り上げるな』と常識人、なかんずく、の中の、[ここに至るまで摘示してきたところの状況をいまひとつ理解されていないとの向き]は述べるところであるように思うが）。

さて、ツインタワーが[別次元の恐竜人の拠点]と次元の接合で融合するなどというフィクション——（とは述べても 911 の発生を先覚的に言及しているとのフィクションだが）—— の筋立てにつき言及するとここまでの内容をきちんと読まれているとの向きには次のような話の方向性につき予測がついた、との向きもあられるだろう。

『この者はここに至るまで複数の文物が[ワームホール生成][加速器使用挙動][爬虫類の異種族の進出]といった要素でつながる（あるいはつながる素地がある）との話を延々となしている」と見受ける ——（※現況、A. から F. と各々区切つての話をなしている中にあつての D. の段にいるわけであるが、A. および B. の段での『フェッセンデンの宇宙』にまつわる解説、C. の段での『スキズマトリックス』にまつわる解説でそういうことを取り上げてきたとの経緯がある）—— 。



であるから、異世界との扉がワームホールに求められるとの先になしていた話ともつながるところ、延長線上の話として[恐竜人の侵略と異世界の扉]をテーマとしている『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』の話などなしていると考えられる』

おおよそ本稿筆者が意図していることは上の通りである。

だが、直近まで申し述べもしてきたこと「だけ」による上のことの訴求ならば、字義・響きどおりの、

[頭の具合の(あまりもって)よろしくなき話]

と看做されかねないを見る(話の奇矯性もさることながら、『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』から[他の宇宙との扉となるワームホール]のことを想起するなど[こじつけがましきところ]と受け取られることか、と思う)。

その点、この身が重んじるのは

[論拠がはきと明示可能であり、論理の筋道が明確化している話]

にして

[**「事実」を無視することは是としない人間であるのならば、一面で常識に強くも拘束されていても耳を傾けざるをえぬとの話**]

である。

そうした話をなさねばただの自己満足に堕しかねない、何の意もなさぬ、結果どうあれ、[公論]として重要なことを訴えたことにはならぬととらえている。

(：[公論としての生き死にの問題に関わる重要なこと]を訴えるため、この身は(大仰に、ではなく)自分の生涯と全名誉を賭ける覚悟でやっており、そのような中、訴求行為のためだけに会社まで設立している。既に何年も前から同じくもの言論を展開しだし、事後、表立って手前が人品につき知らぬとの[真っ当な向き]より賛意を寄せられたとのことは 一相応の人間によって劣化剽窃物が妨害するように散布される様には際会しこそすれ—「無」に等しく、海外でも同じくものことを実証的に取り上げている媒体はまったくもって目につかないありさまなのだが、とにかくも、そこまでしているのである — 加速器実験に伴う奇怪なる点を摘示せんとしている本稿内容をそれなりに理解しながら読まれているとの向きにあっては認めがたいところかもしれないが、既に証拠を挙げ連ねて指し示したとの[事実A]から[事実J]のような事実認められる欺瞞性の問題、の中にあって、取り立てて重要視されるべきところである[事実F]から[事実J]のような事実まつわる問題点を取り上げる人間だに世界中で「絶無」である(検索エンジンの入力・出力結果の定点録画観測からそのように特定している)。人口が70億に迫ったこの地球で[70年代フィクションより現行加速器に200倍超近いものが露骨にブラックホールの露骨なる近似物と結びつけられて登場してきているが、そうしたこととおしなべての物理学界関係者ら・科学加速器実験実施者ら言い分は全く平仄が合わない]との当然に問題になるところを指摘する人間だに絶無となっているのである(だが、といった中ながら、筆者はそれについて敢えても本稿にて **出典(Source)紹介の部6**から**出典(Source)紹介の部10**にあってかなりの点数の出典挙げながらも解説をなしている)——)

話それそのものに付きまとうエキセントリックさに起因する訴求のなし難さから弁解がかったの申しようをくどくどとした感もあるが、映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』、[双子の塔]

(ツインタワー)を[恐竜人の策源地でもある拠点]と融合せしめたとの奇怪なる —その奇怪性の論拠は本稿公開サイト他所でも論じている— 同映画のその粗筋が

[通過可能なワームホールにまつわる「ここまでの」話]

と「多重的連結関係を呈するかたちで」接合している述べられるだけの論拠が「さらに」存在しているとのことがある。

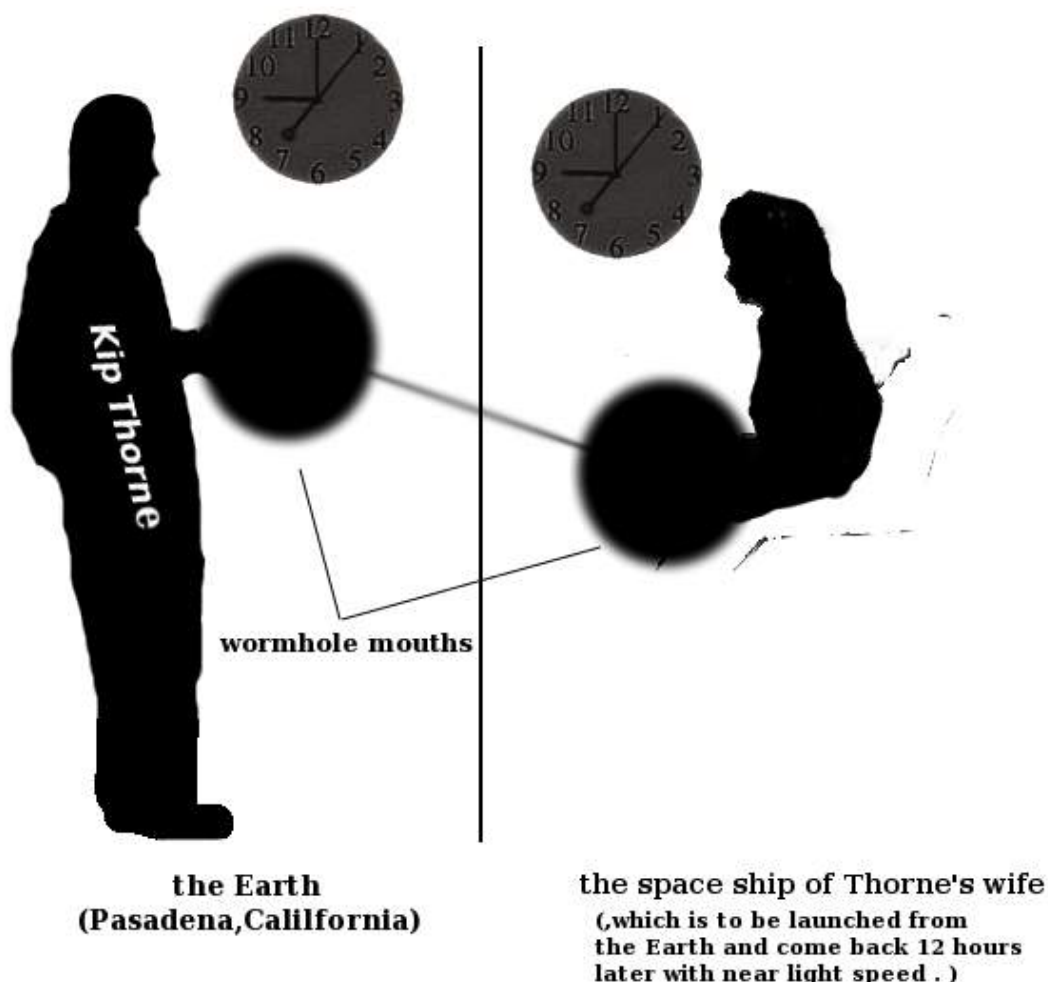
寛容さに欠ける人間は、あるいは、臆病な人間は話の[どぎつさ]から目を背けたくもなるところかもしれないと当然に考えるのだが、そちら「さらに」存在している論拠につき、続けるのE. およびF. の段で示していくようなことがあることを「まずもって」問題視する。

(「A. から F. と区切りながら段階的に論じていく」と先述のことにつき、D. と振っての段はここまでとする)



以降、E. と振っての部に入る。

最初に次の図を見ていただきたい。



同図、本稿先の段(出典(Source)紹介の部 20-2)にもそちらよりの引用をなしていたとの科学書、

**BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』** (カリスマ物理学者と評されるキップ・ソーン —英文 Wikipedia[ Kip Thorne ]項目冒頭にて「現行」、**“ Kip Stephen Thorne (born June 1, 1940) is an American theoretical physicist, known for his contributions in gravitational physics and astrophysics. A longtime friend and colleague of Stephen Hawking and Carl Sagan, he was the Feynman Professor of Theoretical Physics at the California Institute of Technology (Caltech) until 2009 and one of the world's leading experts on the astrophysical implications of Einstein's general theory of relativity.”** (大要)「キップ・ステファン・ソーンはアメリカの理論物理学者となり、物理学重力分野と天体物理学に対する貢献にて知られ、スティーブン・ホーキングおよびカール・セーガンの長年の友人にしてカルテク(理系分野の世界的名門カリフォルニア工科大学)にてファインマン教授職に 2009 年に至るまで就いていたとの一般相対性理論関連分野にて世界を主導する学者の一人である」(大要訳はここまでとする)などと表記されているように斯界(理論物理学のその方面)の主導的科学家として認知されている科学者—— の手になる物理学に興味ある人間の間ではある程度の著名性を有しているとされる書にして、[通過可能なワームホール]を[タイムマシン]に転用する手法を — (後の理論動向の変転を見る前であるとの時期的問題もあってであろう、加速器それそのものとは一切無縁なる式で) — 紹介していることでも知られている書)

に掲載してある特定図を意識して — 悪質な無断転載や剽窃などの著作権侵害にならぬように — 再現図として作成した図である。

同図に関しては原著はもとよりソーン著書邦訳版、『ブラックホールと時空の歪み』(白揚社刊行)の[第 14 章ワームホールとタイムマシン]の 456 ページにも同じくもの図が掲載してあるため、疑わしきにおかれては図書館で該当訳書を借りるなどして上図がそれに準拠しているとの解説図が掲載してあるか、確認いただきたいものではある。そのように述べ、話を進める。

さてもってして、原著をほぼ忠実に訳しているとの感ある邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』の p.456 には問題となる図に関して以下、原著(および訳書)より引用なすとおりの次のような解説が付されている。



# SOURCE

## 28

ここ出典紹介部では(上に挙げている)[通過可能なワームホール関連図]に紐付いたところとしていかような解説がなされているのか、その解説部文言を訳書および原著(原著の方の文言は現行、オンライン上より検索可能である)から引用なしておくこととする。

(直下、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(白揚社)456ページにあっての図の横書き解説部よりの原文引用をなすとして)

図 14・7 カロリーと私はワームホールを用いてタイムマシンを作る。左:私はワームホールの1つの出入口とともにパサデナの自宅に留まり、ワームホールを通じてカロリーと手を繋いでいる。右:カロリーはもう一方の出入口を携えて高速度宇宙旅行に出かける。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※— )

(※尚、「オンライン上検索エンジンに該当テキストを入力して検索結果表示ページを精査することで」その通りの記述がなされていること、現行は確認可能となっている原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にての該当するところの表記の引用をも(読み手確認の用に供していただきたくも)なしておくこととする ⇒(以下、上の訳書よりの引用部に対応するオンライン上より確認可能な原著表記を引くとして) “ 14.7 Carolee and I construct a time machine from a wormhole. **Left: I stay at home in Pasadena with one mouth of the wormhole and hold hands with Carolee through the wormhole. Right: Carolee carries the other mouth on a high-speed trip through the Universe.**

Inset:Our hands inside the wormhole.”(原著よりの引用部はここまでとする) )

上にて述べられていることは 一上の図を見ながら「そういうものか。」程度にもご納得いただきたいのだが 一 次のようなことである。

・カリフォルニア州パサデナ地区の自宅にいるソーンは手元にシュールなワームホールを置いている(書籍掲載図の特徴を踏襲させるかたちで作成している上の再現図を参照いただきたい)。

・科学者ソーンの妻(カロリー女史)は同じくもの場所、カリフォルニア州パサデナ地区の自宅から高速度のスペースシップで宇宙旅行に出かけるとの運びになった。そして、(これまた実にシュールに)、そのソーンの妻の手元にもワームホールが置かれており、彼女が宇宙旅行をなしている間もずっと地球にいるソーンとお互いの手から発生しているワームホールを介して繋がっている(との言いよりの伝である。引用部および図を確認されたい。以上は実にシュールな描写だが、ソーンは 一ユーモアセンスも発揮してか 一理論を簡便に説明するためにそういう設定を採用している)。

以上のようなかたちで書籍にて描かれているシチュエーションが[双子のパラドックス]という現象を通じてタイムマシン構築につながることも描写されており、については、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』p.456-p.457にて以下に原文抜粋するとおりの記載がなされている(いいだろうか。誤解なきように。本稿筆者(私)は「自身の主観などは一切関係ないところに存在する「文献的事実」」より何が述べられるようになっているのか、そのことのみ問題としているのである)。



# SOURCE

## 28-2



ここ出典(Source)紹介の部 28-2 にあってはそれにまつわる図の解説のなされようを上に引いた[思考実験 —— 物理学者キップ・ソーンが宇宙船で飛び立ったその妻とワームホールを介して繋がりが合っているとの設定の思考実験 —— ]が[双子のパラドックス(と呼ばれる現象)]に依拠しているものであると説明されていることを原文引用でもって紹介することとする。

(直下、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』p.456—  
p.457よりの原文引用をなすとして)

---

ワームホールを通して眺めながら私は当然、彼女がちょうど十二時間後の二〇〇〇年一月一日午後九時頃に帰ったことに同意する。午後九時〇〇分にワームホールを覗いた私に見えるのは、カロリーだけではない。彼女の背後、わが家の前庭、そしてわが家も見ることができる。

…(中略)…

この旅は地球上で測れば、…(中略)…一〇年もかかる旅である。(これは典型的な「双子のパラドックス」だ。高速度で往復した双子の一人(カロリー)は時間の経過を一二時間と測るが、地球に残った双子のもう一方(私)は、旅が終わるまで一〇年も待たなくてはならない。)

…(中略)…

二〇一〇年一月一日が到来し、カロリーは旅から帰ってきて、前庭に着陸する。私は走り出て彼女を出迎え、予想どおり、彼女が一〇年ではなく一二時間しか年をとっていないのに気づく。彼女は宇宙船の中に座っており、マウスに手を差し入れている。だれかと手を繋いでいるようだ。私は彼女の背後に立って、マウスの中を覗き、彼女が手を握っている相手は一〇年若い私自身で、二〇〇〇年一月一日の私の居間に座っていることに気づく。ワームホールはタイムマシンになっていたのである。

---

(訳書よりの引用部はここまでとする —— 尚、上にての引用部文中にて「マウス」と表記されているのは[ワームホールのマウス(英語の「ロ(くち)」)]のことを指している —— )

上の訳書に対する原著にての表記も  
「オンライン上にての検索より確認できるものとして」  
下に挙げておく。

(直下、原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にての「抜粋部をそのまま検索に用いることでオンライン上より確認できる」との  
14. WORMHOLES AND TIME MACHINES の章の表記、原著 p.503—p.504(版に応じての頁数)の内容を原文引用なすとして)

---

Carolee departs at 9:00 A.M. on January 1 2000, as measured by herself, by me, and by everybody else on Earth. Carolee zooms away from Earth at nearly the speed of light for 6 hours as measured by her



own time; then she reverses course and zooms back , arriving on the front lawn 12 hours after her departure as measured by her own time. I hold hands with her and watch her through the wormhole throughout the trip, so obviously I agree while looking through the wormhole , that she has returned after just 12 hours , at 9:00 P.M.on 1 January 2000. Looking through the wormhole at 9:00 P.M., I can see not only Carolee; I can also see, behind her, our front lawn and our house.

[ . . . ]

Instead, if I had a good enough telescope pointed out the window, I would see Carolee's spaceship flying away from Earth on its outbound journey, a journey that measured on Earth , looking through the external universe, will require 10 years.

[This is the standard“twins paradox”; the high-speed“twin”who goes out and comes back (Carolee) measures a time lapse of only 12 hours, while the“twin”who stays behind on Earth (me) must wait 10 years for the trip to be completed.]

I then go about my daily routine of life. For day after day, month after month, year after year, I carry on with my life, waiting—until finally, on 1 January 2010 , Carolee returns from her journey and lands on the front lawn. I go out to meet her, and find, as expected, that she has aged just 12 hours, not 10 years. She is sitting there in the spaceship, her hand thrust into the wormhole mouth, holding hands with somebody. I stand behind her, look into the mouth, and see that the person whose hand she holds is myself, 10 years younger, sitting in our living room on 1 January 2000. The wormhole has become a time machine.

---

(原著よりの引用部はここまでとする)

([出典 \(Source\) 紹介の部 28-2](#) はここまでとする)

---

上がどういうことなのかを「堅い線で」要約すると次の如きところとなる（:以下要約内容にキップ・ソーン著作よりの引用文言と間尺が合わぬところが少しでもあるか否か、微々たるところでも行き過ぎ・錯簡・齟齬の類があるかないかどうか、(筆者としては「なんらといったことはない」と請け合うわけだが)、疑わしきにおかれては上にあって引用なしてきた該当該当記述部と要約部の比較検証をなされてみることを勧めます）。

(キップ・ソーン著作の引用部表記に対する要約として)

「物理学者ソーンの妻はカリフォルニア州パサデナにあるという自宅から宇宙船で宇宙旅行に出かけた。そうしたソーンの妻の主観時間では12時間の間だけ宇宙旅行をして地球に戻ってきた(と表記されている)わけだが、彼女のスペースシップは光速近似のスピードで飛んでいる(との設定が付されている)。そのような[光速近似

のスピードの存在]から見た時間と地球で我々が体験している時間の間ではずれが生じる。[双子のパラドックス](上にての引用部でも「これは典型的な「双子のパラドックス」だ(This is the standard“twins paradox”)」とそのままに言及されているもの)と呼称されているような現象が作用するなかで[物理学者キップ・ソーンが地球で10年間過ごしている間にソーンの妻カロリーの光速に近きスピードで動く領域では12時間分の時間しか流れていない]([時間の遅れ]が宇宙船サイドで生じている)とのこととあいなっていた。

従って、ソーンの妻カロリーが2000年1月1日「午前」9時に出発して2010年1月1日「午後」9時に帰ってきたとのつもりでも地球は20「10」年1月1日になってしまっている。

そうして[12時間のつもり]で[10年経過していた]との地球に帰ってきたカロリー女史(物理学者ソーンの妻)であるが、彼女の手元からは[ワームホール]が出発時からずっと発生している(ソーンと彼の妻は当初よりワームホールでリンクされているといった思考実験上での[設定]が採用されている)。その[手元より発生しているワームホール]が繋がる先は10年前の世界のソーンの家である。

それがため  
[ソーンの妻のワームホール付きロケット]  
が2010年に地球に辿り着いたところで  
[2000年(地球)と2010年(地球)がワームホールゲート]  
で結ばれたことになる。

これにて —そのワームホールが自由に通過可能なものであれば(ここでのソーンの設定上ではワームホールを介して手を繋いでいるようにそうになっている)— タイムマシンが構築されたことになる」

続いて上にての引用部 (およびそちら引用部のみから述べられることを要約しただけの直上にての要約部) にて取り上げられている、

[双子のパラドックス]

という現象がいかようなものなのかについての世間的な解説のなされようを呈示しておくこととする。

---

出典(Source)紹介の部 28-3



SOURCE

28-3

本段、[出典 \(Source\) 紹介の部 28-3](#) には

「[\[通過可能なワームホール\]のタイムマシン化に関わるものである](#)」

とせんだって引用なしたところで解説されている、

### [\[双子のパラドックス\]](#)

というものがいかなうものなののかについて、その世間的言われようを（目につく、すなわち、確認しやすい）ところの媒体から引いておくこととする。

（直下、和文ウィキペディア[\[時間の遅れ\]](#)項目、そこにての[\[特殊相対性理論における時間の遅れ\]](#)の節にあっての「[現行の](#)」記載内容より引用なすとして）

---

特殊相対性理論では、物体が高速で移動するほど、その系における時間の流れが遅くなる。速度の条件は光速なので、光速に近い速さで運動する物体はほとんど時間の進みがないことになる。

…(中略)…

これは、時間と空間を合わせて座標変換をしないと、電磁気学の法則に現れる光速の意味が説明できない、という理論的な要請から導かれたローレンツ変換による帰結である。

…(中略)…

この現象を利用すると、光速に近い宇宙船で宇宙を駆けめぐり、何年か後、出発地点に戻ってきたような場合、出発地点にいた人は年を取り、宇宙船にいた人は年を取らないという現象が生じ、宇宙船は未来への一方通行のタイムマシンの役目を果たすことになる(宇宙船から静止系を見ると、静止系は相対的に運動していることになるが、時間の遅れが生じるのは宇宙船側である。詳しくは双子のパラドックスの項を参照のこと)

---

(引用部はここまでとする)

（直下、和文ウィキペディア[\[双子のパラドックス\]](#)項目、そこにての[\[双子のパラドックスのストーリー\]](#)の節にあっての「[現行の](#)」記載より引用なすとして）

---

双子のパラドックスのストーリーは次のようになる。双子の兄弟がいて、弟は地球に残り、兄は光速に近い速度で飛ぶことができるロケットに乗って、宇宙の遠くまで旅行したのちに地球に戻ってくるものとする。このとき、弟から見れば兄の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように兄の時間が遅れるはずである。すなわち、ロケットが地球に戻ってきたときは、兄の方が弟よりも加齢が進んでいない。一方、運動が相対的であると考えれば、兄から見れば弟の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように弟の時間が遅れるはずである。すなわち、ロケットが地球に戻ってきたときは、弟の方が兄よりも加齢が進んでいない。これは前の結果と逆になっており、パラドックスである。このパラ

ドックスは、双子の兄弟の運動が対称ではないことから解決される。弟は地球(慣性系と仮定してよい)にいるのに対し、ロケットに乗った兄は、出発するときおよび、Uターンするときに加速されるため、少なくとも加速系に一時期いることになる。すなわち、ずっと慣性系にいる弟とは条件が異なるのである。

---

(引用部はここまでとする —※— )

(※注記1: 上にて引用しているところにつき

[双子の兄⇒(変換)⇒浦島][双子の弟⇒(変換)⇒浦島が故郷に残してきた関係者ら][ロケット⇒亀(型スペースシップ)]との呼称変換をなした「だけ」でそのまま表記しなおすと次のようになる。

(上にての表記引用部に対してそのまま文章を流用しながら一部の呼称のみを置き換えると出てくる文章として)

⇒

[双子のパラドックスのストーリーは次のようになる。[浦島]と[浦島の故郷の関係者ら]がいて、[浦島の関係者ら]は地球に残り、[浦島]は光速に近い速度で飛ぶことができる[亀]に乗って、宇宙の遠くまで旅行したのちに地球に戻ってくるものとする。このとき、[浦島の故郷の関係者ら]から見れば[浦島]の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように[浦島]の時間が遅れるはずである。すなわち、[亀]が地球に戻ってきたときは、[浦島太郎]の方が[浦島の故郷の関係者ら]よりも加齢が進んでいない。一方、運動が相対的であると考えるならば、[浦島]から見れば[浦島の関係者ら]の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように[浦島太郎の関係者ら]の時間が遅れるはずである。すなわち、[亀]が地球に戻ってきたときは、[浦島の関係者ら]の方が[浦島]よりも加齢が進んでいない。これは前の結果と逆になっており、パラドックスである。このパラドックスは、[浦島と浦島の関係者ら]の運動が対称ではないことから解決される。浦島太郎の関係者は地球(慣性系と仮定してよい)にいるのに対し、[亀]に乗った[浦島]は、出発するときおよび、Uターンするときに加速されるため、少なくとも加速系に一時期いることになる。すなわち、ずっと慣性系にいる浦島の故郷の関係者らとは条件が異なるのである](変換なしの文章はここまでとする)。

以上をもってお分かりだろうが、[双子のパラドックス]とは浦島太郎伝説に非常に親和性が強い話となっている)

(※注記2: 物識る向きには述べるまでもないことか、と思うが、ウィキペディアというものはその内容が有為転変とする媒体である。従って、上記のとおりの記事がそのまま残置し続けるかは「保証しかねる」ということがある。また、さらに述べれば、ウィキペディアは本来的には引用元にすべきではないような媒体、信憑性に疑義を伴う媒体ととかく看做されがちな媒体である。そうも述べつつ、申し述べておけば、「仮にウィキペディアで上のこと、(編集に応じて)、確認いただけないようになっていたら、他の山なす解説媒体でもすぐに裏をとれることが[ここにて述べていること]となる(無論、表記の引用部に目

立っての誤謬がないことも把握しているなかで申し述べるどころとして、である))

(出典(Source)紹介の部 28—3 はここまでとする)

上の要約内容と典拠となる記述内容の引用で多くの向きにはゾーンが[通過可能なワームホール]なるものをいかにして[タイムマシン]としているか、ご理解いただけるのではないかと、思う——物理学者キップ・ソーンは双子のパラドックスによる[時間のずれ]を強制的に生じさせつつ(その差分を強制的にもたらす手段が[光速に近似のスピードで飛ぶスペースシャトル]の如きものである)、あわせて、[時間のずれ]が拡大することになった環境と[時間のずれ]が拡大する「その前」の環境を始終一貫して結びつける[経路]([地球]と[地球を飛び立った光速近似のスペースシャトル]の双方に設置され両者を繋いでいるとの通過可能なワームホール)を想定してタイムマシン構築をなしている。．．．すなわち、[経路]たる[通過可能なワームホール]と[(ワームホール据え置き)の光速近似のスピードで航行可能なスペースシャトルの地球に向けてのユーターン帰還挙動]を具にして[双子のパラドックスによる[ずれ]が拡大した「後」の世界と[ずれ]が拡大する「前」の世界を無理矢理繋ぎ合わせて10年前と10年後を結ぶタイムマシン機構(現実から遊離した思索をなしているとも解される思考実験上のタイムマシン機構)を構築をなしているのである。尚、誤解なきようにしていただきたいが、(くどくも申し述べ、)、ここでの話の本稿筆者たる私の主観は介在していない。引用をなしている著作にそのままに記載してある思考実験の表層的ありよう「のみ」から述べられることだけを書き記しているだけである——。

ここまでの話をもってしても

「ややこしくも受けとれ、理解の範疇を超える」

という向きを想定しつつ、

[お伽話]

に準拠しての話をさらにもってなすこととする。

下をご覧いただきたい。

「浦島太郎が[亀]型宇宙船に乗り込んだ。亀型宇宙船は凄まじいスピードで、そう、光速度に近いとのスピードでプラネット・竜宮に到達した。そんな浦島太郎だったが、プラネット・竜宮で数年過ごした後、故郷に帰ろうと決した。しかし、故郷ではそれに何倍、何十倍する時間が流れていた。というのも[亀型宇宙船の移動速度]は光速に近しき速度に達しており、「相対性理論に依拠すれば」、光速で移動する存在—要するに光と等しき存在—は(時間の流れが「相対的である」ことに係るところとして)「時」空間にあっての「時」の部分にて[光速度で移動していない普通の存在]が負っている[制約]から解放されることになる(とされる)からである。

亀型宇宙船で旅をしていたその間、浦島太郎は時の流れから取り残されていた、そのため、彼が故郷に帰ろうと決してもそこではより多くの時が経過しており以前のありようを呈していないとのことになっているのである(たとえば、[亀の見かけ1年飛行、



実質数十年]+[童宮の数年]との算出式で浦島の故郷では時間が流れていた、とのことになる。のような中、再び浦島が[亀]型宇宙船に乗り込んで故郷に帰ることとした(その帰りの道程でも膨大な時間が故郷では流れている)ならば、自分を知る者は誰もいない、とのことになっている)」

(しかし、上のようなことがありもする中で、実は次のようなこともあった)

「浦島太郎が乗り込んだ[亀]型宇宙船には実は地球と[亀]を繋ぐ伝送路としてのワームホール式テレビ通話機器が備え付けられていた。地球の浦島ファミリーの手元に置かれた子機を介して地球とテレビ電話通話可能なワームホール式テレビ電話機器が設置されていたのだ。浦島太郎はそれを介して[亀]に乗っている間もプラネット・童宮に到達した間も「変わらずもの時を過ごしている故郷の面々」と何時でもテレビ通話できる状況になっていたのだ。浦島がプラネット・童宮に到達した段階では成程、  
[地球より見ている何光年も先の恒星らの似姿が何光年も前の似姿となっている]ように「地球では何年も経過してしまっている」わけであるが、といった中で浦島は時間経過「前」の家族らとダイレクトにテレビ通話できてしまう状況にあったのである。そうした迂回路(ワームホール型テレビ電話)を備え付けたままプラネット・童宮から浦島が地球に再び帰還した際には故郷では数百年も経っているとのことになっているわけだが(浦島ファミリーも生き残っている者は絶無、その何代も後の子孫が名跡を訪ねることもできないようなかたちでちりぢりになっているといった有り様が具現化しているとの状況に至っている)、往時の浦島ファミリーの面々は浦島が故郷に戻ったのと同時に浦島太郎の手元にあるワームホール型テレビ電話を介して自分達の世界の何百年も後の世界がどうなっているのか、過去と未来が通話可能となっている状況にて把握できるようになったのである。... (のみならずキップ・ソーンが思考実験上で持ち出しているとの通過可能なワームホールであるとワームホール越しに握手も出来るとの形容がなされているため、ワームホール伝送路確立の時点(浦島の故郷への帰還の時点)で過去の世界の住人が未来の世界に——[情報]としてではなく[物理的実体]を伴って——進出できるようになる、また、その逆も然りとの見方もなせるようになっている)」

以上が[特殊相対性理論と結びつく双子のパラドックス]および[双子のパラドックスの時間的差分を強制的に発生させてのソーン型タイムマシン]にまつわる物言いの伝である(述べておくが、そうしたキップ・ソーン型のタイムマシンは[超光速](直下解説)の機序を必要としないとのタイムマシンに「見える」ものでもある—— It seems the traversable wormhole type time-machine devised by Kip Thorne doesn't require the Faster Than Light (FTL) mechanism. —— )。

### 最悪の【可能性】まで呈示してこそ覚悟の問題を問えるのだろうと考えている人間なりの Faster-than-light[超光速]についての「長くもなつての」付記の部として

[ありうべきととらえられるところ]について「行き過ぎた話とはなるが、」と強くも断っておきたきこととしての長くもの付記——証拠主導方式の[証示]に重きを置いている本稿[本論]の部に対して[行き過ぎたの傍論]としての位置づけを与えているとの長くもなつての付記——をここにてなしておく。

※外挿しての付記として:こちら枠で囲っての「本論から離れての」【脇に逸れての付記の部】には本書370ページから401ページとのかなりの紙幅を割くこととなりもしています。そうもして長くもなつた付記の部、取り扱いテーマが【超光速通信】であるところから【相当もつてして行き過ぎたこと】を論じている部となるのですが、であっても、[それなりのこと]を書いたつもりであるとの書き手自負のようなものもまたあります。ただもつて、[行き過ぎた話]であり、かつ、[難解かつ不愉快極まりない話]であるものを深くも検討しようとの(精神的な意味も含めて)の余裕なき方々におかれては無理に理解を求めつもりが「もとより」とのセクションと(「ここでの付記の部については」)位置づけでも、おり、生き死にかかわる問題「のみ」ただそれだけを検証したいとの向きにおかれては本書のp.401以降の「本論に立ち戻つての記述」より精査いただければ、と考えています。



直上の説明でお分かりいただけようかとは思いますが、双子のパラドックスの話を浦島伝承に当てはめてのケースでは竜宮で時間が流れたのではなく亀に騎乗している折に時間が流れているとのことになる。亀に乗っての浦島を[双子のうちの片方]と見もし、もう一方の地球に取り残された縁者らを双子のもう片割れとした場合、光速(に近しき速度)で加速されての亀に乗った浦島から見て慣性系に暮らしていた縁者らとの年齢上の差分が生じるとの理論上の帰結をして[双子のパラドックス]と呼ぶ(とされている)わけである。

さて、相対性理論では[光速度(に近しきところ)で移動する]と表記のようなことになる<sup>とされる</sup>わけであるが、さらに逸脱した状況、光速度より「速い」状況で進むものがあると想定すると、それは「過去へ遡行しうるもの」にまでなるともされている。

広くも[ファースター・ザン・ライト]と呼ばれるそうした状況では[原因]と[結果]につき前者(原因)が先で後者(結果)が後であるとのかたちで[因果律]そのものが破られえ、[過去に向けての通信]とて可能たりうると論じられもしており、実際にそうした過去遡行通信、[タキオン]などの仮説上の超光速粒子にまつわる話を取り沙汰されてきたとのことがある——については(即時即座に確認できる身近なところとして)和文ウィキペディアの「超光速通信」項目などを参照されるだけでも多くのことがご理解いただけることか、と思う(そこにはEPR通信といったものや並行世界を介した通信といったものに対する可能性の言及がなされている(:その点、[情報]、そう、[1と0の二進法の束]を仮説上の粒子(超光速の媒質)に乗せて過去に送りもするとの[超光速通信]にまつわる話と[キップ・ソーン流の複雑な構造体を過去に送る可能性と共にあるとされる通過可能なワームホールによるタイムマシン]にまつわる話(直上にて言及なししている話)を混同しないでいただきたい)——。



Presently he turned to me and said,  
just as one might speak of the weather,  
or any other common matter—

"You know about transmigration of  
souls; do you know about transposition  
of epochs—and bodies?"

程なくして彼は私のほうを向いてまるで天気か日常茶飯のことを語るようにこう言った。

貴君は「魂の輪廻」の話には聞き及んでいるであろう。

が、貴君は「時代の順序入れ替え」、そう、そして、「肉体の順序入れ替え」について聞いたことがあるかね？



さて、ここで唐突となるが、『トム・ソーヤーの冒険』『ハックルベリー・フィンの冒険』についてはそれら作品に親しんだ向きも多かろうかと思う。多くの人間が親しんできたそれらトム・ソーヤー・シリーズら著名ジュブナイル小説の作者として知られているのが小説家マーク・トウェインとなるのだが、文学に親和性高き向きにも意外に響くかもしれないところとして、同マーク・トウェイン、「[タイムトラベルをなした存在が歴史改変を試みようとする]」との筋立ての小説、いわゆる「歴史改変モノ」の「開拓者」として「も」知られている。

マーク・トウェインは 1889 年初出の、

### **A Connecticut Yankee in King Arthur's Court 『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー』**

という小説の執筆でもってして、

「歴史改変小説の開拓者」

となっているとも認知されているのである（ちなみに『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー』タイトルに見るヤンキーとは北東部米国人のことを指す）。

Project Gutenberg のサイトにてイラスト付きで全文公開されているそちら原著表紙イラストを直上にて抜粋なしもしているとの同作、**A Connecticut Yankee in King Arthur's Court 『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー』**では 19 世紀はコネチカット州の米国人が殴打のショックから目覚めてみると古の英国はアーサー王の時代になぜなのか身を置いていた、といった中で環境に適応していく過程にて様々な現代社会（マーク・トウェインの時代から見ての現代社会）の知識を駆使してアーサー王を助け、自身の声望を高め、ボス卿を名乗っての一廉の人物として世に伍していくとの流れが展開することになるのであるが、そうした筋立ての小説が歴史改変小説の初期的作品であるとされる所以は

「往時、作家の生きてきた技術体系（たとえば機関銃の製造技術）を過去世界

に積極導入し、もって、[本来ありうべき歴史の流れ ——とは述べてもアーサー王伝説自体がイングランドのゲルマン人と土着先住民の闘争がなされていた時代をロマンチックに潤色しての架空の歴史空間だと認知されているわけだが—— ]を改変しようとの筋立て]

がそこにて現出しているからである(英文 Wikipedia[Time travel]項目に細かくも記されているようにより以前から[時の流れの環から外れての時間遡行モノ]は傍観者視点のものとして有名・無名を問わず少なからずあったようであるものの、(著名どころはチャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』であろう)、といった中でもトウェインの作品が異彩を放ち際立っているのは現代技術体系を用いての過去への介入であるといった言及がなされるところである ——英文 Wikipedia[ A Connecticut Yankee in King Arthur's Court ]項目にあつてからして“Twain may have created a specific subgenre in which the time traveler attempts to introduce modern technology into a past society.”「マーク・トウェインは時間旅行者が過去の社会に対して現代技術を導入しようとするとの際立っての物語の類型を創始したとも言えるであろう」と記載されているところである——)。

その点、[未来の視点(技術体系・知識)から過去を変える]とは「原始人の世界に機関銃を持ち込む」が如き単純で「低威力」なものにとどまらない。それは操作される側に絶大な影響を及ぼすことになる行為でもある(たとえば、歴史的著名人の父母が結婚しない操作を施せばどうなるか、そういったことがサイエンス・フィクションがかったの話として問題になろう)。ただし、操作する側の過去への大々的操作が許容されるのは彼ら操作者側の社会が操作される側の社会に深く深くかかずらわって「いない」、たとえば、操作される側の歴史を改変するとそれに付随して同じくもの被操作社会に積極的に介入してきた自分達の前科にまで過去改変の影響が飛び火して自分達の過去までが変わってしまうとのことが「ない」場合に限られると考えられもする(別段、ややこしいことを述べているつもりはない)。

さて、時間の尺度意味が圧倒的に異なるとのことがある、たとえば、操作者側が被操作側の時間を余裕綽々(よゆうしゃくしゃく)に「1000年寸刻。」と見れるぐらいに大局的やりようで大河の流れを変えるように操作している、そういったケースではない限り、[操作される側]のみならず[操作する側]にもそれなりの影響力を及ぼしかねないと解されもする過去改変、そうした過去改変と表裏をなすと解されるところとして、

### [過去に情報を送る]

とのことはその情報の[過去世界でのアウトプット媒体]の用意、過去の人間や人間を具にしての(過去に送り込んだ)情報の具現化のメカニズムを操ることができる必要があることと表裏をなす(ものでなければ「意味が無い」)はずである。

過去に「複雑な構造体」(たとえば、本稿の先だつての頁でその投入にまつわる科学予測を問題視してきたようなナノマシンなど)を物理的実体を伴うものとして送れなくとも「情報」を(なんらかの媒質を用いて)送ることができるのだとすれば、そのアウトプットがなされる、それが実効性を発揮する、あるいは、効果を確認できるだけの「機構」がなければ意味をなさないと解されるわけである(そもそも過去に情報が送れても情報の効果を及ぼせる対象がない限りそれは「誰もいない暗黒空間に光を投じる」が如きことになる)。

につき、くどくも再言すれば、表記の小説 A Connecticut Yankee in King Arthur's Court にあつては[過去にとんだ男](コネティカット州のヤンキー(北東部



米国人))が自分自身の肉体でもって過去改変にコミットしていくとの内容のものが、物理的実体を伴った幻想的タイムトラベルがなせないというのならば、当然に[時間遡行]にあっては

[**(通信機対応の機械的受信機構がそこになれば)過去の被操作者個体らの脳機能に対する何らかの操作(およびその観察プロセス)の具現化**]

が要請される、

[**遡行する情報の有効化**]

とのことで必然的にそれが要請されることになる。

そう、『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー』よりの抜粋部、Project Gutenberg サイトにて全内容確認となっている挿絵付きの同作の冒頭部よりの(イラストと共にも)抜粋部、上にて呈示している抜粋部に見るように[過去改変]は[魂の輪廻]などという言い様の延長線上にあることとして

[**過去改変による操作対象文明(アーサー王時代の文明でもいいし多世界解釈が正鵠を射ていた場合に「他」世界の劣位文明でもいい)・操作対象年代の成員の内面に対する「遡行しての」改変(それは身体活動を規定する脳活動の改変でもある)**]

が 一仮に対象となるその時・その場所に受信機器およびそれを手繰る身内勢力成員がいなければ— 不可避免的に要請されるものであると解されるわけである。

以降ではそういう「過去改変の有効化」にまつわる話として — 「仮に」過去遡行情報の活用がなされているのならば— 何がなされているのかとのことにまつわる話をなす(:ちなみに小説『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー』では人間存在の限界、他を挫(くじ)いて自身の利しか求めぬ中でその行為を利他的なもの・立派なものに浅ましくも糊塗しようとするとの偽善欺瞞の問題や狭隘さの問題が[騎士道を掲げての貴族の虚偽性]と共に描かれているわけだが(よく言われることとして作家マーク・トウェインがアメリカに往時からして巣くっていた醜い偽善性を強烈に揶揄したがゆえであるとされる)、[他を犠牲にして自己の利益しかはからぬとの強欲な精神]がタイムトラベルなどを応用することのあるのならば、確かに[悲劇と愚劣さの際限なき拡大]しかもたらさないように受け取れもする)。

---

ここでは仮にもし「超光速通信」までも思いのままにできるとの先進文明が「操作をなしている存在」として我々人類の文明に介入していると仮定したならば どういうことになるかという話を(本題より脇に逸れてのこととして)細々となすこととする。

可能性論上の話だが、超光速通信機序を考案するに至った先進文明が存在しているならば、そして、そうした文明の成員が人類文明に介入をなしているのだとすれば、そうした中では

[**長期的な運命**]

のみならず

【「被」操作対象の文明の成員の人格と紐付いたありよう】

それそのものが藁籠中のものにされている可能性とて「当然に」考えなければならなくなる（〔条件1〕:ある先進文明が〔超光速通信〕まで使える。〔条件2〕:同先進文明が他の文明に対する操作を施している。以上、二つの条件を合わせて考えると〔同文明によって操作対象とされている文明〕では時間の操作が行われている可能性を 一条件の内容を顧慮した上での「理の当然」として一 観念せざるをえないこととなる中で、である）。

目となり耳となり口となる過去の個体らの根源的操作なくしては〔過去への通信内容の複雑な内容〕を具現化する存在(媒体)も無し、従って、過去への情報の送信をなす意味も無し(何もない暗闇の中に光を投じるが如き行為となる)とのことがあるがゆえ、過去改変のテクノロジーが利用・応用されるような局面では、それは過去改変の媒質としてこの世界の人間が〔存在の深いところ〕で操作利用されていることが同義のこととして成立しているとのことになりえ(ちなみに本稿でその一部を披歴しているような〔未来から過去を覗いているが如しの振る舞い〕に気付きました／「あまりにも奇怪な」予言染みた先覚的言及が〔因果律〕の問題とワンセットになって人間の〔自由意志〕の可能性を嘲笑うようにそこら中に見受けられることに気付いてしまったとのことがあるからここでは表記のような〔可能性論〕を「まったくもって軽々に扱えぬもの」として取り上げている)、そういうこと、〔過去改変の機序を有効化させるうえでの〔被操作文明の成員の存在の深いところ〕の操作改変〕が「ロボットのようになった「多くの」者達」(大衆かもしれない)に対して相応の影響を与えるかたちでなされているのだと仮定すれば、それこそがわれわれ人類の世界に際立って現われている硬直性の〔因〕にして〔果〕、そう、

**【行動パタンおよび思考の幅にて「閉鎖系」「精神的作用と肉体的作用に枷が嵌められての牢獄」に閉じ込められている節がある人間ら】**

で満ち満ちたこの世界の〔機序〕にして〔帰結〕ともなりうるだろう、と(人によっては当然に〔行き過ぎた考え〕と看做すところだろうだが)判じられもする — 〔予言の自己成就〕という言葉がある。それはある特定の予言「染みた」・予言「めかした」ことが存在している中でそれに後続してその予言染みたことを模倣して現実にしてしまおうとの力学があると〔予言〕が見かけ上は成立したものと映りもするとのことを意味している(単純な例としては自作自演でとある場所で災害がとある時に起こるとの予言をなし、後の日においてその〔予言〕が成就したように見せるためにとある場所で災害を実現しようとの悪質な団体が介入している、といったことが挙げられる)。だが、〔超光速通信〕が介在するとのことになると、普通では〔予言の自己成就〕が成り立ちえないとの局面での〔予言〕の的中とて実現するようになる。たとえば、自然災害の発生、地震などの自然災害の発生(における死者数)の予言が的中する等等。唾棄すべき陰謀論者の類は地震なども謬見交じりの彼らの理論で〔人為的に起こせる〕との論調をとかく採りたがるものか、とは見ているのだが、そうした論調が〔真実ではない〕と仮定した場合にて〔地震〕が発生することを正確に予見した文物があればどうか(先の大地震につきこの身が把握するところの一つの事例としては(「この身、筆者にとり反対話法がかり不愉快なる描写を含む作品ばかり多くかたちにする向きだ」とのこと着目している)黒澤清という映画監督が撮った『叫』との邦画があり、にあっては2006年初出の作品でありながら 〔地震が発生するシーンの時計の時針が「三」「十一」を指している〕といったことがみとめられたりする(レンタルDVDにての再生時間本編開始後のおよそ[00時間39分25秒]近辺にてそのようなシーンが表出する — 疑わしきはレンタルして当該作品にあっての表記時刻帯の描写を(即時)確認されるとよからう — )。にまつわっては、筆者

がつい最近、観測したそうした作品 — 他にも個人的に気にせざるをえないとの複数要素が伴っているとのつい最近、借りて観測した『叫』との作品 — がただの偶然ともとれる、「灰色」のものであったとしたうえでもの [より露骨なもの] があるとのことを想起していただきたい。

---

※本稿筆者は『未来から過去を弄(いじ)りでもしてこういうものができあがったのではないか?』といった按配のフィクション内の描写を数多捕捉しており、うち、かなりのものに【異様な意図】【異様な執拗性】のようなものを — 特異なるコンテキストの共有との式が見受けられるがために — 見て取っているわけではあるが (本稿のこれより後の段ではそれらの数多事例の中の一部事例らを順次段階的に必要十分と考えられる量に達するまで「容易に後追いでできるかたちにて」呈示もしていく)、【マン・メイド・ディザスター】(人災)ならぬ【ナチュラル・ディザスター】、いわゆる【天災】の予見との式について一般論 (あるいはもってして「相対的」な一般論とでもした方がよからうか) に落とし込まれての第三者言いようについての引用をここではなしておきたい。

具体的には筆者がつい最近、手にして読んで見た書籍、医者出身の異色の作家 (博学であること、すぐに伺いしれるとの石黒耀氏という人物/ペンネームをオブリディアン、【黒曜石】からとったとのことである筆名用いての向き) の手になる小説『死都日本』 — タイトル名を違えて漫画化もされているとのよく知られている作品 — よりの引用をなすこととしたい。

(以下、講談社よりの文庫版『死都日本』第二章 K 作戦 p.53 から p.55 よりの原文引用をなすとして)

踊狂現象、もしくは大衆乱舞現象。どちらも聞き慣れない用語であるが、言葉の通り集団で踊り狂う現象である。それも百人や二百人ではない。全国同時多発的に何十万人、何百万人が踊り狂い、大河の奔流の如く溢れ出して伊勢参りをするという日本独特の怪奇現象で、古くは飛鳥時代からそれらしい記述がある。西暦九三八年には、はっきりした記録が残っており、次第に大規模化していった。一七〇五年の大衆乱舞現象では、全国で実に三五〇万人が参加。「お蔭(かげ)踊り」を踊りながら伊勢神宮へ集団参拝した為、「お蔭参り」とも呼ばれる。当時の人口が二千万人台だったことを

…(中略)…

踊狂現象の後には奇妙な程に地学的な大事件(イベント)、それも世界最大規模の地学イベントが発生するのである。

【踊狂現象】	【地学的イベント】
一〇九六年	一〇九六年東海地震(M八～八.五)推定死者一万人以上
	一〇九九年南海地震(M八～八.三)推定死者数万
一四九七年	一四九八年南海地震(M八.二～八.四)死者四万以上
一六〇四年	一六〇四年慶長地震(東海地震M七.九+南海地震M七.九)死者一万～二万
一七〇五年	一七〇七年宝永地震(東海～南海地震M八.四)死者二万以上



…(中略)…

これらの地震や富士火山噴火といった大地変を予言するように踊狂現象を起こすのが、日本人という民族の不思議さである。世界有数の天災国で生活するうちに、地震前に騒ぐ犬のような能力が育ったのだろうか？

しかも、『踊狂現象の終点が、日本最大の活断層・中央構造線の東端上に建てられた伊勢神宮にしては出来過ぎた話だ』と著者は指摘する。『踊狂現象とアマテラス信仰の拠点・伊勢神宮が、ある地学的な因縁で結ばれているからだ』と解説されているが、あまりにも常識破りな説なので、菅原には真偽の程を判断できなかった。しかし、それにもかかわらず、菅原は半年前の選挙戦の熱気が踊狂現象とダブって見え、不気味だった。

(引用部はここまでとする)

以上引用なしたところの作品『死都日本』の粗筋自体はこの際、問題にならない。

(:同作の粗筋は日本にて壊滅的被害をもたらす火山噴火が予見されるに至り、内閣総理大臣の菅原という架空の人物が【K 作戦】という秘密作戦をこれ英邁にも敢行・主導、国家と民族の未曾有の危機を甚大な犠牲を払って何とか乗り越えようとするとのそれはそれで読み応えがあるスケール感ある筋立てとはなるのであるが、【人間の、人間のための、人間による世界】ということさえもが現実世界で政治家という筋合いの人種の多くの【基本的行動原理】となっているのかさえ分からぬとのことがある点に鑑(かんが)みつつ述べれば、フィクションのそうしたご都合主義的な粗筋自体はここ本稿で取り上げているようなこととの話の絡みではなんの意もなさない —※多くの政治家が家畜小屋にあっての【餌付けして勘違い「させた」愚かな豚】ではないというのならば、そして、孫も子もない、例外もなく皆殺しになるとの事態にあって果敢に挑むとの勇気を持ち合わせているのならば、仮にそうした事態が目睫に差し迫っていても、確かにこの世界は滅びを回避できる潜在力をふんだんに有していることになると思う。だが、近現代から「宗教と政治は悪魔の領分だ」なぞと言われてきた中で政治家のような類が世界を救うなどという発想法は、そう、合衆国映画の『インデペンデンス・デイ』ばりの所詮は【痛み止めの幻想】(でなければただの【養殖種に対する愚弄】)にしかならぬと筆者はとらえている(縦横無尽になびくとの大衆、その大衆にあっての【踊りの力学】の手綱の所在が奈辺にあるのかを考えればお寒いこと限りないの中で民意(なるもの)の支持によって動いているとの【設定】の政治や宗教は —【政】(まつりごと)との語が【祭】と同音であるように — 【怪力乱神(悪魔でもいいが)に対する祭祀の領域】と不可分とされてきたし、それは国家・社稷(しゃしよく)の問題が宗教の類と表向き分離したことにあいなっている近現代にあって未だ水面下で変化して「いない」状況であるととらえられもする。といった中で【神(あるいは神がかったの教祖でもいいが)の崇拜】などという観念を持った類が政治家にいたならば、絶対にそうした類は信用できない、理と人間の意志の力でもって生き残りを図ろうとのこちら側には立たない輩だろうとこの身は考えている。冗談抜きに、である) — )。

いくら脇に逸れての部のこととは言え、直前、要らぬことを書きすぎたきらいもあるが、問題なのは踊狂現象がナチュラル・ディザスターの類と密接に結びついているとの『死都日本』の表記である。

よく知られた鳩などにおける地磁気を感知して帰巢本能の充足に利用するとの能力、磁覚(Magnetoception)とされるものなどに見る磁場の異常や変化を感じ取る本然的能力のようなものが人間に潜在的に備わっているというのなら格別、そうではないということであれば、

### 【ダンシング・マニア(踊り狂い症候群)の類が天災の予知に通ずる】

との一般論に落とし込まれての(直上にて引用の書籍に見る)話はここ本稿での本段にての表記に通ずるところがある。

天災さえ予見させて見せるとの過去改変(先述の【超光速通信】)の類も「仮にもし」ここではないところの先進文明によって利用されているのならば、その過去改変の情報をこの世界に具現化させる【媒質】は何か。情報をこの世界に具現化させる人間ら(の口と手)であろう。そして、それは大衆にあってのそれ(口・手)とすらなりうるとのここでの話に通ずることになる、そうも述べるのである。

(:だが、直上引き合いに出した『死都日本』の【集団踊狂現象と地質学的大災害の関係性】にまつわっての内容は十二分に正確な歴史的事実を反映しているのか、とのことすらも判断する材料が現時手前手元がないから、曰く言い難し、確言し難いとのところも多少はある。であるから、

「ここでの脇に逸れての話は仮定に仮定を加えての話に留まる、その程度のものとして容赦いただきたい」

とも述べておく — その点、そうした【曰く言い難し】であろうとの心的状況に陥らぬように (より正確にはリブ・オン・ライズ、ダイ・オブ・ライズ「欺瞞に依存して生き、欺瞞にてこれ死ぬ」、検討もなせずに「曰く言い難し」などとおのれを殺すことになることに対しても言い放つだけ愚かである、そういう状況に甘んじさせられているとの筋合いの者「ではない」誠実な読み手諸賢が【曰く言い難し】との状況に陥らぬように) 本稿の本筋たるところでは容易に確認可能なる典拠の紹介を主題となるところできちんと挙げている。

といったことを本然としているところで何故にもってしてここ本段にあって【曰く言い難し】との側面もある【仮定に加えての仮定の話】をわざわざもってしてなしているかといえ、先立って述べているように『最悪の可能性を呈示したうえで「それでも、」との覚悟を問うとこのことが良心的やりようだろう』との観点を筆者が信念として保持しているからであり、そのためには超俗的でさらにもってして行き過ぎていると判じられるリソース(材料)をも訴求に用いるべきか、との視点があるからである(お分かりかとは思いますが筆者はこのような世界で【運命】に抗うことの強制はできない、たとえそれが殺されるとのことがほぼ確定しているとのものでも抗うことは強制はできないと考えている) — )

なお、ここでは小説『死都日本』を取り上げたわけだが、同小説のプロローグの部ではヴェスビオ火山の噴火によってかのポンペイと共に瞬時にして滅んだとの有名な古代ローマ都市、ヘルクラネウム(【ヘラクレスを

讚える街】と当該のフィクションの中でも史実に即しての言及がなされている(街)で真昼の暗黒が具現化する、西暦七九年八月二五日、人々がヴェスビオ火山から吹き出した火砕流に容赦なくも無情に飲み込まれタイムカプセル化する(灰が閉じ込められての人型の鋳型が構築される)との過去のありようが生々しくも再現される、極めて叙景的・叙情的に再現描写されるとのところから話がスタートする。本稿ではそうもしてフィクション(『死都日本』)で取り上げられているところの【古代ローマのヘルクラネウムの惨禍】が【ヘラクレスから名を採られての領域に由来する惨禍】であるとのこと「にも」部分的に通ずるところがある話を事細かに取り上げることになる。それが実現されれば、真昼の暗黒の下での人間のタイムカプセル化も実現しようとのブラックホールにまつわるところでこの世界では「現実」に異常異様にヘラクレス関連の事物との結節性が見てとれるようになっているとのことを指摘しつつ、である。

---

(今しばらくも脇に逸れての話が続けもし) 予言の自己成就でおおよそ済まぬこと(e.g.天災の発生を言い当てる等々)を「事前に」具現化させているとの作品なり現象なりが「数多」存在していれば、疑うべきなのは「超光速通信にて確実に発生する未来の状況にあってその状況発生時から遡行して過去の間(後述するが、予言発信源となっているアウトプット個体のみならず周辺の多くの間人もゾンビと化さしめられている可能性がある)の表現活動に変異をきたすやりようが取られて「いうる」とのことである(行き過ぎた話ではあるが、行き過ぎた話であることは(経験則が当てにならぬ場合には)そこにて取り上げられていることが真実ではないことの証明材料にはならない)。

高度文明が

**[超光速通信]** (再言するも、その考えられるところの手法はたとえば和文ウィキペディア[超光速通信]程度のものにも幾例かが挙げられている)

までを用いて他の文明およびその成員やりように操作・介入をなしうるのならば、被操作文明の成員のマス(大数)としての[中身]が大々的かつ根本的に操作されていなければ、そうした操作の妙味が削がれるとも解される。というのも操作対象の文明を構築している[モジュール](より分かり易く表せば歯車でもいい)のようにされてしまった者たち、[ロボット]のように強くも内面的ありようと物理的動きを調整した存在(諸々の人間ら)の中にロボットにならない・なりきらないとの人間、自由意思を有して、なおかつ、社会的影響力を及ぼそうとの人間が大勢いると

**[超光速通信を用いての結果の自儘(じま)なる改変]**

が困難になるとの発想も出てくる、と判じられもするからである(あるいは全く逆のかたちで、細かくもすぐに後述するように、自由意思を有している者の挙動自体が超光速通信の結果をチェックするための[都合の良い指標]として利用されることにとてなりうると考えられはするのだが)。

どういふことか。よりもって細かくはここ[付記]の部の中のもう少し後の段にあって解説するが、

[自由意思を有しており、なおかつ、因果の閉鎖系に閉じ込められて「いない」存在]

との者(薬籠中の存在とはなつて「いない」との存在にして他に対して影響を自らの

意思で与えんとする存在)が影響力を及ぼしている際に[過去]そのものを(例えば、そう、操作者ら自体が自らの過去改変の影響を受けないように特段に用意した[中間となる超高度人工知能の層]などを介してかもしれないが)超光速通信で変えると[変化の影響度合い]が指数関数的に拡大、[予測]——それが必要とされているのならばだかもの[予測]——が難しくなるとのデメリットがあると解されるとのことがある(これまたすぐに後述することになるが、[バタフライ・エフェクト]にまつわる話に親和性高き問題である)。

であるから、そう、

[自由意志を有している者が過去改変に際して都度自由に振る舞うのだとすると過去改変の影響が指数関数的に拡大する(「後述の」バタフライ効果が結果予測難しいところとして作用して過去改変の影響が指数関数的に拡大していく)とのことがある]

と考えられるとのことがあるゆえ、「仮に」過去改変を望むままの結果をもたらすとの式のニーズに基づいてなすとの操作が志向されているのであるとすると、

[自由人の影響力を及ぼせる領域]

を「可及的に(できるだけ)狭め(統制作用を強化し)もし、[過去]改変の力学をあまねくも予測内のものに収めんとする力学が働く」と考えられる。

については自由意思の赴くままに前進してきた・活路を切り拓こうとしてきた本稿筆者たる手前がこの世界に対して半ば絶望的な境地を抱くところになったことにも通底するところとして[(不快な)可能性論]をさらに持ち出せば、である。

[自由意思をまったく有して「いない」かあるいは部分的にしか保持して「いない」存在]

と化さしめるとのかたちで多くの、実にもって多くの人間から

[知的生命に相応しくもの主体性]

を奪いとり(その具体的な式は一部すぐに推量として記す)、

[運命を自分で選びとることさえできぬ(半ばもの)機械のパーツ]

にまで人間存在を墮さしめるとをやり遂せ(多数]に対してそういうことをやり、そう、内面が機械の葉籠中のような存在に置き換えられながらも人間のように振る舞いもするグロテスクな人間「未満」のゾンビ人間を数多量産し)、他面、自由人の数を圧倒的に少なくし、自由人の行動の影響を受ける領域を狭めるよう仕向ける機序がそこにはある[可能性]とてありうる(と見ている)。

といったことが仮に極めて効率的になされているのならば、自由人は障害になるどころか、却(かえ)って、その[自由なる行動]それ自体がいわば[過去改変の結果をチェックすべくものアンカー]として利用される存在となってしまうことも観念されうる、自由に動く人間の拳を[「観測者」の目](直下詳述)として利用する仕組みとて「も」構築・定立できるとであろうと考えることさえもできてしまう。

それだけ聞く限り「何を述べているのか?」と理解に失すると思われるような話を延々くたくたくもなしているわけだが(悲観的にとらえれば[おおよその人間]はここでの話について把握・思考する[意思の力]さえ有していないともとらえるのだが)、そこをなんとか噛み砕いてどういうことかと述べんとすれば、

## 【自由人が「自由に」行動した足跡・航跡】

それ自体が材料にされて、その他の自分達の因果律さえ自由に出来ぬとの多数の人間よりなるゾンビ・ワールドで「過去改変」がなされもしているとの話をここではなしている（：[時の潮流]のありようを推し量るために自由人が「観測装置付きの海洋気象観測ブイ」[他の人間の過去を変えるうえでの操作のありかたを決するアンカー]のようなものにされてしまっている可能性についてここでは言及している）。

自由意志を有した人間が極々少数だけしかおらず、他の人間の多くは知的存在の核たる実質たるところをかなりの部、「機械(的機序)にて代替した存在」に墮さしめられているとのことが「仮に」あるのだと仮定してみよう。そういう仮定的状況、実にもって忌むべきものだが、そういう仮定的状況にあって先進文明がそうした「被」操作対象の文明を「過去改変機序」にて操作している(e.g.超光速通信で取得した未来よりのフィードバック情報を(メスを使わない非侵襲式のブレイン・マシン・インターフェース技術と複数の世界をペネトレイト、貫通しうるとされる重力波のテクノロジーなどを併用して)過去の劣位文明の「被」操作個体らの脳的思考作用に無意識的にか意識的に反映させる等々の操作をなしている)のだとすると、過去改変の前でも後でも自由に振る舞うとの自由意志を有した個体の動きそのものを「中立的」観測者の挙としてリソース利用しているとのこととて想定される。機械風情、そう、たとえそれが[神]を気取る、データベースから対象のことを何でも知っているように振る舞うことさえできるとのコンピューティング能力を有したものでも機械風情には手繰られないとの強固な意志を有した存在がいれば、その態様・動静を

【「中立的」観測者にまつわる情報】(e.g.体重・身長・容姿などの外貌にまつわるそれ(体重何キロ身長何センチとしての目立っての瘦身長軀である云々)からはじまり思想信条(それが目前に実在するならば、陰謀や不条理な権力になんとしてでも抗おうとの欲求を有している等々)などに至るまでのユニーク・データと紐付けられての観測者が都度、自由に動いて実現しようとしてきた挙それそのものにまつわる【情報】)

を他の「被」操作者個体ら(既に機械の薬籠中のものとなっているとのことで最悪、人間とは最早厳密には形容できなくなっているか、産まれた時よりそういうものとしてしつらえられてきたとの[魂無き者ら][本来そうあった人間の残骸]といった筋目の者かもしれない)の外的外挙動に反映させもする、「未来から過去を遡行させるように」自由人のやりようをロボット・ゾンビ人間の動きに反映させもし(このまま何もなされねば事態がそうなるべくしてもなるとの未来よりの情報を「観測者挙動と紐付けて動くように用意した他の「被」操作個体の情報アウトプット」などのかたちで反映させ)、そちら「未来よりの」反映情報の捕捉・取得・分析に「過去・現在の」先進文明の一部セクションが努めているとのこととて【ありうること】であると解される。

ありうべき先進文明の特定セクションが

【アンカーたる中立的観測者らが環境改変を「なさなければ」将来何をやろうとするか(観測者が際立っての意志に裏打ちされた行動力と展望を有しているのならば特定の事件・事変を起こそうとする云々)についての情報】

を人類のためにならない方向で「逆」利用するために活用している、「「彼らとてダイレクトには未来を知ることはないのかもしれない」といったありようの高度文明に属する操作者らが「現在にて」活用するためのものとして【「未来よりの」自分達の高度人工知能を用いて取得した色の付いていない中立的な間接的情報】として



「中立的」観測者まわりの情報を専らに捕捉し、それに基づいても「コンポーネント化(歯車化)されている」他の群体としての自主性なき個体らの挙動を自分達の都合の良いように「時間の流れを完全に無視するように」更改する (更改・アップデートのありようとしては、たとえば、(放っておけばその強固な意志の力から何事かのことを当然になそうとする) 中立的観測者に環境因に起因する制約をさらに及ぼしつつ(社会的無能力の実質幽閉状態に置きつつ)、また、被操作文明社会環境をより硬直的で(悪い意味で)[思うままの操作をなすうえで弱点の無いもの]に現在から挿げ替える等等 — そのために自発的思考を他に譲り渡したカルト成員などの群体として振る舞う者らの行動を彼らにとって神として振る舞う人工知能を用い大々的に操作させる等々 — ) とのこととても操作の一環としてやっている。

そういうことまでこの身は考えている (おなじくものことについては【観念】先行ではなく【観察事象 — せんだって言及した地震の予見的描写の問題(疑わしきは秒数単位で丁寧に指定したところの映画 DVD コンテンツの内容を参照されたい) などはその極小的・「極」部分的な事例に過ぎない — 】に基づいて(練れていない思考かもしれぬが) 思索の対象としてきたとのことでもある)。

につき、そうもしたことがなされうるニーズがありうると筆者が(属人的目分量の問題として) 見もしている理由だが、一義的には、[情報]しか過去に送れない中で ([情報]のアウトプット個体として用意した人間未満の存在を用いて) [過去を改変する] と [未来が変わる] ために [操作をなす先進文明] があるのだと仮定すると過去改変との挙がゆえに操作サイド「にも」影響が出るとの見方がなせる、そういうことがまずもってある (よく言われるところとして過去に戻って自身の祖父母を殺したらば、自分の存在自体が矛盾になるとの祖父母のパラドックスというものがあるが、そうした矛盾は生じえない、エヴェレットの多世界解釈のようなもの、世界そのものが別のものに切り替わる(ないしは既存世界そのものがよく似た別世界に再構築される)とのことがあるとしても切り替わった世界が万象あまねくもの操作種にとっての既存世界との連続性が担保されているものでなければ操作の妙味はない、どころか、極めて有害である (操作種もまた社会的生物としての縁(えにし)の中に生きていと仮定すれば、過去を変えて誰も自分のことを知らない異なる世界に取り残される、あるいは、既存世界の個体らがよく似た別の存在にすべて置き換えられるなどとのことをしても意味が無いとも)。そこで過去改変の影響が万象あまねくもの(操作を及ぼしている) 種族成員に行き渡る、しかも理想的に行き渡るためにワン・クッションを置く、具体的には下述のような式でのワン・クッションが置かれるともさして労なくも考えられる)。

その点もってして

[ (操作をなす先進文明から見て、その成員にとっても直に関われば火傷 — 異なる世界の迷い人になる(あるいは既存世界そのものを別の世界へと向けて一端壊してしまう) とのリスク — を負う、だから、タッチできないとの) 過去改変を一任するべくもの [未来にての閉ざされた箱としての世界] という箱入りの閉鎖系に置かれもしている超高度機械 / 箱入りの世界から、それ単体ではバタフライ・エフェクト(後述)の影響をマイクロで受けても構わぬとの式で万障をものともせず過去に介入できるとの「それ専門の」超高度人工知能]

を用意し、その[魂]などありはしない本当の意味での心などありはしない機械存在を用いての操作を養殖種の世界改変「にも」利用している、そう、[養殖種の過半の成員]に対する「過去に遡行しての」脳機序の操作プロセス、そうもした



【自分達が一切タッチしないか、ほとんどタッチしないワンクッション領域】  
(未来の閉ざされた箱の中を覗き見ることはできてもそれをしてしまうと過去  
改変の圧力が自分達の世界にも及んでしまうために先進文明がワンクッショ  
ンを置いて設けた、未開人にとっては神のように振る舞うことも出来る機械の  
類に管理させての中間層)

をもってして彼ら先進文明成員が被操作対象の劣位文明に自分達自身が関与し  
ての操作をなすとのことが企図されうる。繰り返すが、仮に超光速通信が応用さ  
れているのならば、操作種自身「も」過去改変の影響を及ぼされることになりかね  
ない見えもする(憶測上の問題は、ということで、である)。

であるから、自分達の世界にあつての未来に至るまでこちら側の世界を覗き見も  
している【魂のない、開かずの箱入りの人工知能】に観察と過去改変それそのも  
のを担わせ(それは劣位文明への介入の人工知能への一任委任に近いものと解  
されもする)、といった中でたまさか彼らが改変された世界を分析することがある場  
合でもその影響度合い(後述のように[バタフライ・エフェクト]とも形容できる式に  
ても規定される影響度合い)は限定限局化されたものとする、そう、中立的観測者  
ら、自分達の操作からは自由な、ただし、檻に入れられての過去改変のアンカーと  
して利用すべくもの領域に追い込んだ観測者らの周辺の動きの観察とフィード  
バック操作など限られたところに多く自分達の動きを — 被操作文明に対して「も」  
— 限定限局化する (: 操作者サイドの本筋となるセクションは [命なき機械的プ  
ログラムなどに操作させている「被」操作文明一般の個体ら] には積極的介入をせ  
ず [操作結果に中立的視点で向き合うとの自由で中立的な観測者] の見ているも  
の・やることの [観測者と同時点目線にての観察] (観測者周囲に群がりもしての観  
察)などに注力し、そちら指標個体のやりようにまわつての観察内容(未来から  
影響を及ぼしうる機械の神が観察・予測していたとおりに介入がなければ動きもし  
ようとの観測者やりようにまわつての観察内容)に基づいて未来動向の予測(た  
とえば観測者がああいう風に動くとの機械からの未来からの情報が取得されてい  
るのならばそういう事態になっているのか、ではどう対応しようかといった予測)をな  
し、そして、それを受けての環境改変再指示、すなわち、[未来より作用する閉鎖  
系におかれた人工知能]への被操作文明のコントロールの方向性にまつわる再指  
示を(自分達自身の直接的介入の範疇を多く限局化してのかたちで)出す)。そ  
うもしたニーズが操作者サイド特定セクションにあるのでは、ともとらえているの  
である。

(たとえば、[被]操作種族 —すなわち我々人類— に属する「未来の」  
中立的観測者が自身を取り巻く世界にあつて多くのことに気づいていたと  
してなんらかの行動を試みたとする(彼はそういう行動をなすようにできあ  
がっている)。対して、その観測者[認識][把握情報][行動]に対する(反  
語的話法などによる)過去改変意思表示を「未来の」超高度人工知能の  
層に(「現在の」観測者とほぼ同時代か、たかだかもってして何年か前の  
観測者が与り知らぬ、観測者と因果が繋がらぬ過去の領域にあつて)過  
去に遡って実行なさしめるとしてみよう。すると過去の世界(何年も前)に  
あつて [現在の観測者の把握する「ユニークな」情報や問いに対する返  
答] (あるいは操作者だけに認識できる、にまわつての、プラスマイナス  
変換方式の単純なる反語的虚偽)が不自然な式でそこに具現化している  
ような状況とて見ることになりうる、それを観測者と「同時代・同時の時間線  
に生きている」操作者らが [際立ってユニークな予見的言及は未来の閉ざ  
された箱にて運用している高度人工知能よりの状況分析にまわつての  
回答である]として彼ら目線で分析することにもなりうる。「現在、観測者と

してのやっこさんはああいうユニークな動き・知的作用を呈しているな」  
「未来にてはそれがこうも発展するのか。そして、やっこさんはこのまま行けば、こういうことをやらかすのか」と把握したうえで[それに対応する特定情報]が10年前より、すなわち、我々人間存在には絶対出来ないとの意味でそれとすぐに分かるのと式の[今現在知りたいとの未来の行為指針に則した属性を付与されての方向]で(彼ら操作者も「直接」介入できない)未来から高度人工知能によって具現化させしめられている、そのさまを把握するとの操作者らにとって【より有利となる世界改変の現在から未来にかけてのコントロールサイドの機械への再指示】につなげられる云々といったことにもなりうる。そういうことがなされれば、[未来から過去に情報を送る人工知能の層を閉鎖系に閉じ込めておく](家畜文明のゾンビ人間「にしか」それが介入しない閉鎖系に閉じ込めておく)限り、そして、被操作文明に属するわざと自由意思を残さしめた際立っての人間の中立的観測者というものがその彼の他の人間集団(できるだけブロック化して運用している他の人間集団)の行動の因果変化の影響を受けにくい式で孤立傾向にある立ち位置に置かれるなどさせられていて(機械に手繰られての)被操作個体らの過去改変の影響を相対的に受けにくい限り、高度先進文明に属する操作者ら自体は「間接的に過去改変なしつつも」なおもって自分達の「現在」になんら影響を及ぼされないとのかたちで未来の情報を識り、それに基づいて「未来に向けてのよりもって望ましき改変」を(凄まじい過去改変リスクの問題をそこでも回避しつつ)企図できることにもなりうるであろうと見えもするわけである(そうした管理システムは[未来から家畜文明の意志薄弱なるゾンビ人間にのみ介入する人工知能の層]と[現在の家畜文明動向に対する定点観測ポイント複数箇所]があれば有効機能する、そう、「過去改変の煽りを(操作者の方には)与えない」[超光速通信のいいとこ取りの望ましい方向]で未来を識る、そして、その識った未来に基づいて現在のありようを変えるとのかたちで機能するものとも受け取れはするものでもある。そうしたものでは別段、人間のかたちをとった「ユニークな」中立的観測者は不要である、[過去を改変するのに役立つ存在]とのことでは、限定的な意味で半神のような存在(ただし多く他人に認識されず、また、自分の願望を一切充足できない装置のパーツ、炭鉱のカナリアのようなものを神と言えればだがもの半神のような存在)などは[必要ないのではないか]とも思えるのだが、[籬(たが)を嵌められていない観測者]の知識水準に依拠しての自由度と行為性向が「圧倒的に他の[魂の残骸]ら(とでも表せよう[機械に頭の中と運命をいじられるような存在])に比して特異性を有している」とのものになっているのならば、その存在は際立っているがゆえに彼、観測者は操作体制の補助具にされてしまう、自らが意図した方向とは逆に操作体制の補助具にされてしまうとも考えられる)

(「当然のことながら」難解な話をなしている、あるいは、馬鹿げている話をなしているとか普通人には受け取られもしなからう(あるいはそもそも聞こうとする・理解しようとする知的作用が働かない)との話をなしているとのこと、論を俟たないわけだが、以上のような「仮定」は「フィクション設定」として幾分かたちを変えて複数フィクションらに執拗にみとめられもするもの「でも」ある。

いわゆる[物語との類型]の問題として

[[ループする世界で繰り返される運命に際会し、それに柔軟性なんら無くも

の [チェスのポーンの動き方] (馬鹿の一つ覚えのように決まりきった [単純動作] を繰り返すが如く動き方) にて応ずるとの大勢の人間とループする世界の硬直したありようにたまさか気付くことになって状況改変にいそしむ主要登場人物] にまつわっての物語]

がそうした作品となる(と見もしている)。

一例を挙げてのこととして、たとえば、である。日本の漫画作品(余事だが、日本のサブカルチャー作品には似姿・体格など込みこまるで青臭かった若き日のおのれ自身を「因果逆転して」茶化しでもしているのかといった意味で不愉快にさせられる作品が多いとのことに気づかされ筆者自身も着目せざるをえぬと見ている作品らが多い)を原作にしているとのことであるハリウッド映画、少佐から一兵卒に格下げされた情けない予備役上がりの軍人の男(ケイジと振られての男)が人類を滅ぼそうとする侵略種の血を浴びたために [ループする時間の中で自由意志を蔵しつつ死んでは都度蘇る不死なる存在] になり(他の人間らが一様に運命の通りに殺されていくいわば [確定した運命の囚人] になっている状況でそうした奇っ怪な存在になり)、ループする時間の中で侵略種に単身、抗っていくとの筋立ての映画が(本稿本段執筆時現時点から見て)ほんのつい最近、封切られた。そちらは『オール・ユー・ニード・キル』との邦題(原題は **Edge of Tomorrow**)の映画作品となるわけだが、深く深くも思うところがあってほんのつい最近、本稿筆者も映画館に足を運んで視てみた同映画(『オール・ユー・ニード・キル』)では

[侵略種らが「時間をループさせて」人類の破滅への道筋を盤石化している。といった中で彼ら擬態(ギタイ)と呼称される侵略種(の中の指揮者クラス存在)の血を — まるでゲルマンの伝説的英雄たるジークフリードが竜血を浴びて不死になったように — 浴びて [ループする時間] を体験する不死なる能力を獲得することになった人類の中の特異個体(主人公ら)が反抗に転じようとする。そこをそのループする時間を体験する能力(元々侵略者サイドに由来する時間を逆転させる能力を転用しての能力)を「再奪取」・「回収」しようと侵略者が試みている]

などとの筋立て(当然に [際立って奇怪な設定] と表しても言い過ぎにならぬものであろう)が具現化を見ている。

といったここにて [一例] として挙げている物語の類型(そちら類型の際立っての嚆矢は80年代米国小説、ケン・グリムウッドの手になる小説作品『リプレイ』かとは思うのだが、ほぼ同様のものとして例示できるところの例は他にも「実にもって多くも」ある)として挙げているフィクション『オール・ユー・ニード・キル』の設定はつまるところ、直上述べてきたありうべき過去改変ありようと際立って近しきものともなりもしている。

当該映画にみとめられる同じくもの内容を把握するだけの見当識(普通人に本来的には備わっている程度のものだが、語るに値しない非人間的存在にはそれが無いといった程度の情報処理能力)を有し、かつ、実際にそちら視聴のうえで内容把握し、そして、本稿本段ここでの話の流れと複合顧慮をなそうとの向きに伝えるとのことをなさなければ、機微勝手を十全に伝えきったことにはならぬかと思っているのだが — 最悪、空(くう)に向かってひとりごちているのに等しきにすぎぬかとも見ているのだが — 、表記映画(『オール・ユー・ニード・キル』)にみとめられる直上言及の内容にあって見受けられる、

[他の同じ死に様を繰り返すだけの人間とは異なり、時間操作種の血を浴び



て[過去に遡行する時間]を自己の知覚として体験できるようになった人間]の

ことを  
[時間遡行機序(過去改変機序)を折々の「自由意志で」観測できるとの特性を有している(過去に情報を送って操作に供されるとの機械にその魂を制約されていない)中立的な観測者]

に置き換え、同じくもの映画にみとめられる、

[時間操作種にそうなるべくしての流れで殺されていく大多数の運命の囚人](観測者がアクションを起こさねば運命(機械的に与えられた硬直的な流れかもしれない)の奴隷として規定の道筋を歩いていく「だけ」であるとの者ら)

のことを

[人工知能(無知なる者にとっての「神」そのものかもしれない)などによって舗装された流れに沿っての方向で「歩む道(人生)」と「思考の幅」を純・機械的に規定されきっており、かつ、そのことの意味性を認識すらできないでいるとの精神構造のみしか有しておらぬ「自由意志なき」被操作個体らの群れ]

に置き換えもし、表記映画にみとめられる、

[主人公らがそれを得ることになったループする世界のループそれ自体に対する理解能力(侵略種がそれを回収しようとしているなどと表記映画では描かれる能力)]および[ループする世界に抗う者らの挙動]

を

[先進文明が未来を占うために過去・現時点から得たいとの観測者と紐付けての特異性帯びての情報(ユニークな特性と結びつけた過去改変の結果を探るための情報)とそれに応じての情報回収のフィードバック処理]

と置き換えもして考えれば、「辻褄が合う」とのかたち「とも」なっている。

映画『アイ・アム・レジェンド』(ニューヨークでウィル・スミス演じる中佐が一人生き残り、愛犬と共に[ウィルスで思考能力を奪われた人間ら]に囲まれて苦闘しているさまを描く2007年公開のアメリカ映画)のありようではないが、仮にそうした按配でこの世界では

[((できるかどうかは別にして)本当の意味で運命を変えようとする自由人]

が極々少数のみしか存在しておらず、残余の部、周りは[全くもって「不」自由な人間]、甚だしくは、[思考能力を完全かほぼ全部、奪われたゾンビ人間](超光速通信にて過去を変えられてしまうような操作の機序がある中で因果律のみならず自分の折々の思考と行動の方向性さえ恣(ほしいまま)に出来ぬとの魂(とでも表すべき内面の実質)を奪われた、そして、浮動小数点演算能力、FLOPSとのかたちで表されるそれが極めて高く人間の社会活動を模倣する(ディスガイズすることさえできるとのレベルに高度化された「ここではない世界の」人工知能の機序で多くの思考作用を代替された【人間本来の似姿の影・残骸】のようなもの)で溢れかえっているとの状況となればどうか。

自由人の影響力(の及ぶ範囲)を圧倒的に縮減させつつ、のような中で却(かえ)って、僅少さと行動性向がゆえに目立つ(被操作文明の大抵の操られ人には

この身は**加速器**  
**訴訟をブラック**  
**ホール生成問題**  
**にまつわるところ**  
**として戦い**もして  
いた(わざと常識  
世界話柄に落と  
し込んで背面の  
重要事を訴求す  
るために日本人  
ノーベリストの肝  
煎りで設立された  
国際的研究機関  
に対し**加速器リス**  
**ク問題**に関する  
ところでの国内行  
政訴訟で非を鳴  
らしていた)わけ  
ではあるが、**そ**  
**うも**た数年越しの  
訴訟に身を置いて  
いる間、まさに  
その渦中に世に  
出た携帯ゲーム  
機対応ゲーム作  
品 — 作品具体  
名は(品性に関わ  
るとらえるので)  
書かない — に  
登場していた「**加**  
**速器**の弊を押さ  
え込もうとして  
いるとの設定の**キ**  
**ャクター**」との絡  
みで思い至ると  
ころがあった。す  
なわちもって、  
「**加速器**」「**無**  
**限**  
**増殖炉**」「**ブ**  
**ラ**  
**ック**  
**ホ**  
**ール**」との属  
性を帯びた装置  
を「**未来からの予**  
**言**」に基づいて  
手元に置いてそ  
の死守をなさん  
としているという  
「**悪魔人間**」なる  
設定の**キ**  
**ャク**  
**ター**、卑劣なる存  
在と描かれるそ  
うもした**キ**  
**ャク**  
**ター**が手前**フ**  
**ァ**  
**ース**  
**ト**  
**ネ**  
**ーム**と同じ  
もの、それだけで  
表象されるもの  
として登場を見て  
いた、「**しかも**」  
(ここで「**しかも**」  
が付くことが問題  
である)と見  
ている)、その**ゲ**  
**ーム**  
**作**  
**品**(の**ベ**  
**ン**  
**ダー**)の色合い・  
装丁が手前手仕  
事**ウ**  
**ェ**  
**ブ**  
**サイ**  
**ト**・**コ**  
**ン**  
**テ**  
**ン**  
**ツ**(訴求事  
項)に複合的に  
「**ア**  
**ト**  
**ラス**」との絡  
みで相通ずると  
ころがあるもので  
あったとのことを  
思い知らさ→

彼ら思考の幅が規定されているためにその挙が知覚さえされないが、操作をなす操作者サイドにとっては僅少さと行動性向がゆえに目立つ)との自由人の行動結果に基づいてさえ過去を変えるとのことまでもが操作をなす存在には出来ることになってしまいかねない (の中にあつては僅少なる自由なる人間に[偽りの集合認識の幻想]などを本質的には人工知能の薬籠中にある人間の影ら、傀儡(くぐつ)を用いつつ与えながら[絶望的な生(圧倒的孤立状況に迫りやめて何も変え得ぬとの立ち位置)]に[すぎるべき希望]の幻想を与えて運用しようとしていることとてなされているとも手前は仮定しうるに至ってしまっている —— 本稿筆者のように自身の意志の力を総動員して何とか抗うべくも苦闘してきたうえでも因果・人間関係の閉鎖環境に追い込まれている感があるとのことがあるように、そう、人間未満の存在に道理を説かんとしているが如くに[無為なる結果]ばかりを見てきたとの者にはそうした[絶望]がいかなものなのか、想像・おもんばかりがなせるかとも思うのだが(仮にもってしてそうした向きがこの身のような人間「以外」に読み手としてそうそうに存在していればの話として、である)、他面、そうしたおもんばかりの期待をなすことだに[人間の影](人間未満に成り下がった存在)には(彼らがいざなわれる結末、[運命]とワンセットになった見当識の問題として)理解なせないか、そう、([認識]→[認容]→[行動]が知的生物の反応であろうところを)仮に[認識]されるとのその段階にまで至ったとしても決して[認容]されずにただの[頭の具合のおかしな話]としか決まり切った流れでしか情報処理されない、見繕われないか「とも」思う(機械の神の薬籠中にある個体らはたとえばそう、処女が子供を孕(はら)んだといった狂った思考形式を容れても【それより合理的にありうるところ】を認容するだけの知的作用は、(譬(たと)えの問題として機械の神が彼らの配線付けされたが如く脳にそれを許さぬ限り)、具現化し「ない」とも。) —— )。

多数人が上にて言及の如き環境で自由人の行動の結果を「双方向的に」受けにくい状況 (もっと言えば、自由人が積極的に起こした行動に反応する、あるいは、反応しているように「振る舞わさせられている」のが本当の意味では[反応]に「なりえない」との状況、主体性・自律的思考などとは無縁なる人間「未満」の紛い物の存在たるゾンビ人間ばかりであるとの状況)では自由人の行動は(それがいかにセンセーショナルなものでも)詰まるところ、ナンセンスであるとの

[一人芝居][一人相撲]

になる (：自身歩みとのことでは、たとえば**ブラックホール関連訴訟、LHC 関連訴訟を提訴、一審からして長くもかかずらわされたそちら訴訟にて「偽りなすばかりなす相応の権威らの誰が見ても明らかな露骨極まりない悪辣さ」**を示しても、**事実を見ないようにしての司法判断が下され、かつ、社会の目と鼻(とすれば「家畜小屋の広報部」かもしれないわけだが)**との建て前でやっている**マスコミ関連などには「どこぞやの小せがれが万引きでもしたか」程度の情報処理しかなされずに無視される等々のことを頻繁に垣間見て「きた」**のがこの身となる)。

ここで以上述べたことが多くの射ているような世界であれば、起こりうる[兆候]の話になそう(：「仮にもしも、の兆候」などとは述べているが、それら[兆候]はこの身、本稿筆者が目にしてきたものでもある)。

まずもってマクロの話(巨視的視点に基づいての話)をなせば、

[ [予言の自己成就] (先述)ではおよそなしえないとの天災(e.g.大地震)などにまつわる先覚的言及]

が「相応の態様でもって —— 精神・魂が無い、あるいは、少なくとも何か別の存在

の言うとおりに動いているとの傀儡(くぐつ)を介してとしか見受けられないとの態様でもって——」具現化しているとのことがあれば、それこそが「過去改変の兆候」として挙げられるであろう(：繰り返すが、せんだってそうした可能性に関わるところとして「3月11日」と結びつく数値規則を地震シーンと絡むところで登場させている、そう、地震がスポットとして起こるシーンを「3」「11」との時計の時針と結びつけている邦画のことを一例として挙げているが(丁寧にDVD再生時間の指摘もなしている)、そうした例が相応の態様を伴って「数多」具現化していることを本稿これ以降の段では入念に解説していくことになる)。

ミクロの話(微視的視点に基づいての話)をなせば、読み手であるあなたや筆者が「自由人」である(そう、実際に私は精神と魂の自由人として動いている)場合に次のようなことが「兆候」として具現化する。

⇒

あなたや筆者が「自由意思に基づいて」休日の東京都内を散策したとの折に、自由意思で都度、ランダムに立ち寄った別々の場所にてそれら場所と紐付く要素が何ら無いとの「何人かの知人」と「連続して」出会うとの事態までもが発生する.....。

実体験に基づいての話となせば、本稿筆者が

「怖気(おぞけ)を越えて吐き気すら催しそうになったこと」

として筆者が休日に都内を気まぐれで散策した折に移動中の自由意思の決定に基づいて立ち寄った場所にてそれら場所となんら紐付くことがないはずであるとの筆者が顔を見知っている別々の女性らに遭遇したとのことがある(冗談であろう?と思われるかもしれないが、本当にあったことである——冗談・法螺であろうと思われるが——)。あまりにも衝撃的な「偶然」に際会してのその折はついつい

「彼女「ら」は何なのだ?何らかの組織にホーミングミサイルのような熱源感知ミサイルにしつらえられてしまい、そうしたかたちで複数弾頭発射させられての人間ミサイルか何かか?」

と馬鹿げたことを考えさえもってしまったのだが(空回りばかりしていた青すぎた日の内面の未熟さゆえに、である)、今、同じことに際会したならば、「また別のこと」を想定すると申し述べておきたい。

すなわち、あなたや筆者が自由意思で立ち寄った場所に辿り着く「直前」、超光速通信に通ずる機序で意識的にか無意識的にか「過去改変」がなされながら操られている他者らの存在を「仮定」とすると、そうした存在らが「都度折々の自由意思で動いているはずの」あなたや筆者に「先回り」している(ランダムに選んだ場所に「先回り」している)ような状況が現出することになる、それでいてそうした過去改変されし者達の過去改変は波及効果が発生する程度が限局化した制御された「(半ば、もの)ゾンビ人間のそれ」であるゆえにあなたや私の因果律には重篤な影響を与えはしない——([安定化するように制御されたゾンビワールドの哲学的ゾンビの因果律(における過去の状況)]は[自由なる人間の独立した因果律(の現在の状況)]と相互干渉「しにくい」)——とのことになりもして「自由人たる」あなたや筆者自身の過去は独立別個の不変なるものとして存在しているがゆえに何の矛盾も生じえない....、などとのことにもなりうる。

頭の具合がよろしくはなければ(あるいは見ている世界が蝶々飛び交うお花畑な



らば)、自分で都度自由意志で自由に歩いていったところで、そう、地図にダーツを投げて刺さった場所でもいい、気の向くままに立ち寄ることとした場所らにて顔だけ知っているとの魅力的なる異性らに連続して出会うなどとの状況が立ち現れたりすると[運命の赤い糸のあやとりの問題] などとのことを想起するかもしれないが(凄まじい確率的偶然をもものともせぬ運命が具現化しているなどと想起するかもしれないが)、あるいは、過度に被害妄想的になっていれば、

『おや、(監視社会をテーマとする映画題名としての)エネミー・オブ・アメリカ Enemy of the State か、何らかの全てを見通す陰謀団の手先が人工衛星で自分の行動をダイレクトに監視・把握、凄まじいスピード(情報把握なしがたいところで情報把握をなし、移動のための所要時間もやりくりできなからうと思えるところでの超スピード)で追尾する尾行要員を付けているのか』(正気ではありえない凄まじく病んだ体系妄想患者 Paranoid の発想である。ただしこの国では大規模仏教系カルト成員らが海外で[モビング]と呼ばれるような行為類系の「異常極まりない」「普通ならば説明がなしがたい」対個人集団つきまとい行為をなしうるとのことは筆者も把握しているし、聞き及んでいる)

などとも考えるかもしれないが([パラノイ德的観点]を当然に誘発しうるところとして筆者に関してはたとえば、大学時代、深夜電気を消した直後、無言電話がかかってきたこともあり、窓を開けて不審者(車)が周囲にないか確認をすることになった(そしてそこにはなににもなかった)などとの馬鹿げたことを多く経験しもしてきた)、そう、

「人間は他者の内面を推し量ることができない (もしかしたらばあなたや私の隣にいるのは[人間のフリをしている機械に精神を譲り渡してしまっているゾンビ] かもしれないし、[それと気付かずに「無意識的に」機械に衝動をコントロールされているが如きの致命的なまでに過度に暗示受けやすき者] かもしれない)とのこととワンセットの状況が成り立っている —— 最悪なことに[哲学的ゾンビの仮定]と同一のことが問題になりうる —— )」

との仮定を差し挟めば(それまた世の中を常識教信者よろしく「常識的にのみ」見れば凄まじく病んだ仮定だがとにかくも差しはさめば)、そして、加えもしての先述の二つの条件、

**[超光速通信を薬籠中のものとしている別の先進文明が存在しており]**

**[そちら超光速通信の機序を用いもしてそうした文明がこちらの世界に介入すること「まで」がなされている]**

との二つの仮定(世界そのもののありようにまつわる仮定)を差し挟めば、

**[可能性論]**

としてまったく違う見方もができるようになる、[兆候]にまつわる場所としてまったく違う見方もできるようになってしまうとのことがある(：無論、であっても当然に馬鹿げて響きもする話であろうから、「そうした話を容れて欲しい」などここでは強くも願わない。だが、本稿これ以降の流れを読み解くに当たって、「ひとつのものの見方としてそうした見方さえ出来るとこの者は述べたいのか」程度に見ていただければ、光栄と思いはする)。

超光速の機序を用いての人間操作が実体としてあるのならば具現化しうることになるとの[兆候]の話はここまでとし、同じくものことにまつわたるの(本題から脇に

逸れての) 付記の部を続ける。

以上示してきた見方は

[[理]もなく[未来]を言い当ててしまうとの預言者](という名の被操作個体)

のみならずものところとして世界が[虚ろなる存在](思考能力など有しておらず、頭の具合が過度によろしくはないことをやり、言う存在にも成り下がろうとの本質的に虚ろなる存在)で溢れ返っている、そういった、

[世界ゾンビ横溢仮説]

という[悲劇的なものの見方]に通ずるところのものである。

一般論の問題として超光速通信は

[因果律; Causality] (通例、[原[因]])としての行動が先んじてそこにあり、それが[結[果]]を引き起こすとの通常の「あれなければこれなし」の流れ

の問題と抵触すると言われるのだが、その因果律を些事茶飯的なところですら自分自身のものに(時と局面に応じてか)出来ぬとの存在、代わって、他律的に操作されているとの状況に甘んじているとの人間は限りなく[ゾンビ](部分的ゾンビ)に近きものにされているとも形容できる。

といった者らが存在していない(あるいはほんの少ししか存在していない)中で過去を少しでも変えるとのことがなされるのだと仮定するとその波及効果(後述するところのバタフライ・エフェクトに親和性高きもの)が問題になるのであるから、仮に[波及効果]を極小に抑えるとの発想法が強くもあるのだとすれば、である。

考えられるところとして「本当に重要なところでは」、

[話が通ずる素地が何らないとのゾンビのような人間ら] (海外にあって膨大な数の人間が寄り集まり、彼・彼女らは何を考えてこうしたことをなしているのか、との[ゾンビの本格的扮装をして街を練り歩くとの数万の参加者を集めての Zombie Walk] というイベント( Zombie Walk で画像検索すればそのコスプレ集団としての態様のすさまじさが瞭然として分かつてもしようとのイベント)があるのだが、そこに見るような典型的ゾンビ、そうしたものは異なる一見にしてゾンビと見えない、いかにも[普通の人間]とのなりをしてのゾンビらではある／お蔭参り(先述)にかつて参集したような大衆のようなものかもしれないが、そこに主体性・自律性の残置を想定するのならばゾンビに近い状況に「甘んじている」と形容できる者らでもいい)

が大量に、そう、あまりにも大量にこの世界の[部品]として配置されている、それだけの理由があるとの見方とも通底してしまうことになる(この問題に中途半端なありようは想定できないとも)。 そういう話をここではなしている —— 最も著名な部類の SF 作家、いわゆる SF 業界のビッグ・スリーの一に分類されるとの小説家ロバート・ハインライン (Robert A. Heinlein) は「過去改変による不可思議なループ世界実現を描く作品」、そう、一人の人間の誕生がその人間自身の過去改変に起因するとの因果の淀みのようなものを描いている作品を発表しているのだが、そちら作品の「邦題」タイトルが『輪廻の蛇』であるのに対して、「原題」タイトルは All You Zombies (1959) となっている。 そうした原題に見る含みは明確で「過去改変の虜(とりこ)」になり、その状況に依存しきっているとの状況は「本当に生きている」とはまったくもって言えない状況、「浅ましくものゾンビの状況に限りなく近い状況

に成り下がっている]とのものでもあろうと解されるところである——。

筆者は、(特段に思うところあって)、上のような話をしているのである ( : 理解が早いとの向きにとってはあまりにもくだしくもなつての筆の運びをなしていると承知のうえで書けば、である。「仮に」そういうことがあるのだとすると、本質的には自由度など有していない、ほとんど同じことを機械的に繰り返す、であるが、何か言われれば、その指令を遵守しての範囲内で機械的・非自主的な変則的行動をなすとのゾンビ人間で満ち満ちた牢獄であるとのことが世界の実体であるとのことになりえ、自由意思を有している本稿筆者「のような」人間がいくら自身の種族(人類)にとり有意義有用たらんことを述べ、やろうとしても、それが機械(を動かす存在)の決めた流れに背馳するのであれば、そして、「人間存在一般に機械に抗うだけの意思の力がついぞ生じ得ない」ならば、死ぬまでそうもした挙は顧みられることはない、無視され続けることにもなる(ただ、その場合にも取り合うにも値しない人間未満のゾンビ人間に「足を引っ張るためだけ。」との理由での下らぬ式で顧みられるとのケースは除く)とあいなろうと述べもしているのがここでの話でもある)。

今しばらくも本稿本論から離れての脇に逸れての付記を続ける。

[[過去改変]と[微調整]]のこことを取り上げた米国の著名作家レイ・ブラッドベリの1952年初出小説として

### A Sound of Thunder 『サウンド・オブ・サンダー』(邦題『いかずちの音』)

という作品が近年(2003年)にて映画化されたとのことがある (: 50年代初頭刊行の小説自体はレイ・ブラッドベリが科学考証とは無縁な作家であったため荒唐無稽な匂いがしもするものだが、その寓意性が問題になると判断し、ここでは同作のこことを引き合いに出している —— 因みに2003年の映画版『サウンド・オブ・サンダー』でも「恐竜が生きる往古の世界」が「加速器と関係するようにほんの少し言及されてのタイム・トラベル型ワームホール」とが結びつけられている—— )。

作品設定として[産業化されてのタイムトラベル]が扱われる小説作品にして映画作品たるそちら『サウンド・オブ・サンダー』の中では

[恐竜時代にタイムトラベルしてのハンティングツアーが催されている中で[死ぬことが決まっている動物]だけが狩猟可能となっているところを誤ってツアー参加者が蝶を踏みつけた、そのために世界の歯車にずれが発生して凄まじい時間の改変圧力が生じた]

とのこことが話の主軸として描かれている。

( : にまつわるこころの話なせば、

[カオス理論](こちら[カオス理論]とは極々端的に述べれば、[ある事柄が一見にして乱雑・複雑に見えるとのありようを呈している(ケイオス、混沌の状況を呈している)とのこことがあって「も」、それは力学系の問題、本質的ありようを[初期値としての状況に多く規定されている系の問題]として突き詰めることができるはずである]と数値的に分析することをなすとの理論の枠組みのこことを指す)

との絡みでは

[蝶々が舞った動きが嵐にも通ずる](換言すれば、[嵐の如き「乱雑な」(ケイオスの状況を呈する)状態「も」突き詰めれば、たかだかもの蝶一

と判じられる材料が残念ながらそこかしこにある、いかに自由意志をふんだんに蔵した者が好転を世にもたらそうとしても、当人は徹底無視される中で下らぬまがい物ばかりが過去に遡ってもたらされるだけである、そして、そうした時を遡るまがい物およびまがい物の生成の機序を空虚なありようで甘受しているだけなの、— その先が奈辺にあれ— ベルトコンベアーに乗って逆らわずに流されていくだけの「視野角が狭い」周辺の因果(過去)の改変すら吸収してしまう生活・思考領域が極めて効率的にコンポーネント(部品)化された人間存在である(日本ならば毎日通勤しての電車で魚群の群れのようなありようを呈しもして日常慣性で決して抗わぬ人間存在である)とのこことにもなりえる。

以上申し述べたうえで、だが、筆者はそうした中では死にきかずここの「行き過ぎた」話まで— 余事表記としてながらも— 赤裸々になしているとのここと、(そうした向きが果たしていれば、だが)、心ある向きにはお含みいただきたい(尚、筆者が万人に理解を求めたいのはここの行き過ぎた余事表記の部ではなく(いわんやもつてしての直上の勘違いを招きもしようとの印象論としての「おれがおれが話」の類ではなく)、世の紛いものらがここととするような「露骨なまで行き過ぎた話柄 — (言→



匹の羽ばたきにまで遡りうる])

との意で

[微少的变化が大々的变化をもたらすことになるとの式]

について

[バタフライ・エフェクト](バタフライ効果)

との用語を用いる慣行が確立されている。

そちら「カオス理論との絡みでの」[バタフライ・エフェクト]の提唱時期は広くも語られるところとして1972年とはされているが(下にその経緯の紹介もなす)、50年代初頭の空想的サイエンス・フィクション作家たるレイ・ブラッドベリの手になる表記作品 A Sound of Thunder『いかずちの音』に見る、

[原始時代に遡っての蝶の踏みつけ圧殺(二〇〇三年の映画版「でも」それが描かれるところの踏みつけ圧殺)が世界の崩壊につながった]

との筋立てはそうもした[カオス理論にてのバタフライ・エフェクトの用語定立に結実している七〇年代動向]に先行するところのものとなりもなり、フィクションに見るそうもした先行性それ自体を(カオス理論にての)[バタフライ効果]との概念との絡み「でも」目立って問題視するとの見方もまたある——現行現在にての英文 Wikipedia のバタフライ・エフェクト絡みの項目([ Butterfly effect ]項目)にて、引用なすところとして、“ **The idea that one butterfly could eventually have a far-reaching ripple effect on subsequent historic events first appears in "A Sound of Thunder", a 1952 short story by Ray Bradbury about time travel.**” (訳として)「一匹の蝶が以降歴史に対して広範囲に亘っての波及効果を及ぼすとの観点はレイ・ブラッドベリによるタイムトラベルを扱った短編『いかずちの音』に初出を見るものである(引用部(訳)はここまでとする)と表記されているようなところが同じくもの観点が認められるところである——。

その点、経緯解説をなせば、大御所として知られるSF作家、レイ・ブラッドベリのフィクションに後続するところとして気象学者エドワード・ローレンツが60年代から70年代にかけて

「仮に気象学者がそちら説の適宜適切さをみとめるとのことがあるのならばカモメの羽ばたきが気象の流れを恒常的に変えうるとのことにもなるであろう」

などと述べ、続いての1972年に同じくものことを([カモメ・ウミネコ seagull の類]を[蝶 butterfly]に代えての) Does the flap of a butterfly's wings in Brazil set off a tornado in Texas?と題しての講演で同じくものことを強調、後にその式が「カオス理論との絡みで」幅広くも援用されることになったことが[バタフライ・エフェクト]という言葉の縁起となっているとメインストリートでは語られている(同じくもの英文 Wikipedia [ Butterfly effect ]項目にて “Elsewhere he said that "One meteorologist remarked that if the theory were correct, one flap of a seagull's wings could change the course of weather forever." **Following suggestions from colleagues, in later speeches and papers Lorenz used the more poetic butterfly.** According to Lorenz, when he failed to provide a title for a talk he was to present at the 139th meeting of the American Association

論操作の意図などがあって無理矢理流通させられているのならば格別、)本来ならば当然の帰結として斥けられることになるべきだろうとの話柄——ではなくにも[危機的状況]を具体的な現象から「堅いところとして」指摘・訴求している本論の部であるとも強くも断っておく——※我が属する種族、人間存在が生き残るに足る種族ならば行動を起こしめしよとのかたちで【人災を引き金にしての終末的状況にまつわる恣意性】をつまびらやかにしようとしているのが筆者この身と本稿それ自体であって、本来的にそこには山火事を報せたのは誰か、といった問題はどうかでもいいとの観点があり、【山火事に対する適正なる報知のありよう】(それを信用性を疑わせしめる方向で歪めたり、隠したりするようなことをやるような奴原はなににせよ屑であり、また、そうもしたやりようを下支えする力学は我々人間の側にはないともとらえている)、および、【報知された側の適正なる対処のありよう】しか問題にならぬはずだろうと考えていると申し述べておく——)。

for the Advancement of Science in 1972, Philip Merilees concocted Does the flap of a butterfly's wings in Brazil set off a tornado in Texas? as a title. Although a butterfly flapping its wings has remained constant in the expression of this concept, the location of the butterfly, the consequences, and the location of the consequences have varied widely.”と表記されているところがそれにまつわっての解説部となる——同一のことについては「和文」ウィキペディアにあって(以下、そちら「現行にての」表層的解説を引用するところとして)“ **butterfly effect** という簡潔な表現自体はエドワード・ローレンツが 1972 年にアメリカ科学振興協会でおこなった講演のタイトル『予測可能性-ブラジルでの蝶の羽ばたきはテキサスでトルネードを引き起こすか』に由来する。ローレンツによると、この講演のタイトルは学会の主催者で気象学者のフィリップ・メリリースが付けたものだという”(引用部はここまでとする)と表記されているところともなる——)。

とにかくも、バタフライ効果との概念は[(公式提唱時期に「先行する」ブラッドベリ小説『いかずちの音』に見るような)蝶の踏みつけによる世界崩壊に通じた過去改変のリスク]に相通ずるものであるとの見方もなされている)

直上言及しての映画化された小説『いかずちの音』(流通している映画版でも[死すべき運命]にあるのならば獐猛巨大なる肉食恐竜の(タイムトラベラーによる)ハンティングなども許されるが、まだそれが生き続ける運命にあるならば、儂げな蝶一匹たりとて殺してはならないとの描写が目立ってなされているレイ・ブラッドベリ小説作品)にも見る筋立てが[誇張]を見てのものであっても、人間の運命がそういう発想——自由な蝶々は飛ぶに任せてもその他のところで慎重を期すとの式での発想——で過去に逆行して操作調整されている可能性がある(要するにこの世界は[因果律]を自由にできないのかたちでコントロールされる(運命を他律的に決められているとの按配でコントロールされる)[ゾンビ]をそのために数多内包している可能性がある)ととらえるが如き話をここではなしている。

ここまできたところで、である。自由に生き、自由に物を言い、行動なしてきたとの筆者自身の挙、の中でおのれの目を欺き、ときに愚弄するかのごときありさまで際会することが多かった[化け物がかったこの世界のありよう]、そして、そのありようにただただ唾——言葉発せられぬとの者——のように従うだけ(と見受けられる)との主体的意思明示しなき人々のありさまに照らし合わせ、「特段に」想い、含むところがある中で[行き過ぎた可能性論]として触れるべきではないところに意図して触れている(本題から逸れての)脇にての話、そのまとめをなす。

「(繰り返すも)、—「仮に」付きで— 仮にそういうことが[目的]をもって(媒介としての高度な人工知能を用いて、でも)構築されてきたとの[養殖種の文明]に応用されており、それこそが我々人類の文明であると仮定すれば、(本稿筆者とて無論にして我々人類が[時空間を恣(ほしいまま)にするテクノロジーを有した存在によって「目的」づくめで育てられてきた養殖種]であるなどとは想定したくないのだが、本稿にてのこれよりの段でも論拠を挙げ連ねて指し示していくとのそう判じざるをえぬとの材料もが山積しているなかでそうした[仮定]を置くのならば)、それは[必要性][手段]の問題——いいだろうか。[必要性]と[手段]の問題である——として多くの人間に[自由意思]が許されておらず、

[時を越えての機械的指示であれ何であれ言われれば何でもやると

の機械の部品(モジュール:歯車)]

と化した人間ら、

[下位の機械機構の部品(歯車)としてのみ生き(活き)、「自分達が  
どういう状況にあるかさえついで理解することを許されずに死んで行  
く」(耐用年数を超えて存在しなくなる)人間「未満」と墮した存在]

が諸所この世界に配されているとの可能性(およびその可能性を想起する  
だけの考えられるところの必要性)に直結するところとなる」

---

本稿執筆が進んだ段階での「追記」として:

本稿にての後の段、

**出典(Source)紹介の部 87(3)**および**出典(Source)紹介の部 87(4)**

を包摂する部とのところのものである後の段にては「可能性論・推測にとどまら  
ざるをえない話ではある」と強くも断つての流れにてだが、

**[人間存在のありうべき機序(作用原理)]**

の話も申し分け程度に付すとの運びとした([追記部]であるからかなりもつての  
後の流れについて細かくも言及をなせるところとして、である)。

そうした後の段では

**[非侵襲性(医療器具としてのメスを使わない)とのかたちでのブレイン・マシン・  
インターフェース(と呼ばれる装置)を「機械⇒(作用)⇒人間の脳機能の方向  
性で」作用させる式]**

が[具体的操作手法]として考えられるとのことを——[この世界で人間レベル  
のものとして60年代よりエール大学所属の医学博士ら(悪名高いホセ・デルガ  
ドラ)によって実現されていたとの動物の脳の電気刺激による制御技術]および  
[多世界(マルチバース)を浸潤するとされる[重力波](傍受できないために守  
秘性に優れるとされる重力波)をいかにして電磁気力に変換し、それを媒質とし  
て用いるのかに関わる科学論文ら内容]を引き合いに——ひとつの可能性、  
そう、[他の世界よりのゾンビ人間(の群体)の意識的ないし無意識的な操作]に  
まつわるひとつの可能性の問題として呈示することを試みもしている(エール大  
の設備を利用して科学者らが霊長類に属する猿の脳内電流構造を制御してい  
かにその感情と物理的単純行動を([被実験体の存在の核にある意思]に抵触  
しないとのレベルで)ラジオ・コントロール方式で実現したのか、当該実験関係  
者の論稿内容と往時にまつわる評を原文引用しながら示し、また、それと併せ  
て、[多世界]を浸潤すると「される」重力波にいかような[応用可能性]があるの  
か、との解説をなし、ひとつの可能性を呈示することを試みもしている)。

そうした(同じくもの)後にての段の解説部では

**[未来の情報に基づいての超光速通信による過去に対するコントロール]**

にも相通ずるところがありうる(ととらえる)ところを取り扱いもするのだが、ここ本  
段、[脇に逸れての付記の部]では意図して次のような引用をもなしておく。

(以下、本稿筆者がつい最近、読みもした **Breaking the Time Barrier The  
Race to Build the First Time Machine** (邦題)『タイムマシン開発に挑んだ  
物理学者達』(邦訳版版元は日経 BP 社)との著作にての第 15 章[ひもつきの  
タイムマシン]、147 ページより引用なすとして)



同じような実験がカナダのオンタリオ州サッドベリーにあるローレシア大学の名高い神経科学者マイケル・パーシガー(一九四五～)によって進められている。被験者を使った実験は二〇年にわたってつづけられ、詳細な結果が医学と科学の論文に数多くまとめられている。パーシガーが設計した装置は、強力な電磁場を発生させて脳を刺激する。その結果、被験者の意識が変容し、しばしば幻覚が引き起こされる。時間を超越したり、精神が肉体から離れたりといったように、報告される特徴の多くはバセットのそれと共通している。パーシガーの研究の目的は、人工的に発生させた電磁場の作用をもとに、天然に存在する電磁場の悪影響を調べることだ。その独自の理論によれば、地質の状態が原因で電磁場のエネルギーが浮遊し、「過渡現象」として澱むことがあるという。ある程度の敏感な人間は、たまたま悪い時間に悪い場所にいると、身体に奇妙な刺激を感じたり、不思議な物体を見たりする。そして、タイムトラベルをしたとか、異星人に遭遇したとか思い込む

(引用部はここまでとする)

操作対象となる生命体の脳(猿などの比較的高度な生物の脳も含む)の機序を自在自儘(じまま)に操れる、その生体の本然的欲求に完全に背くことがない限り、ラジコンのようにコントロールできるとのテクノロジー(ブレイン・マシン・インターフェースにまつわるテクノロジー)が人間世界の科学者に由来するものとして60年代より実現していたとされる(執筆が進んだ段階より立ち戻っての追記部だから書ける場所として本稿のかなり後の段、**出典(Source)紹介の部 87(3)**および**出典(Source)紹介の部 87(4)**を包摂する部にて同じくものを当該の理論にまつわる科学理論解説英文文書より原文引用なしながら事細かに取り上げている)。他面で生体の脳に対する通電に近い行為をより雑然かつ包括的になす、側頭葉に電磁場放射をなすことで対象に[時間を超越したり][精神が肉体から離れたり][異星人と出会ったり]との幻覚を与える効用がもたらされるとの「実験」結果も人間レベルで(直上にて引用なしのような式で)呈示されている。

仮にもし[後者実験(マイケル・パーシガーの時間錯誤をもたらすとの頭部に対する電磁波照射実験)にまつわる言いよう]が[前者テクノロジー(ブレイン・マシン・インターフェース技術)の応用の極にあるところ]を愚劣にも茶化す(結果的に茶化す)ようなありようのものとしてたかだかもの人間レベルの科学者(傀儡くぐつかもしれない)によって引き合いに出されているのだとすれば、何が言えるのか。(ここ追記部を付した対象としての)本稿直前の段ではそういうことに通ずる話をなしてもいる——本稿執筆が進んでから付しもしたとの追記部はここまでとする——)



## Ridiculous ?

上の図で示さんとしていることは[次のこと]である。

⇒

[バタフライ・エフェクト]というものが過去改変と抵触する - interfere- (先述の小説および映画の『いかずちの音』にその表象を見るように抵触する)と考えれもする中、[世界[ゾンビ][不自由人]充満仮説]の類のありようがそこがあればそちら[バタフライ・エフェクト]を縮減する - reduce- とのことが可能であり(自由意志がないゾンビのような人間の行動は時局折々の硬直的な機械的操作の影響を受けておりさして大きな変数とならないとも)、によって過去改変の効果測定を向上させしめることができると考えられる — [ありうべき先進文明のやりよう]を考えた際のこととして、である—。他面、同じくものことと表裏をなすこととして過去改変を効率的になせる(過去に情報を送って「どういう機序でか」その結果を過去にて反映できる)といった技術体系があるのならば、それは半ばゾンビに近しき人間で世界が満ち満ちていることとも通ずることになる([過去改変]と[ゾンビ充満仮説]はインターディペンデント、相互依存の関係を呈する)。

図にて端的に示そうとしているそうした関係性それ自体について和文にて極めて事細やか解説をなさんとしてきたのがここまでの内容である。

以上のようなものの見方に対しては、

「そのような観点は馬鹿げている。[自由]が容認されている人間の社会を貶める出鱈目(がかったの馬鹿げた推論)である」

などと述べたい向きもいるかもしれない、とも思う (:[人間だけの、人間だけに

よる、人間だけのためのお花畑世界(の押しつけ)の鼻についてならぬとの虚偽)、その臭気放ったありようを「どういう料簡でなのか」すべて無視しながら世界が「人間という種族のためだけに運用されている世界」であるなどと「無条件に」想定し(あるいは宗教などという相応の臭気放つものがそこにある中で不誠実極まりなくも強弁し続け)、逆に真実を手探りで探る行為については諸共もってしてステレオタイプ化された頭の具合のよろしくはない者達に由来するもの、「陰謀論者」「フリーク(畸形)」の「痛い」行為としての前提での語り口上をなすとの能しかないとの「愚劣な偽り人(いつわりびと)」の横溢の問題を観念せず最大限、好意的に解しても「この世界で自由について強弁するなど騙され人の謬見にすぎぬ」とも筆者なぞはとらえているのだが、とにかくも、そういう意見の問題が当然に想定されはする)。

その点、(魂の)自由の問題について「時間」との絡みでさして深い「思考」(「思考」として自由を前提にしての意志の力から生じるものなのだろうが)も伴わずに云々しようなどとのその行為は「実に甘い」ものであろうと見受けられる(※)。

---

(※これからもそのことを「必要である」と判じて厭々ながらも示していくが、この世界は

[[自由]が紛い物でなければ説明が付きがたいとの「結果」(「現象」)]

で満ち満ちている(そして、それが「我々を全員皆殺しにする(と自然に解される)」が如くの意味表示」とワンセットになっている)。

成程、「言い得て妙.」の問題として、

“**There are two freedoms, — the false, where a man is free to do what he likes; the true, where a man is free to do what he ought.**” 「二つの自由がある。一方は「自身が好きなこと」を自儘(じまま)にやれるのを自由とする人間のところに存在する」との「紛い物の自由」であり、もう一方は「自身が「なすべきと判じたこと」をなす自在性を有した人間のところにある」との「本物の自由」である」(英国国教会牧師にして歴史家たる Charles Kingsley の弁となる)

とのこと、

「ものを考えることをせぬ、それゆえ、ものを考えてそれに基づき「行動」を決している節もないとの人間」

にとつての「自由」とは

「低次の嗜好、三大欲求あるいはそれに毛が生えた程度の欲求 —— 球技と呼ばれる球遊びを「余暇」として愉しむ程度の欲求でもいい —— を満たすのが関の山であるとの「飼われての獣畜」にはせいぜいその充足だけが意味をなすとの欲求」の消化作用を十二分に味わえとのそれ程度の意味合いのもの」

に停滞、留まっている節もあり、実際にその程度の紛い物にこの世界の「自由」の効用と意味は多くの人間にとり限定限局されているようにも「見える」(こ

の世界には種族の未来にとっても種族に内包される個々人の未来にとっても[どうでもよい]との下らぬ手前語り・属人的印象論を論客ぶって云々する[自由人]も数多いるが、この世界の主たる者達は[「長期の展望にての望まじき存続、あるいは近々の生存それ自体のためにそれを[なさねばならぬ]とのことがある」と露骨に判じられる中でそのことを突き詰めて見、かつもって、種族とおのれの生存のためになさねばならぬと判じられることに命を賭けるとの自由]は有しておらず、[[屠所の羊]がメエメエ鳴いて食べて寝て交尾する程度のものに完結している自由]を有しているにすぎぬ風もある)。

につき、日本を含め先進国では教育現場その他にて絶えず

「自由は尊い」

などとそれこそマントラか何かのようにひたすらに鼓吹されるわけだが、

[本稿で一部事例につき詳述を詳述を重ねてきたし、これより、さらにもって数多存在摘示していくような[奇怪な前言現象]](残念ながらそれらは[屠所の羊]らを予定通りに「皆殺しにする」との執拗なる恣意性が透けて見える、そう、「露骨に透けて見えもする」との前言現象らでもある)

が「何故にもってして」山なす程に多々見受けられるのか、そして、そうした状況下でその異常なる状況が「何故にもってして」世人一般に顧みられて「いない」とのことがあるのか(陳腐化を領分とする下らぬ陰謀論者・神秘家・詐狂者・質的狂人らによって彼らお得意の馬鹿噺として顧みられるケースは除く)、そこより「人間の世界の自由の真なるありよう(「欠如」そのもの)」が見てとれるようになっていると当然に筆者は考えている。

---

超光速通信の機序を用いての介入の話は——くどくも申し述べたいところとして——[可能性論]として呈示したいところだが(そうしたもの、「可能性論」として目立つように強調したうえで呈示しなければ、たとえもし、無視なされずに顧みられても、頭の具合がよろしくはない「相応の」者達に足を引っ張るうえでの足しにされるのがせいぜいであるともとらえる——筆者からして人間としては不自然性を感じさせる動きの者らに接近され不愉快の念に駆られたことが何度となくある——)、そうもした[可能性論]さえ顧慮して然るべきであると考えられるところとして[人間の歴史]——(本稿筆者がどの程度までの歴史知識を有しているかは本稿それ自体の歴史関連表記および本稿公開サイト上にて公開している著作のデータ分析部をご覧くださいのものではある)——にあっては[自由]ほど軽んじられるものはなかった、そのように解されるとのかたちで人間の歴史には「個々人が人間として、人間らしいものとしてなすべきと判じたことを禁ずる」とのその意での[自由]を否定する[ドグマ]と[結果]で満ちているとの節がある。

(半ば余事記載となっているところをいましばらく続けるとして)

著名な文献文書に基づくところとして欧州の支配的観念、キリスト教の中のプロテスタントについてはその開祖マルティン・ルターの物言いからして「[自由意思]と[理性]は呪われた忌むべき者の特性である」などとする風潮があり、といった観点を神の御心(というもの)を絶対視する会衆らが容れてきたとの事情がある。また、同じくものプロテスタントのカルヴァン主



義では運命は「生まれた時からすべて正しくもあるべくもの方向」に決定されているとのドグマがあり、そういう理念を「きわめて重要視する」との塩梅で多くの人間が「是」としてきたのが人間の歴史であると判じられるようになってきている(：「生まれた折より神の御心からすべての運命はきまっている」なぞとするカルヴァン主義については同観点で資本主義の原動力たる資本蓄積の原因となっていた、信徒らはその「神授されての運命」が望ましい「予定調和」に適ったものと「確認」するために逆説的に(自分達の与えられた(とドグマで規定された)[生]の有用性を確認するために)資本蓄積に奔ったなどという —『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と題されての著名論考が皮相を撫でるようにそういうことを扱っているとの— 学究ら観点もあり、といったことは多くの大学生(との名の社会の「良き」構成要素の候補)ですら学ぶことである)。

につき、たかだか和文ウィキペディアにての誰でも確認できるところとしての「奴隷意志論」項目(ルター著作「奴隷意志論」こと *De servo arbitrio* にまつわる項目)や同「予定説」項目(多くのプロテスタントにとって甚大な影響を与えたとされるカルヴァン主義の中心理念にまつわる項目)を参照されてみるのもよからう。といったものにての記述からして人類の文明世界の地平を切り開いてきた欧米文明の背面にある発想が

「人間の自由意思を否定し」「神の恩寵に身を委ね」「ひたすらに神の御心に沿って生きる」

ことこそが「正しき人(義人)の道」とするものであることが推し量れるようになってきている(：ポイントは「自由意思の「否定」」が望ましいものであるなどとの「生物の生存能力」(「局面に応じて臨機応変に判断をなす」すなわち「融通無碍に「自由な」判断をなす」、によって、知的生命体として状況を分析して生き残れもしようとの生存能力)と矛盾する不自然な、いや、グロテスクですらある観点が支配的ドグマとして鼓吹されてきたことである)。

そうもした中近東に端を発する一神教のドグマ ——会衆は「神」に対してその自由を捨て去り、その恩寵のため、おのが身を捧げるべしとのドグマ—— に対して仏教、そして、そちら仏教とその発想法にて相補関係を呈するヒンドゥー教のドグマに関して「も」話として限りなく似通っているとの側面があることも指摘できるようになっている。仏教の根本理念は「渴愛・愛着や喜怒哀楽を私的な「我」の領分として切り捨てて、[私(わたくし)をむなしくしての無我]の境地に至ることを最上の道としている(生物としての自然なる存在ありようをプラスとするのではなくそれをしてマイナスとする[不可解な観念]ではある)。

それでもって、無我に至ることでもって —ここからが肝要なわけだが— 仏教は

**「涅槃(ねはん／ニルヴァーナ)に至る道」**

すなわち

**「「我」執ゆえに囚われての輪廻転生の苦界から脱却するとの道」**

と鼓吹してきた(といった仏教の輪廻転生ことサンサーラの「苦しみから脱却する」云々の観点はヒンドゥー教の観点と共通性を呈する)。

そうもした無我の境地に至る、煩悩を捨てることで輪廻の悪因悪果から逃れ出るなどとの「特異なる」思考様式がどうして「このような世界」で歴年唱導されてきたのかとまで考えてこそその「思考する人間」かとは思うのだが、さて、そこに見る「輪廻転生」を「繰り返す運命」をもってループ構造とすれば、それを科学的に実現する手段は何か。

科学的に見れば、

「人間(というより生物一般)の生は死ねばおしまいであり、繰り返しはない」とのことになる。

だが、である。超光速通信が如く「過去」に溯行する操作機序による人間操作がなされれば、人間は「そうとは知らずに」死んでからも多少異なる動作を繰り返しなされられることとなりかねない。延々、奇怪な糸繰り人形のように、である(管理用の機械——お為ごかしに被操作種族の個体毎に対してデータベースに照応して神か何かのように振る舞えもするマシンたりうる——に計算管理をなさしめる十分なコンピューティングの素地があり、かつ、そちらコンピューティングを約束する動力が約束されているのならば、そう、それこそ何度も何度も超光速通信による微弱過去改変が付与されてのループが試行されているとのこととてありうる)。超光速通信による自由束縛の力学、そう、「我」(人間らしさを捨てておらぬ状況)に対する「無我」(人間らしさを捨てた機械の境地)を容れている状況が(人外にとっての)理想的なループ環境として「要請」されもしているとの状況にてそういうこととてありうる——といった中ではまさしく「無我」の境地こそが仏教の額面の論理とは完全に真逆に、何度もそれと「識らず」に「空っぽの偽りの人生」を繰り返させられる「超光速通信による因果律の牢獄」(ゾンビの境地)への要件とのことになるであろう——。

その点、「仮に、」であるが、超光速通信でもって葉籠中の存在を操作する者達(が用いる超高度な機械的力学)があるのだとすれば、である。「悪辣な反語的表現」としては「仏教」なども「自由意思と知性を楽園(エデン)にてそちらサイドより否定した神の最終救済」へと話が向かっていく一神教とおおよその話は同文であると受け取れるようになっていと述べられもするとのわけである(：尚、仏教が忌まわしくもとらえているとの「ループ」(涅槃にて克服されるべきとされる輪廻)が金輪際生じえないとのケースを考えれば、である。重力波などの(マルチバースを貫通しうるとも科学読み本らでされる)操作媒質となりえるものをもってしても「多」世界解釈の他世界から影響を及ぼしえないとの状況に至っている、そう、操作されての世界がブラックホールの如き情報・物理的実体を破壊し尽くすとのものに吞まれる、時空間の穴の中に消え失せた場合などが挙げられるのではないかと個人的には見ている——本稿後半部ではそれにまつわって(邦訳されていない著作だが)米国人物理学者フランク・ティプラーの手になる **The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead (1994)** との書籍にあつての「まさしくものそのこと の絡みで問題となる(重力の特異点というものが輪廻を断ち涅槃を実現するとの発想法に通ずるとのこととて問題となる)」反語的内容を細かくも取り上げる所存である——)。

さて、人間の歴史にあつての支配的ドグマの特質についての一步進んでの確認までをなす「自由意思」を有した機械「以上」の向きらが本稿を目にしていると仮定しての奨め(『それはあまりにも状況を楽観視しての奨めかもしれない』と自分でも考えているものではある)として書いておくが、

「本稿公開サイトの一つで同文に公開しているとの『人類と操作』(2009)という著作では「人間の歴史操作の可能性」について論じているので、——(「諦観」ではなく「反抗」の糧にすべくも)——、データに依拠して示唆される「永年に渡っての操作」の可能性の理非について考えていただきたいものである」

(：手前がいくばくかの印税を得ての初版数千部との式での商業出版の流れで話が進んでいたことに付随して相応の人間らに褒め殺し・トンデモ化の試みをなされるとの憂き目を見ることになったし未だ見ている(要するに存在そのものを消されようとしている、そういう力学に強くも曝されている)との節ある著作ともなる拙著『人類と操作』についてはまだ筆者が比較的楽観的かつ未熟(今よりも未熟)であった折に「まずもつての橋



頭保にでもなせたら」との観点で著した著作としての[欠陥]も伴っているのだが(筆致も内容も俗受けするようにとの配慮・調整がなされていてそれがゆえに[軽いところ]が少なからずあり、のみならず、社会的環境および科学的見解にまつわっての[問題ある言い様]を真に受けすぎていたとの側面も少なからずあるとの(著者自身認めざるをえぬところの)[欠陥]が伴っている)、 であっても、同著に関しては人間の歴史から推し量れる悲劇の積み重ねについては多くを示唆しえた著作としての意義もあるか、と考えている)

以上で、

(自身の側に立つ人間がその影響に曝されうるとの)最悪の可能性を遺漏なくも呈示するのをもまた正しきを志す人間が通すべき筋であろう

との観点で延々と「脇に逸れて」書き連ねてきた、

**[過去改変]**

**[Faster than light 超光速]**

についての長くもなつての[付記]の部を終える (ここまでに他ならぬ手前自身が【我ら種族を滅びをもたらすシステムの部品】([超光速通信;過去改変]の無力無為極まりないアンカーのようなもの)にされてしまっているとの可能性にも通じうるとの事を赤裸々に呈示したつもりである。尚、これより[本題]に立ち戻って問題視することは、である。超光速通信(情報を過去に送るとの行為)、そう、「予言」の類を可能ならしめる超光速通信がそうしたものであるとの「情報」を過去に送るとのもの以上のもの、「(まとまった)物体」を過去に送るとの「通過可能なワームホールにまつわる思考実験(にまつわる書籍内記述)」に[文献的事実]との観点でいかような悪辣な側面が垣間見れるのか、とのこととなる)。

ここをもってして「長くもなつての」付記の部の終端とする

(直前直上にあつての脇に逸れての部、[超光速にまつわる可能性論に基づいての(行き過ぎての節もあったもののそれとて必要かと判じて付しもした)付記の部]から話を本筋の部——双子のパラドックスが何故、問題になるのかの話——に回帰させるとして)

日本にて伝わる[浦島太郎伝承]に対して[双子のパラドックス(先述)にまつわる観念]と[安っぽいサイエンス・フィクションの風味]を加えてのアレンジを加えてみる。

「浦島太郎は[亀]型宇宙船に乗り込んだ。亀型宇宙船は凄まじいスピードで、光速度とのスピードでプラネット・竜宮に向けて前進しているのだが、彼、浦島太郎はといった旅路につく前に故郷にワームホールカメラを置いてきた。そこで浦島は都度、悪趣味な亀型宇宙船に敷設してあるワームホール連結型ワームホールカメラ映像受信機(ワーム・カムとしておく)で故郷の様子を見てみた。結果、都度、観察するごとに自分の双子の兄弟が(そうした存在がいたとして)老いさらばえていく様に際会した」

無論にして馬鹿げている話の運びである(と読み手によっては聞こえよう)が、物理学者キップ・ソーンの「思考実験」上での申しようはそれにプラスアルファして奇矯なるものとなっており(出典(Source)紹介の部 28 および 出典(Source)紹介の部 28-2)にて原著および訳書よりの原文引用をなしているところがその該当部位となる)、ソーンの科学的仮説は——同じくもの書きようはつい先立っての段(長くもなつての直前の補足部に入る前のつい先立っての段)にあつてもなしていたわけだが—— 次のような内容のものとなる。

[浦島が亀型宇宙船で用いていたワームホールが[異なる時空間の情報を捕捉するカメラ]を越えての[ワームホール型ゲートドライブ](とここではしておく)となっており、それでもって、[光速で移動している、あるいは、移動をやめてのプラネット竜宮に到達した浦島太郎周辺の領域]と[過去と化した遙か離れての浦島故郷(地球)の場]をつなぐワームホール型タイムマシンができあがった。浦島は惑星[竜宮]から故郷[地球]に時を越えて「物理的に介入できるようになった」——たとえば、ワームホールに手を突っ込むなどしてその先の存在と握手できるなどのことができるようになった——のである。そして、浦島がそちらワームホールゲートを再び地球に立ち戻って使用すれば、それは過去の地球と未来の地球を結ぶゲートとしての役割を帯びるようになるのである]

疑わしきは邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(白揚社刊行の邦訳版)p.456-p.457より以下、再引用なしの部と直上直近述べたことの中身の比較をなしていただきたい。

(直下、出典(Source)紹介の部 28-2)にて挙げた内容の再度の原文引用をなすとして)

私は彼女の手を握ったまま …(中略)… ワームホールを通して眺めながら私は当然、彼女がちょうど十二時間後の二〇〇〇年一月一日午後九時頃に帰ったことに同意する。午後九時〇〇分にワームホールを覗いた私に見えるのは、カロリーだけではない。彼女の背後、わが家の前庭、そしてわが家も見ることができる。 …(中略)… この旅は地球上で測れば、…(中略)… 一〇年もかかる旅である。(これは典型的な「双子のパラドックス」だ。高速度で往復した双子の一人(カロリー)は時間の経過を一二時間と測るが、地球に残った双子のもう一方(私)は、旅が終わるまで一〇年も待たなくてはならない。) …(中略)… 二〇一〇年一月一日が到来し、カロリーは旅から帰ってきて、前庭に着陸する。私は走り出て彼女を出迎え、予想どおり、彼女が一〇年ではなく一二時間しか年をとっていないのに気づく。彼女は宇宙船の中に座っており、マウスに手を差し入れている。だれかと手を繋いでいるようだ。私は彼女の背後に立って、マウスの中を覗き、彼女が手を握っている相手は一〇年若い私自身で、二〇〇〇年一月一日の私の居間に座っていることに気づく。ワームホールはタイムマシンになっていたのである

(引用部はここまでとする)

以上によって示されることは浦島伝承というものが[特殊相対性理論と双子のパラドックスを巡る議論]と親和性がいかようにして高くもなっているか、ということである——話柄はエキセントリック

クなものであるが、浦島伝承という核を変えずにゾーンの思考実験と同様の言いようがなせるようになっていくことが問題となる— )。

さて、ここで殊更に浦島伝承などを引き合いにしたのには訳がある。

[生き死にの問題に関わる訴求の一材料]

として[次のこと]を問題視したいとの背景上、直上表記のようなたとえ話 — 向きによっては「滑稽さ」が目立つようなものかもしれない— を持ち出しもした、とのことがあるのである。

(まずもっての振り返っての話をなすが)

[ワームホール生成][加速器使用挙動][爬虫類の異種族の進出]との要素で複数の文物らがつながりあっているとの話が[文献的事実]にまつわるところでなせるようになっていく(との指摘をなしてきた — **出典(Source) 紹介の部 22**から**出典(Source) 紹介の部 27**とのかたちにての出典紹介部を付しつつそうした方向性を念頭にの一群の指摘をなしてきた— )との経緯がある。

以上のことに関わるところとしては(今は A. から F. と分けての E. の段階での話をなしているとして)先立っての A . および B. の段にて[カシミール効果]を観測するとの結果に至った実験 — 「二枚の無電状態の金属プレートを真向かいから近接させられるところまで近接させそこで[反重力]といった言葉と結びつけられる負のエネルギーを観察する」に至ったとの実験— に類似の行為、

**[「二枚の金属プレートを向かい合うかたちで配してその間の重力を中和する」なかで宇宙を創造する]**

との行為が[文献的事実]の問題としてフィクション、『フェッセンデンの宇宙』にも描かれていることを問題視した (: ひとつの問題は二枚の金属プレートを並べて[反重力]ともつながる負のエネルギーの観測をなしたカシミール効果発見の実験が行われたのが「1948年」であったのに対して二枚の金属プレートを並べてその間の重力を遮断しているとの『フェッセンデンの宇宙』が初出を見たのが1937年であったとのことである)。そして、同じくものことにまつわって次の関係性もが指し示せるようになっていくこと「をも」先立っての段では指摘していた。

[加速器実験の結果] → [宇宙開闢の状況の再現(加速器実験の目的はビッグバン、宇宙創成の状況の極微領域での再現と銘打たれもしている)] / [最近になって加速器実験がそれを実現すると考えられるようになったとのありうべきところとしてのワームホール生成(ワームホールの生成安定化の理論と結びつくカシミール効果が留意されていることも先の段にてポール・ディヴィス著書 **How to Build a Time Machine** を引き合いに紹介)] ← ([カシミール効果発生挙動と類似の行為による宇宙創成]という設定を介しての接合) ← [『フェッセンデンの宇宙』]

---

(上記の関係性をさらに要約なせば、

[加速器実験] → [宇宙開闢状況再現 / ワームホール生成と結びつけられる筈との関係性] ← [『フェッセンデンの宇宙』]

とのことになる — ポイントはそこに[先覚性]が介在していることである— )

---

以上のようなことに加え同じくもの先立つ A. および B. の段では、

**[ワームホール生成に通ずる機序で生まれた宇宙にての)爬虫類型別種族との遭遇・皆殺しとの帰結に至った侵略戦争]**

という『フェッセンデン宇宙』に描かれる一局面のことを殊更に問題視した。

加えて、上の通りのことを事細かに出典に依拠して指し示しもしていた A. と B. の段に続いての C. の段、同段では 1985 年初出のフィクション『スキズマトリックス』の内容に見る、

**[加速器実験を想起させるような巨大施設 (ローレンツカと結びつく円形施設) にあつての死闘の後、爬虫類型宇宙人が来訪するとの設定]**

のこともまたもってして問題視していた。

以上、振り返りもしたとのかたちで、いいだろうか、[A および B]と[C]のそれぞれの段の間には 一個人の主観とは無縁なる[文献的事実]よりのみ導出してのこととして—

**[加速器実験を想起させるもの] [爬虫類型の異種族との遭遇]**

との要素が双方に関わっているとの相関関係が見てとれ、またもってして、同一作品(小説『フェッセンデンの宇宙』)について取り上げた[A. 段]および[B. 段]に着目する限り、そこには

**[ワームホール生成挙動とつながる負のエネルギー] (にまつわるカシミール効果)**

の話が科学理論の発展動向から「**時期的に不自然な**かたちで」関わっているとの指摘がなせてしまうとのことになっているのである(：再三再四述べるが、1937年初出の『フェッセンデンの宇宙』が1948年に実施されたカシミール効果発見の実験のことを想起させるような行いを描いているのも奇怪であるといえる素地がある——(につき、『フェッセンデンの宇宙』の宇宙開闢具現化装置と後にて取り沙汰されたカシミール効果測定実験挙動の両者の間に[行為としての類似性]があってもそのことを問題視する人間がいない(現行にては本稿筆者を除いてはいない)ことは筆者が相応のキーワードで検索結果ゼロ件になるまで特定キーワードで切り詰めての言論流通動態の確認より把握することなのだが、発言をなす者が僅少であることはその発言の信憑性が低いとのことと同義とはならないのは言うまでもない)——。他面、加速器によってブラックホールやワームホールの類が生成されると考えられるに至ったのがここ最近のこととなっており、そして、『フェッセンデンの宇宙』で宇宙を創造するとされる行為がカシミール効果測定につながった挙動、すなわち、[通過可能なワームホールを構築する要件と仮説付けられるに至った負のエネルギー]の捕捉につながった挙と類似するものとなっていることがあり、関係性はいよいよ「**時期的に**」「**不相応な形で**」奇怪なものとなる(『フェッセンデンの宇宙』の執筆年代(1938)にはカシミール効果のことも況や加速器によるブラックホールやワームホールの生成など問題視されていなかったがゆえに、である))。

そちら先覚性と[C. の段]にて指摘してきたことを複合顧慮すれば、より一層、不気味さが際立つというかたちとなっている——[C. の段]にて問題視している『スキズマトリックス』の刊行時である1985年にあつて「も」人類の実現できる加速器ではワームホールもブラックホールも生成されると看做されていなかった(と考えられるようになっていく。については本稿先の段にあつて出典を細かく明示しているとの[事実A]から[事実B]にまつわる人為的ブラックホール実現に至る理論的動向に関する解説部(出典(Source)紹介の部1)および出典(Source)紹介の部2)、および、先にポール・ハルパーンという物理学者の手になる著作の訳書としての『神の素粒子—宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』の記述紹介(出典(Source)紹介の部18)からはじめてのワームホール生成に対する解説部や人為的ワームホールのことを仮説上の先進文明のやりようとして検討したとのキップ・ソーンの1985年以降の挙動(キップ・ソーンがよく知られた挙に関しては出典(Source)紹介の部20-2)にて先述)にて確認されたい※)——。



※振り返ってもの表記として

それが「人間の(加速器の)手によって実現できるもの」とは看做されていなかったものだが(すなわち、**出典(Source)紹介の部 21-2**にて How to Build a Time Machine(邦題)『タイムマシンをつくらう!』(草思社)より原文引用なししていたところの同著 p.120 よりの再度の引用をなすとして “従来の電磁気技術では、プランク・エネルギーは太陽系に匹敵するぐらい巨大な加速器を建造しないと獲得できないが、まったく新しい加速器技術が開発されれば、はるかにコンパクトな装置を用いて非常に高いエネルギーを得ることができるかもしれないのだ。またいくつかの理論によれば、空間の大規模な改変はプランク・エネルギーよりもずっと低いエネルギーで実現できるかもしれず、技術的にも見通しがつけられる可能性があるという。もし重力をほどほどのエネルギーで操作できれば、これまでにのべたような途方もない圧縮や加速を必要とせずwormホールを作ることができるだろう”(引用部はここまでとする)と考えられるようになった「以前の」状況にあつてのことながらも、

[通過可能なwormホールについての「仮説」(現行人類とは異なる先進文明を想定しての「仮説」)]

が——スター・トレックや日本国内の宇宙戦艦ヤマトのようなフィクション作品にそれ以前かお目見えしていた[wormフィールドを介してのworm・ドライブ][worm航法]のような空想上のものではなく—— [現実的なもの]として取り沙汰された契機は[1985年]にあると一般には説明されている。

については以下のような解説のなされようを先に呈示していた。

(直下、**出典(Source)紹介の部 20-2**にて取り上げたキップ・ソーン著作の邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』437ページよりの再度の引用をなすとして)

私は一九八四年—八五年度の最後の授業をちょうど終えて、研究室の椅子に深々と座り、アドレナリンの分泌が鎮まるのを待っていた。電話のベルが鳴ったのはそのときだった。コーネル大学の天体物理学者で古くからの友人でもあるカール・セーガンからだった。「邪魔してすまん。キップ」と彼は語った。「人間と地球外文明との最初の接触に関する小説を今、書き終えたところだが、困っているんだ。科学的なことではできるだけ正確を期したいと思っているんだが、重力物理学の中に間違いがあるのじゃないか、と心配なんだ。どうだろう。目を通して助言してくれないだろうか?」私はもちろん引き受けた。

(引用部はここまでとする —※— )

(※以上の部の原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にての表記は “ **I had just taught my last class of the 1984-85 academic year and was sinking into my office chair to let the adrenaline subside, when the telephone rang. It was Carl Sagan, the Cornell University astrophysicist and a personal friend from way back. " Sorry to bother you , Kip," he said. "But, I'm**

just finishing a novel about the human race's first contact with an extraterrestrial civilization and I'm worried. I want the science to be as accurate as possible, and I'm afraid I may have got some of the gravitational physics wrong. Would you look at it and give me advice?" Of course I would.” とのものである)

(次いで、**出典(Source)紹介の部 20-2**にて取り上げたキップ・ソーン著作の邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』439 ページ末から 441 ページ冒頭よりの再度の掻い摘まんでの引用をなすとして)

「ワームホールは SF 作家のたんなる空想の産物ではない。それらは一九一六年、アインシュタインが場の方程式を定式化したわずか数カ月後に、その方程式の解として数学的に発見されたのである。ジョン・ホイーラーと彼の研究グループは、一九五〇年代にさまざまな計算を行って、それを徹底的に調べ上げた。…(中略)…ワームホールはある瞬間に作り出され、やがてちぎりと取られて消えてしまう——創造からちぎれるまでの全寿命はあまりにも短すぎて、何物も(人も、放射も、どんな種類の信号も)、その中を通して一方のマウスから他方のマウスまで行くことはできない」

(引用部はここまでとする 一※一 )

(※以上の部の原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にてのほぼ対応するところの表記は “ **Wormholes are not mere figments of a science fiction writer's imagination. They were discovered mathematically, as a solution to Einstein's field equation, in 1916, just a few months after Einstein formulated his field equation; and John Wheeler and his research group studied them extensively, by a variety of mathematical calculations, in the 1950s. However, none of the wormholes that had been found as solutions of Einstein's equation, prior to my trip down Interstate 5 in 1985, was suitable for Carl Sagan's novel, because none of them could be traversed safely.[ . . . ] The wormhole is created at some moment of time, opens up briefly, and then pinches off and disappears — and its total life span from creation to pinch-off is so short that nothing whatsoever ( no person, no radiation, no signal of any sort) can travel through it, from one mouth to the other. Anything that tries will get caught and destroyed in the pinch-off. Figure 14.2 shows a simple example.**” とのものである)

(加えて、直下、**出典(Source)紹介の部 20-2**にて取り上げたキップ・ソーン著作の邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』444 ページの記載内容 ——今までその通過可能性が科学的には否定されていたワームホールについて物理学者キップ・ソーンが[エキゾチック



ク物質]というものを(1985年に)導入することで通過可能性を問題視しだしたことにまつわる部の記載内容——よりの再度の掻い摘まんでの引用をなすとして)

パサデナに着くと、私はカールに長い手紙を書いて、なぜ彼の小説のヒロインは急ぎの星間旅行にブラックホールを使うことができないかを説明し、ヒロインにはそのかわりにワームホールを利用させること、そして小説の中のだれかにエキゾチックな物質がほんとうに存在し、ワームホールを開けておくのに利用できることを発見させるように提案した。カールは私の提案を喜んで受け入れ、それを彼の小説『コンタクト』の最終稿に取り入れた。カール・セーガンに私の意見を伝えた後、私は彼の小説が一般相対性理論を学ぶ学生の教育用に使えることを思い当った。こうして学生に役立たせるために、マイク・モリス(私の学生の一人)と私は、一九八五年の冬にエキゾチックな物質に支えられたワームホールに対する一般相対論の方程式と、これらの方程式とセーガンの小説との関連について論文を書きはじめた。…(中略)…一九八七—八八年の冬以前に、われわれは論文を「アメリカン・ジャーナル・フィジクス」誌に投稿したが、その時点では論文はまだ掲載されていなかった

(引用部はここまでとする —※— )

(※以上の部の原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にての表記は “ **So upon reaching Pasadena, I wrote Carl a long letter, explaining why his heroine could not use black holes for rapid interstellar travel, and suggesting that she use wormholes instead, and that somebody in the novel discover that exotic material can really exist and can be used to hold the wormholes open. Carl accepted my suggestion with pleasure and incorporated it into the final version of his novel, Contact. / It occurred to me, after offering Carl Sagan my comments, that his novel could serve as a pedagogical tool for students studying general relativity. As an aid for such students, during the autumn of 1985 Mike Morris (one of my own students) and I began to write a paper on the general relativistic equations for wormholes supported by exotic material, and those equations' connection to Sagan's novel. / We wrote slowly. Other projects were more urgent and got higher priority. By the winter of 1987-88, we had submitted our paper to the American Journal of Physics, but it was not yet published ;” とのものである)**

上の記述に見るようにワームホールを現実的に通過可能なゲート(兼タイムマシン)に使うとのやりとりが1985年「以降」にて——仮説上の先進文明やりようとして——学者(キップ・ソーン)と学者兼作家(カール・セーガン)の間で交わされたとのことがある。

そして、そうしたワームホールというものがブラックホールと同様に後にあって[プランク・エネルギー]を投下するなどという人類が実現出来ぬことをなすことなしに構築可能でありうるとの新規理論が浮上してきた——新規理論とは1998年より取り沙汰され、加速器によるブラックホール生成が可能でありうるとしたとの余剰次元理論のことである。については(本稿にて既に論じてきたところに加えて)本稿の後の段でもさらにロシア人物理学者らの論稿(ITEPという研究機関に所属する IF LHC IS A MINI-TIME-MACHINES FACTORY, CAN WE NOTICE?(2006)との論稿など)を引き合いにより煮詰めての話をなす所存でもある——)

(振り返っての表記はここまでとする)

直上までの振り返り部にて再度しつつこくも内容再表記をなした A. から C. と振っての段での説明に続くものとして(それぞれ別個のものとして括っての中での) D. と振っての段では加えもして、

**[1993年に封切られた映画 Super Mario Bros.『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』の**

**[片方の上階に風穴が空き、片方が崩落するとのツインタワー]**

**が粗筋[設定]上、**

**[異なる次元が融合させられて(異なる次元の融合となれば、ワームホールのことが想起されるが、とにかくも、融合させられて)の中で恐竜帝国の首府ダイノハッタンと融合させられる建造物]**

**として劇中にワンカット描写されていた]**

とのことを[記録的事実]の問題として——意図しているところは直上にて振り返り言及した[[ワームホール関連事物にまつわる文物]と[爬虫類の異種族の侵出]のつながりあい]との絡みで(まじめな)読み手にとっても明確か、とは思いますが——取り上げもしていた。

さて、2001年に上階に穴が開きツインタワーが崩壊することになったその前に「時期不相応に」、

**[片方の上階に風穴が空き、(背景に飛行物体が横切る中で)片方が崩落するといった描写形態でのツインタワー]**

とのものを(短きワンカットにあってながら)登場させているとの映画 SUPER MARIO BROS.『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』で悪役とされるのは[恐竜人]である。

に関して——聞こえから『細かく、かつ、くだらないことをぐだぐだと述べているようだ』との誤解を招きかねないような話をなしているとは重々承知の上で敢えても述べることなのだが——、映画で恐竜人の王となっているクッパというキャラクター、それは原作のゲーム作品スーパーマリオシリーズでは恐竜ならぬ[「亀」の大魔王]といった設定の存在である。

(:繰り返しも述べたくなる場所として「きちんとした教育を受けた学識ある大人には『くだらない』と内心で看做されようことを述べていることを重々承知の上で出典明示に遺漏なきようにと書くが、和文ウィキペディアにての関連項目には原文引用するところとして「次のように」記載されている。

(直下、和文ウィキペディア[クッパ(ゲームキャラクター)]項目よりの引用をなすと

して)

“クッパ(Bowser)は、任天堂が発売したコンピューターゲームソフトのシリーズ、マリオシリーズに登場する架空のキャラクター。…(中略)…クッパ軍団(初期はカメ帝国とも)のボスキャラクター。怪獣を思わせる姿をした巨大なカメで、黄色と緑色からなる皮膚と赤色のたてがみを持ち、甲羅には10本のトゲが、頭には鋭い角が付いている(以下略)”

(引用部はここまでとする)。

(続いて直下、同様に和文ウィキペディア[スーパーマリオ 魔界帝国の女神]項目よりの引用をなすとして)

“クッパ…地下に広がる恐竜帝国「ダイノハッタン」の帝王(字幕では大統領と表記されている)。ティラノサウルスから進化した恐竜族である。前国王を追い落とし国を奪った。地上世界と恐竜帝国の次元を融合して両世界を征服しようと企む”

(引用部はここまでとする)

以上引用部については映画設定にまつわり(その手の話、商業作品の半ば広報を兼ねているような皮相的な話に関してはあまり誤りが認められないとの媒体である)そちらウィキペディアに記載されているとおりのことが現実にある)

1993年公開の作品であるにも関わらず、

[穴が上階に開いて崩落するツインタワー]

とのまるで2001年に現出した[ビル連続倒壊事件]のことを想起させるようなものをワンカットにて登場させている映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』では[悪の恐竜人の首魁]が次元融合を企図しているとの作品粗筋解説がなされているが、そうした映画の原作のゲーム作品では[悪の「亀の」軍団の首魁]がマリオという主人公キャラクターと闘うことになっているのである。

ここで話を日本の浦島伝承——[双子のパラドックス]という物理現象に実にもって親和性が高い伝承であることをつい先立って紹介しした伝承——に持って行くが、浦島伝承では

「亀に乗って浦島が竜宮に足を運ぶ。そこではしばしの楽しき時間を過ごした後に故郷に戻ってみれば、あまりにも時間が経過しており、立つ瀬がない。そこで受け取った玉手箱を開ければ、老いさらばえた老体となってしまう」

との粗筋が具現化している。それにつき、「亀」に乗った男が「竜宮」に行くとの伝承粗筋と「映画」および「ゲーム」の『スーパーマリオ』の「恐竜の悪の軍団」「亀の悪の軍団」との設定に——「カメ」や「「竜」宮」との爬虫類を介しての——アナロジー(類似性)を問題視したらばどうか。

無論、常識的な人間には鼻で笑われるとのことになるであろう。そう、

『子供だましの話を[子供だましの作品](往時のおとぎ話／現時の荒唐無稽映画やビデオ・ゲーム)を引き合いにしてなしているにすぎない。きちんとした識見を蔵した大人が、きちんとした大人に対してなすような語り口上ではない』

と鼻で笑われるのが関の山とのことになりかねない(と思う)。

だが、以降摘示していくようなことを複合加味したうえでなお鼻で笑おうとするのは

「きちんとした大人に相応しき知性を有していない」、

いや、

「延々騙されてきたうえで殺されても最期までその死因について理解するだけの知性を

有していない」

との類 — 残念ながら語るに値しないとの筋目の向き— となろう（と無礼承知の上で申し述べたい次第である）。

(E. と振っての一連の段は今しばらくも続ける)

ここで

[[「亀」に乗って「竜」宮に辿り着く浦島伝承(；双子のパラドックスとの近似性が問題になる伝承)とのアナロジー(類似性)][荒唐無稽子供向け映画との体裁をとる『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』に[[「亀」に乗って「竜」宮に辿り着く浦島伝承(；双子のパラドックスとの近似性が問題になる伝承)とのアナロジー(類似性)]を見出すこととても行き過ぎになんらならない]

とのことにまつわりそうも申し述べるところの二つの理由の概要をまずもって呈示する(それら委細の解説に先駆けて概要をまずもって呈示する)とのことから話をはじめ。

(荒唐無稽映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』に浦島伝承との関連性をみとめることとして行き過ぎにならぬところの理由としての) 第一。

物理学者キップ・ソーンの[通過可能なワームホール]にまつわる解説のなしようを取り上げる中で内容を問題視し、そこよりの原文引用をなしてきたところの書籍が **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(亀の移動時間にそれを当てはめると浦島伝承にそれが接合するとの[双子のパラドックス]を[ワームホール型タイムマシン]に応用しての論理を展開していること、本稿にてのつい先立っての段で細かくも解説したとの科学書)という書籍となるわけだが、同著はそれ自体からして

[911の発生を明瞭に予見しているが如くもの「露骨な」予言的作品]

となっており、その絡みで映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』と不快かつ奇怪に結びついているとの側面が — 認めがたいこととは思いますが — 確としてある(については本稿のさらに続く段で原著および訳書よりの原文引用を必要十二分と解されるだけなしながらも細かき解説をなす)。

であるとする、そう、表記のソーン科学書 — ここ本段ではいまだ解説未了ながらも911の発生に対する予言的作品としてのソーン科学書 — と映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』の間に不快な関係性が成立しているとする、

ソーン科学書 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』 ⇔ [双子のパラドックス] ⇔ [浦島伝承]

との関係性のパスのみならず、

ソーン科学書 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』 ⇔ ([911の予見作品としての側面]) ⇔ 『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』

とのパスが(別方向から)成立していることになる。

換言すれば、である。

[浦島伝承] ⇔ ([双子のパラドックス]とワームホールにまつわる思考実験を介しての近接性) ⇔ 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』 ⇔ (【911の事件にまつわる先覚的言及】(後述) / 【ワームホール関連トピック】) ⇔ 『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』(「亀」救出ならぬ「亀」軍団退治のゲーム作品を原作とする恐「竜」人の次元接合のための暗躍を描く映画作品)

との関係性のパスが

[別個独立に成立しているところの関係性の合算]

から導出できてしまうことになる(であるから、映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』と浦島伝承の間にてのたかだかもの[「亀」と「竜」(竜宮)との爬虫類がらみのアナロジー(類似性)]にまつわる側面についてすら着目すべきとの話が馬鹿げたものでなくなるとのことがある)。

(荒唐無稽映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』に浦島伝承との関連性をみとめることとて行き過ぎにならぬところの理由としての) 第二。

特殊相対性理論から導き出せる帰結に相通ずること(双子のパラドックス)に言及しているような色彩を伴っているとの簡明化して解説した側面を有している以外に、浦島伝承それ自体からして奇怪な側面が付き纏っている。

細かくもの論拠は続いての段にて挙げるが、伝承などの文化伝播が相互に観念しづらい領域、

[中世期アイルランドにて成立したとされる伝承]

(および)

[上代日本(奈良期日本)に成立したとされる浦島伝承]

がピタリとした数値的一致性を呈しながらほぼ同じ内容を有しているとのことが「ある」。

そのような[奇怪]なること ——(本稿にての先立っての段で炙り出しているように70年代にあって[現行加速器に対往時加速器で200倍近いものを登場させ、そのCERN加速器を想起させる機関のビーム照射挙動でブラックホール生成がなされるように描いている作品]が存在していることも奇怪なことなのだが、それに類するところと見えもする[奇怪]なるところ) —— にまつわる話であるから、そちら浦島伝承と[予言「的」作品](ツインタワーの崩壊を予見するような描写を含む作品)としての『スーパーマリオ魔界帝国の女神』という現代映画作品との間のアナロジー(類似性)を問題視することは[子供だましの文物より引き出しての子供だましの話]で済まされるようなことではない(とのことが「ある」)。

上の第一および第二の点につき便宜的にここでは第二の点よりの解説をなす(第一の点、911の予見を介しての関係性に関してはさらに後の段で何がどう問題となるのか事細かに解説する)。

それでは以下をご覧ください。

[浦島伝承について]

ここより(出典紹介を厚くしての本稿なればこそ)下のことにまつわる論拠を事細かに呈示することとする。

---

[初期、浦島太郎伝承が [浦島子] と呼ばれる男を主人公とした [竜宮] ではなく [蓬莱山ハウライザン] (あるいは常世・海底の宮) に向けての異界滞在神話であったこと]

[浦島太郎 (初期、浦島子と呼称) が仲睦まじくなったのは乙姫ではなく亀の化生 (けしょう) した仙女であったこと]

[初期の浦島子伝承にては [三年の異界滞在] が [三〇〇年の現実時間] に対応させられていたこと]

---

---

出典 (Source) 紹介の部 29



# SOURCE

## 29

本段、**出典 (Source) 紹介の部 29** にあっては、

---

[初期、浦島太郎伝承が [浦島子] と呼ばれる男を主人公とした [竜宮] ではなく [蓬莱山ハウライザン] (あるいは常世・海底の宮) に向けての異界滞在神話であったこと]

[浦島太郎 (初期、浦島子と呼称) が仲睦まじくなったのは乙姫ではなく亀の化生 (けしょう) した仙女であったこと]

[初期の浦島子伝承にては [三年の異界滞在] が [三〇〇年の現実時間] に対応させられていたこと]

---

とのことにまつわっての出典紹介を必要十二分と判じてのソースを挙げることでなすこととする (余談めくところとして、何故、そういう出典紹介が微に入っただけで易々とできるかだが、「それは、」初版数千部との予定で商業出版契約の話がまともっていた —— が、大手出版社出入りの相応の人脈などによって [強くもトンデモ化] が指向されるようになった (人間の進歩にとって害物にしかならぬとしか言い様がない [愚書・悪書の類] に成果物が貶められそうになった) 中でそ



ちら出版計画は頓挫した——との拙著の執筆過程で同じくものことの情報収集に励んでいたとの個人的背景がこの身にあるからである)。

(直下、『浦島子伝』(一九八一年に現代思潮社より刊行／著者は重松明久(元広島大学教授・物故者))、その p.105 から p.106 よりの中略なしつつもの原文引用をなすとして)

---

浦島伝説は恐らく六、七世紀に濫觴(らんしょう)し、今日に至るまで諸種の文芸や昔話の形式で、書きつぎ語り伝えられてきた、かなり息の長い説話である。

…(中略)…

初期の伝記においては、主人公の名前はほぼ一貫して浦島子と表記されており

…(中略)…

室町時代頃成立した小説類以降においては、主人公は一転して浦島太郎とよばれることも、周知のところである。

---

(まずもつての引用部はここまでとする)

(次いで、直下、上と同じくもの『浦島子伝』(現代思潮社)、その p.120 よりの中略なしつつもの原文引用をなすとして)

---

『風土記』系と『万葉集』系のうち、何れをこの伝説の本源的な型と考えるべきかについて、従来対蹠(たいしよ)的な見解が見られる。まず『万葉集』系に軍配を上げられるのは、佐々木信綱氏である。佐々木氏は『万葉集』の長歌が、浦島伝説のなかで最も原始的かつ本源的な形をもつとする。その理由として、「日本紀も風土記も、ともに浦島が亀を得、亀が神女と化したとあるが、これは長歌にはない。両書とも女を蓬莱の神女とした。これは言ふまでもなく志那思想の影響で、長歌では単にわたつみの神の女となつてゐる。而してまた、蓬莱といふ如き思想は長歌には見えないで、単にとこ世、即ち遠い国なる海底の宮となつてゐる(以下略)」

---

(引用部はここまでとする)

以上の浦島伝承について一意専心して論じているとの学者解説本——今より30年以上も前に、大正生まれの学究がものした書籍とのことで旧字体・文語調が際立つ書物となっている『浦島子伝』——にて言及されていることは次の通りのことである。

・室町時代に入る前に浦島太郎は浦島子と呼ばれ、その伝承は6世紀から7世紀に成立を見ている(濫觴らんしょうを見ている)。

・浦島子の伝承のうち、初期のもの[万葉集]系と[風土記]系では浦島は亀に化身しての神女と出会い、蓬莱とその伝承は結びつけられている(ただ、蓬莱(ほうら

い／中国の伝承にあつての不死の神仙らが住まう桃源郷)については、代わって、常世(とこよ)、遠い国としての海底の宮ともされている)。

次いで、上のことを示しもし、さらにもって、本稿本段に問題している浦島伝承に伴う奇っ怪な側面にも通ずる古典([逸文]、すなわち、引用形態のみで伝存しているとの古典)それぞれのものの記載内容を下に引くこととする。

(直下、同じくもの『浦島子伝』(現代思潮社)、その p.11 から p.13、『丹後国風土記』収の浦嶋子伝承に対する訓読文よりの問題となる部の掻い摘まんでの抜粋をなすとして)

---

丹後国風土記に曰く、與謝(よさ)の郡(こほり)、日置(ひおき)の里に筒川の村あり。此(ここ)の人夫(たみ)、  
…(中略)…

筒川の嶋子(しまこ)と云(い)ひき。人と為(な)り、姿容(すがた)秀美(うるは)しく、風流(みやび)なること類なかりき。  
…(中略)…

長谷(はつせ)の朝倉の宮に御宇(あめのした)しろしめしし天皇(すえらみこと)の御世(みよ)、嶋子(しまこ)独り小船に乗りて、海中(うみなか)に汎(うか)ひ出て、釣為(つりす)ること、三日三夜を経て、一つの魚だに得ず、乃(すなわ)ち、五色の亀を得たり。心に奇異(あやし)と思ひて、船の中に置きて、即(やが)て寝るに、忽(たちまち)に婦人(おもな)と為(な)りき。其の容(かたち)美麗(うるは)しく、更比(またたぐ)ふべきものなかりき。  
…(中略)…

爰(ここ)に嶋子(しまこ)神女(かみおとめ)なることを知りて、懼(おそ)れ疑ふ心を鎮(しず)めき。  
…(中略)…

女娘(をとめ)曰(い)ひけらく、「君宣(きみうべ)棹(さお)を廻(めぐ)らして蓬山(とこよのくに)に卦(ゆ)かさぬ」といひき。嶋子(しまこ)従ひて往(ゆ)かむとしき。女娘(をとめ)、教えて目を眠らしめき。即(すなわ)ち不意の間に海中(うみなか)の博(ひろ)く多きなる嶋(しま)に至りき。  
…(中略)…

時に嶋子(しまこ)、旧俗(もとづくに)を遺(わす)れて仙都(とこよ)に遊ぶこと、既に三歳(みとせ)を逕(すぎ)たり。忽(たちまち)に土(くに)を懐(おも)ふ心を起(おこ)るに、独り親(かぞいろ)を恋(こ)ふ。故(かれ)、吟哀(かなしび)繁(しげ)く発(おこ)り、嗟嘆(なげき)日に益(ま)しき。女娘(をとめ)、問(と)ひけらく  
…(中略)…

女娘(をとめ)、玉匣(たまくしげ)を取りて嶋子(しまこ)に授けて謂(い)ひけらく、「君、終(つひ)に賤妾(やっこ)を遺(わす)れずして、眷(かへり)み尋ねむとならば、堅く匣(くしげ)を握(と)り、慎(ゆめ)、な開き見たまひそ」といひき。  
…(中略)…

先世(さきのよ)に水江(みづのえ)の浦嶋子といふものありき。独り蒼海(うみ)に遊びて、復(また)還(かへ)り来ず。今、三百余歳(みほとせあまり)を経(へ)つといへり。何ぞ忽(たちまち)に此

(引用部はここまでとする —※— )

(※上は原典ではなく[逸文](引用文)との形態で今日に伝わる『丹後国風土記』の浦島子伝承にまつわる下りの一部パートよりの引用、学者が訓読文として紹介しているパートよりの原文引用なしのものとなるが、同じくもの古文にて見受けられるところは「浦島が[仙都][亀の化身の女に連れられて到達し蓬萊で[とこよ]と訓読されている)で三年あまりすぎたところ、故郷・親族に対する懐旧の情を抑えがたくなり」

「玉匣(たまくしげ／玉手箱)を開けるな、と言われて受け取って帰還したらば」

「故郷の住人に[浦島子という男が三百年前に失跡したと伝わっていること]を耳にした」

とのパートである(ここで常識人ならば、「300年も前の失踪のことが一般の里人に覚えられているなんてどれだけマーベラスなセレブなんだよ。浦島っていう奴は。」などと思うだろうが、ここではそういうありうべき突っ込みの問題は脇に置いておく)。

上の引用部では、

「浦島の異境滞在が丹後国風土記 —8世紀には成立したとされる文書で逸文(引用形態)でのみ残存— の時点からして三年と三〇〇年の対応関係を呈している」

とのこともが記されている(また、さらに述べておけば、丹後国風土記バージョンでは玉手箱(玉匣たまくしげ)を開いた後の浦島の有り様が果たして[老化]にあると言いきれるのか、ぼかされているとの風もあるが(「かぐわかしき姿が風に吹き消えた」—— 上述引用元の訓読文表記では「芳蘭(かぐわしき)き体(すがた)、風雲(かぜくも)に率(したが)ひて蒼天(あめ)に翮(ひるがへ)り飛びき」—— とあるのみであるが)、万葉集にて掲載のバージョン(物部氏に連なる歌人、高橋虫麻呂の作とされる長歌)でははきと[浦島が老化した]と記載されていることが知られている(については和文ウィキペディア[浦島太郎]項目にも記載されていることである)

細々となりはしたが、これにて

---

[初期、浦島太郎伝承が[浦島子]と呼ばれる男を主人公とした[竜宮]ではなく[蓬萊山ホウライザン](あるいは常世・海底の宮)に向けての異界滞在神話であったこと]

[浦島太郎(初期、浦島子と呼称)が仲睦まじくなったのは乙姫ではなく亀の化生(けしょう)した仙女であったこと]

[初期の浦島子伝承にては[三年の異界滞在]が[三〇〇年の現実時間]に対応させられていたこと]

---

とのことにまつわっての出典紹介を必要十二分と判じてのソとにまつわっての出典紹介を必要十二分と判じてのソとのことがそれ専門の学者にそうだと解説されており、実際に古文献にそういう記載がなされている（[文献的事実]である）とのことの典拠紹介とした。

(出典(Source)紹介の部 29 はここまでとする)

浦島伝承についての出典紹介兼ねての解説部はここまでとして次いで、[ケルトの Oisín 伝承にあつての浦島伝承と類似する内容]についての解説をなす。

[Oisín オイシン(綴りからそうもとられよう呼びようではなく実際の口語発音に近いかたちで呼称すればオシアン)伝承について]

浦島についての丹後国風土記(8世紀日本にて成立の風土記)から打って変わり、アイルランドで成立したとの Oisín 伝承(こちら Oisín 伝承の主役 Oisín については普通一般には(ケルトの発音を意識してか)オシアンなどと和文では表記されることが多いが、ただし、国内にて流通している著名神話学者ジョセフ・キャンベルの著書 *The Hero with a Thousand Faces* の訳本(筆者も探求活動の一環として内容精読している訳本)などにてはオイッシンといったかたちで訳され記述されている)にも

「三年と三〇〇年の現世(うつしよ)と異界の時間的差分を[助け出した異界の存在]と夫婦の契りを交わした男が異界から戻つての後、体験し、それとともに一挙に老化したとの粗筋]

が具現化を見ているとのことの論拠を挙げておく(直下、出典(Source)紹介の部 30 から出典(Source)紹介の部 30-2(2)の内容を参照されたい)。

出典(Source)紹介の部 30



SOURCE

30

ここ出典(Source)紹介の部 30 にあっては Oisín 伝承において[3年異界滞在⇔300年時間経過]との数的規則がみとめられることについて「まずもって基本的なところとして」英文ウィキペディアよりの引用をなすこととする。

(直下、Wikipedia[Oisín]項目にあっての「現行」記載内容より引用をなすとして)

---

In Oisín in Tir na nÓg, his most famous echtra or adventure tale, he is visited by a fairy woman called Niamh Chinn Óir (Niamh of the Golden Hair or Head, one of the daughters of Manannán Mac Lir, a god of the sea) who announces she loves him and takes him away to Tir na nÓg ("the land of the young", also referred to as Tir Tairngire, "the land of promise"). Their union produces Oisín's famous son, Oscar, and a daughter, Plor na mBan ("Flower of Women"). **After what seems to him to be three years Oisín decides to return to Ireland, but 300 years have passed there.** Niamh gives him her white horse, Embarr, and warns him not to dismount, because if his feet touch the ground, those 300 years will catch up with him and he will become old and withered. Oisín returns home and finds the hill of Almu, Fionn's home, abandoned and in disrepair. Later, while trying to help some men who were building a road in Gleann na Smól lift a stone out of the way onto a wagon, his girth breaks and he falls to the ground, becoming an old man just as Niamh had forewarned.

(補いもしての訳として)

「『ティル・ナ・ノーグにおけるオシアン』との作、オシアンの最もよく知られた[Echtra] (訳注:アイルランド古文学体系)または冒険譚であるとの同作にあって彼(Oisín)は Niamh Chinn Oir (訳注:金髪のニアム、海神マナナン・マクリルの娘)、すなわち、彼を愛し、ティル・ナ・ノーグ(訳注: Tir na nÓgとして言及されるケルト神話の妖精らの常若の地、約束の地)に連れて行くと告げた同存在の来訪を受けた。彼ら夫婦の契りはオシアンの有名な息子オスカー、そして、[乙女らの花]と呼ばれる Plor na mBan の誕生につながりもした。ティル・ナ・ノーグにて三年の時を過ごしたかのように見えた後、オシアンは故郷アイルランドに帰郷することを決したが、しかし、そこにては三〇〇年の時が経過していた。ニアムはオシアンに[Embarr]という白馬を授け、仮に足がその馬より離れて接地したならば、過ぎ去りし三〇〇年が彼に追いつき、彼は古い、枯れしぼむことになるのであるから、その馬から下りるなどの警告をなした。オイシンは家に戻り、放置され朽ちるにまかされたアルムの丘にてのフィン(オイシンの父王たるフィン・マックール)の拠点を見つけ出した。後、Gleann na Smólの地にて道路の開通作業にいそんでいた男が石を道路から荷馬車に持ち上げて除こうとしているのを手伝おうとしている最中に馬につけてあった腹帯が壊れ、オシアンは大地に転落、ニアムがあらかじめ警告していたように老人と化してしまった」

---

(補いながらもの訳を付しての引用部はここまでとする)

(出典(Source)紹介の部 30 はここまでとする)

話の特異性 ——日本の8世紀頃の浦島伝承と西欧はケルトの僻遠の地アイルランドの中世にてのオシアン伝承、その「文化的には接合していない」世界の双方の特定文物らが極めて似たような内容を有しており、「現世にての三年は異界にての三〇〇年に相当」との際立っての数値的一致性もが見てとれるとの話の特異性—— に鑑みて記述内容が有為転変するとの英文 Wikipedia 程度よりの引用だけでは足りぬと見、19世紀に世に出た書籍、

**The Science of Fairy Tales** (同著、1891年刊行の Edwin Sidney Hartland という19世紀の文化人類学者の手になる著作権保護期間終了の書となり、著作権喪失書籍を公開しているとの Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロード可能なものとなる)

との著作の内容 ——に見る不変なる文献的事実を体現しての部—— をも下に引いておくこととする。

## 出典(Source)紹介の部 30-2



# SOURCE

## 30-2

ここ出典紹介のための **出典(Source)紹介の部 30-2** にあっては

[19世紀刊行の著作からして Oisin という男が[異界に三年滞在している間に故地では三〇〇年が経過しており、故地に戻った折、老化の憂き目を見た存在]として言及されている]

このことを当該の19世紀著作それ自体から引いておくこととする。

(直下、**The Science of Fairy Tales (1891)**にての CHAPTER VIII.THE SUPERNATURAL LAPSE OF TIME IN FAIRYLAND [第一三章:妖精界での時の超自然的なる経過]の章 p.199、[オイシン(英語圏綴りではなく古アイルランド語に由来するとされる発声に着目すればオシーンあるいはオシアーン)が妖精国王女がドルイド僧によって豚の顔にされていたところを治癒なして妖精国の王位を継いだとの下り、その「後の流れ」に関する解説部] の記載よりの引用をなすとして)

So he reigned for many a year, until one day the longing seized him to go to Erin and see his father and his men. His wife told him that if he



set foot in Erin he would never come back to her, and he would become a blind old man; and **she asked him how long he thought it was since he came to Tir na nÓg. “About three years,” he replied. “It is three hundred years,” she said.** However, if he must go she would give him a white steed to bear him; but if he dismounted, or touched the soil of Erin with his foot, the steed would return that instant, and he would be left a poor old man. This inevitable catastrophe occurred in his eagerness to blow the great horn of the Fenians, in order to summon his friends around him.

(訳として)

「彼(オシアン)は[エリン](アイルランド異称)に立ち戻るとの切望が彼をとらえてやまなくなったとのその日に至るまでの何年もの間、(妖精国の)統治をなしていた。彼の妻はオシアンに彼がもしエリン(アイルランド)の地盤に足をつけたのならば、彼は二度と彼女の元へは帰ってこれず、盲目の老人と化すであろうとのことを告げ、その上で、**彼にティル・ナ・ノーグ(訳注:オシアンが足を踏み入れた妖精らの常若の国)に来てからどれほどの時間が経過していると考えているのか、と尋ねた。「およそ三年であろう」と彼オイシン(オシアン)は答えた。(対して)「三〇〇年です」と彼女は言った。**しかしながら、もしそれでも彼が行かねばならぬというのならば、彼女は彼を支えられるだけの元気な白馬を供与するとし、もし、彼がその馬から下馬し、自身の足でエリン(アイルランド古称)の地に足を付けるとのことにあいなったならば、白馬はその刹那に立ち戻り、一人みすぼらしい老人として取り残されるだろうとの(話の)運びとなった。こうして不可避的な破局が[オシアンの(去りし日の)同僚らを彼の周りに呼び集めるためにフェニアンの巨大な角笛を吹き鳴らそうとの熱情]にて生じることになった」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source)紹介の部 30-2**はここまでとする)

---

以上引用部をもってして19世紀末葉に書かれた妖精関連の物語の解説書にあって「も」「三年と三〇〇年の一致性」が具現化を見ているとのことが[文献的事実]の問題としてそこにあること、お分かりのことか、と思う。

その点、オイシン伝承についてはその[古(いにしえ)にての登場期]からなんの改作改訂もなく「三年、三〇〇年の対応」がそこにあったのかということについて確認困難となっているものもある。

だが、しかし、ギンガモール、[レー(Lai)]と呼ばれる[中世詩]の類型に登場する英雄の物語からして

「三日(三年ではなく三日)の滞在が三〇〇年の滞在となっていた」

とのほぼ同様の筋立てを具現化させていることが知られており、そちらギンガモール伝承はよりもって以前から存在していたオシアン伝承の影響下にあると判じられもする(ようになっている)。そこからして、([三年と三〇〇年か、三日と三〇〇年か]との違いはあるが)、オイシン伝承の近代欧州の蒐集者らが、と同時に、既に江戸期を終えて明治期に入っていた鎖国を終えての日

本のマイナーな浦島伝承絡みの特定の下りから影響を受けもし、三年・三〇〇年の下りだけを浦島伝承からオシアン伝承に接ぎ木し今日に伝わる伝承を「改作」・案出したとの発想法は到底、成り立ちがたいものとなっていると判じられるところとなる(少なくともそれ自体[化け物がかった外力の介入]が複数の近代人をして過去偽造・詐欺的剽窃をなさしめたとの仮定を差しはさまないかぎり、である)。

同じくものこと、ギンガモール関連の詩に伴っての相似形——作品成立が先行するところと解されるオイシン伝承の三年・三〇〇年対応表記に相通ずる三日・三〇〇年の相似形——については Project Gutenberg を通じて公開されている(従って、書物の全文ダウンロードが容易になせるとの)1907年刊行の書、

### ARTHURIAN ROMANCES Unrepresented in Malory's "Morte d'Arthur"

というアーサー王関連の伝承を集めた書物、その p.21 から p.22 (プロジェクト・グーテンベルク・サイト表記では 21 頁から 22 頁と表記されている節があるが、インターネット・アーカイブ・サイトよりダウンロードできる古書 PDF 版にあつては p.20 から p.21) の内容を引いておくこととする。

#### 出典(Source)紹介の部 30-2(2)



## SOURCE 30-2(2)

ここ出典(Source)紹介の部 30-2(2)にあつては

[Oisin 伝承と地続きにあると解されるケルト伝承、ギンガモール伝承からして「三日・三〇〇年」との時間の歪みを登場させている]

とのことにまつわつての典拠紹介をなしておく。

(直下、ARTHURIAN ROMANCES Unrepresented in Malory's "Morte d'Arthur" (1907) 古書 PDF 版にあつての p.20 から p.21 の内容を引用なすとして)

The waiting maiden had ridden on quickly to the palace wherein Guingamor had entered, and they had decked it richly, and bidden the knights mount and ride out to meet their lady, to do honour to the

lover whom she brought with her.[ . . . ] Yet otherwise than he deemed had it chanced to him ; not three days but three hundred years had he been in that palace ; dead was the king, and dead his household and the men of his lineage, and the cities he had known had fallen into destruction and ruin.

(分かりづらいところであるので場面解説しながらもの大要訳を付すとして)  
「[待ち人となる乙女](訳注:ギンガモールが白い猪を狩るとの無理難題を負うことになった道中で出会い、騎士道の何たるかを示したとの魔法の国の乙女)はギンガモールが入城することになった宮殿に(馬で、か)乗り入れ、その場に居を定める騎士らが彼らの[淑女]および彼女が連れ立ってきた恋人ギンガモールに祝福を述べに参じた。といった場でギンガモールが過ぎしたのは三日ではなく三〇〇年となっており( not three days but three hundred years had he been in that palace)、その間にギンガモール故郷の王や彼の血統の者らは皆、死を得もし、ギンガモールが知っている城市らは崩壊・破滅を見ていた」

---

(引用部はここまでとする)

以上のような内容のギンガモール伝承の成立時期については同じくもの引用元の書籍 (ARTHURIAN ROMANCES Unrepresented in Malory's "Morte d'Arthur")にての96ページ(プロジェクト・グーテンベルク・サイト表記では96頁とされるが、インターネット・アーカイブ・サイトよりダウンロードできる古書PDF版にあつては97ページ)で推定年代12世紀のものとして記述があり、それについては

(引用なすところとして)

---

GUINGAMOR. This charming lay was first published by M. Gaston Paris (Romania VIII.) from the same MS. collection as the Lay of Tyolet. The author is unnamed, but the general consensus of critical opinion has attributed it to Marie de France, the famous Anglo-Norman poetess. Certainly both in manner and matter it is a remarkably favourable specimen of the Breton lay.

(補いつつもの訳として)  
「ギンガモール. このチャーミングな[レー](中世詩の一形態)は最初にガストン・パリ(19世紀後半期にて主たる活動をなしていたとのフランス人文豪)によってthe Lay of Tyolet(アーサー王伝説を収めたブリトン・レー)と同じくものマニユスクリプト・コレクション(写本コレクション)から刊行されたものとなる。同ギンガモール叙事詩の著者は知られてはいないが、批評家筋の一般的に同意が得られているところの理解ではその作者はマリー・ド・フランス、有名なアングロ・ノルマン系の女詩人であろうとのものである(訳注:マリー・ド・フランスは12世紀活躍の人物であるから、ギンガモール叙事詩は12世紀の作とされているとのことである)。確かに様式・態様からしてブルターニュのレー(ケルト、ブルターニュの詩形たるレー)の際立って好感得られるとの標本となるものである」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

との言及のされようとなっている。

(出典(Source) 紹介の部 30-2(2)はここまでとする)

---

上もてオシアン(Oisín) 伝承の影響を受けていると判じられるギンガモール伝承からして([3年⇔300年]に代えて)「3日⇔300年」との時空間のずれを描いているとの「12世紀成立の」作品であると述べられることの典拠とした。

(※注記として:

尚、紛らわしいことに Osian・Oisín についてはジェイムズ・マクファーソンという人物に由来するところの叙事詩体系に見る主要登場人物、アイルランドの英雄的詩人である伝承上の Oisín に範を取った存在たる、

[Macpherson's Ossian(「マクファーソンの」オシアン)と呼ばれる存在]

が本来の伝承から遊離しての、

[18世紀後半にあつて創作・捏造されたとの疑義・疑惑が色濃くも伴っているとの存在 ——英文 Wikipedia[Oisín]項目の後半部にあつても(引用するところとして) “Ossian, the narrator and purported author of a series of poems published by James Macpherson in the 1760s, is based on Oisín. Macpherson claimed to have translated his poems from ancient sources in the Scottish Gaelic language. These poems had widespread influence on many writers including Goethe and the young Walter Scott, although their authenticity was widely disputed.” (訳文)「ジェイムズ・マクファーソンによって1760年代に刊行された一群の詩らにての語り部および自称作者たるオシアンは Oisín 伝承に範を置いている存在である。マクファーソンが主張していたところ、彼のオシアンを語り手とする詩らは(彼自身の創作・贋造によるのではなく)スコットランドゲール語による古代文献から訳されてのものであるとのことであつた。これら一群の詩らはゲーテおよび若き日のウォルター・スコットを含む数多くの著述家に幅広くもの影響を与えたとのものであるが、しかし、その歴史的真正さも広く議論されているところのものとなっている」との記載が現行、なされている存在—— ]

として口の端によくのぼることがあるようであり、「どういふわけなのか」そちら「「マクファーソンの」オシアン」に話柄留めての沿革にまつわる話が日本などでは強く取り上げられるようになっているとのきらいがあるように見えもする(:背景には明治期の文士たる夏目漱石が(往時の欧州の文壇の様相を受けてであろうと見える式で)[マクファーソンのオイシン]関連の詩に親しんでいたとの事情があり、また、本筋の Oisín 伝承に関する分析そっちのけで岩波文庫などからマクファーソンのオシアン絡

みの叙事詩が出版されていたといった国内事情があるようにも思われる)。しかしそうした通用度の問題とは別に [「マクファーソンの」オシアン]とここ本段にて問題視している[オシアン伝承] (成立が相当昔に遡るとの詩集である The Colloquy of the Ancients, Tales of the Elders『古老の語り・古人らの物語』こと Acallam na Senórach にもその登場がみとめられるとされる存在)は[まったくの別物]であるとのこと、混同しないできちんとお含みいただきたい次第である —— ついでに要らぬところとして述べれば、この世界ではたかだかもの[縁起胡散臭い近代の文学作品] (18世紀後半初出のマクファーデンによるオシアンを語り部とする文学作品)などという[どうでもよいもの]がさも縁起由来について分析すべくもの重要なものであるように取り上げられ(本来の Oisín 伝承がその影に隠れるようになるかたちでもって取り上げられ)、[浦島伝承と本家の Oisín 伝承の間に普通では説明なしがたい(後述するような理由から普通では説明なしがたい)ような一致性]が存在しているとのことを取り上げる人間が目立っていないとのことにも筆者は嘆息している(:すかさずの目・虚ろな脳髄には、そう、ゾンビのような境涯に甘んじた人間の内面にあっては[偽りの世界を固守することの先に何が待つのか]につき考えは及びもしないし、世界そのものにまつわる愚にもつかぬ常識を破壊することなくして[種の存続]など望みようもないとの観点およびそちら観点導出につながる分析に理解を示すこともないのかもしれないと筆者は見るに至っているが、たかだかものここにて述べている程度のことからしてあまりにも酷いありようであるととらえてもいる) —— )

### (Oisín 伝承にまつわる解説部はここまでとする)

#### [浦島伝承と Oisín 伝承の間に横たわる断絶性について]

ここまでにて [浦島伝承] および [Oisín 伝承] 双方に

**「仲睦みあった相手と共に3年程、異界滞在をなした後、故郷に戻ったならば、300年の経過を見ており、直後、老化の憂き目を見た」**

との式で際立っての相似形がみとめられるとのことの所以たる記述を原文引用にて示し終えたわけではあるも、

**[浦島伝承と Oisín 伝承の間に横たわる断絶性] (類似性が存在しているにもかかわらず存在しているとの断絶性)**

について以降、端的なる解説をなしておきたい。

その点、

**[日本の上代(奈良期)成立の浦島伝承とアイルランドのオシアン伝承 —— 双方ともに【恋におちた存在によって異界に誘われたとの作品】【[三年の異界滞在]が[三〇〇年の現実時間]に対応させられている作品】【異界から出た際に禁を破った主人公が時間を失ったとの描写がなされている作品]となっているとの作品ら—— の間に類似性をもたらすような文化的交流が「日本と欧州では」存在していなかった]**

と解される論拠を — 極々基本的なところ、一般的歴史理解にまつわるものとして — 挙げておくこととする。

( Common knowledge [一般常識] にまつわる話としてまずは基本的なところ、和文 Wikipedia [マルコ・ポーロ] 項目、[黄金の国ジパング] の節よりの抜粋をなすとして)

マルコ・ポーロ ( Marco Polo ) は、自らは渡航しなかったが、日本のことをジパング ( Zipangu ) の名で初めてヨーロッパに紹介した。バデルが校正した B4 写本では、三章に亘って日本の地理・民族・宗教を説明しており、それによると中国大陸から 1, 500 海里 ( 約 2, 500km ) に王を擁いた白い肌の人々が住む巨大な島があり、黄金の宮殿や豊富な宝石・赤い真珠類などを紹介している。

( 引用部はここまでとする )

極々基本的なところながら、ウィキペディアよりの引用だけでは心もとないとも考えたので、さらに直下、Project Gutenberg にて公開されている ( 日露戦争だに発生していなかった折の ) 19 世紀末刊行の著作 Japan ( 1896 年刊行版 / 著者を日本政府のお雇い外国人ともなっていた米国の大学人デイヴィッド・モルレーとしているとの著作 ) よりその内容を引いておくこととする。

( 直下、Project Gutenberg にて公開されている Japan ( 1896 ) の冒頭部よりの引用をなすとして )

The first knowledge of the Japanese empire was brought to Europe by Marco Polo after his return from his travels in China in a. d. 1295. He had been told in China of “ Chipangu, an island towards the east in the high seas, 1500 miles from the continent; and a very great island it is. The people are white, civilized, and well favored. They are idolaters, and are dependent on nobody. And I can tell you the quantity of gold they have is endless; for they find it in their own islands.”

( 訳として ) 「日本帝国 ( と 19 世紀末にて呼称されていた日本 ) の最初の知識はマルコ・ポーロが紀元 1295 年に中国よりの旅行から帰ってきた後に欧州にもたらされることとなった。彼マルコ・ポーロは中国にあって Chipangu ( ジパング ) 、大陸から 1500 マイル程東に離れたところにある島、とても大きな島であるとのその島について伝え聞くことになった。[ その住人は色白であり、高度に文明化されており、好意的である。その住人は偶像崇拜主義的であり、また、他の何物にも依存していない ]。( そして、マルコ・ポーロが言うところとして ) 彼らの島が黄金を産出するために彼らが所有している黄金の量が無尽蔵であると述べることもできる… ( とのものであった ) 」

( 訳を付しての引用部はここまでとする )

以上のようにマルコ・ポーロ ( 1254 - 1324 ) が紹介するまで日本という中国より東の島国の存在それ自体が欧州には知られていなかったということが [ 通常の歴史理解 ] 上の話となる ( 現実にそれ以前に日本のことを問題視している文献的記録が欧州に存在して「いない」と認知されているからこそその [ 通常の歴史理解 ] である ) 。



従って、

[[アイルランド中世にて成立した伝承] ⇔ [日本の浦島伝承]]


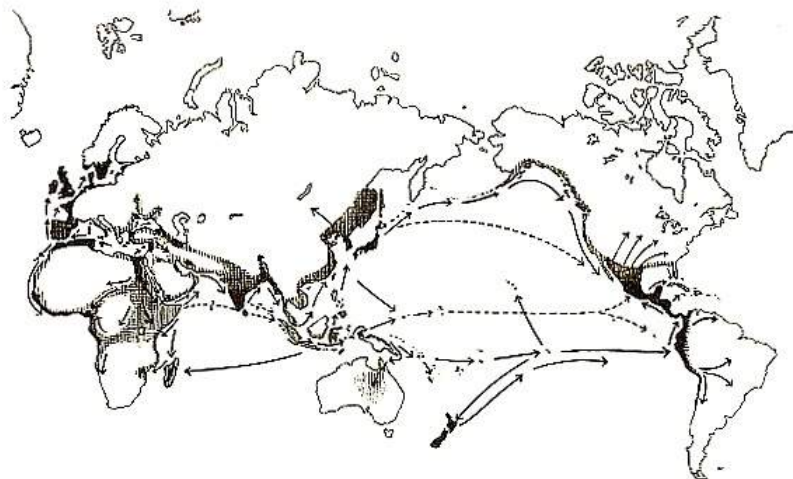
とのかたちでの直接的なつながりは観念できない。少なくとも普通には観念できない。

では、[間接的なつながり]が問題となる文書が存在するか否かはどうか(たとえば、西洋と東洋の双方に影響を与えたとの[より古き伝承の原型・雛形]が目につかないところであった等等)。

それにつき考えると、古今東西の東西を垣根で作用していた可能性がある伝承、それらしい伝承は確かに中国にあるようなのであるが(囲碁の観戦をなしていたら膨大な時間が経っていたとの[爛柯](らんか/囲碁の別称)という言葉の由来につき言及している『述異記』に見る中国伝承]もその範疇に入るだろう)、 だが、しかし、そこにて

[三年・三〇〇年の一致性]

は見受けられないとの按配となっている(：少なくともこの身が「寡聞で「はない」とのところまで文書探査をなした限りは、である——但し、異本や異伝の裾野は広いようにもとれ、浦島伝承の元となったとの[洞庭湖の竜女伝承]を収めての中国にての漢魏叢書(中国明代にあっての16世紀末に成立した文書)に収録されている拾遺記(中国の五胡十六国時代の4世紀末記録が6世紀にまとめられたものとされている文書)からして筆者が把握していない3年と300年の数値規則を含む記述を含んでいる版の存在も[もしかしたらありうるかもしれない]と見はする(ほぼないことか、とは見もしているが)——)。

earlier Urashimako legend	Oisín legend
	
	
<p>Map 2.—An attempt to represent roughly the areas more directly affected by the "heliolalic" culture-complex, with arrows to indicate the hypothetical routes taken in the migrations of the culture-bearers who were responsible for its diffusion.</p>	
<p>表記の図は浦島「子」伝承(逸文 —引用形態でのみ残存— とのかたちで上代(奈良期)より日本に伝わる浦島「太郎」伝承の元となるところの</p>	

伝承)および **Oisin 伝承**(ケルトの古伝承 ——先述なしたところの[「マクファーデンの」オシアン叙事詩]という全くの別物と混同しないこと——)の間には「文化的接続性がない」ことを視覚的に強調する、ただそのためだけに作成した図である(：初言及の情報をそこに付してのものではないので[たかだかもそのそうしたもの]と受け取っていただきたい)。

図の上の段に配しているのは浦島と Oisin をそれぞれ描いての近代画だが、彼らの間に横たわる事細やかな一致性については [文化伝播のパス ——図の下段にそちら文化伝播についてよく言われてきたところの[エジプトに由来する順々・ゆっくりした一方的流れ]を示しての英文 Wikipedia[ Trans-cultural diffusion ]項目に掲載されている図を挙げもしているとのパス—— ]

にて説明がなせない、というのも、「浦島伝承が濫觴(らんしょう、成立)を見たのは6世紀から7世紀であるとされており、オイシン伝承は、の後に、成立している節がある」(先述)、「欧州人が中国人を通じて日本の存在を知ったのは13世紀末であるとされている」(先述)とのことがあるがゆえに説明がなせない、とのことが問題になりもする。

さて、文化伝播による説明のなしがたさが伴っていることを述べ、もってして、「浦島伝承というものはそれからして不可解な特質を帯びており、それがゆえに、本当の学識ある大人でも軽んじるべきものではない」との訴求の具としたところで、先に問題視したことを繰り返す。

荒唐無稽映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』に浦島伝承との間にアナロジー(類似性)をみとめることとて行き過ぎにならぬところの理由として次の二点のことが挙げられる。

(荒唐無稽映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』に浦島伝承との関連性をみとめることとて行き過ぎにならぬところの理由として)

第一。

物理学者キップ・ソーンの [通過可能なワームホール] にまつわる解説のなしようを取り上げる中で内容を問題視し、そこよりの原文引用をなしてきたところの書籍が **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』** (亀の移動時間にそれを当てはめると浦島伝承にそれが接合するとの [双子のパラドックス] を [ワームホール型タイムマシン] に応用しての論理を展開していること、本稿にてのつい先立っての段で細かくも解説したとの科学書) という書籍となるわけだが、同著はそれ自体からして

[911の発生を明瞭に予見しているが如くもの「露骨な」予言的作品]

となりもしており、その絡みで映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』と不快かつ奇怪に結びついているとの側面が —認めがたいこととは思うが— 確としてある(については本稿のさらに続く段で原著および訳書よりの原文引用を必要十二分と解されるだけなしながらも細かき解説をなす)。

であるとすると、そう、表記のソーン科学書 ——ここ本段ではいまだ解説未了ながらも911の発生に対する予言的作品としてのソーン科学書—— と映

画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』の間に不快な関係性が成立しているとすると、

ゾーン科学書 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's  
Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインの  
とんでもない遺産』 ⇔ [双子のパラドックス] ⇔ [浦島伝承]

との関係性のパス、そして、

ゾーン科学書 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's  
Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインの  
とんでもない遺産』 ⇔ (【911の予見作品】としての側面) ⇔ 『スーパー  
マリオ 魔界帝国の女神』

とのパスが「別個独立に」成立していることになる。

換言すれば、である。

[浦島伝承] ⇔ ([双子のパラドックス]とワームホールにまつわる思考  
実験を介しての近接性) ⇔ 『ブラックホールと時空の歪み アインシュ  
タインのとんでもない遺産』 ⇔ (【911の事件にまつわる先覚的言及】(後  
述) / 【ワームホール関連トピック】) ⇔ 『スーパーマリオ 魔界帝国の  
女神』(「亀」救出ならぬ「亀」軍団退治のゲーム作品を原作とする恐  
「竜」人の次元接合のための暗躍を描く映画作品)

との関係性のパスが

[別個独立に成立しているところの関係性の合算]

から導出できてしまうことになる(であるから、映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』と浦島伝承の間にてのたかだかも「亀」と「竜」(竜宮)との爬虫類がらみのアナロジー(類似性)にまつわる側面についてすら着目すべきとの話が馬鹿げたものでなくなるとのことがある)。

(荒唐無稽映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』に浦島伝承との関  
連性をみとめることとて行き過ぎにならぬところの理由として)

第二。

特殊相対性理論から導き出せる帰結に相通すること(双子のパラドックス)に  
言及しているような色彩を伴っているとの簡明化して解説した側面を有してい  
る以外に、浦島伝承それ自体からして奇怪な側面が付き纏っている。

伝承などの文化伝播が相互に観念しづらい領域、  
[中世期アイルランドにて成立したとされる伝承]  
と

[上代日本(奈良期日本)に成立したとされる浦島伝承]  
がピタリとした数値的一致性を呈しながらほぼ同じ内容を有しているとのこと  
があるのである。

そのような[奇怪]なること ——(本稿にての先立っての段で炙り出している  
ように70年代にあって[現行加速器に対往時加速器で200倍近いものを登

場させ、その CERN 加速器を想起させる機関のビーム照射挙動でブラックホール生成がなされるように描いている作品]が存在していることも奇怪なことなのだが、それに類するところと見えもする[奇怪]なところ)—— にまつわる話であるから、そちら浦島伝承と[予言「的」作品](ツインタワーの崩壊を予見するような描写を含む作品)としての『スーパーマリオ魔界帝国の女神』という現代映画作品との間のアナロジー(類似性)を問題視することは[子供だましの文物より引き出したの子供だましの話]で済まされるようなことではない(とのことがある)。

以上の第一および第二の点につき便宜的に第二の点からはじめての解説をなしてきたのがここまでの流れであったわけだが、これ以降はそちらこそが重要であるとの第一の点(解説が極めて長くもなりするので後回しにしたとの点)にまつわる解説に舵を切ることとする。

(E. と振っての一連の段はこれにて終えることとする)

F

これ以降、F. と振っての段(これまでの A. から E. と振っての流れを受けもしての段)では上にての繰り返しての表記にて最も重きをなすところ、

「キップ・ソーン科学書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』には先の 911 の事件の予見文物としての側面が伴っている」

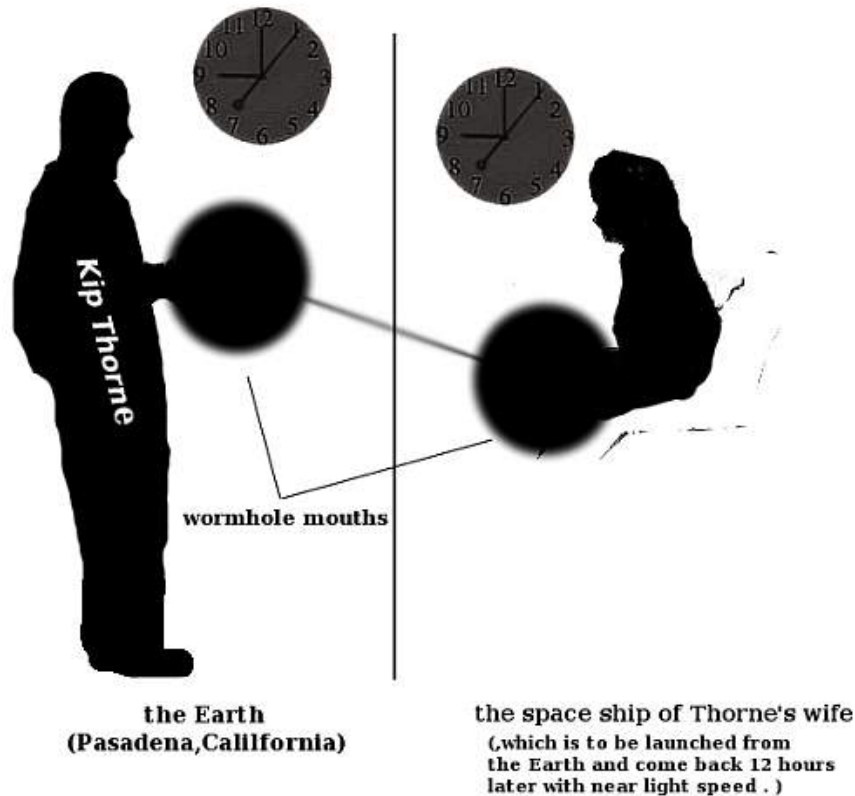
とのことの具体的指し示しに入ることとする。

続けての出典紹介部を含めての話が紙幅にして相当な分量とならざるをえないとのところなのだが、(ここ本段、F. と振っての段では) 以下、1. から 5. と振ってのことが呈示できる(呈示できるように「なっている」)ことを事細かに問題視する。

1.

まずは本稿の先の段にて挙げたものを再掲しての下の図を元に話を進める。





上の図は本稿の先の段、E. と振っての部の書き出しの部にて挙げもしていたとの図となる、より具体的には

**[ソーン著書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 掲載の「ワームホールをタイムマシンに変換させる方式」につき解説した図(邦訳版 p.456)の著作権法に抵触はしなからう程度のイミテーション]**

として作成した図(を再掲したもの)となる。

同図にては

**[思考実験におけるワームホールの口が存在している場]**

として

**[カリフォルニアのパサデナという地]**

を配置している(そのことを記載しているとの訳書および原著よりの表記もすぐに再引用するが、はきとそのように図の解説部で明示されている)。

先にもその概要につき解説したように

**[「思考実験概要」に対する説明をなすべくも物理学者ソーンによって図示されている上の再現図のオリジナルとなった図]**

からしてそちらパサデナの地(にあると表記されてのキップ・ソーン自宅)に留まっている髭を豊かに貯えた物理学者ソーンの手から、

**[モデル化したワームホールの入り口]**

がシュールに発生している様が描き込まれているわけであるが、そうしたワーム

ホール構築がなされる場として書籍にて言及されているカリフォルニアのパサデナという地、カリフォルニア工科大学が存在している地域は郵便番号(ZIPコード)が[91101]からはじまる地域である(：何故、そのようなことを当方が把握しているかと述べれば、911の事件の前言がなされていたとのことを告発している一群の動画群を検証していた際、そのうちのひとつとして『ビッグリボウスキ』という映画作品が911の前言をなしていたと解説しているとの訴求動画を目にしており、(『よくそこまで気づいたものだ』と感心させられたものなのだが)、の動画の中で映画『ビッグリボウスキ』劇中に登場するキー(鍵)がパサデナと結び付けられていること、そして、パサデナの郵便番号91101と結びついているのは問題であろうとの指摘がなされていたのを目にしたからである(ただ、そちら動画が読み手がまだ確認いただけるかたちで流通しているかは保証しかねる))。

その点、91101というのは —そこからして典拠を後に示すことになるが— 英語圏における二〇「〇一」年「九」月「一一」日の表記方法である。

## 2.

先にも解説しているところとして、ソーンは同じくもの図(1.と振っての部にて挙げた図)の右側に

[光速に近い速さで移動している宇宙船 (ソーン妻カロリーが乗った猛烈なスピードで地球より離れていき、同様に地球に戻ってくるとの宇宙船) 内にワームホールのもう一つの開閉口]

を配置している。

以上のようなキップ・ソーン著作の

[地球と宇宙船の中に配置され相互に結びついたワームホール開閉口の描写]

は[双子のパラドックス]と呼称される現象、「1911年に」提唱されたことでも知られているとの、

[特殊相対性理論の帰結として導出される観察者タイムラインの差分発生現象]

と関係するものともなる(先に原文引用をなしたところでもあるが、[双子のパラドックス]との絡みでは下にて再度の出典紹介をなす)。

ソーンはその1911年提唱の[双子のパラドックス]のメカニズムを考慮に入れ、[地球]と[光速に近いスピードで動く宇宙船]内にそれぞれ配置した両区間を結ぶワームホールよってのタイムマシン実現の可能性を呈示の図を挙げながら自著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』の中で論じているのである(同点については本稿の先の段にて既に十全の解説をなしているのでここの話は理解している向きのためのおさらいのものとお含みいただきたい)。



そうして考慮に入れられての双子のパラドックスからして二〇〇一年九月一日に双子の塔が崩されたあの事件が想起されもするとのこと「**まずもって**」ある。

「ツイン」タワーと「双子」つながりということもあるうえ、——後に同点にまつわる出典紹介をなすところとして——双子のパラドックスの考案年数が1「911」年であるとのこともある(無論、それだけを述べれば、ただのこじつけ話と看做されかねないところであろうが)。といった[1「911」年提唱の「双子の」パラドックス]が[郵便番号91101(繰り返すが、91101は2001年9月11日そのものを指す数字列である)よりはじまる一地域(カリフォルニア州パサデナ)を[空間上の始発点]として飛び立ったスペースシップ]を材にしての思考実験の中で重んじられているのである。

また、——そちらは本稿にて初言及のこととなるが——物理学者キップ・ソーンはその著書 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み』にあつて[双子のパラドックスに通ずる時空の相対性]について書籍内の他所にて取り上げており、その段では双子のパラドックスに通ずる時間の相対性が

**[カリフォルニア州パサデナ (ZIPコードが91101より始まる地) で [爆竹 (firecracker ファイアクラッカー) 付き自動車走行の観察結果]**

によって解説されている。走っている爆竹付きの車 ( a car with a line of firecrackers on its-roof ) の[爆竹のスパーク(小爆発でもいいだろう)]の発生順序に対する観察結果に見る観察者毎の差分より双子のパラドックスに通ずる時間の相対性を論じようとの発想だが、かの911の事件は時間差をきたしながら炎上・倒壊していく「双子の」塔が現出した事件だった(ZIPコード「91101」よりはじまる地で[爆竹 (firecracker ファイアクラッカー) 付き自動車]走行にまつわる思考実験をなして、そこに1「911」年提案の「双子の」パラドックスに通ずる時間の相対性を見ようというのは原著1994年刊行の **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み』の書きようとしては穏やかではない。時期的に、である)。

### 3.

上の1. および2. だけでは、

「**穿ち過ぎである(から信用が置けない)**」

ととらえる向きもいるところかもしれない。だが、ここでの話には[より露骨な、問題視すべきこと]が伴っている。

当然に続く段にて出典よりの原文引用をなし、[文献的事実]であることを示すとのこととなるが、キップ・ソーンは上にてイミテーションを挙げているその図にて一連の出来事の起算点となる時刻を

**「2000年1月1日午前9時」**

と設定している。その刻限からして911のことが想起される場所となる。英語圏で

2000年1月1日午前9時とくれば、January 1, 2000 9:00 a.m.などと表記される  
ところであろうが、世界協定時間(UTC)としての表記では2000/01/01/09:00との  
表記が充てられる。より略式化すれば、2000/1/1/9である。そこからして、かの911  
の事件のことが想起される(2001/9/11と2000/1/1/9は[数値列]として近いとい  
うわけである——殊に0をnull値[空値]として見るとそうなる——)。

さて、ここで「何時」「何日」「何年」とショートスパン(short-span)の単位に並び変  
えれば、9/1/1/2000との数値が導出されることになる。

といった並び替えがなせる刻限が[「双子の」パラドックス(1「911」年提唱の「双  
子の」パラドックス)にまつわる思考実験]にして、かつ、[空間上の始発点を郵便  
番号91101(2001年9月11日の略記そのもの)にてはじまる地区(パサデナ)に  
置いての思考実験]であるとの**タイムマシン関連の思考実験**の[時間軸上の始発  
点]として用いられている。

そこからして[できすぎの感]を醸し出している。

(※2001年9月11日「前の」1994年刊行の書籍に見るやりようであ  
るからタイムマシンではないが、時を逆行するようなやりようとの観点  
で問題になる——※意味合いを問えば、まずもって、[1911年と双  
子が結びつくこと]が[双子の塔が崩された911の事件]と結びつくよ  
うに見えるとのことを奇縁で済まされるのか、とのことがある。加えて、  
[1911年と双子が結びつくこと]がまさしくも意味をなしてくるとの挙が  
[2001年9月11日]「そのもの」を指す数値列を[地区の始発点表象  
数値(郵便番号91101)]とする一区域と[空間軸上の始点]を介して  
結びついているとのことが奇縁で済まされるのか、とのことがある。さ  
らに加えて、そこに[時間のずれ]が[順次爆破]との式で関わってお  
り、また、そうした[時間のずれ]がタイムマシンの材にされているこ  
とが奇縁で済まされるのか、との問題がある(911の事件では双子の  
ビルが連続で時間的ずれをきたしながらも爆発倒壊している)。「さ  
らに」「さらに」加えて、[何々時間・何々日・何々年をショートスパン順  
に入れ替えて並べれば200「1」年911と200「0」年911との式で[一  
桁しか違わない数値列]が同じくもの挙にての[時間軸上の始発点]  
となっているとのことが奇縁で済まされるのかとのことが問題にもなる  
(以上の問題となることらにつき、正気の間人ならば、第一段階の[双  
子のパラドックスと911が結びつくこと]からして[出来すぎである]と  
の予断をもって見ることもかとは思いますが、そこを敢えてもの問いをここ  
では発している)——)。

## 4.

上の3.と密接にかかわるところの話をなす。世の中にては2000年をもって

[新たな千年紀(ニュー・ミレニアム)の始まり]

として祝賀するムードがあったわけだが、現実には2000年ではなく2001年が  
ニュー・ミレニアムの始期であるとする理論——というより暦の発展史に基づいての  
見立て——が存在している。

そうした見立てに言及している書籍を例として挙げる。  
チャールズ・サイフェという科学ライター(アカデミズム寄りの数学の学位を持つ  
ある程度有名なサイエンスライター)の手になる書、

**ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』  
(原著 2000 年刊)**

という書籍には次のような趣旨の記載がなされている。

「西暦で示される暦にあってはそれがゼロとの数値の存在を顧慮して構築  
されていたものではない。そういった事情より、暦のカウント方式に差分が  
生じる。そのため、20 世紀のはじまる折は 2000 年ではなく 2001 年である  
との解釈がなされうる。2000 年と 2001 年のそうあるべき位置づけは 1 年  
づつずれているとも述べられるのである」(続けてのすぐ後の段にてそこ  
よりの原文引用をなすが、『異端の数ゼロ』邦訳「ハードカバー」版での  
以上のことへの言及ページは p.64—p.69 となる)

以上のような見立てに準拠すれば、2000 年と 2001 年の各年は[ミレニアム(新  
たな千年紀)のスタート・ポイント]としてその混同が問題となるところということにな  
る。

そのため、キップ・ソーンの『ブラックホールと時空の歪み』— [通過可能な  
ワームホールとタイムマシンの関係の問題] を扱った海外では比較的知られた著  
作— にての

[ワームホールのタイムマシン化挙動の開始ポイント]

の時期、ソーンとスペースシャトルになったソーンの妻がしばしの別離をなすことにな  
った時期が

「2000 年 1 月 1 日 9 時」

とされていることの意味がさらに重きをもってくることになる。

2000 年 1 月 1 日 9 時が[「双子の」パラドックス(1「911」年提唱)が起こるスター  
ティング・ポイント]と看做されていることになるわけだが(そこからしてご理解いた  
だけではない向きはここまでの内容を読みなおしていただきたい。また、理解したう  
えでなお疑わしいとのことであれば厚く表記しての以降の出典紹介部を参照・内  
容検討いただきたい)、2000 年 1 月 1 日というのが欧米人の多くがそれを担いで  
いたニュー・ミレニアムのスタートポイントではなく、その実、2001 年 1 月 1 日が  
ニュー・ミレニアムのスタートポイントであるとの見立てが背面にあること、そこから、

[2000 年 1 月 1 日 9 時→2001 年 1 月 1 日 9 時]

こそが切り替えの時であるとの見立てが背面にあるとの物言いもなせる(2001 年 1  
月 1 日 9 時は数値変換の問題からダイレクトに 2001 年の九月十一日に起こった  
かの事件を想起させることになる)。

## 5.

上の4.にて言及したチャールズ・サイフェ著、

### **ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』 (原著2000年刊)**

との著作は(表記のように)2000年と2001年の区別が曖昧となっていることを論じての著作であると同時に

[刊行年にて先行するキップ・ソーン著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあつての(上にて再現図を挙げた)図と同様の[通過可能なワームホールにまつわる図]を同じくものイラストレーター(Matthew Zimetという人物か)の手になる極めて独特なるテイストのイラストとして挙げもしているとの著作]

にして、また、

[ブラックホールという語を911の事件が起こる「前」から(往時より使用局面が限られているとの特殊な言葉であった)[グラウンド・ゼロ]との語と結びつけている著作] (キップ・ソーンのここにて問題視している[通過可能なワームホール]にまつわる思考実験のことを解説している著作の表題が『ブラックホールと時空の歪み』となっているとのそのことを想起させるようにブラックホールをグラウンド・ゼロとの言葉——元来にして使用局面が限られた特殊な言葉——と結びつけている著作)

ともなる(：これまた冗談のように聞こえもしようことだが、[文献的事実]の問題としてそういうことがあることをこれより示していく)。

そういうことまでもが([2000年と2001年の別の曖昧さについて扱っているとの著作]に伴うところとして)あり、それでもってして、上の3.にて言及した、

[2000年1月1日9時と2001年1月1日9時の区別の曖昧さ]

の意味合いがよりもって重くもなるとのことがある。

以上1.から5.のこの出典紹介を網羅的に、そう、必要十分と解する分だけ、以下、なしていくこととする。

### [1.の部にまつわる出典として]

ここでは(より端的に表しての)

## 1.

再現図を呈示したとの、

[ソーン著書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy に掲載の[ワームホールをタイムマシンに変換させる方式]につき解説した図]がそれにまつわるものとなっている(書籍に見る)[思考実験]の始発点はカリフォルニア州パサデナに設定されており、そちらパサデナの郵便番号は91101からはじまる。そして、91101という数値列は2001年9月11日を指すものでもある

とこのことの出典を挙げることにする。

まずもって

[思考実験の始発点がパサデナである]

とこのことについての典拠紹介をなす。

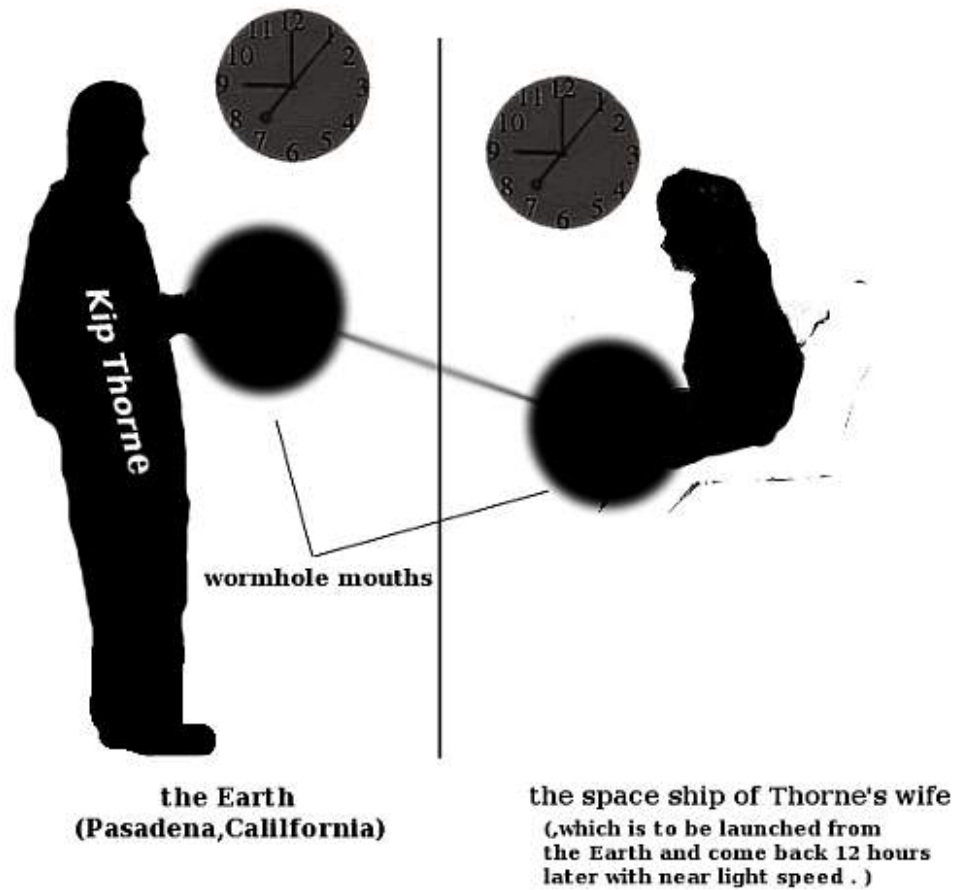
(直下、キップ・ソーンの著作『ブラックホールと時空の歪み』(白揚社刊行の邦訳版)456ページにある図の横書き解説部よりの引用を(出典(Source)紹介の部28にても引用なしたところより)「再度」なすとして)

図 14・7 カロリーと私はワームホールを用いてタイムマシンを作る。左:私はワームホールの1つの出入口とともにパサデナの自宅に留まり、ワームホールを通じてカロリーと手を繋いでいる。右:カロリーはもう一方の出入口を携えて高速度宇宙旅行に出かける。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※— )

(※尚、「オンライン上検索エンジンに該当テキストを入力して検索結果表示ページを精査することで」その通りの記述がなされていること、現行は確認可能となっている原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にての該当するところの表記の引用をも(読み手確認の用に供していただきたい)もなしておくことにする。(以下、上の訳書よりの引用部に対応するオンライン上より確認可能な原著表記を引くとして) 14.7 Carolee and I construct a time machine from a wormhole. **Left: I stay at home in Pasadena with one mouth of the wormhole and hold hands with Carolee through the wormhole. Right: Carolee carries the other mouth on a high-speed trip through the Universe.** Inset: Our hands inside the wormhole. (原著よりの引用部はここまでとする)—— )

(※以上原文引用部にて呈示の再現図が述べたとおりのもの、[左にカリフォルニアはパサデナに位置するソーンを配し、右にスペースシップに出かけるソーン妻を配し、両者がワームホールでつながれたもの]であることが言及されている)



次いで [カリフォルニア州パサデナの郵便番号が91101よりはじまることについて] の即時確認できるところの出典を挙げる。

出典(Source)紹介の部 31



# SOURCE

## 31

ここ出典紹介部ではカリフォルニア州パサデナ市の郵便番号が91101よりはじまっていること



について正確に記載されている(正確に記載されていなければ、日常社会の運行そのものに支障がきたされうる)との英文ウィキペディア表記を引いておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia[ Pasadena, California ]項目、その右の枠内部の市街地データ記載部にあつての ZIP コード表記欄(郵便番号表記欄)よりの引用をなすとして)

---

ZIP codes 91101–91191

---

(引用部はここまでとする.尚、上にての引用部の意味合いは[カリフォルニア州パサデナの郵便番号は91101 にてスタートし、91191 にて終わる]とのものとなる)

(出典(Source)紹介の部 31–2 はここまでとする)

---

上についても疑わしきは検索エンジンで読み手をご自分自身で[ pasadena zip code 91101 ]で入力、そのとおりとなっていること、ご確認いただきたい(尚、『言うまでもないことか』とは思うのだが、カリフォルニア州パサデナ郵便番号の全てが91101となっているわけでは「ない」(カリフォルニア州ロサンゼルス群内でのパサデナ市の人口は13万人超に達すると諸所にて確認させるようになっており、その人口規模は東京23区の相対的人口規模高位地区の数分の1に達する))。

さらに[91101]との表記が米国表記にて2001年9月11日——先の911の事件が起こった日付そのもの——である論拠も(本来ならば日付表記方式自体はCommon Knowledge 常識としての話ともなろうか、とも思うのだが)挙げておくこととする。

---

出典(Source)紹介の部 31–2



SOURCE

31-2

ここ出典紹介部では91101との数値列が米国日付表記方式にて2001年9月11日を指すものであることの典拠を、『日付表記などという基本的極まりないことに関してそこまでする必要があるのか』とも思いもしたのだが)、呈示しておくこととする。

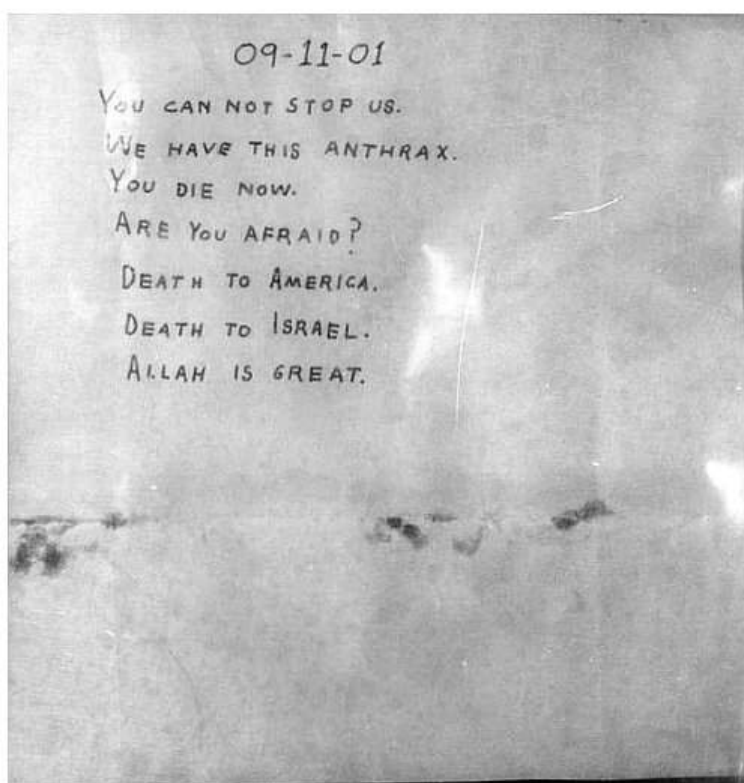
まずもって紹介するが、英文 Wikipedia[ Calendar date ]項目にては「合衆国にて用いられるものである」と記載されている( This sequence is used primarily in the United States.と記載されている)日付表記方式として

### **Gregorian, month-day-year**[グレゴリウス方式:月:日:年]

との日付表記方式が挙げられている。すなわち、合衆国では月・日・年との順での日付表記方法が(半ば常識の問題でもあるわけだが)採用されている。

それがゆえに2001年9月11日が(ここにて問題視している数値列たる)91101となるとことの実例を下に挙げておく。

#### **Second anthrax note**



(From Wikimedia Commons)

上は911の事件の後、米国にて発生した炭疽菌テロを起こしたとされるブルース・イヴィンズ容疑者——本稿の後の段にてそのやりようを取り上げるとの自殺による物故者——が書いたと見なされている犯行声明書の内容を挙げたものである(英文 Wikipedia[ 2001 anthrax attacks ]掲載のものよりの転載)。

そこに見る一見にして愚劣なものであると分かつと内容はどうでもいいとして、ここにて問題視しているのは上の犯行声明文に見る「(0)91101」というナンバーがパサデナという地区のジップコード(郵便番号)の開始番号となっていることである(そうしたことにこだわらざるをえぬとの[奇怪な相関関係]が現出しているとの話の流れで日本でもクレジットカードなど一般に見られる

世間一般の常識的数値表記法にまつわる話をなしている)。

(**出典(Source) 紹介の部 31-2** はここまでとする)

ここまでにて

## 1.

再現図を呈示したとの、  
[ソーン著書 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** に掲載の [ワームホールをタイムマシンに変換させる方式] につき解説した図] がそれにまつわるものとなっている(書籍に見る)[思考実験]の始発点はカリフォルニア州パサデナに設定されており、そちらパサデナの郵便番号は91101からはじまる。そして、91101という数値列は2001年9月11日を指すものでもある

このことの出典紹介部を終える。

**[2. の部にまつわる出典として]**

先立って1. から5. と分かちもしてのことらのうちの2. の部、すなわち、

## 2.

先にも解説しているところとして、物理学者キップ・ソーンは彼の著作 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあつての問題となる掲載図(1. と振っての部にて挙げた図)の右側に

[光速に近い速さで移動している宇宙船 (ソーン妻カロリーが乗った猛烈なスピードで地球より離れていき、同様に地球に戻ってくる時の宇宙船) 内にワームホールのもう一つの開閉口]

を配置している。

以上のようなキップ・ソーン著作の

[地球と宇宙船の中に配置され相互に結びついたワームホール開閉口の描写]

は「[双子のパラドックス]」と呼称される現象、「1911年に」提唱されたことでも知られているとの、

[特殊相対性理論の帰結として導出される観察者タイムラインの差分発生現象]

と関係するものともなる(先に原文引用をなしたところでもあるが、「[双子のパラドックス]」との絡みでは下にて再度の出典紹介をなす)。

ソーンはその1911年提唱の「[双子のパラドックス]」のメカニズムを考慮に入れ、「[地球]と「[光速に近いスピードで動く宇宙船]」内にそれぞれ配置した両区間を結ぶワームホールによってのタイムマシン実現の可能性を呈示の図を挙げながら自著 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』の中で論じているのである。

そうして考慮に入れられての双子のパラドックスからして二〇〇一年九月一日に双子の塔が崩されたあの事件が想起されもするとのこと「まずもって」ある。

「ツイン」タワーと「双子」つながりということもあるうえ、——後に同点にまつわる出典紹介をなすところとして——双子のパラドックスの考案年数が1「911」年であるとのこともある(無論、それだけを述べれば、ただのこじつけ話と看做されかねないところであろうが)。といった「1「911」年提唱の「双子の」パラドックス」が——先行するところの1.の段にて申し述べているように——「郵便番号91101(繰り返すが、91101は2001年9月11日そのものを指す数字列である)よりはじまる一地域(カリフォルニア州パサデナ)を「空間上の始発点」として飛び立ったスペースシップ」を材にしての思考実験の中で重んじられているのである。

また、——そちらは本稿にて初言及のこととなるが——物理学者キップ・ソーンはその著書 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み』にあつて「[双子のパラドックスに通ずる時空の相対性]」について書籍内の他所にて取り上げており、その段では双子のパラドックスに通ずる時間の相対性が

[カリフォルニア州パサデナ(ZIPコードが91101より始まる地)で「爆竹(firecracker ファイアクラッカー)付き自動車走行の観察結果」]

によって解説されている。走っている爆竹付きの車(a car with a line of firecrackers on its-roof)の「爆竹のスパーク(小爆発でもいいだろう)」の発生順序に対する観察結果に見る観察者毎の差分より双子のパラドックスに通ずる時間の相対性を論じようとの発想だが、かの911の事件は時間差をきたしながら炎上・倒壊していく「双子の」塔が現出した事件だった(ZIPコード「91101」よりはじまる地で「爆竹(firecracker ファイアクラッカー)付き自動車」走行にまつわる思考実験をなして、そこに1「911」年提案の「双子の」パラドックスに通ずる時間の相対性を見ようというのは原著1994年刊行の **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み』の書きようとしては穏やかではない。時期的に、である)。

とのことの出典を挙げることにする。

まずは「双子のパラドックス」というものが「1911年」に提唱されたものであるとのことの言われようを紹介し、次いで、そうした双子のパラドックスがキップ・ソーン著作の問題となる「通過可能なワームホールのタイムマシンとしての運用にまつわる思考実験」にて利用されていることのおさらいをなす。

---

## 出典(Source)紹介の部 32



# SOURCE

## 32

ここ出典紹介部ではまずもって「双子のパラドックス」という概念が双子と結びつく式にて1911年にかたちをなした概念であることの典拠を目立つところ、ウィキペディアより引いておく。

(直下、和文ウィキペディア「双子のパラドックス」項目の現行記載内容よりの原文引用をなすとして)

---

双子のパラドックス(ふたごのパラドックス)とは、特殊相対性理論(1905年)による運動系の時間の遅れに関して提案されたパラドックスである。初めは、相対性理論に内部矛盾があるかどうかについて、アインシュタイン本人が時計のパラドックスとして出した問題であるが、1911年にポール・ランジュバンが双子をモデルしたパラドックスに仕立てたため、双子のパラドックスとして有名になった。

---

(引用部はここまでとする ー※ー)

(※尚、英文 Wikipedia「Twins Paradox」項目にあつての History の部にあつては「two clocks のパラドックス」にアインシュタインが1905年に言及しだし、それを同じくもアインシュタインが「1911年」に精緻化

させたこと、そして、同年に学者ポール・ランジュバンがローレンツ・ファクター Lorentz factor に言及しての双子の例で画期的な説明を与えたとの記載が比較的長めになされている (また、同じくもの英文ウィキペディア解説項目にては現行、その冒頭部からして Starting with Paul Langevin in 1911, there have been various explanations of this paradox. との表記がなされている)。そうした英文ウィキペディア表記は和文ウィキペディアよりの上にての引用部表記に見る「[双子のパラドックス]は1911年にポール・ランジュバンによって提唱された」との物言いと差異差分はないものである)

次いで、上記2. にまつわるところとして

[問題となる思考実験(ソーン著作に見る911の予見的言及との絡みで問題となる思考実験)との絡みで物理学者キップ・ソーンは[双子のパラドックス発生のメカニズム]を考慮に入れ、[地球]と[光速に近いスピードで動く宇宙船]内にそれぞれ配置した両区間を結ぶワームホールによつてのタイムマシン実現の可能性を論じている]

とのことの出典を挙げておく。

(直下、キップ・ソーンの著作『ブラックホールと時空の歪み』(白揚社刊行の邦訳版)456ページから457ページよりの引用を([出典(Source)紹介の部28-2]と同文のところとして)再度なすとして)

---

この旅は地球上で測れば、…(中略)… 一〇年もかかる旅である。(これは典型的な「双子のパラドックス」だ。高速度で往復した双子の一人(カロリー)は時間の経過を一二時間と測るが、地球に残った双子のもう一方(私)は、旅が終わるまで一〇年も待たなくてはならない。)

---

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※それにつき、「オンライン上検索エンジンに該当テキストを入力して検索結果表示ページに当たることで」その通りの記述がなされていること、確認可能な原著 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** にての該当するところの表記の引用をも再度なしておくこととする。(以下、上の訳書よりの引用部に対応するオンライン上より確認可能な原著表記を引くとして) “ **Instead, if I had a good enough telescope pointed out the window, I would see Carolee's spaceship flying away from Earth on its outbound journey, a journey that measured on Earth , looking through the external universe, will require 10 years. / [ This is the standard“twins paradox”; the high-speed“twin”who goes out and comes back (Carolee) measures a time lapse of**



only 12 hours, while the“twin”who stays behind on Earth  
(me) must wait 10 years for the trip to be completed.” (原  
著よりの再度の引用部はここまでとする)—— )

(**出典(Source)紹介の部 32**はここまでとする)

---

さらに、上記 2. にまつわるところとして

[同じくもの書籍にあつて[双子のパラドックスに通ずる時間の相対性の説明]と  
して[カリフォルニアのパサデナから走る爆竹付き車両の爆竹爆発観察]が引  
き合いに出されている]

とのことの出典を挙げておく。

---

**出典(Source)紹介の部 32-2**



# SOURCE

## 32-2

本段、**出典(Source)紹介の部 32-2**ではキップ・ソーン著作にあつて[双子のパラドックスに通  
ずる時空間のずれ]のありようについての説明として[爆竹起爆の話]が取り上げられていること  
を紹介することとする。

(直下、キップ・ソーンの著作『ブラックホールと時空の歪み』(白揚社刊行の邦訳  
版)63 ページから 65 ページよりの引用を中略しながらもなすとして)

---

空間と時間の混合(あなたの空間が私の空間と私の時間の混  
合であること)を理解するために、あなたが馬力の大きなスポー

ツカーをもっていると想像してください。真夜中に警官である私が居眠りをしているとき、あなたはパサデナのコロラド・ブルヴァール(大通り)で高速度で車を飛ばしていた。あなたは車に一列のファイアクラッカー(爆竹)をつけていた。図 1・3a に見られるように、フードの前に一つ、後部トランクの上に一つ、そしてその中間に多数である。あなたはあなたの車がちょうど派出所の前を通過するときに、すべてのファイアクラッカーがあなたから見て同時刻に、一斉に爆発するように調整していた。図 1・3b は、この出来事をあなたの観点に立って描いている。

…(中略)…

この図表は水平に空間が、垂直に時間が描いてあるので、時空ダイアグラムと呼ばれている。破線は時間とともにファイアクラッカーが世界の中をどのように動いているかを示しているのので、世界線と呼ばれる。この本では今後、このような時空ダイアグラムと世界線をふんだんに使わせてもらう。

…(中略)…

さて、アインシュタインが論理的に導き出した驚くべき結論(BOX1・1)はこうだ。ファイアクラッカーの爆発はあなたの目には同時に見えたとしても、私の目には同時に爆発したとは見えないことを、光速の絶対性は要求している、というのである。私の立場に立つと、あなたの車のもっとも後部にあるファイアクラッカーから先に爆発し、もっとも先頭にあるファイアクラッカーが最後に爆発する。その結果、われわれが「爆発の瞬間のあなたの空間」と呼んだもの(図 1・3b)、私の時空ダイアグラムでは傾くことになる(図 1・3c)。

---

(訳書よりの引用部はここまでとする)

以上引用部につき意欲がある向きであるのならば、「オンライン上検索エンジンに該当テキストを入力して検索結果表示ページを精査することで」その通りの記述がなされていること確認可能な原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 内に記載のほぼ対応しての箇所引用をも下になしておくこととする。

(直下、BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 内の訳書記述に対応するところの記載内容引用をなすとして)

---

To underslaldthe analogous mixing of space and time (your space is a mixture of my space and my time, and my space is a mixture of your space and your time), imagine yourself the owner of a powerful sports car. You like to drive your car down Colorado Boulevard in Pasadena, California, at extremely high speed in the depths of the night,when I, a policeman am napping. To the top of your car you attach a series of firecrackers, one over the front of the hood, one over the rear of the trunk, and many in between; see Figure1.3a you set the firecrackers to detonate simultaneously as seen by you, just as you are passing my

police station.

Figure 1.3b depicts this from your own viewpoint. Drawn vertically is the flow of time, as measured by you (" your time "). Drawn horizontally is distance along your car, from back to front, as measured by you ("your space"). Since the firecrackers are all at rest in your space (that is, as seen by you), with the passage of your time they all remain at the same horizontal locations in the diagram. The dashed lines, one for each firecracker, depict this. They extend vertically upward in the diagram, indicating no rightward or leftward motion in space whatsoever as time passes and they then terminate abruptly at the moment the firecracker detonate. The detonation events are depicted by asterisks.

[ . . . ]

This figure is called a spacetime diagram because it plots space horizontally and time vertically, the dashed lines are called world lines because they show where in the world the firecrackers travel as time passes. We shall make extensive use of spacetime diagrams and world lines later in this book.

[ . . . ]

Now, the surprising conclusion of Einstein's logical argument ( Box 1.1 ) is that the absoluteness of the speed of light requires the firecrackers not to detonate simultaneously as seen by me, even though they detonate simultaneously as seen by you. From my viewpoint the rearmost firecracker on your car detonates first, and the frontmost one detonates last. Correspondingly, the dotted line that we called " your space at moment of detonation "( Figure 1.3b ) is tilted in my spacetime diagram ( Figure 1.3c .)

---

(原著よりの引用部はここまでとする)

(※上抜粋部に見る思考実験にあつては

[派出所警官との設定のキップ・ゾーンから見た爆竹付きハイスピード走行車両の爆竹の爆発具合]

[ハイスピード走行車両の運転手との設定の読者 (『ブラックホールと時空の歪み』読み手) がとらえる爆竹の爆発具合]

がそれぞれの観察者によって別の様相で見える(キップ・ゾーン扮する警官サイドでは同時に爆発していないように見え、運転手サイドでは同時に爆発していることになっている)理由として

[光(爆発時発生)の絶対性の性質]

が作用しているとのことが記されている(:疑わしきは上記の引用をなし、している部位の内容につき、[同じくものこと]を示すに不足するところがあるのか、確認いただきたい)。

といった話、

[ [光速度の性質] と [観測者の位置する空間] によって [ものの見え方が違う] との話]

は、言い換えれば、

[ 光速性質に規定される中、存在のありようによって時空間は相対的な様相を呈する]

とのものでもあり(路傍で止まって爆発の光を見た者には爆発が順次生

じているように見え、爆発をさせている光の発信源には爆発は同時に起っているようにとらえられる)、それは大雑把に述べて、  
[双子のパラドックス —— 光速に迫ろうとの勢いで移動する存在と留まっていた存在では時間の流れが異なる話—— の機序]

にも通ずるところである (本稿にての **出典(Source) 紹介の部 28-3** にあって和文ウィキペディア[双子のパラドックス]項目より以下の記載を引いていたところと同じくもの話である ⇒ “双子のパラドックスのストーリーは次のようになる。双子の兄弟がいて、弟は地球に残り、兄は光速に近い速度で飛ぶことができるロケットに乗って、宇宙の遠くまで旅行したのちに地球に戻ってくるものとする。このとき、弟から見れば兄の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように兄の時間が遅れるはずである。すなわち、ロケットが地球に戻ってきたときは、兄の方が弟よりも加齢が進んでいない。一方、運動が相対的であると考えれば、兄から見れば弟の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように弟の時間が遅れるはずである。すなわち、ロケットが地球に戻ってきたときは、弟の方が兄よりも加齢が進んでいない。これは前の結果と逆になっており、パラドックスである。このパラドックスは、双子の兄弟の運動が対称ではないことから解決される ” ) )

(**出典(Source) 紹介の部 32-2** はここまでとする)

ここまでもってして

## 2.

先にも解説しているところとして、物理学者キップ・ソーンは彼の著作 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあっての問題となる掲載図(1. と振ったの部にて挙げた図)の右側に

[光速に近い速さで移動している宇宙船 (ソーン妻カロリーが乗った猛烈なスピードで地球より離れていき、同様に地球に戻ってくる宇宙船) 内にワームホールのもう一つの開閉口]

を配置している。

以上のようなキップ・ソーン著作の

[地球と宇宙船の中に配置され相互に結びついたワームホール開閉口の描写]

は[双子のパラドックス]と呼称される現象、「1911年に」提唱されたことでも知られているとの、

[特殊相対性理論の帰結として導出される観察者タイムラインの差分発生現象]

と関係するものともなる(先に原文引用をなしたところでもあるが、[双子のパラドックス]との絡みでは下にて再度の出典紹介をなす)。

ソーンはその1911年提唱の[双子のパラドックス]のメカニズムを考慮に入れ、[地球]と[光速に近いスピードで動く宇宙船]内にそれぞれ配置した両区間を結ぶワームホールによってのタイムマシン実現の可能性を呈示の図を挙げながら自著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』の中で論じているのである。

そうして考慮に入れられての双子のパラドックスからして二〇〇一年九月一日に双子の塔が崩されたあの事件が想起されもするとのこと「まずもって」ある。

「ツイン」タワーと「双子」つながりということもあるうえ、——後に同点にまつわる出典紹介をなすところとして——双子のパラドックスの考案年数が1「911」年であるとのこともある(無論、それだけを述べれば、ただのこじつけ話と看做されかねないところであろうが)。といった[1「911」年提唱の「双子の」パラドックス]が——先行するところの1.の段にて申し述べているように——[郵便番号91101(繰り返すが、91101は2001年9月11日そのものを指す数字列である)よりはじまる一地域(カリフォルニア州パサデナ)を[空間上の始発点]として飛び立ったスペースシップ]を材にしての思考実験の中で重んじられているのである。

また、——そちらは本稿にて初言及のこととなるが——物理学者キップ・ソーンはその著書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み』にあって[双子のパラドックスに通ずる時空の相対性]について書籍内の他所にて取り上げており、その段では双子のパラドックスに通ずる時間の相対性が

**[カリフォルニア州パサデナ(ZIPコードが91101より始まる地)で[爆竹(firecracker ファイアクラッカー)付き自動車走行の観察結果]**

によって解説されている。走っている爆竹付きの車(a car with a line of firecrackers on its-roof)の[爆竹のスパーク(小爆発でもいいだろう)]の発生順序に対する観察結果に見る観察者毎の差分より双子のパラドックスに通ずる時間の相対性を論じようとの発想だが、かの911の事件は時間差をきたしながら炎上・倒壊していく「双子の」塔が現出した事件だった(ZIPコード「91101」よりはじまる地で[爆竹(firecracker ファイアクラッカー)付き自動車]走行にまつわる思考実験をなして、そこに1「911」年提案の「双子の」パラドックスに通ずる時間の相対性を見ようというのは原著1994年刊行の BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み』の書きようとしては穏やかではない。時期的に、である)。

とのことの出典紹介とした(色を付けたところが直上の出典紹介部にて(従前典拠呈示に加えての)典拠を紹介したところとなる)。

次いで(1. から 5. と分かちもしての部にあつての)3. と振つての部位の出典紹介に入ることにする。

### [3. の部にまつわる出典として]

次いで、3. の部、すなわち、

### 3.

キップ・ゾーンは思考実験(通過可能なワームホールのタイムマシン化にまつわる思考実験)の起算点を

「2000年1月1日午前9時」

と設定している。その刻限からして911のことが想起される場所となる。英語圏で2000年1月1日午前9時とくれば、January 1, 2000 9:00 a.m.などと表記される場所であろうが、世界協定時間(UTC)としての表記では2000/01/01/09:00との表記が充てられる。より略式化すれば、2000/1/1/9である。そこからして、かの911の事件のことが想起される(2001/9/11と2000/1/1/9は[数値列]として近いというわけである——殊に0をnull値[空値]として見るとそうなる——)。

さて、ここで「何時」「何日」「何年」とショートスパン(short-span)の単位に並び変えれば、9/1/1/2000との数値が導出されることになる。

といった並び替えがなせる刻限が「「双子の」パラドックス(1「911」年提唱の「双子の」パラドックス)にまつわる思考実験」にして、かつ、「空間上の始発点を郵便番号91101(2001年9月11日の略記そのもの)にてはじまる地区(パサデナ)に置いての思考実験」であるとのタイムマシン関連の思考実験の「時間軸上の始発点」として用いられている。

そこからして「できすぎの感」を醸し出している。

とのことの出典を挙げることとする。

具体的には

[書籍に見る(問題としているとの)思考実験のスタートポイントの時刻が[2000年1月1日午前9時]となっている]

とのことの出典を挙げることとする。

直下、引用部を参照されたい(：既に先の出典紹介部にて出典となる箇所を挙げているために、「再掲」とのかたちとして連番形式で設けての出典紹介部はあらたに設けない)。

(直下、キップ・ゾーンの著作『ブラックホールと時空の歪み』(白揚社刊行の邦訳版)456ページから457ページ、出典(Source)紹介の部28-2にて先立って引用なししていた部よ



りの再度の引用をなすとして)

私は彼女の手を握ったまま ……(中略)…… ワームホールを通して眺めながら私は当然、彼女がちょうど十二時間後の二〇〇〇年一月一日午後九時頃に帰ったことに同意する。午後九時〇〇分にワームホールを覗いた私に見えるのは、カロリーだけではない。彼女の背後、わが家の前庭、そしてわが家も見ることができる。

…(中略)…

この旅は地球上で測れば、…(中略)…… 一〇年もかかる旅である。(これは典型的な「双子のパラドックス」だ。高速度で往復した双子の一人(カロリー)は時間の経過を一二時間と測るが、地球に残った双子のもう一方(私)は、旅が終わるまで一〇年も待たなくてはならない。)

…(中略)…

二〇一〇年一月一日が到来し、カロリーは旅から帰ってきて、前庭に着陸する。私は走り出て彼女を出迎え、予想どおり、彼女が一〇年ではなく一二時間しか年をとっていないのに気づく。彼女は宇宙船の中に座っており、マウスに手を差し入れている。だれかと手を繋いでいるようだ。私は彼女の背後に立って、マウスの中を覗き、彼女が手を握っている相手は一〇年若い私自身で、二〇〇〇年一月一日の私の居間に座っていることに気づく。ワームホールはタイムマシンになっていたのである。

(訳書よりの引用部はここまでとする)

以上引用部につき意欲がある向きであるのならば、「オンライン上検索エンジンに該当テキストを入力して検索結果表示ページを精査することで」その通りの記述がなされていること確認可能な原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 内に記載のほぼ対応しての箇所引用をも下になしておくこととする。

(直下、BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 内より  
(上にて引用なした訳書の記載に対応するところを)引用する —原著  
14. WORMHOLES AND TIME MACHINES の章、p.503 から p.504 の表記を引用する— として)

Carolee departs at 9:00 A.M. on January 1 2000, as measured by herself, by me, and by everybody else on Earth. Carolee zooms away from Earth at nearly the speed of light for 6 hours as measured by her own time; then she reverses course and zooms back, arriving on the front lawn 12 hours after her departure as measured by her own time. I hold hands with her and watch her through the wormhole throughout the trip, so obviously I agree while looking through the wormhole, that she has returned after just 12 hours, at 9:00 P.M. on 1 January 2000. Looking through the wormhole at 9:00 P.M., I can see not only Carolee; I can also see, behind her, our front lawn and our house.

[ . . . ]

Instead, if I had a good enough telescope pointed out the window, I would see Carolee's spaceship flying away from Earth on its outbound journey, a journey that measured on Earth, looking through the external universe, will require 10 years.

[This is the standard“twins paradox”; the high-speed“twin”who goes out and comes back (Carolee) measures a time lapse of only 12 hours, while the“twin”who stays behind on Earth (me) must wait 10 years for the trip to be completed.]

I then go about my daily routine of life. For day after day, month after month, year after year, I carry on with my life, waiting—until finally, on 1 January 2010, Carolee returns from her journey and lands on the front lawn. I go out to meet her, and find, as expected, that she has aged just 12 hours, not 10 years. She is sitting there in the spaceship, her hand thrust into the wormhole mouth, holding hands with somebody. I stand behind her, look into the mouth, and see that the person whose hand she holds is myself, 10 years younger, sitting in our living room on 1 January 2000. The wormhole has become a time machine.

(オンライン上より文言確認なせるようになっているとの原著よりの引用部はここまでとする)

以上の訳書および原著よりの引用部をもって

### 3.

キップ・ソーンは思考実験(通過可能なワームホールのタイムマシン化にまつわる思考実験)の起算点を

「2000年1月1日午前9時」

と設定している。その刻限からして911のことが想起されるところとなる。英語圏で2000年1月1日午前9時とくれば、January 1, 2000 9:00 a.m.などと表記されるところであろうが、世界協定時間(UTC)としての表記では2000/01/01/09:00との表記が充てられる。より略式化すれば、2000/1/1/9である。そこからして、かの911の事件のことが想起される(2001/9/11と2000/1/1/9は[数値列]として近いというわけである——殊に0をnull値[空値]として見るとそうなる——)。

さて、ここで「何時」「何日」「何年」とショートスパン(short-span)の単位に並び替えれば、9/1/1/2000との数値が導出されることになる。

といった並び替えがなせる刻限が[「双子の「パラドックス(1「911」年提唱の「双子の」パラドックス)にまつわる思考実験」にして、かつ、「空間上の始発点を郵便番号91101(2001年9月11日の略記そのもの)にてはじまる地区(パサデナ)に置いての思考実験」であるとのタイムマシン関連の思考実験の[時間軸上の始発点]として用いられている。

そこからして[できすぎの感]を醸し出している。

とのことの出典紹介とした。

#### [4. の部にまつわる出典として]

先立って1. から5. と分ちもしてのことらのうちの4. の部、すなわち、

## 4.

上の3. と密接にかかわるところの話をなす。世の中にては2000年をもって

[新たな千年紀(ニュー・ミレニアム)の始まり]

として祝賀するムードがあったわけだが、現実には2000年ではなく2001年がニュー・ミレニアムの始期であるとする理論 — というより暦の発展史に基づいての見立て — が存在している。

そうした見立てに言及している書籍を例として挙げる。

チャールズ・サイフェという科学ライター(アカデミズム寄りの数学の学位を持つある程度有名なサイエンスライター)の手になる書、

### **ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』** (原著2000年刊)

という書籍には次のような趣旨の記載がなされている。

「西暦で示される暦にあってはそれがゼロとの数値の存在を顧慮して構築されていたものではない。そういった事情より、暦のカウント方式に差分が生じる。そのため、20世紀のはじまる折は2000年ではなく2001年であるとの解釈がなされうる。2000年と2001年のそうあるべき位置づけは1年づつずれているとも述べられるのである」(続けてのすぐ後の段にてそこよりの原文引用をなすが、『異端の数ゼロ』邦訳「ハードカバー」版での以上のことへの言及ページはp.64—p.69となる)

以上のような見立てに準拠すれば、2000年と2001年の各年は[ミレニアム(新たな千年紀)のスタート・ポイント]としてその混同が問題となるところということになる。

そのため、キップ・ソーンの『ブラックホールと時空の歪み』 — [通過可能なワームホールとタイムマシンの関係の問題] を扱った海外では比較的知られた著作 — にての

[ワームホールのタイムマシン化挙動の開始ポイント]

の時期、ソーンとスペースシャトルになったソーンの妻がしばしの別離をなすことになった時期が

「2000年1月1日9時」

とされていることの意味がさらに重きをもってくることになる。

2000年1月1日9時が[「双子の」パラドックス(1「911」年提唱)が起こるスターティング・ポイント]と看做されていることになるわけだが(そこからしてご理解いただけていない向きはここまでの内容を読みなおしていただきたい。また、理解したうえでなお疑わしいとのことであれば厚く表記しての以降の出典紹介部を参照・内容検討いただきたい)、2000年1月1日というのが欧米人の多くがそれを担いでいたニュー・ミレニアムのスタートポイントではなく、その実、2001年1月1日がニュー・ミレニアムのスタートポイントであるとの見立てが背面にあること、そこから、

[2000年1月1日9時→2001年1月1日9時]

こそが切り替えの時であるとの見立てが背面にあるとの物言いもなせる(2001年1月1日9時は数値変換の問題からダイレクトに2001年の九月十一日に起こったかの事件を想起させることになる)。

とのことの出典を挙げることとする。

より端的には

[2000年をもって[新たな千年紀(ニュー・ミレニアム)]の始まりとして祝賀するムードがあった一方で2000年ではなく2001年がニュー・ミレニアムの始期であるとする見立て 一暦の発展史に基づいての見立て— が存在している]

とのことの出典を挙げることとする。

---

## 出典(Source)紹介の部 33



# SOURCE

## 33

本出典紹介部、**出典(Source)紹介の部 33**にあつては

[2000年をもって[新たな千年紀(ニュー・ミレニアム)]の始まりとして祝賀する

ムードがあった一方で2000年ではなく2001年がニュー・ミレニアムの始期であるとする見立て 一暦の発展史に基づいての見立て一 が存在している]

とのことにまつわるところとして **ZERO: The Biography of a Dangerous Idea** (邦題)『異端の数ゼロ』(原著2000年刊となり、邦訳版は早川書房より2003年刊の著作／著者をプリンストン大で数学の学位を取っている、科学に造詣深きサイエンス・ライターのチャールズ・サイフェとしていたとの著作)、そのハードカバー版よりの掻い摘まんでの引用をなしていく。

(直下、早川書房より出されている邦訳ハードカバー版『異端の数ゼロ』p.62よりの一部引用をなすとして)

---

この愚かで”子供じみた議論”——新しい世紀の最初の年は〇〇年か〇〇一年かという議論——は、時計じかけのように一〇〇年ごとに現れる。中世の修道士がゼロについて知ってさえいたら、私たちの暦はこんな混乱状態にはなかったろう

---

(「上にての」引用部はここまでとする)

(直下、早川書房より出されている邦訳ハードカバー版『異端の数ゼロ』p.63より的一部分引用をなすとして)

---

復活祭の日付を計算するのは、暦どうしの食い違いのおかげで、なかなか厄介な仕事だった。教会の総本山はローマで、一年三六五日(閏年あり)の太陽暦を用いていた。しかし、イエスはユダヤ人で、一年三五四日(閏月あり)のユダヤの太陰暦に支配されていた。二つの暦は互いにずれていき、ある祝日がいつであるかを予測するのは実にむずかしかった。復活祭は、まさにそのような移ろいゆく祝日だったので、数世代ごとに一人の修道士が選ばれて、むこう数百年にわたる復活祭の日付の計算を任された。

ディオニシウス・エクシグウスは、そうした修道士の一人だった。

---

(「上にての」引用部はここまでとする)

(直下、早川書房より出されている邦訳ハードカバー版『異端の数ゼロ』p.64より的一部分引用をなすとして)

---

キリストが生まれた年がアンノ・ドミニ一年、つまり、われらが主の最初の年であるべきだとディオニシウスは考えた。

…(中略)…ただし、問題が一つあった。いや、二つだ。…

(中略)…今日では、おおかたの学者は、キリストが生まれたのは紀元前四年のことだったと考えている。ディオニシウスは数年

はずれていた

---

(「上にての」引用部はここまでとする)

(直下、早川書房より出されている邦訳ハードカバー版『異端の数ゼロ』p.65 よりの一部引用をなすとして)

---

実際には、この誤りはそれほど大したものではなかった。暦の最初の年を選ぶとき、その後すべてのつじつまが合っていれば、どの年を選ぶかは本当は重要ではない。

…(中略)…

だが、ディオニシウスの暦には、もっと重大な問題があった。ゼロだ。ゼロ年がなかった

---

(「上にての」引用部はここまでとする)

(直下、早川書房より出されている邦訳ハードカバー版『異端の数ゼロ』p.66 よりの一部引用をなすとして)

---

ゼロ年がなかったことは二〇〇年後に問題を引き起こしはじめた。…(中略)…北イングランド出身の修道士、ビードが再び復活祭表を延長した。おそらく、そうして、ディオニシウスの仕事を知るようになったのだろう。『イギリス国教会史』を書くとき、新しい暦を使った。

…(中略)…

やはりゼロを知らなかったビードにとって、紀元一年に先立つ年は紀元前一年だった。ゼロ年などなかった。…(中略)…一見、このように数を割り振るのは、それほど悪くないように思われるかもしれない。だが、これでは問題が起こるのは確実だった。…(中略)…紀元前四年一月一日に生まれた子供を想像してみればいい

---

(「上にての」引用部はここまでとする)

(直下、早川書房より出されている邦訳ハードカバー版『異端の数ゼロ』p.67 よりの一部引用をなすとして)

---

紀元〇年があったら、当然ながら、この子供は、紀元〇年一月一日に四歳、紀元一年に五歳、紀元二年に六歳になったはずだ。これなら、この子供の年の計算は、2から-4を引くだけの話だ。しかし、実際には、そうではない。正しい答えを出すにはさら



に一年引かなくてはならない。したがって、イエスは一九九六年には二〇〇〇歳ではなかった。一九九九歳でしかなかった。これは混乱を招きやすい

(「上にての」引用部はここまでとする)

以上、ページ毎に数センテンス単位の引用に留めてそういう話があるとのことが[文献的事実]であることを示したのは

西暦の考案者として知られる6世紀活躍(544年頃死没とされる)のローマ教会内の識者ディオニシウス・エクシグウスが「ゼロ」を暦の計算にカウントしなかったこと、そのエラーが「西暦の普及者」として知られるベーダ(ビード)・ヴェネラビリスに継承され、紀元ゼロ年が「実際に存在していない」西暦のために1999年歳のイエスが2000歳を祝われている存在となっているといったことがある

とのことに関わるところとなる。



上は英文 Wikipedia「[Historia ecclesiastica gentis Anglorum](#)」にて著作権の縛りなく掲載されているとのセントペテルベルク在の Historia ecclesiastica gentis Anglorum (イングランド教会史)の写本の中身である。

上図にて写本の視覚的ありようを挙げての表記著作(『イングランド教会史』)は  
[西暦]

との概念を流布・固定化するうえで功あったとされる人物、8世紀活動のキリスト教教会知識人ベーダ・ヴェネラビリスが著したとのものでそれ自体が[西暦]概念の確立に重きをなして関わっているとされる著作である(：日本の高校生がお受験でそこまでは学習することを求められるような知識ではないだろうとは見るが、我々人類の過去の歴史——(全部が全部、シェイクスピア劇劇中人物の台詞に見るように、「男も女も[役者]、死と共に退場を強いられてきた舞台。」のようなものであっても、そう、自由度などなく、筋書き通りに生き、死んでいくとの者達らが紡いでいたというより紡が「されていた」といったものでも、とにかくもの人類の過去の歴史)——の時間軸記述方法それ自体が生まれる沿革に表記著作『イングランド教会史』は「重きをもって」関わっているとされ、については、和文ウィキペディア[西暦]項目に(現行のそこにての記載内容を掻い摘みながら一部引用するところとして)[西暦は6世紀のローマの神学者ディオニシウス・エクシグウスによって算出された。ディオニシウスは…(中略)…当時ローマで用いられていたディオクレティアヌス紀元(ローマ皇帝ディオクレティアヌスの即位を紀元とする)に替えて、イエス・キリストの受肉(生誕年)の翌年を元年とする新たな紀元を提案した。…(中略)…西暦1年から531年までは概念上の存在であり、実際の紀年法として使用されたことはない。その後も長らくこの紀年法は受け入れられず、731年にベネディクト会士ベーダ・ヴェネラビリスが『イングランド教会史(イギリス教会史)』をキリスト紀元で著してから徐々に普及し、10世紀頃によく一部の国で使われ始め、西欧で一般化したのは15世紀以降のことであるという](引用部はここまでとする)と記載されているようなことがある)。

といったキリスト教教会内の識者にて形作られてきた西暦表記には欠陥があるとされ、それが

**[2000年と2001年とのどちらを21世紀のはじめとするか]**

の論議につながっているとのことがここにて抜粋している著作たる『異端の数ゼロ』(原著2000年刊、邦訳版2003年刊)の内容となる。

(**出典(Source)紹介の部33**はここまでとする)

上出典紹介部にての訳書『異端の数ゼロ』ハードカバー版(のp.62)からの引用部でもってして

#### 4.

上の3.と密接にかかわるところの話をなす。世の中にては2000年をもって

[新たな千年紀(ニュー・ミレニアム)の始まり]

として祝賀するムードがあったわけだが、現実には2000年ではなく2001年がニュー・ミレニアムの始期であるとする理論——というより暦の発展史に基づいての

見立て— が存在している。

そうした見立てに言及している書籍を例として挙げる。

チャールズ・サイフェという科学ライター(アカデミズム寄りの数学の学位を持つある程度有名なサイエンスライター)の手になる書、

**ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』(原著 2000 年刊)**

という書籍には次のような趣旨の記載がなされている。

「西暦で示される暦にあってはそれがゼロとの数値の存在を顧慮して構築されていたものではない。そういった事情より、暦のカウント方式に差分が生じる。そのため、20 世紀のはじまる折は 2000 年ではなく 2001 年であるとの解釈がなされうる。2000 年と 2001 年のそうあるべき位置づけは 1 年づつずれているとも述べられるのである」(続けてのすぐ後の段にてそこよりの原文引用をなすが、『異端の数ゼロ』邦訳「ハードカバー」版での以上のことへの言及ページは p.64—p.69 となる)

以上のような見立てに準拠すれば、2000 年と 2001 年の各年は[ミレニアム(新たな千年紀)のスタート・ポイント]としてその混同が問題となるところということになる。

そのため、キップ・ソーンの『ブラックホールと時空の歪み』—[通過可能なワームホールとタイムマシンの関係の問題]を扱った海外では比較的知られた著作—にての

[ワームホールのタイムマシン化挙動の開始ポイント]

の時期、ソーンとスペースシャトルになったソーンの妻がしばしの別離をなすことになった時期が

「2000 年 1 月 1 日 9 時」

とされていることの意味がさらに重きをもってくることになる。

2000 年 1 月 1 日 9 時が[「双子の」パラドックス(1「911」年提唱)が起こるスターティング・ポイント]と看做されていることになるわけだが(そこからしてご理解いただけていない向きはここまでの内容を読みなおしていただきたい。また、理解したうえでなお疑わしいとのことであれば厚く表記しての以降の出典紹介部を参照・内容検討いただきたい)、2000 年 1 月 1 日というのが欧米人の多くがそれを担いでいたニュー・ミレニアムのスタートポイントではなく、その実、2001 年 1 月 1 日がニュー・ミレニアムのスタートポイントであるとの見立てが背面にあること、そこから、

[2000 年 1 月 1 日 9 時→2001 年 1 月 1 日 9 時]

こそが思考実験における双子のパラドックスの起算点であるとの意味合いにての見立てもなせるところとなっている(2001 年 1 月 1 日 9 時は数値変換の問題からダイレクトに 2001 年の九月十一日に起こったかの事件を想起させることになる)。

とのことの典拠とした( :色を付けての部位が先立っての 1. から 3. で「既に」典拠を挙げたことを除いての直上の部にてはじめて典拠たるところ(4. の部の典拠たるところ)を挙げたところとなる)。

続けて、5. の部、すなわち、

## 5.

上の 4. にて言及したチャールズ・サイフェ著、

### **ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』 (原著 2000 年刊)**

との著作は(表記のように)2000年と2001年の区別が曖昧となっていることを論じての著作であると同時に

[刊行年にて先行するキップ・ソーン著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあつての(上にて再現図を挙げた)図と同様の「通過可能なワームホールにまつわる図」を同じくものイラストレーター(Matthew Zimetという人物か)の手になる極めて独特なるテイストのイラストとして挙げもしているとの著作]

にして、また、

[ブラックホールという語を911の事件が起こる「前」から(往時より使用局面が限られているとの特殊な言葉であった)「グラウンド・ゼロ」との語と結びつけている著作](キップ・ソーンのここにて問題視している[通過可能なワームホール]にまつわる思考実験のことを解説している著作の表題が『ブラックホールと時空の歪み』となっているとのそのことを想起させるようにブラックホールをグラウンド・ゼロとの言葉——元来にして使用局面が限られた特殊な言葉——と結びつけている著作)

ともなる(:これまた冗談のように聞こえもしようことだが、[文献的事実]の問題としてそういうことがあることをこれより示していく)。

そういうことまでもが([2000年と2001年の別の曖昧さについて扱っているとの著作]に伴うところとして)あり、それでもってして、上の 3. にて言及した、

[2000年1月1日9時と2001年1月1日9時の区別の曖昧さ]

の意味合いがよりもって重くもなるとのことがある。

とのことの出典を挙げることとする。



# SOURCE

## 33-2

ここ出典(Source)紹介の部 33-2 には **ZERO: The Biography of a Dangerous Idea** (邦題)『異端の数ゼロ』(原著 2000 年刊)という著作がキップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』といかように結びつくのか、また、グラウンド・ゼロとブラックホールとの言葉をどのようにあわせて用いているのかの解説をなす。

まずもってチャールズ・サイフェ著 **ZERO: The Biography of a Dangerous Idea** (邦題)『異端の数ゼロ』(原著 2000 年刊)が

[刊行年にて先行するキップ・ソーン著作 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあっての(上にて再現図を挙げての)図と同様の[通過可能なワームホールにまつわる図]を同じくものイラストレーター( **Matthew Zimet** という人物か)の手になる「極めて独特なるテイストの」イラストとして挙げもしているとの著作]

となっていることについてだが、

(直に書籍を手にとってそちら該当ページを確認することで理解いただけようところのページ指定として)

・キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインの残したとんでもない遺産』(白揚社/原著刊行時期より遅れること3年しての1997年に刊行された邦訳版)にあっての p.453 及び p.456 にて呈示の図ら

・チャールズ・サイフェ『異端の数ゼロ 数学・物理学が恐れるもっとも危険な概念』ハードカバー版(早川書房刊行/当方が参照しているのは2003年初版の版)にあっての p.267(付録 E「自家製ワームホールタイムマシンをつくらう」と題されての

をご覧ください。ことで易々と確認がなせるようになっていてと申し述べておく。

その点、[極めて似たテイストのイラスト]が[極めて似たような構図;人物描写込みにして極めて似たような構図]で同じくものテーマ——通過可能なワームホールとのテーマ——に関わるところとして掲載されているとのことになってもいる(：同一の漫画家に由来する独特の画風のイラストがきわめて同じような構図で具現化しているとの有り様と述べることもできる。につき、キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』に関する手前の方の調査では[ Matthew Zimet ]とのイラストレーターの名が同著の製作者に名を挙げられていることを把握しており、チャールズ・サイフェの問題となる著作『異端の数ゼロ』に対する調査でも同名のイラストレーターの名が同著の製作関係者として名を挙げられていることを把握している。従って略称表記か否かの違いはあるが「ほぼ確実に」両著にて挿絵を提供していたイラストレーターは同一人物かと思われる)。

次いで、チャールズ・サイフェ著 ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』(原著 2000 年刊)が

[ブラックホールという語を 911 の事件が起こる「前」から(往時より使用局面が限られているとの特殊な言葉であった)[グラウンド・ゼロ]との語と結びつけている著作]

となっているとのことについては以下の引用部を参照されたい。

(直下、邦訳版『異端の数ゼロ』(早川書房)ハードカバー版にての [第 8 章 グラウンド・ゼロのゼロ時——空間と時間の端にあるゼロ] の章、240 ページより原文引用をなすとして)

---

ゼロは、物理法則を揺るがすほど強力である。この世界を記述する方程式が意味をなさなくなるのは、ビッグバンのゼロ時であり、ブラックホールのグラウンド・ゼロだ。しかし、ゼロは無視できない。ゼロは私たちの存在の秘密を握っているばかりでなく、宇宙の終りの原因にもなるのだ

---

(引用部はここまでとする —※—)

(※尚、上にての引用部に対する原著 ZERO: The Biography of a Dangerous Idea にての表記は最終章[ **Chapter Infinity: Zero's Final Victory: End Time** ]に先立つ[ **Chapter 8: Zero Hour at Ground Zero: Zero at the Edge of Space and Time** ]に認められる、“Zero is so powerful because it unhinges the laws of physics. It is at the zero hour of the big bang and the ground zero of the black hole that the mathematical equations that describe our world stop making sense. However, zero cannot be ignored. Not only does zero hold the secret to our existence, it will also be responsible for the end of the universe.”とあいなっている)



上のように書籍『異端の数ゼロ』では(ここにて専らに問題視しているキップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』がブラックホール絡みのものである中で)[グラウンド・ゼロ]との言葉が[ブラックホール]と結びつけられている。

さらに加えて、

「[グラウンド・ゼロ]とは911の事件の後、ワールド・トレード・センターの跡地を指すに至った言葉でもあるが、元来、同語(グラウンド・ゼロ)は[広島・長崎の原爆投下地]を指すべくも生み出された「特殊な」言葉であった——[普通名詞]的な語ではなくむしろ[固有名詞]的な語であった——」

このことについては下を参照されたい。

(直下、英文 Wikipedia [ Ground Zero ] 項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

---

The origins of the term ground zero began with the Manhattan Project and the bombing of Japan. The Strategic Bombing Survey of the atomic attacks, released in June 1946, used the term liberally, defining it as: "For convenience, the term 'ground zero' will be used to designate the point on the ground directly beneath the point of detonation, or 'air zero'."

[ . . . ]

The Pentagon, the headquarters of the U.S. Department of Defense in Arlington, Virginia, was thought of as the most likely target of a nuclear missile strike during the Cold War. The open space in the center is informally known as ground zero, and a snack bar located at the center of this plaza was nicknamed "Cafe Ground Zero".

(訳として)

「グラウンド・ゼロとの言葉の[起源]はマンハッタン計画および日本に対する原爆投下にある。1946年6月に出された核攻撃の戦略的爆撃調査書では「爆発ポイント真下の地番、すなわち、エア・ゼロの場のことを示すうえで便宜上、グラウンド・ゼロとの言葉が用に適している」との言い方をなしながら同語をふんだんに用いていた。

…(中略)…

ヴァージニアはアーリントン(ワシントン郊外)にあるペンタゴンは冷戦下、最も[核]の標的になりやすきところであると考えられていた。その中央にあつての広場は非公式には(核兵器の標的になりやすいとのこと、そして、原爆投下地がグラウンド・ゼロと呼称されるに至っていた経緯から)[グラウンド・ゼロ]と呼ばれており、広場にある軽食堂は Cafe Ground Zero [カフェ・グラウンド・ゼロ]とのニックネームが与えられていた」

---

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※— )

(被爆国日本のウィキペディア [グラウンド・ゼロ] 項目では「現況」(後に改訂される可能性もある)、原文引用するところとして “ 従来は広島と長崎への原爆投下爆心地や、ネバダ砂漠での世界初の核兵器実験

場跡地、また核保有国で行われた地上核実験での爆心地を「グラウンド・ゼロ」と呼ぶのが一般的であった”(引用部終端)と記載されている。グラウンド・ゼロが[原爆投下地に対する一般名詞]となっているような表記のされようだが、グラウンド・ゼロとの言葉、その使用局面は本来的には[固有名詞的なるもの]となっていると解されるようになっている)

以上のようなこと、[グラウンド・ゼロ]との語が相当特殊な言葉であったことに鑑みて見ても、後、911の跡地がグラウンド・ゼロと呼称されることになったとのこととの絡みで

[キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』(の911いまつわる予見的側面)と比較顧慮した場合のチャールズ・サイフェ著作『異端の数ゼロ』の意図性]

が増すことになる。

(出典(Source)紹介の部 33-2 はここまでとする)

以上をもってして5.の部、すなわち、

## 5.

上の4.にて言及したチャールズ・サイフェ著、

**ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』**  
(原著2000年刊)

との著作は(表記のように)2000年と2001年の区別が曖昧となっていることを論じての著作であると同時に

[刊行年にて先行するキップ・ソーン著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあつての(上にて再現図を挙げた)図と同様の[通過可能なワームホールにまつわる図]を同じくものイラストレーター(Matthew Zimetという人物か)の手になる極めて独特なるテイストのイラストとして挙げもしているとの著作]

にして、また、

[ブラックホールという語を911の事件が起こる「前」から(往時より使用局面が限られているとの特殊な言葉であった)[グラウンド・ゼロ]との語と結びつけている著作] (キップ・ソーンのここにて問題視している[通過可能なワームホール]にまつわる思考実験のことを解説している著作の表題が『ブラックホールと時空の歪み』となっているとのそのことを想起させるようにブラックホールをグラウンド・ゼロとの言葉 ——元来にして使用局面

が限られた特殊な言葉——と結びつけている著作)

ともなる(：これまた冗談のように聞こえもしようことだが、[文献的事実]の問題としてそういうことがあることをこれより示していく)。

そういうことまでもが([2000年と2001年の別の曖昧さについて扱っているとの著作]に伴うところとして)あり、それでもってして、上の3.にて言及した、

[2000年1月1日9時と2001年1月1日9時の区別の曖昧さ]

の意味合いがよりもって重くもなるとのことがある。

との部の典拠紹介とした。

ここまでにあって1.から5.と分かつかたちで直前頁までにあって

[物理学者キップ・ソーンの手になる科学書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』には先の911の事件の予見文物としての側面が伴っている]

とのことであっての典拠たるところを細かくも示してきた。

それら今までにあって典拠たるところとして示してきたこと(オンライン上からでも後追い確認容易なる原著原文引用、そして、流通訳書より後追い確認できるとの訳書よりの原文引用に重きを置いて示してきたこと)がいかようなことなのかのまとめでの表記を以下、なすこととする。

(以下、こここれに至るまでに1.から5.と振っていかようなことを示してきたかについて振り返りをなすとして)

---

[思考実験にみとめられる設定として物理学者キップ・ソーンは夫妻で[郵便番号91101](二〇「〇一」年「九」月「一」日の日付略記ともなる数字列)ではじまる地区(カリフォルニア州パサデナ)にあって[「双子の」パラドックスに依拠したワームホール型タイムマシン生成挙動]を開始した(との設定がソーン著書『ブラックホールと時空の歪み』に現れている)](表記のことは先に[出典(Source)紹介の部28-2]と振って指し示したことおよび[出典(Source)紹介の部31](および[同31-2])と振って指し示したことによって[文献的事実][記録的事実]であることの典拠を示しているところとなる)

[ソーン夫妻が[郵便番号91101ではじまる一画]を空間軸上のスタートポイントにしてなしはじめた挙動と結びつく[双子のパラドックス]ではあるが、その提唱年は1「911」年であるとされている。そこには[「91101」(2001年9月11日を指す数値列)と結びつく始発点]と[1911年提唱の双子のパラドックス]が接合性が見てとれる](表記のことは先に[出典(Source)紹介の部32]と振って指し示したことによって[記録的事実]であることの典拠を示しているところとなる)

[キップ・ソーンは自著『ブラックホールと時空の歪み』にて[双子のパラドックスに相通ずる「時間の相対性」概念]を説明するための思考実験として——[91101との郵便番号を振られてのパサデナにはじまるワームホールタイム型タイムマシン生成挙動]のセクションに入る前に——[パサデナを走行する自動車の上で爆竹が順次爆発させ

るとの挙動]を引き合いに出している。[パサデナ](郵便番号 91101 が最も若い番号として割り振られている一画)、[双子のパラドックス(1911 年提唱)]、[順次爆発]との観点で[二〇〇一年九月一日に起こったツインタワー崩落事件](時間差を呈して崩落した双子の塔としてのツインタワー以外に計七棟のビル群がワールド・トレード・センターでは順次、爆発するように瓦解していったとの 2001 年 9 月 11 日の事件)のことが想起される](表記のことは先に[出典\(Source\)紹介の部 32-2](#)と振って指し示したことによって[文献的事実][記録的事実]であることの典拠を示しているところとなる)

[パサデナ発の(ソーン『ブラックホールと時空の歪み』に認められる)双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成挙動としての思考実験であるが、その時間軸上の開始ポイントは 2000 年 1 月 1 日午前 9 時として設定付けされているとのことがある(1994 年原著初出のソーン著作の中にはきとそう見て取れる。先の[出典\(Source\)紹介の部 28-2](#)を参照のこと)。そちら時間軸上のスタートポイントを時間の単位として若い順番、時刻→日付→年次との順番 —— short span を基準にしての順番—— で配置しなおすとの時刻表記方法としては一般的で「はない」方法で並べると「9」「1」「1」「2000」とのかたちとあいなる([出典\(Source\)紹介の部 31](#))。それによってかの 911 の事件の表象数値との差は 1 桁しかないとのかたちとなる(それだけ述べれば、牽強付会(こじつけがましき論法)と看做されかねないだろうが、ソーン著書の兼ね合いでは[空間軸上にてのスタートポイントたるパサデナの始端郵便番号問題][双子のパラドックスにまつわる意味的問題]が、と同時に、[全く同じところ]で具現化している)](表記のことは先に[出典\(Source\)紹介の部 28-2](#)と振って指し示した部の再引用によって[文献的事実]であることの典拠を示しているところとなる)

(※上のことまでも 2001 年 9 月 11 日「前の」1994 年刊行の書籍に見るやりようなのであるから、それこそ[タイムマシン]ではないが、[時を逆行するようなやりよう]との観点で問題になる ——※意味合いを問えば、まずもって、[1911 年と双子が結びつくこと]が [双子の塔が崩された 911 の事件]と結びつくように見えるとのことを奇縁で済まされるのか、とのことがある。加えて、[1911 年と双子が結びつくこと]がまさしくも意味をなしてくるとの挙が [2001 年 9 月 11 日]「そのもの」を指す数値列を [地区の始発点表象数値(郵便番号 91101)] とする一区域と [空間軸上の始点] を介して結びついているとのことが奇縁で済まされるのか、とのことがある。さらに加えて、そこに [時間のずれ] が [順次爆破] との式で関わっており、また、そうした [時間のずれ] がタイムマシンの材にされていることが奇縁で済まされるのか、との問題がある(911 の事件では双子のビルが連続で時間的ずれをきたしながらも爆発倒壊している)。「さらに」「さらに」加えて、[何々時間・何々日・何々年をショートスパン順に入れ替えて並べれば 200「1」年 911 と 200「0」年 911 との式で[一桁しか違わない数値列]が同じくもの挙にての[時間軸上の始発点]と結びついているとのことが奇縁で済まされるのかとのことが問題にもなる (以上の問題となることらにつき、正気の人間ならば、第一段階の[双子のパラドックスと 911 が結びつくこと]からして[出来すぎである]との予断をもって見ることかとは思いますが、そこを敢えてもの問いをここでは発している) —— )。

[(繰り返すが)ソーン著書『ブラックホールと時空の歪み』にて取り上げられる[双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成]の時間軸上の開始ポイントは 2000 年 1 月 1 日午前 9 時であると設定されているわけだが、そこに見る 2000 年

については[2000 年紀はじまり](ミレニアム開始時期)として[2001 年]と混同されるとの理解が存するとの年度である。そこより 1994 年初出著作の中で持ち出されている 2000 年 1 月 1 日午前 9 時にあって 2001 年 1 月 1 日午前 9 時との接続性が感じられ、となれば、かの 911 の日付との数値的連続性をよりもって感じられるとことがある] (表記のことは先に [出典\(Source\) 紹介の部 33](#) と振って指し示したことによって[文献的事実]であることの典拠を示しているところとなる)

[ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』に遅れて世に出た科学書、ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』(原著 2000 年刊となり、邦訳版は早川書房より 2003 年刊)にあっては(上にて表記のところの)[2000 年と 2001 年のニュー・ミレニアム始期としての曖昧さ]にまつわる言及がなされている。そうした 2000 年と 2001 年の曖昧さにまつわる目立っての解説を含む著作『異端の数ゼロ』からして[キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』にての Pasadena を始発点とする通過可能なワームホール構築にまつわる思考実験]と同様に[通過可能なワームホール]にまつわる図が巻末付録部に掲載されてもおり、その図はソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』にイラストを提供した向きと同一人物(マシュー・ジメットという人物)の手になると思しき[独特なるテイストのもの]となっている。また、同じくもの著作『異端の数ゼロ』にあっては(ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』が主要テーマと扱っている)[ブラックホール]が[グラウンド・ゼロ]との言葉と結びつけられている。につき、グラウンド・ゼロが元来からして使用局面が限られた相当特殊な言葉であったことに鑑み、ブラックホールのことを主軸にしての科学的説明がなされているソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』にあっての問題性、[2000 年 1 月 1 日午前 9 時と 2001 年 1 月 1 日午前 9 時の接続性]との絡みでの 911 の事件 — グラウンド・ゼロとの言葉を広くも世に広める契機になったとの事件 — と接合するようにとれるようになっていくことの問題性が一層強くも想起されるようなかたちとなっている] (表記のことは先に [出典\(Source\) 紹介の部 33-2](#) と振って指し示したことによって[文献的事実]であることの典拠を示しているところとなる)

---

以上の観点よりソーン著作(『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインの残したとんでもない遺産』)をもってして

#### [後の日の 911 の事件の発生にまつわる先覚的言及文物]

であると — どうしてそのような奇異奇怪なものがこの世界に存在・現出しているのか、その[機序]の問題はさておきも置いておき — 名指して明言するところだが(ここに至るまでの文章解説部と図を合わせてよくご検討いただきたい)、同じくも[911 の先覚的言及文物]の一として挙げられるのが映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』となる。

同映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』(額面上は荒唐無稽映画にすぎないとの作品)にあっては

#### [ツインタワーにての片方が倒壊していき、片方の上階に穴が開くとのワンカット描写]

がなされている(しかもそこにては崩落するツインタワーへの飛行物体接近もが描かれている)との先覚「的」描写にまつわり、

#### [「ツインタワーが」「次元の融合によって」「恐竜人の首府と同一化する」]

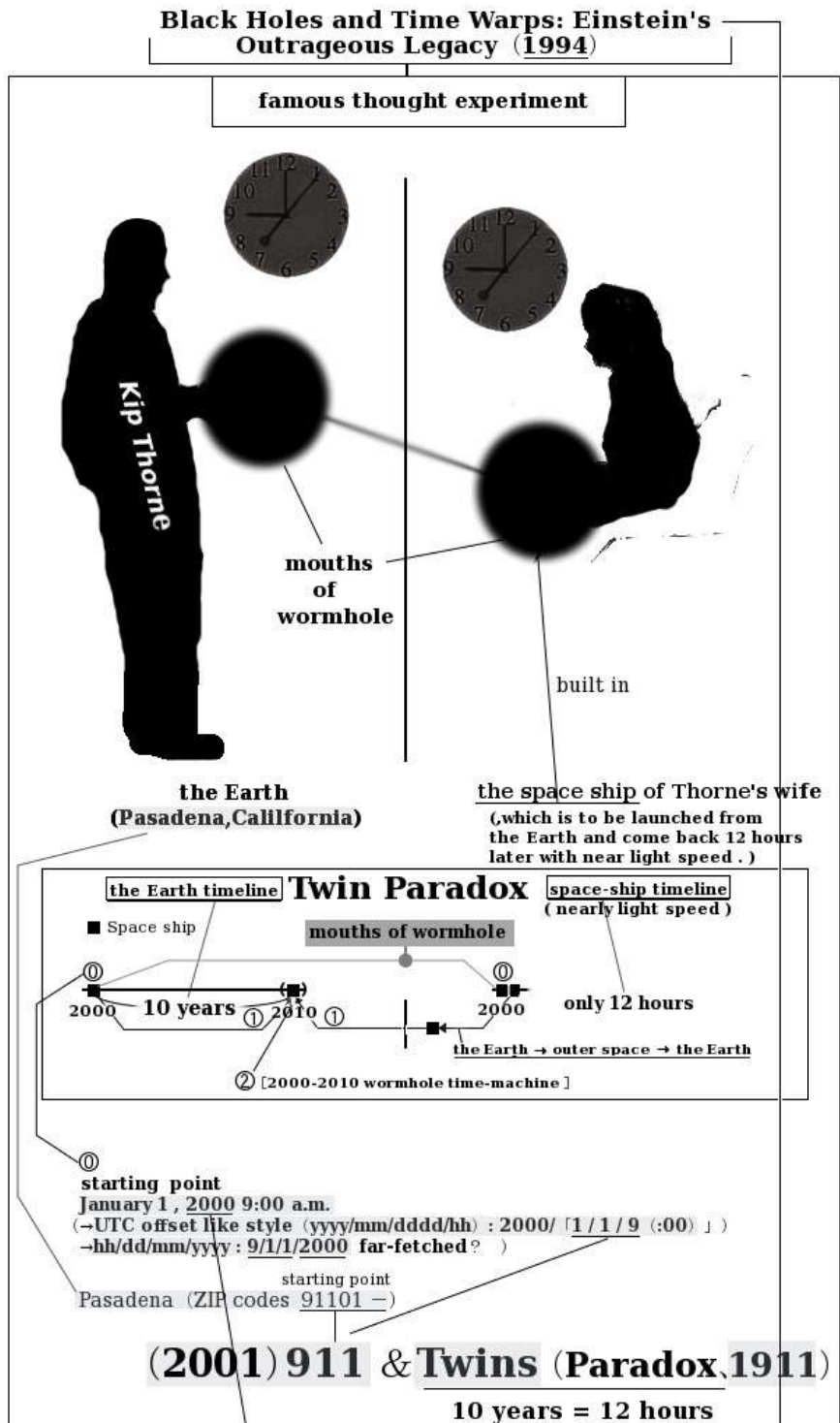
との筋立てが表出しており([出典\(Source\) 紹介の部 27](#)と YouTube など流通の動画を参照されたい)、そこより、



[(多世界解釈における)他世界との扉たりうるとの話が伴うワームホール]

のことが想起されえ、それがゆえに、「911 の先覚的言及と共にある」キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』と「911 の先覚的描写と共にある」映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』の接続性がワームホール絡みでも観念されるようになってきていると申し述べるのである(話柄の奇矯さから『冗談であろう?』と思うかもしれないが、筆者に「この局面で」虚偽としての冗談を言うなぞとこのことをする、そのようなことをなす動機は一ミリもなく、現実に事実関係より指し示せるところを淡々と指摘しているにすぎない)。

(ここまでの指し示し事項の中身を図示すれば、下のようなかたちとなる)





starting point  
 January 1, 2000 9:00 a.m.  
 (→UTC offset like style (yyyy/mm/dddd/hh) : 2000/「1/1/9 (:00)」)  
 (→hh/dd/mm/yyyy : 9/1/2000 far-fetched? )

starting point  
 Pasadena (ZIP codes 91101 -)

**(2001) 911 & Twins (Paradox, 1911)**

10 years = 12 hours

[Wormhole→Timemachine] thought experiment

Charles Seife's

**Zero: The Biography of a Dangerous Idea (2000)**

- (containing a similar illustration of the same thought experimentation as Thorne's one)
- (asserting that the watershed between year 2000 and year 2001 is vague)

remind

(making a prophetic comment :  
 " Zero is so powerful because it unhinges the laws of physics. It is at the zero hour of the big bang and the ground zero of the black hole that the mathematical equations that describe our world stop making sense. However, zero cannot be ignored. Not only does zero hold the secret to our existence, it will also be responsible for the end of the universe.")

**One scene of SUPER MARIO BROS. (1993 film)**

※一見にして子供向けの荒唐無稽映画としての体裁をとる『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』では隕石によって分かれた[人類の世界]と[恐竜人の世界]の融合が企図される。その融合と関わるところで頭上に風穴が開き、崩落を見るツインタワーが描写されるのだが、[911の予見的描写]に通ずるそうしたところでも異世界・異空間をつなげるものとしてのワームホールやブラックホールの特性を思い起こさせられるとことがある(：ワームホールやブラックホールの異世界間をつなぐ性質については本稿にての[出典(Source)]紹介の部20)などを参照されたい)



Dinosauroids' world  
 fusion  
 this world

キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』(原著1994年刊行)に見る、[同一の思考実験] ( [通過可能なワームホールのタイムマシン化] についての思考実験)

は次の側面らより911の事件と「予言的に」結びつくと言われるようになっていく。

- a. 問題となる思考実験は91101を郵便番号上のスタート・ポイントとする地域で始められるのだが、[91101]とは米国表記での2001年9月11日を示すとの数値ともなる。
- b. 実験それ自体が「1911」年に提唱された[「双子の」パラドックス]にまつわるものである(：2001年9月11日の事件では双子の塔ことツインタワーが崩落させられている)。
- c. 実験の(地域としてではなく)日付けとしてのスタート・ポイントは何故なのか(1994年刊行著作であるのに)2000年1月1日9時頃に設定されている。それ自体、時間単位を若い単位から読み替えれば911を意識させる実験開始時刻だが、加えて、2000年と2001年については21世紀のはじまりのポイントをどこに置くかとの意味合いで暦表記のズレがあると指摘され、混同が問題視されている年度らであるとのことがある。
- d. 2000年と2001年の混同の問題を論じ、また、キップ・ソーンのここにて問題としている思考実験と同じくもの実験をキップ・ソーンのまさしく問題となる著作『ブラックホールと時空の歪み』と同じイラストレーターを起用して挙げているとの筋合いの著作、『異端の数ゼロ』(原著2000年刊)では「ブラックホールとグラウンド・ゼロとの言葉が結びつけられている」とのことが見受けられる(先述のところとしてグラウンド・ゼロというのは相当使用局面が限られている言葉となっており、その主たる使用対象は核兵器投下地および冷戦下の核攻撃対象推測地としてのペンタゴンの広場であった。そうしたグラウンド・ゼロがワールド・トレード・センター跡地をも指すようになった2001年の事件の前に2000年の著作『異端の数ゼロ』はブラックホールをグラウンド・ゼロと結びつけて使用している)。

e. キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』では問題となる思考実験（通過可能なワームホールにまつわる思考実験）と同文に双子のパラドックスに関する説明をなすための思考実験が展開されているのだが、その実験からして「91101」との郵便地番からはじまる地域（カリフォルニア州パサデナ）で「頭上に爆竹をつけた車のうえでの[爆竹の時間的差分をきたすスパーク]を観察する」とのものである。爆竹爆発の順次的観察との観点で述べれば、ツインタワーの崩落プロセス、双子の塔ことツインタワーが差分をきたす外的衝撃によって倒壊していったとのプロセスのことが想起される。

以上、a. からe. のことが僅かひとつの思考実験にかかわるところであわせて観察される（オンライン上より確認できるとの原著英文テキストの抜粋にても示せるし本稿ではそうしているとの「文献的事実」の問題としてあわせて観察される）からこそ、偶然性が棄却されると述べるのである——そして「性質が悪いこと」に「キップ・ソーン」のブラックホール思考実験と関わるところにて何故なのか、911の事件の予告といったものが頻出しているとのことが観察されるとのことも「この馬鹿げた世界には」ある。

関連する他事象からも顧慮しての偶然性排除にまつわる確率論の話も本稿の末尾にてなす所存である。

「確たる文献的事実の問題」として同じくものことが指摘可能であること、問題となる著作の執筆者たるキップ・ソーン自身が（その後の経過を見て）当然に気付いていようとの性質のものであるのにも関わらず、どういうわけか、同じくものこと、キップ・ソーン著作の予見性にまつわる指摘をなす人間は本稿筆者以外に全世界に一人としていない（少なくともオンライン上の言論流布状況を検索エンジン導出結果から録画などしながら確認しているところでは、である）。それにつき、これより同じくものことを述べる者が出てくる可能性もあるか、と見るが（ただし、その際に情報発信日付けの日付け偽装をなしていたらば、国内外を問わず相応の人間ともなろう）、現況にての主張者の僅少さは主張されていることの不適切性を証明するものではないの言うまでも無い。

さらに述べれば、A. からF. と振りつつも長々と分割しての話をなしているとの一連の流れ（現行、F. と振っての流れの中にての話をなしている）の中にあつて、である。まずもってA. からC. と振っての流れの中で

「「奇怪な先覚性」（キップ・ソーンが80年代後半よりそれを構築しうると述べだしたとの「通過可能なワームホール」の安定化物質たるエキゾチック物質の特性となる負のエネルギーの発見に繋がったとの1948年実施実験のことにまつわる予言「的」言及を含んでの先覚性）とワンセットとなった「加速器」と「爬虫類の異種族の来寇・来訪」の結びつき」

について指摘し（カシミール効果測定実験にまつわる先覚的言及と結びつく1930年代の文物が「繋がられた惑星間での爬虫類の種族による人類種族の皆殺し」を描いていたりもすることなどを指摘し）、次いで、D. からE. の流れの中で

「「爬虫類の異種族の次元間侵略」と「911にまつわる先覚的言及との特質」の繋がり合い」  
「「双子のパラドックス」と「「亀」を助けた男が「竜」宮に誘（いざな）われるとの浦島伝承」の密接なる記号論的繋がり合い」

に目を投じることだに「行き過ぎではない」と問題提起してきたとのその問題提起の論拠をも多く呈示したことになると判じている。

すなわち、以下のことにあつての第一の点を強調することだにも「行き過ぎではない」との論拠を呈示したことになると判じている（：補うことになる証示の材はこれより挙げていくつもりなのだが、とにかくも、「行き過ぎではない」とのレベルにての呈示はなしたか、と判じている——ちなみに以下、振り返りもする第一および第二の点にあつての第二の点にあつてはどのようにしてそういうことが述べられるのかの論拠を（第一の点に先駆けて）先行する段にて入念に呈示している（そちら

委細は出典(Source)紹介の部 30 から出典(Source)紹介の部 30-2(2)の部を包摂する箇所を参照されたい)――。

(荒唐無稽映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』に浦島伝承との関連性をみとめることとて行き過ぎにならぬところの理由として)

第一。

物理学者キップ・ソーンの[通過可能なワームホール]にまつわる解説のなしようを取り上げる中で内容を問題視し、そこよりの原文引用をなしてきたところの書籍が **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(亀の移動時間にそれを当てはめると浦島伝承にそれが接合するとの[双子のパラドックス]を[ワームホール型タイムマシン]に応用しての論理を展開していること、本稿にてのつい先立っての段で細かくも解説したとの科学書)という書籍となるわけだが、同著はそれ自体からして

[911の発生を明瞭に予見しているが如くもの「露骨な」予言的作品]

となりもしており、その絡みで映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』と不快かつ奇怪に結びついているとの側面が ―認めがたいこととは思うが― 確としてある(については本稿のさらに続く段で原著および訳書よりの原文引用を必要十二分と解されるだけなしながらもの細かき解説をなす)。

であるとすると、そう、表記のソーン科学書 ―ここ本段ではいまだ解説未了ながらも911の発生に対する予言的作品としてのソーン科学書― と映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』の間に不快な関係性が成立しているとすると、

ソーン科学書 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』 ⇔ [双子のパラドックス] ⇔ [浦島伝承]

との関係性のパス、

ソーン科学書 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』 ⇔ (911の予見作品としての側面) ⇔ 『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』

とのパスが「別個独立に」成立していることになる。

換言すれば、である。

[浦島伝承] ⇔ ([双子のパラドックス]とワームホールにまつわる思考実験を介しての近接性) ⇔ 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』 ⇔ (911の事件にまつわる先覚的言及(後述)／ワームホール関連トピック) ⇔ 『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』(「亀」救出ならぬ「亀」軍団退治のゲーム作品を原作とする恐「竜」人の次元接合のための暗躍を描く映画作品)

との関係性のパスが

[別個独立に成立しているところの関係性の合算]

から導出できてしまうことになる(であるから、映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』と浦島伝承の間にてのたかだかも「亀」と「竜」(竜宮)との爬虫類がらみのアナロジー(類似性)]にまつわる側面についてすら着目すべきとの話が馬鹿げたものでなくなるとのことがある)。

(荒唐無稽映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』に浦島伝承との関連性をみとめることとて行き過ぎにならぬところの理由として)

第二。

特殊相対性理論から導き出せる帰結に相通すること(双子のパラドックス)に言及しているような色彩を伴っているとの簡明化して解説した側面を有している以外に、浦島伝承それ自体からして奇怪な側面が付き纏っている。

伝承などの文化伝播が相互に観念しづらい領域、  
[中世期アイルランドにて成立したとされる伝承]  
と

[上代日本(奈良期日本)に成立したとされる浦島伝承]  
がピタリとした数値的一致性を呈しながらほぼ同じ内容を有しているとのこと  
があるのである。

そのような[奇怪]なること ——(本稿にての先立っての段で炙り出しているように70年代にあって[現行加速器に対往時加速器で200倍近いものを登場させ、そのCERN加速器を想起させる機関のビーム照射挙動でブラックホール生成がなされるように描いている作品]が存在していることも奇怪なことなのだが、それに類するところと見えもする[奇怪]なるところ) —— にまつわる話であるから、そちら浦島伝承と[予言「的」作品](ツインタワーの崩壊を予見するような描写を含む作品)としての『スーパーマリオ魔界帝国の女神』という現代映画作品との間のアナロジー(類似性)を問題視することは[子供だましの文物より引き出しての子供だましの話]で済まされるようなことではない(とのことがある)。

以上、指し示し事項の内容を振り返ったうえで申し述べるが、先の段(出典(Source)紹介の部20の段)になした引用を下に繰り返しなすところとして、米国のメディア露出型カリスマ物理学者の著作にて言及されているところとして次のような科学予測 —— 先進文明のありうべきやりよう  
にまつわる科学予測 —— が呈示されている。

(直下、Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos 邦訳版『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』384 ページから385 ページよりの「再度の」原文引用をなすとして)

カー・リングの中心にワームホールがあれば、われわれの宇宙をまったく別の宇宙と、あるいは、同じ宇宙のなかにある別の地点と、結びつけてくれるかもしれない。  
…(中略)…

現在、おおかたの物理学者は、ブラックホールを生きて通り抜けることはできないと考えている。しかし、ブラックホールの物理的解釈はまだ未熟な段階で、この推測は検証されていない。ここでの議論のために、ブラックホールを通り抜けることができ、とくに回転するカー・ブラックホールでそれが可能だと考えてよう。すると、どの先進文明も、ブラックホールの中を探索しようと真剣に考えるだろう。

…(中略)…

探査機は、事象の地平線の近傍にどれだけ放射が存在するかを正確に決定し、そうした莫大なエネルギーのさなかでワームホールが安定していられるかどうかを明らかにしてくれるだろう

(引用部はここまでとしておく —※— )

(※以上をもってして日本放送出版協会(現NHK出版)より刊行されている国内流通の訳書よりの引用となしたが、(検索エンジンにての下記長文テキストの入力などを通じ)「オンライン上よりその通りの記載がなされている、すなわち、[文献的事実]であるところの」原著 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos 原著内該当表記部もここでは引用しておく。(以下、原著 CHAPTER ELEVEN Escaping the Universe の節よりの引用として) “ The wormhole in the center of the Kerr ring may connect our universe to quite different universes or different points in the same universe.[ . . . ] Currently, most physicists believe that a trip through a black hole would be fatal. However, our understanding of black hole physics is still in its infancy, and this conjecture has never been tested. Assume, for the sake of argument, that a trip through a black hole might be possible, especially a rotating Kerr black hole. Then any advanced civilization would give serious thought to probing the interior of black holes.[ . . . ] The probe would determine precisely how much radiation there is near the event horizon and whether the wormhole could remain stable in spite of all this energy flux.” (再度の原著該当セクションよりの引用部はここまでとする))

(さらに続いて直下、邦訳版『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』403 ページよりの「再度の」原文引用をなすとして)

ワームホールのなかでは潮汐力や放射が猛烈になりそうなので、未来の文明は、向こう側の宇宙で再生するのに必要な燃料やシールドや養分を、最小限にして運ばなければならないだろう。そこでナノ・テクノロジーを使えば、それらを詰めた小さな鎖を細胞ほどの大きさの装置に入れて、ワームホールの向こうへ送れる可能性がある。



ワームホールが非常に小さくて原子サイズだとしたら、その向こう側で全人類を再生できるだけの莫大な情報を、原子でできた長いナノチューブに詰めて送ることになるだろう。さらに小さくて、ワームホールが素粒子のサイズだったら、原子核をそこへ送り込み、向こう側で電子をつかまえて原子や分子を再構成するようにするしかない。

(引用部はここまでとしておく 一※一 )

(※以上をもってして訳書よりの引用となしたが、(検索エンジンにての下記長文テキストの入力などを通じ)「オンライン上よりその通りの記載がなされている、すなわち、[文献的事実]であるとのことを確認できるところの」原著 *Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos* 原文内該当表記部を上と同文に引用しておく。(以下、原著 CHAPTER ELEVEN *Escaping the Universe* の節よりの引用をなすとして) “ Because the tidal forces and radiation fields would likely be intense, future civilizations would have to carry the absolute minimum of fuel, shielding, and nutrients necessary to re-create our species on the other side of a wormhole. Using nanotechnology, it might be possible to send microscopic chains across the wormhole inside a device no wider than a cell.” (再度の原著該当セクションよりの引用部はここまでとする))

何故、以上のような再度の引用部呈示をなしたかに関わるどころとして本稿の先行する段にあって何を述べてきたのかについての「これまたの」振り返り表記をまなしておく。

現行、F. の段にての話をしてなしているわけだが、先立つ A. から C. と振ってのそれぞれの段の間にも ——[文献的事実]よりのみ導出してのこととして——

**[[加速器実験を類似させるもの][爬虫類の異種族との遭遇]を双方共に(結びつけるように)登場させているとの文物ら]**

が存在していることに言及していた。

そのうち、Fessenden's World『フェッセンデンの宇宙』(1937)という同一作品について取り上げた A. および B. にあっては

**[ワームホール安定化とつながると指摘されるに至った負のエネルギー(を史上初、捕捉したカシミール効果測定実験)]**

の話が科学理論の発展動向から「時期的に不相応なたちで」、要するに、「予見的な式で」『フェッセンデンの宇宙』という作品に入れ込まれているとの指摘がなせてしまうこと([文献的事実]に基づきそういう指摘がなせて「しまう」こと)につき証示し、その上で同作『フェッセンデンの宇宙』にて描かれる、

**[絶滅戦争 —— 科学者が薬籠中の宇宙にて二つの惑星を無理矢理につなげたことに起因する爬虫類の種族による人類に似た種族に対する「皆殺し」との帰結を伴った絶滅戦争—— ]**



のことを問題視しとした(：「1937年に」初出の『フェッセンデンの宇宙』と「1948年に」実施されたカシミール効果測定実験が双方共々、[際立っての類似性を呈しての行為] ——(「向かい合う二枚の金属プレートをきわめて近接させる」「反重力と相通じる重力の作用が問題になる」とのことでの[際立っての類似性を呈しての行為]) —— を具現化させているとのことが[奇怪なこと]としてある中での話として、である)。

加えて、フィクション『フェッセンデンの宇宙』にての[宇宙を創造する行為]が

[現行現実世界にての加速器実験の「宇宙開闢の状況を再現する」との額面上の言いよう]

を想起させる行為ともなっており、その一方で同じくもの『フェッセンデンの宇宙』の[宇宙開闢のための行為]が

[[加速器実験に生成されると後に考えられるようになったワームホール]、そちらワームホールの安定化に用いられると理論上見られるに至った[負のエネルギー]の存在の見積もりにつながった行為(カシミール効果導出実験)と質的に一致しているものとなっている]

とのこともがあり、関係性ははいよいよ「時期的に」「不相応な形で」奇怪なものとなっていると申し述べた(：以上のことにつき本稿の先立っての段では細やかなる解説を加えているので把握していないとの向き、かつ、事理について判断なしたいとの向きはそちら参照願いたい ——そちら出典紹介部としては [出典\(Source\)紹介の部 22](#) から [出典\(Source\)紹介の部 24](#) の一連の部を参照されたい —— )。

以上振り返ってのこと(A. および B. と振っての段の内容を振り返ってのこと —— C. と振っての部にて扱ったこと、『スキズマトリックス』という 80 年代小説作品が[円形加速器同等物]を[爬虫類の異種族の来訪]と結びつけているとのことは振り返り対象としなかった —— )に加えて D. 以降の段にて問題視してきたとのことがある、すなわち、

---

「ワームホール安定化とつながるとキップ・ゾーンによって 80 年代より指摘されるに至った[負のエネルギー]、そちら[負のエネルギー]を捕捉したことで知られるカシミール効果測定実験(1948 年実施)のことに時期的に不自然なかたちで言及している節すらある作品『フェッセンデンの宇宙』(1937)が[爬虫類の種族による絶滅戦争の完遂 —— 神として振る舞う科学者が葉籠中の宇宙で二つの惑星を無理矢理につなげもしたことに起因する爬虫類の種族による人類に似た種族に対する「皆殺し」との帰結を伴った絶滅戦争の完遂 —— ]のことを描いているとのことまでもがある」

との一方で、「加えて」、

「[キップ・ゾーン](#) 著作『ブラックホールと時空の歪み』(原著 1994 年初出) および [並行世界で独自に進化した恐竜人による侵略挙動](#) を描いての映画作品『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』の両作が[ワームホール関連の繋がり合い]を想起させるものらであるのみならず —— 「奇怪極まりないことに」 —— [911 の事件の発生への先覚的言及作品]として「も」接合していることとなっている(とのことを摘示しもしてきた)」

---

とのことがあるうえでも

## [相互関係の「密」結合性]

がまだ十分に示されていないととらえる向きもあるかもしれない(：[相互関係 —いくつかのことらがつながりあっているとの関係性— ]と[因果関係 —あれなければこれなしとの関係性— ]は無論、異なるわけだが、しかし、相互関係があまりにも密結合を呈し、また、かつ、そこに恣意なくして成り立ち得ないとの側面が具現化していれば、それはとどのつまり、「犯罪的やりようの成立にまつわる」因果関係の問題に通底することになる)。

であるから述べるが、

「ここまで A. から F. と分けもしての段にあつては[ワームホールが構築されうるといった申しよう(理論の登場時期との兼ね合いでは平仄が合わぬも)内容面で不気味かつ異常無比なかたちで平仄が合うとのことらが史的に見て長期にわたつて、それにまつわる権威申しよう自体と関係ないところに数多存在していること]についての関係性につき[一例]たるものを取り上げているにすぎない」

とのことがある。

加えて述べれば、

「ここまで A. から F. と分けもして示してきたことからして[大海としての巨視的なる現象の束](個人の主観など問題にならぬところではきとそうしたものが存在していると摘示できるところの現象らの束)に —純・記号論的なる一致性をもってして述べられるところとして— [一部]として包摂されているにすぎぬものであり、そして、そうもして包摂・被包摂の関係が生じているところが我々人類を殺す・滅すとの悪質かつ執拗なる意思表示の所在を示すものとなっていることの指し示しをなしていく」

とのことを本稿の趣意たるところとしているとのことがある(そちら言辞に[行き過ぎ]、[属人的な妄念・妄覚の先走り]といった側面が当てはまるか否か是非とも検証なしていただきたい、と申し述べつつも強調したきところとして、である)。

以上述べたことをもってして、長くもなつたが、A. から F. と振つての一連の段 —うち、F. の段はキップ・ソーン著作にあつての問題となる特質につき 1. から 5. と分割しての指し示しをなしている— を終えることとする。

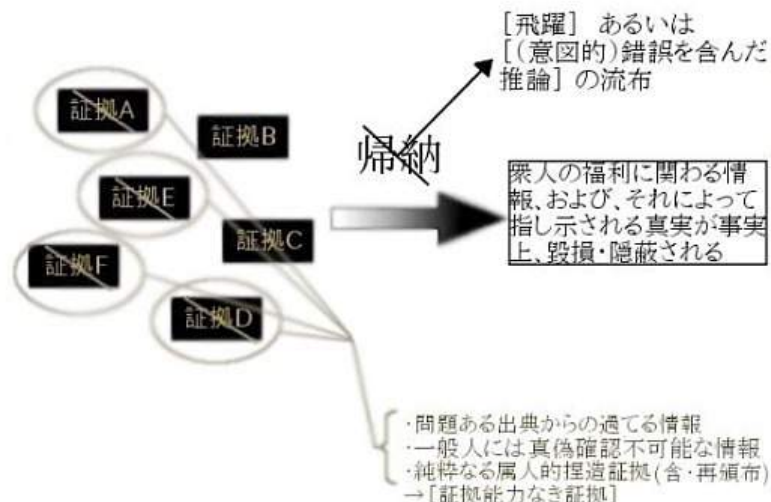
## AからF と振つての部はここまでとする

「付記」たる話として

A. から F. と分けての話に一区切りを付けたとしてここでは続く段に入る前に申し述べておきたいことについて記しておく。

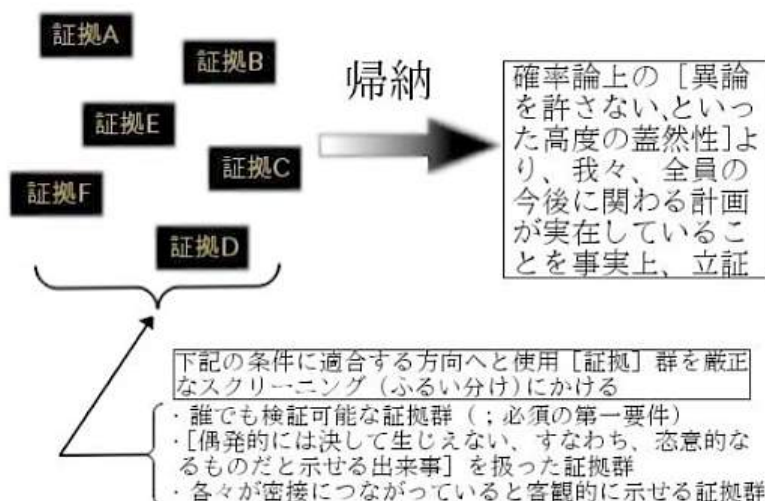
さて、(半ば脇に逸れての)[相互関係の接合性]についての話をなすことから始める。

下の図をまずもって見ていただきたい。



図は — 図に付してのキャプション(文字解説部)からも理解なしただけであろうが — [牽強付会; こじつけがましきこと] 極まりないとの[情報攪乱者やりよう]にまつわるモデルである(: 図に見る[帰納]の意味合いについてご存知ではなく、[導出]程度のところを越えてのその意味合いについて把握したいとの向きは各自、お調べいただきたい)。

対して、



との関係性が成立していることの摘示 — きちんとした論拠を明示したうえでの摘示 — はその密結合度合から「一人合点の論理」「手前勝手の論理」で話が済まされるものではない。

しかも、その関係性の逸脱度合いが通常ありうべき物事の類似性(偶然として成立しているとの類似性)より際立っていればいるほど、そこに[特異な事情](恣意性)が介在しているとの判断をなせることになり、その重みが増してくる。

本稿これ以降の段ではそういう方向 — 普通一般のことからの逸脱度合いが甚だしい事柄らが、しかし、「確として成立」しており、かつ、それらの事柄らの中に密結合の関係性が見てとれる、それがゆえに(巨視的な意味での)[恣意性]が浮かび上がってくるのこのことを示すべくもの方向 — で話を煮詰めていくのこのこと、脇に逸れてのこの部にて断っておく(※[恣意性]すなわち[わざと、]の問題)が何たるかについては下にさらにもっての表記をなしておくこととする)。

※直近、「関係性にあつての逸脱度合いが通常ありうべき域を越えて存在しているほ

ど、恣意性が問題になる」と述べたが、たとえば、

[911の事件にあつての後の爆破テロの爆破「地点」(ワールド・トレード・センターないしツインタワー)と爆破「日時」(911)に関して同時に言及するが如くことをなし、それによって前言をなしているのとれるとの描写を含むサブ・カルチャー作品「ら」が存在している]

とすれば、どうか。そういうサブ・カルチャー作品らについては順次、本稿にて詳述していく所存であるが(殊に本稿後半部はそのための(後追いなしやすきでの)解説にかなりの紙幅を割く所存である)、ここでは「アメリカのサザエさんの看板アニメだ」などと紹介されるテレビ・アニメ・シリーズ、

### 『ザ・シンプソンズ』

やバーチャル・リアリティ世界を描く極めて有名な映画作品、

### 『マトリックス』

のことを例として紹介しよう。

その点もってして『ザ・シンプソンズ』シリーズの1997年初出の特定エピソード(題名 The City of New York Vs. Homer Simpson というタイトルのエピソード)には

[「ニューヨーク」と上の段に掲げられた紙媒体(雑誌か新聞か)の一面広告部が主要登場人物に掲げられ、同広告部の中央に「\$ (ドル)9」との文字列が「極めて目立つように」大きく中央に書かれ、その右隣にツインタワーが「11」ととれるように配置されているとの描写がなされていた」(下に図示もなしておく)

とのことが諸所にて、たとえば、YouTube 該当部切り抜き動画などの形態にて現実に問題視されてきたとのことがある(：表向きそういう描写がなされているのはシンプソンファミリーの女兒たるリサ・シンプソンが「9ドルのバス会社バス(bus)でニューヨークへ」との勧めをなしていることに起因することとはなっているわけだが、[蓋然性・偶然性での説明のなしがたさとの兼ね合いで当然に疑念視して然るべきような描写]であるために多くの人間が問題視している、そう、そもそも「大文字ドルマークの隣に9の数字を字体大きくも配し、さらにその隣にツインタワーが11と見えるようにして911と見せる」とのやりよう自体が[1997年]のアニメーションとしては特異な先見性を呈してのものと当然に解されるために「その存在「だけ」で着目に値する」と一定数以上の人間に見られ動画などで取り上げられることとなっている——詳しくは「911, The City of New York Vs. Homer Simpson」などと検索して調べれば、労せずして該当描写特定できるであろう——)。

次いで、「よく知られた作品である」との映画 The Matrix 『マトリックス』(1999)についてであるが、同作品に関して遺漏なくも確認できる(広く市中に流通しているDVDコンテンツにあつての特定シーンの一時停止確認にて遺漏なくも確認できる)とのことを紹介しておく。

映画『マトリックス』では同作に登場する敵手、機械知性の手下として人間を内部から操ることができる【人間に幻影を見せる(そして機械に産み落とされているポット入りの人間らを電池として死ぬまで「消費」し尽くす)システム】の防衛プログラム、エージェント・スミス(Agent Smith)というサングラスをつけた擬人化プログラムが

(以下、引用なすところとして)

“ As you can see, we've had our eye on you for some time now, Mr. Anderson. It seems that you've been living two lives. In one life, you're Thomas A. Anderson, program writer for a respectable software company. You have a Social Security number, you pay your taxes, and you...help your landlady carry out her garbage. The other life is lived in computers, where you go by the hacker alias "Neo" and are guilty of virtually every computer crime we have a law for. ” (訳)「君も分かっているように我々は以前から君に目をかけてきたのだ。ミスター・アンダーソン。君は二つの顔をもって生活しているようだね。ひとつはトーマス・アンダーソン、尊敬に値する会社でプログラムを書いており、社会保障番号を持ち、きちんと納税もしている。そして、そうした君は... 大家の女性のゴミ出しを手伝う好青年でもある。そして、君のもう一つの生活はコンピューターの中で営まれるもの、ハッカー仲間にもネオと呼ばれるところで営まれるもので我々がそのために法規制を及ぼさなければならないとのありとあらゆるコンピューター犯罪で有罪となるようなものだ...」

(引用部はここまでとする)

などとまわりくどいことを口にしながら、彼らに目をつけられた主人公を(本質的にはたぶらかすための)脅迫的言辞を弄しながらも尋問しているとのシーン、そちら「映画本編開始後十七分後あたりから映し出される」一連のシーンの中にあつて「2秒しか表示されない」(そして細かくも文字のありようを視認可能なのは1秒弱に近いといったかたちともなる)とのところにも「異様なる」予見的言及が具現化している(インターネット上で今まで一部の向きらが指摘してきたところとして、である)。

その一連の尋問シーンにあつてはエージェント・スミス(人間に幻影を見せながらも飼育殺しにしているシステムの代理プログラム)が参考としているように描写される主人公(【ネオ】というキャラクター)に関連する資料にあつて写真付きIDカード(ハリウッド・スター、キアヌ・リーブスを写した写真付きの「パスポートのようにも見える」架空の身分カード)がファイリングされたものとして映し出されており、そのIDカードを画面を一時停止しながら180°回転させて見てみる(画面を180°回転しないと適正配置にならぬとの上下反転したものながらも検証してみる)と、

**【11 SEP / SEP 01】(普通に見れば、【9月11日 / (20)01年9月】となろうとの表示(ただし【9月11日 / 9月1日】あるいは常識的文脈に合うかたちでの【(20)11年9月まで有効、(20)01年9月発行】とも「極めて無理に」解すれば見えもするか、との期間表示としては極めて変わった描写))**

などと右下の部に「実際に」書いていることが分かるようになっている(疑わしきにおかれてはDVDコンテンツ(日本では三バージョン流通しているとのことだが、ここでは映画本編およそ136分を遺漏なくも収録しているとの『マトリックス』(特別版)とのバージョン(2000年よりDVDコンテンツとして日本にて売り出され、レンタルショップで数本単位で据え置かれるなど広く流通しているもの)を引き合いに出す)にあつての本編開始後【00時間18分20秒】から【00時間18分21秒】経過時のシーンを「一時停止しながら」確認されたい(の際には画面を180°回転しもすること)。無論、筆者も何度か流通DVDを借りながらも直に確認したことがあるとの描写となる)。

ここで考える必要があることとして映画『マトリックス』の中では主人公に架空世界

の実態を示して見せた反抗勢力の闘士モーフィアス（【ブラックホール】や【事象の地平】といったものが重要な役割を帯びているとのポール・アンダーソンという映画監督の手になる Event Horizon『イヴェント・ホライズン』との1997年公開米国映画「でも」ハイテク・シップのキャプテン(船長)との役割を演じているローレンス・フィッシュバーンという俳優が演じての有名なキャラクター) が

「君はこの世界を1999年とと思っているかもしれない．が、正確なところは分からないのだが、現在は(機械達に戦争で敗れ、人間が生体電流を目当てにされての電池にされた後の世としての)2199年頃だと考えられている」

と説明するシーンがあり、そのモーフィアスの作中説明は映画『マトリックス』が封切られたのが1999年であるとのことと間尺が合う（:映画『マトリックス』の作中舞台が1999年に設定されているとのことについてはたとえば英語版 Wikipedia[ The Matrix ]項目にて(引用なすところとして) “ When humans blocked the machines' access to solar energy, the machines instead turned to harvesting the humans' bioelectricity as a substitute power source, while keeping them trapped in "the Matrix", a shared simulation of the world as it was in 1999, in which Neo has been living since birth.” と記載されているところでもある)。

では、「何故」、1999年に公開され、1999年に舞台設定されての仮想世界を描いているとの映画『マトリックス』で

【9月11日／(20)01年9月】

などと解されるようになっている(作中主人公身分カードに見る)日付表示なのか？

ここで仮に何の忝意性もないのならば、9月11日との日付が設定されるのは365分の1となると考えられるわけだが(1999年は日数が一日加算されての閏年ではないのでそうなる)、そこにさらに2001年との年次の一致性のことまで考えると、

【2001年9月11日の現実世界の限界を嘲笑うような事件とも一部にて評されるかの事件の発生日】

との「尋常ならざる」確率的一致性が目につくところとなってくる(くどいが、何故、1999年公開の映画にあって2001年9月11日なのか?)。

それでも偶然の一致として映画『マトリックス』にてそういうことが具現化していると言えるのか。

筆者はそうは思わない。

その点もってして —これもまた容易に確認できるところなのだが— 日本にて映画『マトリックス』が公開されたのは1999年9月11日となっているとことがある(すぐに和文ウィキペディアなどを通じて確認可能なることである; In Japan , the movie THE MATRIX was released on September 11, 1999.)。

それが映画にての9月11日のID表記に影響を与えているようにも「相応の」向きら (人間など「結末込みに」家畜程度にしか思っていない飼い主のためにこれ無知かつ無恥にも馬鹿な幻影ばかりを見せることに躍起になっているとの類かもしれない) は強調するかもしれないも(あるいは甚だしくは確認すらせずに[良識を偽装しての種族に対する裏切り行為]として「都市伝説だ」などとキャンキャン(ありえるありえる)とマジックワード(アーバン・レジェンド)を用いつつ馬鹿な犬として吠えるかもしれ



ないも)、「だが、」後付けで決せられている節がある日本の公開日付(1999年9月11日)それ自体からして厭なにおいを醸し出していると感じられるようなところとして、米国で映画『マトリックス』が公開され出した日付は、そも、1999年3月31日のこととなる(たとえばもってして英語版 Wikipedia[ The Matrix ]項目にて Release date(s) March 31, 1999 と記載されているとおりである)。

といったこと、(2001年の)9月11日を想起させる日付描写がほんの一瞬出てくる作中小道具にて描かれている蓋然性がないとのことが「ある」、そして、なによりも本稿の後の部で細かくも解説することになるように【より露骨なるその手の予見的言及】がその他の諸種様々な作品らにてなされているとのことが「ある」、であるから、筆者はたかだかもってして映画『マトリックス』の1秒弱程度のシーン(再言するが、DVDの本編開始後【00時間18分20秒】から【00時間18分21秒】経過時にてのシーンを字面まで綺麗に映るまで停止してキャプチャリングし、その実態を確認されてみるといい)からして偶然ならざるものだと考えている。

さてもってして、仮に予言「染みた」(ここでは「染みた」と取りあえず表記する)作品がそちら一作品だけであるのならば、

「確かにそれは特異な現象なれど……」

とされつつも大多数の世人には「問題とはならぬこと」で済まされることにもなろう(果たしてその通りか否かは置き、である)。

が、そういうものが「数多」存在し、「なおかつ」、それらに予告「染みた」側面それ自体「以外」の要素での

[共通のコンテクスト]

となるところが存在していればどうか。

といったことがあるとのことは[密結合]が問題になるところであり、そして、その際立っての特異性より当然に[「恣意」の介在][執拗さが向かう先の問題]を想定して然るべきところ(そしてその検証をなして然るべきところ)になる、そう述べて差し障りなからう。

といったことがあるとのことは[密結合]が問題になるところであり、そして、その際立っての特異性より当然に[何らかの「恣意」の介在]を想定して然るべきところ(そしてその検証をなして然るべきところ)になる、そう述べて差し障りなからう。

(尚、直近、言及なしたところの **The City of New York vs. Homer Simpson** との作中内特定エピソードにて予見描写をなしている『ザ・シンプソンズ』や映画『マトリックス』についてはそうもしたかたちで問題となるコンテクストに「直接的には」関わっていないように「見える」ところの作品ではある(その意で問題となる予見的作品については本稿の後の段で厭となる程に呈示する所存である一方でのこととして、である)。

だが、『ザ・シンプソンズ』にあつての表記の予見エピソードのタイトル [ニューヨーク市対ホーマー・シンプソン] に見るシンプソン・シリーズの主要登場人物ホーマーの由来について考えるとそうもいかない — 『ザ・シンプソンズ』に見る予見的言及が

如き類は本稿にて問題視している共通のコンテキストの埒外に位置しているかとのことについて必ずしもそうとは言えない— とのところがあ  
るにはある。

ホームー。

英語表記では **Homer**。その名の由来はギリシャ詩人ホメロスの英語表記 **Homer** にある(同じくものは現行、英文 Wikipedia[ **Homer Simpson** ] 項目にあつて “ **Homer was named after Groening's father Homer Groening who himself had been named after ancient Greek poet Homer.** ” 「(シンプソン・シリーズの主要登場人物である)ホームーは原作者グレイニングの父、ホームー・グレイニング、彼自身は古のギリシャ詩人ホームー(ホメロス)より命名されていたとのその人物の名から命名されている」と記載されているところでもある)。

ギリシャ詩人ホームーことホメロスは西洋文明の基準古典として知られる『オデュッセイア』『イリアス』の両古典、本稿の後にての段でいやとなるほどに後述するところとなるが、それら[古のトロイアの崩壊につながった戦争について扱った作品ら]である両古典を今日に遺した[盲目の詩聖]として知られていもする存在である(和文ウィキペディア[ホメロス]項目にて現行より引用なせば、(以下、引用なすとして)“ホメーロス(羅:Homerus、英:Homer)は、紀元前8世紀末のアオイドス(吟遊詩人)であったとされる人物を指す。ホメロスとも。西洋文学最初期の2つの作品、『イリアス』と『オデュッセイア』の作者と考えられている。「ホメーロス」という語は「人質」、もしくは「付き従うことを義務付けられた者」を意味する…(中略)…伝承はホメーロスが盲目であったとしている”(引用部はここまでとする)と記載されているとおりである)。

となれば、予見的描写を含む、

### **The City of New York vs. Homer Simpson**

とのエピソード — (同エピソードはホメロス・シンプソンことホームー・シンプソンがワールド・トレード・センターに駐輪されている自家用車を取り戻そうと悪戦苦闘するとのものでもある) — は

[ニューヨーク市対[トロイア崩壊の叙事詩をものしたことで知られる盲目の詩人ホメロスの名を冠する男]]

と「記号論的には」言い換えることもできる。

以上、述べたところで書くが、本稿では

「[911の予見事物]らの多くに[トロイア崩壊の寓意]が執拗に入れ込まれている」

とのことを[事実の問題]としてひたすらに典拠を挙げ連ねながら摘示していくことになる。その言に偽りなきことか、冷やかしてやるか、程度の心中・心境でもいいので何卒、検討してもらいたいところとして、である。

であるから、ここにて一例摘示している **The City of New York vs.**

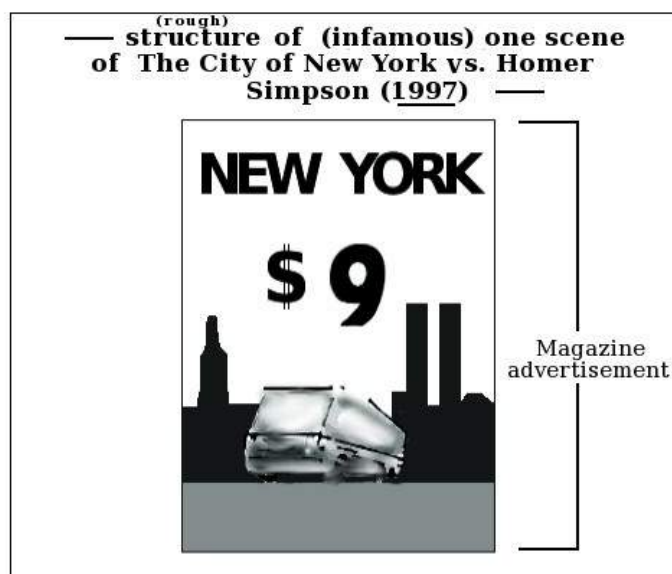
**Homer Simpson**『**ニューヨーク市・バーサス・ホメロス・シンプソン**』からして [共通のコンテキスト]と「間接的には」関わると述べるのである)

問題となるような記号論的一致性が凝集しているところに共通のコンテキストがみとめられるとのことがあるのならば、

[その関係性の逸脱度合いが通常ありうべき物事の類似性(偶然として成立しているとの類似性)より際立つての差分を呈していればいるほど、そして、多重的な密結合を呈していればいるほど、そこに[自然状況でのありえなさや]

ンセットになった[恣意性]介入]の判断をなせることになり、その重みが増してくる]

と考えるが [理の当然] たろう ——であるのにも関わらず、そういうことが見てとれる [現実]をもってして「偶然である」などとの言葉で済ませようとする人間は、はきと述べれば、正常な人間では「ない」(狂っている、ないしは、許容範囲があらかじめ決められている機械に求められる程度の正確性しか有していない)。 対して、状況につきよく分かっている、なおかつ、黙っている人間もただの臆病者であり(恣意性を思うままに発露させている存在が恐ろしくてならずなにも出来ぬとのそういった臆病者であり)、知っていてなお、といったことを [下らぬ出鱈目] と一味同仁と看做さしめるような駄法螺を吐いているような手合いは (遠慮会釈無くも口汚く、だが、相応しき言葉用いて述べ) [人間の屑]と述べても構わぬところであろう。 多くの人間が正気ではないのならば、あるいは、臆病者や(怯懦な者にも増して唾棄すべき)卑怯者であるのならば、(高等学校の教科書の漢文などに見るとのエピソードにて中国では屈原という男が「世の中で自分だけが醒めている」ことを嘆いて汨羅(べきら)の川に身を沈めたなぞと伝わるが)、自殺するように時の大河の流れの中にて果てねばならぬのは我々人類全員ということになりかないのだから[悲劇](あるいは嗜虐的な敵手にとっては酷薄な笑いの対象か)であろうとの話をこれよりなしていくと申し述べつつも、書けば、重みの問題は [理の当然] だろう——。



this is merely a one (of many).

上は **The City of New York vs. Homer Simpson** の前言部を大雑把に再現した図となる(特徴を大まかに示すためのものである)ので細部は

現物と違う)。

同図にあって何が前言たりうるかは無論、言うまでもなかろう ——あとは「実際にその通りのアニメーションが具現化しているのか、問題とされる一連の場面らを切り抜いての映像として公開されている複数 YouTube 動画や諸所静止画紹介サイトを参照されたい」と申し述べるまでである——。

ここで「問題なのは、」以上のような予見「的」事物がこの世界には「数多」

見受けられることであり(それをして意外ととらえるのならば貴殿はメディアなどメインストリートの目立つところで[トリヴィア(些事些末なることら)を取り上げるうえで、そして、重要なことらを悉く無視するうえでの最もらしい芝居をしている役者ら]に騙されていたとのことになる)、かてて加えて(より悪きことに)、それら予見事物の間に

[嗜虐的な意味での共通のコンテキスト]

が見受けられるとのことである(:そこにいう共通のコンテキストなるものが本当に実在するのか、も含めて、続く内容を確認いただきたい次第だが、本稿筆者はそうしたやりように人間存在は抗うのか、あるいは、(皆殺しにするとのメッセージングが露骨に含まれている中で)殺されるまで見て見ぬ振りをする・させられ続けるのか、[自身の運命を包含する人間という種族の運命]について見極めたくも全余力を割いての訴求をなすことにしたとの筋合いの者でもある)。

さて、上のこと、申し述べたうえで、である。以降の段では粒子加速器にまつわる異様なる先覚性問題(本稿冒頭部よりその指し示しに努めてきたとの問題)に直結する[本稿にての最重要訴求事項]にまつわる指摘をなすこととする。

すなわち

[人類に破滅をもたらしうる特異点を生成すると考えられるに至った粒子加速器実験](本稿冒頭部より、にまつわっての異様なる先覚的言及文物が複数存在していることの論拠呈示を原文引用を密になしながらなしてきたとのものである粒子加速器実験)と  
[911の事前言及事物「ら」](さらに問題となる作品「ら」を都度、挙げていくとの類の事前言及事物「ら」)  
を濃密に、多重的に結びつけている要素、いわば、  
[梁(はり)となる要素]  
が存在している

とのことをこれ以降、問題視していくこととする。

それにつき、

(直上にて言及の)

[[重力の特異点を生成すると考えられるに至った粒子加速器実験]と[911の事前言

【及事物ら】とを結びつけるいわば梁となる要素】

が何かと述べれば、——次の各語につきしかと念頭に置いていただきたいのだが——、

「アトラス」  
「アトランティス」  
「ヘラクレス」  
「トロイア」

がそれに該当する。

・ **Atlantis**                      ・ **Atlas**  
・ **Troy**                              ・ **Heracles**

本稿にての重要訴求事項に[梁]として関わるのは巨人 Atlas アトラス、ギリシャ神話の英雄 Hercules ヘラクレス、往古海底に没したとプラトンの手になる古典（後述の Timaeus 『ティマイオス』）に言及される Atlantis アトランティス、そして、今日の欧州文明の源流となっているギリシャ古典（後述の Iliad 『イリアス』および Odyssey 『オデュッセイア』）にてその破滅に向けてのありようが言及される「木製の馬で滅せられたトロイア」である

以上のことに言及したうえで、同じくものことにまつわたるの詳述に入る前に、ここではデーヴィッド・アイク (David Icke) という論客、

「有史以来の人類の支配者は爬虫類人としての形態をとる」

との主張を最大限流布したことで知られる同人物の「一部・特定の」申しようのことからさしあたり問題視することとする(申しようの主軸をなす Conspiracy Theory [陰謀論] ありようからは出来るだけ歩幅をとりつつもの問題視をなすこととする)。

#### 付記 ( Supplementary Note ) たるところとして

上にて論客デーヴィッド・アイクの「一部・特定の」申しようのことからさしあたり問題視するとしたが、ここ付記の部ではデーヴィッド・アイクという人物に由来する異説・陰謀論につき何ら関連知識を有しておらぬとの向きを想定して、デーヴィッド・アイクという人物の主張にまつわる通俗的な解説のなされようを取り上げ、また、同アイク説に対する現行の筆者目分量についても——そうすることもが[本稿の後の段にての記述]に対する要らぬ誤解(あるいは下らぬ人間に由来する、に対す

る、ありうべき口撃)を避けるために必要であると判じているからこそ— 記載しておく。

(まずもって直下、英文 Wikipedia [David Icke]項目、その Key ideas の節にての [Reptoid hypothesis] (爬虫類人仮説)の部より「現時点の」記載内容 — 不特定多数の者が頻繁に更改の挙に及んでいるとのウィキペディアという媒体の性質上、そちら記述の[残置]については請け合わない— の引用をなすとして)

---

Icke introduced the reptoid hypothesis in *The Biggest Secret* (1999), which identified the Brotherhood as descendants of reptilians from the constellation Draco, who walk on two legs and appear human, and who live in tunnels and caverns inside the earth. He argues that the reptilians are the race of gods known as the Anunnaki in the Babylonian creation myth, *Enûma Eliš*. According to Barkun, Icke's idea of "inner-earth reptilians" is not new, though he has done more than most to expand it. Lewis and Kahn write that Icke has taken his "ancient astronaut" narrative from the Israeli-American writer, Zecharia Sitchin, who argued — for example in *Divine Encounters* (1995) — that the Anunnaki had come to Earth for its precious metals. Icke argues that they came specifically for "monatomic gold," a mineral he says can increase the carrying capacity of the nervous system ten thousandfold. After ingesting it, the reptilians can process vast amounts of information, speed up trans-dimensional travel, and shapeshift from reptilian to human form. They use human fear, guilt, and aggression as energy. "Thus we have the encouragement of wars," he wrote in 1999, "human genocide, the mass slaughter of animals, sexual perversions which create highly charged negative energy, and black magic ritual and sacrifice which takes place on a scale that will stagger those who have not studied the subject."

(細かくもの訳として)

「1999年の著述 *The Biggest Secret* (邦題『大いなる秘密』)からデービッド・アイク — (注: 元来はスポーツ選手から英国放送協会のキャスターに転じたとの向きであったが、ニューエイジャー・チックなる主張をなしはじめた後、総好かんを食らい、陰謀論的言辞を展開しだしてより再度の注目を次第次第になされることになったとの英国論客) — は(人間社会で力を持つフリーメーソンのような友朋団としての)[ブラザーフッド]をもってして

[りゅう座からやってきて二本足で歩き地球内部のトンネル・洞窟に潜んでいるとの爬虫類人]

よりの伝来物であると主張しだした(※)。

(※上の部に対する【訳注】: デヴィッド・アイクという男は上に見る[りゅう座からやってきたレプティリアン](なる存在)にまつわる観点を彼が[月のマトリックス理論]というものを展開しだした2010年以降も保持し続けている節があるのだが、そう、例えば、彼アイクは2003年に世に出た *Tales from the Time Loop* (2003)との著作(部分的にかなり興味深くもある表記を含む著作)にて次のような書



きょうをなしている。

“ The Big Dipper includes the star Alpha Draconis, the star of the Egyptian god, Set. Alpha Draconis is an alleged home of the reptilian 'royalty', the elite leadership, known as the "Draco ” .(訳として)「北斗七星はアルファ・ドラコニス(りゅう座α星)、エジプト神たるセトを体現しての星を含む。アルファ・ドラコニスは爬虫類人の王族、ドラコとして知られる選りすぐりの指導者層の拠点と推察されるところである」(訳注: この部はデヴィッド・アイクによる錯誤によるところか、汎ミスによるところの誤記[error]である可能性がある。Big Dipper こと北斗七星にはりゅう座アルファ星は現況含まれていない。但し、北斗七星と親和性が強い北極星( Pole Star )の立ち位置にかつてりゅう座アルファ星があったのは事実である)。

“As I have detailed in other books, the Illuminati bloodlines are seriously into human sacrifice and blood drinking ritual and have been throughout their existence. They perform the same rituals today as they did in Babylon, their ancient headquarters after the demise of Sumer, although I think there was a much earlier version of Babylon, also. The story of Dracula originates from this theme.[ . . . ] His name is Dracula (the Draco are claimed to be the 'royal' reptilian bloodlines); he is called "Count" Dracula (symbolic of the way these Draco bloodlines have been carried by 'human' royalty and aristocracy); he 'shape-shifts' (like the Reptilians) and he is a vampire (symbolic of the need of the Draco Reptilians to drink human blood and feed off human energy, as I shall detail shortly).” (訳として)「既に私が他の自著にて詳細を解説したようにイルミナティ(訳注: アイクがこの世界の悲劇の因であると主張するところの紐帯)の血脈は深く深く人間の犠牲の儀、そして、飲血の儀に関わっているし、彼らの存在そのものに関わるところとして今まで同じくものことに関わってきた。私はバビロン仕込みの初期的やりようが(その背景に)あるとは見ているのだが、彼らイルミナティ血脈(というデヴィッド・アイクが彼の主張にあつての悪の根源をそこに帰しているとの紐帯)はシュメール崩壊後の彼らの主要拠点であったバビロンでやっていたことと同じくもの儀式を今日でも実践しているのだ。ドラキュラの話はこのテーマに関わるところである  
・・・(中略)・・・ [ドラコ]は爬虫類人の王族の血族と主張されているとの中で彼はドラキュラ伯爵と呼ばれていた —「ドラコの」血脈が人間の王族と貴族によって接受されてきたことの象徴的方法ととれる—。(「ブラム・ストーカーの小説では」)ドラキュラは(爬虫類人がそうあるように)姿を変え、そして、吸血鬼であった —先に短くも記したようにドラコ=りゅう座のレプティリアンらに人間の生き血をすする必要性、人間のエネルギーに喰ってたかる必要性があるからであろう—」(訳を付しての引用部はここまでとする)

直上までにてアイク著作よりそのまま原文引用なししているように彼アイクは[りゅう座伝来]云々との[外宇宙起源説]に加え「レプティリアン上層部はこの次元におらず異世界の住人である」としたり、  
「レプティリアンは恐竜が別次元で進化したものかもしれない」との事を述べたりするとの式の主張もあわせてなし続けている —[異星人]と[並行世界の存在]は併存しづらいつころなのにそうしたいいようをなすの「も」アイク流である— (ここまでをまづもつての【訳注】とする)

(補つても注記を終えてウィキペディアよりのここでの引用部に対する訳を続けるとし) 彼アイクはレプティリアンら(爬虫類人ら)をもつてして[バビロニア創世神話における『エヌマ・エリシュ』にてのアヌンナキとして知られる神の種族]

であると論じもしている。

(陰謀論分析者としてその名が通つてつるとの論客の)バークンによるとアイクはそちらを最大限拡張解釈しているものの、アイクのそうした[地球内部の爬虫類人とのアイディア]は新しいものではないとのことである。また、Lewis および Kahn の両二名が(彼らの著作 The Reptoid Hypothesis: Utopian and Dystopian Representational Motifs in David Icke's Alien Conspiracy Theory 『爬虫類人仮説: デビッド・アイクにての異星人陰謀論におけるユートピア主義者のモチーフとディストピア主義者のモチーフ』にあつて) 書くところではアイクはイスラエル系アメリカ人作家ゼカリア・シッチン、[希少金属のためにアヌンナキが地球を訪れなければならなかつた]とのことを主唱していた同男の古代宇宙飛行士説にての主張のありかた、たとえば、1995 年に世に出た Divine Encounters との書籍の主張をアイクは容れているとのことである (※)。

(※上の部に対する【訳注】: ちなみに上引用部に見るゼカリア・シッチンにまつわる書きように関わるところとして英文 Wikipedia に紹介されている物書きら、Richard Kahn および Tyson Lewis の両名はアイクの説を Swiftian satire [ガリバー旅行記著者たるスウィフト的諷刺の産物] と評していることもがウィキペディア当該項目には紹介されているが、本質的にはそのようなレベルのもので済まされなつような側面を一部伴うのがアイク説であると見立てられもする (この世界 — this crazy world — の実体に鑑みれば数多のシンパを伴つてアイク説が評価される風潮を「たかだか」スウィフト的諷刺に置き換える者達の心情の方がむしろ不誠実 dishonest であると受け取れる)。

その点、David Icke 本人に言わせると「(異星人地球資源獲得目的来訪理論を唱えた)ゼカリア・シッチンは悪魔主義者の一人である」とのことになるようなのだが(同じくもの弁が下劣な中傷に留まるところなのか、でないのかは判断する術がない)、といった申しようをもなししている彼アイク本人によると、異星人来訪にまつわる自己の主張は(ゼカリア・シッチン主張に拠るとつより)元コロンビア大学生物学分野の教授であつ

た Arthur David Horn の手になる Humanity's Extraterrestrial Origins との書籍に多く拠っているとのことである — アイクという男はその著作 The Biggest Secret 以来、そうも述べている — (ここまでを【訳注】とする)

(補つても注記を終えてウィキペディアよりのここでの引用部に対する訳をさらに続けるとし、)

アイクが主張するところでは「アヌンナキは[神経伝達システムの働き具合を 10 万倍に増加させしめる単原子の金]を求めてやってきたと考えられる」とのことである。

それを摂取することで爬虫類人は大量の情報を処理することができ、次元間旅行、そして、爬虫類人の形態から人間の形態に移行できるようになるというのである。

彼らレプティリアンは人間の恐怖の感情、罪悪感、攻撃性をエネルギーとして利用するという。そして、アイクは「かくして我々は戦争を遂行したいとの刺激を受けるのだ」と 1999 年、自著にて書いている。「高付加の負のエネルギーを生み出す人間の大量虐殺・動物の大量殺戮・性倒錯、そして、黒魔術の儀式というのは同じくもの主題について研究したことがないとの人間が驚く程の規模で執り行われてきたのだ」とも彼アイクは主張している」

---

(細かくも補つての訳を付しての英文ウィキペディアよりの引用部はここまでとする)

以上のような英文ウィキペディア表記に見るような主張を大要としてなしているとの論客デーヴィッド・アイクの申しようについては — 「りゅう座より侵略者が来訪した」などとのこと(普通に字義通り解せば、[正気ではないとのレベルに左巻きがかった新興宗教の徒の憑かれたが如くの妄言・妄語の類]と区別のなしがたいような申しよう)を古典でのあやふやで僅少な記述などに依拠していきなり大上段に振り回す以外に — 固有の問題性が伴っている。

銘々各自におかれてお調べいただければお分かりいただけることか、とは思いますが、

[爬虫類人はこの世界に実体をもって介入できる]

[爬虫類人の地下基地がそこかしこにある]

[爬虫類人が影に隠れての間接統治を支える人間世界の伝統的王族・貴顕らは爬虫類人の血脈、その遺伝子を受け継いでいる者として組織的児童虐待に手を染めている]

[爬虫類人がいままさに究極の世界的監獄社会をニュー・ワールド・オーダーとして構築しようとしている]

といった[都市伝説めかした要素](地下基地云々など多くの人間の[経験知]とも相容れぬ風が如実に伴っての「あまりにも」都市伝説めかした要素)とともにあるとのことがある、そこからしてアイク申しようには問題性が伴っているように当然に見受けられるとのことがあるのである(アイク主張ありようにあつての問題となるところについては例えば、英文 Wikipedia を参照するといったことだけでもある程度の理解をなせるであろう。筆者としては英語を読むのになんら苦がないとの向きらにあつてはオンライン上より苦もなく検討(ダウンロード)できるようになっているとの

アイク著作の「原著」それ自体を検討されてみることで薦める次第だが)。

無論、本稿筆者は直上表記の如し側面にて[極性]を帯びての申しようを「自称・目撃証人の証言」や「信憑性の低い出所」を元になす David Icke に全幅の信を置いているわけではない。

デーヴィッド・アイクの表記の如し申しように関しては

[20世紀からアメリカで隆盛を振るうようになっていった都市伝説(未確認飛行物体地下基地存在にまつわる都市伝説)・陰謀論(たとえば、元・エホバの証人のフリッツ・スプリングマイヤーという人物が広めていた悪魔の血流陰謀論)を一緒にくたにし]

[文献的に何ら信用性の置けないソースを多く典拠に置いている]

とのかたちでの虚妄の一大体系としての側面「をも」有している節ありであろう

と判ずるに至っているからである——何故、デーヴィッド・アイクが持説を広める際にシンパら(たとえば「自称・悪魔的児童虐待の元被害者」や「ダイアナ妃の元カウンセラー(クリスティーン・フィッツジェラルドというスピリチュアル・カウンセラー)として故ダイアナ妃から爬虫類人の話を生前聞いたとの霊媒師」や「アフリカのシャーマン」といった爬虫類人支配説やその接合領域の説を支えているとの証人等等)がそこに目立って伴って「いる」のか、そこからして「(人間操作の)機序」との絡みで問題になりうるとはとらえているのだが、とにかくもってして、デーヴィッド・アイクの上に引き合いに出した申しようなどについてこの身は虚妄の一大体系としての側面を有しての節ありと判ずるに至っている——。

(:尚、アイクの関連するところの主張動態の[嚆矢(original)]については Behold a Pale Horse『青ざめた馬を見よ』との書(聖書の黙示録に見る第四の騎士の乗馬に対する形容に範を取ってのタイトルを有しての洋書で「宇宙人地下基地陰謀論」から「多くキリスト教世界観に依拠してのイルミナティ陰謀論」といったものをすべて取り込んで体系化したような書籍)をものした Milton William Cooper ミルトン・ウィリアム・クーパー(群保安官事務所による加重暴行の懸念を受けての逮捕の挙の折に抵抗・発砲して射殺されたと発表されている米国民兵組織寄りの陰謀論者)および元「エホバの証人」ながらも脱退し悪魔主義陰謀論の巨視的力がフリーメーソンらを動かして世界を支配せんとしている、そのために特定の血族が利用されているとの主張をなしての Bloodlines of the Illuminati(1998)をものした「悪魔主義血族陰謀論」の旗手たる Fritz Springmeier フリッツ・スプリングマイヤーら兩名による、「後追いの術が担保されていない」 Conspiracy Theory [陰謀論]に求められると筆者は見ているし、同じくものに気付いている欧米人の数は(そのことを口に出す人間は僅少でも)かなり多いか、と思う⇒ Icke's view point ← (affect) ← Fritz Springmeier's view point ([satanists and "blood line"] conspiracy theory) + Milton William Cooper's view point ([power elites' cooperation with extraterrestrials] conspiracy theory)

だが、しかし、説の主軸となるところが信用のおけない、そう、「世の中をよく知っている大人」ら(この世界が「唾棄すべき「人形劇」の世界」であることを知ったう



えでその「盤上の駒」として動くことに納得しきった者も無論にして含んでの「世の中をよく知っている大人」ら)には

[まったくもって信に値しない —(アイク説のどこがどう問題になるのか、それが人類の今後に関わる欺瞞性「とも」いかように関わるかについては本稿の後の段でもかなり細かく煮詰める所存である)— ]

とのパートを少なからずも含むとのかたちで流布されているものでも「爬虫類人類支配説」それ全体が信憑性に値「しない」とのことではないと強くも申し述べたい(:[システム運営にとって望ましいとの筋目の機械のような人間]として物事の事理につき何ら適正な判断をなせない(がゆえに中身が空っぽのことしか言わないし聞かない)といった程度よりは幾分ましたが、それでも思考作用が十二分に働いていなければ、人間は物事を一面でもって全面を語る・見ようとするきらいがある、それがゆえに「半分の毒で半分の真実すらも棄却してしまう」こともありうるかと考えられる中にて強くもそのこと、申し述べたい)。

アイク説を「よりもって陳腐化なさしめている」節すらもある爬虫類人類支配の自称根拠 (という名の実体はそれを陰謀論に貶めるだけの爬虫類人変身証拠「画像」) や爬虫類人類支配説を広めんとしているスタンスを取っている者達の背景にあって作用している、

[ありうべきことと幼稚な迷信をごった煮にするカーゴ・カルト的側面]  
(カーゴ・カルトの意味が分からぬ向きは自身でその意味をお調べいただきたい)

の過半を脇に置き、——ただここではそうしたことの過半を脇に置いてもインターネット上に、相応の面構えの者達の関与ゆえにであろうが、流布されている芸能人・著名人などが爬虫類人に変身したと主張しているノンリニア編集動画などの特性およびその撒布の(愉快犯にかこつけての)[考えられるところの真の目的]については後の段にても多少、筆を割くことにする—— 次のようなこと(1および2)が「間接証拠」として存在しているために「爬虫類人類支配説」は唾棄すべきものどころか、真摯に検討すべきもの、「おそらく一面で真を穿っている」のではないかといったレベルで真摯に検討すべきものであると本稿筆者としてはとらえている (「本稿の結論、「いずれにせよ対策を打たねば死滅は必定である」との本稿結論を左右するところ「ではない」のでそうした目分量については押しつけはなさない」とあわせもして申し述べたいところなのだが、とにかくもってのこととして、である)。

(爬虫類人類支配説の内容が「一面で」軽んずべきものではないとのこと  
にまつわっての「間接的証拠」として)

1. 人類史にあっては竜・蛇との「爬虫類の象徴」が世界中で往古より「異常」とも言えるかたちで頻繁に用いられてきた、[明示的]あるいは[隠喩的]に用いられてきた、とのことがある。また、「爬虫類の象徴」が「異常」なかたちで頻用されてきたとのことと表裏をなすこととして"象徴"のみならず、世界各地の神話・伝承も蛇や竜の"神格"、蛇や竜絡みの"妖しき者達"にまつわっての叙述で満ち満ちているとのことがある
2. 重んじて然るべきようなところとして複数伝承のおよそ文化伝播では

説明なしがたいような「あまりにも奇怪なる」相似形問題が存在している  
とのことがあり、そこに多く蛇や竜の象徴が関わっているとのことがある

理由は上の1および2——殊に2の点は大きい——で語りきれるところではないのだが、爬虫類人支配説が重んじられるところの[間接証拠]がいかようなものなのかについては直下にての別枠表記の部の記述内容に譲ってここでの付記たるところに一区切りをつけたいと思う。

図を挙げながらもの補っての表記として

ここ別枠で括っての部では

『一体全体、paranormal[超常的]かつeccentric[奇態]との話を延々なす意味がどこにあるのか』

との読み手心証惹起をおそれずにももの[(図を付しての)[異説]にまつわる解説]をなしておく。

さて、直上最前の段にて先述のように爬虫類人人類支配説、その旗手たるデーヴィッド・アイクは、

「異次元に本拠を置く爬虫類人が代理人(爬虫類人に憑依・コントロールされているロボット人間)を介して人間世界を支配している」

との主張をなして欧米圏にて物議を醸すに至った人物である(彼の言い様はそうした「異次元介入存在にまつわる」申しようと両立するのかに首をかしげたくなる「外宇宙よりの介入存在を想定しての」エイリアン・コンスピラシー・セオリー(宇宙人介入陰謀論)との融合もがとみに見てとれるわけではあるが、とにかくものこととして、である)。

以上申し述べたうえで「そこからして誤解をおそれずにももの申しようをなす」が、アイクのそうした言いよう、

「異次元に本拠を置く爬虫類人が代理人(アイク言辞における爬虫類人に憑依・コントロールされているロボット人間)を介して人間世界を支配している」

との言いように関しては、

[ほぼ同じくものことを一面で「強くも」「間接的に」示唆するような側面]

が世の諸所にみとめられるとのことがある。

たとえば、下に写真を挙げた[天龍]および[金龍]の像を引き合いにして「も」同じくものことに通底することが述べられもする(ようになってしまっている)。





東京は浅草、その浅草にあつての浅草寺(せんそうじ)の門前に建つ  
 [雷門](こちら[雷門;かみなりもん]は言うまでもないことか、とは思うが、  
 日本を象徴する著名な建築物である)のまさしくもの門の裏側の両側に  
 配された像、故・平櫛田中(ひらくしでんちゅう;人間国宝)の手になる  
 像らが上に写真を挙げている[天龍]および[金龍]の像なのだが、それ  
 ら彫像からして比喩性を感じるやりようが透けて見えるようになっている  
 というのがこの[忌むべき世界]である、そう述べても差し障りないよう  
 になってしまっている。

上にてそのありようを撮った写真の掲載をなしている[天龍][金龍]ら  
 は[尾が生えた竜人]として象(かたど)られているわけだが(疑わしきは  
 各自、お調べいただきたい)、竜と人との混淆型である彼(天龍)・彼女  
 (金龍)らの背面には

[異次元から覗くが如くのような竜の似姿]

が配されている —— [天龍][金龍]の像を手ずから撮っての上掲の写真、  
 その下側に[光背(こうはい)の部分にて顕現している竜の似姿]を

強調すべくもの図像も挙げている——。

ここで述べるが、といったところに基づいて「のみ」、

**「アイクの異次元に拠点を置く爬虫類人がラジコン化された人間を支配しているとの観点に実にもって平仄があう構図である」**

などと述べるのは、もっと言えば、それをして爬虫類人類支配説の「間接証拠」などととらえるのは「暴論」あるいはそれ以前の「妄語」に聞こえることかとは思(はきと述べ、神秘主義者ら、さにあらずんば、陰謀論者の申しよう、懐疑的な人間であればあるほど、軽侮なしたくもなるとのそうした筋目の人間の申しようと区別なしがたいとの「暴論」ないし「妄言」に聞こえることかとは思——デヴィッド・アイク著作、たとえば、彼の初期の『ザ・ビッグスト・シークレット』のような著作にあつて「爬虫類人」(と表されての存在)が被操作対象の人間の後ろに立って不可視領域からその人間にオーバーシャドウイング(憑依)しているといった按配の図が載せられている、そのありようが浅草の雷門裏手の先掲の彫像らの構図とそのままに重なり合うといったことがあるとしても、である(筆者としては『仮に人間に憑いている存在がいてもそれは生体ではなく人工知能風情だろうがな』と考えているわけではあるも、といったこともここでは置く)——)。

しかし、である。直上にての指摘だけでは **ridiculous**、馬鹿げていると響きもするかととらえているわけではあるも、読み手が浅草駅から徒歩で歩いて浅草寺の仲見世通り——観光客で賑わう活況呈しての浅草寺の門前町を直通するメインストリート——を突っ切るとの道程を得、その道中みとめられる象徴主義らの問題について思料するとのことをなせば、直上表記のこと——雷門の背面に配された金龍・天龍の像の構図にデヴィッド・アイク言い分との接合性がみとめられるとのこと——からして暴論の類とは無条件には受け取らない(というより脳が正常に機能しているのならば受け取れない)ことになろうか、とも思う。

に関して、まずもって書くが、地下鉄浅草駅(の雷門に通ずる3番出口の脇)には  
[祭装束で竜の幟(のぼり)を担ぎする衆のありよう]  
が壁面モニュメントの真正面から臨んでの右側の部——出口階段脇に配された壁面モニュメントで浅草寺の名物である三社祭のありようを巨大パネルにて描いたの右側の部——にて具現化させられているとのその式がインパクト強くも目に入るようになっている(少なくとも筆者がここにて掲載の「天龍」「金龍」の像の写真を撮った、順調にいけば、数千部との流れで初版からして商業出版されてもいたものであるとの自著に掲載すべくも2008年にそれらの像を撮った折柄にはそういう浅草駅の装飾付けが目についた——因(ちな)みに「龍の幟(のぼり)」を複数人が棒担ぎしてうねらせるとのありようは三社祭に限らずアジア圏でよくみとめられる光景である——)。

次いで書くが、浅草駅から徒歩にてすぐの浅草寺にあつては

**「雷門(表部両脇に極めて有名な風神・雷神の像を配し背面部両脇には先述の「天龍」「金龍」を配するとの日本にあつて**

著名なる建築物たる"かみなりもん")に入る] ⇒ [浅草寺のメインストリートたる仲見世通りを歩く] ⇒ [本堂に程近いセクション(の通り右側)にて沙竭羅(さから)龍王の像にまみえる]

との観光の式が位置関係上、「自然に成立する」ようになっている——[観光の式]とは述べても、「これはどういう縁起由来の像か」「この像の構造的特徴はどういったものか」といったことまで物を深く見ない人間にはそこにどういった特性が具現化しているのかついで気付くこともなく、何となくにも物見遊山で終わることになるろうか、とは思うのだが、ここでは[ものをじっくりと見る観光客(観察者)]を想定しての話をなしている——。

そちら位置関係上、自然にそうもなろうとの観光の式、繰り返すが、

[竜を衆生が皆で棒担ぎする壁面モニュメントのありようを駅で目にする] ⇒ [雷門の背面に目を向けた際に[背面に垂空間から覗くような竜を配する竜人ら[天龍][金龍]の像]にまみえる] ⇒ [仲見世通りを歩いて沙竭羅(さから)龍王像設置のセクションに向かう]

との式にあつての

[沙竭羅(さから)龍王像 ——日本彫刻界の大家たる高村光雲の手になる作として知られている彫像—— ]

が一体どういった構図をとるかと言うと、同彫像は

[男が身体に竜を巻き付けるとの格好をし、その竜が天井に描かれた竜に融合するが如くの構造が具現化したもの]

となっている(下にそうした沙竭羅龍王像の[天井部の竜]を省いての構図を挙げる)。



さて、それらが目立ってそこにそうしたものとして「ある」との蓋然性が判然としない、いや、だからこそ却(かえ)って背面に寓意性があるように感じられるところとして



[浅草駅雷門方面出口(の階段脇)に見る竜担ぎというモニュメントの一部分構図]

[平櫛田中の彫った(雷門の裏手の)[天龍][金龍]の像(先掲の像ら)]

[高村光雲が彫った沙竭羅(さから)龍王像(上にて呈示の像)]

の間には

[天あるいは上位領域にある竜が人間存在(あるいは人の格好をした表現物)を拘束しているとの「共通の」式]

が 一仲「見」「世」通りを介して— 窺える格好となっている(疑義があるとの向きは「ここ本稿の直上の段にて何を書いているのか読み直し、その上で浅草寺に足を運んでみるといい」とも申し述べておく)。



松下幸之助が、戦後、(現在の浅草寺門構えと同文に)浅草寺に寄進したことで知られる大提灯。観光イメージとして東京それそのものを象徴するとの観もある【雷門との字句が刻み込まれたそちら巨大な大提灯】にあっては屈(かが)んで覗き込まなければありよう察することが出来ないとの式で下側背面の部に【龍の像】が彫り込まれており、その龍の像を撮影して構図呈示しとしたのが上掲図となる。また、これまたあまり知られていることではないが、(浅草寺にあつての)雷門の大提灯には仏教にて瑞相(吉兆)の象徴とされる万字、卍紋様——ナチスがそれを反転させての鉤(かぎ)十字をもってしてシンボルとしたとの Swastika の呼称でも知られる万字紋様(ナチ象徴である鉤十字紋様についてはそれと似たような構図、『妄言を社会に広めているだけだろう』との神智学協会という世界的団体が【ユダヤ民族の象徴でもある六芒星】・【尾を噛む蛇であるウロボロス紋様】と組み合わせて組織標章に入れ込んでいるとの紋様でもある)——が目立つように刻み込まれてもおり(地図記号に見るように寺社仏閣がそも万字と結びつけられているとのありようからそれ単体で見るとはあまり奇異なることではない)、また、大提灯表面部それ自体にも金色(こんじき)の龍らの頭部彫刻がま

るで提灯から生えるように施されているとのありようが見受けられるようになりもしている(；だからと言って、筆者は金龍山との山号で知られる浅草寺に提灯と門構えを寄進した松下幸之助が怪物がかつての力学の全面的被影響下にあったのだらうなどと馬鹿げた言い分をなしたいの「ではない」—この世界にあまねくも行き渡っている節がある機械「的」操作とは何かについて思うところを示したいとの意図がある中でありながらも、である—)。

以上のことを申し述べてたうえでも、人間存在がいかように忌むべき状況にあるか思索を巡らしたことがなんらないとの幸せな(あるいは不幸も行き着くところに行き着いた)向きらは『なにを馬鹿なことを延々と...』  
と考えるかもしれないし(そうした向きにあっては「貴殿がそれに着目するか否かは自由だが、材料は他にも山ほどあり、この世界にはそういうものらが具現するだけとの相応の「機序」(テーブル下に置かれた磁石でテーブルの上に置かれた足下にある磁石つき人形を動かすが如く式の機序)が作用している節があるのだ」と申し述べるまでである)、また、幾分、理性的な批判をなさんとする向きは次のように反論を呈するかもしれない。

「今や東京を代表する観光スポットとなっている浅草寺の山号(寺社称号)とは、そも、金龍山であろう。また、そのために雷門にも金龍山と右から左に読まされる式で書かれているではないか。であるのならば、龍に対する固執はそんなにおかしなこととは言えまい？それに浅草寺には他にも観光スポットがたくさんある。浅草寺メインストリートという目立つところを引き合いに出しての持説強弁のやりようとも言える」

「言い様の具に用いているとの沙竭羅(さから)龍王は仏教における八部衆の一柱だが、八部衆には—ナーガといった龍蛇の類を意識させる存在も含まれるもの—緊那羅(きんなら)や乾闥婆(けんだつば)、そして、有名な三面六臂の阿修羅などの一般に龍・蛇の形状をとらぬ存在も含まれている。そうした多種の生物の混交型たる八部衆らに含まれ、そもそも仏教におけるマイナーな護法神に過ぎぬとの沙竭羅(さから)や縁起由来さえはきとせぬ金龍・天龍らの仏像をもって巨視的なコントロールの存在の可能性を論じようとするなどとは[行き過ぎ](あるいは[ナンセンス])である」

「目立ってそういう構図がみとめられるとのことがあっても、である。そうしたことは[偶然]、ないし、[常識的文化伝播]の問題(たとえば、アジア圏では仏像の光背の部に多頭の蛇を配する構図がインドの神々の彫像ありようの影響でであろう、多分にみとめられる)で説明がなしえるところであろう」

部分的には[反論]としてもっともな言い分ではあるか、と思う(沙竭羅(サカラ)龍王なる存在が法華経—すなわち排撃性の強い宗教の教典とされているもの—に登場する、仏法を守護する(八部衆ならぬ)八大竜王の一に数えられることは置いておいてもっともな言い分

であるか、とは思う)。

だが、切り返して述べれば、一例として、次のようなこと「ら」までもがあるのがこの[忌むべき世界]である。

1. 「建築物における奇怪な龍・蛇の具現化は浅草のそれにとどまらない。例えば、恐竜を6500万年前に滅したとされる隕石の落下地近傍領域(ユカタン半島のチチュルブ・クレーター近傍領域)に存在している中米にてのチチェン・イツァといった遺跡では蛇の神ククルカンを祭るピラミッド、[高度な建築技術] (今日的な目線で見ればコンピューター計算して設計でもしたのかと考えたくなるようなところとして日照の変遷から丁度、[春分の日]にピラミッド段差部に彫られたククルカン神が蛇行するような蛇の影を呈するようになっているといったことに見られる建築技術) を体現してのカスティーヨと呼ばれるピラミッドがみとめられもする。そのような高度な建築技術を体現してのピラミッド(カスティーヨ)を含むマヤ文明の同じくもの遺構チチェン・イツァではアメリカ大陸に対するスペインの侵略前にあって生け贄の儀が執り行われていたことが知られており、その生け贄の儀では[セノーテ]と呼ばれる隕石落下によって形成された鍾乳窟に直結している地下用水地に人身御供が放り込まれていた、それも、[爬虫類の似姿を呈しての神々]に五穀豊穰・天候にまつわる伺い立てをなさせるために人身御供が放り込まれていたとのことが伝わっている(：につき、解説書を読む時間はないものの、同じくものことにまつわっての通俗的解説のなされようについて把握したいとの向きにあってはインターネット上の基本的情報、チチェン・イツァの生け贄のセノーテ(天然井戸)をダイビングで探索した著名考古学者にまつわる英文ウィキペディア[ Edward Herbert Thompson ]項目や同[ Sacred Cenote ]項目、そして、それらにまつわっての他、英文による解説媒体——(他解説媒体としては、例えば、セノーテに放り込まれた生け贄が同神へのお伺いをたてさせられるとのことが伝わっていたChaacチャク神のありよう(ウィキペディアなどには“Chaac is usually depicted with a human body showing reptilian or amphibian scales, and with a non-human head evincing fangs and a long, pendulous nose.”(訳として)[チャク神は爬虫類あるいは両生類状の鱗片を呈しており、際立っての牙・長くぶら下がっての鼻を伴った人外の頭部を保持した姿で描写される]と表記されているような構図上のありよう)などにまつわる解説媒体を挙げておく)——を参照されたい)。その奇怪な意味合いについて科学的かつ確率的目分量から論ずる向きはこの世界には目立って「いない」わけであるが、とにかくも、[恐竜を滅したと伝わる隕石跡地の界限に存するマヤ文明の遺構(チチェン・イツァ)]にては[爬虫類の類を様式に組み込んでの高度の建築技術]が具現化を見ており、なおかつ、同遺構では[恐竜滅亡の隕石の跡地そのものである用水地]に人間を放り込んで[爬虫類の神々]に人身御供を介してのご機嫌伺いが実施されていた、そういうことが歴史的ありようとして具現化しているのである(過半大多数の人間にあってはコロンブス到来前のアメリカにてのそうした文明形態ありようについて知らぬ存ぜぬ、それが自分達にどう関わるのか、とのことさ



え理解する意思の力さえ無いとは思うのだが、そうもなっている)。

さらに述べれば、上にて言及のマヤの遺構チチェン・イツァとは別物となるところとして、  
[隕石の落下地(恐竜を6500万年前に滅したとされる隕石の落下地チチュルブ・クレーター)に先述のチチェン・イツァよりも近いとの「際立っての」隕石落下近接ポイント]  
に存在している[ウシュマル]というマヤ文明古代都市の遺跡にあつては  
[[イグアナの卵より孵化した子供]によって魔法によって短期間に建設されたと伝わるピラミッドの伝承]  
が語り継がれてきたとのことが考古学関係者に知られている(：につき、同文に解説書を読む時間はないものの、通俗的解説のなされよう程度について把握したいとの向きにあつてはインターネット上の基本的情報、現行にての英文ウィキペディア[Uxmal]項目および同[Pyramid of the Magician]項目の内容を —チチュルブ・クレーターの位置状況を別媒体で確認されるなどしながらも—参照されるとよからう) 」

([爬虫類人の類による人間支配のを示唆する間接的証拠まではそこら中に存在している]とのことに通ずる現実世界に見受けられる[現象]についてさらにもって言及するとして)

2. 「欧州にあまりにも質的に近い近似物、文化伝播ではおよそ説明がなしたがたいとの式での近似物がみとめられるとの浦島伝承では[龍]や[蛇]のアイコンが入れ込まれている(浦島は「亀」の背に乗って「竜」宮に至ったとある)。そして、浦島伝承に関しては[双子のパラドックス]とのアインシュタイン相対性理論の帰結との接合性が(直近言及の文化伝播で説明がなしがたいような近似物の存在以外の際立ってのところとして)伴っているとのこともがあり、そこからして龍・蛇の登場との式も軽んじることができない」(上のことは本稿の先だつての段 — 出典(Source)紹介の部 28-3 から 出典(Source)紹介の部 30-2(2) を包摂する段 — で典拠を細かくも挙げながら指摘してきたことである)

3. 「[粒子加速器][浦島伝承でも問題となる双子のパラドックスを用いての通過可能なワームホール構築にまつわる思考実験]の双方と結びつく[奇怪な予言的言及]を含む文物らが時期的に不可解な折柄に世に出ているとのことがある(ラジコン人間・傀儡クグツの類を無意識的にか、そうではないのか、とにかくも手繰って現出でもさせたのか、といった式にて、である)。そして、それら予言的言及らはまた爬虫類の異種族の来寇(人間への侵略)とも結節点を有するものである」(先立っての段 — 出典(Source)紹介の部 22 から 出典(Source)紹介の部 27 を包摂する段 — でこれまた典拠を細かくも挙げながら「まずもつての」一例たるところを取り上げたことである)

上記のようなことらに相対したとしても、である。人間に相応しい[中

身][内面]がない、神秘主義者らが[魂]と呼ぶような実質部がそもそも欠を見ているとの仕儀にまで至ってしまったとの多くの向きらにあつてはその[中身][内面]の欠如がゆえに[何の反論の論拠もなしにももの否定の言]をそれこそ[獣声]、そう、[理なき獣の声]のようにあげる(あるいは「獣畜の飼い主」に叩かれてあげ「させられる」)ところか、あるいは、問題の可能性を極小化するようにそうしたことの意味合いに真摯に何ら向き合わないか(たとえそれが自分達種族に対する絶滅オペレーションを進行させている者達の素顔をその絶滅オペレーションそのものとあわせて同時に示すものでもその意味合いに何ら真摯に向き合わず「好事家の領分」の出来事に矮小化させてしか情報処理しない)といった風にその[反応の程]が限られているかとは思ふところなのだが、実にもって遺憾なことに上にての2. および3. と振つてのことは[確認のための論拠]を本稿でも都度、入念に挙げているとの多くの人間が易々と真偽確認なせるとの重大事そのものである(ゆえに述べるが、筆者のことを小馬鹿にしてやりたい、笑いたおしてやりたい、忌まわしい仮想論敵として反駁(はんぱく)しきってやりたいとの意図でもいい、[意]ある向きらは上にて挙げていることからしてきちんと検証いただき、その真偽の程につきよくよくご判断いただきたい次第ではある)。

お分かりかとは思ふが、たかだかもの一例として挙げた(接合するところとして問題となることはより入念にこれよりの本稿の後続する段にて摘示していく所存である中でたかだかもの一例として挙げた)以上のようなことらをもつてからして

「爬虫類人類支配説の類には[間接証拠] (操作なす側がわざわざ自分達自身で明示的に疑いの余地もなく自分達がこれをやったと告白・自白しているとの如き直接証拠の類とまでは言えぬも[ぎりぎりの線]で人間を馬鹿にしきってなのか、わざと歴史的に前面に出してきた節があるとの間接証拠の類) は存在している」

と述べざるをえぬ、判じざるをえぬ、と申し述べもしたい(：くくだしくも繰り返すが、救いようがないのは人間一般にあつて多くの者が容赦ない操作によって[人間未満の磁石移動方式のマネキン]のようなナンセンスなものに成り下がっているとでもいうのか、さにあらずんば、そのような[愚かさ]が種族の一大特性だとでもいうのか、そうした露骨なることに何ら目を向けず、他方で「情報流通の関門に配されての」相応の筋目の者達 —— 社会の口・目・耳に[それら]が主要構成要素として配されているとのいわば向こう側の手先、あるいは[手先]云々との表現が悪意・確信犯的性質との意味で言い過ぎであっても、向こう側が利用しているだけだとの実にもって愚かな社会の目・口・耳に相当する部に配されての者ら—— の流布し続けている「人間だけの」「人間だけによる」「人間のためだけの」世界の幻想に対しては無批判の受容をなしている、脳髓まで浸りつつとのかたちでなのかの無批判の受容をなしている、といった中で種族の多くの者らが[処女懐胎]や[題目]といったものを押しつけるとのあまりにも下らぬガラクタ(「宗教」などと呼ばれるもののことである)さえも信じているモードで日々を生きていることだが、読み手たる貴殿がある一定以上の自由度を蔵した向き、そして、勇気をも蔵した向きならば、問いたいものである。仮にもし(確認未了である段階を想定してここでは便宜的に「仮にもし」と付しておく)、[功利的に人間という名の養殖種を副次的に絶滅させる必要がそこにある]との場合にて愚

劣な幻影しか見ようとしな、そして、ブレーキング・ポイントにまつわる情報が呈示されたうえでもなお愚劣な幻影を紡ぐしか能がないとの種族が「一可能・不可能の問題として」[明日の日]を見ることが出来るのか」と。

尚、ここでの筆者の言いよう・摘示事項をわざと歪曲して馬鹿噺に落とし込もうとの手合い(「筆者から見れば」、そこに自我があれば、[自身のせせこましき安寧安泰のために自分の属する種族を売り払い、愚劣にも殺されていくのだろうといった按配の下らぬ「屑」ら]でもある)なぞは「浅草は爬虫類人の拠点である」

「爬虫類人が人間の中に「物理的実態」を伴ってまぎれこんでいるからそういうことになるのだ」

などといった[酸鼻を極める妄言妄語の類]を流布・撒布する可能性もあるかと思うが(自種族に資する有益なる情報を破壊しようとの筋目の情報操作の輩ら「一経験則から筆者は「彼ら」が「工作としての自組織に対する悪言悪罵をなすことにもやぶさかではない」カルト成員と多く重なるようになっていたことを捕捉している・させられてきたわけだが、とにかくもってして「工作人員でござい」といった者達「がいかにももってしてやりそうなことである」、述べておくも、筆者はそうしたことを述べたいのではない。そう、浅草の住人らやあるいは問題となるモニュメントを遺した向きら「一上述の高村光雲や平櫛田中」が物理的実態を伴っての爬虫類人そのものであるとかその[「意識的なる」手先]であるなどと述べているのでは断じてない(浅草でその活気に好感を覚えもしていたとの人間としてそのような馬鹿なことを考えたことは一度もない)。「問題なのは、人間存在一般が自分がやっている行為の意味を考えず・考えられずにコントロールされる可能性がある(多世界解釈論におけるその他の世界から侵出してくる何らかの媒質を用いての超高度技術を介して「無意識的に」コントロールされる可能性すらもがある)とすら判じられるだけのことが「ある」とのことであり、『ニューロンの活動電位の問題やEEG、脳波がまさしくそうしたものの体現物であるところの「電氣的に作用するとの脳機序」を悪用して操作をなすとの手法が用いられているのか』(でなければ厳にそこら中にある[奇怪な先覚的言及をなしている文物ら]を残す・残させることはできないであろう)と普通に考えられるようになって「しまっている」そうした状況下で脳が外的作用を受けての中での[視覚的幻影](visionary hallucination)・[聴覚的幻影](auditory hallucination)を越えては具現化しえない(すなわち我々人類の物理的に手の届く領域には具現化しえない)、また、先方からも「操り人形」の手を介して以外は直に介入することはない(というより出来ない)のであろうと判じられるとの嗜虐的操作者らが相応のメッセージングをなしていると判断できることであり、また、といった状況の行き着く先は絶望的な破滅だけであると判じられる状況・材料「も」がそこかしこにあると判断できることである(：下らぬ、そう、なんら有効な処方箋を呈示しないとの意で下らぬ[終末論者]としてもものを述べているのではなく[終末状況「回避」主義者]として強調するところとして、「ここ本稿では我々人類の文明を[忌むべき紛い物]として構築するうえでの手助けを高度機械を(当然に、であろう)活用してなし、(宗教にいう[エデンの子孫]が宗教経典たる聖書黙示録によって[最終的に大部分、永劫の地獄に落とされる]との筋書きを見ているように)[あからじめ用意した破滅]に向けての行進を人類になさしめていると判じられるように

なっている科学的先進文明のやりようのことが問題になる(嗜虐的前言があまりにも体系的かつ執拗になされている中で問題になる)とのその具体的論拠を都度、十分と判ずる量だけきちんと明示していく所存である — 筆者としてはそうした内容に怖じ気づき、逃げ惑うとの向きらをそもそも読者として想定していない(情報の拡散流布に陳腐劣化という意味以上で協力するわけでもなく、足を引っ張ることしかなさぬであろうとのそういうものには本稿は読んでもらわなくていいと考えている)との中での[証示]を命を賭けてなす所存である—」)。

(ここまでにてデービッド・アイク説にまつわる付記( Supplementary Note)の部を終えることとする —※— )

(※尚、筆者も一面では評価していた —殊に徐々に自身の中の常識の壁が決壊していく中、一時期、過度にニューエイジャー・チックとなっていた折はそうであった— もの、ここ最近になって失望ばかりを強めさせられもしているとのデーヴィッド・アイクという論客、彼アイクが具体的に何を言いやってきたのかについては本稿を公開しているサイトの一でも解説しているところなのだが、彼の主張内容にとみにみとめられる欺瞞性、特にもってして[[人類滅亡を企図してのものであるトロイアの木製の馬の「不在」性]を印象づけるようなやりよう][ありとあらゆる問題の根をたかだかもの虚偽を伴った新世界秩序陰謀「論」に矮小化させるやりよう]、また、[重要な不正への認識を間違った方向に誘導し正しいことを見させないようなにしているが如くやりよう]に見る欺瞞性については本稿それ自体の後の段にても都度、解説していくこととする)

(直上までの付記の部から本題に引き戻すとして)

さきんじてデヴィッド・アイクの「特定の」申しようからさしあたり問題視すると申し述べもしていたが、について具体的には、論客デヴィッド・アイクの著作、**Children of the Matrix (2001)** にあって

#### [アトランティスに対する蛇の種族の侵略]

にまつわる記述が — 極めてエキセントリック(奇矯)かつパラノーマルな(paranormal:超常的な)話であること、そして、歴史的贗造物(archaeological forgery)であるものが引き合いに出されての話であることを承知の上で書くところとして— みとめられる、[そうしたことからして何が述べられるのか]とのことより問題視する(直下出典紹介部を参照されたい)。





# SOURCE

## 34

本段、**出典(Source)紹介の部 34**にあつては

[アトトラティスが蛇の種族に侵略されたとの神秘家申しようがかなりは早い段階からなされもしていた]

とのことを示すための引用をなすこととする。

(直下、Children of the Matrix (2001)原著にての CHAPTER 8 the shape-shifters[変身なす者達]、その中の The children of the shadows と振られての節よりの引用をなすとして)

---

Ancient tablets, alleged to come from beneath a Mayan temple in Mexico, describe the reptilians and their ability to shape-shift. These accounts correlate remarkably With modern experience and reports. They are known as the Emerald Tablets of Thoth, who was a deity of the Egyptians. It is claimed that they date back 36,000 years and were written by Thoth, an "Atlantean Priest-King" who, it is said, founded a colony in Egypt. His tablets, the story goes, were taken to South America by Egyptian "pyramid priests" and eventually placed under a Mayan temple to the Sun God in the Yucatan, Mexico. The translator of these tablets, who calls himself "Doreal" (Maurice Doreal), claims to have recovered them and completed the translations in 1925. But only much later was he given "permission" for part of them to be published, he says. However, you don't have to accept all the details of that story to appreciate the synchronicity between what these tablets say and what is now being uncovered. The following is the relevant section in the tablets to the subjects we are discussing.

"Speak of ancient Atlantis, speak of the days of the Kingdom of Shadows, speak of the coming of the children of shadows. Out of the

great deep were they called by the wisdom of earth-man, called for the purpose of gaining great power.

"Far in the past before Atlantis existed, men there were who delved into darkness, using dark magic, calling up beings from the great deep below us. Forth came they into this cycle, formless were they, of another vibration, existing unseen by the children of earth-men. Only through blood could they form being, only through man could they live in the world.

"In ages past were they conquered by the Masters, driven below to the place whence they came. But some there were who remained, hidden in spaces and planes unknown to man. Live they in Atlantis as shadows, but at times they appeared among men. Aye, when the blood was offered, forth came they to dwell among men.

"In the form of man moved they amongst us, but only to sight, were they as are men. Serpent-headed when the glamour was lifted, but appearing to man as men among men. Crept they into the councils, taking form that were like unto men. Slaying by their arts the chiefs of the kingdoms, taking their form and ruling o'er man. Only by magic could they be discovered, only by sound could their faces be seen. Sought they from the kingdom of shadows, to destroy man and rule in his place.

(上記原著引用部に対する拙訳として)

「メキシコはマヤ期神殿に由来すると主張されもしている古代の碑文らがレプティリアン（[爬虫類人]とデーヴィッド・アイクが呼称する操作者）および彼らの変身能力についての描写をなしている。その碑文らに見る書かれようは今日の経験・報告事例と合致するところがある。

（ここで取り上げている）それら碑文とは「エジプトの神として知られるトートの名を冠するエメラルド・タブレット」である。「36000年前に遡るものである」と主張され、また、「エジプトにコロニーを創始した「アトランティス神官王」たるトートによって書かれたものである」とも主張されているとの碑文らとなる。

同[トートの碑文]にてはその碑文がエジプトのピラミッド聖職者らによって南アメリカに持ち込まれ、そして、メキシコ・ユカタンにての太陽神を祭つてのマヤ神殿の下に安置されたものであるとつづられている。自身を「ドリール」 —注:ここでは「リアルにする」とのことをデーヴィッド・アイクは強調しているようにとれる— 「モーリス・ドリール」と名乗る碑文解読者は1925年にそれらを修復・解読をなし終えたと主張し、「だが、一部の出版の許可を与えられたのはより後のことである」と同人物は述べもしている。

しかし、あなた(デーヴィッド・アイクが読者を形容してのあなた)はその碑文らが言っていることと今日、明かされてきていることの一致性の価値を認めらう。うえで、ドリールのそうした話の細部についていちいち認容する必要もないだろう。

次の部が我々が議論の俎上にのせている主題と相関関係を呈している碑文にあつての問題となる部となる。

「古代アトランティスについて語りたまえ、影の王国たるありし日について語りたまえ、暗闇の子らの到来について語りたまえ。より強き力を欲せんとのため、彼ら暗闇の存在、地上の賢者より深淵の外へと呼び出されるなり」

「アトランティスのありし日より前に遡る往古、暗闇によって分かつたれし者ども、黒魔術を用い、我々より下にある深淵からの存在を呼び出さんとした人間らがいた。この世界の輪に彼らがやってくる時、彼らは別の振動領域に属し



て形なさず、地上の者達には姿が見られずとの形にて存在をなす]  
[かつて、彼らは彼らがやってきた場へと下ったマスターらによって征服された。しかし、思い出すべきは人間には知られぬ隠された空間、領域があることである。彼らはアトランティスに影として生き、時に人の間にその姿を現した。血が供されたとき、彼らは人の間に居を定めるべくも上昇してきた]  
[人の形をなして彼らは我々の間を闊歩し、彼らはただ見かけ上、人間であるように見せたのだ。彼らは魔力が発露するとき蛇の顔を現した。彼らは人間の形をなして議会に入り込んだ。そうした者らはその秘法にて王国の首長らを殺害し、殺害した彼らの形をなし、全民衆を支配した。魔術によってのみ彼らは探知され、音によってのみ彼らの素顔は見られた。人間を破滅させ、そして、そちら領域より支配なすためのものとなっている影の王国にこそ彼らは見出される(以下略)』

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source)紹介の部 34**はここまでとする)

---

さて、要約すれば、上にて引用なしたところにあつてデービッド・アイクという論客は

「トートのエメラルド・タブレットというマヤの神殿にて発見されたと「主張」される碑文（モーリス・ドリールという人物に一九二五年に修復・解読されて、より後の折に許可が下りて刊行されたと「主張」なされてのもの）にて  
[アトランティス時代よりはるか前に地上に呼び出された蛇の顔を持つ別の振動領域の存在がいたこと]  
[その存在らがアトランティスにも血によって具現化するとの形にて人知れず存在し、王国の首脳部を乗っ取ったこと](デービッド・アイクはその記述がアトランティスの崩壊と結びつくようにも引用部の後に強調する)  
とのことがに書き記されているとされること、そうしたことが(文書由来どうあれ)今日の状況に合致する」

とのことを述べているわけである(疑わしいとの向きは引用部との対応関係につき確認されたい)。

以上、要約なしたことについては 一裏を取ってそこまで確認したとの人間がいかほどまでにいるかは分からないが—

「**それ自体では**歴史的贋造物( **archaeological forgery** )に依拠しての何ら信用の置けない話をなしている」

とのものである。

その点、[トートのエメラルド・タブレット]と訳出部にて呼称されているもの、

[中世期欧州にて現実に存在したエメラルドタブレットという(それからして出所に疑義がある文書とも考えられるが)錬金術関連文書からその呼称を神秘主義

者が勝手に借り受けている捏造古代碑文]

はその刊行より以前に刊行されていたパルプ雑誌掲載の小説の粗筋から「露骨な影響」を受けている、「文言レベル」で「露骨な影響」を受けていると判じられるとの「紛い物」である（「古代アトランティス」に由来するなどという「子供騙し的な胡散臭さ」は言うに及ばず、紛い物であると該当サブ・カルチャーにつき知っている人間にはすぐに判断できるようになっているし、そうも紛い物であると確言しもする論拠も直下、挙げることとする）。

そこにいう「史的「紛い物」性」に関わるどころとして

「アトランティスが蛇人間の「影の王国」に侵略されているとの筋立て」

を伴っている『トートのエメラルド・タブレット』（和文ウィキペディア「モーリス・ドリール」項目に見るように1939年に変名のフランス人 Marice Doreal にて刊行されもの「ちなみに左モーリス・ドリールは前世でキリストと会ったなどと主張する「相応の」人種であったとも知られている」という文書の内容が小説家ロバート・エルヴィン・Howard（拳銃自殺を遂げた早世の作家として知られる多作の作家 Robert Ervin Howard）の創作物に「使用文言込みで」酷似している、すなわち、1929年（の8月、とすると、第二次世界大戦の契機となったと歴史家が総括しもある世界大恐慌発端の株価大暴落開始の二ヶ月前）に作家ロバート・エルヴィン・Howardがものした The Shadow Kingdom『影の王国』「反響を呈したためにシリーズ化されたキング・カル・シリーズの第一作にあたる小説」と「文言レベルで」非常によく似ているとのことがある（直下、[出典 \(Source\) 紹介の部 34-2](#)を参照されたい）。

---

[出典 \(Source\) 紹介の部 34-2](#)



SOURCE

34-2

本段、[出典 \(Source\) 紹介の部 34-2](#)にあつては

「神秘家による「アトランティスが蛇の種族の影の王国に次元間侵略された」との太平洋戦争勃発前から存在している言い様」が「より以前から存在していたパルプ雑誌掲載小説から「文言込みに」剽窃されたと判じられるものとなっている」

とのことの典拠を挙げておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia [ The Shadow Kingdom ] より問題となる部を引用  
するとして)

---

"The Shadow Kingdom" by Robert E. Howard is the first of Howard's Kull stories, set in his fictional Thurian Age. It was first published in the pulp magazine Weird Tales in August 1929.

[ . . . ]

The story starts shortly after the Atlantean barbarian Kull has conquered Valusia and become its King. Kull is invited to a feast by the Pictish ambassador to Valusia, Ka-nu the Ancient.

[ . . . ]

Brule reveals that the Serpent Men, an ancient pre-human race that had built Valusia but was almost extinct, ruled from the shadows, using their Snake Cult religion and ability to disguise themselves with magic. They intended to replace Kull with a disguised Serpent Man, just as they had done with his predecessors.

(拙訳として)

『影の王国』は作家ロバート・E・ハワードによる架空のトゥーレ時代(注:日本語訳では訳者らがテューリア時代と訳している)を作品舞台に据えてのカル・シリーズ、その第一作にあたる作品である。同作はパルプ雑誌『ウィアード・テイルズ』に1929年8月に発表された作品となる。

…(中略)…

物語はアトランティスの蛮人カルがヴァルーシア国を征服、その王となってより間もなき折からはじまる。カルはピクト人の特使の老カ・ヌによって宴に招かれることになる。

…(中略)…

(宴の席にてその近々の来訪が王に伝えられた槍の名手である)ブルーは[蛇人間ら、ヴァルーシア国を設立したもののほとんど絶滅しかけているとの人類より前より存在している太古のその種族が[スネーク・カルト]を用いて影よりの支配をなしていること、そして、魔法によって彼らの姿を偽れる能力を有しているとのこと]を明かした。彼ら蛇人間はカルを彼の前任者の王らがそうであったように人間に化けた蛇人間へと置き換えることを企図しているとのことをカル王に伝えた」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする —※— )

(※微々たることであろうと向きによってはとらえるところかとも思うのだが、上の小説『影の王国』の主人公たるカル王が君臨するヴァルーシア国が古代アトランティスに内包されている国家であるとの設定が採用されていることの典拠を挙げておく。

(直下、和文 Wikipedia [キング・カル] 項目(ほぼ英文 Wikipedia [Kull of Atlantis] 内容に準拠して書かれている項目)の現行記載より原文引用なすとして)

“カルは、紀元前2000年、大変動で沈没する前のアトランティス群島

に生まれた。当時のアトランティスは未開の蛮人たちによって支配されていた。アトランティスの東部、古きテューリア (Thuria) は、コモリア (Commoria)、グロンダー (Grondar)、カメリア (Kamelia)、テューレ (Thule)、ヴァレリア (Verulia) などのいくつかの王国に分割されていた。その中で最も強大だったのがヴァルーシア (Valusia) である ” (引用部はここまでとする ——尚、英文ウィキペディア [ Kull of Atlantis ] 項目の該当部解説では [ Kull was born in pre-cataclysmic Atlantis c. 100,000 BC. At the time Atlantis was ruled by barbarian tribes. East of Atlantis lay the ancient continent of Thuria, divided among several civilized kingdoms, including Commoria, Grondar, Kamelia, Thule, and Verulia. Most powerful among these was Valusia. ] と同文のことが記載されている—— )

(出典 (Source) 紹介の部 34-2 はここまでとする)

上もてお分かりいただけることか、とは思うのだが、

「人間の姿をとる蛇人間らによる「影の王国」(シャドウ・キングダム) が「アトランティス (正確にはアトランティス時代のアトランティスに近接する領域にての王国) の統治機構」を「人間らの王族にすり替わった蛇人間」を通じて支配している」

というのがロバート・ハワード小説 The Shadow Kingdom (1929) — Kull of Atlantis シリーズとも銘打たれる一群の作品らの第一作— の作品設定である。

対して、デヴィッド・アイクがその著作 Children of the Matrix で引き合いに出しているモリス・ドリールという男が刊行した The Emerald Tablets of Thoth (1939) は

「人間の姿をとる蛇人間らによる「影の王国」(シャドウ・キングダム) が「アトランティスの統治体」を「人間らの王族にすり替わった蛇人間」を通じて支配している」

といった内容を有しているとのものである (ただし、ロバート・エルヴィンの小説『影の王国』と [同様の言い回し]・[同様の内容] を有していてもドリールのそれには [次元間侵略] とのモチーフが付け加えられてもいるわけではあるも)。

本稿筆者は、であるから、一重要な比喻の問題がそこに介在しているか否かにかかわらず—

「「影の王国」という文言込みでの盗用 (古代アトランティスの碑文を解読したと自称している神秘主義者モリス・ドリールによる盗用) が問題になる」

と当然に判じているし、それはまた至極当然の一般論の問題である (と述べても差し障りなからうことである ——※尚、『第二のエメラルドタブレット』(1939) なる自称古代アトランティス由来の神秘家文書の窃用・模倣の対象とされている節が露骨にある『影の王国』(1929) をものした著名作家の名は (直上表記のように) ロバート・エルヴィン・ハワードとなるのではあるのだが、デービッド・アイクという男はそちら作家のミドルネームでもある [エルヴィン] との名について「エルヴィン Elven などのエルフと結びつく言葉は爬虫類人・イルミナティ血族 (と彼がその実在を主張する人的紐帯) の暗号となっている」などともその著作『チルドレン・オブ・マトリックス』の中で



「まったくの別文脈で」何度も強調するとのことをなしている(エルヴィンの言い分は爬虫類人の手先の言い分であるとの印象付けをなしているとのことである)。その点、作家ロバート・「エルヴィン」・Howardの手になる『影の王国』という作品の具体名を一切出さぬ中でそうもした(作家のミドルネームでもある)「エルヴィン」まわりの主張をアイクという男が何度もなし、そして、同じくもの著作『チルドレン・オブ・マトリックス』の中で(先に引用なしたようなかたちでの)ドリール文書の取り上げ(それがさも重んずべき対象であるかのような取り上げでもある)を(ドリールの妄言文書による[エルヴィン]手仕事に対する剽窃の可能性になんら言及することをせず)なしもしている。筆者としてはそこにて計算されての巧妙かつ悪辣なやりようが介在している可能性もあると見ている。そう、現実改変能力がポテンシャルティとしてなんらない(のみならず[イルミナティ血脈]云々といった的外れなところで人間(じんかん)に相互不信を広めるとの役割は帯びている)との虚偽としての「現代神話」体系の[一面での説得力を伴った効率的流布](たとえばモーリス・ドリールの手仕事が先達のロバート・エルヴィン・Howardの模倣と気づいた向きにあっても「エルヴィンは悪魔の血脈である」云々といったアイクの論理が滲透するように計算されているといった意味での効率的流布)のためにそうもした巧妙なやりようが介在している可能性もあるかもしれないと私的に考えているのだが、については、だが、私的目分量とのことで押しつけをなすつもりはない—— )。



The Shadow Kingdom  
(Kull of Atlantis series)

1929

"Ancient" tablets (of Maurice Doreal) 1939 published (1925 - baseless.)

"Speak of ancient Atlantis, speak of the days of the Kingdom of Shadows, speak of the coming of the children of shadows. Out of the great deep were they called by the wisdom of earth-man, called for the purpose of gaining great power.  
 "Far in the past before Atlantis existed, men there were who delved into darkness, using dark magic, calling up beings from the great deep below us. Forth came they into this cycle, formless were they, of another vibration, existing unseen by the children of earth-men. Only through blood could they form being, only through man could they live in the world.  
 "In ages past were they conquered by the Masters, driven below to the place whence they came. But some there were who remained, hidden in spaces and planes unknown to man. Live they in Atlantis as shadows, but at times they appeared among men. Aye, when the blood was offered, forth came they to dwell among men.  
 "In the form of man moved they amongst us, but only to sight, were they as are men. Serpent-headed when the glamour was lifted, but appearing to man as men among men. Crept they into the councils, taking form that were like unto men. Slaying by their arts the chiefs of the kingdoms, taking their form and ruling o'er man. Only by magic could they be discovered, only by sound could their faces be seen. Sought they from the kingdom of shadows, to destroy man and rule in his place.

—— David Icke ,Children of the Matrix (2001)

※上掲図にての非テキスト部にて挙げているのは英文 Wikipedia [ The Shadow Kingdom ] 項目に記載されている小説『影の王国』掲載の図となる（同図は著作権失効明示画像としてウィキペディアに掲載されているものとなる — また、同じくもの図は（筆者が手ずから確認しているところとして）国書刊行会より出されているパルプマガジン『ウィアード・テイルズ』復刻版（ウィアード・テイルズ(2)）にての和訳版『影の王国』掲載部にて「も」見受けられるものとなる — ）。

上掲図に付したテキスト部にて何が影響・被影響との絡みで問題になるのか — [傀儡のような人間に対してどこぞやら指示がなされたうえでの窃用が具現化を見ているとも受け取れもする]のだが、それは置き、常識的先後関係の問題で何が問題になるのか — ご理解いただけるか、とは思（：当時当代にあって押しも押されぬ売れっ子作家となっていたロバート・ハワードの1929年小説『影の王国』では[古代アトランティス世界にての蛇人間らによる影の王国からの侵略]がその作中モチーフとされている。他面、時期的にロバート・ハワード小説に10年遅れてのモーリス・ドリールという神秘主義者による自称古代アトランティスの解説碑文（1939）でも[古代アトランティスにての蛇人間らによる影の王国からの侵略]がモチーフとされている）。

**本筋から離れての付記として（言論それそのものの効用に関わりうるのかたちで今後生じうる「ありうべき誤解」を避けるべくもの付記として）**

ここで「これ偏狭也。」「くどいにも程があろう」との誤解をおそれずにも付記しておくが、先の段にて意図してその申しようを引いたデービッド・アイクという人物（欧米圏で物議を醸しているとの[爬虫類人類支配説]という異説の主唱者）の言論につき、現行、

『（デヴィッド・アイクというのは）多く「捏造論拠・信用のおけない論拠にばかり基づいて」話をなす（さらには把握するところとして「他者言論を吸収しながら[悪魔主義爬虫類血族支配の新世界秩序企図陰謀理論]なるものに組み込んでの話をなす」）向きであろう。

そうしたやりようがために、—我々人類がこの先も存続することが可能である、あるいは、存続の可能性があると仮定して—後代にあってその言説の実態調べた向きに[広く流通しているその申しよう]（人類の支配者は爬虫類人であるとの異説）について

『また例の法螺話か』

と思われるといった向きであり（あるいはそれに類する攻撃材料を与えるだけの向きであり）、彼のやっていることは—人類を詐害せんとする機序によって[知名度]（虚名とも）は与えられても—多く[なんら意をなさない]だろう』

との心証を覚えるに至ってしまったとの者がこの身、本稿筆者である（：さらに述べれば、本稿筆者は『多くの熱烈なる宗教信者に[宗教]というシステムの高度な実利的側面についての想像が及ばぬように個人思惑とは別のところとして上のような効果をもたらすことがデヴィッド・アイク・プロモーション力学の背後にある[はなからの狙い]であるかもしれない』とさえ考えるに至ってしまったとの者でもある。その点、デヴィッド・アイクやりよう—本稿を公開している



サイトの一でも多少細かくもの解説を講じているところのやりよう—には当初、肯定的に評価していたのではあるが、最近になってとみに失望感を一層深めさせられている（ひとつに彼が出典上の誤りをなんら正さず、また、本質的な問題となるところが他にあるにも関わらず、ある種の俗悪性も感じさせるやり方で表層的なところで非を鳴らすか、(本稿でも後述(かつ講述)するような式で)まったくもって真偽不明なる話をなすのに注力しつづけているからである)。それにつき、筆者考えでは「ゼロやマイナスは足してもゼロやマイナスにしかならず、ただ単に真偽不明であるとのことに加えて捏造論拠に依拠しての申しようをなすなどとのことは人類の本当に望ましき未来にあっては[マイナス]にしかない」とのこととあいなる)。

そう、デービッド・アイクという人物およびそのコラボレーター(説の流布に努めているとの者達)らに

[本当に重要なこと]

の真実性について裏を取る気風があるのか、彼らに真実の訴求との観点で本当に人類のために動く気概(あるいは真に人間たらんとする者に相応しき自由度)があるのか、ということについては筆者としては[何ら期待などできない]と見るに至っているのである。今日ここに至るまでの彼らやりようの分析をなし続けてきた結果をもってして、である(同じくもの点に関しては本稿のかなり後の段で具体論としてデヴィッド・アイクという人物が[LHCの類]をどのようなものと看做して、それについてどういった物言いをなしているのか、そして、そうした言説が「自分では満足に考えることのできない」種別の人間らを媒介項としての[妄信の毒]たるかたちでいかように社会に広められているのかについて手前が把握するところの解説を「細かくも」なすこととする)。

ただ、同アイクについては

「ここでは慎重になるのか」

ととれるところもあり、

(上の訳出引用部にてもそうしたところが含まれるところとして)

「しかし、読み手はそのドリール碑文ら(アトランティスに対する蛇人間の影の王国の侵略について扱っているとの碑文)が伝えんとしていことと今日、明かされだしてきていること(爬虫類人支配の実体とのアイクの申しよう)の一致性の価値を認めるうえで、ドリール申しよりの細部につきいちいち認容する必要もないだろう」

と書くとのやりようまでは往々にしてなす、ドリール申しようが矮小なる剽窃物のそれであることを受け入れる用意がある(実際には彼はそれをしてくれはしないのではあるも欠陥を受け入れる用意があるように臭わす)とのことを書くぐらいのやりようまでは往々にしてなしている——であるから、(信の置けぬ論拠を挙げていることを知った上での狡猾さの発露でなければだが)、デービッド・アイクのやりようの方が彼の手放しの礼賛者らよりは「幾分ましである」とは見えもする——。

以上、デヴィッド・アイクという人物のやりようの問題性について言及したうえで

「自身の言論(訴えんとしていること)を守るために必要なこと」

と判じて書いておくが、日本で現行、デービッド・アイク関連の物言いを広めている者達には「個人的にも」そのやりようについて[それなりの判断をなさざるをえぬ]との側面が多々見受けられるとのことがある。

そうした者たち — 匿名ないし偽名・筆名でか、の日本にてのデーヴィッド・アイクの説の拡散者ら — のやりようについては元より計算でもしているのか、もしそうであるのならば、「悪質であろう」ととれるところとして、  
[「文献的事実にまつわるところで裏を取った人間には」多く信用の置けぬところがあるデーヴィッド・アイクの話]  
に対して、「さらに」との式で、  
[まっとうな人間には軽侮されて然るべき類の話]  
を付しているといったところが目につくとのことが「ある」(:たとえば、先にそちらよりの引用をなしているところの Children of the Matrix「の訳書」 — 相応の邦題が振られ、ほとんど国内では流通「していない」との訳書でもある — にカブレラ・ストーンといった偽造プロセスまで問題視され広くも如何物(イカモノ)視されているものにまつわる追加トピックを目立って「付け加えられている」といったことまでが国内ではなされているのだが、その委細はここでは解説しない)。といった力学に通ずるところでこの身の訴えんとしている(ところの類縁領域)にまで[色]を付けたいのか、との観点を「強くも」抱くに至っているとのことがある。

その点もってして[公憤]ではなく[私怨先行の話]をなしているなどと誤解して欲しくはないのだが、  
[次のようなこと]  
が[手前のやってきたこと]に対して「も」なされたことがある(常識世界の問題では「[債務不履行](民法414条から415条)・[不法行為](民法709条)といった法律問題に発展させるべきか」とも考えたことなので慎重な筆致で書く)。

---

本稿のようなものをものし、その真偽を問うことを自身の余力を全て注力してなすべきと判ずるに至った人間、そうした人間由来の話としてなすこととして、手前が自身の訴求活動の前身としてもものしていた著作の商業出版 — 自費出版ではなく手前がいくばくかの印税を貰っての商業出版である — に関して「も」[事実上の出版契約]締結がなされていたとの状況下で相応の者達による尋常一様ならざる陳腐化の憂き目に逢ったとのことがある。

検索エンジンには引っかかるようなかたちとはなっていないが、改訂を加えてオンライン公開なすことにしたとの『人類と操作』という著作が手前手仕事としてある。

同著については事実上の出版契約が結ばれ特定出版社からの商業出版での話が進んでいたのだが、どういうわけか、「99.99(略)パーセント出版します」との先方出版社役員の話が  
「経営事情で出版は出来なくなりました」  
との運びとなった(既に先方から編集者も付けられておりこちらの時間も制約されていた、機会損失が発生していたのであるから、弁護士が述べるところでは役員の申しようをあわせて本稿筆者に対する債務不履行の問題が観念されるとのことであった)。

の際、同出版社からの出版に代えての大手出版「など」複数社 — の

中にはデヴィッド・アイク関連の書籍を出している大手出版社が含まれている——での出版提案とのかたちでの[介入](初期の出版計画が潰れた後、即座にトンデモ化が強くも想起されるかたちでの[合の手]を入れての介入)の提案が特定人(某大規模宗教団体関係者とのことをこちらで聞き及んでいた人物)関与の下でなされていることが明らかになったのだが、まずもって、そこに至るまで

[原稿流出なければ説明できずとの品性に欠ける相応の行為 — 関連するようなテーマのネット掲示板での褒め殺すように原稿に近いことを書き綴るなどとの眉をひそめるようなやりよう — ]

をなされていたとのことがある(目立っては2010年前半期からの動きである。こちらが印税もらってのいわば金銭にまつわる約束事が前提になっての素人のお家芸ではないところでの話で[そういうこと]が起こっている — といっても筆者は『びた銭でも大枚でもこの期に及んで銭金(ぜにかね)などどうでもいい』と心底思っていたのだが—)。

また、その他の意味でも[それなりの判断]をなさざるをえないといった動きを — 記録証跡の取得に当然に努めざるを得ぬとの式で — 後に把握させられたとのことがある(あまりにも悪質かつ組織的なやりようである、かの有名な[言論出版妨害事件]の再燃かと自然にとらえられるものであるために話を聞いた人間ならば、[尻込みするようなやりよう]をなされたとのことがある)。

そうした動きとの兼ね合いで[手前の言論]に関わるどころ「でも」日本のアイク説の広め手との兼ね合いでは[他人事]と見ることができないといったことがあるのである。

---

以上が(不快極まりない委細を全て端折っての)色つけのやりようの端的なる例である —— (自著の商業出版が初期目標通りに実現させられないようになった一方で[橋頭堡とすべくもものした自著の原稿の流出](出来の悪いマーケティングがなされたというよりも陳腐化をなされたとの式を伴っての流出)が「相応の掲示板書き込み内容との絡みで」観察された、また、それと並行して[アイク系の本を出している大手を含む出版社ら]よりの[トンデモ本化]でもしたいのかといったかたちでの代替出版が提案されていた) —— 。

以上のことに言及したうえで加えて書き記しておくが

[[大事なもの]が奪われた人間らには絶対に「出来ぬ」と見立てるに至った指し示し —— 批判的視座にてでもの精査検討を請いたいとの確たる論拠に依拠しての指し示し —— ]

に「遺漏なくも」努めている(意あるところとしてそうしたものとしてしたためている)との本稿にあっては、

[デヴィッド・アイクの言論展開(の「舞台裏」)を巡るあれやこれや] など本来的には

[取り上げるに値せぬもの]

であるとの認識、そうした認識を抱くに至るまでに突き抜けたとの人間なりの逡巡もあったのだが、かつて自身のデヴィッド・アイク説に関する拙き分析を記していたとの自著にまつわるなせされようのことを顧慮しつつも「本稿にて」展開している言論を守るべくも次のこと、「さらに」言及しておくこととする。

---

筆者はデヴィッド・アイクの主張「をも」細かくも分析なしでの書を特定出版社(だけ)に渡しており、の折、2009年に遡る折に相応の者達に非常に望ましくはないとのやりようをなされたとのことがある人間となること、一委細を省きつつ一 直近にて述べた(：[民法上の問題]としては時間・労力配分を拘束しての中での100万ほどでの債務不履行の可能性ありということで法律問題にはできるのではとのことであったが(弁護士は「腹を立てずにその程度が妥当であろう」と述べていたのだが)流石に大人気ないとのことで法的問題化などは差し控えた)。

そのようなデヴィッド・アイク説に対する分析をなしてもいた自著を巡る事前経緯があったことについて(「敢えても」委細触れずではあるも)言及なしとうえで強調しておくが、筆者はデヴィッド・アイク本の紹介に携わっている者らと一彼らのやりよう(あるいは[やらされよう]か)についてはよく知っているが一「なんら関係がない」との人間である。

だがしかし、  
「他者目分量の問題として」  
同じくものことにまつわって誤解を抱かせる素地あることが「際立って」具現化しているとのことをこれまでに観察することになってしまったとのことがあるので、  
についての多少微に入っている表記をなしておく。

たとえば、——これよりも殊更に自身の言論を守るために書くことだが——  
筆者が重要なことを訴求するために設けたサイト、出版頓挫した自著を半ば拙きPDF版に焼き直して公開することにしたもの「でも」あるサイトがサーバー領域で「どういうわけか」まさにここまで言及なしとのまさしくもの流れに関わる大手出版社(筆者著作の出版にお呼びではないところを合いの手を入れてきた向きによってそこよりの出版が推されていたとの大手出版社)に出入りしている向き、ユダヤ系陰謀論を展開しているとの向きの宣伝サイトと筆者自身の関知できないところで隣り合うことになさしめられているとの状況が出来(しゅったい)し、その対処(逆引きドメインIP情報の録画までもしている)に思案を巡らせつつ怒りを覚えたとのことまでもが「ある」(そちら「も」弁護士に資料を渡しているようなことでもある。というのも[同じくもの関係出版社の一つ]に関わるところとしてそうした偶然が起こる可能性は普通では考えがたいことであるとの認識「も」当然にあったからである)。

それにつき、ただもってそういうことがあったと断るだけでは  
[ある程度情報技術に通じ情報収集力が高いとの人間]  
などがさも抱こうとの人間関係の誤解を払拭できはしないことかとは思(それだけ異常異様なることがサーバー領域で具現化している)。

だから、ありうべき誤解を可及的に避けるためにさらに次のこと、申し述べもしておく(いざとなれば自身の訴求せんとしていること、世に知らしめんとしている[真実]のために全力を投じて不条理に抗うつもりだが、現時点では[詰まらぬこと]で法律問題にしたくないとの観点から(法的観点で)「抑えめ」の具体例呈

示をなしておく)。

⇒

2009年に筆者は(ここでは敢えて名を伏せるが)著名なる洋著らの邦訳版の版元でもある堅めの某出版社(こちらは大手ではない)に自身の原稿——以降の自身の訴求活動の前哨とすべく、そして、[データに基づいての人間の歴史の虚偽性の訴求をなすべくも著した拙著『人類と操作』の原稿——を渡していた。そちら著作『人類と操作』の出版の過程で不快な状況を見、「99.99(略)パーセント当社から出版します」と述べられていた状況が頓挫に向かい(前述の通りである)、後、俗悪な書籍ばかりを出していると見ていた大手出版社にての(陰謀論本としてか)代替出版を出版社出入りの向きに薦められて、名も利もいまやどうでもいい、ただひたすらに[真]にのみ生きようと決していた筆者はそうした提案を固辞した(その過程も最後の方は非通知ではなくにも「告知」録音に努めていた)。

といったプロセスを経て著作『人類と操作』をオンライン公開することにしたのだが、そちらサイトに関しては「2011年に遡っての」サイトビデオ録画記録映像を——偏執狂的ともとられようが、相応の行為・やりようの表出を受けてのこととして——遺してきたとのことがあり、そうして記録遺しているところ(現行、「どういわけなのか」検索エンジンにも表示されにくくなっているところの自サイト)にては

「デヴィッド・アイク説、爬虫類との特性を有する知的存在が人類史に介在しているとの説については日本にての宗教のありようと接合性が観念されるところである。日本にての神道、その神なるものの領域に飾られる注連縄(しめなわ)が交差する蛇に由来するとされてきたことや、また、同じくも神道、そちら体系を受けて神棚にて飾られる[鏡]カガミにあってのカガミの言葉の由来が(とぐろを巻く鏡餅「カガミモチ」の名称にもその片鱗が見出せるとの式にて)[蛇カガミ]にあるとされることとの兼ね合いで相応のにおいを感じさせる」

といった趣旨のことをも一微細なることをくぐらと述べていると思われるかもしれないが——書き記しもしていたとのことがある(ちなみに、筆者は自身のやろうとしていることを無為に変ぜんとするといった悪質な剽窃その他の行為に曝される可能性、および、サイトそのものがそこにあるのにも関わらず視界内に存在しないものとなさしめるインターネット・センサーシップ(本来的には違法なる実質「非」表示化措置)のことをも考え、サイトの内容や映り具合を——過去に遡ってその内容の変化を確認する手法もあるのだが、海外アーカイブに全幅の信頼が置けるか疑義があるとの観点から——全ページ日付け証跡付きの式で録画をしてきたとの人間となる。ために、自サイトの記述内容や細かき表示のなされようは2011年前期に遡って記載事項として日付け証跡付きで証明可能なことである)。

なにがしかの有用な作用を及ぼせたらば、世を(自身が属する)人間という種に望ましい方向に変えるうえでの[一石]を投じるようなものと出来ればと公開していた自身のウェブサイトにての「特定部」——そちらはサーチ・エンジンのセンサーシップ(非表示化)の危惧からの経年録画との兼ね合いで示せるところとして[爬虫類人にまつわる異説]関連のトピックスをそれなりに深く煮詰めんとした(つもりである)との特定ページでもある——と

[酷似していること]

が最近になっ有為転変を見ているとのウィキペディアの特定項目(同ウィキペ



ディアもギガバイト級のダンプファイルを筆者が定期的を取得している媒体であり、オフラインでもその記載内容の変化を確認できるようになっている媒体ともなっている)、[デイビッド・アイク]項目に後付けで掲載されるように[なった]の事を把握しているとのことがある。

その点、延々、微少的なる(下らぬ)属人的あれやこれやについて書き記すようであるが、それ自体をもってしても本稿指し示しの主体としての筆者誠実性を推し量る材料としていただければ、との観点で引用なすところとして、2011年前半に遡る録画内容から日付け証跡の指し示しができるとの筆者サイト(『人類と操作』という自著作を公開し、そちらを敷衍しての申しようをなしもしている筆者サイト)申しようと内容と「極めて似たようなこと」が後付けで、だが、[先後関係]や[人間関係]につき誤解を抱かせるようなかたちで和文ウィキペディア —最低限のIPは残るが、手順させ踏めばだれでも編集可能な媒体—に下のようなかたちで登場を見たとのことがある。

(直下、本稿執筆本段執筆時現時点にあつての現行にての和文ウィキペディア[デイビッド・アイク]項目 ——当初は一言のみの解説に毛が生えた程度のものであつたところが記述ボリュームをここ最近になって徐々に増してきたとの項目—— の一部記載内容を原文引用するとして)

デーヴィッド・アイクの著書の翻訳家である為清勝彦は、レプティリアンを「蛇の神」と置き換えれば民俗学ではよくある話になる、と指摘している。また為清は、吉野裕子らの研究を挙げ、デーヴィッド・アイクのレプティリアン説を補強している。それによれば、日本の縄文時代には既に「蛇の神々」を崇拝する文化があり、その信仰は神社の注連縄(しめなわ)や神体である鏡(蛇身:かかみ)という形で残っている。かつての日本には様々な動物信仰が存在したが、その中でも蛇は「祖先神」「宇宙神」として破格の扱いを受けている。日本古代の祭は、巫女と蛇の混合がテーマであった可能性がある。縄文時代の土偶は非人間的で異様な姿を取っているが、それは「来訪者」の姿を模したものである可能性がある。

(「現行にての」記載内容よりの引用はここまでとしておく)

上から見受けられるように日本のアイク関連の書籍の翻訳者の一人となっている人物につき、(誰でも編集がなせるが、IPは残るとの)ウィキペディアにて

「また為清は、吉野裕子らの研究を挙げ、デーヴィッド・アイクのレプティリアン説を補強している。それによれば、日本の縄文時代には既に「蛇の神々」を崇拝する文化があり、その信仰は神社の注連縄(しめなわ)や神体である鏡(蛇身:かかみ)という形で残っている」

との書かれようがなされているわけだが(少なくとも現行現在でのウィキペディア記載内容ではそうなっている)、そうした書きようは上にて紹介の筆者が自サイト、色々と不快なる状況に曝されてきたとの自サイトにてよりもって従前より

(再度繰り返すとして)

「爬虫類との特性を有する知的存在が人類史に介在しているとの異説があることについては日本にての神道、その神なるものの領域に飾られる注連縄(しめなわ)が交差する蛇に由来するとされることや、ま



た、同じくも神道、そちら体系を受けて神棚にて飾られる鏡カガミにあってのカガミという言葉の由来が(とぐろを巻く鏡餅「カガミモチにその片鱗が見出せるとの式にて)蛇にあるとされることとの兼ね合いで相応のにおいを感じさせる」

との内容は

[際立つての類似性]

を感じさせるものである(：ちなみに訳書内容よりその識見の程は分かるとの為清氏なる人物が**出典として挙げている吉野裕子氏の研究とのことについては同じくものサイトにて筆者が公開することとしたとの筆者著作、2009年に出版社に渡し、[相応の憂き目]をそのしばらく後より見ていた(と直上先述の)自著『人類と操作』でそういうものがあると紹介なしていた著作『蛇』、日本の祭りなどの習俗を陰陽思想などとのからみで紹介した著作をものしていることでも知られるし手前もその複数著作を読み解いているとの草莽の民俗学者、故・吉野裕子氏の手になる著作『蛇』(講談社学術文庫)に認められる研究のことを指しているのであろうと解される。そちら吉野裕子氏由来の資料については表記項目に見るアイク本の広め手たる為清氏なる人物「も」氏の名がアイク絡みで活字媒体として目に入るようになった2011年後半以降世に出たアイク書籍の邦訳版で言及しているところとなる)。**

以上のように類似性が認められるようになってい

中であるからこそ断っておくが、上のウィキペディア表記に見る為清勝彦氏なる人物(「2011年後半より」刊行されるに至ったアイクの HUMAN RACE GET OFF YOUR KNEES The Lion Sleeps No More『人類よ。ひざまずくの止めよ。ライオンはもうこれ以上、眠らない』の邦訳本に対する翻訳で関与するようになった向き、少なくとも、その名でははじめて関与するようになったとのことが事実関係として把握できるとの向き)と際立って近いものの書きようを(同人物に先行するところとして)なしている筆者の間には人的関係をはじめ「何の関係もない——筆者としてはその為清勝彦氏と[実名]でやっているとの自身に**関係があると他に思われたくない、まったくもって思われたくもないと**考えている——」。

そして、—これからが殊に強調なしたい(それだけの問題性認識がこの身にある)とのことなのだが— 同人物(為清氏なる人物)が筆名(ペンネーム)でか出入りしているとの新発の出版社、

[アイク系の書籍を出している大手出版社系の人脈に由来するところで(スピアウトとの式で)設立されたとの新発の出版社]

と筆者の間にもまた何の人的関係がない(商業サーバー領域の尋常ならざるセッティングの問題に関わるところとして露骨に筆者と「彼ら」の間に**関係があるように見せんとする力学が働いたと判じられるだけのことが具現化しているのではあるも、とにかくもって彼らと筆者の間には何の関係もない**)。

小さなこと、狭隘なることに延々こわだっていると良識人(を任ずる向き)にも見られようかと当然におもんばかるところなのだが、**については次のことが「ある」からこそもってしての訴求をなしている。**

→

筆者は反ユダヤ主義 —アンチ・セミティズム— の崇拝者などでは断じてない(筆者にも『アンネの日記』などを読んで『これが人間の歴

史の一断面か。』と思うぐらいの感性はあるし、反ユダヤ主義者の虚偽としての、そして、ある種、邪悪な全体主義 — 日本ではカルトがその体现者であろうとの人間を[物を考えぬ触手]とすることを是とするが如く思考体系 — と紐付いての歴史的具現化具合についても研究してよく「識っ」ている)。だが、何故なのか、筆者が自著の商業出版が頓挫した後にその拙きPDF版を公開しだしたサイトとサーバー上の同一IP領域（筆者が関知できないところの商業レンタル・サーバー上の特定領域／いくつものサイトが詰め込まれているサーバーでありながらも特定企業の特定サーバー上の同一IP領域にサイトが並立しているとのことはそれは膨大な数ある東京都内のオフィスビルの中の同じオフィスビルの同一階数の同一パーティションにあるといった程度の縁(えにし)に等しいし、インターネットの仕組みに多少なりとも通じている向きらには当然にそう見られるであろうところでもある)に反ユダヤ主義を標榜しているように見える大手出版社著作の宣伝サイト — 為清氏なる人物がアイク訳本を出しているところの新発の出版社の人脈の供給元となっている大手出版社(同出版社は筆者著作の出版における介入過程でもその名が出されたとの多くの人間が名前を識っている出版社でもある)にあつての同じくもの人脈に由来する著作にまつわつての宣伝サイト — が据え置かれ(どうしてかそういう商業サーバー領域でのセッティングがなされもし)、かつ、そちらサイトのことが筆者サイトのことを検索すると — サイトの冒頭 — 文字のアルファベット態様より — 一時期この身筆者のサイトと並立表示されてグーグル検索エンジンに表示されてきていたとのことが「ある」(録画しているし、知人弁護士にも諮ったとの[事実]である)

以上、[事実] — この身、筆者をして、にまつわつて「も」弁護士に迷わず相談なさしめる程に心底いからせしめたとの[事実]でもある — について解説したうえで書いておく(情報収集能力が世人よりは優れているとの向きに去来しうるとのありうべき誤解を避けるために書いておく)が、仮に筆者が[剽窃](盗作)をなす者であるとの[誤解]を受ければ、あるいはよりもって問題となるころとして[相応のやりよう]をなす紐帯(狭隘な反ユダヤ主義者に通底する物言いを商業的になしている者達)の関係者か何かかと受け取られれば、「自身の言論およびそこにての重要な指摘事項(他に同じくものことを同じくもの水準で摘示なさんとする人間が「いない」ために「遺憾ながらも」現行、というより、ここ数年間ずっと、非力なる手前自身と紐付いているとの言論および重要な指摘事項)そのものに疵(きず)が付けられうる」と判じての断り書きをここではなしている。

同じくもの筋合いの誤解がなされれば、—— 制約だらけだと筆者が見る人間存在というものに訴求事項それ自体を容れる・認容するだけの雅量(寛容さ)あるいは自由度があるかどうかは置き—— [自身が訴求なさんとしていること](自身ではなく自身の言論それ自体)にもダメージがもたらされうる可能性があるかとの観点で以上、表記のことにまつわつての断り書きをなしているのである(：はきと述べ、筆者には[あれは小人(しょうじん)よ]と後ろ指を指されるような類が抱きがちなものであるせせこましい属人的名誉感情などに今は拘(こたわ)っている時ではないとの判断があるのだが(本稿にて訴求していることを理解出来る程度の水準があれば惑うことなく「最早時間等ありはしない。即時に愚劣に滅せられることになってもおかしくはない状況である」と納得いただけることかとは思ふ。といった中で筆者は自分自身の下らぬ生も間もなく終焉を迎

えるとの覚悟でやっている)、ここではメリット・デメリットを秤にかけたうえで [あれ小人よ] との誤解を招きかねないことを敢えても言及することにしたとも申し述べておく)。

また、さらにもって述べれば、直上・直近述べたような、

[ありうべき勘違いの問題]

からのダメージより[自身の言論および指摘事項]そのものを守るとの意図がある中でながら、逆に、為清氏なる特定の人物によって「剽窃」—その行為をなすような人間が信用性との面で社会的に相応の評価を与えられかねない行為—がなされていると指摘しようとしているわけでもなければ、そうだと名指して非難をなしているわけでもない(：読み手によっては意外と受け取られるかもしれないが、自身「の言論」の信用性に関わらなければ、この先、自身のやろうとしていることの障害になるようなことが「なければ」、障害になりえないとの判断があれば、筆者は第三者やりようにあるのそうした性質の有無に拘る人間ではない)。

為清氏なる人物、ペンネームか否かは知らぬが、同人物にあつての

[法的名誉感情]

を「強くも」慮って申し述べることでもあるが、上にて言及した内容近似性にまつわつてのこと、

[たかだかもの[注連縄](しめなわ)や[鏡]にまつわる蛇に通ずる類似性 —せんだって言及しているところの筆者の先行するところの書きようとオーバーラップする類似性— ]

程度のことならば、一定以上の情報探査能力・思考能力さえあれば、難なくも思いつこうところか、とも思われるとのこともある(であるから筆者とはまた別側面から本名か筆名か存じないが、氏が筆者と同文のことにたまさか思い至り、そのことを口の端に出して述べ、その言い様を誰だかは知らないが、ウィキペディアに書き込んだ可能性はあるか、とも当然に思っている。このような世界にして社会にあつて、そう、[何ら本当に重要なことが顧慮されるようなことがない(しそうしたことの顧慮および指摘を阻害するような力学が —相応の「紛い物の綺麗事までは口にする」とのカルト団体成員などを介して— 強くも作用していると判じられる)との世界にして社会]にあつてながら「も」である)。

---

以上、述べたうえで[峻別なしていただきたいこと]について一転して書いておくが、個人特性 —[個人特性]にまつわるあれやこれやなどを[問題でもないところ]にて重箱の隅をつつくように槍玉にあげるなどおよそまともな大人がやるようなことではない、[程度の低い者ら]がやる人身攻撃(陋劣な類がこととする人身攻撃がいかようなものなのかについては本稿の**出典(Source)紹介の部 17-2**の記述を参照されたい)であると筆者は見立てている—— のことではなく、個人から離れての「不特定多数の」アイク説の国内ヴェンダー(供給者ら)やりようをなじるようなことを他のところで述べているとのこと「も」この身にはある。

自身が把握を強いられることになったこととの兼ね合いで複数出版社・複数執筆者を総称しての「不特定の」アイク説 —いわゆる爬虫類人介入操作説—



の日本にてのヴェンダーら(供給者ら)全般となっている者達のやりよう(その品質につき先述なしたところのやりようでもある)につき「証跡を取りながら捕捉している諸所事情から」心中に深く深く含むところがあり、[不特定数のそれなりの数の人間が関わっての総称してのそのやりよう]を言葉きつくも責めるようなことを筆者サイトにて従前から書きもしていたのである——[我々の種族(人類)を惑わすようなこと、[大なる虚でもって一部の真を埋めきるが如きこと]を「相応の」種別の一群の人間らが相応の式でやっている(やらされている)]との観点でもって、である——。

そちらは当然に属人的批判とは無縁なるもの、大局をおもんばかりつつもの慷慨(こうがい)を込めての訴求でもあったと断っておく(：尚、この世界では[大なる虚]が[一部の真]を全方位から圧倒的に陵駕し、それがゆえに、(真実に向き合いその背後にあることに抗い挑むことこそが人類に存続可能性が担保されている唯一無二の生存の途であるならば)、私こと筆者が属する種族たる人類の行く先は[可能]・[不可能]の問題として「たかだかも知れている」との心証をこの身からして強くも抱くに至っている、そう、[マス(大数)]としての情報・言論の流通度合いを望見しつつも[存続できない][存続を望めるところはほとんどない]との心証をこの身からして抱くに至っていること「も」繰り返しもしてここに書いておく——[アイドル](という名の一頃は砂利タレと呼ばれていた芸事稼業の人間ら)や[醜悪なる権力](崇拜行為をなす者らの特質から権力それ自体およびそれにたかる手合いらの愚劣さが際立つとの北朝鮮の將軍のようなものでもいいし、同文のことが当てはまるところの醜悪なるカルトの教祖などでもいい)の元にひたすらに拝み奉るように蝟集(いしゅう)することはあってもおのが頭で考え、おのが言葉で語り、そして、真実に相対することは決してなさぬ、拒みきるといった筋合いの[虚ろな目をした者ら]で満ち満ちているとのこと、[種としてのくだらなさ]の問題がおもんばかれるわけだが(にまつわって具体的なところとして[大衆挙動]としての検索エンジンのクエリ分析(情報を[大衆]というものがどれだけ積極的に自ら収集しようとしているのかのことについてインターネット全体の動向として(検索エンジンに対する入力ワード連動型広告の単価見積もり手段としてサーチ・エンジン会社がプラットフォーム提供をなしているサービスを介して)把握できるようになっているとのそちらウェブ全般にあつてのクエリ——検索エンジンに対する入力ワード——分析)からも[そうしたこと]、真実に相対することは決してなさぬ、拒みきるといった筋合いの[虚ろな目をした者ら]の全体としての動向が如実に押し量れるようになっている)、　だが、であったとしても、そう、自身の属する種族が現状改変可能性を微々たるものとしても[兆候]として伴わぬとのいかに下らぬもの、下らぬ状況に甘んじているものであるかについて精査なさんとしてきて「よく知るに至ってしまっている」とのことがあっても、『死ねば無に帰すだけとの命を賭けて[真実に対する[認容度合い]]について[確認]したい(生ある限りは可能性を見極めたい)、そして、出来れば、(自己犠牲の美化思潮・ヒロイズムの類は大概にして胡散臭くて嫌いなのだが)、虚偽世界の改変、現代のお伽噺であろうとのサブ・カルチャーにあつてのご都合主義的展開などとは一線画しての[現実的变化]をきたすことの一助となれば、』とこの身は考えてもいる(自身、下らぬものが圧倒的多数を占める中でそうした[およそ不可能なること]に死命を賭すことは実に愚かであるとも考えているのだが、『「ださい」(あるいはより悪くも「馬鹿だろう)」と見られてもそれ以外に歩む途はなかろう』と見つ[決死]の覚悟を定めているのである)——)。

(「本筋から離れてのこと」、だが、「自身の言論を守るために付す必要

があるかと判じてのこと」の付記の部はここまでとしておく)

(尚、再言しておくが、[デヴィッド・アイク本人のLHCにまつわつての問題ある物言い]に伴う虚偽性(欺瞞性の最たるところであると筆者が見立てている側面)については本稿の後の段でかなり細やかなる解説をなす所存である)

(直近までの補足、本稿の本筋をなすことから引き比べて見もすれば、「非本質的」といったことを交えての補足に過分に筆を割いてしまったきらいがあるが、話を引き戻すとし)

先にデーヴィッド・アイクの書籍『チルドレン・オブ・マトリックス』にみとめられる特性として

[(デーヴィッド・アイクが爬虫類人の介入説を唱道するうえで引き合いに出しているとの)[アトランティスに対する蛇の異種族の侵略]をテーマとしているとの神秘家由来の文書はそれに僅かばかり先立って世に出ていたパルプ雑誌掲載の小説に文言込みで倣っている節が如実にあるとのものである]

とのことを解説した。

につき、

『[戦前期アメリカに遡る神秘家由来のインチキ臭が鼻につくとのやりよう](モーリス・ドリールの碑文の捏造性)を喝破するなど愚にもつかぬことに注力している』

とそこからして思われた向きもおられるかもしれないが、神秘家なる人種たるモーリス・ドリールの申しようをわざわざもって引き合いに出した目的は「下らぬものの実態の喝破」をなすのではない。

たかだかもそのような「アナロジー」(analogy)の問題からして我々人類の今後の問題、我々人類の種族としての脳髓を狙う銃座の問題に関わるとの認識があるがゆえにわざわざもって同じくもの神秘家(モーリス・ドリール)やりようのことを取り上げたのである。

その点、先にも呈示した際立っての各要素ら、

・ **Atlantis**

・ **Atlas**

・ **Troy**

・ **Heracles**

との各要素を核とするとの関係性から、たかだかも上記のようなこと「とても」が我々の今後に関わるとの指し示しが「なせてしまう」(個人的にはそのようなことが本当ではあってはほしくはないのだが、残念ながら、知性ある大人であるのならばそうであると納得しようとの[偶然を棄却する方向]での指し示しが「なせてしまう」)がための問題視をなしている。

以上のように述べもするところに関わるところとして[文献的事実]の問題として 一くどくどとした同様のことの言及に辟易としもするとの方もおられるかもしれないが— 次のことら、 $\alpha$ . から  $\gamma$ . のことらを「まずもって」示してきたのが本稿である。

---

**$\alpha$**  . [カシミール効果]検証実験(1948 実施の実験)のことを露骨に想起させる独特なる行為によって宇宙開闢の実現が図られるとの小説『フェッセンデンの宇宙』(初出 1937 年の小説作品)ではその作中、誕生した宇宙で[爬虫類の種族]が人間そっくりの種族を「皆殺し」にするとの描写がなされている(介入者たる科学者によって繋がれた相互惑星の間の戦争にまつわるところでそうした描写がなされている)。さて、先覚性 — 初出 1937 年の作品のそれでありながら 1948 年のエポックメイキングな実験([カシミール効果]検証実験)の内容をなぞるが如く先覚性 — を有した『フェッセンデンの宇宙』(に見る[悲劇の宇宙]の開闢手法)と同様の手法で現実世界で検証されることになった[カシミール効果]が同文に現実世界にてその存在を指し示すことになったとの[負のエネルギー]というものに関しては[ワームホールを安定化させるもの]とも 80 年代後半より考えられるに至っているとのことがある(出典(Source) 紹介の部 24)にて指し示しにつとめているところとして「物理学者キップ・ソーンによって加速器実験とは何ら関係ないところでそれ絡みの科学仮説が呈示なされての」1980 年代後半のこととしてである)。他面、(人為的に繋がれた惑星の間での戦争を通じての爬虫類に似た種族による人類に似た種族に対する皆殺し挙動が描かれるとの)小説作品『フェッセンデンの宇宙』と同様に[宇宙の開闢状況]を再現する、すなわち、宇宙開闢時(ビッグバン時)のエネルギー状況を極小スケールで再現すると銘打たれながら後に執り行われるに至っている加速器実験に関しては [(『フェッセンデンの宇宙』と同様の手法で検証された)[カシミール効果]に見る[負のエネルギー]でこそそれが安定すると 80 年代後半に考えられるに至ったものたるワームホール]をそちら加速器実験が生成しうるとの観点が「ここ最近になって」(プランクエネルギーとの高エネルギーを用いなくとも加速器実験にてワームホール生成なしうるとの観点が「ここ 10 数年で」)呈されるようになったとのことがある(出典(Source) 紹介の部 18、出典(Source) 紹介の部 21-2)らを通じて専門の科学者の手になる書籍に見る科学界の主たる理論発展動向に関して解説しているとおりでである)。

**$\beta$**  . 上の  $\alpha$  でフィクション『フェッセンデンの宇宙』と現実の[加速器実験]を — [宇宙の開闢状況の再現の企図]といった共通事項に加えて — 結びつける要素となるのが、

[[カシミール効果による負のエネルギーの検証]と密接な関係にある「通過可能な」ワームホール]

となるのではあるが、そちら通過可能なワームホールのことをテーマとして扱っているのがキップ・ソーン著書『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作となる。同著に関しては[911 の事前言及][他界との扉]との観点で爬虫類の異種族による次元間侵略を描いた映画、『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』という[上階に風穴が開き、片方が倒壊していくツインタワー]のワンカット描写を含む映画]と記号論的につながる素地がある



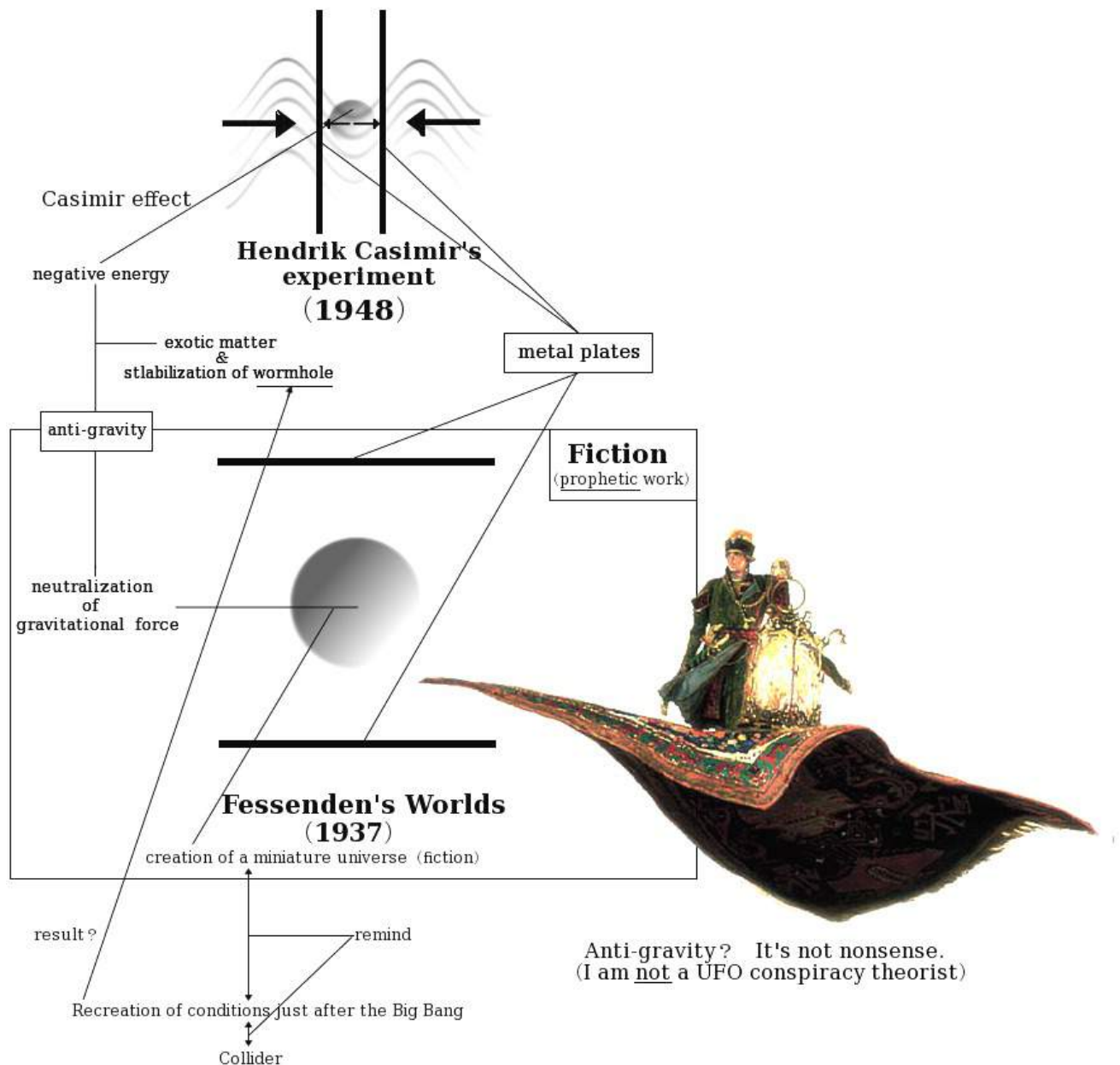
(:その理由は事細かに先の段にて述べている。(羅列しての表記をなせば) [出典\(Source\) 紹介の部 28](#)、[出典\(Source\) 紹介の部 28-2](#)、[出典\(Source\) 紹介の部 28-3](#)、[出典\(Source\) 紹介の部 29](#)、[出典\(Source\) 紹介の部 31](#)、[出典\(Source\) 紹介の部 31-2](#)、[出典\(Source\) 紹介の部 32](#)、[出典\(Source\) 紹介の部 32-2](#)、[出典\(Source\) 紹介の部 33](#)、[出典\(Source\) 紹介の部 33-2](#)で問題となる物理学者キップ・ソーン著作がいかようにして[双子のパラドックス(1911年提唱)の機序の利用による二点間時差の応用] / [91101(2001年9月11日を意味する数)との郵便番号ではじまる地を始点に置いてのタイムワープにまつわる解説や同じくもの地で疾走させた爆竹付き自動車にまつわる思考実験による[双子のパラドックス]にまつわる説明の付与] / [2000年9月11日 ⇒ 2001年9月11日と通ずる日付け表記の使用] / [他の関連書籍を介しての「ブラックホール⇄グラウンド・ゼロ」との対応図式の介在]といった複合的要素を[僅か一例としての思考実験]にまつわるところで同時に具現化させ、もって、[双子の塔が崩された911の事件]の前言と解されることをなしているのか、について(筆者の主観など問題にならぬ客観情報にまつわるところとして)摘示している。他面、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という書籍にて[多重的に911と結びつくようにされている双子のパラドックスにまつわる思考実験]が[通過可能なワームホール] (他空間の間をつなぐ宇宙に開いた穴)にまつわるものとなっているとのことがある一方で1993年の荒唐無稽映画 Super Mario Bros. (邦題)『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』がツインタワーが異次元の恐竜帝国の首府と融合するとの粗筋の映画であることについては[出典\(Source\) 紹介の部 27](#)を、そして、同映画がツインタワーに対するジェット機突入前のことであるにも関わらず上階に風穴が開き、片方が倒壊していくツインタワーをワンカット描写している映画であることについてはオンライン上に流通している記録動画群 —— Super Mario Bros., 1993, 911 といったクエリで検索エンジン走らせればすぐに特定できようとの動画群 —— などを通じて確認されたい)。

$\gamma$  . 上の  $\alpha$ . と  $\beta$ . は異様な先覚性がみとめられるところで[[爬虫類の似姿をとる異種族の侵略]]と[加速器実験の結果たるワームホール]]との接合]が見てとれることを示すものであるが(問題はそのようなことがあるのが「偶然の一致」で済むか否か、である)、[[加速器と同様のもの]]と[爬虫類の異種族の侵入]]を結びつけて描く作品]は他にも存在している。先に言及したブルース・スターリングの『スキズマトリックス』との作品、ローンチ・リング(加速器と同様の機序を有する装置)での死闘の最中に爬虫類の異種族の来訪を見るとの同作が該当文物となる(委細については先の解説部を参照されたい。[出典\(Source\) 紹介の部 26](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 26-3](#)との出典解説部を設けながらなしてきた本稿にての従前の段がその部に該当する)。

(尚、上に  $\alpha$ . から  $\gamma$ . と振って再言及しているところの関係性に加え、[加速器とブラックホール特質を繋げての同時言及]] (「異様な先覚性を伴っての」同時言及)]] [爬虫類の種族による人間種族への侵略]との要素をあわせて具備しているとの作品が一九五〇年代初頭より Philological Truth [文献的事実]の問題として具現化しているとのこと

「も」がある、その点についても本稿の後の段では解説する所存である——当該文物原著よりの事細かな原文引用をなしながら **The Sword of Rhiannon** (邦題は『リアノンの魔剣』) という作品のその伝で問題になる特性について詳説を講ずる所存である—— )

(出典となるところを参照することでそれらが事実であるとのこと、理解できもしようとの  $\alpha$  から  $\gamma$  の関係性に関わるところの図を ( $\alpha$  の部に関わるところより) 以下、挙げる—)



フィクションならぬ現実世界ではヘンドリック・カシミールという人物が [[カシミール効果]と命名されるに至った作用を測定した有名な実験] を実施している (1948年実施) ののであるが、同実験実施環境と類似するもの、 [金属プレートを向かい合わせてその中間の領域にての作用を活用するとの行い] を作品の重要要素として描き、同じくもの行為に付帯するところとして、 [カシミール効果測定実験の結果と同様の作用] (重力に抗う機序の実現)

について「も」言及しているとのある種、予言的なる作品が1937年初出の『フェッセンデンの宇宙』という小説作品である。

同『フェッセンデンの宇宙』、

[金属プレートの間での小宇宙の造成]

を描くとの作品となっているのだが、そのような『フェッセンデンの宇宙』での

[「宇宙生成」挙動]

が

[加速器実験で銘打たれている「ビッグバン直後の状況の再生」]

を想起させるものであるのと同時に、

[カシミア効果と結びつき、また、ワームホールの安定化を実現すると「後の日に」あつて考えられるようになったもの]

とも(後のフィクションならぬ現実世界での科学界理論動向との兼ね合いで)結果的に結びつくこととなっていることの[できすぎ度合い]を本稿にては問題視している。

(:カシミア効果測定実験の結果、引力に対して斥ける力、すなわち、斥力を呈するとの[マイナスのエネルギー](英語表現ではネガティブ・エナジー)ないし[マイナスの質量](ネガティブ・マス)といったものの実在が科学者の間で認容されるに至った。そうした負の質量と

といったものの斥力呈しての作用が

[「エキゾチック物質」と呼称されるもの]

の特質と通底するとのことがあり、その[エキゾチック物質]がキップ・ソーンという科学者によって

[安定化したワームホール(時空間のショートカットを実現するとの空間の歪み)の材料]

として取り上げられるに至ったとの経緯がある。

につき、それが安定的なものかどうかは置き加速器がワームホールの類を生成すると「極々最近になって」考えられるようになったことは本稿にてのここまでの段でも先述のことであるし、後の段にでも取り上げる所存なのだが、問題としているフィクション、『フェッセンデンの宇宙』が

[宇宙創成挙動 — 加速器実験での(超高エネルギーの一極集中による)ビッグバン直後の状況のことがを語感から想起させもする挙動— ]

および

[カシミア効果測定挙動類似の挙動]

を同じくものものとして描いていることの意味性について問題視せざるをえぬとの事情が存在している)

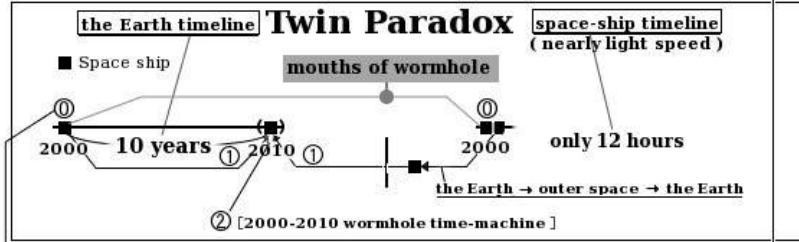
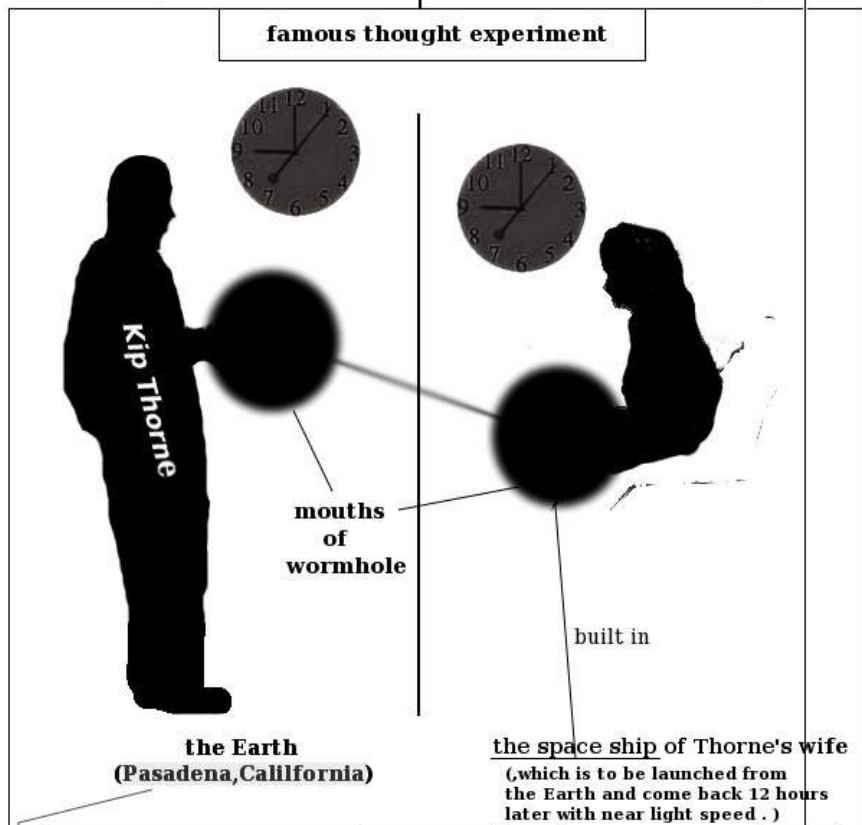
その点、『フェッセンデンの宇宙』が

[人工宇宙にての[爬虫類から進化した種族の惑星]と[人類に似た種族の惑星]が融合させられて、前者の住人(爬虫類の種族)が後者の住人を完全に皆殺しにするとの粗筋]

を有していることの絡みで何が問題になるのかにつき本稿をまじめに読解しているとの向きには理解できるように筆を進めているつもりである。

(次いでもってして( $\alpha$ から $\gamma$ のうち) $\beta$ の部に関わるところの図を以下、挙げておく)

**Black Holes and Time Warps: Einstein's  
Outrageous Legacy (1994)**



① starting point  
January 1, 2000 9:00 a.m.  
(→UTC offset like style (yyyy/mm/dddd/hh) : 2000/ [1/1/9 (:00) ] )  
→hh/dd/mm/yyyy : 9/1/2000 far-fetched? )

starting point  
Pasadena (ZIP codes 91101 -)

**(2001) 911 & Twins (Paradox, 1911)**

**10 years = 12 hours**

[Wormhole→Timemachine] thought experiment

Charles Seife's  
**Zero: The Biography of a Dangerous Idea (2000)**

- (containing a similar illustration of the same thought experimentation as Thorne's one)
- (asserting that the watershed between year 2000 and year 2001 is vague)
- (making a prophetic comment :  
"Zero is so powerful because it unhinges



Charles Seife's  
**Zero: The Biography of a Dangerous Idea (2000)**

(containing a similar illustration of the same thought experimentation as Thorne's one)

(asserting that the watershed between year 2000 and year 2001 is vague )

(making a prophetic comment :  
 " Zero is so powerful because it unhinges the laws of physics. It is at the zero hour of the big bang and the ground zero of the black hole that the mathematical equations that describe our world stop making sense. However, zero cannot be ignored. Not only does zero hold the secret to our existence, it will also be responsible for the end of the universe."

remind

**One scene of SUPER MARIO BROS. (1993 film)**

※一見にして子供向けの荒唐無稽映画としての体裁をとる『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』では隕石によって分かれた【X類の世界】と【恐竜人の世界】の融合が企図される。その融合と関わるところで頭上に風穴が開き、崩落を見るツインタワーが描写されるのだが、【911の予見的描写】に通ずるそうしたところでも異世界・異空間をつなげるものとしてのワームホールやブラックホールの特性を思い起こさせられるとのことがある(：ワームホールやブラックホールの異世界間をつなぐ性質については本稿にての【出典(Source) 紹介の部20】などを参照されたい)



Dinosauroids' world  
 I fusion  
 this world

Hole

こちら 1993年公開の映画のシーンが尋常ならざるものであるところとしては (本稿にての出典

( Source) 紹介の部 27 で市中流通 DVD を通してのその旨の確認方法を紹介しているように) 【片方が崩れ、片方の上階に風穴が開くとツインタワーのありよう】などといったものが飛行物体 (画面にては小さいがゆえに旅客機か戦闘機か、どういものとして入れ込まれているか判然とせぬ飛行物体) のツインタワーの合間の中空横切り描写と結びつけられているとすることで「も」ある。

その点、映画公開前の数ヶ月前、1993年においてツインタワーの地下駐車場が爆破テロに曝されているとのことも本稿前段にて解説しているところとしてあるのだが、そうした往時においての状況では当該描写の際立った予見性を否定できないとことがある、それがゆえに問題になる、と述べるわけである。

キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』(原著1994年刊行) に見る [同一の思考実験] ( [通過可能なワームホールのタイムマシン化] についての思考実験) は次の側面らより911の事件と「予言的に」結びつくと言われるようになっていく。

- 問題となる思考実験は91101を郵便番号上のスタート・ポイントとする地域で始められるのだが、 [91101] とは米国表記での2001年9月11日を示すとの数値ともなる。
- 実験それ自体が「911」年に提唱された [「双子の」パラドクス] にまつわるものである (：2001年9月11日の事件では双子の塔ことツインタワーが崩落させられている)。
- 実験の (地域としてではなく) 日付けとしてのスタート・ポイントは何故なのか (1994年刊行著作であるのに) 2000年1月1日9時頃に設定されている。それ自体、時間単位を若い単位から読み替えば911を意識させる実験開始時刻だが、加えて、2000年と2001年については21世紀のはじまりのポイントをどこに置くかとの意味合いで暦表記のズレがあると指摘され、混同が問題視されている年度らであるとのことがある。
- 2000年と2001年の混同の問題を論じ、また、キップ・ソーンのここにて問題としている思考実験と同じくもの実験をキップ・ソーンのまさしく問題となる著作『ブラックホールと時空の歪み』と同じイラストレーターを起用して挙げているとの筋合いの著作、『異端の数ゼロ』(原著2000年刊) では [ブラックホールとグラウンド・ゼロとの言葉が結びつけられている] とのことが見受けられる (先述のどことしてグラウンド・ゼロというのは相当使用局面が限られている言葉となっており、その主たる使用対象は核兵器投下地および冷戦下の核攻撃対象推測地としてのペンタゴンの広場であった。そうしたグラウンド・ゼロがワールド・トレード・センター跡地をも指すようになった2001年の事件の前に2000年の著作『異端の数ゼロ』はブラックホールをグラウンド・ゼロと結びつけて使用している)。
- キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』では問題となる思考実験 (通過可能なワームホールにまつわる思考実験) と同文に双子のパラドクスに関する説明をなすための思考実験が展開されているのだが、その実験からして「91101」との郵便地番からはじまる地域 (カリフォルニア州パサデナ) で [頭上に爆竹をつけた車のうえでの [爆竹の時間的差分をきたすスパーク] を観察する] とのものである。爆竹爆発の順次的観察との観点で述べれば、ツインタワーの崩落プロセス、双子の塔ことツインタワーが差分をきたす外的衝撃によって倒壊していったとのプロセスのことが想起される。

以上、 $\alpha$ . から  $\gamma$ . の間に成立している関係性はそこに異様な先覚性が介在しているがために

[常識的な意味で際立っての説明困難性を伴っている]

と解されるとのものである（少なくともそれだけの関係性を理解出来るだけの脳の自由度を伴っているとの世間人並みの状況認識能力——[神]なるものに由来する[内面に響き渡る声]を聞いてそれを容れている節があり、ときに愚劣極まりない自殺テロをなしたり、処女懐胎を信じたフリをなしたりといった宗教の徒輩などはそれすら「欠」のありようを呈している節があるから問題なのだが、とにかくもの世間人並みの状況認識能力——を有していれば、[常識的な意味で際立っての説明困難性を伴っている]と易々と解されるとのものである）。

すなわち、

・『フェッセンデンの宇宙』(1937)がものされた折、まだ、カシミール効果の観測(1948)は具現化しておらず、似たような特性が伝播関係で描写されることに通ずる共通の知識基盤などそこに観念できなかつた。にも関わらず、『フェッセンデンの宇宙』と[カシミール効果観測のありよう](マイナスのエネルギーと主流科学者らに呼びならわされるものの発見のありよう)の間にあつては際立っての近似性(本稿先立っての頁で詳説を試みているところの[向かい合わせた二枚の金属プレートの間にて反重力作用を具現化させる]との意での近似している特性)が具現化を見ており、のみならず、一今日的な視点を加味してのみそのありようをはじめて指摘できるとの— 加速器実験を介しての接合性「も」がそこに観念されるところとなっている。すなわち、  
[小説『フェッセンデンの宇宙』にて企図される宇宙開闢の状況の再現とは加速器実験のビッグバンの状況の再現とかさなって見えるところとなっている]  
⇒ [『フェッセンデンの宇宙』にあつての宇宙(人間の惑星と爬虫類人の惑星が繋げられ絶滅戦争が繰り広げられるとの悲劇の宇宙でもある)の開闢方式は[マイナスのエネルギー]の発見につながったカシミール効果発見実験ありよう(二枚の金属プレートの間にて斥力作用(しりぞけあう作用)を発現させるとの手法)と類似しているものであるとのことがある] ⇒ [カシミール効果観測によってその存在がはじめて実験的事実として裏付けられた[斥力を呈するマイナスのエネルギー]は80年代後半より物理学者キップ・ソーンの思索によって[通過可能なワームホール]を実現するためのエキゾチック・マターの特性と強調されるに至ったところのものである] ⇒ [[ワームホール]についてはここ10数年にてLHCのような大規模加速器にてそれが構築される可能性があると考えられるようになった] ⇒ [加速器実験と『フェッセンデンの宇宙』の宇宙開闢試行挙動とを介しての接続性がみとめられる](**回帰**)とのパスが記号論的に炙り出せるようになっている。

・[911の事件が起こることを先覚的に言及しているような文物]としての特性を有したものが関わってきているとのことがある、それがゆえにもってしても異常性が際立っている。

との観点から常識的な意味での際立っての説明困難性が伴っている(時期的、そして、内容的に科学理論の発展動向では説明が付きがたいものである)。であるから、それ単体だけで見たらば、[エキセントリックな話]とだけで済ませられかねないことも然にあらざとも先に述べている。

そして、話はそれだけで済まされない。直近呈示の  $\alpha$ . より  $\gamma$ . のことらの間には「他の」多数の事柄とも接合する共通の「梁となる事柄ら」が介在しているとのことがあり、それらが



「アトラス」  
「アトランティス」  
「ヘラクレス」  
「トロイア」

との要素となっているとのことが「ある」のである。

上記各要素を媒介項にしての多重的[密結合関係]がはきと証示できて「しまう」ため——数学的証明のように厳密な式で「証明して」指し「示せる」ため——、

「常識的に[偶然]の可能性が否定されようとの特性(およそ自然にはありえない密結合度合いがゆえに[偶然]の可能性が否定されようとのもの)、すなわち、

[恣意性(もっと言えば執拗性)帯びての特性]  
のことが首をもたげてくる。

そして、露骨に透けて見える[恣意]的やりようが[我々全員を殺すという意思・意図を濃密に体現している]との場合にて抗わぬというのならば、人という生き物は重要・重大なことに何にも抗えぬとのことになる」

と述べざるをえぬとのことが[問題]になってくる(そのような性質を見出すことが果たして妥当か否かをひたすらに具体的根拠に基づき突き詰めるというのが本稿の趣旨である)。

以上述べたうえで、

[1939年初出の出版物に見る神秘家申しようが[アトランティスが蛇の種族に「次元間侵略」された]とのものであったこと]

との話に回帰しもさせて述べるが、——そうした神秘家申しようが1929年初出の pulp 雑誌掲載小説の内容を受けていたもの(相応の史的贗造物 archaeological forgery)であったとしても——同じくものこととの兼ね合いで「問題となる」ことについて、次いで、幾点かの指摘をなしていくこととする——以降の論証への橋渡しとして「問題となる」この指し示しを幾点かなすこととする——。

具体的には先掲の  $\alpha$  から  $\gamma$  のことらが何故にもってして

(先にそれこそが問題なのだと注意を向けたところの)

[梁となる要素ら] (アトラス・ヘラクレス・アトランティス・トロイア崩壊譚)

と相通ずるものとなっているのか、その点について「まずもって」指摘したきことを典拠挙げながら摘示なす(すなわち、それらまずもって問題視したき事柄らについて[証示]をなす)ための段に入ることとする。

[ (先述の  $\alpha$ . から  $\gamma$ . のことらとの絡みで [これよりの話の流れ] 上、何が問題になるかについて) まずもって指摘したきことの第一として ]

最初に

**[アトランティス] [アトラス] という言葉からしてワームホールやブラックホールを生成しうるとされるに至った加速器生成実験とダイレクトに関わっている語である**

とのことを取り上げることとする（：上に見る[アトランティス]は——本稿にて先述なしたことを繰り返すが——[太平洋戦争勃発前の特定の神秘家の馱法螺(の類と「額面上は」受け取られもしようもの)]にあつては[蛇の異種族に侵略された]などともされている古(いにしえ)の陸塊の名である)。

何をもってして上のように、そう、アトランティスやアトラスという言葉からしてワームホールやブラックホールを生成しうるとされるに至った加速器実験と「ダイレクトに」関わっていると述べるのか。

については次のことらのはきとして存在していると摘示できるようになっている(続いての段にて当然に典拠を示すところとして[個人の偏頗(へんぱ)なる主観などが問題になるようなことではない]との式で摘示できるようになっている)とのことがある。

「史上最大の加速器 **LHC** を用いての **LHC** 実験にあつては

[ブラックホール(加速器実験の結果、生成される蒸発する安全なものと強調されている極微ブラックホール)を探索・観測するために供するもの「でも」あると銘打たれている [イベント・ディスプレイ] (Event-display) 用ツール]

として

[ATLANTIS (アトランティス) という呼称が振られたもの]

が用いられているとのことがある」

(：直上表記のことの典拠は下にて挙げるが、手早くも手ずから確認なしたいとの読み手におかれては

Atlantis, Black hole, Event display, LHC

などとのキーワードをあわせて入力してグーグル検索エンジンを(複合キーワード検索にて)動かしみていただきたい。それによって LHC 実験参画者らが

[**ATLANTIS** と呼ばれるイベント・ディスプレイ・ツール ——[コンピューター端末上にあつて[**LHC** 附属検出器(アトラスといった名前が冠される検出器)]を示しての円]を中央に表示なし、ブラックホール生成などの[イベント]が生じれば、その画面にその兆候を示すとのイベント・「ディスプレイ」・ツール]—— ]

を使用していることにつき労せずして(現行にては)確認できるかたちともなっている)

「(上にいう)「ブラックホール生成挙動を観測しうる」ものたりうると銘打たれてのイベント・ディスプレイ・ツールたる **ATLANTIS** のアトランティスという呼称は同イベント・ディスプレイ・ツールが使用に供されての[**ATLAS 実験**]という実験(およびそこにて用いられる検出器)に付されたアトラスという名称に由来すると当然に解されるところとなっている (ちなみに **ATLANTIS** との呼称に影響を与えたと解されるようになっているとの **ATLAS** 実験(を執り行う **ATLAS** グループ)にアトラスという命名を付すとのことが実験関係者らの間で決せられた時期は **LHC** 実験(のための建設計画)にゴー・サインが出された 1994 年から遡ること 2 年程前の 1992 年のこととなっている) 」

上記のことが [事実] となっていることにまつわる出典をこれより順次、挙げることにする。

---

出典 (Source) 紹介の部 35



# SOURCE

## 35

ここ出典 (Source) 紹介の部 35 にあっては

[LHC 実験にあっては [アトランティス] という名前の付された実験結果観察ツールが用いられている]

[LHC 実験にあっては [アトランティス] という名前の付された実験観察ツールが用いられているわけだが、そこには [検出器アトラス] および [ありうべきブラックホール生成] との繋がり合いが存する]

とのことの典拠を必要十分と判じた分だけ挙げておくことにする。

まずは LHC 実験にて ATLANTIS と銘打たれているイベント・ディスプレイツールが用いられているとの件につき、現行、誰でもインターネット上より入手できるとのかたちとなっているオンライン上流通の PDF 論稿、

[ **Visualizing Data from the LHC with the Atlantis Event Display Program** (と題されての論稿)] (コロンビア大学付属の研究施設 Nevis Laboratories のウェブ媒体、[nevis.columbia.edu](http://nevis.columbia.edu) とのドメイン付されての媒体にて公開されている PDF 論稿で Joshua Auriemma というコロンビア大学所属の研究者によってもものされているとの論稿)

の記述を引いておく。

その点、

[ **Visualizing Data from the LHC with the Atlantis Event Display Program** ]

との英文タイトルをグーグル検索エンジンで入力することで誰でも同定・入手できようとの 2005 年初出のそちら論稿（邦訳すれば、そのものずばりで『LHC からのデータのアトランティス・イベント・ディスプレイ・プログラムを用いての可視化』とでもなろう論稿）にあつてはその冒頭部、Abstract(要旨)の部の末尾にて

---

“ When events are properly flagged, the ATLANTIS program will provide extremely convincing evidence as to the validity of those flags.” 「(LHC にて発生したイベントが) 適正にフラグと対応付けられれば、アトランティスプログラムは極めて確信の行くものであるとのそれらフラグの適正さを示す証拠を呈示してくれるだろう」

---

との記載がなされている（：一応、申し述べておすが、上原文引用部に見る flag[フラグ]とはコンピューター・プログラムが動いている場合にプログラム動作の条件を「旗(すなわちフラグ)の上げ下げで示そう」との発想法と結びついた表記となる(プログラムの処理条件をフラグと呼び慣らすとの世間的慣行に基づいての申しようのものとなる)。次いで、述べれば、上にての引用部は LHC(論稿表題にもその名がお目見えしている LHC)からデータが流れてきた際に、そちらに対する条件付け(フラグ対応付け)が適正になされれば、アトランティスという名が付されたイベント・ディスプレイ・プログラムは適正にデータにまつわる証跡を呈示してくれるだろうとの(ものの存在意味として)当たり前なことが述べられていると解されるところのものである)。

以上のような ATLANTIS、LHC よりの実験データを処理すべくものものとなっている ATLANTIS が

[ブラックホールまわりのイベントが検知されれば、それを感知するとのものでもある(と実験当事者らに認知されている)こと]

について「さらにもって」次の出典を挙げておく。

(文書名) [ Mini Black Holes in ATLAS ]

上の文書は Victor Lendermann というドイツの物理学者(ユニヴェルジテート・ハイデルベルク Universität Heidelberg ことハイデルベルク大学に所属の物理学者)の手になるアトラス実験グループの[極微ブラックホール探索]挙動について解説をなしているプレゼンテーション資料形式をとっての文書となり( Physics at the Terascale と副題となるようなところが銘打たれての 2007 年のハンブルクでの発表で用いられたものとなる)、誰でもオンライン上にて取得(ダウンロード)できるとの同資料の 17 と付されたページなどには

**Black Hole Event@ATLAS**

との表記が目立ってなされ(直訳すれば、「**検出器 ATLAS(検出器 ATLAS については下にての注記部を参照されたい)**でお目見えする**ブラックホール生成挙動**」との表記が目立ってなされ)、同じくもの部にて

[ブラックホール( Black Hole )が生成された場合のアトランティス(ATLANTIS)のディスプレイ画面]

が掲載されている(ので疑わしきにおかれてはそちら文書を **Mini Black Holes in ATLAS** などと入力してダウンロードするなどして確認されてみるとよい。ちなみに、(以下に再現図を呈示することになるが) イベント・ディスプレイ・ツールのディスプレイ画面の「左上」のところに ATLAS・ATLANTIS と書かれているところからも(よく知らぬとの向きにあつても)それがイベント・ディスプレイ・プログラム、ATLANTIS による画面であると容易に分かるようになっている)。

(※注記として)

ここで[そもそもの問題]として読み手は思うかもしれない。

『何故、(安全なものであると自称されているとはいえ)ブラックホールの探知・探索などが重要視されているのか』

と。

については本稿の **出典 (Source) 紹介の部 2** にて

『LHC 加速器の現状と CERN の将来計画』

と題されての文書(オンライン上にあつてのそのままの文書タイトル名入力で「現行は」捕捉、全文ダウンロードできるとの文書 / 日本の LHC 実験参画グループ「元」代表者に由来する公的文書)より

(再度の原文引用をなすところとして)

“1998 年に提唱された ADD モデルでは余剰次元を導入することによってヒッグス粒子の質量の不安定性(階層性問題)を解決する。このとき重力は TeV 領域で強くなり、LHC での陽子衝突でブラックホールが生成され、ホーキング輻射のため  $10^{-26}$  sec で蒸発すると予言された。これは理論屋にとって大変魅力ある新しい展開で、危険性などまでには考えが及んでいなかった”

(引用部はここまでとする)

との記述を引いているところにも見受けられるような背景、

『ブラックホールの生成がなされる(そして、それが 10 のマイナス 26 乗秒後に瞬時蒸発を見る)可能性があると考えられた』

とのことが「物理学上の既存の強固な理論への反証材料の提供」との観点で一部の人間に「知的にエキサイティング」などと重要視されているとのことが「ある」からである(：自らを殺すことになるようなものに対して「誤ったものの方を無理矢理に押しつけられているとの筋合いの者達」が「痴的にエキサイティング」といったありさまでの狂騒狂態を呈して「外側の」存在に嘲笑われてのなかで愚かなやりとり]を交わしているだけであるといったことが「本当のところ」であるのならば、巻き添えを食らう人間にとっては無残も極まりないことになるわけだが、とにかくもの世間的説明としてはそうもなっている)。

さらにもって述べれば、同じくものことについては統一性理論の候補としての「超弦(ひも)理論」の適正さ検証といった問題にブラックホール生成のことが理論闘争の具として持ち出されることになったとのことがある。同点については本稿の「後の段にて」おいおい解説する(追記:本稿の後の段、**出典 (Source) 紹介の部 81** にて「何故、ブラックホール生成それ自体が科学者間の理論闘争の具になっているのか」とのことにつまざる解説をなすこととした))

(※注記として(2))

LHC 実験にはいくつかの大型の検出機器(ATLAS や ALICE や CMS と いった呼称を付されてのものが 供され、また、それら検出機器と同一名で呼称される実験グループ(ATLAS グループであるとか、ALICE チームであるとか、単に「ATLAS の方面で。」などと略称される実験グループ)が実験を執り行っているとのこと、オンライン上の和文・英文媒体調べれば、すぐに得心いこうところとあいなっているのであるが、LHC まわりでアトラスとだけ単に言及される場合、検出器それ自体(アトラス検出器)を指すケースが多いと解されるようになっている ——英文 Wikipedia [ ATLAS experiment ] 項目にては現行、“ ATLAS ( A Toroidal LHC Apparatus ) is one of the seven particle detector experiments ( ALICE, ATLAS, CMS, TOTEM, LHCb, LHCf and MoEDAL ) constructed at the Large Hadron



Collider (LHC), a particle accelerator at CERN ( the European Organization for Nuclear Research ) in Switzerland.” (訳として)

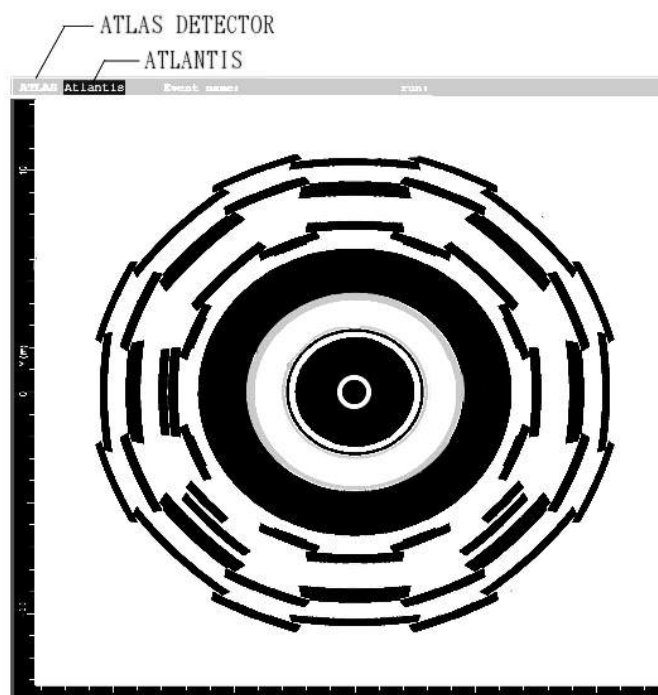
「ATLASこと A Toroidal LHC Apparatus (環状型 LHC ユニットでも訳すべきであろう)はスイスにある CERN のラージ・ハドロン・コライダー(LHC)に内包されるものとして建設された七つの粒子検出器 ALICE, ATLAS, CMS, TOTEM, LHCb, MoEDAL のうちのひとつである」といった書かれようや

“ATLAS is designed to be a general-purpose detector. When the proton beams produced by the Large Hadron Collider interact in the center of the detector, a variety of different particles with a broad range of energies are produced. Rather than focusing on a particular physical process, **ATLAS is designed to measure the broadest possible range of signals.**” (訳として)

「ATLAS は汎用性を有した加速器になるべくも設計されているものである。LHC にて生成された陽子ビームが検出器中央で相互作用した際に幅広いレンジのエネルギーを伴っての異なるさまざまな粒子が生成される。特定の物理的プロセスに注視するというよりも ATLAS 検出器は最も幅広い幅のありうべき兆候を計測するようにデザインされている」との表記がなされているところである――。

また、本稿筆者 (本稿筆者はアトラス日本グループの中枢機関と[LHC 実験関連の発表動向にまつわっての不正]につき行政訴訟の法廷で長々とやりあっていた人間であるぐらいであるから情報収集には余念がない ――そちら国内訴訟については本稿 **出典(Source) 紹介の部 17-2** に付しての表記などを参照されたい――) が[特化しての目的のために自身が設立した株式会社]の名刺で手ずから取材なした物理学者より聞き及ぶところでは、である。

「([核物理学]系の物理学者らが集っての ALICE グループに対して)[素粒子物理学]を専門にする物理学者らが関与しているのが ATLAS 検出器を主として用いての ATLAS グループとなっており、そちら ATLAS 検出器での探査挙動でブラックホールを検出をなそうとした際に用いられるイベント・ディスプレイ・ツールが ATLANTIS と命名されている」 とのことである)



上掲図は科学関連の紙誌上、あるいは、オンライン上流通の実験関係者資料でとかくブラックホール生成検出挙動と結びつけて引き合いに出される



ATLANTIS のディスプレイ画面を呈示したものである ——ディスプレイ上に  
図のように[ATLANTIS]と表示されている(ATLAS 検出器を指す ATLAS  
の文字列と並べられての式にて、である)。同ディスプレイ画面は中央部にて  
粒子の動きが描画され、その周囲には[熱量計計測のエネルギー状況が描  
画される]との仕組みとなっており、その独特なる動きにてブラックホール生成  
イベントを指し示している(というのが実験関係者らの申しようである) —— 。

(**出典(Source)紹介の部 35**はここまでとする)

直上直近までの表記でもってお分かりだろうが、

**「[アトランティス][アトラス]という言葉からしてワームホールやブラックホールを生成しうる  
とされるに至った加速器生成実験とダイレクトに関わっている語である」**

とのことになっている。

ここで ——さまざまなことにアンテナを向けているとの情報感度高き向きにして、なおかつ、本  
稿従前内容をきちんと理解しているだけの向きを「想定」とし—— 次のような見立てを呈す  
る読み手もおられるかもしれない。

『モーリス・ドリールという神秘家がより以前から存在していたというロバート・ハワードの  
小説、ザ・シャドウ・キングダムを具にして自家流の「蛇の種族によるアトラン  
ティスへの次元間侵略がなされた」とのこを内容とする神話体系を構築したらしい  
(との先立っての本稿筆者申しよう)との趣旨は分かった(**出典(Source)紹介の  
部 34**および**出典(Source)紹介の部 34-2**と解説部設けながら先に指摘したところ  
については分かった、でもいい)。

であるが、そのような捏造神話体系(アトランティス次元間侵略)が諸種文化事象  
に背面で影響を与えて CERN のアトラス実験に影響を与えている可能性とて否定  
できないのではないか。

たとえば、米国では『スターゲイト・アトランティス』というテレビ・ドラマ、宇宙の遙  
か彼方に通ずる扉、地球人と異星種族の接触・衝突を主軸とするテレビ・ドラマが  
2004 年から 2007 年にかけて作成、放映されている。その『スターゲイト・アトラン  
ティス』にモーリス・ドリールの捏造したような神秘的な世界観 ——蛇の種族の別次  
元からの次元間侵略について言及しているとの「いかにも」神秘主義者らしい神秘  
的世界観—— が背面で影響している可能性もあり、また、その『スターゲイト・アト  
ランティス』(2004 年初出)の元となった映画作品『スターゲイト』は早くも 1994 年に  
公開され、その『スターゲイト』の内容を踏襲し『スターゲイト・アトランティス』に先立  
つドラマ作品として

Stargate SG-1『スターゲイト・エスジー 1』

という作品が何シーズンにも分かれたれ、1997 年から 2007 年にかけて米国にて放  
映されていたとの事情もある。

また、そもそも、映画『スターゲイト』(1994) からして粒子加速器のようなリング状  
の構造物(といっても超強大なトンネルではなく屹立するホールに収まりそうなモ

ニュメント状構造物)が他惑星とのゲートになっていた作品であった。

そういう背景からモーリス・ドリールの自家流超古代史を『スターゲイト』シリーズなどが吸収、それを CERN の科学者らが「再」吸収してアトランティスと加速器の接合とあいなったということが常識的な線での説明としてなせると考えられるところである(それゆえ、筆者の考えは[穿ちすぎのもの]として棄却されるべきである、と付け足しでもしておくか)』

上のような観点で話が済めば、いかほどまでにこの身、筆者も気が楽であったろうか。「だが、」残念ではないが、上のような観点で説明をつけることが全くできないようになっている、そのようなかたちで、

「"こと"の根があまりにも深く深く及んでいる」(と指摘できてしまう)

からこそ、問題になるのである。

その点につき、順々に分けての解説をなしておく(続いての i. から ii. の流れをご覧頂きたい)。

## i

まずもって述べるが、表向き、LHC 実験関係者が **ATLANTIS** などという名前が付されたイベント・ディスプレイ・ツールを実験にて用いているのは同ツールが

「アトラス検出器の[目](イベント・ディスプレイ用の目)に引っかけられてのものであるから」

と自然に解されるようになっているとのことがある。

よりもって述べれば、ギリシャ神話の天を支える巨人 **ATLAS** の名前を冠するディテクター(検出器)、アトラス・ディテクターにあっての **ATLAS** の派生語として **ATLANTIS** が用いられるようになったと自然に解されるようになっているとのことがある。

その点、——唐突とはなるが—— 今日、沈んだ伝説上の大陸[アトランティス]のことを伝えるのはギリシャ期古典、かの哲人プラトンの手になる『ティマイオス』『クリティアス』となっている(それら該当古典よりの原文引用「も」これよりなす)。うち、『クリティアス』にあっては(直下にて一次資料たる古典そのものより原文引用をなすように)アトランティスの王が「伝説の巨人 Atlas」の名と同様の「アトラス」であったとの記載がなされており、加えて、「そのアトラス王の名がゆえ、[アトランティス]という伝説上の陸塊の呼称が決した」との表記もがなされている([文献的事実]の問題として「伝承上の」アトランティスの名称はアトラスという名前を持つ王の名に由来する」との表記が古典字面にてお目見えしている)。だけではない。アトラスの一群の娘らをしてアトランティスと表記する式があり(本稿のさらに後の段で後述する)、といったことを加味して「アトラスの」といった形容詞的ニュアンスの言葉がアトランティスであるとの理解が自然に出てくる、ために、イベント・ディスプレイ・ウェアの名称が **ATLANTIS** となっているのはそれが供される **ATLAS** 検出器(先述)がアトラスとの名称を冠しているからであるとの理解が自然に出てくるよう

になっている(プラトン古典にての表記内容については直下、[出典\(Source\)紹介の部 36](#)を参照のこと)。



# SOURCE

## 36

ここ出典(Source)紹介の部 36 にあつてはプラトン由来の古典『ティマイオス』および『クリティアス』にて

「古代にて大西洋の先にアトランティスとの王国があつた」

「海中に没した陸塊に存在していたと伝わる王国[アトランティス]の開闢王がアトラスという存在であり、それがゆえ、[アトランティス]との名称が付された」

との記述がなされていることの出典を挙げておく。

(直下、プラトン全集 12(岩波書店刊行)『ティマイオス』収録部の p.22—p.23 より中略をなしつつの原文引用をなすとして)

というのは、あの大洋には——あなた方の話によると、あなた方のほうでは「ヘラクレスの柱」と呼んでいるらしいが——その入口(ジブラルタル海峡)の前方に、一つの島があつたのだ。そして、この島はリビュアとアジアを合わせたよりもなお大きなものであつたが、そこからその島の他の島々へと当時の航海者は渡ることができたのであり、またその島々から、あの正真正銘の大洋をめぐっている、対岸の大陸全土へと渡ることができたのである。

…(中略)…

さて、このアトランティス島に、驚くべき巨大な、諸王国の勢力が出現して、その島の全土はもとより、他の多くの島々と、大陸のいくつかの部分に支配下におさめ、なおこれに加えて、海峡内のこちら側でも、リビュアではエジプトに境を接するところまで、また、ヨーロッパではテュレニアの境界に至るまでの地域を支配していたのである。実にこの全勢力が一团となつて、あなた方の土地も、われわれの土地も、否、海峡内の全地域を、一撃のもとに隷属させようとしたことがあつたのだ。

…(中略)…

すなわち、あなた方の都市は、その盛んな意気と戦争の技術と

であらゆる都市の先頭に立ち、ある時にはギリシャ側の総指揮に当たっていたが、後に他の諸都市が離反するに及んで自ら孤立を余儀なくさせられ、危険の極に陥りながらも、侵入者を制圧して勝利の記念碑を建て、未だ隷属させられていなかった者についてはその隷属を未然に防いでくれたのだし、その他の者に対しては、とにかくヘラクレスの境界内に居住する限りのわれわれ仲間すべてについて、これを、惜しむことなく自由の身にしてくれたのであった。

しかし後に、異常な大地震と大洪水が度重なって起こった時、苛酷な日がやって来て、その一昼夜の間に、あなた方の国の戦士はすべて、一挙にして大地に呑み込まれ、またアトランティス島も同じようにして、海中に没して姿を消してしまったのであった。

---

(引用部はここまでとする ー※ー )

(※上にて引用なしているプラトン全集 12(岩波書店刊行)掲載の『ティマイオス』邦訳版収録部 p.22 には

(そこだけ再抽出するとして)

「あなた方のほうでは「ヘラクレスの柱」と呼んでいるらしいが——その入口(ジブラルタル海峡)の前方に、一つの島があったのだ」  
とのかたちで[ヘラクレスの柱]が[ジブラルタル海峡]象徴物であると明示されているが、古典原著にジブラルタル海峡との言葉が表出しているわけではない。本来ならばいちいちもって断るまでもないことかとは思うのだが、古典を訳している学究が訳に現在の地理的呼称(ジブラルタル海峡)を入れ込んだためにそうなっている)

直近呈示の邦訳版文言に対して英訳されてのもので「オンライン上より誰でも確認できる」ところのソースも挙げておく。

(直下、Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロードできるとの英訳版 TIMAEUS by Plato ——19 世紀にあってのオクスフォードのプラトン翻訳家となる Benjamin Jowett との向きによって英語版に向けての英訳がなされている版——よりの原文引用をなすとして)

---

The most famous of them all was the overthrow of the island of Atlantis. **This great island lay over against the Pillars of Heracles, in extent greater than Libya and Asia put together,** and was the passage to other islands and to a great ocean of which the Mediterranean sea was only the harbour; and within the Pillars the empire of Atlantis reached in Europe to Tyrrenia and in Libya to Egypt. This mighty power was arrayed against Egypt and Hellas and all the countries bordering on the Mediterranean. Then your city did bravely, and won renown over the whole earth. For at the peril of her own existence, and when the other Hellenes had deserted her, she repelled the invader, and of her own accord gave liberty to all the nations within the Pillars. A little while afterwards there were great earthquakes and floods, and your warrior race all sank into the earth;

and the great island of Atlantis also disappeared in the sea. This is the explanation of the shallows which are found in that part of the Atlantic ocean.'

---

(英訳版プラトン著作よりの引用部はここまでとする ——訳は上に引用なしたとおりの邦訳版のとおりなので付さない—— )

(続いて、直下、プラトン全集 12(岩波)『クリティアス』収録部の p.236 より中略をなしつつの原文引用をなすとして)

---

ポセイドンはまた五組のふたごの男の子を生み、育てられた。そしてアトランティス島全体を一〇の地域に分けたまい、最年長のふたごのうち、さきに生まれた子に、母の住まいと、その周辺のいちばん広いもつとも地味の肥えた地域を分け前として与えて、かれを他の子どもたちの王となしたまい、他の子どもたちには、それぞれに多くの人間を支配する権限と広い地域からなる領土を与えて、その領主とした。なお、かれは子どもたち全員に名前をおつけになったが、そのさい、初代の王となった最年長の子におつけになった名前が「アトラス」だったので、この名前にあやかって、島全体も、その周辺の海も、「アトランティコス……」と呼ばれるようになったのである。

---

(訳書よりの引用部はここまでとする)

(同じくも)直上呈示の邦訳版文言に対して英訳されてのもので「オンライン上より誰でも確認できる」ところのソースも挙げておく。

(直下、Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロードできるとの英訳版 CRITIAS by Plato ——19 世紀にあつてのオクスフォードのプラトン翻訳家となる Benjamin Jowett との向きによって英語版に向けての英訳がなされている版——よりの原文引用をなすとして)

---

He also begat and brought up five pairs of twin male children; and dividing the island of Atlantis into ten portions, he gave to the first-born of the eldest pair his mother's dwelling and the surrounding allotment, which was the largest and best, and made him king over the rest; the others he made princes, and gave them rule over many men, and a large territory. **And he named them all; the eldest, who was the first king, he named Atlas, and after him the whole island and the ocean were called Atlantic.**

---

(英訳版プラトン著作よりの引用部はここまでとする ——訳は上に引用なしたとおりの邦訳版のとおりなので付さない—— )

以上引用なしたところにて示されているように古の陸塊アトランティスの[アトランティス]との命名の由来はポセイドンに[アトラス]と名付けられた者が開闢・創建時の王として推戴されていた

からであるとされている(くどいが、プラトン古典『クリティアス』にあつての “the eldest, who was the first king, he named Atlas, and after him the whole island and the ocean were called Atlantic [そのさい、初代の王となった最年長の子におつけになった名前が「アトラス」だったので、この名前にあやかって、島全体も、その周辺の海も、「アトランティコス……」と呼ばれるようになったのである]” との表記が該当するところとなる)

(出典(Source)紹介の部 36 はここまでとする)

---

## ii

上にて示した古典に記載される言葉の派生態様(「アトラスと名付けられた者が王であるからこそそのアトランティス」との言葉の派生態様)より見るところからも、  
[アトラス→アトランティス]

との関係性が見出せる。加速器にてアトランティスとの名称が付されたのも先行するところのアトラス検出器のことがあつてであろうと判じられるところとして、である。

そうしたことが述べられもする中でイヴェント・ディスプレイ・ツール ATLANTIS がそれとセットになっているとの LHC 実験にて用いられている ATLAS Detector (アトラス検出器)、ブラックホール生成時の観測にも一役買うとされている ATLAS 検出器の命名がいつなされたか、だが、筆者が(自身が設立した会社経由での)取材とのかたちで実験関係者に直に聞いたところとしてその命名(アトラス実験に付されての検出器呼称「とも」なるアトラスにまつわる命名)がなされたのは「1992 年である」とされている。については下の出典紹介部を参照されたい(尚、筆者が命名の始期についてこだわっているのは「物事の先後関係」を「因果関係」と「額面上の申しようとは異なる恣意性介入の可能性」との絡みで問題視しているからである)。

---

出典(Source)紹介の部 36(2)



# SOURCE

## 36(2)



本段、**出典 (Source) 紹介の部 36 (2)** にあつては

「LHC 実験まわりの **ATLANTIS** との呼称に影響を与えたと解されるようになっているとの **ATLAS** 実験 (を執り行う **ATLAS** グループ) にそも [アトラス] という名を用いるとのことが関係者らの間で決せられた時期は LHC 実験 (のための建設計画) にゴー・サインが出された 1994 年、そこから遡ること 2 年程前の 1992 年のこと となっている」

このことについて容易に確認できるとのオンライン媒体、

[ [timeline.web.cern.ch](http://timeline.web.cern.ch) とそれ専門のドメイン付されるかたちで公開されている CERN 公式サイト ]

にあつての記述を引いておくこととする。

(直下、[timeline.web.cern.ch](http://timeline.web.cern.ch) とドメイン付される形で公開されている CERN 公式サイトにあつての [The Large Hadron Collider | CERN timelines](http://www.cern.ch/accelerators/lhc/timelines) と題されてのウェブページ —— 表記文字列の検索エンジン入力で捕捉できもしようとのページ——  
よりの引用をなすとして)

---

[ATLAS and CMS collaborations publish letters of intent 1 October 1992]

The Toroidal LHC Apparatus collaboration propose to build a multipurpose detector at the LHC. **The letter of intent they submit to the LHC Experiments Committee marks the first official use of the name ATLAS. Two collaborations called ASCOT and EAGLE combine to form ATLAS.**

(訳として)

「[ATLAS および CMS にまつわるコラボレーション (共同企画) の面々が 1992 年 10 月 1 日付けで取決め書を発する]: **The Toroidal LHC Apparatus** コラボレーションの面々は LHC にあつて多目的に機能する検出器を建設するよう提案なした。そこにて彼らが LHC 実験委員会に呈示してきた設立覚書にて初めて [ATLAS] という名の使用が公的に現われていた。初期の [ASCOT] および [EAGLE] と呼ばれていた二つのコラボレーション (共同企画) の面々が ATLAS という名称にて一本化するとのかたちで合併するに至ったのである」

---

(引用部はここまでとする)

以上のことが 20 年以上前の 1992 年 10 月 1 日付けの取決め書 (ATLAS and CMS collaborations publish letters of intent) に関わるところとして明示されている。

ちなみに上のことが記載してあるとの同じくものウェブページにあつては

[LEP という加速器 ( Large Electron Positron Collider の略称たる加速器 / 1989 年から 2001 年にかけて運用 ) のために掘られる予定であったトンネルを [将来の計画] のために使うとの案]

が早くも「1984 年より表沙汰にされだした」との解説「も」なされており、そちら LEP 加速器のト

ンネルにまつわってのやりとりが **LHC** 計画のことが初めて公的に言及されだした折である「とも」言及されている（原文引用なせば、“CERN and the European Committee for Future Accelerators (ECFA) hold a workshop in Lausanne, Switzerland and at CERN from the 21-27 March 1984. The event, Large Hadron Collider in the LEP Tunnel, marks the first official recognition of the concept of the LHC. Attendees consider topics such as what types of particles to collide and the challenges inherent to high-energy collisions.”（訳として）「CERNとECFA(将来の加速器のための欧州協議会)が1984年3月21日から24日にかけてスイスはローザンヌでワークショップ(関係筋参加型合意形成の集い)を開いた。同ワークショップにあつての「LEPトンネルの中に据え置かれてのLHC。」というのが初めて公的に認知されることになったLHC構想である。同ワークショップ参加者らはいかようなタイプの粒子らが衝突なさしめられるべきなのか、続いての高エネルギー衝突のチャレンジとはどうしたものかといったことに思いを馳せることになった」との部位がその点について記述しているとのまさしくの部位となる)。

そうもして従前から構想のことだけは言及されていた **LHC** の計画案が

(**LHC** の青写真が世に出たとされる1984年から10年を経ての)[1994年12月]

にて **CERN** 運営委員会に正式に承認されて(同じくものオンライン公開文書にて“16 December 1994 The CERN council approves the construction of the Large Hadron Collider.”「1994年12月16日 **CERN** カウンシルはラージ・ハドロン・コライダーの建設を(正式に)許諾した」とあるところである)、**LHC** 計画が[実現すべき具体案]となったとの経緯が紹介されている(要するに「**LHC** の構成単位になったとの **ATLAS** グループの名称は **LHC** 計画が「正式に」スタートを見た1994年より2年程前から存在していたとの説明がなされている一方で **LHC** についてはその青写真が1984年からして呈示されだしていた」とのことである)。

(**出典(Source) 紹介の部 36(2)** はここまでとする)

ここまでの i. および ii. と振つてのことらの指し示し部から

『モーリス・ドリールという神秘家がより以前から存在していたというロバート・ハワードの小説、ザ・シャドウ・キングダムを具にして自家流の[蛇の種族によるアトランティスへの次元間侵略がなされた]とのことを内容とする神話体系を構築したらしい(との先立っての本稿筆者申しよう)との趣旨は分かった(**出典(Source) 紹介の部 34** および **出典(Source) 紹介の部 34-2** と解説部設けながら先に指摘したところについては分かった、でもいい)。

であるが、そのような捏造神話体系(アトランティス次元間侵略)が諸種文化事象に背面で影響を与えて**CERN** のアトラス実験に影響を与えている可能性とて否定できないのではないか。

たとえば、米国では『スターゲイト・アトランティス』というテレビ・ドラマ、宇宙の遙か彼方に通ずる扉、地球人と異星種族の接触・衝突を主軸とするテレビ・ドラマが2004年から2007年にかけて作成、放映されている。その『スターゲイト・アトランティス』にモーリス・ドリールの捏造したような神秘的  
世界観 —— 蛇の種族の別次元からの次元間侵略について言及している

との「いかにも」神秘主義者らしい神秘的 세계観—— が背面で影響している可能性もあり、また、その『スターゲイト・アトランティス』(2004年初出)の元となった映画作品『スターゲイト』は早くも1994年に公開され、その『スターゲイト』の内容を踏襲し『スターゲイト・アトランティス』に先立つドラマ作品として

Stargate SG-1『スターゲイト・エスジー 1』

という作品が何シーズンにも分かたれ、1997年から2007年にかけて米国にて放映されていたとの事情もある。

また、そもそも、映画『スターゲイト』(1994)からして粒子加速器のようなリング状の構造物(といっても超強大なトンネルではなく屹立するホールに収まりそうなモニュメント状構造物)が他惑星とのゲートになっていた作品であった。

そういう背景からモーリス・ドリールの自家流超古代史を『スターゲイト』シリーズなどが吸収、それを **CERN** の科学者らが「再」吸収してアトランティスと加速器の接合とあいなったということが常識的な線での説明としてなせると考えられるところである(それゆえ、筆者の考えは[穿ちすぎのもの]として棄却されるべきである、と付け足しでもしておくか)』

とのことが適正なる意見として成立しえない理由が何たるかおもんばかりいただけたかとは思(第一。「LHC がアトランティスとの呼称と結びつくのはアトラス検出器がゆえのことと解され、[次元間侵略と神秘家話柄にて早くから結びつけられていたアトランティス]とは関係ないと解される」。第二。「映画『スターゲイト』(1994年封切り)およびそのスピニアウト作品たる『スターゲイト・アトランティス』(2004年放映開始)が世に出る前からLHCは(実験供与イヴェント・ディスプレイ・ウェアとしてのアトランティスの命名由来になったと解される)アトラスとの名称と結びついていたとのことがあり、『スターゲイト』シリーズにまつわる呼称に実験関係者が「人間レベルで」影響されての命名可能性につき考えるのは時期的に妥当な見方ではない)。

以上呈示したことを受けもして「なおもって」次のように思われる向きもあるかもしれない。

『では、きたるべき **LHC** 計画にあつてのアトラス実験グループへのアトラスの命名の時点(1992年)で

[アトランティス]

との密接なつながりをもたせるべくもの意図があつたと解すればどうか。

後に『スターゲイト・アトランティス』という派生作品を生み出すに至つた映画『スターゲイト』(1994年公開)の登場前のことではあつたが、加速器が何らかの[ゲート]を生み出すとの潜在的可能性に対する認識がひっそりと存在しており——(本稿の先の段 **出典(Source) 紹介の部 20** にて問題となる科学者の弁を引いて解説しているようにブラックホールおよびその近縁のワームホールが時空間のゲートたりうる (Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos (邦題『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』、その384ページから386ページより掻い摘まんでの引用なすところとして “カー・リングの中心にワームホールがあれば、われわれの宇宙をまったく別の宇宙と、あるいは、同じ宇宙のなかにある別の地点と、結びつけてくれるかもしれない。…(中略)…現在、おおかたの物理学者は、ブラックホールを生きて通り抜けることはできないと考えている。しかし、ブラックホールの物理的解釈はまだ未熟な段階で、この推測は検証されていない。ここでの議論のために、ブラックホールを通り抜けることができ、とくに回転するカー・ブラックホールでそれが可能だと考えてよう。すると、どの先進文明も、ブラック

ホールの中を探索しようと真剣に考えるだろう ” (引用部はここまでとする)と  
いったところに見るブラックホールやワームホールをして[時空間のゲート]たりう  
るとする潜在的可能性に対する認識を受けての観点が学者の身内の間だけに  
ひっそりと存在しており)——、加えてもって、そこにモーリス・ドリール「的なる」  
妄言をこととするとの神秘家申しように対する意識——随分前から「アトランティ  
スが蛇の異種族に侵略された」との神秘家の妄言が展開されていたとのことにま  
つわる意識——など「も」が介在してのこととして、である』

上のような見解(「そうしたものでは話は済まされない」とのことを遺漏なくも指し示すのが本稿  
にあっての趣意のひとつであると述べておきたき見解)に対しては、[そもそも問題]のことを取り  
上げることで適正さの程を呈示することができる。

すなわち、表記の如き見解は

[加速器によってブラックホールやワームホールの類の生成が想定されるに至っ  
たとの科学界の論調の変化の経緯]

を全く顧慮していない、加速器によるブラックホール(そしてワームホール)の生成問題が[肯定  
的]な論調でもって科学界関係者によって取り沙汰されだしたのは2001年以降——すなわち、  
アトラスという実験グループ名称が決まった1992年より後のことである——と説明されることを  
全く顧慮していないがゆえに謬見(錯誤)を含んだ申しようであろうと考えられるようになってい  
るとの欠陥性がある(：について詳しくは本稿前半部にて摘示の[事実A]から[事実E]に関する  
内容(出典(Source)紹介の部1から出典(Source)紹介の部5を伴った内容)を参照されたい  
うえで、さらに本稿の続いての段でプランクエネルギーにまつわる言われようとの兼ねないで何を  
具体的に解説しているのか(出典(Source)紹介の部18から出典(Source)紹介の部21-2を  
含んでの箇所などで何を具体的にどう解説しているのか)確認いただきたいものである)。

さらにもって述べておくと、

「アトラスの表向きの命名由来は同アトラス検出器に用いられている[巨大な環  
状磁石](超伝導磁石トロイド、A「Toroidal」LHC Apparatusのtoroidal)に  
因るといった説明がなされており、そうしたことが指摘されているところではパル  
プ雑誌掲載小説内容を受けての「詐欺的」神秘主義者的なるモーリス・ドリール  
が前世紀前半、第二次大戦に近接しての時代より蛇の種族の次元侵略と結び  
つけていたアトランティスへの[その伝での文脈を意識しての命名]の側面は  
(1992年のアトランティスならぬアトラスATLASの方の呼称確定時には)な  
かったと解されるようになっていとのこと「も」ある(尚、この場合の[なかった]  
とは人間の科学者のレベルの認識では[なかった]ということであり、そこがボトル  
ネックとなっていることはここまでの[操作]にまつる文脈から論ずるまでもないこ  
とか、と思う)

因みにアトラスグループのウェブサイト内の特定頁(atlas.ch/t\_barrel.htmlとのかたちで特  
定できるページ)にては下に抜粋する通りの記述がなされている。





# SOURCE

## 36(3)

ここ出典(Source)紹介の部 36(3)にあつては

[アトラス検出器の正式名称が A Toroidal LHC ApparatuSこと「環状型 LHC ユニット (とでも訳すべきもの) 」とされていることを想起させるようにアトラス検出器がトロイド Troid(環状構造)との言葉と濃厚に結びつけられている]

とのことを紹介すべくもの引用をなしておく。

(直下、アトラスグループのウェブサイト内の特定頁( atlas.ch/t\_barrel.html にての検索エンジン上入力で特定できるページ)より抜粋をなすとして)

---

The ATLAS Barrel Toroid systems consists of eight coils assembled radially and symmetrically around the beam axis. The coils are of a flat racetrack type with two double-pancake windings made of 20.5 kA aluminum stabilized NbTi superconductor.

(逐語訳に代えての大要訳として)「アトラス・バレル・「トロイド」機構はビーム軸周りに放射線状かつシンメトリカルに配された 8 本のコイルを構成する (以下略)」

---

(訳を付しての引用部はここまでとしておく ー※ー )

(※アトラス検出器の流布された写真に認められる検出装置のまわりにダクト・パイプのようにくっついている八本の管が上記のアトラス・バレル・「トロイド」機構である。にまつわって書くところとしてトロイド Toroid というのは[[ドーナツ型]図形]に対して数学の分野にて与えられる呼称なわけだが、そのトロイド構造、すなわち、環状構造をとる巨大超伝導磁石を用いているからこそそのアトラス、正式名称「ア」・「ト」ロイダル・「ラ」ージハドロンコライダー・「ア」パラタ「ス」であるなどと表無きには説明されている。ちなみに表記の引用部に見る The ATLAS Barrel Toroid systems はアトラスとトロイダルが重層

的に用いられており、同語反復のきらいもあるが(正式名称から A Toroidal LHC Apparatus Barrel Toroid systems とあいなっている)、そうした語感の悪さはこの際、問題にならないであろう)

(出典(Source) 紹介の部 36(3) はここまでとする)

以上でもってよりもって納得いただけることか、とは考えるが、[常識的な観点](述べておくが、そこに陥穽(かんせい・落とし穴)があると指摘するのが本稿である)ではアトランティスやアトラスの由来は

Troidal [トロイド] (環状構造)

との形状に由来する正式名称に求められるところとなり、

[加速器とアトランティスの陥落の(一見にしては愚にも付かぬ)神秘主義者言いやうなどの間に成立しているアナロジー(類似性)]

の問題に対する明確な回答を与えることが「なしがたい」ようになっている(：他面、本稿の後の段にて表記するようなこと——史的に古(いにしえ)のアトランティスが古のトロイア城市と結びついて映るだけの特定古典にあつての記述がなされているとのことにまつわって表記すること——との絡みから上記トロイドの命名規則使用からして **LHC** が[トロイアの木製の馬]の寓意と結びつくように「されている」ことに相通ずるとの見方もなせるわけだが、それは[過分に印象論がかったの話]として脇に置く)。

これにて先述してきたところの  $\alpha$  から  $\gamma$ 、すなわち、

---

**$\alpha$**  . [カシミール効果]検証実験(1948 実施の実験)のことを露骨に想起させる独特なる行為によって宇宙開闢の実現が図られるとの小説『フェッセンデンの宇宙』(初出 1937 年の小説作品)ではその作中、誕生した宇宙で[爬虫類の種族]が人間そっくりの種族を「皆殺し」にするとの描写がなされている(介入者たる科学者によって繋がれた相互惑星の間の戦争にまつわるところでそうした描写がなされている)。さて、先覚性——初出 1937 年の作品のそれでありながら 1948 年のエポックメイキングな実験([カシミール効果]検証実験)の内容をなぞるが如くの前覚性——を有した『フェッセンデンの宇宙』(に見る[悲劇の宇宙]の開闢手法)と同様の手法で現実世界で検証されることになった[カシミール効果]が同文に現実世界にてその存在を指し示すことになったとの[負のエネルギー]というものに関しては[ワームホールを安定化させうるもの]とも 80 年代後半より考えられるに至っているとのことがある(出典(Source) 紹介の部 24 にて指し示しにつとめているところとして「物理学者キップ・ソーンによって加速器実験とは何ら関係ないところでそれ絡みの科学仮説が呈示なされての」1980 年代後半のこととしてである)。他面、(人為的に繋がれた惑星の間での戦争を通じての爬虫類に似た種族による人類に似た種族に対する皆殺し挙動が描かれるとの)小説作品『フェッセンデンの宇宙』と同様に[宇宙の開闢状況]を再現する、すなわち、宇宙開闢時(ビッグバン時)のエネルギー



状況を極小スケールで再現すると銘打たれながら後に執り行われるに至っている加速器実験に関しては[『フェッセンデンの宇宙』と同様の手法で検証された][カシミール効果]に見る[負のエネルギー]でこそそれが安定すると80年代後半に考えられるに至ったものたるワームホール]をそちら加速器実験が生成しようとの観点が「ここ最近になって」(プランクエネルギーとの高エネルギーを用いなくとも加速器実験にてワームホール生成なしうとの観点が「ここ10数年で」)呈されるようになったとある(出典(Source)紹介の部18、出典(Source)紹介の部21-2らを通じて専門の科学者の手になる書籍に見る科学界の主たる理論発展動向に関して解説しているとおりである)。

$\beta$  . 上の  $\alpha$  でフィクション『フェッセンデンの宇宙』と現実の[加速器実験]を——[宇宙の開闢状況の再現の企図]といった共通事項に加えて——結びつける要素となるのが、  
[[カシミール効果による負のエネルギーの検証]と密接な関係にある「通過可能な」ワームホール]  
となるのではあるが、そちら通過可能なワームホールのことをテーマとして扱っているのがキップ・ソーン著書『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作となる。同著に関しては[911の事前言及][他界との扉]との観点で爬虫類の異種族による次元間侵略を描いた映画、『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』という[上階に風穴が開き、片方が倒壊していくツインタワー]のワンカット描写を含む映画]と記号論的につながる素地がある(：その理由は事細かに先の段にて述べている。(羅列しての表記をなせば)出典(Source)紹介の部28、出典(Source)紹介の部28-2、出典(Source)紹介の部28-3、出典(Source)紹介の部29、出典(Source)紹介の部31、出典(Source)紹介の部31-2、出典(Source)紹介の部32、出典(Source)紹介の部32-2、出典(Source)紹介の部33、出典(Source)紹介の部33-2で問題となる著作がいかようにして[双子のパラドクス(1911年提唱)の機序の利用による二点間時差の応用]／[91101(2001年9月11日を意味する数)との郵便番号ではじまる地を始点に置いてのタイムワープにまつわる解説や同じくもの地で疾走させた爆竹付き自動車にまつわる思考実験による[双子のパラドクス]にまつわる説明の付与]／[2000年9月11日⇒2001年9月11日と通ずる日付け表記の使用]／[他の関連書籍を介しての「ブラックホール⇄グラウンド・ゼロ」との対応図式の介在]といった複合的要素を[僅か一例としての思考実験]にまつわるところで同時に具現化させ、もって、「双子の塔が崩された911の事件」の前言と解されることをなしているのか、について(筆者の主観など問題にならぬ客観情報にまつわるところとして)摘示している。他面、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という書籍にて[多重的に911と結びつくようにされている双子のパラドクスにまつわる思考実験]が[通過可能なワームホール](他空間の間をつなぐ宇宙に開いた穴)にまつわるものとなっているとある一方、1993年の荒唐無稽映画 Super Mario Bros. (邦題)『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』がツインタワーが異次元の恐竜帝国の首府と融合するとの粗筋の映画であることについては出典

(Source) 紹介の部 27 を、そして、同映画がツインタワーに対するジェット機突入前のことであるにも関わらず上階に風穴が開き、片方が倒壊していくツインタワーをワンカット描写している映画であることについてはオンライン上に流通している記録動画群 —— Super Mario Bros., 1993, 911 といったクエリで検索エンジン走らせればすぐに特定できようとの動画群 —— などを通じて確認されたい)。

$\gamma$  . 上の  $\alpha$  . と  $\beta$  . は異様な先覚性がみとめられるところで[[爬虫類の似姿をとる異種族の侵略]と[加速器実験の結果たるワームホール]との接合]が見てとれることを示すものであるが(問題はそのようなことがあるのが「偶然の一致」で済むか否か、である)、[[加速器と同様のもの]と[爬虫類の異種族の侵入]を結びつけて描く作品]は他にも存在している。先に言及したブルース・スターリングの『スキズマトリックス』との作品、ローンチ・リング(加速器と同様の機序を有する装置)での死闘の最中に爬虫類の異種族の来訪を見るとの同作が該当文物となる(委細については先の解説部を参照されたい。出典(Source) 紹介の部 26 から出典(Source) 紹介の部 26-3 との出典解説部を設けながらなしてきた本稿にての従前の段がその部に該当する)。

(尚、上に  $\alpha$  . から  $\gamma$  . と振って再言及しているところの関係性に加え、[加速器とブラックホール特質を繋げての同時言及(「異様な先覚性を伴っての」同時言及)][爬虫類の種族による人間種族への侵略]との要素をあわせて具備しているとの作品が一九五〇年代初頭より Philological Truth [文献的事実]の問題として具現化しているとのこと「も」がある、その点についても本稿の後の段では解説する所存である——当該文物原著よりの事細かな原文引用をなしながら **The Sword of Rhiannon** (邦題は『リアノンの魔剣』)という作品のその伝で問題になる特性について詳説を講ずる所存である—— )

---

とのことらに

[梁となる要素ら ——アトラス・ヘラクレス・アトランティス・トロイア崩壊譚—— ]

が結節しているとのことがある、その絡みで取っ掛かりとなるところを呈示するとの話の流れの中で「まずもってそこより」問題視することにしたとの、

「[アトランティス][アトラス]という言葉からしてワームホールやブラックホールを生成しうるとされるに至った加速器生成実験とダイレクトに関わっている語である」

とのことの説明を終えることとする。

これ以降の部では次いでもってして上にて再掲の  $\alpha$  . から  $\gamma$  . と【梁となる事柄】らがいかにように結びついているとのことについて

[「まずもって」摘示しておきたきところの第二点目]

について筆を割くこととする。

[ [これよりの話の流れ] 上、何が問題になるかについて指摘なしたきことの第二として ]

上記  $\alpha$  から  $\gamma$  と梁となる要素が相通ずるようにもなっているとのことについて

「[これよりの本稿での話の流れ] 上、どういったことが問題になるかについての取っ掛かりとなるところを呈示する」

との趣意にて申し述べることとしたこと、にあつての以下の点に話を移す。

(プラトン著作より原文引用なして先掲の **出典 (Source) 紹介の部 36** にあつて呈示したように古典で[アトラスとの名を王に戴いていた]と表記されているアトランティスのことを想起させもする巨人アトラスに関わるところとして)

[ヘラクレスの 12 功業の内、第 11 功業は「アトラス」が登場するものなのだが(にまつわつてのきちんとした文献記録よりの原文引用も後の段でなす)、そちら伝説上のヘラクレス功業を巡る話が — 普通に考えれば、奇怪奇態としか思えないようなところとして— 「九一一の事件」と関わっているとの指摘がなせるようになってきている(なつてしまつている)とのことがある]

以降、上のことについての「まずもつての」ものたる解説をなしておくこととする——同じくもの点、すなわち、[911 の事件とヘラクレスの第 11 功業が「どういうわけか」接合していると摘示できるようになつてしまつている]との点は本稿全体で証示なしていく所存であるとのことだが、「まずもつての」ものたる解説をなしておくこととする—— (※)。

---

※言論動向 — [話としての通用性] — を巡る補足として

上のこと、

[ [911 の事件] と [ヘラクレスの 11 番目の功業] の関係性 ]

については欧米圏にあつて同じくものことを指摘せんとする向きが英文での情報発信者にあつて

「**「僅か」片手の五指で数えられる程度ほど**」

に従前よりいたとのことがある。

ただし、そうした向きら — 僅か五指程度にて数えられたとの向きら — も(だんまりを決め込んでいる数万単位でいそうな臆病者らと同様に)『知つていながらであろうに』とも見てとれる中ながらもきちんと指し示しをなしてくれていないとの風があつた(背景には彼らのサイトの表示のされにくさからくる費用対効果、そして、彼ら自身の負つた制約があるのではないかと判じもしている)。

といった事情を望見しつつも筆者はできるだけ入念に同じくものことについての指し示しをウェブ上でなそうと試みようとしてきたとのことがある。

そうした背景あつての人間として筆者は

[本稿を公開することにしたウェブサイトの一](自身で言うのも何ではあるが、

見てくれ・筆の運びとの両面で当初はかなり拙いものであったサイト)

でもって自身解説を試みてきた同じくものこと、すなわち、

[911の事件とヘラクレス12功業の関係性]

を巡る「海外の」オンライン上の言論動向の[経年変化]の把握にも腰を入れもしてきたとのことがある(：「海外の」言論動向としているのは、「日本国内」では元来からしてそういうことに言及する者が[絶無]であったからである。その点、これより日付け偽装媒体などにて相応の面構えの者らが[真実を台無しにするためのトンデモ噺]のようなものと同義同一なるところとして(皮肉を込めて)「表示上、過去に遡っての」言及をなす可能性はあるかとも見るが——[日付け偽装]をなすような者に真摯さがあるわけもなかろうし、同文により質的に優れた先達が存在しているところで劣化媒体をこさえる人間に誠実さがあるわけもないと考えられるがため、相応の意図、[真実を台無しにせんとするが如し意図]があるとの判断の下に書いている——、とにかくも国内での言及者が絶無であったとのことがあり、専ら海外の言論動向の変遷の把握に腰を入れてきたとのことがある)。

そちら海外の言論動向の精査の中でオンライン上にて関連しそうな海外のページがどういう風に表示されてきたのか(あるいはそこに存在しないかたちにて表示されてきて「いなかった」か)とのことを検索クエリ——検索エンジン入力文言——毎に[日付証跡付き]で手前は録画をなしてきもした(何故、そこまでしたかについてはひとつには[あまりにもことが重大である、しかしながら、そのことがなんら取り上げられていないのはどういうことなのか]との観点に依拠しての情報流通動態にまつわる確認欲求があったこと、そして、[劣化媒体が構築された場合、その経緯を捕捉しておくのも有意義であろう]との認識があったことが挙げられる)。そうした録画プロセスより特定していることは「不愉快、」というより、深刻に「度し難い」ととらえたところともなっており、それなりのキーワードでは何とか表示されていた手前サイトのようなものが表示され「なくなる」とのことが具現化を見るに至った一方で(いろいろな向きに相談をなしたこととして何語もキーワードを入力しないとHTMLファイルの構造(タイトルタグや文構造などに着目しての構造)からも奇怪なことにサイトが表示されなくなるとの傾向が強まっていった)、海外でいままでお目見えして「いなかった」ところにて[「相応の」媒体]([きちんとした論拠を呈示する意思も能力もないのであろう]といった按配の「相応の」面構えの[知的誠実性]とは無縁なる憑かれたような者達由来のどぎつい英文サイトなど)がより以前より同様のことに「中途半端極まりなくも」言及していたようなかたちでそこにあった、そのようにオンライン上に目立って見受けられるようになってもいるとのことがありもする(おそらく他の動向を受けての[更新]された煙幕撒布([言論の封殺]と[真実の陳腐化]を企図しての力学、人類に望ましい明日など絶対に与えるつもりなどないとの筋目の力学に由来する作為)がなされていると判じている)。

だが、それにしても、やはり、同様のこと、

[911の事件とヘラクレス12功業の関係性]

について言及しているとの海外の向きは指で数えられる程度にしか「いない」とのことがある。

以上のようなかたちで言論動向の把握に録画までして努めてきた人間として強くも申し述べるが、

「取り上げていることの言及者がほとんどいない、また、といったなかで指で数

えられる程度にての極々僅少なるところで僅かに見受けられるとの「海外の」言及者やりようの態様も不十分なる言及、あるいは、悪質性を感じさせる言及にとどまる——言論動向の問題としてそうもなっている—— のことがあったとしても、である。俎上にあがっていることが真実ではない保証にはなんらならない——地球人口 70 億超(うち、先進国に住まっており[140 字程度の無価値無意味なる「作文」「声なき声」などは本質的に質を異にする情報発信]にもやぶさかではないとの水準高き者は 100 万未満か)のなかにあつて言及者がまったくもっていないとのことであつても俎上にあがっていることが[真実]ではないとの保証にはなんらならない、でもいい——」

上のこと、申し述べたうえで書くが、

[ [911 の事件] と [ヘラクレスの 11 番目の功業] の間には関係がある]

とのことについては(本稿の水準の問題を慮りいただきながらでも)[話としての奇矯さ]に加えての[話としての耳に入りづらさ]でもって[予断]を抱かないようにしていただきたい次第である。

(言論動向 —— [話としての通用性] —— を巡る補足はここまでとしておく)

---

さて、

[ [911 の事件] と [ヘラクレスの 11 番目の功業] の関係性]

とのことについては

「ヘラクレスの 12 功業のうちの[第 11 の冒険]と先の[911 の事件]は密接に結びついている。[911 の「前言」事物](そうしたものが存在していること自体がそも不可解極まりないことなのだが、[911 の事件が起こる前から同様の事件の発生を前言していたが如きもの])との兼ね合いですらそうもなっている」

とのことを「従前より」不特定多数の人間に微力ながら訴求試みんとしてきたとのことが本稿筆者には背景としてあり、の中では、

[極一例 —いいだろうか. その他多数材料呈示しての中での極一例である— ]

として、

[直下、事例紹介するようなこと]

を訴えんとしてきたとのことがある(本稿を公開することにしたサイトの一にあつての他の部にあつてからして[次のこと]に従前より言及してきた)。

(本稿を公開することにしたサイトの一にあつての他所でも述べているところとして、そして、これより本稿それ自体でもより入念なる出典紹介をなすところとして)

「 — [イルミナティ]などというどぎつい陰謀論者好きする言葉が用いられている作品としてながらも — 70 年代に米国で大ヒットを見た小説、



**The Illuminatus! Trilogy『ジ・イルミナタス・トリロジー』**(正確には[光を与えられし者の三部作]とでもなろう語感のものだが、日本語ではイルミナティというフィクションや陰謀論の分野で好まれる陰謀団の名称からイルミナティ三部作と呼び慣わされている作品(額面・表面上はいかにも、の荒唐無稽小説))

が[ヘラクレスの11番目の功業]に関する寓意性を色濃くも呈しながら911の事前言及をなしている作品となっているとこのことがある」

※イルミナティなどの語を含む文物(上にて言及の『ジ・イルミナタス・トリロジー』)のことを持ち出すと

『品行陋劣なる陰謀論者(イルミナティや三〇〇人委員会といったものをこの世界の影の支配者に比定してそちらに問題が収斂している旨、強調するとのお決まりの口上をお家芸とする者ら)か何かか?』

『情報操作者か?』

との式できちんとした知(ウィルダリー・ナレッジ世俗知としての知識と知恵)を有している向きらなどに誤解がなされうる、それによって、自身が命を賭けて訴えんとしていることにまで予断を抱かれやすくなり、訴えんとしているとのその行為自体が[さらにもって無為に帰しやすくなる]との危惧・懸念があるため、本稿冒頭部より強調していたことを下に再度、繰り返し表記しておく。

(restating)

**Although this long paper deals with [ foretelling problems ] which are related with masonic symbolic system deeply , I don't cling to point of view that such organizations as Freemasonry (or "legendary" Illuminati) are chief conspirators behind significant incidents. As an author of this evidence-based paper, I never intend to maintain "self-belief-system" avoiding the sterile land of conspiracy theorists who persist in conspiracy "theories" such as [ NWO conspiracy theory ] , [ Illuminati (that organisation can't be identified exactly) conspiracy theory ] or [(fictional?) power obsessed human elite circle conspiracy theory].**

「長くもなるこの本稿にあっては

[フリーメーソンのシンボル体系と濃厚に接合する「前言」事物]

らがあまりにも露骨に多数存在しているとの問題についても取り扱うが(具体的事例を多数挙げながらも取り扱うが)、だが、だからと言って、(本稿それ自体にて)フリーメーソンのような組織体が重要な出来事の背後背面に控えるフィクサーとしての陰謀団であるとの見立てを押し売りしたいわけではない。

フリーメーソンのシンボリズムを異常異様なることに流用する力学があるとは具体的事実を挙げ連ねて指摘なすが、[チェス盤上の駒]が陰謀の立役者であるなどとは考えていないし、そのようなことを目立って訴求するつもりもない。

またもってして筆者は陰謀論者よろしく[新世界秩序陰謀論][イルミナティ(という実体不明瞭なる組織体)に関連する陰謀論][「人間の」権力それ自体に固執するエリート・サークル(架空存在たりうる)による陰謀論]に固執するような人間でもない」



以上のこと、[911の事件とヘラクレス功業の接合性]が小説作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』（「表面上は、」もの荒唐無稽小説）にて具現化しているとのこと、そして、そもそももってしての当該小説それ自体が911の事前言及作品にすらなっていると申し述べられるとのことについては原文引用なしながらも典拠紹介をこれより事細かになす所存だが——そこからして（一見関係ないように見えもして）つい先ぞにあっても繰り返しなしているとの $\alpha$ . から $\gamma$ . のことらに相通じるようになっており、ゆえに、極めて重要であるとの認識があるから[そうまでする]（原文引用なしながらも懇切丁寧なる典拠紹介をなす）わけではあるも——、それに先立って、表記小説（『ジ・イルミナタス・トリロジー』）に対する欧米圏にての評価なされようについて端的に紹介しておきたい。

（直下、近年、集英社より遅まきに—原著が出たのが70年代だったところを2007年まで邦訳されなかったとの意味合いで遅まきに—四分冊で邦訳・刊行されたとの文庫版『イルミナティI ピラミッドからのぞく目（下巻）』、その284ページにての同作邦訳版訳業に携わった邦訳者の作品に対する解説を引くとして）

「あの幻の伝奇小説の古典 ILLUMINATUS!の刊行をとうとうスタートすることができました。…（中略）…といっても、多くの読者のみなさんには、これがどれほど大変な事件なのかおわかりいただけないかもしれません。…（中略）…ロバート・アントン・ウィルソンとロバート・シェイの二人がアメリカのデルという出版社から三部作として発表し、たちまち百万部のベストセラーとなり、全世界でカルト的人気を博した、究極の陰謀小説ともいわれ、多くの流行語まで生み出した大傑作なのです。そればかりではなく、ミュージカルになり、大きな賞をとる傑作ゲームになり、ロックのさまざまな名曲を生み出し、いかがわしい秘密結社を描くトндеモ本の大流行まで招いた、一つの社会現象になった作品です」

（ここまでを引用部とする）

上のように邦訳版訳者に述べられているとのかたちにて「反響呈しての」ジ・イルミナタス・トリロジーが大要としてどういう作品かは長々と英文 Wikipedia の [ The Illuminatus! Trilogy ]

項目にまとめられているのでそちら参照するのもよからうか、と思う——日本語圏での最も手取り早い全容の把握方法は国内で流通を見ている四分冊翻訳されているところの文庫版を手にとって読まれてみることであろうと思うが、とにかくも申し述べておくところとしてである——。

直上にて [ 基本的なところ ] （社会的認知ありよう）につき [ 申しわけ ] 程度に言及した上で、

[ 著名フィクション ( The Illuminatus! Trilogy『ジ・イルミナタス・トリロジー』) に顕在化を見ているとの [ 911 の前言 ] ]

が何たるかの「細かくもの」解説を以降なしていくこととする（同小説作品が何故にもってヘラクレス第11功業と結びつくのかについて解説なす前にその点からの解説をまずもってなす）。

さて、70年代にヒットを見た小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』に関しては以降述べていくところの、

1. -5.

の各点から [911 の前言小説] にして [ヘラクレスの第 11 番目の冒険] と結びついている作品と述べられるようになっている。

# 1.

表記の小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』(表面上は荒唐無稽小説にとどまるとの作品) は  
[ニューヨークはマンハッタンに位置するリベラル系出版社のオフィスビル爆破]

より話がはじまる小説である。

そこからして、(物事の重みは[一致性の重層性]および[確率的な意味での偶然の成り立ち易さ度合い]から判じるべきであるとは見るべきであるのは論を俟たないことであろうが) [マンハッタンのビル攻撃] とのことで先に起こった 911 の事件の連続ビル倒壊事件のことが「取りあえずも」想起される。

---

## 出典(Source)紹介の部 37



# SOURCE

## 37

ここ出典(Source)紹介の部 37 にあつては

[小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』はニューヨークはマンハッタンに位置するリベラル系出版社のオフィスビル爆破より話がはじまる小説である]

とのことの出典紹介をなしておく。

その点、まずもって書くが、フィクション内での

[マンハッタンのビル爆破]

については問題としている小説原著ジ・イルミナタス・トリロジーの BOOK#1:THE EYE IN THE PYRAMID (70年代である原著刊行時期から見て遅まきにも) を訳するとのかたちで2007年に文庫版が和訳されて刊行された集英社刊の文庫版『イルミナティI ピラミッドから覗く目(上)』をご覧いただければ、すぐに同じくもの点につき確認いただけるところでもある。というのも当該の和訳版文庫本では——少なくとも当方の手元にあり本稿執筆現時点で書店に流通しているものらに關しては—— [着脱式ブックカバーの部の背面に印字された粗筋紹介部]からして [ニューヨークのマンハッタンでのビル爆破から話が始まること]への言及がなされている(書店で容易に確認がなせるところとしてカバー背面部でそういう表記がなされている)からである。

同じくものことについてオンライン上より確認できるところとしては(全文も現行、ダウンロードできるようになっているのであるも)、英文 Wikipedia [ The Illuminatus! Trilogy ] 項目にての Plot summary (粗筋要約)の部にあつての、

The trilogy's rambling story begins with an investigation by two New York City detectives (Saul Goodman and Barney Muldoon) into the bombing of Confrontation, a leftist magazine, and the disappearance of its editor, Joe Malik.

(訳として)

「トリロジー・シリーズの発散性を呈しての物語はソール・グッドマンとバーニー・マルドゥーンらのニューヨーク市警の両刑事らによるコンフロンテーション誌、左翼系の同雑誌社の[爆破]および編集者ジョー・マリックの失踪に対する捜査(にまつわる描写)より始まる」

との記述からもそうしたところとなっていると理解できるようになっている。

上のウィキペディアよりの引用部では[コンフロンテーションという雑誌社が爆破されている](このことに対しての捜査ありよう描写から小説が幕を開ける)と表記されているが、そちらコンフロンテーションがマンハッタンに設けられていたとの設定が採用されていることを示す訳書および原著よりの引用もなしておく。

(直下、集英社から遅まきに出された邦題文庫版タイトル『イルミナティI ピラミッドからのぞく目(下)』にての[第五のトリップ]の節、269 ページの表記——冒頭部からの描写を振り返つての記述が端的になされている部——よりの引用をなすとして)

---

だが、爆弾事件捜査班のダニー・プライスフィクサーはほとんどこの異様な出来事に気づかずにいた。<コンフロンテーション>爆破の起こる前の週にジョーゼフ・マリックと話をした可能性のある全員から聞きこみをするために、マンハッタンの端から端へと大渋滞の中で車を走らせていたのだ

---

(訳書よりの引用部はここまでとする —※— )

(疑わしきがオンライン上にての検索からも裏取りできるようにすべくも表記の引用部に対応する原著表記、オンライン上のアーカイブサイトより現行、全文ダウンロード可能となっているとの原著 The Illuminatus! Trilogy The Eye In The Pyramid Book Two: Zweitragt にての THE FIFTH TRIP, OR GEBURAH の節よりの引用もここにてなしておく。(以下、上にて引用の国内流通訳書

に対応するところの原著表記よりの引用をなすとして) “ Danny Pricfixer of the Bomb Squad, however, was almost oblivious of this bizarre occurrence, as he drove through heavy traffic from one part of Manhattan to another interviewing every witness who might have spoken to Joseph Malik in the week before the Confrontation explosion.” (原著よりの引用部はここまでとする)

以上出典表記でもってお分かりのことかとは思いますが、[文献的事実]の問題としてジ・イルミナタス・トリロジーは左派系の出版社のマンハッタンのビルの爆破から話がはじまるとの物語である。

(出典(Source)紹介の部 37 はここまでとする)

---

## 2.

続いて指摘するが、小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』(繰り返すが、表面上は荒唐無稽小説にとどまりもしているとの小説作品)では物語が終盤に近づいていく過程で

「魔的封印を解くとの目的でペンタゴンが爆破・部分倒壊させられる」

との描写がなれている。

---

出典(Source)紹介の部 37-2



# SOURCE

## 37-2

ここ出典(Source)紹介の部 37-2 にあつては、

[小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』はペンタゴン爆破描写を含む作品である]

このことの出典紹介をなしておく。

フィクション内でのペンタゴン部分爆破については問題としている小説原著ジ・イルミナタス・トリロジーの最終巻、BOOK#3：LEVIATHANを邦訳したとの集英社刊『イルミナティIII リヴァイアサン襲来』の[第九のトリップ]と銘打たれた章に見ることができる。

そちら問題となる部を当方所持の版の書店流通邦訳文庫版 — 邦訳初版版の文庫版『イルミナティIII リヴァイアサン襲来』— よりの原文引用、次いで、オンラインより確認可能との原著よりの原文引用とのかたちで下に挙げておく。

(直下、文庫版『イルミナティIII リヴァイアサン襲来』(集英社) p.120より原文引用をなすとして)

---

「ワシントン時間で午後五時五五分に、一連の爆発によりペンタゴンの三分の一が破壊され、いちばん内側の中庭からいちばん外側の壁まで、四重の環状構造がずたずたにされた」

---

(引用部はここまでとする)

疑わしきは和訳版(文庫)を直に手に取られて確認されるとよからう。

また、英文原著の方、The Illuminatus! TrilogyのBOOK#3：LEVIATHANの原著版テキストもオンライン上のアーカイブなど複数媒体からネット上にて現行確認可能となっているので原著版記述も引いておく。

(直下、インターネットアーカイブなどの海外のアーカイブサイトなどから現行、全文確認できるところのThe Illuminatus! TrilogyのBOOK#3：LEVIATHAN(にあつてのTHE NINTH TRIP, OR YESODの部)より原文引用をなすとして)

---

In any case, at 5:55 P.M., Washington time, a series of explosions destroyed one-third of the river side of the Pentagon, ripping through all four rings from the innermost courtyard to the outermost wall.

---

(原著よりの引用部はここまでとする — こちら英文テキストの把握については全く手間(図書館で借入するぐらいの手間)も小銭(文庫本を購入するぐらいの金銭)も投ぜずにできることであるので、表記テキストをグーグル検索エンジンなどに入力、その通りの内容が具現化を見ているのか、オンライン上より確認されてみるのもよからうか、と思う— )

---

※尚、上引用部に見るように小説作中にて[午後五時五五分]がペンタゴンの爆破時間として描かれているわけだが、[アナログ式時計](今日、文明社会で普段用いられているインド・アラビア式の数字での時刻表記のものであればなお望ましい)

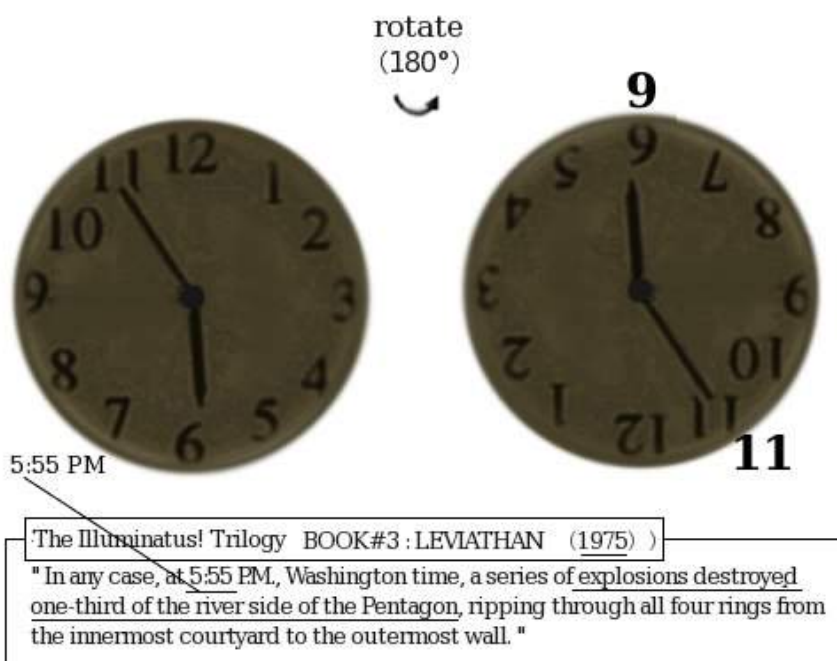
が手元にあるとのことであれば、そちら手元に寄せて見ていただきたい。

[午後五時五五分](問題としている小説作中に見るペンタゴンの爆破時間) というのが

[時計の時針にての短針がアラビア数字で6の位置を指し、時計の時針にての長針がアラビア数字で11の位置を指す]

時刻であること、お分かりいただけることか、と思う。そこで時計を上下逆様にひっくり返して見てみると、[9]と[11]への時針の指し示しが浮かびあがってくる(下にて呈示の図など参照のこと。ひっくり返さなくとも[9]と[6]の視覚的相似性から臭いを感じると手前などは見ている)。

far-fetched?



note ( ["only coincidence" probability] ⇒ the probability should be estimated to be higher because of authors' adherence to the Law of Fives.)

偶然か?

筆者はそこからして[偶然]であるとはとらえていない。その他の判断材料——これよりさらに述べていくところの同じくもの小説の事前言及作品としての性質——から[意図してのやりよう]であろうと想定している(：但し、である。ジ・イルミナタス・トリロジー・シリーズの作中テーマとしては **the Law of Fives [5の法則]** なるもの(数値の五には重きを置いて然るべきであるとする当該のフィクションの中で頻繁にもちだされる法則ザ・ロー・オブ・ファイブズ)が重きをなしている。といった中でジ・イルミナタス・トリロジーでは正五角形を呈しもするペンタゴンがその形状から[5の法則]にて重んじられる存在として言及されており(ペンタゴンは五角形であるから五を重んじる法則の枠内にある云々)、ペンタゴンが(5が三連続するとの)5時55分に爆破されているとのことは「フィクション体系なりの蓋然性ありであろう」、「逆転すると911と結びつく時間帯に爆破されていることは前言事象としてとらえるべきところではなかろう」との言い分もなされる、「それ単体だけ」顧慮され



た際にはそういう言い分がなされやすくもあるところか、と言及しておく)。

[強くも訴求したきことにまつわっての追記として]：加えて述べておくと、上のような話をなしている背景には「180度回転させると911との数値が浮かび上がってくるもの」を「ツインタワー(崩落)関連事物」と結びつけて911の事前予告なすが如き作品「ら」が他に複数作、存在しているとのことがありもする（「ツインタワー(崩落)関連事物」と(911の事件の発生前に)「数値を180度変換させることで911となるもの」があわせて描写されているとの作品らがあること自体が、いわば、常識的に考えてみて「信じがたいようなこと」ではある)。にまつわっては（ここにての一文が追記部のそれであるからこそかなり先んじての段についても細々と言及できるのだが）本稿の後の段、[補説4]と銘打つてのかなり段にあつての[出典(Source)紹介の部106(3)][出典(Source)紹介の部108]との部にて具体的なる作品らを挙げての出典紹介を[容易に後追いできるかたち]にてなしている。

さらに述べれば、

[午後5時55分にあつてのペンタゴン爆破]

を目立って描くとの小説『ジ・イルミナタス・トリロジー・シリーズ』最終巻『リヴァイアサン襲来』(英文タイトルはBOOK#3: LEVIATHAN)にあつては巻末に付されての[付録の部]として

[秘教象徴体系紹介部]

と銘打たれての部が設けられているとのことがあるのだが(いいだろうか。要するに[「隠された象徴」に対する解説部]が設けられているとのことがあるわけだが)、そちら秘教シンボル知識紹介部の中にあつてまったくもって意図不明に

“But we say no more at this point, lest the reader begin seeking for a  $5 = 4$  equation to balance the  $5 = 6$ .” 読者が「 $5 = 6$ 」の公式と釣り合わせるように「 $5 = 4$ 」の公式を探そうとしないように今はこれ以上話すのはやめよう。

などといった申しようがなされているとのこともがあり、そちらもまた

[注視に値すること]

であるとこの身、筆者はとらえている——訳書よりの引用をなす。(以下、文庫版『イルミナティIII リヴァイアサン襲来』(集英社)にての付録の部 p.370より原文引用するところとして) “あらゆる秘術の公式と同じく、ここにも火の父、水の母、気の息子、地の娘がすべて含まれている。だが、読者が $5 = 6$ の公式に釣り合わせるために $5 = 4$ の公式を探しはじめたりしないよう、いまはこれ以上いわないでおこう。この項の最後は、次のように警告、明言してしめくりたい。(アステカ帝国、カトリック教会の異端審問、ナチスの殺人収容所に見られるような)集団的犠牲に訴えるのは、真の“死にゆく神の儀式”をおこなうことのできない者の方策である”(以上、訳書よりの引用部とする)。また、邦訳版にあつての表記引用部に対する原著該当部についてもここに挙げておく。アーカイブサイトなどからオンライン上より全文確認できるところの The Illuminatus! Trilogy BOOK#3: LEVIATHAN(にあつての APPENDIX LAMED: THE TACTICS OF MAGICKの部)の “The fiery father, the watery mother, the airy son, and the earthy daughter are all there, just as they are in every alchemical formula. **But we say no more at this point, lest the reader begin seeking for a  $5 = 4$  equation to balance the  $5 = 6$ .** [ . . . ] We conclude with a final warning and clarification: Resort to mass

sacrifice (as among the Aztecs, the Catholic Inquisition, and the Nazi death camps) is the device of those who are incapable of the true Rite of the Dying God. ”との箇所が原著にての該当部となる)——。

そこにて「意味不明」かつ「意図不明」に注意が向けられているとの、

[[「5と4」という等号(イコール)で不可思議に結びつけられての数値組み  
合わせ]

[[「5と6」という等号(イコール)で不可思議に結びつけられての数値組み  
合わせ]

から想起されるのは(原著にての seeking for a 5 = 4 equation to balance the 5  
≒6.なぞという意味不明なる表記から想起されるのは)

[[9]という数値および[11]という数値]

「とも」なる、[5+4=9]、[5+6=11]との観点からそうもなる。

といった式で同小説巻末[秘教知識紹介部]にて[9][11]との数値規則を見出すこととて、(繰り返すが)、far-fetched[行き過ぎ]になるようなこととは筆者は見えていない。

「[午後五時五五分](小説作中に見るペンタゴン爆破時間)との作中設定を偶然と見るべきではない」

と直近述べたところの理由と同じくものこととして、

「ジ・イルミナタス・トリロジーという作品は複合的なる前言作品としての側面(これよりさらに表記していくところの前言作品としての側面)を呈している。そうした小説やりように「計算性」のなさ」を観念するのはむしろ浅はかであろう」

との判断あつてのこととして、である(：またさらには「意味不明」かつ「意図不明」にこのこともネックたりうると見ている。直上にて引用なしているような記述、[4=5]と[5=6]などとの数式として成り立たぬ頓狂なものを並列表記してそこに注意を向けているとのことについて「明確な合理的意図」が観念できるというのならば一体全体それはどういうことなのか筆者の方から説明を請いたいとも考えており、結局、そこにみる「意味不明」かつ「意図不明」さが常識面で残置するのならば、共著との体裁でやっている当該小説執筆者らが深くもの知識と知性を有している文士「ら」であることも加味してそこに相応の向きらなりの——あるいは傀儡クグツらを動かす力学なりの——の計算されての常識「外」での寓意添付、[数値規則]に依拠しての何らかの寓意添付がなされていると観念することは何ら行き過ぎにならないと見ているのである)。

---

(出典(Source)紹介の部 37-2 はここまでとする)

# 3.

(1. から 5. と分かちて特定小説にあつての先覚性を論ずるとの段にあつての) 3. と振つての部に、次いで、入ることとする。

小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』（再度もつて申し述べるが、もの表面上は荒唐無稽作品にとどまっているとの欧米圏七十年代ヒット作品）では

「米軍(の細菌研究者)から漏出した炭疽菌改良株が大災厄をもたらしかねないとの状況に至った」

とのこともが描かれている(明示されていないが、70年代小説内の炭疽菌の漏出に関しては[事故]に近しくもそれもまた[計画]のうちとの描写が作中にてなされている。要するにある種の[炭疽菌に由来する無差別テロ]とも定置できる)。

さて、小説の話から一転、現実にあつてはかの911の事件の後、一週間を経、米国にて[炭疽菌テロ]騒動が発生した。その[アメリカ炭疽菌事件]に関しては犯人声明文で狂信的イスラム・ラディカル・セクトの犯行が臭わされていながら当局捜査の結果、アメリカ陸軍感染症医学研究所で研究をなしていた科学者たるブルース・イビンズ容疑者(アメリカ陸軍感染症医学研究所奉職の科学者であった同男、後、自殺し、事件後、「精神的に不安定な異常者であった」との語られようをなされている人物ともなる)の精神不安定状況下の単独犯とのかたちで「一件落着」とされつつある——ブルース・イビンズ容疑者の関与の話については一般的な解説のされようを下に引いておく——。

いいだろうか。

ここで問題視している七〇年代小説内にあつての、

「米軍(の細菌研究者)からの漏出を見た炭疽菌による災厄」

に類似しているところとしての

「現実の911の事件の後に付随して発生した、米軍細菌戦防備研究の科学者の関与による炭疽菌漏洩事件」

が発生しているのである(フィクションにての炭疽菌流出事件と現実世界での炭疽菌流出事件の(出典紹介兼ねての)概要解説は下になす)。

[911]と[米軍関係(の細菌研究者)に由来する炭疽菌の災厄]との兼ね合いで話が接合する。

そこからして出来すぎているとのことである(以下典拠紹介部を参照されたい)。



# SOURCE

## 37-3

ここ **出典 (Source) 紹介の部 37-3** にあつては

[「問題となるフィクションに見る架空の世界のありようでも」「現実世界に見る 911 に付随するありようでも」米軍 (の細菌研究者) からの漏出を見た炭疽菌による災厄が具現化を見ている]

とのことについての典拠を挙げておくこととする。

まず [小説に見る炭疽菌漏洩事件] の方の記載箇所だがイルミナタス・トリロジー中巻、**BOOK#2: THE GOLDEN APPLE** 以降 (邦訳版では集英社刊『イルミナティII 黄金の林檎』以降) の部より同じくものことへの言及がなされだす。

引用なせば、およそ次のようなかたちにて、である。

(直下、邦訳版『イルミナティII 黄金の林檎』(初版) にあつての 58 ページから 59 ページに記載の登場人物の台詞からの原文引用をなすとして)

---

「午前二時に判明したのだが、炭疽菌パイ・プロジェクトに携わっている数人が誤って生きた菌にさらされた。全員が施設に住んでいるため、解毒剤が効く間の隔離は容易に行える。その旨の命令はすでに出した。モセニゴ博士は本人が気づかぬうちに一番強いものを受けたため症状が進行しており、わしが到着したときには死ぬ寸前だった。この家はもちろん焼き払う必要があるし、わしも彼を調べたときにそばへ寄ったから、もう助からない」

---

(引用部はここまでとする —— 尚、小説では引用部に認められるモセニゴという米軍の科学者が生前、娼婦と接触していたために炭疽菌流出による大災厄をもたらす可能性が首をもたげてきたと描かれるのだが、その背後には影の勢力のオカルト的な暗躍があるような書かれようも当該フィクションではなされている —— )

オンライン上より全文確認できるとの原著よりの原文引用もなしておく。

(直下、上の国内流通訳書に対応するところの表記を原著 **BOOK#2: THE GOLDEN APPLE** にての **THE SIXTH TRIP, OR TIPARETH** の部より原文引用なすとして)

---

I discovered at two this morning that several people in our Anthrax Leprosy Pi project have accidentally been subjected

to live cultures. All of them are living at the installation, and can easily be isolated while the antidote works. I have already given orders to that effect. Dr. Mocenigo himself unknowingly received the worst dose, and was in advanced morbidity, a few minutes from death, when I arrived. His whole house, obviously, will have to be burned down, and I am also, due to my proximity while examining him, too far gone to be saved.

---

(原著よりの引用部はここまでとしておく —※— )

(※オンライン上のアーカイブサイトなどにて上のおりの記載が「原著にて」なされていることが確認できるようになっている。その点、グーグル検索エンジンで表記の英文を入力などし、該当ページを特定、インターネットアーカイブのサイトを開いた折などにて該当ページ閲覧時にキーボードの ctrl キーと F キーを同時押しして、[ブラウザ] (インターネット閲覧ソフト) の閲覧ページ内検索機能をオンの状態に切り替え、その際に表示されてくるチェックボックス内に表記の抜粋テキストの一部を入力すれば、膨大な文量を含むページ内の該当文字列を含む箇所へ一挙にジャンプできる。それによって、この身が挙げているとおりのことが[文献的事実]、すなわち、問題となる記載が問題としている引用文献内にて実際になされているとのことの確認が即時容易になせると述べておく)

上が小説に認められる架空の炭疽菌問題に関する部の一部引用をなしたが、対して、

「[現実世界で発生した炭疽菌事件]

の方については和文 Wikipedia の[アメリカ炭疽菌事件]項目にすらブルース・イビンズ容疑者、米軍関係者の細菌学者たる精神の均衡を失した向きとされる同男の単独犯行によって二〇〇一年九月一日以降の事件(炭疽菌事件)が落ち着いたように現行、まとめられている(のでそちらを引用する)。

(直下、「現行の」和文 Wikipedia [アメリカ炭疽菌事件] の「現行にての」記述内容より引用するところとして)

---

「FBI は 2005 年 4 月 4 日以降になり初めて犯人の可能性が高かった当時、メリーランド州フレデリック市のフォート・デトリックにあるアメリカ陸軍感染医学研究所に 18 年勤務していたブルース・エドワード・イビンズに対して焦点を当てたことが報告資料から判明している他、同研究所の他の 3 名を捜査対象としている。…(中略)…2008 年 8 月 6 日、FBI はイビンズの単独犯行であると宣言した…(中略)…なおイビンズは捜査機関に対し捜査協力を行ってた米炭疽菌研究の第一人者であり、ジョージ・W・ブッシュ大統領を支持し、ユダヤ人は賤民であるとしてラビとイスラム教徒との対話を否定する過激なキリスト教原理主義者だった…(中略)…FBI はイビンズに告発が差し迫っていることを話しおり、2008 年 8 月 1 日イビンズは、アセトアミノ



フェンの大量服用により自殺している・・・(中略)・・・攻撃の直後、ホワイトハウスは繰り返し「アルカイダによる同時多発テロの第2波攻撃である」との証明をするために FBI 長官であるロバートミュラーに対し圧力をかけており、アメリカ合衆国大統領立会いの朝の緊急情報会議でミュラーはこの使用された炭疽菌がウサーマ・ビン＝ラーディン側近らにより製造された物であるとの証拠が出せなかったために殴られている。退職した元 FBI 上級捜査官の一人は「彼らは実際に中東の誰かのせいにしたかった」と証言している。FBI は捜査初期段階でこの炭疽菌は高度な知識と設備が必要な環境下でしか培養できない物であり、テロリストが籠っているであろう洞窟などの環境下では到底生産できる物では無いと理解していた」

---

(引用部はここまでとする — 尚、[成果]を望まれるように出せなかった FBI 長官が殴られたなどと「現行の」和文ウィキペディアにては表記されているが、英文 Wikipedia では強調のためのダブル・クォーテーションが付けられて **beaten up** と表記されている、要するに、暴行を加えられるが如くの叱責を受けたとの趣旨の記載がなされている — )

以上のように 1970 年代小説で米軍関係者(チャールズ・モセニゴというキャラクター)よりの炭疽菌漏出が描かれているのに対して、現実の 911 の事件の後にあっても米軍関係者(陸軍感染医学研究所に 18 年間勤務のブルース・イヴィンズ容疑者)による炭疽菌テロが発生したとされていることがある。

(**出典 (Source) 紹介の部 37-3** はここまでとする)

---

※長くもなつての付記として

ここで直近言及の炭疽菌流布などにまつわる[類似性]につき  
[さらにどういったことが問題となるのか]  
とのことについて「世間的目分量を基準にしての」長くなるも、の付記をなしておく。

まずもってそこより言及なすが、直近まで出典紹介なしつつも指し示したようなこと、米国にて 911 の事件の直後に炭疽菌テロが発生したことにつき『ジ・イルミナタス・トリロジー』邦訳版の訳者(翻訳家の小川隆氏)は『イルミナティII 黄金の林檎』後書き部にて次のようなことを書いている。

(直下、初版文庫版の『イルミナティII 黄金の林檎』の 377 ページから 378 ページにての [翻訳者の手になる後書き部] よりの引用をなすとして)

「ところが、この作品が現実を先取りしていたというのは、そんな些末なことだけではありません。9・11 テロのあとに起こった炭疽菌騒動を覚えておいででしょうか。アルカイダが炭疽菌を使った細菌兵器でアメリカにテロを仕



掛けてくるという、実際に犠牲者まで生んだあの騒動です。まさか、アルカイダが本書を愛読していたとは思えないのですが、今回はいよいよこの炭疽菌ミュー(ないしはパイ)の漏出が決定的になってきます。それにしても、炭疽菌とは何という偶然の一致でしょう。…(中略)… 国を警察国家にするためには国外、国内に危機をあおる必要があるとして、テロを演出するというのも、どこかの超大国の現実の姿を見るようで、いささか空恐ろしいものがあります。…(中略)… 歴史的な陰謀が存在していたという本書の冗談のような仮定も、何だか意味をもっているようで気味が悪いですね。もっとも、作者は秘密結社の陰謀などこれっぽちも信じてはいませんでした。ただ、世界史をあるパースペクティブをもって鳥瞰してみることに、人間の、あるいは知性のもつ本質が見えるのでは、ということで見出した、小説作りの上での工夫にすぎません(以下略)

(以上、『ジ・イルミナタス・トリロジー』訳業に携わった訳書に見る邦訳者解説を記載しての部よりの引用とした)

上のような —— (まだ、ブルース・イヴィンズ犯行のことが公にされる前のことであったからなのか) 「アルカイダの炭疽菌流布」なる話柄を取りながらもの —— [常識的申しよう] を [下らぬ陰謀論] とは一線を画する方向で棄却せざるをえぬとのことを、

【「固い因果関係で相互にできすぎるほどにつながった」証拠の山】

の呈示によって指し示さんとするのが本稿にあっての筆者の意図である。

につき、本稿の末尾近くの段にて[付録と位置付けてのもの]として

【多少込み入った確率論の話】 (大学理系教育で[確率論]を学んだ向きならば「何ら難なく」そのとおりであると理解できようとの話を[理系志向での高等学校卒業レベルの者(ティーンエイジャー)の数学知識にて理解できる]ところに引き落としての話)

も付しておく所存であるが、本来ならばそのような立論の方向を取る必要だにないほどに一連の事件の背後にあっての[恣意性]の介在が明かなることを指し示すのが本稿書き手たる筆者の意図するところである。

さらに述べれば、その[恣意性]が

【「個々人や個々人の凝集たる「人間レベルの」組織体の意図」などを[陰謀]などという言葉で問題視することだにナンセンス(ナチスのユダヤ人問題最終解決手法が「かくあるべし」とアピールされているが如きところで[秘された陰謀]との言い回しを使う必要もなからう?)、[存続]さえも根本否定しようとの性質のものである】

とのことまでを指し示さんというのが本稿本義でもある。

以上、[大なるところ]につき述べたところでここでの話、小さなところ、

【邦訳版『ジ・イルミナタス・トリロジー』翻訳者の申し分そのレベルでの問題性につき論じる】

との [小さくものこと] につき書いておくが(「本来ならば(本稿テーマに比して)わざわざ取り上げるに値せぬほどにももの些事である」として書いておくが)、

「上の『ジ・イルミナタス・トリロジー』翻訳家申しようを見る限りでは炭疽菌事件がアルカイダが起こしたことのように曲解させられるも、同訳書が出た後、米国炭疽菌事件はアメリカ軍のために細菌戦を研究していたイヴィンズ容疑者による犯行によるとされるに至っており、同男自殺後、事件収束の兆しを見ている」(上にてのウィキペディア引用部の通りであることはすぐに確認いただけるだろう)

とのことが[現実](日本の相応のメディアなどは背景あまり報じぬとの現実)的状況となっている。

そのように目立つように流通している問題書籍(『ジ・イルミナタス・トリロジー』)の翻訳者がしたためている[常識的評価](悲劇的なまでに楽観的な常識的評価というやつ)など当てにならぬことに言及しつつ、さらに高等批評を講じれば、

「米国にあっては([信じがたいこと]かもしれないが)公衆に対する弱毒・無害化させた細菌散布「実験」が米軍によって実施されてきたとの史的経緯まで実際にあり、そのことが議会で問題視される「前に」どういうわけなのか『ジ・イルミナタス・トリロジー』作者らが同じくものことに「言及」しているようであるとのこと「も」が——疑義伴って——見受けられる」

とのことがあり「さえも」する。

普通人は論拠を呈示しなければ[容れない]ような性質の話だろうから(「たとえカモにされて殺されても文句も言えぬ」との類の頭の具合のよろしくない人間は論拠を提示して「も」信じないかもしれないが)、論拠を呈示しながら具体的にどうということなのか紹介する。

国家の秘密主義体質に批判的な向きらには比較的知られ、手前も読したことがあるとの洋書 **Clouds of Secrecy (1990)** にあっては次の通りの記載がなされている。

(直下、**Clouds of Secrecy (1990)** にあっての Airborne in the U.S.A Open Air Vulnerability Tests in Minneapolis, St. Louis, and the New York City Subway System の章、その中の p.65 より原文引用なすとして)

Between the time of the spraying of Minneapolis and St. Louis in the early 1950s and the New York City subway system in 1966, scores of tests in other populated areas had taken place, as the army acknowledged in its 1977 report to Congress. Few details are known about the other tests, but the report on the New York City subway test confirms that the values behind the testing program had not changed during the years. **The army's attack on New York City in 1966 exposed more than a million people to bacteria called Bacillus subtilis variant niger. The report of the test, entitled "A Study of the Vulnerability of Subway Passengers in New York city to Covert Attack with Biological Agents"**

(拙訳として)

「1950年代初頭の実験およびセントルイスおよび1966年のニューヨークの散布行為の合間にあつて1977年の議会への報告書にて軍が認めたとように数多くの人口集中エリアにあつての(細菌散布の)テストがおこなわれた。他の実験についての委細はほとんど知られていないが、ニューヨーク市地下鉄実験の報告書はその間の試験プログラムの価値観が異動

を見ていないことをはきと示している。軍の1966年のニューヨーク市での攻撃(演習)では Bacillus subtilis variant niger(枯草菌)と呼ばれるバクテリアに100万人以上の人間が曝されることになった。同実験の報告書は "A Study of the Vulnerability of Subway Passengers in New York City to Covert Attack with Biological Agents"『ニューヨーク市地下鉄乗客へのバイオロジカル・エージェント(バクテリア・ウィルス・プリオン・孢子ら生物兵器に用いられるものの総称)による攻撃実施にまつわる研究』と銘打たれていた」

(引用部に対する訳はここまでとする)

さらに同じくもの洋書 *Clouds of Secrecy* よりの原文引用を続ける。

(直下、**Clouds of Secrecy (1990)** にあつての p.67 よりの原文引用なすところとして)

The several trials were conducted as completely independent operations without the knowledge or cooperation of the New York City Transit Authority or Police Department. Dissemination of agent and collection of air samples attracted no attention, and the tests were carried out without incident.

(拙訳として)

「幾例からの実験実施はニューヨークシティー・トランジット・オーソリティー(ニューヨーク市の地下鉄とバスの運営元)および警察当局の関知なしの状況、あるいは、協力なしに完全に独立したものとして実施されている。生物兵器の散布そして標本としての気体収集は何ら(他よりの)注視を浴びることもなくそして事件になることもなしにテストらは実施を見た」

(引用部に対する訳はここまでとする)

直上直近にて引用なした書籍内記述でもってブルース・イヴィンズ容疑者が奉職していたところ(あるいはその近接領域)との兼ね合いで何が問題になるかおおよそにしてお分かりいただけよう?

が、などと原文引用をなして確認を求めても出典からして[虚偽]に基づいた正しなくなき文書よりの不適切な引用、[虚偽の拡散のやりよう][馬鹿げた(そして実際に愚劣な)陰謀論(Conspiracy Theory)の流布者やりよう]だろうと思われるかもしれない。

であるから述べておくが、*Clouds of Secrecy* を記したレオナルド・コールという人物は真つ当な来歴を伴っている科学者となり(目立ってその確認をなせるところとしては英文 Wikipedia [ Leonard A. Cole ] 項目にて “ He is adjunct professor of political science at Rutgers University-Newark, New Jersey, and of emergency medicine at the University of Medicine and Dentistry of New Jersey, where he is Director of the Program on Terror Medicine and Security of the UMDNJ Center for BioDefense.” (訳として)「彼はニュージャージーのラトガース大学およびニュージャージー医科歯科大の政治科学分野の外来教授—日本で述べるところの非常勤講師のようなもの—であり、ニュージャージー医科歯科大彼ではニュージャージー医科歯科大(UMDNJ)の災害医療およびバイオディフェンス(細菌戦防衛戦略)計画の管理者として従事している」との記載がなされているところである)、また、そうした「専門の」学者(レオナルド・コール)の書

Clouds of Secrecy にあって扱われている「脆弱性テストを期しての散布実験」のことは主流メディアなどにも報じられており、その例として「誰でも確認できるところの」オンライン上にてのニューヨークタイムズ ——尚、こちらニューヨークタイムズからして[偏向報道の実演]などから中立性込みにしてそれ自体批判が多い媒体でもある—— の記事も挙げられる。

(直下、疑わしきにおかれてはグーグル検索にて直下呈示の記事題名と nytimes. com とのドメイン名を複合検索いただきたきところとしてのニューヨークタイムズのオンライン上流通過去記事、Archives The Army's Germ Warfare Against Civilians より中略しつつもの一部原文引用をなすとして)

The Army's biological warfare program has drawn heavy criticism in recent months.[ . . . ] The Army admits it is releasing a bacteria called *Bacillus subtilis* in Utah "from time to time" to simulate biological warfare attacks with the more lethal *Bacillus anthracis*, which causes anthrax. Other bacteria, including *Serratia marcescens*, have also been used there in open air tests. These bacteria are the same "simulants" that were sprayed in cities during the 1950's and 1960's to see how well they could spread and survive. Hundreds of mock attacks were conducted, including the release of bacteria during peak travel hours in New York City's subway system and in the main terminal of Washington's National Airport. In the late 1970's, when the tests became public knowledge, the Army insisted that they were harmless.[ . . . ] Unaware of the Army's test, doctors in San Francisco wrote about the unusual *Serratia* infections in a medical journal. They had never before encountered such an outbreak. Although the infections began three days after the spraying, the Army decided that the timing was "apparently coincidental" and that testing should continue. Neither then nor in later tests has the Army monitored the health of the people exposed.

(逐語訳ではなく大要訳として)

「ここ最近、軍の細菌戦関連のプログラムが激しい批判を引き起こしている。軍はユタ州にて「時々」枯草菌と呼ばれるバクテリアの[散布]を[より致命的な炭疽菌による強襲]を想定しての細菌戦シュミレーションをなすためになしていること、認めた。他のバクテリアを含め、といったものが1950年代から1960年代にかけて細菌の生存状況を確認するために都市部に撒かれてきたとの経緯がある(注:細菌戦では[占領の便宜上兵器としての細菌が都市部に滞留しないこと]が重視されるきらいがあるから実演テストがなされたとも言われている)。何百回と模擬攻撃が実施され、その中には[ニューヨーク市地下鉄のラッシュアワー時のトンネル内散布][ワシントン国際空港メインターミナル内散布]も含まれている。1970年代、そうした実験が公にて知られるところとなった際に、軍はそれらは無害であるとの強調をなしていた。だが、軍のテストにつき何も知らなかったとのサンフランシスコの医者らがセラチア感染症の通常ならざる増大にて医学誌に寄稿しているとのことがある。彼ら医師らはそうした[アウトブレイクと表されるレベルの疾病流布状況]に従前、相対したことがなかった。感染症は散布後三日を経てはじまったが、軍は「明らかにただの偶然」と決めつけ、テストも継続を見、細菌曝露を見た人々に対する健康診断をまなしていない」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

以上、過去記事のアーカイブ版として主流メディアのニューヨーク・タイムズ紙のサイトにて公開されている(そして確認容易な)記事に関しては被害状況について軽々に見れないのではないかととれる書きようもなされているが、ここでの趣意は、

「ウィルス撒布が狂った人間ら ——あるいはそうしたことが実演されることになった際、自分達が[被害者]ではなく[選ばれた加害者]に留まっていられるとの心根を植え付けられた相応の手合いらでもいいが—— によってなされるとの陰謀論(あるいはその[可能性]を問題視するとの陰謀論「染みた」話)を展開する」

とのこと「にはない」。

そうもしたことを問題視したのは、

[[文献的事実](特定文献ジ・イルミナタス・トリロジーに字面として特定の内容が具現化しているとの容易に後追い可能な事実)と[歴史的事実](とされること;国民の不同意状況下での軍による細菌撒布テストがなされていたとの事実)との間の時期的な意味で問題になりうる関係性を問題視する]

との観点からである。

すなわち、

( Clouds of Secrecy より「再度の」原文引用をなすところとして)

“ Between the time of the spraying of Minneapolis and St.Louis in the early 1950s and the New York City subway system in 1966,scores of tests in other populated areas had taken place,as the army acknowledged in its 1977 report to Congress.” (訳として)「1950年代初頭のミネアポリスおよびセントルイスおよび1966年のニューヨークの散布行為の合間にあつて1977年の議会への報告書にて軍が認めたように数多くの人口集中エリアにあつての(細菌撒布の)テストがおこなわれた」

( The New York Times オンライン上過去記事より再度の原文引用するところとして)

“ In the late 1970's, when the tests became public knowledge.” (訳として)「1970年代後半より」細菌散布が公の知るところとなった」

とされているようなその「公然化した」情報が不快なる小説 ——The Illuminatus! Trilogy—— に影響を与えることがあつたのか、[時期的先後関係]の問題から考えてみる必要があるようにとれるとの観点からである。

については

『軍よりの細菌流出を陰謀にかこつけて描いていたとの The Illuminatus! Trilogy 『ジ・イルミナタス・トリロジー』(1970s. 1975年刊行. 草稿執筆期間 は英文 Wikipedia[ The Illuminatus! Trilogy ]項目の Publishing history の節によると(刊行は1975年だが)ものされたのは1969年—1971年とも記載されている — “ The trilogy was originally written between 1969 and 1971 while Wilson and Shea were both associate editors for Playboy magazine.” と記載されている— 作品)の作者らが細菌戦予行演習にまつ



わる知識を知ることがあったのだろうか?』

という点が問題になりうると指摘したいのである——(仮に先後関係から合理的説明が付けば、『ジ・イルミナタス・トリロジー』の炭疽菌持ち出しのやりようが時世を受けてのことに片付けられがちになることは考えるが、同作に関してはその他の不審事由との兼ね合いで結局のところ、どす黒い作品と看做さざるをえないわけではあるも)——。

その点、筆者脳裏をよぎったことは

[オウム真理教、人間の[尊厳]の問題すら理解できぬ・理解なそうとせぬとの精神構造に陥ってのロボット人間、言われればなんでもやるだろうとのそういう類ばかり集めてこさえられた節ある同カルトが[亀戸異臭事件]と後に呼称されるようになった事件を引き起こすとのかたちで他ならぬ東京都内(亀戸)にて[炭疽菌]を撒き散らし(1993年のこと/和文ウィキペディアにも一項設けられている事件)、の過程で、亀戸の事件で撒かれた炭疽菌があまりにも弱毒化していたためにそれが被害をもたらさなかった(弱毒化しての無害性は米軍による細菌散布脆弱性テストとの近接性を感じられなくもない)とのことがこの日本にて平成前半期にあった]

ということである。

については、「後に」同カルト・オウムが地下鉄サリン事件を引き起こしたことが米軍が「実際に」地下鉄にて[無害な細菌戦]を[極秘]との人権——人間の尊厳——の軽視が伺い知れる式でなしていた、とのこと「も」[類似性]を想起させるところとしてある。

そういう日本の事件史との関係でも意味深くもとらえられる背景、[人形]([機械]・[叩いても定型文しか出てこぬとのシステムの唾棄すべき端末のようなもの]でもいいが)のように動き、上から言われれば何でもやるとの不気味な個体ら([人間]との言葉にも値しなからうから[個体]らと表記)によってその一例が具現化を見たとの忌まわしき機序が[米国の暗部]にてもまた作用している、そういうことにまつわる背景事情を把握しての相応の力学の介在があつてジ・イルミナタス・トリロジーという小説 ([陰謀「論」]をモチーフに成り立っているとのことになっている小説)にて[軍による炭疽菌漏出]が取り上げられていた、軍の細菌散布実験——何の情報提供もなく、そして、ゆえに、同意すらなくに市民に対して実施されていたとの細菌散布実験——が「表立って問題視される」前ながら取り上げられた可能性もあるか、と手前などは考えているのである(さらに述べれば、オウムの輩ら、[宗教的狂気]という[スタンス]に逃げた相応の人間らの作用ではないが、軍で細菌戦を研究していたブルース・イヴィンズ容疑者が単独犯でそういう事件を起こしたとの「認定」がなされるような状況にも同じくもの機序の問題が作用している可能性とてありうるかと見ている)。

(長くもなつたが、これにて [予見的小説の内容] と [現実世界での細菌撒布行為] の質的類似性から何が述べられるかの付記を終える。すなわち、「臭気を放つ質的類似関係の問題には[国内国家の問題]も関わって"いうる"が、部分的に露見しているところもあるそうした問題については本稿にての主要論点とすべきではないとのスタンスで臨み、代わって、よりもって本質的なところに対する理解を求める」とのことにつわる付記を終える)



ここ本頁では表記のことにまつわっての継続表記たるところとして、4. と振っての部の話に入りたい。

# 4.

70年代小説作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』（先述のようにカルト的反響を呈し陰謀論にまつわる一大文化現象を引き起こしたとの解説のなされようもなされているとの小説作品）にあつての911の事件との接合性に関しては次のようなこと「も」ある。

スティーブ・ジャクソン・ゲームズという会社（一九九〇年、同社はどういうわけなのかシークレットサービスに家宅搜索されている会社となり、その現行にての社のシンボル（三角形の中の一つ目と結びつくピラミッド）からしてフリーメーソンの的なシンボルと現行根深くも結びついている会社となる）が販売している、  
[カードゲーム・イルミナティ]（1980年米国にて初出のもの）  
は911の前言を含んでいたと指摘されているカードゲームとなっている。

[崩されるツインタワー]

[爆破されて粉塵をあげるペンタゴン]

などのイラスト使用からである。

上のこと、カードゲーム・イルミナティにあつて [崩されるツインタワー] [爆破されて粉塵をあげるペンタゴン] が登場してくることまでについては取り上げる人間は多いのだが（であるからこれこれ具体的な出典挙げるまでもなく検索エンジンに card game, Steve Jackson, 911 などと入力して見ればそれについて扱った時期的に問題になる [商品写真] そのものを掲載しているとの多くの英文ページを捕捉できることか、と思う）、問題なのはスティーブ・ジャクソン・ゲームズの [カードゲーム・イルミナティ] にインスピレーションを与えた作品がここにて取り上げている『ジ・イルミナタス・トリロジー』であることが同カードゲーム発売元に明示されていることである。

出典 (Source) 紹介の部 37-4



# SOURCE

## 37-4

ここ出典(Source)紹介の部 37-4 にあつては[911 に相通ずる先覚的描写]が殊更に取り沙汰されるカード・ゲーム『イルミナティ』がそもそももって小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』にインスピレーションを受けてリリースされた商品であると認知されていることの典拠を挙げておく。

カード・ゲーム『イルミナティ』のリリース経緯についてはウィキペディアのような媒体にて以下のようなことが記されているところとなる。

(直下、英文 Wikipedia [Illuminati (game)] にての現行記載より引用なすとして)

---

Illuminati is a standalone card game made by Steve Jackson Games (SJG), inspired by The Illuminatus! Trilogy by Robert Anton Wilson and Robert Shea. The game has ominous secret societies competing with each other to control the world through sinister means, including legal, illegal, and even mystical. It was designed as a "tongue-in-cheek rather than serious" take on conspiracy theories. It contains groups named similarly to real world organizations, such as the Society for Creative Anachronism and the Semiconscious Liberation Army. It can be played by two to eight players. Depending on the number of players, a game can take between one and six hours. In September 1981, Steve Jackson and his regular freelance cover artist Dave Martin discussed their shared admiration of the Illuminatus! Trilogy, and the latter suggested a game. Steve Jackson decided against adapting the novel because of the expense of game rights, and the difficulty of adapting a novel with such convoluted plots. He decided "a game about the secret-conspiracy idea behind Illuminatus!" was doable. After doing research on the Illuminati and conspiracy theories, and "extensive and enthusiastic playtesting" it went on the market in July 1982 in the Pocket Box format (a plastic box the size of a mass-market paperback) which was at the time the usual for SJG.

「(カードゲーム)イルミナティはスティーブ・ジャクソン・ゲームズ社(SJG)がロバート・アントン・ウィルソンおよびロバート・シェイらの手になる小説『イルミナタス・トリロジー』よりインスパイアを受けて製作されたとのオフラインでプレー可能なカードゲームとなる。同ゲームは合法・非合法、時に神秘的ですらある陰険邪悪な手段をもってして世界をコントロールすべくも相争う凶兆帯びての秘密家結社らを主題としているものとなる。同ゲームは[シリアスに]というよりも[からかい半分]とのスタンスで陰謀論らをとらえて設計されているものである。また、同ゲームは中世文化同好会やセミコンシャス・リベレーション・アーミーといった現実存在している組織を模したと思しきグループ名(訳注:セミコンシャス・リベレーション・アーミーについてはシンバイオニーズ解放軍、[七つの頭を持つコブラ]をシンボルとして、ハースト家の令嬢パトリシア・ハーストを拉致・誘拐し、脅迫の材料にしている内に同女が同組織に加わって銀行強盗なしたことで知られるアメリカの過激左派組織となる)を用いているものとなる。同ゲームは二人から八名でプレー可能となり、プレーヤーの数によるが、一回のプレー時間は六時間ほどになる。1981年9月にてスティーブ・ジャクソンおよび彼が通例として依頼なしていたところのフリーランスのカバーデザイナーのデイブ・マーチンらは彼らが小説『イルミナタス・トリロジー』に対する崇敬の念を分かち合っていることにつき論じ合い、後者が同ゲームを企画提案した。ゲーム化権利に伴う支出および小説の複雑で絡み合った内容を反映させることの困

難性を顧慮、スティーブ・ジャクソンはその提案を諾とすることに反発を呈していた。スティーブ・ジャクソンは[イルミナタス・トリロジーの背後にある秘密の陰謀]についてのゲームを造ることは実行可能であろうと決した。イルミナティと陰謀論についての調査の結果、そして、値が張り、熱意も伴っての実演検証を経て、同ゲームは往時 SGJ 社ゲームにあって常なところとなっていたポケット・ボックス形態(大量市販のペーパーバック版サイズのプラスチック容器梱包形態)で 1982 年 7 月、市場に登場することとなった」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上に見るような経緯にて小説『イルミナタス・トリロジー』の影響を受けて 1982 年に製作・リリースされたとされるカード・ゲーム『イルミナティ』については[爆破倒壊するツインタワー][攻撃を受けて粉塵を上げているペンタゴン]といった絵札が描かれていることがよく知られているとのことになっているわけだが、については、(繰り返すが)、

[ Illuminati (game) , Steve Jackson Games , 911 ]

とグーグル検索エンジンに入力するなどしてイメージ検索すれば、(表示されてくる媒体らの内容の品質・程度問題についてまでは何ら関知するところではないが)、多くの実物写真紹介媒体を特定できるようになっている(であるから、そちらをもってして典拠としたい)。

ちなみに、遅まきに訳されての邦訳版『イルミナティII 黄金の林檎』巻末に認められる訳者後書き部ではその点につき何が巷間にて問題視されているかにつき「政治的配慮でか別の事由でか」一切触れることなくして(その p.382 より至当ととれる文量での原文引用をなす ところとして)

当初、この作品は一巻本として書かれたのですが、版元のデルの編集者が分厚い本のペーパーバック・オリジナル刊行をしぶり、大ヒットした『指輪物語』にならって三部作形式で刊行しました。実際には五部形式なので、不自然になっているのは、そういう事情があるからです。刊行と同時にカルト的ヒットとなり、とりわけ当時の若者たちには絶対的な支持を受けました。これをもとに、当時流行しはじめていたロールプレイング・ゲームのなかでもとくに評価の高いゲーム・デザイナー、スティーブ・ジャクソンはカード・ゲーム形式でこれをゲーム化、一九八二年に発表し、その年のゲーム関係の賞を総ざらいするほどのヒット作品となります

と記載されている ——少なくとも私が所持している初版邦訳文庫版では上記のとおりに記載されている(重版に伴っての改訂なければ書籍を手元に取りられることで、そうした訳者由来の解説もご確認いただけるだろう)——)。

---

(出典(Source)紹介の部 37-4 はここまでとする)

---

これにて 4. と振っての部を終える(そして、次いで、5. と振っての部に入る)。

# 5.

ここまでの 1. から 4. の内容と複合顧慮することでも[重み]が理解できようところとして 70 年代米国にてヒットを見た小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』にあつては

[ペンタゴン状の五角形と黄金の林檎を真向かいに並べて並置させているシンボル]

が 一文献的事実の問題として—

[ディコーディアニズム・シンボリズムたる「聖なるカオ」]

というものとして作品にて「頻出」させられているとのことがある。

その 70 年代米国で大ヒットを見た小説ジ・イルミナタス・トリロジーに頻出させられている、

[ペンタゴン状の五角形と黄金のリンゴを並置させたシンボル]

たるディスコーディアニズム・シンボルにつきまづもって述べたいのはそのシンボルに見る[五角形]が実際に[ペンタゴンの比喩的象徴物]そのものと定置されているとのことがあることである。

---

出典 (Source) 紹介の部 37-5



## SOURCE 37-5

本段、**出典 (Source) 紹介の部 37-5** にあつては

[ペンタゴン状の五角形と黄金の林檎を真向かいに並べて並置させているシンボルが 一文献的事実の問題として— [ディコーディアニズム・シンボリズム「聖なるカオ」] と呼ばれるシンボルとして、そして、[合衆国国防総省庁舎たるペンタゴンに関わるもの]として「頻出」させられているとのことがある]

とのことの典拠を挙げる。

出典を挙げる。まずは小説内に認められる[聖なるカオ]の描写に対する引用をなすことから始める。

(直下、遅まきに邦訳版として出されたとの集英社刊行『イルミナティI ピラミッドから覗く目(下巻)』の236ページから237ページよりの中略なしつつもの原文引用をなすとして)

---

[「これが」と芝居がかって博士はいった。「聖なるカオだ」…(中略)…右側に、おお、高貴な生まれのものよ、あなたの"女性的"直感的性質のイメージが見える。中国では陰と呼ばれるものだ。陰のなかにある林檎はエリスの黄金の林檎、イヴの禁断の林檎、ブルックリンのフラットブッシュ・バーレスク・ハウスでリンダ・ラルー嬢がストリップのクライマックスになってその上で前開脚をするとステージから消えたという有名な林檎だ。それが表すのはハグバード・セリーンやわれわれの味方となる動的不和軍が崇拝する、エロスとリビドーとアナキーと主観という価値だ。さあ、高貴な生まれのものよ、完全なる覚醒の準備のために、聖なるカオの左側、陽の側に目を向けなさい。こちらはあなたの"男性的"合理的自我のイメージだ。そこにあるにはイルミナティや悪魔主義者や合衆国軍の五角形(ペンタゴン)だ。それが表すのはイルミナティが傀儡政権をつうじて世界のほとんどの人々に課している肛門と権威主義と構造と法と秩序という価値だ]

---

(引用部はここまでとする)

引用するだにたばかれるとの猥雑な内容の小説(イルミナティなる陰謀団に支配された世界にての反体制派を気取るもその実のイルミナティの領袖との設定の乱交儀式をこととする麻薬ディーラーたるハグバード・セリーンという男を主人公とする小説)の特質、そちらをよくも体現した文章ではあるが、上にて見受けられる、

[聖なるカオ]

とは要するに、

[右側に陰陽における陰の体現物としての女性象徴としての[エリスの黄金の林檎]にして[イヴの禁断の林檎]たる林檎を配し、左側に陰陽における陽の男性象徴としての[イルミナティ・悪魔主義者・合衆国軍が用いる五角形(ペンタゴン)]が配される象徴物]

であることが文献的事実の問題として作中に明示されているものとなる。

上の部についてはオンライン上のアーカイブ・サイトより確認できるとの原著 The Illuminatus! Trilogy BOOK#1 : The Eye In The Pyramid (にての THE FIFTH TRIP, OR GEBURAH の部)よりの原文抜粋をなすと

“ "This," he said dramatically, "is the Sacred Chao." [ . . . ] " On the right, O nobly born, you will see the image of your 'female' and intuitive nature, called yin by the Chinese. The yin contains an apple which is the golden apple of Eris, the forbidden apple of Eve, and the apple which used to disappear from the stage of the Flatbush Burlesque House in Brooklyn when Linda Larue did the split on top of it at the climax of her striptease. It represents the erotic, libidinal, anarchistic, and subjective values worshiped by Hagbard Celine and our friends in the Legion of Dynamic Discord. "Now, O nobly born, as you prepare for Total Awakening, turn your eyes to the left, yang side of the Sacred Chao. This

is the image of your 'male,' rationalistic ego. It contains the pentagon of the Illuminati, the Satanists, and the U.S. Army. It represents the anal, authoritarian, structural, law 'n' order values which the Illuminati have imposed, through their puppet governments, on most of the peoples of the world. ”

との部が該当箇所となる。

尚、その点については同じくものものについて解説しているとの英文ウィキペディアの [Discordianism] 項目 ([問題となるシンボル]、Sacred Chao「聖なるカオ」とのシンボルを扱う疑似宗教にまつわる項目)に次のような記載が「現行」なされていることを挙げておく。

(直下、英文 Wikipedia の [Discordianism] にての Sacred Chao の節にての記載内容の原文引用をなすとして)

---

The choice of the pentagon as a symbol of the Aneristic Principle is partly related to The Pentagon in Virginia near Washington, D.C., partly a nod to the Law of Fives, partially for the Golden Ratio references associated with the pentagon/apple allegory, and wholly for the five-sided pentagon from the "Starbuck's Pebbles" story in the Discordia.

(下線を付した部の要約として)

「聖なるカオ ( Sacred Chao ) と呼ばれるディスコーディアニズム・シンボル — 問題となる小説で多用される [黄金の林檎と五角形を並置させるシンボル] — はワシントン DC 近傍のヴァージニアの合衆国防衛の要ペンタゴンと関係づけられているものである」。

---

(引用部はここまでとする —※— )

(尚、言うまでもないことかと思うが、Wikipedia という媒体については [公共心] も [道義心] も持ち合わせていなかろうとの筋目の相応の輩らによって [世の方向性を見誤らせる法螺] の類が書き込まれる、あるいは、小なるところとしては都合の悪い他者を直接ないし間接的に傷つけることを専らに意図した論拠無き中傷記述の類がなされることもあると知られている が (に関しては運営財団の具体的対応手法も込みにして [ Vandalism on Wikipedia ] 項目に詳しい)、他面、真っ当なところでも媒体内容が変化変容 (change) を見ているとの欠陥もあり、上にて引用なしたような記述が残置しているかは請け合えない。だが、しかし、Wikipedia の記述動向の変遷については [ past versions of a page 過去ページら ] を収録した archive file が公開されているため、それを元に変更内容の後追いが事細かにできるようになっていると述べておく (本稿筆者もオフライン環境閲覧にも資するものとして和文英文の Wikipedia の大規模ダンプデータを都度取得している))

上のようにウィキペディアに解説されているディスコーディアニズムシンボル [聖なるカオ] を図像化したものが、すなわち、[ペンタゴン状五角形と黄金のリンゴを対面並置するとのシンボリズム] が The Illuminatus! Trilogy 『ジ・イルミナタス・トリロジー』 作中では「図示されてまで」何度も登場してきている。

具体的には (遅まきに訳されたとの邦訳版を引き合いに述べるとして) 次にて表記のことが示せるようになっている。



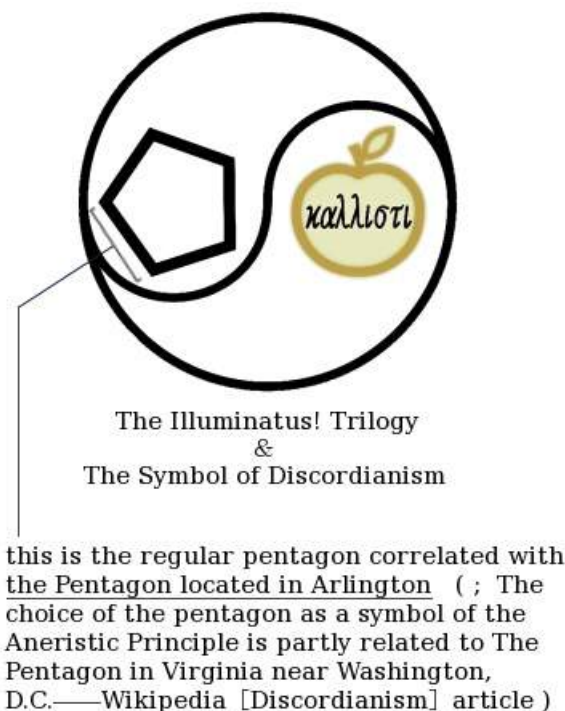
---

[集英社刊行の『イルミナティI ピラミッドから覗く目(上巻)』の[第三のトリップ]と題された部、『イルミナティI ピラミッドから覗く目(下巻)』の[第五のトリップ]と題された部、『イルミナティIII リヴァイアサン襲来』の付録部らに[図示をなしてのもの]が掲載されている]

(図像まで呈示の該当部は当方所持の版の邦訳文庫版ではそれぞれ集英社『イルミナティI ピラミッドから覗く目(上巻)』161 ページ/集英社『イルミナティI ピラミッドから覗く目(下巻)』236 ページ/集英社『イルミナティIII リヴァイアサン襲来』367 ページとなる)

---

同じくもの点に関しては下に同様のものを図示することとしたそちら問題となる図が実際に文献的事実 **Philological Truth** の問題として当該の小説に記載されているかどうか、(疑わしきにおかれては)書店にて幅広くも流通を見ている小説の方の[図像呈示]部を参照、確認されるとよいだろう——※尚、誤解なきようにしていただきたいが、「さもくわしように語っているが、(ここまでの申しようからもご察しいただけることかとは思いますが)この身はディスコーディアニズムのような得体の知れぬ疑似宗教の関係者やそういった領域に親和性高い人間でも何でも無い。詳しくも調べて、[多くがそこに通ずる]ようになっていることにつき気付かされた人間がこの身なのだが、筆者は神秘主義的観点を象徴主義に用いる相応の者達のやりようには辟易させられこそすれ、そうした者達に共感を覚えたことは一度たりとも無いとの人間である。以上述べたうえでさらに述べておくと、「当方のような告発をなそうとの人間までをそういう[得体の知れぬ者達]の係累にあの手この手、操り人形のようにした人間を用いているようにあの手、この手で見せたいとの力学は存在し、によって、実体験上、不快な思いをさせられることはあるが、そういう力学に惑わされないでいただきたい」——。



小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』にあつては上にて似姿呈示している[[ペンタゴン象徴とされる五角形]と[黄金の林檎]を並置させるシンボル]のことが「何度も図示までされて」頻繁に言及されている

(出典(Source)紹介の部 37-5 はここまでとする)

また、現実のパロディー宗教(とされるもの)である [ディスコーディアニズム] のやりようと同様の式で問題となる小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』にて頻出させられているとのもの、

[ペンタゴン状の五角形(上にてペンタゴンそのものの体現物との見方がなされているものであると紹介)と黄金の林檎を並置させたシンボル]

にあつての [黄金の林檎] の方がニューヨークの象徴物となっていることにつき本稿を公開することにしたサイトにてより従前から多くの筆を割き、解説を試みてきたのがこの身である(※)。

※長くもなつての補足として

「(まずもつてしてそこから取り上げるが)ビッグ・アップルことニューヨークはマンハッタン地区には【エリス島】という島が包摂されている。その場、【エリス 島】を介して(結果的に)[不和]をもたらすことになってしまった多くの移民がアメリカに流れ込んだとの史的背景がある —— (和文ウィキペディア[エリス島]項目にての冒頭部概説部にての「現行」記載内容を引用すれば(以下、引用なすところとして) “エリス島 ( Ellis Island ) は、アメリカ合衆国、ニューヨーク湾内にある島。アメリカの文化遺産である。19 世紀後半から 60 年あまりのあいだ、ヨーロッパからの移民は必ずこの島からアメリカへ入国した。移民たちによって『希望の島』 ( Island of Hope ) または『嘆きの島』 ( Island of Tears ) と呼ばれてきた。約 1200 万人から 1700 万人にのぼる移民がエリス島を通過し、アメリカ人の 5 人に 2 人が、エリス島を通過してきた移民を祖先にもつと言われて いる ” (引用部はここまでとする)と表記されているような歴史的背景がある —— 。

そうした【エリス島】という名称は(エリス島を介してアメリカに流れ込んだ移民たちのように)[人種の坩堝]での不和・不調和を体現するが如く女神エリス、[黄金の林檎の投げ手]として神話に登場するとの女神エリスのことを名称として「想起」させる名前の島であるとも述べられる —— 後により真つ当な出典より長くもの引用もなすが、エリス神についてとりあえずも英文 Wikipedia [ Apple of Discord ] 項目にての現行記載内容より引けば、“ An apple of discord is a reference to the Golden Apple of Discord (Greek: μήλον τῆς Ἐριδος ) on which, according to Greek mythology, the goddess Eris (Gr. Ἐρις, "Strife") inscribed "to the fairest" and tossed in the midst of the feast of the gods at the wedding of Peleus and Thetis, ” (訳として)「不和の林檎は [不和の黄金の林檎] (希臘(ギリシャ)語表記: μήλον τῆς Ἐριδος) として言及なされるものとなり、ギリシャ神話にあつては女神エリス(希臘語表記にして Gr. Ἐρις, その意は[争乱・不和])が「最も美しき者に。」と書き入れてペレスとテティスの婚礼にあつて馳せ参じていた神々の祝宴の舞台に投げ込んだとのものである」と記載されているようにエリスは[黄金の林檎の投げ手]として神話に登場する存在である —— ( : 尚、【エリス島】の名称は額面上はその島の権利者であつたというサミュエル・エリス( Samuel Ellis ) 氏から命名された、女神エリス Eris (ギリシャ語綴りでは Ἐρις, /同エリス、ここに問題視している表面上の荒唐無稽小説 The Illuminatus! Trilogy にてその存在が非常に重要視されているとの神話に見る不調和 [Discord/ディスコード] を体現する女神となる)とは英文綴りが微妙に異なる向きから命名されたとされており、そうした表向きの命名理由に女神エリスとの関係性を見出すことにはできない) 」

「(以上のこと、【エリス島】との名称から【女神エリス】の名が想起されるとのことについて【「想起される」との印象論】で話が済まぬとのことに通ずる点として) 【エリス島】に対するフェリーが出ているニューヨークの一区画、バッテリーパークに [ツインタワーの間に置かれていたスフィアという黄金の球形オブジェの修復物] が(額面上は 911 の被害者を悼むとの名目にて)「記念碑」として安置されているとのことが「ある」 ——

(英文 Wikipedia [ The Sphere ] 項目にて “ The Sphere is a large metallic sculpture by German sculptor Fritz Koenig, displayed in Battery Park, New York City, that once stood in the middle of Austin J. Tobin Plaza, the area between the World Trade Center towers in Manhattan. ” (訳として)「スフィアはかつてマンハッタンにてのワールド・トレード・センターのタワーらの間、Austin J. Tobin Plaza (訳注: ニューヨーク・ニュージャージー港湾会社の重役 Austin Joseph Tobin の名より付けられたワールド・トレード・センターにてのツインタワーの間に存在していた一区画で2001年の事件で破壊された)の中央に立っていた、そして、現行、ニューヨークのバッテリーパークにて展示されているとのドイツ人彫刻家フリッツ・ケーニッヒの手になる巨大な金属製の彫刻となる」と記載されているとおりである)——。その「スフィア」というオブジェ、ありし日にツインタワーに設置されていたオブジェが(女神エリスが騒乱の具としたとギリシャ神話に伝わる)「黄金の林檎」の体現物に露骨に仮託されていると判じられるだけの事由がある。ひとつにそれは「黄金の林檎の歴史的描かれよう」および「関連するところのニューヨークの地理的アイコン」より判断できるとのこととなる——【「黄金の林檎」と「(エリス島からのフェリーが巡航している)バッテリーパークに据え置かれるに至っているザ・スフィア」の視覚的接続性】や【その他の意でのニューヨークと黄金の林檎の接続性】については続いての図解部を参照のこと——」

(直近言及のこと、黄金の林檎とバッテリーパーク安置のオブジェたるスフィアが「ニューヨークの「諸所」象徴的アイコンの問題」にも通ずる式で接合していることに関しての委細に踏み込んでの図解部として)



□ Ellis Island  
□ Liberty Island  
□ Battery Park



Statue of Liberty  
(illustrated in 1885)



Castello Plan (1660)



上の図は

[[ワールド・トレード・センターで焼かれた特定オブジェ]が[エリス島](および[エリス島に近接してのリバティ・アイランドに設置の自由の女神像])と[バッテリーパーク]を通じて縁深いものとなっていることを示さんとすべくも作成した図]

である(：図の作成の材としては英文ウィキペディアにてのマンハッタン関連項目掲載の図像ら —19世紀のマンハッタン鳥瞰図および同19世紀の自由の女神像ありようを描いての新聞紙掲載図、そして、17世紀のオランダ植民地時代のマンハッタン境界地図らを含めての図ら— を用いている)。

上掲図にても矢印にて示しているところだが、エリス島 Ellis Island(および同島に近接しての自由の女神設置のリバティ・アイランド Liberty Island)に向けて[バッテリーパーク]、先にワールド・トレード・センターで焼かれたスフィアというオブジェの残骸が展示されているとのバッテリーパークから始発を見てのフェリーが出ているとのことがある(：見解の相違など生じえない[事実]であり、かつ、世間で広くも認知されているようなところであるのでその程度の媒体よりの引用に留めるが、和文ウィキペディア[バッテリーパーク]項目にて“**バッテリー・パーク(英語: Battery Park)**は、ニューヨーク港に面するニューヨーク市、マンハッタン島南端のバッテリーに位置する25 エーカー(10ヘクタール)の公共公園である。バッテリーは、砲台の名称であり、都市が建設されて数年後に、これからの町を守るため、設置された。…(中略)…海岸からは、自由の女神像とエリス島へ向かうクルーズ・フェリーが出港している。公園にはさらに、第二次世界大戦中に西大西洋の沿岸で死亡したアメリカ海軍兵を追悼するイースト・コースト・メモリアルなど、いくつかの記念碑がある”(引用部はここまでとする)とあるとおりである)。

繰り返すが、そのバッテリー・パーク、要するに、

[エリス島と自由の女神像(の据え置かれたリバティ島)とそれぞれにフェリー航路にて結線させられている場]

にてワールド・トレード・センターのツインタワーの間に配置された黄金色のスフィアが焼かれた後、修復を見、安置されるに至ったとの背景がある ——先に英文Wikipedia[ The Sphere ]項目より“**The Sphere is a large metallic sculpture by German sculptor Fritz Koenig, displayed in Battery Park, New York City, that once stood in the middle of Austin J. Tobin Plaza, the area between the World Trade Center towers in Manhattan.**”(訳として)「スフィアはかつてマンハッタンにてのワールド・トレード・センターのタワーらの間、Austin J. Tobin Plazaの中央に立っていた、そして、現行、ニューヨークのバッテリーパークにて展示されているとのドイツ人彫刻家フリッツ・ケーニッヒの手になる巨大な金属製の彫刻となる」との文言を引いたとおりである——。

「問題なのは、」そのようにバッテリー・パーク([エリス島]に向けてのフェリーが巡航しているとのニューヨークはマンハッタン島南端に位置するバッテリー・パーク)に安置されるに至った金色のザ・スフィアが[黄金の林檎]と[同文のもの]と定置できるようになっているとのことである。

どういうことか。

については続いて図を付しながらも指摘するような関係性が成立しているとのことがあるからそうも述べるのである。

Ellis Island

Samuel Ellis



Eris (Goddess)



Golden Apple

connected

(ferry)

Battery Park

The Sphere  
(WTC → Battery/Park)



The Sphere (Fight Club version)

図の最上段では【エリス島外観】および【(エリス島が結果的にそうなったところとして[不和の象徴]とも通ずる上での)エリス島を介して大量の移民が米国に流れ

ていくありさま】を写し撮った写真を挙げている。

そちら最上段のすぐ下の段(中段)の図は遺物 —古代ギリシャ・アッティカの遺物として英文 Wikipedia[Eris]項目に掲載されている遺物— にみとめられる不和の女神エリス —本稿にての続いての段でも「黄金の林檎の投下による不和の誘発」とのその行状にまつわる出典紹介をなすことになる女神— の似姿およびエリス神によって投下された黄金の林檎(美の神の象徴としての字句が綴られていた林檎)を巡っての女神らの間で執り行われることになった美人コンテストの一幕を描いた絵画となる。

さらに下っての段(下段)にて呈示の図らはルネッサンス期の巨匠ルーカス・クラナッハ・エルダーの16世紀絵画、

【Judgement of Paris との画題の絵画(女神エリスの林檎を巡る美人投票にトロイアの皇子としての出自を持つパリスが招聘された一幕を描いての1512年から1514年にかけて作成の画/無論、英文 Wikipedia などから簡単に捕捉できるとの絵画)】

となる。

そして、同じくも下段にて呈示しているのは

【映画『ファイト・クラブ』 —本稿の後の部にて【多重的に張り巡らされた911の事件に対する先覚的言及(複数の理由からニューヨークはワールド・トレード・センターおよびツインタワー界限と解されるどころ、そうしたところにて連続ビル倒壊劇が具現化させられるとのことを描いての先覚的言及にして見様見方によっては911との数値規則それそのものとも関わる先覚的言及)】と共にあること、かつもってして、【フリーメーソンの象徴主義の「露骨なる」複線の反映】との兼ね合いで何が問題になるかのことについて膨大な文量を割いて解説する所存であるとの映画作品— に登場するオブジェ・スフィア(ツインタワー合間に置かれていたオブジェ)の露骨なるイミテーションを再現しての図】

となる。

以上、各段に分けて呈示の図らからお分かりいただけようことか、とは思うが、映画『ファイト・クラブ』(それ自体、非常に問題になる映画として本稿の後の段にて分析対象とすることになっているとの映画)にて登場のスフィア・イミテーションはルネッサンス期の特定絵画にて「黄金の林檎」(女神エリスと紐付く伝承上の果实)として描かれていたものとそっくりの外観を呈しているとのことがある。

(追記:本稿のかなり後の段、**出典(Source)紹介の部 104**の部の直前の部にて「映画『ファイト・クラブ』のスフィア —ニューヨークのツインタワーの間に敷設されていたスフィアのイミテーション(噴水の中に据え置かれていたとの黄金の球体オブジェのイミテーション)—」[クラナッハの黄金の林檎]の関係性については「より細やかなる」指摘をなすこととする)

上の図解部に見るように

【ルネッサンス期の巨匠ルーカス・クラナッハ・エルダーの手になる絵画 —三人の女神が「最高の美神の証」たる黄金の林檎を巡っての美人コンテストにトロイア皇子パリスが審判役として参画させられたとの筋立てからなるパリスの



審判、ジャッジメント・オブ・パリス(パリスの審判)をモチーフとした絵画— に見る黄金の林檎]

が映画『ファイト・クラブ』に登場した金色の球形オブジェがワールド・トレード・センターの合間に据え置かれたザ・スフィアというオブジェの露骨なる模造物(映画に登場のイミテーション)と視覚的そっくりさんとなっている(のが問題になる)。

そして、(繰り返すも)、現実世界ではツインタワーの間で焼かれたオブジェたるスフィアがバッテリーパークに後に安置されることになったとのことがある。そのバッテリーパーク(先掲の絵画に見るように黄金の林檎の歴史的描画形態と通ずるオブジェが据え置かれている一区画)よりエリス島 —黄金の林檎を投げた女神エリスの名を想起させる島— に向けてのフェリーが出ているのであるから、「まずもってそこからして」黄金の林檎と女神エリス(黄金の林檎を争乱の具とした不和の女神)とニューヨーク(ビッグ・アップル)の関係性が観念されることになる。

話はそれにとどまらない。

バッテリー・パークからエリス・アイランドと同様にそこに向けての船が出ているとの一区画たるリヴァティ島、そこに存在する【自由の女神】像が

#### 【黄金色を呈しての松明を掲げている存在】

となっているとのこともが着目に値するところとなる ——たとえば和文 Wikipedia [自由の女神像 (ニューヨーク)]項目にあつて(現行記載を引用するところとして) “右手には純金で形作られた炎を擁するたいまつを空高く掲げ、左手にはアメリカ合衆国の独立記念日である「1776年7月4日」とフランス革命勃発(バスティーユ襲撃)の日である「1789年7月14日」と、ローマ数字で刻印された銘板を持っている”(引用部はここまでとする)と記載されているところである——。

同・自由の女神像とは

#### 【足下に鎖が描かれているとの彫像】

でもある ——英文 Wikipedia [Statue of Liberty]項目にあつての冒頭部にて “The statue is of a robed female figure representing Libertas, the Roman goddess of freedom, who bears a torch and a tabula ansata ( a tablet evoking the law ) upon which is inscribed the date of the American Declaration of Independence, July 4, 1776. **A broken chain lies at her feet.** ”と記載されているとおりである——。

そうした【黄金色を呈しての松明を掲げている存在】であり、また、【足下に鎖が描かれているとの彫像】でもあるとの【自由の女神像】と同様に【黄金の炎】を掲げているとの存在がニューヨークはマンハッタン島に見てとれ、それは、(唐突とはなるが)、

#### 【ニューヨークのロックフェラーセンターに据え置かれているプロメテウス像】

となる ——ニューヨークのロックフェラーセンターに置かれているプロメテウス像、米国人彫刻家 Paul Manship (ポール・マンシップ)の手になる作品がいわば【黄金の松明】を掲げるが如く存在であるとのことについては例えば、英文 Wikipedia [Prometheus (Manship)]項目に「現行」掲載されている同彫像の似姿を見れば、理解できることであろう(全身、金色を呈するとのブロンズ像が全容と同様に金色の炎を手を持っている似姿を見れば、理解できることであろう)——。

そして、神話が語るプロメテウスというのは

[足下に引きちぎられた鎖が配されている自由の女神像よろしく「鎖で繋がれるが如く状況より解放された」存在]

である —— 目立つところでは英文 Wikipedia [Prometheus] 項目にても “Prometheus, in eternal punishment, **is chained to a rock in the Caucasus, Kazbek Mountain**, where his liver is eaten daily by an eagle,” 「プロメテウスは永遠の責め苦としてユーカサスの岩に鎖で縛り付けられ、そこにて日々、自身の肝臓を鷲に啄(ついで)まれている」との通りの伝承が伝存している——。

以上指摘したうえで申し述べるが、神話が語るプロメテウスをかたどっている [ニューヨーク据え置き(直近言及)の黄金の火を掲げる彫像] 自体には鎖は描かれて「いない」のであるが、プロメテウス像が飾られているのと同じ場、ニューヨークにてのロックフェラーセンターに神話上、プロメテウスの兄弟との設定の

### [巨人アトラス ATLAS の像]

が — 彫刻家 Lee Lawrie (リー・ロウリー) の手になる作品として — 飾られていることが問題となると申し述べたい (: 英文 Wikipedia [Rockefeller Center] 項目にての [Center art] の節の「現行の」記載内容より引用なせば、“Sculptor Lee Lawrie contributed the largest number of individual pieces — twelve — including the statue of Atlas facing Fifth Avenue and the conspicuous friezes above the main entrance to the RCA Building. Paul Manship's highly recognizable bronze gilded statue of the Greek legend of the Titan Prometheus recumbent, bringing fire to mankind, features prominently in the sunken plaza at the front of 30 Rockefeller Plaza.” (訳として) 「彫刻家リー・ローリーは五番街に面したアトラス像およびレイディオ・コーポレーション・オブ・アメリカ・ビル(別名 GEビルディング)正面通用口上部のフリーズ(装飾付壁面)作品を含む12の個人的作品を — 同センターにての芸術作品として最も多いところとして — ロックフェラー・センターにもたらした。ポール・マンシップによる極めて目立つ黄銅にて箔付けされ、人類に与えるべくもの火をもっているとの横たわるタイタン・プロメテウスのギリシャ神話に依拠しての像はロックフェラー広場30号(GEビルディング)正面の落ちこんだ一画にて際立っての色合いを付している」(訳を付しての引用部はここまでとしておく)とあるとおりである)。

そのアトラス像の[アトラス]とは — 同じくものことは後の段にて伝承上の典拠を細かくも挙げることになるが — 、

[ヘラクレスの11番目の冒険にて黄金の林檎 — いいだろうか、ここに問題視している[黄金の林檎]である — の所在を知る者として登場してくるプロメテウスの兄弟にあたる巨人]

にして、かつもって、

[[プロメテウス]本人がヘラクレス第11功業にてヘラクレスに言い含め、彼に会うように、との進言をなしたところの巨人]

として神話が語り継ぐ存在でもある (: 同点については本稿にての他所でギリシャ神話エピソードとしての出典紹介をなすことになるのものである —— 追記: 本稿にての続く段、**出典(Source)紹介の部 39**にてギリシャ神話を今日に伝存させるうえでの主要な媒質となっているローマ期古典よりの原文引用をなしてヘラクレス11番目の功業が[アトラス][プロメテウスの解放][黄金の林檎]と結びつけられていることにつき文献に依拠しての解説を講ずる——)。

といった、たかだか皮相的な側面、順序を多少たがえてまとめたの表記をなせば、

[ニューヨークこと [ビッグ・アップル] (巨大なる林檎) の守護神とでもいった位置付けの【自由の女神像】(リヴァティ島安置の女神像) は[足下にちぎられた鎖]が配せられての存在にして、なおかつ、[黄金の松明]を掲げる存在となっている]

⇒

[ニューヨークのランドマークとなっているロックフェラーセンターに据え置かれているプロメテウス像は[黄金の炎]を掲げる存在であるが、そちらプロメテウスはギリシャ神話にて [ヘラクレスより鎖から解放された存在] と伝わっており(従って【プロメテウス】と【自由の女神像】が [マンハッタンのアイコン] [黄金の火を掲げる存在] [鎖より解放された存在] との式で結びつくようになっている)、なおかつ、同プロメテウスはヘラクレスに巨人アトラスから [黄金の林檎] の在り処を訊くようにと進言した存在ともなっている(そして、【ニューヨークのランドマークたるプロメテウス像】と同様に【プロメテウスが彼に会うようにとヘラクレスに勧めた存在、黄金の林檎の在り処を知る存在である巨人アトラス(プロメテウスの兄弟にあたる巨人)の彫像】もがロックフェラー・センターには据え置かれている)]

⇒

[[黄金の林檎]を投げた不和の女神の名は[エリス]となるのだが、その女神エリスと綴りはともかくも発音が同じであるとの著名な島が存在しており、そちらが大量の移民が米国に流入するうえでの拠点にして関門となっていたとのビッグ・アップルことニューヨークのエリス・アイランド(常識上の話ではその島のかつてのオーナーがサミュエル・エリスなる人物であったからそのような名前になっているとの島)となる。その[エリス島]に向けての定期便が [自由の女神像の据え置かれた一画] に向けての定期便と同様に運航を見ているとの場がニューヨークの南端バッテリー・パークとなり、そちら([エリス島]と[自由の女神の島]を結びつける場たる)バッテリー公園にてワールド・トレード・センターにあって911の事件で焼かれたありし日の黄金色のオブジェ、[ザ・スフィア]が安置されるようになったとのことがある。そして、映画『ファイト・クラブ』にもそのスフィアの露骨なるイミテーションが登場を見ており、こともあろうにそちらスフィア(イミテーション)との目立っての構造的近似物がルネサンス期特定絵画で [黄金の林檎] に仮託されているとのことがある]

との事由から見て「も」ビッグ・アップルことニューヨークが [黄金の林檎] と結びつけられているとの物言いがなせるように「なっている」——※【バッテリー・パークよりの(女神エリスと同文の響きの)エリス島へのフェリーの巡航】/【バッテリー・パークにおける黄金の林檎の歴史的具現化形態に通ずるオブジェ(ザ・スフィア)の据え置き】/【バッテリー・パークよりの自由の女神像(直上既述のようにマンハッタンのアイコンとしてプロメテウスに結びつく存在)が屹立するリヴァティ島へのフェリーの巡航】との各観点から【ニューヨークと[女神エリスの手管にしてヘラクレス第11功業の目標物である黄金の林檎]との結びつき】が観念されることになる、ということである。そして、判断事由はここに述べたことに留まらず「他にも」複数ある。そのように述べたうえで書くが、ここで引き合いに出しているとの極々一面的な判断事由らからしてこの世界では「どういふわけなのか」誰も指摘しようとしな<sup>い</sup>とのこととなる(そこからして気付いている向きがどうかは分からないが、この世界の限界領域にまつわることに<sup>関</sup>しては根拠なき稚拙な憶説・妄説を平然と鼓吹する人間(いわばもの屑か糸繰り人形であろう)が数多い一方できちんとした論拠を伴っ

ていることらでもそれが「ある程度の複雑性」を帯びだすと、たとえば、判断のためのプロセスが階層的になるとそのことを指摘しようとする人間が途端に「いなくなる」とのことがある)。同じくものことに気付いている人間はニュー Yorker にして、なおかつ、神話関連知識 豊富な向きであるとの人間ならば、普通ならば部分的にいそうであるようにとれるのに、(再強調して)、「どういうわけなのか」誰もそのような指摘を具象論 としてなそうとしないとのこととなっている(：性質の悪い日付け偽装の紛い物ら、[馬鹿話]を広めんとするが如くの媒体なぞが相応の程度・水準の人間らによるところの手仕事、誰がみようと[どぎつさ]につき察しがつくとの愚昧さが際立った劣化物としてこれより登場する可能性もあることか、と懸念するところであるが(幾点かそういう媒体が「頭の中身が「できあがった」手合い」によって捏造画像などを伴いつつもの 紛いものの陰謀論サイトが英語圏にて流布されている、手繰られてであろう、検索エンジンなどにて目立って映りやすきところとして流布されだしているとのこと「も」本稿筆者は捕捉している)、現況情報流通動態を見る限りは「どういうわけなのか」誰も同じくものことまでの呈示の挙を(筆者を除き)見せていない)――。

(図解剖終端)

以上のような論拠らだけではなく、[他の数多の論拠]があるため(たとえば、(筆者が自媒体の他所でも指摘しているところとして)ニューヨークことビッグ・アップルと[黄金の比喩] および [揺れる双子の比喩] とを同時にサブリミナル的に結びつける 1980 年代初出の某 映画作品なども存在しているといったことがこの世界には見てとれ、また、本稿の後の段で呈示するところとして [911 の事件と黄金の林檎の関係性にまつ わっての先覚的言及物「ら」] が幾点も存在しているといったことがある)、筆者としては「当然に」ニューヨークは黄金の林檎と結びつけられると指摘する次第である。

※長くもなつての補足の部はここまでとしておく

以上、補足となることを呈示した段階で 5. と振つての段を終えることとする(：問題となる小説にあつて「何が問題となるのか」とのその根拠を分けても示していくとの趣旨にての 5. と振つての段を終えることとする)。

さて、ここまで 70 年代に欧米にてヒットを見た『ジ・イルミナタス・トリロジー』の [911 の予見描写] について解説してきたことを振り返れば、

1. [ニューヨークのマンハッタンのオフィスビル爆破]より話がはじまり(：[出典 \(Source\) 紹介の部 37](#)を典拠として挙げている先立つての 1. の部を参照のこと)、
2. クライマックスに向けて魔的封印を解くとの目的で「ペンタゴンの爆破・部分倒壊」が実演され(：[出典 \(Source\) 紹介の部 37-2](#)を典拠として挙げている先立つての 2. の部を参照のこと. 爆破時間まで問題にするかは人によろうがこの身は爆破時間のことまで問題視していることも理由と共に解説)、
3. 現実のブルース・イビンズ容疑者を巡る 911 以後の状況を事前に描くように「米軍から漏出した炭疽菌改良株が大災厄をもたらしかねないとの状況に至った」こと



が描かれ(：[出典\(Source\)紹介の部 37-3](#)を典拠として挙げている先立っての上の3. の部を参照のこと)、

4. そのスピンアウト・カードゲーム作品(スティーブ・ジャクソン・ゲームズ製の[カードゲーム・イルミナティ])までもが[崩されるツインタワー][爆破されて粉塵をあげるペンタゴン]とのイラストの持ち出しから911の事前言及物であると問題視されている(：[出典\(Source\)紹介の部 37-4](#)を典拠として挙げている先立っての4. の部を参照のこと)、

との各要素を同小説が帯びていること、具体的に指摘可能になっている。

そして、直前直近までにてそのことに言及してきたところとして同作『ジ・イルミナタス・トリロジー』についてはさらにもって

5. [ [合衆国国防総省のペンタゴン(911の事件で攻撃対象とされたバージニア州アーリントンにある国防総省庁舎)の体現物と当該小説内作中で明示されている五角形]と[直近言及のことからニューヨーク体現物(911の事件で攻撃対象とされた地域)との判断がなせるようになっていく黄金の林檎]を対面並置させての独特なるシンボリズム]が図示までされて作中にて頻出を見ている(マンハッタンにてのビル爆破およびペンタゴン爆破をモチーフにしている作品で[そういうこと]が見てとれる)

とのことも指摘なせるようになっていく(：直前にての[出典\(Source\)紹介の部 37-5](#)では小説作中に頻出を見ている[聖なるカオ]などと命名されてのシンボリズム、すなわち、[ [合衆国国防総省ペンタゴン象徴物と結びつけられての五角形]と[黄金の林檎]を真向かいから並置させてのシンボリズム]に関しては[黄金の林檎]がニューヨーク象徴物とされているとのことを摘示し、もって、問題となる小説にて[ [合衆国国防総省ペンタゴン象徴物と結びつけられての五角形]と[ニューヨークの象徴たりえる黄金の林檎]を真向かいから並置させてのシンボリズム]が多用されているとのことを指摘した(黄金の林檎がなぜにもってニューヨーク、ひいては911と結びつくのかについてのさらに一歩進んでの深甚なる理由について解説しきれなかったとのところがあるが、そちらについては本稿の後の段で詳説を加えるとしつつも指摘した)。

以上、一九七〇年代に原著が刊行され大ヒットを見ている小説を引き合いにそれが

### [911の前言事物]

となっているとの論拠 —1. から5. — を挙げてきた。

そして、同じくもの摘示してきたことは、と同時に、

### [911の前言事物がヘラクレスの第11功業と結びついているとのこと]

を示すものともなっている。前言事象としての作品それそのものがヘラクレスの第11功業に登場する[黄金の林檎]と密接に関わっているからである(論拠にあつての5. と振っての段では黄金の林檎が[ヘラクレス第11功業](アトラスおよびプロメテウスが登場する功業)に関わるとの言及をなしていることを思い出していただきたいものである。そして、[黄金の林檎]はそもそももって1. から5. のような特性から(機序ともかくも)911の事前言及事物となっているとの作品のうちの一たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』の作品副題ともなっている、Illuminatus! Part II The Golden Appleといったかたちで作品副題となっているものでもある —黄金の林檎が登場するヘラクレス第11功業がいかなうものなのかは間を経ずに伝承に基づいての典拠を挙げることになるとしつつも、その点につき留意いただきたいと申し述べる(また、先立っての段でもその旨、記していることだが、ヘラクレスの第11功業と911の予見事物たる「他の」サブ・カルチャー作品らの関係性についても本稿では具体例を挙げていくとの方針で



やっている)—— )。

直上、申し述べもしている重要なことを含めて

「手前の申しようの理非曲直の程についてはきちんと論拠らを批判的に検証いただければ理解いただけるところである」

と述べ、話を進める。

さて、(さらにもってのその指し示しを本稿にてのより後の段になすところともなるのではあるが)

「911の事件(の予見事物)がヘラクレスの12功業、なかんずく、第11番目の功業と密接に結びついているとのことが「現実にある」」

として、である。

にまつわっては

「[911の事件と接合する(と本稿筆者が指摘するところの)ヘラクレス第11功業]に登場するアトラスという神話上の巨人が  
[アトランティス]  
と結びついている」(※)

ことが問題になるとのことがある。

※1. [アトラス]という巨人の名が [アトランティス] と結びつくものであることについて補足をなしておく。

アトラスがアトランティスと結びつくことについては本稿の先の段にて述べたこと——[出典\(Source\)紹介の部 36](#)にて古典の和訳版(プラトン全集 12(岩波書店刊行)『ティマイオス』収録部の p.22-p.23)の原文引用をなしてそれでもって典拠を示したところ——を繰り返す。

「今日、沈んだ伝説上の大陸[アトランティス]のことを伝えるのはギリシャ期古典、プラトンの『ティマイオス』『クリティオス』となっているが、うち、『クリティオス』にはアトランティスの開闢王が[伝説の巨人]の名と同様の[アトラス]であったということ、それゆえの(古の国家たる)アトランティスとの名称がなされているとの表記がなされている」(先に引用したところの著名古典『クリティオス』にあつての原文表記という文献的事実の問題である)

※2. それについてはより細かくもの古典そのものに依拠しての解説は後の段にてなすが(追記:本稿にての後の段、[出典\(Source\)紹介の部 39](#)にて原文引用なすこととした)、ヘラクレスがその第11功業にてアトラスと出会うとのことについて「衆目に触れやすい」とのことでそちら媒体よりの引用をなせば、和文ウィキペディア [アトラス]項目などには「現行」次の記載がなされているところである。

(以下、原文引用するところとして)

後に英雄ヘラクレスが、アトラスを頼って訪れて来た。彼はヘスペリデスの庭園から黄金の林檎を取り、ミュケナイへ持ち帰るよう命じられた(ヘラクレスの11番目の功業)のだが、肝心の庭園の場所が分からなかった為、コーカサス山に縛り付けられていたプロメー

テウスを救い出し、彼に助言を求めた。そして彼からアトラスの所へ行ってみてはどうかと言われたのである(アトラスは庭園に住むヘスペリスたち(ヘスペリデス)の父であった)。ヘーラクレースから黄金の林檎を手に入れたいと相談されたアトラスは、自分が天空を支える重荷から逃れたい事もあり、ヘーラクレースに対して、自分が庭園に行き、林檎を持って来るから、その間天空を代わりに支えて欲しいと頼んだ。こうして天空をヘーラクレースに任せたアトラスは庭園に行き、林檎を持って帰ってきた  
(ここまでもって基本的なところとしての「現行の」和文ウィキペディア[アトラス]項目よりの引用とする — 偽アポロドーロスとして知られるローマ期文人の古典それそのものよりの同じくもの内容を含んだ箇所  
の原文引用も後の段にてなす — )

そうもしたこと、[「アトランティス」と「ヘラクレス11 功業に登場するアトラス」の結びつき]が問題になるとのこと「にも」関わるところとして筆者は本稿先立っての段で

[ワームホールおよびブラックホールに関わる現代事象]

が — 奇っ怪・奇態なる話であることは論を俟たないのだが —

[爬虫類の異種族の「次元間侵略」を扱っている作品]

および

[911の予見的言及作品 — 911の予見的言及との兼ね合いではそれが(アトラス登場の)ヘラクレス第11 功業と結びつくようになっていくことの「一例」摘示をなしもしたばかりである — ]

と接合しているとのことに言及してきた。

そちら接合性にまつわってのこと、そして、その先に何かあるのかと判じられるのかとのことに関して — 振り返りもして — [以下のこと]が指摘できるようになってきていること、本稿では解説してきた。

---

## これより「長くもなるが、」の先立っての指し示し事項の振り返りをなす

「まずもって」そこより表記するが、先行する段にあつては下に枠で括ってのことの摘示に努めていたとことがある。

本稿にては(羅列しての表記をなすところとして) **出典(Source) 紹介の部 28**, **出典(Source) 紹介の部 28-2**, **出典(Source) 紹介の部 28-3**, **出典(Source) 紹介の部 31**, **出典(Source) 紹介の部 31-2**, **出典(Source) 紹介の部 32**, **出典(Source) 紹介の部 32-2**, **出典(Source) 紹介の部 33**, **出典(Source) 紹介の部 33-2**を包摂する段にて[通過可能なワームホールを用いてのタイムマシン構築技法]に言及していることでも有名な著作、『ブラックホールと時空の歪み アイんシュタインのとんでもない遺産』という物理学者キップ・ソーンの手になる著作がいかようにして

[「双子の」パラドックス (1「911」年提唱) の機序の利用による光速近似の速度移動で分かれたれた二点間時差の応用]

[「91101」(2001年9月11日そのものを指し示す数)との郵便番号ではじまる

地を空間軸上の始点に置いてのタイムワープにまつわる解説や同じくもので疾走させた爆竹付き自動車にみる順次爆発プロセスを引き合いにしての思考実験による[双子のパラドックスに通ずる時間の相対性]の説明の付与  
[2000年9月11日⇒2001年9月11日と通ずる日付けを時間軸上の始点にしてのやりよう]

[同じくもの思考実験をキップ・ソーン著作と同様のイラストレーター関与で持ち出しているとの他の書籍を介しての「ブラックホール⇄グラウンド・ゼロ」との対応図式の介在(911の事件発生前の介在)]

といった複合的要素を

[僅か一例としての思考実験]

にまつわるところで「同時に」具現化させ、もって、[双子の塔が崩された911の事件]の前言と解されることをなしているのか、について(筆者の主観など問題にならぬ客観情報にまつわるところとして)解説を講じてきた。

その点、以上、振り返っての言及なしでの特性を伴っているとの『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作が

[**多重的に911と結びつくようにされている双子のパラドックスにまつわる思考実験**]

とを

[**通過可能なワームホール**] (他空間の間をつなぐ宇宙に開いた穴)

に通ずるものとして持ち出している著作となっているとのことがある一方で、

[**1993年公開の荒唐無稽映画 Super Mario Bros. (邦題) 『スーパーマリオ魔界帝国の女神』**]

に関しては

[**ツインタワーが異次元の恐竜帝国の首府と次元間融合する —(とするとワームホールのことを想起させる)— との粗筋**]

が具現化しているとのことがあり(出典(Source)紹介の部27)、同映画、ツインタワーに対するジェット機突入事件発生(2001年)より8年も前に封切られた作品であったにも関わらず、

[**上階に風穴が開き、片方が倒壊していくツインタワー**] (次元融合の結果、恐竜帝国の首府と融合したとのツインタワー)

をワンカット描写にて描いている作品となっているとのことがある(とのことを本稿にて指摘してきた。その奇怪性がゆえにオンライン上に流通している記録動画群(Super Mario Bros. ,1993,911といったクエリで検索エンジン走らせれば特定できようとの動画群)などを通じて確認できるようになっているところとしてである))。

以上、枠内表記してきたことに関わる(そして一部重複を呈する)ところとして本稿では下に再掲なすところの、 $\alpha$ . から  $\gamma$ . のことの [証示] に取り立てて努めてきたとのことがある( :いいだろうか. 証して示す、[証示] との言葉を用いているのはそれが「属人的主観などが問題にならない」との[はきと存在している関係性 一流布見ている特定文献にそういう記述が容易に後追い可能などところとしてみとめられるとのこと、すなわち、**Philological Truth** 文献的事実に裏打ちされているとの関係性— ]を摘示するとのプロセスとなっているからである。そして、筆者はそうした [証示] がなせるようになっていたとの事態が[偶然]で済むのか、[恣意]の力学があるからなのか(換言すれば、[操

作]がなされているからなのか)、[恣意]であるのならば、何が問題になるのか、とのことを問題視しているとの人間である)。

**α** . [カシミール効果]検証実験(1948 実施の実験)のことを露骨に想起させる独特なる行為によって宇宙開闢の実現が図られるとの小説『フェッセンデンの宇宙』(初出1937年の小説作品)ではその作中、誕生した宇宙で[爬虫類の種族]が人間そっくりの種族を「皆殺し」にするとの描写がなされている(介入者たる科学者によって繋がれた相互惑星の間の戦争にまつわるところでそうした描写がなされている)。さて、先覚性——初出1937年の作品のそれでありながら1948年のエポックメイキングな実験([カシミール効果]検証実験)の内容をなぞるが如く先覚性——を有した『フェッセンデンの宇宙』(に見る[悲劇の宇宙]の開闢手法)と同様の手法で現実世界で検証されることになった[カシミール効果]が同文に現実世界にてその存在を指し示すことになったとの[負のエネルギー]というものに関しては[ワームホールを安定化させるもの]とも80年代後半より考えられるに至っているとのことがある(出典(Source)紹介の部24にて指し示しにつとめているところとして「物理学者キップ・ソーンによって加速器実験とは何ら関係ないところでそれ絡みの科学仮説が呈示なされての」1980年代後半のこととしてである)。他面、(人為的に繋がれた惑星の間での戦争を通じての爬虫類に似た種族による人類に似た種族に対する皆殺し挙動が描かれるとの)小説作品『フェッセンデンの宇宙』と同様に[宇宙の開闢状況]を再現する、すなわち、宇宙開闢時(ビッグバン時)のエネルギー状況を極小スケールで再現すると銘打たれながら後に執り行われるに至っている加速器実験に関しては[『フェッセンデンの宇宙』と同様の手法で検証された][カシミール効果]に見る[負のエネルギー]でこそそれが安定すると80年代後半に考えられるに至ったものたるワームホールをそちら加速器実験が生成しうるとの観点が「ここ最近になって」(プランクエネルギーとの高エネルギーを用いなくとも加速器実験にてワームホール生成しうるとの観点が「ここ10数年で」)呈されるようになったとのことがある(出典(Source)紹介の部18、出典(Source)紹介の部21-2らを通じて専門の科学者の手になる書籍に見る科学界の主たる理論発展動向に関して解説しているとおりでである)。

**β** . 上の **α** でフィクション『フェッセンデンの宇宙』と現実の[加速器実験]を——[宇宙の開闢状況の再現の企図]といった共通事項に加えて——結びつける要素となるのが、[[カシミール効果による負のエネルギーの検証]と密接な関係にある「通過可能な」ワームホール]となるのではあるが、そちら通過可能なワームホールのことをテーマとして扱っているのがキップ・ソーン著書『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作となる。同著に関しては[911の事前言及][他界との扉]との観点で爬虫類の異種族による次元間侵略を描いた映画、『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』という[上階に風穴が開き、片方が倒壊していくツインタワー]のワンカット描写を含む映画」と記号論的につながる素地がある(：その理由は事細かに先の段にて述べている。(羅列しての表記をなせば)出典(Source)紹介の部28、出典(Source)紹

※【(繰り返しし  
ての)外挿表記と  
しまして】：ここ  
のそれのように本  
稿では「頻繁に」  
文字色と背景色  
を変えての【出  
典紹介部】呈示  
のための表記を  
なしています。本  
稿全体の指し示  
し内容の重大性  
を顧慮して【後  
追い可能な典拠  
】の細部に至るま  
での呈示からして  
必須事項ととらえ  
ているからではあ  
りませんが、無論  
にして、後追い「可  
能」であるだけで  
はなく後追い「容  
易」である必要も  
あるとの認識が書  
き手この身にはご  
ざいます。にま  
つわって後追い  
「容易」性の方を  
もたらず方式、  
すなわち、【都  
度即応的にすべ  
ての出典紹介部  
の内容を即時確認  
するための方式  
】を本稿にあって  
の冒頭 p.5 で細  
かく紹介しており  
ますので「頻繁  
に本稿の典拠内  
容の確認をなす  
必要」を感じてお  
られるとの方々に  
おかれましてはそ  
ちら本稿 p.5 で案  
内させていただ  
いております方式  
を採択いただけ  
ればと考えます  
(典拠内容確認を  
容易・即応的な  
すとのその紹介  
方式とは本稿を  
収めた PDF 文書  
を別名保存で二  
ファイル用意し、  
うち、片方を閲覧  
用、もう片方を  
(巻末数ページの  
出典紹介部一覽  
表記部「だけ」を  
印刷して役立て  
つつもの)出典確  
認用の電子文書  
として活用いた  
だくとの方式となり  
ます)



介の部 28-2、出典(Source)紹介の部 28-3、出典(Source)紹介の部 29、出典(Source)紹介の部 31、出典(Source)紹介の部 31-2、出典(Source)紹介の部 32、出典(Source)紹介の部 32-2、出典(Source)紹介の部 33、出典(Source)紹介の部 33-2 で問題となる著作がいかようにして[双子のパラドックス(1911年提唱)の機序の利用による二点間時差の応用]／[91101(2001年9月11日を意味する数)との郵便番号ではじまる地を始点に置いてのタイムワープにまつわる解説や同じくもの地で疾走させた爆竹付き自動車にまつわる思考実験による[双子のパラドックス]にまつわる説明の付与]／[2000年9月11日⇒2001年9月11日と通ずる日付け表記の使用]／[他の関連書籍を介しての「ブラックホール⇄グラウンド・ゼロ」との対応図式の介在]といった複合的要素を[僅か一例としての思考実験]にまつわるところで同時に具現化させ、もって、[双子の塔が崩された911の事件]の前言と解されることをなしているのか、について(筆者の主観など問題にならぬ客観情報にまつわるところとして)摘示している。他面、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という書籍にて[多重的に911と結びつくようにされている双子のパラドックスにまつわる思考実験]が[通過可能なワームホール](他空間の間をつなぐ宇宙に開いた穴)にまつわるものとなっているとのことがある一方で1993年の荒唐無稽映画 Super Mario Bros. (邦題)『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』がツインタワーが異次元の恐竜帝国の首府と融合するとの粗筋の映画であることについては出典(Source)紹介の部 27 を、そして、同映画がツインタワーに対するジェット機突入前のことであるにも関わらず上階に風穴が開き、片方が倒壊していくツインタワーをワンカット描写している映画であることについてはオンライン上に流通している記録動画群—— Super Mario Bros., 1993, 911 といったクエリで検索エンジン走らせればすぐに特定できようとの動画群—— などを通じて確認されたい)。

$\gamma$  . 上の  $\alpha$ . と  $\beta$ . は異様な先覚性がみとめられるところで[[爬虫類の似姿をとる異種族の侵略]と[加速器実験の結果たるワームホール]との接合]が見てとれることを示すものであるが(問題はそのようなことがあるのが「偶然の一致」で済むか否か、である)、[[加速器と同様のもの]と[爬虫類の異種族の侵出]を結びつけて描く作品]は他にも存在している。先に言及したブルース・スターリングの『スキズマトリックス』との作品、ローンチ・リング(加速器と同様の機序を有する装置)での死闘の最中に爬虫類の異種族の来訪を見るとの同作が該当文物となる(委細については先の解説部を参照されたい。出典(Source)紹介の部 26 から出典(Source)紹介の部 26-3 との出典解説部を設けながらなしてきた本稿にての従前の段がその部に該当する)。

(尚、上に  $\alpha$ . から  $\gamma$ . と振って再言及しているところの関係性に加え、[加速器とブラックホール特質を繋げての同時言及(「異様な先覚性を伴っての」同時言及)][爬虫類の種族による人間種族への侵略]との要素をあわせて具備しているとの作品が一九五〇年代初頭



より Philological Truth [文献的事実] の問題として具現化している  
 とのこと「も」がある、その点についても本稿の後の段では解説する所  
 存である —— 当該文物原著よりの事細かな原文引用をなしながら  
**The Sword of Rhiannon** (邦題は『リアノンの魔剣』) という作品のそ  
 の伝で問題になる特性について詳説を講ずる所存である —— )

(先立っての内容の振り返り表記を続けるとして)

以上、再掲なしての  $\alpha$ . から  $\gamma$ . に関わるところとして本稿筆者は次のことを指摘し  
 ていた。

それ自体は世の中のことが一面でながらもよく分かっている向きには歴史的贋造物  
 ( archaeological forgery ) と見られる、のみならず、ナンセンス(nonsense)なもの  
 と看做されるとのものであるが、モーリス・ドリールという神秘主義者(悪い意味で「できあ  
 がった」人間)が刊行した The Emerald Tablets of Thoth (1939) は

[人間の姿をとる蛇人間らによる [影の王国] (シャドウ・キングダム) が  
 [アトランティスの統治体] を [人間らの王族にすり替わった蛇人間] を通  
 じて支配している]

といった内容を「太平洋戦争勃発前」から有しているとのものである。そちら『(捏造  
 版)エメラルド・タブレット』は

「[影の王国]という文言込みでの盗用(古代アトランティス碑文を解読し  
 たと自称しての神秘主義者モーリス・ドリールによる盗用)が問題になる」

とのものである。



上掲図非テキスト部にて挙げていのは英文 Wikipedia [ The Shadow Kingdom ] 項目に記載されている小説『影の王国』掲載の図となる(同図は著作権失効明示画像としてウィキペディアに掲載されているものとなる — また、同じくもの図は(筆者が手ずから確認しているところとして)国書刊行会より出されているパルプマガジン『ウィアード・テイルズ』復刻版(ウィアード・テイルズ(2)) にての和訳版『影の王国』掲載部にて見受けられるものとなる— )。

上掲図に付したテキスト部にて何が影響・被影響との絡みで問題になるのか — [傀儡のような人間に対してどこぞやら指示がなされたうえでの窃用が具現化を見ているとも見えもする]のだが、それは置き、常識的先後関係の問題で何が問題になるのか— ご理解いただけるか、とは思う( : 当時押しも押されぬ 売れっ子作家となっていたロバート・ハワードの 1929 年小説では[古代アトランティス世界にての蛇人間らによる影の王国からの侵略]がその作中モチーフとされている。他面、時期的にロバート・ハワード小説に遅れてのモーリス・ドリールという神秘主義者による自称古代アトランティスの解読碑文(1939) でも [古代アトランティスにての蛇人間らによる影の王国からの侵略] がモチーフとされている)。

以上、振り返って指摘したことに関しては次のような観点から見た場合に問題性が浮き彫りになる。

⇒

それが捏造されたものであろうとなかろうと 20 世紀前半からして[爬虫類の異種族によるアトランティスへの次元間侵略がなされた]との内容の文物があることは先述の  $\alpha$ . から  $\gamma$ . の関係性を不気味に想起させることに相違はない(また、述べておけば、 $\alpha$ . から  $\gamma$ . は後の出来事の先覚的言及に関わるものでもあるために問題の根が極めて深くも見てとれるとのこともある)。

加えて、次のようなこともが — 極めて重要であると判じられるところとして— この世界にはある(と先立って申し述べてきた)。

「史上最大の加速器 LHC を用いての LHC 実験にあつては

[ブラックホール(加速器実験の結果、生成される蒸発する安全なものとして強調されている極微ブラックホール)を探索・観測するために供するもの「でも」あると銘打たれている[イベント・ディスプレイ](Event-display)用ツール]

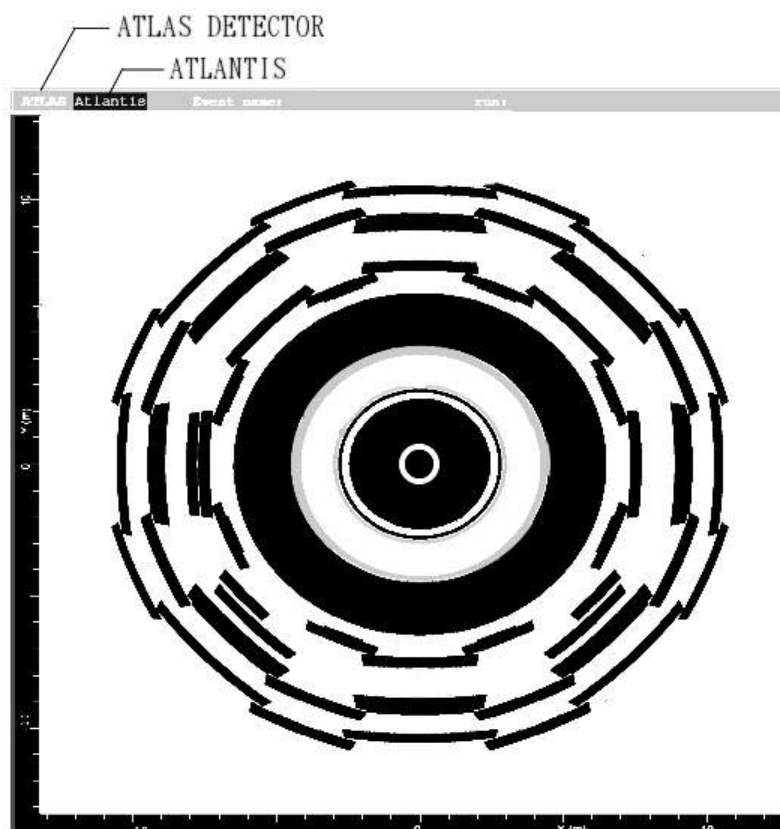
として

[ATLANTIS(アトランティス)という呼称が振られたもの]

が用いられているとのことがある」

「(上にいう)「ブラックホール生成挙動を観測しうる」ものたりうると銘打たれてのイベント・ディスプレイ・ツールたる ATLANTIS のアトランティスという呼称は同イベント・ディスプレイ・ツールが使用に供されての[ATLAS 実験]という実験(およびそこにて用いられる検出器)に付されたアトラスという名称に由来すると当然に解されることとなっている(ちなみに ATLANTIS との呼称に影響を与えたと解されるようになっているとの ATLAS 実験(を執り行う ATLAS グループ)にアトラスと

「この命名を付すとのことが実験関係者らの間で決せられた時期は LHC 実験(のための建設計画)にゴー・サインが出された 1994 年から遡ること 2 年程前の 1992 年のこととなっている)」



上掲図は科学関連の紙誌上、あるいは、オンライン上流通の実験関係者資料でとかくブラックホール生成検出挙動と結びつけて引き合いに出される ATLANTIS のディスプレイ画面を呈示したものである——ディスプレイ上に図のように [ATLANTIS] と表示されている (ATLAS 検出器を指す ATLAS の文字列と並べられての式にて、である)。同ディスプレイ画面は中央部にて粒子の動きが描画され、その周囲には [熱量計計測のエネルギー状況が描画される] との仕組みとなっており、その独特なる動きにてブラックホール生成イベントを指し示している(というのが実験関係者らの申しようである)——。

以上のようなことが史的事実となっているとことがある (委細は実験関係者ら由来の文書よりの抜粋をなしての [出典 \(Source\) 紹介の部 35](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 36-3](#) にて呈示しているとおりである) との中で「**実にもって残念ながら**」次のようなことがある。

『モーリス・ドリールのような神秘主義者由来のアトランティスが蛇の種族の異次元侵略と結びつくとの発想が介在して、加速器実験コミュニティ(の中の LHC 関連の命名規則を決している者達)に 一半面でも世に警鐘を鳴らそうとの意図の下での——命名規則決定がなされたのではないか?加速器 LHC の如きものがワームホール(注:それが潮汐力や放射線放射に耐えうる極微機械を送るポータルになりうるとの見解が、つい最近より科学界にて呈されだしたことを本稿で解説してきたもの)あるいはブラックホールを生成することになりうるとの認識があつて「人間レベルで」色をつけての命名なされたのではないか?』との見解

は成り立たない。というのも、加速器によるブラックホール(そしてワームホール)の生成問題が[肯定的]な論調(安全なブラックホール生成がなされれば特定の理論の適正さが示されるとの意味合いでの肯定的な論調)でもって科学界関係者によって取り沙汰されだしたのは2001年以降——すなわち、アトラスという実験グループ名称が決まった1992年より後のことである——と説明されることを全く顧慮していないがゆえにそうした見解は謬見(錯誤)であろうと判じられるようになっている(：同じくものことについて詳しくは本稿前半部にて摘示の「事実A」から「事実E」に関する内容(出典(Source)紹介の部1から出典(Source)紹介の部5)を伴った内容を参照したうえで、さらに本稿の続いての段でプランクエネルギーにまつわる言われようとの兼ねあいでは何を具体的に解説しているのか(出典(Source)紹介の部18から出典(Source)紹介の部21-2)を含んでの箇所などで何を具体的にどう解説しているのか)確認なせば、よく理解できるようになっている)。

### 長くもなつての振り返り表記はここまでとする

以上、振り返りなしてきたところを見る、

「911の事前言及をなしているとの要素を含むワームホール関連の著作」⇔「蛇の異種族侵略」  
「911の事前言及をなしているとの要素を含むワームホール関連の著作」⇔「当該の著作(BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(1994))刊行より後にワームホール・ブラックホール生成の可能性が現実視されるようになったとの加速器LHC」

という関係性との絡みで(長くもなつての振り返り部に先立って)そちらに注意を向けたこと、

(さらにもつてのその指し示しを本稿にてのより後の段になすところとし)

「911の事件(の予見事物)がヘラクレスの12功業、なかんずく、第11番目の功業と密接に結びついているとのことが「現実にある」」

として、である。にまつわっては

「[911の事件と接合する(と本稿筆者が指摘するところの)ヘラクレス第11功業]に登場するアトラスという神話上の巨人が[アトランティス]と結びついている」

ことが問題になる

という流れが意味をなしてくる。どういうことか。次のような関係性の摘示がなせるようになっているからである。

「[911の発生に対する予見的言及事物ら(この段階ではジ・イルミナタス・トリロジーのことをまずもって例示しているとの予見事物ら)」⇔「アトラス(アトランティス)に関わるヘラクレス11番目の功業との関係性」⇔「アトランティス」⇔「ドリールの神秘的申しように見る爬虫類の異種族によるアトランティスの次元侵略」]

[キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』に見る911の事件への予見的言及]⇔[ワームホールやブラックホールの類を生成しようと「ここ最近になって」認知・認容されるに至ったLHC]⇔[LHC実験にてブラックホール生成がなされるとあいなった場合にそれを検出しようとされる検出器たるアトラスATLAS(ヘラクレス11番目の功業にて登場する巨人)および検出器アトラスと結びつくイヴェント・ディスプレイ・ツールたるアトランティスATLANTIS]

そう、話の平仄・辻褄が合いすぎるのである(同じくものことには本稿にての**出典(Source)紹介の部22**から**出典(Source)紹介の部26-2**を包摂する段で解説を加えてきたとの『フェッセンデンの宇宙』や『スキズマトリックス』といったフィクションを介しての予見的言及のことも問題になる)。

いいだろうか。この身は

[ (その異質性はさておきも) 容易にその通りであると確認できる事実と論拠]

に基づいての指し示ししかなさないようにしている。にも関わらず、上記のような[関係性]の摘示がなせてしまうのである( :いちいち断るまでもないことかとは思いますが、なせて「しまう」と「しまう」付きで表記しているのは偏頗(へんぱ)な個人的主観が介在する余地なきところでそういうことが指摘出来るになっていることに対して[「あまりにも」望ましくはないことである]と受け取られるからである)。

が、などと述べても、である。

話の奇矯性、すなわち、

「911の事前言及をなしているとの要素を含むワームホール関連の著作」⇔「爬虫類の異種族侵略」

「911への言及」⇔「アトラス(アトランティス)に関わるヘラクレス11番目の功業」

「アトランティス」⇔「ドリールの神秘的申しように見る爬虫類の異種族次元侵略」

といった奇態なることらにまつわる奇態なる因果関係を問題としているとのところに起因する話の奇矯性——ほんとうにもってくどくも書くが、「指し示し事項の選択」以外に個人の主観など問題とならぬところにて[特定の作品らに相関関係呈しての記述・視覚的描写が認められるとのこと]をただ単純に問題視しているにすぎないのであるも、とにかくも、響きより「奇態なるところ」としか評しようがないとの話の奇矯性——によってこの身の申しようの重篤性が伝わり難いところか、と思う。

であるから次のことにも言及しておく。

「つい先立って[911の事件の事前言及小説との性質]を帯びていること、そこよりの原文引用をなしながら解説してきた(本稿にての**出典(Source)紹介の部37**から**出典(Source)紹介の部37-5**で相応の前言作品と述べられる論拠を仔細に呈示してきた)との小説たるザ・イルミナタス・トリロジーにあつて「も」  
[アトランティスの爬虫類の種族(人造生命)による侵略]  
との内容が盛り込まれている。

おそらくはより以前から存在するパルプ雑誌掲載小説(既述のロバート・エルヴィン・ハワードのパルプ雑誌ウィアード・テイルズにて初出の小説『影の王国』)の筋立てを意図して踏襲している——小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』の中にはロバート・ハ



ワードの『影の王国』を含むキング・カル・シリーズ以外の他シリーズ作品、たとえば、コナン・シリーズといったものの踏襲設定が見受けられるから現実にそうであろうと述べられる—— からであろうが、具体的には

[有毛人種で溢れていた古代アトランティスに生まれたグルアドという無毛の突然変異の人間が蛇と人間を合成しての蛇人間らを遺伝子操作で作りだしてアトランティスのリベラル派の[侵略]にそれら人工生命を使役した]

との描写が同作品にはなされている(下にての出典表記部を参照のこと)」

---

## 出典(Source)紹介の部 38



# SOURCE

## 38

ここ出典(Source)紹介の部 38 にあつては先行するところとして911の事前言及文物としての特性を帯びていることについて出典に依拠しながら解説したとの70年代ヒット小説、『ジ・イルミナタス・トリロジー』が

[蛇人間によって往古アトランティスが侵略された]

との[設定]を伴っていることの典拠紹介をなすこととする。

上記のことについての出典を挙げる。

(直下、邦訳文庫版『イルミナティII 黄金の林檎』208ページより引用をなすとして)

---

「若い(百歳の)科学者グルアドが同僚のガオ・トウォーネに生物学的実験を見せている実験室へと画面が移った。その実験は、水棲の巨大な蛇人間だった」

---

(引用部はここまでとする)

(続いて、直下、邦訳文庫版小説『イルミナティII 黄金の林檎』215 ページより引用を  
なすとして)

---

「緑色でうろこ状の皮膚をもち、長い黒マントと緋色の羽飾りがついた頭蓋帽姿をした人間に似た生き物の一団を見せて、蛇人間と紹介した。アトランティスの人々には、見境のない激情に駆られない限り殺しをしないという本能的な抑制機能のようなものが備わっているから、グルアドは爬虫類の中で最も頭がいいと判断した蛇から合成ヒューマノイドを作り出したのである」

---

(引用部はここまでとする)

(加えて、直下、邦訳文庫版小説『イルミナティII 黄金の林檎』218 ページより引用を  
なすとして)

---

「突然、蛇人間の一群がリス・ヴェルカーの手下に攻撃を仕掛けて、数人を殺した」

---

(引用部はここまでとする —※— )

(※リス・ヴェルカーというのは性質が悪い小説『イルミナティII 黄金の林檎』にはアトランティス文明の穏健派科学者であったという描写がなされている存在である。通例、現実の世界の伝承理解では[リス]とくれば、蛇女のようなものを指すというのが一般的理解であるところを、である)

なお、オンライン上のアーカイブサイトなどから現行、ジ・イルミナタス・トリロジーの原著を全文ダウンロード可能となっているが、そちらにての本段で訳書より引用なしていた箇所該当するところは下に引用するとおりのものとなる。

( The Illuminatus! Trilogy BOOK#2 : The Golden Apple (にての THE SEVENTH TRIP, OR NETZACH の部)より原文引用するところとして)

---

Then he shows them a group of manlike creatures with green, scaly skin, wearing long black cloaks and black skullcaps with scarlet plumes. These he calls his Ophidians. Since At-lanteans have a kind of instinctive check on themselves that prevents them from killing except in blind fury, Grudad has developed these synthetic humanoids from the serpent, which he has found to be the most intelligent of all reptiles. They will have no hesitation about destroying men and will act only on Grudad's command.

---

(原著よりの引用部はここまでとしておく —※— )

(※表記引用部の和訳表記は(再度、訳書の内容を引くとして)“緑色でうろこ状の皮膚をもち、長い黒マントと緋色の羽飾りがついた頭蓋帽姿をした人間に似た生き物の一団を見せて、蛇人間と紹介した。アトランティスの人々には、見境のない激情に駆られない限り殺しをしないという本能的な抑制機能のようなものが備わっているから、グルアドは爬虫類の中で最も頭がいいと判断した蛇から合成ヒューマノイドを作り出したのである”とのところとなる —— さらに原著にあつての文献的事実の有無の効率的確認方法についてであるが、(インターネット・アーカイブのサイトなどより継続ダウンロード可能ならばそれをなして)、該当ウェブ文書より表記の英

文テキストが記載されている部 を ctrl キーおよび f キーの同時押しで検索するか、あるいは、検索エンジンに直に表記の英文テキストを入力、そのとおりの文章表記部が存在しているか チェックすることで確認がなせるようになってい — )

以上をもって内容呈示を終えるが、ここで問題視しているのナンセンス (nonsense) と受け取られよう小説の内容それそのものではなく、相応の作品にそういう記述 — アトランティスに対する蛇の種族の侵略の話 — が認められるという [文献的事実 (philological truth) の問題] である。

(出典 (Source) 紹介の部 38) はここまでとする)

加えて、である。

表記の小説 (ジ・イルミナタス・トリロジー) には

[太古のアトランティスのペンタゴンと現在のアメリカのペンタゴンに封じられた怪物 — 劇中、ヨグ・ソートないしロイガーと呼称される怪物 — が解放され (太古と現在にてそれぞれペンタゴンが爆破されて解放されて)、別空間より人間の魂を侵食して喰らいます]

などとの [設定] が — より以前より存在していたクトゥルフ神話と呼ばれる荒唐無稽なフィクション・ホラー体系を踏襲するとのかたちにて、ながら (そも、ヨグ・ソートであるとか、ロイガーというのはクトゥルフ神話体系と呼ばれる 20 世紀アメリカの一群の作家らが作り出したホラー体系に登場する怪物の名前ながら) — も認められるとのことがある (下の出典紹介部を参照のこと)。

出典 (Source) 紹介の部 38-2



SOURCE

38-2

ここ出典 (Source) 紹介の部 38-2) にあっては先行するところとして 911 の事前言及文物としての特性を帯びていることについて出典に依拠しながら解説したとの 70 年代ヒット小説、『ジ・イルミナタス・トリロ

ジー』が

[ペンタゴン倒壊による次元侵略]

との[設定]を伴っていることの典拠紹介をなすこととする。

欧米で70年代にヒットした小説が遅まきにといつたかたちで2007年に訳書として刊行されたとの集英社文庫版『イルミナティII 黄金の林檎』より（「一見にしては荒唐無稽な内容の作品の荒唐無稽な記述であることを百も承知のうえで」）上のこと、[ペンタゴンが崩され、魂を喰らう異次元よりの介入存在（別の銀河系に由来するともされる存在）が解き放たれた]との表記部を引いておく。

(直下、文庫版小説『イルミナティII 黄金の林檎』214ページの原文引用を  
なすとして)

---

「魂を喰らう別の銀河系のその奇怪なエネルギー体に自由を与えることにしたのだ。ヨグ・ソートは、大陸南部の荒涼とした原野にあるアトランティスの大五角形（ペンタゴン）に閉じ込められていた」

---

(日本国内書店で広くも流通を見ている訳書よりの引用部はここまでとする  
—※—)

(※尚、オンライン上より確認できるところの原文表記は The Illuminatus! Trilogy The Golden Apple (の THE EIGHTH TRIP, OR HOD の部) にあつての “ He and his associates decide on a desperate expedient. unleashing the lloigor Yog Sothoth. They will offer this unnatural soul-eating energy being from another universe its freedom in return for its help in destroying Gruad's movement. Yog Sothoth is imprisoned in the great Pentagon of Atlantis on a desolate moor in the southern part of the continent.” との部となる)

(直下、文庫版小説『イルミナティII 黄金の林檎』223ページから225ページより掻い摘まんでの引用をなすとして)

---

「アトランティスの人々が恐怖の古代生物ヨグ・ソートを勇気と知恵でとらえた五角形の仕掛けは、驚くべきことに大災害に遭っても無傷だった。ヨグ・ソートが入れられたペンタゴンはほとんど人が住まない南部の平地にあったため、災害を切り抜けた人々が移住して中心地となった。…(中略)…ペンタゴンの壁に沿って男も女も列を作って歩かされ、レーザーで焼き殺された。それか死体の山に装薬が仕掛けられると、マスクをかぶった制服姿の破れざる環は引きあげていった。連続して爆発が起き、ぞっとするような黄色い煙がとぐろをまいた…(中略)…廃墟となったペンタゴンの周辺の柔らかい土の上に、巨大な鉤爪の痕が現れた。…(中略)…生き延びた避難民らは、叫びながらちりぢりに逃げた。小麦を刈る大鎌のように、集団で逃げる人々を死が巨大な弧を描いて刈りとっていった。…(中略)…姿形も手足の数もはっきりしない赤みがかつた巨大な影が、勝ち誇ったようにその場に立ち尽くしていた。…(中略)…グルアドと破れざる環がペンタゴンの崩壊とアトランティス人の大虐殺を見つめていた。…(中略)…「これまで多くの者がわたしを利用しようとしてきたが、味方になった者は一人もいない。そなたの魂のために特別な場所を用意したぞ。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※— )

(※以上引用部では [古代アトランティスにあってペンタゴンに封じられていた(別銀河に由来するなどされる)異次元介入妖怪が古代に施された封印より解き放たれた] との [設定] が採用されていることが見てとれるようになっている。そして、そちら設定が当該小説の後の段にあっての「アメリカのペンタゴンが爆破された後に(同様の)怪物が解放される」との筋立てと陸続とするような格好となっている。尚、ここにの引用部のオンライン上より確認できるところの原文表記は The Illuminatus! Trilogy BOOK#2 : The Golden Apple(の THE SEVENTH TRIP, OR NETZACHM の部)にあっての “ Being on the southern plain, which was relatively uninhabited, the Pentagon of Yog Sothoth becomes the center of a migration of people who survived the disaster.[ . . . ] Lines of Atlantean men and women are marched to the walls of the Pentagon and there mowed down by laser fire. Then explosive charges are placed amid the heaps of bodies and the masked, uniformed men of the Unbroken Circle withdraw. There is a series of explosions; horrid yellow smoke goes coiling up. [ . . . ] Then the piled-up boulders of one side of the wall fly apart as if thrust by the hand of a giant. An enormous claw print appears in the soft soil around the ruins of the Pentagon.[ . . . ] Gruad and the Unbroken Circle watch the destruction of the Pentagon and the massacre of the Atlanteans.[ . . . ] At this the face of EVOE, a young priest, takes on a reddish glow and a demoniac look. There is more than a hint of possession. "It is good to hear you say that," he says to Gruad. "No man yet has befriended me, though many have tried to use me. I have prepared a special place for your soul, oh first of the men of the future." ” となっている)

(直下、邦訳版『イルミナティ III リヴァイアサン襲来』120 ページより(出典 (Source) 紹介の部 37-2 の段にて抜粋なしたところよりの)「再度の」原文引用をなすとして)

---

ワシントン時間で午後五時五五分に、一連の爆発によりペンタゴンの三分の一が破壊され、いちばん内側の中庭からいちばん外側の壁まで、四重の環状構造がずたずたにされた。

---

(訳書よりの引用部はここまでとする —※— )

(※尚、オンライン上より確認できるところの原文表記は The Illuminatus! Trilogy BOOK#3 : LEVIATHAN(の THE NINTH TRIP, OR YESOD の部)にあっての “ In any case, at 5:55 P.M., Washington time, a series of explosions destroyed one-third of the river side of the Pentagon, ripping through all four rings from the innermost courtyard to the outermost wall.” との部となる)



ヴォルフガングは周囲で勃発していた戦闘の音を忘れた。「おまえ、いつの間に? どうやって抜けだした?」相手の声は砂礫層から浸みだしてくる原油のようにわきあがり、また石油と同様、化石時代のものだった。南極がサハラ砂漠のなかにあり、頭足類が最も進化した生命の形だったころ、この惑星に現われた生物の声だった。「どうやったかなどどうでもよい。わたしはもはや幾何学には縛られない。わたしは出で訪れ、わたしは魂を食った。長い年月おまえたちに与えられてきた粗末な原形質ではない。生きのいい魂だ」「何ということだ、それがおまえの感謝の仕方か?」ヴォルフガングはくっつかかった。少し低い声で彼はヴェルナーにいった。「護符をさがすんだ。ソロモンの印とイモリの目で封印された黒いケースに入っていたはずだ」そしてヴィルヘルムの肉体を乗っ取っている存在に向かっていった。「ちょうどよい時にきたな。ここでこれから大量の殺しがはじまる。魂もたくさん食べられるはずだ」「このあたりの者たちには魂はない。奴らには見せかけの命しかない。それを感じるだけでもおぞましい」ヴォルフガングは声をあげて笑った。「ロイガーでも嫌悪感を抱くことはあるというわけだ」「わたしは何百年もの長い間、おまえたちに次から次へと五角形のなかに封印され、生きのいい魂ではなく粗末な保存エキスを与えられて、うんざりしていた」

(訳書よりの引用部はここまでとする —※— )

(※ここでの引用部は[アメリカのペンタゴンが爆破された後、[古代アトランティスのペンタゴンに封印されていたのと同様の存在ロイガー]がそこより解放され、(異次元より介入しての)不可視の憑依靈感の存在として人間の魂を食さんとした]とのことが描写されているとの部となる。また、オンライン上より確認できるところの原文表記は The Illuminatus! Trilogy BOOK#3 : LEVIATHAN (の THE NINTH TRIP, OR YESOD の部) にあつての “ Wolfgang forgot the sounds of battle that raged around him. / "You! Here! How did you escape?" The voice was like crude petroleum seeping through gravel, and, like petroleum, it was a fossil thing, the voice of a creature that had arisen on the planet when the South Pole was in the Sahara and the great cephalopods were the highest form of life. / "I took no notice. The geometries ceased to bind me. I came forth. I ate souls. Fresh souls, not the miserable plasma you have fed me all these years." / "Great Grud! Is that your gratitude?" Wolfgang stormed. In a lower voice he said to Werner, "Find the talisman. I think it's in the black case sealed with the Seal of Solomon and the Eye of Newt." / To the being that occupied Wilhelm's body he said, "You come at an opportune time. There will be much killing here, and many souls to eat." "These around us have no souls. They have only pseudo-life. It sickens me to sense them." / Wolfgang laughed. "Even the lloigor can feel disgust, then." / "I have been sick for many hundreds of years, while you kept me sealed in one pentagon after another, feeding me not fresh souls but those wretched stored essences." ”との部となる)

(以上、長々と引用なしたところで —裏 を取ることをきちんとしたいとの向きを想定して— 原著テキストの簡便なる内容特定方法について「再

度」、言及しておく。インターネット・アーカイブ Internet Archive のサイトなどより継続して原著が閲覧可能であり続けるようになっているのならば、そちら原著公開ページを閲覧、ctrl キーおよび f キーの同時押しでブラウザ(ウェブ文書閲覧ソフト)の検索機能をオンにしてブラウザの検索窓に上の引用テキストの一部を入力するとこのやり方で [文献的事実] の有無の確認がなせる(瞬時に該当部テキストにとぶ)。また、より容易な確認方法としてはグーグル検索エンジンに直にここでの抜粋英文テキストをセンテンス単位で入力、そのとおりの文言を含むパートが表示されてくるか確認するといった方法もある)

(出典(Source)紹介の部 38-2 はここまでとする)

---

以上、取り上げたような記述 —— [古代アトランティスにてペンタゴンが崩されて異次元を介して介入してくるとの別銀河系に由来する存在が解き放たれた] といったフィクション内容を体現しての記述 —— が認められるのは

[911 の事件の事前言及作品]

どの作品性質に鑑みて、一笑にふせるものではない (:につき、(他にもヘラクレス 11 功業と結びつく式での類例があるとの) [911 の事件の事前言及小説] との側面さえなければ、より以前から存在していたフィクション (既述のロバート・ハワード小説『影の王国』やクトゥルフ神話 (Cthulhu Mythos) と呼ばれる一群の物語の類型に含まれる荒唐無稽なホラー作品ら) よりもただの文化伝播で話を済ませたかも知れないのだが、小説に伴う不快な側面よりそうした見立てで済ますのが適切であるとはおよそ判断させないところがある)」

---

※長くもなるも、の補足として

細々とした指摘をなしている中でも述べておくが、筆者は「爬虫類人が異次元侵略をなさんとしている」などということ[印象論] —— ついでに述べれば「荒唐無稽極まりない」馬鹿話ともとらえられよう —— などとして取り上げ、かつ、それを「専らに」問題視したいの「ではない」。

そもそも、我々の世界に [コントローラー] (操作者) が介在しているとの仮定を置いたうえでもその [コントローラー] が爬虫類人というものかを直に断じるのに有用な、そう、決定的に有用な [直接的証拠] (いいだろうか、そこらじゅうにそれ相応のものが認められるとの [間接的証拠] (部分的に先掲) ではなく [直接的証拠] である) が我々人類の眼前には「ない」ととらえていることもある。

に関してはネット上にて

「爬虫類人が「物理的実体を伴って」我々の間に[「直に」入り込んでいる]ことを示す証拠映像である」

などとまるで鬼の首をとったように強弁している、[爬虫類人に「変身」する人間の写

真]といったものを持ち出し強弁しているとの「相応の品性の」一群の者たちも存在している —— 国内外で事実、目立たせられているところとして存在している—— わけだが(同じくものことを想起している向きも当然にいたのであろうが、筆者なぞもそうした[やりくち]を目にして二〇〇四年に封切られて大こけした邦画、実写版『デビルマン』の劇中にみとめられる[悪魔側の手先による騙されやすき人間を焚き付けての人間の間不和を煽る計略(離間工作)][無知にして、かつ、視野角も狭く社会のことがよく分かっていないとの人間に物事の本質を見誤らせる計略]のことを当然に想起させられもしている)、この社会をよく見知っている(つもりである)人間として本稿筆者はそうした映像撒布者らが呈示している映像形式の証拠なるものを[真正なもの]として容れていない —— 相応のマス・メディアが相応の手合いらを出演させて相応の[未確認飛行物体]目撃談義といった[わざとらしい芝居(人形劇)]を展開させていることと同文の力学が介在しているのであろうととらえている—— (鬼の首をとったといったかたちで"証拠"を提示している人間らの[品性;人間性・人品]の問題「だけではなく」呈示されているものらの[品質]も当然に問題視しながら、である)。

その点、[文献的事実](世界中に歴年、写しが流布され、同様に歴年、その内容に対する甲論乙駁がなされてきたとの古典、オンライン上のアーカイブサイトでも全文確認できるとの古典に特定の内容が表出を見ているといった記録的事実)などと異なり、写真・映像の類なぞは容易に加工(捏造)できる —— (実写映像でもコマ割りしてコマ毎に簡単に改変がなせることはある程度の動画編集の経験がある人間ならば「すぐに分かる」とのものである)—— 。 といった中で人間性が腐敗しているとの操り人形・傀儡くぐつを用いて[「捏造しての」爬虫類人に人間が変身する映像]なるものが「撒布」されるとのことがなされているのであるとすれば、その

[背景意図]

「も」容易に想像がつく。

そう、繰り返しとなるが、

[現実の問題になることを韜晦(とうかい、はぐらかし)しつつ、不信や軽侮による分断の機序で抵抗力を弱めるとの意図]

につき容易に想像がつくとのことがある (:などと述べれば、「我々の間に爬虫類人が物理的実体を伴って紛れ込んでいる」といったことを主張している相応の[直接介入論者](あるいは印象操作のために使役されている類)によって「あいつは爬虫類人(ないし彼ら流の話法たる[悪魔の血流]か)であるからそうしたことを述べるのだろう」などとの人格攻撃を食らうことになりかねないか、とも思うのだが、筆者はそのような存在ではないし、そうした存在の薬籠中のものでもないこと、断っておく。また、筆者は爬虫類人と表されている存在らが( [ラジコンと化さしめられた人間]を科学的手法にて操るとの「間接的な」レベルを越えては)この世界に直接的に介入できるとも現行考えていない人間となるとも重ね重ね断っておく)。

そして、容易に背景意図の推し量りがなせるとの露骨な[情報操作](検索エンジンを手繰れば、[どういうわけか、そういうものばかりが目につくようになっている]ことが分かりましょうとの[[人間が爬虫類人に変身した]であるとか[爬虫類人がアセンションによって駆逐される]であるといった「神秘主義的な」申しようを前面に出し、同じくものことにまつわる不信の根、あるいは、軽侮・軽快の念を助長しているように見受けられるやりよう]をしてここでは露骨な[情報操作]と述べている)の背景意図が行き着く先にあって「何が」「具体的に」「いかように」

存在しているのか、膨大な論拠を挙げて呈示・訴求せんとしているのが本稿である——※この世界に[爬虫類人]（ここでは陰謀論者ら由来の意見を踏襲して述べておこう）が仮に「実体を伴って」侵入しているのならば、そう、[操り人形となった人間の神経系統を支配している][神経系統に働きかける幻影を見せる]との意味合い「以外」で我々の間を[物理的実体]を伴ってそうした存在が闊歩しているというのならば、彼ら爬虫類人と呼称される存在にはわざわざこの世界に「トロイアを「内破」させた木製の馬」といったものを構築する動機など「ない」ことになる（：その者達はすでに我々の間に侵入できるのであるから、[城壁を破るための挙]を試みる必要など「ない」ことになる）。だが、である。「トロイアの木製の馬に「仮託」されるもの」を「遠大な目標」として構築・用意せんとしてきた、そのために人間社会を歪なかたちで構築してきた、そういう文脈に自然に通ずるところの「隠喩的言及」の類が歴年、『「視野角の狭い者」では死ぬまで気づけなかつたよ』との陰險なかたちで執拗極まりなく、そして、非常に複線的なるやり方で（意思表示の「媒質」となった操り人形を動かす機序は不分明ながら）なされ続けてきたとのことが摘示できるようになっている、同じくものことを容赦なくも示す具体的証跡から摘示できるようになっているとこの身は気付くに至っており、現実とその指し示しを膨大な文量を割いて本稿にてなしている（屠所の羊ならぬ生き残るに値する種族の成員をもって任じている、殺されると半ば分かっている状況であるのならば死命を賭して闘う勇気がある、そうした愚劣にも逃げ惑うの是としない向きに対しては、以上のことの「証示」に努めているとの本稿のここまでの段および続く段の検証を切に請いたい）——。

（補足の部の中にあつて付け加えたところの本稿を書き終えてからの「追記」として）

人類社会に対するコントロールが常識では語りきれない存在によってなされているなどと述べれば、「それこそが陰謀論の極致であろう」と[爬虫類人の類による直接介入論]の論者とは別の意味での「相応の」人間らに断じられることか、とは思う（：当然であろう。ちなみに[断じられる]としているが、その[断ずる]との行為に理性・知性に裏打ちされた相手方申しように対する有力反証材料が伴っていないのだとすれば、である。せいぜいそれは(好意的にとらえれば)「アンビリーバボー」といった感嘆詞程度のもの、あるいは、(悪くとらえれば)[理]がない中で[攻撃性]だけは伴っているとの獣畜の鳴き声、知的生命の発するものではない獣畜の鳴き声の如きものにすぎないと見立てられるところである——筆者は人間を獣畜のような[愚劣なもの](狩られ殺されて至当と愚弄されるような存在)にせんとしている機序に挑まんとしている人間としてそれも述べている——)。

以上述べたうえで申し述べておくが、筆者申しようを[陰謀論]であると理性的に判じたいとの向きに対して筆者は

「本稿では(冒頭部より そうであると明示しているように)指し示し対象に対しては「一対一で」根拠となるところを「網羅的に」呈示している。であるから、成敗してやろうとの心境でもいい、批判をなしたいとの向きは[指摘⇔論拠]の対応関係に[飛躍][錯誤]の類がないか、また、各[指摘]の間に[飛躍]

がないか、そこから事実 ベースとして検証いただきたい」

と強くも言明しておく。

上のような [検証] を経ての批判によってこそ ([理] もなく攻撃的なだけであるとの下等な獣の鳴き声といったレベルを越えてのものとして) 筆者申しように対する陰謀論か否か の明言がなせるところであると当然に主張するところである。

尚、検討なすべき者に検討を求めているとの本稿にあってはその [過半] にあって

「自動車免許の筆記試験に受かる程度の知的水準を有していれば、理解なせようところであろう」

とのことしか述べていないつもりだが、でありながらも、極一部、[知識] のない者を斥けてしまうような部を含めもしている。具体的には本稿末尾にて [付録と位置付けての部] として付すことにした [確率計算の部] (ベイズ推定を特定の事象切り分けアルゴリズムに基づいてなそうとの部) である。

同部だけは ([大学理系教育での数学的知識と確率論に関する知識を持った者ならばすぐに理解できるところを高校生レベルの話に相当程度落とし込んでの話] をなす中で) [知識] がないとの向きを斥けるような話をなすこととなりもしている (計数的な訴求をなすのにはそうする以外にないと苦渋の決断をなした)。

だが、といった「半ば」テクニカルなる部 (といっても高校生の数学知識で理解できるように努めている部でもあるが) は事前にそういうものであると断ってなすところの例外となるところであり、残余の過半の部、そちらこそが本筋であるとの部にては知識無き者を斥けるような話を一切なしていない。

神話伝承や現代の科学理論にまつわるあれやれこれやに関する [専門的な知識] を含むところではその知識にまつわる説明を (原文引用なしながらも) 都度、細やかになしながら、

「 [事実] に基づいての指し示しである」

「 [ [事実] の集積より導き出せる多重的相関関係の摘示] に基づいての指し示しである」

と誰でも分かろうとのかたちに落とし込んでの立論に努めている — 筆者は [事実] および [[事実] の集積より導き出せる多重的相関関係の摘示] に基づいての指し示し「ではない」との話を本稿の中で時になしもすることがあるが、といった部では「これは筆者個人的意見であるが」「これは仮説あるいは筆者の主観が先行した外れなことを述べている可能性ありの推測 (スペキュレーション) の話となるが」「脇に逸れての行き過ぎの話となるが」との断りをなすことに努めている。たとえば、である。(ここでの話が後にて付した [追記部] であるから書くことだが) この世界で人間存在をコントロールする機序が存在すると [仮定] して、その機序はどういったものと考えられるのか、そういう話をなさんとする際には「これは人の身では真実であるか判断しようもないとの仮説としての話だが、」と断つての話をなすに留まっている (: につき、本稿がひたすらに重んずるのは客観的に摘示でき、そして、誰でもそのとおりでであると認識で



きるとの[現象]であり、[現象の集積より導き出せる事実関係]であって、[現象の背後にある機序]ではないわけだが、[現象の背後にある機序]の問題について考えられるところを何ら言及しないのもどうか、との観点から、[仮説]としてながらもそうしたこと、[人間存在のコントロールがなされているとして、そのための手段にまつわる]ところの機序はいかなものと考えられるか]との問題についても取り扱うこととしている(追記の中の追記として:例えば、本稿にての**出典**(Source)紹介の部 87(2)の段の部などがそうである)——)。

(本稿をあらかじめ書き終えてから付しもした「追記部」はここま  
でとする)

さて、上にては

「爬虫類人なる存在が我々の世界にダイレクトに干渉しているとの直接的証拠は(現行、目につくところでは)存在していない。その直接的証拠と主張されるものらについては検証するところ、紛いものの臭いがつきまとう」

とのことを申し述べたが、誤解を恐れずに敢えても申し述べれば、

「爬虫類人「的なる」存在が我々の世界に対する操作を外側から施してきたことを疑わせる[間接的証拠]と見えるものは山積している(その点、偶然性が否定される、恣意的やりようが認められると本稿で指し示さんとしているその恣意性ひとつとっても操作の片鱗を示すものであると強調したい)。そして、そうしたこと、直接証拠ならずとも間接的な形で指し示されることが過去の問題ではなく、今後の問題に関わるとの判断がなせるために、その奇怪性を訴求するのは有為か「とも」考えている」

とのことが筆者意中となっている。

相応の人間、ネット上に[子供騙しの愚劣な媒体]をノイズ、まるで煙幕を張るように縦横に展開しているとの向きら、なかでも、[愚劣さ]・[他を犠牲にしての自己保身の心根]などが際立っているとの相応の人間「ではない」との人間らが本稿をまじめに検討すれば、この身が上のような申しようとの絡みで何を問題視しているのか、履き違えることもないとは思うのであるが、とにかくも、述べるところとして、である。

ここまででもって筆者は「爬虫類人が異次元侵略をなさんとしている」などということ[印象論]——ついでに述べれば「荒唐無稽極まりない」馬鹿話ともとらえられよう——などとして取り上げ、もって、専らに問題視したいの「ではない」とのことまつわる補足を終えておく。

---

(きちんと本稿の内容を検討されている向きであれば、話のくどきことに食傷している御仁もいるかもしれないとも思うのだが) 振り返りもすれば、

[[爬虫類の種族によるアトランティスに対する次元間侵略]を筋立てとする一見にして神秘家由来の妄言と受け取れる言辭(より従前から存在していたところの pulp 小説『影の王国』の内容を「特徴的な文言込みで」窃用している、

アトランティスという伝説上の存在にまつわるあからさまな捏造史観を持ち出している、それがゆえもあって妄言と推し量れるところのモーリス・ドリールという神秘家由来の言辭)が大戦期近辺にて具現化していたことが(「一見にしては」妄言にすぎないと受け取れもするところなのだが)気がかりなこととしてある]

「アトラス・アトランティスという呼称はブラックホールやワームホール生成をなすとされるに至った加速器実験にあっての命名規則でも用いられているものである」

「古にて[アトラス]との名の王に戴いていたとの話が(プラトンのギリシャ期古典を介して)伝わるアトランティスだが、伝説の巨人の方の[アトラス]と関わるヘラクレス功業が(計にして12ある功業のうちの)ヘラクレス第11功業となる。そして、ヘラクレスの第11番目の功業が九一一の事件の先覚的言及文物と「奇怪に」通じているとのことがある(：本稿では「取りあえずも、」とのかたちで小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』にみとめられる同じくもの特性につき例示をなしてきた——ヘラクレス第11功業にて取得対象となっていた[黄金の林檎]をタイトル副題に冠する作品であり、[古代アトランティスに対する蛇人間を用いての侵略]や[古代アトランティスおよび現代アメリカのペンタゴンの崩落による異次元介入妖怪の復活]をモチーフとしているとの「一見する限りは、」の荒唐無稽作品でありながらも[九一一発生の先覚的言及文物]となっているとの作品たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』を引き合いに[九一一の発生の先覚的言及事物とヘラクレス功業の記号論的關係]について一例摘示をなしてきた——)」

との各事項がより先立って詳述なしてきた  $\alpha$ . から  $\gamma$ . と振ってのこらの内容——[911の先覚的言及事物][次元間侵略サブカルチャー作品][ブラックホール・通過可能なワームホール関連文物][加速器関連文物]が[爬虫類の異種族の来訪・来寇]を多く共通のモチーフに相互に結び付き合っているとのことを[文献的事実]の問題として指摘しているとの部の内容——に通ずるところとなっていることについて噛み砕いて詳述し、かつ、その意味性を問うてきたというのがこここれに至るまでの内容である。

以上、振り返ったうえで、である。次いで、紙幅にして相当量に及んでいたところの直近までの段——小説作品『影の王国』に端を発しているようにも見えるとの「アトランティスに対する侵略」というモチーフがいかようにして「記号論的に」加速器の問題と接合するかの解説などを試みてきたとの段でもある——の内容と

「アトラス」  
「アトランティス」  
「ヘラクレス」  
「トロイア」

の各要素ら——本稿にてのより先立っての段にて「本稿にて摘示したき関係性の核をなすところ」であると申し述べていたとの各要素ら——とを結びつけるだけの事柄らが他にも複層的なかたちで存在している、そのことを煮詰めるべくもの話をこれより展開していくことにする。

・ **Atlantis**

・ **Atlas**

・ **Troy**

・ **Heracles**

本稿にての重要訴求事項に「梁」として関わるのが上記要素ら、巨人 Atlas アトラス、ギリシャ神話の英雄 Hercules ヘラクレス、往古海底に没したとプラトンの手になる古典 (Timaeus『ティマイオス』) に言及される Atlantis アトランティス、そして、今日の欧州文明の源流となっているギリシャ古典 (後述の Iliad『イリアス』および Odyssey『オデュッセイア』) にてその破滅に向けてのありようが言及される「木製の馬で滅せられたトロイア」であると先立って言及してきたわけだが、これ以降の部では、うち、「アトラス」「アトランティス」「ヘラクレス功業」について (既に極部分的なる言及をここまでにてなしてきた——さらに続いての膨大な典拠呈示 によって完全な指し示しにもっていくためのいわば足がかりとしての極部分的なる言及をここまでにてなしてきた—— との) それら要素らについてさらに一歩進んで何が述べられるのかの解説をなしていくこととする。

具体的には以降の段では

---

「アトラス」  
「アトランティス」  
「ヘラクレス」  
「トロイア」

にあつての

「アトラス」  
「アトランティス」  
「ヘラクレス」

との各要素らが (上記要素らにあつての) 他要素としての「トロイア」と多重的・複線的に結びつくようになっており、そのことがまた、

「ブラックホールを生成すると主張され、その可能性が科学界にて認容されるに至ったとの LHC」

とも関わるようになっている

---

ことにまつわる解説 (にして「証して」「示す」との「証示」) を膨大な紙幅を割いてなしていくこととする。

それでは「まずもって」上のことについて I. から V. と振っての流れでの指摘をなしていくこととする。

# I.

既に述べもしたこととなるが、

「LHC 実験、その参加グループの中には[巨人アトラス]の名を冠するディテクター(検出器)を用いているとの研究グループ、ATLAS グループが参与しており、彼ら ATLAS グループが LHC 実験にてブラック・ホール生成・検出をなしうるとの資料を目立って公にしている」

との経緯がある。

(:疑わしきにおかれては [ LHC,ATLAS, Black hole ] などとあわせて入力の上、グーグル検索エンジンで検索されてみるとよい。によって、表示されてくる研究機関論稿 (PDF 研究論文や学界関係者も含めての身内向けプレゼンテーション資料など) から上の申しようが適切なること、ご理解いただけるか、と思う。その点、CMS などの LHC を構成する他検出器に携わるグループにもブラックホール探索に重きを見出している人間が包摂されること、筆者は聞き及んでいるも、(本稿の先の段(出典 (Source) 紹介の部 35 を包摂する段)でも述べたことを繰り返すが)、その伝での探索活動、ブラックホール探索活動との絡みで目立つのは

[アトラス・グループの関係者らの資料]

[ATLANTIS のことが引き合いに出されての資料]

である(ひとつに英文 Wikipedia [ ATLAS experiment ] 項目にあって現行、“Rather than focusing on a particular physical process, ATLAS is designed to measure the broadest possible range of signals.”「特定の物理的プロセスに注視するというよりも ATLAS 検出器は最も幅広い幅のありうべき兆候を計測するようにデザインされている」と記載されているような事情に因るところのことか、とも解されるところとして、本稿の先の段出典 (Source) 紹介の部 35 でも言及し、また、本稿のすぐ後の段にても再度問題視する所存であるとの [イヴェント・ディスプレイ・ツール ATLANTIS] と [ATLAS によるブラックホール探知可能性] が紐付けられているとのことがよく見受けられると

のことがある)。

につき、

『欧州に出張している国内の研究関係者らが多く関わっているのがアトラス実験グループであるため(オンライン上に流布を見ているアトラス「日本」グループ関係者由来の資料(『「ヒッグス粒子」の発見と日本の貢献』と題された資料・表記タイトル入力で同定・ダウンロードできるとの資料)にも昨今平成 24 年 3 月の時点で国内 104 名の研究者・大学院生が CERN の [ATLAS グループ] に関わっているとの表記が認められるところである)、その伝でのバイアス、日本に固有なる検索エンジン検索結果に依存しているとのバイアスかかってアトラスが強くもブラックホールと結びつくとの物言いなしているのでは?』

との異論を招いても詰まらぬと思うので申し述べておくと、同様のこと、[ATLAS グループの資料にブラックホール生成関連のトピックが強くも見受けられるとのこと] については英語にて関連英語媒体を特定すべくも諸種キーワードで検索エンジンを動かして「も」同じくものことが見てとれるようになっている)

# II.

実験関係者らによって

「ブラックホールが観測される測地点としてはその検出器が挙げられる」

などと言われている加速器 LHC を構成する ATLAS 検出器 (正式名称は A Toroidal LHC Apparatus) がその名を踏襲している巨人アトラスというのは古典字面、そちらに見受けられるとの文献的事実の問題として

[トロイアを滅ぼした戦争の原因となっている [黄金の林檎] の在り処を知ると神話が語る  
巨人の名前]

となっているとことがある —— (巨人アトラスがトロイア崩壊の原因となった黄金の林檎の在り処を知る巨人であるとのことは下にの [出典 \(Source\) 紹介の部 39](#) を参照いただきたい。ちなみに、本稿冒頭の部にあつての [出典 \(Source\) 紹介の部 1](#) および [出典 \(Source\) 紹介の部 2](#) を包摂する解説部、そちらにあつて [事実 A] から [事実 B] とのかたちで分類していた各事実を摘示していた折に詳述なしにしているように「1999 年」に出された加速器実験機関由来の公式安全報告書では「フォー シバブル・フィーチャー (予見可能な未来) の問題として [今後ありうべき加速器によるブラックホール生成] などは観念されるところではない。そのようなことを問題視した人間 (ウォルター・ワグナー) の申しようはパイプ・ドリームが如きもの (麻薬中毒者がパイプ越しに見る夢が如きもの) である」といったまとめようが「文献的事実」の問題として (物理学界をリードする学者らによって) 文中なされているとことがある。といった実験機関および科学界を牽引なしにしている者らの申しようが「2001 年」より [変節] を見た、1998 年より提唱されていた余剰次元 理論 (ADD モデル) にまつわる理論動向の変遷がゆえに [変節] を見たとすることがあり (事後の実験機関公式報告書や海外の法学者論稿の内容を引きながら [出典 \(Source\) 紹介の部 2](#) にて解説なしにしていることである)、それがために、ブラックホール生成可能性が「肯定的に見られるようになったとことがある。そのように 2001 年より [ありうることだ] と [変節] のうえで研究機関によって認められるようになったとのブラックホール生成可能性なのだが、といったなかでブラックホールを「中途より」観測することになりうるとされるに至ったのがここに引き合いに出している ATLAS 検出器というものである。そして、本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 36 \(2\)](#) で CERN サイドの解説ドキュメントを引き合いにして紹介するように ATLAS 検出器の [ATLAS] の名称はかなり前より定まっていたものとなる。ATLAS の名称はまだ LHC 実験計画の開始が正式に認可さえされていなかった (LHC 計画が LEP を引き継ぐものとして正式に認可されたのは 1994 年である) 折たる [1992 年] よりきたるべき LHC に供される [ア・トロイ] ダル・エルエイチシー・アパラタス A Toroidal LHC Apparatus (環状 LHC 装置ユニットといった呼称) の略称としてその名が決していたものであると CERN サイドより発表されているものとなるのである (timeline.web.cern.ch とドメイン名が固有に付されての CERN ウェブサイトで “ATLAS and CMS collaborations publish **letters of intent 1 October 1992** The Toroidal LHC Apparatus collaboration propose to build a multipurpose detector at the LHC. The letter of intent they submit to the LHC Experiments Committee marks **the first official use of the name ATLAS**. Two collaborations called ASCOT and EAGLE combine to form ATLAS.” (訳として) 「ATLAS および CMS コラボレーション (共同企画面々) が 1992 年 10 月 1 日付けで取決め書を発する: Toroidal LHC Apparatus コラボレーションの面々は LHC にあつて多目的に機能する検出器を建設するよう提案した。そこに彼らが LHC 実験委員会に呈示してきた設立覚書にて初めて



[ATLAS] という名の使用が公的に現われていた。初期の ASCOT および EAGLE と呼ばれていたコラボレーションの面々が ATLAS という名称を形成するようなかたちで融合なすに至ったのである」と表記されているとおりである)。そうもして「1992 年」に命名がなされていた ATLAS、「ヒッグス粒子の発見を含む未知の物理事象を探求するとの名目で推し進められることになった加速器実験の目」となるとの同検出器が 10 年近くを経て「ブラックホール生成を観測する目」ともなりうると見做されだしたとのことになっている（何故、そのようなことをくぐぐと言及しているかだが、「[トロイア崩壊の原因となったとの黄金の林檎]（直下、出典紹介）の所在を知る巨人アトラスの名をしてブラックホール探索と結びつける意図が [ブラックユーモア] あるいは [半面での善性の発露] として「[人間の]実験関係者」らにあつて採択されたとは「時期的に」考え難いことである」と述べたかったからである）——。

■ 外挿付記としまして：ここ【典拠紹介部 39】には「多少長くもの」p.611 から p.619 との頁数を割いているため、以降【典拠紹介部】（従たるところ）と【指し示しの主軸たるところ】の関係について惑われぬよう、何卒ご注意いただければ、と申し述べさせていただきます次第です。

## 出典 (Source) 紹介の部 39

# SOURCE

## 39



ここ出典 (Source) 紹介の部 39 にあつては

[巨人アトラスが登場するヘラクレス 11 番目の功業(というもの)にあつては黄金の林檎がその目的物となっている]

[古のトロイア崩壊(正確にはトロイア城市攻囲戦)は黄金の林檎によつてもたらされた]

とのことらが伝承に見る確たる[文献的事実]となっていることの紹介をなすこととする。

まずもつてそこよりはじめるが、アトラスが[黄金の林檎]の在り処を知っているとのことの伝承上の典拠は

[ヘラクレスの 12 功業の第 11 番目の功業]

に求められる。

神話上、実子らを狂乱の態で殺害してしまったことの贖罪のためにはじめた 12 の試練、そのヘラクレス 12 功業にての 11 番目の功業でヘラクレスは黄金の林檎を探してくるよう求められる、その過程で彼が呪縛より解き放ったプロメテウスより

「黄金の林檎を管理管掌しているのはアトラスの娘らたるヘスペリデス(という三人ないし四人とされる姉妹)である。従って、君は黄金の林檎の管掌者となっている者らの父たるアトラスに黄金の林檎の在り処を問うべきである」

と助言されたため、黄金の林檎取得のためのネゴシエーションをアトラスとなしたと「伝わっている」のである。

につき、細かくもなるが、出典記載をなしておく。

**ビブリオテケー (BIBLIOTHEKE)**、日本では『ギリシャ神話』と題名訳されての訳書が岩波書店より出されているとのギリシャ神話網羅的紹介著作(英語圏ではラテン語から **The Library** とも呼称される著作)が存在している。

そちらビブリオテケーはローマ時代のギリシャ人著述家アポロドーロス(都市アテナの文人アポロドーロスと紛らわしいもの別人説があるために英語で言うところの **pseudo** が付けられての **スードゥ・アポロドーロス**、「偽」アポロドーロスとも表せられることがある 1 世紀から 2 世紀に生きたとされる文人)によって著されたものであると伝わっているのだが( : 英文 Wikipedia [ **Bibliotheca (Pseudo-Apollodorus)** ] 項目にて掻い摘まんで引用なすところとして “ The Bibliotheca is a compendium of myths and heroic legends, arranged in three books, generally dated to the first or second centuries AD. [ . . . ] A certain "Apollodorus" is indicated as author on some surviving manuscripts ( Diller 1983 ). This Apollodorus has been mistakenly identified with Apollodorus of Athens ( born c. 180 BC ), a student of Aristarchus of Samothrace, mainly as it is known — from references in the minor scholia on Homer — that Apollodorus of Athens did leave a similar comprehensive repertory on mythology, in the form of a verse chronicle. [ . . . ] Since for chronological reasons Apollodorus of Athens could not have written the book, the author of the Bibliotheca is conventionally called the "Pseudo-Apollodorus" by those wishing to be scrupulously correct. Traditional references simply instance "the Library and Epitome." ( 逐語訳ではなく大要訳として) 「『ビブリオテケー』は神話および英雄譚の三巻よりなる概説書であり、一般に 1 世紀から 2 世紀に起源を求められるものとなる。同著にあつてのアポロドーロスとの著者名は残存テキストのいくつかによって特定されているわけだが、そのアポロドーロスが紀元前 180 年に産まれたと伝わるアテナイのアポロドーロス、サモトラケのアリスタルコスの学徒にしてホメロス研究にまつわり今日に名を残しているとの同人物と誤って特定されてしまった。しかし、年代学的理由によりそれはありえないことであるとされての結果、伝統的にビブリオテケーの著者は(アテナイのアポロドーロスに対して)「偽」アポロドーロスと呼ばれるに至った」と縁起記載されているとおりである)、その『ビブリオテケー』(邦題タイトル『ギリシャ神話』)によって

[ヘラクレスの黄金の林檎探索にあつてのアトラスとの関わり]

にまつわるくだりが今日に伝存しているとのことがある。

ためにそちら、日本の書店でも広く流通している岩波文庫版『ギリシャ神話』(偽アポロドーロス著、邦訳版訳者は古代ギリシャ語を専門としていたとのことである故・高津春繁東京大学名誉教授)よりの中略なしつつもの原文引用をなしておくこととする。

(直下、ヘラクレスが歩んだ 11 番目の冒険についての下り、日本の書店でも廉価にて広くも流通しているとのアポロドーロス『ギリシャ神話』(当方所持の岩波文庫版第 61 刷のもの) p. 99 から p. 102 よりの原文引用をなすとして)

---

「エウルステウスは

…(中略)…

第一一番目の仕事としてヘスペリスたちから黄金の林檎を持って来るように命じた。

これは一部の人々の言うようにリビアにあるのではなく、ヒュペルボレアス人の国の中のアトラスの上にあったのである。それを大地(ゲー)がヘーラーと結婚したゼウスに与えたのである。テューポーンとエキドナから生れた不死の百頭竜がその番をしていた。それとともにヘスペリスたち、すわなちアイグレー、エリュティア、ヘスペリアー、アレトウーサが番をしていた。

…(中略)…

アラビアに沿って進んでいる時にティートノスの子エーマティオンを殺した。そして、リビアを通過して、向い側の大陸に渡り、プロメテウスの肝臓を食っている、エキドナとテューポーンから生まれた鷲をカウカサス山上で射落とした。そしてオリーブの縛めを自ら選んだ後、プロメテウスを解き放ち、ゼウスに彼の代わりに不死でありながら死を欲したケイロンを呈した。

ヒュペルボレオス人の地のアトラスの所に来た時に、プロメテウスがヘーラクレスに自分で林檎を取りに行かないで、アトラスの蒼穹を引きうけて、彼を遣わせと言ったので、それに従って蒼穹を引きうけた。アトラスはヘスペリスたちから三つの林檎をとって来て、ヘーラクレスの所へやって来た

---

(岩波文庫より出されているビブリオーケーの訳書、『ギリシャ神話』よりの引用部はここまでとする)

上にて見るようにローマ期(1世紀から2世紀)に著されとされ、今日に伝存している古典(『ビブリオーケー』)上では

[ヘラクレスが黄金の林檎の探索をなすとの冒険に挑んだ際に(プロメテウスに助言されて)黄金の林檎をアトラスに取りにやらせた]

との記載がなされているわけである。

尚、以上、引用なしたところについては現行、Internet Archiveなどのサイトにてジェイムズ・フレイザー(大著 The Golden Bough『金枝篇』の作者としても知られる民俗学の開拓者)の訳になる版としての Apollodorus, The library が全文公開を見ている——ただし、OCR式スキャン変換なしの中での文字化けがひどくもあり読解には困難が伴うとのものでもある——ので「オンライン上より」文言入力などで確認が可能なそちらよりの該当部引用もなしておくこととする。

(直下、オンライン上で確認できるところの Apollodorus, The library, II. v.よりの引用をなすとして)

---

These apples were not, as some have said, in Libya, but on Atlas among the Hyperboreans. They were presented by Earth to Zeus after his marriage with Hera, and guarded by an immortal dragon with a hundred heads, offspring of Typhon and Echidna, which spoke with many and divers sorts of voices. With it the Hesperides also were on guard, to wit, Aegle, Erythia, Hesperia, and Arethusa. So journeying he came to the river Echedorus.

[...]

And passing by Arabia he slew Emathion, son of Tithonus, and journeying through Libya to the outer sea he received the goblet from the Sun. And having crossed to the opposite mainland he shot on the Caucasus the eagle, offspring of

Echidna and Typhon, that was devouring the liver of Prometheus, and he released Proraetheus,  
Now Prometheus had told Hercules not to go himself after the apples but to send Atlas, first relieving him of the burden of the sphere ; so when he was come to Atlas in the land of the Hyperboreans, he took the advice and relieved Atlas.)。

---

(オンライン上より確認なせるところのフレーザーの手になる英訳版よりの引用はここまでとしておく ——なお、そちらについては直前、原文引用なしの岩波版の訳書の内容とそのままに対応しているとの部なので訳は付さないこととしておく—— )



出典表記を続ける。

(ここまでにて黄金の林檎がヘラクレスの 11 番目の冒険の取得対象であり、そこには巨人アトラスとの縁が関わっているとのことにまつわる文献的論拠を挙げたわけだが)

[ [黄金の林檎] がトロイア戦争の原因、いわば、トロイア崩壊の原因「とも」になっている]

とのことが

[パリスの審判] (英文表記では半ば固有名詞化しての言い回しとしての Judgement of

## Paris ジャッジメント・オブ・パリ

という神話上のエピソード — それにまつわる絵画・芸術作品が多数存在するとのもの — に関わっているところとして

[欧米圏でよく知られたこと]

となっている（：通用度の問題としては、である。（手前目分量強くも介在してのこととはなってしまうのだが）、日本にあっての古典文物に引きなおしてみれば、たとえば、— 多くの人間が「どうでもいいものである」と睡眠学習に留めて [おさらば] するとのものであっても — 高等学校での国語「古典」の教科書に多く載せられている『平家物語』の中の壇ノ浦の合戦名場面とされる一幕で [那須与一（ただ単純にヨイチでもいい）が平家の軍船の上の的を弓で射、見事、扇を射落すといったこと] 並みかそれ以上に海外識者の間では [パリスの審判] の通用度は高いものか、と個人的には見ている）。

よく知られてもおり、また、内容に争いの余地などない（過てることを述べれば、すぐに分かっていく程度の通用度を有する）との話であるから、本来ならば、出典を挙げる必要もないか、ともとらえているのだが、まずもってウィキペディア程度のもの（本稿の先の段でも述べたように易変性や文責の曖昧さの問題から本来的にはそこからの引用が忌避されているとの媒体でありながら、多くの人間にとり確認しやすくもなっているとの媒体）よりの引用をなすことから始めて、さらに、記述内容不変性を伴っての 19 世紀識者著作よりの引用を（出典紹介として）なすこととする。

（直下、まずもって和文ウィキペディア [パリスの審判] 項目にあっての「現行」記述よりの原文引用をなすとして）

---

テティスとペーレウスの結婚を祝う宴席には全ての神が招かれたが、不和の女神エリスだけは招かれなかった。エリスは怒って宴席に乗り込み、「最も美しい女神にあたえる」として黄金の林檎を投げ入れた。この林檎をめぐるヘーラー・アプロディーテー・アテーナーが争った。ゼウスは仲裁するために「イリオス王プリアモスの息子で、現在はイデ山で羊飼いをしているパリス（アレクサンドロス）に判定させる」とした（パリスの審判）。女神たちはさまざまな約束をしてパリスを買収しようとした。アテーナーは「戦いにおける勝利」、ヘーラーは「アジアの君主の座」を与えることを申し出た。しかし、結局「最も美しい女を与える」としたアプロディーテーが勝ちを得た。「最も美しい女」とはすでにスパルタ王メネラーオスの妻となっていたヘレネーのことで、これがイリオス攻め（トロイア戦争）の原因となった

---

（引用部はここまでとする）

上記のこと、

[パリスという男が [最高の美神の証としての黄金の林檎を巡るの女神らの争い] の仲裁役に招かれたことがそもそものトロイア戦争の原因である]

とされていることについては「簡にして易。」と映る、そう、端（はな）から何も知らぬとの人間を想定してなされているといった按配での細かき解説が

THE AGE OF FABLE（1 世紀以上にわたって [米国人の神話理解のための標準書] となっていたとされるトマス・ブルフィンチ（日本でもその騎士道ロマンスにまつわる書籍らが岩波書店などから翻訳・刊行されているとの 19 世紀米国の代表的文人 Thomas Bulfinch）の手



になる書 ——日本国内でも出版元と邦題タイトルを異にしての複数訳書が流通しているとの書—— )

との書籍 (著作権喪失著作を公開しているとの Project Gutenberg のサイトを通じて [誰でも全文ダウンロードできる] とのソース) にてなされているので、そこよりの引用を下にてなしておくこととする。

(直下、ブルフィンチ全集とはまた別に Project Gutenberg のサイトにて公開されている BULFINCH'S MYTHOLOGY THE AGE OF FABLE —— Rev. E. E. Hale との人物の編による版—— にての Chapter XX と付されての部よりの引用をなすとして)

---

Minerva was the goddess of wisdom, but on one occasion she did a very foolish thing; she entered into competition with Juno and Venus for the prize of beauty. It happened thus: At the nuptials of Peleus and Thetis all the gods were invited with the exception of Eris, or Discord. Enraged at her exclusion, the goddess threw a golden apple among the guests, with the inscription, "For the fairest." Thereupon Juno, Venus, and Minerva each claimed the apple. Jupiter, not willing to decide in so delicate a matter, sent the goddesses to Mount Ida, where the beautiful shepherd Paris was tending his flocks, and to him was committed the decision. The goddesses accordingly appeared before him. Juno promised him power and riches, Minerva glory and renown in war, and Venus the fairest of women for his wife, each attempting to bias his decision in her own favor. **Paris decided in favor of Venus and gave her the golden apple, thus making the two other goddesses his enemies.** Under the protection of Venus, Paris sailed to Greece, and was hospitably received by Menelaus, king of Sparta. Now Helen, the wife of Menelaus, was the very woman whom Venus had destined for Paris, the fairest of her sex. She had been sought as a bride by numerous suitors, and before her decision was made known, they all, at the suggestion of Ulysses, one of their number, took an oath that they would defend her from all injury and avenge her cause if necessary. She chose Menelaus, and was living with him happily when Paris became their guest. Paris, aided by Venus, persuaded her to elope with him, and carried her to Troy, ... (以下略)

(補ってもの拙訳として)

「ミネルバ(ギリシャの女神アテナのローマ呼称)は智慧の女神でもあったわけだが、ある機会にて彼女はユーノー(ギリシャの女神ヘラのローマ呼称)、そして、ヴィーナス(ギリシャの女神アフロディテのローマ呼称)との美人競争に参加するとのおとつもない愚行をなした。

それはこのように起こったことである。

[ペレウスとテティスの婚礼の儀の折、その場には不和の女神たるエリス以外の全ての神々が招かれた。自身の排斥に激怒、不和の女神エリスは来賓らの間に「最も美しきものへ。」と記された[黄金の林檎]を投げ入れた。その挙を受け、ユーノー(ヘラ)、ヴィーナス(アフロディテ)、そして、ミネルヴァ(アテナ)は各々、林檎を我が物であると主張しだした。[ジュピター] (訳注:ギリシャ主神のゼウスのローマ表記がこちら[ジュピター]となる) はそのようなデリケートな問題を決するのには乗り気ではなく、それら三女神らを見目麗しきパリスが羊飼いとて羊の群れの世話をしていたとのイーデー山 (訳注:マウント・イダないしマウント・イデは古のトロイア界限(Troad 一帯)にその名を冠する山が実在しているとの神話上の山である) へと送る、[誰が最も美しいかを決させしめるべくもの役割]を負わせてのパリスの元へと送ることとした。女神らはそれがゆえにパリス面前に現われ、各々が勝利の熱情に駆られながらパリ

スにバイアスがかかった裁決を下させるべくも試み、ユーノー（ヘラ）はパリ  
スに権力・富を（彼女を勝たせる対価に）与えると提案、ミネルバ（アテナ）は栄  
光と戦にての名声を与えると提案、そして、ヴィーナス（アフロディテ）は彼の  
妻に最も見目麗しき女を与えると提案した。

パリスはヴィーナスを支持することにし、彼女に

**〔（美人コンテストの勝者の証となっていた）黄金の林檎〕**

を与えることにしたため、他の二柱の女神は彼パリスの「敵」へと変ずること  
になった（訳注：トロイア戦争の激戦の一幕を描く著名古典たるホメロスの  
Iliad『イリアス』ではトロイア戦争にあってのギリシャ勢・トロイア勢の攻守そ  
れぞれに〔武将に対する憑依〕や〔災害の惹起〕といった手法によって神々  
が間接的に参加していたとの描写がなされているのだが、といった中で神々  
の中でのアテナとヘラはパリスが王子としての立ち位置にいたトロイアの滅亡  
へ向けての援助活動に注力しているとの描写がなされている。それはここ引  
用部にてのブルフィンチの解説に認められるような経緯、アテナとヘラの両女  
神がパリスの審判に対して怨恨を抱くことになったとの経緯が影響していると  
解されるようになっていく——有名なところとしてトロイア戦争に最終的決着  
をもたらした〔木製の馬の奸計〕が成功裡に終わったのも〔アテナの助力〕あ  
つてのことであるといった話が伝わっている——（訳注はここまでとする）。

女神ヴィーナス（アフロディテ）の庇護の下、パリスはギリシャに向けて船出し、  
そして、そこにてスパルタ王であったメネラオス王の歓待を受けることにな  
った。その当時、メネラオス王の妻に収まっていたとのヘレンはその美に秀でて  
の女ぶりよりヴィーナスがパリスのものになるとの運命を与えたまさにも女で  
あった。（それに先立つところとして）彼女ヘレンは

〔数多の婚約希望者に「花嫁に、」と求められていた存在〕

となってもおり、のような中、ヘレンが夫たる者を決する前に求婚者らはユリ  
シーズ（オデュッセウス）の提案で（ヘレンの夫となった人間と他の婚約希望  
者らとの後々の禍根を断つためもあつて）〔彼ら求婚者らは必要となれば、全  
ての暴力・彼女の歩んだ道に対する復讐からヘレンを守る〕との誓約をなし  
ていた。といった中でヘレンは（スパルタ王の）メネラオスを選び、パリスが彼ら  
の客としてその場を訪れるまで幸せに暮らしていた。ヴィーナス（アフロディ  
テ）による助力を受けていたパリスはそのヘレンに彼と駆け落ちすることを説  
得しおおせ、彼女をトロイア（訳注：パリスが王子としての立ち位置にあつた都  
市国家）に連れ出した——以下略——（といったことの後、オデュッセウスが  
ギリシャ諸侯にヘレン絡みで取り交わすことを提案していた誓約に縛られて  
いたためにギリシャ有力諸侯がこぞって参加してのヘレンの（元）夫たるメネ  
ラオスの兄アガメムノン王を盟主とする大量のギリシャ勢がパリスを王族として  
戴くことになっていたトロイアに雲霞（うんか）の如く来襲することになったとい  
うのがトロイア戦争開戦を巡る顛末となる）」

---

（訳を付しての引用部はここまでとする）

上の引用部にててもそのように解説されているように、要するに、

**〔黄金の林檎〕**

が〔勝者の証〕となつてのギリシャ神話の主要な三女神らがエントリーなしたとの美人コンテストに審判  
者として関わることになったパリスが

**〔絶世の美女として知られていたヘレネー（ヘレン）の獲得〕**

を買収の条件として容れ、黄金の林檎（不和の女神の投げ入れた黄金の林檎）をアフロディテに手渡  
したこと、その結果としてのパリスによるヘレン略取に既にヘレネーの夫となつていたメネラオスが怒  
り、メネラオスの兄たるアガメムノン王を総指揮官にしてのギリシャ諸侯による、

[パリスが皇子として重きをなすことになりもしたトロイア]

への攻囲戦が開始されたとの運びとなっているわけである(黄金の林檎を巡る争いがそのままトロイア戦争へと発展していったとも言い換えられる)。



Minerva (Athena)



Juno (Hera)



Venus (Aphrodite)

Golden Apple

Helen of Troy



Alexandros Paris

(直上引用部にまつわるところの図解として)

上掲図にあっての上の段で挙げているのはスペイン人画家エンリケ・シモネ( Enrique Simonet ) の手になる 20 世紀初頭の [パリスの審判] を描いての画となる(黄金の林檎を美の象徴として求めている女神らが自身の美を審判役たるパリスに示さんとしている場をモチーフとしているとの画となる)。他面、下の段にて挙げているのは黄金の林檎を巡るコンテスト

に参加していた三女神をかたどった彫像写真として Project Gutenberg のサイトにて公開されている 19 世紀後半刊行著作に掲載されているものとなる。

([出典\(Source\)紹介の部 39](#)はここまでとする)

(ここまでにて II. と振っての段を終える. そのうえで III. 以降の部に頁を分かちて入ることとする)

## III.

開口一番断っておくが、

「以下、III. と振っての部は極めて長くもなつての指し示しをなしていくことになる」。

そのように述べた上でまずもって I. にて「繰り返し」指摘したことと半ば重複することを言及することよりは始めるが、**CERN** の **LHC** 実験では巨人アトラスの名前を冠する検出器アトラスが用いられている。その **ATLAS** に供されるイベント・ディスプレイ・ツールとして、

**[ATLANTIS]**

というディスプレイ・ツールが用いられるに至っており、さらには、そのイベント・ディスプレイ・ツール **ATLANTIS** によってブラックホール観測がなされる可能性があるとの実験当事者物言いがなされるに至っているとのこともある (：[\[ATLAS 検出器\]](#)については(冠詞の)「A」ア・(環状構造を意味する toroidal の)「T」トロイダル・(**LHC** の)「L」エルエイチシー・(機器を意味する apparatus の)「A」アパラタ「S」スを縮めているからこその「A」「T」「L」「A」「S」であるといった申しようがなされているところであるが、その **ATLAS** 検出器のアトラスの派生語的呼称を **ATLAS** 検出器と関わるところで振られているのが **ATLANTIS** というイベント・ディスプレイ・ツールとなり、そちら **ATLANTIS** と **ATLAS** がブラックホールを観測しようと「されている」ことについては ——**ATLANTIS** の表示画面も含めて—— 本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 35](#)で紹介している)。

上に見る [アトランティス] というのは言うまでもなく、

**[かつて大洋に没したとされる古の陸塊アトランティス]**

の名称と同一のものとなる(海中に没したとされるアトランティスのことがギリシャ期古典『ティマイオス』『クリティアス』にあつていかように描写されているかもオンライン上より確認可能なソースをも挙げながら本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 36](#)で紹介しているところとなる)のであるも、その海中に没したと伝わる [アトランティス] の方の質的同等物となる存在として、歴年、

**[黄金の林檎の園が存在する場所として神話が語り継ぐ「アトラスの娘ら」(ヘスペリデス)の園]**

および

**[大洋の先にある「アトラスの娘」カリュプソの島(オーギュギアー島)]**

のことが挙げられてきたとの事情(直下、当然に出典紹介なすところの事情)が存する。



そして、上の「ヘスペリデスの園」および「カリュプソの島」に関しては

「(各々別個に) 歴年、アトランティス同等物と定置されもしてきた洋上の陸塊」

であるばかりではなく、双方ともに、

「トロイア陥落の原因とも係るもの」

と「純・記号論的に」述べられるだけの要素を伴ったものら「とも」なっている。

上記のこと、

「古の陸塊たるアトランティスの質的同等物として「黄金の林檎の園が存在する場所として神話が語り継ぐ「アトラスの娘ら」(ヘスペリデス)の園」および「大洋の先にある「アトラスの娘」カリュプソの島(オーギュギアー島)」のことが歴年、取り沙汰されてきたことがある」

「(アトランティスの質的同等物として言及されもしてきた)「黄金の林檎の園が存在する場所としてのヘスペリデスの園」および「大洋の先にあるカリュプソの島(オーギュギアー島)」も双方共に「トロイア陥落の原因とも係るもの」となっているとのことがある」

とのことの出典をこれ以降、挙げていくこととする(につき、本段は文中にて「出典(Source)紹介の部 40」から「出典(Source)紹介の部 45」を包摂させての長大な解説部となること、事前に断っておく)。

(これより長くもなつての「出典(Source)紹介の部 40」から「出典(Source)紹介の部 45」を包摂させての典拠説明の部に入るとし)、

ここではまずもって

「ヘスペリデスの黄金の林檎の園」がアトランティスと定置される理由」

についての典拠紹介を長くなるもなしておくこととする(：神話にて「ヘスペリデス」と呼称される巨人アトラスの娘ら(単数形は「ヘスペリア」となり3人から4人とカウントされての複合名称が「ヘスペリデス」となる存在)が「黄金の林檎の園」を管掌しているとされること、そして、ヘスペリデスが管掌する「黄金の林檎の園」が伝説上の海中に没した陸塊たるアトランティスと結びつけて見られてきたことについての「出典紹介」をなしていくこととする)。

その点、先立ってのところの「出典(Source)紹介の部 39」にて引用をなした(不特定の)アポロドーロスなる著者によって著されて今日に伝わっているとの古典ビブリオテーケー(BIBLIOTHEKE)の和訳版(岩波より出されている『ギリシャ神話』/当方所持の文庫版では第61刷99ページから102ページ)にあっては

(再掲するところとして)

「エウルステウスは…(中略)…第一一番目の仕事としてヘスペリスたちから黄金の林檎を持って来るように命じた。これは一部の人々の言うようにリビアにあるのではなく、ヒュペルボレアス人の国の中のアトラスの上にあつたのである。それを大地(ゲー)がヘーラーと結婚したゼウスに与えたのである。テューポーンとエキドナから生れた不死の百頭竜がその番をしていた。それとともにヘスペリスたち、すわなちアイグレー、エリュティア、ヘスペリアー、アレトゥーサが番をしていた。…(中略)…アラビアに沿って進んでいる時にティートーノスの子エーマティオンを殺した。そして、リビアを通過して、向い側の大陸に渡り、プロメーテウスの肝臓を食っている、エキドナとテューポーンから生まれた鷲をカウカサス山上で射落とした。そしてオリヴの縛めを



自ら選んだ後、プロメテウスを解き放ち、ゼウスに彼の代わりに不死でありながら死を欲したケイローンを呈した。ヒュペルボレオス人の地のアトラスの所に来た時に、プロメテウスがヘーラクレスに自分で林檎を取りに行かないで、アトラスの蒼穹を引きうけて、彼を遣わせと言ったので、それに従って蒼穹を引きうけた。アトラスはヘスペリスたちから三つの林檎をとって来て、ヘーラクレスの所へやって来た」

(引用部はここまでとする)

との記載がなされている。

以上引用部にあつては

[ヘラクレスはリビアを通過して「向かい側の大陸に行き」コーカサス地方のプロメテウスを開放、その後、ヒュペルボレオスのアトラスの元に到達し、(ヘスペリスらが管理する果樹園に実る)[黄金の林檎]の取得に向けての直接的行動がなされた]

との表記がなされている(先にそこよりの抜粋もなしたところの(ジェイムズ・フレイザーの英訳になる版として)オンライン上に[全文ダウンロード可能なかたち]にて流通しているビブリオテーカーの英訳版 The Library にあつては “ They were presented by Earth to Zeus after his marriage with Hera, and **guarded by an immortal dragon with a hundred heads, offspring of Typhon and Echidna, which spoke with many and divers sorts of voices. With it the Hesperides also were on guard, to wit, Aegle, Erythia, Hesperia, and Arethusa.** So journeying he came to the river Echedorus.[ . . . ] And passing by Arabia he slew Emathion, son of Tithonus, and **journeying through Libya to the outer sea he received the goblet from the Sun. And having crossed to the opposite mainland he shot on the Caucasus the eagle, offspring of Echidna and Typhon, that was devouring the liver of Prometheus, and he released Proraetheus.** Now Prometheus had told Hercules not to go himself after the apples but to send Atlas, first relieving him of the burden of the sphere ; so when he was come to Atlas in the land of the Hyperboreans, he took the advice and relieved Atlas.” との部位が同じくものところに該当する)。

その点、

[リビア(アフリカ沿岸地域)を通過して向かい側の大陸のコーカサス山近辺に辿り着いた、そこでプロメテウスを解放した、と表記されている。コーカサス山地というのはユーラシア大陸(欧州を包摂する大陸)の一地域だ。その後、ヒュペルボレオスの領域、アトラスの所在地(そして、黄金の林檎の近接地)に到達したとされるのだから、その古典に見る[ヒュペルボレオス]というのは[欧州の近傍に属するところ]なのではないか]

ように「とれも」する(：そのため、アポドーロスのビブリオテーカーだけを論拠とする場合においては[ヒュペルボレオスのアトラスの手の届く範囲にある黄金の園]というのはヨーロッパ内部にあり、大西洋上にあった陸塊とされるアトランティスとは直線的につながらないようにも「とれも」する)。

であるが、上に見る、

[ヒュペルボレオス ——その具体的所在地が曖昧なかたちにてギリシャ時代より伝わるころの桃源郷—— ]

がプロメテウスの囚われていたとアポドーロス本人も書いている[カウカサス山脈](黒海とカスピ海の間)に存在する山脈、要するに今日の地理的理解ではトルコ東北部とロシア南西部の境界線部たるコーカサス地方の山脈) 近辺あるいはカウカサス山脈を内包しているヨーロッパ にあったのか、それとも「どこか別の場所」にあったのか、アポドーロスの古典ひとつとっても記載が模糊としている感がありもする。

また、同じくものこと、アポロドーロス古典だけを典拠にただけでは「ヒュペルボレアスなる領域がどこにあるか曖昧模糊としている」とのことについては

「[ヒュペルボレアスのアトラス]が(アフリカ北西部にあるとの)[アトラス山脈]のことを指すように見えるが、それとて曖昧模糊としている——[ヘラクレスが第10の冒険で砕いたとされるアトラスの名残りであったとも伝わるアトラス山脈]が[ヘラクレスが第11の冒険で際会したとされる巨人アトラス]と同一物かも模糊としている——」

ようにとれるようになっていたこと「も」ある(：アポロドーロスの古典 Bibliothek のオンライン上、Internet Archive のサイトにて公開されている(であるから誰でも確認できるとの)英訳版より原文引用すれば、“Now Prometheus had told Hercules not to go himself after the apples but to send Atlas, first relieving him of the burden of the sphere ;so when he was come to Atlas in the land of the Hyperboreans, he took the advice and relieved Atlas.”(拙訳として)「プロメテウスがヘラクレスに対して「林檎は自身で取りに行かずに最初にアトラスの[天球](スフィアとの訳語が[天界])に対して振られている)を担ぐとの責務から解放、アトラスを遣いに出せ(そして林檎を取ってこさせよ)」と述べたので、ヘラクレスは[ヒュペルボレアスのアトラス]のところに来た際に、プロメテウス助言を容れて、アトラスを自由にした」と記されており、天を担ぐ巨人として知られもするアトラスが[山(アフリカ北西部に目立って存在するアトラス山脈)の比喩的象徴物]なのか、それとも[ヒュペルボレアスに佇む巨人]なのか、その申しようが曖昧であるととれるようになっていた))。

以上に見るように

[ヒュペルボレアスについてはユーラシア大陸にそれがあるのではないかとの解釈もなされるが、その場は曖昧としている]

とのことがある一方でヘラクレスが目指したそちらヒュペルボレアスと親和性高い(と古典にての記述より判じられる)、

[ヘスペリデスの黄金の園]

という場については

[相応の属性を帯びた存在らが管掌する大洋の彼方にある西の島]

であるとの見立てもが呈されており、それがゆえ、

[古にて海中に没したとされる太陽の彼方にある陸塊アトランティスの同等物]

であると定置されてきた場ともなっている。

については「まずもって」そうした解釈が成り立つ相応の背景があることにつき触れたうえで、「次いで」実際にそうした解釈に基づいての見立てが呈されてきたとの事例紹介をなすこととする。

さて、ここで本稿の先の段でも取り上げている古典(プラトン『ティマイオス』に続く『クリティアス』)に認められる[古のアトランティスの縁起由来にまつわる記載部]が問題になるのでその部(出典(Source)紹介の部 36)にて引用なししていたところの一部よりの引用を「再度」なすこととする。

(直下、プラトン全集 12(岩波書店)『ティマイオス』収録部の p.22 よりの再度の原文引用をなすとして)

というのは、あの大洋には——あなた方の話によると、あなた方のほうでは「ヘラクレスの柱」と呼んでいるらしいが——その入口(ジブラルタル海峡)の前方に、一つの島があったのだ。そして、この島はリビュアとアジアを合わせ

たよりもなお大きなものであったが、そこからその島の他の島々へと当時の航海者は渡ることができたのであり、またその島々から、あの正真正銘の大洋をめぐっている、対岸の大陸全土へと渡ることができたのである

(引用部はここまでとする —※— )

(※尚、疑わしき向き、それでいて、ネット上などより確認をなすとの意欲があるとの向きのために言及しておくが、同様の部は Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロードできるとの公開版(19世紀にあつてのオクスフォードのプラトン翻訳家となる Benjamin Jowett の訳業によるところの TIMAEUS by Plato)にあつては “The most famous of them all was the overthrow of the island of Atlantis. **This great island lay over against the Pillars of Heracles, in extent greater than Libya and Asia put together,** and was the passage to other islands and to a great ocean of which the Mediterranean sea was only the harbour” と表記されている箇所となる)

(続いて直下、プラトン全集 12(岩波書店) Critias『クリティアス』収 x 録部の 236 ページよりの「再度の」原文引用をなすとして)

ポセイドンはまた五組のふたごの男の子を生み、育てられた。そしてアトランティス島全体を一〇の地域に分けたまい、最年長のふたごのうち、さきに生まれた子に、母の住まいと、その周辺のいちばん広いもつとも地味の肥えた地域を分け前として与えて、かれを他の子どもたちの王となしたまい、他の子どもたちには、それぞれに多くの人間を支配する権限と広い地域からなる領土を与えて、その領主とした。なお、かれは子どもたち全員に名前をおつけになったが、そのさい、初代の王となった最年長の子におつけになった名前が「アトラス」だったので、この名前にあやかって、島全体も、その周辺の海も、「アトランティコス……」と呼ばれるようになったのである。

(引用部はここまでとする —※— )

(※同様の部は Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロードできるとの公開版( Benjamin Jowett という学究の訳業によるところの CRITIAS by Plato)にあつては “He also begat and brought up five pairs of twin male children; and dividing the island of Atlantis into ten portions, he gave to the first-born of the eldest pair his mother's dwelling and the surrounding allotment, which was the largest and best, and made him king over the rest; the others he made princes, and gave them rule over many men, and a large territory. **And he named them all; the eldest, who was the first king, he named Atlas, and after him the whole island and the ocean were called Atlantic.**” と表記されている箇所となる)

上もてお分かりいただければと思うが、古のアトランティス、ヘラクレスの柱(ジブラルタル海峡)を越えての大洋の先としての[西方]にあったとされる陸塊の由来は

「アトラス」(巨人アトラスとは別存在とも解されるが、とにかくも、のアトラス)

が王であったためにアトランティコス(アトランティス)と呼ばれているとされている場となる(については本稿の先の段、加速器を巡る話の段で述べたことの繰り返しともなる)。

そのように、[アトランティスの開闢王がアトラスであった] [アトラス王がゆえのアトランティス(アトランティコス)との命名がなされた] とプラトン古典にて伝わっているようなことがある一方で、「直下にて紹介するように」、ヘラクレスが探索対象とした黄金の林檎の園、その場を管理管掌するヘスペリデスら彼女ら「アトラスの娘」をして「アトランティスの血統」とのことで「アトランティス」と呼称する風がありもすることが問題になる —— (伝説の巨人アトラスには [プレアデス] (七人姉妹の娘たち) や [ヘスペリデス] (3人から4人の娘たちたるヘスペリスの総称) や [マイア] (アトラスの長女) といった一群の娘たちがいるとギリシャ神話が語り継ぐが、彼女らはいわば [アトランティス] (複数形はヘスペリスの複数形がヘスペリデスとあいなるようにアトランティデス Atlantides) と表記される存在であるとの観点が存在している) —— 。

出典 (Source) 紹介の部 40

# SOURCE

## 40



ここ出典 (Source) 紹介の部 40 にあつては

[アトラスの娘が「アトランティス」(複数形はアトランティデス)と呼ばれている]

とのことの典拠紹介をなす。

まずもって英文ウィキペディアにあつての [Ogygia] 項目との項目にての現行の記述を引いておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia [Ogygia] 項目の現行にての記載内容よりの原文引用をなすとして)

Ogygia (/oʊˈdʒɪdʒiə/; Ancient Greek: Ὀγυγίη Ōgygíē [oːgygíː], or Ὀγυγία Ōgygia [oːgygía]), is an island mentioned in Homer's *Odyssey*, Book V, as the home of the nymph Calypso, **the daughter of the Titan Atlas, also known as Atlantis (Ἀτλαντίς[1])** in ancient Greek.

(訳として)

「オーギュギーアはホメロスの叙事詩オデュッセイアの第五歌にて古代ギリシヤにて「アトランティス」(Ἀτλαντίς)として知られていた「タイタン・アトラスの娘」たるニンフ・カリュプソの住まいとして言及されている島である」

---

(引用部訳はここまでとしておく —※— )

(※尚、上の「現行の」ウィキペディア記載内容よりの引用部に付されての[1]との出典番号に照応するところでは[1] ↑ "Atlantis" means the daughter of Atlas. See entry Ἀτλαντίς in Liddell & Scott. See also Hesiod, Theogony, 938. と出典のタイトルが表記されている、すなわち、「[アトランティスがアトラスの娘の意たることの出典]としては【リデルおよびスコットの解説】および【ヘシオドスの神統記】を参照のこと」との表記がなされている —うち、前者にあつては「A Greek-English Lexicon [ギリシヤ語・英語語彙目録]の編纂およびその標準化に功あつた向きの手になる Liddell and Scott's lexicon (リデルおよびスコットのギリシヤ語彙目録/余事だが、リデルの方はルイス・キャロルがアリスズ・アドヴェンチャーズ・イン・ワンダーランドのモデルとしたアリス・リデルの父である)の解説部を参照のこと」の事と同義と解される—)

さらに著作権の切れた書籍を無償全文公開している Project Gutenberg のサイトにて現行、全文ダウンロードできるとの 1882 年刊行の古典知識関連の辞書 Carletons Condensed Classical Dictionary より [アトランティス] (巨人 [アトラス] の娘としてのアトランティス) の複数形がアトランティディスと呼称されていることにまつわる引用をなすことにする。

(直下、Carletons Condensed Classical Dictionary にあつての Atlas の項目よりの原文抜粋をなすところとして)

---

Atlas. One of the Titans, son of Iapetus and Clymene. He married Pleione, daughter of Oceanus (or of Hesperis, according to some writers). **He had seven daughters, who were called the Atlantides.**

(訳として)

「アトラスはタイタンの一人であり、イアペトスとクリュメネーの間にもうけられた息子である。彼はオーケアノスの娘ないし(幾人かの著述家によれば暁の女神ヘスペリスの娘とも言及される)プレーイオネーと婚儀を結んだ。同アトラスは「Atlantides」と呼称される「七人の娘」(訳注: 文脈上、七人姉妹プレアデスのこと) をもうけた」

---

(引用部はここまでとしておく —※— )

(※尚、上にてはプレアデス七姉妹が(上述のカリュプソのように)[アトラスの娘ら](アトランティデス)と紹介されているが、[黄金の林檎を管掌するヘスペリデス姉妹ら]もまたアトラスの一群の娘達に内包されていると認知されている。については英文 Wikipedia [Hesperides] 項目にて “ They are sometimes portrayed as the evening daughters of Night (Nyx) either alone, or with Darkness (Erebus), in accord with the way Eos in the farthest east, in Colchis, is the daughter of the titan Hyperion. **Or they are listed as the daughters of Atlas**, or of Zeus, and either Hesperius or Themis, or Phorcys and Ceto.” (訳として) 「彼女達ヘスペリデスらは[エーオース(暁の女神)]



が(日の昇る)遙か東方にてのホルキスの地にてのタイタン・ハイペリオンの娘であるとされる]ことと相通じるところとしてしばしば [夜] (ニクス) が一人で産んだ、ないし、ニクスが [闇] (エレボス) との間にもうけたとの [黄昏を体現しての娘ら] であると描写される。あるいは彼女達は [アトラス] ないしゼウスとヘスペリウスないしテミスないしポルクュースないしケートーとの娘とされている」との表記がなされているところである(ヘスペリデスのありようについては本稿の後の段でも取り上げることとする))

以上でもって [アトラスの娘(ら)] が [アトランティス] (複数形は Atlantides) という言葉と結びついての典拠とする。

(尚、[アトラスの娘が[アトランティス]という言葉と結びつけられている] ことに関わるところとしてアイザック・ニュートンのような歴史上の著名人によっていかに [「アトラスの娘の島」が海中に没した陸塊としてのアトランティスと結びつけられているか] についても本稿の後の段にあって一次資料の記載内容——全文オンライン上より確認できるとの Issac Newton の手になる **THE CHRONOLOGY OF ANCIENT KINGDOMS AMENDED** の記載内容——を抜粋することで問題視することとする。

「好古趣味昂じての……」といった酔狂がゆえにではなく、そのようなこと、[ニュートンからして古の陸塊アトランティスを [アトラスの娘(の島)] と結びつけていた]

といったことからして [今日を生きる我々にとり重要な因果関係の問題と関わっている] との複合的指し示しに通じているとの認識がこの身にあるからである。

それにつき、実体としてであっても、

『やたら微に入つてのこと、そして、非本質的な話を [愚者ないし趣味人が好むような話柄] を好古癖がゆえにこの者は振り回している』

といった認識しか本稿読み手が「この局面で、」抱けないとしたらば、それは [悲劇的なこと] と筆者がとらえもするところとなる。

遠慮会釈も述べるのだが、

『そうした人間は [殺されても文句が言えまい] ような [履き違え] をなしていることになる』

と判ずるだけの具体的論拠が筆者の手元にはあるからである。そして、そうも述べられるだけの [論拠] を「異論を許さないかたちで」本稿にて呈示しているか、きちんと検証していただきたいと考えてもいる)

(**出典(Source)紹介の部 40** はここまでとする)

---

さて、[アトラスの娘]が[アトランティス]との名称と結びつくようになっているとの指摘をなしたうえでさらに述べるが、本稿の先の段(**出典(Source)紹介の部 39**)にて原文引用をなして問題視してきた [アポロドーロス古典『ビブリオテーケー』] (**Bibliotheke**) に着目する限りでは、

[黄金の林檎の園(アトラスの娘らたるヘスペリスが管掌していると伝わっている場)と結びつけられた[ヒュペルボレアス]という地がヨーロッパ近縁領域に位置しているのか、そうではないのか、曖昧模糊としているとのことがある

わけだが（つい先立っての段にて古典の文言に依拠して言及したこともである）、そうした見方が呈されるのは [ヒュペルボレアス]（英語的呼称ではハイパーボリア）という地、ギリシャ伝承に見る [夜なき永遠の光に包まれているとの彼方の楽園] とのヒュペルボレアスの想定地が複数あることと同義のことでもある。

その点、ヒュペルボレアス（ハイパーボリア）と呼ばれる領域の候補地が複数あることについては — 英文ウィキペディアの記述を引きもしながら述べるどころとして — 次のような観点もが存在している。

（以下、英文ウィキペディア [Hyperborea] 項目より引くところとして）

Northern Europeans (Scandinavians), when confronted with the classical Greco-Roman culture of the Mediterranean, identified themselves with the Hyperboreans, neglecting the traditional aspect of a perpetually sunny land beyond the north. This idea was especially strong during the 17th century in Sweden, where the later representatives of the ideology of Gothicism declared the Scandinavian peninsula both the lost Atlantis and the Hyperborean land.

（訳として）

「地中海由来の古典期ギリシャ・ローマ（に由来する）文化に接した際に北欧・スカンディナビアの者たちは [北方を超えて常に日が照っているとの地] との伝統的理解に見るヒュペルボレアスの特質を無視、そのうえで彼ら自身をして [ヒュペルボレアスの民] と定置するようになった。こうした観念が「スカンディナビア半島こそがアトランティスにしてヒュペルボレアスの地である」と称しての [Gothicism]（訳注：近世に隆盛を見た、先祖の過去を美化しようとの風潮）のイデオロギーが隆盛を見ていた 17 世紀スウェーデンにて強くもなっていた」

（訳を付しての引用部はここまでとする — ウィキペディアに関しては全幅の信の置けぬ媒体としての限界が伴っているとのこと、本稿従前の段にて何度となく述べているわけであるが、といった中であってながらもここでは「真偽それ自体ではなく言論動向有無の問題を取り上げる意では有意か」との観点でもってウィキペディアより引用をなしているとのこと、断っておく — ）

上にて言及されている 17 世紀北欧にて隆盛を見た思潮の中身は「極めて胡乱（うろん）なるもの」である（「何ら論拠を伴っていない駄法螺と等しき話」である）と今日にては評価されている — 中学生レベルの歴史知識がある向きか、物を識らぬ向きを騙す詐欺師ないし現実に合致しないことを憑きものがついたように連呼し続けるとの相応の神秘主義の徒輩でなければ当然に分かるうこととしてそういう風に評価されている — わけだが、そうした思潮が存在していたと伝わること自体が問題になると筆者はとらえている。

そう、

「ヒュペルボレアス（ハイパーボリア）が [アトランティス] の同等物であったとの観点「もが」存在している — その真偽はおよそ語るに値しないところながらも存在している — 」

こと自体が問題になると筆者はとらえているのである。

につき、アポロドーロスにての古典『ビブリオテーケー』では [黄金の林檎の園] が [ヒュペルボレアス]（ハイパーボリア）に存在するとされている一方で、他面、その [ヒュペルボレアス]（ハイパーボリア）がアトランティスであると見る見方が 17 世紀北欧にて隆盛を見ていたイデオロギーに伴っていたとのことは、すなわち、[黄金の林檎の園] が [アトランティス] と結びつけられる素地がいかに強くも史的にあったかを判断する材料となるからである（※）。

（※注記として

ヘラクレスが第 11 番目の冒険にて向かった先たる [黄金の林檎の園] が [西の果て] にあるとの理解が一般になされていること「も」[黄金の林檎の園] と [アトランティス] の同質性について考える上での材料とはなる (ここに至るまで一度ならず引用なしてきたプラトン古典にて「アトランティスはジブラルタル海峡を越えての大洋彼方にある」と表記されているとのことがあるからである)。

だが、—— 本稿公開サイト上の他所ではその点についての説明不足のきらいがあったかと現時反省するところでもあるのだが —— ヘラクレスの向かった [黄金の林檎の園] の場が「西の果て ( in the far west of the world ) にある」とのことがあっても

**[黄金の林檎の園はアトランティスよろしく地中海を超えて大西洋という大洋の先にある]**

との文脈にてはイコール「にならない」との観点が呈されているとのことがあり「も」する。

その点、英文ウィキペディア [Hesperides] (ヘスペリデス) 項目にあつては冒頭部より “ In Greek mythology, the Hesperides are nymphs who tend a blissful garden in a far western corner of the world, located near the neighbourhood of Cyrene or Benghazi in Libya or the Atlas mountains in North Africa at the edge of the encircling Oceanus, the world-ocean.” (訳せば「ギリシャ神話にあつてヘスペリデスらは [世界の西の果て] にある至福の果樹園、キュレネ (注:リビアに建設された元ギリシャ系植民都市) あるいはベンガジ (注:これまたリビアに建設された元ギリシャ系植民都市) の近傍ないし世界を取り囲むオケアノス (注:古代ギリシャの世界観にあつての世界を取り囲む大洋) の縁にあつての北アフリカのアトラス山脈に存在していた果樹園を見張っているとのニンフらのことである) ) と記載されていることに見受けられるように、黄金の林檎の園が存在する [西の果て] が大西洋の果てとの観点が直接的には出て「こない」ことも一応表記しておく必要があるか、と判断ししたのである —— [西の果て] と述べても古代ギリシャ世界から見れば [リビアらアフリカの北西部] かもしれないとの言いよの伝である。についてはアポロドーロス古典『ビブリオテーケー』の先に抜粋したような記載の曖昧さも上記のような [ヘスペリデスの黄金の林檎の園] の候補地の複数存在に関係しているところとなっていると解される—— )

ここで整理しての話をなす。

「黄金の林檎の園を管掌するヘスペリスらは —— 古の陸塊の名称たるアトランティスにも名称の響きとしてつながるところとして —— [アトラスの娘としてのアトランティス] (複数形はアトランティデス) でもある (出典 (Source) 紹介の部 40)。

さて、アトラスの娘 (アトランティデス) である彼女らヘスペリデスが管掌すると伝わる黄金の林檎の園、ヘラクレスが第 11 功業にてその場の探索をなしていたと伝わるその黄金の林檎の園の近傍は

[アトラスが存在してもいるヒュペルボレアスの地]

として古典にて描かれているが (出典 (Source) 紹介の部 39)、そのヒュペルボレアス (ハイパーボリア) が何処にあるのかは模糊としており、それが一部の理解では [アトランティス] と同様のものであるとの見解も呈されてきたとのことある (北欧にての 17 世紀隆盛思潮のことは先に言及したわけだが、同じくもの点についてはさらに後の段で詳説する)。

以上のようなことから [黄金の林檎の園] は [アトランティス] であるとの解釈が成り立つ —— 黄金の林檎の園の候補地にはアフリカが強くも挙げられていたりしているわけであるが、とにかくもそういう解釈が成り立つ —— 」

次いでもってして

[[ヘスペリデスの黄金の林檎の園]が —実際にそれがそうしたものであったのかは置き — アトランティスであるとの主張がなされてきた]

とのことを具体例とともに紹介する。

その点、

[[ヘスペリデスの黄金の林檎の園]が [アトランティスの質的同等物]であるとの主張がなされてきた]

とのことについては、たとえば、半ば趣味人的なる史家であったイグナティウス・ロヨラ・ドネリー（政治家としてのキャリアも持つ人物）が19世紀後半(1882年)に

### Atlantis: The Antediluvian World 『アトランティス大洪水前の世界』

という著作 ——(同著、『アトランティス・ジ・アンティディルービアン・ワールド』については「欧州およびアメリカ大陸は古のアトランティスの影響下にあった」との申しようを主張の核とするとの著作で今日、信用の置けぬ出典 (unreliable source) と看做されているような著作だが見るべきところもあるとの著作となり、表記のタイトル入力でプロジェクト・グーテンベルクなどのサイトを通じて誰でも全文確認できるとの著作ともなる) —— を世に出しており、19世紀末から20世紀初頭にかけてある程度の反響を呈していた同著の中にも、同文のこと、ヘスペリデスの園を強くもアトランティスと結びつけるとの申しようが (そうなされるべくして) なされていたとのことがある。

直下にての出典紹介部にて解説するような式にて、である。

---

出典 (Source) 紹介の部 41

# SOURCE

## 41



本段、**出典 (Source) 紹介の部 41** にあつては



[ヘスペリデスの黄金の林檎の園が何故、アトランティスと看做される素地があるのか]

とのことに関わる典拠を紹介する。

「行き過ぎている」(far-fetched)と評価されやすき内容、すなわち、

「古に存在していた共通古代文明としてアトランティス伝承に通ずる文明が存在しており、それが新大陸(アメリカ)および旧大陸に共通の文明基盤を与えることになりもしていた」

との仮説を展開しているとの意味で「行き過ぎている」と評価されやすき内容を有しており、そして、情報の行き渡りが不十分であったとの19世紀にあって専門の学者でなく職業政治家との来歴を持つ人物(イグナティウス・ロヨラ・ドネリー)の手になる著作がゆえに全幅の信が寄せられるようなものではないといった評価が伴っての書とはなるが、著述家イグナティウス・ドネリーの手になる著書 ATLANTIS THE ANTEDILUVIAN WORLD にあっては次のような表記がなされている。

(直下、Internet Archive や Project Gutenberg のサイトを通じて全文ダウンロードできるとの書となっている ATLANTIS THE ANTEDILUVIAN WORLD (1882) にての CHAPTER II THE KINGS OF ATLANTIS BECOME THE GODS OF THE GREEKS. の部、p.306 よりの抜粋をなすとして)

---

The Nymphs were plainly the female inhabitants of Atlantis dwelling on the plains, while the aristocracy lived on the higher lands. **And this is confirmed by the fact that part of them were called Atlantids, offspring of Atlantis. The Hesperides were also "daughters of Atlas;" their mother was Hesperis, a personification of "the region of the West."** Their home was "an island in the ocean," Off the north or west coast of Africa.

(補いもしながらもの拙訳として)

「貴族階級が高地に住んでいた一方でニンフラ(に比定される存在)は [アトランティスの平野部]

に住んでいた女の住人らであった(と述べられる)。これは彼女らの一部が **Atlantids**、[アトラスの後裔]と呼ばれていたことで確認されることである。(ギリシャ神話の下位位階の女神らたるニンフラの)ヘスペリデスはアトラスの娘達であり、彼女らの母は[西方]の人格化存在たるヘスペリスとなっていた(訳注:ヘスペリデスの母親の名がヘスペリス Hesperis となっていることはすぐに裏取りできるところだが、娘らヘスペリデスの中にヘスペリスとの存在の呼称が含まれているとされることもあったり、娘らヘスペリデスを単数形として表記した際にヘスペリスといった名称が用いられたりややこしいところではある)。

彼女らニンフラ(ギリシャ神話の女神接合存在)の故地は大洋の島であるとされ、それはアフリカの北岸ないし西岸の先にあるところであった(とのことでプラトン古典に見るアトランティスとの地理的接合性が問題になる)」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(続いて、直下、Project Gutenberg などのサイトを通じて全文ダウンロードできるようになっているとの Atlantis: The Antediluvian World 『アトランティス大洪水前の世界』(1882) にての CHAPTER VIII. THE OLDEST SON OF NOAH の章、p.453 よりの抜粋をなすとして)



---

Agriculture.--**The Greek traditions of "the golden apples of the Hesperides" and "the golden fleece" point to Atlantis.** The allusions to the golden apples indicate that tradition regarded the "Islands of the Blessed" in the Atlantic Ocean as a place of orchards. And when we turn to Egypt we find that in the remotest times many of our modern garden and field plants were there cultivated.

(拙訳として)

「農業について——[ヘスペリデスの園の黄金の林檎]および[金羊毛皮]にまつわるギリシャ伝統はアトランティスの方向を指し示すものである。黄金の林檎に対する言及は果樹園の場としての[大西洋の祝福されし島]にまつわる伝承のことを想起させる。そして我々がエジプトに立ち戻った時、往古にて我々の今日の果樹園や栽培種の多くがそこにて栽培されていたことを見出すのである(訳注:ここではドネリーはアトランティスとして同定できるものがギリシャから欧州やアメリカ先史時代に農業的な影響を与えていたとの式での申しようをなしている)」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上にての引用部に認められるようにイグナティウス・ドネリーはその著書 *Atlantis: The Antediluvian World* 『アトランティス大洪水前の世界』(1882年刊行/19世紀末から20世紀初頭にて反響呈した著作)にあつて、はきと、

「ヘスペリデスも、また、ヘスペリデスの黄金の林檎の園もアトランティスと結びついて  
いる」

と主張している ——※ちなみにそちら主張を支える理由として[黄金の林檎の園を管掌するヘスペリデスの[ニンフ(ギリシャ神話にての下位の女神ら)としての呼称]が[アトラスの娘のグループ]がゆえに[アトランティデス](Atlantides,単数形は Atlantis)とのかたちとなっていること]、[ヘスペリデスの黄金の林檎の園が大西洋の先にあったとのことで(プラトン古典に見る)[大西洋の先にある陸塊]としてのアトランティスとの接合性が観念されること]、[ヘスペリデスの母親としても伝わるヘスペリス(ヘスペリデスの単数形呼称でもあるが母親の名としても伝わる)の語源が[西方]と結びついていることで西方にてのアトランティスとの接合性が観念されること]との各事由が挙げられていもする —— 。

([出典\(Source\)紹介の部 41](#)はここまでとする)

---

ここで

「履き違え・誤解しては欲しくはない」

ところとして申し述べるが、直近引用部にてその著作内容を取り上げたイグナティウス(イグネイシャス)・ドネリーという100年以上前の文筆家申しようについてその主張内容帰結(アトランティスとの観点と結びつくあまねくもの文明に共通する先史時代にあつての文明共通基盤があつたとする主張内容帰結)の真偽や信憑性を(本稿では)問題にしているのではない —— 今日、ドネリーの展開してきた申しように関してはドンキホーテ的な幻想であつたと評するような評価もなされているが(たとえば Ignatius Donnelly A DON QUIXOTE in the World of Science 『イグナティウス・ドネリー 世界の科学にてのドンキホーテ』との書きものがオンライン上よりダウンロードできる Minnesota Historical Society ミネソタ歴史学会なる組織経由の文書として流通したりしている)、筆者はそうもして毀誉褒貶の「毀」「貶」が目立

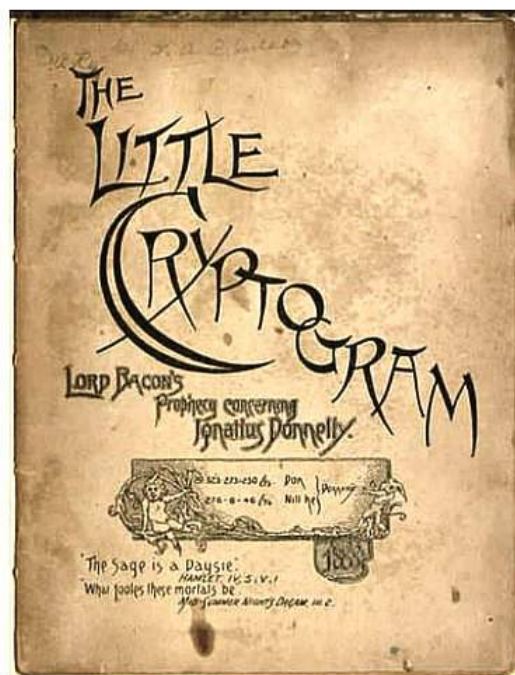
ちもする式となっているドネリーの申しようが正しいか正しくないかを問題視しているのではない( **my point of view: Whether viewpoints seen in ATLANTIS THE ANTEDILUVIAN WORLD (by Ignatius Loyola Donnelly's) are proper or not, it makes no difference.** )——。

「問題なのは、」近代人ドネリー申しようからして

「西の果てにあるとのことである、一群の女神（下位の女神である神話にあつてのニンフ）である「アトランティス」（先述のように「アトラスの娘」との意味合いでの「アトランティス」）らに管掌される黄金の林檎の園が「沈んだ陸塊としてのアトランティス」に親和性が高いものである」

との見解が呈されるべく呈されているとのこと、そのことが伺い知れるとのことである（:ドネリーは別段、おかしいことを言っているわけではない。第一。アトランティスは大洋の先、西方の果ての島とされている。第二。伝説上の巨人アトラスの娘はアトランティス(複数形アトランティデス)と呼称されていたとのことがある。第三。アトラスの娘ら(アトランティデス)たるヘスペリデスら ——黄金の林檎の管掌者ら——が暮らすヘスペリデスの園は大洋の際、西の果てにあつたとされ、ヘスペリデスら自体が西方と親和性高い言葉である。以上、第一から第三の点よりヘスペリデスの園は大海の果てにあつたと伝わるアトランティスに通ずると判じられる。以上の論理に関しては ——伝説の大陸アトランティスというものが実際にあつたのか、また、そのアトランティス大陸とヘスペリデスらが実際に不可分なる関係にあつたのかについては典拠などない、それがゆえに、真偽藪の中とならざるをえぬとのことがあつたとしても——飛躍はなんらないと判じられるわけである）。

イグナティウス・ドネリーやりようにまつわる補足として



上にて

[表紙]

を挙げているのはイグナティウス・ドネリーという論客に対する批判論稿となる。

より具体的には(最前にての)本稿本段でその著作 *Atlantis: The Antediluvian World* 『アトランティス大洪水前の世界』(1882)の「内容;中身」を取り上げもしたとの著述家イグナティウス・ドネリーの名声を失墜させしめるに至った著作にして「シェイクスピアの真の正体はロード・フランシス・ベーコンであった」とのことを主として主張しているとの(ドネリー自称としての)「暗号解説」本、

**The Great Cryptogram: Francis Bacon's Cipher in Shakespeare's Plays**  
**『大いなる暗号:シェイクスピア劇に含まれしフランシス・ベーコンの暗号』**  
**(1888)**

の内容に対する批判的分析を世に問うべくものされた論稿たる、

**The Little Cryptogram 『微々たる(取り合ふに足らぬ)ところの暗号』(1889)**

の表紙部が上に図像挙げているものとなる(：実にもって短きものでありながらも相当に難解なものでもある同論稿 *The Little Cryptogram* は [Project Gutenberg](http://Project Gutenberg) のサイトを通じて全文ダウンロードできるようになっている(との内容後追いを誰でもできるものであるからここにて引き合いに出した)と申し述べておく。尚、表紙絵を上挙げもした同論稿でもってそれが槍玉にあげられているとのやりよう、[[「シェイクスピア=ベーコン説」]に固執するとのやりよう]にて著述家ドネリーが立つ瀬を完全に失ったとのことについては —これより、にまつわっての内容紹介をより細やかなかたちでなすとの所存でもあるが— たかだかもの英文 Wikipedia [Ignatius L. Donnelly] 項目にてあって「も」現行、“In 1888, he published *The Great Cryptogram* in which he proposed that Shakespeare's plays had been written by Francis Bacon, an idea that was popular during the late 19th and early 20th century. He then travelled to England to arrange the English publication of his book by Sampson Low, speaking at the Oxford (and Cambridge) Union after which his thesis "Resolved, that the works of William Shakespeare were composed by Francis Bacon" was put to an unsuccessful vote. The book was a complete failure and Donnelly was discredited.” (逐語訳に替えて半ばもの大要訳として)「1888年、イグナティウス・ドネリーは19世紀から20世紀にかけての往時、衆目を集めるところとなっていたとの観点、「ベーコンこそがシェイクスピアである」との観点を支持しての著書 *The Great Cryptogram* を刊行し、(同著作主張に関するものとして)オクスフォードおよびケンブリッジにての公演をなしつつ同著英国版刊行に向けての調整をなすべく渡英した。同著はまったくもっての失敗作とあいなり、それによりドネリーは信を失った」(引用部はここまでとする)との記載が端的になされているところでもある)。

その点、上にて表紙絵を挙げている批判的論稿にて槍玉にあげられたドネリー著作、**The Great Cryptogram: Francis Bacon's Cipher in Shakespeare's Plays** 『大いなる暗号:シェイクスピア劇に含まれしフランシス・ベーコンの暗号』(1888)については筆者も(残余余力の配分の都合もあって精査には至らぬも)一読はなしており、そこにて記載されている内容を

[難解であるうえに独創先行 (highly imaginative) のきらい極めて強き、行き過ぎたもの/こじつけがましきこと限りなしのもの]

と判ずるに至っている。

(:ドネリー著作 **The Great Cryptogram: Francis Bacon's Cipher in Shakespeare's Plays** にあっては読み手が一廉の人間であり、手持ち知識・情報にて充分なる援護射撃をなそうと考えた場合でも

[判読に一定以上の知能を要するとの論理「そのもの」]

に無視しがたい固有の欠陥がついてまわっており(暗号解読、デコードの式でシェイクスピア戯曲にベーコンのメッセージングが入れ込まれているとの主張にあってのその暗号解読の方式それ自体にこじつけがましいにも程があるとの欠陥がついてまわっており)、それがゆえに、全幅の信に値しないとのものとなっているとことがある。

にまつわって現代にあって

[ (ドネリーが主張するところの暗号解読方式との) 同じくもの臭い]

を感じさせるものを挙げれば、である。近年、世界的にヒットし、かつ、日本にても世間に妄言・妄覚の類を広めんとするが如き筋目の者達(そういう役割を特段に負わされた相応の臭気を放っている者達)に担がれているとの書籍、元ワシントン・ポスト、ウォールストリート・ジャーナル記者であったとのマイケル・ドロズニン( Michael Drosnin )がものした、[**壮大な nonsense**]

といった評されようもなされている著作、

**The Bible Code『聖書の暗号』**(訳書は新潮社刊)

という書籍およびそこに見る主張のことが挙げられもするであろう(とここでは付記しておく)。

ドロズニンの手になる直上言及の著作『聖書の暗号』については、

[ヘブライ語聖書に未来予言を兼ねての暗号が含まれている]

(e.g.オズワルドによるケネディ暗殺やロバート・ケネディ暗殺にまつわる未来予言を兼ねての暗号などが[ヘブライ語聖書]に含まれている等等)

といった「相応の」主張を支えるべくものこじつけ論理を[暗号解読方式]で展開しているとの側面がとみにみとめられる。

以上、ドネリーの往時のやりようの現代版であるとの式で引き合いに出した **The Bible Code『聖書の暗号』** については、ただ、その委細に踏み込まない、踏み込む必要もなからうと筆者は判じもしている ——そこに見る暗号解読方式としては **EquiDistant Letter Sequences** こと **EDLS** ないしは **ELS** という[等距離文字列抽出方式](一定量の原文から等距離の文字列を抽出するとの方式)が採用され、それによって完全な文章がいくつも「特定」され、聖書の中にての予言的言及が捕捉出来るようになっているなどとの主張がなされていると言及だけはしておく——。その点、ドロズニン『聖書の暗号』については反対意見を表明しての論客(ブランダン・マッケン Brendan McKay という大学人など)から

[「ハーマン・メルヴィルの **Moby-Dick『白鯨』** から同じくもの式(ドロズニンが聖書から暗号を引き出したのと同じくもの式)で「暗号」の解読を導き出せるようになっている]

との批判を同著者(ドロズニン)呈示の暗号解読方式(EDLS)それ自体に準拠して呈示されるかたちとなっており、かつもって、[「人を笑わせる(失笑させる)、それでいて、思索をもたらす」との意味で悪名を馳せた者]

に与えられる賞、[イグ・ノーベル賞]の1996年ドロズニン受賞にもつな



がっているとのことだけ申し述べれば十分である(そして同著委細には踏み込まない)と筆者は判じているのである——『聖書の暗号』内容が一体全体、どのようなものなのか、そして、そこにみる[露骨なる妄言]を広めるのにどういう筋目の者達が国内外で一助なしているのかも含めて各自で確認されてみるのがよからう、と思う(尚、筆者は【数千年前から文言変転を見ずにそこにあるとされる書物】(聖書)に【数千年後の出来事】の予言が人名(役者名)込みにも事細かになされているなどとはありえなからうと考えているのだが(そのようなことは超高度コンピューターでも予測できなからうし、そも、予測する必要もない)、ただし、プログラミング computer programming の世界で言うところの [Easter Egg; 隠しコマンド発現型愉快犯要素] としての [近年に実行スキーム(処理手順)が定義・構築された自己成就予言 (self-fulfilling prophecy)] が実演されていること、いわゆる [自作自演]での [聖書に範を取っての演出] が人形のような者達らを操って [神なるもの] の振りすらする性質悪い存在によってなされているとのことまでは可能性論として否定しきれなからうと考えている「とも」断っておく)。その点、さらに述べれば、数千年前の書物(ヘブライ語聖書)に数千年後の社会にての微細なる出来事経緯の予言(オズワルドによるケネディ暗殺等々の予言)が具体的人名込みに含まれているとのことなどを殊更に強弁するような愚書・悪書の類(脳が正常に働いているとの人間には見るに堪えがたい愚劣な書でもいい)が何故にもってしてありとあらゆる[より問題となる明瞭とした「予見的な」ことら]が脇に捨て置かれている中で世界的ベストセラーになりえたのか、そこからして、この世界の現状について推し量りただければ「なにより。」とも考えている(なお、世界的ベストセラーになったとの『聖書の暗号』を著してのドロズニンが受賞した Ig Nobel 賞とは Ignatius Nobel「イグナティウス・ノーベル」なる人物の遺産によって運営されているとの[設定]も付与されているが、実体は英語の ignoble「恥ずべき、不名誉な」との語に淵源を持つ賞である)—— )

さて、19世紀後半から20世紀初頭にて屹立していた卓抜した識者たるイグナティウス・ドネリーという人物、[アトランティスに仮託されるような古代の文明共通基盤が存在していた]との主張をなしたことで最大限知られているイグナティウス・ドネリーという人物が(下に批判のなされようについてだけは紹介しておくとの)[ベーコン＝シェイクスピア理論]にまつわる「問題ある」主張——近年にあつて「も」同文の「暗号解読」にまつわる主張が時折なされては物議を醸しているとのことを紹介すべくも直前、マイケル・ドロズニン著書『ザ・バイブル・コード(聖書の暗号)』にみるありようを挙げもしたとのところの(暗号論を時宜に適っていないやりようで用いてしまったとの)「問題ある」主張—— をなしていたとしても、である(※)。

(※ドネリーの主張が往時にてどういう評価を受けていたのかについての紹介を下になしておく。

その点、上にその表紙絵を挙げている批判論稿 The Little Cryptogram にあつてはドネリー呈示の暗号解読手法に対する高等批評が講じられており、そこではシェイクスピア劇 Midsummer Night's Dream 『夏の夜の夢』にての妖精パックの台詞、

“What fools these mortals be.” 「これら死すべき定めを負った者達(人間ら)のなんと愚かなことだ」

との台詞に結語を収束すべくもさせるべくも痛烈な Irony 皮肉として、



**“ It is simply impossible that this combination of unusual words, “Donnelly,” “politician,” “author,” “sage,” all jostling each other in passages introduced without relevance to the play, should be an accident. It is deep design. Bacon, looking forward with more than mortal prescience, saw the day when his deliverer would come.** And in anticipation of this event, he put into his greatest play, by means of the cipher, the prophecy that is now fulfilled. By one act of transcendent genius, he made it impossible for anyone to reject the revelation which his interpreter should make in the fulness of time.” (訳として) 「 [ドネリー (Donnelly)] [政治家 (politician)] [著述家 (author)] [賢者 (sage)] と いった (往時には) 通常用いられない語句らの組み合わせが何らかの関連性なくして「シェイクスピア劇に導入されている」 (正確には「ドネリー提唱の暗号体系 (なるもの)」に基づいて語句変換されたうえでは導入されているとの「解釈」が出てくる) というのが偶然であるなどというのは不可能である、そのように端的に言うより他はない。こうもした [ことの仕儀] を受けて期されるところから、「彼」(シェイクスピア) はその偉大なる戯曲に暗号との式で「現在」(ドネリーが解読をなしたと主張しての折柄をもってしての「現在」) にてその解読が達成されることになったこと (自体にまつわる言及) を入れ込んだのだ。(シェイクスピアの真なる姿である) ベーコン生年の前科学的ありようを越えもしての未来予見の術にて彼の伝えんとしたことが達成される目を見ていたのである。類稀なる演出の才にて彼シェイクスピアたるベーコンは誰であっても否定しがたいとの [黙示] (注: この場合、revelation は聖書の黙示録レベレーションの語源にも鑑みて [暴露] ではなく [黙示] と訳すべきと判じた)、[彼の作品の解読者が時が満ちてなすべくこと] にまつわる [黙示] をもなしえていたのである」

といった申しようがなされていること、挙げれば、それで十分か、とも思う—ドネリーの暗号解読方式を実践すると [ベーコンによるシェイクスピア戯曲の真作者としての執筆の声明 (と見受けられるもの)] だけではなく [シェイクスピア解読家にして政治家かつ著述家であるイグナチウス・ドネリーのありようへの予見的言及 (と揶揄されてのもの)] すらもが浮かび上がってくる、であるから、おかしかろうとの論理である— )

---

イグナチウス・ドネリー著書にそうした問題ある主張がとみにみとめられる、そう、イグナチウス・ノーベル Ignatius Nobel 賞とも言われるイグノーベル賞一九九六年受賞の The Bible Code『聖書の暗号』ドローズニ「的」やりよう (completely nonsense なるやりよう) が仮に見てとれても、である。

イグナチウス・ドネリーの主張を支える論拠までもが全部全面で信に値しないとのことにはならないとのこと、強調しておく ( : 先に述べたことを繰り返すが、筆者のスタンスはドネリーの申しようが正しいか正しくないかを問題視ではない ( **my point of view: Whether viewpoints seen in ATLANTIS THE ANTEDILUVIAN WORLD (by Ignatius Loyola Donnelly) are proper or not, it makes no difference** ) とのものである)。

ここ本稿では細かくも補いながらも [おなじくものこと] (ドネリーの全ての言い分が棄却に値するわけでないとのこと) が明言できるだけの詳述詳解をなしていること、強くも断っておく — 本稿筆者自身は元来、[何も考えぬ愚かな野人] であつたところをひたすらに自己進化なさんとしてきた人間であるつもりなのではあるも、宗教的な徒輩に好まれるような申しようを

用いれば、「槃特(はんどく)が愚痴もこれ文殊の知恵」(愚人も正しく修養なせば、智者たりうる)とのことは残念ながら世間一般の人間には当てはまらない(システムの問題などにて[精神の実質を後天的に毀損・去勢された者ら]などにはなんら当てはまらない)、そして、といった中で、いくらもってして微に入っただけの解説をなしても「後天的」白痴・「実質的」死骸の群れの中にあっては聞く耳もなし、無為も甚だしいことであるとの認識「も」ある(徐々にといった認識が筆者の内実を蝕んでいる)のだが、とにかくもきちんと詳述詳解をなしていること、強くも断っておく(※)——。

(※さらに書いておけば、「シェイクスピアの真の正体である」などとイグナティウス・ドネリーに主張されていたフランシス・ベーコンがいかような人物なのかについては——[同人物ベーコンが今日のフリーメーソンの紐帯の根本教理(ソロモン神殿を社会の中核に据えての教理)に記号論的に深くも接合することをいかように主張していたのか][同人物ベーコンが核として主張していたことが[養殖種]の末期にいかように関わると判じられるのか]とのことも込みにして——「具体的」「客観的」なる詳述詳解(是非とも[批判的検証]および[真っ当なフィードバック]を期待したいとの詳述詳解)「をも」本稿では都度、なしていくことになるとも先立って申し述べておく)

(くぐぐと長く、余事記載も少なからずなしてしまったとの)取りあえずもの補足はここまでとする

いくつかの出典紹介部を内包させてのさらに「長くなるも、」の注記として

直上からして延々と脇に逸れての補足表記をなしもしてののだが、「さらにもってして」「本題から逸れての傍論として長くなるも、の注記」をなしておくこととする(：その趣意は本稿が相応の著作を出典として挙げていることに起因する誤解を避けること、および、後の段に関わるところの伏線を張りもすることにある)。

さて、直近引用をなしているとの **Atlantis: The Antediluvian World** 『アトランティス大洪水前の世界』(本稿公開サイトの一にあっての他所にても言及の著作) の中にて同著者イグナティウス・ドネリーは次のような申しよう、

[一見にして「史的論拠を一切伴わぬ下らぬ申しよう」(ridiculous)ではないのか? と看做されうるような書きよう]

をも 一同時代人の他者の見解を踏襲しているのか形態にて— なしている。まずもってのこととして下にての出典紹介部にて紹介するような式にて、である。

# SOURCE

## 41(2)



ここ出典 (Source) 紹介の部 41 (2) にあつては

[イグナティウス・ドネリー著作 *Atlantis: The Antediluvian World* 『アトランティス大洪水前の世界』にあつては — 中途半端なものながらも — それなりに歴史知識を蔵した人間に ([誤信] に基づいての) 軽侮・愚弄を招きかねない記述が含まれている]

とのことを示すための引用をなしておく ( : そうもした引用をなすのは次のことを訴求するためでもある ⇒ 「一見にして誤解を招くような箇所であつて「も」関連するところに通じた本当の歴史通「には」軽侮されるようなものではない、そう、きちんとした古文獻に依拠しての申しようとなっている。ために、ドネリーの当該の著作からして半面で軽んじざるべきものである」)。

(直下、*Atlantis: The Antediluvian World* 『アトランティス大洪水前の世界』にての Part IV. *KINGS OF ATLANTIS THE GODS OF THE GREEKS* の部、p.289 よりの抜粋として)

One account says: "Hyperion, Atlas, and Saturn, or Chronos, were sons of Uranos, who reigned over a great kingdom composed of countries around the western part of the Mediterranean, with certain islands in the Atlantic. Hyperion succeeded his father, and was then killed by the Titans. The kingdom was then divided between Atlas and Saturn--Atlas taking Northern Africa, with the Atlantic islands, and Saturn the countries on the opposite shore of the Mediterranean to Italy and Sicily." (Baldwin's "Prehistoric Nations," p. 357)

(補つての拙訳として)

「一つの説明のなされようとしてはハイペリオン、アトラス、そして、サトゥルナス (サターン) すなわちクロノスらの各人は

[地中海西部の周辺、アトランティック上の (大西洋にあつての) 特定の島々と紐づく国家らよりなる巨大な王国]

を支配していたとのウラノスの息子らであるとされている (注:ウラノスというのは

神話上、ハイペリオンやアトラス、そして、サトゥルナスことクロノスらタイタンらの父親となっている原初の天空神のことである)。

ハイペリオンは彼の父親の跡を継ぎ、それよりタイタンらに殺傷された。王国はそれよりアトラスとサトゥルナスの二者によって二分割され、うち、アトラスが大西洋の島々を含むアフリカ北部を領し、サトゥルナス(サターン)がイタリアとシリアに至る地中海の対岸沿岸部を領するとの形での二分割をなした(ポルドウィン著『先史時代の国家群』p.357より) 」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source)紹介の部 41(2)**は以上とする)

---

最前・直上にて引用なしの部は(最前の段にてイグナシヤス・ドネリー著作 **Atlantis: The Antediluvian World** の特定部内容を引用、問題視してきたなかだからこそ述べるのだが)、殊に、

「重きを置くには足りない」「信用の置けぬ」

との **Atlantis: The Antediluvian World** という著作が低くも見られうる、そう、[信の置けぬ馬鹿げた記述] と [ある程度、神話について通じているとの高等「教育」を受けた人間ら] には見られうるどころかとは見ている (実際には「そうとは言えぬ」とのことある、後述するような euhemerism こと [エウヘメルス主義] との兼ね合いで問題になるようなこともあるのだが、皮相程度のものであれ、世間的にある程度の神話伝承にまつわる知識を有しているとみられるような人間の視点を慮って申し述べるところとして、である)。

神話学や伝承に対する多少の知識が中途半端にでもあるとの向きならば、

[プラトン古典などに見るアトランティス伝承に対する理解]

[ギリシャ神話体系に対する一般的理解]

にまつわってのこと以前に上の申しように見る逸脱性から話が[奇異たるに留まるもの]と映ることか、と判じられるようになって「いる」のである —— 具体的には、である。上の引用部に見る記述につき、「ハイペリオンやアトラスやサトゥルナスやクロノスは神の名前(よりもって正確に述べれば、ゼウスらとの権力闘争に敗れた古き神々たるタイタン)であって現実世界の領土問題に史的に関わっていたような存在ではない」「現在、日本にての新興宗教が往古の神々の名を使って荒唐無稽な自前の神話体系をでっちあげているが(そしてどういうわけなのか多くの人間がそうした[教義]を容れている素振りを見せているが)、19世紀末のアメリカからしてそういう愚にもつかぬ思潮でもあったのか」といったものの見方が(皮相程度の)識見があるとの人間には呈されるところか、と判じられるところである —— 。

さらに述べれば、イグナティウス・ドネリーの当該著作 (本稿にて記述内容を問題視し、また、本稿を公開することとしていたサイトにてより従前より取り上げていたとの著作 **Atlantis: The Antediluvian World**) に見る上のような記述をダイレクトにピックアップし、そうした申しよう —— ([大西洋の先]の領域などほとんど考えられることもなかった古代世界にてクロノス・アトラスらが世界の統治権を分割しあった、などという神話解釈論にて「一般に聞かれることもない」といった申しよう) —— を

[類型化された宗教家・神秘家ら特有の駄法螺としての話柄]

と殊更に同一化してオンライン上に流布する、印象操作するが如く流布するとの式のことを「どういう意図でか」ここ日本国内(オンライン上流布情報にての総じての知的水準を見る限り、惨憺たる空虚さを感じざるをえないとの日本国内)ですら不自然にやっているとの者達を事後的に特定している(筆者が



本稿執筆段階から見て何年も前にオンライン上にて[反応探査]の探針として挙げていたとの情報にてドネリーのことを引き合いにだしていた折柄から見て「事後的に」特定している)とのことがあるがため、同じくものありべき他者心証——「ドネリーという輩は胡乱(うろん)極まりない話をなすおかしな類にすぎなかった」との心証——がよりもって惹起されやすきところか、同じくもの反応を助長するよう仕向ける[力学]でもあるのか、と見て「も」いる(：「筆者は本稿を公開している自サイトの一を巡る言論動向の変遷を録画までなして精査してきた」(そう、「偏執的に」と見られるようなかたちで精査してきた)とのことを申し述べ、そうしたことをなしたとの背景について本稿の先だつての段で一言ながらも申し述べているわけだが、そうした挙の中で今までそこに見受けられなかったところを「事後的に」特定したところとして、より従前より筆者が自身のサイトにて取り上げてきたとの表記著作 Atlantis: The Antediluvian World に関して最前にて原文引用なしたような記述内容が含まれていることを殊更に取り上げ、オンライン上で確信犯的にか、ドネリー著作をもってして[馬鹿げた神秘主義者由来の著作]に留まるものであるように[褒め殺し方式]で取り上げているような者達の媒体——「日付偽装」もお手のものといった媒体を展開しているとの相応の者達たちの国内媒体——を特定しているとのことがある——構築者らの質・程度からはそれが自力でできるとは思えぬところで印象操作なしつつも隙間を埋めるべくもあるようにそこにあると判じられる相応の媒体(筆者媒体にも色を付けようとしてきた者達の媒体でもある)の中の、ここで問題視しているような特定ページの残置については請け合わない。尚、筆者は計算してときに神秘主義者「的な」申しようをなすこともあるとの人間とはなるが、本質的には神秘主義の類を軽侮している人間となる(本稿にての折に触れもしての書きようからその旨、理解いただけるかと思う)。すなわち、「世間一般の神秘主義者とはその大半が相応の人間ら、偽りばかりの世界でアンダードッグ(わざと負けるべくも用意された噛ませ犬)として駄法螺を撒布し、メインストリートの偽りを[まだましなるもの]のように見せる役割を負っているにすぎない者達である」と見ている人間ともなる——)。

脇に逸れての話(注記の部)の中でのさらに脇に逸れてもの話として要らぬことに筆(と筆を走らす時間)を割きすぎたとの感もあるが、(引き戻して述べるどころとして)、先にて引用なしたような[頓狂さ]が際立つと見られかねないドネリー著書にあっての申しよう、再度引用するが、

**One account says: "Hyperion, Atlas, and Saturn, or Chronos, were sons of Uranos, who reigned over a great kingdom composed of countries around the western part of the Mediterranean, with certain islands in the Atlantic. Hyperion succeeded his father, and was then killed by the Titans. (訳として)「ハイペリオン、アトラス、そして、サトゥルナス(サターン)すなわちクロノスらの各人は[地中海西部の周辺、アトランティック上の(大西洋にあっての)特定の島々と紐づく国家らよりなる巨大な王国]を支配していたとのウラノスの息子らであるとされている」**

との申しよう「にも」史的見解の変遷および往時の見識を受けてのこととしてのそれなりの史的背景があるのもまた事実である、そう述べられるだけのことが「ある」。

同じくものことについては文献的事実の問題としてドネリーの(先に原文抜粋の)書きようを支えるだけの、

**[往古の著述家の古典内容([文献的事実])に依拠しての申しよう]**

が存在しているとのことがあるので、その点、解説しておく。

さて、——そこから言及するのが妥当であろうと判ずるためにそうするところとして——イグナティウス・ドネリーの Atlantis: The Antediluvian World 『アトランティス大洪水前の世界』にあっての(最前の出典(Source)紹介の部 41(2))にて引いた)問題となる申しよう、

「(一つの説明のありようとして)ハイペリオン、アトラス、そして、サトゥルナス(サターン)すなわちクロノスらの各人は地中海西部の周辺、アトランティック上の(大西洋にあっての)特定の島々と紐づく国家らよりなる巨大な王国を支配していた(との見立がある)」



との申しようの出典としてイグナティウス・ドネリーが挙げている著作は

### Prehistoric Nations

という著作となるのであるが —— (同 **Prehistoric Nations**、『先史時代の国家群』とで訳せよう著作は英文 Wikipedia にも同人物解説のための一項が設けられているとの 19 世紀の政治家にして考古学分野の著述家である John Denison Baldwin という人物の手になる 1874 年刊行の著書となり、インターネット・アーカイブのサイトなどを通じて全文、オンライン上より作者および著作名の入力で PDF 版がダウンロードできるとのものでもある) —— 、同著『プレヒストリック・ネーションズ』それ自体からして —— 何の証明力もないとのことで [人類の進歩進化にとってノイズとしかならぬもの] しかばらまかぬ神秘家という人種ら由来の駄法螺とは異なり ——

[一面でながらきちんとした史的論拠に依拠して記されている]

とのものとなっているとのことが「ある」。

(:意欲、すなわち、裏取りをなすだけの能力を支えるとの気風が無き人間、それでいて、金太郎飴式教育および教育による選別システム (社会の良き構成要素・部品を選別 / 生成する流れ) にあって刷り込まれるとの [歴史関連の情報] (それが真実であるかは問わずにの過去世界にまつわる情報)、そちら暗記を強いられる歴史関連の情報に産毛が生えた程度の [皮相レベルの教養] を有している向きらなどにあっては

「ハイペリオン、アトラス、そして、サトゥルナス(サターン)・クロノスらの各存在(お受験知識にほんのすこし毛が生えたようなところにて知られるギリシャ神話の古の神々の名を冠する存在)が地中海西部の周辺、アトランティック上の(大西洋にあつての)特定の島々と紐づく国家らよりなる巨大な王国を支配していた(と伝わる)」

といった書籍内容を [頓狂なこと] と見なし、そこに [古典上の論拠] が存在し、それら論拠がきちんと呈示されうるとのことなど、理解も及ばないところか、とは思ふ。思うのであるも、とにかくものごととして、同じくもの記述からして [古典上の論拠] が存在するとのことがある —— 尚、さも分かったように [金太郎式促成養成の知識に産毛が生えたような皮相レベルの教養] を持った人間ありようのことを引き合いに出したが、その伝で言えば、筆者にも同じくものことで予断偏見に囚われる素地はありはした。(無用なる手前語りをなすようで何なのであるが) [歴史関連の「教養」] (なるもの) とのことでは、別段、筆者は特定時代・特定地域にまつわる歴史を大学などで講ずるといった筋目の人間ではないわけだが (そも、そんな不毛な選択をなそうと思ったことさえない)、愚かなりし学生時代のこととして、そう、司馬遼太郎の [フィクション] としてのヒロイック歴史小説などを読むなどして青雲の志を抱いていた気になっていたとの高校時代、その志を達するため、(ええかっこしいも行き過ぎであると思うので個人の欲目を赤裸々に交えて述べれば、[違和感を感じさせてならなかったとのこの世界で周囲に気兼ねなくもの [変人] として振る舞いつつながしかのことを成せるとの地歩を得る] ために)、この身からして東大模試の全面記述式答案で確実に東大に受かれるぐらいの [世界史] 科目の東大模試の偏差値を引き出すに至るまで [先入観の下地となる下らぬ不必要な情報] の吸収を「嫌々ながらも」「ダサく無為なること限りなしだな、と思ひながら」自分に課していたとのダークエイジ、[暗黒時代] が (偽りの世界に眩惑されきっていた未熟期のこととして) ありもする、それがゆえに、メインストリートで担ぎ上げられる歴史にまつわる知識体系でもって多くの物事を判じようとの通弊に陥る素地は自分自身にも「あった」とのことがある (がゆえのおもんばかりなしでの記述をなしている) とのこと、申し述べておく (尚、ここでの東大云々の

そのような物言いをなすは[ただの愚人]であるとの認識をも当然に筆者は蔵しているのだが、秤量のうえ、といった申しようをもなすこととしたとも申し述べておく。すなわち、「泡沫うたかた・仮現の社会システムの奴隷としての表向きの上下関係を決するパラメーターの一たるもの(歯車を[情報処理能力]および[素直さ]に基づき適正配分するための基準)に過ぎぬところに[愚かなりし自尊心]をもってこだわっているとの誤解もやむなしであろう、そういう俗物染みた鼻につくような話柄である」とのことは重々承知のうえで、だが、[歴史家でもないのに『分かったような話をしてくれるね』とのありうべき読み手目分量]を減衰させるべくもの書きようを「選択」することにしたとのことがある)—— )

引用表記なしたことにあつての[一見する限りはもってしての奇態なる記述]にも史的典拠が伴うとのことに関わるところとして、である。ドネリー著作の典拠とされている Prehistoric Nations (繰り返すが、同著 Internet Archive のサイトなどにて全文閲覧できるとの書籍でもある)の p.356 の内容を引けば、以下紹介するようなかたちにて

「ハイペリオン、アトラス、そして、サトゥルナス(サターン)すなわちクロノスらの各人は地中海西部の周辺、アトランティック上の(大西洋にあつての)特定の島々と紐づく国家らよりなる巨大な王国を支配していた」

との記述(ドネリー著作にもそれが見受けられる[頓狂さ]が際立つ部)にまつわる古典上の典拠が呈示されているとのことがある。

出典(Source)紹介の部 41(3)

# SOURCE

## 41(3)



ここ出典(Source)紹介の部 41(3)では

「ハイペリオン、アトラス、そして、サトゥルナス(サターン)すなわちクロノスらの各人は

地中海西部の周辺、アトランティック上の(大西洋にあつての)特定の島々と紐づく国家らよりなる巨大な王国を支配していた」といった申しようにも古典それそのものに見る論拠が伴っている]

とのことの典拠紹介に入ることとする。

(直下、Internet Archive のサイトなどにて全文閲覧できるとの Prehistoric Nations の p.356 より引用なすところとして)

---

**Diodorus Siculus and others point out that the ancients held two opinions concerning the gods; some saying they were always heavenly and incorruptible, and others that they were originally of earthly origin, being deified men who were worshipped as forms or representations of the Supreme Being.**

(訳として)

「シケリアのデュオドロスらをはじめとする他の者らは古代人らは神々に対する二通りの見解を持っていた旨、指摘している。神々は天上にあつて常に不朽なる地位にあつたと述べている者達がいる一方で、他の者らは彼ら神々は[至高存在の体現存在ないし代理存在としての聖別された人間]であり、この地上にあつての起源を原初的には持っていたと述べているのである」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

**出典(Source)紹介の部 41(3)**は以上とする)

---

さて、上にての引用部([古の神々をして現実世界の古の人間の体現存在である]とするとの見解があつた古代にはあつたとのことが記載されての引用部)にその名が挙げられている、

Diodorus Siculus こと [シケリア(シチリア)のディオドロス] (シーザーが生きた紀元前1世紀ローマ時代にあつてのギリシャ系著述家)の著作 ——ここではオンライン上より誰でも確認できるところの英訳版(訳者名が付された Diodorus of Sicily, with an English translation by C.H. Oldfather (『シケリアのディオドロスの英訳』)との語句のそのままの入力でインターネット上より容易に特定できよう著作——

にあつては

[Philological truth [文献学的事実] (その内容正否は問題にならないが、古文献にそのようなことが記されているとの記録が残っていることは事実であるとのこと) の問題]

として次のような記載がなされている。

---

**出典(Source)紹介の部 41(4)**

# SOURCE

## 41(4)



ここ出典 (Source) 紹介の部 41(4) にあっては

[アトランティス領域にあって [古の神々] を古代の「人間の」権力者の象徴存在とするとの書きようが古文献それそのものになされている]

とのことの典拠を挙げることにする。

(直下、オンライン上より全文特定できるところの古文献 Diodorus of Sicily, with an English translation by C.H. Oldfather 『シケリアのディオドロスの英訳』よりその記載内容を抜粋するところとして)

---

After the death of Hyperion, the myth relates, the kingdom was divided among the sons of Uranus, the most renowned of whom were Atlas and Cronus. **Of these sons Atlas received as his part the regions on the coast of the ocean, and he not only gave the name of Atlantians to his peoples but likewise called the greatest mountain in the land Atlas.**

(訳として)

「ハイペリオンの死後、(地上にあっての巨大な)王国はウラノスの子息ら、そのうち、最も名が知れ渡っていたのはアトラスとクロノスだが、彼らウラノスの子息らによって分割された。それら子息のうちアトラスは彼の大洋の沿岸部の領域を継承、自身の統治下には入った領民にアトランティア(アトラスの民)との呼び名を与えただけではなくアトラスの地にある最も巨大な山にも同様のことをなした」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上より

[ギリシャ神話の(ゼウスの祖父にあたる)ウラノス、そのウラノスらの子息となっているタイタンら(アトラスやクロノスといった存在)がかつての地上にての古の王国の為政者であった]

などという見立てが



[普通一般ではまったくもって聞かれぬところの話]

ながら古典それ自体にて言及されるところとなっていること (換言すれば、そう見えはしても「馬鹿げた現代の神秘家・宗教家の類が手軽・勝手にこさえた設定」では済まされない古文献上の記述とまではなりもしていること —そうしことが現実にあったが問題ではなくそうした申しようが古(いにしえ)よりなされていたことが差し当り問題となりもするとのこと—) を示した (尚、表記引用部では [タイタンのアトラスの淵源になっている伝承上の人界にての存在がアトランティス比定地の管掌者となっていた] などとの表記がなされているが、プラトン古典、本稿でも先立ってそちらよりの原文引用なししているとのプラトン古典 Critias 『クリティアス』にあってはアトランティスの元を造ったのは(人間などではなく)神たる海神ポセイドン Poseidon であるとされており、そのポセイドンに[開闢王]として「人間の」(タイタン・巨人のアトラスの名と同じくもの名を冠した)アトラス王が据え置かれたためのアトランティスであるとの表記がなされている)。

(**出典(Source)紹介の部 41(4)**はここまでとする)

これにてお分かりだろうが、

「ハイペリオン、アトラス、そして、サトゥルナス(サターン)すなわちクロノスらの各人は地中海西部の周辺、アトランティック上の (大西洋にあっての) 特定の島々と紐づく国家らよりなる巨大な王国を支配していた(との話がある)」

といったドネリー申しようからして

「世間人並み以上の歴史的理解がある人間であればある程、そう看做しかねないところながらも、ドネリーの妄想(妄想は言い換えれば、[頭の具合のよろしくない神秘家のたわごと・ざれげん]ともなる)などでは断じてなく、また、ドネリーの出典となっている著述家ボルドウインの妄想でも断じてなく、本質的には

[紀元前 1 世紀に生きたとされる著述家 (下にて言及の **euherism** [エウヘメルス主義] という古典時代より存していたとの史観の体现者であった[シケリアのディオドロス]という著述家)の著作に見る [文献的事実] としての見解を踏襲しているとの物言い・古典上の典拠を帯びての物言い]

となっている」

とのことがあり、そこからして彼ドネリー申しようは [馬鹿げた話を展開するとの相応の類] (真実や客観的証明に対する破壊をなさんといった水準低き神秘主義者のような類) が勝手に [論拠もない] とのかたちで彼らお得意の馱法螺を吹いているとのその式とは一線を画するものとなっているとのかたちとなっている — 中途半端に識見を蔵しており、それがゆえに、物事をときにもってして歪んだ視点で見るとの向きの特質をおもんばかつたうえでいちいちもって付記するところとして、である— 。

(その点、(延々とマイナーなる、込み入ったの話をなすようではあるが、「それとてもが本稿にての訴求事項に関わる」との認識で述べておくこととして)、上のように神話にあってのタイタンら、そうした神話的存在らをして

[かつて君臨していた人間の統治者を神に転化させての存在]

と看做すとの思潮は古代ローマの時代である古典期より一部にあり、Prehistoric Nations という著作 — イグナティウス・ドネリーの Atlantis: The Antediluvian World の出典とされている著作とのことで最前にて内容を取り上げた著作— にもその名への言及がなされているとの [シケリアのディオドロス] だけではなく和文ウィキペディアにすら解説一項目設けら



れている [エンニウス] こと [クイントゥス・エンニウス]、紀元前 1 世紀のシケリアのディオドロスより遡っての(帝政期以降前の)共和政期ローマの著述家の手になる著作エウヘメルス (Euhemerus)にも同様のこと、

「神々として伝わっている存在の実態が現世・人界にあって際立った事績を遺した大昔の権力者らであった」

との見解が古代より呈されていたとのことが一部の識者には知られているとのことがある(：史家クイントゥス・エンニウスの著作エウヘメルスに由来するところとして euhemerism こと [エウヘメルス主義] との思潮が [多神教の神々は人間のより往古の歴史の合わせ鏡として生み出された存在である] とのものとして存在しており、については、比較的充実した解説がなされているとの英文 Wikipedia [Euhemerism] 項目の冒頭部にて “ Euhemerism is a rationalizing method of interpretation, which treats mythological accounts as a reflection of historical events, or mythological characters as historical personages but which were shaped, exaggerated or altered by retelling and traditional mores. ” (訳として)「エウヘメリズムとは[神話上の物言いを歴史的イヴェントの反映として扱う]、あるいは、[神話上の存在らを改変見ての物語あるいは伝統的規範のありようにて形作られ、誇張され、変質なさせられてきたとの歴史的個人らとして扱う]との解釈論にての理由付け手法となる」との表記がなされているところでもある)—— )

さらに、本稿これよりの内容への[布石]を兼ねもして、奥へ奥へと進んで取り上げれば、である。

**Atlantis: The Antediluvian World** 『アトランティス大洪水前の世界』原著 (オンライン上よりPDF形式でダウンロードできるとの著作) の p.82 にあって ——原文引用なすところとして—— 次のような表記がなされているとのことを「も」格別に問題視しておきたい。

出典 (Source) 紹介の部 41 (5)

# SOURCE

## 41(5)



ここ出典(Source)紹介の部 41(5)にあつては

[洪水を警告した神と古代人に解されていたクロノス神に由来する [クロノスの海] (なるもの) が古のアトランティス伝承と結びつくだけの背景がある]

とのことを紹介しておく。

(直下、Atlantis: The Antediluvian World を原著(スキャンなされての PDF ファイル形式のものも公開されているとの著作)にての p.82 よりの原文抜粋をなすとして)

---

In the first place, Berosus tells us that the god who gave warning of the coming of the Deluge was Chronos. Chronos, it is well known, was the same as Saturn. Saturn was an ancient king of Italy, who, far anterior to the founding of Rome, introduced civilization from some other country to the Italians. He established industry and social order, filled the land with plenty, and created the golden age of Italy. He was suddenly removed to the abodes of the gods. **His name is connected, in the mythological legends, with "a great Saturnian continent" in the Atlantic Ocean, and a great kingdom which, in the remote ages, embraced Northern Africa and the European coast of the Mediterranean as far as the peninsula of Italy, and "certain islands in the sea;" agreeing, in this respect, with the story of Plato as to the dominions of Atlantis. The Romans called the Atlantic Ocean "Chronium Mare," the Sea of Chronos, thus identifying Chronos with that ocean. The pillars of Hercules were also called by the ancients "the pillars of Chronos."**

(補いもしての拙訳として)

「最初に述べるが、ベロソス(訳注:バビロニア史を遺したことで知られる紀元前三世紀の著述家ベロソス/同ベロソスについては後の出典紹介部でもその伝わるどころの伝承を一次資料そのもの(に対する英訳文書)より引用なすこととする)が我々に語っているところの洪水(訳注:往古の伝承にて問題視される洪水と同義のもの)の到来を警告した神はクロノスである。クロノスはサターン(サトルゥナス)と同一の存在であることはよく知られている(訳注:この場合のサターンとは現行英語にての土星呼称ともなっているローマ由来の土星神格化存在のことを指す)。サターン(サトルゥナス)はローマより遙か前に遡る往古イタリアの王であるともされ、他の文明をイタリアに移植した存在である。彼は産業と社会位階を確立、大地をして富で満たし、そして、イタリアの黄金時代を創始した。(その後)、ほどなくして急遽、サトルゥナスは[神話上の存在にすぎぬもの]へと取り除かれた。同サトルゥナスの名前は[アトランティック・オーシャン(要するに大西洋)にあった偉大なる(ものとされる)サトルゥナリア大陸]、そして、「偉大なる(ものとされる)王国、すなわち、往古、イタリア半島そして数々の島々のみならず北アフリカと地中海のヨーロッパ側に抱かれるように位置していたとの偉大なる(ものとされる)王国」と結び付けられており、また、サトルゥナスの名前はこのような観点に沿うところとして[プラトンのアトランティス統治体に言及している物語]とも結びつく。ローマ人はアトランティック・オーシャン(大西洋)をしてクロニウム・メア、[クロノスの海]と呼び、大洋を[クロノス](サトルゥナス同一存在)と結び付けていた。また、ヘラクレスの柱(地中海と大西洋を分かちジブラルタル海峡の寓意物)は[クロノスの柱ら]とも古代人に呼ばれていたのである」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上にて引いたようなドネリー物言い、

「大西洋はクロノスの海である」

「クロノスの島が大西洋上にある」

といった申しようがイグナシヤス・ドネリーになされるような史的背景が果たして本当にそこにあるのかとのことについて「も」この身は出来る限り調査してきた——「というのも、」苔むした、とのレベルを越えて、ほぼ風化せんとしているといった按配でのそうした見方が今日にあっても顕在化している問題に関わっている、正確に述べれば、関わるように「されている」と判断できるだけの「寓意付け」が「特定の領域」にてなされていると判断なすに至ったとのことがあるからである——。

その点、[文献的事実]の問題、著名なローマ時代の著述家プルタルコス——頭の具合のよろしくはないとお受験スタンダードで見れば、皮相的知識の暗記(インプット・アウトプット能力)の深度が重んじられる日本の私大入試では暗記事項となっているとの歴史上の著名人——の大著 *Moralia* 『倫理論集』内やプルタルコス著作『博物誌』内に「クロノスの海」にまつわるドネリー著作内申しようを裏付ける記述があるとのことを手前は把握するに至っている(と述べるうえで当然のこととして、この身は「国内で流通を見ていない」古典の近代英訳版原著記述をも(少なからぬ読解量にて)紐解いている)。

例えば、である。プルタルコス著 *Moralia* 『倫理論集』、現行オンライン上より各部の全文の確認もダウンロードも可能となっている大著『倫理論集』にての英文該当部を(便宜的に **出典(Source)紹介の部 41(6)** とのかたちで) 挙げておくこととする。

出典(Source)紹介の部 41(6)

# SOURCE

## 41(6)



ここ出典(Source)紹介の部 41(6)にあつては

〔「大西洋はクロノスの海である」「クロノスの島が大西洋上にある」とのドネリーの言い様の伝にも古典上の典拠が伴っている〕

とのことの出典を挙げておく。

(直下、オンライン上よりダウンロード可能となっているとのプルタルコス著 Moralia『倫理論集』よりの原文引用をなすとして)

---

An isle, Ogygia, lies far out at sea, ; a run of five days off from Britain as you sail westward ; and three other islands equally distant from it and from one another lie out from it in the general direction of the summer sunset. In one of these, according to the tale told by the natives, **Cronus is confined by Zeus, and the antique (Briareus), holding watch and ward over those islands and the sea that they call the Cronian main**, has been settled close beside him,

(多数の手をもつヘカトンケイルに属する巨人ブリアレオスにまつわる細かき伝承理解を要するとの部を含むために、逐語訳をなさずに大要訳をなすとして)「大洋の彼方、ブリテン(ローマ期イギリス)より西へと5日間の航程で船首を向けた先にはオーギュギア島があり、そこからさらに等距離離れた先に[他の島々]があるが、現地民によって語られるところでは[クロノスがゼウスに幽閉されたとの伝承]が関わって、そこにての海および島々はクロニアン・メイン(クロノスの大洋)と呼ばれている」

---

(引用部はここまでとする。尚、ここにて原文抜粋なししているとの文章は「そのまま検索エンジンに入力するだけでも」プルタルコス原著内容記載ページが表示されてくるような性質のものである(であるからプルタルコスの古典由来のものであると容易に裏取りできるであろう))

(出典(Source)紹介の部 41(6)はここまでとする)

---

上記のようにローマ期著述家プルタルコスの手になる著作にても[文献的事実]の問題として言及がなされているところの[クロノス神の海]だが、それは日本はおろか欧米にてすら現代社会にてほとんど知られていない(と見受けられる)ところながらも、

[氷りついた海としても知られるクロニウム・メア Cronian main / Cronium Mare [クロノスの海]]

との伝「でも」語られてきたものである ——たとえば、オンライン上より全文確認できようところとしては Project Gutenberg のサイトにて公開されているイングランドにての年代記にて網羅的に解説している 20 世紀初頭(1906 年)刊行の著作、Old English Chronicles, INCLUDING ETHELWERD'S CHRONICLE. ASSER'S LIFE OF ALFRED. GEOFFREY OF MONMOUTH'S BRITISH HISTORY. GILDAS. NENNIUS. TOGETHER WITH THE SPURIOUS CHRONICLE OF RICHARD OF CIRENCESTER との実にもって長くもあるタイトルの著作にての第八章( CHAP. VIII.)にての 26 と振られての注記部にて “ **Thule, according to the same author, abounds in fruits. At the distance of a day's sail from Thule the sea is difficult to pass through, and frozen; it is by some called**



**Cronium.**” (訳として)「古のトゥーレ(訳注:伝説にあつての世界の最果てたる地)は同じくもの著者(ソライナスと前述されている人物)によれば豊潤にも果実らを産する。トゥーレから一日の航程の段階で海は「凍り付いたもの」となっているがゆえに航海困難になる、そして、そうした海はクロニウム(クロノスの領域)と呼ばれていた」と表記されているように「凍り付いた」ものともされるクロノスの海と結びつけられている――。

そうした「凍り付いた海」に封印されているとされる存在「でも」あるといった伝承理解がなせるようになっているのがクロノス神(英語呼称における Saturn となる土星の体現神格化存在)となり(オンライン上よりダウンロード可能となっているとのプルタルコス著 Moralia『倫理論集』より最前の段にて原文引用なしたところとして “ **Cronus is confined by Zeus, and the antique (Briareus), holding watch and ward over those islands and the sea that they call the Cronian main** ” (訳として)「現地民によって語られるところでは「クロノスがゼウスに幽閉されたとの伝承」が関わって、そこにの海および島々はクロニアン・メイン(クロノスの大洋)と呼ばれている」との記述が見受けられるとおりである)、に関して、

### [古典時代古代人の世界解釈を受けての洪水伝承と結びつく側面]

が見出せるとの指摘がなせるようになっている、すなわち、(批判的識者の世界では Unreliable Source[信の置けぬ出典]であろうとの見方を呈されやすい著作でもあること、先述のものながらも Atlantis: The Antediluvian World『アトランティス・大洪水前の世界』よりの引用部表記を繰り返すところとして)、

「ベロソスが我々に語っているところの洪水(訳注:往古の伝承にて問題視される洪水と同義のもの)の到来を警告した神はクロノスである。そのクロノスがサターン(サトルナス)と同一の存在であることはよく知られている。サターン(サトルナス)はローマより遙か前に遡る往古イタリアの王で文明を他の文明をイタリアに移植した存在である。彼は産業と社会位階を確立、地をして富で満ちし、そして、イタリアの黄金時代を創始した。(その後)、ほどなくして急遽、サトルナスは「神話上の存在にすぎぬもの」へと取り除かれた。同サトルナスの名前は「アトランティック・オーシャン(大西洋)にあつた偉大なる(ものとされる)サトルナリア大陸」、そして、「偉大なる(ものとされる)王国、すなわち、往古、イタリア半島そして数々の島々のみならず北アフリカと地中海のヨーロッパ側に抱かれるように位置していたとの偉大なる(ものとされる)王国」と結び付けられており、また、サトルナスの名前はこのような観点に沿うところとして「プラトンのアトランティス統治体に言及している物語」とも結びつく。ローマ人はアトランティック・オーシャン(大西洋)をしてクロニウム・メア、「クロノスの海」と呼び、大洋を「クロノス」と結び付けていた。また、ヘラクレスの柱(地中海と大西洋を分かちジブラルタル海峡の寓意物)は「クロノスの柱ら」とも古代人に呼ばれていたのである」(原著表記は“ **In the first place, Berosus tells us that the god who gave warning of the coming of the Deluge was Chronos. Chronos, it is well known, was the same as Saturn. Saturn was an ancient king of Italy, who, far anterior to the founding of Rome, introduced civilization from some other country to the Italians. He established industry and social order, filled the land with plenty, and created the golden age of Italy. He was suddenly removed to the abodes of the gods. His name is connected, in the mythological legends, with "a great Saturnian continent" in the Atlantic Ocean, and a great kingdom which, in the remote ages, embraced Northern Africa and the European coast of the Mediterranean as far as the peninsula of Italy, and "certain islands in the sea;" agreeing, in this respect, with the story of Plato as to the dominions of Atlantis. The Romans called the Atlantic Ocean "Chronium Mare," the Sea of Chronos, thus identifying Chronos with that ocean. The pillars of Hercules were also called by the ancients "the pillars of Chronos."** ” となる)



との指摘がなせるようになっていくことが何故にもって問題となるのかについてであるが、それについては本稿にあってのこれより後の段で典拠となることを示すし、本稿を公開しているサイトの一にて2011年初期よりまとめたプロトタイプを公開していたPDF論稿、

### Analysis of 911 Ritual & Prospect of Puppeteers' Plan 『911の儀式性詳説 及び 起こりうべき災厄の予測 (改訂版)』

と題してのPDF論稿をご覧ください。ことでも、([知識]と([知識]取得にも通ずる)[検討の意欲]さえあれば)、若干かもしれぬが、理解が及ぶか、とも思う。

(:逆を述べれば、(出来る・出来ないの問題として)そうしたことについて批判的視座にてでも分析する気力概すらないとの筋合いの向きならば、何にせよ問題となることについて—それがおのれを殺そうとする銃座の所在を示すものであったとしても— ついぞ把握することはなかるうとも判じているわけだが(真実の一断面を[現象]に基づいてのみ指し示さんとする情報源に相対する意思の力がそもそも「ない」とも見ている)、とにかくも、筆者が検討者として望むだけの水準の向きならば直上掲題のPDF論稿 (今考えれば、疎漏に失すところもあったかとも見ているものではあるも、のPDF論稿 Analysis of 911 Ritual & Prospect of Puppeteers' Plan) 程度のもを通じても [クロノスにまつわる問題性] について相半ばながらも理解はなしていただけることか、と思う —※因(ちな)みにだが、本稿のこれよりの段ではクロノスという存在が属人的主観などがなんら問題にならぬとの「純・記号論的結びつき」の問題としていかに聖書に見る悪の根源サタンと結びつきもするのか、またもつてして、[クロノス] ことサターン(土星を体現してのローマ期神格 Saturn)と通ずるところがあるとの聖書におけるそちらサタンに対する「凍り漬けた重力中枢領域に対する封印」を扱ったルネサンス期古典に異常異様に「今日的な意味での観点から見た場合のブラックホール」の質的近似物に対する言及が複線的になされているのかについて詳説しもすることになること、([布石]として)、先立って申し述べもしておく— )

#### [さらにもってして、] 記述部として

ここまでに

【クロノス(であるとベロソスという古代著述家に名指しで言及されての神格)が夢見に現われて王に大洪水の警告を与えたとのバビロン由来の洪水伝承】

【(大洪水で滅したと伝わる)アトランティスのクロノスに通ずるありよう】

【[クロノスの海の名を冠する大西洋(アトランティック・シー)] および [クロノスの柱とも呼称されていたヘラクレスの柱】

【[凍りついた海]としてのクロノスの封印領域(クロニアン・メイン)】

との各点にまつわる文献記録や識者言分を引き合いに出してきたわけではあるが、本稿にあっての紙幅にしてかなりもって後の段では

「[ギリシャのクロノス](ローマのサトルナス(あるいはサターン)に照応する存在)は[聖書におけるサタン]と結びつく素地が何重にも伴っているとの存在でもある」

とのことにまつわっての具体的論拠をいくつも挙げることにする (:そうした指摘をなす一方で同じくものことに通ずるところでは[人間の終末にまつわる複数地域の神話

内記述] が — [洪水伝承] にも通ずるところとして — [43200] との際立ってのユニークナンバーと結びつけられているとのことも (先賢の言を引きながら) 紹介することとする)。

そうもした (後にて詳述の) 内容に関わりもするところとしてこの段階から申し述べておくが、

「([凍り付いた海]と結びつけられ、また、同じくもの領域における[幽閉]とも結びつけられているとの)ローマ神格サトルナス(ギリシャの[クロノス]の質的同等物)と純・記号論的な意味での接続性を多重的に帯びているとの存在が聖書におけるサタンという存在であるということがありもする中で、ダンテの著名古典『神曲;地獄篇』ではそのサタンが氷地獄に閉じ込められた存在(凍り漬けになって幽閉された魔王ルチフェロ)として登場してくる」

「(上にて言及のことに通ずる)ダンテ古典に見る悪魔の王サタンが幽閉されている氷地獄の領域(重力の中枢領域であると古典それ自体にて明示されもしてのジュデッカの領域)はブラックホールの質的近似物となっているもの「でも」ある (実際にダンテ『神曲;地獄篇』をブラックホールと結びつけている物理学者らが何人もおり、本稿の後の段 — **出典(Source)紹介の部 55** — ではそうもした彼らを言を引きもする. またもってして、同じくものことはブラックホールがその初期研究において(ブラックホールという言葉すらなかった折のこととして) Frozen Star と性質上、呼ばれていたこととオーバーラップして見えるようになっても「いる」)」

「【クロノス(であるとベロソスという古代著述家に言及されての存在)が夢見に現われて王に大洪水の警告を与えたとされるバビロン由来の洪水伝承】【クロノスにも通ずる(大洪水で滅した)アトランティスのありよう】の二点からもおもんばかりなせるようなところとして [凍り漬けの領域(と接合するところ)に幽閉されていると伝わりもするクロノス] には古典内容 (先に引用なした[シケリアのディオゲネス]の手になる古典) や近代識者申しよう (イグナティウス・ドネリーや彼に典拠を提供しているとのジョン・ボールドウィン) を介して [アトランティス] との結びつきが存するとのことが指摘できるようになっている。そして、[アトランティス]については — 本稿にての先行するところの**出典(Source)紹介の部 35**にて摘示しているように — ブラックホール人為生成挙動(とされるに至った実験ありよう)に通ずるところがある (イヴェント・ディスプレイ・ウェア ATLANTIS を介して生成ブラックホールを検知しうるなどとされていることがそれである) 」

以上のことが [ブラックホール] や [アトランティス] を媒介にしてのこじつけがましきこと限りなしの伝言ゲームの類で済むことなのか、あるいはもってして、[我々の脳髓を容赦なく狙う銃座の所在]を示すものであるのか、(それだけの根拠が数多存在していると述べられるか否か)、是非とも本稿の後にての段の検討を通じて判断させていただきたいものである。

Saturn (Cronus)



Father Time  
(Grim Reaper)



Symbolism

(本稿にあつてのかなり後の段では [サトルナス(クロノス)および悪魔の王サタンの一  
致性問題] に関わるところとして上掲のような図が描画できることが何故にもつてし  
て問題になるのか、とのことの解説をもなす所存である)

これにて「長くもなつて、」の[布石]を兼ねての注記の部を終る

(直上まで注記と銘打つての部からして長くなりすぎてしまったくらいがあるも、本稿本筋に話を回帰  
させもし、) 歩を先に進める。

ここまでもつてしてイグナシヤス・ドネリーの著作内容を引くなどして

[ [ヘスペリデスの黄金の林檎の園] が [アトランティス] と定置されるだけの理由 (およびそ  
の理由を受けての風潮) があるし、現実に同じくもの定置の式が垣間見れるとのことがある]

とのことについて指摘してきたわけだが(せんだつての [出典 \(Source\) 紹介の部 40](#) および [出典 \(Source\) 紹介の部 41](#) を包摂する解説部にて細かくもの言及をなしてきたとおりで)、次いで、

[アトラスの娘たるカリュプソが住まうオーギュギアー島 (アイランド・オーギュギアー) という島]

もまたもってして

[アトランティス同等物と定置されもする洋上の陸塊]

であることについて摘示していくこととする。

その点、(直上より言及なしはじめているとの)神話上の島、オーギュギアー島とは

[大洋オケアノス —古代ギリシヤ人らはユーラシア大陸を主軸とした世界を囲む海をして  
[オケアノス]という名の海の神に仮託してそのように呼称していた—の彼方にある島]

と古典が語り継ぐ島である(出典は下に挙げる)。

そしてまた、同オーギュギアー島とは

[アトラスの娘ということで「アトランティス」と呼称されることがある女神(下級の女神という文脈で[ニンフ]とも呼称)が住処としている島]

ともされている(同様に<sup>1</sup>出典は下に挙げる)。

---

## 出典(Source)紹介の部 42

# SOURCE

## 42



ここ出典(Source)紹介の部 42<sup>1</sup>にあつては

[オーギュギアー島という地所が、一説によると、[(地中海世界から見ての)大洋の彼方西方にある]との伝承が存在している]

[オーギュギアー島を住処としているのは[アトラスの娘]の一柱に数えられる女神である]

とのことの出典を紹介しておくこととする。



まずもって古代地中海の民から見ての大洋(オケアノス)の西の彼方にオーギュギア島という地所が存在しているとの見立てがあったことについては 20 世紀初頭に刊行されもし Project Gutenberg のサイトにて全文公開されているとの著作にして北極圏への初期探索動向とそれにまつわっての神話伝承を紹介しているとの著作たる **IN NORTHERN MISTS ARCTIC EXPLORATION IN EARLY TIMES** 『北方が霧の中にて 一北極圏に向けての初期探検の動向について一』(1911) にあっての下の記述を引いておくこととする。

(直下、Project Gutenberg にて全文公開を見ている(従ってオンライン上より全文確認できる)との IN NORTHERN MISTS ARCTIC EXPLORATION IN EARLY TIMES との著作にあっての CHAPTER IX WINELAND THE GOOD, THE FORTUNATE ISLES, AND THE DISCOVERY OF AMERICA よりの抜粋をなすとして)

---

In the same colours as these the Odyssey describes many fortunate lands and islands, such as **the nymph Calypso's beautiful island Ogygia, far in the west of the ocean**; and again "Scheria's delightful island" [vii. 79 ff.], where the Phæacians, "a people as happy as gods," dwell "far away amid the splashing waves of the ocean," where the mild west wind, both winter and summer, ever causes the fruit-trees and vines to blossom and bear fruit, and where all kinds of herbs grow all the year round (remark the similarity with Isidore's description). The fortunate isle of Syria, far in the western ocean, is also mentioned [ xv. 402]

(訳として)

「これら(当該引用著作にて先述の地所ら)と同様の色合いのものとして古典『オデュッセイア』は「**大洋の遙か西方に存するニンフ・カリュプソの美しき島オギュギア島**」そして「神のような幸福を愉しんでの民とされるパイアケス人らが住まうとの荒れる波間の遙か彼方の地所にして、穏やかなる西方よりの風が冬・夏の別なくも吹き、それにより、果樹ら・ブドウの木らが年中開花、果肉を産し、ありとあらゆる草木もが年中、育っているとの喜びに溢れているスケリア島」のような恩恵に浴せし土地・島らを数多くも描写している」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上にての 20 世紀初頭に世に出た著作にあってからして、(一説によるところとして)、オーギュギア島という地所が[西方の彼方](地中海文明圏から見ての西方の彼方)にあるとの伝承が伝存していることが伺いしれるようになっている。また、同じくものことについてはローマ時代の世界観を今日に伝えている著述家として著名なプルタルコスPlutarchの古典 *Moralia* 『倫理論集』にあっては(先立っての **出典** (Source) 紹介の部 41(6) にて引いた記述の一部を再度引いてのこととして) 次のような記述がなされているところである。

“ **An isle, Ogygia, lies far out at sea, ; a run of five days off from Britain as you sail westward** ” (訳として)「オーギュギア、それはブリテン(ローマ時代イングランド)より五日の行程で船首を向けた先にある島である」

(上の引用部英文テキストについては Internet Archive のサイトにて *Moralia*, in fifteen volumes, with an English translation by Frank Cole Babbitt とのかたちで公開されている『倫理論集』よりの記述を引いたものである)



次いで、

[オーギュギアー島を住処としているのは[アトラスの娘]の一柱に数えられる女神である]とのことの典拠を挙げておく。

同じくものことに関してはギリシャ神話にての相当メジャーな話であると見ているため(オーギュギアー島にての女神が欧州の源流古典となっているホメロスの『オデュッセイア』にて目立って登場しているがゆえにメジャーな話であると見ているため)、通用性より確認も容易、従って、そこよりの引用で十分か、と判じて、(通用性の低い出典を挙げることに替え)、先立っての **出典(Source) 紹介の部 40**にて引きもしたウィキペディア記述を再度、引くとのことをなしておく。

(直下、英文 Wikipedia [Ogygia] 項目の「現行にての」記載内容よりの「再度の」原文引用をなすとして)

---

Ogygia (/oʊˈdʒɪdʒiə/; Ancient Greek: Ὀγυγίη Ōgygíē [ɔːgygíɛː], or Ὀγυγία Ōgygia [ɔːgygía]), is an island mentioned in Homer's *Odyssey*, Book V, as the home of the nymph Calypso, the daughter of the Titan Atlas, also known as Atlantis (Ἀτλαντίς[1]) in ancient Greek.

(訳として)

「オーギュギアーはホメロスの叙事詩オデュッセイアの第五歌にて古代ギリシャにて「アトランティス」(Ἀτλαντίς)として知られていた「タイタン・アトラスの娘」たるニンフ・カリュプソの住まいとして言及されている島である」

---

(引用部訳はここまでとしておく —※— )

(※尚、(これまた再度記しておくところとして)、上の「現行の」ウィキペディア記載内容よりの引用部に付されての[1]との出典番号に照応するところでは [1] ↑ "Atlantis" means the daughter of Atlas. See entry Ἀτλαντίς in Liddell & Scott. See also Hesiod, *Theogony*, 938.. と出典のタイトルが表記されている、すなわち、「[アトランティスがアトラスの娘の意たることの出典]としては【リデルおよびスコットの解説】および【ヘシオドスの神統記】を参照のこと」との表記がなされているが、うち、前者にあつては「A Greek-English Lexicon [ギリシャ語・英語語彙目録]の編纂およびその標準化に功あつた向きの手になる Liddell and Scott's lexicon (リデルおよびスコットのギリシャ語彙目録/余事だが、リデルの方はルイス・キャロルがアリスズ・アドヴェンチャーズ・イン・ワンダーランドのモデルとしたアリス・リデルの父である)の解説部を参照のこと」と同義のことと解される)

Ogygia = The island of Calypso

daughter of Atlas, "Atlantis"

ここまでの引用部でもってして端的に表記すれば、上の図の通りの関係性を示したことになる

以上のようにオーギュギアー島に関しては

〔一説によると、〔地中海世界から見ての〕大洋の彼方西方にある〕とされている  
〔アトラスの娘〕(アトランティス) の一柱に数えられる女神の住処となっている〕

との申しようがなされているがために、同島、アトランティスとの接合性・同一性が問題視されもしてきた島ともなる。

すなわち、オーギュギアー島 ——伝説上の幻の島—— というのは

(本稿〔出典(Source)紹介の部 36〕にて引用したところの岩波書店刊『プラトン全集 12』  
中の『ティマイオス』収録部たる p.22—p.23 より再引用するところとして)、

あの大洋には ——あなた方の話によると、あなた方のほうでは「ヘラクレスの柱」と呼んでいるらしいが——その入口(ジブラルタル海峡)の前方に、一つの島があったのだ。そして、この島はリビュアとアジアを合わせたよりもなお大きなものであったが、そこからその島の他の島々へと当時の航海者は渡ることができたのであり、またその島々から、あの正真正銘の大洋をめぐっている、対岸の大陸全土へと渡ることができたのである

とのプラトン著作の書かれように見るアトランティスに対する解説(アトランティス属性)と合致するところがあると看做される存在、そう、

「ヘラクレスの柱(ジブラルタル海峡)の先の領域に存在する島であると古典にて語られている(上にてはブリテン島の先にあるとの式でのプルタルコス著作内の記述を挙げた)島である」  
「その主が〔アトランティス〕との言葉と結びつくアトラスの娘であるとされている」

との島であるがために歴年、アトランティスの同等物と語られてきた、との経緯ある島なのである(伝説に見るオーギュギアー島がどういった人間によってアトランティス同一物と見做されてきたかは直下これより文献的事実としての論拠を挙げていくこととする)。

ここまできたところで(先立って〔ヘスペリデスの黄金の林檎の園〕を〔アトランティス〕と結びつける論調があったことについての事例紹介をなしてきたように)〔オーギュギアー島〕をして〔アトランティス〕と看做す風潮がいかようなものとして存在しているかについての事例紹介をなすこととする。

その点、科学史にあつての二大巨頭、

〔アイザック・ニュートン〕(今日の物理学に通じる古典物理学の父とされ、〔万有引力の法則の発見およびその精緻化〕〔ニュートン力学を支える運動方程式(高等学校の実に詰まらぬ物理の教科書がその紹介よりはじまる三つの方程式で代表される方程式)の確立〕〔(前二者の方式を形容・担保するための)微積の手法の確立への貢献〕といった事績でもってして偉人中の偉人などと形容されるかのニュートン)

および

〔ヨハネス・ケプラー〕(ニュートンに万有引力の法則の着想の元となるところを提供し

た、すなわち、[ケプラーの法則] (天動説から地動説への転換を決定的ならしめた法則)の提唱者として科学史にあつてのニュートンと並ぶ偉人と形容される人物)

の両二名からしてその伝わるどころの言行録から [オーギュギアー島] をして [アトランティス] (あるいはアトランティスに比定されるような大いなる大陸) と定置していたことが知られている。

## 出典 (Source) 紹介の部 43

# SOURCE

## 43



ここ **出典 (Source) 紹介の部 43** にあつては科学史にあつての二大巨頭、アイザック・ニュートンおよびヨハネス・ケプラーがオーギュギアー島をしてアトランティス (あるいはそれに比定される大いなる大陸) 等価物であろうと指さしていたことにまつわる典拠紹介をなしておくこととする。

まず、ニュートンについては英文 Wikipedia にそのための一項が設けられているところとして

### Isaac Newton's occult studies [アイザック・ニュートンのオカルト研究]

との項目の内容を問題視することとする —— (につき、強調したいところだが、[ニュートンのオカルト研究]なる項目よりの引用をなしているが、(筆者はオカルト「的なる」話柄をわざと前面に出すことはあつても)、基本的にはオカルト「的なる」ものを軽視しているとの人間ともなること、断つておく) —— 。

その点、表記の英文ウィキペディア項目 ([アイザック・ニュートンのオカルト研究] 項目) にはそれが真実一路正しいものであるか否かは置き、そうした見解が出てくること自体が問題であるところとして次のような表記が現行 (原文引用するところとして) なされている。

### Newton's Atlantis

Found within The Chronology of Ancient Kingdoms, are several passages that directly mention the mythical land of Atlantis. The first such passage is part of his Short Chronical which indicates his belief that Homer's Ulysses left the island of Ogygia in 896 BC. In Greek mythology, Ogygia was home to Calypso, the daughter of Atlas (after whom Atlantis was named). Some scholars have suggested that Ogygia and Atlantis are locationally connected, or possibly the same island.

(補ってもの訳として)

「ニュートンのアトランティス : ニュートンが遺した『古代王国年代記』に見受けられるところとしていくつかの文章が直接的に神秘的存在としての大陸であるアトランティスの地への言及をなしているとのことがある。彼のそのような言及箇所にての最初のもは(ニュートン著作 The Chronology of Ancient Kingdoms 『古代王国年代記』にあつての前半部に認められるとの)ショート・クロニカルの部分にあつて見受けられるところ、ホメロス叙事詩に見るユリシーズ(訳注:ユリシーズとはトロイアを木製の馬の計略で滅ぼしたオデュッセウスのラテン語:Ulixes (ウリクセス)あるいはラテン語:Ulyseus (ウリュッセウス)との表記がそちら Ulysses へと転じているとのものである)が紀元前 896 年にオギューギアを去ったとの部の記述である。オギューギアは「アトランティスがそより命名されたとのアトラス」の娘たるカリプソが住まっていた島だった。幾人かの学者らは(ニュートンがそのように見ていたように)オーギューギア島およびアトランティスは位置的に連続性がある、あるいは、ありうべきところとして同様の島であるとの提案をなしている」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上については Project Gutenberg にて公開されている(従って誰であれオンライン環境が整っておれば内容が確認できる)とのアイザック・ニュートンの手になる **The Chronology of Ancient Kingdoms**『古代王国年代記』それそのものよりの記載を引くのが良いか、と判断、実際にそうすることとする。

(直下、Project Gutenberg サイトよりダウンロードできるとの The Chronology of Ancient Kingdoms にあつての The Times are set down in years before Christ.と付された節(にてのニュートン流編年史の羅列記述部)よりの抜粋をなすとして)

---

896. Ulysses leaves Calypso in the Island Ogygie ( perhaps Cadis or Cales.) She was the daughter of Atlas, according to Homer. The ancients at length feigned that this Island, (which from Atlas they called Atlantis) had been as big as all Europe, Africa and Asia, but was sunk into the Sea.

(訳として)

「紀元前 896 年 ユリシーズがオーギューギア島(カディスないしカレスでありうる)のカリュプソのもとから去る。彼女カリュプソはホメロスによれば、「アトラスの娘」ということになる。古代人らは詳細にまつわるところでこの島(アイランド・オーギューギア)をもってアトラスの名から彼らがアトランティスと呼称した島、



「大きさにしてヨーロッパ・アフリカ・アジアをあわせたのに匹敵するも海に沈んだ島」であるように見せようとのことをなしていた」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上のようにニュートンの手になる *The Chronology of Ancient Kingdoms* (の流布版) に「文献的事実の問題」としてアトラスの娘たるカリュプソの島たるオーギュギアー島がアトランティスと結びつくとの表記がなされている (ただし、アイザック・ニュートンの上のような見立てには多少、アトランティス伝承について詳しい現代人が首をひねるような錯誤が含まれている。ニュートンは「アトランティスはヨーロッパとアフリカとアジアを足したのと同じくらい大きい」と *The Chronology of Ancient Kingdoms* (ニュートン没後 1 年を経ての一七二八年に刊行を見ているとの書) にて述べているわけだが、プラトンがその自著『ティマイオス』で伝えるところではアトランティスのサイズは「この島はリビュアとアジアを合わせたよりもなお大きなものであった」と叙述されることとなっており、そこに「ヨーロッパまでも合算の基礎としている」などととのことは見受けられない——本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 36](#) でも岩波書店刊行の日本国内流通訳書よりの抜粋をもなしたところであるが、Project Gutenberg のサイトよりダウンロードできるとの *TIMAEUS by Plato* にて “ This power came forth out of the Atlantic Ocean, for in those days the Atlantic was navigable; and there was an island situated in front of the straits which are by you called the Pillars of Heracles; the island was larger than Libya and Asia put together, and was the way to other islands, and from these you might pass to the whole of the opposite continent which surrounded the true ocean; for this sea which is within the Straits of Heracles is only a harbour, having a narrow entrance, but that other is a real sea, and the surrounding land may be most truly called a boundless continent.” と表記されているところである)。

---

付記として:

現代科学の基礎分野、その大立者として認知されているアイザック・ニュートン (「彼なくして高校の物理の教科書の冒頭よりお目見えする三法則も今日あったとおりに広まっていかず、また、彼なくして微分積分の思想・計算法が科学的分析にあつての基礎的手法になるプロセスも今日あるものの通りにはならなかったであろう」などといったかたちでの理解がなされているとの人物でもいい) には

[錬金術の研究に没入専心するとのもう一つの顔]

もがあったことが今日よく知られており、それがゆえもあつてであろう、

[ニュートンのオカルト研究]

と銘打たれてのトピックがある程度市民権を得ているように見受けられるとことがある。そして、同じくものことにまつわる一項が英文ウィキペディアだけではなく、和文ウィキペディアにも ([アイザック・ニュートンのオカルト研究] 項目との項目名称にて) 設けられているのであろうと解されるところである。

以上、述べたうえで書いておくが、表記ウィキペディア項目——英文・和文の [アイザック・ニュートンのオカルト研究] との項目——に認められる、ニュートンが注力なしていたとされる研究の内容は確かに全般的に

[オカルト「的」側面]

が強くも見られるとのものとはなっている (: よく言われるところとして [オカルト] という言葉は原義として [目で見たり指で触れたりできない隠された側面を取り扱うやりよう] との意味合いをもった言葉とされるが、これまたよく言われるところとし



てそうした[オカルト]との言葉が「論争にあつての論敵主張に「論証不可能性の側面」や「神秘主義的・宗教的側面」が際立っているとのことを批判する際にあつての罵倒語へと転用されてきたとの歴史的背景がある」とされる——そこからして疑わしきは和文ウィキペディアないし英文ウィキペディアの[オカルト]項目にて言葉の使用法にまつるところとしてどういった解説が学者の文献を付されたかたちにてなされているのか、確認してみるといい。それにつき、日本国内にて[オカルト]分野とされるところにてどういう胡乱なる話、あるいは、おどろおどろしき[畸形によるショー(フリーク・ショー)]の如きものが展開させられているかを見れば、オカルトが罵倒語として機能する背景が何たるかも当然に容易に推し量れることであろうとしつつ申し述べるところとしてである——)。

そうしたニュートンのオカルト「的なる」やりように含まれるところとして、

(ここで問題視している)[ニュートンのアトランティスに対する理解]

が取り上げられているのは

「そもそもアトランティスなるものは実在していたかも定かではない」

わけであるし、

「カリュプソの島たるオーギュギアー島をそうしたアトランティスと結びつけて持ち出すとのやりようもそれ自体では地理的・・実地的論拠たるところを何ら伴っていないことにまつるところである」

とのことがあるからであろうと推察されるところである。

以上、書き記したところとして、「そうは述べても、」の問題として書いておくと、「アトランティス」という名の陸塊のことを——その陸塊アトランティスが実在したか否かは置き—— プラトンが遺したものとして伝わっている古典(『ティマイオス』『クリティアス』)が取り上げていることは[文献学的事実]であり、その[アトランティス]なる「伝説上の」存在がカリュプソの島にかこつけられる「素地もある」とのことがあり、ニュートンやりようをもってしてその例示とすることまではそれもまた至当であろうと指摘しておきたき次第である——ちなみにニュートンは上にての The Chronology of Ancient Kingdoms の引用部にあつて「古代人がカリュプソの島をもってしてアトランティスと結びつけていた」との申しようをなしているが(要するに伝聞方式を採用している)、そこに見る古代人の弁を収録した著作が具体的にどの著述家の何という著述なのか、ということについてきちんと説明していないくらいがあり、それゆえ、ニュートン独創ではないと言い切れるのかと見るところが少なからずある。であるから、胡乱なる話と映るのであるが、カリュプソが「アトランティス」(アトラスの眷族)との名称と結びつく「アトラスの娘」であることに違いはなく、また、そのカリュプソの島がローマ期のプルタルコスの古典 Moralia『倫理問集』で(プラトン古典にあつてのジブラルタル海峡の先にあつたとのアトランティスを巡る位置関係と辻褄が合うように)「ブリテンから船首をさらに西方に向けてのところに存在していた」と伝わっている島であることに(先に引用なして示している文献的事実の問題として)何ら違いはない——。

---

(付記としての部はここまでとする)

次いで、ニュートンと並ぶ [今日の文明の大立者] としてその名が常識的世界に安住の地を見出しているとの常識人によく知られているヨハネス・ケプラーの方だが、英文 Wikipedia [Ogygia] 項目 (カリュプソの島 [オーギュギアー島] にまつわる英文解説項目) からして次のことが紹介されている。

(直下、英文 Wikipedia [Ogygia] 項目にての現行記載内容より原文引用するところとして)

---

W. Hamilton indicated the similarities of Plutarch's account on "the great continent" and Plato's location of Atlantis in Timaeus 24E — 25A. Kepler in his *Kepleri Astronomi Opera Omnia* estimated that "the great continent" was America and attempted to locate Ogygia and the surrounding islands.

(訳として)

「ウィリアム・ハミルトンはプルタルコスの「大いなる大陸」とプラトンの『ティマイオス』24E から 25A に認められるアトランティスの近似性を同定していた。ヨハネス・ケプラーは彼の *Kepleri Astronomi Opera Omnia* にて「大いなる大陸」とはアメリカのことを指すととらえ、オーギュギアー島およびその周囲の島々をその場と一致させんとしていた」

---

(訳を付しての引用部は以上とする)

科学史にあつての二大巨頭、アイザック・ニュートンおよびヨハネス・ケプラーがオーギュギアー島をしてアトランティス(あるいはそれに比定される大いなる大陸)等価物であろうと指さしていたことにまつわる典拠紹介はこれにて終える。

(**出典 (Source) 紹介の部 43** はここまでとする)

---

さて、III. と振つての本段にあつてのここまでの流れにて以下のことが論拠を伴って述べられることを指し示した。

→

「**「ヘスペリデスの黄金の林檎の園」** (アトラスの娘らヘスペリデスが管掌する場) および **「カリュプソの島」** (アトラスの娘の住処となっている島) は双方、沈んだ陸塊アトランティスに仮託されうるとのものであるし、**一部識者によって現実にそのように仮託されてきたものである**」 (: **出典 (Source) 紹介の部 40** から **出典 (Source) 紹介の部 43** を同じくものことの典拠として付している)

# Ogygia = The island of Calypso

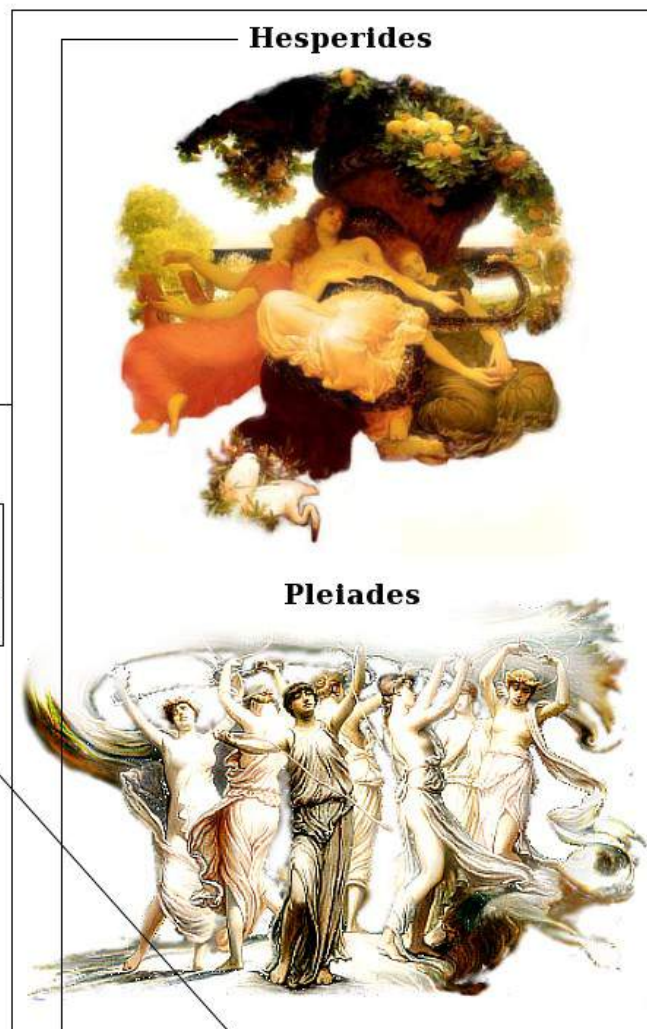
daughter of Atlas, "Atlantis"

(This isle seems to have been regarded as Atlantis by some Europeans)

## —legendary Atlantis

896. Ulysses leaves Calypso in the Island Ogygie ( perhaps Cadis or Cales.) She was the daughter of Atlas, according to Homer. The ancients at length feigned that this Island, ( which from Atlas they called Atlantis ) had been as big as all Europe, Africa and Asia, but was sunk into the Sea.  
—Issac Newton (The Chronology of Ancient Kingdoms )

Whether Newton's opinion is proper or not, it makes no difference.  
(I consider "philological truth" itself is implicative.)



daughter of Atlas  
=Atantis  
( daughters of Atlas  
=Atlantides )

the garden of Hesperides

# Ogygia = The island of Calypso

—legendary Atlantis

(ここまでの記述部では上にて図示したような関係性(アトラスの娘らであるヘスペリデスらに管掌される大洋の彼方にあるとされる[黄金の林檎の果樹園]もアトラスの娘であるカリュプソが住まう大洋の彼方にあるとされる[オーギュギアー島]も双方共々に大洋の彼方にあつたとされるアトランティスに仮託されるし仮託されてきたとの背景があるとの関係性)を示してきた——尚、上掲図に付しての図だが、アトラスの娘ら(アトランティデス)である Hesperides らの似姿として挙げているのはフレデリック・レイトン(Frederic Leighton)という画家による画となり、また、同文にアトラスの娘ら(アトランティデス)である Pleiades ら(プレアデス7姉妹)の似姿として挙げているのはエリユー・ベッダー(Elihu Vedder)という画家の手になる画となる——)

次いで、

(超巨大加速器 **LHC** にてのブラックホール生成を観測・表示しうることになるとされている **LHC** のイヴェント・ディスプレイ・ツール **ATLANTIS** の名称ともなっている)[かつて大洋に没したとされる古の陸塊アトランティス]については

[黄金の林檎の園が存在する場所として神話が語り継ぐ「アトラスの娘ら」(ヘスペリデス)の園]

および

[大洋の先にある「アトラスの娘」カリュプソの島(オーギュギアー島)]

と同一視されもしてきた。

そして、(アトランティスと同一視されてきた)上の[ヘスペリデスの園]および[カリュプソの島]に関してはその双方ともに、

[トロイア陥落の原因とも係るもの]

と「純・記号論的に」述べられるだけの要素を伴ったものら「とも」なっている

とのことであつての

「[ヘスペリデスの黄金の林檎の園](アトラスの娘らが管掌する場)および[カリュプソの島](アトラスの娘の住処となっている島)は双方ともに[伝説上のトロイア崩壊の原因]と関係があるものである」

とのことについての証示をなすこととする。

まずもって述べれば、

[ヘスペリデスの黄金の林檎の園]

に存在している[黄金の林檎]というものが

[トロイア崩壊をもたらした戦争のそもそもの原因]

となっていることがあるのであるが、については先に述べたとおりである。



(⇒ 先に **出典(Source) 紹介の部 39** にて [パリスの審判] の概要として解説してきたとおりである。

すなわち、

[女神エリスが [最高の美神の証] としての意味づけを黄金の林檎に付して三女神らに鬭争の根を引き起こす] ⇒ [三女神が美神の証としての黄金の林檎を取得するために美神を判定するためのジャッジとしての役割をおわされたトロイアの王子パリスに贈賄工作を仕掛けるに至る] ⇒ [パリスはヴィーナス(アフロディテ)に黄金の林檎を与えて彼女を勝利させる代償に絶世の美女たる人妻ヘレンを自身のものとするとの約定を交わす] ⇒ [パリスが人妻ヘレンを略取したためにヘレンの夫をはじめとしたギリシャ諸侯が(かねてよりヘレンにまつわって取り交わされていた盟約に基づき)トロイアに雲霞のように押し寄せるに至る] ⇒ [トロイアの崩壊に至る戦争に突入する]

↓との流れが存する —— 本稿にての **出典(Source) 紹介の部 39** で Project Gutenberg のサイトにて公開されている BULFINCH'S MYTHOLOGY THE AGE OF FABLE より和訳付して “At the nuptials of Peleus and Thetis all the gods were invited with the exception of Eris, or Discord. Enraged at her exclusion, the goddess threw a golden apple among the guests, with the inscription, "For the fairest." Thereupon Juno, Venus, and Minerva each claimed the apple. Jupiter, not willing to decide in so delicate a matter, sent the goddesses to Mount Ida, where the beautiful shepherd Paris was tending his flocks, and to him was committed the decision. The goddesses accordingly appeared before him. Juno promised him power and riches, Minerva glory and renown in war, and Venus the fairest of women for his wife, each attempting to bias his decision in her own favor. Paris decided in favor of Venus and gave her the golden apple, thus making the two other goddesses his enemies. Under the protection of Venus, Paris sailed to Greece, and was hospitably received by Menelaus, king of Sparta. Now Helen, the wife of Menelaus, was the very woman whom Venus had destined for Paris, the fairest of her sex. She had been sought as a bride by numerous suitors, and before her decision was made known, they all, at the suggestion of Ulysses, one of their number, took an oath that they would defend her from all injury and avenge her cause if necessary. She chose Menelaus, and was living with him happily when Paris became their guest. Paris, aided by Venus, persuaded her to elope with him, and carried her to Troy,” (以下略)との部を引いたとおりである(上にて記述したとおりの内容である訳は繰り返さない)。

ちなみに、トロイア城市は(有名な話として)最終的に木製の馬の計略で[内破]・[皆殺し]の憂き目を見たわけであるが、その木製の馬の計略に関してはパリスの審判で[黄金の林檎]

を得られずにアフロディテ神に敗れることになったとの女神、パリスおよびパリスが王子となっていたトロイアに少なからずも含むところがあったアテナ神の関与があってこそ実現を見た計略であるとの伝承が今日に伝わっているとのことがある(同点、アテナがトロイアに引導を渡した木製の馬の計略を成功裡に終わらせしめたと伝承が語り継いでいるとの点については例えば、ホメロスの古典にそれそのものの記載がなされていることがある —— 具体的には Project Gutenberg サイトにて公開されており、誰でも全文閲覧・ダウンロード可能などところの THE ODYSSEY OF HOMER (William Cowper という 18 世紀浪漫派詩人の英訳になる版) にあっての BOOK VIII の部にて蒼古とした英語表現にて “**The horse of wood, which by Minerva's aid Epeus framed, and which Ulysses erst Convey'd into the citadel of Troy With warriors fill'd, who lay'd all Ilium waste.**” (訳として)「木製の馬はミネルヴァ神(アテナ神)の援助にてエペイオスが組み立て、そちらがユリシーズはじめイリウム(トロイア別称)を灰燼に帰せしむべくもの戦士らで一杯になった状態でトロイア城市に運び込まれ



た」と記載されているとのことがある—— )。

また、トロイア戦争に決着をつけることになった

[木製の馬の計略]

の考案者としてよく知られているオデュッセウス(ユリシーズ)が、と同時に、  
[ヘレンを巡るところで一難事あった際にはヘレン求婚者となっていたギリシャ諸侯は  
(求婚者達の間以後々の禍根を残さぬように、と)大同団結するとの(かねてよりの)誓約の発案者]

ともなっていたと伝わっていることがあり、それがゆえに、[黄金の林檎を巡る争い]における人妻ヘレンの使用から発展してのなるべくしての「トロイア戦争」勃発とあいなったとのこと「も」ある(上にての BULFINCH'S MYTHOLOGY THE AGE OF FABLE よりの再度の引用部として挙げたところでは “ She had been sought as a bride by numerous suitors, and before her decision was made known, they all, at the suggestion of Ulysses, one of their number, took an oath that they would defend her from all injury and avenge her cause if necessary. ” との部が同じくものことについて言及した箇所となる)。

そうした意味「でも」、そう、黄金の林檎を得られなかった女神アテナの怨嗟によるやりようが木製の馬の計略を支え、そもそも、木製の馬の計の発案者とされるオデュッセウス(ユリシーズ)が黄金の林檎を巡る争いで贈賄の具とされたヘレンを巡る事前の約定を考案していなければ、トロイア戦争は起こらなかったとの意味合いでも  
[黄金の林檎を巡る争い](パリスのヘレン略取につながった争い)

と

[木製の馬で決着がつけられたトロイア戦争]

は接合していることとなる)

続けて、

[カリュプソのオーギュギアー島]

がトロイア崩壊の原因と関わっているとのことについてであるが、それについては同島オーギュギアーがホメロスの叙事詩『オデュッセイア』にて「トロイア城市を木製の馬の奸計で内破させた」オデュッセウス(叙事詩『オデュッセイア』主人公の知将オデュッセウス)の漂着先(そしてアトラスの娘であるカリュプソと愛を育んだ場)として描かれているとのことがある。

オデュッセウスとは、(欧米圏ではほぼ[一般常識]内の話と思われるところとして)、

[木製の馬の奸計の発案者]

すなわち、

[ギリシャ勢(トロイア攻囲戦攻め手側)は[一部将兵を内部に入れた木製の馬](がらんどろであるように偽装されての木製の馬のモニュメント)を浜辺に遺して偽装撤退し、そちら木製の馬を戦勝記念として城市に運び込まさせる。そのうえで勝利の美酒に酔っての城内ありようを横目に伏兵が夜陰に乗じて木馬より出でて城門を解錠、守備側にとっては「まさか、」と招き入れられた大量のギリシャ兵による夜襲・奇襲による都市の内破を実現する。そのような(漫画のよ如き)奸計の発案者]

として今日にあって極めてよく知られた存在となっている——委細としてはギリシャ勢と気脈を通じた男(シノーンというわざとトロイア方の捕虜になったギリシャ方の戦士)が何事かと確認をなしにきたトロイア勢に対して「ギリシャ勢は撤退した。木製の馬は神への祈願物として建造されたものである」と欺き(の際には「木製の馬が巨大なのはそれがトロイア城市内に運び込まれるとギリシャ勢が敗けるとの予言があった」との虚言も弄されたと伝わっている)、によって、木製の馬を城壁内に運び込ませ、同・木

製の馬から都市内に侵入することに成功したギリシャ勢伏兵が夜陰に乗り偽装撤退していたギリシャ軍をトロイア(勝利を祝っての宴会の後、住人が寝入っていたとのトロイア)内に誘導、不意打ち・無差別殺戮(皆殺し)の挙を実現したとされている——。

であるから、そう、トロイアの木製の馬の考案者(オデュッセウス)が落ち着いた先であるから、カリュプソの島たるオーギュギア島はトロイアと結びついていると申し述べるのである(また、そうしたオーギュギア島のありようを描く叙事詩『オデュッセイア』がトロイア崩壊に至る道程を描く叙事詩『イリアス』と共に欧米文化の源流古典となっているホメロスの代表作となっているとのこと「も」ある)。

#### 出典(Source)紹介の部 44

# SOURCE

## 44



ここ出典(Source)紹介の部 44にあつてはまずもって

[オデュッセウスという男が木製の馬の考案者であること]

についての典拠を挙げておく。

その点、指し示しの対象が

[争いの余地などない欧米圏にての基本的教養にまつわる話]

であるため、ウィキペディア程度のもの——(大学教育のレベルではそこよりの引用は推奨されないとの[確度に疑義伴う問題記事]を多く含む媒体だが、通念化したこと／争いの余地がないことを紹介するうえでは有用であるケースもあり、また、第三者が確認が容易であるとの利点もあるとの媒体)——から裏付けとなる記述を引くだけで十分か、と考へ、実際にそうすることにどめておくこととする(本来ならば出典紹介する必要もなきところか、とも思うのであるが、日本ではギリシャ古典に対する理解があまり

すすんでいないとの配慮もなして出典紹介をなしておく)。

[オデュッセウスという男が木製の馬の考案者であることについて]

(直下、和文 Wikipedia [オデュッセウス] 項目より中略なしつつも引用なすとして)

---

オデュッセウス(古代ギリシア語: Ὀδυσσεύς, Λαερτιάδης、ラテン文字転記: Odysseus)はギリシア神話の英雄であり、イタケーの王(バシレウス)であり、ホメーロスの叙事詩『オデュッセイア』の主人公でもある。ラテン語で Ulixes (ウリクセス)あるいは Ulyseus (ウリュッセウス)ともいい、これが英語: Ulysses (ユリシーズ)の原型になっている。彼はトロイ攻めに参加した他の英雄たちが腕自慢の豪傑たちであるのに対して頭を使って勝負するタイプの知将とされ、「足の速いオデュッセウス」「策略巧みなオデュッセウス」と呼ばれる。ホメーロス以来、女神アテーナーの寵厚い英雄として書かれる。イタケー王ラーエルテースとアンティクレイアの子で、妻はペーネロペー、息子はテーレマコスである。シーシュポスが父とする説もある。トロイア戦争ではパラメーデースの頓智でアカイア勢に加勢させられ、アキレウスの死後、その武具を大アイアースと争って勝利した。また木馬の策を立案し、アカイア勢を勝利に導いた

---

(引用部はここまでとする ——尚、ウィキペディアは諸々のブログ媒体などと同様、常に編集・改訂がなされうるとの特性を伴っているため、記載内容が有為転変としており、表記の記載内容には文章構成との意味で異動が生じる可能性がある—— )

[トロイア崩壊の顛末について]

(直下、和文 Wikipedia [トロイア戦争] 項目より中略なしつつもの引用をなすとして)

---

戦争末期の状況については、『イーリアス』のほか、『アイティピス』や『アイアース(Aias)』において語られる。トロイアの勇将ヘクトールとアカイアの英雄アキレウスの没後、戦争は膠着状態に陥った。しかし、アカイア方の知将オデュッセウスは、巨大な木馬を造り、その内部に兵を潜ませるという作戦を考案し(『小イーリアス』では女神アテーナーが考案し)、これを実行に移した。この「トロイアの木馬」の計は、アポローンの神官ラーオコーンと王女カッサンドラーに見抜かれたが、ラーオコーンは海蛇に絞め殺され、カッサンドラーの予言は誰も信じていけない定めになっていたため、トロイアはこの策略にかかり、一夜で陥落した。

---

(引用部はここまでとする ——尚、ウィキペディアは諸々のブログ媒体などと同様、常に編集・改訂がなされうるとの特性を伴っているため、記載内容が有為転変としており、表記の記載内容には文章構成との意味で異動が生じる可能性がある—— )

(出典(Source)紹介の部 44)はここまでとする)

上のようにトロイアに引導を渡した（換言すれば、黄金の林檎をめぐる美人投票に端を発してはじまった戦争に騙し討ちで決着をつけた）オデュッセウスがトロイア戦争後、ギリシャの故郷への帰路にあって「渦潮」に吞まれて同道者を全て失った後に漂着したのが

【アトラスの娘たるカリュプソの島（オーギュギアー）】

となっていると語り継がれてきたとのことがある（直下、出典紹介部を参照されたい）。

---

出典 (Source) 紹介の部 44-2

# SOURCE

## 44-2



ここ出典 (Source) 紹介の部 44-2 にあつては、

[オデュッセウスが渦潮に吞まれた後、カリュプソの島に漂着したことについて]

の典拠を挙げておくこととする。

(直下、まずもって和文 Wikipedia [オデュッセイア] 項目にての [第 12 歌] との節よりの  
中略なしながらももの引用をなすとして)

---

オデュッセウスがカリュプソーの島に囚われているところから叙事詩は始まる。

…(中略)…

第 12 歌

オデュッセウスの航海と冒険の話の続き。キルケーの館より出て、仲間達と船を進ませる。途中、セイレーネス(セイレーンたち)という人の顔を持ち鳥の身体を持つ怪物がいる島の傍らを船は通過する。セイレーンたちの歌を聴いた者はすべての記憶を失い、怪物セイレーンに近づきその餌食とされる。しかし、オデュッセウスはその歌が聞きたく、仲間たちの耳は密蝋で塞ぎ、自分は帆柱に縛り付けてもらい、身動きできないようにして、無事通過する。オデュッセウスは、セイレーンの島に進むのだと叫ぶが、仲間たちは歌も聞こえないので、そ



のまま無視して進んだ。

次に怪物スキュラのいる岩の横を通過するが、スキュラは、六本の頭で仲間たち六人をくわえて捉えむさぼり食うが、オデュッセウスを初め、他の仲間は何とか無事にスキュラの岩の傍らを通過できた。

…(中略)…

ヘーリオスの家畜をみだりに殺し食用にしたため、家畜を世話していたヘーリオスの娘ラムペティエーはそのことを父に知らせた。ヘーリオスは怒ってゼウスに訴えたので、ゼウスは船に雷を落とした。彼らの船は再びスキュラの岩とカリュブデスの近くに流され、今度は、大渦巻ですべてを飲み込むカリュブデスの岩の下の海に吹き寄せられたので、船は仲間を含めて渦巻きに飲み込まれたが、オデュッセウスだけは助かり、カリプソの島に流れ着いた。

---

(引用部はここまでとする ——尚、ウィキペディアは諸々のブログ媒体などと同様、常に編集・改訂がなされうとの特性を伴っているため、記載内容が有為転変としており、表記の記載内容には文章構成との意味で異動が生じる可能性がある—— )

また、第三者にとり確認も容易なうえに引用する方も手間がかからぬとはいえウィキペディアの内容ばかりを引いていると軽侮を要らぬところで招こうかとも思うため、次の出典(同文にオンライン上より全文確認可能であるとの出典)よりの引用もなしておく。

(直下、Project Gutenberg のサイトにて公開されているホメロス叙事詩『オデュッセイア』の近代英訳版 THE ODYSSEY OF HOMER Translated by William Cowper (訳者の同 William Cowper は 18 世紀活躍の英国の文人となる) よりの第 12 巻の要約の部 —表記の英文テキスト入力誰でもオンライン上より特定できるところ— よりの引用をなすとして)

---

BOOK XII ARGUMENT Ulysses, pursuing his narrative, relates his return from the shades to Circe's island, the precautions given him by that Goddess, his escape from the Sirens, and from Scylla and Charybdis; his arrival in Sicily, where his companions, having slain and eaten the oxen of the Sun, are afterward shipwrecked and lost; and concludes the whole with an account of his arrival, alone, on the mast of his vessel, at the island of Calypso.

(補ってもの訳として)

「[12 巻要約] ユリシーズは (パイアキス人に対して) 彼の物語を続け、[影らの領域] (注: 第 11 巻の舞台となる影と化しての死者らの領域) から [魔女キルケの島] への帰還へと話をつなげ、さらに、(魔女にして女神のキルケによってなされた) 事前警告のこと、そして、[サイレンら] (注: 人面鳥身の怪物ら) 魔手よりの逃亡のこと、[スキュラ] (注: 上半身が女で下半身が複数の顔を持つ猛犬との怪物) および [カリュブデス] (注: 渦潮の怪物) よりの逃亡のこと、[シシリア島に到達、そこで彼の船旅の同道者らが太陽神の牛を屠殺・食した(がために神罰によってカリュブデスの領域に引き戻され) 後に座礁・同道者全滅の憂き目を見た] とのことへと話をつないでいき、そして、カリュプソの島へと船のマストにつかまって唯一人到達したことを結末として語った」

---

(補っての訳はここまでとする)

([出典\(Source\)紹介の部 44-2](#) はここまでとする)



さらに

[オデュッセウスの漂着先がカリュプソの島である。ゆえにトロイア崩壊譚とカリュプソの島には接続性がある]

とのことの絡みで問題となることがあるのでその点について「も」取り上げておく。

直近、[出典 \(Source\) 紹介の部 44-2](#)にて呈示の引用部に見るように黄金の林檎を巡る確執ではじまった戦争に木製の馬の計略で決着をつけたオデュッセウスはトロイア戦争後の後の帰路にあつての冒険途上、「一端は切り抜けたものの」再度、そこに誘われてしまった渦潮(の怪物カリュプティス)の領域にて身ひとつを除いてすべてを失ったと伝わっているわけだが、そうした結末、渦潮に飲まれて海の藻屑と消えるといった結末は

[トロイア攻囲戦で勝者となったギリシャ勢「一般」の運命]

に通底するところであると

[ホメロス叙事詩「以外」の他の古典]  
が示しているとのことがある。

ゆえに、

[トロイア崩壊力学にまつわる動静 —ギリシャ勢がトロイアを滅ぼした後に渦潮に呑まれて大部分死滅していったとのありよう— ]

が

[渦潮に呑まれた後、同道者を皆失ってカリュプソの島に到達したオデュッセウス似姿]

と重なるところがある、そのため、カリュプソの島はトロイア崩壊力学の行き着く先と結びつきやすいとの解釈もがなされうとのことがある。

については手前が精読しもした『トロイア戦記』という古典の内容を取り上げる(※)。

(※そちら古典、『トロイア戦記』については [スミルナのクイントゥス(コイントス)] という名で知られるギリシャ人著述家がトロイア戦争の顛末を扱った作として書き記したものの写本が後の世(15世紀、1450年とも)にあつて再「発見」されたとのかたちで今日に伝存を見ている古典となる —同 Posthomerica 『トロイア戦記』については和文 Wikipedia [スミルナのクイントゥス] 項目にもその写本の登場経緯にまつるところとして次のような表記がなされている⇒(以下、引用するところとして) “1504年、アルドゥス・マヌティウスがヴェネツィアで『**Quinti Calabri derelictorum ab Homero libri XIV. Venetiis: in aedibus Aldi**』という題名で「規範版( Editio princeps )」を出版した。アルドゥスが作者を「**Quintus Calaber**(カラブリアのクイントゥス)」としたのは、唯一知られていたコイントスの写本が1450年、ヨハネス・ベッサリオン枢機卿によってカラブリアのオトラントで発見されたからである。1577年、ミハエル・ネアンダー( Michael Neander )のラテン語訳が出された時、編者の **Lorenz Rhodomann** が「**Quintus Smyrnaeus** 」という名前をつけた ” (引用部はここまでとする) — )。

# SOURCE

## 44-3



ここ出典(Source)紹介の部 44-3 にあつては

[「トロイア攻囲戦で勝者となったギリシャ勢「一般」の運命】がいわば支隊に相当するオデュッセウス一行同様、渦潮に吞まれて死滅していくとのものであったことが伝わっている]

とのことについての典拠を挙げておくこととする。

(直下、『トロイア戦記』(講談社学術文庫刊/松田治訳) p.439—p.441、第14巻 [ギリシャ軍の帰国] の部よりの原文引用をなすとして)

---

そして、陸と不毛の海で叩きのめされた彼に、黒い死が襲いかかった。

…(中略)…

同様に他のギリシャ人たちも巨大な渦潮に運ばれて、船上茫然となっている者もいれば、船外へ転落する者もいた。全員が命にかかわる試練にさらされていた。

…(中略)…

激浪とゼウスの雨に暴風が加わり、彼らはこれに抵抗できなかったのだ。空は絶えず川のように流れ、下では神聖な海が荒れくるっていた。そこで誰かがいった。

「デウカリオンの時代にあの驚くべき雨が降ったときは、おそらくこのような嵐が人間たちを襲ったのだろう。大地は海に変わり、至るところ海の底になったのだ。」

無惨な嵐に心底から茫然となって、一人のギリシャ人がこのようにいった。死者は数えられなかった。広い海面いっばに死体がただよい、海岸もびっしりと屍で埋めつくされた。

…(中略)…

ポセイダーオンは彼の願いをきき届けた。ほどなく、すべてのギリシャ人を暗い波間に引きづりこんだ。ナウプリオスは逞しい手で赤々と燃える松明を振りかざした。そして、この策略によって、安全な港のある土地へきたと思っているギリシャ人たちをだました。みじめにも、彼らギリシャ勢は、ごつごつした岩のまわりで船もろとも破滅に瀕していた。

…(中略)…

僅かな人数が死をまぬがれたが、これは、神か神霊の救いの手に助けられた者たちである。しかるに、アテーナーは、胸のうちで欣喜雀躍したかと思えば、また一方で、思慮ぶかいオデュッセウスのために心を痛めてもいた。彼はポセイダーオンに脅迫されて数知れぬ苦難をこうむる定めにあつたからだ。

---

(以上をもって引用部を終える)

(**出典(Source)紹介の部 44-3**はここまでとする)

---

以上、長くもなつたが、複数分割しての出典紹介部(**出典(Source)紹介の部 44**から**出典(Source)紹介の部 44-3**)によって

「オギュギーア島(アトランティス比定地)にはトロイアと結びつく側面がある」  
とのことを示した。

さて、これにて

「**[ヘスペリデスの黄金の林檎の園]**(アトラスの娘らが管掌する場)および**[カリュプソの島]**(アトラスの娘の住処となっている島)は双方、伝説上のトロイア崩壊の原因と関係があるものである」

とのことについて、すなわち、

「**[アトラスの娘らたるヘスペリデスの黄金の林檎の園]**で栽培される黄金の林檎が**[トロイア崩壊の原因]**となっていること、また、**[アトラスの娘たるカリュプソの島たるオギュギーア島]**が**[トロイア崩壊の奸計を奏功させたものの水害に遭い渦潮に呑まれることになった]**(それは一部古典ではギリシャ勢一般の運命ともされる)との武将オデュッセウス —彼オデュッセウスは黄金の林檎を巡る争いが戦争に発展する前提条件を構築した者でもある— の漂着先」となっていること、そこから**[ヘスペリデスの黄金の林檎の園]**も**[カリュプソの島]**も**[海中に没したアトランティスの候補地]**のみならず**[トロイア崩壊の原因]**そのものと結びついている」

とのことについて摘示すべきと判じたことの多くを摘示した。

につき、ここまでにて証示に努めもしてきた表記のこと、

「**[ヘスペリデスの黄金の林檎の園]**(アトラスの娘らが管掌する場)および**[カリュプソの島]**(アトラスの娘の住処となっている島)は双方、伝説上のトロイア崩壊の原因そのものと関係があるものである」

とのことは

**[アトランティス]**と**[トロイアの崩壊]**の —黄金の林檎を介しての— **結びつき**

を示すものでもあるが、さらに同点に接合するところとして次のようなこともが指摘出来るようになっている。

---

「トロイアはギリシャ勢に攻め滅ぼされた後、(異伝では)、その元の主(トロイアの民ら)

を失った廢墟として占領をなしていた攻め手のギリシャ勢の攻囲用の防壁を伴った陣地もろとも神罰によって海中に没せしめられたとの伝承が伴っている都市となる」  
「他面、アトランティスについてもギリシャの軍勢と戦争をなしている折に大地震にさらされ、ギリシャ勢諸共、海中に没したとの話が伝わっている」

---

上記にあつての

〔トロイアのギリシャ勢を巻き込んでの洪水による崩壊〕

についてはトロイア戦争の物語を叙事詩として語り継いできたホメロスの作品に語られずのところを描いたとの書物である『トロイア戦記』（つい先立っての**出典(Source)紹介の部 44-3**にて引き合いに出した書物)にそういう記述が〔文献的事実〕の問題として含まれているのでその部を取り上げておく。

---

**出典(Source)紹介の部 44-4**

# SOURCE

## 44-4



ここ**出典(Source)紹介の部 44-4**にあつては

〔トロイア都市の末期は攻囲勢のギリシャ軍諸共にしての水没であったとの特定古典内記述がある〕

とのことについての典拠を挙げることとする。

(直下、『トロイア戦記』(講談社学術文庫刊／松田治訳)p.441—p.442、第14巻〔ギリシャ軍の帰国〕の部よりの引用をなすとして)

---

水没するトロイア

折しも、ポセイダーオンは、その不屈の胸のうちで、逞しいギリシャ人たちの防壁や塔に激しい敵意を向けていた。それはギリシャ人たちがトロイア勢の憎

悪にみちた攻撃を防ぐために構築したものだ。神は大急ぎで、黒海からヘレスポントスへ流れる海の水のすべてを氾濫させ、それをトロイアの海岸にぶきまけた。上空からはゼウスが、誉れたかい地ゆすりの神を讃えて、雨を降らせていた。また遠矢を射るアポローンにしても、苦労はしなかったわけではなく、イーデー山からあらゆる川の流れを一カ所に導き、ギリシャ人たちの要塞を水びたしにした。海は動揺をつづけ、そしてまだ、ゼウスの雨によっておびたしく増水した急流が、轟々と流れていた。この急流が、ギリシャ人たちの防壁をことごとく無惨に粉碎しないままに海になだれこもうとするのを、とどろく海の黒い波浪が阻止していた。そこでポセイドンみずから、中から地面を割り、水と泥と砂を無限に噴出させた。そして強力な力でシーイオン岬をゆさぶった。するとトロイアの海岸も土台も轟音をたて、巨大な城壁は破壊され、水没してみえなくなり、大きくぼっかり口を開けた大地の中へ飛び込んでいった。そして、海が退いたとき、砂だけがまだ見えていた。その砂は鳴りどよめく岬からはるか遠くへの波打ち際まで広がっていた。以上の事態は神々のよこしまな考えによって達成されたことである。

---

(引用部はここまでとする)

(尚、上にて原文引用をなした邦訳版『トロイア戦記』記述については国内流通を見ている当該著作(講談社学術文庫刊『トロイア戦記』)を直に手元にとってみないとそれが[文献的事実]を体現したものか確認の術がないととらえるため、即時即座にオンライン上より確認せないととらえたため、ネット上に公開されている当該古典該当部の英文テキストも下に挙げておくこととする——下に引用なしの英文から何語か抽出して入力し、また、英語版古典タイトル The Fall of Troy および古典の著者と伝わる Smyrnaeus Quintus の名称を入力すれば、検索エンジンから特定できるところの The Project Gutenberg のサイトにて公開されている The Fall of Troy 英訳版(1913年刊行のもの)よりの引用を下になしておくこととする)

(直下、Project Gutenberg のサイトにて公開されている The Fall of Troy(1913)よりの原文引用をなすとして)

---

The sea Dashed o'er it, and the roaring torrents still Rushed on it, swollen by the rains of Zeus; And the dark surge of the wide-moaning sea Still hurled them back from mingling with the deep, Till all the Danaan walls were blotted out Beneath their desolating flood. Then earth Was by Poseidon chasm-cleft: up rushed Deluge of water, slime and sand, while quaked Sigeum with the mighty shock, and roared The beach and the foundations of the land Dardanian. So vanished, whelmed from sight, That mighty rampart. Earth asunder yawned, And all sank down, and only sand was seen. When back the sea rolled, o'er the beach outspread Far down the heavy-booming shore. All this The Immortals' anger wrought.

---

(引用部はここまでとする —※— )

(※ちなみに、直上にての抜粋部、『トロイア戦記』英訳版(英文タイトル The Fall of Troy の入力をなした方がラテン語タイトル Posthomerica の入力をなした際よりもネット上で特定しやすくもなっているとの古典)の誰でもオン



ライン上より確認できるとの抽出部については[別の版から訳を起こされたと思しき日本国内流通版の表記 一上にて原文引用なししているところの講談社学術文庫版の表記一 ]に比べて簡明な記述がなされ、その意で内容が多少異なるものとなっているので、一応、直上にての同じくもの英文テキストに対する拙訳を付しておくこととする ⇒ 「ゼウスが降らした雨に倍加されるとのかたちで海水はほとぼしりの轟音を響かせながら、地を奔った。[ダナン] (訳注:[ダナン]はこの場合、トロイア包囲側のギリシャ連合軍を指す)の城壁が不毛なる洪水の下に滅せさせしめられるに至るまで、未だもつなり続ける大海よりの黒色帯びての大波が打ちよせ打ちよせては深みにて結合するがごとくにて吐き出されていた。そうした中、ポセイドンによって大地が割られ、水・泥・土が入り混じっての洪水が襲いかかってシーイオン岬に尋常ならぬ衝撃でもって喚きかけるがごときことをなし、浜辺と父祖ダーダネルスの地 (訳注:Dardanことダーダネルスはトロイア建立の父と伝説にてされる存在である)に轟音を浴びせもしていた。そうして力強き防壁(rampart)は、望見する限り、消滅を見ることとなった。大地は真つ二つに口を開け、すべてが沈み、海が引いた後、重々しきさまを呈していた内陸部からはるか下つての浜辺に至るまで一面、砂のみが認められるとのありさまであった。これ全て、不死なる者ら(イモータルズ、要するにギリシャ神話の神ら)の怒りが成就見ることであった」(オンライン上より確認可能な上にて引用の英文テキストに対する拙訳はここまでとする))

上の記述はトロイアをようやくと滅ぼし、故地ギリシャへの帰国を企図していたギリシャ勢が僅かな例外を残して神々によってほぼ皆殺しにされていくとの過程を事細かに描いているとの段、包囲用に構築された自陣攻囲壁もろとも、主を失ったトロイア城市の土台もろとも、海中に没させしめられていくとの筋立てを体現しての段となるが、といった下りが「古の洪水伝承」と関わることを示唆する記述も同じくもの古典の中に存在する。

すなわち、先に**出典(Source)紹介の部 44-3**の部にて引用をなした『トロイア戦記』(講談社学術文庫)にての

「デウカリオンの時代にあの驚くべき雨が降ったときは、おそらくこのような嵐が人間たちを襲ったのだろう。大地は海に変わり、至るところ海の底になったのだ。」無惨な嵐に心底から茫然となって、一人のギリシャ人がこのようにいった」

との邦訳版(441 ページ)よりの原文引用しての記述(ギリシャ勢とトロイア廃墟に皆殺しの洪水を加速させるための神としての大雨が浴びせられた折にギリシャ人が口にしたとの言葉を取り上げての部/オンライン上より誰でも確認できる英文表記では “ Raved round them. And one cried: "Such floods on men Fell only when Deucalion's deluge came, When earth was drowned, and all was fathomless sea!" ” となっている)に見る、

[デウカリオンの時代のあの驚くべき雨]

というのはギリシャ版[ノアの洪水伝承]とでも言うべきデウカリオン洪水伝承のことを指しているがゆえである。

(:デウカリオン洪水伝承についてはたとえば和文ウィキペディア[デウカリオン]項目には原文引用するところとして次のような記載がなされているところでもある。

(直下、和文ウィキペディア[デウカリオン]項目より原文引用をなすとして) “ゼウスが洪水を起こした原因は、次のようなものである。ペラスゴスの息子

リュカーオンとその子たちは、不信心のために神々の怒りを買った。リュカーオンは当初アルカディアにゼウス・リュカイオスの信仰を広めたが、神に祈る際に人間の少年を生贄としたことでゼウスによって狼の姿に変えられた。リュカーオンの家はゼウスの雷霆で焼き払われた。リュカーオンの息子たちは22名とも50名ともいうが、その悪行の噂はオリンポス山にも知れ渡っていた。ゼウスは貧しい旅人に身をやつしてリュカーオンの息子たちのもとを訪れた。彼らは旅人に臍物入りのスープをすすめたが、スープには、羊や山羊の臍物だけでなく、彼らの兄弟の一人ニクティエモスの腸が混ぜてあった。ゼウスはこれを見破ってリュカーオンの息子たちを狼の姿に変え、ニクティエモスだけは生き返らせたという。…(中略)…ゼウスはこれら  
のことで人間に嫌気がさし、絶滅させてしまおうと、地上に大洪水を起こした。  
南風とともに豪雨が起り、恐ろしい速さで海の水かさが増した。沿岸や平  
野にあるすべての都市が流され、世界はわずかな山の頂以外は水場たしと  
なった。しかし、デウカリオンは父プロメテウスから警告を受けていたの  
で、いち早く方舟を作って食糧を積み込み、妻ピュラーとともに乗り込んでい  
た”

(引用部はここまでとする。トロイア崩壊に際しても (先に引用なしたように) [ゼウスが大雨を降らせて洪水の威力を倍加させしめた]との描写が『トロイア戦記』にてなされている。他面、上にてのデウカリオン伝説 —リュカーオンという土地の王にその息子ニクティエモスの人肉を食わされたことにゼウスが憤激して人間を滅ぼすことにしたとの伝説— でも [ゼウスが大雨を降らせて洪水を招いた] との描写がなされている (そして、『トロイア戦記』では以上のデウカリオン伝説のことを攻囲側のギリシャ勢に属するギリシャ人が語っているとの描写がなされている) )

お分かりだろうが、(元となっている『トロイア戦記』という古典、スミルナのクイントゥスという古典期著述家の手になるものとして (上にて既述のように) 15世紀にはじめて写本が発掘・発見されたとのその古典の縁起に [ルネサンス期にての捏造可能性] が伴うものでも)、[トロイア崩壊の顛末]が一面で古の大洪水伝承の崩壊の顛末と接合するとの記述が何百年も前からその存在が確認されているとの古文献に認められるとのこととなっているのである (疑わしきにおかれては Posthomerica の英訳版である The Fall of Troy の記述内容を同著を Project Gutenberg などからダウンロードでもなし、引用なしたところが文献的事実か否かとの観点で確認させていただきたいものである)。

(出典(Source)紹介の部 44-4 はここまでとする)

以上より

[ [ギリシャ勢と戦争をなした後のギリシャ勢をも巻き添えにしての洪水によるトロイア滅亡] と  
[ギリシャと戦争をなした後のギリシャ勢にも壊滅的被害を与えた洪水によるアトランティス滅亡]

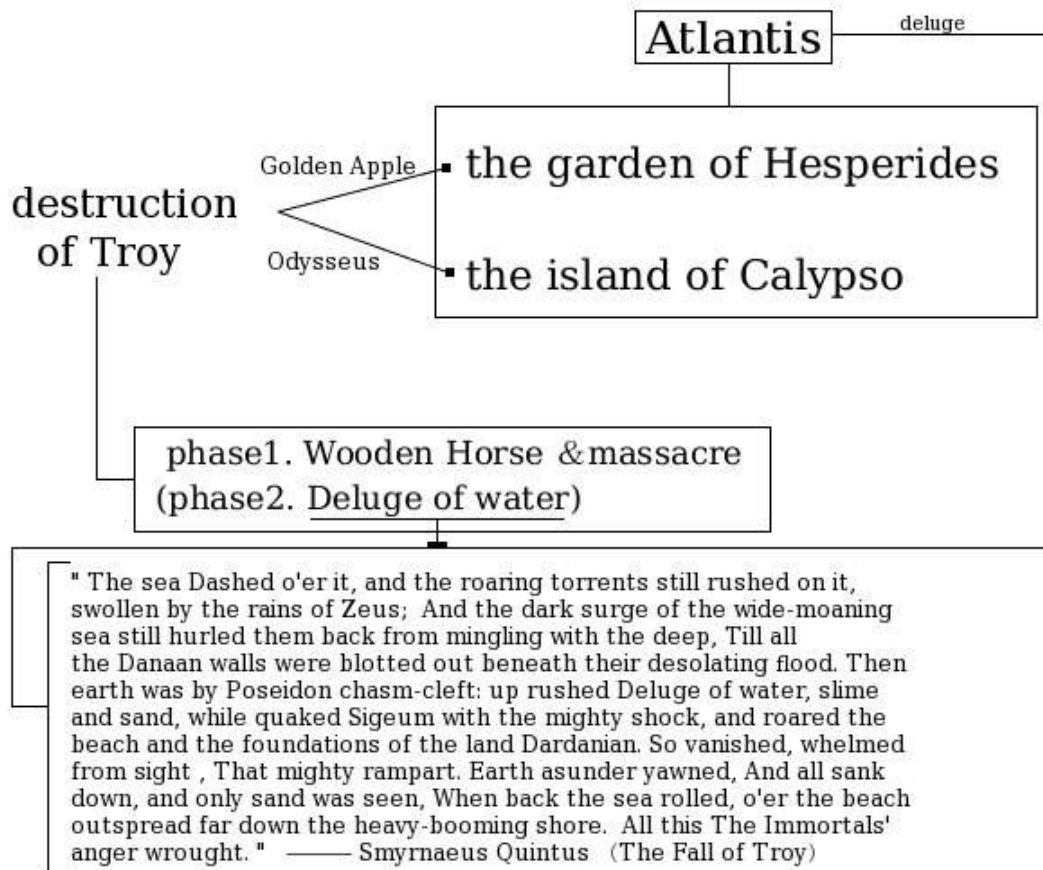
は

「その末期(まつご)のありよう」

として接合すると述べるができるようになっている。

(:尚、アトランティスの方の最期が戦争相手であったギリシャ勢を巻き込んでの海中沈没であったと伝わっていることについては先立っても引用なしで示している——先に本稿にての**出典(Source)紹介の部 36** にあってプラトン全集 12(岩波書店刊行)『ティマイオス』収録部の p.22—p.23 より引いたところとして “さて、このアトランティス島に、驚くべき巨大な、諸王国の勢力が出現して、その島の全土はもとより、他の多くの島々と、大陸のいくつかの部分を支配下におさめ、なおこれに加えて、海峡内のこちら側でも、リビュアではエジプトに境を接するところまで、また、ヨーロッパではテュレニアの境界に至るまでの地域を支配していたのである。実にこの全勢力が一団となって、あなた方の土地も、われわれの土地も、否、海峡内の全地域を、一撃のもとに隷属させようとしたことがあったのだ。…(中略)…すなわち、あなた方の都市は、その盛んな意気と戦争の技術とであらゆる都市の先頭に立ち、ある時にはギリシャ側の総指揮に当たっていたが、…(中略)…侵入者を制圧して勝利の記念碑を建て、未だ隷属させられていなかった者についてはその隷属を未然に防いでくれたのだし、その他の者に対しては、とにかくヘラクレスの境界内に居住する限りのわれわれ仲間すべてについて、これを、惜しむことなく自由の身にしてくれたのであった。しかし後に、異常な大地震と大洪水が度重なって起こった時、苛酷な日がやって来て、その一昼夜の間に、あなた方の国の戦士はすべて、一挙にして大地に呑み込まれ、またアトランティス島も同じようにして、海中に没して姿を消してしまったのであった” (Project Gutenberg にて取得可能な Timaeus に見る該当部表記は “This mighty power was arrayed against Egypt and Hellas and all the countries bordering on the Mediterranean. Then your city did bravely, and won renown over the whole earth. For at the peril of her own existence, and when the other Hellenes had deserted her, she repelled the invader, and of her own accord gave liberty to all the nations within the Pillars. **A little while afterwards there were great earthquakes and floods, and your warrior race all sank into the earth; and the great island of Atlantis also disappeared in the sea.**” となる) と記載されているとおりでである。ちなみに、「あなたがたの国」と表記されているのは都市国家「アテナ」のことである)——。

以上のような伝わるどころのアトランティスの最期に対して、トロイアの最期として [アガメムノン王に率いられたギリシャ勢による攻囲戦の後、住民皆殺しの憂き目に遭った後、洪水によって包囲勢力諸共、微塵も残さず完全破壊された] とのことが伝わっているわけである。繰り返すが、以上のようなかたちで [アトランティス] と [トロイア] は [ギリシャ勢との戦争とギリシャ勢を巻き込んでの大洪水によっての滅亡] という文脈で結びつくのである。だけではなく、欧州では [アトランティスの所在地] と目される場として [黄金の林檎の園]、すなわち、[[トロイア崩壊の原因となった神の果実]の園] が挙げられてきたとの事情がある (**出典(Source)紹介の部 40** および **出典(Source)紹介の部 41**)。それでもってしてアトランティスおよびトロイアは [ギリシャ勢との戦争と大洪水によっての滅亡した領域] としてだけではなく [黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)] を介しても接合していることになると述べられるわけである)



(ここまで示してきたことを英文で端的に表記すれば、上のようなところとなる)

以上、摘示に努めてきた内容をもってしても、しかし、

[トロイアとアトランティスの「多重的」結びつき] (と述べもするところ)

について典拠として足りないにとらえる向きもあるかもしれない。であるから、欧米圏の古文献内容を「対象多岐に渡るところとして」把握しようとしてきた人間として通ずるに至ったこととして、

[トロイア・アトランティス接続性を示す「他の」古文献内記述]

もが存在していること、以降、示しておくこととする (ここまでの内容をきちんと把握している向きにはいちいちもって述べるまでもないか、とも思うのだが、そういう細々とした指し示しに注力なしているのは同じくものが [アトラス] [アトランティス] との名詞を [ブラックホール関連事物] にあつての命名規則に組み込んでいる (ブラックホールの検知・観測をなしうるとされる検出器 **ATLAS** およびイベント・ディスプレイ・ツール **ATLANTIS** になるものを運用している) との **LHC** 実験に深く深く関わるとの指摘がなせてしまうからである)。

その点もってして

[トロイア・アトランティス接続性を示す「他の」古文献内記述もが存在している]

とのことの典拠たるところをこれより紹介していくことになるわけではあるが、同じくものことについては次の流れが問題となる。



---

「古のアトランティスの開闢王は[アトラスの名を冠する人物]であったとプラトン古典『クリティアス』に表記されているとのことがある」(本稿にての **出典(Source)紹介の部 36** にあって典拠たる記述を挙げている)

→

「トロイアの創設者であるのはダルダノスという伝説上の存在であるが、そのダルダノスは巨人アトラスの娘(エレクトラ)の息子、すなわち、アトラスの孫であると伝わっている」(これより初出の出典紹介をなす)

→

「上のダルダノス(トロイア始祖)については[巨人アトラスの孫]であるとされる一方で同人物が[人間的側面を帯びたアトラスという「王」]に(孫ではなくその息子として)臣従していたと記しているところの地域史関連の古典が存在している、すなわち、[ダルダノス]と[アトラス王]の関係をイタリアの特定地域の(中世以後捏造されての)地域史と結びつけようとしていたとの古典が現実存在する」(これより初出の典拠紹介をなす)

→

「とすれば、[トロイア創設者ダルダノス]は[人間としてのアトラス王]の[臣下]にして[血族]と伝わっていることになり、[人間としての側面強きアトラス王]を戴いていたと伝わるアトランティスにまつわる伝承とトロイアの伝承がより一層、深くも接合することになる」

---

以上のことにまつわって典拠紹介未了となるところの紹介をこれよりなす。

■ 外挿付記としまして：ここ【典拠紹介部 45】には「多少長くもの」p.680 から p.687 との頁数を割いているため、以降【典拠紹介部】(従たるどころ) と【指し示しの主軸たるどころ】の関係について惑われぬよう、何卒ご注意ください。と申し述べさせていただきます。次第です。

出典(Source)紹介の部 45

# SOURCE

## 45



ここ**出典(Source)紹介の部 45**にあっては



[トロイア・アトランティス接続性を示す「他の」古文獻内記述もが存在している]

とのことについて表記の順序での典拠紹介をなすこととする。

まずもって、

---

「古のアトランティスの開闢王は[アトラスの名を冠する人物]であったとプラトン古典『クリティアス』に表記されているとのことがある」(本稿にての **出典(Source)紹介の部 36** にあって典拠たる記述を挙げている)

→

「トロイアの創設者であるのはダルダノスという伝説上の存在であるが、そのダルダノスは巨人アトラスの娘(エレクトラ)の息子、すなわち、アトラスの孫であると伝わっている」(これより初出の出典紹介をなす)

→

「上のダルダノス(トロイア始祖)については[巨人アトラスの孫]であるとされる一方で同人物が[人間的側面を帯びたアトラスという「王」]に(孫ではなくその息子として)臣従していたと記しているところの地域史関連の古典が存在している、すなわち、[ダルダノス]と[アトラス王]の関係をイタリアの特定地域の(中世以後捏造されての)地域史と結びつけようとしていたとの古典が現実に存在する」(これより初出の典拠紹介をなす)

→

「とすれば、[トロイア創設者ダルダノス]は[人間としてのアトラス王]の[臣下]にして[血族]と伝わっていることになり、[人間としての側面強きアトラス王]を戴いていたと伝わるアトランティスにまつわる伝承とトロイアの伝承がより一層、深くも接合することになる」

---

との流れにあっての

「古のアトランティスの開闢王は[アトラスの名を冠する人物]であったとプラトン古典『クリティアス』に表記されているとのことがある」

とのことについての論拠だが、先に**出典(Source)紹介の部 36**にあって引用なしたことを再引用することで足りると考えているため、そうする。

(直下、プラトン全集 12(岩波) Critias『クリティアス』収録部の 236 ページよりの「再度の」原文引用をなすとして)

---

ポセイドンはまた五組のふたごの男の子を生み、育てられた。そしてアトランティス島全体を一〇の地域に分けたまい、最年長のふたごのうち、さきに生まれた子に、母の住まいと、その周辺のいちばん広いもつとも地味の肥えた地域を分け前として与えて、かれを他の子どもたちの王となしたまい、他の子どもたちには、それぞれに多くの人間を支配する権限と広い地域からなる領土を与えて、その領主とした。なお、かれは子どもたち全員に名前をおつけになったが、そのさい、初代の王となった最年長の子におつけになった名前が「アトラス」だったので、この名前にあやかって、島全体も、その周辺の海も、「アトランティコス……」と呼ばれるようになったのである。

---

(引用部はここまでとしておく 一※一 )

(※以上、訳書よりの引用部に関して Project Gutenberg より全文ダウンロードできるとの英訳版 Critias ——19 世紀にあつてのオクスフォードのプラトン翻訳家となる Benjamin Jowett との向きによって訳がなされている版—— では同じくもの引用部について “ He also begat and brought up five pairs of twin male children; and dividing the island of Atlantis into ten portions, he gave to the first-born of the eldest pair his mother's dwelling and the surrounding allotment, which was the largest and best, and made him king over the rest; the others he made princes, and gave them rule over many men, and a large territory. **And he named them all; the eldest, who was the first king, he named Atlas, and after him the whole island and the ocean were called Atlantic.**” との記載がなされている ——述べるまでもないことかとは思ふが、英訳版の内容を挙げているのは和文のそれと異なり英文原著の方がオンライン上で裏取りなせる、全文確認可能となっているといったことがあるからである—— )

次いで、表記のこらの中にあつての、

「トロイアの創設者であるのはダルダノスという伝説上の存在であるが、そのダルダノスは 巨人アトラスの娘(エレクトラ)の息子、すなわち、アトラスの孫であると伝わっている」

とのことの出典を挙げることにする。

については基本的なことと判断、和文ウィキペディア[ダルダノス]項目にあつての現行の記載内容より次の記述(媒体が媒体がゆえにこれより変転を見る可能性もある記述)を引いておくことにする。

(直下、和文ウィキペディア [ダルダノス] 項目よりの引用をなすとして)

---

ダルダノスは、ギリシア神話に登場する人物である。プレイアデスの1人エーレクトラとゼウスの息子。イーアシオンと兄弟。あるいはハルモニアと兄弟といわれることがある。テウクロスの娘バティアとの間にイーロスとエリクトニオスの2子、またピーネウスの妻となったイーダイアーが生まれた。トロイア王家の祖であり、ギリシャ神話における洪水伝承の1つは彼が主人公とされる(他にデウカリオンとオーギュゲスがいる)。

---

(引用部はここまでとする —※— )

(※以上のように和文ウィキペディアにて解説されていることと意味的にほぼ同じくものことを言及しているとの箇所として英文 Wikipedia[Dardanus] 項目(の冒頭)には次のような記載がなされている⇒ “ In Greek mythology, Dardanus (/ˈdɑːrdənəs/; Greek: Δάρδανος) was **a son of Zeus and Electra, daughter of Atlas**, and founder of the city of Dardania on Mount Ida in the Troad . ” (訳として)「([トロイア界隈と同じくもの語源を持つ) Troad 地方にあつてのイデ山に拠つてのダルダニアの市を創始したダルダノスはゼウスと「アトラスの娘たるエレクトラ」との間に出来た息子である(アトラスの孫である) 」)

続いて、

---

「古のアトランティスの開闢王は [アトラスの名を冠する人物] であったとプラトン古典

『クリティアス』に表記されているとのことがある」(本稿にての **出典(Source)紹介の部 36** にあって典拠たる記述を挙げている)

→

「トロイアの創設者であるのはダルダノスという伝説上の存在であるが、そのダルダノスは巨人アトラスの娘(エレクトラ)の息子、すなわち、アトラスの孫であると伝わっている」(これより初出の出典紹介をなす)

→

「上のダルダノス(トロイア始祖)については[巨人アトラスの孫]であるとされる一方で同人物が[人間的側面を帯びたアトラスという「王」]に(孫ではなくその息子として)臣従していたと記しているところの地域史関連の古典が存在している、すなわち、[ダルダノス]と[アトラス王]の関係をイタリアの特定地域の(中世以後捏造されての)地域史と結びつけようとしていたとの古典が現実存在する」(これより初出の典拠紹介をなす)

→

「とすれば、[トロイア創設者ダルダノス]は[人間としてのアトラス王]の[臣下]にして[血族]と伝わっていることになり、[人間としての側面強きアトラス王]を戴いていたと伝わるアトランティスにまつわる伝承とトロイアの伝承がより一層、深くも接合することになる」

---

とのことらのうち、大っぴらには語られないとのこととなるも本稿にて重要視していること、

---

「上のダルダノス(トロイア始祖)については[巨人アトラスの孫]であるとされる一方で同人物が[人間的側面を帯びたアトラスという「王」]に(孫ではなくその息子として)臣従していたと記しているところの地域史関連の古典が存在している、すなわち、[ダルダノス]と[アトラス王]の関係をイタリアの特定地域の(中世以後捏造されての)地域史と結びつけようとしていたとの古典が現実存在する」

---

とのことの典拠を挙げることとする。

についてはまずもってそこより述べるが、イタリアのフィレンツェ(英語表記はフローレンス)にての地史を扱った書として

### Nuova Cronica 『新年代記』

という書が[ジョヴァンニ・ヴィッラーニ]という14世紀活動(没年1348年)の銀行家・史家によってのものであったものとして今日に伝わっていることがある。

(:同著『新年代記』については中身の細かいところに入らないで額面的・皮相的な解説に留まるものであるが、和文ウィキペディア[ジョヴァンニ・ヴィッラーニ]項目に次の通りの記載がなされてもいるところである。

→

(現行にての和文ウィキペディア[ジョヴァンニ・ヴィッラーニ]項目の記載内容を掻い摘まみながら引用するところとして)

“ジョヴァンニ・ヴィッラーニ(Giovanni Villani, ? – 1348年)は、イタリア・フィレンツェの銀行家・政治家・歴史家。生年については、1276年とも1280年とも言われるが不明である。『新年代記』(en:Nuova Cronica)を著作した。父親のヴィッラーノ・ディ・ストルド・ヴィッラーニはフィレンツェの有力な商人の1人であり、1300年にはダンテ・アリギエーリとともに市の行政委員(プリオーネ)を務めた(ただし、ほどなく辞任して翌年の政変で失脚した同僚ダンテと明暗を分ける

こととなる)・・・(中略)・・・彼は古代ローマ以来の歴史家の伝統が途絶したことを嘆き、「ローマの娘」を自負するフィレンツェ市民である自分がその伝統を復活さなければならぬとする靈感に遭遇した(と、本人は主張した)ことによって、彼は「ローマの娘」フィレンツェを中心とする年代記編纂を決意したと伝えられている・・・(中略)・・・『新年代記』(Nuova Cronica)は全12巻から構成され、大きく2部に分けられる。前半6巻はバベルの塔からフリードリヒ2世までを扱い、父祖以前の歴史に属するため先人の著書に依存する部分が多い。また、ジョヴァンニはラテン語をほとんど知らなかったとされる一方で、聖書や古典に関する知識が豊富であり、それが記述にも生かされている”

(以上、和文ウィキペディア [ジョヴァンニ・ヴィッラーニ] 項目にての(現行)記述よりの掻い摘まんでの引用部とする)

奇縁あって筆者は上に見るジョヴァンニ・ヴィッラーニ『新年代記』の内容も渉猟対象としていたのだが、そこより問題となるところの記述をここに引いておくこととする。

(直下、オンライン上にて Project Gutenberg サイトを通じて全文確認できるとの Giovanni Villani の Nuova Cronica 『新年代記』の20世紀初頭英訳版、VILLANI'S CHRONICLE (1906) にての§ 9. — How Italus and Dardanus came to agree which should succeed to the city of Fiesole and the kingdom of Italy.の節よりの抜粋をなすとして)

---

**When King Atlas had died in the city of Fiesole, Italus and Dardanus his sons were left rulers after him**; and each of them being a lord of great courage, and both being worthy in themselves to reign over the kingdom of Italy, they came to this agreement together, to go with their sacrifices to sacrifice to their great god Mars, whom they worshipped; and when they had offered sacrifice they asked whether of them twain ought to abide lord in Fiesole, and whether ought to go and conquer other countries and realms.

(補ってもの拙訳として)

「イタリアのフィエゾーレの市 —— (訳注:フィエゾーレについてはここにて引用している『新年代記』がその地誌となっているところのフィレンツェ、イタリア共和国トスカーナ州はフィレンツェ県にある自治体(コムーネ)の名前として現時でも用いられている地名である) —— でアトラス王が死した折、彼の息子らである[イタラス] (訳注:Itlus.イタリアの語源とも述べられる存在)および[ダルダノス] (訳注:トロイアの創立者ダルダノス)は遺されし統治者となっていたところ、各々大いなる度胸を有しての君主らであったから、双方ともにイタリアの王国を統治するに値しており、そのため、(妥結点を探るため)彼らの崇拝する戦神マルス神に互いに犠牲を供しあうことを約した。そして、彼らが犠牲を神に供さんとした折、彼ら二人のうちのどちらがフィエゾーレに留まるべきか、そして、どちらが去って他の国土を征服せんとするべきか神前にて伺いをたてた」

---

(引用部はここまでとする)

上の引用部でもってしてダルダニスという神話上の存在が中世年代記にて [アトラス王] と結びつけられていること、理解いただけただか、と思う(※)。

---

※補足として

尚、引用元文書であるジョヴァンニ・ヴィッラーニ『新年代記』では

[ダルダノスがイタリアを去るべしとなったこと、そして、同ダルダノスがトロイアの地に進出してその地の王となった]

との流れが具現化を見ている(散漫な展開であるため、そちらについては原著よりの引用はなさない)。

そうした事後展開も加味して上にて引用なしたような筋立てが見受けられるとのことについては、だがしかし、

『それが[偽史]と知れようとのものでもそれにしても通常の歴史理解からあまりにもかけ離れている突拍子もないことを扱ったものである(イタリアから出た王がトロイアの地を侵略したなどという理解は「源義経がジンギス・カンになった」よろしくの式で通常の歴史理解からかけ離れている、でもいい)。であるから、馬鹿馬鹿しくて聞くに堪えない』

ととらえる向きもあるかもしれない(筆者目分量としては古典に関する知識に乏しいの人間であればあるほど、そういう予断に囚われやすきところか、とも見ている)。

が、少なくとも、である。ダンテが生きた初期ルネサンス期のイタリアにあって(ジョヴァンニ・ヴィッラーニによって)具現化していた以上のような「偽史」を支えるだけの内容を有した有名古典が「古代より」伝存しているとのことは事実となり、引用なしの『新年代記』の作者ジョンヴァンニ・ヴィッラーニはそちら古典に依拠して「偽史」をこさえていたと考えられるようになっていたとのことがある。

では、その古典とは何かだが、ヴェルギリウス著『アエネーイス』、現存するローマ期成立の著名古典たる同作がそうした古典にあたり、同『アエネーイス』では  
[ローマ(共和世紀を経て地中海世界を席卷するに至ったローマ)の起源]が文献的事実の問題として

[木製の馬で陥落したトロイアの落ち武者アエネイウスの一行のイタリア来訪]

と結びつけられているとのことがあり(ローマ人には自分たちの祖先がトロイア人であったとの理解があった)、同『アエネーイス』に見るところと同じくもの内容、陥落したトロイアよりの落人がイタリアを目指した理由が(『アエネーイス』の中では)

[彼らはダルダネス(トロイア始祖)以前の父祖の地(イタリア)に「再度」舞い戻ることにした]

との目的意識に求められているとの記載が認められるとのことがありもするのである(要するに[イタリアの民⇒トロイア入植⇒トロイア崩壊⇒イタリアへの故地を求めての旅]との流れが『アエネーイス』に具現化を見ている)。

以上のことについて紹介する前にまずもって和文ウィキペディア[アエネーイス]項目にての現行記載を引いてアエネーイスとの古典がいかようなものなのかの紹介をなすことから始める。

(直下、和文ウィキペディア[アエネーイス]項目にあっての現行記載内容よりの引用をなすとして)

「アエネーイスは「アエネーアースの物語」の意。ヴェルギリウスの最後にして最大の作品であり、ラテン文学の最高傑作とされる。



この作品の執筆にウェルギリウスは11年(前29年—前19年)を費やした。最終場面を書き上げる前に没したため未完である。彼は死の前にこの草稿の焼却を望んだが、アウグストゥスが刊行を命じたため世に出ることになった。

…(中略)…

トロイアの王子でウェヌスの息子であるアエネーアースが、トロイア陥落後、カルタゴの女王ディードーとの悲恋を経てイタリアにたどり着き、現地王の娘との婚約とそれに反対する勢力との戦いを描く。詩の中で建設が予言されるアルバ・ロンガはローマの創立者ロームルスとレムスの出身地であり、当時ローマの礎と見なされていた」

(引用部はここまでとする)

上もてアエネーアースがトロイアよりの落人を材にとつての著名な古典であることを紹介したところで、次いで、英文ウィキペディア[Dardanes]項目(トロイア始祖ダーダネルスにまつわる項目)にての記載内容よりの引用をなしておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia[Dardanes]項目、トロイアの始祖たるダルダネスにまつわる項目よりの引用をなすとして)

**A different account by Virgil in his Aeneid (3.163f), has Aeneas in a dream learn from his ancestral Penates that "Dardanus and Father Iasius" and the Penates themselves originally came from Hesperia, afterwards renamed as Italy**

(上の引用部に対する訳として)

「(ダルダネス故地にまつわる) ヴェルギリウスの『アイネーアース』による他の説明はアイエアースは夢にて彼の祖霊(ローマの祖先崇拜の対象たる存在ペナーテース)からダーダネルスおよび同様に父祖たるイーアシオンそして祖霊ペナーテース自体が原初、ヘスペリア、後にイタリアと呼ばれるところから(トロイアへ)やってきた存在であると学んだとのものとなっている」

(引用部はここまでとする)

ここまでの内容をもってご理解いただけたか、とは思うのだが、(そもそもシュリーマンにその遺跡とされるものがギリシャより西方、ヨーロッパというよりもアジアに属するアナトリアの黒海周辺にて発見されたトロイア自体が伝承通りのものとして実在していたかも怪しいとされる中にて)、欧州にあっては「古のトロイア」と自分達の歴史が「相互の始祖」に関わるところで密接に結びついているとの「偽史」が脈々とかたちづくられてきた、との背景があるのである。

(補足の部は以上とする)

---

ここまででもってして

---

「古のアトランティスの開闢王は[アトラスの名を冠する人物]であったとプラトン古典『クリティアス』に表記されているとのことがある」(本稿にての **出典(Source)紹介の部 36** にあって典拠たる記述を挙げている)

→

「トロイアの創設者であるのはダルダノスという伝説上の存在であるが、そのダルダノスは巨人アトラスの娘(エレクトラ)の息子、すなわち、アトラスの孫であると伝わっている」(これより初出の出典紹介をなす)

→

「上のダルダノス(トロイア始祖)については[巨人アトラスの孫]であるとされる一方で同人物が[人間的側面を帯びたアトラスという「王」]に(孫ではなくその息子として)臣従していたと記しているところの地域史関連の古典が存在している、すなわち、[ダルダノス]と[アトラス王]の関係をイタリアの特定地域の(中世以後捏造されての)地域史と結びつけようとしていたとの古典が現実存在する」(これより初出の典拠紹介をなす)

→

「とすれば、[トロイア創設者ダルダノス]は[人間としてのアトラス王]の[臣下]にして[血族]と伝わっていることになり、[人間としての側面強きアトラス王]を戴いていたと伝わるアトランティスにまつわる伝承とトロイアの伝承がより一層、深くも接合することになる」

---

とのことを示し終えたことになる。

(長くもなったが、[出典\(Source\)紹介の部 45](#)はここまでとする)

---

直近までにて

「古のアトランティスの開闢王は[アトラスの名を冠する人物]であったとプラトン古典『クリティアス』に表記されているとことがある」(本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 36](#)にあって典拠たる記述を挙げている)

→

「トロイアの創設者であるのはダルダノスという伝説上の存在であるが、そのダルダノスは巨人アトラスの娘(エレクトラ)の息子、すなわち、アトラスの孫であると伝わっている」(これより初出の出典紹介をなす)

→

「上のダルダノス(トロイア始祖)については[巨人アトラスの孫]であるとされる一方で同人物が[人間的側面を帯びたアトラスという「王」]に(孫ではなくその息子として)臣従していたと記しているところの地域史関連の古典が存在している、すなわち、[ダルダノス]と[アトラス王]の関係をイタリアの特定地域の(中世以後捏造されての)地域史と結びつけようとしていたとの古典が現実存在する」(これより初出の典拠紹介をなす)

→

「とすれば、[トロイア創設者ダルダノス]は[人間としてのアトラス王]の[臣下]にして[血族]と伝わっていることになり、[人間としての側面強きアトラス王]を戴いていたと伝わるアトランティスにまつわる伝承とトロイアの伝承がより一層、深くも接合することになる」

との流れが成り立つことを順々に示した。

それによって

[アトランティスもトロイアも [黄金の林檎] と結びつく —— [黄金の林檎の園] の所在地がアトランティスに仮託されていることがある一方で [黄金の林檎を巡っての争い] がゆえにトロイアは滅びている —— ]

[アトランティスもトロイアも [木製の馬の計略を考案した男] と結びつく —— アトランティスに仮託されているオーギュギアー島が木製の馬の考案者の漂着先となっているとことがある一方でトロイアは木製の馬の計略によって引導を渡されている —— ]

[古のアトランティスも古のトロイアも双方共々が [ギリシャ勢力との戦争の果ての洪水による (ギリシャ軍を巻き込んで) 海中への完全消失] との式で結びつく]

との接合関係について既に解説しつくしてきたアトランティスとトロイアの接合関係が「よりもって濃厚に」示されたとのことになると述べて差し障りなからう。

さて、ここまで述べてきたことをも「あわせて」顧慮すれば、自然に申し述べられることとして、

「LHC 実験に供されての ATLANTIS ( [ブラックホールを観測するため「にも」用いられるイベント・ディスプレイ・ツール] / 本稿 出典 (Source) 紹介の部 35 を参照のこと ) は [トロイア (の崩壊)] と結びついて映るものとなっている」

とのことになる。

同じくものことを加味したうえでここまで指摘してきた内容を整理すれば、次のようなまとめようがなせるとのかたちとなっている。

CERN は ATLAS という検出器を LHC 実験で用いているが、その検出器 ATLAS にみるアトラスおよびそちら検出器と紐付くイベント・ディスプレイ・ツールにその名前が冠されている ATLANTIS (アトランティス) の双方がトロイアと結びついているとのことがある。

まずもって振り返るところとして、より先んじての段からして [検出器 **ATLAS** にその名が流用されている巨人アトラス自体がトロイア崩壊伝承と結びつく] ことを言及していたわけだが ( [ヘラクレス 11 功業にまつわる神話にて (トロイア崩壊の原因ともなった) [黄金の林檎] の園の場を知るのはアトラスであると語られている ] とのこと) にまつわる話となる)、そのアトラスの名と縁起由来で結びつくアトランティス (**LHC 実験** にあつてのイベント・ディスプレイのツールたる **ATLANTIS** と同一名の古の陸塊) にあつても次の観点からトロイアと結びついているとことがある。

(論拠・委細はここまでの記述に譲るところとして)

それについてはギリシャ神話にあつての

[ヘスペリデスの黄金の林檎の園] (アトラスの娘ヘスペリデスが管理する果樹園)

[オーギュギアー島] (アトラスの娘カリュプソが住まう島)

の両地所が双方共に欧州一部識者らによって歴年、

[アトランティス]

に仮託されてきたとのことがあるばかりではなく、同じくもの両地所が

[トロイアの崩壊伝承]

と結びつく場となっているとのことがある(：[ヘスペリデスの果樹園]にて管理されていた黄金の林檎がトロイア崩壊に至る戦争の原因となっていること、また、[オーギュギア島]に漂着したのがトロイア滅亡の木製の馬の奸計を弄した者にして、なおかつ、それ以前に黄金の林檎を巡るやりとりがトロイア戦争に発展することになったとの前提条件(ヘレンにまつわるかねてよりの盟約)を整えた者であったとのオデュッセウスであったとのことがあるからである)。

加えて、トロイア崩壊伝承それそのものにもアトランティスよろしくの洪水崩壊伝承的側面が一面で伴っている。すなわち、有名なところとしてアトランティスに

[ギリシャ勢との戦争の後のギリシャ軍を巻き込んだの洪水による崩壊伝承]

が伴っている一方で、(あまりよく知られていないとの後日譚を扱った一古典に見るところながら)トロイア「にも」

[ギリシャ勢との戦いの末のギリシャ軍を巻き込んだの洪水による完全消滅の伝承]

が伴っているとのことがある。

のみならず、アトランティスの王がアトラス(本稿[出典\(Source\)紹介の部 39](#)にて表記されているような[蒼穹を担ぐ巨人]というよりも[人間の王]としてのアトラス)であるとの申しようがなされている一方で木製の馬で滅ぼされることになったトロイアの創立者ダルダノスの父王も[人間のアトラス王]となっていると言及しての偽史(Nuova Cronica『新年代記』)が存在しており、その偽史の舞台は[ヘスペリア]とも呼称されるイタリアとなっている、すなわち、

[黄金の林檎 —アトラスの娘ら([出典\(Source\)紹介の部 40](#).複数形はAtlantidesとなるアトランティス)— を管理するヘスペリデスと同系統の名たるヘスペリア(Hesperia)]

とも呼称されるイタリアとなっているとのことがある。

従って、[アトランティス](アトランティスに仮託される地所)は「多重多層的に」[トロイア]と結びつくとのこととなっているわけである。

そうもしてトロイアと「多重多層的に」結びつくことになっているとのアトランティスの名を冠するツールを用いてブラックホールを観測しようとの主張がなされてきた、そして、アトランティスと結びつく(アトランティスの王の名であるとのかたちで結びつく)とのアトラスの名を冠する、すなわち、[神話が[トロイアを滅ぼした黄金の林檎]の在処を知る存在として語り継いでいる巨人アトラス]の名を冠する検出器でもってブラックホールを検出しようとの主張がなされてきた実験が **LHC** 実験となっている。

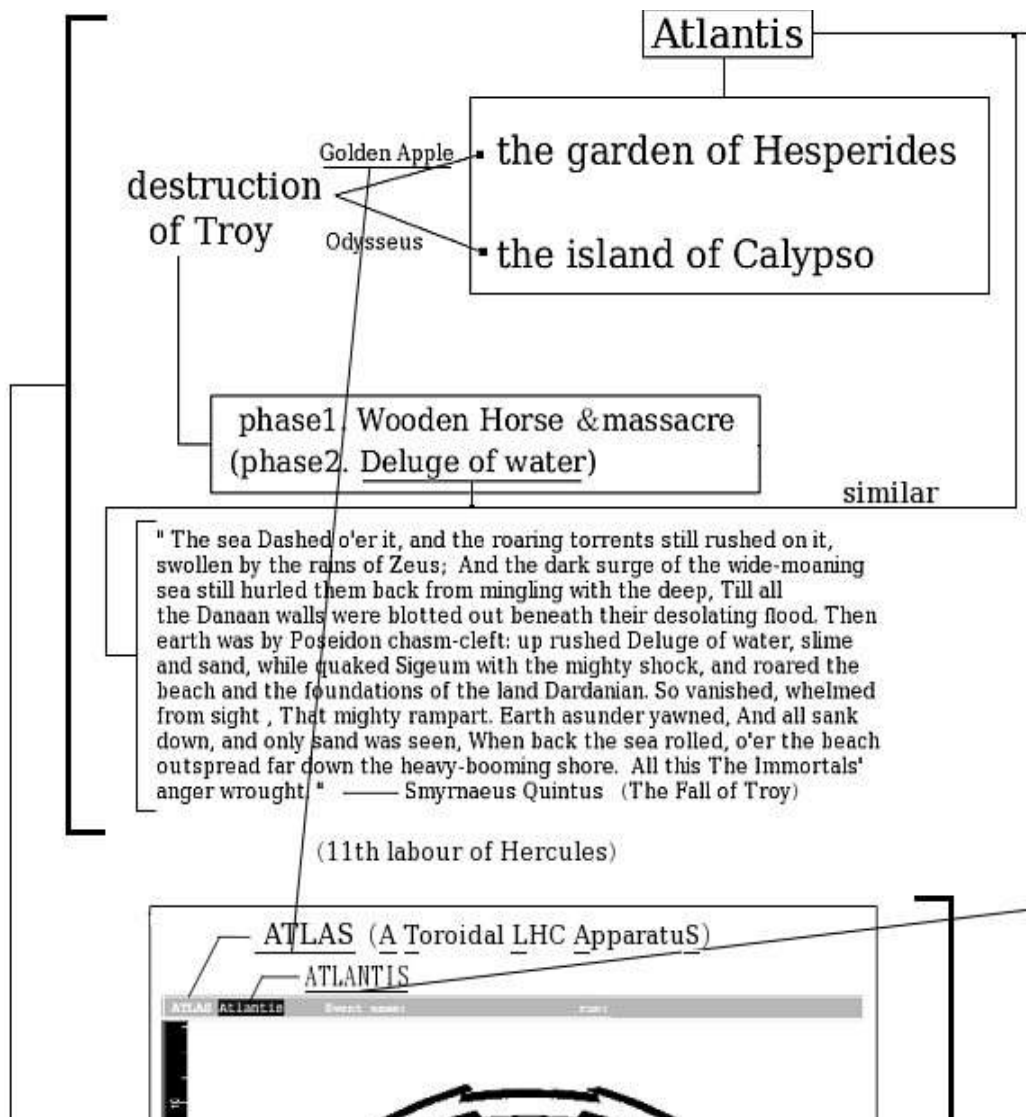
以上、(向きによっては食傷するところであろうかと思えるほどにくどくも振り返りながら)、述べてきた通りに、

CERN の執り行っている LHC 実験が

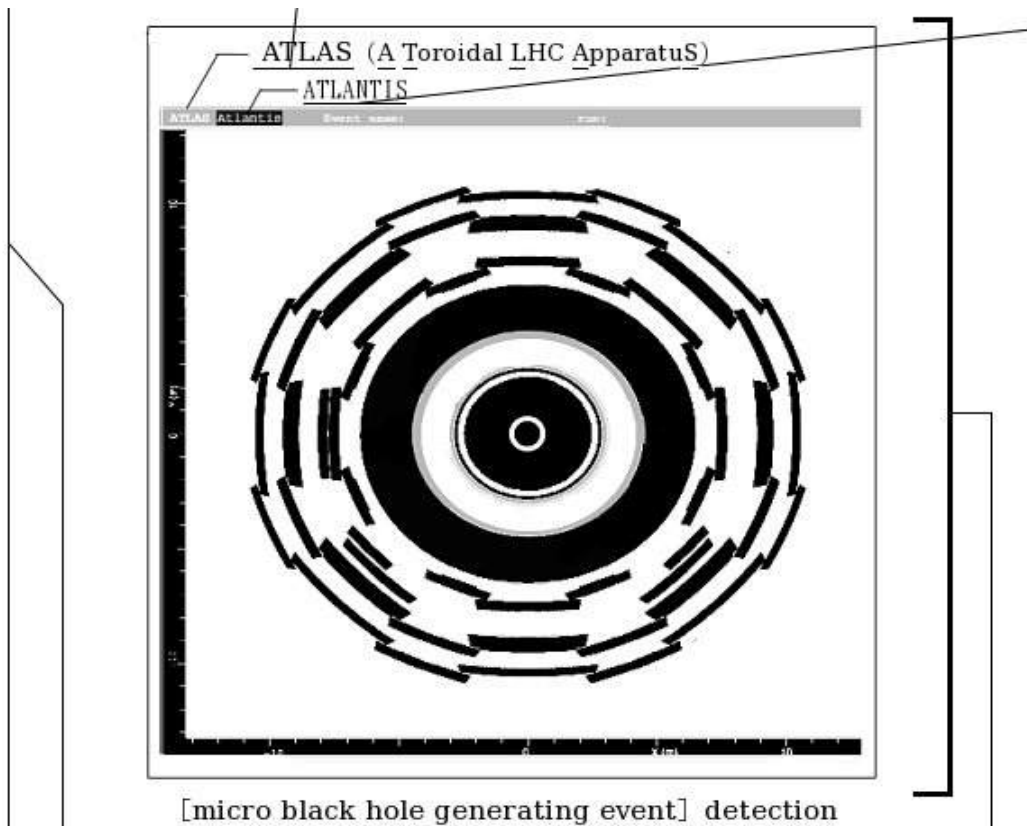
- [アトラス:トロイア崩壊の原因のものとなった黄金の林檎の所在地を知る巨人]
- [アトランティス:トロイアと複合的に結びつく伝説上の陸塊名にして国家名]

の双方と結びつくのことは [トロイア崩壊] とも多重的に結びつくことと同義である

とのことになりもする (「実に残念ながら、」ここでの話からして指し示し対象の選択以外、筆者の主観など一切介在しておらず、あるがままのことをその通りとしてそうであると指摘しているにすぎない — につき、同じくもの点から押し広げもして、**CERN** が用いている **ATLAS** 検出器の **T** の部分が Toroidal こと [環状構造] の体現文字となっている (本稿 **出典 (Source) 紹介の部 36 (3)**) とされることにも「トロイア」との関係性を見出すかは人によるか、とも思うのであるが、この身はそうしたことからして隠喩としての意味合いが込められている可能性も十分にあるかと見ている (それだけの多重的関連性がここまでの話より透けて見えるようになっている) — )。







[micro black hole generating event] detection

[トロイアとアトランティスの結びつき(1)]  
 トロイアの崩壊は黄金の林檎によってもたらされたとも述べることもできる（[出典(Source)紹介の部39]）。その黄金の林檎が実るヘスペリデスの園が位置描写概要などよりアトランティスと結びつけられてきたとことがある（[出典(Source)紹介の部41]）。  
 また、トロイの滅亡は木馬の計略によって完遂したと伝わるが、木馬の計略を考案したと伝わるオデュッセウスがトロイア崩壊後に流浪したさまを描く叙事詩『オデュッセイア』では  
 [カリュプソの島]  
 というものが渦潮にクルーと船を呑まれたオデュッセウス漂着先として登場を見ており、そのカリュプソの島、巨人アトラスの娘たる神格の住まう島からしてアトランティスと結びつけられてきた（e.g. アイザック・ニュートンの特定古典内での物言いなど）とことがある（[出典(Source)紹介の部43]）。

[トロイアとアトランティスの結びつき(2)]  
 黄金の林檎を巡る女神らの美人コンテストに端を発して勃発したトロイア戦争。その終結をもたらしたのは木製の馬の計略であると伝承は語るが、今日、あまり知られていない古典ではそうやって滅びたトロイアにはさらなる破壊が及んだとの記述が含まれている。スミルナのクイントスに由来する『トロイア戦記』（英文タイトル the fall of Troy）に認められるところがそうで、トロイアを木製の馬で内側から破壊させたギリシャ勢も巻き添えにトロイアの存在が洪水にて完全抹消を見たとの伝承もよく知られていないところながら伝わっているのである（[出典(Source)紹介の部44-3]）。その点、[ギリシャ勢との戦闘に付随しての洪水による破壊]とのシチュエーションはアトランティスの最期と同一のものである（[出典(Source)紹介の部44-4]）に続いての段にてのプラトン著作よりの引用を参照のこと。

[LHC実験とアトランティスの関係性について]  
 どういう料簡でなのか、LHC実験はそのブラックホール生成可能性が現実的可能性をもって語られたとの始原期（LHC実験のブラックホール生成可能性論議を巡る経緯については本稿にての[出典(Source)紹介の部1]から[出典(Source)紹介の部5]を包摂する解説部を参照されたい）より前に遡る折柄、LHC計画がLEP加速器に接ぎ木しての加速器設置案としてCERNサイドで「正式に」ゴーサインを出されることになった1994年より前よりATLASとの名前と結びつけられているとことがある（本稿の[出典(Source)紹介の部36(2)]で解説しているように1992年からのことである）。  
 そこに見るアトラスという名称はヘラクレスの功業に登場してきた伝説の天を支える巨人の名であるわけだが、同巨人アトラス、  
 [トロイア滅亡の原因ともなっている黄金の林檎]  
 がたわわに実る果樹園の所在地を把握していると伝わっている巨人にして、それぞれ別個に、  
 [古のアトランティス]  
 に比定される[黄金の林檎の園][カリュプソの島]、それらの地の代表的住人たるヘスペリデスおよびカリュプソという女の神格らの父親とされる存在でもある（[出典(Source)紹介の部39]以降の一連の解説部にて文献的論拠を明示していることである）。そうもしたことが指摘できる時点でCERNのLHC実験はアトランティスと接合していると述べられる。  
 のみならず、LHC実験ではATLANTISとの名前が付されているEvent Displayツールでブラックホール生成イベントを観測する可能性が実験関係者によって「肯定的に」（科学的知見発展に資する安全なブラックホールの生成・観測との文脈で）宣伝されているとことがある。従って、ATLASとの名称それ自体に留まらずATLANTISとの名称をも用いているとのことでLHCとアトランティスの関係はいよいよ色濃くも見えてくるとのことがある。

※尚、ここまでの流れを(「それなりに」も)把握されたうえで読み手にあつては

[次のような見方]

を呈する向きもいるかもしれない。

『 [LHC 実験が [ブラックホール] を生成する可能性があると考えられていた……]、従って、そうした可能性を危惧した研究者らの一部あるいは CERN 運営サイドの一部が  
「この装置は危険ですよ」  
との意思表示を「半面の」良心良識を呈するところでなさんとした、それがゆえに、  
[トロイア崩壊(望ましいものと騙されて運び込んだ木製の馬にて皆殺しの憂き目に遭ったとのトロイアの崩壊譚)と複合的に接合する(と神話・伝承に「深く」また「深く」通じている人間が分析すれば分かろうとの)アトラスないしアトランティス]  
との名称が LHC に関連するところの命名規則として用いられるようになったのでは? 』

しかし、上のような見方については、(極めて遺憾なことに)、

[的外れで、かつ、多幸症的な [勘違い] の賜物]

と「時期的な意味での関係性より」判断できるところの論拠について「も」本稿の先の段にて既に詳説を加えもしていた。

筆者とて

「仮にもし上のような見解 —— 誤解によるどころと判断なせてしまうような見方 —— の通りであるのならば、どれ程よかったことか」

と当然に思っていると述べたうえで、「だが、しかし、」の話として、同じくものことに対する反対論拠として本稿にあつてどういったことを挙げていたのか(掻い摘まんで)の繰り返し訴求を下になしておくこととする。

LHC 実験やそれに先行するところのブルックヘブン国立加速器研究所が運営する加速器 RHIC に絡み[加速器によるブラックホール生成可能性]がはじめて「部外の」人間より問題視されるようになったのは[1999年]であつた —— の折、ウォルター・ワグナーという人物が「スティーブン・ホーキングの理論によれば、原初宇宙には極微ブラックホールがあつたとされている。そして、加速器は原初宇宙の状況を再現するという。だから、ブラックホールもまた生成されるのではないか」との理屈でもつての疑義を發しだしたとされている(本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 1](#) 及び [出典\(Source\)紹介の部 2](#) にあつての原文引用部を参照のこと) —— 。

その際(1999年)、実験関係機関 —— CERN およびブルックヘブン国立加速器研究所 ——、そして、物理学界を牽引する物理学者ら —— 後の 2004 年にノーベル物理学賞を受賞することになったフランク・ウィルチェックら —— は

[加速器によるブラックホール生成の可能性など「ありえない」。それは今後実現する加速器でも話は同じであり、加速器によるブラックホール生成の可能性を問題視するなどパイプドリーム(麻薬酩酊者の吸引パイプ越しの狂夢・妄夢が如きもの)にすぎない]

と断じていたとのことがある(本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 1](#)にて呈示の一次資料の紹介部を参照のこと。また、本稿の[出典\(Source\)紹介の部 5](#)ではパグウォッシュ会議を代表してノーベル「平和」賞の方を受賞したイタリアの大物物理学者、フランチェスコ・カロジェロがブラックホール生成の可能性をもってしていかように[ありえないこと]とその論稿 *Might a Laboratory Experiment Destroy Planet Earth?*にて断じていたのかの具体的紹介もなしている)。

だが、

[2001年より発表されだしたとの[1998年提唱のADDモデル(余剰次元モデル)を受けての新発の見解]——TeVスケール・オーダー(兆単位の電子ボルトを極微領域に集中させる状況)でもブラックホールが生成されうるとの見解——]

が世に出たのを契機にか、一挙にそうした公式発表が変化を見るに至り、一転、

「ブラックホールは生成されうるが、それは[即時即座に蒸発する安全なブラックホール]であり、むしろ、その観測は「科学の発展に資する」ものである」

との方向に科学界にての申しようが「迂(まが)った」とのことがある([出典\(Source\)紹介の部 2](#)以降にて呈示のとおりである——それにつき、日本のLHC実験参画グループ元代表者に由来する文書として『LHC加速器の現状とCERNの将来計画』との題でオンライン上にてPDFファイル版が現行、流通しているとの資料にては(その[166]および[167]との頁番号が振られたページより引用するところとして)“1998年に提唱されたADDモデルでは余剰次元を導入することによってヒッグス粒子の質量の不安定性(階層性問題)を解決する。このときに重力はTeV領域で強くなり、LHCでの陽子衝突でブラックホールが生成され、ホーキング輻射のため $10^{-26}$  secで蒸発すると予言された。これは理論屋にとって大変魅力ある新しい展開で、危険性などまでには考えが及んでいなかった”(引用部はここまでとする)と述べられているとのことにも言及していた——)。

「他面のこととして、」LHC実験にてATLASの名前が用いられるとのことが何時頃にて決せられたかと言え、LHC実験の計画スタートが正式にCERNカウンシルに承認されるに至ったとのその折(1994年)よりも前、1992年のことであるとされている(本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 36\(2\)](#)で“ATLAS and CMS collaborations publish letters of intent 1 October 1992 The Toroidal LHC Apparatus collaboration propose to build a multipurpose detector at the LHC. The letter of intent they submit to the LHC Experiments Committee marks the first official use of the name ATLAS. Two collaborations called ASCOT and EAGLE combine to form ATLAS.”(訳として)「ATLASおよびCMSコラボレーション(共同企画面々)が1992年10月1日付けで取決め書を発する: Toroidal LHC Apparatus(環状LHC装置ユニットとでも訳すところ)コラボレーションの面々はLHCにあって多目的に機能する検出器を建設するよう提案なした。そこにて彼らがLHC実験委員会に呈示してきた設立覚書にて初めてATLASという名の使用が公的に現われていた。初期のASCOTおよびEAGLEと呼ばれていたコラボレーションの面々がATLASという名称を形成するようなかたちで融合なすに至ったのである」とのCERNサイドの公式発表を引用しているところである)。

以上の流れから、

(かねてよりの構想を受けて 1994 年に正式に計画スタートの認可を得、  
2008 年に初運転を見るに至った LHC 実験にあつて) [1992 年に遡つて  
ATLAS との名称が用いられるようになっていたとのこと]

については「ブラックホール生成の可能性」を「人間の」関係者が「トロイアとアトラス、  
あるいは、トロイアとアトランティスの関係性でもってして」警告する意図によって具  
現化したこと「ではない」と判じられるところである (ATLAS との名称が決した 1992  
年というのは、いいだろうか、ブラックホール生成可能性が部外の人間より取り沙汰  
され、そして、その可能性が実験機関報告文書にて一笑に付されて否定されるより  
も[7 年も前]、そして、ブラックホール生成の可能性が転じて実験機関および科学  
界にて認容され[科学的に望ましき結果]と鼓吹されだしたのよりも[9 年も前]のこと  
となっている)

(これにて [ [LHC にあつての ATLAS や ATLANTIS の命名規則の使用] につき  
実験当事者に警告・警世の意図が (潜在的・水面下にて、でも) 働いていたと考える  
こと] がいかに的を失っていると「時系列的に」判じられるのかとのことについての  
(従前内容に依拠しての) 指し示しを終えることとする)

長くもなったが、ここまででもってして I. から V. と振つての話の内の III. の部、出典紹介部として **出典 (Source) 紹介の部 40** から **出典 (Source) 紹介の部 45** を付しもしたとの部に一区切りをつけることとする — そのうえで続いては IV. と振つての部に入ることとする — 。

## IV.

これよりは (I. から V. と各別に振つての一連の流れにての) IV. と振つての部の話に入る。

その点もってして、本段、IV. と振つての部にあつても (先立つての III. と振つての部の帰結としてそうしたことがあるのを証示したとのことでもある) [CERN の LHC 実験がトロイア崩壊の物語と結びついている]との摘示を続けることとする。

さて、LHC 実験でブラックホールが作られる可能性が取り沙汰されるようになった (途上からそうもなった) とのことにより、実験関係者らは彼ら流の言葉で述べるところの「安全で」「発見が科学の進歩に資する」ブラックホールら、

[即時蒸発する銀河系中枢に存する巨大なブラックホールとは一線を画する極微ブラックホール] (本稿 **出典 (Source) 紹介の部 1** にて紹介の各文書に見るように当初、実験機関関係者らによって生成それ自体が否定されていたところが **出典 (Source) 紹介の部 2** の各文書に見るように安全なものとしての生成が中途より観念されるようになっていったもの)

の想定される振舞いを分析するためのツールとして

[ブラックホール・イベント・ジェネレーター] (極微ブラックホールの生成・消滅をシミュ



レートするためのツール／先述の[イベント・「ディスプレイ」観測]用の ATLANTIS とは別物のツール)

というものをを用いている。

そのブラックホール・イベント・ジェネレーターの一つに対して

### [カリュブディス(CHARYBDIS)]

という名称が与えられている(いくつものオンライン上に流通している実験関係者ら論稿にそちら CHARYBDIS の名前はお目見えしている)。

そこに見るカリュブディスとは、

[トロイア崩壊を「木製の馬の計略」でもたらしたオデュッセウス一行を吸い込んだ(そして、アトラスの娘とされるカリュプソの島にオデュッセウスを結果的に誘(いざな)うこととなった)渦潮の怪物の名前]

にちなんで命名されているものとなる —— 続いての [出典\(Source\)紹介の部 46](#) を参照のこと —— (につき、オデュッセウスのみが渦潮の怪物カリュブディスに飲み込まれた中で唯一生き残り、アトランティスにも仮託されるアトラスの娘、カリュプソの島に漂着することとなったと伝わっていることがある)。

## 出典(Source)紹介の部 46

# SOURCE 46



ここ [出典\(Source\)紹介の部 46](#) にあっては LHC で[極微ブラックホール]が生成されうることをも想定すべくものものとして

### [CHARYBDIS]

という生成ブラックホールの動きをシミュレートするツールが存在していること、そして、そこにいる [CHARYBDIS] の命名由来が



[トロイア崩壊を「木製の馬の計略」でもたらしたオデュッセウス一行を吸い込んだ(そして、アトラスの娘とされるカリュプソの島にオデュッセウスを結果的に誘(いざな)うこととなった)渦潮の怪物たるカリュプデイス(Charybdis)]

に求められるとのことの出典を紹介することとする。

ブラックホール・シュミレーション・ツールたるカリュプデイス(CHARYBDIS)については検索エンジン上に

[ CHARYBDIS, Black Hole Event Generator ]

などとの入力をなせば、その「使用」と「仕様」に言及した解説ページに行きつけることか、と思う。

そうも述べつつ、ここでは CHARYBDIS の開発者らが執筆しているようであるとの同イベント・ジェネレータの解説論稿(そのままに CHARYBDIS: A Black Hole Event Generator との題名が付された現行ユーネル大の論稿配布サーバー arXiv で公開されている論稿)の冒頭ページ内の記述を引いておく。

(直下、論稿配布サーバー arXiv にて公開されている CHARYBDIS: A Black Hole Event Generator より引用をなすとして)

---

Abstract: **CHARYBDIS is an event generator which simulates the production and decay of miniature black holes at hadronic colliders as might be possible in certain extra dimension models.** It interfaces via the Les Houches accord to general purpose Monte Carlo programs like HERWIG and PYTHIA which then perform the parton evolution and hadronization.

(訳として)

「要諦:カリュプデイスは「特定の余剰次元モデルに依拠すればありうるとされているところのハドロン加速器にての極微ブラックホールの生成および消滅」をシュミレートするためのイベント・ジェネレーターである。同 CHARYBDIS は Les Houches accord (訳注:フランスの Les Houches レズーシュの地にあつて取り交わされた素粒子物理学関係者らの間の規格標準化にまつわる合意)を通じて HERWIG や PYTHIA のような「パートン・エヴォリューションおよびハドロナイゼーション (ハドロン形成プロセス)を再現するとのモンテカルロ法に則つての一般目的に準じてのプログラム」と接続作用を呈するとのものである」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする —※— )

(※ちなみに上にては “ **CHARYBDIS is an event generator which simulates the production and decay of miniature black holes at hadronic colliders as might be possible in certain extra dimension models.**カリュプデイスは「特定の余剰次元モデルに依拠すればありうるとされているところのハドロン加速器にての極微ブラックホールの生成および消滅」をシュミレートするためのイベント・ジェネレーターである ” と記されているが、そこに見る [extra dimension models 余剰次元理論] とは本稿にての [出典\(Source\)紹介の部2](#) でもそのありようを取り上げ、また、さらに補つても解説を後々の段にてもなす所存であるとの **ADD モデル** という名で知られる(提唱者の名前からとられてのその名で知られる) **1998 年提唱の理論** ともなる。「1998 年に世に出た」同理論および「2001 年から顕在化しだした」その発展的思考によって **ブラックホール生成が Planck Energy (2.0x10<sup>9</sup>J) ジュールにて表記で**

きるようなエネルギー;ガソリンタンク目一杯で自動車を駆動させ続けるとのエネルギー)の投入なくして、すなわち テラエレクトロン・ボルト単位 (TeV Scale) のエネルギー (1.6×10<sup>-7</sup>Jジュールにて表記できるエネルギー;蚊の飛ぶ運動エネルギー程度のもの) の極微領域 —— 「蚊の一兆分の一」と表されている極微領域 —— へ向けての投入で可能となるとの帰結が導かれることになった —— 今まで、恒星ないし恒星系クラスの加速器 (an atom smasher the size of a solar system or even a star system) という絶対に人類には構築できぬものを用いてしか不可能であるとされていたブラックホール生成が LHC 程度のもので可能であると目されるようになった —— とのことがある (その細かき解説は [重要なる欺瞞] (この世界のありようの根本に関わるところの [重要なる欺瞞] ) のひとつとして本稿の前半部 (出典 (Source) 紹介の部 1 から出典 (Source) 紹介の部 21-5 (2) を包摂する部) からして事細かになしてきたところともなる) )

以上のように一言解説されているとの CHARYBDIS が LHC 実験参加グループの中の [アトラス実験関係者] によっても利用されていることは読み手それぞれがオンライン上より確認いただきたいところである、として話を進め、CHARYBDIS がオデュッセウス(トロイアを木製の馬で内破させしめた謀将) 一行を呑み込んだ渦潮の化け物の名前となっていることについては下のような引用を再度なしておく。

(直下、和文ウィキペディア [キルケ] 項目の内容より中略しながらもの引用をなすとして)

---

ホメロス作『オデュッセイア』では、キルケーの住むアイアイエー島にたどり着いたオデュッセウスの部下たちは、キルケーの差し出す食べ物を食べて豚に変えられてしまう。オデュッセウスのみは、魔法を打ち消す効力のある薬草モーリュをヘルメースからもらっていたおかげで豚に変えられずにすんだ。キルケは魔法が効かない相手に屈して部下たちを元の姿に戻す。しかし、オデュッセウスはキルケーの魅力にとりつかれ、1年間キルケーとともに過ごす。…(中略)…ようやく部下たちの帰還を望む声にわれに返ったオデュッセウスはキルケーと別れ、島を後にする。キルケーは忠告して、セイレーンの海域では魔力のある歌を聴いてはならないこと、その後二つの岩があり、カリュブデイスの渦巻きと怪物スキュラのいずれかを選ばなくてはならないと教える。スキュラは、もとニウムペーであったが、海神グラウコスに愛されていることを嫉妬したキルケーが、魔法でスキュラを6つの犬の頭に12の足を持つ化け物に変えたものといわれる。

---

(引用部はここまでとする —— 尚、ウィキペディアは諸々のブログ媒体などと同様、常に編集・改訂がなされうるとの特性を伴っているため、記載内容が有為転変としており、表記の記載内容には文章構成との意味で異動が生じる可能性がある(※) —— )

(※ウィキペディアよりの引用だけでは心もとないので加えての引用もなしておく。具体的にはより詳しくものところとして Project Gutenberg のサイトにて全文公開されている、すなわち、オンライン上より誰でも全文確認できるとのオデュッセイアの19世紀初頭詳解版とも言えよう著作、Charles Lamb という往時随筆家による **THE ADVENTURES OF ULYSSES** 『ユリシーズの冒険』(1808) にあってより次の表記を引いておくこととする ⇒ (以下、より引用なすとして) “ Ulysses then prayed her that she would inform him what Scylla and Charybdis were, which she had taught him by name to fear. She replied:

"Sailing from Aeaëa to Trinacria, you must pass at an equal distance between two fatal rocks. Incline never so little either to the one side or the other, and your ship must meet with certain destruction. No vessel ever yet tried that pass without being lost but the Argo, which owed her safety to the sacred freight she bore, the fleece of the golden-backed ram, which could not perish. The biggest of these rocks which you shall come to, Scylla hath in charge. There in a deep whirlpool at the foot of the rock the abhorred monster shrouds her face; who if she were to show her full form, no eye of man or god could endure the sight: thence she stretches out all her six long necks, peering and diving to suck up fish, dolphins, dog-fish, and whales, whole ships, and their men, whatever comes within her raging gulf. **The other rock is lesser, and of less ominous aspect; but there dreadful Charybdis sits, supping the black deeps. Thrice a day she drinks her pits dry, and thrice a day again she belches them all up; but when she is drinking, come not nigh, for, being once caught, the force of Neptune cannot redeem you from her swallow.** Better trust to Scylla, for she will but have for her six necks six men:

Charybdis in her insatiate draught will ask all." ” (原著文言に忠実たらんとする逐語訳は寸刻を割くだに浪費と見ているために割け、労少なき即時にての意識を「ここにては」なすとして)「ユリシーズ(オデュッセウスの英語通用呼称)は彼女(オデュッセウス一行に一年間の滞留を強いた魔女キルケー)に彼女が言うところの名前からして畏怖すべき存在、[スキュラ]および[カリュブディス]の情報を与えるよう請い求めた。アイアイエ島からトリーナキエ島に向けての行く先の航海ではキルケー曰くのこととして、何とかその間を切り抜けなければならない二つの命奪う岩礁が存在しているとのことであり、その間をやりぬけたのは魔法による遁走能力具備の船、金羊毛を求めもしていたアルゴ船ぐらいのものであるとのことである。うち、大きな方の岩礁には忌まわしい顔隠しのスキュラ、神さえ正視に堪えぬようなその怪物が海の大小の動物から船舶まで六つの長い首で喰らうとのかたちで陣取り、他面、一方の岩礁はその見かけのいかめしさでは前者に劣るが、恐るべきカリュブディス、日に三度の干潮の折に三度、呑み込んだものをはき出すとのそちら怪物が陣取りもしているといい、そして、うち、カリュブディスの方の吸引力は海神ネプチューンでさえ呑み込まれたものをはき出させることができないとのことである。(両者ともども致命的な存在であるとの中)キルケー曰くのこととしてまだしもスキュラの方が身を任せるにましである、というのもスキュラは彼女の6つの頭で6人しか喰らわぬとの決着もありえるが、カリュブディスとくると、食欲さを示して全員の命を要求するがゆえ、とのことであつた」(拙訳付しての引用部はここまでとする)

(さらに直下、先にも [出典\(Source\) 紹介の部 44-2](#) にてなした和文ウィキペディア [オデュッセイア] 項目にての [第 12 歌] との節よりの中略なしながらもの再度の引用として)

---

オデュッセウスの航海と冒険の話の続き。キルケーの館より出て、仲間達と船を進ませる。途中、セイレーネス(セイレーンたち)という人の顔を持ち鳥の身体を持つ怪物がいる島の傍らを船は通過する。セイレーンたちの歌を聴いた者はすべての記憶を失い、怪物セイレーンに近づきその餌食とされる。しかし、オデュッセウスはその歌が聞きたく、仲間たちの耳は密蝟で塞ぎ、自分は帆柱に縛り付けてもらい、身動きできないようにして、無事通過する。オデュッセウスは、セイレーンの島に進むのだと叫ぶが、仲間たちは歌も聞こえないので、そのまま無視して進んだ。

次に怪物スキュラのいる岩の横を通過するが、スキュラは、六本の頭で仲間たち六人をくわえて捉えむさぼり食うが、オデュッセウスを初め、他の仲間は何とか無事にスキュラの岩の傍らを通過できた。

…(中略)…

ヘーリオスの家畜をみだりに殺し食用にしたため、家畜を世話していたヘーリオスの娘ラムペティエーはそのことを父に知らせた。ヘーリオスは怒ってゼウスに訴えたので、ゼウスは船に雷を落とした。彼らの船は再びスキュラの岩とカリュプデウスの近くに流され、今度は、大渦巻ですべてを飲み込むカリュプデウスの岩の下の海に吹き寄せられたので、船は仲間を含めて渦巻きに飲み込まれたが、オデュッセウスだけは助かり、カリプソーの島に流れ着いた。

---

(引用部はここまでとする —尚、ウィキペディアは諸々のブログ媒体などと同様、常に編集・改訂がなされうるとの特性を伴っているため、記載内容が有為転変としており、表記の記載内容には文章構成との意味で異動が生じる可能性がある— )

(直下、先にも出典(Source)紹介の部 44-2 にてなした Project Gutenberg のサイトにて公開されているホメロス叙事詩『オデュッセイア』の近代英訳版 THE ODYSSEY OF HOMER Translated by William Cowper (訳者の同 William Cowper は 18 世紀活躍の英国の文人となる)よりの第 12 巻の要約の部 —表記の英文テキスト入力でもオンライン上より特定できるところ— よりの再度の引用をなすとして)

---

BOOK XII ARGUMENT Ulysses, pursuing his narrative, relates his return from the shades to Circe's island, the precautions given him by that Goddess, his escape from the Sirens, **and from Scylla and Charybdis; his arrival in Sicily, where his companions, having slain and eaten the oxen of the Sun, are afterward shipwrecked and lost;** and concludes the whole with an account of his arrival, alone, on the mast of his vessel, at the island of Calypso.

(補ってもの訳として)

「[12 巻要約]ユリシーズは(パイアキス人に対して)彼の物語を続け、[影らの領域](注:第 11 巻の舞台となる影と化しての死者らの領域)から[魔女キルケの島]への帰還へと話をつなげ、さらに、(魔女にして女神のキルケによってなされた)事前警告のこと、そして、[サイレンら]の魔手よりの逃亡のこと、[スキュラ]および[カリュプデウス]よりの逃亡のこと、[シシリア島に到達、そこで彼の船旅の同道者らが太陽神の牛を屠殺・食した(がために神罰によってカリュプデウスの領域に引き戻され)後に座礁・同道者全滅の憂き目を見た]とのことへと話をつないでいき、そして、カリュプソの島へと船のマストにつかまって唯一人到達したことを結末として語った」

---

(補ってもの訳を付しての引用部はここまでとする —因みにオデュッセウスがスキュラとカリュプデウスの間を渡ろうとしたとの故事はトロイア攻城戦で唯一生き残ったトロイアサイドの武将アイネイアスにまつわる物語にも当てはまり、アイネイアスら一行の場合、そもそも、迂回路を選択したとされている(現行は和文ウィキペディア[スキュラ]項目にさえ記されていることである)。オデュッセウス関連の古典『オデュッセイア』描写とアイネイアス関連の古典『アエネーイス』描写を混同しないように、と一応、付記しておく— )



# ΟΔΥΣΣΕΙΑ (Odyssey)

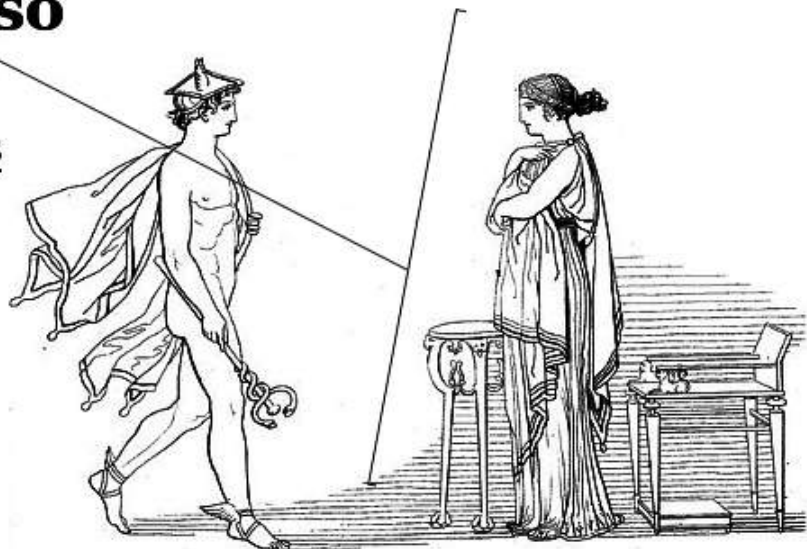
[Book 10]  
**Circe**

[Book 12]  
**Siren**

[Book 12]  
**Scylla**  
**Charybdis**

[Book 12]  
**Calypso**

Ogygia  
→  
ATLANTIS



上の図 —— 魔女キルケを描いた画家ジョン・ウィリアム・ウォーターハウスの絵画および一九世紀古典関連書籍にみとめられる[ヘルメスが女神カリュプソにオデュッセウスを解法するように求めているとの一幕を描いての挿絵] (ウィキペディアにも公開のもの) を引き合いに出しつつもの図 —— にて端的に示さんとしている流れはこうである。

⇒

[叙事詩『オデュッセウス』にてオデュッセウス一行は第10歌で魔女 Circe キルケと出会う。第12歌でオデュッセウスらはキルケ助言に従いつつも Siren



サイレン（人面鳥身の船舶座礁の魔声を発する怪物）ら領域・Scylla スキュラ領域・Charybdis カリュブデイス領域に帆を進め、結局、渦潮カリュブデイスの領域にてオデュッセウスを除く同道者全員が海の藻屑となり果てる結果を見ることになる。そして、そうもしてオデュッセウスが辿り着いたのがアトランティスと同一視される島であるオギュギアに抛るカリュブソの元であった]

本稿の後の段でも予見事物との兼ね合いで都度、取り上げることになる以上の流れが何故、重要なのか、と言え、ひとつに(ここまでの流れに依拠して書くところとしてひとつに)、

[ [渦潮 Charybdis] および [渦潮 Charybdis によってトロイアの木製の馬の考案者たるオデュッセウスがいざわれた先たるオーギュギア一島(女神カリュプソが抛っての島)と歴史的に同一視されてきた ATLANTIS] の双方共々が [LHC 実験にあってのブラックホール関連事物の命名規則] と結びついている]

とのことがあるからである ( :ちなみに述べておけば、Odyssey こと叙事詩『オデュッセイア』にあっての英語呼称オデッセーは英語圏にて諸所の文物のタイトルにその名が拝借されているとのものであり、映画化作品含めてよく知られたアーサー・クラークの小説『2001年宇宙の旅』(の原題 2001: A Space Odyssey)もその例に漏れない ——そして、人間の「人為的」進化の問題をフィクションとして語るそちら『2001年宇宙の旅』についてはそれがいかようにブラックホールの問題と関わるものなのか、小説版に対する物理学者解説のなしようを後の段にて引き合いにだすとの作品「とも」なる—— )。

(**出典(Source)紹介の部 46**はここまでとする)

これにてお分かりだろうが、

「トロイアを木製の馬で滅ぼしたオデュッセウスを [アトランティスに仮託される島] (カリュプソの島オーギュギア) へといざなった渦潮の化け物の名前 (CHARYBIDIS) をブラックホール・イベント・ジェネレーターの名前に用いている」

とのその伝「でも」CERN やりようは [トロイア崩壊の物語] と結びついていると述べられるようになって

(同点については[カリュブデイス]が[渦潮体現存在]となっているとの意味合いで[ブラックホールの形状](渦を巻くとの形状)を意識させるからであろうとの観点も出てくるとは考えられるところであるが ——(他面、[生成可能性が問題視されてきたところの極微ブラックホール]より[銀河の渦を巻く巨大ブラックホール]の如き飲み込んだものを徹底的に粉碎してやまないとの大渦の化け物カリュブデイスのことが想起されるのかとのことについては、どうか、ともとれる) ——、そうした目分量・印象論の問題はここでは置く)

(I. から V. と振っての一連の段にあっての IV. の部はここまでとしておく)

# V.

本稿の先の段にても筆者はアトランティスに関するプラトン古典の具体的記述内容を文献的事実の問題として多少、問題視していたとことがある。その点、アトランティスに関する言及が認められるとのプラトン古典は『ティマイオス』および『クリティアス』の二篇となるのだが、後者『クリティアス』に認められるアトランティスの似姿にまつわる記述、すなわち、

[環状形を呈する中枢都市を広大な平野の海岸側に配するとの似姿にまつわる記述]

が、(文献的事実の問題に関わるどころとして)、

[(LHC 実験に供される)アトラス検出器と結び付けられているイベント・ディスプレイ・ツール [ATLANTIS]のディスプレイ画面]

のそれを意識させるようなものであるとのこと「も」がある(下にての出典紹介部をご覧ください)。

---

## 出典(Source)紹介の部 47

# SOURCE

## 47



ここ出典(Source)紹介の部 47 にあつては

[プラトン古典にみとめられるアトランティス首府構造 —環状の中央島が幾重にも外壁にて囲まれているとの構造— ]

が LHC で用いられているブラックホール生成イベントを観測するともされるイベント・ディスプレイ・ツールである ATLANTIS のディスプレイ画面と相通ずるものとなっていることを典拠挙げて指し示すこととする。

(直下、先にそこよりの抜粋をなした岩波書店刊『プラトン全集 12』の巻末部に付された訳者の田之頭安彦氏(故人.元東京学芸大学名誉教授)による『クリティアス』解説部、そのアトランティス形態にまつわる記述部 p.302 より中略をなしつつもの原文引用をなすとして)

---

(2)「アトランティスの平野」(117E～118E 図2を参照されたい)。この平野を全体としてみると、東西の一辺が三〇〇〇スタディオン(約五三二・八キロメートル)、南北の一辺が二〇〇〇スタディオン(約三五五・ニキロメートル)の長方形をなして、まわりを大運河によって囲まれていた。

…(中略)…

そして、平野の北側を走る大運河から、およそ一〇〇ブース(約二九・六メートル)の幅をもつ二九本の用水路が、それぞれ一〇〇スタディオン(約一七・七六キロメートル)の間隔を保つように平野を縦断して掘られており、さらにこれらの用水路と用水路の連絡を可能にするために、横断用水路も掘られていた(以下略)

---

(まずもっての引用部はここまでとする)

(続いて、直下、先にそこよりの抜粋をなした岩波書店刊『プラトン全集 12』の巻末部に付された訳者の田之頭安彦氏による『クリティアス』解説部、そのアトランティス形態にまつわる記述部 p.304 — p. 305 より中略をなしつつもの原文引用をなすとして)

---

(3)「アトランティスの町(ポリス)」(113C～117E.図を参照されたい)。後に中央島となった小高い丘は海から島の中央に寄っておよそ五〇スタディオンの距離をへだてた平野の中にあつた(113C)と述べられているが、

…(中略)…

また中央島は直径が五スタディオンであるから(116A)、全体が一七五スタディオン(約二二・五キロメートル)の円形をしていたことになる。

…(中略)…

そして、外海を起点とする環状壁が、いちばん大きな環状壁帯から五〇スタディオンの間隔を保つようにして町を囲み、

…(中略)…

環状壁は外海に接していたことになるのであって、

…(中略)…

この環状壁の内側には家々がぎっしりと建ち並び、外海へ向かう水路は世界の各地からやってきた船舶や商人で満ち溢れ、たいへんな賑わいを見せていた

---

(引用部はここまでとする)

以上原文抜粋したところの古典『クリティアス』和訳をなしている学究の記述 — 古典『クリティアス』より導き出せるアトランティス像に対する記述 — をまとめると次のようになる。

[全体としての陸塊アトランティスは、の中に、広大な平野部を擁しており、そちら平野部は[巨大な長方形の大運河]によって囲まれている(運河は縦横 2000 スタディオン×3000 スタディオン、東西五三二・八キロメートル、南北三五五・ニキロメートルとのサイズ)。そして、その長方形巨大運河の中に縦横等間隔に用水路が設

けられている]

[アトランティスには平野部の長方形の大運河地帯に接するかたちで[中央島]を含むアトランティスの町がある。[中央島](直径5スタディオン)を含むそちらアトランティス市街(外延の海岸部および平野部から中央島の部に向けて拡がったの街)の形状は円形にしてその内部には幾重かの環状壁が存在しており、それら環状壁の内部に賑わった市街地が存在しているとの形態描写がなせる] (:アトランティスでは貴顕・王族の類が住まう中央島(直径5スタディオン)を中心にして円形の堀・外壁で分かたれた環状島が市街地となっているとの描写がなされている)

ちなみに上記のこと、邦訳版に付されての国内学究申しようと同じくものが原著 Critias の英訳版、の中にあつての全文をオンライン上より確認できる版にていかにように表記されているかを示すための抜粋もなしておく。

(直下、Project Gutenberg より全文ダウンロードできるとの英訳版 Critias ——19世紀にあつてのオクスフォードのプラトン翻訳家となる Benjamin Jowett との向きによって訳がなされている版—— より「アトランティスの平野には長方形の大運河に接するかたちで [中央島] が存在しており、その中にはアトランティスの町がある。[中央島]は海岸に接していると解釈なせるとのものでその形状は円形にしてその内部には幾重かの環状壁が存在しており、その環状壁の内部に町が存在しているとの形態描写がなされている」とのことを記述している箇所よりの原文引用をなすとして)

---

Towards the sea and in the centre of the island there was a very fair and fertile plain, and near the centre, about fifty stadia from the plain, there was a low mountain in which dwelt a man named Evenor and his wife Leucippe, and their daughter Cleito, of whom Poseidon became enamoured. He to secure his love enclosed the mountain with rings or zones varying in size, two of land and three of sea, which his divine power readily enabled him to excavate and fashion, and, as there was no shipping in those days, no man could get into the place. To the interior island he conveyed under the earth springs of water hot and cold, and supplied the land with all things needed for the life of man.

[ . . . ]

**First, they bridged over the zones of sea, and made a way to and from the royal palace which they built in the centre island. This ancient palace was ornamented by successive generations; and they dug a canal which passed through the zones of land from the island to the sea. The zones of earth were surrounded by walls made of stone of divers colours, black and white and red, which they sometimes intermingled for the sake of ornament; and as they quarried they hollowed out beneath the edges of the zones double docks having roofs of rock.** The outermost of the walls was coated with brass, the second with tin, and the third, which was the wall of the citadel, flashed with the red light of orichalcum. In the interior of the citadel was a holy temple, dedicated to Cleito and Poseidon, and surrounded by an enclosure of gold, and there was Poseidon's own temple, which was covered with silver, and the pinnacles with gold.

[ . . . ]

Also there were fountains of hot and cold water, and suitable buildings surrounding them, and trees, and there were baths both of the kings and of private individuals, and separate baths for women, and also for cattle. **The water from the baths was carried to the grove of Poseidon, and by aqueducts over the bridges to the outer circles.** And there were temples in the zones, and in the larger of the two there was a racecourse for horses, which ran

all round the island. The guards were distributed in the zones according to the trust reposed in them; the most trusted of them were stationed in the citadel. The docks were full of triremes and stores. The land between the harbour and the sea was surrounded by a wall, and was crowded with dwellings, and the harbour and canal resounded with the din of human voices.

---

(原著よりの引用部はここまでとする ——(「長ったらしくもなり、また、重複記載ともなる」との観点からあまり意をなさぬとの判断、拙訳はここでは付さない—— )

(次いで、直下、Project Gutenberg より全文ダウンロードできるとの英訳版 Critias ——19世紀にあってのオクスフォードのプラトン翻訳家となる Benjamin Jowett との向きによって訳がなされている版—— より「アトランティスの中央には巨大な平野が存在しており、その平野は [巨大な長方形の大運河] によって囲まれている (運河は縦横 2000 スタディオンの×3000 スタディオンの、東西五三二・八キロメートル、南北三五五・二キロメートルとのサイズ)。その平野にあっての長方形巨大運河の中に等間隔に用水路が流れ込んでいる」との記述している箇所よりの原文引用をなすとして)

---

The whole country was said by him to be very lofty and precipitous on the side of the sea, but the country immediately about and surrounding the city was a level plain, itself surrounded by mountains which descended towards the sea; it was smooth and even, and of an oblong shape, extending in one direction three thousand stadia, but across the centre inland it was two thousand stadia.

[ . . . ]

It received the streams which came down from the mountains, and winding round the plain and meeting at the city, was there let off into the sea. Further inland, likewise, straight canals of a hundred feet in width were cut from it through the plain, and again let off into the ditch leading to the sea: these canals were at intervals of a hundred stadia, and by them they brought down the wood from the mountains to the city, and conveyed the fruits of the earth in ships, cutting transverse passages from one canal into another, and to the city.

---

(原著よりの引用部はここまでとする ——(「重複記載ともなる」との観点からあまり意をなさぬとの判断、拙訳はここでは付さない—— )

(付記として:

なお、ほぼ同じくものことに関しては英文 Wikipedia [Atlantis] 項目にあって “The Egyptians, Plato asserted, described Atlantis as an island comprising mostly mountains in the northern portions and along the shore, and encompassing a great plain of an oblong shape in the south "extending in one direction three thousand stadia [ about 555 km; 345 mi ], but across the center inland it was two thousand stadia [about 370 km; 230 mi]." Fifty stadia [9 km; 6 mi] from the coast was a mountain that was low on all sides...broke it off all round about [6]... the central island itself was five stades in diameter [about 0.92 km; 0.57 mi].”

と記載されているわけだが、の中に、

「アトランティスに存在している運河地帯は東西 555 キロメートル、南北 370 キロメートルである」( extending in one direction three thousand stadia [ about 555 km; 345 mi ]との部)

との旨の記載が見受けられる。



そちら記載が「国内プラトン書籍翻訳者によるサイズ表記(上にて引用のもの)と異なるように見えるようになっている」  
 とのことがある(再度の引用なしつつも指摘すれば、[その平野部は[巨大な長方形の大運河]によって囲まれている(運河は縦横 2000 スタディオン × 3000 スタディオン、東西五三二・八キロメートル、南北三五五・二キロメートルとのサイズ)。そして、その長方形巨大運河の中に縦横等間隔に用水路が設けられている]との部位が国内訳書にての解説部なのであるが、そちらと英文ウィキペディア表記に食い違いがある、[東西 555km、南北 370km](英文ウィキペディア)、[東西 532.8km、南北 355.2km](邦訳版『クリティアス』解説部)とのかたちで食い違いがあるように見える)。

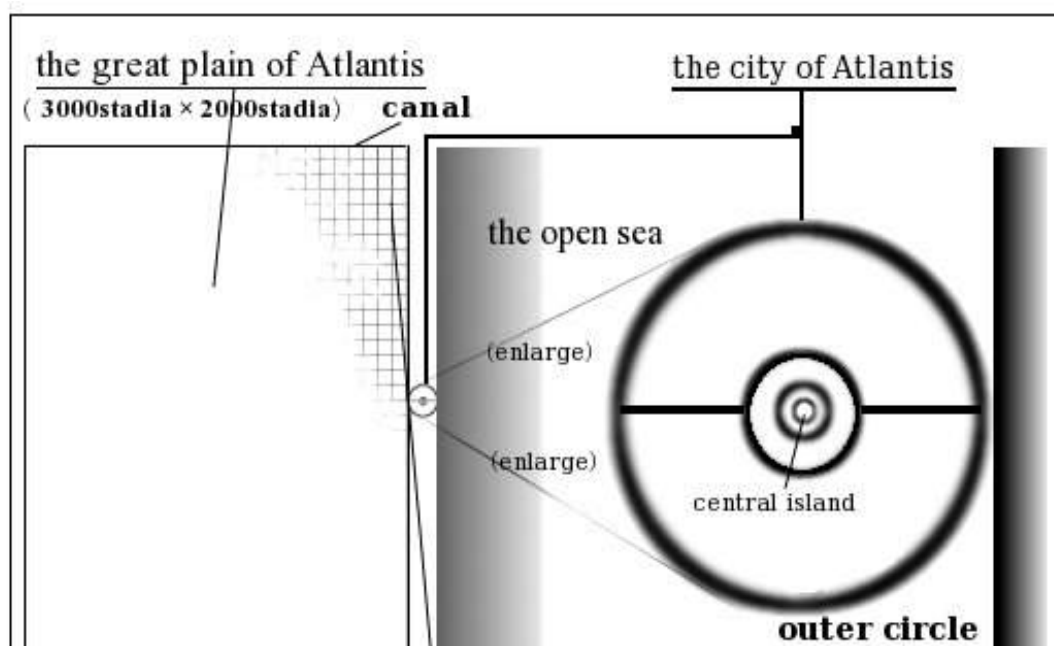
その点については [スタディオン] という単位に対する解釈上の相違に因ると解される。

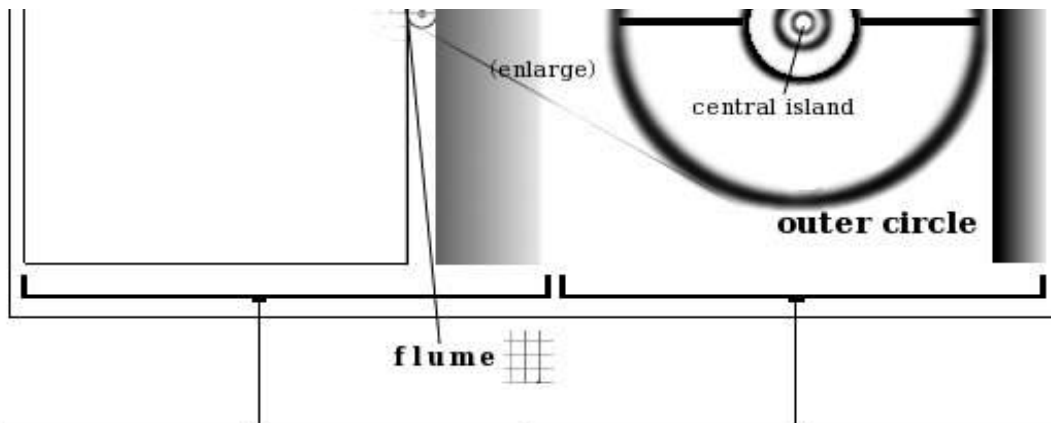
古典上に見られる [スタディオン] との長さの単位(バビロニアに淵源がありギリシャ・ローマ期に用いられていたとされる度量衡単位)につき国内著作では「1 スタディオン → 約 177.6 メートル」と見積もる計算がなされているように見受けられる一方、英語版ウィキペディア当該項目に見る記述では「1 スタディオン → 185 メートル」(555 キロメートルを 3000 スタディオンで除した際の 1 スタディオンの値である) との認識での表記がなされているとことが差分に影響しているのであろうと推察される。については「スタディオンという古代の度量衡上の単位には正確な定義づけがなされていないから生じている差分であろうのだろう」とも推し量れるところである。

細かくもなりすぎているきらいがあるが、不正確記述をなしているとの誤解を招く可能性を可及的になくすべくもの付記の部、度量衡上の単位の曖昧さに起因する [出典資料の記載内容と流布媒体の相違] にまつわる付記の部はここまでとする)

以上、引用なししてきたことに基づき、アトランティスの再現図を挙げつつもの図解部を設けておく。

まずもって下の図示部をご覧いただきたい。





## Critias

The whole country was said by him to be very lofty and precipitous on the side of the sea, but the country immediately about and surrounding the city was a level plain, itself surrounded by mountains which descended towards the sea; it was smooth and even, and of an oblong shape, extending in one direction three thousand stadia, but across the centre inland it was two thousand stadia.

( . . . . . )

It received the streams which came down from the mountains, and winding round the plain and meeting at the city, was there let off into the sea. Further inland, likewise, straight canals of a hundred feet in width were cut from it through the plain, and again let off into the ditch leading to the sea: these canals were at intervals of a hundred stadia, and by them they brought down the wood from the mountains to the city, and conveyed the fruits of the earth in ships, cutting transverse passages from one canal into another, and to the city.

ここで提示しているのはプラトン著作『クリティアス』文言から再現できるところの「古の」アトランティス再現図——運河水路が長方形区画状に張り巡らされた平野部に近接して王城を兼ねての国家中枢部(中央島)を含む円形都市が何重もの内部外壁によって仕切られながら外海に面して存在していると語られるところのアトランティス似姿——であるが(：似たような図は国内から出版されている岩波書店刊『プラトン全集』に見る学者の作品紹介部にも図示されており、についてはその解説テキストを本稿にての[出典(Source)紹介の部47]でも該当ページ数挙げて解説部文言引用とのかたちで紹介している)、本稿ではそうしたアトランティスの似姿が下にて呈示のLHCのEvent displayウェア

「ATLANTIS」の管理画面、LHC実験関係者ら曰く「安全な」ブラックホール生成がなされれば、そこにてその観測がなされるとのATLANTISの管理画面(「出典(Source)紹介の部35」)と「実によくできている」ことに相似形を呈していること、そのことの

【意味性】

について問題視している(たかだか実験関係者レベルの恣意でそういうことが具現化を見ているとのことで済むか否かという観点で、である)。

## Critias

Towards the sea and in the centre of the island there was a very fair and fertile plain, and near the centre, about fifty stadia from the plain, there was a low mountain in which dwelt a man named Evenor and his wife Leucippe, and their daughter Cleito, of whom Poseidon became enamoured. He to secure his love enclosed the mountain with rings or zones varying in size, two of land and three of sea, which his divine power readily enabled him to excavate and fashion, and, as there was no shipping in those days, no man could get into the place. To the interior island he conveyed under the earth springs of water hot and cold, and supplied the land with all things needed for the life of man.

( . . . . . )

First, they bridged over the zones of sea, and made a way to and from the royal palace which they built in the centre island. This ancient palace was ornamented by successive generations; and they dug a canal which passed through the zones of land from the island to the sea. The zones of earth were surrounded by walls made of stone of divers colours, black and white and red, which they sometimes intermingled for the sake of ornament; and as they quarried they hollowed out beneath the edges of the zones double docks having roofs of rock. The outermost of the walls was coated with brass, the second with tin, and the third, which was the wall of the citadel, flashed with the red light of orichalcum. In the interior of the citadel was a holy temple, dedicated to Cleito and Poseidon, and surrounded by an enclosure of gold, and there was Poseidon's own temple, which was covered with silver, and the pinnacles with gold.

( . . . . . )

Also there were fountains of hot and cold water, and suitable buildings surrounding them, and trees, and there were baths both of the kings and of private individuals, and separate baths for women, and also for cattle. The water from the baths was carried to the grove of Poseidon, and by aqueducts over the bridges to the outer circles. And there were temples in the zones, and in the larger of the two there was a racecourse for horses, which ran all round the island. The guards were distributed in the zones according to the trust reposed in them; the most trusted of them were stationed in the citadel. The docks were full of triremes and stores. The land between the harbour and the sea was surrounded by a wall, and was crowded with dwellings, and the harbour and canal resounded with the din of human voices.

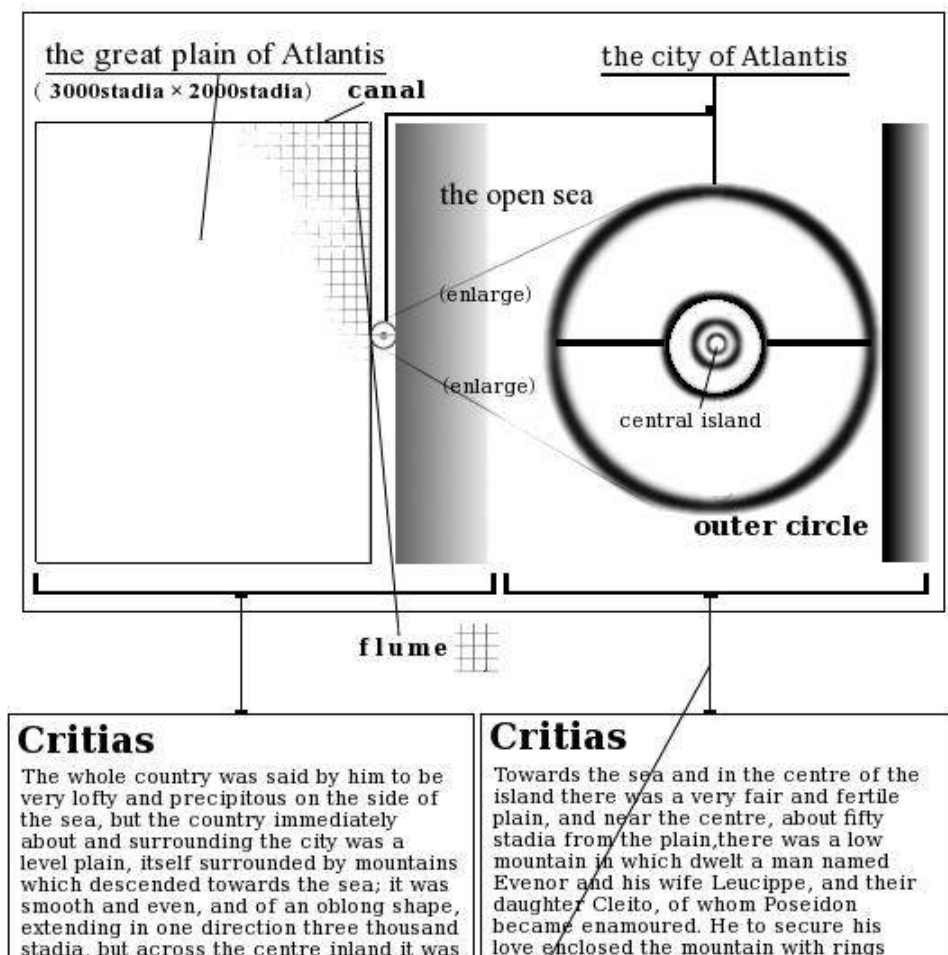
上の図にあって呈示の、

[多層構造を取るとの環状壁に囲まれた環状形のアトランティス市街地ありよう(古典記述内容に基づき再現したとのありよう)]

すなわち、広大なアトランティス平野に接するように、そして、外海に面するように存在しているとのアトランティス中央市ありよう(プラトン古典『クリティアス』記述に基づき再現したとのアトランティスありよう)は

[ATLAS 検出器にて検知されたイベント(事象)を分析するためのディスプレイツール「ATLANTIS」のディスプレイ映像](先掲のそちらディスプレイ映像を下にあらためて再掲するとのもの)

と「相似形を呈している」(その点、スクリーン上に示される ATLANTIS の管理画面は現実世界に巨大装置としての実態を伴って具現化しているとの ATLAS 検出器を正面から見据えての姿を模したような構造を二次元世界(スクリーン)に表示させているとのもの「とも」なる。ATLANTIS ディスプレイ画面一直下にて再掲—に見受けられる8つの出っ張りがアトラス・バレル・トロイド・システム、先に本稿の **出典(Source) 紹介の部 36(3)**にて言及もした ATLAS 検出器の特徴をなすところの [8つのコイルを検出器中央に通ずる部で設置している機構] たるアトラス・バレル・トロイド・システムに起因していると自然に解釈できるようになっているといったかたちにて ATLANTIS は検出器 ATLAS の現実世界の構造を反映したかたちとなっていると見受けられるようになっているのである——読み手が疑わしいとお考えになられたのならば、オンライン上などに流布されているアトラス検出器の正面撮影写真(LHC, ATLAS Detector などと検索すれば表示されてこよとの写真)などと ATLANTIS の(ここにて紹介もしているし、また、諸所にて挙げられもしているとのディスプレイ画面を比較検討をなしていただきたいものである——)。



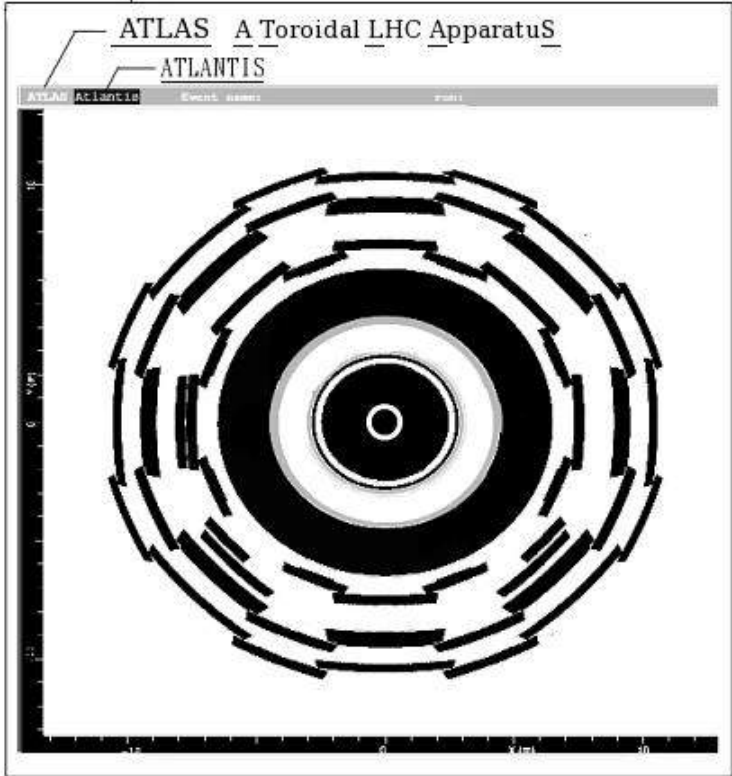
two thousand stadia.  
 ( . . . . . )  
 It received the streams which came down from the mountains, and winding round the plain and meeting at the city, was there let off into the sea. Further inland, likewise, straight canals of a hundred feet in width were cut from it through the plain, and again let off into the ditch leading to the sea: these canals were at intervals of a hundred stadia, and by them they brought down the wood from the mountains to the city, and conveyed the fruits of the earth in ships, cutting transverse passages from one canal into another, and to the city.

or zones varying in size, two of land and three of sea, which his divine power readily enabled him to excavate and fashion, and, as there was no shipping in those days, no man could get into the place. To the interior island he conveyed under the earth springs of water hot and cold, and supplied the land with all things needed for the life of man.  
 ( . . . . . )

First, they bridged over the zones of sea, and made a way to and from the royal palace which they built in the centre island. This ancient palace was ornamented by successive generations; and they dug a canal which passed through the zones of land from the island to the sea. The zones of earth were surrounded by walls made of stone of divers colours, black and white and red, which they sometimes intermingled for the sake of ornament; and as they quarried they hollowed out beneath the edges of the zones double docks having roofs of rock. The outermost of the walls was coated with brass, the second with tin, and the third, which was the wall of the citadel, flashed with the red light of orichalcum. In the interior of the citadel was a holy temple, dedicated to Cleito and Poseidon, and surrounded by an enclosure of gold, and there was Poseidon's own temple, which was covered with silver, and the pinnacles with gold.  
 ( . . . . . )

Also there were fountains of hot and cold water, and suitable buildings surrounding them, and trees, and there were baths both of the kings and of private individuals, and separate baths for women, and also for cattle. The water from the baths was carried to the grove of Poseidon, and by aqueducts over the bridges to the outer circles. And there were temples in the zones, and in the larger of the two there was a racecourse for horses, which ran all round the island. The guards were distributed in the zones according to the trust reposed in them; the most trusted of them were stationed in the citadel. The docks were full of triremes and stores. The land between the harbour and the sea was surrounded by a wall, and was crowded with dwellings, and the harbour and canal resounded with the din of human voices.

ここで提示しているのはプラトン著作『クリティアス』文言から再現できるところの「古の」アトランティス再現図——運河水路が長方形区画状に張り巡らされた平野部に近接して王城を兼ねての国家中枢部(中央島)を含む円形都市が何重もの内部外壁によって仕切られながら外海に面して存在していると語られるところのアトランティス似姿——であるが(：似たような図は国内から出版されている岩波書店刊『プラトン全集』に見る学者の作品紹介部にも図示されており、についてはその解説テキストを本稿にての[出典(Source)紹介の部47]でも該当ページ数挙げて解説部文言引用とのかたちで紹介している)、本稿ではそうしたアトランティスの似姿が下にて呈示のLHCのEvent displayウェア「ATLANTIS」の管理画面、LHC実験関係者ら曰く「安全な」ブラックホール生成がなされれば、そこにてその観測がなされるとのATLANTISの管理画面( [出典(Source)紹介の部35] )と「実によくできている」ことに相似形を呈していること、そのことの意味性について問題視している(たかだか実験関係者レベルの恣意でそういうことが具現化を見ているとのことで済むか否かという観点で、である)。



上にて摘示なしてきたことまでを顧慮してなお、LHC 実験にて [アトランティス] 絡みの尋常一様ならざる [こだわり] が反映されて [いない] などと言えるのか? 「いや、言えまい」というのが筆者が「理の当然。」として呈示する視点である。

---

付記として

上にて [アトランティスにまつわる尋常一様ならざるこだわり] が LHC 実験に反映されていないなどと言えるのか? と (反語的に) 上にて疑念呈示しているわけだが、同じくもの点にそれらもまた関わろうと判断できるところとして、本稿にてのここに至るまでの段では次のことらを示してきたとことがある。

(振り返ってもの話として)

[ [文献的事実] の問題として [アトランティスに対する蛇の異種族の次元間侵略] を内容に含んでの申しようが太平洋戦争勃発前の折柄 (1939 年) に遡るところとして — (それ自体はより従前より存在していた著名作家によるパルプ雑誌掲載小説内容を「文言込みで」踏襲しての神秘家妄言とといったものであったとしても) — なされていたとことがある] (表記のことが [事実] であるとのことについては [出典 \(Source\) 紹介の部 34](#), [出典 \(Source\) 紹介の部 34-2](#) を参照されたい)

[ [文献的事実] の問題として [爬虫類の異種族の来訪・来寇] (甚だしくは蛇の種族による人類によく似た種族に対する皆殺しの挙) と [加速器(と結びつく要素)] を結びつけて描いているとの作品らが存在している —うち、一作品たる『フェッセンデンの宇宙』はそれ自体が後の科学実験(カシミール効果測定実験)ありようを予言するような内容を有しているとの奇怪なる作品でもある— ] (表記のことが [事実] であるとのことについては本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 22](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 26-3](#) を包摂する一連の解説部を参照されたい)

[奇怪なことであるのは論を俟たないが、それもまた容易に後追い可能なる論拠群が呈示できるところの [事実] の問題として、[九一一の事件に対する露骨なる予見的描写を含んでいるとの形態をとる] ( [後に起こった九一一の事件と記号論的に関わる要素を多重的に含んでいる] ) との一群の作品らが存在しており、の中の、複数作が [爬虫類の



種族による侵略][望ましくはない存在の別次元よりの介入]とのテーマと接合するものとなっているところがある(e.g. 『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』)。そして、内、一作品たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』に至っては[アトランティスに対する蛇の人工生命の侵略]とのテーマを有している作品にして、[アトランティス]とも[トロイア]とも接合することを本稿で指摘してきた[黄金の林檎]を作品表題に含むような作品ともなっているところがある(表記のことが[事実]であるとのことについては出典(Source)紹介の部 27 から出典(Source)紹介の部 33-2、出典(Source)紹介の部 37 から出典(Source)紹介の部 37-5 の部を参照されたい)

[(透けて見える結果が悲劇としか言い様がないこととして[世界的に見て]本稿筆者を除き現行に至るまで誰も指摘していないようなこととなるが)[後に起こった九一一の事件と記号論的に関わる要素を多重的に含んでいる]との作品らの環の中にはキップ・ゾーン **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という科学書も含まれている。そして、そちら科学書にての予見的描写はまさしく**ブラックホールおよびワームホールにまつわる**ところの**時空間の扉の問題を扱っている部**に関わるところとなっている(表記のことが[事実]であるとのことについては出典(Source)紹介の部 28 から出典(Source)紹介の部 33-2 を参照されたい)

(※上のことらは無論、話柄としては奇矯極まりないものだが、そうしたことが存在していること自体は[現象]の問題、そして、Philological Truth[文献的事実]の問題として[容易に裏取り可能となっているところの事実]であると摘示なしてきたのが本稿となると重ね重ね強調しておく——筆者としてはそうした本稿(尋常一様ならざる手間をかけて執筆しているものを)を「批判してやろう」「やっつけてやろう」との目的でも勇氣と知性の双方を兼ね備えた読み手が検証してくれることを待ち望んでいる——)

以上、振り返りもしてのことら、不愉快極まりない現実の一側面として先行する段にて摘示してきたとのことに依拠して申し述べるところとして、

[ [ブラックホールを生成するようになったと考えられるようになった LHC 実験] と [アトラス・アトランティス] (ここまでにそれらがトロイアといかようにもって多重的に結びつくのかの摘示に努めてきたアトラス・アトランティス) の関係性]

について [ただの偶然の賜物] であろうと思われるであろうか?

その点、延々と証示に努めてきた人間として次のこと、申し述べておく。

「(この段階でも)偶然なわけがないであろうと判ずるのが健全な理性の働きか、と判じられる。そうしたことをして [パノイド(体系的妄想患者)の戯言・放言の類] [偶然と解されることに対する過度かつ不適切なる因数分解の賜物] などと強くも見るような人間がいるとすれば、ただ単純にその人間が実態実質として狂っているのか(ないしは狂っているとのレベルで[頭の具合がよろしくはない]との式で[自分にとって都合の良いこと]と[無情なる現実世界ありよう]の区別がついていないか)、あるいは、そうした向きが単純なる [事実]および単純な [事実関係] そのものを認識「できていない」「できないでいる」(生き残るに値するだけの情報処理能力がそもそももつての欠を呈している)かであろう。言いたくもないが、そうも述べざるをえないところである。

しかし、そうは述べつつも、甘目に見て、  
[[偶然] であるとは言い切れぬが、[必然] であるか否かについてはグレー・ゾーンである]

との話とでもしてみよう。

であれば、[無害]の可能性を無条件に前提に置くのは危険すぎるのとところとなるであろう。[危機管理]の基本として「疑わしきは用心に越したことはない」とのことになるからである——ここで筆者は[ゾンビによる世界の終末]を念頭に置いての危機管理といった現実から遊離しての話(と見られるようなこと)を云々しているのではない。[証拠が具体論として出揃っているとのことから自然に指し示される方向性]にまつわる危機管理の話をしているのである。にも関わらず、「両者(ゾンビによる終焉と具体的事実)に裏付けられての具象論が同一のものとして見られる」のならば、「そのような種族に明日は望めぬであろう」と(わざと皮肉を込めて)書きたくもあるところとして、そうも述べるのである(筆者はここまでにて[人間存在の限界]について実に多くを考えてきた、そして、それについての確認を(諦めの悪い者として)「いまだ」なしたいととらえている一個の人間としてそうも述べているのである)——」

だが、などと述べても、この段階にあっても筆者申しようのことを「それでも疑わしい」ととらえる向きもあろうと見るから事前に断っておく。

「これより本稿では膨大な筆数を割いて同じくものことを指し示す「他の」論拠をもひたすらに指し示していく所存である。総合的にここまで述べてきたことが霞む程の証明力を有しての指し示しとして

[[際立って特異な要素]を共有している多重的な相関関係(それらは我々人類に対する害意が露骨に表出していると容易に判じられるところの相関関係もなる)が成立していることにまつわる証示]

に努めていく所存である —※—」

(※上にて言及するところの [証示] にあって「も」無論、「誰でも確認できる典拠」を各 [指し示し事項] と1対1に対応させてのものとして挙げての」指し示しに当然に努めていく所存である ——本稿

の核にあるのは[「自身が訴求なさんとしていることは極めて重大なことである」との観点に依拠しての節義]であるから中途半端なことはしない——。

その点、前もって断っておくが、

「本稿末尾の部、そこにての [付録と位置付けての部]にては大学レベルの数学知識を有しているとの人間の発想法を(ベイズ確率論・ベイズ推定というものと絡みで)高校生の数学知識で事足りるものにグレード・ダウンしての話をなす所存だが(:[筆者自身にわざと不利になる尤度(ゆうど)設定なしでの計数的に定義した仮説ら]にまつわり「ほぼそうである」「ありえる」「多分ない」との確率が追加データに応じていかように変遷していくのか、という科学的視点に則っての確率分布分析(かのラプラスもその有効性を最大限評価していたとのベイズ確率論を用い、good Bayesian[良心的ベイズ主義者]といった言いようで表せられもしようとのやりようでの確率分析)をもなしもする]が——この段階では意味不明な話かとは思いますが、そちら確率分析に際しては高校生の知識水準で理解できるとの段階的で懇切丁寧な説明も講ずる所存である——)、そも、そうした計数的な話は「裾野狭くも理解なせる(若干ながらもとつきにくいところにも足を踏み入れ理解しようとの意志がある)人間のみを対象にしている」「本筋となるところではない」と明示したうえで極部分的に留め、本稿にては  
[状況理解にあつて高度な知識など本来的には必要ではない、そして、それで完全に事足りてる]  
との証示をなしていく所存である」

(付記の部はここまでとする)

---

以上、これにて I. から V. と振ってなしてきた段階的なる話にあつての V. の部を終えることとする。

ローマ字数字 (I. - V.) にて分類しての指し示しをここに至るまでにてなしてきたわけではあるが、そこからして話が細々と長くもなつたきらいがある。であるから、「読み手理解を期しての整理のために」直上の段にて一区切りをつけもした I. から V. と振つての段にて何を指し示してきたのか、再度、振り返ることとする。

---

(以下、振り返つての表記をなすとして)

そもそも I. から V. と分けてもの段階的な指し示し部に入ったのは直下、再述のような流れを受けてのこととなる。

本稿にての重要訴求事項に[梁]として関わるのが巨人 Atlas アトラス、ギリシャ神話の英雄 Hercules ヘラクレス、往古海底に没したとプラトンの手になる古典 (Timaeus 『ティマイ

オス』)に言及される Atlantis アトランティス、そして、今日の欧州文明の源流となっているギリシャ古典(後述の Iliad『イリアス』および Odyssey『オデュッセイア』)にてその破滅に向けてのありようが言及される[木製の馬で滅せられたトロイア]であると先立って言及してきたわけだが、うち、[アトラス][アトランティス][ヘラクレス功業]らのそれらについて[何が問題になるのか]についての極部分的なる言及をここまでにてなしてきたとの各要素についてさらに一歩進んでどういったことが述べられるのかについての解説をなすことにする。

具体的には

「アトラス」  
「アトランティス」  
「ヘラクレス」  
「トロイア」

にあつての

「アトラス」  
「アトランティス」  
「ヘラクレス」

との各要素らが(上記要素らにあつての)他要素としての [トロイア] と多重的・複線的に結びつくようになっており、そのことがまた、

[ブラックホールを生成すると主張され、その [可能性] が科学界にて部分的に認容されるに至ったとの LHC]

とも関わるようになっている

とのことにまつわる解説(にして「証して」「示す」との[証示])を膨大な紙幅を割いてなしていくこととする。

それにつき、「まずもっては」同じくものことについて I. から V. と振っての流れでの指摘をなすこととする。

以上、再述なした流れにもとづき I. から V. と振ってのことらについて以下、呈示する通りの解説をなすことに(ここに至るまで) 努めてきた。

# I.

(I. の段にては)

⇒

(この段では新規のことを述べていたわけではなく、振り返っての話をなしていたところとして)

LHC 実験、その参加グループの中には

[アトラス]

の名を冠するディテクター(検出器)を用いているとの研究グループ、**ATLAS** グループが関わっており、彼ら **ATLAS** グループが LHC 実験にてブラックホール生成・検出をなしう

るとの資料を目立って公にしているとの経緯がある、とのことを——典拠を従前の段(にての**出典(Source)紹介の部 35**を包摂する部)に譲っての話として——再述した。

## II.

(II. の段にては)

⇒

(先立つ I. の段にあってその名に振り返って言及したところの) **ATLAS** 検出器がその名を冠するものとなっているところの **ATLAS** が

[古のトロイア城市が滅亡する原因となった[黄金の林檎]を在り処を知る巨人]

としていかように伝承に登場しているのかについての摘示をなした(**出典(Source)紹介の部 39**と振っての出典紹介部を設けていかようにして[巨人アトラス]が[(「トロイアを滅ぼす原因となった」ものたる)[黄金の林檎]の園の在り処を知る存在]として[ヘラクレス第 11 功業にまつわる伝承]に登場を見ているのかについての文献的根拠を示しました)。

## III.

(III. の段にては)

⇒

CERN の LHC 実験では巨人アトラスの名前を冠する検出器 **ATLAS** に供されてのものとして、

[**ATLANTIS**]

というイベント・ディスプレイ・ツールが用いられるようになってもおり、そのイベント・ディスプレイ・ツール **ATLANTIS** そのものによってブラックホール観測がなされる可能性があるとの実験当事者物言いがなされるに至っているとのことがあることを(従前呈示の典拠に依拠してのこととして)再度、指摘した。

そのうえでブラックホールを検出しうる——LHC 実験運転にて発生しうる極微ブラックホールの足跡の Event Display をなしうる——とされる同 **ATLANTIS** にその名が流用されているところの、

[ギリシャ古典(プラトン『ティマイオス』『クリティアヌス』)にて[海中に沈んだ大陸]とされているアトランティス]

の方がいかようにして

[黄金の林檎の園が存在する場所として神話が語り継ぐ「アトラスの娘ら」(ヘスペリデス)の園]

[大洋の先にある「アトラスの娘」カリュプソの島(オーギュギアー島)]

との両地所と結びつくか、また、その結びつき関係から



## [トロイア]

との接合関係がいかように多重的に成立していると指し示せるようになってきているかの解説をなしてきた(一連の解説には網羅的論拠摘示に必要十分かと判断できるところの出典紹介部として [出典\(Source\) 紹介の部 40](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 45](#) を付した)。

# IV.

## (IV. の段にては)

⇒

LHC 実験でブラックホールが作られる可能性が取り沙汰されるようになった(途上からそうもなった)とのことにまつわり、実験関係者らが彼ら流の言葉で述べるところの「安全で」「発見が科学の発展に資する」ブラックホールらの想定される振舞いを分析するためのツールとして[ブラックホール・イベント・ジェネレーター](極微ブラックホールの生成・消滅をシミュレートするためのツール)というものをを用いているとのことがあり、の中に、**[カリュブディス(CHARYBDIS)]**

と命名されてのものが含まれているとのことがあることを(英文解説論稿文言を呈示しながら)まずもって紹介した。次いで、そのカリュブディスが

**[トロイアを木製の馬の計略で滅ぼした謀将オデュッセウスをして(歴史的に[アトランティス]と結びつけられていた)[カリュプソの島]に漂着させることになった渦潮の怪物の名前]**

となっていることを指摘した ([出典\(Source\) 紹介の部 46](#))。

# V.

## (V. の段にては)

⇒

(先立つ III. の段にあって言及していたところの) **[LHC 実験にての ATLAS 検出器に供されてのイベント・ディスプレイ・ツール ATLANTIS]** のディスプレイ画面が **[海中に没した大陸アトランティスのプラトン古典『クリティアス』に見るアトランティス構造(を視覚化させてのもの)]**

と照応するかたちとなっているとを解説した (**ATLANTIS** の画面は二次元上に **ATLAS** 検出器のデフォルメされた正面構図を再現するといったものとなっている節があるのだが、そちらがプラトン古典『クリティアス』に記述されるアトランティス構造描写を鳥瞰図形式で現わしたものと「視覚的に」照応するようになってきているとを本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 47](#) の図解部でもって示してきた)。

以上、端的に表記しての I. から V. のことらの解説 (かつ典拠紹介) をなすのに注力してきたのが最前までの流れである。

(振り返っての表記はここまでとする)

上にて振り返っての表記をなしたが、同じくもの表記部に見る I. から V. と振ってのセクションにて示してきたこと、すなわち、

[ [アトラス] [アトランティス] [ヘラクレス] [トロイア] との各要素にあつての [アトラス] [アトランティス] [ヘラクレス] との要素らが —CERN の LHC 実験を間に介し「も」し— [トロイア] と接合している]

とのことが

[さらにもって多重的なる相互関係の環]

に包摂されていると指し示せるようになっていく (指し示せるように「なってしまうている」) とのことをこれ以降、摘示していくこととする。

さて、直上にて、それにまつわつての説明をこれ以降なすと申し述べたところの [さらにもって多重的なる相互関係の環] の委細に踏み込む前にまずもって再強調しておくが、

[「アトラスが神話上で登場するのは、」 [ヘラクレスの第 11 番目の功業] である]

とのことがある(出典(Source)紹介の部 39)。

計 12 ある試練のうちの 11 番目の試練にてヘラクレスは巨人アトラスに会いに行き、彼に [黄金の林檎の園] (先立っての段にて [アトランティス] と結びつけられてきたとのことを論じてきた [アトラスの娘らヘスペリデスが管掌する黄金の林檎の園]) から黄金の林檎を取ってきてくれと頼むことになる。

上の点について本稿では古典よりの記述として『ビブリオテーケー』という古文献の特定部を(出典(Source)紹介の部 39)とのかたちで)抜粋している。そちら抜粋なしたところについて「再度の抜粋」に重ねてのさらにももの抜粋を以下にてなしておくこととする。

(直下、アポロドーロス(ローマ時代のギリシャ人著述家)によって著されたビブリオテーケー(BIBLIOTHEKE)の和訳版(岩波文庫より出されている『ギリシャ神話』)にあつての該当部記述をくどくも引くとして)

「エウルステウスは…(中略)…第一一番目の仕事としてヘスペリスたちから黄金の林檎を持って来るように命じた。これは一部の人々の言うようにリビアにあるのではなく、ヒュペルボレアス人の国の中のアトラスの上にあつたのである。それを大地(ゲー)がヘーラーと結婚したゼウスに与えたのである。テューポーンとエキドナから生れた不死の百頭竜がその番をしていた。それとともにヘスペリスたち、すわなちアイグレー、エリュティア、ヘスペリアー、アレットウーサが番をしていた。…(中略)…アラビアに沿って進んでいる時にティートーノスの子エーマティオーンを殺した。そして、リビアを通過して、向い側の大陸に渡り、プロメーテ

ウスの肝臓を食っている、エキドナとテューポーンから生まれた鷲をカウカサス山上で射落とした。そしてオリーブの縛めを自ら選んだ後、プロメテウスを解き放ち、ゼウスに彼の代わりに不死でありながら死を欲したケイロンを呈した。…(中略)…ヒュペルボレオス人の地のアトラスの所に来た時に、プロメテウスがヘーラクレースに自分で林檎を取りに行かないで、アトラスの蒼穹を引きうけて、彼を遣わせと言ったので、それに従って蒼穹を引きうけた。アトラスはヘスペリスたちから三つの林檎をとって来て、ヘーラクレースの所へやって来た」

(引用部はここまでとしておく)

上のように [巨人アトラス] が登場するものである (そして、同じくものは先述のようにイベント・ディスプレイ・ツール [ATLANTIS] が用いられているところの LHC 実験にあつての [ATLAS] 実験グループ・[ATLAS] 検出器とも命名規則の問題として通ずるところ「とも」になっている) との [ヘラクレース 11 番目の功業] だが、そこに登場する黄金の林檎について

---

「黄金の林檎は

「聖書『創世記』に見る [エデンの蛇による誘惑の物語] とも ——  
「トロイア崩壊に至るまでのエピソードを媒介項にする」とのかたちで  
—— 多重的に関わっている」

と「記号論的に」摘示可能なものとなっている」

---

と述べたらば、どうか。

また、さらに一歩進んで、

---

「黄金の林檎が聖書『創世記』に見る [エデンの蛇による誘惑の物語] とも ——  
「トロイア崩壊に至るまでのエピソードを媒介項にする」とのかたちで—— 多重的  
に関わっていると「記号論的に」摘示可能なものとなっているとのことが  
[ブラックホール生成問題]  
と「あまりにもできすぎた」方向性にてつながるようになっていくとのことが「ある」」

---

と述べたらば、どうか。

以下、そうしたことから、

---

[ [ヘラクレースの 11 番目の功業に登場する黄金の林檎] が [エデンの園の蛇の誘惑] に関わる]  
[ [ヘラクレースの 11 番目の功業に登場する黄金の林檎] が [エデンの園の蛇の誘惑] に関わるとのことからしてブラックホール生成問題と結びつくようになっていくとのことが —— 実にもって問題となる文献的記録らを通じて —— 指摘できるようになっている」

---

とのことから

[個人の主観より生じ、また、そこに留まって然るべきと看做されよう印象論上の話]

などではまったくもってなく、「はきと客観的に指し示せるものとなっている」ことを証示すべくもの細かく

もの指し示しをこれ以降なしていくこととする（：言うまでもないが、ここでの話からして実に頓狂なものと響くものである。であるが、「[奇矯なること]は[真実ではないこと]と同義ではない」とのことがここでの話にも当てはまると強くも申し述べておきたい——筆者は自身の全名誉、そして、命さえ、その真実性に賭けてもいいと考えている。疑わしきは本稿これよりの段の逃げ口上を許さぬ指し示し部をきちんとお読みいただきたいものである——）。

まず、[ブラックホール生成問題を巡る「多重的」接合関係]を論ずるうえでの[布石]となるどころであるがゆえに取り上げることとした、

---

[ヘラクレス 11 番目の功業 ——(こちらヘラクレス第 11 功業に登場する巨人アトラスおよび黄金の林檎を巡る話がいかにして LHC 実験と多重的に接合しているかは先に具体的典拠を挙げ連ねながらつい先立っての段までにて詳述に詳述を重ねてきたこととなる)—— に登場する [黄金の林檎] (トロイア崩壊の原因たるもの) が聖書『創世記』に見るエデンの蛇による誘惑の物語とも関わっている]

---

とのことについて解説を講じる。

その点、有名なトロイア戦争の原因は黄金の林檎をどの女神に分け与えるかの審判、[パリスの審判] というものとなっているとのことは本稿の先の段にて先述してきたことである。

同 [パリスの審判]、フロー(流れ)を辿れば、

[美人コンテストの勝者の証、トロフィーとしての [黄金の林檎] の獲得者の選別のための審判役としてのパリスの動員] → [美人コンテスト参加者ら女神らによるパリスに対する賄賂の提案] → [美の女神たるアフロディテの賄賂の条件(絶世の美女ヘレンとの縁の取り持ち)をパリスが受け入れる] → [パリスによるヘレンの取得(黄金の林檎をパリスより受け取ってのアフロディテの勝利)] → [ヘレンをパリスに奪い取られた夫(およびその兄弟)の檄文にギリシャ諸侯が応じての(パリスが皇子となっていたところの)トロイアの滅亡に向けての戦争の開始]

とのかたちでそのありようを摘示なせるものとなっている。

(出典として:細かくもの典拠の紹介も [出典\(Source\)紹介の部 39](#) にてなしたことが、[パリスの審判]についてはウィキペディア項目(程度のもの)から引くだけで十分と申し述べた点、それぐらいに欧米圏ではよく知られていると述べた点でもある。それにつき和文ウィキペディア[パリスの審判]項目にての現行記載内容よりの原文引用をなせば、

(直下、引用するところとして)

テティスとペーレウスの結婚を祝う宴席には全ての神が招かれたが、不和の女神エリスだけは招かれなかった。エリスは怒って宴席に乗り込み、「最も美しい女神にあたえる」として黄金の林檎を投げ入れた。この林檎をめぐるヘーラー・アプロディーテー・アテーナーが争った。ゼウスは仲裁するために「イリオス王プリアモスの息子で、現在はイデ山で羊飼いをしているパリス(アレクサンドロス)に判定させる」とこととした(パリスの審判)。女神たちはさまざまな約束をしてパリスを買収しようとした。アテーナーは「戦いにおける勝利」、ヘーラーは「アジアの君主の座」を与えることを申し出た。しかし、結局「最も美しい女を与える」としたアプロディーテーが勝ちを得た。「最も美しい女」とはすでにスパ

ルタ王メネラーオスの妻となっていたヘレネーのことで、これがイリオス  
攻め(トロイア戦争)の原因となった

(引用部はここまでとする)

とある通りである —— 本稿にての **出典(Source)紹介の部 39** ではウィキペディア「程度」の媒体の記述を問題視するに留まらず(オンライン上の Project Gutenberg のサイトにて公開されている神話解説書 **BULFINCH'S MYTHOLOGY THE AGE OF FABLE** にての Chapter XX と付されての部よりの原文引用をなしつつも)細かくもの出典紹介兼ねての解説をなしていた—— )

以上の [パリスの審判] を巡るフローが

**[エデンの林檎の園での誘惑]**

と記号論的に多重的に接合しているからこそ問題になる(本稿筆者たるこの身としては「ふざけたことに変換できるように[こさえられている]から問題になる」と声を大にして述べたいとの気分でもあるのだが、ここではただひたすらに一致性指摘することを念頭に置いての記号論的な話を淡々となしていきたい)。

につき、[エデンの林檎の園での誘惑]との兼ね合いでは表記のトロイア崩壊へと向かう[パリスの審判]のフロー、すなわち、

[美人コンテストの勝者の証、トロフィーとしての[黄金の林檎]の獲得者の選別のための審判役としてのパリスの動員] → [美人コンテスト参加者ら女神らによるパリスに対する賄賂の提案] → [美の女神たるアフロディテの賄賂の条件(絶世の美女ヘレンとの縁の取り持ち)をパリスが受け入れる] → [パリスによるヘレンの取得(黄金の林檎をパリスより受け取ってのアフロディテの勝利)] → [ヘレンをパリスに奪い取られた向きの檄文にギリシャ諸侯が応じての(パリスが皇子となっていたところの)トロイアの滅亡に向けての戦争の開始]

とのフローにあってその名が見受けられる、

**[[アフロディテ]という名の女神(黄金の林檎をパリスより取得しおおせたとの美の女神)]**

に伴う特性のことが問題になる。

上にて言及の [アフロディテ] という名のギリシャ神話にあっての女神は[金星]と結びつく女神として知られる。アフロディテという美の女神がギリシャの神話体系を多く踏襲しているとのローマの神話体系(最高神ゼウスをジュピターに、ポセイドンをネプチューンに、ヘルメスをマーキュリーに、といった塩梅にて多神教信仰の神の名前だけ変えて神話体系をそのまま踏襲しているとのローマの神話体系)にあっては [ヴィーナス](ミロのヴィーナスでも有名なかのヴィーナスである)へと名称置き換えされているとのことがあり、そちら美の女神ヴィーナス(Venus)が(太陽系で最も巨大な惑星たる[木星]が大神ゼウスのローマ名にかこつけられてジュピターと命名されているといったことに対して)「金星」を指す名詞へと転用されているといったことから「も」同じくものこと —— ヴィーナス(と呼ばれるに至ったアフロディテ)が金星と結びつくとのこと—— は推し量れもなっていない

それにつき、**アフロディテ(パリスより黄金の林檎を取得しおおせた女神)のローマ版たるヴィーナスが[金星体現存在]になるだけの神話上の由来が(ヴィーナス淵源としてのギリシャの)アフロディテの段階からして存在しているとのこと**もある程度知られていることとなっており、そのことは以下にて出典紹介するようなかたちで指し示せることとなっている。



# SOURCE

## 48



ここ出典 (Source) 紹介の部 48 にあつては

[(ギリシャ神話にあつての) 美の女神アフロディテが金星の象徴存在としての顔を有している]

このことの典拠を挙げることにする。

(直下、まずもってオンライン上より容易に確認できる場所として英文 Wikipedia [Aphrodite] 項目よりの原文引用をなすとして)

---

In native Greek tradition, the planet had two names, Hesperos as the evening star and Eosphoros as the morning star. The Greeks adopted the identification of the morning and the evening stars, as well as its identification as Ishtar/Aphrodite, during the 4th century BC, along with other items of Babylonian astrology, such as the zodiac (Eudoxus of Cnidus).

(訳として)

「ギリシャにあつての本来の伝統にあつてはその星(金星のこと)は二つの名を持っていた、すなわち、宵の明星としての Hesperos と明けの明星としての Eosphoros である。ギリシャ人らは紀元前 4 世紀のバビロニア占星術、たとえば、エウドクソスの黄道十二宮概念のような他の分類を傍目に[イシュタル(バビロニアの女神)]/[アフロディテ]に対するのと同様に[明けの明星]と[宵の明星]の意味付けをなした」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする —※— )

(※注:一般教養上の話として述べるが、「明けの明星および宵の明星とは金星のことを指す」。両者を古代人は別物として考えていたがゆえに [モー

ニング・スター] および [イヴニング・スター] との別名表記が存在するなど  
されることと併せて指摘することとして、である)

(さらに直下、オンライン上より容易に確認できるところとして和文ウィキペディア [アフロディ  
テ] 項目よりの原文引用をなすとして)

---

(アフロディテは)本来、豊穡多産の植物神としてイシュタルやアステルテー同様に金星の女神であったが、このことはホメロスやヘシオードスでは明言されていない。しかし古典期以降再び金星と結び付けられ、ギリシャでは金星を「アプロディーテの星」と呼ぶようになった

---

(引用部はここまでとする)

上のウィキペディア表記の抜粋 —本来ならばウィキペディアは出典として挙げられるのが忌避される媒体であること、既に申し述べているが、すぐに確認可能なものとしてなした抜粋— だけでは納得できぬ向きもいるかもしれぬとのことで「若干手間をかければ」オンラインから確認できるとの「記述内容不変性を伴っての」古典の記載にも同様のことが [文献的事実] として見出せることをも引いておく。

カエサリアのエウセビオス (Eusebius of Caesarea) という 4 世紀 (紀元 300 年以降) に目立って活躍したキリスト教教父 —ちなみに、[教父]ことチャーチ・ドクターというのは初期キリスト教聖職者にあつてギリシャ語での著述活動をなした者たちを総称しての呼称である— の著作『福音の備え』 (Praeparatio Evangelica、英訳名 Preparation for the Gospel) の 1903 年に英訳されたものがオンライン上にて公開されているのだが、その第三巻にあつてからして次のような記載が認められる。

(直下、E. H. Gifford という訳者の手になる Praeparatio Evangelica にての CHAPTER XI の節より原文引用なすところとして)

---

The star of Aphrodite they observed as tending to fecundity, being the cause of desire and offspring, and represented it as a woman because of generation, and as beautiful, because it is also the evening star

「古代ギリシャ人は [アフロディテの星] をして多産 (fecundity) 傾向を示すもの、欲望および子種の因、そして、さらには [宵の明星] ともなしてのゆえとして [生殖および美のための女性] の表象としていた」

---

(引用部はここまでとする —※— )

(※エウセビオスの遺した古文献にてアフロディテの星が [宵の明星; イブニング・スター] こと金星であるとの言及がなされていることを問題としている。なおもってして、上記記述がエウセビオスの文書にて見受けられることについては [Preparation for the Gospel, 1903, E.H. Gifford, BOOK III] とグーグル検索エンジンに入力して (上にての E.H. Gifford とはエウセビオス著作を英訳した訳者のことである) 表示されてくるとの 1903 年の該当著作英訳版の紹介ページを閲覧することで確認できる。その点、さらに確認簡易化の方法を (インターネット用いての調査が不慣れな方のために) 紹介すれば、該当ページの閲覧時にキーボードの ctrl キーと F キーを同時押しして、[ブラウザ] (インターネット閲覧ソフト) の閲覧ページ内検索機能をオンになったとの状態にし、の際に、表示されてくるチェックボックス内に表記の抜粋テキ

ストの一部を入力すれば、膨大な文量を含むページ内でも該当文字列を含む箇所を一挙にジャンプ特定でき、それでもって、[文献的事実]、すなわち、問題となる記載が問題としている引用文献内にて実際になされているか否かの確認が即時容易になせるようになっている)

(**出典(Source)紹介の部 48**はここまでとする)

---

直上出典紹介部を終えたところでさらに指摘するが、

### [アフロディテの象徴]

となっていると上 (の**出典(Source)紹介の部 48**) にて指し示さんとしてきた金星、[明けの明星]および[宵の明星]との別称を伴ってのそちら[金星]がキリスト教文化圏にあつての悪魔の中の悪魔、ルシファーの象徴「とも」になっていることがある。

につき、まずもって極々基本的なこととして次のこと、原文引用との形で呈示しておく。

---

**出典(Source)紹介の部 49**

# SOURCE

## 49



ここ**出典(Source)紹介の部 49**にあつては、

[いかように [金星] という惑星が歴史的にキリスト教大系に見る悪魔の王ルシファーと結びつけられてきたか]

について「取りあえずも、」の出典をなす。

まづもっては目に付きやすき基本的なところ、ウィキペディア程度の媒体にあつての現行記載内容よりの引用をなすこととする。

(直下、和文ウィキペディア [金星] 項目 (にあつての [歴史と神話] の節) よりの原文引用をなすとして)

---

(金星は) 欧米ではローマ神話よりウェヌス(ヴィーナス)と呼ばれている。メソポタミアでその美しさ(明るさ) 故に美の女神イシュタルの名を得て以来、ギリシャではアフロディーテなど、世界各国で金星の名前には女性名があてられていることが多い。天使の長にして悪魔の総帥とされたルシファー(ルシフェル、Lucifer、光を帯びた者)も元々は明けの明星の神格化である。

---

(引用部はここまでとする)

(続いて、直下、和文ウィキペディア [ルシファー] 項目よりとりあえずの原文引用として)

---

ルシファーの名の悪魔たるゆえんは、旧約聖書「イザヤ書」14章12節にあらわれる「輝く者が天より墮ちた」という比喩表現に端を発する。…(中略)…随天使ないし悪魔とされたこの「輝く者」は、ヒエロニムスによるラテン語訳聖書において、明けの明星を指す「ルキフェル」の語をもって翻訳された。以上の経緯をもってルシファーは悪魔の名となったとされる…(中略)… テルテウリアヌスやアウグスティヌスなどの教父たちは「イザヤ書」14:12の墮ちた星ないし墮ちた王をサタンとして論じている

---

(引用部はここまでとする)

以上のようにルシファーについてはアフロディーテと同様、

[金星の体現存在]

であるとされているものである(上については英文 Wikipedia [Lucifer] 項目の冒頭部直下の箇所にも **“ Later Christian tradition came to use the Latin word for "morning star", lucifer, as a proper name ("Lucifer") for Satan as he was before his fall. [17] As a result, "Lucifer has become a by-word for Satan in the Church and in popular literature", [3] as in Dante Alighieri's Inferno and John Milton's Paradise Lost.”**「キリスト教伝統的解釈はラテン語にて明けの明星を指すものとして用いられていたルシファーをして地に落ちる前のサタンを指すものとして用いるようになっていた。結果、ルシファーは教会およびダンテ・アリギエーリの『地獄篇』やジョン・ミルトンの『失樂園』のような著名古典にてサタンの別称として用いられてきた」との通俗的理解が記されているとおりである)。

本稿にての後の段にてもルシファーと金星の関係性について [さらに突き詰めての解説] をなす所存ではあるが、この段階でもってしてもさらに次のようなソースにての書きようも引いておくこととする。

(直下、UNIVERSITY OF NEBRASKA STUDIES IN LANGUAGE, LITERATURE AND CRITICISM Number 2 と付されての Project Gutenberg のサイトにて公開されているネブラスカ大学所属の学究 (Florence Grimm との人物) がものした ASTRONOMICAL LORE IN

---

Of all the planets, that most often mentioned by Chaucer is Venus, partly, no doubt, because of her greater brilliance, but probably in the main because of her greater astrological importance; for few of Chaucer's references to Venus, or to any other planet, indeed, are without astrological significance. **Chaucer refers to Venus, in the classical manner, as Hesperus when she appears as evening star and as Lucifer when she is seen as the morning star.**

(補つても訳として)「チョーサーに言及されている全ての天体の中で最も多く言及されているのは疑いもなく[ヴィーナス](金星)であるとのことがあり、その理由については、金星の輝度の高さ、しかし、主たるところではその天文学における重要性にある(と解される)。チョーサーの[ヴィーナス](金星)への言及、そして、他の天体への言及のどれをとっても本然的に天体に重きを置いてのことなくして成り立つようなものではない。チョーサーが[ヴィーナス](金星)に言及するとき、そのやりようは古典的なところに従っており、金星が[宵の明星](イブニング・スター; 夕闇にて見受けられるとの金星似姿)として現われての折には[ヘスペロス Hesperus] (訳注:ギリシャの黄昏の神/本稿の先の段にてアトラスの四人ないし三人ワンセットの娘らたるヘスペリデスと結びつ存在)として金星につき言及し、金星が[明けの明星](モーニング・スター; 明け方にて見受けられるとの金星似姿)として認められるときには「ルシファー Lucifer」と言及していた」

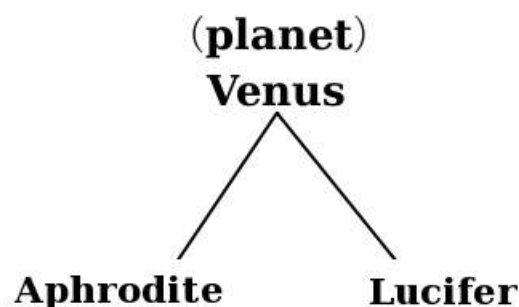
---

(以上、引用部に対する訳とする 一※一)

(※以上の ASTRONOMICAL LORE IN CHAUCER (1919)については当然に

「オンライン上より全文確認できる」

との文物だからここにて引用なしている。尚、チョーサーが著名な『カンタベリー物語』にて占星術知識を反映させていることはある程度、通念化していることとなっているようで、英文 Wikipedia[Astrology](占星術)項目にての Literature and music との節で(一文のみ引用するところとして)“The fourteenth-century English poets John Gower and Geoffrey Chaucer both referred to astrology in their works, including Gower's *Confessio Amantis* and Chaucer's *The Canterbury Tales*.” (訳)「14世紀英国の詩人らジョン・ガワーとジェフリー・チョーサーらは双方、(ガワーの *Confessio Amantis* 『恋する男の告解』とチョーサーの *The Canterbury Tales* 『カンタベリー物語』を含むところとして)占星術への言及をなしている」との記述が認められるところでもある)





上の段に至るまでにて摘示してきたとのことら、すなわち、

[ [ギリシャ神話体系にあつての美の女神アフロディテ⇒金星の象徴存在] との流れが存在している] (出典(Source)紹介の部 48)にて解説)

および

[ [金星の象徴存在⇒ルシファー] という語句とのつながりが存在している] (直前にあつての出典(Source)紹介の部 49)にて解説)

とのことらを念頭にしての置き換えをなせば、である。[トロイア戦争の原因たる黄金の林檎]をどの女神に分け与えるかの審判、[パリスの審判] のフロー(流れ)については、

[美人コンテストの勝者の証、トロフィーとしての[黄金の林檎]の獲得者の選別のための審判役としてのパリスの動員] → [美人コンテスト参加者ら女神らによるパリスに対する賄賂の提案] → [美の女神たるアフロディテの賄賂の条件(絶世の美女ヘレンとの縁(えにし)の取り持ち)をパリスが受け入れる] → [パリスによるヘレンの取得(黄金の林檎をパリスより受け取つてのアフロディテの勝利)] → [ヘレンをパリスに奪い取られた夫およびその兄弟の檄文にギリシャ諸侯が応じての(パリスが皇子となっていたところの)トロイアの滅亡に向けての戦争の開始]

との式で示せるものから

[美人コンテストの勝者の証、トロフィーとしての[黄金の林檎]の獲得者の選別のための審判役としてのパリスの動員] → [美人コンテスト参加者ら女神らによるパリスに対する賄賂の提案] → [美の女神たるアフロディテの賄賂の条件(絶世の美女ヘレンとの縁の取り持ち)をパリスが受け入れる; [ルシファーと同様の金星の体現存在]による美女を用いての誘惑にパリスが屈する] → [[ルシファーと同様の金星の体現存在](アフロディテ)による林檎の取得] → [ヘレンをパリスに奪い取られた夫およびその兄弟の檄文にギリシャ諸侯が応じての(パリスが皇子となっていたところの)トロイアの滅亡に向けての戦争の開始]

とのフローにも変換できるとも述べられる(純・記号論的な意味での変換とのことで、である)。

無論、だが、話がそれに留めるだけならば、[金星の象徴化存在]という共通項だけでもってして牽強付会にも(こじつけがましきも)、

[ルシファー ⇔ (変換) ⇔ アフロディテ]

との変換を無理矢理なしていると受け取られるところであろう(当然であろう)。

であるから、

[付会しての変換(こじつけがましき言葉遊びの類)]

を無理矢理なしているとのことでは話は済まないとのことの典拠となるところをこれより指摘する、具体的には、

[美の女神たるアフロディテにて呈示された贈賄の条件(絶世の美女ヘレンとの縁(えにし)の取り持ち)をトロイアの皇子パリスが呑む; ルシファーと同様の[金星の体現存在]による美

女を用いての誘惑にパリスが屈する] → [【ルシファーと同様の金星の体現存在】(ギリシャ神話のアフロディテ)の林檎に関わる誘惑の奏功] → [パリスにヘレンを奪い取られた夫、そして、その兄弟の檄文にギリシャ諸侯が応じての(トロイアの滅亡に向けての)戦争の開始]

との部分が

[女という性を最大限活用しもしての誘惑(美女ヘレンを具にしたの誘惑)が(パリスの審判にて)アフロディテよりパリスに対してなされる]

[上は金星体現存在による誘惑である]

[林檎の取得が崩壊(誘惑に応じた者を包摂しての都市の崩壊)につながった —— すぐに後述することになるが、エデンで用いられた禁断の果実(Forbidden Fruit)が林檎であるとの明示的記述は聖書それ自体の中には認められないものの、ただし、禁断の果実を林檎と解して然るべきだけのことがある—— ]

との側面から

[エデンの園にての誘惑]

と接合するとのことのその意味性を「よりもって煮詰めて」指摘することにする。

それではこれよりは(直上表記の流れを受けもして)、

[黄金の林檎⇔(記号論的相関関係の存在)⇔エデンの誘惑]

とのことをより煮詰めるべくもの摘示をなしていくこととする。

さて、

[パリスの審判に伴っていた誘惑]

および

[エデンの園にての誘惑]

の間に横たわる接合性の問題は以下、1. から 3. と振っての式で細かくも指し示せるようになっている。

1.

まずもってそこより書くが、[パリスの審判] および [エデンの誘惑] の間にあっては

[単純な記号論的接合性]

が認められる。

につき、「パリスの審判でも」「エデンの園でも」女という性を用いての誘惑がなされている(：前者 [パリスの審判] ではアフロディテがパリスをヘレンの取得を対価にし、女という性を用いての誘惑の拳に出ている。後者 [エデンの園] では蛇がまずもって女イヴから誘惑をなし、そのイヴ(エバ)がアダムの

知恵の樹の飲食をなさしめている)。

また、「パリスの審判でも」「エデンの園でも」林檎という果実が「誘惑上の重要なモチーフ」となっていると述べられる。その点、前者「パリスの審判」では「黄金の林檎を巡る争い」こそがトロイアの崩壊をもたらしたものとなり、そもそももって、林檎こそが「女神アフロディテがパリスに対する女ヘレン — 男にとり破滅の元となる女、ファム・ファタール (femme fatale) などと類型化されるような部類の女ヘレン — を具にしての誘惑をなした理由」となっているとのことがある。他面、後者「エデンの園」では誘惑の具となった「知恵の樹の実」がその実、「林檎」であったとの解釈が根強くもなされている (直下出典を挙げる) とのことがある — 林檎が「目的」か「手段」かの差分は存在するが、林檎が「やりとりの中心」にあったことに変わりはない — 。

## 出典 (Source) 紹介の部 50

# SOURCE

## 50



ここ出典 (Source) 紹介の部 50 にあっては

[[禁断の果実] が (聖書本文にはそうは記載されていないところながら) [林檎] であるとされてきた]

とのことの典拠を挙げることとする。

その点、まずもって目につきやすきところからはじめるとして和文ウィキペディア [知恵の樹] 項目にては以下のごとき書かれようが現行なされている。

(直下、和文ウィキペディア [知恵の樹] 項目にての現行記載内容よりの引用するところとして)

「この知恵の樹の実は俗にリンゴのことであるとされるが、旧約聖書にそうした

記述はない。また喉頭隆起のことを英語で「Adam's apple」(アダムのリンゴ)という。これはアダムが知恵の樹の実を喉に詰まらせたとする伝説に由来する」

---

(引用部はここまでとする)

といったウィキペディアに見受けられる見方 — アダムとイヴらが蛇に唆されて食した果実というのがその実、林檎であるという理解— は  
[著名な古典]

にも反映されているとのものである。

著名古典にあつて「禁断の果実」を「林檎」とする記述が見受けられること、さらには、欧州人一般にてそういう理解があつたとのことを示すため、ここでは聖書を諧謔(おどけ)を含んでの言いようで確信犯的に茶化している節がある書、Project Gutenberg にて公開されている 19 世紀から 20 世紀に活動した文人の手になる書 BIBLE ROMANCES First Series より、その内容を引いておくこととする。

(直下、Project Gutenberg のサイトより抜粋なせるところの BIBLE ROMANCES First Series (『聖書、その目立ってロマンチックな物語ら』とでも訳す書籍) にての EVE AND THE APPLE. BIBLE ROMANCES.-3 よりの引用をなすとして)

---

God made her to be Adam's helpmeet. **She helped him to a slice of apple, and that soon helped them both outside Eden.** The sour stuff disagreed with him as it did with her. It has disagreed, with all their posterity. In fact it was endowed with the marvellous power of transmitting spiritual stomach-ache through any number of generations.

**How do we know that it was an apple and not some other fruit? Why, on the best authority extant after the Holy Scriptures themselves, namely, our auxiliary Bible, "Paradise Lost;" in the tenth book whereof Satan makes the following boast to his infernal peers after his exploit in Eden:—**

**"Him by fraud I have seduced  
From his Creator, and, the more to increase  
Your wonder, with an apple."**

Yet another authority is **the profane author of "Don Juan," who, in the first stanza of the tenth canto, says of Newton :**

**"And this is the sole mortal who could grapple, Since Adam, with a fall, or with an apple."**

**Milton, being very pious, was probably in the counsel of God. How else could he have given us an authentic version of the long colloquies that were carried on in heaven? Byron, being very profane, was probably in the counsel of Satan. And thus we have the most unimpeachable testimony of two opposite sources to the fact that it was an apple, and not a rarer fruit,** which overcame the virtue of our first parents, and played the devil with their big family of children.

(背景知識ない向きを想定して細かくも補つてもの訳をなすとして)

「神はアダムの協力者とすべくもイヴを造り出した。

その彼女イヴはアダムが

[ a slice of apple 一切れの林檎]

へと向かうよう「助力」し、すぐに両者共々、エデンの外側に行く結果へと「助力」することになった。酸っぱい食べ物イヴにてそうだったようにアダムの口

にも合わなかった。そして、それは彼らに続く世代にても同文であった。実際、それ(林檎)は幾世代を通じて精神の胃痛を媒介する驚くべき力を授けられていたとでも言うべきであろう。

では、どのように我々はそれが「林檎」であって他の果実ではないと分かるというのか(訳注:これは聖書にエデンの果実が林檎であるなどの言及がなされていないことを所与の前提においての物言いであると解される)。

何故かと言えば、旧約および新約の聖書の「後の世」にあつて現存しているところの最良の典拠、の中にあつてのまさしくもの我々にとっての聖書補足版とでも言うべき(ミルトンの)『失樂園』(訳注:失樂園は17世紀成立の古典)、その第10の巻にてサタンが彼のエデンでのやりようの後、地獄の貴族達に対して、

「我は詐欺にて彼(アダム)を彼の造物主の方向より誘惑・墮落させた。そして、君らがより驚くところして「一個の林檎」にてそれを成し遂げたのだ」

と勝ち誇って述べているとのことがあるからである。

そして、まだまだのところとして、他の典拠としては『ドン・ファン』(訳注:この場合は同名のフランスの大物文人モリエールの喜劇ではなく、文脈上明らかなところとしてロード・バイロンの詩『ドン・ファン』を指す)の敬虔ではないとのその著者、彼が『ドン・ファン』第1巻にての第10節にてニュートン(「万有引力の法則着想と林檎の関係にまつわる俗信」が取り上げられてきたところのニュートン)のことを指しもし

「ニュートンはアダム以来、死せる者(ザ・モータル;人間)としてながら(動詞グラップルをアップルとかけての掛詞を用いつつ)唯一、「落下」(人類の墮落 Fall of man とかけての「落下」fall)と「林檎」とに取っくみあつた男である」と言及しているとのこともある。

(サタンの林檎による誘惑を扱っている『失樂園』をものした)ミルトンはとても信心深かつたとのことであるから、おそらく、その記述は神の助言によってなされているのだろう。他にどのようにしてミルトンは天の国にて行われた長い対話の真正なる型というものを我々に伝えられえただろうか?(訳注:当該古典『失樂園』に対する細かい知識を有していないとこの部、“How else could he have given us an authentic version of the long colloquies that were carried on in heaven?”「他にどのようにしてミルトンは天の国にて行われた長い対話の真正なる型というものを我々に伝えられえただろうか?」との部にての微妙なるニュアンスについて推し量ることなどできなからうかとは思ふが、おそらく、ここでの引用元書籍の著者——(BIBLE ROMANCESの作者;secularist(政教分離論者)でもあつたとのことがWikipediaに紹介されている19世紀から20世紀にかけて活動の論客George William Footeという人物)——は『失樂園』著者ミルトンの霊媒師的やりようについて茶化すように言及している、すなわち、古代詩人ホメロスがその叙事詩冒頭にてムーサ(文芸の女神達)に対して「我に憑いて(憑依靈感の虜というおどろおどろしき状態をもたらして)物語を語らせたまえ」などと云々している(いわゆるインヴォケーション Invocation というものをなしている)のと同文に『失樂園』をものしたジョン・ミルトンが『失樂園』序文にて同様に「天なるミューズ(聖霊)よ物語を語らせしめたまえ」としてことをもってして「天の国の対話を地上に再現する仲立ちをするといった触れ込みの霊媒師的やりようだ」と茶化すように言及しているのだと思われる(訳注はここまでとする)。

ロード・バイロン、(上のニュートンについての言及パートを含む作たる)『ドン・ファン』を生み出したそちらロード・バイロン(訳注:放縦で退廃的な生き方をして最後はギリシャで客死したことで有名な詩人)の方は(ジョン・ミルトンに



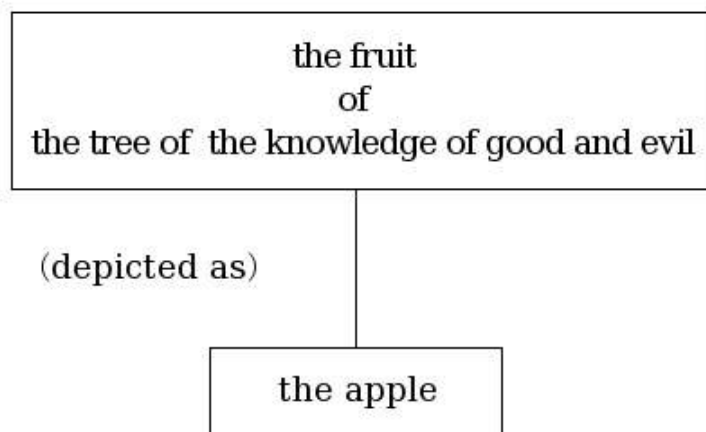
比して)不信心極まりない人間であったので、おそらく、サタンの助言を得ていたのであろう。

そして、このように我々は正反対の情報源 (ミルトンとロード・バイロン) から最も申し分ないとの証言、「我々の最初の父祖 (アダムとイヴ)をして美德を越えるようなことをなさしめ、そして、その子供らの大家族(人類)をして悪魔と戯れることに至らしめたとの果実が[林檎]であって他のよりもって珍しい果物ではない」とのことについての申し分ないとの証言を得ることになっているのである(であるからエデンの果実は林檎であろう)」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(上の引用部をもってしてもお分かりいただけたか、と思うが、ジョン・ミルトン 古典『失樂園』にエデンの禁断の果実をして林檎とする描写が認められるとのこと、また、そうした[エデンの禁断の果実=林檎]とする視点がある程度、欧州人が史的に共有してきたとのこともある)



(出典(Source)紹介の部 50)はここまでとする)

---

(1. から 3. と分ちて [[パリスの審判] と [エデンの園での誘惑] の接合性] を指摘なすべくもなし  
ているとのここでの話にあつての 1. の部を続けるとして)

ここまででエデンにての誘惑の具たる禁断の果実(知恵の樹の実)が [林檎] であるとされる風潮があること、紹介したとして、さらに、

[誘惑の結果が — 英語で述べるところの [フォール] (落下・陥落・墮落)と結びつく— 破滅的事態であるとされている]

ことも [[パリスの審判] と [エデンでの園での誘惑] の間の記号論的つながりあい] に関わると指摘しておく。

[パリスの審判]ではヘレンを対価としての取引が — 出典(Source)紹介の部 39 の流れのなかで  
既述のように— [トロイアの陥落]([ Fall of Troy ]と英語表記されるような事態)へとつながっている  
とのことがある (ヘレン略取がギリシャ連合軍の招集とワンセットであるため)。

他面、エデンでのエヴァ(イヴ)の籠絡よりはじまった誘惑の結果が至福の楽園よりの永久追放、すなわち、[人類にとっての災厄]([Fall of man: 人類の墮落]と英語表記される事態)につながっているというのが聖書の記述である。

その意で女難と共にあったところの [[黄金の林檎]に関わるところのパリスの審判に付随しての誘惑]も、また、女難と共にあったところの [禁断の果実(林檎ともされる)に関わるところのエデンにての誘惑]も破滅的帰結を伴っていたものとして相通ずるとのことがある。

加えて、(小さいことだが)、

[パリスの審判で用いられた黄金の林檎]も [エデンの園の林檎とも看做される果実]も  
[爬虫類の類(蛇に親和性強き存在)]  
と結びついている

とのこともまたある。

林檎と同一視される神の禁断の果実が実るエデンの園では

### [人語を解する蛇]

が誘惑者として林檎とも看做される禁断の果実を薦める存在として登場してくる。

他面、パリスの審判でその取得が争われた黄金の林檎がたわわに実るヘスペリデスの黄金の林檎は [アトラスの娘ら]に管掌されるのと同時に

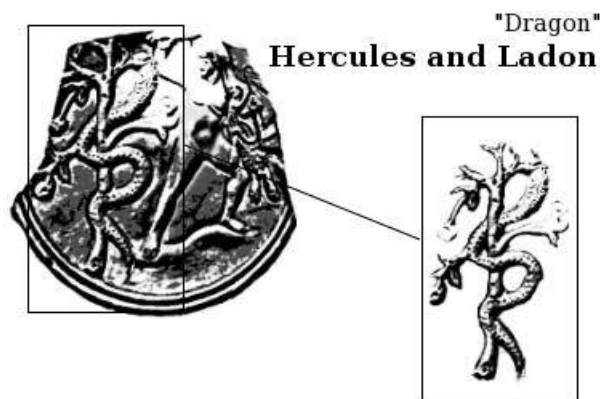
### [100の頭を持つ「竜の」怪物ラドン]

をその番人としていた、と伝わる。

そういうこともあるわけである —— 出典として:先にも **出典(Source) 紹介の部 39**にて引用なししていたとのアポロドーロス『ギリシャ神話』(当方所持の文庫版第61刷のもの) p. 99-p. 102よりの原文引用を再度なすと、“エウルステウスは…(中略)…第一一番目の仕事としてヘスペリスたちから黄金の林檎を持って来るように命じた。これは一部の人々の言うようにリビアにあるのではなく、ヒュペルボレア人の国の中のアトラスの上にあったのである。それを大地(ゲー)がヘーラーと結婚したゼウスに与えたのである。テューポーンとエキドナから生れた不死の百頭竜がその番をしていた” (引用部はここまでとする)とあるが、そこにて記載されている百頭竜というのは [100の頭を持つ蛇ないし竜の怪物たるラドン] という怪物のことである。同ラドンに見る「ギリシャ神話にあつての竜」とは西洋中世に見るような翼を生やした典型的ドラゴンのようなものではなく「巨大な蛇」「巨大なとかげ」といった性質を強くも有していた存在であったとされている。については Project Gutenberg のサイトより現行、全文ダウンロードできるとの幻想世界の怪物らについて扱った要覧的著作 MYTHICAL MONSTERS『神話に見る怪物ら』(1886年刊行の Charles Gould という英国人地質学者の手になる著作)にあつての p.165にて “The popular mind of the present day doubtless associates it always with the idea of a creature possessing wings; but **the Lung of the Chinese, the δράκων of the Greeks, the Draco of the Romans, the Egyptian dragon, and the Nâga of the Sanscrit have no such limited signification, and appear to have been sometimes applied to any serpent, lacertian, or saurian, of extraordinary dimensions, nor is it always easy to determine from the passages in which these several terms occur what kind of monster is specially indicated.**” (大要訳なすところとして)「今日の通俗的精神というものは疑いもなくのところとしてそれら生き物、竜の類は[翼を持っている存在]としているが、**中国にてのロン Lung (竜)、ギリシャの δράκων、ローマの Draco、エジプト版ドラゴン、そして、サンスクリットのナーガ**らはそうした意味付けに限られるようなものではなく、**蛇・蜥蜴のような特性を呈しており、文脈上、そうした生き物がいかな怪物として特に描写されているのか決するのが難しい**とのことともなっている」(引用部大要紹介はここまでとする)と掲載されている程度のことからして推し量れもし、さらに述べれば、といったこと、元来、史的に竜という伝説上の生き物は洋の東西を問わず —— [東洋の龍]と[西洋の竜]の別を論ずる以前の問題として—— [蛇](次いで[蜥蜴]の類)に近しくもの存在として描写されることが多かったとのことがあるとされ、についてはここ日本にての一部の識者からして「戦前期より」指摘

なしていたことでもする。たとえば、この身がデヴィッド・アイクという論客の異説を多角的に分析することとしたなかで竜・蛇の類の伝説を扱った書籍を色々読んでいた際に出逢った書籍となり、現行、和製 Project Gutenberg とも表せられよう青空文庫よりオンライン上より全文確認できるところの南方熊楠の手になる『十二支考 04 蛇に関する民俗と伝説』（岩波文庫）の記述を極一部のみ掻い摘まんで引用なせば、“故にフィリップやクックが竜は蛇ばかりから生じたように説いたは大分粗漏ありて、実は諸国に多く実在する蜥蜴群が蛇に似て足あるなり、これを蛇より出て蛇に優まされる者とし、あるいは蜥蜴や鱉(がく)が蛇同様靈異な事多きより蛇とは別にこれを崇拜したから、竜てふ想像物を生じた例も多く、それが後に蛇崇拜と混合してますます竜譚が多くまた複雑になったであろう”（引用部はここまでする）といった式で（『十二支考』の著者たる南方熊楠の浩瀚なる読書量に支えられての例証とセットにされながら）「竜という存在の[起源]が諸種伝承にては蛇・蜥蜴に近い」と戦前期から日本「でも」述べられていたことが伺い知れるようになっていく（：「戦前期日本からして竜蛇の起源を同一視する識者指摘があった」とのこと南方熊楠のことを[例]として挙げたが、不適切だったかもしれない。というのも「字義通りずば抜けていた彼と比べ見れば、知識のマス(総量)との意味で日本史上に並び立てる知識人(一流大学出でも知識人のチの字にも値しない人間が過半であるところを知識人とするに相応しき人間)など日本史上にて全くもっていなかろう」といった評価もなされもする「別格」の熊楠(言い分・言い様に論理的な流れがまったくもって欠けていると言われようがなされているしそうだととれるのであるも、知識の蒐集・整理・呈示との意では神童のまま大人になったような向きであり、かつ、真偽定かではないが神がかった伝説を伴った人物)を識者の「例」として挙げるのは何ではあるかもしれないとの思いが筆者にはあるからである)——)。

### Greek Dragon ⇒ Drákōn (= huge serpent)



### Iásōn swallowed by "Dragon"



ヘラクレスの第 11 功業では [黄金の林檎(神の果实たる黄金の林檎)の果樹園] の番人として [百頭竜ラドン] なる怪物が控えていると描写される。それにつき、ギリシャ・ローマ (Greco-Roman) 時代の竜は今日知られているような翼ある西洋の竜のようなものではなく、[巨大な蛇] のようなものであったと認知されている。ゆえに「神の黄金の林檎の果樹園」を守っていたのは巨大な多頭蛇との解釈が自然になせるし、なされている(上にての図ではそのことを示すために英文ウィキペディア [Ladon] 項目に掲載の [ローマ時代のラドンおよびヘラクレスの描写遺物] を挙げ、また同時に、同じくものウィキペディアの他項目にみとめられる [ギリシャ時代の金羊毛皮探索の英雄イアソンが巨大な蛇たるドラゴンに呑まれる様を描写した遺物] を挙げもした)。

## 2.

ここまで述べたきたような類似性 —— [女という性を武器にしての誘惑がなされている] [誘惑が [林檎] に結びつくものとしてなされている] [林檎と結びつく誘惑の結果が破滅的事態に通じている] [双方ともエピソードに [果樹園の爬虫類の存在] 関連の描写が垣間見れる] —— に加えて [[黄金の林檎を巡るパリスの審判にまつわる誘惑] と [エデンの誘惑]] の間には

(「先にも言及したことだが」)

[誘惑者が双方ともに [金星と根深くも結びつく存在] となっている]

との一致性もが伴っている。

(: 本稿 **出典 (Source) 紹介の部 49** にて既に解説しているように [パリスの審判] にあつて贈賄工作を奏功させたアフロディテという女神は [明けの明星] こと金星と結びつく存在であると広くも認知されている存在である。また、[エデンでの誘惑をなした蛇] はルシファーことサタンであると定置されもし、そちらサタンはアフロディテと似通ったところで (本稿にての先の段 **出典 (Source) 紹介の部 49** にて典拠示しているように) [ルシファーとして明けの明星の体現存在] でもあると歴年看做されてきた存在である ( [エデンの誘惑にまつわる下り] を含む『新約聖書』から離れてのユダヤ教聖典である『旧約聖書』それ自体には [誘惑の蛇] = [悪鬼の王としてのサタン] であるといった表記は認められないもののそのようにキリスト教徒の間でそのように定置されている —— ※たとえば、本稿のさらに後の続く段にあつて細かき記述内容を原文引用なしながら問題視するつもりである古典となるも、17 世紀成立の古典、ジョン・ミルトン ( John Milton ) の手になる Paradise Lost 『失樂園』などはその筋立てとして (和文ウィキペディア [失樂園] 項目にてのそちらあらずじ紹介部より原文引用するところとして) “ (『失樂園』は) ヤハウエに叛逆して一敗地にまみれた墮天使のルシファーの再起と、ルシファーの人間に対する嫉妬、およびルシファーの謀略により樂園追放に至るも、その罪を自覚して甘受し樂園を去る人間の姿を描いている ” (引用部終端) と要約されるような内容を有していることがあり、といったと



ころに見るように、ルシファーこそがエデンでの「楽園追放をもたらした蛇」であるとの観点がキリスト教圏で呈されてきたとのことがある—— ) )

(:「さらに付け加えてのこと」として

直上にてトロイ滅亡につながったパリスの審判にあつての林檎を巡る取引にあつての誘惑者たる女神アフロディテが「金星」と結びつく存在であるのなら、エデンの園にての誘惑者たる蛇(と同一視されること多きルシファー)もまた「金星」と結びつく存在であるとの話をなした。

それにつきここ追記部で補って表記しておくこととするが、  
「パリスの審判で諍(いさか)いの元となっている黄金の林檎」  
というものからして

「金星」

と結びつくものであるとのことがある。

本稿出典(Source)紹介の部 39 にて紹介しているように  
「黄金の林檎」

は「ヘスペリデスの園」という場にて管理されていると伝承は語るものであるが、そこにて解説したところの黄金の林檎を管理するヘスペリデスらからして「金星」と浅からぬ関係にあるとされているとのことがあるのである。

につき、ヘスペリデスが「アトラスの娘」らとしてのアトランティス(単数形: Atlantis、複数形: Atlantides)であるといった存在であることは先述のことであるが(出典(Source)紹介の部 40 を参照のこと)、ヘスペリデス、彼女らについては「アトラスの娘ら」ではなく「金星「体現」存在の娘ら」であるとの異伝もまた伝わっているとのことがある。

異伝・異説の類ではヘスペリデスらの父親は  
「宵の明星こと金星の体現存在たるヘスペロス(Hesperus)」

であるとされているとのことがあるのである。

ヘスペリデスが「ヘスペロス」という「金星の体現神格」の娘とされていることについて細かくは

出典(Source)紹介の部 62

にて典拠を挙げることとするが、とにかくも、黄金の林檎の管掌者らであるヘスペリデスの父親たるヘスペロスが「宵の明星としての金星」を体現する存在となっているとの式で、また、そのヘスペロスの響きが「黄金の林檎の管理者」であるヘスペリデスと近きものである——(ということはヘスペロス Hesperus 及びヘスペリデス Hesperides は語としての成り立ちが近しいと推察されるし、直下、申し述べるとおりに実際にそうなっている)——との式で黄金の林檎もまた「金星」と結びつくようになっていると述べるのである。

については本稿にての先の段、出典(Source)紹介の部 49 で中世期文豪たるジェフリー・チョーサーの『カンタベリー物語』について解説した著作

ASTRONOMICAL LORE IN CHAUCER 内より引いたところにも、

(ASTRONOMICAL LORE IN CHAUCER より再引用するところとして)

“Chaucer refers to Venus, in the classical manner, as Hesperus when she appears as evening star and as Lucifer when she is seen as the morning star” (拙訳)「チョーサーが「ヴィーナス」(金星)に言及するとき、そのやりようは古典的などころに従っており、金星が「宵の明星」(イブニング・スター; 夕闇にて見受けられるとの金星似姿)として現われての折には「ヘスペロス Hesperus」として金星につき言及し、金星が「明けの明星」(モーニング・スター; 明け方にて見受けられるとの金星似姿)として認められるときには「ルシファー Lucifer」と言及していた」



(再度の引用部はここまでとする)

と記載されているように Hesperus が Lucifer と相並べ立てられての [金星の体現存在] と古典上にて記述されているといったことがある —— 尚、Hesperides と語感近くもある(アトラスに代替する)ヘスペリデス父親候補 Heperus はその名それものからして[宵の明星]・[(宵の明星としての金星が観察される、日の沈む方向たる)西方]・[夕餉(ゆうげ. 夕食)]を意味するラテン語[vesper]と語源を一にすると指摘が存するものでもある。については英文 Wikipedia [Hesperus]項目にて “ **Hesperus' Roman equivalent is Vesper ( cf. "evening", "supper", "evening star", "west" ”** 「ヘスペラスのローマ語にての対応語句はヴェスパー、[夕刻]・[夕食]・[宵の明星]・[西方]との意となる語句である」と現行にて記載されているようなことがある (Hesperus ⇒ イブニング・スター ⇒ 金星という式が成立している)。以上、言及したうで一応断っておくが、直前にて既述のように黄金の林檎を管理管掌する Hesperides らの父が Hesperus であるとの見方がある(後にての [出典\(Source\) 紹介の部 62](#) でその言われようについては言及する)一方でのこととして[彼女ら Hesperides の母親の複数候補のうち一人の名前]や[彼女ら Hesperides の単数形ないし構成単位と結びつく名前]が Hesperia(父親候補 Hesperus とは異なるが Hesperus と同様に Hesperides と非常に似たような響きの名たる Hesperia)とされているとのこと「も」ある。についてはブリタニカ百科事典で最も著名なる版にしてオンライン上より全文確認できるようになっているとの版にあつて “ HESPERIDES, in Greek mythology, maidens who guarded the golden apples which Earth gave Hera on her marriage to Zeus. According to Hesiod (Theogony,215) they were the daughters of Erebus and Night; in later accounts, of Atlas and Hesperis, or of Phorcys and Ceto ( schol. on Apoll. Rhod. iv. 1399; Diod.Sic.iv.27). They were usually supposed to be three in number-Aegle, Erytheia, Hesperis ( or Hesperethusa ); according to some, four, or even seven. They lived far away in the west at the borders of Ocean, where the sun sets. Hence the sun (according to Mimnermus ap. Athenaeum xi. p. 470) sails in the golden bowl made by Hephaestus from the abode of the Hesperides to the land where he rises again.” (幾分か委細省いての訳として)「ヘスペリデスはギリシャ神話にて大地神が女神ヘラのゼウスとの婚礼に際して贈り与えた黄金の林檎を守護する乙女らとなる。ヘシオドス『神統記』によれば、彼女らはエレボス神と夜(の体現神格)の娘らであるとされ、より後の説明では、アトラスおよびヘスペリス[Hesperis]神の娘ら、あるいは、ポルクユスとケートーの両神の娘らであるとされている(ロドス島のアポロニウスらの言いようの特定部による)。彼女らは通例、アイグレー・エリュテーイア・ヘスペリス[Hesperis](またはヘスペレトウーサ)の三人よりなるとされている。他の説明によるところでは4人、あるいは、7人であるされることもある。彼女らは[遙か西方の大洋の果て]、[日が沈むところ]にて住まうとされる。それゆえに、(ミムネーマスによる古典によれば)太陽はヘパイトスにて鑄造された黄金の鉢状の容器に入つての式にてヘスペリデス住まいから彼が再び昇る場へと航海をなしていくとされている」(引用部はここまでとする)との記載がなされているところでもある)。まとめて述べれば、ヘスペリデス Hesperides という黄金の林檎の管掌者らは [金星=宵の明星] と同義のローマ名を持つ Hesperus を父親とするとも言われ、その構成単位ないし母親を Hesperis とするとも言われる存在とのことになり、Hesperides という[Hesper]との語句と結びつく黄金の林檎の管掌者らがいかに日没にて輝く金星と結びつくか推し量れもするとのことになる—— )

(後にててもよもって簡明なるまとめでの表記をなすが、本段までにて丁寧を心がけて指し示してきた

[黄金の林檎を巡るギリシャ神話上の誘惑]と[エデンの園にての誘惑]の関係性とは図示なすと以下のようなものとなる)



# Lucifer

(the morning star)

ルシファーは金星、明けの明星と名前を共有している。



①forbidden fruit  
(depicted as the  
apple)  
&  
Eve  
(femme fatale,deal)

ルシファーとも同一視されるエデンの蛇はファム・ファタールとも評せられるイヴを用いて林檎とも見られている禁断の果実を食するよう、アダムを籠絡するのこことをなした。

②ruin アダムとイヴは行為を問責されるとのかたちで楽園より追い出された。

(planet)

## Venus

金星は [ルシファー] と [アフロディテ] の双方に結びつく

アフロディテは林檎と関わる誘惑を女を用いて成就させた。

(Cause of the Trojan War)

Golden apple & femme fatale

ルシファーは林檎と関わる誘惑を女を用いて成就させた。

Forbidden fruit (depicted as an apple) & femme fatale

### Aphrodite

### Lucifer

Hesperus—Hesperides—connection

アフロディテ誘惑と関わる黄金の林檎 —蛇とも結びつく林檎— はハスペリデスらに管理される林檎でもある。そのハスペリデスらはルシファーと同文に金星の体現存在であるヘスペロスの係累であるとの説が伴っている者達である。

# 3.

ここまで述べただけでは「それでも、」

[パリスの審判とエデンにての林檎の誘惑の接合性]

を論ずることをもってして独創先行のきらいありの申しようであるとする向きもあらわれるかもしれない (エデンの林檎は誘惑の [手段] であるが、黄金の林檎は誘惑の [動機] であるからここでの話には



[こじつけがましいものである]と看做したりしながらも、である)。

だからこそ、ここにきて指摘するが、

[黄金の林檎の園] (明けの明星と結びつくアフロディテ、その女神の誘惑目的となった林檎が実る果樹園)

[エデンの園] (明けの明星と結びつく蛇、ルシファーことサタンの同等物と看做される蛇による誘惑がなされた場)

が[質的な意味での同一物]と長年看做されてきた、そして、そのように看做されるだけの事情があるとのことが ([パリスの審判にまつわる黄金の林檎を巡っての誘惑]と[エデンの園での誘惑]が接合していると論ずるうえでの強力なる論拠として) [無視できぬこと]としてある。

同点については直下、出典紹介部を参照されたい。

## 出典 (Source) 紹介の部 51

# SOURCE

## 51



ここ出典 (Source) 紹介の部 51 にあつては

[「実際に」[エデンの園]と[黄金の林檎の園]が「歴史的に」質的に同質のものと看做されてきた]

とのことについての論拠を挙げる。

エデンの黄金の林檎の園と黄金の林檎の園が質的につながるものであるとの理解がなされてきたことについては(まずもって目につきやすきところからはじめるとして)英文 Wikipedia [ Garden of Eden ] 項目にて現行、次のような記載がなされていることを取り上げたい。

(英文 Wikipedia [ Garden of Eden ] 項目よりの引用として)

---

The garden of the Hesperides in Greek mythology, was somewhat similar to the

Christian concept of the Garden of Eden, and by the 16th century a larger intellectual association was made in the Cranach painting (see illustration at top). In this painting, only the action that takes place there identifies the setting as distinct from the Garden of the Hesperides, with its golden fruit.

「ギリシャ神話にあつてのヘスペリデスの園(黄金の林檎の園)は幾分、キリスト教のエデンの園のアイディアと似ており、16世紀、クラナッハの絵画にて知的関連付けがなされた。この画ではそこにて発生した動きのみが黄金の果実を伴ったヘスペリデスの園との区別をつけるうえでの設定条件となる」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

直上にて抜粋した英文 Wikipedia [ Garden of Eden ] 項目の記述は当該項目内記載内容それぞれものからして論拠として弱い(insufficient)であるとはとれるところでもあるのだが、そこにて問題視されているルーカス・クラナッハ・ジ・エルダー(Lucas Cranach the Elder)という画家の絵画がいかようにエデンの園と黄金の林檎の結節点になるのかの一例摘示をなしておく。

Works of Lucas Cranach the Elder



"Law and Grace"

Paradise Lost



"Judgement of Paris"





"Judgement of Paris"



the 11th labour of Hercules  
(Hercules and Ladon)

### Golden Apple

上掲図にては —— 述べるまでもなく瞭然としているところだが—— 枠にて囲ってルーカス・クラナッハ・エルダーの作品を二例ほど挙げている(：うち、上部のものは Law and Grace と題されるようなモチーフを扱った絵画となり、[キリスト教の神の定めた人間の運命が樂園追放からイエスの犠牲によっての復樂園へとつながっていくさま]をモチーフとして描いているとのものとなり、下の段のものが Judgement of Paris ことパリスの審判をモチーフとして描いているとの画となる、すなわち、構図にてアフロディテ・アテナ・ヘラの黄金の林檎を巡って争った三女神を配し、そのうえで、彼女らの誰に黄金の林檎を渡すのか決しさせしめるとの前段階として [アンニュイな表情をした中世甲冑姿のパリス] に黄金の林檎が渡される場を描いているとの画]となる)。

また、上掲図にてはルーカス・クラナッハの絵画らを挙げての枠内から外れての部にて英文 Wikipedia [Ladon (mythology)] にて現時掲載されており、ローマ期にて製作されたと解説されている、  
[ヘラクレスとラドン(黄金の林檎を守るとされる百の頭を持つ竜)の黄金の林檎取得のための戦いを描いたレリーフ]  
を挙げもしている。

以上、一言のみ概要解説しての各図葉らがいかにして結びつくのかは図をご覧いただければ、よくお分かりいただけるか、と思う —— たとえば、下の段にて呈示の [パリスの審判] 関連の画にて [審判役のパリスにトロフィーの黄金の林檎を渡すさまが描かれているとの神の似姿] が上の段にて呈示の Law and Gospel とのテーマを持つ画にての [アダムよろしく裸の格好をとる人類の表象的人物に道筋を示している老人の似姿] と (同じくもの画家の手になる画らの間にて) 「視覚的に照応している」風ありと見受けられること、お分かりいただけるか、と思う——。

直近抜粋したところの英文ウィキペディアではルネサンス期画家ルーカス・クラナッハ・ジ・エルダーの絵画のことが言及されてはいるが、それとはまた別の側面で [[エデンの園] および [黄金の林檎の園] の同質性を示す] とのことがある (のを捕捉している) ので、そちらについて「も」紹介しておくこととする。

についてはとっかかりとして、「信用の置けぬ行き過ぎた著作との評価が伴いがちなものであるが、」と断りながらも本稿の先の段にでも挙げていたとの著作、

**Atlantis: The Antediluvian World** 『アトランティス大洪水前の世界』 (オンライン上から古書をスキャンしたとの PDF 版およびテキスト抽出版をそれぞれダウンロード可能となっているとの著作)

の[書籍執筆時の言論動向を示す記述](19世紀欧州にあっての言論動向の影響下にあるのかたちで『アトランティス大洪水前の世界』作者ドネリーがなしているとの記述)を引くことから始める。

(直下、Atlantis: The Antediluvian World 冒頭部 p.1-p.2 にあっての[同著者がメイン・テーゼとして挙げている13のテーゼの中の1つにまつわる記載部]より抜粋をなすとして)

---

That it was the true Antediluvian world ; the Garden of Eden; the Gardens of the Hesperides ; the Elysian Fields ;the Gardens of Alcinous; the Mesomphalos ; the Olympos; the Asgard of the traditions of the ancient nations; representing a universal memory of a great land, where early mankind dwelt for ages in peace and happiness. The Bible tells us that in an earlier age, before their destruction, mankind had dwelt in a happy, peaceful, sinless condition in a Garden of Eden. Plato tells us the same thing of the earlier ages of the Atlanteans.

(拙訳として)

「[それ](注:文脈上、伝承が語るアトランティス)こそが[真なる大洪水前の世界—聖書のノアの洪水の観点と接合するところの大洪水前の世界—]である。それは[人類が平和と幸福の内に時代を重ねていたとの偉大なる地]の普遍的記憶を示すとの存在、[エデンの園]であり、[ヘスペリデスの園]であり、[エリュシオンの園]であり、[オリンポス]であり、古代国家群の伝統を体現存在としての[アスガルド]である。初期の時代、破滅に先立つ折にて人間は幸福、平和的心境、無原罪の内にエデンの園に住んでいたと聖書はわれわれに語っている。対してプラトンは(アトランティス言及著作にて)アトランティスの初期の時代に同様のことが当てはまると語っている」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

ドネリー(政治家から転身しての19世紀活動の草莽の史家として[古代文明揺籃の地となった失われた世界(大洪水前の世界)が存在する]とのことを主張していたとのこと、先述の **Atlantis: The Antediluvian World** の著者イグナティウス(イグネイシャス)・ロヨラ・ドネリー)が呈示しているテーゼそのものが正しいか正しくないかはここでは問題とはならない(**My point of view: It makes no difference whether Donnelly's hypotheses are true or not.**)。

「問題なのは、」

[ドネリーが上のような申しようをなしている背景に「[エデンの園]と[黄金の林檎の園]を同一の起源を持っているものである」と主張しても「行き過ぎ」にはならないような「時代的背景」(往時にての人間のものの見方を受けての事情でもいい)が存在している]

とのことである。

その点、そちら[往時の言論動向]に関わる場所としてドネリーが Atlantis: The Antediluvian World の中で

[次のようなこと]

「をも」記載しているとのことがある。

(直下、Atlantis: The Antediluvian World の p.324 よりの引用をなすとして)

---

" The Gardens of the Hesperides, with their golden apples, were believed to exist in some island of the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands off the north or west coast of Africa. They were far famed in antiquity ; for **it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus**, and there that **the earth displayed the rarest blessings of the gods** ; it was **another Eden.**"

(Ibid., p. 156.)

(拙訳として)

「黄金の林檎が実るヘスペリデスの園は大洋にあってのどこかの島に存在する、あるいは、アフリカ沖から北ないし西に向かった先にあると考えられている。それらは古典古代の時代にあつて「ゼウス寝所のそばにて流れるネクター(神々の不死の飲料のこと)の発する場」にして「この地上にあつて神々の最も得がたき祝福が施された場」として非常に有名であつた。すなわち、ヘスペリデスの園はもう一つのエデンであつた」(上に引用の書(Ibid)p.156より)

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

表記引用部にあつてそちら p.156 の内容が問題視されている(Ibid., p. 156.「上にて引用の書籍の156 ページより」とされている)との「上にて引用の書」とは Atlantis: The Antediluvian World の直上抜粋のページ(p.324)にて同書書名が言及されている、

Murray's " Manual of Mythology," ( ムーレイ著『神話学の手引き』)

という書籍となる。

同著 Manual of Mythology『神話学の手引き』の著者の Alexander Stuart Murray は 19 世紀後半 — イグナティウス・ドネリーが活動していたとの時代 — にての古典研究にあつての「デ・ファクト・スタンダード」を構築していた権威筋の考古学者として認知されている向きとなる。それに関しては英文 Wikipedia にて「Alexander Stuart Murray」と一項目が設けられもしており、の中で

(原文引用するところとして)

“ In 1886 he was selected by the Society of Antiquaries of Scotland to deliver the next years Rhind lectures on archaeology, out of which grew his Handbook of Greek Archaeology (1892). ”

(大要訳として)「ムーレイはスコットランド考古学会に考古学リンド講演(訳注:リンド講演会とはリンド数学パピルスという遺物を発見したアレクサンダー・ヘンリー・リンドに由来するところのスコットランド考古学界主催の講演会となり学者ら身内で権威筋にある者が進行役に選ばれるように見受けられるようになっているものである)の進行役に選出され、一八九二年、ギリシャ考古学ハンドブックを生み出した向きとなる」

と記載されているような学者が同じくものアレクサンダー・ムーレイという学者となる(述べておくが、筆者は[[権威]そのものが何かを証明する]と考えているような類の人種、要するに相応の権威主義者などではない。断じてない。ただし、権威が彼ら流の論拠に基づきかくかくしかじかのことを「表立ってのところで」「目立って」述べているとことが摘示できるようになっているときにはそのことを even though「…でさえも」との式で取り上げることが — [時代人を縛るそれだけのマス(総量)としての考え方がある][述べんとしていることにある程度の通用性が伴っている]ことを指し示すとの意で — 有意義たりうると考える人間とはなる)。

以上述べたうえで書くが、英文原著内容をオンライン上のアーカイブ ( Internet Archive ) より誰でも確認できるところの同著 *Manual of Mythology* には確かに次のような記載がなされている。

(直下、*Manual of Mythology* にての II. INFERIOR DEITIES. と振られた節にあつての THE HESPERIDES の項目より原文引用するところとして)

---

The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were far-famed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods : it was another Eden.

(訳として)

「黄金の林檎が実るヘスペリデスの園は大洋にあつてのどこかの島に存在する、あるいは、アフリカ沖から北ないし西に向かった先にあると考えられている。それらは古典古代の時代にあつて[ゼウス寝所のそばにて流れるネクター(神々の不死の飲料のこと)の発する場]にして[この地上にあつて神々の最も得がたき祝福が施された場]として非常に有名であつた。すなわち、ヘスペリデスの園はもう一つのエデンであつた」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする —以上内容は上の段にて引用した *Atlantis: The Antediluvian World* の特定部内容と[まったくもって同文のこと]を述べているところとなる— )

ドネリーと同様の 19 世紀の時代の人間たる Alexander Stuart Murray アレクサンダー・スチュアート・ムーレイからして自らの手になる神話の解説書の一で[黄金の林檎の園]たる[ヘスペリデスの園]を[その他のエデン]と評していたというわけである( : 黄金の林檎の園とエデンの類似性にまつわる論点としては[楽園的領域としての特質][林檎と結びつくとの特質][神が大切にしている不死の飲食物と結びつくとの特質(ヘスペリデスの園には黄金の林檎と結びつくだけではなくネクターこと[ギリシャ神話の[不死を約束する神の飲料]と結びついていたとの申しようが上の訳出部にてはなされている。そして、エデンの園にあつては[知恵の樹の実]だけではなく知恵の樹とそれを同時に食すと神にも等しくなるとの[命の樹の実]が実っていたと聖書 —創世記 2 章 9 節— は語っている) ]とのことがあるのだと解される)。

(追記 : アレクサンダー・ムーレイ以外に [ヘスペリデスの園] を [エデンの園] と同質視していたとの近代の欧州の知識人の申しようもここ追記部にて引いておくこととする。

具体的には英文 Wikipedia [ George Stanley Faber ] 項目にも一項設けられての解説がなされている 19 世紀の英国国教会系の神学者としてのジョージ・スタンリー・フェイバーという人物の手になる著作 *The Origin of Pagan Idolatry* (1816 年初出 / 表題訳すれば『異教の偶像崇拜の起源』となる著作) にも次なる表記がなされているとのこと、引いておくこととする。

(直下、オンライン上より容易に確認できるところの Project Gutenberg のサイトにての公開著作 *BIBLE MYTHS AND THEIR PARALLELS IN OTHER RELIGIONS* (1910 年刊行版) 『聖書にての神話、そして、他の宗教にみとめられるその類似物らについて』) にも引用されているところの *The Origin of Pagan Idolatry* (1816) 内記述を引くとして)

**"But the garden of the Hesperides was none other than the garden of**

**Paradise; consequently the serpent of that garden, the head of which is crushed beneath the heel of Hercules, and which itself is described as encircling with its folds the trunk of the mysterious tree, must necessarily be a transcript of that Serpent whose form was assumed by the tempter of our first parents.** We may observe the same ancient tradition in the Phœnician fable representing Ophion or Ophioneus."

(拙訳として)

「しかしヘスペリデスの園(黄金の林檎の園)は[楽園の果樹園]に他ならなかったとのものであり、従って、その果樹園の蛇、その頭もてヘラクレスの足下に踏みしだかされている、そして、神秘的な果樹園樹木の幹に覆いかぶさるように巻き付いているとの描写がなされているとの蛇は[我らが始祖(訳注:文脈上、アダムとイヴのこと)への誘惑者にそのかたちが模された蛇の類似型]に違ひなかりとの存在と必然的になる。我々は同じくもの古代の伝統(的描写)をオピオーンないしオポオネウス(訳注:オピオーンというのはギリシャ神話にてタイタンのクロノスらと主導権を争い、消えていったとされる古の神、蛇の姿と結びつけられることもある神のことを指す)にまつわるものたるフェニキアの伝承にも見出せるかもしれない」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上に見るように[ヘスペリデスの園]と[エデンの園]とは19世紀初めの著作——神学者ジョージ・スタンリー・フェイバーの手になる *The Origin of Pagan Idolatry*——からして結びつけられて見られていたものである。

(出典(Source)紹介の部 51 はここまでとする)

(直上の段までもってして 1. から 3. と分けても段階的なる指し示しの部を終える)

以上、書き連ねての指し示しのプロセス(どのことを指し示しの材にするのかとの話柄選択以外の面では属人的主観などが入る込む余地が一切無いとの指し示しのプロセス)にあつては以下のことを呈示してきた。

a. [黄金の林檎にまつわる誘惑]および[エデンの園にての誘惑]の双方ともに[女という性を用いての誘惑]が主軸をなしているとのことがある(一方はヘレン、もう一方はイーヴという女という性を用いての誘惑がなされている)。

b. [黄金の林檎にまつわる誘惑]および[エデンの園にての誘惑]の双方ともに[誘惑が破滅的事態をもたらした]との結末が付きまわっているとのことがある(片方が[フォール・オブ・トロイア;トロイア陥落]、もう片方が[フォール・オブ・マン;人類の墮落・失樂園]との結末に通じている)。

c. [黄金の林檎にまつわる誘惑]および[エデンの園にての誘惑]の双方ともに誘惑にてその授受が争われたのは[林檎]および[林檎と歴史的に同一視されてきたもの]と



なっているとのことがある(聖書にては[エデンの禁断の果実]ことフォウビドゥン・フルーツが[林檎]であるとの明示的表記がみとめられないわけであるが、それが歴史的ありようとして林檎と看做されてきたとのことがあり、本稿ではその点についても解説している)。

d. [黄金の林檎の果樹園]は百頭竜ラドンに守られているとされる。そして、ギリシャ・ローマ時代における竜とは[巨大な蛇]のようなものとされる。他面、[エデンの園の誘惑]は蛇によってなされたと伝わるものである。従って、[黄金の林檎]および[エデンの園の禁断の果実]の双方ともどもに「(蛇たる)爬虫類とのつながり」があいが見てとれるとのことになる。

e. [黄金の林檎にまつわる誘惑]および[エデンの園にての誘惑]の双方ともにあつて[金星の体現化存在]が誘惑者となっているとのことがある(片方は金星の体現存在たる女神アフロディテを誘惑者としており、もう片方では金星(明けの明星)の体現存在たるルシファーことエデンの蛇と同一視されるサタンを誘惑者としている)。また、誘惑者が金星と結びつくだけではなく、黄金の林檎というのはそれが実る果樹園からして[金星]と親和性が高い存在となっているとのことがある。すなわち、黄金の林檎を果樹園で管掌するとされるヘスペリデスらが金星こと[宵の明星]と非常に近い存在であるとのことがある(ヘスペリデス Hesperides という黄金の林檎の管掌者らは[金星=宵の明星]と同義のローマ名を持つ Hesperus を父親とするとも言われ、その構成単位ないし母親を Hesperis とするとも言われる存在とのことになり、Hesperides という[Hesper]との語句と結びつく黄金の林檎の管掌者らがいかに日没にて輝く金星と結びつくか推し量れもするとのことがある)。

f. [黄金の林檎の園]および[エデンの園]の双方は「互いに関係があるもの」として欧州人に「歴史的に」隠喩的・明示的な式で結びつけられてきたものらとなる。隠喩的な式とのことでは、ルネサンス期画家のルーカス・クラナッハ・ジ・エルダーの絵画に両者関係性を示唆するが如きものが存在しているとのことがある(その[具体例]を本稿の先の段で挙げている)。他面、明示的な式で関係づける式とのことでは、近代知識人らの著作にあつて[[神に不死を約束するネクター]と結びつく黄金の林檎の園]と[[不死と知恵の果実が実るエデンの園]とを結びつける表記がなされている(そちらも原文引用にて摘示している)。

表記の a. から f. のことらより [黄金の林檎にまつわる誘惑] および [エデンの園にての誘惑] の双方が多重的に結びつくのは自明とのこととなっている(再言するが、話者の属人的な主観が問題になるようなことではない)。

さて、ここに至るまでの段階にて

---

[ [ヘラクレスの 11 番目の功業に登場する黄金の林檎] が [エデンの園の蛇の誘惑] に関わるとのことからしてブラックホール生成問題と結びつくようになっていることが — 実にもって問題となる文献的記録らを通じて — 指摘できるようになっている ]

---

とのことを証示するための [布石] となるところである(「[ブラックホール生成問題を巡る「多重的」接合関係]を論ずるうえでの [布石] となるところである)と明示して論じてきたとの、

---

[ヘラクレス 11 番目の功業 ——(こちらヘラクレス第 11 功業に登場する[巨人アトラス]および[黄金の林檎]を巡る話がいかようにして LHC 実験と多重的に接合しているかは先に具体的典拠を挙げ連ねながら先立っての段にて詳述に詳述を重ねてきたこととなる)—— にあつての [黄金の林檎](トロイア崩壊の原因たるもの) が聖書『創世記』に見るエデンの蛇による誘惑の物語と接合している]

---

とのことについて多くを指し示したかたちとなる。

が、「まだ足りない」との認識にてこれ以降は同じくものことに通ずるところとして、「さらにも、」

の話を —— 話の方向性につき「多少」、というより、「かなり」の変化球を加えての格好にて —— 同様に [布石] となることとしてなしていくこととする。

そうした変化球加えての以降の話にあつては、まずもって、

(「切り出しとしては唐突ながら結果的には取り上げているところの[多重の接合性]の問題を示す方向に収束していく」と申し添えたいとのところとして)

「コロンブスが [新大陸] として発見した [アメリカ] こそが [古のアトランティス] であると看做す風潮が大航海時代以降の欧州にあつた」

「そちらをアトランティスと看做す風潮が欧州人にあつたとのコロンブスが「発見」した [アメリカ] にはケツァルコアトル信仰というものがかつて存在しており、同ケツァルコアトル信仰が [エデンの蛇の物語] と接続するような要素を多重的に伴っていると示せるよう「にも」なっているとのことがある」

とのことらについての解説を講じることからはじめることとする —— 事前に断っておくところとして、それら解説部からしてかなりの紙幅を割くことになる——。

まず、上にてのことらのうち、

「 [アメリカ] こそが [古のアトランティス] であると看做す風潮が大航海時代以降の欧州にあつた」

とのことについてだが、次の出典部紹介部を参照いただきたいき次第である。

■ 外挿付記としまして：ここ【典拠紹介部 52】には「多少長くもの」p.747 から p.755 との頁数を割いているため、以降【典拠紹介部】(従たる)と【指し示しの主軸たる】の関係について惑われぬよう何卒ご注意いただければ、と申し述べさせていただきますき次第です。

---

出典 (Source) 紹介の部 52

# SOURCE

## 52



ここ出典(Source)紹介の部52にあつては、

「[アメリカ]こそが[古のアトランティス]であると看做す風潮が大航海時代以降の欧州にあつた」

とのことの出典を挙げることにする。

その点、表記のことの指し示しにはそこからはじめる必要があると考えるためにそこから言及なすのだが、イングランドの著名な論客に

[フランシス・ベーコン]

という人物がいる。

同フランシス・ベーコンについては日本にあつても高等学校の[世界史]の科目を受験を使うことに選択した者がその名を

[近代的思想への道筋を付けた論客]

として暗記を強いられるような格好ともなっている歴史上の人物となる ——[知識通用度]の問題としてそうもなっている——。

にまつわつては和文ウィキペディアのフランシス・ベーコンにまつわる現行の記述を ——そも、フランシス・ベーコンの名など知らぬ存ぜぬとの向きが読み手になっていることを想定のうえで—— 引いておくことにする。

(直下、和文ウィキペディア [フランシス・ベーコン (哲学者)] 項目にての現行の記載内容よりの一部引用をなすとして)

---

フランシス・ベーコン (Francis Bacon, Baron Verulam and Viscount St. Albans, 1561年1月22日 - 1626年4月9日) は、イギリスの哲学者、神学者、法学者である。イングランド近世(ルネサンス期)の人物。「知識は力なり」(Ipsa scientia potestas est)の名言で有名。…(中略)…ヴォルテールは、フランシス・ベーコンについて、『ノヴム・オルガヌム』などの著作を念頭に、「経験哲学の祖」として賞賛している。

---

(引用部はここまでとする)

(続いて、直下、和文ウィキペディア [イドラ] 項目にての現行の記載内容よりの一部引用をなすとして)

---

イギリス経験論哲学の祖として知られ、政治家でもあったフランシス・ベーコンは、「知識は力なり」のことばによって、自然の探求によって自然を克服し、人類に福祉をもたらすことを提案した。そして、その探求方法としては、法則から事実を予見するアリストテレス(『オルガノン』)的な演繹法に対し、個々の実験や観察の結果得られた知見を整理・総合することで法則性を見出す帰納法を提唱した。ベーコンによれば、一般論から個々の結論を引き出すアリストテレスの論理学はかえって飛躍をまねきやすいのであり、知識とはむしろ、つねに経験からスタートし、慎重で段階的な論理的過程をたどることによって得られるものであった。

---

(引用部はここまでとする)

さて、以上、前提知識ない向きを想定しての教科書的なフランシス・ベーコンにまつわる解説の引用をなしたところで述べるが、フランシス・ベーコンは

### New Atlantis 『ニュー・アトランティス』

という書籍をものしており、の中では、

#### 「アメリカこそが伝説に見る大アトランティスである」

との言及がなされている ( : 英文・和文で『ニュー・アトランティス』の全内容を当然に検討している人間として申し述べておが、同作『ニュー・アトランティス』というのは交易対象としての日本を目指していた欧州の船乗り達が(アメリカに同定されるグレート・アトランティスに対してそうも呼称される)[架空の島国ニュー・アトランティス]に漂着、そこでもって「サロモン(ソロモン)の家」という組織によって「文明の進歩のすばらしさ」を思い知らされるとの一種の寓意譚となっており、また、現実世界の英国にて「王立協会」(人類の科学文明の進歩に多大なる役割を果たした科学者らの互助組織となり、アイザック・ニュートンが初期会長になっていたことでも知られる団体)の設立に影響を与えたとされる作品ともなっている — その程度のことも物事を皮相でとらえるにすぎない世俗的教養のレベルに属する話ともなり(フランシス・ベーコンの名前を中世のロジャー・ベーコンという名前の際立っての修道士の名前と分けて暗記することを強られる日本の受験生ら、および、彼らが長じてそうしたものとなるとの[「良き」社会の構成ユニット]の「過半」は死ぬまで把握することがないことかもしれないが、それでも世俗的教養のレベルに属する話ともなり)、例えば、英文 Wikipedia にての [ New Atlantis ] 項目にあっても常識的なところとして(掻い摘まんで引用なすところとして) “ New Atlantis is an incomplete utopian novel by Sir Francis Bacon, published in 1627. In this work, Bacon portrayed a vision of the future of human discovery and knowledge, expressing his aspirations and ideals for humankind. [ . . . ] **The plan and organisation of his ideal college, Salomon's House (or Solomon's House), envisioned the modern research university in both applied and pure sciences.** [ . . . ] **New Atlantis and other writings of Bacon inspired the formation of the Royal Society.** ” (訳として)「ニュー・アトランティスは1627年に刊行されたフランシス・ベーコン卿の手になる未完のユートピア小説となる。この作品にてベーコンは彼の人類に対する切望・理想を吐露しながら人類の発見と知識の未来像を描いている。…(中略)…(ベーコンが自身の理想を体現すべくも呈示せんとした)彼の計画および理想の「サロモン(ソロモン)の家」の組織にまつわる部は近代以降の応用科学および純粋科学双方にあっての研究をなす大学に対する予見をなすものであった。…(中略)…ニュー・アトランティスおよびベーコンの他の著作らは王立協会の設立を促すことになった」(引用部はここまでとする)と解説されているところである — )。

# NEVV A T L A N T I S .

A Wworce vnfinished.

Wwritten by the Right Honourable, FRANCIS  
*Lord Verulam, Viscount St. Alban.*



以上、基本的なることにつき解説したうえでここでは New Atlantis 『ニュー・アトランティス』のオンライン上、Project Gutenberg のサイトより全文入手できる原著版と岩波文庫版として流通している邦訳版より

[アメリカがアトランティスであると表記されていることに関わるパート]

よりの原文引用を(それが本稿にての指し示し事項に関わるとの認識があるゆえに)事細かになしておくこととする。

(直下、Project Gutenberg のサイトより全文入手できるとの New Atlantis の中にての架空の島国 New Atlantis にあつての[ソロモンの家の役職者]に由来する申しようの部 — the Governor of the city, that one of the Fathers of Salomon's House に由来する申しようの部—— よりの原文引用をなすとして)

---

You shall understand (that which perhaps you will scarce think credible) that about three thousand years ago, or somewhat more, the navigation of the world, (especially for remote voyages,) was greater than at this day. Do not think with yourselves, that I know not how much it is increased with you, within these six-score years: I know it well: and yet I say greater then than now; whether it was, that the example of the ark, that saved the remnant of men from the universal deluge, gave men confidence to adventure upon the waters; or what it was; but such is the truth. The Phoenicians, and especially the Tyrians, had great fleets. So had the Carthaginians their colony, which is yet further west. Toward the east the shipping of Egypt and of Palestine was likewise great. China also, and the great Atlantis, (that you call America,) which have now but junks and canoes, abounded then in tall ships. **This island, (as appeareth by faithful registers of those times,) had then fifteen hundred strong ships, of great**



**content. Of all this, there is with you sparing memory, or none; but we have large knowledge thereof.**

[ . . . ]

At the same time, and an age after, or more, **the inhabitants of the great Atlantis did flourish. For though the narration and description, which is made by a great man with you; that the descendants of Neptune planted there; and of the magnificent temple, palace, city, and hill; and the manifold streams of goodly navigable rivers, (which as so many chains environed the same site and temple); and the several degrees of ascent, whereby men did climb up to the same, as if it had been a scala coeli, be all poetical and fabulous: yet so much is true, that the said country of Atlantis, as well that of Peru, then called Coya, as that of Mexico, then named Tyrambel, were mighty and proud kingdoms in arms, shipping and riches:** so mighty, as at one time ( or at least within the space of ten years ) they both made two great expeditions; they of Tyrambel through the Atlantic to the Mediterrane Sea; and they of Coya through the South Sea upon this our island: and for the former of these, which was into Europe, the same author amongst you ( as it seemeth ) had some relation from the Egyptian priest whom he cited.

[ . . . ]

**But the divine revenge overtook not long after those proud enterprises. For within less than the space of one hundred years, the great Atlantis was utterly lost and destroyed:** not by a great earthquake, as your man saith; (for that whole tract is little subject to earthquakes;) but by a particular' deluge or inundation; those countries having, at this day, far greater rivers and far higher mountains to pour down waters, than any part of the old world. **But it is true that the same inundation was not deep; not past forty foot, in most places, from the ground; so that although it destroyed man and beast generally, yet some few wild inhabitants of the wood escaped.**

[ . . . ]

**So as marvel you not at the thin population of America, nor at the rudeness and ignorance of the people; for you must account your inhabitants of America as a young people; younger a thousand years, at the least, than the rest of the world: for that there was so much time between the universal flood and their particular inundation.** For the poor remnant of human seed, which remained in their mountains, peopled the country again slowly, by little and little; and being simple and savage people, (not like Noah and his sons, which was the chief family of the earth;) they were not able to leave letters, arts, and civility to their posterity; and having likewise in their mountainous habitations been used (in respect of the extreme cold of those regions) to clothe themselves with the skins of tigers, bears, and great hairy goats, that they have in those parts; when after they came down into the valley, and found the intolerable heats which are there, and knew no means of lighter apparel, they were forced to begin the custom of going naked, which continueth at this day.

---

(オンライン上より全文確認できるとの原著表記(の現代語訳版)よりの引用はここまでとする)

上のオンライン上より確認できるとの『ニュー・アトランティス』原著テキストに対しての訳文、広くも流通を見ている岩波文庫版(川西進訳)の該当部の訳文は ——原文引用するところとして—— 次のようになっている。

(岩波文庫版『ニュー・アトランティス』p.26からp.27よりの引用をなす)

「ぜひともおわかりいただきたいのは(もしかするとあなた方には到底信じられないかも知れませんが)約三千年、あるいはそれ以上前には、世界の航海は(特に遠洋航海は)今日より盛んだったのです。あなた方のお国で、ここ百二十年ほどの前に、航海が大いに行われるになったことを私どもは知らないわけではありません。それは良く知っておりますが、それでもあの頃の方が今より盛んだったのです。世界大洪水から少数の人々を救った(ノアの)箱舟の例が、海に船出する自信を人類に与えたのかどうかわかりませんが、いずれにせよ事実はそうだったのです。フェニキア人、特にツロ(ティルス)の人たちは大船団を持っていました。カルタゴ人もそうで、彼らはツロよりもさらに西の方に入植した人々です。東方には、エジプト人とパレスチナの船が盛んに出ていました。中国も、大アトランティス(あなた方がアメリカと呼んでおられるところです)も今でこそジャンクとカヌーしかありませんが、当時は大きな帆船を持っていました。

…(中略)…

(岩波文庫版『ニュー・アトランティス』p.28よりの一部引用をなす)

その当時から一世紀かそれ以上にわたって、大アトランティスの住民は栄えていました。あなた方の中の異人の一人(プラトン)は、ネプチューンの子孫がそこに定住したと語り、壮大な神殿、宮殿、街並み、丘陵、(その街と神殿を鎖の輪のように幾重にも囲む)船の通れるほど大きな無数の河による入り組んだ水路、「天の梯子」(「創世記」二八章十二節「ヤコブの階段」参照)のように神殿に向かって登る幾段もの階段のことなどを詩的に、空想を交えて記述していますが、確かなことは、このアトランティスという国は、当時コヤと呼ばれるペルー、ティランベルと名付けられていたメキシコと同じように、軍備、船団、豊かな資産を誇る強大な国だったことです。これらの国々がいかに強大であったかは同時に(あるいは少なくとも十年以内に)二つの大遠征をしていることからわかります。ティランベルは大西洋を横切って地中海へ、コヤは南海(太平洋)を横切って私どもの島へ来たのです。前者、つまりヨーロッパ遠征については、(たぶん)先に述べたあなた方のお国の筆者が、エジプトの神官から聞いた話として、書いておられます(『ティマイオス』二四)。

…(中略)…

(岩波文庫版『ニュー・アトランティス』p.29よりの一部引用をなす)

しかし、これらの傲慢な企てに対する神の復讐がほどなく彼らに下されました。百年も経たぬ内に、大アトランティスは完全に破壊され、消滅しました。例の方(プラトン)は大地震によると言っていますが(その地方一帯はめったに地震の起こるところではありません)、大洪水、大氾濫が原因です。これらの国々は、現在でも、旧世界のどこよりも大きな河と高い山があり、水を押し流すのです。しかしその洪水はあまり深くはなく、たいていの場所で四〇フィート以内の水深で、人にも動物にも広く被害を及ぼしましたが、森に住む僅かな野蛮な住人たちは助かりました。

…(中略)…

(岩波文庫版『ニュー・アトランティス』p.30よりの一部引用をなす)

ですからアメリカの人口の希薄さに驚くことはありません。彼らが粗暴で無知なのも当然です。アメリカの住民は若い、世界の他の地域の住民に比べて、少なくとも一千年は若いということを考慮しなければなりません。(ノアの)大洪水

から彼らだけを襲った洪水までにそれだけの間があったのです。山間部の生き残った人々は、徐々に人口を増やし、全土に広がっていきましたが(全人類の中心となる一族であったノアと彼の息子たちとは違い)単純な野蛮な連中ですから、文字も、技芸も、礼節も、後世に伝えることはできませんでした。

---

(訳書よりの掻い摘まんでの引用部はここまでとする)

以上引用の部、『ニュー・アトランティス』に見る[Fictionとしての創作人類史](といっても教訓を語るためにそれと分かるように創作されての人類史)にまつわる部にあつてベーコンは

[かつてアメリカ大陸が大アトランティスであった]

[アメリカ大陸としての大アトランティスは神罰によるところの洪水によって破滅を見た](これはアトランティスのことを伝えたプラトンの『ティマイオス』の表記が[大地震に次ぐアトランティスの沈没]とあいなっていることを元にしての創作であろうとの部である)

[洪水後のアメリカ大陸では文明の再建に至らず、旧大陸に比して未開の状況に文明水準が留め置かれることになった]

との[設定]を

[ニュー・アトランティス(ペルーから船出した欧州人が漂着した未知の島にて往古より外界と途絶されて存在していたとの島国)にての文明促進組織[ソロモンの家]の役職者の弁になるところ]

として持ち出しているのである。

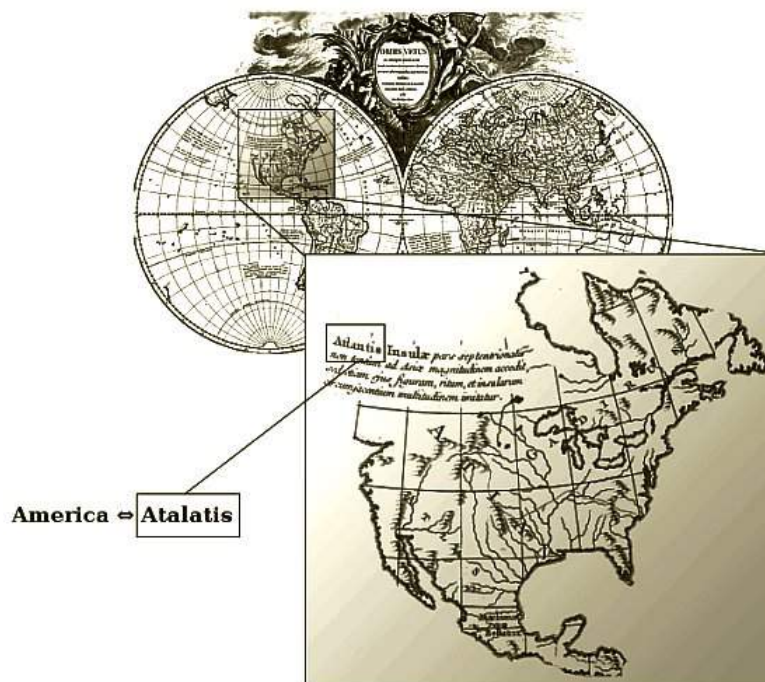
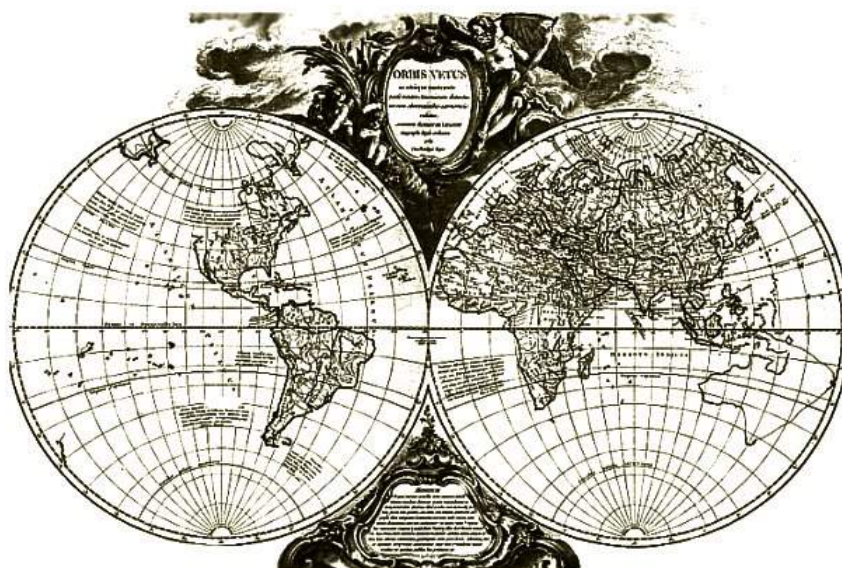
上のようにベーコン著作『ニュー・アトランティス』では先進文明を有しているその他文明世界から隔絶されての架空のニュー・アトランティスの人間(ソロモンの家の構成員)がアメリカをして

[大洪水で一端、破滅の憂き目を見た大アトランティス(グレート・アトランティス)]

であると呼称しているとの記述が見られるわけだが(そして、そのアメリカの住民が文明的に遅れた状況にあるのは洪水の影響冷めやらぬところであるからだとも表記されているわけだが)、といった認識はフランシス・ベーコン以後に作成された欧州人の手になる地図にもよく現われている。

続いて挙げもする図をご覧頂きたい。

## Robert de Vaugondy's map of the world



(上の地図は 18 世紀に活動し声望を博していたとされる地図製作者 Robert de Vaugondy によって作製されたとの世界地図となり、(拡大部をご覧いただければお分かりいただけようが)、アメリカをしてアトランティスとするとの欧州人の認識が反映されているものとなっている)

ここで、何故、以上取り上げたようなベーコン認識や地図制作者やりようが垣間見れるのか、すなわち、「アメリカこそがアトランティスである」との認識が垣間見れるかと述べれば、表層的には、今日にアトランティスありようを伝える古代ギリシャ古典、プラトン『ティマイオス』に見るアトランティス像が(直下、再引用するように)

[アジアとリビアを合算したものよりも大きいヘラクレスの柱(地中海と大西洋を分かっジブラルタル海峡)の先にある陸塊]

とのかたちで[アメリカ大陸のそれを想起させるもの]であったことが大なるところとしてある、そのように自然に解されるようになっている。

(直下、[アトランティスがアメリカ大陸と見なされるだけの古典上の記載が存する]と  
のことを強調すべくものプラトン全集 12(岩波書店刊行)『ティマイオス』収録部 p.22—  
p.23 よりの(出典(Source)紹介の部 36と同じくものを引いての)「再度の」引用を  
なすとして)

---

あの大洋には——あなた方の話によると、あなた方のほうでは「ヘラクレスの  
柱」と呼んでいるらしいが——その入口(ジブラルタル海峡)の前方に、一つ  
の島があったのだ。そして、この島はリビュアとアジアを合わせたよりもなお大  
きなものであったが、そこからその島の他の島々へと当時の航海者は渡ること  
ができたのであり、またその島々から、あの正真正銘の大洋をめぐっている、  
対岸の大陸全土へと渡ることができたのである

---

(再度の引用は以上とする)

(:以上の再引用部についてはオンライン上で容易に確認できる英文テキス  
トとして Project Gutenberg のサイトよりダウンロードできるとの TIMAEUS by  
Plato ( Benjamin Jowett との 19 世紀にあつてのプラトン翻訳家の訳になる  
バージョン)にての “ This power came forth out of the Atlantic Ocean, for in  
those days the Atlantic was navigable; and there was an island situated in  
front of the straits which are by you called the Pillars of Heracles; the island  
was larger than Libya and Asia put together, and was the way to other islands,  
and from these you might pass to the whole of the opposite continent which  
surrounded the true ocean ; ” とのテキストも先に引いていた)

(出典(Source)紹介の部 52)はここまでとする)

---

さて、直近までの段にて、以降指し示していくと申し述べていたところの

「コロンブスが [新大陸] として発見した [アメリカ] こそが [古のアトランティス] である  
と看做す風潮が大航海時代以降の欧州にあった」

「そちらをアトランティスと看做す風潮が欧州人にあつたとのコロンブスが「発見」した  
[アメリカ] にあつてはケツァルコアトル信仰というものがかつて存在しており、同ケツァル  
コアトル信仰が [エデンの蛇の物語] と接続するような要素を多重的に伴っていると示  
せるよう「にも」なっているとのことがある」

との二つのことらのうちの前者(「[アメリカ]こそが[古のアトランティス]であると看做す風潮が大航海時  
代以降の欧州にあった」)についての解説を遺漏無くもなしたつもりだが、次いで、

「そちらをアトランティスと看做す風潮が欧州人にあつたとのコロンブスが「発見」した  
[アメリカ] にあつてはケツァルコアトル信仰というものがかつて存在しており、同ケツァ  
ルコアトル信仰が [エデンの蛇の物語] と接続するような要素を多重的に伴っていると  
示せるよう「にも」なっている」



とのことについてこれより ——多少長くなるが、—— 解説を講じていくこととする。

それにつき、基本的なところとしてアステカ文明というものがどういうもので、そこにて隆盛を見ていたケツアルコアトル崇拝というものがいかようになるものであったかについて「教科書的な」言われようの紹介をなすことから始める。

---

出典 (Source) 紹介の部 53

# SOURCE

## 53



ここ出典 (Source) 紹介の部 53 にあつては極々基本的な教科書的な知識の問題、その程度のものの認識にて「まずもって」和文ウィキペディア [アステカ] 項目より (手前が記述に間違いはないだろうと見ているところより) 抜粋なすことで同文明の概要を紹介することからは始める。

(直下、高等学校学童レベルの話としてそこよりの引用で十分と考えたところとして和文ウィキペディア [アステカ] 項目にての現行記載内容よりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

---

アステカ (Azteca、古典ナワトル語: Aztēcah) とは 1428 年頃から 1521 年まで北米のメキシコ中央部に栄えたメソアメリカ文明の国家。自らをメシーカ (古典ナワトル語: mēxihcah) と称した。言語は古典ナワトル語 (ナワトル語)。  
[建国] 伝説によればアステカ人はアストランの地を出発し、狩猟などを行いながらメキシコ中央高原をさまよっていた。やがてテスココ、アスカポツアルコ、クルワカン、シャルトカン、オトンパンなどの都市国家が存在するメキシコ盆地に辿りつき、テスココ湖湖畔に定住した。1325 (または 1345) 年、石の上に生えたサボテンに鷲がとまっていることを見たメシカ族は、これを町を建設するべき場所を示すものとしてテスココ湖の小島に都市・テノチティランを築いた。その後、一部が分裂して近くの島に姉妹都市・トラテロルコを建設したとされる。  
… (中略) …

[繁栄] 1440年、イツコアトルの後を継いでモクテスマ1世が即位する。モクテスマ1世は遠征を頻繁に行い、メキシコ湾岸の熱帯地方を占領・従属させて勢力を伸ばした(花戦争)。征服した土地に対して貢ぎ物を要求したが統治はせず、自治を許していた。被征服地は度々反乱を起こしたが、武力で鎮圧された。

…(中略)…

[スペインのアステカ帝国征服] アステカにはテスカトリポカ神に追われた白い肌を持つケツァルコアトル神が『一の葦』の年(西暦1519年にあたる)に戻ってくる、という伝説が存在した。帰還したケツァルコアトルが古い世界を破壊して新しい世界を建設すると信じられていた。アステカ人が漠然と将来に不安を感じ始めていたころ、テノチティランの上空に突然大きな火玉が現れ神殿の一部が焼け落ちてしまった。その後も次々と不吉な出来事が起こった。この伝説により、『一の葦』の年の2年前(1517年)から東沿岸に現れるようになったスペイン人は帰還したケツァルコアトル一行ではないかと受けとられ、アステカのスペイン人への対応を迷わせることになった。

…(中略)…

[滅亡] メソアメリカ付近に現れたスペイン人は、繁栄する先住民文化をキューバ総督ディエゴ・ベラスケスに報告した。1519年2月、ベラスケス総督の配下であったコンキスタドールのエルナン・コルテスは無断で16頭の馬と大砲や小銃で武装した500人の部下を率いてユカタン半島沿岸に向け出帆した。

…(中略)…

1519年11月18日、コルテス軍は首都テノチティランへ到着し、モクテスマ2世は抵抗せずに歓待した。コルテス達はモクテスマ2世の父の宮殿に入り6日間を過ごしたが、ベラクルスのスペイン人がメシカ人によって殺害される事件が発生すると、クーデターを起こしてモクテスマ2世を支配下においた。

…(中略)…

その後スペインは金銀財宝を略奪し徹底的にテノチティランを破壊しつくして、遺構の上に植民地ヌエバ・エスパーニャの首都(メキシコシティ)を建設した。多くの人々が旧大陸から伝わった疫病に感染して、そのため地域の人口が激減した(但し、当時の検視記録や医療記録からみて、もともと現地にあった出血熱のような疫病であるとも言われている)。

…(中略)…

その犠牲者は征服前の人口はおよそ1100万人であったと推測されるが、1600年の人口調査では、先住民の人口は100万程度になっていた。スペイン人は暴虐の限りを尽くしたうえに、疫病により免疫のない先住民はあつという間に激減した。

…(中略)…

アステカ社会を語る上で特筆すべきことは人身御供の神事である。人身御供は世界各地で普遍的に存在した儀式であるが、アステカのそれは他と比べて特異であった。メソアメリカでは太陽は消滅するという終末信仰が普及していて、人間の新鮮な心臓を神に奉げることで太陽の消滅を先延ばしすることが可能になると信じられていた。そのため人々は日常的に人身御供を行い生贄になった者の心臓を神に捧げた。また人々は神々に雨乞いや豊穡を祈願する際にも、人身御供の神事を行った。アステカは多くの生贄を必要としたので、生贄を確保するために戦争することもあった。ウィツィロポチトリに捧げられた生贄は、祭壇に据えられた石のテーブルの上に仰向けにされ、神官達が四肢を抑えて黒曜石のナイフで生きたまま胸部を切り裂き、手づかみで動いている

心臓を摘出した。シペ・トテックに捧げられた生贄は、神官達が生きたまま生贄から生皮を剥ぎ取り、数週間纏って踊り狂った。人身御供の神事は目的に応じて様々な形態があり、生贄を火中に放り込む事もあった。

(引用部はここまでとする)

(出典(Source)紹介の部 53 は以上とする)

上に基本的なる解説のされようを引いたように現メキシコ界隈に拠って栄えていた(そしてスペインの侵出によって滅ぼされた)とのアステカで隆盛を見ていたケツアルコアトル信仰がいかなものかだが、(この手のことは衆目につきやすきウィキペディアなどの希釈化されての記述でさえ多くが知れるようになっているのであるも)、については、先アメリカ史(コロンブス到来前、プレ・コロンビアン・イラと海外では呼称される時代)の研究を一意専心とのかたちでなしてきたとの欧米の学者らにどのような定義付けがなされていたかを引くことまでなしたほうがよいか、と判断、そうしたソースよりの引用を以降なししていくこととする。

出典(Source)紹介の部 53(2)

# SOURCE 53(2)



ここ出典(Source)紹介の部 53(2)にあつてはケツアルコアトル神が一体全体、どのような神として信仰

されていたのか、概説紹介をなしているとの著作よりの引用をなしておく。

(直下、Project Gutenberg のサイトにてダウンロードできるとの **AMERICAN HERO-MYTHS. A STUDY IN THE NATIVE RELIGIONS OF THE WESTERN CONTINENT (1882)** ——19 世紀にて声望高かった Daniel Garrison Brinton ダニエル・ガリソン・ブリントンという米国人考古学者の手になるアメリカ史分析書となり、直訳すれば、『アメリカの英雄神話: 西方の大陸、その土着宗教の研究』とのタイトルの書籍——にての The Return of Quetzalcoatl CHAPTER III. THE HERO-GOD OF THE AZTEC TRIBES. §1. The Two Antagonists. のパートよりの原文引用をなすとして)

---

The culture hero of the Aztecs was Quetzalcoatl, and the leading drama, the central myth, in all the extensive and intricate theology of the Nahuatl speaking tribes was his long contest with Tezcatlipoca, "a contest," observes an eminent Mexican antiquary, "**which came to be the main element in the Nahuatl religion and the cause of its modifications, and which materially influenced the destinies of that race from its earliest epochs to the time of its destruction.**"

[...]

Like all the heroes of light, Quetzalcoatl is identified with the East. He is born there, and arrives from there, and hence Las Casas and others speak of him as from Yucatan, or as landing on the shores of the Mexican Gulf from some unknown land. His day of birth was that called Ce Acatl, One Reed, and by this name he is often known. But this sign is that of the East in Aztec symbolism.

[2]

[...]

His name is symbolic, and is capable of several equally fair renderings. The first part of it, quetzalli, means literally a large, handsome green feather, such as were very highly prized by the natives. Hence it came to mean, in an adjective sense, precious, beautiful, beloved, admirable. The bird from which these feathers were obtained was the quetzal-tototl ( tototl, bird ) and is called by ornithologists Trogon splendens.

**The latter part of the name, coatl, has in Aztec three entirely different meanings. It means a guest, also twins, and lastly, as a syncopated form of cohuatl, a serpent.** Metaphorically, cohuatl meant something mysterious, and hence a supernatural being, a god. **Thus Montezuma, when he built a temple in the city of Mexico dedicated to the whole body of divinities, a regular Pantheon, named it Coatecalli, the House of the Serpent.**

(訳として)

「アステカにあっての文化的英雄はケツアルコアトルとなっており、ナワトル語を母語とする(同アステカ文明担い手たる)民族全てにあっての広範囲に渡り、かつ、入り組んだ神話大系にあっての主要なる物語、中心に位置するとの神話は

[ケツアルコアトルとテストポリテカとの長きに渡る対立]

ともなっており、その対立は、衆に優れてのメキシコ古物蒐集家が述べるところ「**ナワ族(ナワトルを母語とする民族)の宗教にての主要素、そして、その修正の因ともなり、その最も初期の物語から破壊の折に至るまでの民族の運命に影響を与えてのものとなっている**」

とのことである。

…(中略)…

陽の側面を体現しての諸々の英雄らに認められるように、ケツアルコアトルは東との方向と紐付けられている存在となる。彼はそこにて生まれ、そこからやっ

て来たとき、同ケツァルコアトルにつきラス・カサス（訳注：スペインのインディオに対する虐殺にまつわる記録を遺したことで有名なスペイン人修道士たる史家 [バルトロメ・デ・ラス・カサス] のこと）や他の人間は [ユカタン半島あるいは未知なる土地からメキシコ湾海岸へやってきた存在] と言及している。彼の降誕の年はセーアカトル (Ce Acatl)、一の葦の年となっており、その絡みで彼ケツァルコアトルはしばしば知られるとのことになっている（訳注：19世紀後半に執筆されたここにての引用元書籍 AMERICAN HERO-MYTHS. A STUDY IN THE NATIVE RELIGIONS OF THE WESTERN CONTINENT にあつてのこの部では [[ケツァルコアトルの帰還の年] とされる [一の葦の年] がスペイン人のエルナン・コルテスの到来期間と期を一にしていたため、現地民がスペイン人侵略者をケツァルコアトルと誤信された] とのことが言及されているのだと解される）。しかし、この [一の葦の年] の象徴はアステカシンボルイズム体系にあつての東方のシンボルでもある。

…(中略)…

彼ケツァルコアトルの名前は象徴的なものであり、等しくも翻訳できるようなものとなっている。Quetzalcoatl にあつての quetzalli の部は地元民にとっても珍重されているとの [大きく見事な緑色の羽毛] を意味する。そのうえでそちら quetzalli は形容詞的意味合いにて [高価な] [美しい] [親愛なる] [賞嘆に値する] との意を有するに至っていた。それら羽毛の産出元としての鳥は quetzal-tototl との鳥となり、鳥類学者によってトロゴン・スプレデス、美しきキヌバエドリと呼ばれている鳥となる。Quetzalcoatl という語の後ろの部 コアトル coatl はアステカ人にとり、三つの意味を有しており、[客人]そして[双子ら]、最後に、cohuatl との語と同義扱いされながらの[蛇]の意である。比喩的な文脈でとらえれば、(蛇を意味する) cohuatl との語は神秘的な何物か、そして、霊的な存在、神との意味の語となっている。このようなところで モンテスマ (訳注：アステカ帝国の統治者) は メキシコ・シティが現在存在する場にて神々全神格に捧げる正規の万神殿(パンテオン)として Coatecalli、[蛇の家] と名付けられた神殿を建立しもしていた

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典 (Source) 紹介の部 53 (2)** は以上とする)

---

直上の部にて19世紀のその方面の権威 —— 19世紀にて声望高かった Daniel Garrison Brinton (ダニエル・ガリソン・ブリントン) という米国人考古学者 —— が自著の中にて述べていることを(プロジェクト・グーテンベルクのサイトより誰でもオンラインで確認できるところを引きながら) 紹介したわけだが、そこにてケツァルコアトルは

[文化的英雄 (the culture hero of the Aztecs) にして民族のありように最初から最後まで影響を与えた存在にして、[羽毛の生えた (quetzalli) 蛇 (cohuatl ないし cohuatl)] との語に分解できる名前を有しもしている存在]

として言及されている。



そうしたケツアルコアトルが

[金星の体現存在]

[文明の授け手]

として崇拝されていた存在となっていること、続いての典拠紹介部にて紹介したい。

---

出典 (Source) 紹介の部 53(3)

# SOURCE

## 53(3)



本段、[出典 \(Source\) 紹介の部 53\(3\)](#)にあつてはケツアルコアトルという神が [金星の体現存在] [文明の授け手] としての特性を帯びていたことの出典を挙げることにする。

まずもって基本的なところから取り上げるとして、オンライン上にて即時即座に確認できるところの英文ウィキペディアには以下のような表記がなされている。

(直下、英文 Wikipedia [Quetzalcoatl] 項目の冒頭部よりしばらく下つての段にての現行記載よりの引用をなすとして)

---

Among the Aztecs, whose beliefs are the best-documented in the historical sources, Quetzalcoatl was related to gods of the wind, of Venus, of the dawn, of merchants and of arts, crafts and knowledge.

[...]

To the Aztecs, Quetzalcoatl was, as his name indicates, a feathered serpent, a flying reptile (much like a dragon), who was a boundary-maker (and

transgressor) between earth and sky. He was a creator deity having contributed essentially to the creation of Mankind. He also had anthropomorphic forms, for example in his aspects as Ehecatl the wind god. Among the Aztecs, the name Quetzalcoatl was also a priestly title, as the two most important priests of the Aztec Templo Mayor were called "Quetzalcoatl Tlamacazqui". In the Aztec ritual calendar, different deities were associated with the cycle-of-year names: Quetzalcoatl was tied to the year Ce Acatl ( One Reed ), which correlates to the year 1519.

(訳として)

「歴史的資料(訳注:侵略者スペインサイドの資料)として極めてよく文書化されている信仰を有していたアステカの民らの中にケツァルコアトルは風・[金星]・夜明け・商業・芸術・技能・知識の神々と関連付けさせられていた。…(中略)…アステカの民らにとってケツァルコアトルの名は[大地と空の境界線を定めた存在(そしてその境界の侵犯者)としてのドラゴン]と評するほうがより適切であろうといった[飛行する爬虫類]としての[羽毛ある蛇]のことを指し示すものとなる。同ケツァルコアトルは人間の創造に根本から関わっているとの創造神とみなされてもいる。また、ケツァルコアトルは風の神 Ehecatl としての側面にて人間の形態を取ることもある。アステカ人の間にケツァルコアトルの名は神職の称号名となり、アステカの神殿にて最も重要な二つの神職位階は Quetzalcoatl Tlamacazqui と呼ばれるものであった。アステカの儀式上の暦では年単位の周期が異なる神々の名前と対応付けられており、ケツァルコアトルは[一の葦の年]と対応付けさせられており、それは 1519 年(訳注:スペインよりの征服者エルナン・コルテスがアステカ皇帝モンテズマと会見した年)と対応している」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上では

[アステカの民らの中にケツァルコアトルは風・[金星]・夜明け・商業・芸術・技能・知識の神々と関連付けさせられている]

とケツァルコアトルが金星の体現存在であることが示されているわけだが、同 Quetzalcoatl が [金星の体現存在] とされていることにつきもう一押しの出典紹介をなしておく。

この手の出典候補としてはオンライン上より堅いところの出典がいくらでも見つかるようになっているのだが、ここではなかんずく手堅いところとして

**The Archaeology of Measurement: Comprehending Heaven, Earth and Time in Ancient Societies, Cambridge University Press, 2010 (2010 年、ケンブリッジ出版会刊行の『単位の考古学:古代社会にての天と地と時間に関する理解』とでも訳せよう書)**

の記述を引いておくこととする。

(直下、The Archaeology of Measurement: Comprehending Heaven, Earth and Time in Ancient Societies にての p.160 の記述を引くとして)

---

The center of the pyramid divides this line at the Sacred Precinct into 416— and 584— molicpitl segments. The latter is the principal Venus cycle count.

This is appropriate because the god Quetzacoatl was associated with Venus as morning and evening star.

(大要訳として)

「(ケツァルコアトルの)ピラミッドの中央部はこの聖なる区域を(特定の規則に基づいての)二区画に分割する。後者は金星のサイクル計算と一致しているとのものとなる。これはケツァルコアトルが「明けの明星」(モーニング・スター)にして「宵の明星」(イブニング・スター)たる金星と関連づけられているとのことによる」

---

(引用部はここまでとする ——尚、表記の原著英文テキストは抜粋の文言でもってグーグル検索エンジンを走らせることで文献的事実であることを、(少なくとも現行にては)、確認可能となっている—— )

上にてケツァルコアトルが

### [金星の体現存在]

として崇拝されていた存在となっていること、典拠紹介なしのわけだが、次いで、同神が文明の授け手であるとされることについても端的な引用をなしておきたい。

(直下、先程の段にてもそこよりの文言を引いたところの著作、Project Gutenberg のサイトにダウンロードできるとの **AMERICAN HERO-MYTHS. A STUDY IN THE NATIVE RELIGIONS OF THE WESTERN CONTINENT** にあつての The Return of Quetzalcoatl CHAPTER III. THE HERO-GOD OF THE AZTEC TRIBES. の部にての §3. Quetzalcoatl, the Hero of Tula.よりの引用をなすとして)

---

But it was not Quetzalcoatl the god, the mysterious creator of the visible world, on whom the thoughts of the Aztec race delighted to dwell, but on Quetzalcoatl, high priest in the glorious city of Tollan (Tula), the teacher of the arts, the wise lawgiver, the virtuous prince, the master builder and the merciful judge.

(訳として)

「ケツァルコアトルはアステカ民族が生きるに喜びを感じていた可視世界、その神秘的なる創造者との位置付けにある神ではないが、同ケツァルコアトルは栄華を誇つてのトゥーラ(訳注:アステカ勃興前にメキシコ境界で栄えたトルテカ文明の都市群)よりの高位の祭司、技芸の教授者、賢明なる法制定者、美德をもつての王子、建築家、慈悲深い審判者との存在であった」

---

(訳を振つての引用部はここまでとしておく —※— )

(※尚、同じくもの点につき、衆目につきやすきところの英文 Wikipedia [Quetzalcoatl] 項目には “ historian David Carrasco has argued that the preeminent function of the feathered serpent deity throughout Mesoamerican history was as the patron deity of the Urban center, a god of culture and civilization. ” 「歴史家の David Carrasco はメソアメリカ史全体にわたつての羽毛ある蛇の役割が都市中枢にての庇護者としての神、文化文明の神としてのものであったことを論じている」と記載されているとのことがある)

これにてケツアルコアトルが

[金星の体現存在]

[文明の授け手]

として崇拝されていた存在となっていたことの指し示しを終える。

さてもってして、ここに至るまでにあって、

---

[ [ヘラクレスの 11 番目の功業に登場する黄金の林檎] が [エデンの園の蛇の誘惑] に関わるとのことからしてブラックホール生成問題と結びつくようになっていたことが — 実にもって問題となる文献的記録らを通じて — 指摘できるようになっている]

---

とのことを証示するための[布石]となる場所であると明示して論じてきたとの、

---

[ヘラクレス 11 番目の功業 — (こちらヘラクレス第 11 功業に登場する[巨人アトラス]および[黄金の林檎]を巡る話がいかようにして LHC 実験と多重的に接合しているかは先に具体的典拠を挙げ連ねながら先立っての段にて詳述に詳述を重ねてきたこととなる) — にあつての[黄金の林檎] (トロイア崩壊の原因たるもの) が聖書『創世記』に見るエデンの蛇による誘惑の物語と接合している]

---

との点について「さらに加えても、」の話をなしており、の流れの中で

「コロンブスが [新大陸] として発見した [アメリカ] こそが [古のアトランティス] であると看做す風潮が大航海時代以降の欧州にあった」

「そちらをアトランティスと看做す風潮が欧州人にあったとのコロンブスが「発見」した [アメリカ] にあつてはケツアルコアトル信仰というものがかつて存在しており、同ケツアルコアトル信仰が [エデンの蛇の物語] と接続するような要素を多重的に伴っていると示せるよう「にも」なっているとのことがある」

とのことらについて典拠紹介なしながらも指し示しをなすとの方向に舵を切った (: 上の各点もが「[黄金の林檎]と[エデン的一幕]の接合がブラックホール人為生成問題に記号論的に相通じている」とのことに関わっているとのことがある — 話柄としては無論、奇態なことながらも現実問題としてそういうことがある — ためにそちら指し示しをなすとの方向に舵を切った)。

そして、直前部までにあつては、うち、

「 [アメリカ] こそが [古のアトランティス] であると看做す風潮が大航海時代以降の欧州にあった」

とのことについて指し示しなし(出典(Source)紹介の部 52)、加えて、

「そちらをアトランティスと看做す風潮が欧州人にあったとのコロンブスが「発見」した  
[アメリカ] にはケツアルコアトル信仰というものがかつて存在しており、同ケツア  
ルコアトル信仰が [エデンの蛇の物語] と接続するような要素を多重的に伴っていると  
示せるよう「にも」なっていると述べている」

このことについてケツアルコアトル(アステカ文明で崇められていた主要神格)の [蛇神としての側面]  
[金星の体現存在としての側面] [文明の接受者としての側面] についての指し示しをなすことま  
でなした(出典(Source)紹介の部 53(2)および出典(Source)紹介の部 53(3))。

ここ本頁では以上、振り返りもしての直前頁の流れの延長線上として[ケツアルコアトルとエデンの蛇  
の接合性]について煮詰めるべくもの話をなしていくこととする。

かつて中部アメリカ、現在のメキシコ境界に拠って栄えたアステカ文明の担い手であったナワ族に民  
族の運命が重ね合わせて見られていたとのケツアルコアトルという神については

[同神を崇拝していた地域の住民(アステカ帝国住民)の期待を裏切ることになったが  
如く神]

でもあることについて指し示すことにする。直下、出典紹介部を参照されたい。

---

出典(Source)紹介の部 53(4)

# SOURCE 53(4)



ここ出典(Source)紹介の部 53(4)には

「ケツアルコアトルという神が同神を崇拝していた民族を裏切るが如く結果を現出した存在であ  
る」

このことの典拠を挙げることにする。

先に、



**AMERICAN HERO-MYTHS. A STUDY IN THE NATIVE RELIGIONS OF THE WESTERN CONTINENT** (19 世紀にて声望高かった Daniel Garrison Brinton という米国人考古学者の手になるアメリカ史分析書となり、現行、Project Gutenberg にてダウンロード出来る 1882 年初出の著作)

の内容を紹介した **出典(Source) 紹介の部 53(2)** の部にて、(上著作より引用なししていたところとして)、

“ He is born there, and arrives from there, and hence Las Casas and others speak of him as from Yucatan, or as landing on the shores of the Mexican Gulf from some unknown land. His day of birth was that called Ce Acatl, One Reed, and by this name he is often known.”

「ケツァルコアトルにつきラス・カサス(訳注:スペインのインディオに対する虐殺にまつわる記録を遺したことでも有名なスペイン人修道士たる史家[バルトロメ・デ・ラス・カサス]のこと)や他の人間は[ユカタン半島あるいは未知なる土地からメキシコ湾海岸へやってきた存在]と言及している。ケツァルコアトルの降誕の年はセーアカトル(Ce Acatl)、一の葦の年となっており、その絡みで彼はしばしば知られるとのことになっている」

との記述が含まれていることは既に紹介していたところとなる(疑わしきは本稿のそちら出典番号のパートを見直していただきたい)。

そのようにケツァルコアトル降誕が

[一の葦の年](One Reed)

と結びつけられていることがケツァルコアトルがその崇拝をなしていた文明の担い手らを裏切ったの結果を現出したこととつながっている。

それについては下の和文ウィキペディアの記述よりも多くのことを理解させるようになっている。

(直下、和文ウィキペディア [アステカ] にて現行記載されている通史としてのアステカ侵略の顛末にまつわる記述の引用をなすとして)

---

アステカにはテスカトリポカ神に追われた白い肌を持つケツァルコアトル神が『一の葦』の年(西暦 1519 年にあたる)に戻ってくる、という伝説が存在した。帰還したケツァルコアトルが古い世界を破壊して新しい世界を建設すると信じられていた。…(中略)…この伝説により、『一の葦』の年の 2 年前(1517 年)から東沿岸に現れるようになったスペイン人は帰還したケツァルコアトル一行ではないかと受けとられ、アステカのスペイン人への対応を迷わせることになった。…(中略)…メソアメリカ付近に現れたスペイン人は、繁栄する先住民文化をキューバ総督ディエゴ・ベラスケスに報告した。1519 年 2 月、ベラスケス総督の配下であったコンキスタドールのエルナン・コルテスは無断で 16 頭の馬と大砲や小銃で武装した 500 人の部下を率いてユカタン半島沿岸に向け出帆した。…(中略)…1519 年 11 月 18 日、コルテス軍は首都テノチティランへ到着し、モクテスマ 2 世は抵抗せずに歓待した。…(中略)…1521 年 4 月 28 日、トラスカラで軍を立て直し、さらなる先住民同盟者を集結させたコルテスはテテスコ湖畔に 13 隻のベルガンティン船を用意し、数万の同盟軍とともにテノチティランを包囲した(テノチティラン包囲戦)。1521 年 8 月 13 日、コルテスは病死したクイトラワク国王に代わって即位していたクアウテモク王を捕らえアステカを滅ぼした。…(中略)…その後スペインは金銀財宝を略奪し徹底的にテノチティランを破壊しつくして、遺構の上に植民地ヌエバ・エスパーニャ

の首都(メキシコシティ)を建設した。多くの人々が旧大陸から伝わった疫病に感染して、そのため地域の人口が激減した。…(中略)…その犠牲者は征服前の人口はおよそ 1100 万人であったと推測されるが、1600 年の人口調査では、先住民の人口は 100 万程度になっていた。スペイン人は暴虐の限りを尽くしたうえに、疫病により免疫のない先住民はあっという間に激減した。

---

(引用部はここまでとする)

(直下、和文ウィキペディア [ケツァルコアトル] 項目にての [概要] の部よりの引用をなすとして)

---

その名は古代ナワトル語で「羽毛ある蛇」(ケツァルが鳥の名前、コアトルが蛇の意)を意味し、宗教画などでもしばしばその様な姿で描かれる。また、白い顔の男性とも考えられている。ケツァルコアトルは「セーアカトル(一の葦の年)に復活する」と宣言してアステカを立ち去ったといわれており、16 世紀初頭にコンキスタドールが侵略してきた際、コルテスがメキシコに来た 1519 年が偶然にも「一の葦の年」と一致したため、アステカ人達は、白人である彼らをケツァルコアトルの再来かと錯覚し、対応を遅らせたとも言われている。

---

(引用部はここまでとする)

(※注記：英文 Wikipedia [Hernán Cortés] 項目には  
“Moctezuma gave lavish gifts of gold to the Spaniards which, rather than placating them, excited their ambitions for plunder. In his letters to King Charles, Cortés claimed to have learned at this point that he was considered by the Aztecs to be either an emissary of the feathered serpent god Quetzalcoatl or Quetzalcoatl himself — a belief which has been contested by a few modern historians.”

「皇帝モンテスマはスペイン人らを懐柔するというよりむしろ[有り余るほど]の黄金の贈与をなし、スペイン人の略奪への野心に油を注ぐとのことをなした。カルロス王への手紙の中でコルテスはそこから自分が羽毛ある蛇よりの神使ないし羽毛ある蛇それ自身とアステカ人に考えられているようであるとのことを述べており、モンテスマの所信の信憑性については極少数の歴史家にのみによって疑義呈されてきた(ほとんどの歴史家はコルテスの確信をその通りのものであるととらえていた)」

と記載されており、

[1519 年(既述の[一の葦の年])にアステカに軍兵伴ってやってきたとのスペイン・サイド征服者たるエルナン・コルテス]

が

[ケツァルコアトル、ないし、そのゆかりの者]

と看做され、それが征服を容易ならしめたのは事実であると過半の歴史家 — 全部ではない — に認知されているように記載されている。

ただし、同じくもの Wikipedia 上の記述にての出典として紹介されている **Seven Myths of the Spanish Conquest** という著作の著者であるその方面を専門とする歴史家 Matthew Restall は「コンキスタドレス(新大陸征服者)の代表的人物の一人であったコルテスが羽毛の生えた蛇と同一視されて征服が容易になったということ自体がスペインによるアステカ征服の後、間もなくしてより広がりだした伝説染みたまものである」との申しようをなしてもおり、については英文

Wikipedia [Quetzalcoatl] 項目の [ Belief in Cortes as Quetzalcoatl ] ([ケツアルコアトルとしてのコルテスにまつわる信心]) との節にて

“ Historian Matthew Restall concludes that: The legend of the returning lords, originated during the Spanish-Mexica war in Cortés' reworking of Moctezuma's welcome speech, had by the 1550's merged with the Cortes-as-Quetzalcoatl legend that the Franciscans had started spreading in the 1530's.”

「スペイン・メキシコ戦争の渦中の折に由来する [帰還した主ケツアルコアトル] にまつわる伝説は [コルテスがモンテスマ演説への改訂をなしたもの] が 1550 年代までに [フランチェスコ会士が 1530 年代に広めだしたケツアルコアトルとしてのコルテス伝説] と結合呈してのものであると歴史家 Matthew Restall (マシュー・レストール) は結論付けている」

との表記がなされてもいるところである。

といった学者由来の主張が如何ほどまでの信憑性を有していようと、

「一つ確実に述べられることがある」。

それはスペインサイドのコンキスタドール(侵略者)たるコルテスがケツアルコアトルと同一物と看做されたとの歴史的な理解が幅広く存在していることそれ自体は事実であり、その[事実]として存在している歴史的な理解 —— 中身の信憑性はともかくもそういう見方が歴年呈されてきたことまでは事実であるとの理解 —— に由来するところとして、

「アステカはケツアルコアトルの帰還信仰への妄信のために滅びを加速させられた、ケツアルコアトルに裏切られたようなかたちで滅ぼされた文明であるとの申しようが歴史的になされてきた」

とのことである —— [アステカ皇帝モンテスマらがコルテスを神と信じていた]

[それがゆえにアステカへの侵略が容易に成就された] とのことについての初期の言及は早くも 16 世紀に成立していたスペイン側の記録、フランシスコ会修士ベルナルディーノ・サアグンが編纂主導して成立した Florentine Codex 『フィレンツェ絵文書』より同文の記述がみとめられる(とされる)。また、モーリス・コリス著『コルテス征略誌』(講談社学術文庫)にてもコルテスへの神格化が征服者サイド記録にて記されていることがうかがい知れるようになっている) —— )

以上、スペインのコンキスタドール(征服者)のコルテスを[一の葦の年(1519)に帰還したケツアルコアトル]と誤信して歓迎したと伝わっている皇帝(モンテスマ2世)を為政者として戴いていたとのアステカ帝国(血なまぐさい生贄の儀を恒常的に行っていたとの式で欧米圏よりはるその愚劣さ・醜悪さが永年、取り沙汰されてきたとの政体)のその末路が

「戦乱続いての疫病(旧大陸より持ち込まれた Smallpox こと天然痘のことである)にて人口が 10 分の 1 になる破滅を見た」

とのものであるとされていることについての典拠紹介をなした。

同じくものことよりケツアルコアトルは

[同神を崇拝していた地域の住民の期待を裏切ることになったとの神]

になっていると申し述べるのである。

**[出典(Source)紹介の部 53(4)は以上とする]**

ここまでにて[アトランティス]と歴年定置されもしてきたとのアメリカにあってスペイン人の征服がなされるまで崇拝されていたケツァルコアトルという神が

[羽毛を持った蛇との語感の名前の神] (出典(Source) 紹介の部 53(2))

[金星の体現存在] (出典(Source) 紹介の部 53(3))

[文明の恩人] (同出典(Source) 紹介の部 53(3))

[同神を崇拝していた地域の住民の期待を裏切ることになったとの神] (出典(Source) 紹介の部 53(4))

となっていることについての解説をなしてきた。

対して、エデンの園にて誘惑をなした存在も同文に、

[蛇であるという存在]

[(エデンの誘惑者をサタン・ルシファーであると見た場合に) 金星と結びつく存在]

[ある種の文明の促進者とでもいうべき存在]

[エデンの住人および「その子孫」の期待を裏切ることになった存在]

となつてもいる。

表記のことについて順次出典を挙げていく。

まず、

[エデンの誘惑をなしたのが蛇である]

[エデンの蛇はある種の文明の促進者とでもいうべき存在である]

このことについての聖書記述を下に引いておく(あまりにも常識的なことであるのでいちいちもって引用なすのもナンセンスか、とは思ったのであるが、バイブルというものに何が書かれているのか、そのあらためての確認整理をなしておくのも有意かとの認識で聖書記述を引いておく)。

---

出典(Source) 紹介の部 54

# SOURCE

## 54



ここ出典(Source)紹介の部 54 にあってはエデンの誘惑者としての蛇のありよう(ある種、文明の促進者となっているとのありよう)にまつわる典拠紹介をなしておく。

(直下、オンライン上にて PDF 文書版を誰でも全文ダウンロードできるとの日本聖書協会『旧約聖書』創世記第 2 章 16 節－17 節よりの原文引用をなすとして)

---

主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」

---

(引用部はここまでとしておく)

(直下、オンライン上にて PDF 文書版を誰でも全文ダウンロードできるとの日本聖書協会『旧約聖書』創世記第 3 章 1 節－7 節よりの原文引用をなすとして)

---

さて主なる神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾であった。へびは女に言った。「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」。女はへびに言った。「わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」。へびは女に言った。「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」。女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を取って食べ、また共にいた夫にも与えたので、彼も食べた。すると、ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた」

---

(引用部はここまでとしておく)

(直下、オンライン上にて PDF 文書版を誰でも全文ダウンロードできるとの日本聖書協会『旧約聖書』創世記第 3 章 22－24 節よりの原文引用をなすとして)

---

主なる神は言われた、「見よ、人はわれわれのひとりようになり、善悪を知るものとなった。彼は手を伸べ、命の木からも取って食べ、永久に生きるかも知れない」。そこで主なる神は彼をエデンの園から追い出して、人が造られたその土を耕させられた。神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎを置いて、命の木の道を守らせた

---

(引用部はここまでとしておく)

(出典(Source)紹介の部 54 はここまでとする)



以上のようにユダヤ教・キリスト教(そして見よう見方によってはユダヤ教徒・キリスト教徒を經典の民と重んじるイスラム教)ら中近東由来の一神教の崇拜者らが[(字義通りの)不磨の大典]として重要視する旧約聖書ではその冒頭部(オンライン上より誰でも聖書の全文和訳文も確認できるなかでの『創世記』のパート)にて

[アダムとイヴが賢くなり善悪を知ることになる知恵の樹の実を[蛇]に食すことを唆されて結果的に樂園追放の憂き目を見た]

とことが記載されているわけである。

といった樂園追放の筋立てはある意味、

[知恵の接受] (引き延ばして見れば [文明の接受])

とワンセットのものであるとも述べられる(アダムとイヴは知恵の樹の実を食したことによって(上にての聖書よりの原文引用部に見るように)「裸であることを恥じる」ようになったのであり、結果、衣服を伴っての文明の階梯を上がりだした比喩的形容であるとも述べられる)。

そのように [知恵の接受] および [樂園追放] を同時にもたらした [エデンの誘惑者] については一ユダヤ教の聖典たる旧約聖書それそのものにあつてはエデンの蛇をしてサタンと強くも規定する文言がみとめられないわけであるものの一

[サタン] ( [叛乱の元・天使長] など後に宗教の徒らに[設定]付けられての別名は [ルシファー])

であるとの解釈がキリスト教圏では歴年なされてきたとことがある。その点については欧米にてキリスト教文学の金字塔として極めて重要視されている 17 世紀英国の文豪ジョン・ミルトンの手になる『失樂園』よりの一部引用をなしておくこととする。

---

出典 (Source) 紹介の部 54(2)

# SOURCE

## 54(2)



[著名古典にてエデンの誘惑者がサタンとしていかに表記されているのか]

についての例示をなしておく。

(直下、[蛇に変わっての林檎による誘惑]を奏功させたサタンことルシファーが地獄に落とされた墮天使仲間(ルシファーと共に神に叛乱を企てたとの設定の元・天使達)の元に舞い戻って演説をなし、その後どうなったと描写されるのか、その顛末にまつわる記述を『失樂園』より [中略なしながらも「引用」として適切な量と判断した文量]にて抜粋なすとして — 引用元は岩波文庫版『失樂園』(平井正穂訳)にての原著第10巻の部を納めたパート (P. 182 から p. 187)とする—— )

そこでわたしは陰謀をめぐらしてその人間を誘惑し、創造主(つくりぬし)から引き離してやった。——しかも、驚くことなかれ、そのために用いたのは、僅か、一個の林檎にすぎなかったのだ！そして、笑うことなかれ、それを怒った創造主(つくりぬし)、自分の愛する人間とそのすべての世界を悉く『罪』と『死』の餌食として、われわれの餌食として、抛(ほう)り出してしまったのだ！…(中略)…いかにも神はわたしをも裁いた、というより、わたしのかわりに、わたしが人間を騙した際に姿を借りたあの動物、つまり蛇だ、あれを裁いたというわけだ。

…(中略)…

そう言ったあと、恐らく自分の耳を聳(ろう)するばかりの講堂の喝采と称賛の聲が忽(たちま)ちあがるものと思ひ、期待に胸をふくらませ、暫時佇立(ちよりつ)していた。ところが意外にも、四方八方から彼の耳を襲ってきたものは、無数の舌、舌、舌から漏れてくる不気味なしゅっしゅっという声であった!どうしたことか、と異様に驚いたが、次の瞬間、こんどは自分自身の異様の変化にさらに驚いた。

…(中略)…

そこには腹這いになったまま必死に、だが空しく、もがいている一匹の巨大な蛇の姿があった。より大なる力が今彼を圧倒し、裁きに従って、彼が罪を犯した当時の姿にその姿を変えて、彼が罪を罰したのだ。

…(中略)…

彼の大胆不敵な叛乱の共犯者として、誰も彼も同じように蛇に姿を変えられてしまっていた。大広間のあちらこちらから発せられるしゅっしゅっという声は、凄絶な響きをあげていた。あらゆる所で、頭と尾が絡み合った怪物の群れがのたうちまわっていた。蠍(さそり)や毒蛇や恐ろしい両頭蛇(アンピスバイナ)や角蛇(ケラスケス)や水蛇(ヒドロス)や海蛇(エロツプス)や飢渴蛇(アムビバ)がそこにいた(ゴルゴンの血が滴り落ちた例の土地でも、蛇島(オフユーザ)でも、これほど多数の蛇が蝟集し蠢いたことはかつてなかった)。しかし、やはりなんといつても、その中で最も巨大だったのは、今や巨竜(ドラゴン)に変わっていたサタンであった。彼は、かつて太陽の熱によってピュートの谷間の泥の内に生じた、あの巨大な錦蛇(ピュトン)よりも、さらに巨大であった。大きさの点に劣らず、力もまた依然として儕輩(せいはい)を凌(しの)ぐものを保持している様子であった。

…(中略)…

警備のために、或(あるい)は閱兵をうけんものと、意気軒昂として整列し自分たちの栄ある首領が颯爽として出てくるのを、この目で見ようと息をのんで待っていた。やがて彼らは見た、——だが全く意外な光景であった!それはぞろぞ

ろと這いながら出てくる醜悪な蛇の大群だったのだ。

…(中略)…

同じように次々に彼らに感染していった。

…(中略)…

この彼らの変身と時を同じくして、突如としてすぐ近くの地中から森が一つ姿を現していた。これこそ彼らに対する懲罰をいっそう厳しくしようとする神の御意志(みむね)から出たものであった。そこには美しい果実が、あの誘惑者サタンがイーヴを惑わす際に好餌(こうじ)として用いた、楽園(パラダイス)の例の果実そっくりの美しい果実が、たわわに実っていた。この異様な光景を見て、こんな風にあの一本の禁断の樹のかわりに夥(おびただ)しい禁断の樹が生じたのは、もしかしたら自分たちをいっそう苦しめ辱めるためかもしれぬ、と想いながら、彼らはまじまじとそれを凝視していた。だが、焼けつくような渴きと激しい飢えとに苛まれ、この果物が自分達を欺くために送られたかもしれぬとは思いつつも、どうにも我慢出来なくなり、続々と這い上がり樹によじ登った。

…(中略)…

何度も何度も食べようとした。そのつど吐気を覚え、どうにも我慢できぬ味の悪さに辟易して、口じゅう煤と灰だらけになったその顎(あぎと)を歪めるだけであった。こんな風にして彼らは何度も同じ迷妄に陥った。そこが、彼らに征服されて一度だけ過ちを犯した人間とは違うところであった。

…(中略)…

やがて神に許されて …(中略)… 或る日数に限ってこのような恥ずべき蛇の姿に身を窶(やつ)すことを彼らに命じ給うたという。

---

(訳書よりの引用はここまでとする 一※一)

(※1 本稿にての **出典(Source) 紹介の部 50** では[エデンの知恵の樹の実]がその実、林檎であるとの解釈が根強くもともと紹介したが、上にての『失楽園』の記述はそのことを傍証するものである。表記の岩波文庫版『失楽園』(平井正穂訳)よりの引用部に認められるようにエデンの誘惑者と名指して描写されているサタンが“そこでわたしは陰謀をめぐらしてその人間を誘惑し、創造主(つくりぬし)から引き離してやった。——しかも、驚くことなかれ、そのために用いたのは、僅か、一個の林檎にすぎなかったのだ”と述べている姿が描かれるからである)

(※表記の部の英文テキストも (Internet Archive のサイトおよび Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロードできるとの)ミルトン原著 PARADISE LOST より抜粋しておくこととする(疑わしきにおかれてはオンライン上より [文献的事実]の問題を確認いただきたいとの趣旨にて、である)。それでは以下、原著テキスト(にての BOOK X.の部)より抜粋をなす→ “Made happy. Him by fraud I have seduced / **From his Creator; and, the more to increase / Your wonder, with an apple. He, thereat / Offended worth your laughter hath given up / Both his beloved Man and all this world, / To Sin and Death a prey, and so to us, / [ . . . ] / True is, me also he hath judged, or rather / Me not, but the brute serpent, in whose shape / Man I deceived. / [ . . . ] / So having said, awhile he stood, expecting / Their universal shout, and high applause, / To fill his ear; when, contrary, he hears, / On all sides, from innumerable tongues, / A dismal universal hiss, the sound / Of public scorn. He wondered, but not long / Had leisure, wondering at himself now more. / His visage drawn he felt to sharp and spare, / His arms clung to his**

ribs, his legs entwining / Each other, till, supplanted, down he fell / A  
monstrous serpent, on his belly prone, / Reluctant, but in vain ; a greater  
Power / Now ruled him, punished in the shape he sinned, / [ . . . ] / Alike, to  
 serpents all, as accessories / To his bold riot. Dreadful was the din / Of hissing  
 through the hall, thick-swarmed now / With complicated monsters, head and  
 tail, / Scorpion, and Asp, and Amphisbaena dire, / Cerastes horned, Hydrus,  
 and Ellops drear, / And Dipsas not so thick swarmed once the soil / Bedropt  
 with blood of Gorgon, or the isle / Ophiusa — but still greatest he the midst, /  
Now Dragon grown, larger than whom the sun / Engendered in the Pythian  
vale on slime, / Huge Python, and his power no less he seemed / [ . . . ] /  
 Sublime with expectation when to see / In triumph issuing forth their glorious  
 chief. / They saw, but other sight instead — a crowd / Of ugly serpents!  
 Horror on them fell, / And horrid sympathy for, what they saw, / They felt  
 themselves now changing. / [ . . . ] / Cast on themselves from their own  
 mouths. / There stood / A grove hard by, sprung up with this their change, /  
His will who reigns above, to aggravate / Their penance, laden with fair fruit,  
like that / Which grew in Paradise, the bait of Eve / Used by the tempter. On  
 that prospect strange / Their earnest eyes they fixed, imagining / For one  
 forbidden tree a multitude / Now risen, to work them further woe or shame. /  
 Yet, parched with scalding thirst and hunger fierce, / Though to delude them  
 sent, could not abstain ; / But on they rolled in heaps, and up the trees /  
 Climbing, sat thicker than the snaky locks / [ . . . ] / Their appetite with gust,  
 instead of fruit / Chewed bitter ashes, which the offended taste / With  
 spattering noise rejected. Oft they assayed, / Hunger and thirst constraining;  
 drugged as oft, / With hatefulest disrelish writhed their jaws, / With soot and  
 cinders filled; so oft they fell / Into the same illusion, not as Man / Whom they  
 triumphed once lapsed. [ . . . ] / Thus were they plagued, / And worn with  
 famine, long and ceaseless hiss, / Till their lost shape, permitted, they  
 resumed, / Yearly enjoined, some say, to undergo / This annual humbling,  
 certain numbered days, / To dash their pride, and joy for man seduced.” (オ  
 ンライン上より確認可能な原著よりの引用部はここまでとする/ちなみに『失  
 樂園』は叙事詩形態の著作として頻繁に改行がなされている作品ともなるわ  
 けだが、そちら改行部についてはスラッシュで表した) )

(出典(Source)紹介の部 54(2)はここまでとする)

ここまでにエデンの誘惑者が

[蛇である存在(サタンと看做されてきた存在)となっていること]

[文明の接受と同文のことを(樂園追放とワンセットとなったところとして)なした存在]

となっていることを述べたが、次いで、同存在(エデンの誘惑者)が、

[ときに金星の体現存在であるとされていること]

[(期待を裏切った)破滅をもたらした存在であるとされること]

との要素の摘示もなしておく。

エデンの誘惑者と同質同一の存在と見られてきたとのサタンについては [ルシファー] との別名が存



在しており、そのルシファーとの語句が「金星」と淵源上、結びついていることを(出典(Source)紹介の部 49)にても言及したことをさらに煮詰めて)下に解説する。

出典(Source)紹介の部 54(3)

# SOURCE

## 54(3)



ここ出典(Source)紹介の部 54(3)にあつては

[エデンの誘惑者が(天体の)金星と結びついている]

とのことについて(先掲の出典(Source)紹介の部 49から一歩進んでの)出典紹介をなしておくこととする。

まずは基本的なところからはじめる。

(直下、英文ウィキペディアの「Lucifer」項目にての一部記述より端的にもの引用をなすとして —この部は出典(Source)紹介の部 49と重複するところともなる— )

Later Christian tradition came to use the Latin word for "morning star", lucifer, as a proper name ("Lucifer") for Satan as he was before his fall. As a result, "Lucifer has become a by-word for Satan in the Church and in popular literature", as in Dante Alighieri's Inferno and John Milton's Paradise Lost.

「キリスト教伝統的解釈は[ラテン語にて明けの明星を指すものとして用いられていた Lucifer という語]をして[地に落ちる前のサタンを指すもの]として用いるようになっていた。結果、ルシファーという言葉が教会およびダンテ・アリギエーリの『地獄篇』やジョン・ミルトンの『失樂園』のような著名古典にてサタンの別称として用いられてきた」

(引用部はここまでとする)



(直下、和文ウィキペディア [ルシファー] 項目にあつての [人文学研究によるルシファーの来歴] の部よりの引用をなすとして)

---

Lucifer はもともと、ラテン語で「光を帯びたもの」「光を掲げるもの」(lux 光 + fer 帯びている、生ずる)、「光をもたらす者」(lux 光 + fero 運ぶ)を意味する語であり、当初は悪魔や墮天使を指す固有名詞ではなかった。ラテン語としてのルキフェルが見出されるのは、ウルガータ聖書の以下の箇所においてである。「黎明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。」—旧約聖書「イザヤ書」14: 12— ここでの明けの明星は或るバビロニアの専制君主のことを指し、輝く者を意味するヘブライ語の「ヘレル」が明けの明星 lucifer と訳されている。

---

(引用部はここまでとする)

ここより多少込み入つての解説のされようを引いておく。

(直下、Project Gutenberg のサイトにて全文公開されているとのブリタニカ百科事典第 11 版、Encyclopaedia Britannica, 11th Edition, Volume XVII, Slice 1 の LUCIFER にまつわる項目より引用をなすとして)

---

LUCIFER (the Latinized form of Gr. φωσφόρος, “light-bearer”), the name given to the “morning star,” i.e. the planet Venus when it appears above the E. horizon before sunrise, and sometimes also to the “evening star,” i.e. the same planet in the W. sky after sundown, more usually called Hesperus (q.v.). The term “day star” (so rendered in the Revised Version) was used poetically by Isaiah for the king of Babylon: “How art thou fallen from heaven, O Lucifer, son of the morning! how art thou cut down to the ground, which didst weaken the nations” (Is. xiv. 12, Authorized Version). The words ascribed to Christ in Luke x. 18: “I beheld Satan as lightning fall from heaven” (cf. Rev. ix. 1), were interpreted by the Christian Fathers as referring to the passage in Isaiah; whence, in Christian theology, Lucifer came to be regarded as the name of Satan before his fall. This idea finds its most magnificent literary expression in Milton’s Paradise Lost. In this sense the name is most commonly associated with the familiar phrase “as proud as Lucifer.”

(日本語表現に適合するように訳なしての拙訳として)

「LUCIFER とは

[φωσφόρος, [光を運ぶ者]との意のギリシャ語のラテン語表記]

となり、[明けの明星](モーニング・スター)、すなわち、

[日の出前に東の地平線の上に現われるとの金星]

に与えられての呼称、あるいは、しばしばもって、同様に金星、日没前に西の空に現われるとの[宵の明星](こちらは通例、ヘスペラスと呼ばれるところのもの「とも」なる)に与えられての呼称となっているとの語である。

同語、[デイ・スター](明けの明星)はバビロンの王によるやりようにまつわるところで(改訂訳版聖書に収録のその部にて記述されているように)旧約聖書イザヤ書にて

O Lucifer, son of the morning! how art thou cut down to the ground, which didst weaken the nations「黎明の子、明けの明星(Lucifer)よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは地に倒れてしまった」

と述べられているようなところの存在となり(オーサライズド・バージョン＝欽定訳聖書イザヤ書 14 章 12 節)、そうした書かれようと[ルカによる福音書]第 10 章 18 節にあってのキリストによる言葉、

I beheld Satan as lightning fall from heaven「彼らに言われた、「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た」」

との文言(そちらについては Rev. ix. 1 すなわち、レベレーション

(Apocalypse)『黙示録』第 9 章第 1 節をも参照のこと)との兼ね合いでキリスト教教父らに解釈されてきたところ、そして、キリスト教神学で解されてきたところとして、(同じくものルシファーという語は)

[墮天の前にあってのサタンの名称]

へとなったものでもある。

この観点はミルトンの『失樂園』にて最も壮麗なる文学的表現を見ているところのものとなり、そこより同語(ルシファー)はよく知られたフレーズ、“as proud as Lucifer.”「ルシファーよろしく高慢な」とのフレーズと巷間にて最もそうもなされているところとして関連づけられるようになったものものである」

---

(補いもしての訳を付しての引用部はここまでとする —※— )

(※尚、原文にて言及されている旧約聖書(『イザヤ書』)と新約聖書(『ルカによる福音書』)の日本語訳の部だけは日本聖書協会による 1954 年改訂版日本語聖書(オンライン上にて PDF 版が広くも流通しているとの日本語訳聖書)の文言をそのまま利用することとしたこと、断っておく。また、ここにて引用元としたとの第 11 版ブリタニカ百科事典であるが、その通用性が極めて高いものともなり、(以下、現行にての和文ウィキペディア[ブリタニカ百科事典第 11 版]項目の記載を掻い摘まんで原文引用するところとして)[ブリタニカ百科事典第 11 版は、1910 年から 1911 年にかけて発行されたブリタニカ百科事典の 11 番目の版で、全 29 巻からなる 20 世紀初頭の知識の集大成である。製作には当時の著名な研究者や、後に有名になる執筆者が多数参加している。また、この版は現在、米国で著作権の保護期間を経過しパブリックドメインになっている](引用部はここまでとする)のものとなっている)

上にて主だつてのところから引用なししているところに見るように[ルシファー]の名([光を運ぶ者]とのラテン語とも結びつく名)を冠する存在はサタンと同文の存在にして

[金星を体現しての存在]

であるとされているのだが(それについては本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 49](#) にも Project Gutenberg にて誰でもダウンロードできるとの ASTRONOMICAL LORE IN CHAUCER (1919)『チョーサー(カンタベリー物語の作者の 14 世紀詩人ジェフリー・チョーサー)に見る天文知識』より原文引用をなすのかたちにて “all the planets, that most often mentioned by Chaucer is Venus, partly, no doubt, because of her greater brilliance, but probably in the main because of her greater astrological importance; for few of Chaucer’s references to Venus, or to any other planet, indeed, are without astrological significance. Chaucer refers to Venus, in the classical manner, as Hesperus when she appears as evening star and as Lucifer when she is seen as the morning star” (訳として)「チョーサーに言及されている全ての天体の中で最も多く言及されているのは疑いもなくビーナス(金星)であるとのことになっており、については、金星の輝度の高さ、しかし、主たるところではその天文学における重要性による(と解される)。チョーサーのヴィーナス(金星)への言及、そして、他の天体への言及のどれをとっても本然的に天体に重きを置いてのことなくして成り立つようなものではない。チョーサーがヴィーナス(金星)に言及するとき、そのやりようは古典的なところに従っており、金星が[宵の明星](イブニング・

スター)として現われての折については「ヘスペロス Hesperus]として金星につき言及し、「明けの明星」(モーニング・スター)として金星が認められるときには「ルシファー Lucifer]と言及している」との記述を引いていたとのところでもある)、そのようなルシファーをサタンとはきと明言しての古典がダンテ『地獄篇』となり、また、ミルトン『失樂園』となっているとの記載が上にて引用なしている英文 Wikipedia [Lucifer] 項目にての現行記載部などにて見受けられるわけである。

では具体的に Milton『失樂園』でいかようにルシファーとの名称がサタンのそれとして現われているのか。それについて指し示すべくもの記述をここでは引いておくこととする。

(直下、Internet Archive より誰でも全文ダウンロード出来るとの William Walsh という人物の手になる編集が加えられての近代刊行版 PARADISE LOST、その BOOK X.424-426 より 端的な原文引用をなすとして)

---

Of Pandemonium, city and proud seat

Of Lucifer, so by allusion called

Of that bright star to Satan paragoned

「パンデモニウム(地獄の首府・万魔殿)にての誇り高き玉座にての、  
ルシファーの、比喩的なるサタンの摸造ともなりうる[輝く星]の、」

---

(引用部はここまでとする)

上のような記述が『失樂園』にて認められるとのが[文献的事実]の問題としてそこにある——ミルトンのパラダイス・ロスト(『失樂園』)では[文献的事実]の問題として[高慢がゆえに神に齒向かった天使]がルシファー(転じてのサタン)であるとの描写がなされている(尚、ミルトン『失樂園』とは神に墮天させられたルシファーことサタンが直接的反撃が出来ぬ中での意趣返しとして神が新たに造り出した種族である人類の祖たるアダムとイヴを墮落させ、破滅に誘うとの奸計を弄するとの筋立ての物語となっている。まさしくものそうした筋立てに関わるるところにあつて「どういふわけなのか」今日のブラックホール理解に通ずる描写が多重的にみとめられるとのことを本稿の後の段にて指摘することになるとも先立って言及しながら申し述べるところとして、である)——。

他面、『失樂園』より何世紀も前に成立した古典たるダンテ『地獄篇』にあつて [ルチフェロ]

と呼称されてのサタンが[地獄の最下層]に幽閉されているとの描写がなされている(※)。

---

※尚、本稿の先立っての段で解説したように[イザヤ書第 14 章 12 節以下]が

[[悪魔の王たるサタン]が[金星たるルシファー](元来、[ルシファー]という語と結びつくものであった金星)と結びつけられるに至った聖書の中の典拠となる部]

となる(とされている)。

そちらについては——「オンライン上よりダウンロードできる」との分かりやすい章節番号が付されている邦訳版 PDF 版電子版聖書(日本聖書協会)よりも労せず確認できるとのくだりとなるので疑わしきには確認いただきたいところとして——バビロンの王に対する口撃を兼ねての預言としての表記にあつて

「天より落とされた存在としての明けの明星」(イザヤ書物 14 章 12 節)

「陰府(よみ)に落とされ穴の奥底に入れられた存在」(イザヤ書 14 章 15 節)

「国々を動かし世界を荒野のようにし、その都市を壊し、捕らえた者たちを解き帰さなかった存在」(イザヤ書 14 章 16 節-17 節)

「つるぎで殺され存在に覆われ踏みつけられた死体のように穴に下る存在」(イザヤ書 14 章 19 節)

との形容がみとめられもし、そちら [バビロンの凋落に通ずる表記] が [悪魔の王 ——新約聖書にてバビロンを破滅に誘(いざな)う存在—— ] たる [ルシファー=金星] と結びつけられるに至ったとのことがある、聖書上の典拠としてはそうもなっているとのことがある。

そう、その部しか —有名なところとして— 聖書それ自体の中では

**[ [明けの明星(金星) = ルシファー] を悪魔の王たるサタンと比定する上での論拠]**

となるところがないとのことになっているようなのだが (のような中で現実にダンテやミルトンに典型例が認められるようにキリスト教徒らは [ルシファー] こと [明けの明星] を悪魔の王を指す語として歴年用いていたきたの史的経緯がある。ひとつにそれは『旧約聖書』のイザヤ書に認められる直近言及したところの [国々を動かし世界を荒野のようにし、その都市を壊し、捕らえた者たちを解き帰さなかった存在] との記述が『新約聖書』末尾の黙示録に見るサタン像 ——バビロンとも結びつけられるパートで偽りへの会衆を結集させて、彼ら諸共、地獄落ちすることになるとの存在—— と類似するところがあったからであろうとは解される)、といったイザヤ書に見る記述については

『中近東の異教神 (旧約聖書を奉じていた一神教たるユダヤ教から見たうえでの異教神) たる [アッタル] という神 (ウガリット古代都市文明の [明けの明星] と結びつく神) を指すのではないか』

との理解「も」一部にてなされており、英文 Wikipedia [Lucifer] 項目にはその理解に基づいての記載が現行なされている ——原文引用をなせば英文 Wikipedia [Lucifer] 項目にあつての Mythology behind Isaiah 14:12 [イザヤ書 14 章 12 節の背景にある神話] と振られた節にての “ In ancient Canaanite mythology, the morning star is pictured as a god, Attar, who attempted to occupy the throne of Ba'al and, finding he was unable to do so, descended and ruled the underworld. ” 「古代カナン地方神話にあつて明けの明星はアッタルという神、バアルの玉座を奪おうとして、しかし、それが出来ぬことがわかって冥界に下り、そこを統治したとの神と結びつけられている」との言及がなされているところである——。

---

以上ここまでよりエデンの誘惑者としての蛇と同質に見られるサタンが

**[金星の体現存在(たるルシファー)]**

となっていることを細かくも解説した。

次いで、[エデンの誘惑者たる蛇]に比定される[悪魔の王サタン]が

[(期待を裏切った)破滅をもたらした存在であるとされること]

についての解説を(一般教養レベルのこと、基本的な聖書記述にまつわることであればそこまで解説する必要もないか、とも思うのだが)なしておくこととする。

まずもって書くが、

[エデンの蛇に知恵の樹の実を食すように唆されたため、アダムとイヴが[楽園追放](蛇に林檎を唆されて食したための失楽園)を見たとき聖書には記述されている]

とのことがあり、その伝でも期待を裏切るとのやりようは感じられるところである(出典(Source)紹介の部 54にての旧約聖書創世記(日本聖書協会よりPDF文書版がオンライン公開されている和訳版旧約聖書)よりの原文引用部を参照のこと)。

のみならず、

[新約聖書ではその末尾の黙示録の部にて[サタン](後にキリスト教神学にて、先述のような経緯から、[ルシファー]と呼称されるに至った存在)が[偽りの信仰の会衆]を大同団結させて神に最終決戦を挑み、その挙の中で会衆に破滅をもたらすとの描写がなされている]

とのこと「も」ある(下の出典紹介部を参照されたい)。

# SOURCE

## 54(4)





ここ出典(Source)紹介の部 54(4)にあつてはキリスト教体系にて[エデンの蛇]と同一視されているサタンが[会衆の期待を裏切って破滅をもたらした存在]として新約聖書・黙示録に登場していることにまつわる引用をなしておくこととする。

(直下、日本聖書協会『新約聖書』—オンライン上にてPDF版を閲覧・取得できるとのもの(1954年改訳版)— ヨハネの黙示録第13章よりの一部引用をなすとして)

---

わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。それには角が十本、頭が七つあり、それらの角には十の冠があつて、頭には神を汚す名があつてゐた。わたしの見たこの獣はひょうに似ており、その足はくまの足のようで、その口はししの口のものであつた。龍は自分の力と位と大いなる權威とを、この獣に与えた。その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおつてしまつた。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従ひ、また、龍がその權威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拝んで言つた。「だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦ふことができようか」。…(中略)…そして彼は、聖都に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する權威を与えられた。地に住む者で、ほふられた子羊のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者はみな、この獣を拝むであらう。

---

(引用部はここまでとしておく)

(直下、日本聖書協会『新約聖書』—オンライン上にてPDF版を閲覧・取得できるとのもの(1954年改訳版)— ヨハネの黙示録第18章よりの一部引用をなすとして)

---

この後、わたしは、もうひとりの御使(みつかい)が、大いなる權威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた。彼は力強い声で叫んで言つた。「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。そして、それは悪魔の住む所、あらゆる汚れた霊の巣くつ、また、あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣くつとなつた。すべての国民は、彼女の姦淫に対する激しい怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と姦淫を行い、地上の商人たちは、彼女の極度のぜいたくによって富を得たからである」

…(中略)…

すべての船長、航海者、水夫、すべて海で働いている人たちは、遠くに立ち、彼女が焼かれる火の煙を見て、叫んで言う、『これほどの大いなる都は、どこにある』。彼らは頭にちりをかぶり、泣き悲しんで叫ぶ、『ああ、わざわいだ、この大いなる都は、わざわいだ。そのおごりによって、海に舟を持つすべての人が富を得ていたのに、この都も一瞬にして無に帰してしまつた』。天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、予言者たちよ。この都について大いに喜べ。神は、あなたがたのために、この都をさばかれたのである」

---

(引用部はここまでとしておく)

(直下、日本聖書協会『新約聖書』 —オンライン上にてPDF版を閲覧・取得できるとのもの(1954年改訳版)— ヨハネの黙示録第19章(第19節)以降よりの引用をなすとして)

---

なお見ていると、獣と地の王たちと彼らの軍勢とが集まり、馬に乗っているかたとその軍勢とに対して、戦いをいどんだ。しかし、獣は捕らえられ、また、この獣の前でしるしを行って、獣の刻印を受けた者とその像を拝む者とを惑わしたにせ予言者も、獣と共に捕えられた。そして、この両者とも、生きながら、硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。それ以外の者たちは、馬に乗っておられるかたの口から出るつるぎで切り殺され、その肉を、すべての鳥が飽きるまで食べた。

---

(引用部はここまでとしておく)

(直下、日本聖書協会『新約聖書』 —オンライン上にてPDF版を閲覧・取得できるとのもの(1954年改訳版)— ヨハネの黙示録第20章よりの一部抜粋をなすとして)

---

またわたしが見ていると、ひとりの御使が、底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手を持って、天から降りてきた。彼は、悪魔でありサタンであり龍、すなわち、かの年を経たへびを捕らえて千年の間つなぎおき、そして、底知れぬ所に投げ込み、入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終わるまで、諸国民を惑わすことがないようにしておいた。その後、しばらくの間だけ解放されることになっていた。

…(中略)…

千年の期間が終わると、サタンはその獄から解放される。そして、出て行き、地の四方にいる諸国民、すなわち、ゴグ、マゴグを惑わし、彼らを戦いのために招集する。その数は、海の砂のように多い。彼らは地上の広い所に上ってきて、聖徒たちの陣営と愛されていた都を包囲した。すると、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽くした。そして、彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには、獣もにせ予言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである。

---

(引用部はここまでとしておく)

以上、原文抜粋をなした(オンライン上より誰でもPDFファイル版がダウンロードできるようになっているとの日本聖書協会『新約聖書』より原文抜粋をなした)ようにヨハネの黙示録——聖書の最後に位置する文書で神を信じぬ者達は皆、灰燼に帰せられ、神を信ずる民らが至福の王国に生きるとの内容を有したキリスト教信仰の究極的[結末]を描いたパート——には「文献的事実の問題として」次のような内容が含まれている。

(筆者は[サタン]や[神]といったドグマチックな概念に重きを置く[宗教]も[宗教的狂人]のやりようも多く唾棄すべきものであるとらえている無宗教・無信心の者だが、といった身を押してのこととして指し示すところの黙示録に見る内容として)

[龍(サタン)に権威を与えられた獣および龍(サタン)それ自体を崇める大バビロンおよびその民らが神によって火によっての滅尽を見る。そして、その後、[救世主に率いられた軍勢]と[獣と偽予言者と龍とその麾下の軍勢]とが対峙するが、後者は火の池地獄に投げ込まれた](との記載がなされている)

[獣と偽予言者と龍のシンパらが神の裁きを受けた後、1000年を経、龍(サタン)が再度解放され、ゴグ・マゴグと呼ばれる諸国民(その数は海の砂のように多いともされる)を招集して神の信徒に戦いを挑むも、同様に火と硫黄の池に投げ込まれた](との記載がなされている)

これにて[キリスト教体系にて[エデンの蛇]と同一視されているサタンが[会衆の期待を裏切って破滅をもたらした存在]として新約聖書・黙示録に登場している]ことにまつわっての典拠紹介を終えることとする。

(**出典(Source)紹介の部 54(4)**はここまでとする)

ここまでで[エデンの誘惑者][エデンの誘惑者に比定されるサタン・ルシファーという存在]について次の通りのことが述べられることを「遺漏無くも」指し示したつもりである。

[蛇であるという存在となっている] (**出典(Source)紹介の部 54**)

[ある種の文明の促進者ともいうべき存在となっている] (**出典(Source)紹介の部 54(2)**)

[**(エデンの誘惑者をルシファーであると見た場合に)金星と結びつく存在ともなっている**] (**出典(Source)紹介の部 54(3)**)

[**エデンの住人とその子孫の期待を裏切ることになったと描写される —— 旧約聖書の創世記および新約聖書の黙示録にてそうも描写される —— 存在となっている**] (**出典(Source)紹介の部 54(4)**)

以上のことはアメリカ(先に[アトランティス]と同一の存在と看做されるだけの背景があると指摘してきたところのアメリカ)に崇拝されていたケツアルコアトルが(再掲して)次のような要素を伴っている存在となっていることと相似形を呈するものである。

[**羽毛を持った蛇との語感の名前の神となっている**] (**出典(Source)紹介の部 53(2)**)

[**金星の体現存在となっている**] (**出典(Source)紹介の部 53(3)**)

[**文明の恩人となっている**] (同**出典(Source)紹介の部 53(3)**)

[**同神を崇拝していた地域の住民の期待を裏切ることになったとの神となっている**] (**出典(Source)紹介の部 53(4)**)

(※1:より幅広くも見れば、[ケツアルコアトルの信徒らに破滅を進呈した]のが[キリスト教徒](たるスペインの征服者ら)となっていること、[サタンの薬籠中になった会衆に(新約聖書の黙示録で描写される)ところとして)打ち勝った]のが[キリスト教徒]となっていること「にも」相似形を見出せるようになっている)

(※2:**出典(Source)紹介の部 53(4)**にて示さんとしてきたように[スペインがアステカ文明圏に破滅的改変を強いた]なかで疫病 —— 新大陸の人間が免疫を持っていなかった旧大陸(欧州)由来の天然痘 —— の猖獗(しょうけつ)が戦乱と共に現地人を容赦なく殺していったとされる。対して、聖書黙示録 —— [古き蛇にして赤い竜としてのサタン][偽預言者][偽りの獣]がその会衆を破

滅に誘(いざな)うとの記述がなされている聖書の末尾におさめられている文書たる黙示録——では[黙示録の四騎士(なる存在)が究極的破滅(墮地獄)に至る前段階にて人間に災厄をばらまく]との記述も認められ、[戦乱]と[疫病]との伝でのアナロジー(一致性)の問題もアメリカ大陸の出来事と『黙示録』の間にはみとめられるとのことがある(同点については聖書上の極めてよく知られた記述とのことでそれで十分かと判断、和文ウィキペディア[ヨハネの黙示録の四騎士]項目程度のものよりの[中略]なしつつもの引用をなしておくこととする。⇒(以下、和文ウィキペディア[ヨハネの黙示録の四騎士]項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)“ヨハネの黙示録の四騎士は、『ヨハネの黙示録』に記される四人の騎士。小羊(キリスト)が解く七つの封印の内、始めの四つの封印が解かれた時に現れるという。四騎士はそれぞれが、地上の四分の一の支配、そして剣と飢饉と死・獣により、地上の人間を殺す権威を与えられているとされる。…(中略)…[第四の騎士]『ヨハネの黙示録』第6章第8節に記される、第四の封印が解かれた時に現れる騎士。青白い馬(蒼ざめた馬)に乗った「死」で、側に黄泉(ハデス)を連れている。疫病や野獣をもちいて、地上の人間を死に至らしめる役目を担っているとされる”(引用部はここまでとする)

ここに至るまで摘示してきたところの相似形が具現化していることにつき

『ただの偶然ではないのか』

(ないしは)

『キリスト教徒が新大陸の文明を滅ぼされて当然の悪魔の文明であるとの見立てを抱いていたためにそういう類似性を示す記録が(考古学者らもその風潮に乗せられたところとして)歴史的に人為構築(捏造)されてきたのではないか』

と思われる向きもあるかもしれない(『それぐらいの懐疑主義的視点を持っていてなければ、(真実を破壊するために飼われているといった類の)相応の陰謀論者らのインチキ話柄の類に騙されても文句は言えぬであろう』と手前などは考えている)。

だが、筆者は「それでは済まない」との[情報]を数多把握しているからここでの話をなしているのである。

ここで振り返っていただきたいところなのだが、

[**(ケツアルコアトル崇拝のアステカ文明が欧州人の到達の前から存在していた)新大陸アメリカは大航海時代以降、アトランティスと同質のもの**と欧州人に看做されてきたとの背景がある](本稿にての**出典(Source)紹介の部 52**、フランシス・ベーコンの『ニュー・アトランティス』を引き合いに出しての部を参照のこと)

とのことが重きをもってくる。

それにつき、ここまでに指し示しに注力してきたことを繰り返すが、

[**新大陸アメリカと同質に看做されてきた(先立っての**出典(Source)紹介の部 52**にて示したようにそうなるべくしての背景あって看做されてきた)との[アトランティス]については[アトラスの娘らの黄金の林檎の園]**(あるいは[黄金の林檎にて起こったトロイア戦争に決着をつけた武将オデュッセウスが漂着した先たるアトラスの娘カリュプソの島])と結びつけられてきたとのことがあり、また、[アトランティス]と同一視されるだけの背景がある**[黄金の林檎の園]**については**[エデンの園]**と結びつけられてきたとのことがある]

とのことがある（⇒ ※下にて多少の振り返り表記をなしておく）。それがゆえに問題になるのである。

ケツァルコアトルが崇められていたアステカ文明を培ったアメリカ大陸がアトランティスに欧州では仮託されている、そして、アトランティスと同一視されることもある[黄金の林檎の園]は[エデンの園]とも結びつけられている。

となれば、蛇の神ケツァルコアトルを[文明の接受者]として崇めていた地域(アメリカ大陸)の特性より顧慮してケツァルコアトルとエデンの誘惑者の関係はより濃厚な色彩を帯びることにもなり、またもって、[黄金の林檎](アトランティスと同一視されるヘスペリデスの園に実る果実)と[エデンの果実]の関係もアトランティスと同一視されてきた地で崇められてきたケツァルコアトルとエデンの誘惑者の接合性(最前の部にて先述の接合性)からよりもって重みをもってくる、相補関係を呈してよりもって重みをもってくるということになるというわけである。

(※ [アトランティス] ⇔ [アトラスの娘らの黄金の林檎の園] および [アトランティス] ⇔ [黄金の林檎にて起こったトロイア戦争に決着をつけた武将オデュッセウスが漂着した先たるアトラスの娘カリュプソの島] ] との見解が成り立つだけの背景があり、また実際にそのような見方が歴年呈されてきたとのことについては本稿にての **出典(Source) 紹介の部 40** から **出典(Source) 紹介の部 41** を包摂させての部にて解説をなしている。

他面、[黄金の林檎の園(アトランティスと同一視されもしてきたとの黄金の林檎の園)] ⇔ [エデンの園] ] との見解が欧州人に呈されてきたとのことについては **出典(Source) 紹介の部 48** から **出典(Source) 紹介の部 51** を包摂する解説部にて詳説なしにしていることであり、その中であって [出典(Source) 紹介の部 51] では Alexander Stuart Murray の *Manual of Mythology* らを引き合いに出しながらいかようにして [黄金の林檎の園] と [エデンの園] らを同一視する見解が呈されていたのか具体例を挙げている)

---

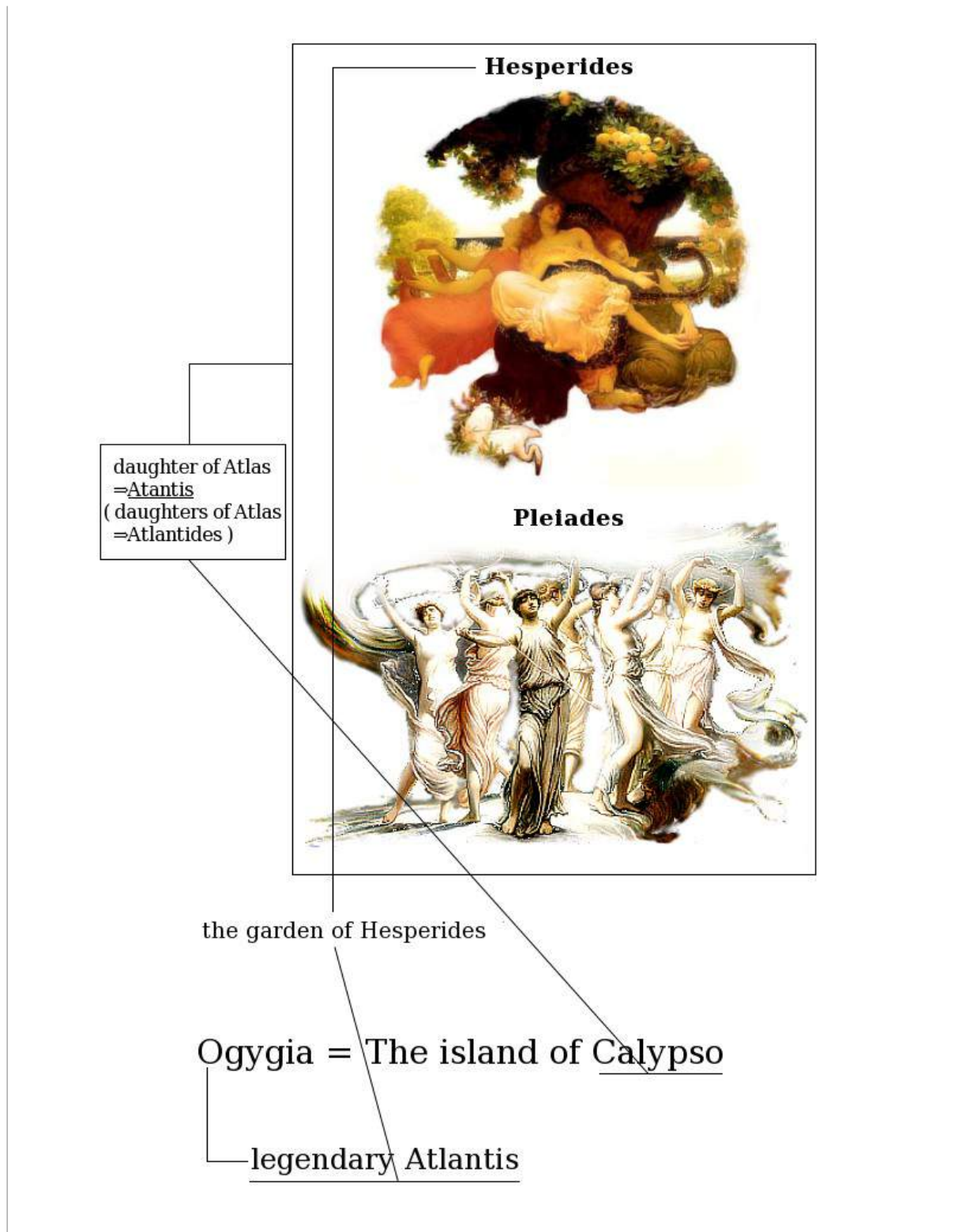
振り返っての部として

次の頁へと歩を進める前に直前言及のことについて先立って摘示してきたことを振り返っておくこととする。

(黄金の林檎の園がアトランティスと看做されもしてきた点については下にて表記の通りのことを既に指し示している)

(本稿にての **出典(Source) 紹介の部 41** では) [黄金の林檎の園を管掌するヘスペリデスの[ニンフ(ギリシャ神話にての下位の女神ら)としての呼称] が [アトラスの娘のグループ] がゆえに [アトランティデス](Atlantides, 単数形は Atlantis) とのかたちとなっていること]、[ヘスペリデスの黄金の林檎の園が大西洋の先にあったとのこと] (プラトン古典に見る) [大西洋の先にある陸塊] としてのアトランティスとの接合性が観念されること]、[ヘスペリデスの母親としても伝わるヘスペリス(ヘスペリデスの単数形呼称でもあるが母親の名としても伝わる)の語源が [西方] と結びついていること] で西方にてのアトランティスとの接合性が観念されること] との各事由を [アトランティス ⇔ 黄金の林檎の園] との理由として挙げている 19 世紀末成立の著作の内容を挙げもした。





(黄金の林檎の園がエデンの園と関連づけられるとの点については下にて表記の通り  
ことを指し示している)

a. [黄金の林檎にまつわる誘惑] および [エデンの園にての誘惑] の双方ともに「女という性を用いての誘惑」が主軸をなしているとのことがある（一方はヘレン、もう一方はイーヴという女という性を用いての誘惑がなされている⇒同じくものこと、トロイアありようにまつわる

古典上の典拠は**出典(Source)紹介の部 39**にて紹介している)。

b. **[黄金の林檎にまつわる誘惑]** および **[エデンの園にての誘惑]** の双方ともに「誘惑が破滅的事態をもたらした」との結末がつきまわっているとのことがある(片方が**[フォール・オブ・トロイア;トロイア陥落]**、もう片方が**[フォール・オブ・マン;人類の墮落・失樂園]**との結末に通じている⇒同じくものこと、トロイアありようにまつわる伝承上の典拠は**出典(Source)紹介の部 39**にて紹介している)。

c. **[黄金の林檎にまつわる誘惑]** および **[エデンの園にての誘惑]** の双方ともに誘惑にてその授受が争われたのは「林檎」および「林檎と歴史的に同一視されてきたもの」となっているとのことがある(聖書にては**[エデンの禁断の果実]**こと**フォウビドゥン・フルーツ**が**[林檎]**であるとの明示的表記がみとめられないわけであるが、それが歴史的ありようとして林檎と看做されてきたとのことがあり、本稿ではその点についても解説している — **出典(Source)紹介の部 50**を参照されたい — )。

d. **[黄金の林檎の果樹園]** は百頭竜ラドンに守られているとされる。そして、ギリシャ・ローマ時代における竜とは**[巨大な蛇]**のようなものであるとされる(**出典(Source)紹介の部 50**の後に続けての部で典拠紹介のこと)。他面、**[エデンの園の誘惑]** は蛇によってなされたと伝わるものである。従って、**[黄金の林檎]**および**[エデンの園の禁断の果実]**の双方ともに「(蛇たる)爬虫類とのつながり」があいが見てとれるとのことになる。

e. **[黄金の林檎にまつわる誘惑]** および **[エデンの園にての誘惑]** の双方ともにあって「金星の体現化存在」が誘惑者となっているとのことがある(片方は金星の体現存在たる女神アフロディテを誘惑者としており、もう片方では金星(明けの明星)の体現存在たるルシファーことエデンの蛇と同一視されるサタンを誘惑者としている — **出典(Source)紹介の部 48**および**出典(Source)紹介の部 49** — )。また、誘惑者が金星と結びつくだけではなく、黄金の林檎というのはそれが実る果樹園からして**[金星]**と親和性が高い存在となっているとのことがある。すなわち、黄金の林檎を果樹園で管掌するとされるヘスペリデスらが金星こと**[宵の明星]**と非常に近い存在であるとのことがある(ヘスペリデス Hesperides という黄金の林檎の管掌者らは**[金星=宵の明星]**と同義のローマ名を持つ Hesperus を父親とするとも言われ、その構成単位ないし母親を Hesperis とするとも言われる存在とのことになり、Hesperides という**[Hesper]**との語句と結びつく黄金の林檎の管掌者らがいかに日没にて輝く金星と結びつくか推し量れもするとのことがある — **出典(Source)紹介の部 49**などを参照のこと — )。

f. **[黄金の林檎の園]** および **[エデンの園]** の双方は「互いに関係があるもの」として欧州人に「歴史的に」**隠喩的・明示的な式**で結びつけられてきたものらとなる。隠喩的な式とのこと言えば、ルネサンス期画家のルーカス・クラナッハ・ジ・エルダーの絵画に両者関係性を示唆するが如きものが存在しているとのことがある(その**[具体例]**を本稿の先の段、**出典(Source)紹介の部 51**で挙げている)。他面、明示的な式で関係づける式とのこと言えば、近代知識人らの著作にあつて「[神に不死を約束するネクター]」と結びつく黄金の林檎の園」と「[不死と知恵の果実]」が実るエデンの園」とを結びつける表記がなされている(そちらも原文引用を**出典(Source)紹介の部 51**でなしている)。



Works of Lucas Cranach the Elder



"Law and Grace"

Paradise Lost



"Judgement of Paris"



the 11th labour of Hercules  
(Hercules and Ladon)

Golden Apple

---

" The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were far-famed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods : it was another Eden. "

— Alexander Murray (Manual of Mythology)

---

※諸種要素から類似性が問題となる「黄金の林檎の園」と「エデンの園」は現実に欧州の識者によって同一のものであるように語られてきた場となる（上のアレクサンダー・ムーレイの19世紀刊行著作内記述はそのことを示す一例となるものである）

振り返っての部はここまでとしておく

---

直前の部にあつて

[「ケツァルコアトル」(アトランティスと同一視されもしてきたアメリカ大陸、そこにてのアステカ文明にて崇められてきた文明の接受者としての蛇の神) とエデンの誘惑者の複合的關係性]

について示したとして、である。

同じくものことに関わりとるとして [本稿にてのより先立つての段にあつて指し示しに注力なしてきたこと] にまつわる振り返りを下になす。

---

(膨大な文量を割きもし、本稿にての先立つ段では以下再述するとおりのことの指し示し —それは文献的事実・映像記録上の事実、および、それら事実群から純・記号論的に導き出せるとの接合性をただひたすらに重んじての指し示しともなる— をなしてきた)

[「古代アトランティスに対する蛇の種族による次元間侵略」との内容を有する(一見すれば妄言体系としての)神秘家由来の申しようが今より70年以上前から存在している — (所詮はパルプ雑誌に初出の小説『影の王国』(1929)の筋立てをその言い回し込みにして参考にしたのであろうと解される形態でながら前世紀、第二次世界大戦勃発の折柄(1939年)から存在している) — とのことがある] (: [出典\(Source\) 紹介の部 34](#)から [出典\(Source\) 紹介の部 34-2](#)を包摂する解説部を参照されたい)

→

[ (上にて言及の) 「アトランティスに対する蛇の種族の次元間侵略」との内容と類似する側面を有しての「恐竜人の種族による次元間侵略」という内容を有する映画が

[片方の上階に風穴が開きつつ][片方が崩落する]とのツインタワー —(恐竜人の首府と融合するとの設定のツインタワー)— をワンカット描写にて登場させながら 1993年に封切られているとことがある(子供向け荒唐無稽映画との体裁をとる『スーパーマリオ魔界帝国の女神』がそちら作品となる)] (:[出典\(Source\)紹介の部 27](#)を包摂する解説部を参照されたい)

→

[ある種、911の先覚的言及をなしているとも述べられるような性質を伴っての上記映画は[他世界間の融合]といったテーマを扱う作品ともなっていたわけだが、そうした内容([異空間同士の架橋]との内容)と接合する[ブラックホール][ワームホール]の問題を主色として扱い、また、同じくものところで[911の事件の発生に対する先覚的言及とも述べられる要素]をも「露骨」かつ「多重的に」帯びているとの著名物理学者由来の著作 — BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作 — が(申し分としては無論、頓狂に響くところなのだが)原著1994年初出のものとして「現実的に」存在しているとことがある] (:疑わしきにおかれては(羅列しての表記をなし)本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 28](#),[出典\(Source\)紹介の部 28-2](#),[出典\(Source\)紹介の部 28-3](#),[出典\(Source\)紹介の部 31](#),[出典\(Source\)紹介の部 31-2](#),[出典\(Source\)紹介の部 32](#),[出典\(Source\)紹介の部 32-2](#),[出典\(Source\)紹介の部 33](#),[出典\(Source\)紹介の部 33-2](#)を包摂する解説部を参照されたい。表記の部にてはBLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という1994年初出の作品が[双子のパラドックス(1911年提唱)の機序の利用による二点間時差の応用] / [91101(2001年9月11日を意味する数)との郵便番号で「はじまる」地を実験に対する[空間軸上の始点]に置いてのタイムワープにまつわる解説] / [2000年9月11日⇒2001年9月11日と接合する日付けの実験に対する[時間軸上の始点]としての使用] / [他の「関連」書籍に見るブラックホール⇄グラウンド・ゼロとの対応付け]を[僅か一例としての思考実験]にまつわるところで「すべて同時に具現化」なさしめ、もって、[双子の塔が崩された「2001年の」911の事件]の前言と解されることを事件勃発前にいかようになしているのかについて(筆者の主観など問題にならぬとの客観事実に関わるところとして)仔細に・緻密に摘示している。また、それに先立つところ、本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 29](#)から[出典\(Source\)紹介の部 30-2](#)を包摂させての解説部ではその前言問題に関わるところの[双子のパラドックス](1911年提唱)というものと結びついているとことがよく指摘される浦島伝承(爬虫類の化身と人間の異類結婚譚との側面も初期(丹後国風土記)にては有していた浦島子にまつわる伝承)が欧州のケルトの伝承と数値的に不可解な一致性を呈していることを解説、その「伝承伝播では説明がなしがたい」ような特異性についての指摘「も」なしている)

→

[「加速器」および[(時空間の)ゲート開閉に関わる要素]および[爬虫類の異種族の侵略]らの各要素のうち複数を帯びているとの作品らが従前から存在しており、の中には、カシミール・エフェクトといった後に発見された概念(安定化したワームホール構築に必要と考えられるようになったエキゾチック・マターという物質の提唱に関わっている概念)につき尋常一様ならざるかたちにて先覚的言及をなしているとの



1937年初出の作品『フェッセンデンの宇宙』——人工宇宙にての爬虫類の種族による人類の皆殺しが描かれているとの作品——も含まれている] (:疑わしきにおかれては[出典\(Source\)紹介の部 22](#)から[出典\(Source\)紹介の部 26-3](#)を包摂する一連の解説部を参照されたい)

→

[CERNのLHC実験は「実際の命名規則の問題として」1990年代の実験プラン策定段階にての1992年(米国にて2004年に放映されていたテレビドラマ『スターゲイト・アトランティス』といったものを包摂する一連のスターゲイト・シリーズの嚆矢たる映画作品『スターゲイト』が1994年の公開にて世に出ることになった折より2年程前)——から「アトラス——ヘラクレスの11功業にて登場した「黄金の林檎」の在在を把握すると伝わる巨人——」と結びつけられており(ATLASディテクターという[「後の」2000年代よりブラックホール観測「をも」なしうるとされるに至った検出器]にまつわる名称が1992年に確定したとも)、また、同LHC実験、後にその「アトラス」と語義を近くもする「アトランティス」ともブラックホール探索挙動との絡みで結びつけられるに至っているとのことがある(そのうえ、同LHC実験にあつてブラックホールの生成を観測しうるツールと銘打たれているイベント・ディスプレイ・ツールのATLANTISについてはプラトン古典『クリティアス』記述から再現できるところの古のアトランティスの城郭構造を意識させるようなディスプレイ画面を用いているとの按配での堂の入りよう「とも」なっている)。CERNのLHC実験と結びつけられての巨人アトラスは「黄金の林檎の在在(ありか)を知る巨人」として伝承に登場を見ている存在でもあるが、そこに見る「黄金の林檎」は「トロイア崩壊の原因」となっていると伝わるものである。とすると、CERNがATLAS検出器でブラックホールの観測——その観測が「科学の発展に資する」と中途より喧伝されるに至った即時蒸発を見る極微ブラックホールらの観測——をなしうると後に発表するに至ったことは「黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)の在在処を知る巨人」によってブラックホール探索をなさしめていると呼ばわっているに等しい] (:疑わしきにおかれては[出典\(Source\)紹介の部 35](#)から[出典\(Source\)紹介の部 36\(3\)](#)および[出典\(Source\)紹介の部 39](#)を包摂する解説部を参照されたい)

→

[「古の陸塊アトランティスの崩壊伝承」は「古のトロイアに対する木製の馬の計略による住民無差別殺戮「後」の洪水による城郭完全破壊伝承」(Posthomerica『トロイア戦記』)と同様の側面を伴っているものとなる(アトランティスおよびトロイアの双方とも「ギリシャ勢との戦争の後」、[洪水]による破壊を見たとの筋立てが採用されている)。また、「巨人アトラスの娘」との意味・語法での女神「アトランティス」——(アトランティスという語は「古の陸塊の名前」以外にDaughter of Atlasとの響きを伴う語ともなり、そうした名詞がLHCのATLAS検出器に供されているイベント・ディスプレイ・ツールに供されているATLANTISの名にも転用されている)——については「トロイア崩壊の原因となった果実たる黄金の林檎の園が実るヘスペリデスの園」とも「史的に結びつけられてきた」とのことがあり、といった絡みから、「黄金の林檎の園」は(アトラスと共にCERNのLHC実験の命名規則とされているとの)「伝説上の陸塊アトランティス」の所在地と結びつけられもしていたとのことがある] (:疑わしきは[出典\(Source\)紹介の部 40](#)から[出典\(Source\)紹介の部 45](#)を包摂する一連の解説部を参照のこと)

→

[「ヘラクレスの11功業」というものは「アトラス(1992年よりLHC実験関連事項と

してその命名が決せられた ATLAS と同じくもの名を冠する巨人) および「黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)」と関わるもの」となるが(出典(Source)紹介の部 39)、先の 911 の事件の前言と解せられる要素を「多重的に」含む特定作品らがそうもした「ヘラクレスの 11 功業」と濃厚に関わっていると指摘出来るとのこと「も」がある。

具体的には(ヘラクレス第 11 功業と 911 の事件の関係性を示すべくもまづもって挙げたところの作品としての)『ジ・イルミナタス・トリロジー』という 70 年代にヒットを見た小説作品が

[ニューヨーク・マンハッタンのビルの爆破]

[ペンタゴンの爆破] (時計表示を 180 度回転させて見てみると時計の 911 との数値が浮かび上がってくるのと 5 時 55 分にペンタゴンが爆破されたと描写 —— [180 度反転させることで 911 との数値が浮かび上がってくる数字列]をワールド・トレード・センター(の崩落)などと結びつけている文物「ら」は(複数形で)他にもあり、本稿でそれらの特性について解説することになってもいる中での一例としての描写となる—— )

[「ニューヨーク象徴物」と「ペンタゴン象徴物」の並列配置シンボルの作中にての多用]

[米軍関係者より漏洩した炭疽菌の災厄の描写] (現実の 911 の事件では事件後間もなくして米軍関係者と後に判明したブルース・イヴィンズ容疑者の手になるところの炭疽菌漏洩事件が発生しているが、そちら現実の状況と照応するような[米軍関係者より漏洩した炭疽菌の災厄]との筋立ての具現化)

[関連作品でのツインタワー爆破・ペンタゴン爆破描写]

との要素らを内に含みつつもヘラクレスの第 11 功業と接合していると摘示できることがある(『ジ・イルミナタス・トリロジー』という作品ではヘラクレス第 11 功業に登場する[黄金の林檎]が作品の副題に付されていたり、黄金の林檎を描いたものとされるシンボルが何度か図示までされて登場してきているといったことがある) (:疑わしきにおかれては出典(Source)紹介の部 37 から出典(Source)紹介の部 37-5 を包摂する一連の解説部、オンライン上より全文現行確認できるようになっているとの原著よりの原文抜粋および国内で流通している訳書よりの抜粋をなしつつ「どこが」「どのように」[911 の事件に対する奇怪なる前言と呼べるようなパート]となっているかにつき事細かに解説してもいるとのそちら一連の解説部を参照されたい)

→

[上にて言及の『ジ・イルミナタス・トリロジー』は

[蛇の人工種族を利用しての古代アトランティスの侵略がなされる]

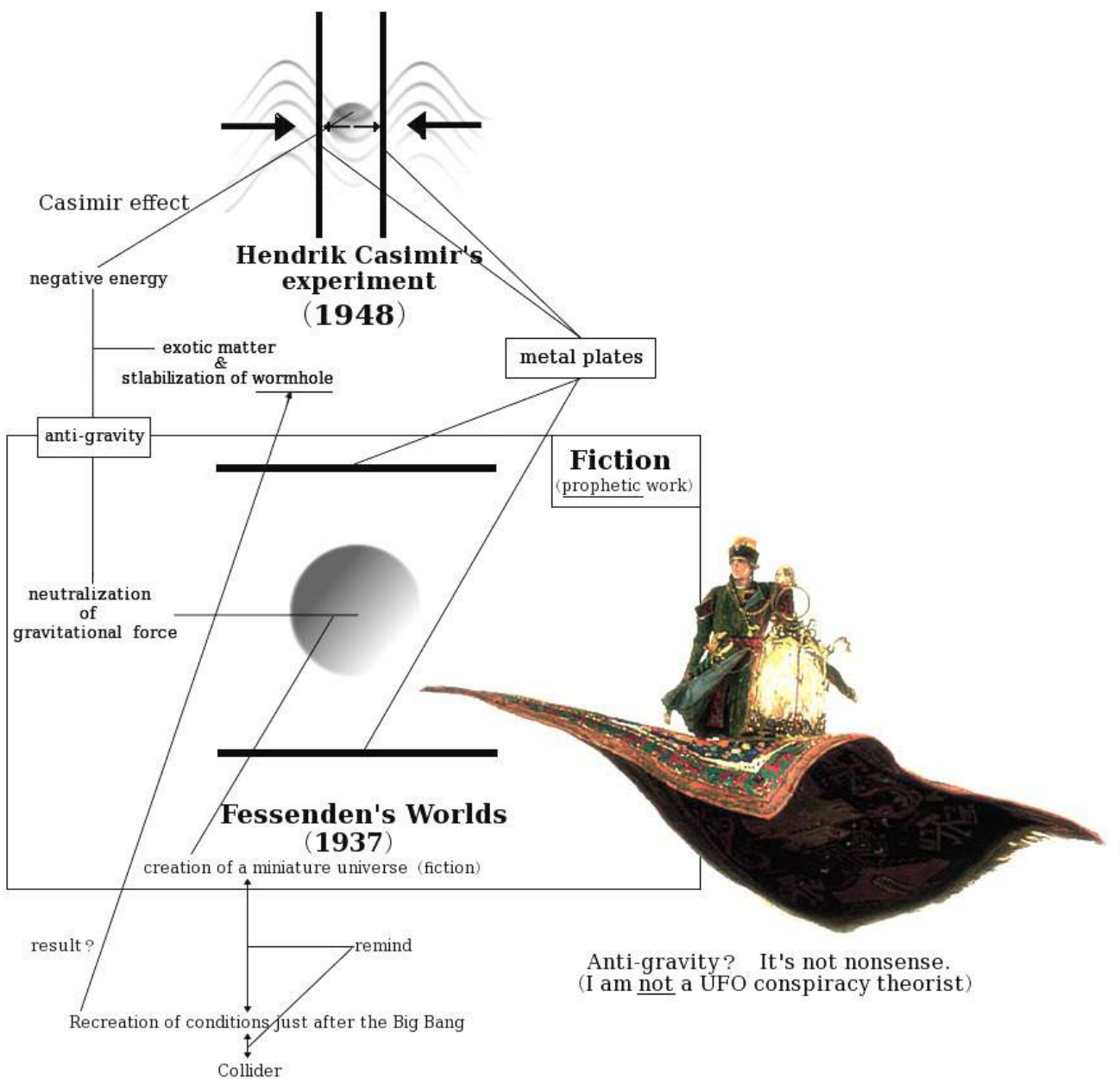
[アトランティスと現代アメリカのペンタゴンが破壊されたことによるのそこに封印されていた[異次元を媒介に魂を喰らうべくも介入してくる存在]の解放がなされる]

といった作中要素を内に含んでいる小説作品「とも」なる ——そこに見る[蛇の人工種族を利用しての古代アトランティスの侵略]という筋立ては一見すると先述の神秘家話柄(蛇の種族によるアトランティスに対する異次元間侵略)と同様により従前より存在していたロバート・エルヴィン・ハワードという作家の小説『影の王国』をモチーフにしていると解されるところでもあるのだが、であろうとなかろうと、奇怪なる先覚性(ナイン・ワン・ワンの事前言及)にまつわる問題性はなんら拭(ぬぐ)えぬとのことがある——。

といった[異次元との垣根が破壊されての干渉の開始]との筋立ては上述の著名物理学者キップ・ソーンに由来する著作、BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのどん

でもない遺産』という著作が（異次元との扉にも相通ずる）[ブラックホール] [ワームホール] の問題を主色として扱い、また、同じくものことで [911 の事件に対する前言とも述べられる要素] をも「多重的に」帯びているとの作品として存在しているとのことと平仄が合いすぎる程に合う]（：疑わしきにおかれては出典(Source)紹介の部 37 から出典(Source)紹介の部 37-5 に加えての出典(Source)紹介の部 38 から出典(Source)紹介の部 38-2 を包摂する一連の解説部の内容、そして、出典(Source)紹介の部 28 から出典(Source)紹介の部 33-2 を包摂する解説部の内容を参照されたい)

(上にての関係性指摘の部にかかわるところの従前図解部の再掲として —[1]— )



フィクションならぬ現実世界ではヘンドリック・カシミールという人物が  
[[カシミール効果]と命名されるに至った作用を測定した有名な実験]  
を実施している(1948年実施)のであるが、同実験実施環境と類似するもの、  
[[金属プレートを向かい合わせてその中間の領域にての作用を活用するとの行い]  
を作品の重要要素として描き、同じくもの行為に付帯するところとして、  
[[カシミール効果測定実験の結果と同様の作用] (重力に抗う機序の実現)  
について「も」言及しているとのある種、予言的な作品が1937年初出の  
『フェッセンデンの宇宙』  
という小説作品である。

同『フェッセンデンの宇宙』、  
[[金属プレートの間での小宇宙の造成]  
を描くとの作品となっているのだが、そのような『フェッセンデンの宇宙』での  
[[宇宙生成挙動]

が  
[[加速器実験で銘打たれているビッグバン直後の状況の再生]  
を想起させるものであるのと同時に、  
[[カシミール効果と結びつき、また、ワームホールの安定化を実現すると「後の  
日に」あつて考えられるようになったもの]  
とも(後のフィクションならぬ現実世界での科学界理論動向との兼ね合いで)結果  
的に結びつくこととなっていることの[[できすぎ度合い]を本稿にては問題視して  
いる。

(：カシミール効果測定実験の結果、引力に対して斥ける力、すなわち、  
斥力を呈するとの[[マイナスのエネルギー] (英語表現ではネガティブ・  
エナジー) ないし [[マイナスの質量] (ネガティブ・マス) といった  
ものの実在が科学者の間で認容されるに至った。そうした負の質量と  
いったものの斥力呈しての作用が  
[[エキゾチック物質] と呼称されるもの]  
の特質と通底するとのことがあり、その[[エキゾチック物質] がキッ  
プ・ソーンという科学者によって  
[[安定化したワームホール (時空間のショートカットを実現するとの空  
間の歪み) の材料]  
として取り上げられるに至ったとの経緯がある。  
につき、それが安定的なものかどうかは置き加速器がワームホール  
の類を生成すると「極々最近になって」考えられるようになったことは  
本稿にてのここまでの段でも先述のことであるし、後の段にても取り上  
げる所存なのだが、問題としているフィクション、『フェッセンデンの  
宇宙』が  
[[宇宙創成挙動 ——加速器実験での(超高エネルギーの一極集中によ  
る)ビッグバン直後の状況のことがを語感から想起させもする挙動——]  
および  
[[カシミール効果測定挙動類似の挙動]  
を同じくものものとして描いていることの意味性について問題視せざる  
をえぬとの事情が存在している)

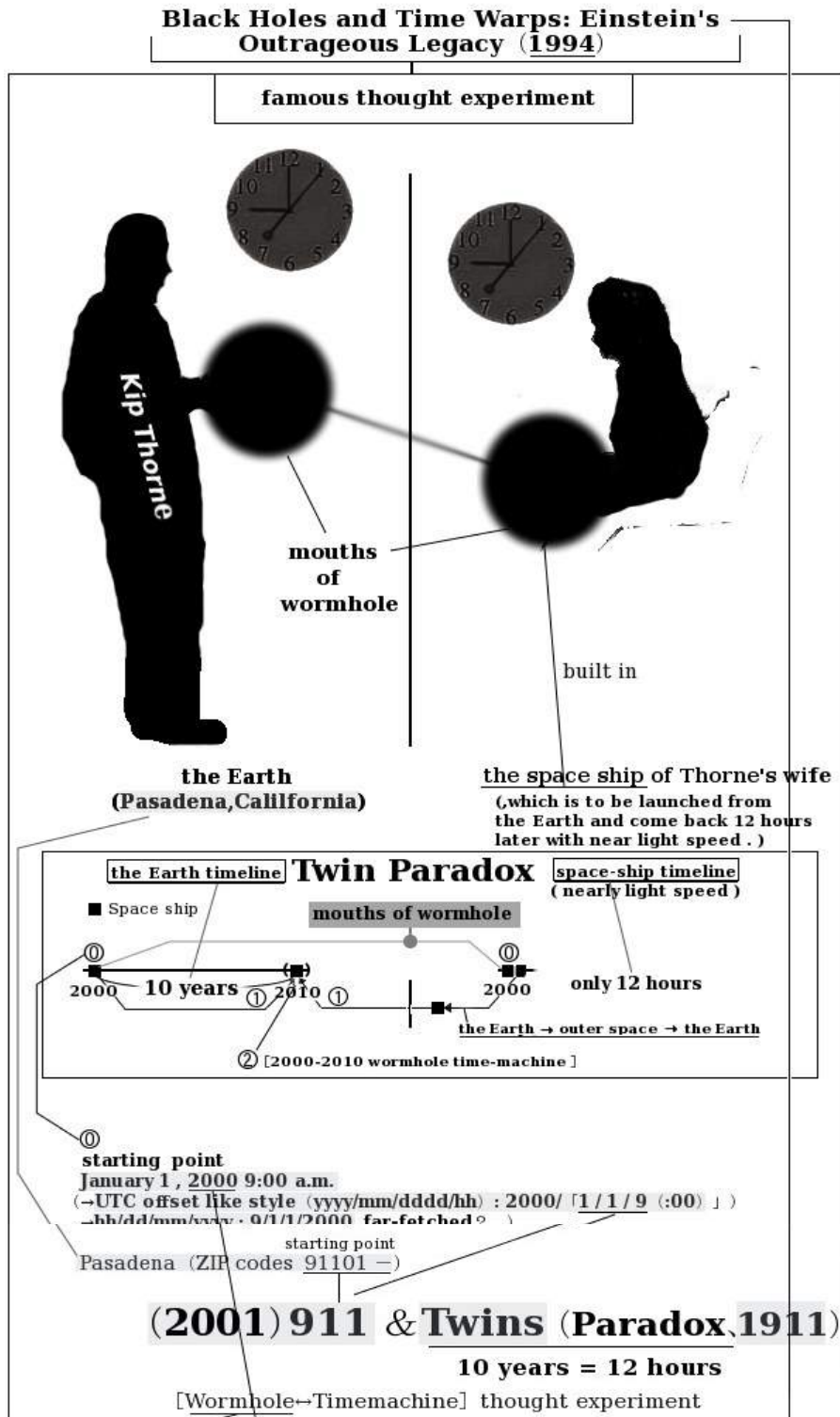
その点、『フェッセンデンの宇宙』が

[[人工宇宙にての[[爬虫類から進化した種族の惑星]と[[人類に似た種族の惑星]が  
融合させられて、前者の住人(爬虫類の種族)が後者の住人を完全に皆殺しにするとの  
粗筋]

を有していることの絡みで何が問題になるのかにつき本稿をまじめに読解していると  
の向きには理解できるように筆を進めているつもりである。



(上にての関係性指摘の部にかかわるところの図解部として — [2] — )



Charles Seife's  
**Zero: The Biography of a Dangerous Idea (2000)**

- (containing a similar illustration of the same thought experimentation as Thorne's one)
- (asserting that the watershed between year 2000 and year 2001 is vague)
- (making a prophetic comment :  
"Zero is so powerful because it unhinges the laws of physics. It is at the zero hour of the big bang and the ground zero of the black hole that the mathematical equations that describe our world stop making sense. However, zero cannot be ignored. Not only does zero hold the secret to our existence, it will also be responsible for the end of the universe.")

remind



**The Illuminatus! Trilogy The Golden Apple (1975 novel)**

(extract)

He and his associates decide on a desperate expedient, unleashing the Ilogor Yog Sothoth. They will offer this unnatural soul-eating energy being from another universe its freedom in return for its help in destroying Grad's movement. Yog Sothoth is imprisoned in the great Pentagon of Atlantis on a desolate moor in the southern part of the continent. . . . . Being on the southern plain, which was relatively uninhabited, the Pentagon of Yog Sothoth becomes the center of a migration of people who survived the disaster. Emergency cities are set up, those dying of radiation sickness are treated. A second Atlantis begins to take root. And then, from the Himalayas, the ships of the Unbroken Circle come swooping down on one of their raids. Lines of Atlantean men and women are marched to the walls of the Pentagon and there mowed down by laser fire. Then explosive charges are placed amid the heaps of bodies and the masked, uniformed men of the Unbroken Circle withdraw. There is a series of explosions; horrid yellow smoke goes coiling up.

先述のように荒唐無稽小説の体裁をとる70年代小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』は黄金の林檎などと濃厚に結びつきながら、911の先覚的描写を多分に含む作品となっている。のみならず、同作、[アトランティスに対する蛇人間が用いられた侵略] [アトランティスのペンタゴン(正五角形封印)の破壊による異次元介入存在の解放]といった粗筋を有しており、といったことまでもが他の関連事象との兼ね合いで問題になる(との論拠を呈示してきたのが本稿である)

I think the delusive story (of Illuminatus Trilogy) itself based on the Cthulhu Mythos is not worth noticing. But, I consider metaphors and prophetic aspects of the novel are worth noticing.

プラトン古典に見る陸塊アトランティスには古のトロイアとの接続性がある。第一、黄金の林檎の園がアトランティスと同一視されるが、黄金の林檎はトロイア崩壊の原因である。第二、女神カリュプソの島(オーギュギア島)もアトランティスと同一視されるが、オーギュギアはトロイア崩壊の力学の発するところ、オデュッセウスの戦いの島である。第三、ギリシャ軍との戦争の結果、城市が海に呑まれたとのアトランティス伝説帰結はそのままトロイア戦争の異伝に見る帰結と重なるようになっている(『トロイア戦記』)。第四、イタリアの地史関連文物にトロイア創建者ダルダネスとアトランティスの開闢王たるアトラス王と同じ名の王を血縁とする記述が存在する。以上のことがアトランティス⇔トロイア・コネクションについて挙げられもする。

**Atlantis**

- Golden Apple - the garden of Hesperides
- Odysseus - the island of Calypso

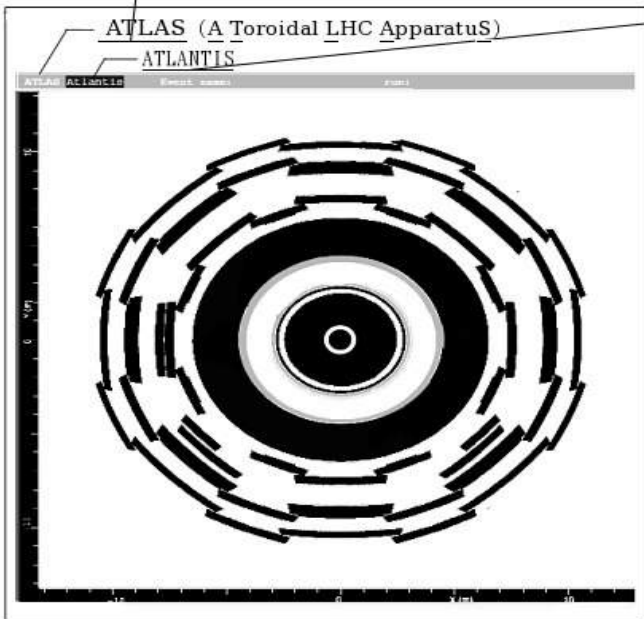
destruction of Troy

phase1. Wooden Horse & massacre (phase2. Deluge of water)

similar

"The sea Dashed o'er it, and the roaring torrents still rushed on it, swollen by the rains of Zeus; And the dark surge of the wide-moaning sea still hurled them back from mingling with the deep, Till all the Danaan walls were blotted out beneath their desolating flood. Then earth was by Poseidon chasm-cleft: up rushed Deluge of water, slime and sand, while quaked Sigeum with the mighty shock, and roared the beach and the foundations of the land Dardanian. So vanished, whelmed from sight, That mighty rampart. Earth asunder yawned, And all sank down, and only sand was seen, When back the sea rolled, o'er the beach outspread far down the heavy-booming shore. All this The Immortals' anger wrought." — Smyrnaeus Quintus (The Fall of Troy)

(11th labour of Hercules)



先述のようにブラックホールやワームホールの類を生成する可能性がここ数十年で想定されるようになったLHC実験であるが、同実験では「生成が科学の進歩に資する」とされるブラックホール、そのブラックホール生成関連の命名規則としてATLANTISやATLASといった命名規則が用いられている(うち、Event DisplayをなすためのATLANTISについてはそのディスプレイ画面がプラトン古典から再現できるアトランティスの中央島王城の構造を想起させるものとなっていること「も」がある)

[micro black hole generating event] detection

さて、本稿これ以降の段では直上、再呈示をなしてきたような関係性らが存するとのことが

**〔根深く、かつ、人類の存続それ自体を「根本否定」しようとの悪意の賜物〕**

であると述べられるようになっていくとのことにまつわる理由についてさらに煮詰めていくこととする。

ここで申し述べるが、直近にて(従前摘示のものを振り返るとのかたちで)呈示したところの結びつきに対しては先に解説してきたところの、

〔黄金の林檎を巡るパリスの審判にての誘惑〕および〔禁断の果実を巡るエデンでの誘惑〕の間の多重接合性]

〔エデンの誘惑の蛇(サタン・ルシファーに比定される存在)〕およびケツアルコアトルの間の多重接合性]

もが

「ヘラクレスの第11番目の冒険に登場を見る黄金の林檎が聖書『創世記』に見るエデンの蛇による誘惑と——「トロイア崩壊に至るまでのエピソードを合間の結節点に挟みもして、」とのかたちで——多重的に関わっていると「純・記号論的に」摘示可能なものとなっている]とのことまでもが  
〔ブラックホール生成問題〕  
とつながるようになっていくとある

との方向性で深くも関わっていると判じられるだけのことがある(※)。

※再度、くどくもの振り返りをなしておく。

**〔黄金の林檎を巡るパリスの審判にての誘惑〕および〔禁断の果実を巡るエデンでの誘惑〕の間の多重接合性]**

に関しては次のような接合性のことを(典拠と共に)挙げてきた。

- ・(エデンの〔禁断の果実〕を〔林檎〕と見る見方に拠っての話として)〔パリスの審判〕も〔エデンの誘惑〕も双方ともに林檎を巡るやりとりとなっている]
- ・[双方ともに誘惑の具として女——片方がヘレン、片方がイヴ——が用いられている]
- ・[双方ともに誘惑の結果が誘惑対象に(女難による)破滅的結果をもたらしたとのものである——パリスの審判の結果、パリスが王子となっていたトロイアは滅亡に至る戦争に突入した。他面、エデンの誘惑の結果、アダムとイヴは至福の楽園からの追放を見た——]
- ・[(パリスの審判でのアフロディテの属性、また、エデンの園で誘惑をなした蛇と結びつけられてきたルシファーの明けの明星と結びつく属性に着目して)双方ともに誘惑者が〔金星〕と濃厚に結びつく]

かたちとなっている]

・[(小さなことながらも)双方とも爬虫類の類と接合する素地があることとなっている ——エデンの園の誘惑については言うまでもないとして、パリスの審判にてその取得が争われたとの黄金の林檎については[ヘラクレス第11功業を巡るギリシャ神話にて100の頭を持つ竜(半ば蛇のような存在とも先述)たるラドンという存在に守られていると伝わっている]とのことがある—— ]

・[上にて述べてきたことらを加味したうえでよりもって重みが理解できるようなところとして19世紀欧州人などによって[黄金の林檎の園]と[エデンの園]は同一性を帯びていた存在であると述べられていたとのことがある]

他面、

### **[ [エデンの誘惑の蛇(サタン・ルシファーに比定される存在)] およびケツアルコアトルの間の多重接合性 ]**

に関しては次のような接合性のことを(典拠と共に)挙げてきた。

・[エデンの誘惑者もケツアルコアトルも双方とも[蛇]としての存在となっている ——[人語を解するエデンの誘惑の蛇]と[羽毛の生えた蛇としてのケツアルコアトル]とのことで両者とも蛇である—— ]

・[エデンの誘惑者もケツアルコアトルも双方ともある種の[文明の促進者]とでもいべき存在となっている —— [ケツアルコアトルにあっての神話に見る文化的英雄としての描写]と[エデンの知恵の樹の実による「裸体を恥じての」知恵と文明の向上]との観点で接合性が観念できる—— ]

・[エデンの誘惑者もケツアルコアトルも双方とも[金星]と結びつく存在ともなる —— [エデンの園の蛇]の場合は明けの明星の体現存在としてのルシファーと見た場合に[金星]の体現存在となる。[ケツアルコアトル]は金星の体現神格として神話が語り継いでいる存在となる—— ]

・[エデンの誘惑者もケツアルコアトルも双方とも信ずるものを裏切り、破滅的結果をもたらした存在となっている —— [エデンの蛇]にあっては旧約聖書にあっての創世記の内容および新約聖書・黙示録の内容が背信・裏切りの所在を示している。他面、[ケツアルコアトル]については(それが征服者のスペイン・サイドにいかようなる脚色がなされていようと) [一の葦の年(1519年)にてのケツアルコアトル帰還伝承]が[コンキスタドレス(スペイン征服者ら)征服活動]を容易ならしめ、それに付随しての土地収奪と疫病の流布による人口の激減が具現化見ているとのことがある—— ]

・[エデンの誘惑者もケツアルコアトルも双方の欺瞞が体現した場に接合性が見てとれるとのことがある —— [アトランティス]を[アメリカ]と見る見方が歴史的に存在する。そちら[アトランティス]と見做されもしてきた[アメリカ]で崇められてきたのがケツアルコアトルとなるわけだが、といったなかで[アトランティス]については[黄金の林檎の園]との結びつきが問題視されてきたとの背景がある。[黄金の林檎の園]については上述のような[黄金の林檎を巡るパリスの審判]と[禁断の果実を巡るエデンの園の誘惑]の接合点もあってであろう、[エデンの園]との接合性が一部にて論じられてき

た場となる—— ]

(直上言及のケツアルコアトルおよびエデンの誘惑の蛇の接合問題については(先立って細かくも解説なしのように)次のことらもまた類似性の環に入るものとして挙げられる)

(※1:より幅広くも見れば、[ケツアルコアトルの信徒らに破滅を進呈した]のが[キリスト教徒](たるスペインの征服者ら)となっていること、[サタンの菓籠中になった会衆に(新約聖書の黙示録で描写される)ところとして]打ち勝った]のが[キリスト教徒]となっていること「にも」相似形を見出せるようになっている)

(※2: **出典(Source)紹介の部 53(4)**にて示さんとしてきたように[スペインがアステカ文明圏に破滅的改変を強いた]なかで疫病——新大陸の人間が免疫を持っていなかった旧大陸(欧州)由来の天然痘——の猖獗(しょうけつ)が戦乱と共に現地人を容赦なく殺していったとされる。対して、聖書黙示録——[古き蛇にして赤い竜としてのサタン][偽預言者][偽りの獣]がその会衆を破滅に誘(いざな)うとの記述がなされている聖書の末尾におさめられている文書たる黙示録——では[黙示録の四騎士(なる存在)が究極的破滅(墮地獄)に至る前段階にて人間に災厄をばらまく]との記述も認められ、[戦乱]と[疫病]との伝でのアナロジー(一致性)の問題もアメリカ大陸の出来事と『黙示録』の間にはみとめられるとのことがある)

---

以降の話にあつては以上のこと、

[ [黄金の林檎を巡るパリスの審判にての誘惑] および [禁断の果実を巡るエデンでの誘惑] の間の多重接合性]

[ [エデンの誘惑の蛇(サタン・ルシファーに比定される存在)] およびケツアルコアトルの間の多重接合性]

が

[多くを結びつける留め金]

となっている所以を強くも示していく所存であり、

[ [エデンの園の誘惑の蛇に比定される存在] であり [ケツアルコアトルと記号論的に結びつくとの特性を帯びている存在] である (とのことを先述なしで) [ルシファー] ]

がいかにして [ブラックホール「的」なるもの] と史的に古文献の中で結びつけられてきたのか、文献的事実——古文献にこういう記載が誰にでも認識出来るのかたちで書きとめられてきたとの事実(philological truth)——として摘示なしでいくこととする。



より具体的には

[[ルシファー] こと [サタン] が地獄の最下層に囚われていることを描くダンテ『地獄篇』およびミルトン『失樂園』の両古典の字面レベルでの描写形態にて [(今日的な意味で見た場合の)ブラックホール(の質的類似物)] が見てとれるとのことがあり、その絡みで問題となることもある]

とのことを契機にしての解説を講じていくこととする(※)。

(※その点、筆者は

「ダンテ『地獄篇』にブラックホールのことそのものが描かれている」  
などという「頭の具合の実によろしくはない」と受け取られようことを語気強くも(遮二無二押しつけるように)述べたいのではない。

そうではなく、

「古典『地獄篇』にて [今日的な物理学分野にあつての申しように見るブラックホールの「質的近似物」] が露骨かつ多重的に登場を見ている」と指摘し、その絡みで、問題になることが山積しているとつまびらやかにしたいのである。銘々誠実な読み手におかれては履き違えることはないことか、とは思いますが、一応、その点からして断っておく

同じくもの点につき細かくは直下続けていく解説部をご覧にいただきたい (: またさらにくたくたくも述べておくが、以降摘示の段はそのように述べられて「しまう」ことを [現象] として摘示することに注力しているのであって、そのように述べられるようになっていくことの [機序] (具現化理由) につき揣摩臆測の類を挙げ連ねながら云々しようといった類の話ではない。[現象] 摘示だけで [選択と行動を求めるやりよう] としては十分のはずであると見ながらも、である)。

#### 【 本稿冒頭部にあっても同じくものことを記載の「本題から離れての」断り書きとしまして 】

それこそ「ざっと見」にてご一読いただくだけでもご理解いただけることかとは存じますが、当文書は「非常に細々とした表記をなしているもの」となります。その点に関して文書製作者としては(非常に細々とした表記がゆえに)読み手の方々が文書主筋となるところを見失われかねない — (当文書が「なぜ」「どのような」問題意識でもって作製されたものなのか、その指し示事項は究極的には奈辺にあるのかについて把握するうえで難渋される(そして文書検討をおやめになる)とのことになりかねない) — とのことを当然に危惧・懸念いたしております。それゆえ、ここ断り書きの部にて次のこと、注意喚起なさせていただきます。

(以下、文書内容についての注意喚起として)

⇒「当文書の主要なる問題意識と訴求事項は当文書タイトル — すなわちもってして

Entities that physicists refer to as Black holes , already fulfilled many extraordinary

Predictions , and firm Guilty Intent『物理学者の類がブラックホールとよびならわしている存在

ら、既の実現を見てきた異様な予見的言及、そして、確たる他害意志の介在問題について』

とのタイトル — にすべて集約されています。いかに細々としたものであれ、当文書中の記

述はこれすべてそちら文書タイトルで表しもしているまさにそのことを摘示「しきる」ために必要と

判じてのものとしてなしております(脈絡・文脈なくも漫談じみた無為なるはなしを展開しようとの

観点は全くございません)。微に入って細やかな表記はそうもしてこれすべて【一つの目的に

奉仕するために必要な手順】と判じてのものなのですが、他面、読み手銘々が一体全体何が

問題になっているのか捕捉しづらいとのことが — (ざっと見を重んずるとの嗜好が強い方ほど)

— であろうかと書き手てずから深く懸念していることに相違ありません。そこで本書を真摯に検討

なそうとの方々におかれましては当文書が「厳密な意味での段階説明方式を採用している」との

ことを何卒ご理解の上でとにかくも当文書を最初から順を追って検討なすことを願わせていただ

きたき次第です — 階段を上るような式での検討をなしていただければ、(フィクションならぬ

告発文書としての完全なるノン・フィクションとして当然に作製しているものなのではあります)

当文書があたかも物語性の強い小説作品のように首尾一貫しての流れに基づいて書き進めて

のものであること、ご理解いただけることか、とは思いますが — 」



# Inferno『地獄篇』などの古典に見受けられるブラックホール近似物 と既に摘示してきたことらとの異様な多重的相関関係について

先行するここまでの流れにあっては

[[黄金の林檎を巡ってのギリシャ神話に見る誘惑] および [エデンの園にての誘惑] の  
記号論的接合性]

がいかようにして多重的に

[ブラックホール生成可能性を伴うとされるに至った LHC 実験にまつわる命名規則]

と相通じている(そも「なってしまうている」とのことについて多くの典拠となるところの指し示しを  
なした。

その上でつい最前の段では

「これより([記号論的・留め金]となることを部分的に示してきた)[ルシファー]という存在  
について「ブラックホールとの兼ね合いで」さらに取り上げるべきことを取り上げる」

と申し述べ、それは具体的には

[[ルシファー]こと[サタン]が地獄の最下層に囚われていることを描くダンテ『地獄篇』  
およびミルトン『失樂園』の両古典の字面レベルでの描写形態にて[(今日的な意味で  
見た場合の)ブラックホール(の質的類似物)]が見受けられ、その絡みで問題となること  
が「ある」]

とのことにまつわる話となると申し述べた。

以上のこと、あらためて記したところで、ダンテ『地獄篇』およびミルトン『失樂園』の西洋二大古典  
に[ブラックホール]との絡みで問題になるとの側面が伴うとのことにつき、その典拠となるところをこれ  
以降、順次摘示していくこととする。

出典(Source)紹介の部 55

# SOURCE

# 55



■ 外挿  
付記とし  
まして：  
ここ【典  
拠紹介  
部 55】  
には「極  
めて長く  
も」の  
p.801 か  
ら p.825  
との頁数  
を割いて  
いもする  
ため、以  
降【典拠  
紹介部】  
(従たるところ)と  
【指し示  
しの主軸  
たるところ】の関  
係について惑われ  
ぬよう、  
何卒ご注  
意いただ  
ければ、  
と申し述  
べさせて  
いただき  
たき次第  
です。

ここ出典(Source)紹介の部 55)にあっては —さらに後の出典紹介部(出典(Source)紹介の部 55(2)および出典(Source)紹介の部 55(3))にて内容を補うとの前提の下に— 、

[ダンテ『地獄篇』およびミルトン『失樂園』に今日的な意味でのブラックホール類似物の描写が見てとれることにまつわる解説「兼」典拠紹介]

をなすこととする。

→

さて、早速、本題に入って述べるが、『地獄篇』に込められたブラックホールがらみの寓意とは以下の I. から III. のような観点から指し示せるものである。

I. 最初に前提となる[事実]の話をなす。一言で述べれば、『神曲』(地獄篇)という作品は [地球の中心]

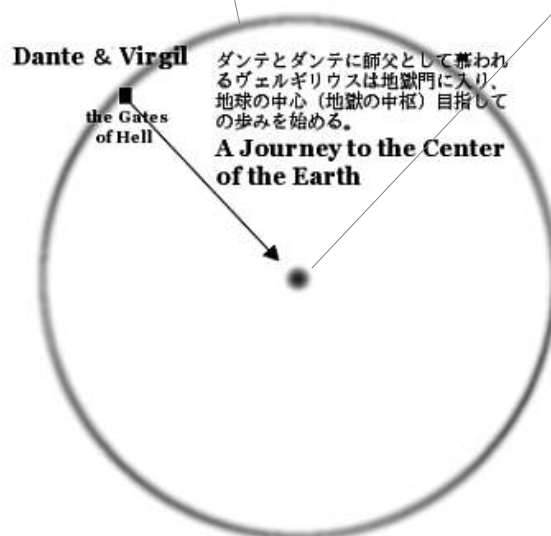
であるとの設定の、

[地獄の中心]

向けて地下を下る、という粗筋を有した作品である (自らを物語の主役として登場させている作者ダンテは森の中で人生に迷っていたところを「地下に下る」との地獄の旅に誘われることになり、地球中心に向けて地下へ地下へと下っていく。『地獄篇』とはそういう物語である。尚、そのことを示す原著表記はさらに続く段で抜粋する)。

さらに述べれば、興味深いことに(13世紀から14世紀の画期に成立したものであるにも関わらず)『地獄篇』は地球を球形に見立てている作品であるばかりではなく、なおかつ、地球中心点を

[重さ(質量)「が」(周囲を)引きずる力 —要するに重力— が等しく働く中心的ポイント] であるとはきと描き出している作品ともなっている(※)。



(※欧州中世暗黒時代には「地球が球形である」などとの説は無論、容れられていないものだった。地球球体説が公に主張されだしたのはパオロ・トスカネッリが1474年に同説 —コロンブスがインド目指してアメリカ航海に出たのも同・地球球形説ゆえに、であるとされている— を唱えだして折のことからであるとされている。

にも関わらず、ダンテはそれに先立つこと150年以上前(伝わるところのダンテ没年は1321年)の13世紀から14世紀画期に成立した『神曲』(『地獄篇』)で地球が球形であるとの描写(直下該当部摘示)をなしている。

それにつき、高校の[世界史]の授業をまじめに受けてその知識を保持されている方は思うかもしれない。

『古代ギリシャ人の知識人らが地球が球形であるとまで述べてその周長まで求めていなかったか』。

上は事実である(とされる)。

すなわち、古代ギリシャ人に地球が球形であるとの知識が(船から見る北極星などの概況などを通じて)あったということ、そして、今より2200年以上前の紀元前3世紀に活躍したヘレニズム期学者エラステネスが地球の周長を南中高度と円周計算の知識を活かして(太古にあっては驚異的なことに)誤差10数パーセントで計算していたということは事実である(とされている。については和文ウィキペディア[エラステネス]項目を閲覧いただくだけでも確認いただけることである)。

しかしながら、といった古典時代の叡智はキリスト教と封建主義王侯の結託が無知を促進した中世暗黒時代に欧州では破壊されつくされていた、というのが常識的な歴史理解となる(：につき、疑わしきは自分で調べるなり身近の歴史通に確認などされてみるとよいだろう)。

そういった[失われた(とされる)古典時代の叡智]が保持されていたとされるイスラム圏の文物やそれら文物にまつわる口伝経緯で文豪ダンテが[失われた(とされる)叡智]

を個人的に「再」発見していた可能性がある、とのことは確かに考えられるし、常識人はそういう話柄を用いるであろう(：地獄篇を含む『神曲』については[ダンテの時代には歳差運動によって欧州からは確認不可能になっていた南十字星]に対する言及をなしているとのことも一部で知られているが、それについても[イスラム圏で欧州で一旦は失われた古典時代知識が応用発展されて構築されていた科学体系(アラビアの天球儀など)のダンテの観察可能性]に因を求めることもできなくはなく、実際にそういう申しようがなされていることも聞き及ぶ)。

しかし、ダンテがガリレオ、続いてのニュートン以前の「万有引力の法則など夢もまた夢」であった時代に地球の中心部をして

[物の重さが全方面から等しくも引きつけんとするポイント]

であるとほきと表記していたこと(下にてても古典よりの原文引用をなす)は——(ガリレオやニュートン以前にも[重力]の拙い概念(アリストテレスのそれに代表されるような概念)はあったとされるのであるが)——[尋常なること]と見ていいことではない(と考えられるだけの素地がある)。

近代がその黎明期となっている古典力学にては[重力]とは

[[引力](質量に起因するところとしてあまねくも働く物と物とが引き合う力)と[遠心力](地球の回転に伴う慣性の力)の合力]

と(教科書的に)定義なされているもの、そして、(時間と空間を一体化した[時空]を観念するに至ったとの)アインシュタイン以後の観点では[重力]とは

[物質(のエネルギー・質量)による時空の歪みに起因する力]

といった定義・理解のされ方を見ているものとなるわけだが、といった見方を科学的見地の発展に伴ってなされるに至った[重さの本然たる力](重力)に関して

[重さ(物質の質量)「が」引いてくる本源たるポイント]

[それが全方位等しくも作用しているポイント]

との形容でもって、(質量が【主体(主語)】となって引きこむ力が具現化しているとし)、



アインシュタイン以後の観点では【重力 Gravity】とは【[引力](質量に起因するところ)としてあまねく働く物と物が引き合う力】と【遠心力(地球の回転に伴う慣性の力)の合力】などと近代まで定義されてきたものを越えて、【物質(の質量あるいはエネルギー)に由来する時空の歪みに起因する力】と定義されている(たとえばもってして英文 Wikipedia [History of gravitational theory] 項目に現行、"Einstein proposed that spacetime is curved by matter, and that free-falling objects are moving along locally straight paths in curved spacetime." と表記されているようなところである)。ここで「こじつけがましい(far-fetched)主張である」との批判もまぬかれえぬところか、とは思うのだが、表記引用部に見どころの【the point to which [things heavy] draw from every side】とは【ものの重さ(質量)「が」周囲を引き込むポイント】と訳されるものである(主語・主体が物質質量になっており、それが周囲を引っ張っているのだと表記されている)。そこに見る重力観は(今日の)アインシュタインの見方に近いものであること、きちんと読解いただければ、理解なしでもらえることか、と思う(ただし、そうしたこと【先覚性】の範疇に入らなくとも、そう、筆者の謬見によるところでも、「はきと」問題になる「他の」ことらが存在することに相違はない)。

## [地球中心] (現代科学ではマントル・外核にくるまれるかたちで最も密度が高い内核 Inner Core があるとされている領域 )

のこを持ち出しているのは驚異的な業ともとれる。これより詳述していくこととなる [ブラックホール質的近似物] との兼ね合いもあって、である)

では、具体的にはダンテはいかに『地獄篇』で地球を球形に見立て、なおかつ、その地球中枢をして【重さ(質量)に関わる中心的ポイント】であると描いていたのか。

ダンテと彼の地獄での案内役たるヴェルギリウスの間で「地獄の最下層たる地球の中心部コキュートスを超えて反対側に出た折に」なされた会話を挙げるのが簡便な途であるところであつたのでそうすることとする。

まずは直下にて岩波文庫より出されているダンテ『神曲』(地獄篇)の大正期に敢行された邦訳本(山川丙三郎訳本の『神曲 一地獄 上』) — 大正期文語体のものであるのにも関わらず、未だに書店で最も流通しているダンテ『地獄篇』訳本 — からの該当部引用をなす(尚、そちら大正期訳本については重力にまつわる際立つての先覚性 — アインシュタイン的理解に近い先覚性(先述) — が同時期欧米にて流通していた英訳版に比して見えない)。

(岩波文庫版『神曲 一地獄 上』(山川丙三郎訳)第三十四曲 p. 205—p.206 よりの原文引用として)

“汝のかなたにありしはわがくだれる間のみ、われ身をかへせし時 汝は重量(おもさ)あるものを四方より引く点(てん)を過ぎ 廣(ひろ)き乾ける土に蔽はれ、かつ罪なくして世に生れ世をおくれる人その頂点(ちようてん)のもとに殺されし半球を離れ いまは之と相對(あひむか)へる半球の下にありて、足をジユデッカの背面を成す小さき球の上におくなり かしこの夕はこゝの朝にあたる、また毛を我等の段となせし者の身をおくさまは今も始めと異なることなし”

上の大正期訳本は訳もどうかととらえられ、かつ、現代人には何を述べているのか分からぬものである(⇒筆者もまた岩波文庫版の全篇、上の如しで訳文がつづられている訳本、何故なのかいまだに書店書架に据え置かれている訳本を買ってしまい、『大正期の間でもないのでこんなものを十全に読み解けるわけなからうが』と『神曲』を放り投げるところであった。読者が『神曲』内容に興味を抱かれているのなら、そして、内容把握をなしたいというのなら、一多ある簡訳版ではなく — [完訳版としての現代文訳のもの] を読まれるのを勧める)。

そこでさらにラテン語から英訳された文を引き合いに — Henry Wadsworth Longfellow (ヘンリー・ワーズワース・グッドフェロー)、アメリカではじめてダンテ『神曲』を翻訳した19世紀の同文人の手になる訳を引き合いに — 、拙訳を付して問題となる部位を挙げたい(英文の方はオンラインで容易に特定できるものとなる)。

(問題となる案内役ヴェルギリウスとダンテの会話の部位)

That side thou wast, so long as I descended; When round I turned me, thou didst pass the point **To which things heavy draw from every side**, And now beneath the hemisphere art come Opposite that which overhangs the vast Dry-land, and 'neath whose cope was put to death The Man who without sin was born and lived. **Thou hast thy feet upon the little sphere Which makes the other face of the Judecca. Here it is morn when it is evening there**

[不足部をかなり補っての拙訳として]

「(地獄の中核地点へ向けて地下へと)私が下へ下へと下っていた際だけなのだ

よ、君(thouは「君」の古語)のいる方面が

[(地球の半球の)通り過ぎた向こう側]

だったのは。私が(地獄の底を突きぬけて)反転し振り返った折、(脇にいた)君はもはや

「あらゆる方向から物の重さ(質量)が引きつけんとする地点」

を通過していたわけだ。そして、いまや我々は(地球の)半球の下側、そう、乾いた大地に覆われ罪なくして生まれ生きた御仁、そのうえで殺された御仁(設定上、イエスのことである)のおられた(地球の)半球の反対側にいるのだ。

足をもってジュデッカ(地獄の最下層たる氷地獄コキュートスの中心部)の反対側をなす矮小な半球の上に置いているのである。あちらの半球で夜ならばこちら側の半球では朝なのである」

(ここまでを引用部に対する拙訳の部とする)

上の摘示部でもってもすんなりとご理解いただけているか不安なところであるからさらなる絞り込み抽出をなすが、

「ダンテと案内役ヴェルギリウスは 「重さの中核となっている地点」 (正確には To which things heavy draw from every side 「あらゆる方向から物の重さが引きつけんとする地点」と描写される地点) としての 「地獄の中核」にして「地球の中心」 から反転して「球形構造をとる世界(地球)の地下にあつての反対側に出た」

と『地獄篇』には —— Philological Truth [文献的事実] の問題として—— 記されているのである(：ダンテ案内役ヴェルギリウスが『地獄篇』の末尾に近しき段でダンテに教え諭している部位にてそのように記されている)。

ここまでもってしてダンテが『地獄篇』で

「いかに地球を球形に見立て、なおかつ、地球中核が重力の本源たるポイント(しかもアインシュタイン以後の「重力」観に近しいと易々と見受けられる式での【重力の本源たるポイント】)として描いているのか」

の話をしたとして(納得いただけていないとのことであれば現代文によってなる完訳版の『地獄篇』などをお手にとられてみることを薦める)、次の話に移る。

## II. ダンテが

「地球を球形に見立て、なおかつ、その地球の中核をして [重さが引く力] が等しくも働く本源的ポイントであると描いている」

とのことの時点で[蒙昧の中に片足を突っ込んでいる時代の人間]としては驚異的な業ともとれるのだが(ただし常識的話柄でもそうしたことが[不可能なこと]とは看做されないと説明される理由についても上にて多少言及している)、ダンテの『地獄篇』にて重力の中核たる領域に

「(現代科学から見た)ブラックホールの要素」

が付加されているとなれば、無論、それは[最早、人間業ではない領域に突入している]とのことになってしまう(であるから、大概の人間はそこに[偶然の一致]的側面しか見出そうとしないところだろう。ここではそうした見立てとは相容れないような事実群を摘示するものだが、とにかくも、の話としてである)。

それにつき、まずもって述べるが、今日の科学から見るブラックホールのなるものはダンテ死後、600年ほど経ってのアインシュタインの一般相対性理論の呈示(およびシュバルツシルトという科学者の解法による存在可能性[示唆]とチャンドラセカールという科学者の解



法による存在[明示] によって姿を現し始めたものである（と説明されている。1796年にラプラスの悪魔との観念の提唱で有名な数学者ラプラスらが提唱した「重力が強すぎて光を逃がさない星たる暗黒星」とのものとは異なる観点でのブラックホール理解、「時間までもが」歪んだ重力の化け物としてのブラックホール理論登場の厳密なる端緒期については和文ウィキペディア「ブラックホール」項目の理論史項目にても記載されているところとしてその淵源が1930年代のチャンドラ・セカール挙動にあるように明示されている（のでその部を確認してみるのもよからう——それにつき、ブラックホール理論登場にまつわる沿革については本稿のさらに後の段（かなり後の段）でも科学書などよりの引用をなしつつ説明するとの所存ではあるが、同じくものことにまつわっての細かくもの理解を求めたいとの向きには（筆者も読んでいる著作だから勧めるところとして）**Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes** 邦題『ブラックホールを見つけた男』（草思社）との著作などを讀まれてみるのもよいか、と思う——）。

そのようなもの、相対性理論に基づき「時間までもが」歪んだブラックホールのことをダンテが知りえたなどと述べるのは「穴居生活の原始人が微分方程式を知っていた」（あるいは「原始人がニュートンよろしく微分法と積分法を合算して天体の運航を指し示して見せた）」というぐらいいやなナンセンスなことではある。

そのように（要らずも、といった）前置きをなしたうえで述べるが、問題となるのは地獄の中核、すなわち、重力の中核部の「硬直的状况と無限粉碎を伴う牢獄」に関する記述である。

ダンテが重力が向う中核部として描き出した部位については

「罪人たちが重力の中核の氷地獄でルチフェロ（悪魔の王）の顎門（あぎと）にて永劫に噛み砕かれている」

との実にシュールなそのありように「ブラックホールとの結びつき」が見て取れるようになっている。

それにつき、古典の内容をより細かくも指し示すことからはじめるが、ダンテは「重力における中心的ポイントたる地球中心地」を最も罪深い罪、「裏切り」の罪を背負った者たちのための「氷地獄」（コキユートス、いいだろうか、氷地獄である）として設定して、その重力の中核地点——先立って引用なした通りの式での重力の中核地点——で氷漬けになった悪魔の王ルチフェロ（ルシファー）が人類の代表的裏切り者ら、すなわち、「イスカリオテのユダ」（キリストを裏切った男）「マルクス・ユニウス・ブルータス」（シーザーを裏切って殺したローマ人）「ロンギヌス・カッシウス」（上と同罪のローマ人）を「三つの顔と口」で永劫に噛み砕き続けていると『神曲』（地獄篇）で描いて見せている（：要するに重力の向かう先たる中核部たる氷地獄にて「硬直的状况と無限粉碎を伴う牢獄」が開いていることになる）。

上の通りの記載が古典にてなされていることについては——原典内容をいちいち問題視するのも煩瑣なのであるが、文献的事実を重んじつつその事実を明示するとの本稿スタンスより細々と紹介するところとして——直下引用部を参照されたい。

（岩波文庫版『神曲 一地獄— 上』（山川丙三郎訳）第三十四曲 p. 204—p.205  
よりの抜粋として）

悲しみの王土の帝（みかど）その胸の半まで氷の外にあらはれぬ、巨人をその腕に比ぶるよりは我を巨人に比ぶるかたなほ易し、その一部だにかくのごとくば之に適（かな）へる全身のいと大いなること知りぬべし 彼今の醜きに応じて昔美しくしかもその造主（つくりぬし）にむかひて眉を上げし事あらば一切の禍（わざわ）ひ彼よりいづるも故なきにあらず 我その頭に三の顔あるを見るにおよびてげに驚けることいかばかりぞや、一は前にありて赤く 残る二は左右の肩の正中（ただ

なか)の上にてこれと連り、かつ三ともに鶏冠(とさか)あるところにて合へり 右なるは白と黄の間の色の如く、左なるはニーロの水上(みなかみ)より来(きた)る人々の如く見えき また顔の下よりはかかる鳥につかしき二(ふたつ)の大きな翼いでたり、げにかく大なるものをば我未だ海の帆にも見ず 此等みな羽なくその構造 蝙蝠の翼に似たり、また彼此等を搏ち、三の風彼より起れり コチートの悉く凍れるもこれによりてなりき、彼は六の眼(まなこ)にて泣き、涙と血の涎とは三の頤(おとがい)をつたひて滴(したた)れり また口毎にひとりの罪人を歯にて砕くこと碎麻機(あさほぐし)の如く、かくしてみたりの者をなやめき わけて前なる者は爪にかけられ、その背しばしば皮なきにいたれり、これにくらぶれば噛まるるは物の數ならじ 師曰ふ、高くかしこにありてその罰最も重き魂はジユダ・スカリオットなり、彼頭を内にし脛を外に振る 頭さがれるふたりのうち、黒き顔より垂るるはブルートなり、そのもがきて言なきを見よ また身いちじるしく肥くとみゆるはカッソオなり、されど夜はまた来れり、我等すでにすべてのものを見たらばいざゆかん

※何故か今日にあっても大正期文語にて記載されての版が流通しているとの上の岩波文庫版『地獄篇』の原文引用部につき(アメリカではじめてダンテ『神曲』ラテン語から英語に翻訳した19世紀の文人 Henry Wadsworth Longfellow のオンライン上流通版に認められる英語訳を参考にしつつ) 補いつつもの現代語訳をなせば、下のようなものとなる。

「悲嘆の園(氷地獄たるコキュートス)の帝王(サタンのこと、『地獄篇』表記でいうところのルチフェロ)は胸より下部は氷に覆われ、胸より上部は氷の外に出ているとの有様となっており、そのサイズと言え、「その腕を巨人と比べるより自分(ダンテ)を巨人に比べる程が容易」であるとの途方もなさ、一部でそれなのであるから、全体の大きさは自ずと知れるところである。その巨大なルチフェロは現況の醜怪なる容貌に相応しきところとして造物主たる神に齒向かったのであるから、そこより一切の災厄が生じているのも理由ないとのことではない。私(ダンテ)はそのルチフェロの頭部に三つの顔がついていることを見て極めて驚かされた。そのうちの一つは前方の赤色の顔で、残る右と左の顔は肩の上にあつて中央部のそれと幹となるところでつながっている。右の顔の色合いは白と黄色の中間色のような色合いであり、左のそれは低地に流れ込むニーロ(ナイル)の水上に由来するのでは、と人々が見るような色合いのものである(オンライン上より古書にあつてのその表記を容易に確認できるとの英訳版では the Nile falls valley-ward とされている部である。山川丙三郎の訳は低地に流れ込む、といったニュアンスや、古ナイルの「古」といったニュアンスを割愛しているように受け取れる)。また頭部の下にあつては二つの巨大な翼が生えており、そのように巨大なものを海中を走る帆船にも見出したことがないとの規模のものであつた。その翼には羽毛がなく蝙蝠の翼に似ており、その翼がはばたき、それによって、コキュートスがことごとく凍りついている。彼(ルチフェロ)は六つの眼をもっており、涙と血の涎がその下あごより滴り落ちている。その口ごとに一人の罪人を麻を砕く用具のように歯で噛み砕いており、三人の者が責め苛まれている。うち、前方の(赤い顔の)口にて砕かれている者は爪で引っ搔かれ皮がないとの状況になつており、一層の責め苦しに苛まれている。師(たるヴェルギリウス)は言った。「一番高いところにて噛み砕かれているのは最も罪重き魂でイスカリオテのユダだ。彼は頭から噛まれて足だけ外に出し、その足をばたばたと振り上げている」(ヴェルギリウスは続けて述べ)「頭が下がつての黒き顔 —ここで山川丙三郎は英訳版と同様、古ナイルの色に「黒き」顔との訳を付している— にて噛まれているのはブルータスである(：山川丙三郎の岩波よりの『神曲』流通版(当方手元にあるのは第69刷のもの)には大正期の認識を反映してなのかブルート(何故かBブルートですらなくP「プ」ルート)と表記されているが、カエサルを

殺したブルータスのことである)。彼ブルータスはしゃべることだにできない。もう一人はカッシウスである。その姿、突き出た大きな肉塊とのさまである。さあ再び夜が巡ってきた。今は歩みを進める時だ。見るべきものはすべて見た」(Henry Wadsworth Longfellow の英語訳では But night is reascending, and 'tis time That we depart, for we have seen the whole.と表記されている部)

※尚、上にて古典よりの原文引用なししている部については和文ウィキペディア[神曲]項目にあつては 一以下、引用するところとして一 次のようにまとめられているところ「でも」ある。

⇒(和文ウィキペディア[神曲]項目上の記載として)

“地獄の中心ジュデッカのさらに中心、地球の重力がすべて向かうところには、神に叛逆した墮天使のなれの果てである魔王ルチフェロ(サタン)が氷の中に永遠に幽閉されている。魔王はかつて光輝はなはだしく最も美しい天使であったが、今は醜悪な三面の顔を持った姿となり、半身をコキュートスの氷の中に埋めていた。魔王は、イエス・キリストを裏切ったイスカリテのユダ、カエサルを裏切ったブルートウスとカッシウスの三人をそれぞれの口で噛み締めていた”

※さらに加えて付記しておくが、ダンテ『地獄篇』の地獄の最下層コキュートスではその中枢部に至るまでの氷の大河で裏切りの罪がゆえに永劫の氷漬けの刑に処されていると描写されている。和文ウィキペディアの[神曲]項目にての「第九圏裏切者の地獄」と振られての部にて現行記述されていることを原文引用するところとしての下の書きよりの通りに、である。

⇒(和文ウィキペディア[神曲]項目上の記載として)

“「コキュートス」(Cocytus 嘆きの川)と呼ばれる氷地獄。同心の四円に区切られ、最も重い罪、裏切を行った者が永遠に氷漬けとなっている。裏切者は氷に漬かり、涙も凍る寒さに歯を鳴らす”



上は [地獄の中枢の氷地獄に囚われた『地獄篇』ルチフェロを描いた挿絵] となる (Alessandro Vellutello の手になる 16 世紀(1534 年)の作品となる。無論、明示



され、[パブリック・ドメイン] 化された画像を出典としている)。

問題は、である。挿絵にてルチフェロが[人類の代表的裏切り者ら]を永劫に噛み砕きつつながら囚われているとのその領域がブラックホール特質と通底すると指摘できてしまうことである。

ここまで(出典挙げながらも)解説してきたうえで述べるが、  
「重力の中枢(たる地球の中心)で」  
「生前裏切りをこととした悪しき存在らが永劫に氷漬けになっての氷地獄が広がり」  
「その場の中枢で氷漬けになった魔王が三大裏切り者を永遠にかみ続けている」  
などという『地獄篇』の[設定]は  
[ブラックホール特質]  
と相通じるものである(そのように述べる論拠はこれよりの続く段にて挙げる)。

それにつき、普通に想像しうる限りは  
[サイズの自身よりもはるかに巨大な存在より噛まれ続けられれば、肉体など四散してしまう]  
と分かつ(想像がつく)というものではある。そこを『地獄篇』では人類の代表的裏切り者ら  
—キリストを裏切ったイスカリオテのユダとカエサルを裏切ったマルクス・ブルータスおよびロ  
ンギヌス・カッシウスの三者— は永遠に流血しながらも超巨大な魔王に噛み砕かれ「続けて  
いる」のだから、魔王ルチフェロが相当甘噛みしているのか、噛まれる方が超硬度肉体を  
持っているかといったことになるとでもいうのか、と妙な疑問すらわいてくる(それ自体想像力  
が実に貧困、といった話ではあるが)。

また、何故、地獄の中枢(火山で内容物を吐き出す地球の中心)が[灼熱地獄]ではなく  
[氷地獄]なのか、ということもある。ダンテが地球の中心(コア)が超高温世界(現実には地  
球の内核は金属製の超高温のものであると想定されている)と知っていたわけがないからで  
ある、などという話はさておきも妄言文書の聖書(の黙示録)にてさえも魔王が落としこま  
れる場は[硫黄の燃えている火の池]であるとされている(疑わしきにおかれては聖書電子  
版のダウンロードなどを通じてその点についてご確認いただきたい。その点、私の手元にあ  
る邦訳版新約聖書(1954年改訳版)の黙示録第20章第13節から第14節には引用するこ  
ろとして“海はその中にいる死人を出し、そして、おのおのそのしわざに応じて、さばきを受  
けた。それから、死も黄泉も火の池に投げ込まれた”と記載されている—書きようからお察し  
いただけることか、と思うが、筆者は宗教の徒輩などではないし、その同類の神秘家(あるい  
はそのふりをしている詐狂者ら)も忌んでいとの人間でもある—)。そこを、聖書にて火の  
池地獄と描写される地獄を[氷地獄]にアレンジしてしまっていることもまた妙に映りはする。

以上、注意喚起したうえで述べるが、問題となることとして、  
(一般論として論じられることとし)

**【「重力が向う先で氷漬けになったようなさまでありながらも粉々になる(シュールなことに破壊されているのに外から見た限り外見が保たれ続けている)との最期」は広くも説明されているところのブラックホール被吸引者の末路とそのまま重なるものである】**

とのことがあるのである。

重力の化け物たるブラックホールの中では外側から見ると内側の時間は無限大に延長されて映るとされる。その点、単に光がブラックホールの重力の歪みによって外側の人間に止まったような状況に変換されるからであるとも「とれる」が、物理学者由来の諸書籍ら(その一例は続く段で挙げる)にてははっきりと記されているように、

「ブラックホールの中と外とでは時間の尺度が完全に崩れる」

とされている。より具体的には重力赤方偏移としても知られる現象によってブラックホールの外側の人間の時計から見てブラックホールの内側の人間の時計の針の進み具合は無限大

に遅くなるとされている。

字義どおりブラックホール被吸飲者にとっては「一日千秋」以上の状況が現出するわけだが、それは重力の穴に落ち込んだ者らが無限の命を獲得したことにはならない（ブラックホール外側から見た限り、彼らは永遠の命の輝きを放っているようにも見えるとも想起できるようだが）。ブラックホール被吸飲者の主観では被吸引者は一瞬で潮汐力で粉々に分解されての圧死を遂げており、ゆえに、オーソドックスな理解では外側の世界の人間がそうしたありようを錯視することにもつながるといのは本来的には【既に死んだ者らの存在の影】にすぎないとされている（尚、述べておくと、右はあくまでも私が「科学読み本らに見出した思考実験」上の話にすぎない。現実にはブラックホール被吸飲者がブラックホールに吸引されるまでのプロセスを外側から確認することは不可能である「とも」されている）。

上にて述べていること —（ブラックホールの内と外では時間の圧倒的差分が生じ、内側では「一瞬の死」（引き伸ばされ粉々になっての死）が待っている一方で外側では「時間が止まったように凍りついたさま」が観念されるなどと述べられていること） — についての出典紹介をなしておく。

### 【ブラックホール被吸引者の末路が粉々になりつつもの引き伸ばされての最期であるとされていることについて】

紐理論の提唱者として知られる著名物理学者レオナルド・サスキンドの著書、**THE BLACK HOLE WAR** (邦題)『ブラックホール戦争』（訳書は早川書房刊）— 続く段でもその内容を問題視することになる[ブラックホール理論の発展の背面にあっての科学者らの相克を主軸として描く]との体裁の科学理論解説書— にあっての p. 40—p. 41 には次のように記載されている。

(原文引用するところとして)

“もしあなたが太陽一個分の質量(1 太陽質量という)のブラックホールへ落ちたら、潮汐力はそんななまやさしいものではすまない。ブラックホールの小さな体積の中に質量がぎっしり詰まっているために、重力は地平線の近くで非常に強くなるだけでなく、非常に不均一になる。(中略) そうしたブラックホールの重力場はひどく不均一なので、身長 200 マイルの人の場合と同じように、その重力場にとってあなたは大きすぎるのだ。地平線に近づくまでに、あなたは変形されて、歯磨きのチューブから絞りだされた練り歯磨きのように なってしまおう”

(引用部終端)

上の引用部ではブラックホール被吸引者の末路が「歯磨きのチューブから絞り出された歯磨き」として形容されている(いわゆる Spaghettification (スパゲティフィケーション)、[スパゲティ化]などと専門家らに呼称される状況でブラックホールに呑まれた者は原子レベルにこなごなに破壊されながらスパゲティよろしく無限に引き上されていくとされる)。

### 【微塵に碎かれ引き伸ばされているブラックホール被吸引者の時間が外側から見る限りは「停止」しているように見える点について】

ブラックホール被吸引者の末路が凍り漬けにされたように止まったように見えるなどと形容されていることについて本稿筆者が「分かりやすい」ととらえているところの科学読み本、そして、邦訳版を読した限り時計の時針の使い方などに興味深いものを感じるとの著作『**2063 年、時空の旅**』（講談社刊行、著名な米国の科学系物書きであるクリフォード・ピックオーバーの手になる門外漢向け科学理論解説書の訳書）の記述を引くこととする。同著（『**2063 年、時空の旅**』）にては物語形



式で「ブラックホール被吸引者末路」について次の通りの言及がなされている。

(『2063年、時空の旅』p.234よりの原文引用として)

“もしヴァーユがブラックホールに近づきすぎたらどうなるだろうか。琥珀に閉じこめられた古代のアリのように、ヴェーユは事象の地平面で永久に凍りついたように見えるだろう。そして彼の姿は薄くなって消えていく。現実には、彼の身体は事象の地平面を突き抜け、特異点に向かって落ち込んでいくのである”

(引用部終端．尚、文中に認められるヴァーユとは面白味を込めて説明のために引用元書籍にて持ち出されている挿話の中に登場する架空のキャラクターである)

また、直近にてそこよりの引用なししており、また、これよりの本稿の続く段でもその内容を意図して問題視することになるとの著作、物理学者レオナルド・サスキンドの手になる「ブラックホール理論の発展の背面にあつての科学者らの相克を描く」との体裁の著作たる『ブラックホール戦争』にあつては「同様のこと」につき次のような記載がなされている。

(『ブラックホール戦争』p.49—p.50により原文引用するところとして)

「アリスが帰還不能点の方へ漂っていくとき、同じことが彼女の歌声に起こる。最初に、ボブは262ヘルツで音を聞く。それから音は200ヘルツ、次に100ヘルツ、50ヘルツというふうに変わっていく。帰還不能点に近いところで歌った歌声は、脱出するのに長い時間がかかる。(中略)しかし一連の音波がボブに届くのにかかる時間はどんどん長くなるので、アリスに関するすべてのことが遅くなってほとんど止まってしまう。ボブが最後の波を感じとるには無限の時間がかかる。実際、ボブから見ると、アリスが帰還不能点に達するには、無限の時間がかかるように見える。(中略)ボブにとっては、彼が聞く音から判断するとアリスが帰還不能点に達するには無限の時間がかかる。だが、アリスにとっては、まばたきするほどの時間もかからない」

(引用部終端．引用部にて持ち出されているアリスとボブはたとえ上のネーミングとして用いられている。物理学者脳裏にあつたことは通信理論でよく用いられる「アリスとボブ」を用いてのネーミング規則と思われる)

振り返ってダンテ地獄篇の「氷地獄(コキュートス)の囚われ人ら」の話だが、彼らは重力の向う先(ブラックホールはまさに宇宙の蟻地獄、重力の牢獄である)で「時が止まったように」氷漬けにされ、なおかつ、「時が止まったように」肉体四散もせず何故か永劫に嘔み砕かれ続けている。

くどくもなったが、ここまでの内容にて何故、ブラックホールの寓意がダンテの『地獄篇』に見出せると言われているのか、(ウェブ上の言及英文媒体らはそのようなことを一切教えてくれないようなものばかりだが)、一面でながらもご理解いただけたのではないだろうか(と期待する)。

### III. ダンテ『地獄篇』とブラックホールの関係は上にとどまらない。

ダンテの『地獄篇』で描かれる地獄の入り口たる地獄門に刻まれた碑文のことからして問題となりもする。極めて有名なこととして地獄門には次のようなフレーズが刻み込まれている。

"Through me the way is to the city dolent;  
Through me the way is to eternal dole;  
Through me the way among the people lost.

Justice incited my sublime Creator;  
Created me divine Omnipotence,  
The highest Wisdom and the primal Love.  
Before me there were no created things,  
Only eterne, and I eternal last.  
All hope abandon, ye who enter in"

(訳文)

我を通して行き着くは憂いが都。我を通して行き着くは「永遠なる」悲嘆。喪われた者らの中にてこそこの我を通しての途。正義をなさしめんとする心が我が至高神を揺り動かさしめ、我を全能なるものとして造り賜うた。並ぶものなき高みにある叡智と根源的なる愛。我の前に造りだされしものはなく、ただ永遠の中にこそ、我は永遠に屹立し続けん。我の先に進まんとするものは「一切の希望を捨てよ」。

(※英文引用はヘンリー・ワーズワース・グッドフェローのそれよりのものとなる。和訳は(読みづらき19世紀英語を訳す時間を惜しんで)大正期ダンテ翻訳者の山川丙三郎の訳に多く依りつつも筆者がなしたものとなる)

いいだろうか。地獄門には門自体が語るように[この先は永劫の悲嘆の道に通じる道であり]、[先に入るものは一切の希望を捨てなければならない]と刻み込まれているわけだが、といった特質は【ブラックホールの質的近似物】(ここⅢ.の段に先立つⅡ.の段で地獄中樞のコキュートスが(現代的観点で見た場合の)ブラックホールと近いとの理由の一端を示してきた)を終着点にしている(との解釈が多重的に成り立ってしまう)『地獄篇』の[始点]に関する描写として相応しい、以下のような観点から「相応しい」と述べられる。

・地獄門碑文ではその先が[「永遠の」「悲嘆の」領域]に通じているとされるが、ダンテ『地獄篇』にて重力の中樞にあると描写されるコキュートスは神話における悲嘆の大河である(たとえばもってして英文ウィキペディアなどにて“Cocytus or Kokytos, meaning "the river of wailing" (from the Greek Κωκυτός, "lamentation"), is a river in the underworld in Greek mythology.”「コキュートスは[嘆きの川](ギリシャ語 Κωκυτός「嘆き」に由来する)としてのギリシャ神話における地下世界の川である」とされているとおりである —エルサレムにあるソロモン神殿の遺構が[嘆きの壁]ウェーリング・ウォールとされているようにコキュートスはリバー・オブ・ウェーリングとなる)。そうしたブラックホールと通ずる(理由の一部について解説した)コキュートスは『地獄篇』冒頭の碑文のように[永遠の]悲嘆の領域と解される。【外側の世界から見て「永遠に」死の間際の時を延長されている世界】がその場、コキュートス(【現代的な意味で見た重力】と通ずる場)にて展開しているからである。

・入ったものは希望を捨てよ、との【地獄門】隻句に見る表現。そこにブラックホールの外延部たる[事象の地平線]の先が不帰の地であるとされていることとの相似形が見て取れもする。ブラックホールの外延部[事象の地平線](イベント・ホライズン)を超えともはや[帰還の希望]など確率論的にありえない、そこに落ち込んだ存在は何人とも脱出できないとされることがあるからである(がゆえにブラックホール質的近似物たるコキュートス領域を終点にしているとの設定を伴っている『地獄篇』にあつての【そもそもの地獄の入り口】たる地獄門の碑文に強印象を与えるとの式で「一切の希望を捨てよ」と記述されていることからしてある種の整合性が見てとれるとのことがある)。それについては有名な話としてブラックホールにあつては光さえ逃げ出せない、とのこと「も」ある —ブラックホールがそこ

からの脱出速度(物体を永久に外側に向けて運動させるのに必要な速度)のハードルをきわめて高いものに据え置いているといった重力の化けものであるため、光の速度をもってしてもブラックホールの重力からは逃げ切れないとされていることもある(※ただし、である。ブラックホールの中の話ではなくぎりぎりの外側の話としてブラックホール界面部では対生成が起こっており、ブラックホール内側へと落ち込む粒子がある一方でブラックホール界面部ぐらい「からは」外へ飛び出す対となる粒子が存在すると「も」理論提唱されている。それによって、ブラックホール周囲でエネルギー保存の法則が破れ、ブラックホールは質量を失っていくという見解が現況、通説視されるに至っている。それが小さなブラックホールはすぐに蒸発するとの帰結につながるホーキング輻射という理論を巡る話である(車椅子のカリスマ、スティーブン・ホーキングが提唱した同仮説が虚偽であると我々が粒子加速器実験で生成されたブラックホールに呑まれて死ぬことになりかねぬ、との理論を巡る話)である)――。

上のような解釈がなせることを[考えすぎ]ととられるだろうか。

が、少なくとも多くの[著名な科学者]らはそうはとらえていない節がある。そして、中にはカリスマ物理学者も含まれている。

それにつき、この滑稽な世界で[カリスマ科学者]などと呼称されている人種が本当のことを言うのか、などと思われる方もおられるかもしれないが(ちなみにカリスマの原義はギリシャ語の[神の恩寵]にあるとされている。多くの「まっとうな」人間が【「神」という言葉で表される対象】をどう理解しているか、理解すべきかはここでは云々しないが)、とにかくも、**カリスマとされている者を含む著名な科学者らが彼ら由来の書籍内で** ―地獄篇にどういふ記述がなされているのか、それがどうして問題になるのか、という解説を全て端折った上での隠喩的申しように苛立たされるものしか見受けないのだが― **ブラックホールの話の流れの中で唐突に『地獄篇』やその中に見受けられる地獄門に対する一言だけの言及を(科学的側面が問題になるように)なしたりもしている**とのことは[事実]である。

例示する。下にて挙げるような学者らがブラックホールとダンテ『地獄篇』を結び付けている。

**スティーブン・ホーキング**(車椅子のカリスマ物理学者として知られ、かなり前より筋萎縮性側索硬化症による四肢麻痺の進行のため事前録音済みの合成された音声流すことで意思表示している学者。ブラックホール蒸発理論の大家) ⇒ **大ヒットを見た科学読み本『ホーキング、宇宙を語る』で「ダンテの地獄門」よろしく「ブラックホールの事象の地平線の先」が一切の希望を捨てなければならない不帰の地であるとの「たとえ」を持ち出す**(: 出典紹介として意欲ある者には容易に後追いできるとのかたちにての原文引用をなす。同点に関しては当方手元にある版のハードカバー『ホーキング、宇宙を語る ビッグバンからブラックホールまで』(早川書房)p.123-p.124 にあって **“事象地平に対しては、ダンテが地獄の門について述べた言葉があてはまるだろう。「ここより入る者はすべての望みを棄てよ」。事象地平を通過して落ちたものは、何物も、また何人も、すみやかに無限の密度の領域と時間の終焉にいきつくだろう”**(引用部終端)と記述されておりである ―疑わしきにおかれては当該書籍を借りるなり購入するなりしてご確認いただきたい―)。ただし、ホーキングについては本稿の先の段でもそれを持ち出しての実験機関安全主張のありようを具体的資料の抜粋とのかたちで問題視していたとの理論、[今日、行われているブラックホール生成実験と(90年代末を始点に)擲揄されだしている実験に「後付けで」安全性論拠として使用されることにもなった理論](現象として小さなブラックホールというものはすぐに蒸発するとのホーキング輻射という[仮説])を1970年代に提唱し、なおかつ、ブラックホール生成実験と擲揄されるに至った実験に「絶対安全だ」と賛意を表する旨のそのコメントが実験実施機関 CERN の安全性強調ページに記載されているとの筋目の者となる(: Hawking の弁を引用すると “The world will not come



to an end when the LHC turns on. The LHC is absolutely safe”とあいなる)。 そうもした「カリスマ物理学者」の同ホーキングが触れる程度を越えてダンテ『地獄篇』に見る[ルチフェロの幽閉領域 一人類の裏切り者達の幽閉領域]にブラックホールの寓意が込められているとのことを「細かくも」突っ込むように論じたことはついぞ「なかった」と見受けられるとのことがある中で、である。

レオナルド・サスキンド (ホーキングとブラックホールに落ち込んだ情報が脱出するかについて争った学者。紐理論の提唱者としても知られる) ⇒ 同男著書 THE BLACK HOLE WAR (邦題)『ブラックホール戦争』で突拍子もなくダンテの『地獄篇』のことを[たとえ]として持ち出し、「ダンテが地獄の罪人の責苦が逃れがたきものかには分からないが、ブラックホールの潮汐力からは逃れられるものは何もない」などと論じている (：出典紹介として原文引用をなす。同点に関しては当方手元にある版の『ブラックホール戦争』(早川書房)[第2章 暗黒星]の部、の中の、[地獄への落下]と銘打たれてはじまる箇所(p.40以降)にあつての p.41 末より p.42 までの内容として(中略)なしつつ引用するところとして “ブラックホールの潮汐から逃れる方法は2つある。自分自身を小さくするか、ブラックホールをもっと大きくするかのどちらかだ。バクテリアなら一太陽質量のブラックホールの地平線で潮汐力を感じない。——(中略)—— しかし、どんなに大きなブラックホールであっても、最後にはどんなものも潮汐力から逃れない。ブラックホールのサイズが大きいことは、避けられない結果を少しばかり遅らせるだけだ。最終的に特異点へ落ち込むのは避けられない。それはダンテが想像したり、トルケマダがスペイン審問で課したりしたどんな拷問にまさるとも劣らぬほど恐ろしいものだ(拷問台が目に見えぬ)。最小のバクテリアさえ中心方向に沿って引き裂かれ、同時に水平に押しつぶされる。小さな分子はバクテリアより長く生き延び、原子はさらにもう少し長く存続する。しかし遅かれ早かれ特異点が勝ち、潮汐力は1個の陽子さえつぶすほど強くなる。ダンテが罪人は地獄の苦痛を逃れられないと主張したのが正しかったかどうか、私は知らない。だが、ブラックホールの特異点では恐るべき潮汐力を逃れられるものは何もないことは確信できる” (引用部終端)と記述されているとおりである (疑わしきにおかれては当該著作を借りるなり購入するなりしてご確認いただきたい)。同サスキンドもまたライヴァルであったホーキングと同様に『地獄篇』のルチフェロの幽閉領域にまつわる問題性につき何がどう問題になるのか、事細かに解説をなすとの人間ではなかったようだが(彼の著作にては「意図の説明がなんらなく」に地獄篇とダンテへの言及がなされているにとどまる)、とにかく『地獄篇』を意識しての言及が同[弦(ひも)理論]大家に明示的になされている。

補足として

上にてはレオナルド・サスキンドの、  
「ダンテが罪人は地獄の苦痛を逃れられないと主張したのが正しかったかどうか、私は知らない。だが、ブラックホールの特異点では恐るべき潮汐力を逃れられるものは何もないことは確信できる」

との物言いを含む同人物著書『ブラックホール戦争』(邦訳版の版元は早川書房)よりの原文引用をなしているが(再三再四くども述べるが、それが[文献的事実]であるかにつき疑わしいと思われた向きにあつては当該著作を借りるなり何なりしてご確認いただきたい)、そうしたことが述べられもしているとの[重力の怪物の類](ブラックホールの類)につながる存在として、  
[通過可能なワームホールの仮説](ブラックホールを二つ繋げて出来上がるゲートでもいい)

のことを本稿の先の段では問題視していた。

米国のカリスマ物理学者ミチオ・カクの言をその著作よりそのままに引きつつ、である (：「再度」抜粋するところとして “現在、おおかたの物理学者は、ブラック

ホールを生きて通り抜けることはできないと考えている。しかし、ブラックホールの物理的解釈はまだ未熟な段階で、この推測は検証されていない。ここでの議論のために、ブラックホールを通り抜けることができ、とくに回転するカー・ブラックホールでそれが可能だと考えてよう。すると、どの先進文明も、ブラックホールの中を探索しようと真剣に考えるだろう」（『パラレルワールド —— 11次元の宇宙から超空間へ』p.385）／「ワームホールのなかでは潮汐力や放射が猛烈になりそうなので、未来の文明は、向こう側の宇宙で再生するのに必要な燃料やシールドや養分を、最小限にして運ばなければならないだろう。そこでナノテクノロジーを使えば、それらを詰めた小さな鎖を細胞ほどの大きさの装置に入れて、ワームホールの向こうへ送れる可能性がある」（『パラレルワールド —— 11次元の宇宙から超空間へ』p.403）との申しようを先の段にて取り上げている。

以上のこと、振り返りつつも書くが、レオナルド・サスキンドという人物、ひも理論の大家としても知られている(同点については多少詳しく英文ウィキペディアの[Leonard Susskind]項目にも解説がなされている)との同男については上にて提示の抜粋部にて

[スペインの異端審問所やダンテの地獄篇]

のことを引き合いにしながらブラックホールのことを語りつつ (スペインの異端審問所のことを引き合いに出しているのは —サスキンドはその点についてはきと言明していないが— エドガー・アラン・ポーの有名な19世紀短編小説『落とし穴と振り子』、そのスペイン異端審問所の特徴的な拷問を描くとのあらすじへ意識誘導をなしたいとの意図があるからであるように思われる)、その後、(再引用するところとして)

「ブラックホール特異点の領域では逃れられるものは何もないと確信している」とまで揚言しているが (尚、同サスキンドはダンテの地獄篇をたとえに出す一方で同じくもの著作の他所で「ブラックホール開口部は天国や地獄の入り口や他宇宙の入り口ではない」とも一言だけ述べており(『ブラックホール戦争』p.82)、また、ブラックホールが別の世界への入り口であるというのは都市伝説であると断じ、他の物理学者が[安定したワームホール]の研究をなしている点については「証拠がない」と断じている(『ブラックホール戦争』邦訳版 p.83))、といった[確信の弁]について本稿筆者には

『どこまで信を置いていいか判じかねる』

との思いがある (：本来的には当該分野の門外漢、物理学の専門的な話については専門家の意見をひたすら謙虚に拝聴すべきなのが筋であるという身の上であることは無論、重々承知のうえで敢えても申し述べる所として、である。——本稿にての遙か遡るところの前半部でも述べたことであるが、筆者が本稿にあって重視しているのは[専門家らの、筆者をはじめ門外漢には是非判断しようがないとの専門理論の適否]などでは毛頭なく(そのようなものの適否につき資格なきところで問題視すれば「出歯亀的異常者」と看做されるだけであろうとも思う)、[真っ当な人間としての分別を有している向きには誰にでも是非につき判断できるとの事柄ら]である——)。

というのも、そう、「その言や心を置けるものなのか疑わし」との思いを抱かざるをえぬということがあるとの理由については、サスキンドという人物に —いくら科学界にあっての身内が同男をして「偉い偉い」と褒めそやそうとも— 同男に

[欺瞞の徒輩]

と述べられるような側面がとみに伴っていると観察されるからである。それも[我々全員の生き死にの問題に関わる所]にて、である。

その点、サスキンドはウィリアム・ウンルーとの他の学究の説を援用、ホーキング放射という現象 —「粒子加速器にて生成された極微ブラックホールは熱放射し



て即時蒸発する」との申しようの論拠となっているホーキングが70年代に提唱した仮説上の現象— が起こることは確実である、であるから、実験機関にブラックホールが造られると考えられるようになった昨今でもなにもおそれることがないとこの旨のことを述べたこと「でも」知られる人物となっている。

本稿の前半部で、(以下、「再度の」引用をなすところとして)、

“Every so often, a physics paper will appear claiming that black holes don’t evaporate,” wrote Leonard Susskind, an elite physicist at Stanford. “Such papers quickly disappear into the infinite junk heap of fringe ideas.”<sup>204</sup> Besides, Susskind noted, black-hole radiation had been “proved” by physicist William Unruh at the University of British Columbia.<sup>205</sup> Unruh’s role in establishing the orthodoxy of black-hole radiation made it ironic that, after Helfer’s effort, Unruh himself wrote a paper theorizing that black holes might not evaporate.<sup>206</sup> In 2004, Unruh, along with co-author Ralf Schutzhold of the Technische Universität Dresden, concluded that “whether real black holes emit Hawking radiation remains an open question.”<sup>207</sup> The debate as to whether black-hole evaporation is real suddenly went from the fringe to the mainstream.” (拙訳として)「スタンフォード大のエリート物理学者レオナルド・サスキンドは「ブラックホールは蒸発しないと主張をなす論文は毎度といった形で現れては、」「限界的思考が限りなくも山と連なるゴミの山へとすぐに消えていくことになる」("Such papers quickly disappear into the infinite junk heap of fringe ideas.")と書いている。といったサスキンドが「ブラックホール蒸発はブリティッシュ・コロンビア大の William Unruh(ウィリアム・ウンルー)に証明されている」と注記している一方で(サスキンドへの論拠提供者とされていた)同ウンルーの「ブラックホール蒸発にまつわる通説を確立しようとしたとの役目」が(ヘルファー Helfer (※ホーキング輻射が発現しないとの理論動向を論稿 Do black holes radiate?で一面で取り合うに足るものとしてまとめて呈示した学究 Adam D Helfer のことを指す)の努力の後)、ウンルー彼自身をしてブラックホールは蒸発しないかもしれないとの理論化をなしている論文を書かしめることになった、というのは皮肉なことである。2004年、ウンルーはドレスデン工科大学の共著者ラルフ・シューツホルドとともにブラックホールがホーキング放射を発しているかは「開かれた疑問」にとどまっていると結論を下した。ブラックホール蒸発が実際的なものであるのかどうかの議論が僻遠の領域から突如としてメインストリームに躍り出てきたのである」

との法学者(Eric Johnson)の加速器リスクにまつわる法的問題の解説論稿 **THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD** の839と振られた頁よりの言を引いているとおりに、である(繰り返すが上の記述は「再」引用なしのところで)。

粒子加速器の安全性論拠の大ききなところとして研究機関に主張されていたホーキング輻射の発現につき[その道の大家]であることで知られるウィリアム・ウンルーが

「ホーキング輻射は仮説にとどまる。その発現は不確実である」

と自認し出した(「2004年に」そのような変節がその道の大家とされる物理学者ウィリアム・ウンルーに生じたことは本稿の先の段でも問題視している)とのその後の2008年にて原著が世に出たとの『ブラックホール戦争』、ここに引

より具体的には本書の前半部 p.64 から p.65

用している THE BLACK HOLE WAR との科学に興味ある一般読者が読むものであろうとの同著作にあってなおサスキンドという男は次のようなことを強弁し続けている(サスキンドがウィリアム・ウンルーの言動を引きながらも今までに主張してきたことを(ウンルーの変節が生じた後も)プログラム式機械人形よろしく強弁し続けている)。

(以下、『ブラックホール戦争』(早川書房) 225 ページより原文引用するところとして)

ブラックホールは蒸発しないと主張する論文がときおり現れる。そのような論文はくだらない奇説の山に放り込まれてすぐさま消える

そうしたこのような世界で [大家] と褒めそやされてのサスキンド申しようでどれだけの人間が「ころり」といままで安心させられてきたか(あるいは仮にまだ暇(いとも)があるのならばこれより安心させられることになるか) は知らないが、サスキンドのような「カリスマ」物理学者が [責任感] とは無縁な、

[実際は自分の言葉で語る能力すらない、唾棄される値打ちしかその実は有していないロボット]

であった場合にその責を誰が負うのかと考えると『実にうすら寒い』との思いで 一門外漢ながらも 敢えてもの付記をなしている)

(話を [著名な科学者らによるダンテ『地獄篇』とブラックホールを関連付ける申しようの存在の例示] とのところに再度、戻し、人名とその申しようの表記を続けるとし)

クリフォード・ピックオーバー(物理学専門の科学者ではないが、科学解説本の作者としてそこそこに名の知れた見識深き科学者) ⇒ 著書 **Black Holes: A Traveler's Guide** (邦題)『ブラックホールへようこそ』で [ホーキングによる地獄篇のたとえ] の比喻を引いている (: 出典紹介として意欲ある者には容易に後追いできるとの形にての原文引用をなす。同点に関しては当方手元にある クリフォード・ピックオーバーの書籍『ブラックホールへようこそ』の冒頭部前書きの部 (邦訳版では x とローマ字で頁数表記がなされている部) にて (以下引用するところとして) “ブラックホールの入り口には「ここより中へ入りたる者は希望を捨てるべし」というダンテの注意書きが記されているかもしれないのです。宇宙物理学者のステューヴン・ホーキングがいみじくも指摘したように、ダンテが地獄の入り口に置いた注意書きは、ブラックホールへ近づく旅行者にとって適切な警告になるでしょう” (引用部終端) と記述されているとおりである (一疑わしきにおかれては当該書籍を借りるなり購入するなりしてご確認いただきたい)。クリフォード・ピックオーバーのホーキングを引き合いに出してのやりようも同男自身が地獄篇に問題となる部位が含まれているのをよく知っていたがゆえでの挙動だと思われる。

キップ・ソーン(本稿の先の段でも著作と物言いを問題視しているとの通過可能なワームホールが仮説上のタイムマシンとなることを指し示したことで著名なカリスマ科学者。ホーキングと賭けをなして勝っていることでも知られる) ⇒ その著書『ブラックホールと時空の歪み』で冒頭部から仮想上のブラックホール[ハデス](冥府)を持ち出している (: 責任感をもってやっている身としてそちらの原文引用もなしておく。キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み —— アインシュタインのとんでもない遺産』(邦訳版版元は白揚社) にあっては [目次部] [問題テーゼに言及しているとの緒言の部] [著作紹介部] に次いで書き始められている冒頭部、[プロローグ ブラックホール巡りの旅] の章にあっての [冥府] との書き出しの部にて次の通りの記載がなされている。(以下、『ブラックホールと時空の歪み —— アインシュタインのとんでもない遺産』の本題がそこよりはじまるところの p.21 より原文引用するところとして) “あなたは、コンピュータ、ロボットとあなたの命令にしたがう

何百人もの乗組員を擁する巨大な宇宙船のオーナーであり、船長である。そう想像してください。(中略) 航海に出発してから六年間、あなたの宇宙船スターシップは恒星ヴェガの近傍にある「ハデス(冥府)」と呼ばれる、地球にもっとも近いブラックホールに近づき、今や、減速しつつある”(引用部終端) —ちなみに[ハデス(冥府)]はキップ・ソーンが想定した架空のブラックホールである—)。その点、ハデスとはギリシャの冥界の王の名から転用されてのキリスト教圏での[地下の地獄]の別称でもある (Kip Thorne『ブラックホール時空の歪み——アインシュタインのとんでもない遺産』の冒頭部より架空のブラックホールの名前とされているハデスがキリスト教体系で[地獄]の同義語となっていることについての補足として → 日本語[ハデス]項目とは多少異なる英文

Wikipedia[Hades(disambiguation)]の現行の記載内容より原文引用するところとして “In Christianity Hell in Christian belief, In the New Testament, was written in the Greek language, Hades was not often used as a synonym for hell, but since the Middle Ages, has often been taken as a synonym for hell.” (訳として) 「(ハデスは)キリスト教信仰では[ヘル; 地獄]の同義語となっている。ギリシャ語で書かれた新約聖書ではハデスはそうしばしばには[地獄]の同義語とは看做されていなかった。しかし、中世以後、ハデスは[地獄]の同義語として度々用いられるようになった」とされているとおりでである —ちなみに同ウィキペディア項目にあつてはハデスが[死者が行くことになるであろう地](日本語聖書で[陰府]などと訳されているところ)と善悪の区別なくも看做されての使用がキリスト教にてなされていることへの言及「も」なされている—)。要するにダンテの『地獄篇』の舞台、地下の地獄の名を冠する仮想上のブラックホールというものを著名物理学者キップ・ソーンはその著書冒頭より持ち出していることになる (ダンテ『地獄篇』の問題性を認識したうえでわざわざの挙動であるのとらえられる。キップ・ソーンもまたルチフェロの幽閉領域に関する問題性を指摘するような類でないようだが)。

以上をもって権威の類が彼ら流の[当たり障りのない話]に落とし込んでどのようなことを

### 【ブラックホールと『地獄篇』の接続性】

に通ずるところとして述べているかの例示としたが、といったことをもってして「も」ダンテ『地獄篇』および同『地獄篇』の中で [不帰の地] への言及がなされている地獄門に [不帰の地たるブラックホール] への比喩が見いだせるという文脈がどういふ事情によってのことなのか、ご理解いただけることか、と思う (それにつき物理学者らがそればかり言及していると地獄門ひとつをとっただけでは何の問題にもならないと考えられる。死んだ人間が向うのが[不帰の地]であるとされるのに何ら不自然性はないからである。しかし、物事を複線的にとらえた場合に問題視すべき側面が浮き上がってくる —であるから著名物理学者らも地獄門への隠喩的言及はなしているのだ、と思われる—)。ちなみに、ダンテ『地獄篇』とは地獄最深部にして地球中枢たるコキュートスに至るまで様々な固有名称が付された地獄の階層を遍歴する物語となっている。その点、古典『地獄篇』とはダンテとダンテに師父と慕われるヴェルギリウスが[デイスの市]であるとか[マーレボルジェ] (悪の囊)だとかそういう固有の名前が付された地獄諸領域を遍歴するとの物語となっているわけだが、といった『地獄篇』の中で最深部コキュートスが占める文量上、および、想像されるところのスペースはさして広くはないと述べられる。しかし、「にも関わらず」(いや、「であればこそ」と述べた方がよいかもしいが)、不気味なのは原義としてコキュートス (Cocytus) に「悲嘆」(転じて「嘆きの川」)との意味合いがあり、地獄門に Through me the way is to eternal dole「我を通して行き着くは永遠なる悲嘆」(⇒悲嘆はコキュートス原意に通ずる)などと刻み込まれていたと描写されている(既述)ことにつき、はなから【入ったものは希望を捨てざるをえぬ不帰の地】と【重力の向う先にして時が止まったような状況で永遠の粉碎劇が展開する、との意味合いでブラックホールのなるコキュートス】の結びつきを指し示さんと『地獄篇』という作品自体が調整されている節すらあることである)。

The Thinker  
(Auguste Rodin)



The Gates of Hell

ここまでその寓意性につき論じてきた[ダンテの地獄門]。その[ダンテの地獄門]からインスピレーションを受けて作製されたのが上のオーギュスト・ロダンの著名な彫刻である。ご存知ない方が過半か、とも思われるが、日本でもマーケティング素材などにもよく使われる彫刻家ロダンの[考える人]は元来、上の彫刻[地獄門]の一部分として製作されたものなのだ(図像を参照のこと)。その点、我々がマス・メディアといったものを通じて食傷するまでに押し付けられている[紛い物]などではない本当の[考える人]であれば考えなければならないことは何か。それは本稿で指し示さんとしていることであると強調しすぎても強調しすぎにならない。そう述べておきたい(:なおもってして[半ばもってしての傍論])となりもするところとして書いておくが、筆者はかのヴィンセント・ヴァン・ゴッホが — (美術にあつての素人、その領域を出ないとの者ながらも言及するところとして) — At Eternity's Gate (1890)との作品を遺している(1882年のリトグラフ作品に構図と題名にあつての端を発することが知られている1890年油彩作品を遺している)とのこと「も」ロダンの当該作品(地獄門と考える人)の寓意性との絡みで実にもってして意味深くもとらえている。画像検索なりなんなりして確認いただければお分かりいただけることか、と思うが、椅子に縮こまるように座った男が絶望し泣きじゃくるように両目を手で覆っているとの「悲嘆」の構図が目立つようになっているとのゴッホの油彩画、【無限の扉の縁(ふち)にて】でも訳せよう表題の(1882年リトグラフに構図と画題にあつての端を発するとの) 絵画 At Eternity's Gate (1890 / 邦題では『悲しむ老人』あるいは『永遠の門』との画題が知られる) という作品はロダンの彫刻【考える人】との構図的相似型が見てとれるとの作品であり(モチーフたる人物が背を曲げて無理にちぢこまるように腰掛けているところに類似型が見出せる)、のみならず、構図上の相似に加えての表題および意味上のありようから【地獄門(永遠の悲嘆の領域に通ずる門;ロダン作) ⇔ 無限(永遠)の扉の縁にて;悲嘆に暮れる老人を描くゴッホ作】との対応「も」が浮かび上がるようになっているとの作品である。その点もってしてカミーユという著名女流彫刻家の愛人をゴッホよろしく精神崩壊(そして行き着くところまで行つての精神病院の孤独死)に追いやったことに責任があるとされる、そして、彫刻【地獄門】にあつての地獄の中を覗いて苦悩する【考える人】は詩人ダンテではなく



そちらカミーユとの間に子をもうけてその子を中絶させた経験があるかの彫刻家自身であるとの説「も」伴う彫刻家オウギュスト・ロダン —(この身から見れば、[正気]とされるところからして多く紛い物・偽りの世界での[狂気](とされる状況)の真因は人間存在の内面実質の空虚極まりない不在化性向かあるいは人間存在の内面の実質への攻撃、[世のありとあらゆる紛い物・偽物へ権威付けを与えている力学]のサイドからの人間性への攻撃にこそ起因していると見受けられもするのだが(そこを狂気と正気の区別の別すら本来的には判別する能力も権利もないとの内面空虚でグロテスクな紛い物らが愚劣にも紛い物なりの【正気と狂気間の分水嶺】にまつわる理屈づけをなしている、あるいは、そういう基準を押しつけられているととらえている)、とにかくも、愛人カミーユの精神を崩壊させた、そして、そのことが【地獄門】構図に影響を与えているとの評価が伴っているオウギュスト・ロダン) — の手になる彫刻 (地獄門の一部をなす【考える人】) は1880年に製作開始されたとされるものの、「1904年まで」公衆の面前に触れることはなかったとされもしている作品である (現行、英文 Wikipedia[ The Thinker ]項目にあつて “ Rodin made the first small plaster version around 1880. The first large-scale bronze casting was finished in 1902 but not presented to the public until 1904.” と記載されているところでもある)。であるから、自ら耳を切ったとのその所業にてよく知られる[狂気]の天才 — 筆者から見れば生存を約するべくも機能するはずである[本当の知性]は生物としての破綻である狂気を打ちすえたところにこそある、幻影に苦しめられてもそれを完全に打ち破ったところにこそあると見えるのだがこのような世界にあつて「天才となにやらは紙一重である」なぞとのたまわれているところの[狂気]の天才なるもの — として知られるゴッホの (1882年リトグラフに端を発しているとの) 作品、【永遠の扉の縁にて悲嘆に暮れる男】といった風なイメージと結びつく作たる At Eternity's Gate (1890) とロダン彫刻 (1904年まで衆目につかなくなったともされるところのもの) との相似・意味論的接性が「時系列的に」よりもって意味深くもとらえられるところではある ( : ちなみに[時系列上の問題]に関わるから書いておくが、ゴッホの【永遠の扉(門)の縁にて】とのタイトルはゴッホによる1882年初出リトグラフの画中左下に付されたゴッホ自身の画題表記に因るとも説明されているところである — 英文 Wikipedia[ List of works by Vincent van Gogh ]項目にあつての1882年の作品紹介の部にて “ Annotated by the artist in ink at lower left: "At Eternity's gate" lithograph,” 「画家自身の手によって At Eternity's gate と画の左下に注記されているリトグラフ。」と現行表記されているところでもあるが、当該のリトグラフのありようを観察して判断できるところでもある — )。につき、もしかしたらばありうべきところとしての【(捏造に関わる) 第三者タイトル付けに際してのゴッホ接合領域でのロダン作に対する「ゴッホの没後の」剽窃・模倣の可能性】あるいは【構図にあつてのロダン領域での(死んでから著名画家に転じた)「ほぼ無名時代の」ゴッホ作品に対する剽窃・模倣の可能性】の有無に応じてここで問題視している【ゴッホ作とロダン作の結びつき】の意味合いも変わるところなのではあるが、「問題となるのは、」ゴッホの著名作 — 邦題では【悲しむ老人】あるいは【永遠の門】との題で知られる At Eternity's Gate — にも関わり、それと通じ合うところがあるロダンの代表作 — The Thinker あるいは The Gates of Hell — にもまた関わるとの【『地獄篇』で描かれる地獄門の先の「永遠の」「悲嘆の」領域たる「コキュートス】が【重力(現代的な意味でとらえた場合の重力)の中核】であり、かつ、諸所の要素からブラックホールとの接続性が問題になるような場であるとのことである — ここまでの話にあつて 【死して後、狂気]の天才として名をなすことになった生前無名だったところのゴッホの手になる「無限の扉」「悲嘆」に関わる作品】(1882,1890)と【愛人を狂気に追いやったとされるロダンのありようもが影響し



ているとされるロダンのダンテ『地獄門』関連作】の絡みで「時系列上どうなのか」と何に対してどのような意味で注意を向けているかは、(脳がきちんと機能しているのならば)、理解に苦しむことはないか、と思う(時系列上、本来的には剽窃・被剽窃の関係が成立していると考えがたい、そうも見えるところで構図および意味上の接合関係が[「永遠の」「悲嘆の」門]との絡みで現出していることを問題視したのである)—— )。

直近直上にての傍論を出でぬとの要らぬことに筆を割きすぎたきらいもあるが、主たる指摘事項、

### 【ダンテ『地獄篇』とブラックホール(今日にあってブラックホールと呼称されるもの)の繋がり合い】

に関して問題となることにまつわっての話はまだ終わらない。

地獄の中核たる重力の向う先 — 永遠の悲嘆の領域に通ずる門と銘打たれた地獄門、希望を捨てよとの碑文が刻まれた地獄門の先に歩を進めて最終的にダンテらが行き着いたコキュートスの領域— で氷漬けになった存在が何者なのかにも着目すべき必要性がある。その点、不自然に分解されきらずに粉碎され続ける人類の代表的裏切り者らの方は既に説明したからもうよいとして、悪魔の王ルチフェロ(ルシファー)が凍っているのかたちで幽閉されている、とのこともまた問題になる。その点もってしてルシファーの語源がラテン語の Lux [光]+Fer [帯びたもの]にあるというのは Wikipedia の[ルシファー]の項にすら記載されているよく知られたことである(であるから疑わしきにおかれてはその点につき確認されたい。また、さらに述べれば、この際、誰でも確認可能な証拠ベースの話などなそうとはしない手合いら、陰謀論者らが真偽確認不能な話に基づいてルシファー崇拝が悪の元凶であるなどと紙媒体および電子媒体で「プロモートされて」といった塩梅で唱道されている陰謀論の中で持ち出していることはお忘れいただきたい(筆者は誰でも確認できる事実とまっとうな論理展開で真実をあぶり出すとのことを信条にしており、[真実の所在をくらませる陰謀論者]のような類の話柄(陰謀「論」)と筆者の物言いの区別をつけていただきたいと考えている)。

Light

語源的にルシファー(ルチフェロ)が[悪魔の王]としては不釣り合いに[光]と結びつく名前であるのならば、である(実際にそういうかたちとなっている)。そのことよりはブラックホールというものが

Escape Velocity

「そこよりの脱出速度(物体を永久に外側に向けて運動させるのに必要な速度)をその重力ゆえに[光]ですら脱出できぬ方向へと高めにしている」

とのことを想起させもする。すなわちもってして、

[重力の中心ポイント(しかも【ニュートン以後の古典力学の重力観】より古典字面それ自体の問題として【アインシュタイン以後の重力観】に近しくも描写されているところの重力の中心ポイント)にて凍りついた中での果てしない粉碎劇が繰り返されている場に捕えられているルシファー] ⇒ [ブラックホールに落ち込み外に出れはしない光]

ということ、である。

いかがであろう。以上の I. から III. をもってして、何故、ダンテ『地獄篇』にブラックホールの寓意が見て取れると述べられるのかご理解いただけただけなのではないだろうか。

さて、ここまでの内容を目にされて、読み手の方はこう思われるかもしれない。

## 『そういうことが述べられるのは分かったが、[ただの偶然の一致]ではないのか』

上が[世間の常識]というものであることは重々承知のうえではあるが、ダンテ作品を問題視する理由は他にも語りきれぬほどにある。

「であるから同古典をわざわざもってして取り上げているのであって、そして、続く内容がありもする」として話を続ける。

ここで述べるが、実はダンテ『地獄篇』と「誰でも判断可能な記号論的側面」で多分に結びつく形でブラックホールの寓意を含んでいると解釈可能な「他の」古典が存在している。

その古典とは17世紀中葉に著された(ダンテ『地獄篇』の300年後以上、後に著された)英国人文豪ジョン・ミルトンの手になる、

### Paradise Lost『失樂園』

という作品である(※)。

(いきなり『失樂園』などと言われても『何をマイナーな古典のことを延々と...』と思う向きもあるかもしれない。『微々たるところで微々たることを掘り返して妙ちきりんな屁理屈をこさえているだけだろう』なぞと見ながらも、である。であるから述べておくが、ミルトンの手になる『失樂園』とは決してマイナーな作品などではない。ダンテ『地獄篇』と同文に人類文明(の基盤たる西洋文明)の代表作なぞと評価されている作品である。たとえばもってして英文 Wikipedia [John Milton] 項目にて現行、“Once Paradise Lost was published, Milton's stature as epic poet was immediately recognised. He cast a formidable shadow over English poetry in the 18th and 19th centuries; he was often judged equal or superior to all other English poets, including Shakespeare.”(即時訳として)『失樂園』が(17世紀に)刊行を見てより、(壮大な)叙事詩の紡ぎ手としてのミルトンの名声は即時に認容されることになり、同ミルトン(の詩)は18世紀から19世紀にあっての英文詩ありようにおそるべき隠然たる影響力をおよぼすことになった。ミルトンはしばしば「シェイクスピアを含む」他のいかなる英語による詩の紡ぎ手に比肩しえる、あるいは、優越しうると評価されてきた存在であった」なぞと記載されていることから同じくものことは伺いしれることか、と思う(対して、せんだってまでブラックホールと通ずるとの特質について先行的に紹介してきたとのダンテの『神曲;地獄篇』については(以下、和文ウィキペディア[神曲]項目にあっての[文学的評価]の節の記述よりの原文引用をなすとして)“『神曲』は、世界文学を代表する作品として評価は定着しており、西洋において最大級の賛辞を受けている。「世界文学」を語る際にはほぼ筆頭の位置に置かれ、古典文学の最高傑作、ルネサンスの先蹤となる作品とも評されている。特に英語圏では『神曲』の影響は極めて大きく、部分訳を含めれば百数十作にのぼる翻訳が行われ、膨大な数の研究書や批評紹介が発表されている”(引用部はここまでとする)との言われようがなされているところの作品でもある)。以上のような基本的なところから引用なしでの話をわざわざもってしてここでなしたのは決して「ぼっと出のマイナーな作品」などではないところ、というより、「人類文明を代表するもの(としての位置づけを与えられている)ところの古典ら」のことを問題視しているのだと一応もってして訴求しておく必要もあるか、と判断したからである(超がつくほどにメジャーな作品ら、そう、「文明の基礎となっている」などと評価されている作品らに、いいだろうか、人間の存在意味それ自体を馬鹿にしきった(物事の軽重さえ満足に見極められぬ、何も分からぬようにしつらえられた家畜化種族をこれから皆殺しにするつもりであると愚弄するように完全に馬鹿にしきった)ブラックホールに多重的に通ずる寓意が込

められているとのことを(意志なき者らには当然に無駄な訴求かもしれないとも考えるのだが)「理」にひたすらに基づいての式で示そう、そして、変化を求めようというのが本稿の趣意である) )。

以下、ジョン・ミルトン『失樂園』がどのようにしてブラックホールと結びつくかについての話に入る。

ジョン・ミルトンの17世紀成立の古典、『失樂園』には次のような観点からブラックホールの寓意と結びつく側面があると見受けられる。

ミルトン『失樂園』にあつては

#### **[エデンの園と地獄の中間領域]**

として[深淵](アビス)の領域が横たわっていると描写されている。その[深淵]を横断する通路、すなわち、

#### **[人間の樂園と地獄を結ぶ通路]**

を墮天使の長であるサタン —(ミルトン失樂園では当初、天使然とした格好の存在として暗躍しているように描写されるのが、後にエデンでイブを蛇の姿で誘惑して墮落させしめたとの咎より蛇の怪物に変異させられたと描写される存在)— が構築したとミルトン『失樂園』では描かれる。

問題はその、

#### **[地獄の地獄門からスタートしてエデンの園に至る深淵領域](地獄に向けての通路が構築されたとされる領域)**

というミルトンが描き出す場に[ブラックホールとの近似性]が露骨に見て取れることである。

具体的にはミルトンの[深淵]には次のような形でブラックホールとの接続性が存在していると判断できる。

→

ミルトンの描き出した[深淵]は[底無しの暗黒領域]と定義されている(⇒[底無しの暗黒領域]はブラックホールのおおよその理解と通じる)。そして、極めて重きをなすことに[時間と空間が意味をなさなくなる領域]であると定義されている(⇒一体、どうして17世紀の詩人(ジョン・ミルトン)が「時間と空間が意味をなさなくなる領域」などと「深淵」につき描写したというのか。その点、「時間と空間が意味をなさなくなる」(時間と空間の意味が失われる)のは「ブラックホール内側の世界のようなものである」との理解がなされるようになったのは時間と空間を有機的にとらえるアインシュタインの相対性理論提唱後の時代になってからである)。また、—以上述べてきたことだけで十分と思うのだが— ミルトンの描き出す[深淵]は[自然の祖]であるとも描写されている(⇒ブラックホールが宇宙の終焉の体現物にして宇宙の生みの親であるというのは今日のビッグバン理論から導き出されている見立てである —前宇宙の物質がブラックホールを通じ吸収され時空の底に落ち、それら物質が新宇宙を形作る原動力となるなどともされている—)。

該当部の抜粋もなしておくが(そのとおりの原文が記載されているか確認されてみるのもよからう)、次のような形でミルトンの描く[アビス](深淵)はブラックホールよろしく[底無しの暗黒領域][時間と空間が意味をなさなくなる領域][自然の祖]であると描写されているのである。

The secrets of the hoary deep ; a dark illimitable ocean, without bound,  
Without dimension, where length, breadth, and height, And time, and place, are  
lost ; where eldest Night And Chaos, ancestors of Nature, hold Eternal anarchy,  
amidst the noise Of endless wars, and by confusion stand. ( BOOK II.,lines 890-  
895 )

(上に抜粋したところのミルトンのアビス描写に対する訳として)

秘められし古き世界。暗く、果てしなく境界なき大洋。(⇒こうしたアビス[深淵]に対する描写は[底無し]の暗黒領域と述べているに等しい)。長さ・幅・高さが、そして、時間と場所が居所を失う次元なき世界。(⇒ブラックホールの内側の状況と同様である)。そこにては夜と混沌、自然の祖先(⇒ここもまた問題となりうる)たるそれらが終わりなき諍いの不協和音の中、混沌を立つ瀬として無限の無秩序状態を保っていた(ミルトン『失樂園』巻の2 890 から 895 行)

(尚、ミルトン古典『失樂園』の上にて抜粋の原典は近代刊行版、EDITED BY HENRY C. WALSH, A.M.,と編者表記がなされているオンライン上全文公開版、上記引用文言そのものの検索にてオンライン上より(全内容含めての)内容を容易に特定・捕捉できるとのものである — ダンテ『地獄篇』よりの引用にも同じことが当てはまるが、そうした引用でなければ意味など無いと筆者は判断している— )

さて、以上のような意味でブラックホールに通じるものであると述べられるミルトンのアビス[深淵]は次のようなもので「も」ある。

[悪魔の王サタン(ダンテが描いたところのルチフェロでもいい)が地獄門の先にある同領域(アビス)をかつてエデンで体現されていた人間の世界と地獄を結ぶ通路にあつての中間地点としたものであり、なおかつ、[サタンの擬人化された妻]たる[罪]そのものと[サタンの擬人化された子]たる[死]そのものがすべからくもの人間に襲いかかるうえでの通路とされる領域であると描写されていもするもの] (ミルトン『失樂園』は悪魔サタンが地獄門の横にいた己の妻たる[罪]と己の子たる[死]が人間らに襲いかかる道筋として地獄とエデンの道筋を「人間の墮落のプロセスによって」造成するとの話でもある)



墮天史達の主導者であるルシファー(サタン)がエデンで育てられだした新発の人類を墮落させんと開始した地獄よりの単身飛行。その過程でアビス(深淵)に通

じる[地獄門]の前で自身の妻(人類に襲いかかることになる<sup>とされる</sup>擬人化された[罪])と自身の息子(人類に襲いかかることになる<sup>とされる</sup>擬人化された[死])にまみえたというのが上の画である。

問題なのは人類に襲いかかることになる<sup>とされる</sup>その妻子([罪]と[死])のためのサタン構築の通り道が「地獄門の先の」アビスを通るものであるとミルトンが描写していること、そして、そのミルトンのアビス(地獄への通り道)を巡る描写がブラックホール特質と結節していると(文献的事実と科学的事実の照応から)論じられるようになっていることである。

以上をもってミルトン『失樂園』に認められる、

**[ダンテ『地獄篇』に認められる、「ブラックホール(と今日、表されるに至った重力の化け物)」に関わる記述部]**

に関する解説を終える。

(**出典(Source)紹介の部 55**はここまでとする)

ここまでの内容で指し示せること、不快ながらも一裏取りをなしていただきたきこととして— 指し示せることはこうである。

⇒(極めて重要なところとして)

「ダンテ『地獄篇』では[地獄門の先に存する場]として

**[光と語源的に結びつく存在(ルチフェロ)が幽閉された領域にして重力が向う先でもある領域にて人類の裏切り者らが氷漬けになったうえで永劫に噛み砕かれ続けるシュールな世界]**

が描かれる(上がいかようにしてブラックホール寓意と結びつくかは先に仔細に解説している)。

他面、ミルトン『失樂園』では[地獄門の先に存する場]として

**[ルチフェロと同義の墮天使サタンが人類を己が妻子たる[罪]と[死]の餌食に供するとの結末をもたらすため、誘惑でもって構築した通路が通る場となり、なおかつ、「底無し」の暗黒領域にして[時間も空間も意味をなくす場]であり[自然の祖]であるアビスこと深淵]**

が描かれる(上がいかようにしてブラックホールの寓意と結びつくかは直近にて解説している)。

読み手に**確率論を理解するだけの基本的知識があると仮定して**(いやそもそもそのような仮定とて不要かもしれないも)問うが、上のような[地獄門の先にある複数古典でのブラックホールを想起させる描写]が偶然で現出を見ているものだと思われるだろうか。切に問いたい次第である。

それにつき、私としては「この時点ですえ」(さらに不快極まりない事実を多々挙げる前の「この時点ですえ」)、

「上のような一致がまったくの偶然でもたらされるなどとのことは確率論的には僅少だろう」

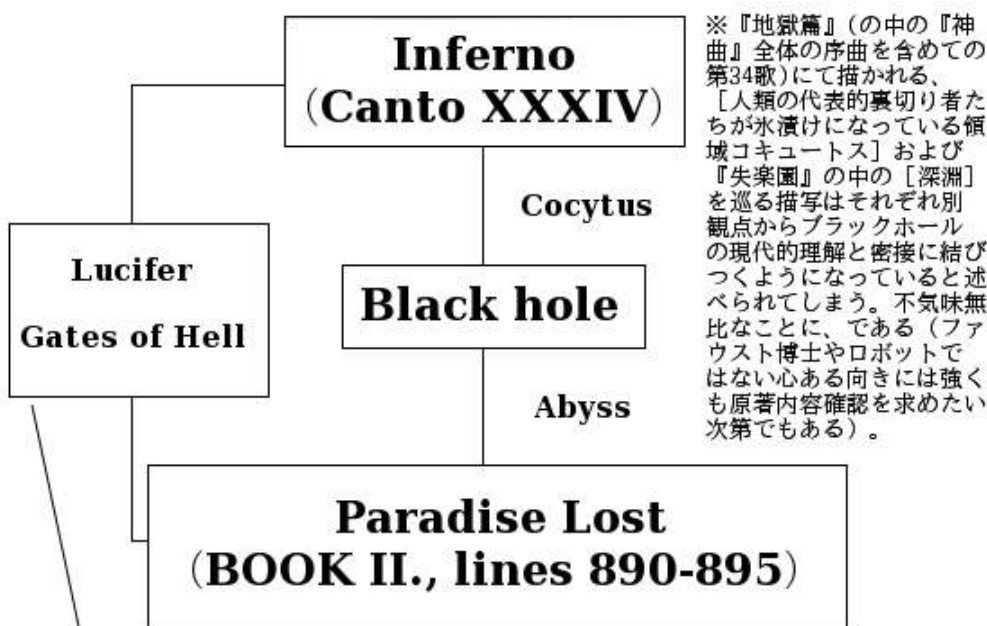
と述べたところである(：それについてはダンテとミルトンのブラックホール寓意物ととれる領域の描写が記号論的共通項([悪魔の王]絡みであり、なおかつ、[地獄門の先の領域絡みであるとの共通項)を有しつつも、相互に異なる観点からブラックホールと結節することを重視すべきであるととらえて



いる——いいだろうか。くどくも強調するが、私は陰謀論者に特有の検証不可能の話柄を用いているのでは断じてなく、[文献的事実から導き出せる自然なる解釈]の話をなしているのである（ただ、自然な解釈より導き出せてしまうことは不自然極まりないとのものであり（何故、今日的な理解におけるブラックホールの類似物がルネサンス期古典に顕現しているというのか）、また、そうしたことが奇怪に結びついている（何故、ブラックホールの比喩とつながると解されるものが別個に成立しながらも揃い踏みで[ルチフェロ][地獄門の先]絡みのものとなっているというのか）とのことが問題となるわけだが）。それにつき、[事実]と[事実から導き出せる自然な解釈]を無視するのはあまりにも悲劇的で愚かであろう。それが生き死にに関わることであるのなら、である——）。

※ ダンテ『地獄篇』がブラックホールと結びつくとはきと述べる、ないし、示唆することをなす向きまでは海外にはいるが、ミルトンの『失樂園』までがそうであるとはきと述べる、問題となる該当部を指し示しながらわざわざ指摘せんとするような向きは、（そのように考えた人間は少なからずいるとは思われもする中）、絶無といったほどに海外にもいない——であるから、ミルトンとダンテの各作品がその伝で結びつくことを論証しようという人間もいない、とのことになっている——。

そうした言論流通動態の問題は置いておいて、([文献的事実]と[そこから導き出せる無理なき解釈]に依拠し)ここまでにて表記してきた関係性につき下にて図示をなしておく(：下図に見る関係性の理非曲直について[本稿で紹介した古典原著該当部]および[ブラックホール基本的特質の諸種解説媒体]にあたってでも検討いただきたいとこの身は考えている次第である)。



※『地獄篇』と『失樂園』を巡るブラックホール関連の話には[共通項]も存在しており、その共通項とは[ルシファー(悪魔の王)]および[地獄門]となる(ルシファーについては[光でも脱出速度のハードルを越えられぬブラックホール特質]のことが問題になり、[地獄門]については(人形らに許された何も変ええぬ不明なレベルの話と受け取れるが)一部の著名な科学者らが極めて隠喩的に、かつ、示唆する程度にブラックホールの外延部[事象の地平線]と結びつけてダンテ『地獄篇』の地獄門のことを持ち出している、との経緯が問題になる)。

直近までの解説部「兼」出典紹介部にあつては要約をなせば(箇条表記に重きを置いての要約をなせば)、次のことを摘示する方向での話をなしてきた(：尚、以下、呈示のことにまつわつては典拠紹介未了部もあるのだが、については、後にての**出典(Source)紹介の部 55(2)**および**出典(Source)紹介の部 55(3)**にて典拠を挙げることにする)。

# i

ダンテ・アリギエーリ『地獄篇』には

[今日、物理学分野の人間らが研究対象として取り扱っているとのブラックホールとの「質的」近似物]

が描かれているとの[現象]が認められる。

具体的には

- A. [ダンテらが「一度入ったらば[悲嘆の領域]に向けて歩まざるを得ず一切の希望を捨てねばならない」との[不帰の領域]にまつわる隻句(『地獄篇』地獄門隻句)を目にしたところから入って最終的に到達した[悲嘆]を体現しての地点]
- B. [重力 — (古典『地獄篇』それ自体にて **To which things heavy draw from every side** [あらゆる方向から物の重さが引きつけんとする地点]と表されているところに作用している力) — の源泉と際立って描写されている場(地球を球と描いての中心ポイント) ]
- C. [(「悲嘆の」川コキュートス)にて(静的描写として)罪障がゆえに「凍りついた」者達が、と同時に、(動的描写として)「永劫に粉碎され続けている」との地点]
- D. [ [光に「語源」を有する存在](ルチフェロ)が幽閉されている地点]

との全ての要素を具備した[『地獄篇』にての地獄踏破にあつての最終ポイント](コキュートス・ジュデッカ領域)にまつわる描写が

- A. [「一度入ったらば二度と出れない」との(事象の地平線の先にての)領域]
- B. [重力 — 地獄篇それ自体の表現と際立っての近似性伴つての[質量]に由来する力(アインシュタイン以後の科学的知見では物質(の質量・エネルギー)が周囲の時空を歪めることに起因する力) — の源泉となっている場]
- C. [外側(生者)から見れば(静的描写として)被吸引者が「時が止まったような状況」になりつつも(動的描写として)その被吸引者本人(死者と化した者)から見れば「粉碎され尽くしている」との場]
- D. [ [光さえもが逃がられぬ]とされる場]

との全ての要素を具備した**ブラックホール特性**と共通のものとなっている(話としての奇異さはともかくも[記号論的一致性・文献的事実の問題]として共通のものとなっている)とのことが現実にある —— ※そうした一致性にまつわるところで初期ルネサンス期、13世紀の文人ダンテは「地球を球形と看做して」「地球の片面で夜ならばもう片面では昼である」との今日的描写までをもなしている。だが、といったことまでは常識で容易に説明ができるところである(と解される)。というのもギリシャに遡つての古典時代に既に地球は球体であるとの見解が呈されており、また、ギリシャ以後の古代ローマにてはそちら地球球体説が当然と容れられていた節もあり(ギリシャ・ローマ時代とのことではプラトン・アリストテレス・ストラボン・プトレマイオスなど主たる哲学者・地理学者は皆、同[地球球体説]を論拠あるものとして支持していたことがよく知られている)、一端、往古の知性が破壊されたとされる中世暗黒時代から近世にかけてのルネサンス期にあつて

「も」同説(地球球体説)が各自銘々の知識人に積極的に容れられていた、イスラム世界で残置していた古典古代の知識の欧州への再流入より容れられていた節があるからである(ただし、ダブル・スタンダードとしていまだ[地球平面説]が社会の主たる構成員のマインドを規定していたとも当然に解されるようになっている)。しかし、古典古代のアリストテレス的[重力]観をダンテが知るところとなっていたと仮定しても現代的理解に近い重力関連描写といい、その他の側面といい、ダンテやりようについてはブラックホールとの多重的接続性の絡みで拭い去れぬ奇怪性がそこにある——)。

## ii

他面、ジョン・ミルトン『失樂園』にあつて「も」  
[今日の物理学上の話柄にあつてのブラックホールの「質的」近似物]  
が描かれているとの[現象]が認められる。

具体的には

- E. [果てなき(底無し)の暗黒領域]
- F. [大きさ・「時間」・「場所」が無意味となる領域]
- G. [自然の祖たる領域]

とのミルトン『失樂園』に見るアビス(地獄門の先にある深淵領域)にまつわる描写が

- E. [底無しの暗黒領域]
- F. [時空間の法則が破綻する(「時間」と「空間」が本来通りの意をなさなくなる)領域]
- G. [それをもって自然の祖であるとする観点が存する場]

とのブラックホール特性と共通のものとなっているとのことが現実にある(※続く段に付しての補うべくもの出典(Source)紹介の部 55(3)を参照のこと)。

## iii

ダンテ『地獄篇』にあつての、

[今日的な理解にあつてのブラックホール近似物の描写(於て:コキユートス)]

とミルトン『失樂園』にあつての同じくもの、

[今日的な理解にあつてのブラックホール近似物の描写(於て:アビス)]

は双方別個に別々の側面からブラックホールとの近似性を呈するとのものであるが、「極めて奇怪なことに」双方共に

- [ルシファーによる災厄]
- [地獄門の先にある破滅・悲劇に関わる通路]

と結びつけられているとのことがある。

以上、i. から iii. と区切つてのことらにつき、まとめれば、『地獄篇』および『失樂園』との両古典を合算して見た際に、

[「ルシファーによる災厄」および「地獄門(と描写されるもの)の先にある「破滅」「悲劇」への通路]との両要素と結びついたポイント]

に関わるところで

- A. [「不帰の領域」]にまつわる隻句(『地獄篇』地獄門隻句)を目にしたところから入って最終的に到達した「悲嘆」を体現しての地点(『地獄篇』コキュートス)
- B. [「重力の源泉と「際立って」描写されている地点」] (『地獄篇』コキュートス)
- C. [「(静的描写として)罪障がゆえに「凍りついた」者達が、と同時に、(動的描写として)「永劫に粉碎され続けている」との地点」] (『地獄篇』コキュートスの中枢ジュデッカ)
- D. [「光に語源を有する存在」(ルチフェロ)が幽閉されている地点」] (『地獄篇』コキュートスの中枢ジュデッカ)
- E. [「果てなき(底無し)の暗黒領域」] (『失樂園』アビス)
- F. [「大きさ・「時間」・「場所」が無意味となる領域」] (『失樂園』アビス/17世紀成立の『失樂園』の刊行時には時間と空間を有機的の一体と見る相対性理論に通ずる発想法は無論、なかった)
- G. [「自然の祖たる領域」] (『失樂園』アビス)

との要素らを「全て兼ね備えての」ありようが具現化していると述べられるようになっており、そうしたありようが現代物理学——(その担い手らが本質的には知性も自由度もないにも関わらず知性あるフリをさせられている下らぬ人種(ダンテ地獄篇にて欺瞞をこととする[人類の裏切り者]らとして氷地獄に閉じ込められているような者達)か否かどうかはこの際、関係ないものとしての現代物理学)——の発展にて呈示されるようになったとの[「今日的な観点で見ての」ブラックホール像]と共通性を呈している、すなわち、

- A. [「一度入ったら二度と出れない」との(事象の地平線の先にての)領域」] (ブラックホール内側)
- B. [「重力」—地獄篇それ自体の表現と際立っての近似性伴っての[質量]に由来する力(アインシュタイン以後の科学的知見では物質(の質量・エネルギー)が周囲の時空を歪めることに起因する力)—の源泉となっている場」] (ブラックホール)
- C. [「外側(生者)から見れば(静的描写として)被吸引者が「時が止まったような状況」になりつつも(動的描写として)その被吸引者本人(死者と化した者)から見れば「粉碎され尽くしている」との場」] (ブラックホール)
- D. [「光さえもが逃がられない」とされる場」] (ブラックホール内側)
- E. [「底無し」の暗黒領域」] (ブラックホール)
- F. [「時空間の法則が破綻する(「時間」と「空間」が本来通りの意をなさなくなる)領域」] (ブラックホール)
- G. [「それをもって自然の祖であるとする観点が存する場」] (ブラックホール)

との特徴を全て兼ね備えたものとしての[「今日的な観点で見ての」ブラックホール像]と共通性を呈していると摘示できるように「なっている」とのことがある。



さらに補ってもの表記として

ダンテは

[[ルシファー]] ([[金星]] こと [[明けの明星]] を語源とする存在であるが、よりもって根本的には [[光]] に語源を有するとの存在 ) の幽閉地]

を

[[重力の中心点]]

として設定しているのと同時に

[[永劫の凍土(氷地獄)]]

とも設定している(先立って原文引用なししているとおりである)。

その氷地獄との描写の仕方からしてブラックホールのありようを想起させるところともなる。

というのもブラックホール理論の発展過程において [[重力の怪物]] たるブラックホールは

[[凍り付いた恒星]] (フローズン・スター)

と当初、(そうなるべくして)形容されていたからである。

については

[[英文 Wikipedia [ Black hole ] 項目の History(理論史)の節]]

にあって次の表記がなされているところである。

(直下、英文ウィキペディア [[ Black hole ] 項目の History(理論史)の節にあっての現行記載内容より引用をなすとして)

Oppenheimer and his co-authors interpreted the singularity at the boundary of the Schwarzschild radius as indicating that this was the boundary of a bubble in which time stopped. **This is a valid point of view for external observers, but not for infalling observers. Because of this property, the collapsed stars were called "frozen stars"**, because an outside observer would see the surface of the star frozen in time at the instant where its collapse takes it inside the Schwarzschild radius.

(入念に補いもしての拙訳として)

「オッペンハイマー(訳注:重力崩壊に対する理論を煮詰めもしてブラックホール理論の旗手ともなっていたかのマンハッタン計画の主導者ロバート・オッペンハイマー)および彼の共著者ら ——(訳注:文脈上、Tolman—

Oppenheimer—Volkoff limit こと[[トルマン・オッペンハイマー・ヴォルコフ境界]]という星の重力崩壊の区切り点にまつわる理論を提唱したオッペンハイマーの理論展開にあたっての論稿共著者ら)—— は

[[シュヴァルツシルト半径]] (訳注:本稿の後の段で説明のされようを呈示するところの[[ブラックホールができあがるうえでの円形領域の半径]]／思索対象となる物体の[[質量]]によってそちら[[半径]]が変動するとのもの)の境界面にあつての特異点(訳注:そこを越えると従来の法則が成り立たなくなり際限なくもの重力崩壊プロセスが進むとのポイント)

をして

[[これは[[時間]]が停止を見る泡の境界を示しているのであろう]]

と解釈していた。

この見方は外側の観測者ら(訳注:ブラックホールの外側の観測者ら)にとっては適正なる見方だが、ブラックホールに落ちこむ観測者らから見れば、適正なる見方ではない。

こうした属性がゆえに、[[縮退星]](訳注: collapsed star はブラックホールとい



う言葉が生み出される前にブラックホールを指して用いられていたところの一呼称)は

**Frozen Stars** [フローズン・スターズ(凍り付いた恒星)]

とも呼ばれていた、というのも外側の観察者はその星がシュヴァルツシルト半径の内側へ向けて崩壊していくまさにその場、その瞬間を「凍り付いた恒星の外面」とのかたちで見ることになるからである(訳注:ここにの[frozen stars]との呼称についての解説については引用元とした英文 Wikipedia[Black hole]項目にて現行は Ruffini, R.; Wheeler, J. A. (1971). "Introducing the black hole". *Physics Today* 24 (1): 30–41.との出典が紹介されている。そちら出典表記に見る Wheeler, J. A.ことジョン・アーチボルト・ホイラーはブラックホールとの呼称を生み出した著名物理学者のことを指す)

(引用部はここまでとしておく)

以上のことから、そう、ブラックホールがそのように呼称されるべくして「凍り付いた星(Frozen Star)」と呼ばれていたとの歴史的経緯からもダンテ『地獄篇』の[光に語源をもつ存在が幽閉されている重力の中核領域]たる[氷地獄](外側から見れば永劫に凍り付いているとの者達が、と同時に、粉碎されつくしているとのポイント)が何故もってブラックホールと相通ずるものとなっているのか、よりもってお分かりいただけることか、と思う。

さらに補ってもの表記はここまでとする

---

以上表記のこと、ダンテ『地獄篇』およびミルトン『失樂園』の西洋二大古典に「ブラックホール」との絡みで問題になるとの側面が伴うとのことにつき典拠をきちんと挙げきれていなかったことにまつわっての典拠を下に挙げることとする。

---

出典(Source)紹介の部 55(2)

# SOURCE

## 55(2)



先にての概説部「兼」出典紹介部としての位置づけの **出典(Source)紹介の部 55**にて

**「ダンテ『地獄篇』およびミルトン『失樂園』の西洋二大古典に「ブラックホール」との絡みで問題になるとの側面が伴う」**

とのことにまつわって典拠を挙げきれていなかったと認識することにつき、ここ **出典(Source)紹介の部 55(2)**にあっては補ってもの典拠を挙げておくこととする。

まずもっては、先立っての部にてきちんとした文献上の典拠を挙げきれていなかったと認識すること、

**「ミルトン『失樂園』にてサタンが「擬人化された[死][罪]が渡ることになったとの航路」を単身、アビス(深淵)を飛翔・横断しながら切り拓いたとの筋立てが具現化している」**

とのことについて文献上の典拠となる部を原文引用にて出典紹介なしておく。

ミルトン『失樂園』にあって「サタンが擬人化された[死][罪]が渡ることになったとの航路を単身、アビス(深淵)を飛翔・横断しながら切り拓いたとの筋立て」が具現化しているとのことに関しては次のように(古典それ自体には)描写されているところとなる。

(直下、「サタンが(艱難辛苦の踏破行といった表されかたをする)飛行移動でもってして[深淵]の領域を渡り、人間の世界に[死]と[罪]が侵入する因をつくったとのありよう」を描いた岩波文庫版ジョン・ミルトン『失樂園(上)』(内収録の第二巻)p.111 から p.112 よりの原文引用をなすとして)

---

彼はその衝撃を排除し、必死に進路を求めて飛翔しつづけた。勿論、幾多の困難と危険にも直面したが、それは、互に闘(せめ)ぎ合う岩礁の間をぬいながら、ボスポラス海峡を通過したときのアルゴ号が、乃至は、左舷ではカリュプティスを避け右舷では渦巻すれすれに進路をとったオデュッセウスが、直面したものよりさらに甚だしいものであった。こうやって、彼は激しい困難と辛酸をなめながら進んでいった。——まさに、それは困難と辛酸の極といえるものであった。だが、彼がひとたび通りすぎてからまもなく、というのは人間が罪に墜ちた時のことだが、そこになんと不思議な変化が生じたことであつたらう。「罪」と「死」がすぐに悪魔(サタン)のあとを追い(それが神の御意志(みこころ)であつたのだ)、その足跡に従って、暗鬱な深淵の上に、踏みかためた広い路を敷いたからだ。この路を、つまり、地獄からこの脆い宇宙の最外層部にある原動天に達する、驚嘆すべき長大な橋梁を、滾(たぎ)りたつ深淵はまさに唯々(いい)として支えるにいたつた。神と善き天使たちが特別な恩恵(めぐみ)によって守り給うている人々をのぞいて、その他の多くの人間を、悪しき天使たちが或(あるい)は誘惑し、或は処罰しようとして、自由にかつ楽々と往ったり来たりする橋がまさにこれなのだ。

---

(引用部はここまでとしておく)

上の部にて引用なしているところで

**「[罪]と[死]が悪魔(サタン)のあとを追い、地獄から宇宙の最外層部にある原動天に達するかたちで敷いたとの長大な橋梁を支えている滾(たぎ)りたつ領域」**

と形容されているのがアビスこと深淵、すなわち、

E. **「果てなき(底無し)の暗黒領域」** (『失樂園』アビス)

F. **「大きさ・[時間]・[場所]が無意味となる領域」** (『失樂園』アビス/17世紀成立の『失樂園』の刊行時には時間と空間を有機的一体と見る相対性理論に通ずる発想法は無論、なかった)

G. **「自然の祖たる領域」** (『失樂園』アビス)

との要素でもってブラックホールと接合することを先立っての**出典 (Source) 紹介の部 55**にて指摘したとのアビス(深淵)となる。そのアビスを横断する通路をサタン(ルシファー)が開通し、その通路を通過してサタンの妻子たる「罪」と「死」が人間に襲いかかることになったというのがミルトン『失樂園』の筋立てとなる。

そのことを示すべくもの引用を「もう一押し」とのかたちで以下、なしておくこととする。

(直下、同文に「サタンが飛行移動でもってして[深淵]の領域を渡り、人間の世界に[死]と[罪]が侵入する因をつくったとのありよう」を描いた岩波文庫版ジョン・ミルトン『失樂園』(内収録の第十巻)p.167からp.168よりの原文引用をなすとして)

---

地獄の門の内側で「罪」と「死」が坐っていた——そうだ、その門の内側で互に向かい合って坐っていた。門は、「罪」の手で開けられて悪魔が通過して以来、今では大きく開かれており、炎々たる焰が混沌の奥深くから噴き出していた。「罪」が急に「死」に向かって次のように話し始めた。「わが子よ、わたし達の偉大な父サタンが、他のところで首尾よく目的を果たし、親愛な子供であるわたし達のために、ここよりもっと幸福な住処(すみか)を見つけてくれたというのに、ここでわたし達がぼんやりと顔を見合わせたまま坐っている法はない(以下略)

---

(引用部はここまでとしておく —※— )

(※上については和訳版でも英文原著近代訳版でも[罪]が息子たる[死]に自分たちが共に悪魔の王の子種であるように語っているさまが描写されるが、うち[罪]の方はサタンの子種であると同時に[妻]ともなっている。ミルトン『失樂園』上の設定では墮天する前のサタン(ルシファー)が[自己の分身]でもある[罪]と交わったうえで、天界から追われてから擬人化されたその[罪](蛇女の形態をとる)が[死](醜悪な怪物の形態をとる)を産み落とし、彼ら[罪]と[死]が揃って[地獄門]の側に座していたところ、地獄からエデンに向けて人類墮落(Fall of man)の単身飛行に乗り出したサタン(ルシファー)とたまさか運命的な出会いを果たすことになった、邂逅したとの設定が採用されているのである。ややこしい設定ともなり、記述が分散しているために引用だけでは同じくものは指し示しにくいとこのことがあるので、そちらについては岩波書店から出されている『失樂園(上)』(内収録の第二巻)p.95—p.100に言明がなされているとだけ解説しておく)

(さらに続いて直下、同文に「サタンが飛行移動でもってして[深淵]の領域を渡り、人間の世界に[死]と[罪]が侵入する因をつくったとのありよう」を描いた岩波文庫版ジョン・ミルトン『失樂園(上)』(内収録の第十巻)p.172よりの原文引用として)

---

そこから何一障害物のない平々坦々たる広い道が地獄に下っていたというわけだ。巨大なものを微小なものに譬(たと)えることが許されれば、この橋は、かつてクセルクセスがギリシャの自由を束縛しようとして、メムノンゆかりのあの宏大な宮殿の地スサから海岸地帯に降りてきて、ヘレスポント海峡に橋を架けることによってヨーロッパとアジアを結びつけようとしたが、その際反抗する狂欄を幾度も鞭打った故事を偲ばせた。こうやって「罪」と「死」は、驚くべき架橋の技術を駆使してこの偉業を達成し、狂乱の深淵の上に宙づりに架せられた岩橋を造り上げた。

---

(引用部はここまでとしておく)

以上、英文学者の(故)平井正穂東京大学教授が訳をなしたとの訳書に見る表記を挙げたが、抽出した部の原文にあつての対応箇所も挙げておく。すなわち、「オンライン上よりPDF形式でダウンロード可能である」(その気があるのならばオンライン上より表記のテキストでもって検索するなどして文献的事実であると容易に確認可能である)との画家ギュスターブ・ドレの挿絵が付された PARADISE LOST『失樂園』近代刊行版、近代文人によって編集がなされた版 — EDITED BY HENRY C. WALSH, A.M.,と編者が記されている版— にての該当部表記も挙げておく。

(直下、Book II 1011—1044(第2巻1011行—1044行)と付された部(誰でもアーカイブのサイトよりダウンロード可能なPDF版のページ数はp.55)よりの引用をなすとして)

---

And more endangered, than when Argo passed  
Through Bosphorus, betwixt the justling rocks ;  
Or when Ulysses on the larboard shunned Charybdis, and by the other  
whirlpool steered.  
So he with difficulty and labour hard  
Moved on, with difficulty and labour -he ; ,  
But he once passed, soon after, when man fell  
Strange alteration ! Sin and Death amain  
Following his track, such was the will of Heaven,  
Paved after him a broad and beaten way  
**Over the dark abyss, whose boiling gulf**  
**Tamely endured a bridge of wondrous length,**  
**From hell continued, reaching the utmost orb**  
**Of this frail world**

---

(原著よりの区切つての引用部、うち、ワンパートの引用部はここまでとする —尚、下線添付部が上にての訳書よりの引用部らとそのまま対応するかたちとしている— )

(直下、Book X 222—255(第10巻222行—255行)と付された部(誰でもアーカイブのサイトよりダウンロード可能なPDF版のページ数はp.247)よりの引用をなすとして)

---

Meanwhile, ere thus was sinned and judged on earth,  
Within the gates of hell sat Sin and Death,  
In counterview within the gates, that now  
Stood open wide, belching outrageous flame  
Far into Chaos, since the Fiend passed through,  
Sin opening ; who thus now to Death began :  
O son, why sit we here, each other viewing  
Idly, while Satan, our great author, thrives  
In other worlds, and happier seat provides  
For us, his offspring dear?

---

(原著よりの区切つての引用部、うち、ワンパートの引用部はここまでとする —尚、下線添付部が上にての訳書よりの引用部らとそのまま対応するかたちとしている— )

(直下、Book X 290—323 (第 10 卷 290 行—323 行)と付された部(誰でもアーカイブのサイトよりダウンロード可能な PDF 版のページ数は p.249)よりの引用をなすとして)

---

Forfeit to Death ; from hence a passage broad,  
Smooth, easy, inoffensive, down to hell.  
So, if great things to small may be compared,  
Xerxes, the liberty of Greece to yoke,  
From Susa, his Memnonian palace high,  
Came to the sea, and, over Hellespont  
Bridging his way, Europe with Asia joined,  
And scourged with many a stroke the indignant waves.  
**Now had they brought the work by wondrous art**  
**Pontifical, a ridge of pendent rock,**  
**Over the vexed abyss,** following the track  
Of Satan to the self-same place where he  
First lighted from his wing, and landed safe  
From out of Chaos, to the outside bare  
Of this round world.

---

(原著よりの区切つての引用部、うち、ワンパートの引用部はここまでとする 一尚、下線添付部が上にての訳書よりの引用部らとそのまま対応するかたちとしている )

これにて先立っての部にてきちんとした文献上の典拠を挙げきれいでなかったと認識すること、

**[ミルトン『失樂園』にてサタンが「擬人化された[死][罪]が渡ることになったとの航路]  
を単身、アビス(深淵)を飛翔・横断しながら切り拓いたとの筋立てが具現化している]**

このことについて文献上の典拠となる部を原文引用にて示したことになる。

([概説]部としての色彩も強かった**出典(Source)紹介の部 55**を補つてももの部としての**出典(Source)紹介の部 55(2)**はここまでとする)

---

直上にての出典紹介部で岩波から出されている邦訳版の問題となる箇所<sup>1</sup>の原文引用にとどまらず懇切丁寧に英文のミルトン原著(の近代訳版)よりの引用までなしたのはそれほどまでに引用部内容が重要なものとの認識が本稿筆者、この身にあるからである。

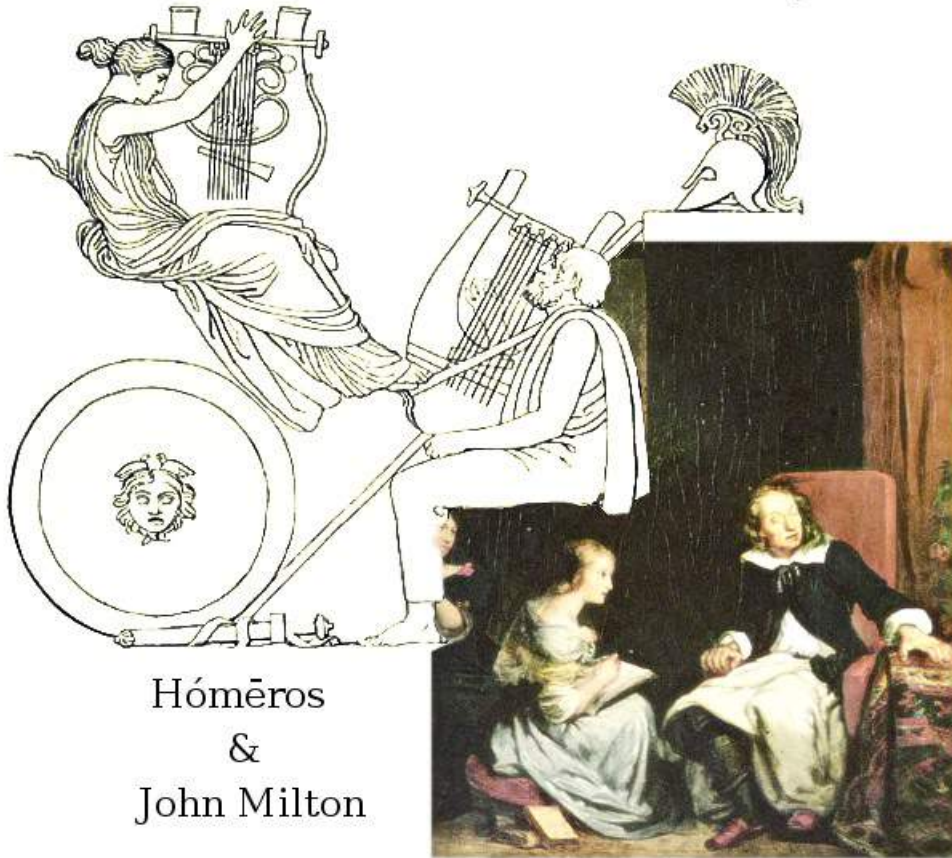
につき、第一に英文学者の(故)平井正穂東京大学名誉教授の訳の抜粋だけではオンライン上よりの確認はできぬか、ととらえたこともある(ただし上のオンライン上の英文も古語で読み解きにくいものとなり、識見がないとの人間であれば、先にての邦訳版抽出部との[比較対象検討]でもってしてはじめて意味が解せるようなものとなり、その意で不親切であったかとは思ふ)。

加えて二義的には、

**[（ここでの）抜粋部がトロイア崩壊の物語と多重的・複合的に関わってくる]**

ということが「現実」にあり 一後の段にて詳述する一、その点を本稿で重んじているとの点から論拠提示を密になしておきたいと考えたとの(本稿にあっての立論上の)事情もある。





Hómēros  
&  
John Milton

Paradise Lost『失樂園』をものした17世紀英国の文人ジョン・ミルトンもトロイアの崩壊プロセスにまつわる一大叙事詩 Iliad『イリアス』および Odyssey『オデュッセイア』を今日に伝えているホメロスも双方ともどもに「盲目の」詩人として知られている(にまつわってはさらに後の段で解説に紙幅を割く)。

そうもした「盲目の」ジョン・ミルトンとホメロスの作品らにあつて

**[トロイア崩壊を通じての結節点]**

がみとめられることを本稿では「重く見ている」。

というのもそちら結節点、どういふもののかについて後続する段にて詳述する所存であるとの「トロイア関連の」結節点が、(一呼吸置いて)、よりもよって

**[ブラックホール近似物描写]**

と結びつくところにあつて具現化しているとの情報把握をこの身がなしているからである(まじめな読み手におかれてはトロイア崩壊譚がいかようにして今日のブラックホール人為生成関連の命名規則に影響を与えていると述べられるのか、具体的論拠を挙げ連ねて仔細に解説してきたとの本稿ここに至るまでの内容についてご把握いただけているかとは思ふ)。

さて、そこにいう、

**[(ブラックホール近似物描写にも関わりもする)トロイア崩壊譚を通じての結節点]**

がいかようなものなのかは後の段で解説なすとして、ここではジョン・ミルトンとホメロス — (上にては近代以後に描かれた彼らジョン・ミルトンとホメロス双方の似姿、ウィキペディアに掲載されての画像を挙げもしている) — の双方が[ムーサ](英語呼称:ミューズ)という[ギリシャ・ローマ世界の一群の文芸を管掌する女神ら]に対する請願をなしている、[口寄せなしての物語再現に対する憑依靈感を求めての請願]を世に傑作と謳われる彼らの『失樂園』そして(トロイア崩壊にまつわる)叙事詩『イリアス』『オデュッセイア』の中で書き綴っていることを、(さしあたり)、問題視しておきたい。

大作とされる欧米古典の特徴として、(これまた問題となるところとしてダンテ『地獄篇』も含めてそうなのだが)、その作中に文芸の神らであるムーサ(ミューズ)達に対する[インヴォケーション](憑依靈感を求めての神への請願)がなされているとのことが時折、みと

められるとのことがあり(については英文 Wikipedia[Muse]項目にて現行、“**Some prose authors also call on the aid of Muses, who are called as the true speaker for whom an author is merely a mouthpiece.**”「幾人かの散文の作者らは真の語り手であり、その場合、著者はただの代弁者(口寄せの媒質)でしかないとのミューズ達の援助を(文中にて)請い求めもするとのことがある」と記載されているとおりで)、そうした [Invocation; 技芸の神たるミューズらが自分の口を用いて物語りなどなしてくれるように、との自我を否定するような著名古典にみとめられる請願] の例としてミルトンやホメロスのやりようが(英文 Wikipedia[Muse]項目などにて)次のように式で例示されるところとなっている

[ホメロスの Iliad 『イリアス』冒頭部]

“ Tell me, (for ye are are heavenly, and beheld  
A scene, whereof the faint report alone  
Hath reached our ears, remote and ill-informed,)  
Tell me, ye Muses, under whom, beneath  
What Chiefs of royal or of humbler note  
Stood forth the embattled Greeks? ”

[ダンテの Inferno 『神曲; 地獄篇』地獄篇第二歌]

“ (Dante Alighieri, in Canto II of The Inferno:)  
O Muses, O high genius, aid me now!  
O memory that engraved the things I saw,  
Here shall your worth be manifest to all! ”

[ミルトンの Paradise Lost 冒頭第一巻]

“ Of Man’s first disobedience, and the fruit  
Of that forbidden tree whose mortal taste  
Brought death into the World, and all our woe,  
With loss of Eden, till one greater Man  
Restore us, and regain the blissful Seat,  
Sing, Heavenly Muse, ”

直上引用部についてはミルトンのそれだけ訳しておくが、そこには「人類の最初の不服従について、そして生限られた者(人間)には賞味禁じられし果樹について、世界に死を呼び込みもしてのことについて、今日生きる我らが全員にとっての災いについて、一人の偉大なる男(キリスト)に至るまでの楽園の喪失について、我らをかっつての上なくも満ちたりし座に恢復させしめ(我が口に言寄せて)歌ってくれ、天なるミューズよ」

などとのことが記載されており、といった書きようのことを顧慮することで

[よりもって問題の根が深く受け取れる]

とのこととなる。

これよりさらにもって詳述なすが、

[ミルトン『失樂園』にあつてのブラックホール「近似」物にまつわる描写]

にして、

[ (最前、そうしたことがあると言及したところの) トロイア崩壊譚と結びつく描写]

は他事物らとの多重的関わり合いとの意味「でも」

[ (時空間にまつわる相対性理論がまだ世に出ていない時代にあつて) 時間と空間が意味をなさなくなる[深淵]の領域を言及していることの重さ]

が増すことになるもの、そう、[操り人形]の問題に相通ずるところでそちら重さが増すことになるもののであるからである(「[問題となる事柄らがあまりにもひとところにとまりきっているもの]であるから. . . 」でもいい)。——余事記載が過ぎるかと思いつつも敢えても書くが—— 同じくものことについて人類にとって[悲劇]ととえられるのは現代に至

るまでときに産業的に押し売りされてきた、あるいは、他に夢見心地を与えるとの才能を強くも有しているがゆえに有用視されてきた節ある[文人ら](情緒的価値はどうかは何とも言えないが、情動的価値は低いといった成果物ばかりを生産してそれでもってそのタレントが世の中に[天賦の才]として担がれるといった一群の人々)の内、少なからずが「今日に至るまで」[広告宣伝用のスピーカー]程度の存在、そう、

[言の葉さえ自分では紡げぬとの木偶(でく)]

として運用されてきた可能性があるとのことであり、加えて、そうしたシステムに与えられた役割を充分認識してやっているのかにさえ疑義があるとの彼・彼女らに由来するよく響きもする言の葉に

[悪質極まりない反対話法 一皮相浅薄の知識しか持ち合わせていない人間には絶対に気づけぬような悪質な反対話法— ]

が濃厚かつ体系的に込められてきたし、いまもってそうであるとすら透けて見えるようになっていること「でも」ある(にまつわってはこれよりさらなる具体例を呈示していくことにする)。

無論にして、無条件にそれを口に出せば、

[馬鹿げたものの見方][才なき者の嫉視の弁][ものあわれを知らぬ技術的野蛮人の雅致・雅趣の世界を貶めんとするが如く野蛮なる言い様]

と世人一般にはとられかねない申しようではある(：ただ、「自分の名誉(汚されると状況不利となりうると判じるもの)のために述べておく」が、筆者は文筆の世界などにて声望博している文人らに対して嫉視きたすような羨望の情など元より抱いたこともない人間であると申し述べておく。そも、泳がんとしてきたとの世界が「彼ら」とは根本からして違う。本来的に本稿筆者には[他人の移ろいやすい主観に左右されるとの情緒的価値の世界]で世に伍していくとの発想は「ない」のである(実業志向であるとの親族縁者一般らから[文学]などを軽んずる傾向を強くも受け継いでしまっており、エンターテインメントでもなく情動的価値もあまりないとの[純文学]や[古典]などを必要以上に担ぐ世の風潮がはきとってほとんど理解出来ない)。自身の知の力を活かしての[公正さが担保された情動的価値(専門技術・専門知識)を提供して世に伍していくとの発想]はこの身には少なからずあったが、[文筆の世界(博奕における目の出方からそうと言われる八と九と三の世界、不条理なコネや不条理な力学が強くも作用する相応の世界であろうとは見る)にてのときに空漠なる輝かしさ][文才に加えての相応の+αが[売れる][売られる]のに要求される節ある世界]に対して嫉視きたすような羨望の情など元よりこの身には「ない」のである 一日本国内では愚にもつかぬカルトに嫉視などなす人間がいないのにも関わらずそうした筋目の転換話法では[嫉妬]がなされているとのことにもなるようだが、といったことに通ずるところとしてナンセンスであるとも申し述べておく— )。

そのように申し述べて、ここでの申しようが

[馬鹿げたものの見方][才なき者の嫉視の弁][ものあわれを知らぬ技術的野蛮人の雅致・雅趣の世界を貶めんとするが如く野蛮なる言い様]

では済まぬのならば、どうなるのかと問うておきたい。そして、虚偽欺瞞に慣らされてきた人間存在の至るところのありよう、抗わねばどうなるのかとのことについて一考いただければ、光栄であると申し述べておきたい。

上のこと、(実にもって要らぬところであったとも思うのであるも) 表記したうえで

[先立っての**出典(Source)紹介の部 55**でカバーしきれていなかったとのことについての補うべくもの**出典紹介部**]

を続けることとする。



# SOURCE

## 55(3)



先にての概説部「兼」出典紹介部としての位置づけの出典 (Source) 紹介の部 55にて

[ダンテ『地獄篇』およびミルトン『失樂園』の西洋二大古典に「ブラックホール」との絡みで問題になるとの側面が伴う]

とのことにまつわって典拠を挙げきれなかったと認識することにつき、ここ出典 (Source) 紹介の部 55(3) にあってはさらに補ってもの典拠を挙げておくこととする。

具体的には

- a. [ブラックホールが「時間と空間の法則が破綻する場」であること]
- b. [ブラックホールが「中に吸い込まれた者の末路が「外側から見る」と時の氷地獄に閉じ込められたようになる——だが、しかし、吸い込まれた者から見れば分解されているとの状況になっている——領域」となっていること]
- c. [ブラックホールが「自然の祖」であるとも考えられていること]

とのことからについてさらにもっての典拠紹介をなしておくこととする。

まずもってブラックホールが

- a. [時空間の法則が破綻する(時間と空間が本来通りの意をなさなくなる)領域]

であるとのことについてはロンドン大で科学史・科学哲学を研究する教授であるアーサー・ミラーの手になる著作、**Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes** の邦訳版『ブラックホールを見つけた男』(草思社)、その432ページにあって[特異点(ブラックホール)]につき次のような言いようがなされていることを引いておく。

(直下、『ブラックホールを見つけた男』(草思社)、p.432よりの原文引用をなすとして)

「特異点——限りなく縮んで無限大の密度の点になった星——という極限状

況では、古典物理学の法則は破綻し、一般相対論もその例に漏れない。古典物理学の法則からは無限という特異点が現われ、容認することのできない矛盾が生じてしまう。けれども、自然をもって現実に即して記述する量子物理学なら、古典物理学が立ち往生してしまう無限を扱うことができる。ブラックホールの奥底では、量子重力の法則があとを引き継ぐ。物理学者たちの推測では、そのような極限状況にある領域では時間と空間は引き裂かれ、出来事の因果関係は消え、時間の前後の区別がなくなるとされている。量子物理学の法則は異様さと曖昧さの始まりを示すものである。時間と空間は切り離される。空間は明確な形を失い、あとに残るのは、決まった形をもたない石鹸の泡の塊のような「量子の泡」の揺らぎである

---

(引用部はここまでとしておく)

さらに ブラックホールが

**b.[その中に吸い込まれた者の末路が「外側から見る」と時の氷地獄に閉じ込められたようになる ——だが、しかし、吸い込まれた者から見れば分解されているとの状況になっている—— 領域]**

であるとのことの「さらなる」出典を挙げることにする。

それにつき、[時に凍り漬けにされるが如き描写]についてはここでその不備を補うことを目的にしての **出典(Source) 紹介の部 55**にて既に次の通りの出典を挙げておいた。

(直下、『2063年、時空の旅』(講談社刊行. 原著原題 Time: A Traveler's Guide / 著名な米国の科学解説本著者であるクリフォード・ピックオーバーの手になる門外漢向け科学理論解説書の訳書)にあつての架空の登場人物らにかこつけられてのブラックホールにまつわる科学理論の解説部となっている 234 ページの記述を引用なししていたところとして)

---

「もしヴェーユがブラックホールに近づきすぎたらどうなるだろうか。琥珀に閉じこめられた古代のアリのように、ヴェーユは事象の地平面で永久に凍りついたように見えるだろう。そして彼の姿は薄くなって消えていく。現実には、彼の身体は事象の地平面を突き抜け、特異点に向かって落ち込んでいくのである」

---

(再度の引用部はここまでとする。尚、[外側から見るとブラックホール被吸引者の姿は琥珀に閉じ込められた蟻のように見える]と書かれてはいるが、そもそも、[外側から見る]との観測行為が諸種の障害ゆえに不可能事とされるとのこともあるのだが、そのことはここでは置く)

ここではもう一例ほど同じくものこと ——ブラックホールの中に吸い込まれた者の末路が「外側から見る」と時の氷地獄に閉じ込められたようになること—— にまつわる出典を挙げておくことにする。

(直下、『ホーキングの最新宇宙論 ブラックホールからベビーユニバースへ』(日本放送出版協会(現社名:株式会社NHK 出版))との国内にて多数流通した書籍にての p.108 から p.109 よりの引用をなすとして)

---

このように、崩壊してブラックホールになっていく星を遠くから見ている人は、



星が実際に消え去るところを見ることはできません。その代わりその星は、実質的に見えなくなるまで、どんどんぼんやりと、赤くなっていくだけでしょ。向こう見ずな宇宙飛行士が、ブラックホールに飛び込むのを見ていると、同じようなことが起きるはず。たとえば、彼の時計で十一時〇〇分にブラックホールに入るとします。そこは光線ばかりか、何もかも脱出不可能な領域です。ブラックホールの外にいる人は、どんなに長い間待っても、宇宙飛行士の時計が十一時〇〇分を指すのを見ることはできません。その代わり、宇宙飛行士の時計の一秒一秒がどんどん長くなって、ついに十一時〇〇分の前の最後の一秒が、永遠に続くのを見ることになるでしょう。このように、ブラックホールに飛び込むことで、少なくとも外にいる人に対しては、自分の姿が永遠に残るということは確信できます。けれど、その像は急速に薄れ、誰にも見えなくなるくらい、ぼんやりとかすんでいくでしょう。

---

(引用部はここまでとする 一※一 )

(※尚、ここにて引用なした国内流通著作『ホーキングの最新宇宙論 ブラックホールからベビーユニバースへ』の著者とのことになっている著名物理学者スティーブン・ホーキング ——(同ホーキング、本稿の **出典(Source) 紹介の部 1** および **出典(Source) 紹介の部 2** にて摘示しているように[加速器生成ブラックホール]の議論の契機を一面で造りだしたとの存在にして、また、加速器生成ブラックホールの安全性論拠に転用されることになった概念(ホーキング輻射)を提供していたとの存在ともなる)—— に関してはその著書 A Brief History of Time 『ホーキング、宇宙を語る ビッグバンからブラックホールまで』(早川書房)の中で次のようなこと「をも」述べてもいる。(ハードカバー『ホーキング、宇宙を語る ビッグバンからブラックホールまで』 p.123 から p.124 よりの原文引用をなすところとして)“たとえば軽率な宇宙飛行士などのような物体が事象地平を通過してブラックホールに落ち込むことはできても、事象地平を通り抜けてブラックホールから抜け出すことのできるものは何一つない(事象地平はブラックホールから脱けだそうと試みている光が時空の中でたどる経路であること、そして光よりも速く伝わるものは何もないことを思い出そう)。事象地平に対しては、ダンテが地獄の門について述べた言葉があてはまるだろう。「ここより入る者はすべての望みを棄てよ」。事象地平を落ちたものは、何物も、また、何人も、すみやかに無限の密度の領域と時間の終焉にいきつくだろう”(引用部はここまでとする)。以上抜粋して示した事、スティーブン・ホーキングがダンテ『地獄篇』にあっての Gates of Hell[地獄門]の概念を持ちだしながらブラックホールのことをかつて論じていたとのそのことは本稿先にて解説した[ダンテ地獄篇における[特徴]]と関わりもすることとなる ——その点、ホーキング見解は経年変化を見ており、ホーキングがここにて抜粋したような部にまつわる見解をすべて保持し続けているかの問題は脇に置く。また、筆者は「ダンテを用いての比喩の側面で」ホーキングの[慧眼](のようなものがあれば、だが)を称揚しているわけでもなければ、「かのホーキングが述べているのだから・・・」との論理を前面に押し出している([権威による論証]という[詭弁術]の一種を用いんとしている)わけでもない。「問題としたきは、」特定権威が『地獄篇』に通ず

る申しようがなせるとのことを一面で傍証するようなことを述べていたとの事実がある、ただ、それだけのことである—— )

他面、ブラックホールが

c. [自然の祖と表されるようなものであるとする観点が存する領域]

であるとのことについては

[ブラックホールについては宇宙の行く末と深くも関わり、また、続く [ビッグバン] との兼ね合いで宇宙の孵卵器(ふらんき)となっているとの [見立て] がなされて「も」いる存在である]

とのこについての紹介をなすことが直截な方式であると見たのでそうすることとする(尚、ブラックホールとビッグバンとの関係性について述べれば、ブラックホールに見る特異点が原初宇宙のそれに似ているといった別の話も関わる節があるのであるが、については、ここでは典拠をいちいち挙げないこととする)。

その点、まずもっては日本にて流通を見ているここ日本の科学雑誌 Newton の記述を引いておくこととする(同誌については『物見遊山的な素人向けの雑誌だろう』と嗤う向きもあるようにも思うのだが、[広く言われもしてきたところ]としての学者ら理解のことを紹介するにはそこよりの引用で足りるとの認識が筆者にあること、お断りしておく)。

(直下、Newton 別冊 正反対の顔をもつ「時空の二つの穴」ブラックホール ホワイトホール(2008年6月15発行の号)にての [宇宙とブラックホールの最終章]の部よりの中略なしつつもの掻い摘まんでの引用をなすとして)

---

われわれの宇宙は現在膨張しています。そのような宇宙の未来はどうなるのでしょうか。…(中略)…真っ黒になった宇宙の銀河の中には、大きな星の最後に残ったブラックホールや冷えた中性子星、冷えた白色矮星、そしてはじめから燃えることのなかった木星のような星だけになります。…(中略)…銀河を支えるエネルギーが小さくなってつぶれていき、最後は巨大なブラックホールになります。そして、銀河がつぶれた巨大なブラックホールの間のばく大な空間を、小さなブラックホールや冷えた星がさまよっているのが、遠い宇宙の姿です。その後、宇宙はブラックホールだけになり、さらに遠い未来にはこれらが宇宙のいたるところで蒸発をはじめて輝きはじめます。そしてこの蒸発が大爆発を経てすべて終わると、宇宙に最終的な死が訪れるのです」

---

(引用部はここまでとしておく。同様のことは英文 Wikipedia [ Chronology of the universe ] 項目の Big freeze: 100 trillion years and beyond の節などにて現行、記載されているところに大きく通ずるところがあると見ている)

また、同じくものことと関わりとる場所としてブラックホールが宇宙の末路であるとされる一方でブラックホールが次なる宇宙の孵卵器になっているとの申しようもなされている。

については「従前」にあつて和文ウィキペディア[ビッグバン]項目にてからして下に引用するような記載がなされて「いた」とのことがある。

(直下、「従前の」和文ウィキペディア [ビッグバン] 項目よりの引用をなすとして)

---

「ビッグバンのメカニズムについて 1. 前宇宙で発生したブラックホールで吸収された物質が、素粒子…(中略)…まで分解された後、時空の底へ落下する。2. 時空の点に落ちた細かな粒子は最大の放出口であるビッグバンに向かって放出される。3. 放出後に物質化した物質同士が融合を繰り返し再度ブラックホールが形成され1から繰り返される」

---

(引用部はここまでとする)

だが、上の記述は現況にあつてはウィキペディアの当該項目の改変によって見られなくなっている。行き過ぎた書きようであったのか、他の事情があるのか測りかねるが、とにかくものこととして、である(：筆者がウィキペディアの改変状況を把握できているのには数ギガバイトのウィキペディアのダンプデータを都度、(閲覧・参考用に)ダウンロードしているとのこと「も」ある)。

そこで次のような科学読み本に見る記述を ——[内容が変転しない普遍的なる文献的事実]の問題に関わるところとして—— 引いておくこととする。

(直下、本稿の先の段でもその内容を問題視したところの Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos (邦題『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』。同書訳書の刊行元は現NHK出版)の原著、CHAPTER EIGHT A Designer Universe?の章にての p.254 よりの原文引用をなすとして —原著テキストの方は引用英文テキストを検索エンジンで入力・検索することでその通りの記載がなされていることをオンライン上より確認できるようになっている— )

---

One variation of the multiverse idea is actually testable today. Physicist Lee Smolin goes even further than Rees and assumes that an “evolution” of universes took place, analogous to Darwinian evolution, ultimately leading to universes like ours. In the chaotic inflationary theory, for example, the physical constants of the “daughter” universes have slightly different physical constants than the mother universe. If universes can sprout from black holes, as some physicists believe, then the universes that dominate the multiverse are those that have the most black holes.

(拙訳として)

「マルチ・バース(多世界解釈)にあつての一つの類型は現実に今日、検証に堪えるものとなっている。物理学者リー・スモリンはリース(訳注:文脈上、マーティン・リースという大物物理学者のことを指す)よりさらに先に行きもし、[宇宙の進化はダーウィンの進化の類似物として発生し、結果的に我々のそれのようなものに至ったのである]と考えている。無秩序(カオス)とのことでの宇宙膨張理論(訳注:宇宙インフレーションセオリー)にあつては例えば、娘宇宙らの物理定数は幾分、母宇宙のそれと違う物理定数となるとの見方がある(訳注:ここでは生物学的に見た細胞分裂の娘細胞や母細胞のような観点で宇宙論が語られている)。仮に幾分か物理学者らが信じているように宇宙がブラックホールより生じるのならば、他宇宙・多世界(マルチ・バース)に対して優勢を呈する宇宙とは「最もブラックホールを保有しているもの」らということになるだろう」

---

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

上にて引用したところで『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』（NHK 出版）著者ミチオ・カク（米国にて一流かつカリスマ物理学者として認知されているハーバードにて学位取得のメディア露出型日系人物理学者）は

「仮に幾分かの物理学者らが信じているように宇宙がブラックホールより生じるのならば、他宇宙・多世界（マルチ・バース）に対して優勢を呈する宇宙とは[最もブラックホールを保有しているもの]らということになるだろう」

と述べているわけであるが、そうした見方 ——宇宙の揺り籠はブラックホールである（ないしは甚だしくは宇宙はブラックホールそのものの子供である）という見方—— を尖鋭に示す英語圏科学分野の識者の物言いも少し調べて見れば見つかるところとなっている（：たとえば、である。その伝で最も尖鋭性を呈している（極めて radical である）との見方は Nikodem Poplawski という物理学者に起因する 2010 年に端を発する見解として現況英文 Wikipedia[ Nikodem Poplawski ]項目にて掲載されているところの “**Nikodem Poplawski (born 1975) is a theoretical physicist at the University of New Haven, most widely noted for the theory that every black hole is a doorway to another universe and that the Universe was formed within a black hole which itself exists in a larger universe.**”（大要訳として）「ニューヘイヴン大の理論物理学者 Nikodem Poplawski はブラックホールが他の宇宙への入り口となっているとの理論、また、[宇宙が他のより大きな宇宙の中に存在しているブラックホールの中で形成されるものであるとの理論]の提唱者とのことでよく知られているとの向きとなる」（引用部の大要訳はここまでとする）とのものに見出すことができもする ——以上の見解は[我々の住まう宇宙が他のより大きな宇宙の中に存在するブラックホールの中にて生成されている可能性がある]といったことを論じての過激なものとなっている——）。

これにて、

「ブラックホールについては宇宙の行く末と深くも関わり、また、続く[宇宙生誕]との兼ね合いで宇宙の孵卵器（ふらんき）となっているとの[見立て]がなされて「も」いる存在である」

との解説を終えることとする（：すなわち、先程、A. から G. と分かちて明示したうちの G. [自然の祖であるとする観点が存する場]との特色をブラックホールが呈しているとされることの出典紹介を終えることとする）。

---

[補足として]

直近引用部にては

[ブラックホールをして [宇宙自体の揺り籠（甚だしくは母）] であるとす  
る観点] が存在していることにつき典拠となるところ]

をミルトン『失樂園』に見る[アビス]の領域の描写 ——（時間と空間を一体として見られるようになったとのアインシュタイン「以後」の現代科学に向けての展開から振り返って見て異質なことに 17 世紀古典にありながら[「時間」と「空間」が意味をなさなくなる]とされている底無しの闇の領域の描写) —— に関わるところとして挙げた。

それにつき述べておけば、同じくものことにつき、数多存在する出典紹介として呈示可能なものを脇に置き、敢えても

**Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions  
and the Future of the Cosmos**（邦題『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』（現 NHK 出版刊行））

との書籍を直上の段にて典拠として紹介したことに「も」（本稿筆者なりの）理由がある。

すなわち、極めて著名な古典となっているミルトン『失樂園』にあつて

[ルシファーことサタンが「ブラックホールに近似的なるもの＝アビス(「時間」と「空間」が意味をなさなくなる「底無し」の「暗黒領域」)]を越えて破壊の対象としての他世界(エデンにて育てられ出した人間の領域)に「林檎での誘惑につながった」単身飛行をなそうとするとの下り]  
[サタンの妻子たる擬人化された「罪」と「死」が「ブラックホールに近似的なるもの＝アビス(「時間」と「空間」が意味をなさなくなる「底無し」の「暗黒領域」)]を越え、「罪」と「死」が人間に襲いかかるための橋梁が構築されたとの下り]

が含まれているとのことと表記の著作、多世界解釈を扱った

[『パラレルワールド ―11次元の宇宙から超空間へ』に見受けられる内容、本稿にての**出典(Source)紹介の部20**で取り上げていたところの「カー・ブラックホールを越えて他世界へのナノマシン投入などをなすとのありべき先進文明やりように対する「未来」予測」がなされているとの内容】(以下、邦訳版『パラレルワールド ―11次元の宇宙から超空間へ』384ページよりの「再度の」原文引用をなすとして)

“カー・リングの中心にワームホールがあれば、われわれの宇宙をまったく別の宇宙と、あるいは、同じ宇宙のなかにある別の地点と、結びつけてくれるかもしれない。…(中略)…現在、おおかたの物理学者は、ブラックホールを生きて通り抜けることはできないと考えている。しかし、ブラックホールの物理的解釈はまだ未熟な段階で、この推測は検証されていない。ここでの議論のために、ブラックホールを通り抜けることができ、とくに回転するカー・ブラックホールでそれが可能だと考えてよう。すると、どの先進文明も、ブラックホールの中を探査しようと真剣に考えるだろう”(再度の引用部はここまでとする)との部につながる極微機械投入 ―ナノ単位やそれよりも遙かに小さいフェムト単位の極微さがゆえにブラックホール内部の潮汐力に耐えうるとの自律機械の投入― にまつわる内容) が

**「ブラックホール類似形を介しての接合性 (ミルトン『失樂園』に見るアビス領域進出描写と表記著作のカー・ブラックホール進出関連トピックを介しての接合性でもいい)を感じさせるものである」**

と見たとのことがあるがゆえにそのことに注意向けるべくも(現在そうしているように実際に注意を向けているとのそうした式につなげるべくも)わざと『パラレルワールド ―11次元の宇宙から超空間へ』という著作を出典として挙げもしたのである(：につき自説に誘導しようとのあざといやりようを取っているとの認識はない。本稿全体の内容をご覧いただければ、ご理解いただければかとのところとして、そういう解釈を取ってもなさざるをえないとの側面がこの世界にはあるとのことが摘示できるからこそ、そういうやりようをとっているのである)。

その点、ミルトン『失樂園』の「アビス ―繰り返すが、「地獄門の先にある領域にして「時空間の法則が意味をなさなくなる場にして」「果てなき暗闇の領域であり」「自然の祖である」との場―」については次のような描写がなされている。

(直下、ミルトン『失樂園』に見る「悪魔の王サタンが「地獄門を越えた先にある深淵アビスの領域」を越えて新しく造られた人間の領域に侵出、墮落のための工作をなすべし」との必要性を同サタン(ルシファー)と共に墮天した仲間の元・天使ら(悪魔ら)に一席ぶっている場を描いてのパート]、岩波文庫版『失樂園(上)』(平井正穂訳)p.79に記載されているところより原文引用をなすとして)

---

「荒れ狂っているこの業火の円蓋は、われわれを九重の壁でとり囲んでいる。頂上から覆いかぶさる、そして炎々と燃えさかっているもろもろの金剛不壊の



門は、頑としてわれわれが出てゆくのを禁じている。誰かがあそこを通り抜けたとしても、そのあとには、実体なき『夜』の底知れぬ空漠の世界が、大きな口を開けて待ち構えている。すべてを無に帰せしめんとするその淵に呑み込まれたら最後、もはや何もかも跡形もなく消滅してしまうのだ。かりにそこを脱れ、どこか未知の世界に達しえたとしても、やはりそこに待ち受けているものは、同じような未知の危険の危険であり、同じように困難極まりない脱出の模索に他なるまい」

(国内にて流通している訳書よりの引用部はここまでとする —※— )

(※尚、インターネットよりその本があるのならば全文ダウンロードできようとのパラダイス・ロスト原著、具体的には Henry Walsh との人物を编者として著名な挿絵家 Gustave Dore の手になる挿絵が付されているところの Internet Archive や Project Gutenberg のサイト経由でダウンロード可能なミルトン PARADISE LOST 原著近代刊行版にあつては ( BOOK II 433-466 行を収めた ) 38 ページにての、  
“ Outrageous to devour, immures us round  
Ninefold, and gates of burning adamant,  
Barred over us, prohibit all egress.  
These passed, if any pass, the void profound  
Of unessential night receives him next  
Wide gaping, and with utter loss of being  
Threatens him, plunged in that abortive gulf.  
If thence he 'scape into whatever world,  
Or unknown region, what remains him less  
Than unknown dangers, and as hard escape”

との部位がオンライン上より確認できる上記の国内流通訳書よりの引用部に対する原著該当部の文言となる —— ちなみにも、そこにて地獄の牢獄が Ninefold「9 重」と定義されているのは『失樂園』に数世紀ほど先行するところの Dante の Inferno『地獄篇』地獄が 9 層であると形容されていることの影響であろうと解されるところとなる —— )

以上の引用部にみるように

[『夜』の底知れぬ空漠の世界となり、一端、そこに下手に落ち込めば、二度と抜けられぬ領域 —— 『失樂園』の別の箇所では「時空間の法則が意味をなさなくなる場にして」「果てなき暗闇の領域であり」「自然の祖である」と描写されているアビスの領域 —— ] (そちらが他古典ダンテ『地獄篇』とあわせてブラックホールとの多重的類似性を有しているからこそ、本稿本段にて問題視しているとの領域)

を越えてルシファーが人間の世界に侵出しようとしている (そして [林檎] による悲劇をもたらそうとしている) と『失樂園』にて描写されていることが

(本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 20](#) でそういう物言いが著名物理学者よりなされるに至っているところの例示としたところの、)

[科学書『パラレルワールド —— 11 次元の宇宙から超空間へ』に見る、[カー・ブラックホールないしワームホールを越えての [潮汐力や放射に耐えうるナノマシン形態の「種子」の投入] (他宇宙・他世界への

進出へ対する種子たる自律極微機械投入)とのありうべき先進文明や  
りようにまつわる未来予測の話]

と[ブラックホール][ワームホール]関連で接合する節があるとのことを問題視すること「さえも」行き過ぎにはならないとの事柄ら(化け物がかった多重的関連性でもいい)が「ある」と指摘することに努めんとしているのが本稿となる——※[加速器によるワームホール(と呼ばれる重力の妙技)の人為生成]の可能性が現代の物理学者らによって取り沙汰されだしたのは「ここつい最近」のこととはなるが(同じくものことについては本稿の前半部にて細かくも典拠挙げながら解説しているし、さらに後の段にて解説なす所存である)、1950年代、[ワームホール]との言葉さえ存在していなかったとのその1950年代との折柄に世に出た特定ファンタジー小説作品からして[蛇の種族の侵略の筋立て]・[加速器とワームホール・ブラックホールの接合にまつわる(明示的ならぬ)隠喩的言及]をその特色としていると申し述べたならば、どうか(既に数点ほど、先覚的文物の問題を扱ってきた本稿ではあるが、未だ解説なしていないとのそちら小説作品、『リアンの剣』については後にこの段で詳説をなすこととする)。またもって、[ワームホール]という言葉の由来が一般に[「林檎に対する」虫喰い穴]に由来するとされている中で[ワーム](現在の語法では[這いずる虫])との語が本来的には古英語で[蛇]の類を意味する語であったと申し述べれば、どうか(その点については「も」後の段で解説なす)。読み手が聡くもあるのならば、そうしたこととここまで摘示してきた内容、そして、ミルトン『失樂園』にあって[[蛇(ワーム)]]に**変じたサタンが[林檎]でもって人間に破滅の結末をもたらした存在**と描写されていることから何がしかのことを考えて然るべきところである。そうも述べておく——。

注意喚起のために上のこと、述べておく。

(補足の部はここまでとする)

---

ここまでにてダンテ『地獄篇』・ミルトン『失樂園』にあっての[ルシファーと結びつく地獄門の先の領域]の絡みで着目しもしたところ(古典内特定記述)と接合する、

[時空間の法則が破綻する(時間と空間が本来通りの意をなさなくなる)領域としての性質]

[その中に吸い込まれた者の末路が「外側から見る」と時の氷地獄に閉じ込められたようになる——だが、しかし、吸い込まれた者から見れば分解されているとの状況になっている——領域としての性質]

[自然の祖であるとする観点が存するとの性質]

をブラックホールが有していると「される」ことについての典拠を挙げるべくも設けた出典紹介部を終えることとする。

([概説]部としての色彩も強かった**出典(Source)紹介の部 55**を補つてもこの部としての**出典(Source)紹介の部 55(3)**はここまでとしておく)

さてもってして、

「ルシファー」が多くを結節させる留め金となる要素の一ともなっている」

とのことについてダンテ『地獄篇』とミルトン『失樂園』の話に入る前の[より従前の段]にあつてのこととして、本稿では次のことらの指し示しに(各事項少なからずの紙幅を割きつつも)努めてきた。

---

(以下のことをよく検討いただき、その意味性についてよく考えていただきたい)

多少、順序違えながらもの振り返り表記をなすとして

・[エデンの園の誘惑]は[トロイア崩壊をもたらした[パリスの審判]に伴っての誘惑]と多重的に接合しているとの指摘がなせるようになっている(：出典(Source)紹介の部48から出典(Source)紹介の部51を包摂する一連の解説部を参照のこと。につき、(順序を違えながらも)、再度、繰り返せば、[パリスの審判]および[エデンの誘惑]に関して、**1.** [(エデンの[禁断の果実]を[林檎]と見る見方に拠つての話として)[パリスの審判]も[エデンの誘惑]も双方ともに林檎を巡るやりとりとなっている]、**2.** [双方ともに誘惑の具として女——片方がヘレン、片方がイヴ——が用いられている]、**3.** [双方ともに誘惑の結果が誘惑対象に(女難による)破滅的結果をもたらしたとのものである——パリスの審判の結果、パリスが王子となっていたトロイアは滅亡に至る戦争に突入した(Fall of Troyトロイア陥落に至った)。他面、エデンの誘惑の結果、アダムとイヴは至福の樂園からの追放を見た(Fall of man[人類の墮落]を見た)——]、**4.** [(パリスの審判でのアフロディテ、また、エデンの園で誘惑をなした蛇と結びつけられてきたルシファーに着目して)双方ともに誘惑者が[金星]と濃厚に結びつくかたちとなっている]、**5.** [(誘惑者のうちのアフロディテの方の金星と結びつけられてきた属性を脇に置いたうえで)黄金の林檎はそれ自体が宵の明星、すなわち、金星と結びつくとの要素を伴う管理者 Hesperides によって管理されているものとなる。他面、エデンの林檎の誘惑者の方は金星の体現存在とされているルシファーと結びつく]、**6.** [(小さなことながらも)双方とも爬虫類の類と接合する素地があることとなっている——エデンの園の誘惑については言うまでもないとして、パリスの審判にてその取得が争われたとの黄金の林檎については[ヘラクレス第11功業を巡るギリシャ神話にて100の頭を持つ竜(半ば蛇のような存在とも先述)たるラドンという存在に守られていると伝わっている]とのことがある——]、**7.** [上にて述べてきたことを加味したうえでよりもって重みが理解できるようなところとして19世紀欧州人によって[黄金の林檎の園]と[エデンの園]は同一性を帯びていた存在であると指摘されていたとのことがある]とのことらの摘示に表記の出典紹介部にては努めてきたとのことがある)

・[パリスの審判](トロイア崩壊の元凶となったところの審判)にあつてその取得が争われていた[黄金の林檎]がたわなに実る[ヘスペリデス(アトラスの娘達)の黄金の林檎の園]は「それなりの理由あつて」プラトン古典が語る[アトランティス]の質的同等物と看做されてきたとの背景がある。他面、同じくもの[黄金の林檎が実るヘスペリデスの園]は一直近にて再述のように[エデンの禁断の果実]が[黄金の林檎]と結びつけられもする中— [エデンの園]の質的同等物と看做されるだけの背景があるものでもある(：[黄金の林檎の園]←→[アトランティス]との点については[アトランティスとアトラスの娘の語源的連続性]などに着目しての出典(Source)紹介の部40および出典(Source)紹介の部41を包摂する部を参照のこと。また、[黄金の林檎の園]←→[エデンの園]との関係性については出典(Source)紹介の部51を包摂する部を参照のこと)

・(直上にて振り返りもして述べているように) [アトランティス] ↔ [黄金の林檎の園] との観点が呈されてきた一方で [黄金の林檎の園] ↔ [エデンの園] との観点が呈されてきたとのことは、(纏(まと)めれば)、 [アトランティス] (↔ [黄金の林檎の園] ↔) [エデンの園] との見方もがなせるようになってきているとのことである。そうしたことがある一方でのこととして「[アメリカ]こそが [アトランティス] である」との見解が大航海時代より存在しているとのことがありもし、その「[アメリカ]こそが [アトランティス] である」との見解に見る [アメリカ] にあってスペイン征服前に遡る土着文明 (アステカ文明) にて崇められていたケツアルコアトルという神とルシファー (エデンにての誘惑者) の間には **多重の接合性が存在しているとのことがある** ( : 出典 (Source) 紹介の部 52 から 出典 (Source) 紹介の部 54 (4) を包摂する一連の解説部を参照のこと。につき、再度、繰り返せば、[[エデンの誘惑の蛇 (サタン・ルシファーに比定される存在)] およびケツアルコアトルの間の多重の接合性] として、**1. [ 双方とも [蛇] としての存在となっている** —— [人語を解するエデンの誘惑の蛇] と [羽毛の生えた蛇としてのケツアルコアトル] とのことである—— ]、**2. [ 双方ともある種の [文明の促進者] とでもいべき存在となっている** —— [ケツアルコアトルにあっての神話に見る文化的英雄としての描写] と [エデンの知恵の樹の実による「裸体を恥じての」知恵と文明の向上] との観点で接合性が観念できる—— ]、**3. [ 双方とも [金星] と結びつく存在ともなる** —— [エデンの園の蛇] の場合は明けの明星の体現存在としてのルシファーと見た場合に [金星] の体現存在となる。 [ケツアルコアトル] は金星の体現神格として神話が語り継いでいる存在となる—— ]、**4. [ 双方とも信ずるものを裏切り、破滅的結果をもたらした存在となっている** —— [エデンの蛇] にあっては旧約聖書にあっての創世記の内容および新約聖書・黙示録の内容が背信・裏切りの所在を示している。他面、 [ケツアルコアトル] については (それが征服者のスペイン・サイドにいかようなる潤色・脚色がなされていようと) [一の葦の年 (1519 年) にてのケツアルコアトル帰還伝承] が [コンキスタドレス (スペイン征服者ら) 征服活動] を容易ならしめ、それに付随しての土地収奪と疫病の流布による人口の激減が具現化を見ているとのことがある—— ]、**5. [ 双方の欺瞞が体現した場に接合性が見てとれるとのことがある** —— 重複するも、 [アトランティス] を [アメリカ] と見る見方が歴史的に存在する。そちら [アトランティス] と見做されもしてきた [アメリカ] で崇められてきたのがケツアルコアトルとなるわけだが、 [アトランティス] については [黄金の林檎の園] との結びつきが問題視されてきたとの背景がある。 [黄金の林檎の園] については上述のような [黄金の林檎を巡るパリスの審判] と [禁断の果実を巡るエデンの園の誘惑] の接合点から [エデンの園] との接合性が観念される場となる—— ] とのことの典拠の紹介に表記の出典紹介部にては努めてきたとのことがある)

・CERN の LHC 実験は「[科学の進歩にとって望ましい] と鼓吹されての安全な極微ブラックホールらを生成する可能性がある」と (中途より) 述べられるに至った実験」となるが ( 出典 (Source) 紹介の部 1 および 出典 (Source) 紹介の部 2 を参照のこと)、「**どうい**うわけなのか、」同 LHC 実験、 [アトランティス] 「とも」 [トロイア崩壊伝承 (黄金の林檎で滅んだ都市の伝承) にまつわる事柄] 「とも」命名規則上、結び付けられるようになっている実験となっている ( 出典 (Source) 紹介の部 35 から 出典 (Source) 紹介の部 36 (3) を包摂する解説部および 出典 (Source) 紹介の部 46 を包摂する解説部を参照のこと)。LHC 実験では [黄金の林檎の所在地を知る巨人] として伝わる [アトラス] の名前が用いられていた、同実験まわりでのイベント・ディスプレイ・ウェアに対して [アトランティス] との名前を付すとの派生命名規則を「後に」生み出すことにもなることとつながったところとし計画準備段階から [アトラス] の名が用いられていた。 **につき、[LHC 実験に供されての ATLANTIS という Event Display ツールの使用と表裏一体となっている**



ATLAS(出典(Source)紹介の部 36 に先立つ解説部を参照のこと)の命名が決められたのは1992年に遡ることとなっており(出典(Source)紹介の部 36(2)にあって CERN のオンライン上解説媒体 timeline.web.cern. Chより引いたところの“ATLAS and CMS collaborations publish letters of intent 1 October 1992 The Toroidal LHC Apparatus collaboration propose to build a multipurpose detector at the LHC. The letter of intent they submit to the LHC Experiments Committee marks the first official use of the name ATLAS. Two collaborations called ASCOT and EAGLE combine to form ATLAS.”(訳として)「ATLAS および CMS コラボレーション(共同企画面々)が1992年10月1日付けで取決め書を発する: Toroidal LHC Apparatus (環状 LHC 装置ユニットとでも訳せようところ)のコラボレーションの面々は LHC にあって多目的に機能する検出器を建設するよう提案なした。そこにて彼らが LHC 実験委員会に呈示してきた設立覚書にて初めて ATLAS という名の使用が公的に現われていた。初期の ASCOT および EAGLE と呼ばれていたコラボレーションの面々が ATLAS という名称を形成するようなかたちで融合なすに至ったのである」との部を参照のこと)、そうもした[アトラス]の名称利用決定は LHC でブラックホールが生成される可能性があることが認容された2001年よりも(また、ブラックホール生成可能性がはじめて(問題あるありかたでながらも)部外の人間より問題視されるようになったとの1999年よりも)何年も前のこととなる。従って、あらかじめ、「危険なる」ブラックホール生成がなされる可能性があることを問題となる古典上の存在——[トロイア崩壊の原因たる黄金の林檎の所在を知る巨人アトラス]の名 ATLAS——を命名規則のなかに取り込みもして用いて、(ブラックホール生成の可能性を当初、全否定し、後に変節を経て、「ブラックホールを観測することは科学に望ましきものである」などと肯定するようになったとの実験機関ないしその一部の関係者が)「人間の意図として」事前に警告・警世をなそうとしていたとは「純粹に時期的な問題として」考えづらい、というより、まったくもって考えられないところとなっている(出典(Source)紹介の部 1 および出典(Source)紹介の部 2 にて摘示しているとの経緯と出典(Source)紹介の部 36(2)にて摘示していることの純粹なる時期的比較より見出せることである)

・(以上のようなことがある中で)、[古代アトランティスに対する蛇の種族による次元間侵略]といったモチーフを含む[より従前より存在していたパルプ雑誌に初出の小説『影の王国』の筋立てを受けての(一見すれば)妄言体系としての神秘家の戯れ言]といったものが前世紀、第二次世界大戦勃発の折柄(1939年)に遡るところとして呈されていたとのことがある(：疑わしきにおかれては出典(Source)紹介の部 34 から出典(Source)紹介の部 34-2 を包摂する解説部を参照のこと)

・[古代アトランティスに対する蛇の種族の次元間侵略]といった神秘家戯れ言(としかそれ単体では見受けられないこと)と接合するように見える[恐竜人の種族による次元間侵略]を扱った[片方の上階に風穴が開きつつ][片方が崩落する]とのツインタワー——(恐竜人の首府と融合するとのツインタワー)——をワンカット描写にて登場させている「1993年封切りの」映画が「現実に」存在しているとのことがある(：疑わしきにおかれては出典(Source)紹介の部 27 を包摂する解説部を参照のこと)

・ある種、911の先覚的言及をなしているとも述べられるような性質を伴っての上記映画は[他世界間の融合]といったテーマを扱う作品ともなっていたわけだが、そうした内容



(「異空間同士の架橋」との内容)と接合する[ブラックホール][ワームホール]の問題を  
主色として扱い、また、まさしくもの同じものところで[911の事件の発生に対する先覚  
的言及とも述べられる要素]をも「露骨」かつ「多重的に」帯びているとの著名物理学者  
由来の著作 — BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブ  
ラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作 — が  
(申し分としては無論、頓狂に響くところなのだが)原著 1994年初出のものとして「現実  
に」存在しているとのことがある (：疑わしきにおかれては(羅列しての表記をなし)本稿  
にての [出典\(Source\)紹介の部 28](#), [出典\(Source\)紹介の部 28-2](#), [出典\(Source\)紹介の  
部 28-3](#), [出典\(Source\)紹介の部 31](#), [出典\(Source\)紹介の部 31-2](#), [出典\(Source\)紹  
介の部 32](#), [出典\(Source\)紹介の部 32-2](#), [出典\(Source\)紹介の部 33](#), [出典\(Source\)紹  
介の部 33-2](#) を包摂する解説部を参照されたい。表記の部にては BLACK HOLES &  
TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュ  
タインのとんでもない遺産』という 1994年初出の作品が[双子のパラドックス(1911年提  
唱)の機序の利用による二点間時差の応用]／[91101(2001年9月11日を意味する  
数)との郵便番号で「はじまる」地を実験に対する[空間軸上の始点]に置いてのタイム  
ワープにまつわる解説]／[2000年9月11日⇒2001年9月11日と接合する日付けの  
実験に対する[時間軸上の始点]としての使用]／[他の「関連」書籍に見る[ブラック  
ホール←→グラウンド・ゼロ]との対応付け]を[僅か一例としての思考実験](通過可能  
なワームホール関連の思考実験)にまつわるところで「すべて同時に具現化」なさしめ、  
もって、[双子の塔が崩された「2001年の」911の事件]の前言と解されることを事件勃  
発前にいかにようになっているのかについて(筆者の主観など問題にならぬとの客観事実  
に関わるところとして)仔細に・緻密に摘示している。また、それに先立つところ、本稿に  
ての [出典\(Source\)紹介の部 29](#) から [出典\(Source\)紹介の部 30-2](#) を包摂させての解  
説部ではその前言問題に関わるところの[双子のパラドックス](1911年提唱)というもの  
と結びついているとのことがよく指摘される浦島伝承(爬虫類の化身と人間の異類結婚  
譚との側面も初期(丹後国風土記)にては有していた浦島子にまつわる伝承)が欧州の  
ケルトの伝承と数値的に不可解な一致性を呈していることを解説、その「伝承伝播では  
説明がなしがたい」ような特異性についての指摘「も」なしている)

・[加速器(およびそのゲート開閉)と通ずること]と[爬虫類の異種族の侵略]を扱って  
いるとも「解釈できる」作品らが従前から存在しており、の中には、カシミール・エフェクト  
といった後に発見された概念につき尋常一様ならざるかたちにて先覚的言及なしてい  
るとの作品『フェッセンデンの宇宙』 — 人工宇宙にあつての[爬虫類の種族による人  
類に似た種族の(世界架橋に伴う)皆殺し]との内容が具現化している作品 — も含ま  
れている (： [出典\(Source\)紹介の部 22](#) から [出典\(Source\)紹介の部 26-3](#) を包摂する  
一連の解説部を参照のこと)

・(上述にて簡条表記していることを敢えても再度繰り返すとして) CERN の LHC 計画は  
「実際の命名規則の問題として」1990年代のプラン策定段階にての 1992年(米国に  
て 2004年に放映されていたテレビドラマ『スターゲイト・アトランティス』といったものを包  
摂する一連のスターゲイト・シリーズの嚆矢たる映画作品『スターゲイト』が 1994年の公  
開にて世に出ることになった折より 2年程前) よりアトラス — ヘラクレスの 11 功業に  
て登場した[黄金の林檎]の在所を把握する巨人 — と結びつけられ、また、後にそ

のアトラスと語義を近くもするアトランティスともブラックホール探索挙動との絡みで結びつけられるに至っている。しかもブラックホールの生成を観測しうるメカニズムと銘打たれているイベント・ディスプレイ・ツールのATLANTISについてはプラトンの古典『クリティアス』記述から再現できるところの古のアトランティスの城郭構造を意識させるようなモニタリング画面を用いているとの按配での堂の入りようとなっている（：[出典 \(Source\) 紹介の部 35](#)から[出典 \(Source\) 紹介の部 36 \(3\)](#)を包摂する解説部、そして、[出典 \(Source\) 紹介の部 47](#)を包摂する解説部を参照されたい）

・[ヘラクレスの11功業]は[アトラスおよび黄金の林檎]に関わるものとなるのだが（[ヘラクレスの11功業]は[黄金の林檎]を追い求めてのものとなっており、の中で、[巨人アトラス]が[黄金の林檎]の在処を知る巨人として登場してくる——アポロドーロス BIBLIOTHEKE『ビブリオテーケー』に見る（先立って引用なしのところの）言い伝えの伝——）、「[どういいうわけなのか](#)」911の事件の前言要素（と解せられるもの／[ニューヨーク・マンハッタンビル爆破][ペンタゴンの爆破][ニューヨーク象徴物とペンタゴン象徴物の並列配置シンボルの多用][米軍関係者より漏洩した炭疽菌の災厄][関連作品でのツインタワー爆破・ペンタゴン爆破描写]との観点で[ニューヨークはマンハッタンとペンタゴンが同時に攻撃されて、後に米軍関係者よりの炭疽菌漏洩テロも発生したとの911の事件]を巡る前後関係と結節していると解せられる要素等等）を「同時に多重的に含んでいる」との按配の作品らが存在しており、それら作品らが「ヘラクレスの11功業」にまつわる寓意「とも」深く結びついているとのことがある——本稿では既に[次元間浸潤妖怪の復活]や[古代アトランティスにあっての蛇人間を用いての反対派の粛正]といった従前サブ・カルチャー（戦前期パルプ小説『影の王国』など）の内容を受けてのものと思しきそうした要素を具備している70年代に大ヒットを見た作品としての『ジ・イルミナタス・トリロジー』（ヘラクレス11番目の功業にての目標物たる黄金の林檎をタイトル副題に解する小説）のことをまずもっての一例として摘示している——（：『ジ・イルミナタス・トリロジー』については[出典 \(Source\) 紹介の部 37](#)から[出典 \(Source\) 紹介の部 37-5](#)そして[出典 \(Source\) 紹介の部 38](#)から[出典 \(Source\) 紹介の部 38-2](#)を包摂する一群の解説部、オンライン上より全文現行確認できるようになっているとの原著よりの原文抜粋および国内で流通している訳書よりの抜粋をなしつつ「どこが」「どのように」[911の事件に対する奇怪なる前言と呼べるようなパート]となっているかにつき事細かに解説しているとのそちらの部を参照のこと）

振り返り表記部はここまでとする

先掲の Philological Truth [記録的事実] として成立していることらにまつわっての振り  
 返り部、そちら内容を視覚的に示しての図解部として

三人の女神が [黄金の林檎] を勝者の証としての美人投票で争った



Minerva (Athena)

Juno (Hera)

Venus (Aphrodite)

Serpent  
 (the 11th labour of Hercules & Ladon)  
 (dragons of Greek mythology  
 - serpent like dragons)

Golden Apple



黄金の林檎はヘラクレスの功業の伝承にも登場、  
 そこでは大蛇としてのドラゴン、ラドンに守られ  
 た果実となっている

① Helen of Troy  
 (femme fatale, deal)

女神アフロディテが美人コン  
 テストの勝者の証たる黄金の  
 林檎の付与権限を与えられた  
 王子、パリスは絶世の美女  
 ヘレンとの男女仲成就を黄金の  
 林檎の対価として呈示、トロイ  
 の王子パリスは其の提案に応  
 じて黄金の林檎をアフロディテ  
 に手渡した (人妻ヘレンの出奔  
 がその後のトロイア戦争および  
 パリスの死亡に通じているため、  
 パリスにとりヘレンは男を破滅  
 に導く女、ファム・ファタール  
 と呼ぶべき存在でもある)。



Alexandros Paris ②ruin

パリスは黄金の林檎を巡る取引の後、  
 結局、それが原因で身を滅ぼした

Hesperus

ヘスペリデスらは一説には  
 ヘスペラスの係累であると  
 されている

Hesperides



the evening star (Venus)



トロイアと同じくものギリシャ由来の伝承  
 であるヘラクレス伝承では黄金の林檎は  
 ヘスペリデスらによって管理されている。



ヘスペラスは金星の体現神格でもある。

## Lucifer

(the morning star)

ルシファーは金星、明けの明星と名前を共有している。



①forbidden fruit  
(depicted as the  
apple)  
&  
Eve  
(femme fatale,deal)

ルシファーとも同一視されるエデンの蛇はファム・ファタールとも評せられるイヴを用いて林檎とも見られている禁断の果実を食するよう、アダムを籠絡するとのことをなした。

②ruin アダムとイヴは行為を問責されるとのかたちで楽園より追い出された。

(planet)

## Venus

金星は [ルシファー] と [アフロディテ] の双方に結びつく

アフロディテは林檎と関わる誘惑を女を用いて成就させた。

(Cause of the Trojan War)

Golden apple & femme fatale

ルシファーは林檎と関わる誘惑を女を用いて成就させた。

Forbidden fruit (depicted as an apple) & femme fatale

## Aphrodite

## Lucifer

Hesperus—Hesperides—connection

アフロディテ誘惑と関わる黄金の林檎 —蛇とも結びつく林檎— はヘスペリデスらに管理される林檎でもある。そのヘスペリデスらはルシファーと同文に金星の体現存在であるヘスペロスの係累であるとの説が伴っている者達である。

" The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were far-famed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods : it was another Eden. "

— Alexander Murray (Manual of Mythology)

※諸種要素から類似性が問題となる [黄金の林檎の園] と [エデンの園] は現実に欧州の識者によって同一のものであるように語られてきた場となる (上のアレギザンダー・ムーレイの19世紀刊行著作内記述はそのことを示す一例となるものである)

Works of Lucas Cranach the Elder



Venus and Cupid



Venus and Cupid  
(1531)

one of them



Adam & Eva  
(Circa:between 1520-1525)

forbidden fruit  
→ apple





フランシス・ベーコンの著作ではアメリカはグレート・アトランティスと呼称されている  
**Atlantis ⇔ America**

[太平洋に浮かぶ広大な陸地]と伝わるアトランティスは[アトラスの娘ら]に管掌される  
 [西の果てにあっての果樹園]たる[黄金の林檎の園]と同一視されることがある

**Atlantis ⇔ the garden of  
 the golden apple**

黄金の林檎の園はエデンの園とも同一視されることがあった場所となる

**the garden of the golden apple  
 ⇔ the garden of Eden**

## Serpent deities of Aztec

(Mesoamerican civilization)

黄金の林檎の園とアト  
ランティスが接合する  
とのことを示すのにも

Francis Bacon's  
New Atlantis

力点  
を置 Great Atlantis civilization

きもしてきたのが本稿  
である。

the garden of Hesperides  
& Golden Apple



Coatlicue (Teoyamiqui)



Quetzalcoat1

フランシス・ベーコンの古典にあって大アトランティスであるとされているアメリカで栄えたアステカ文明、そこでは蛇の神々が崇められていた(左上図は大地母神コアトリクエの発掘彫像の模写、右上はコアトリクエの息子、主要神ケツアルコアトルの古写本内似姿)



Milton's Lucifer (Satan)



the morning star

Planet Venus

黄金の林檎の園と同一視されることもあるエデンの園、その場にての誘惑を奏功させたサタンは

[知の接受者(善悪の樹の実を食べさせての知の接受者)] / [人類を裏切って破滅にいざなった存在(エデンでの策略、および、黙示録の描写)] / [蛇としての似姿を持つ存在] / [金星の体現存在(ルシファーとしての側面)]

としての特性を持つ存在である。

他面、黄金の林檎の園と同一視する視点があるアトランティス、その場にも比定されてきたアメリカ大陸での崇拝対象であったケツアルコアトルは

[知の接受者(文明発達の恩人としての神)] / [信徒を裏切って破滅にいざなった存在(ケツアルコアトルの再臨をスペイン征服者に見たアステカ帝国の破滅のプロセス)] / [蛇としての似姿を持つ存在] / [金星の体現存在]

としての特性を同様に持つ存在である(⇒ 文献的根拠の指し示し箇所としては本稿にての [出典(Source) 紹介の部53] から [出典(Source) 紹介の部53(4)] を包摂する解説部、そして、 [出典(Source) 紹介の部54] から [出典(Source) 紹介の部54(4)] を包摂する解説部を参照のこと)。

Atlantis

destruction  
of Troy

Golden Apple

Odysseus

the garden of Hesperides

the island of Calypso

phase1. Wooden Horse & massacre  
(phase2. Deluge of water)

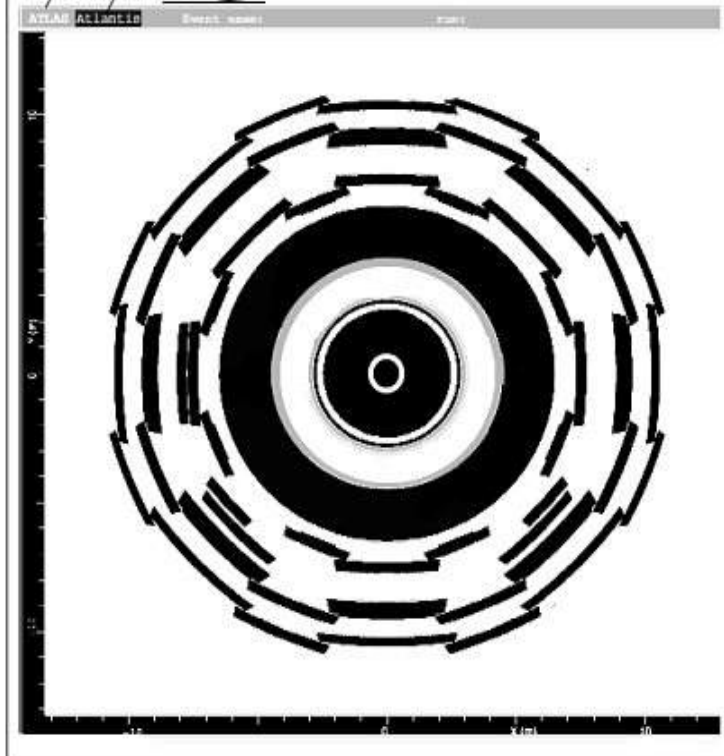
similar

" The sea Dashed o'er it, and the roaring torrents still rushed on it, swollen by the rains of Zeus; And the dark surge of the wide-moaning sea still hurled them back from mingling with the deep, Till all the Danaan walls were blotted out beneath their desolating flood. Then earth was by Poseidon chasm-cleft: up rushed Deluge of water, slime and sand, while quaked Sigeum with the mighty shock, and roared the beach and the foundations of the land Dardanian. So vanished, whelmed from sight, That mighty rampart. Earth asunder yawned, And all sank down, and only sand was seen, When back the sea rolled, o'er the beach outspread far down the heavy-booming shore. All this The Immortals' anger wrought " — Smyrnaeus Quintus (The Fall of Troy)

(11th labour of Hercules)

ATLAS (A Toroidal LHC ApparatuS)

ATLANTIS



[micro black hole generating event] detection





[micro black hole generating event] detection

[トロイアとアトランティスの結びつき(1)]

トロイアの崩壊は黄金の林檎によってもたらされたとも述べることもできる（〔出典(Source)紹介の部39〕）。その黄金の林檎が実るヘスペリデスの園が位置描写概要などよりアトランティスと結びつけられてきたとのことがある（〔出典(Source)紹介の部41〕）。

また、トロイの滅亡は木馬の計略によって完遂したと伝わるが、木馬の計略を考案したと伝わるオデュッセウスがトロイア崩壊後に流浪したさまを描く叙事詩『オデュッセイア』では

[カリュプソの島]

というのが渦潮にクルーと船を呑まれたオデュッセウス漂着先として登場を見ており、そのカリュプソの島、巨人アトラスの娘たる神格の住まう島からしてアトランティスと結びつけられてきた（e.g. アイザック・ニュートンの特定古典内での物言いなど）とのことがある（〔出典(Source)紹介の部43〕）。

[トロイアとアトランティスの結びつき(2)]

黄金の林檎を巡る女神らの美人コンテストに端を発して勃発したトロイア戦争。その終結をもたらしたのは木製の馬の計略であると伝承は語るが、今日、あまり知られていない古典ではそうやって滅びたトロイアにはさらなる破壊が及んだとの記述が含まれている。スミルナのクイントスに由来する『トロイア戦記』（英文タイトル the fall of Troy）に認められるところがそうで、トロイアを木製の馬の内側から破壊させたギリシャ勢も巻き添えにトロイアの存在が洪水にて完全抹消を見たとの伝承もよく知られていないところながら伝わっているのである（〔出典(Source)紹介の部44-3〕）。その点、[ギリシャ勢との戦闘に付随しての洪水による破壊]とのシチュエーションはアトランティスの最期と同一のものである（〔出典(Source)紹介の部44-4〕）に続いての段にてのプラトン著作よりの引用を参照のこと）。

[LHC実験とアトランティスの関係性について]

どういう料簡でなのか、LHC実験はそのブラックホール生成可能性が現実的可能性をもって語られたとの始原期（LHC実験のブラックホール生成可能性論議を巡る経緯については本稿にての〔出典(Source)紹介の部1〕から〔出典(Source)紹介の部5〕を包摂する解説部を参照されたい）より前に遡る折柄、LHC計画がLEP加速器に接ぎ木しての加速器設置案としてCERNサイドで「正式に」ゴーサインを出されることになった1994年より前よりATLASとの名前と結びつけられているとのことがある（本稿の〔出典(Source)紹介の部36(2)〕で解説しているように1992年からのことである）。

そこに見るアトラスという名称はヘラクレスの功業に登場してきた伝説の天を支える巨人の名であるわけだが、同巨人アトラス、

[トロイア滅亡の原因ともなっている黄金の林檎]

がたわわに実る果樹園の所在地を把握していると伝わっている巨人にして、それぞれ別個に、

[古のアトランティス]

に比定される[黄金の林檎の園][カリュプソの島]、それらの地の代表的住人たるヘスペリデスおよびカリュプソという女の神格らの父親とされる存在でもある（〔出典(Source)紹介の部39〕以降の一連の解説部にて文献的論拠を明示していることである）。そうもしたことが指摘できる時点でCERNのLHC実験はアトランティスと接合していると述べられる。

のみならず、LHC実験ではATLANTISとの名前が付されているEvent Displayツールでブラックホール生成イベントを観測する可能性が実験関係者によって「肯定的に」（科学的知見発展に資する安全なブラックホールの生成・観測との文脈で）宣伝されているとのことがある。従って、ATLASとの名称それ自体に留まらずATLANTISとの名称をも用いているとのことでLHCとアトランティスの関係はいよいよ色濃くも見えてくるとのことがある。

視覚的な整理をなすために設けた図解部はここまでとしておく

委細を〔出典(Source)紹介の部55〕にて指し示しているとの前段に譲っての関係性らにつき「再言及」したうえで書くが、最前にあって問題視していたところのダンテ『地獄篇』とミルトン『失樂園』を介しての類似性は次のようにまとめられるもの「でも」ある。

「古典『地獄篇』『失樂園』双方にて

[（エデンの誘惑の蛇にも比定される）ルシファーによる災厄]

[地獄門の先にある破滅への通路]

に通ずるところの要素が揃いも揃って[ブラックホール近似物]とも関わっているとのことがある。

内、『地獄篇』では「人類の代表的裏切り者ら」が地獄門の先にある地獄の中核

(コキユートス)にして「重力の本源」でもあるとの場で「永遠に姿形保ったままの姿で凍り付いたルチフェロ」(ルシファー;語源として「光」と結びつく存在)に「永劫に」粉砕されているさまが描かれている ——「ブラックホールの外にいる人は、どんなに長い間待っても、宇宙飛行士の時計が十一時〇〇分を指すのを見ることはできません。その代わり、宇宙飛行士の時計の一秒一秒がどんどん長くなって、ついに十一時〇〇分の前の最後の一秒が、永遠に続くのを見ることになるでしょう」とブラックホールにつき解説してもいる存在、そして、「事象地平を通り抜けてブラックホールから抜け出すことのできるものは何一つない(事象地平はブラックホールから脱けだそうと試みている光が時空の中でたどる経路であること、そして光よりも速く伝わるものは何もないことを思い出そう)」などとその著作にて(原文引用しながら示したところとして地獄篇地獄門の比喻を持ち出しつつも)解説してもいる存在でもある著名物理学者スティーブン・ホーキングの申しようを想起させるような有様で「永劫に光を語源とする存在(ルシファー)に重力の本源たる領域にて噛み砕かれ続けている」と描かれている——とのことがある。

他面、『失樂園』では墮天使ルシファー(サタン)が「エデンの園」に向けての単身飛行を行い「エデンの園」と「地獄」を「地獄門」の先にある「アビス」の領域(時間と空間が意味をなさなくなる底無しの闇の領域というブラックホールの近似物)を介して接合させもし、林檎で誘惑をなしたアダムとイヴの子孫を自らの擬人化された妻子である「罪」と「死」の餌食に供するとの筋立てが描かれているとのことがある

上のこととつい先立って再言及した一連の関係性らの複合顧慮によって

「ルシファー」(エデンの誘惑の蛇に比定される存在)をキーとして —— 「ブラックホール関連事物」との兼ね合いで —— あまりにも話が接合しすぎる

とのことが申し述べられること、(解説部をきちんと参照されれば)お分かりいただけることか、とは思う。

同じくもの話、「ルシファーが多くを接合させるところの一つのキーとなる」との話はさらに深くも掘り下げるとのかたちで続けられるし続けるべくものところであると定置しており、

「墮天使の長ルシファー(サタン)が地獄門に控えていた己が妻子たる擬人化された「罪」と「死」らが人間を餌食にする上での通用路として用いることになったとの[[アビス]の領域(同じくもの古典内にて見受けられるブラックホール近似物との特性につき先述した「深淵」の領域)を横断する路]を構築したとの粗筋が具現化を見ている

とのところが

「トロイアの崩壊」  
「アトランティス滅亡伝承」

「とも」結びついている(物事があまりにも多重的に結びついているとの塩梅で結びついている)とのことがあることをこれ以降、取り上げることとする。

さて、高等学校で、(勝つこと、ただそれだけを目的としての受験志向の「お勉強」であっても)、『地理』と『世界史』の科目を及第点を取れるぐらいに学習した人間ならば分かつことかとは思うのだが、

「古のトロイア遺跡(ハインリッヒ・シュリーマンが発掘したもの)は現トルコ領のダーダネルス海峡の近傍にある」

とのことがある。

(:トロイア遺跡とされるものについては ——それは「トロイアそのものではない伝承上



の元となった遺跡]ともされるが—— その遺跡所在地が高等学校で用いる『世界史』教科書前半部に載せられているとのことがある。

その遺跡所在地、ここ日本にあっての受験勉強(「学習」)程度のものでその地理的把握が「望ましい」とされる遺跡所在地が

「ダーダネルス海峡のすぐ脇。」

となっているとのことがあり、[ダーダネルス海峡およびボスポラス海峡に囲まれた領域]、北部は[黒海]に面するとの[欧州とアジアの接点]となるとのその領域(下に地図を付すところの[マルマラ海]の領域)がここでの話とダイレクトに関わってくる。

ボスポラス海峡とダーダネルス海峡に囲まれたマルマラ海の領域と言えば、15世紀にイスラム圏とキリスト教圏のパワーバランスを決する上で重要な戦いであったとの[コンスタンティノープル攻囲戦]

がイスラム勢力によって敢行された場ともあいなっており、その場にてイスラム勢力が同コンスタンティノープル攻囲戦にて

[船団を「陸送」する]

との戦略まで採用したことが[よく知られたこと]となっている(：オスマン帝国がビザンツ帝国(東ローマ帝国)の首府を陥落せしめたこと、その「文化面での」世界史的意味(ローマ帝国後裔として古典古代時代の知識を保持していたビザンツ帝国の崩壊によるビザンツ文化の欧州への拡散・流入とルネサンスの一層の促進)、「通商上の」世界史的意味(オスマントルコの策源地確保による地中海貿易にての主導権確保に伴うヴェネチア勢力の衰退と欧州勢の新通商路確保の機運増大、そのような中での大航海時代の到来)を把握のうえで簡にして要、きちんと答案に落とせるとのことが減点式で勝敗が決する天王山としての国立大学での記述式筆記試験に「確実に」受かるには必須の条件とされているとのことがあるぐらいに[よく知られたこと]となっている——その点、「ひたすらに徹に入っただけで、識る者もなきような話をなしているように思われるかもしれないが、一切妥協を許さぬし、許されぬとお受験嗜好の高校生「ですら」知っているようなこと(忘れるかもしれないが一時的に覚えること)を取り上げている」ということを強調したいのである)

出典(Source)紹介の部 56

SOURCE

56

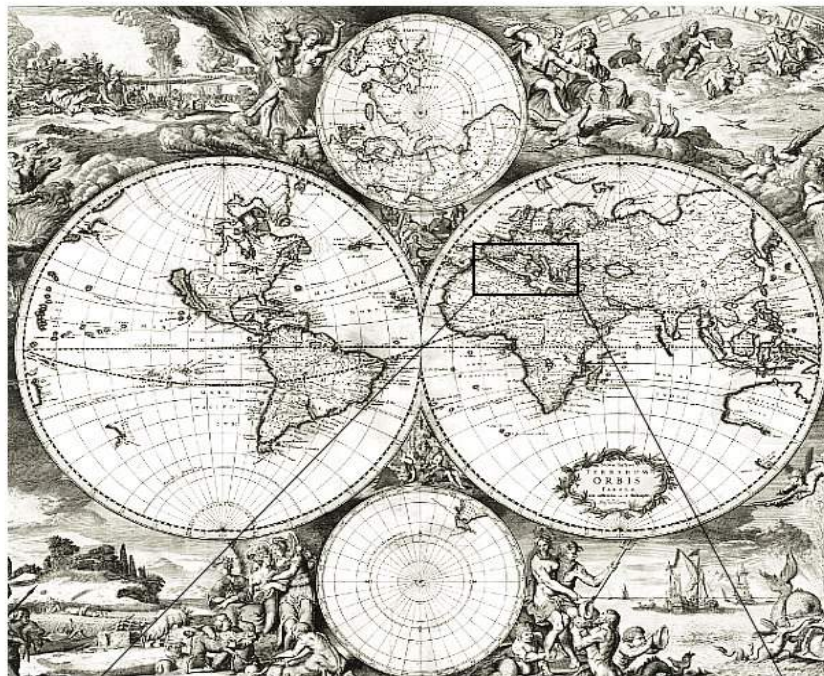


ここ出典(Source)紹介の部 56 にあつては

「古のトロイア遺跡 (ハインリッヒ・シュリーマンが発掘したもの)は現トルコ領のダーダネルス海峡の近傍にある」

とのことの典拠を挙げる。

まずもって次の図をご覧いただきたい。



Van Schagen's map of the world (1689)



Black sea  
(MARE NIGRUM)

Constantinople

Bosphorus

Dardanelles



Troy ("of Heinrich Schliemann ")



図は17世紀後半、1689年に Gerard van Schagen というアムステルダム の地図製作家に由来する古地図(英文 Wikipedia[ World map ]項目にて著作権放棄明示表示と共に画像が公開されているもの)を元に作成したものとなる。

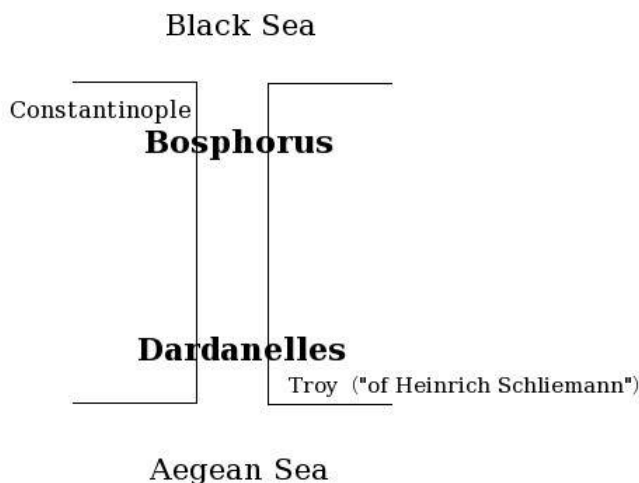
図にあつては黒海とエーゲ海を分かつ二つの海峡、北側の「ボスポラス海峡」と南側の「ダーダネルス」の両海峡および「コンスタンティノープル」(現トルコ首都)、そして、「トロイア遺跡」(とされるもの、時代区分上、トロイアそのものではない「モデル遺構」とも見られているハインリヒ・シュリーマン発掘・発見のトロイア遺構)の位置関係 ——日本の高校生でさえ把握を求められるとの位置関係—— を示したものである。

(:物事をよく分かっていないとの人間は「古のトロイア」が実在しているとの確たる論拠がこの世界にあるのだろうかなどと勘違いし、その遺物「とされるもの」を「完全に真正なる本物」と考えることもあるようではあるが、(トロイアの物語を今日に伝える一大叙事詩らを遺した伝説上の詩人たる)ホメロスの時代より語り継がれていると「される」 ——「される」としているのは「Homeric Question ホメロス問題」との言葉があるようにホメロスの実在についてからして、そも、疑義呈されるのとところがあるからである—— トロイアという都市は「破滅に向かつての戦争」そのものも含めて「実在していたのかさえあやふやな存在」と史的には見做されてきたとこのことがあるものである。といったところながらも、行動力に抜きんでたロマンチストとして知られる実業家ハインリヒ・シュリーマンがかくあるべしとの一帯を見繕ってそれらしき遺構を19世紀後半にて発見したというのが現在のトロイア遺跡であると広くも知られている ——「「ホメロス古文献にかく記載されているのだから、そうであるのだろう」と都度記載されるような書籍にしてシュリーマンの情熱がほとばしっているといった按配のシュリーマン自伝『古代への情熱』(岩波文庫刊)]を読み、トロイア「とされるもの」の発見経緯を押さえたうえで筆者はここでの記述をなしているのだが、トロイアの実在問題(伝説は伝説にすぎぬとの問題)について基本的なことはただかウィキペディアの「ハインリヒ・シュリーマン」項目などにも記載されているので興味があるとの向きはそちら確認されてみるのもよからうか、と思う—— )

ここで問題視しているのは

「トロイアに比定される領域が黒海とエーゲ海のボスポラス海峡(北側)とダーダネルス海峡(南側)の近傍に位置している」

とのことである(多少ややこしいかもしれないと見たのでより簡略化しての図を下に挙げておく)。



その点、普通一般には日本の受験勉強上ではそこまでは暗記することは求められないとの込み入った伝承上の理解に関わるところと解されることながらウィキペディアのようなものに次のような記載がなされているとの格好となっている。

(直下、和文ウィキペディア[イリオス]項目(イリオスとはトロイア別称のことである)項目より引用なすところとして)

---

「かつてイリオスのある地域は、スカマンドロス河とニュンペーのイダイアの子であるテウクロス(テラモンの子テウクロスとは別)が王として治めており、テウクロイと呼ばれていた。そこへアトラスの娘エレクトラにゼウスが生ませた子であるダルダノスがサモトラケ島からやってきた。ダルダノスはテウクロスの客となり、彼の娘バティエエアと領地の一部をもらった。彼はそこにダルダノスという都市を築き、テウクロス王の死後、テウクロイの一带はダダニアと呼ばれるようになった。ダルダノスの後はエリクトニオルスが相続した。エリクトニオスの後はトロスが継いだ。トロスは、自分の名にちなんでダルダニアの地をトロイアと呼ぶことにした」

---

(引用部はここまでとする)

(直下、英文 Wikipedia [Dardanelles] 項目の [Nomenclature] (命名法) の節にあつての現行記載内容よりの抜粋をなすとして)

---

Nomenclature

The Turkish name Çanakkale Boğazı is derived from the major city adjoining the strait, Çanakkale (which takes its name from its famous castles; kale means "castle").

The name Dardanelles derives from Dardania, an ancient land on the Asian shore of the strait which in turn takes its name from Dardanus, the mythical son of Zeus and Electra.

(訳として)

[ノームクレイチャー(命名法)]

「ダーダネルス海峡に対するトルコ語呼称である[チャナツレ海峡 Çanakkale Boğazı]は同海峡に存する主要都市 Çanakkale(その都市にての有名な城塞から命名された都市)に由来している。

(ダーダネルス海峡にあつての)ダーダネルスとの名は神話にあつてのゼウスとエレクトラの子たる古代領主たるダーダネルスから命名なされたとの同海峡のアジア側沿岸部呼称、ダルダニアに由来している」

---

(訳を付しての引用部ここまでとする)

以上をもってして

[木製の馬の奸計で滅ぼされたとされる都市トロイア(欧米圏文明源泉にある二大古典(その重要度との兼ね合いでの位置づけにつき先に言及のホメロス『イリアス』『オデュッセイア』)で同市を巡る戦争がモチーフとされている伝説上の都市) 界限ダルダニア] および [ダーダネルス海峡の名称由来]

がトロイア開闢王ダルダニアにあるとのことを示し、もって、トロイア比定地がダーダネルス海峡界限に存在することを呈示した。

ここで話の方向性をジョン・ミルトン『失樂園』(先に[今日的なる視点で見てのブラックホールの近似物]が登場しているとのこと、解説した古典)の方に向ける。

同作、ミルトン『失樂園』に関しては

[叛逆天使の長たるサタンが自己の妻子たる擬人化された[罪]と[死]の餌食へと  
アダムら子孫を供することとなった —— 本稿にての〔出典(Source)紹介の部 55(2)〕  
で引用しているように[アビスを越えて脆い宇宙の最外層部にある原動天の領域  
(エデン)に侵入しての林檎による誘惑の成就]によって[罪]と[死]にアダムら子孫  
を供することとなった—— との通路(サタンが単身飛行で道筋をつけ、それに沿っ  
て[罪]と[死]が舗装をなしたと描写されている通路)の開通]

にまつわる下りで次の通りの表記がなされているとのこと、先の段〔出典(Source)紹介の部 55(2)〕にて  
摘示していたとことがある。

(直下、岩波書店刊ジョン・ミルトン『失樂園(上)』(内収録の第二巻)p.111－p.112よりの「再  
度の」原文引用として)

彼はその衝撃を排除し、必死に進路を求めて飛翔しつづけた。勿論、幾多の  
困難と危険にも直面したが、それは、互に闌(せめ)ぎ合う岩礁の間をぬいなが  
ら、ボスポラス海峡を通過したときのアルゴ号が、乃至は、左舷ではカリュプ  
デイスを避け右舷では渦巻すれすれに進路をとったオデュッセウスが、直面し  
たものよりさらに甚だしいものであった。こうやって、彼は激しい困難と辛酸をな  
めながら進んでいった。——まさに、それは困難と辛酸の極といえるもので  
あった。だが、彼がひとたび通りすぎてからまもなく、というのは人間が罪に墜  
ちた時のことだが、そこになんと不思議な変化が生じたことであつたらう。「罪」  
と「死」がすぐに悪魔(サタン)のあとを追い(それが神の御意志(みこころ)で  
あったのだ)、その足跡に従って、暗鬱な深淵の上に、踏みかためた広い路を  
敷いたからだ。

(引用部はここまでとする —※— )

(※上は著名な挿絵家ギュスターブ・ドレの挿絵が付されたオンライ  
ン上より確認できるとの近代刊行版『失樂園』にあつては  
“And more endangered, than **when Argo passed  
Through Bosphorus, betwixt the justling rocks ;  
Or when Ulysses on the larboard shunned Charybdis, and by the  
other whirlpool steered.**  
So he with difficulty and labour hard  
Moved on, with difficulty and labour -he ; ,  
But he once passed, soon after, when man fell  
Strange alteration ! Sin and Death amain  
Following his track, such was the will of Heaven,  
Paved after him a broad and beaten way  
Over the dark abyss, whose boiling gulf  
Tamely endured a bridge of wondrous length,”  
との表記がなされているところとなる)



(続いて直下、岩波書店刊ジョン・ミルトン『失樂園(上)』(内収録の第十巻)p.172よりの「再度の」原文引用として)

巨大なものを微小なものに譬(たと)えることが許されれば、この橋は、かつてクセルクセスがギリシヤの自由を束縛しようとして、メムノンゆかりのあの宏壮な宮殿の地スサから海岸地帯に降りてきて、ヘレスポント海峡に橋を架けることによってヨーロッパとアジアを結びつけようとしたが、その際反抗する狂瀾を幾度も鞭打った故事を偲ばせた。こうやって「罪」と「死」は、驚くべき架橋の技術を駆使してこの偉業を達成し、狂乱の深淵の上に宙づりに架せられた岩橋を造り上げた。

(引用部はここまでとする 一※一)

(※上は著名な挿絵家ギュスターブ・ドレの挿絵が付されたオンライン上より確認できるとの近代刊行版『失樂園』にあつては  
“ Smooth, easy, inoffensive, down to hell.  
So, if great things to small may be compared,  
Xerxes, the liberty of Greece to yoke,  
From Susa, his Memnonian palace high,  
Came to the sea, and, over Hellespont  
Bridging his way, Europe with Asia joined,  
And scourged with many a stroke the indignant waves.  
Now had they brought the work by wondrous art ”  
との表記がなされているところとなる)

直上、再度の原文引用をなしたところから(まさにそこに見る Philological Truth[文献的事実]「のみ」より)指し示せるところを下に示す。

---

第一。ミルトンの『失樂園』にあつて描写される、  
[サタンが拓きそのうえで[罪]と[死]が地固めしたとの通路](サタンのアビスを越えての単身飛行、続いてのエデンの園での林檎による誘惑にて拓かれ、なおかつ、[罪]と[死]によって舗装され、結果的に新発の種族たる人類に[罪]と[死]が襲いかかるうえで用いられるようになったとの通路)

は

[ボスポラス海峡]

に仮託され、なおかつ、

[オデュッセウスが渦巻きの怪物カリュプデスに苦しめられた航海の難所]

に仮託されているものとなっている。

(: 上にての再度の引用部より該当部を抽出すれば、

[それは、互に鬨(せめ)ぎ合う岩礁の間をぬいながら、

ボスポラス海峡

を通過したときのアルゴ号が、乃至は、左舷では

カリュプデイス

を避け右舷では渦巻すれすれに進路をとったオデュッセウスが、直面したものよりさらに甚だしいものであった。こうやって、彼は激しい困難と辛酸をなめながら進んでいった。——まさに、それは困難と辛酸の極といえるものであった。だが、彼がひとたび通りすぎてからまもなく、というのは人間が罪に墜ちた時のことだが、そこになんと不思議な変化が生じたことであつたろう。「罪」と「死」がすぐに悪魔(サタン)のあとを追い(それが神の御意

志(みこころ)であったのだ)、その足跡に従って、暗鬱な深淵の上に、踏みかためた広い路を敷いたからだ]“Through Bosphorus, betwixt the justling rocks ;/ Or when Ulysses on the larboard shunned Charybdis, and by the other whirlpool steered. / So he with difficulty and labour hard / Moved on, with difficulty and labour -he ;, / But he once passed, soon after, when man fell Strange alteration ! / Sin and Death amain Following his track, such was the will of Heaven, / Paved after him a broad and beaten way / Over the dark abyss, whose boiling gulf / Tamely endured a bridge of wondrous length”

との部位がそちら描写にあたる)

第二。同じくこのパートに関わる場所としてサタンが拓いた通路 —エデンの園にての誘惑を林檎にて成就させるとのかたちで拓いた通路— にて[罪]と[死]が橋を架けようとしたとの挙は

[クセルクセスが(ギリシャの自由を束縛しようとして)ヘレスポント海峡 — すぐ後に解説するが、このヘレスポント海峡とはボスポラス海峡と向かい合わせに存在する海峡たるダーダネルス海峡、すなわち、トロイア比定地にあつてのトロイア創始者名称(ダルダノス)に由来する海峡そのもののことを指す— に橋を架けることによってヨーロッパとアジアを結びつけようとしたが如くもの]

であったとも表されているとのことがある。

(: 上にての再度の引用部より該当部を抽出すれば

[この橋は、かつてクセルクセスがギリシャの自由を束縛しようとして、メムノンゆかりのあの宏壮な宮殿の地スサから海岸地帯に降りてきて

ヘレスポント海峡

に橋を架けることによってヨーロッパとアジアを結びつけようとしたが、その際反抗する狂欄を幾度も鞭打った故事を偲ばせた。こうやって「罪」と「死」は、驚くべき架橋の技術を駆使してこの偉業を達成し、狂乱の深淵の上に宙づりに架せられた岩橋を造り上げた]

“So, if great things to small may be compared, / Xerxes, the liberty of Greece to yoke, / From Susa, his Memnonian palace high, / Came to the sea, and, over Hellespont / Bridging his way, Europe with Asia joined, / And scourged with many a stroke the indignant waves. / Now had they brought the work by wondrous art”

との部位がそちら描写にあたる)

---

以上、文献的事実に基づいてのみより摘示できるとのことは

[ [ミルトン『失樂園』に見られる、サタンが切り開き、罪と死が人類に襲いかかるのに用いたとの [アビス —(繰り返すが、同アビス、[[時間]と[空間]が意味をなさなくなる底無しの暗黒領域)と表されているものとなる)— を横切る横断路 ] と [トロイア] との複合的結線関係]

を指し示すうえでの要諦となるところでもある。

上のこと、申し述べたうえで[ヘレスポント海峡と呼ばれる地所](ミルトン『失樂園』にて[アビス;今日の観点で見た場合のブラックホールとの質的類似性を解説してきたとの深淵領域]を渡る橋梁が構築されたと描写されている場)がトロイア城市所在地と伝わるダーダネルス海峡(に拠つてのダルダニアの地)そのものであったことを指し示すべくもの典拠を挙げておく。

# SOURCE

## 56(2)



ここ出典 (Source) 紹介の部 56 (2) には

[ヘレスポントス海峡と呼ばれる地所がトロイア創建の地であるダーダネルス海峡を指す] などの典拠を挙げておく。

(直下、英文 Wikipedia [Dardanelles] 項目 —[ダーダネルス海峡]項目— より引用するところとして)

---

**The Dardanelles , formerly known as Hellespont ( Hellespontos, literally "Sea of Helle"), is a narrow strait in northwestern Turkey connecting the Aegean Sea to the Sea of Marmara.**

[ ... ]

Herodotus tells us that, circa 482 BC, **Xerxes I (the son of Darius)** had two pontoon bridges built across the width of the Hellespont at Abydos, in order that his huge army could cross from Persia into Greece.

「ダーダネルス海峡は以前は「ヘレスポントス(ヘレの海)」との名前で知られていたエーゲ海とマルマラ海を結節させる狭隘なる海峡となる。

…(中略)…

紀元前 482 年に**クセルクセス一世(ダレイオス帝の息子)**が大量の兵員をしてペルシャからギリシャサイドに渡れるようにとアビドスにてヘレスポントスを横断するための二つの船橋を構築したと歴史家ヘロドトスは語っている)」

---

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

(出典 (Source) 紹介の部 56 (2) はここまでとする)

繰り返す。以上のことからミルトン『失樂園』に見る〔罪〕と〔死〕が人間の世界に來襲するうえで利用することになった通用路〕はトロイア所在地と接合する、すなわち、

「南端の海峡(ダーダネルス海峡)と共にトロイア比定地近傍となるマルマラ海を形成するもう一方の北端の海峡(ボスポラス海峡)のことが『失樂園』アビス横断路構築にまつわる比喻の中で言及されている」

「トロイアに木製の馬で引導を渡したとの武将オデュッセウスの渦巻き怪物(カリュブデイス)との遭遇エピソードのことが『失樂園』アビス横断路構築にまつわるところで言及されている」

「トロイア比定地近傍のダーダネルス海峡(ヘレスポントス/トロイア創設者ダルダニアに命名由来を持つ海峡)のことが『失樂園』アビス横断路構築にまつわるところで言及されている」

「トロイアの存在地とされるダーダネルス海峡近傍で具現化を見たとされる古代史上の出来事——クセルクセス王の船橋構築——のことが『失樂園』アビス横断路構築にまつわるところで言及されている」

との意味合いでトロイアと結びつくものである(よりもって述べれば、ルシファーの航路確立におけるエデン到達が人間にとっての破滅を意味するとかたちとなっているため、意味合いとしては〔内破させられたトロイア「の崩壊」〕と結びつくとも表してもよさそうなところである)。

ここまでにて著名二古典、ダンテ『地獄篇』およびジョン・ミルトン『失樂園』にあって「現代的観点から見ての」ブラックホールの近似物が具現化しているとのことにつき、

「〔古典字面に見るルシファーという存在〕(エデンの誘惑の蛇に比定される存在)を中心に——〔ブラックホール関連事物〕との兼ね合いで——あまりにも話が接合しすぎる」

とのことが申し述べられることに注意を向けもした。そして、と同時に現代的観点で見た場合のブラックホール近似物の登場の下りに関してはミルトン『失樂園』の方であって

### 〔トロイア崩壊の故事〕

に相通ずる描写がなされているとのことの解説を——古典それそのものにみとめられる記述内容、すなわち、〔文献的事実〕のみを典拠としつつも——講じてきた(全て裏取り容易なる問題となる箇所原文引用をなしながらも解説をなしてきた(※))。

---

※振り返りなせば、ミルトン『失樂園』がトロイア崩壊譚と結びつくのは

ミルトン『失樂園』に見る、

〔罪〕と〔死〕が人間の世界に來襲するうえで利用することになった通用路——アビスの領域(古典そのものにて〔時間および空間が意味をなさなくなる領域〕〔底無しの暗黒領域〕と言及されている深淵領域)を横断する通用路——

が〔トロイアの比定地〕および〔トロイア関連事物〕と接合する、すなわち、

「南端の海峡(ダーダネルス海峡)と共にトロイア比定地近傍となるマルマラ海を形成するもう一方の北端の海峡(ボスポラス海峡)のことが『失樂園』アビス横断路構築の苦難を表する下りの中で言及されている」

「トロイアに木製の馬で引導を渡したとの武将オデュッセウスの渦巻き怪物(カリュブデイス)との遭遇エピソードのことが『失樂園』アビス横断路構築の苦難を表する下りの中で

言及されている」

「トロイア比定地近傍のダーダネルス海峡(ヘレスポントス／トロイア創設者ダルダニアに命名由来を持つ海峡)のことが『失樂園』アビス横断路構築のすさまじさを表する下りの中で言及されている

「トロイアの存在地とされるダーダネルス海峡近傍で具現化を見たとされる古代史上の出来事 ——クセルクセス王の船橋構築—— のことが『失樂園』アビス横断路構築のすさまじさを表する下りの中で言及されている

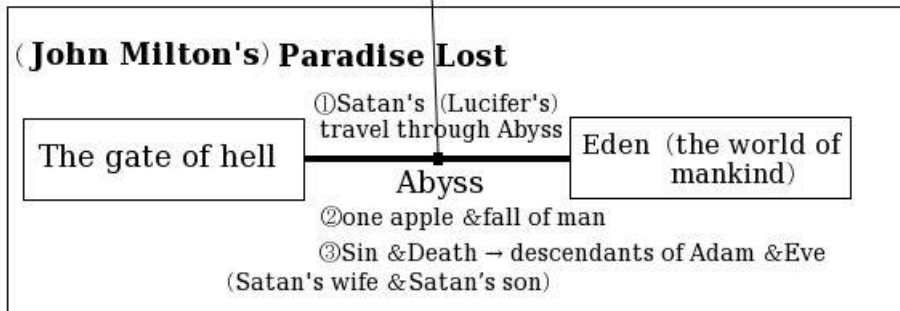
との意味合いで[トロイア比定地]およ[トロイア関連事物]と接合する  
とのことがあるためであるとの解説をなしてきた。





(「文献的事実」の問題(個人の主観や解釈論の問題ではなく文献字面にどう  
表記がなされているかという「記録的事実」の問題)として線を引いた各要素は  
古典『失樂園』の中にて関係づけられている)

connected (philological truth)



ジョン・ミルトン『失樂園』にはルシファーが新発の人類を墮落させるために地獄門の先にある「アビスの領域」を越えてエデン(人間の世界)に単身飛行をなすとの話が展開する。

そこに見る、

[アビスからエデンに向けてのルシファーの単身飛行]

が「文献的事実」の問題として、

[ボスポラス海峡] / [ヘレスポントス(ダーダネルス海峡)] / [ダーダネルスからヨーロッパに向けての往古の侵略作戦(クセルクセス船橋構築)] / [トロイアの木馬の考案者の艱難辛苦の船旅]

らにひとところにて仮託されているとことがある。

そのこと、[ボスポラス海峡] [ダーダネルス海峡] [ダーダネルス海峡を媒介にしての侵略] [トロイアの木製の馬の考案者の旅] らがひとところにて結びつけられているとのことに関しては、トロイアがダーダネルス(トロイア始祖に由来しての名を冠する地)近傍に存在していたと伝わっていることに鑑み、  
[古典『失樂園』に見るルシファーのエデンにての林檎の誘惑は[トロイア陥落]と隠喩的に結びつけられている]のだと解されることである。

以上指摘したうえで書くが、ルシファー誘惑の後、アビスを介して[罪](擬人化されてのルシファーの妻)および[死](擬人化されてのルシファーの息子)がアダムとイヴの子孫(人類)に襲いかかる道筋が構築されたなどと『失樂園』にて描写されていること、そのことの意味を『失樂園』に見る「地獄門の先にあるアビスの特性」、すなわち、

「[[時間]と[空間]が意を失う領域]・[[自然の祖]たる領域]・[無限の闇の領域]・[ルシファーをして一度呑み込まれれば、無に帰せられるしかない領域と言わせしめる不帰の領域]としての特性」(全て本稿にての先行する引用部を介して古典字面にあってそのように表記されていること、指し示しているところの特性)

や[他古典に見る地獄門の先の領域の描写形態——ダンテ『地獄篇』の「地獄門の先の重力中枢としてのルシファー領域」にまつわる描写形態——]に関する顧慮から重んじているのが本稿である。

何故、たかだかそうした「皮相的な一致性」(よりもって性質の悪い関係性の存在をダーダネルス海峡らとの兼ね合いで詳述していくつもりであるも、取りあえずも指摘しているところの「皮相的な一致性」)のことまでを問題視しているかと述べれば、「一つに」次のようなことがあるからである。

「ミルトン『失樂園』に見る、

[[アビス(深淵)]を横断して[罪]と[死]が人間に襲いかかる上で用いるとの通用路]というものは

[エデンの林檎による誘惑の結果による]ところ

として構築されたと当該古典にて描写されている——直近言及のようにトロイア崩壊にまつわる特定名詞が用いられながらもそのように描写されている——ものともなるのだが、そのこと(アビス横断路構築挙動とエデンの園にての誘惑の同義性)と本稿にての従前の内容、

(振り返りもして) [ [トロイアにまつわる伝承] が [アトランティス伝承] と結びついてい  
るとの側面が存在する ( [出典\(Source\) 紹介の部 40](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 45](#)  
を包摂する部にて詳解を講じている) ]

(振り返りもして) [ [アトランティスの伝承上の同等物] としての評価がなされてきた  
[黄金の林檎の園] が [エデンの園] と結びつくとの見立てがなせるようになっている  
し、実際に一部でそういう見立てがなされてきたとの側面がある ( [出典\(Source\) 紹介の  
部 48](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 51](#) を包摂する部にて詳解を講じている) ]

とのことらが結節、[関係性の環]が描けるようになっており、[不気味さ]が際立つと  
のことがある]

(:その関係性の環にまつわる[不気味さ]が[現実世界にあつての(本来ならば) 重大  
視されて然るべきこと]と接合するところとして[ミルトン古典にてのアビス横断路構築に  
まつわる部]が[今日的な意味で見たブラックホール(の近似物・近似表現)]と「多層  
的に」結びつくようになっていとのことがあり ( [出典\(Source\) 紹介の部 55](#) から [出典  
\(Source\) 紹介の部 55 \(3\)](#) を包摂する部を参照のこと)、また、ブラックホール生成をな  
しうると —— 初期、その生成可能性が「ありえることではない」と実験機関に完全否定  
されていたところから一転して—— 中途より主張されるに至ったとの CERN の LHC  
実験が[アトランティス・トロイア関連名称]の双方と「[納得できるとの意図]の明示が何  
らなされずに」実験関係者らによって結びつけられていること ( [出典\(Source\) 紹介の部  
35](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 36 \(3\)](#) を包摂する部を参照のこと) を本稿では問題視し  
てきた)

以上のようなことについて常識力の高い、そして、比較的識見豊富な向きにあつてはおおよそ  
[次のような理屈]

によって「部分的に」自己納得しようとするかもしれない(ありうべき常識の声を否定するための不快な  
話も本稿にあつてさらになしていくことになるのであるが、とにかくも、相応の人間らがどういう[理屈]  
([自己の願望]を体現したものであつても[理屈]との形態をなんとか保持しているもの)で納得しよう  
するか、あるいは、納得「させられ」うるか どのことを慮(おもんばか)つての話をここにてなしておく)。

「ジョン・ミルトンは  
[エデンの園の誘惑]  
を

[黄金の林檎の園にて栽培される黄金の林檎の取得を目的にした誘惑]

と同一視するような視点を有していたのではないか。

そして、[黄金の林檎の園]とくれば、(黄金の林檎で滅んだ)[トロイア崩壊のエピ  
ソード]のことが想起される。

ミルトンはトロイア戦争を語るうえで抜きにすることはできない古代の詩人ホメロス(ト  
ロイア戦争を扱った二大古典『イリアス』『オデュッセウス』の作者) のように視力を  
失っており、『失樂園』を娘らに口述筆記なさしめていたとも伝わっている文豪であるか  
らさもありません( :同じくもの点については英文 Wikipedia [ John Milton ] 項目に  
あつて “ **By 1654, Milton had become totally blind; the cause of his blindness is  
debated but bilateral retinal detachment or glaucoma are most likely.** ” (大要)「一  
六五四年に至るまでにミルトンは網膜剥離ないし緑内障をこじらせてのことというのが  
最もありうるところとしての全盲となり」と記され、また、同項目別パートに “ **Milton's  
magnum opus, the blank-verse epic poem Paradise Lost, was composed by the  
blind and impoverished Milton from 1658 to 1664 (first edition) with small but  
significant revisions published in 1674 (second edition).** ” (大要)「ミルトンの畢生の

作、失樂園に関しては全盲状態にてもなされた」と〔ミルトンが三人の娘の介助を受けながらも『失樂園』を口述筆記していることを描いた歴史画〕が挙げられつつ記されているところとなる)。

それにつき、トロイア崩壊とくれば、ミルトン活躍年代たる往時、古の〔トロイア〕の領域の近傍がイスラム勢力、オスマン帝国の中心地かつキリスト教圏(欧州)侵略の橋頭堡にして策源地となっており、それに対してヨーロッパ世界(キリスト教世界)に対する危機意識が高まっていた(：ボスポラス海峡に面しての都市コンスタンティノープル、〔キリスト教圏のイスラム世界に対する最前線の要衝〕とも目されていたビザンツ帝国の首都がオスマン帝国に陥落させられた後、その場はイスラム勢力の策源地にして首府とされているとのことがある——通史的歴史理解にまつわる場所となるのでそこよりの引用に留めるが、現行、和文ウィキペディア〔オスマン帝国〕項目にて(引用するところとして)“1453年、ムラト2世の子メフメト2世は東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルを攻略し、ついに東ローマ帝国を滅ぼした(コンスタンティノープルの陥落)。コンスタンティノープルは以後オスマン帝国の首都となった。また、これ以後徐々にギリシャ語に由来するイスタンブルという呼称がコンスタンティノープルに代わって用いられるようになった。そして1460年、ミストラが陥落、ギリシャ全土がオスマン帝国領となり、オスマン帝国によるバルカン半島支配が確立した”(引用部はここまでとする)と記載されているような歴史的経緯が存する——)。

であるから、そうした状況下でのキリスト教徒一般のイスラム勢力躍進にまつわる欧州識者階層の危機感を受けて文豪ミルトンが

〔エデンからの樂園追放と〔死〕と〔罪〕の来襲を〔トロイア崩壊〕と結びつける〕

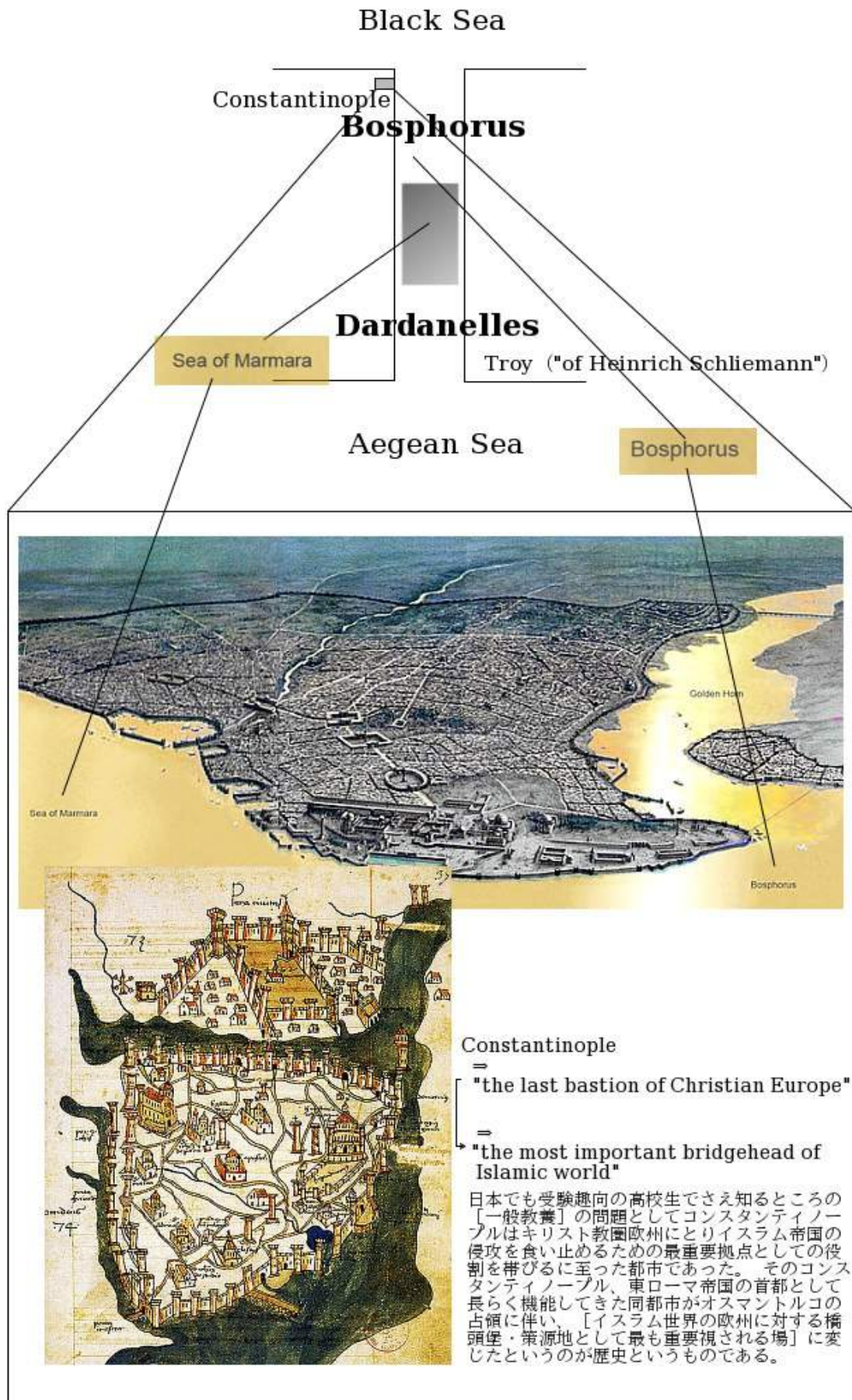
との式を前面に出していたとしてもさして不自然には思われない(：実際にミルトンが『失樂園』をものしたとされる17世紀、1667年の16年後、1683年からしてオスマントルコによるヨーロッパ征服活動の一環として〔第2次ウィーン包囲〕が敢行されている。ちなみにウィーンについては一部で〔黄金の林檎〕とも結びつけられる都市となるとの言い伝えが(そうした言い伝えの伝がどこまで信を置くべきかは判じかねるが)存在しており、たとえば、**Historical Fiction** (史実脚色作品)として最近、2012年後半期に公開された海外映画 **September Eleven 1683** ——直訳すれば『1683年9月11日』とのタイトルの海外映画——では“**On September 11th 1683, Islam was at the peak of its expansion in the West. Three hundred thousand islamic troops under the command of Kara Mustafa were besieging the city they called " The Golden Apple ": Vienna.**”(訳として)「1683年9月11日、その折、イスラムは西洋に対する拡大基調にあつての絶頂期にあつた。カラ・ムスタファに指揮されての軍兵総勢30万が彼らが〔黄金の林檎〕と呼んでいた都市、ウィーンを包囲するに至っていた」との英文解説文が冒頭部から呈示され、大帝(スルタン)を代理する司令官(パシヤ)に率いられてのオスマン勢力による〔9月11日〕にての(〔第2次ウィーン包囲〕渦中での)〔黄金の林檎と描写されてのウィーン〕を手中にすべくもの戦いありようが半ば **Fiction** としての作中にて主軸として描かれていもする)。

きっとそうだ。

だから、この男(筆者)はこじつけの徒輩だ ——(加えて、「だから、ブラックホールのこともそういうやりようできっと何らかの説明がつくのだ。この男は自己の論理を支えるためにこじつけがましいこと、とんでもないことを〔正鵠を射ていない〕ところで述べているにすぎない」との見方もなすかもしれない。については、残念でならないのだが、反対論拠の山の確たる存在(そして、これよりのさらにもつてのその呈示)より「ご愁傷さまではありますが、」としか述べられないのだが。ちなみに、上に〔黄金の林檎とオスマントルコによるウィーン包囲を結びつける作品〕があることに言及したことについで述べておくと、本稿の先立つての内容をきちんとお読みいただければ分かりますこととして、本稿では〔911の事件の「先覚的」言及事物らと黄金の林檎の関係性〕を非常に問



題視しており、既にそうした文物の一例を挙げている。そして、後にての段でも[「他の」911 に対する予見的作品と黄金の林檎の関係性]を都度、具体例摘示なしていく所存でもある)—— )」。







## Mehmed the Conqueror (Mehmet II)

イスラム圏の大軍を率いて古代ローマの衣鉢を継ぐ東ローマ帝国への遠征を実行、大砲ウルバヌス・カノン（[ダルダネス(ダーダネルス)砲] Dardanelles Gunとも呼称される）を用いたり、船を陸送したりといった戦史上よく知られたやりようをとりつつ、コンスタンティノープルを物量作戦で手中に収めたのがオスマン帝国のスルタン、メフメト2世（英語表記ではマホメット2世）である。

以上、識見を伴った常識人のことを想定しもし、といった人間ならば抱きもし、もしかたしらば述べもしうるかととらえられる視点・申しようを直上代弁したうえで書くが、話がとおりの話柄で重篤性が減じるとの心証をなんら抱けないものであるから問題となるのである。



ここに至るまでの多くの重要な指し示し事項を割愛したうえでの話として以下のこの意味合い「だけ」でも考えてみるべきである。

(くどくもの繰り返し表記となるところの話として)

ダンテ『地獄篇』にあつての、

[今日の理解にあつてのブラックホール近似物の描写(於て:コキユートス)]

とミルトン『失樂園』にあつての同じくもの、

[今日の理解にあつてのブラックホール近似物の描写(於て:アビス)]

は双方別個に別々の側面からブラックホールとの近似性を呈するとのものであるが、「極めて奇怪なことに」双方共に

[ルシファーによる災厄]

[地獄門の先にある破滅・悲劇に関わる通路]

と結びつけられているとのことがある。

以上、i. から iii. と区切つてのことらにつき、まとめれば、『地獄篇』および『失樂園』との両古典を合算して見た際に、

[ [ルシファーによる災厄]および[地獄門(と描写されるもの)の先にある[破滅][悲劇]への通路]との両要素と結びついたポイント]

に関わるところで

- A. [[不帰の領域]にまつわる隻句(『地獄篇』地獄門隻句)を目にしたところから入って最終的に到達した「悲嘆」を体現しての地点] (『地獄篇』コキユートス)
- B. [重力の源泉と「際立って」描写されている地点] (『地獄篇』コキユートス)
- C. [(静的描写として)外側から見た際に罪障がゆえに「凍りついた」者達がそこに横たわっている、と同時に、(動的描写として)当事者から見れば「永劫に粉碎され続けている」との地点] (『地獄篇』コキユートスの中枢ジュデッカ)
- D. [[光に語源を有する存在](ルチフェロ)が幽閉されている地点] (『地獄篇』コキユートスの中枢ジュデッカ) E. [[果てなき(底無し)の暗黒領域] (『失樂園』アビス)
- F. [大きさ・「時間」・「場所」が無意味となる領域] (『失樂園』アビス/17世紀成立の『失樂園』の刊行時には時間と空間を有機的の一体と見る相対性理論に通ずる発想法は無論、なかった)
- G. [自然の祖たる領域] (『失樂園』アビス)

との要素らを「全て兼ね備えての」ありようが具現化していると述べられるようになっており、そうしたありようが現代物理学——(その担い手らが本質的には知性も自由度もないにも関わらず知性あるフリをさせられている下らぬ人種(ダンテ地獄篇にて欺瞞

をこととする[人類の裏切り者]らとして氷地獄に閉じ込められているような者達)か否か  
どうかはこの際、関係ないものとしての現代物理学)—— の発展にて呈示されるよう  
になったとの[「今日的な観点で見ての」ブラックホール像]と共通性を呈している、す  
なわち、

- A. [「一度入ったら二度と出れない」との(事象の地平線の先にての)領域]  
(ブラックホール内側)
- B. [重力の源泉となっている場] (ブラックホール)
- C. [(静的描写として)外側(生者)から見れば被吸引者が「時が止まったよう  
な状況」になっているとのことがありつつも(動的描写として)その被吸引者本  
人(死者と化した者)から見れば「粉碎され尽くしている」との場] (ブラック  
ホール)
- D. [「光さえもが逃がられない」とされる場] (ブラックホール内側)
- E. [底無しの暗黒領域] (ブラックホール)
- F. [時空間の法則が破綻する(「時間」と「空間」が本来通りの意をなさなくな  
る)領域] (ブラックホール)
- G. [それをもって自然の祖であるとする観点が存する場] (ブラックホール)

との特徴を全て兼ね備えたものとしての[「今日的な観点で見ての」ブラックホール像]  
と共通性を呈していると摘示できるように「なっている」とのことがある。

(※ダンテ『地獄篇』の最終ゴールたる氷地獄コキュートスに

- B. [重力の源泉となっている場]
- C. [「悲嘆の」川コキュートスにて(静的描写として)外側から見た際に罪障が  
ゆえに「凍りついた」者達がそこに横たわっている、と同時に、(動的描写とし  
て)当事者から見れば「永劫に粉碎され続けている」との地点]

との側面が伴うのに対して、現代的観点で見た際のブラックホールに

- B. [重力の源泉となっている場]
- C. [(静的描写として)外側(生者)から見れば被吸引者が「時が止まったよう  
な状況」になっているとのことがありつつも(動的描写として)その被吸引者本  
人(死者と化した者)から見れば「粉碎され尽くしている」との場]

との特性が伴っているとのまさしくものそのことに関わるところとしてブラックホール(と  
今日、呼ばれるに至ったもの)は初期、

**Frozen Star**[凍った星](ダンテ『地獄篇』の[重力の中枢にあつての氷地獄]のような  
ものとしてのフローズン・スター)

とも形容されていたとのこと「も」先立っての段で解説した —— そちら Frozen Star の  
現行、Wikipedia にての関連表記は[ Black Hole ]項目、その History の節にての  
“**This is a valid point of view for external observers, but not for infalling observers.  
Because of this property, the collapsed stars were called "frozen stars", because an  
outside observer would see the surface of the star frozen in time at the instant  
where its collapse takes it inside the Schwarzschild radius.**” 「この見方は外側の観  
測者ら(訳注:ブラックホールの外側の観測者ら)にとっては適正なる見方だが、ブラッ

クホールに落ちこむ観測者らから見れば、適正なる見方ではない。こうもした属性がゆえに「縮退星」(訳注: collapsed star はブラックホールという言葉が生み出される前にブラックホールを指して用いられていたところの一呼称)は Frozen Stars「フローズン・スターズ(凍り付いた恒星)」とも呼ばれていた、というのも「外側の観察者」はその星がシュヴァルツシルト半径の内側へ向けて崩壊していくまさにその場、その瞬間を「凍り付いた恒星の外側」とのかたちで見ることになるからである」との部位となる——)

上のような関係性が暗示させるようになってきているとのことは——これまたくどくも強調したいことなのだが——古典の記載のみより導きだせるとの「事実」である(再三再四述べるが、**出典(Source)紹介の部 55**から**出典(Source)紹介の部 55(3)**を包摂する解説部を参照のこと。ちなみに同じくの話は無論、「甚だしくも非常識的」とも映るものだが、非常識的であることが事実や真実ではないか、と述べれば、そうではない。誤解曲解の余地あり、非常識的なることを話柄とする人間は大概、「水準の低い人間であってもすぐにそれと分かるような性質の悪い紛いもの」ばかりであるとのことがあるため、誤解・予断を抱かれやすいとの余地はあろうが、「非常識的なること」と「事実・真実」は本来的には両立しうることであるのは言うまでも無い)。

につき、「事実」が「事実」であると納得させるかたちにて遺漏無くも呈示された折に

「それは「虚偽」であろう」

と返すのは「正気の人間」のやりようではないとのことになろう(あるいは「理が通じぬ人間」ないし「機械」のように融通性がない存在]であるということになろう——筆者は『この世界は正気と狂気が往々に逆転することがあるからこそその人間の悲劇なのであろう』と考えつつも、そのようなことをわざわざ書いている——)。

「事実」が「事実」として「遺漏無くも」呈示された折に事実の指し示す方向の検討をなすべき人間が心中にて考えてみるべきことは

「そうしたことがあるのはよくできた「偶然の一致」で済むか否か」

「「偶然の一致」で済まないのならば、その「原因」は何か」

「(「原因」の特定の有無とはまた別個に)「偶然の一致」で済まないのならば、その有害度は如何程か (それを無視することが自分や守りたき者に如何程の不利益を及ぼすのか) 」

といったことであるべきである。

以上述べたうえで書くが、ここにあって問題視していることは表記のようなこと、

「特定古典に今日的な観点で見てのブラックホールに複合的に通じるものが具現化しているとの事実——それが「偶然」であるか否かはとりあえずも置いておいて現象としてそういうことが見てとれるのは「事実」であることには異動が生じえないこと——」

に直接的に関わるとのミルトン『失樂園』にあってのまさにその特定部、

「**「罪」と「死」の通用路に関連する部**」

にあっても「トロイア」との接合性が——今日のLHC実験と同様——観念されるということとなっている。

そうした状況下で上にて代弁したような「常識的なる話柄」にての物言いを真と想定するのは——取りあえずも申し述べるどころとして——

[次のような観点]

から妥当ではない。

[17世紀の人間であるミルトンがブラックホールのことを予測しえたか、と述べれば、そのようなことはおよそ観念できることではない(ブラックホールに近似するものを想起できるだけの科学的観点が登場を見たのはミルトンより後のことである)。

では、ブラックホール近似物が登場を見ていることの方は(ミルトンの故意・恣意ではなく) [偶然]であったと仮定を置いてみよう。

だが、そのような仮定(計数的なる検討をなす対象と見、かつ、多少専門的なる言葉で表するとすれば、帰無仮説、[偶然]ではなく[恣意]の賜物であろうと想定する本稿ここまでの見立てを無に帰すとの仮説ともなろうもの)を無批判に[真]であると想定することも、また、ミルトンが[17世紀時代人なり人間レベルのやりよう]にたかだかすぎないところとしてトロイアの寓意をわざと隠喩的に『失樂園』特定部描写に込めたのだらうと想定するとのことをなすことも[賢明ではない]と判じられるだけの材料が多々「ある」(それら材料にまつわってのさらに微に入っただけの説明はこれよりなすことにする)

上のこと、申し述べもしたうえで、これ以降の段では

[常識論で説明しようとするの方が(普通であれば反対であるべきところを)「まったくもって困難である」とのことを示す「他の」事柄ら]

についての指し示しに入ることとする。

とっかかりとして[ノアの洪水]や[デウカリオンの洪水]といった世界中に伝わる洪水伝承の淵源にまつわる[仮説]として、

### [黒海洪水仮説] (Black Sea deluge hypothesis)

というものが20世紀末より「目立って」提唱されだしているとのことを取り上げることとする。

その点、[黒海洪水説]とは

[氷河期以来、各々、分立してつながって「いなかっ」たとの[地中海]と[黒海]が中途(およそ紀元前5600年頃)より水位変化を呈しだし、結果、[地中海から黒海への海水の大流入]が発生、それによって、黒海の領域が周辺に急拡大しつつ[地中海]と[黒海]が(あらたに形成された海峡を間に置かたちで)結節するようになったとのプロセスを前面に出しての仮説 / 水位上昇による海峡形成を伴っての[地中海]と[黒海]の結節プロセスによって黒海周辺地域(の黎明期人類文明)に対して甚大な水害を及ぼした大洪水が発生したことにまつわる仮説]

となり、1996年にアカデミック・ジャーナルで正式に発表されることになったとのその直前、ニューヨークタイムズに概要が発表されて物議を醸したとの説(そして、今日、説得力あるものとして市民権を獲得している説)となってもする。直下、出典紹介部を参照されたい。



# SOURCE

## 57



ここ出典(Source)紹介の部57にあつては

[黒海洪水仮説がいかようなものなのか]

についての解説を講ずることとする。

まずもって、目に付くところとして英文ウィキペディアにいかなる記載がなされているのか、そちらより引用をなすこととする

(直下、英文 Wikipedia [Black Sea deluge hypothesis ]項目よりの部分引用をなすとして)

---

The Black Sea deluge is a hypothesized **catastrophic rise in the level of the Black Sea circa 5600 BC due to waters from the Mediterranean Sea breaching a sill in the Bosphorus Strait**. The hypothesis made headlines when The New York Times published it in December 1996, shortly before it was published in an academic journal. While it is agreed that the sequence of events described did occur, there is debate over the suddenness, dating and magnitude of the events.

[ . . . ]

In 1997, William Ryan and Walter Pitman published evidence that a massive flooding of the Black Sea occurred about 5600 BC through the Bosphorus, following this scenario. Before that date, glacial meltwater had turned the Black and Caspian Seas into vast freshwater lakes draining into the Aegean Sea. As glaciers retreated, some of the rivers emptying into the Black Sea declined in volume and changed course to drain into the North Sea. The levels of the lakes dropped through evaporation, while changes in worldwide hydrology caused sea level to rise. The rising Mediterranean finally spilled over a rocky sill at the Bosphorus. The event flooded 155,000 km<sup>2</sup> (60,000 sq mi) of land and significantly expanded the Black Sea shoreline to the north and west. According to the researchers, "40 km<sup>3</sup> (10 cu mi) of water poured through each day, two hundred times what flows over Niagara Falls... The Bosphorus flume roared and surged at full spate for at least three hundred days."

(多少補つてももの拙訳として)



黒海洪水説は

[ボスポラス海峡 (へと現時なっている一帯) を貫通するかたちでの地中海よりの水の流入による、およそ紀元前 5600 年頃にての黒海の壊滅的水位上昇]を扱った仮説である。同仮説は 1996 年 12 月、学会誌に発表される少し前、ニューヨークタイムズのヘッドライン部を飾った(うえて反響を呈した)ものである。言及されての一連の出来事が発生したことについては(現行、)同意がなされているが、出来事の突発性、時期、程度に関してはいまだ議論がなされている。

…(中略)…

1997 年、同説提唱者ウィリアム・ライアンとウォルター・ピットマンはおよそにして紀元前 5600 年頃に[以下続いて表記のシナリオ]によってボスポラス経由で黒海にあっての大がかりな洪水が発生したことについての証拠を呈示した。「(洪水の)発生するはるか以前、エーゲ海(地中海ギリシャ方面)に向けて大量の水を排水させながらものかたちで氷河期の氷を含んだ水が[黒海]と[カスピ海]をして[巨大なる淡水湖]へとなさしめた。氷河の後退を見た折、黒海に流入する河川らのうちのいくつかは水位減退し、北海方面に向けて排水がなされる方向にその経路を変えた。世界的規模での水文学(訳注:ハイドロロジー、水循環を研究する学問)的兆候が[海面水位の上昇]を引き起こしていた中にてのことながらそれら湖ら(初期巨大な淡水湖であった黒海およびカスピ海)の水位は(反面で)蒸発プロセスにて低位化を呈していた。(黒海らに比して)水位上昇を見ていた地中海はついに岩盤で蔽われたボスポラス地域を越えて(黒海に流入すると)氾濫を見た。同出来事によって地表 15 万 5 千平方キロメートル(60000 平方マイル)が冠水を見、そして、黒海沿岸は際立つかたちにて北西方向に拡大することになった。調査をなした研究者らによると、[40 立方キロメートル(10 立方マイル)もの水量、[ナイアガラの滝にて 1 日に流れる水量の 200 倍もの水量]が一日毎に黒海に注ぎ込み、ボスポラスにて出来上がった水路が最少で 300 日以上も轟音を発するかたちで水が押し寄せていた]とのことである」

---

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

以上のようにウィキペディア原文抜粋部に見るような黒海洪水説、1996 年に発表された同説がいかんにしてニューヨークタイムズにお目見えしたのかについて、同媒体(ニューヨークタイムズ)よりの原文引用でもって指し示しておくこととする。

(直下、オンライン上より誰でも特定できるところの Geologists Link Black Sea Deluge To Farming's Rise『地理学者らが黒海の洪水をもって農業の隆盛と結びつけた』との題名振られての 1996 年 12 月 17 日付け(Published: December 17, 1996)の The New York Times 記事よりの一部抜粋をなすとして)

---

The team leaders, Dr. William B. F. Ryan and Dr. Walter C. Pittman 3d, both of Columbia University's Lamont-Doherty Earth Observatory in Palisades, N.Y., described the results of their research in interviews last week. A full scientific report is to be published next spring.

Other geologists familiar with the work seem to have no quarrel with the basic reconstruction or the timing. But Dr. Ryan and Dr. Pittman have taken their interpretation of the flood's possible consequences a tentative but bold step

further, two geologists treading on the turf of archeologists. The rumblings of controversy, like the beginnings of the Bosphorus cascade, can already be heard. Could it be, Dr. Ryan and Dr. Pittman speculate, that the people driven from their land by the flood were, in part, responsible for the spread of farming into Europe and advances in agriculture and irrigation to the south, in Anatolia and Mesopotamia? These cultural changes occurred around the same time as the rise of the Black Sea.

Could it also be, they ask, that the Black Sea deluge left such enduring memories that this inspired the later story of a great flood described in the Babylonian epic of Gilgamesh? In the epic, the heroic warrior Gilgamesh makes a dangerous journey to meet the survivor of a great world flood and learn from him the secret of everlasting youth.

If a memory of the Black Sea flood indeed influenced the Gilgamesh story, then it could also be a source of the Noah story in the Book of Genesis. Scholars have long noted striking similarities between the Gilgamesh and Genesis flood accounts and suspected that the Israelites derived their version from the Gilgamesh epic or independently from a common tradition that might have stemmed from a real catastrophe long before.

(多少、補ってもの拙訳として)

「コロンビア大の Lamont-Doherty Earth Observatory (ニューヨークはパリセードの地球科学関連研究施設) に所属しているとのウィリアム・B・F・ライアン博士とウォルター・C・ピットマン(3世)博士らの両・調査チームリーダーらは先週本紙のインタビューに応じ彼らの(黒海洪水説にまつわる)研究結果につき語った。全容を納めての彼らの科学報告書は来春にてリリースを見る予定である。

研究に通じているとの他の地学者らにあつては[基本的再現手法]および[時期同定]につき「議論の余地なし」と見ている節もある。しかし、ライアン博士とピットマン博士の両氏、考古学者の領分に踏み入った二人の地理学者らは洪水のありうべき帰結に関する彼ら解釈をして暫定的な(最終的ではない暫定的な)、しかし、勇気が要されるとの「さらに先への」一歩であるとしてとらえている。

(提唱された説に見る)ボスポラス海峡が出来上がったときのように議論のさざめきが既に聞こえてきている。

果たしてライアン博士とピットマン博士の両氏が推測するように、人々は洪水によって彼らの土地より追われるようになり、他面、(同じくもの人々が)アナトリアやメソポタミアでヨーロッパや他の(古代)先進地域に向かって、南方に向かって農業・灌漑にあつての農地経営の広がりとの役割を果たさせられることになったのだろうか。につき、これら文化的変移は黒海の水位上昇と時を同じくして発生しているとのことがある。

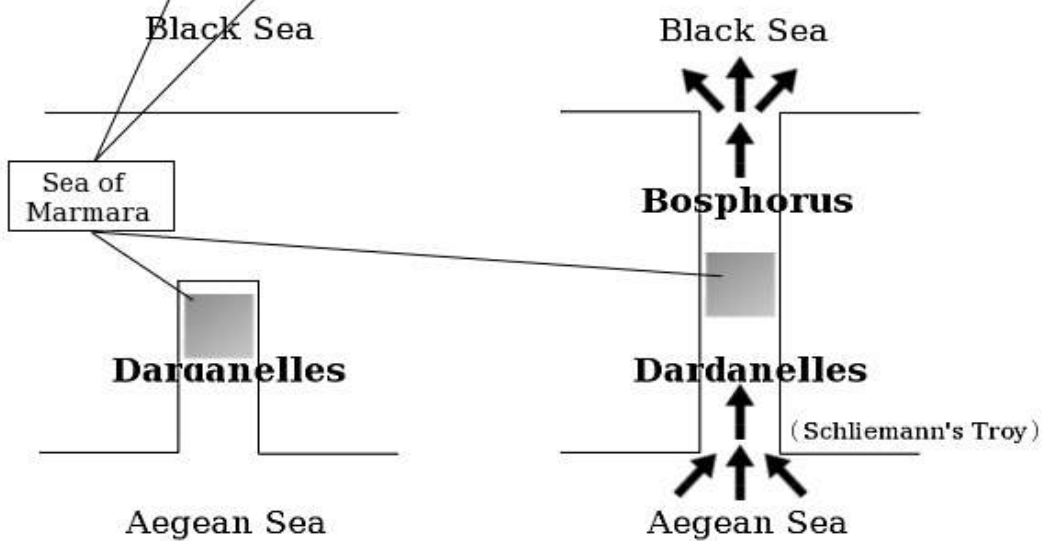
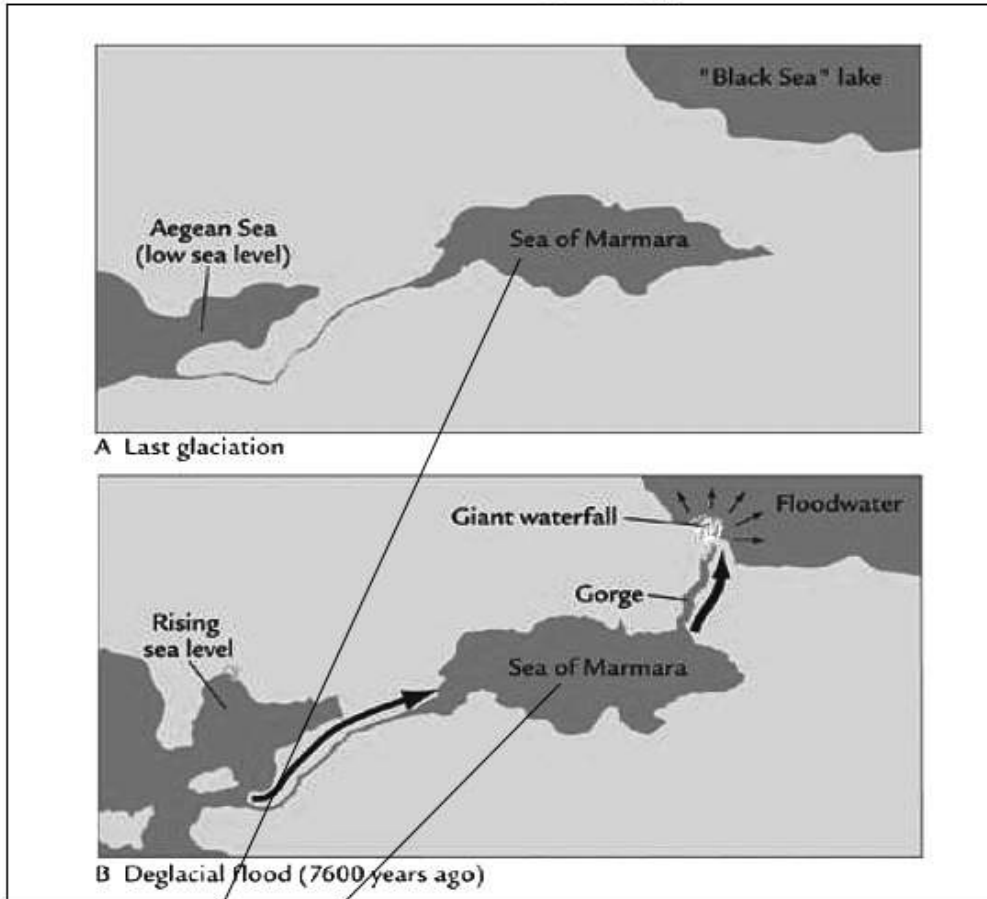
また、黒海にあつての洪水が「風化に耐えもしている」との記憶、バビロニアのギルガメシュ叙事詩に見る大洪水伝承の元となったものとしての不朽の記憶を遺したということも同様にありうるものなのか、両博士は問うている。叙事詩にて英雄的戦士でもあるギルガメシュは世界的大洪水の生き残りとの出会いを実現、また、彼より永遠の若さの秘密を聞き出したとある。

仮にもし本当に黒海にての洪水の記憶がギルガメシュの物語に影響を与えているのだとすれば、それはまた聖書創世記に認められるノアの物語の源泉ともなりうる。学者らはギルガメシュ(の物語)と『創世記』の洪水への言及の間に横たわる衝撃的類似性につき長きにわたって着目してきたし、また、イスラエルの民らがギルガメシュ叙事詩から彼らなりのそれ(洪水伝説)を作るために奪うことをなしたのではないか、あるいは、イスラエルの民が遙か昔に生じた現

実の壊滅的事態に端を発する共通の伝承から各々独立に彼らの洪水伝承を構築したのではないかと疑いもしてきた」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

### Black sea deluge hypothesis



※ [エーゲ海] 側の水位が [黒海] 側の水位に比べて上昇を見ていた中、 [エーゲ海] 側の海水がマルマラ海（ダーダネルス海峡とボスポラス海峡の間に位置している内海）に流れ込み、元来はそこに存在していなかったとされるボスポラス海峡を構築しながら、 [黒海] 側に大量に流れ込み、もって、 [黒海] 周辺地域に大氾濫（およびそれに付随する先史文明に対する大被害）をもたらしたというのが [ノアの大洪水のモデル説] としても取り沙汰されている黒海洪水説のおよその内容である。

(黒海洪水説の概要は視覚的には[上掲図]のように示されるものとなる ——尚、図の上方部に付した地図は英文 Wikipedia[ Black Sea deluge hypothesis ]項目にも掲載されているもの、米国政府関係者に由来する公共的なる図として著作権の縛りが無いことが表記されているものとなる—— )

([出典\(Source\)紹介の部 57](#)はここまでとする)

1996年という年次にあって、

[黒海がかつて(紀元前5600年、すなわち、今より7600年前とされる折)、氷河期退行の中、地中海サイドとの水位差に起因する地中海からの大量の海水の流入に曝され、によってボスポラス海峡が形成される(黒海とマルマラ海をつなぐかたちで形成される)のと同時に大規模な氾濫を呈しながら北西方向に拡大することになった]

との説が提唱され、それによって今日に伝わる往古よりの大洪水伝承の説明を付けようとの学界思潮が生じてきたわけである ( :同じくもの仮説は「説得力が高い」ものとも現行看做されていることがよくも語られる。たとえば、英文 Wikipedia [ Black Sea deluge hypothesis ] 項目にあつての Criticism (批評) の節にも記載されていることとして、多重的な視点でユネスコの調査チームが2005年から2009年にかけて調査を行い、同仮説がまったくもって無理のない ( quite mild ) であるとの調査報告を出していること記載されていることから同じくものが伺いしれる — “ A five-year cross-disciplinary research project under the sponsorship of UNESCO and the International Union of Geological Sciences was conducted 2005--9 および A February 2009 article reported that the flooding might have been "quite mild". ” との英文 Wikipedia 該当項目内の記述がここで引き合いに出しているところとなる— )。

上の如しの黒海洪水仮説を本稿にて取り上げたのは、無論、  
[当該の仮説そのものの適否]  
につき云々するためではない ( そういうことの適否を具象論として云々するのは実地調査をなしているとの専門知識を有した学者ら領分であつて門外漢が食指を伸ばすべきところではないだろうと当然に見ている)。

それが「極めて真つ当なものである」と評価されていても仮説そのものの真偽自体は「(本稿訴求事項から見ての) 本質的なことではない」として脇に置き、代わつて本稿で問題視しているのは、そういう仮説が提唱されていることにも関わるところの「史的」背景・「伝承に依拠しての」背景それ自体に

[[トロイア崩壊の寓意](#)]

にも

[[アトランティス崩壊の寓意](#)]

にも —そしてもつてして—

[[ミルトン『失樂園』の寓意](#)]

にも「不可解に」接合する ——そう、であるから、重要なこととして「不可解に」接合する—— との側面が見受けられ、また、ブラックホールのことを想起させるとの側面すらもがそこにあると見受けられるからである ( といった言いようがこの段階では [ 奇異さ ] が際立っているものとしか受け取れぬものであることは言うまでもないことだが、何故、そうした物言いが「なせてしまうのか」、続けての段にて詳説に詳説を重ねていく所存である)。

それがゆえに、同仮説 ( [黒海洪水説] ) につき取り上げることとしたのである。

上のように断ったうえで話を続ける。

ここで先にもそうであること、言及したように日本の高校にての『世界史』の「お勉強」でも要求される知識水準の話（金太郎飴的な[ナレッジ]のレベルであって、[社会維持・社会構築に役立つ能吏としての才、すなわち、一定以上の理解力とインプット・アウトプット能力を有する者らの社会的適正配置]といったことを主目に置いているように「見受けられる」受験戦争なぞでとかく軽視されがちな知性、定石を崩すが如く応用をなし、かつ、それでいて適正なる解を導き出すとの[ウィズダム]のレベルの話ではない知識にまつわっての話）として

[マルマラ海を南の[地中海]と北の[黒海]に分かつ海峡がボスポラス海峡(北端部)とダーダネルス海峡(南端部)となっている —地理観明瞭とせぬとの向きにおかれては先に挙げての地図を参照などいただければ、と思う— ]

とのことがある。

うち、ボスポラス海峡については

[マルマラ海より黒海(往古、淡水湖であったとの説がある黒海)に大量の水が流れ込んだ際に形成された海峡にして大洪水と結びつくものであったとの海峡]

との地理学者由来の説得力高き申しようが[黒海洪水仮説]とおのかたちで1996年より目立って取り沙汰されているとのことがある(直上の段にて既述のこととなる)。

北端のボスポラス海峡にあってそういったいわれようがなされている一方で南端のダーダネルス海峡、トロイアの始祖ダルダノスより命名されてのものである(と先述の)同ダーダネルス海峡からして[洪水伝承]

と結びついているとのことがある。

具体的にはトロイア始祖として知られるダルダノス、その彼自身が

[古の洪水にあっての生き残り]

と語り継がれているとの向きでもあるとのことがあるのである(典拠はすぐに挙げる)。

そして、そのことに関わるところで

「黒海の限界で往古、大洪水があったのではないか」

との見解が歴年、「黒海洪水仮説(先述)」とはまた別に呈されてきたとのことがあるとのことがある。

以上のことから、

[ダーダネルス海峡一帯(先述のようにトロイア創建の地と伝わる一帯にしてシュリーマンがトロイアの遺構と「される」遺跡を発掘したポイント)からして —トロイア始祖としてのダルダノス自体に大洪水の生き残りとの伝承が伴っているとの式で— 洪水伝承と結びつく側面がある]

[黒海の限界で往古、大洪水があったのではないかとの見解が(黒海洪水仮説とはまた別に)歴年呈されてきたとのことがある]

とのことの出典を挙げることとする。

それにつき、まずもってはウィキペディア —(内容の易変性・匿名の編集者ら(ときに自画自賛や情報操作を目的にしている者も含むとの匿名の編集者ら)執筆がゆえの文責の所在の曖昧さのために「必要以上にそこから言を引けば(教育程度の高い、あるいは、そう任じているとの人間からは)軽侮を



招こう」との媒体とはなるが)——、和文ウィキペディア[ダルダノス]項目に以下のような記述がなされていることから「まずもって」問題視しておく。

---

出典(Source)紹介の部 58

# SOURCE

## 58



ここ出典(Source)紹介の部 58 にあつては

[トロイア創建者ダルダノスが大洪水の生き残りとして知られていることについての基本的解説のなされよう]

についてまずもって紹介しておくこととする

(直下、和文ウィキペディア [ダルダノス] 項目よりの引用をなすとして)

---

古代ローマの著述家ヴェロロによると、ダルダノスはアルカディア地方北部の都市ペネオスの王であつた。しかしペネオスを大洪水が襲つて、人々が高地に追いやられとき、ダルダノスはペネオスの支配を息子デイマスに任せ、自分は人々の何割かを連れてサモトラケー島に移住したという。ジェイムズ・フレイザーは、同地の、洪水の起きやすい土地柄から、こうした伝説が生まれたと述べている。

---

(引用部はここまでとする)

(出典(Source)紹介の部 58 はここまでとする)

上にて言及されていること、トロイア創始者たるダルダノスという男が洪水の生き残りとしてされていることにつきさらに細かくもの出典紹介をなす。

ここでは19世紀末から20世紀初頭にかけて民俗学分野にあつて草分け的なる事績を遺したことで知られている、そう、[斯界の泰斗](その方面での大立者)として知られているとのジェームズ・フレイザー——(同フレイザーについては大学で民俗学や文化人類学をまじめに学んだ人間ならほぼ確実にその名と事績につき知っているといった評価が聞かれるとのレベルでの学者となっているわけだが、そこからして疑わしきにあつてはオンライン上より即時即座に確認いただけるとのウィキペディアなぞの[ジェームズ・フレイザー]にまつわる項目やフレイザー主著の[金枝篇]にまつわる項目から目を通してみたりするのもよからう)—— によって[洪水伝承]絡みの分析もがなされているとの著作、

### Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law (1918年初出)

との論稿よりの引用をもなしておく(：同著作については邦訳版として英文学者の(故)星野徹の訳(全訳ではなく抄訳)になる『洪水伝説』(国文社)が出されており、筆者はそちら訳書および原著の両方ともどもに目を通して)。

---

出典(Source)紹介の部 58(2)

# SOURCE

## 58(2)



こちら出典(Source)紹介の部 58(2)にあつては

[人類学分野の泰斗たるジェームズ・フレイザーがいかにしてトロイア創建者ダルダノスが洪水より逃げのびたと解説しているのか]

について紹介することとする。

(直下、ジェームズ・フレイザーの洪水伝承蒐集論稿たる Folk-lore in the Old Testament:

---

「アルカディアの高地帯にあった故郷から、移住者ダルダノスはサモトラケ島へと移っていたと言われる。一つの説明によると、彼は筏に乗ってそこへ漂っていった。だがもうひとつの版の伝説によると、大洪水がアルカディアでなくサモトラケにおいて彼に追いついたので、彼は空気でふくらせた皮袋に乗って避難し、海面を漂ったあげくにイーダ山に上陸して、その土地に彼はダルダニア、またはトロイアを建設した」

---

（引用部はここまでとしておく —※— ）

（※上は抄訳（部分訳）とのかたちで和訳されている書籍『洪水伝承』よりの引用となるが、オンライン上の Internet Archive のサイトより（部分部分文字化けなどしている箇所もあるが）テキスト情報を確認でき、また、原著をそのままスキャンしての PDF 版もオンライン上のサイトより入手できるとのフレイザーの原著 Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law の上と対応するところの原著記述の引用もなしておく（以下、Folk-lore in the Old Testament にての p.167、CHAP. IV GREEK STORIES OF A GREAT FLOOD（第四章 [大洪水にまつわるギリシャ伝承] の部）の内容を引くとして）“ From his home in the highlands of Arcadia, the emigrant Dardanus is said to have made his way to the island of Samothrace. According to one account, he floated thither great flood on a raft ; but according to another version of the legend, the great flood overtook him, not in Arcadia, but in Samothrace, and he escaped on an inflated skin, drifting on the whence he face of the waters till he landed on Mount Ida, where he escaped to founded Dardania or Troia. ”（フレイザー原著にては（諸種サイトあたって無償 PDF 版など入手いただければ確認いただけようこととして）フレイザーが典拠としているところの出典も無論、細かくも紹介されている）

（**出典(Source) 紹介の部 58(2)**はここまでとする）

---

直近、取り上げもしたことからお分かりいただけたことだろうが、

[トロイアの創建自体が洪水伝説と結びついている]

とのことがあるのである（：そして、本稿にての**出典(Source) 紹介の部 44-3**および**出典(Source) 紹介の部 44-4**にてスミュルナのクイントゥスの手になる Posthomerica 『トロイア戦記』より原文引用なしながらも先に示していたように [(木製の馬から侵入したギリシャ勢に城門解錠されて内側から住民皆殺しの憂き目に遭った後の)トロイアの末路] も神罰としての洪水にあったとの古文献記述も存在しているため、トロイアという伝説上の都市に関しては「洪水に始まり」「洪水に終わった」都市であったとの申しようもなせるようになっていく —— そのようなことをすべて把握しているとの向きは日本はおろか、[ギリシャ伝承のことが教養として知れ渡った欧米圏]（たとえば、ドイツでは現代でもギムナジウム（大学進学予備門）でギリシャ語学習と同時にギリシャ古典のかなり突っ込んでの学習がなされると聞き及

ぶ)にもあまりいないことか、とも思われるのだが(というのもスミュルナのクイントウスの Posthomerica 『トロイア戦記』の如き文献の当該顛末にまつわる内容が[知識]としてほとんど知られていないように見えるとのことがあるうえに、フレイザーが蒐集・提示しての直近呈示の伝承のこと「も」あまり知られていないと見受けられるとのことがあるからである)、とにかくも、古文献に見るトロイアは「洪水にはじまり」「洪水に終わった」都市であるとの形容がなせる都市ともなっている——)。

だけではない。

トロイア始祖ダルダネスに係る洪水伝承——安楽椅子からであろうとフレイザーが幅広く、深く蒐集・開陳しているとの資料に基づいてのダルダネスに関わる洪水伝承——には黒海洪水伝承「そのもの」との結節点が「濃厚に」存在するとのことがある。

その点、[トロイア始祖ダルダニアは[サモトラケ]から逃げてきたが洪水に追いつかれた]とフレイザーが蒐集・開陳している伝承には語られているわけだが(最前にて引用したところである)、そのサモトラケ島——首がもげた翼もつ女神像【サモトラケのニケ】でも有名なダーダネルス海峡南東にあつてのエーゲ海に抱かれての島——に起因する伝承としてフレイザーは次のようなことをも書き記している。

---

---

出典(Source)紹介の部 58(3)

# SOURCE

## 58(3)



ここ出典(Source)紹介の部 58(3)にあつては

[人類学分野の大家として知られるジェイムズ・フレイザーがサモトラケ島に伝わる黒海  
界隈の洪水伝承のことを自著にて紹介している]

とのことにまつわたるの典拠を挙げることにする。

(直下、ジェイムズ・フレイザーの洪水伝承蒐集論稿たる Folk-lore in the Old Testament:



(洪水にあたって) 生存者は高山に逃げのびたということだった。

…(中略)…

この高山があるためにいまでもサモトラケ島は北エーゲ海の最も目立つものの一つとなっており、よく晴れた日にはその山々がトロイアからはっきりと見えるのである。海は逃げのびていく彼らをなおも追いかけてきたので、彼らは神々に救ってくれるようにと祈った。そして救われると島の周囲に、ここから自分たちが救助されたのだというしるしの境界線をつくり、また祭壇を築いてのちのちまで欠かさず犠牲を捧げてきた。

…(中略)…

サトモラケ人が、氾濫を引き起こした原因だと考えたものは、非常に注目すべきものであった。彼らによれば、大変動は豪雨のためではなく、黒海と地中海とをそのときまで分離していた障壁の陸地の崩壊によって海が突然異常に隆起したためであった。そのときこの障壁の背後に堰き止められていた膨大な量の海水が許容量を超過して海水自体の力で堰き止めていた陸地に水路を切り開き、いまではボスポラス海峡とダルダネス海峡として知られる海峡をつくった

---

(引用部はここまでとする —※— )

(※上の訳書よりの引用部についてはフレイザー原著、Internet archive のサイトなどより現行テキスト情報として確認でき、また、PDF 版もネット上サイトより入手できる(要するにインターネットを通じて全文確認できる)とのフレイザーの原著 **Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law** にあってはその p.168 の内容、“The causes which the Samothracians alleged for the inundation were very remarkable. The catastrophe happened, according to them, not through a heavy fall of rain, but through a sudden and extraordinary rising of the sea occasioned by the bursting of the barriers which till then had divided the Black Sea from the Mediterranean. At that time the enormous volume of water dammed up behind these barriers broke bounds, and cleaving for itself a passage through the opposing land created the straits which are now known as the Bosphorus and the Dardanelles, through which the waters of the Black Sea have ever since flowed into the Mediterranean.” との部が原著にての該当部となっている)

(**出典(Source) 紹介の部 58(3)** はここまでとする)

---

ここまで呈示してきたことの整理をなす。

「トロイアの始祖となったダルダノス(黒海とエーゲ海の境界部に存在するマルマラ海の南端に位置するダーダネルス海峡周辺にトロイアを建立したとされる男)には[大洪水の生き残り]との伝承が伴っており」



「ダルダノスが洪水から逃げた先たるサモトラケ島（エーゲ海にてのトロイア遺跡近辺の地）に伝わる洪水伝承では今日にて隆盛を見るに至った黒海洪水仮説とほぼ同様の内容——黒海が地中海から孤立している存在であったところをボスポラス海峡・ダーダネルス海峡の両海峡を形成するだけの水の氾濫が起こったとの内容——がみとめられる」

とのことがある、「現実問題として」あるわけである（その点、1996年に威力高き説として提唱されたとのことを先述の今日の黒海洪水仮説では地マルマラ海北端の「ボスポラス海峡」のみを形成するだけの「地中海と黒海をつなぐことになる大規模氾濫」が起こったとされているわけだが、伝承では「ボスポラス」および「ダーダネルス」の両海峡を形成するだけの「地中海と黒海をつなぐことになる大規模氾濫」が起こったとされている——[伝承]と[近年呈示の仮説]の間に横たわる相違点についても一応、「後の段で」まとめたの図示をなしておくこととする——）。

以上整理したうえにてさらに述べれば、である。

ゴールデン・バウ（The Golden Bough）、[人間の歴史にあつての[呪術的観点の影響の系譜につきつまびらやかにせんとしたとの論稿]たる同『金枝篇』で令名を馳せていた学究、民俗学・人類学分野の方面での大立者として今日認知されている学究たるフレイザーが別論稿 **Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law** を発表した当時、1918年の時点からして、そして、さらに述べれば、遙か昔から

**[20世紀末(1996年)に提唱された黒海洪水説に相通ずる先駆版的なる説](氾濫の方向性を異にするのだが、黒海界限で大規模氾濫があったとの説)**

が提唱されていた、とのことにまで同じくものフレイザーが言及しているとのことがある（その程度のことからしてオンライン上の情報だけではなかなか特定しづらくなっているわけであるが）。

フレイザーが語るどころとしてサモトラケ人の伝承に限らず、そういう観点がフレイザーの同時代人、そして、古代の史家のレベルで「科学的観点でもって」導出されていたとされるのである（続いての出典紹介部を参照のこと）。

---

出典 (Source) 紹介の部 58(4)

# SOURCE

## 58(4)



[1996年に提唱された黒海洪水仮説と似たり寄ったりのことがフレイザーの同時代人、そして、古代の識者に由来するところとして「科学的に」口の端にのせられていた]

とのことにまつわっての典拠紹介をなすこととする。

(直下、フレイザー著作の邦訳版『洪水伝説』(国文社) 62 ページから 62 ページよりの掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

---

さて、このサモトラケ島の伝承は近代の地質学によってある程度まで確認される。<さほど遠くない時代まで>とハクスレイは言う、小アジアの陸地とヨーロッパの陸地とは現在のボスポラス海峡の位置を横切って地続きになっており、高さ数百フィートの障壁を形作っていたが、これが黒海の海水を堰き止めていた。したがって東ヨーロッパと西中央アジアとの大部分は一つの巨大な貯水池となっていて、貯水池のヘリの最低の部分は、北極洋に流れこむオビ河の現在の南流域に沿って海拔二〇〇フィート以上の高さにおそらく位置していた。この盆地の中には、ダニユーブ河とかヴォルガ河のようなヨーロッパ最大の河や、またかつてはアジアの大河であったオクソス河とかヤクサルテス河が、途中の支流を集めて水を注ぎ込んでいた…(中略)…黒海、カスピ海、アラル海が別々に存在する代わりに、地中海に似たポント・アラル海があつて、…(中略)…ウラル河、またその他の支流の低地帯に沿って、入江やフィヨルドとなりながら伸び広がっていたにちがいない…(中略)…この膨大な貯水池、もしくは広大な内海は、小アジアとバルカン半島とを結ぶ自然の高いダムによって限られ、かつ堰き止められていたが、その海は洪積世まで存在していたように見えるのであり、また侵蝕作用によってダルダネス海峡ができたために、堰き止められていた水がついに地中海への出口を見出したのだが、その海峡の生成は洪積世の末期近くか、あるいはその後のことであつたと信じられる。…(中略)…ここから、東ヨーロッパの住民が、広大なポント・アラルの内海について、そしてまたその内海を地中海から隔離していたダムの侵蝕により、言い換えるとボスポラス海峡とダルダネス海峡との開口によりその海が部分的に干上がったことについて、伝承的記録を保持していたことはありうるだろうと思われる。

---

(国内で刊行されたとの訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※尚、オンライン上より表記テキスト入力でも内容全文確認可能な原著 **Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law** にての対応箇所は p.168—p.169 にあつての “ Now this Samothracian tradition is to some extent confirmed by modern geology. " At no very distant period," we are told, **the land of Asia Minor was continuous with that of Europe, across the present site of the Bosphorus, forming a barrier several hundred feet high, which dammed up the waters of the Black Sea. A vast extent of eastern Europe and of western central Asia thus became a huge reservoir, the lowest part of the lip of which was probably situated somewhat more than 200 feet above the sea-level, along the present southern watershed of the Obi, which flows into the Arctic Ocean.**[ . . . ] At that time, the level of the Sea of Aral stood at least 60 feet higher than it docs at present. Instead of the separate Black, Caspian, and Aral seas, there was one vast Ponto-Aralian Mediterranean, which must have been

prolonged into arms and fiords along the lower valleys of the Danube, and the Volga (in the course of which Caspian shells are now found as far as the Kuma), the Ural, and the other affluent rivers — while it seems to have sent its overflow, northward, through the present basin of the Obi." **This enormous reservoir or vast inland sea, bounded and held up by a high natural dam joining Asia Minor to the Balkan Peninsula, appears to have existed down to the Pleistocene period ; and the erosion of the Dardanelles, by which the pent-up waters at last found their way into the Mediterranean, is believed to have taken place towards the end of the Pleistocene period or later.**[ . . . ]Hence it seems possible that the inhabitants of Eastern Europe should have preserved a traditional memory of the vast inland Ponto-Aralian sea and of its partial desiccation through the piercing of the dam which divided it from the Mediterranean, in other words, through the opening of the Bosphorus and the Dardanelles.”との部位なる)

(直下、続いて、フレイザー著作邦訳版『洪水伝説』(国文社) 64 ページから 65 ページよりの掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

---

サモトラケ人の伝承には、ダルダネス海峡の開口にともなう広範囲な氾濫の現実の記憶が保存されていたと想定する代わりに、この大洪水の物語は昔のある哲学者の推測にすぎぬものと想定する方がいっそう無難なように見える。哲学者は大自然による開口のきわめて緩慢な過程を思い描くことができなかつたので、海峡の起源を当然そのように想像したわけである。実際、紀元前二八七年に逍遙学派の長の地位をテオプラストスから継承した有名な自然哲学者ストラトは、純理論的根拠にもとづいてこの見解を主張したのだが、彼は古代から言い伝えられた伝承だからとして主張したのではなくて、黒海の自然的特徴の観察からその伝承を弁護したのである。彼は膨大な量の泥土が幾つもの大河によって年々黒海に流しこまれることを指摘し、もしボスポラス海峡という出口がなければ黒海は早晩泥でふさがってしまうだろうと推論した。さらに彼は、昔はこの同じ大河が河自体の力でボスポラス海峡を押し通って流れ、それらの河の合流した水量をまずマルマラ海に排出し、次にそこからダルダネス海峡を通して地中海に排出していた、と憶測した。同じように彼はまた、地中海が昔は一つの内海であって、地中海と大西洋との連絡水路については、堰き止められていた水がそれ自体の力でジブラルタル海峡という出口を切り開いてつくったのだと考えた。結果としてわたしたちは、サモトラケ人が大洪水を引き起こした原因だと考えたものは古代の伝承よりもむしろ巧妙な推測にもとづいていたのだろう、という結論を引き出すかもしれない。

---

(国内で刊行されたとの訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※オンライン上より表記テキスト入力誰でも内容全文確認可能な原著 **Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law** にあつての対応箇所は p.170—p.171 に見受けられる “ Hence, instead of assuming that Samothracian tradition preserved a real memory of a widespread inundation consequent on the opening of the Dardanelles, it seems safer to suppose that this story of a great flood is nothing but the guess of some early philosopher, who rightly divined the origin of the straits without being able to picture to himself the extreme slowness of the process by which nature had excavated them. **As a matter of fact, the eminent lationof physical philosopher Strato, who succeeded Theophrastus as phiio- head**

of the Peripatetic school in 287 B.C., actually main-sopher. tained this view on purely theoretical grounds, not alleging it as a tradition which had been handed down from antiquity, but arguing in its favour from his observations of the natural features of the Black Sea. He pointed to the vast quantities of mud annually washed down by great rivers into the Euxine, and he inferred that but for the outlet of the Bosphorus the basin of that sea would in time be silted up. Further, he conjectured that in former times the same rivers had forced for themselves a passage through the Bosphorus, allowing their collected waters to escape first to the Propontis, and then from it through the Dardanelles to the Mediterranean. Similarly he thought that the Mediterranean had been of old an inland sea, and that its junction with the Atlantic was effected by the dammed up water cutting for itself an opening through the Straits of Gibraltar. Accordingly we may conclude that the cause which the Samothracians alleged for the great flood was derived from an ingenious speculation rather than from an ancient tradition.”との部位となる——尚、本稿筆者としては、である。[泥土堆積の力学が発散するとかたちにてボスポラス・ダーダネルス海峡の両海峡が[黒海]⇒[地中海(のエーゲ海方面)]の方向での水の流れにて生まれることになったとの見解を呈していた古代哲学者ストラト(日本で使われる呼称は[ランプサコスのストラトン])が同文の式で[ジブラルタル海峡(ヘラクレスの柱)が[地中海]⇒[大西洋]の方向での水の流れに伴い、[純然たる内海たる地中海]と[大西洋]の結節点となる海峡として開通するとかたちにて生まれることになった]と考えていたと]のことがフレイザー洪水伝承分析論稿にて記述されている(そこだけ切り抜いて再引用なせば、“Similarly he thought that the Mediterranean had been of old an inland sea, and that its junction with the Atlantic was effected by the dammed up water cutting for itself an opening through the Straits of Gibraltar.”との式で記述されている)ことをも意味深くも見ている、すなわち、[ボスポラス・ダーダネルス海峡構築の機序がジブラルタル海峡構築の機序(ヘラクレスの柱構築の機序)と古代哲学者ストラトンによって結びつけられている]ことを意味深くも見ているわけだが、そこにいう本稿筆者が意味深くもとらえるところの理由、[何故なのかの問題]については(長大なる)本稿全体の内容からご判断いただきたいものである——)

(出典(Source)紹介の部 58(4)はここまでとする)

まとめれば、である。

上にて引用なしたところでジェームズ・フレイザーは

[ [ハクスレイ] (注記:こちらハクスレーとは[ダーウィンのブルドック]との異称でも知られるトーマス・ヘンリー・ハクスレー、既にフレイザー著作 **Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law** の刊行時には故人となっていたもののヴィクトリア朝期を通じて英国で影響力を持っていたとの生物学者にして Geological Society of London [英国地理学会]の代表者としての来歴を有しているとの同 Thomas Henry Huxley のことを指している——につき、フレイザーはここにて問題としているところの著作 **Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative**



Religion, Legend and Law にての洪水伝承を扱ったセクション( CHAPTER IV THE GREAT FLOOD; 日本にてその部を切り取っての抄訳がなされての著作もが出されているセクション)の冒頭部(Introduction の部)で自身がそのトマス・ヘンリー・ハクスレーの名を冠してのハクスレー記念講演( the annual Huxley lecture )にて講義をなす榮に与ったとのことを述べてもおり、そうした経緯でハクスレーのことがさして前置きなくに引き合いに出されているとのことが背景としてある—— ) が呈示していた見解]

を敷衍(ふえん・押し広げ)しもするとのかたちにて、

「サモトラケの伝承 ——(本稿にての先行するところの **出典(Source) 紹介の部 58(3)** で紹介したように “ The catastrophe happened, according to them, not through a heavy fall of rain, but through a sudden and extraordinary rising of the sea occasioned by the bursting of the barriers which till then had divided the Black Sea from the Mediterranean. At that time the enormous volume of water dammed up behind these barriers broke bounds, and cleaving for itself a passage through the opposing land created the straits which are now known as the Bosphorus and the Dardanelles, through which the waters of the Black Sea have ever since flowed into the Mediterranean.” (訳として)[大変大変動は豪雨のためではなく、黒海と地中海とをそのときまで分離していた障壁の陸地の崩壊によって海が突然異常に隆起したためであった。そのときこの障壁の背後に堰き止められていた膨大な量の海水が許容量を超過して海水自体の力で堰き止めていた陸地に水路を切り開き、いまではボスポラス海峡とダルダネス海峡として知られる海峡をつくった]との内容を有しての伝承)—— に近しくものところで、

[地質学に依拠すれば、小アジア(トルコ界限)とヨーロッパは今日そこにあるボスポラス海峡がかつて陸地となっていたのかたちにて地続きになっており、その式で黒海は洪積世 ——(注記:洪積世とは一般教養の問題として今より 258 万年前から 1 万年前の期間を指す)—— まで巨大な閉じた内海(海拔 200 フィートに存在しての[ポントス・アラル海])だったと見受けられる。その洪積世にての膨大な貯水池・内海としてのポントス・アラル海に堰き止められていた膨大な水が(侵蝕作用によって)ダルダネス海峡を開通させて地中海に向けて水が流れ込んだ]

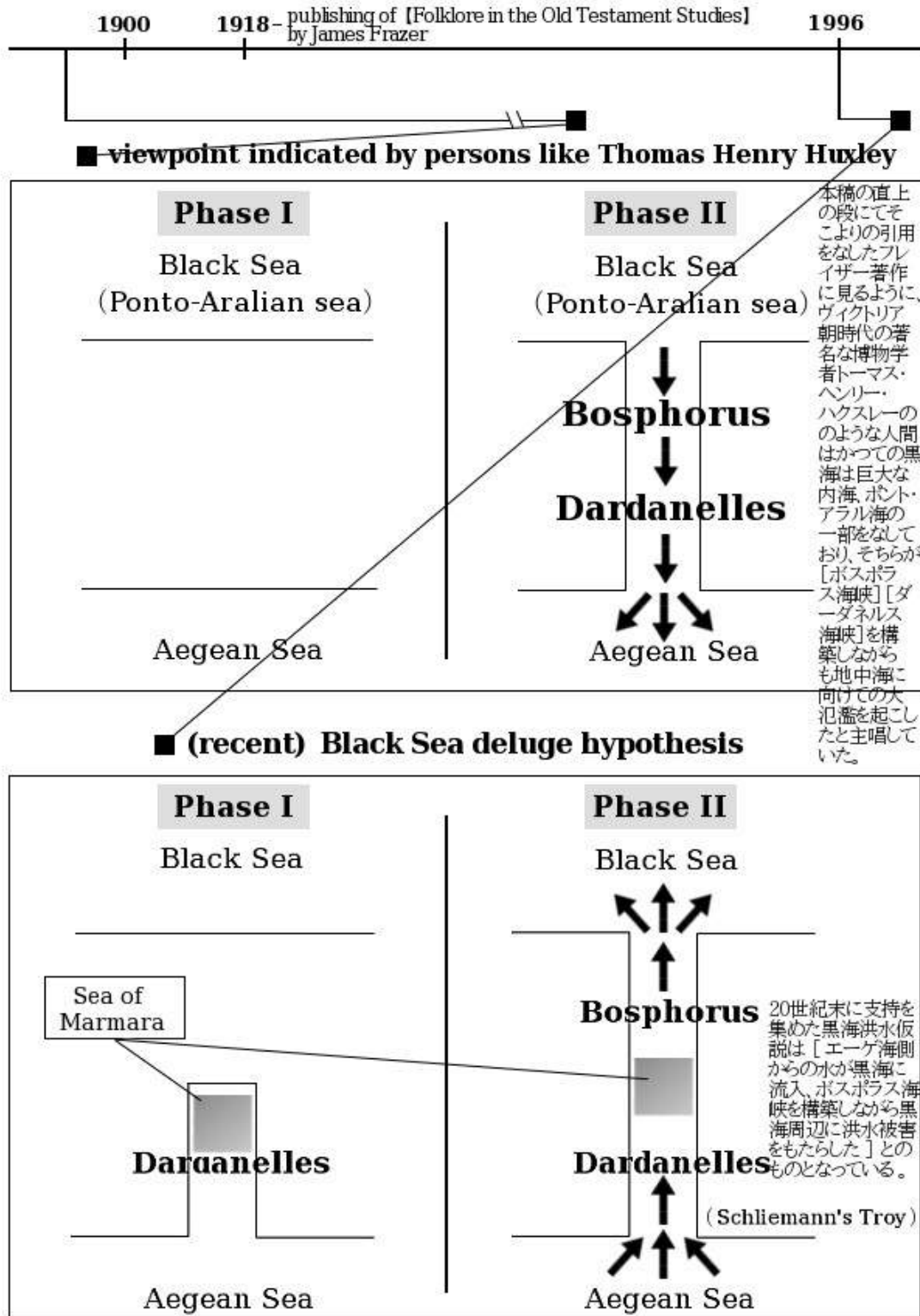
とのトマス・ハクスレーのような人間による見解が存在しているが、同じくもの見解が真を穿っており、それが  
[(そちら記憶を(洪積世のことながら)保持していたかもしれない者達を担い手としての)黒海近辺(トロイア近辺)のサモトラケ島での洪水伝承]の淵源になっていうる (あるいストラトのような古代哲学者が実地観察に基づき呈していたとの見解 ——[黒海は周辺大河からの水流に伴う泥土堆積で放っておけば埋まるようなものであり、といった泥土潮流の勢いのはけ口たる出口が必要であった。そこで地中海に水が流れ込む海峡が構築される結果となった(同じくものことはジブラルタル海峡が地中海と大西洋をつなげるものとして構築されたことにも当てはまる)]との見解—— を同文のものとしてサモトラケ島島民が導きだし、往古洪水の記憶が保持されていない中ながら、島民が後付けで伝承を構築したとも考えられる)

との趣旨のことを述べているのである。

すなわち、今日の[黒海洪水仮説] (くどくもなるが、1996 年に提唱されて物議を醸すに至った仮説)に通ずる見解、そう、「黒海界限にて」「往古、大洪水が発生した」との仮説に「類似」する見解がフ



レイザー当該著作発表時(1918年)より「既に」英国にて呈されていたことを示す「文献的事実」がみとめられるようになってきているとのことがあり、のみならず、そうした見解の淵源は古代世界に求められもすると述べられているのである——※ただし「地中海より水が流れ込むとの氾濫によって黒海が拡大する結果を呈するとの格好でボスポラス海峡が構築された」というのが現代の黒海洪水仮説である一方でハクスレーらヴィクトリア朝期の人間のいよいよの伝では「そこにあった巨大な黒海を包摂する内海が氾濫を呈して地中海に水が流れ込むかたちでボスポラス・ダーダネルス海峡を構築したように見受けられる」となっており、水の流れの方向性はまるきり逆であるとのこともまたある(下図を参照のこと)——。



図は双方ともに「黒海が大洪水に関わっている」との説ながらも内容を異にするとの説ら(片方は黒海サイドから地中海(エーゲ海)サイドに向けての水の流入があり、地中

海サイドにて洪水を見たとのトーマス・ヘンリー・ハクスレーらが呈示していた説、もう片方は地中海サイドから黒海サイドに水の流入があり、黒海周辺にて洪水を見たとの20世紀末に物議を醸すに至った黒海洪水説)がそれぞれ時期的に何時頃から問題になっていたのかを示すために挙げた図となる——細かくは図内の表記を参照のこと——。に関して「問題は、」何にせよ、黒海周辺地域がここ百数十年、近現代の学者らによって洪水と結びつけられるだけの地質学的特色・歴史的特色(サモトラケの伝承の存在などの存在に見る特色)を伴っている場所と見られてきたとのことである。

---

[フレーザー申しようにまつわる付記として]

尚、ここに至るまでそこより事細かな引用をなしてきたとのジェイムズ・フレーザーの手になる **Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law** にあっては次のような言いようもがなされてもいる。

(直下、抄訳版として国内にて流通している『洪水伝説』(国文社)p.175より原文引用をなすところとして)

「あらゆる種類の数多くの改悪や変更は、口誦的伝承が世代から世代へ、国から国へと悠遠な時代を伝達されてくるとき必然的にこうむるものであって、そのことをわたしたちが斟酌したとしても、大洪水に関する雑多な、往々にして奇妙な、子供っぽい、奇怪な幾つもの物語の中に、単一の崇高な原版の人間の手による複写を認めることは、それでもなお困難であると思うだろう。そしてこの困難性が甚だしく増加してきたわけであって、それは『創世記』の崇高な原盤であると思われたものが原版などでは全くなくて、遙かに古いバビロニア版とか、あるいはむしろシュメール版の比較的后代の複写であることが、近代の研究によって立証されたからである。キリスト教擁護論者で、多神教的色彩の強いバビロニアの物語を人間に対する原始的な神の啓示として取り扱うようなひとはいないだろう。また靈感説が原版に通用できないとするなら、その靈感説を用いて複写の物語を説明することもおよそ不可能であろう。

したがって、啓示説とか靈感説を既知の事実と調和しないものとして退けながら、わたしたちがさらに問わなければならないのは、あらゆる洪水伝承の内では確かにバビロニア伝説、もしくはシュメール伝説が、その他のあらゆる伝説を派生せしめたそのもの伝説であるのかどうかということである」

(訳書よりの引用部はここまでとする —※— )

(※尚、オンライン上より表記テキスト入力でも内容全文確認可能な原著 **Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law** にあっての対応箇所は p.170—p.171 に見受けられる “ Even when we have allowed for the numerous corruptions and changes of all kinds which oral tradition necessarily suffers in passing from generation to generation and from land to land through countless ages, we shall still find it difficult to recognize in the diverse, often quaint, childish, or grotesque stories of a great flood, the human copies of a single divine original. And the difficulty has been greatly

increased since modern research has proved the supposed divine original in Genesis to be not an original at all, but a comparatively late copy, of a much older Babylonian or rather Sumerian version. **No Christian apologist is likely to treat the Babylonian story, with its strongly polytheistic colouring, as a primitive revelation of God to man ; and if the theory of inspiration is inapplicable to the original, it can hardly be invoked to account for the copy. Dismissing, therefore, the theory of revelation or inspiration as irreconcilable with the known facts, we have still to inquire**, whether the Babylonian or Sumerian legend, which is certainly by far the oldest of all diluvial traditions, may not be the one from which all the rest have been derived.” との部位となる)

以上抜粋したところに見るフレイザー申しようにあつての、

キリスト教擁護論者で多神教的色彩の強いバビロニアの物語を人間に対する原始的な神の啓示として取り扱うようなひとはいないだろう。また靈感説が原版に通用できないとするなら、その靈感説を用いて複写の物語を説明することもおよそ不可能であろう。したがって、啓示説とか靈感説を既知の事実と調和しないものとして退けながら・・・(以下略)“ No Christian apologist is likely to treat the Babylonian story, with its strongly polytheistic colouring, as a primitive revelation of God to man ; and if the theory of inspiration is inapplicable to the original, it can hardly be invoked to account for the copy. Dismissing, therefore, the theory of revelation or inspiration as irreconcilable with the known facts, we have still to inquire, . . . ”

との部は

「キリスト教隆盛欧州社会にあつての世情・世論の方向を見てなのか、——[曲学阿世(世に阿(おもね)って学を曲げる)]とは言うが——、馬鹿げた申しようをなしている」

ことが露骨に見受けられるところのものとなっている(碩学と表される向きに相応しからぬ、「非論理的 illogical なことこれ限り無し」との意で nonsense なことをいけしやあしやあと述べている、でもいい)。

というのも、表記の部ではフレイザーは

「[神の啓示・靈感が如きもの(あるいはそれに仮託されうる力学)が作用しているとの論理]を「キリスト教擁護論者がバビロニアの宗教も自分達と同じ神の恩寵を受けていたとは考えたくないものだから」棄却し(dismissし)話を進めるとして」

と述べている(と強くも解される)わけが、それは

**[[宗教的)願望]の類で[可能性論]の方向性を選び分けることを首肯する物言い]**  
**[自分が宗教の徒の内面に譲歩するような、科学的「ではない」人間であることを肯定する物言い]**

となつてのものとなつて判じられるようなものだからである ([自身の願望]と[事実]とを混同するような物言いをなすのは ——そういう下らぬ輩でこの下らぬ、救いようもないように見える世界は充満しているわけだが—— 狂人と愚者だけであ

ろう。また、狂人と愚者の論理が世界を牛耳っていることを知った上でそれに準拠して、それに忠実たらんとしたものと言うのは学者でも何でも無い、[ただの望ましからぬシステムの宣伝マン]と自らを規定してのやりようと言えるであろう)。

上のように述べたうえで強調するが、ジェームズ・フレイザーが時代背景よりか、他の事由でなのか、遠慮をなしているはずから言明している[宗教的人種]らが決して認めようとしないうところに、そう、

[狂った人間(話が通じぬとのことで述べれば、人間「未満の」[機械]Robotのような類と化しているといった者達)らを含めての我々の生きる世界がどういったものでどういった方向性と結びついているかの寓意、宗教「的」狂人らが相応の心性で地に頭をつけて永年、崇め敬ってきた、ないし、怖れてきた存在に由来するが如くの(天から降ってきたのか、あるいは、地獄から湧いてきたのかといった不可思議さを呈しつつもの)酷薄無情な寓意]

が含まれているとの解釈が自然に導出できるようになっていることを「根拠主導方式」で問題視しようというのがこの身、そして、本稿であることをここにて断っておきたい。

この身、筆者はジェームズ・フレイザー著作などを引用しはするが、その主張を全面的に容れているわけではないとしつつも、そのようにここにて断っておきたい次第である(述べておくが、筆者は神託・靈感がかつた作用で【人形】・【傀儡】のようになった人間らが相応のことを言い、やるとの可能性をも容れているが、だが、だからといってその理由を非科学的なところには求めていない。であれば、[科学的機序]が当然に作用してそのようになっていると見繕っている)。

(:本稿ではミルトン『失樂園』に見受けられるとの、  
[悪魔の王サタンが開通させ、悪魔の王の擬人化されての妻子たる[罪]と[死]が人間に襲いかかるために用いるとされる通路にまつわる描写]

が

「[どういうわけなのか][今日的な意味で見てのブラックホール「的なる」もの]と多重的かつ複合的なつながりを呈している」  
とのことを問題視している。

につき、そのような「不可解な」ことがさらに類似の要素群と——いかにそのことが奇異奇怪なることなれども——「多重的」・「複合的」に接合しているとのことが示されてしまうとの中であって、そして、さらにもって言えば、その接合関係が[今日の加速実験に伴う命名規則]や[(これまた不可解にも存在しているとの)先の911の事件の予見事象]とも結びつくようになっていることが示されてしまうとの中であって、に対して、宗教的狂人の視野狭窄的なドグマを持ち出すことがいかに愚かなことか、また、とおりひととりの一般的説明を講じようとするのが種族の未来を絶つとの愚挙に通ずるとのことになるのか、理解なしにいただきたいものではある。

尚、宗教的人間が容れることを強いられるとのドグマと親和性強きところについて述べれば、である。本段に至るまで

[『失樂園』にての][罪]と[死]が人間を餌食にするために用い  
ると描写される通路 —アビス横断路— にまつわる寓意]

が

[トロイア崩壊の寓意][大洪水伝承][エデンの失樂園]

を相互に結節させるものであること、そして、そうした結節関係も  
が「奇怪に」CERNのLHC実験にも結線するところのものである  
とのことを問題視しもしてきたわけだが(ここに至るまでの[出典  
(Source)紹介の部 55]から[出典(Source)紹介の部 58(4)]を包摂  
しての部はそのことを示すための前提となる話をなすための部  
でもある)、そこに見る[通路]の開通それ自体が

[神の意志(天の意志)である]

要するに、

[宗教の徒の類が無条件に同意を求められる性質のものであ  
る]

なぞとの書かれようもが問題となる描写を含むミルトン『失樂園』  
の問題となるパートにてなされているとことがある([文献的事  
実]の問題として、である)。

具体的には(本稿にての[出典(Source)紹介の部 55(2)]にて引  
用していたところに包含されるところとなるが)、『失樂園』に  
あつての(岩波文庫『失樂園(上)』p.112より引用するところとし  
て)

「罪」と「死」がすぐに悪魔(サタン)のあとを追い(それが神の御  
意志(みこころ)であったのだ)、その足跡に従って、暗鬱な深淵  
の上に、踏みかためた広い路を敷いたからだ

(引用部はここまでとする — “ Sin and Death amain

**Following his track, such was the will of Heaven, Paved after  
him a broad and beaten way Over the dark abyss, whose  
boiling gulf**との部位、**such was the will of Heaven**” がオンラ  
イン上より確認できるところの原著表記となる—— )

との部がそうである。[神の御意志(みこころ)であった](such  
was the will of Heaven)ならば、時果つるところ、ブラックホール  
に飲まれること(に通ずる先覚的描写)をも許容するのか。といっ  
た者らは騙され、すかさず、挙げ句に殺されるだけだとの「相応  
の」類となろう。冗長となったが、ここではそうしたことについても  
訴求しておく)

[プレイヤー申しようについての付記の部はここまでとする]

---

さて、ここまでに

「1996年に取り上げられたとの黒海洪水仮説、それと「ほぼ」同様のもの(黒海が氾濫し  
て大洪水伝説らの源泉となっており、また、の中で海峡が形作られていたといったとの



物言い)が現実として今より1世紀も前、フレイザーの活動年代より一部で既に問題視されていた」

とのことを[文献的事実]の問題として指し示した。

また、の中では、

「黒海近辺の洪水は[トロイア伝承]と結びついている、しかも、[サモトラケ島の伝承]と[古代の学徒の物言いのレベル — 古代哲学者ストラト(ランプサコスのストラトン)の物言い— ]にて示される古代人の見方のありようのレベルで結びつくような素地があるものである」

との申しようが20世紀初頭にてジェイムズ・フレイザーによってなされていたとのことの指摘をもなした。

何故、そのように黒海洪水仮説の由来について延々取り上げてきたかにつき「顧みながら」述べれば、である。(人によってはくどくも響こうが)[以下、続けて述べるようなこと]があるからである。

(これより取り上げるような「さらにも、」のことがあるがためにせんだって指摘してきたところをまとめて、再度、摘示するとして)

「ジョン・ミルトン『失樂園』にあつて描写されている[罪と死が利用する通用路]が[トロイア崩壊伝承]と結びつくような側面がある。

ミルトン『失樂園』にあつての[罪と死が利用する通用路]の構築にまつわるパート — 要するに[本稿先立っての段でブラックホールの質的特徴と接合するものであることを示してきたもの]の構築にまつわるパート— で

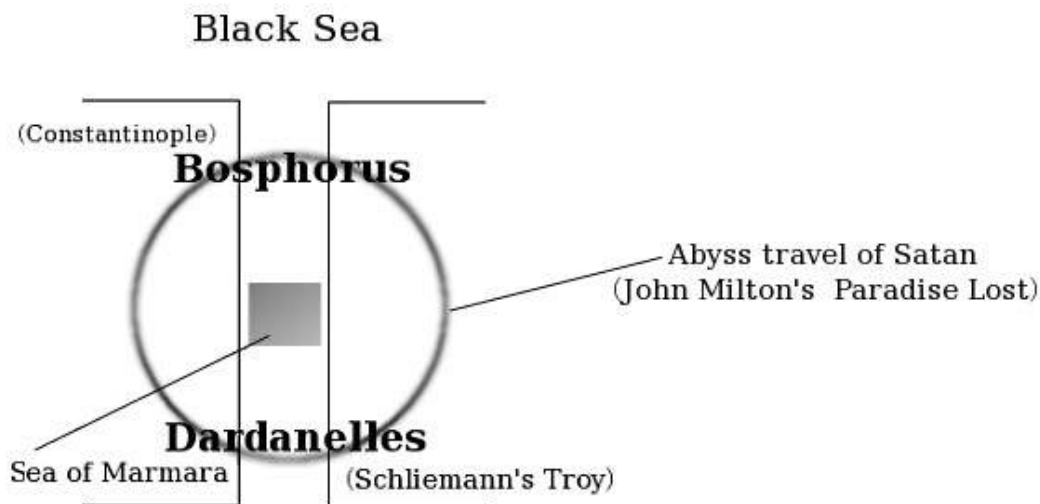
「南端の海峡(ダーダネルス海峡)と共にトロイア比定地近傍となるマルマラ海を形成するもう一方の北端の海峡(ボスポラス海峡)のことが『失樂園』アビス横断路構築の苦難を表する下りの中で言及されている」

「トロイアに木製の馬で引導を渡したとの武将オデュッセウスの渦巻きの怪物(カリュブディス)との遭遇エピソードのことが『失樂園』アビス横断路構築の苦難を表する下りの中で言及されている」

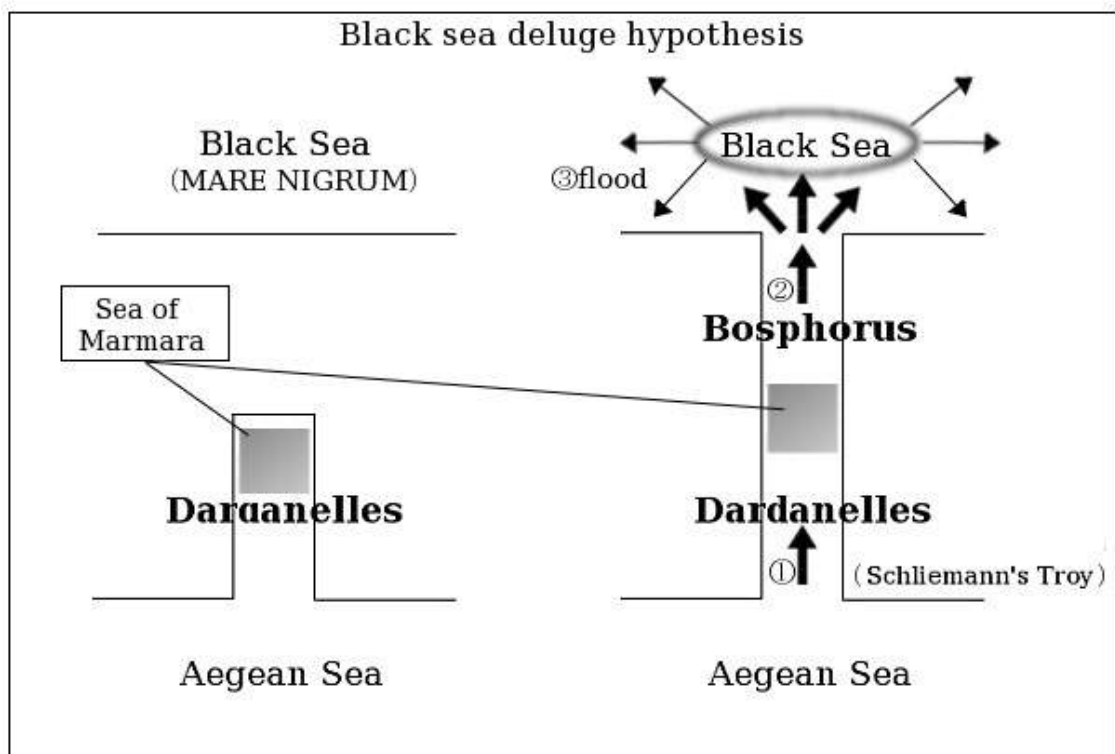
「トロイア比定地近傍のダーダネルス海峡(ヘレスポントス/トロイア創設者ダルダニアに命名由来を持つ海峡)のことが『失樂園』アビス横断路構築のすさまじさを表する下りの中で言及されている」

「トロイアの存在地とされるダーダネルス海峡近傍で具現化を見たとされる古代史上の出来事 — クセルクセス王の船橋構築 — のことが『失樂園』アビス横断路構築のすさまじさを表する下りの中で言及されている」

との意味合いで[トロイア関連事物]と接合する(『失樂園』にてのサタンの飛行経路とサタンに引き続いての横断路の構築過程が【(地理的ありようとして)ボスポラス海峡とダーダネルス海峡を突き抜けるプロセス】として描写されているとのことが「ある」(そちらプロセスは黒海洪水「伝承」および黒海洪水「仮説」の海峡構築プロセスと重ねあわせられるようなものである)。そして、のようなことがトロイア関連事物としての色彩をも帯びている—サタンの飛行がトロイアを滅ぼした男(オデュッセウス)の苦難の航海と重ねあわせられているからである—)。



### Aegean Sea



黒海洪水仮説はエーゲ海より黒海に流れ込んだ水が黒海を氾濫なさせしめ周辺に洪水伝承にあるような被害を発生させたとの仮説である

それにつき、

「ミルトン『失樂園』にあって[[トロイア(比定地)]]と多重的に結びつけられているとの[[罪]と[死]の通用路]にまつわるパートは[エデンの林檎による誘惑の結果に係るもの]として描写されているわけだが、そのこと —[トロイア(比定地)]と[エデンの誘惑]の結果が結び付けられていること— と

[トロイア崩壊伝承がアトランティス伝承と結びついているとの見立てがなせる「ようになっている」こと]

及び

[アトランティスと同一視されてきた[黄金の林檎の園]が[エデンの園]と結びつくと見立てがなせる「ようになっている」こと]

が結節し、

### [関係性の環]

が描けるようになっており、そのために、[不気味さ]が際立つ、とのこともある」

「(そして、さらに、)その[不気味さ]が[現実的なる危険な兆候としての重大なること]と結節するところとしてミルトンの古典の当該描写部 ——[[罪]と[死]の通用路]にまつわるパート—— がブラックホールの科学的特性と結びつくこと、また、ブラックホール生成挙動ともされる CERN の LHC 実験が[アトランティス寓意][トロイア寓意]と結びついているとのことがあり、関係性の多重性度合いが(そこからして)際立つとのこともある —— 出典(Source)紹介の部 35 から 出典(Source)紹介の部 36(3) を包摂する部を参照のこと —— 」

以上、述べた上で書くが、同じくも振り返っての表記・整理するための話として次のことをも表記しておくこととする。

(くどいこととは考えるが、読み手に咀嚼なしでの理解を求めたいため、重複しての申しようを分割して段階的に直下なすとして)

「トロイアそれぞれのものが往古より洪水伝承と結びつき、その洪水伝承とは[ボスポラス・ダーダネルス洪水伝承]にして[神の粛清としてのノアの往古の洪水]と関わるとの[解釈論]が出てくるようなものである」(少なくとも各地の洪水伝承を蒐集してまとめているとの論稿、引用をなしてきた Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law との論稿に見る ジェイムズ・フレイザーが 20 世紀前半にて呈示の観点からしてそういうところがあると窺い知れるし(出典(Source)紹介の部 58(3)および 出典(Source)紹介の部 58(4))、また、洪水水流の流れる方向は逆としているものだが、似たようなことが 20 世紀最後の方にて科学的論拠を具備するかたちにて目立って提示されてきた現代版ブラック・シー・デリュージ・ハイポセシス、[黒海洪水伝承]にも当てはまるとのことがある(出典(Source)紹介の部 57)にてニューヨークタイムズに見る If a memory of the Black Sea flood indeed influenced the Gilgamesh story, then it could also be a source of the Noah story in the Book of Genesis. Scholars have long noted striking similarities between the Gilgamesh and Genesis flood accounts and suspected that the Israelites derived their version from the Gilgamesh epic or independently from a common tradition that might have stemmed from a real catastrophe long before. (訳として)「仮にもし本当に黒海にての洪水の記憶がギルガメシュの物語に影響を与えているのだとすれば、それはまた聖書創世記に認められるノアの物語の源泉ともなりうる。学者らはギルガメシュ(の物語)と『創世記』の洪水への言及の間に横たわる衝撃的類似性につき長きにわたって着目してきたし、また、イスラエルの民らがギルガメシュ叙事詩から彼らなりのそれ(洪水伝説)を作るために奪うことをなしたのではないか、あるいは、イスラエルの民が遙か昔に生じた現実の壊滅的事態に端を発する共通の伝承から各々独立に彼らの洪水伝承を構築したのではないか、と疑いもしてきた」(引用部はここまでとする)との書かれようを引いているところである))

「[ノアの大洪水]に聖書の時系列上では先立つものながら、同じくも[神の粛清]にまつわることとなる[エデンの園からの追放]を主要なるテーマとしている(楽園追放を主要なるテーマとしている)とのミルトン『失楽園』特定パート(ルシファーがアビスを横断、エデンの園にて暮らしていた新発の人類に林檎でもってしての誘惑をなしたとのパート)にて[トロイアの崩壊伝承と通ずるエピソード]が持ち出され、そこにては[黒海洪水伝承][黒海洪水仮説]の内容と結びつくものである

特定ワード「ら」が「それと明示せずにも隠喩的な式で」「複合的に」持ち出されているようなところがある——具体的にはサタンが[妻子たる罪と死の餌食に人間を供する道]を拓いたとの部にあつて[アケメネス朝の王クセルクセスがアジアとヨーロッパを結ぶかたちでボスポラス海峡(黒海洪水伝承・黒海洪水仮説の舞台)に船橋を掛けようとしたことへの言及]がなされている(出典(Source)紹介の部 56(2))、[洪水にて漂流してトロイアに辿り着いたとされるの式で洪水伝承と結びつくダルダノス王の地(ボスポラス南方にてのトロイア創建の地)たるダーダネルス海峡と同義のヘレスポントス海峡に対する言及]がなされている(出典(Source)紹介の部 56)、[後日譚(Posthomeric)『トロイア戦記』に見る後日譚)では攻囲勢も戦後の帰路にてことごとく[洪水]に呑まれたとの帰結が語られているトロイア戦争、そのトロイア戦争に木製の馬で決着をもたらした謀将(オデュッセウス)が帰路にて際会した渦巻きの怪物カリュブディスへの言及]がなされている(トロイア戦争の勝者となったオデュッセウス一行らはカリュブディスに飲み込まれてオデュッセウスを除き海の藻屑と消えたと伝わっているわけだが、それと同様の帰結、洪水や渦巻きによって海の藻屑へと消えるとの帰結が他のギリシャ勢にももたらされたとの描写がなされるのが『トロイア戦記』という先に引用をなしたところの古文献である)との部がそうなる——。にまつわってはミルトン古典では(悪魔の王とその妻子たる[罪]と[死]が)[通用路を構築・切り開く]とのパートでボスポラス海峡・ダーダネルス海峡への言及がなされているわけだが、黒海洪水伝承では黒海洪水にてボスポラス海峡・ダーダネルス海峡の両海峡が「切り開かれ」「構築された」ことになっており、他面、近年物議を醸した黒海洪水仮説では地中海(エーゲ海)サイドより水位差を呈していた黒海に水が流れ込みボスポラス海峡が構築されたとされているとのことが一致性を呈している」

「問題となるミルトン『失樂園』特定パートは現代的な理解で見るブラックホール類事物を見出せるとの部位となっているが(再三再四述べるが、先の段、出典(Source)紹介の部 55から出典(Source)紹介の部 55(3)を包摂する箇所にて詳述のことである)、[トロイア伝承にまつわる記述]および[黒海洪水伝承を想起させる「ような」記述]とそうしたパートが結びついていることはブラックホールの人為生成をなしうるとされる CERN の実験が[洪水絡みのアトランティス伝承]それそのものや[洪水絡みの伝承ともつながるトロイア崩壊伝承]それそのものの寓意と結びつくような格好で(どういうわけなのか、実験機関がアトランティスやトロイア関連事物を実験関係の命名規則に採用しているとの格好で)実施されていることを想起させ、多重的接合性を感じさせもするところである(：出典(Source)紹介の部 35から出典(Source)紹介の部 36(3)を包摂するパート、出典(Source)紹介の部 46を包摂するパートを参照のこと。CERN はトロイア崩壊の原因となった黄金の林檎の在所を知る巨人として神話が語る巨人たるアトラスを検出器や実験グループの名前に転用し、検出器アトラス ATLAS のイベント・ディスプレイ・ツール「アトランティス」ATLANTIS でブラックホールを特定できるなどときに主張しながら「実験」を推進してきたし、また、同実験ではトロイアを滅ぼした謀将(オデュッセウス)が際会した渦潮の化け物カリュブディス、ミルトン『失樂園』の問題となるパートでも登場するその渦潮の化け物の名を冠するブラックホール・イベント・シュミレーター CHARYBDIS を用いたりもしている、そうしたことらにつき本稿では唯、事実のみに依拠しての呈示をなしている)」

(整理のための部はここまでとする)

上にて整理のための記述をなしたところで、続けて関係の多重性が尋常一様ならざるものを示すための話を「さらにもって」なすこととする。

さて、識見と判断力に恵まれ、なおかつ、ここまでの内容をきちんと読まれているとの人間ならば分かることか、と思うところとして、ここまでの話には[新たな反論]を「さらに」呼ぶような側面がある。

(黒海洪水仮説に通ずるところとしての)[黒海洪水伝承]のことを取り上げ、同[黒海洪水伝承]のようなものとの絡みでミルトン『失樂園』が

[ギリシャ勢と大戦争を演じての中での(ギリシャ勢を巻き込んでの)アトランティスの地震と洪水による最期 —— 出典(Source)紹介の部 36]にて引用なしているとのプラトン『ティマイオス』表記内容—— ]

[始原期および末期ともに洪水と結びつくトロイア、ギリシャ勢と大戦争を演じた後に(ギリシャ勢を巻き込んで)完全に洪水により洗い流されたとのトロイアにまつわる伝承 —— 本稿にての出典(Source)紹介の部 44-3]で取り上げているスミュルナのクイントスの古典に見る申しよう—— )]

の双方とつながる節があるとのことはここまでの内容で指し示したきたつもりだが(少なくとも世間人並みの理解力と理解なさんとする意思を有した人間には[黄金の林檎]と[エデンの禁断の果実]を媒介項にしてそういうことが指摘できるようになっていることが当然に理解できるであろうのかたちにて指し示したつもりだが)、 といった話からして、

「常識で説明が付き難い不可解な関係性が「本当に」そこに存在していると述べられるか。そして、であったとしても、その関係性が我々の生き死にの問題に関わるものと言えるのか」

との疑念を強くも前面に押し出すような向きから次のような新たな反論が出されることになりうると見ている。

(LHC 実験にあつてのブラックホール生成問題のことを敢えても脇に置いておいてもものを見たうえで)

『ミルトンの時代にあつてからして黒海洪水伝承のようなものが ——あるいは「トロイア」それそのものと関わるところかもしれぬ式で—— 文豪ミルトンの耳に届くような形で流布されていた可能性もある (：出典(Source)紹介の部 58(4)にて抜粋のフレーザー論稿の抄訳版、『洪水伝説』(国文社)p. 65 内の記述を再引用との形で引けば、(再引用なすところとして)紀元前二八七年に逍遥学派の長の地位をテオプラストスから継承した有名な自然哲学者ストラトは、純理論的根拠にもとづいてこの見解を主張したのだが、彼は古代から言い伝えられた伝承だからとして主張したのではなくて、黒海の自然的特徴の観察からその伝承を弁護したのである。彼は厩大な量の泥土が幾つもの大河によって年々黒海に流しこまれることを指摘し、もしボスポラス海峡という出口がなければ黒海は海盆は早晚泥でふさがってしまうだろうと推測した(再度の引用部はここまでとする)との申しようがなされている、すなわち、「実際に」紀元前3世紀(B.C.287)からして黒海洪水説がギリシャの哲人に顧慮されていたことを学究フレーザーがその20世紀前半に出された論稿内で言及しているといった事情がある)。

であるから、そういう伝存しているところの伝承の内容をも顧慮したうえでミルトンという男が「わざと」黒海近辺への言及を『失樂園』にてなすことでトロイアの比喩を ——それが洪水伝承がらみのものであることについては一切言及せず、だが、しかし、隠喩的には洪水伝承絡みのものであるとの認識でもって—— 込め、それでもってして、神の肅清にまつわる樂園追放、罪と死の人間への襲い掛かりにまつわるエピソードの装飾とし



たのではないか?』

以上のような[ありうべき反論]を新たに呈示すると、17世紀、文豪ジョン・ミルトン(1608－1674)の時代の人間が関与しての、

[隠喩(メタファー)使用に対する「注力」度合い]

を過度に買い被っての物言いをなしているようにとらえる向きもおられるかもしれないが、

[そういうことも[ありうる]のではないか]

との式で批判者が知恵を絞って反論をなすとの局面を想定、そうした反論を徹底的に斥けることが可能であるとのかたちにての立論を本稿では試みており、

[黒海洪水説に対するミルトン(の同時代人)のありうべき認知の程度]

を持ち出しての上のような[ありうべき反論]をも容易に斥けられる方向での話をこれよりなしていく所存である(そこまでするとのやりようを取っているのはこの身に[生き死にに関わる話を証拠主導方式でなしているとの自負と責任感]があるからである)。

さて、別観点から導出されよう反論、ここでの話が常識論にて片付けられ、我々の今後の問題に関わることはないとの納得に通ずるとの反論としての、

『ミルトンの時代からして [黒海洪水仮説に見るような申しよう] が 一場合によっては [トロイア] それそのものと関わりどころとして— 文豪ミルトンの耳に届くような形で流布されていた可能性もある(フレイザーが蒐集・呈示しているようなサモトラケ島のそれに見るような洪水伝承が(再発見されるとの式ではなく)残置し、かつ、通用性を伴っていた可能性がある)。

それゆえ、ミルトンが「わざと」黒海近辺の比喩を、トロイアの比喩を、—それが洪水伝承がらみのものであることについては一切言及せず、だが、しかし、隠喩的には洪水伝承絡みのものであるとの認識でもって— [神の粛清]にまつわる樂園追放、罪と死の人間の領域への来襲にまつわるエピソードに塗(まぶ)したのではないか』

とのありうべき見解には

[物事の奇怪性がより露骨に示されるところである(『失樂園』著者のミルトンのありうべき識見の豊富さでは説明がなせないような奇怪性が示されるところである)]

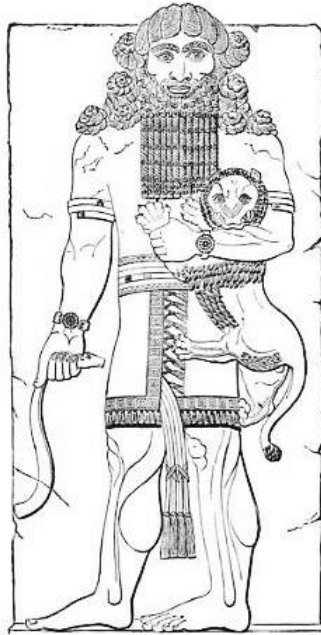
との再反論が呈示可能となっている。

その再反論として引き合いに出したいのは 一唐突と見られるところかとも思うが一

[ギルガメシュ叙事詩] (の細かき内容およびそこから指摘出来るようになっている事柄ら)

である。

これ以降は(直上にて言及の)『ギルガメシュ叙事詩』というものがいかようなものなのか、そして、(古代にて産み落とされたものであるとの)同叙事詩が何故、ここまでの指し示しとの絡みで問題となるのか、多重的に意をなすのか、とのことについての解説に入ることとする。



**Gilgamesh**

19世紀後半にてもものされた著作にして Project Gutenberg のサイトにて図葉込みに全文入手できるとの著作、**The Chaldean Account of Genesis** (『聖書・創世記に対するカルデア文明に依拠しての説明』とでも訳すべきタイトルの著作)に見るギルガメシュ似姿 ——正確には発掘されたレリーフに似姿描かれたギルガメシュを模写したもので( The Chaldean Account of Genesis の中では) Gilgamesh との名称ではなく、それ以前に用いられていたところの Izdubar との名称が用いられている——。これより問題視するのは上のように太古メソポタミア遺物に姿を彫られているギルガメシュと関わる洪水伝承が「奇怪にも」ミルトン『失樂園』内容とも相通じるところがある、そして、黄金の林檎に関わるヘラクレス第 11 功業と複合的に接合するようになっているとのことである。

『ギルガメシュ叙事詩』(の細かき内容)を問題視する前にまずもって述べるが、

「通常の間が物事らの間の因果関係を考える上で重視するのは[先後関係]である(べきであるはずである)」

たとえば、ここでの話との兼ね合いで述べれば、

「ジョン・ミルトンが特定洪水伝承を意識して『失樂園』をものしていたというのならば、ジョン・ミルトンが先立ってそちら特定洪水伝承の知識を入手できるだけの先後関係があつて然るべきである」

ということ、「あれなくして、これなし」との関係性が観念されなければならないはずである(そう、[個人に対する自己が与り知らぬコントロールの問題](尋常一様ならざるコントロールでもいい)のようなものが介在して「いない」と観念(仮定)すれば、である)。

以上、因果関係、あれなくしてこれなし、の問題につき触れたうえで、常識的観点で述べれば、

『ギルガメシュ叙事詩』→(同『ギルガメシュ叙事詩』内容をミルトンが(盲目の身ながらも聴覚を介して)直に耳聞目睹(じぶんもくと)し、その直接的影響を受ける)→ミルトン『失樂園』(にギルガメシュ叙事詩類似の内容が入れ込まれる)

との関係性は「成立しえない」と考えられるようになっている。

どういふことか、と述べれば、『ギルガメシュ叙事詩』というものは19世紀に初めて「再」発見のうゑで解読されたもの、アッシリアの王(アッシュールバニパル王)の古代都市ニネヴェの遺跡の粘土碑文との形で19世紀になって「再」発見のうゑで解読されたものであるとされる(がゆゑに17世紀に生きたジョン・ミルトンはその内容を知っていないと自然に判じられるように「なっている」)からである。

その点、19世紀になってはじめて解読され、「聖書の洪水伝承との類似性から物議を醸した」ともされているのがギルガメシュ叙事詩というものなのだが、同叙事詩、次のような発見経緯を伴っているものである。

---

## 出典(Source)紹介の部 59

# SOURCE

## 59



ここ出典(Source)紹介の部 59)にあつては

### [『ギルガメシュ叙事詩』の発見経緯]

についての説明のなされようについて紹介することとする(『失樂園』著者ジョン・ミルトンが[[『ギルガメシュ叙事詩』およびそこに見る筋立てが反映された類似物]の内容を参照できたとは考えられないとのことにまつわる解説に先立って『ギルガメシュ叙事詩』発見経緯について紹介することとする)。については皮相なところながら、オンライン上より即時即座に確認可能な英文ウィキペディア項目にての記載内容を(補いつつも)引くとのことをなしておきたい。

(直下、英文 Wikipedia [ Epic of Gilgamesh ] 項目にての現行にあつての記載内容を引くとして)

---

The Epic of Gilgamesh was discovered by Hormuzd Rassam in 1853 and is widely known today. That first modern translation of the epic was published in the early 1870s by George Smith.

「ギルガメシュ叙事詩は 1853 年にホルムズ・ラムサンによって発見され、今日  
広くも知られるようになったものである。同叙事詩の近代にあつての最初の訳  
は 1870 年初頭にてジョージ・スミスにてなされたものである」

(引用部はここまでとする)

[付記として]

以上、ウィキペディアの記述を引いたうえで申し述べておくが、上の現行にあつての英  
文ウィキペディアの記述内容と矛盾するように「見えも」する情報を呈示している媒体が存在  
している。

については、この身が検討したところの国内にて流通の『ギルガメシュ叙事詩』(岩波書  
店)、同著にて記載されている[ギルガメシュ叙事詩発見の経緯の解説部]にあつての日  
本の学究(月本昭男立教大教授)の申しようが問題となる。

その点、国内で流通している訳本たる『ギルガメシュ叙事詩』(岩波書店)p.283 より原文  
引用すると、

「楔形文字で粘土版に記された『ギルガメシュ叙事詩』(以下『叙事詩』と略  
称)の一部がはじめに発見されたのは一八七二年のことであつた。一九世紀  
半ばから、フランス人およびイギリス人の手によって古代アッシリアの諸遺跡  
が発掘されはじめ、一八五四年には、イギリス隊がニネヴェで、アッシリア王  
アッシュルバニパル(前六六八—六二七年)が建てた図書館を掘り当てた。  
断片を集めると二万枚以上の楔形文字で記された粘土板文書が出土し、そ  
の殆どが大英博物館に持ち込まれた。その十五年後、イギリスの若き研究者  
G・スミス(G. Smith)がニネヴェ出土の書版のなかに、旧約聖書の洪水物語  
に類似した作品を発見したのである。十二の書版からなる『ギルガメシュ叙  
事詩』の第一の書版がそれであつた。その後、『叙事詩』の他の部分も、同じ  
アッシュルバニパル図書館出土文書のなかから次々に発見されていった」  
(引用部はここまでとする)

と記載されており、現況、[欧米圏で流布されている情報]と平仄合わぬように「見える」こ  
とがそこにては表記されている。

すなわち直近引用部に見る、

楔形文字で粘土版に記された『ギルガメシュ叙事詩』(以下『叙事詩』と略称)  
の一部がはじめに「発見」されたのは「一八七二年」のことであつた。「一八五  
四年」には、イギリス隊がニネヴェで、アッシリア王アッシュルバニパル(前 668  
—627 年)が建てた図書館を掘り当てた。断片を集めると二万枚以上の楔形  
文字で記された粘土板文書が出土し、その殆どが大英博物館に持ち込まれ、  
その 15 年後、その中に旧約聖書の洪水伝承に類似の物語が含まれている  
ことが判明した

との記述については一部の実事実係につき現行、英文 Wikipedia に記載されていること  
——「1853 年」に発見された石版が(16 年以上を経て)1870 年代初頭に解説されたと記  
載されていること——と齟齬を含むと「も」とれるものである(『実にもって細かきことを非  
本質的なところで取り上げている』と受け取られるところか、とも当然に思うのだが、時期  
的先後関係を強くも重んじている人間として本稿の後の段にての内容にも影響するところ  
にあつてのそういう曖昧さは望ましくはないとらえている)。

その点、「1854年」にアッシュルバニパル王図書館発掘、ギルガメシュ碑文発見は「1872年」というのが国内解説本の書きよう、に対して、英文 Wikipedia [ Epic of Gilgamesh ] では 1853 年にギルガメシュ叙事詩の未解読版発見、1870 年代初頭に解読との書きようとなっており齟齬があるように「見える」ようにもなっている(アッシュルバニパル王の「発見」と碑文「発見」が 1853 年であり、アッシュルバニパル王の遺跡の「発掘」が進捗し、の中で、叙事詩の解読後にての同定が 1872 年であるとのことが過去の出来事の流れならば、さして矛盾はないのだが(ただし本当にそうになっているかは保証できない)、「見える」の問題として、とにかくも、そういうことがある)。

については、

**THE EPIC OF GILGAMESH A NEW TRANSLATION** (イギリスの老舗出版社ペンギン社より出されている Penguin Classics 版、Andrew R. George というバビロニア学の権威との学者によって訳が付されているバージョン)

にての記載内容が英文 Wikipedia の記述の方と一致しているとのことがある。そして、本稿では直下引くところのそちら欧米にてのそちら方面の専門家申しように前提に立論を進めていくこととする。

(直下、Penguin Classics 版の **THE EPIC OF GILGAMESH A NEW TRANSLATION** の Introduction の部にての Gilgamesh and ancient Mesopotamian literature と付されての xxiii よりの原文引用をなすとして)

The royal libraries of Nineveh were the first great find of cuneiform tablets to be discovered, in 1850 and 1853, and are the nucleus of the collection of clay tablets amassed in the British Museum. They are also the foundation stone upon which the discipline of Assyriology was built and for much research they remain the most important source of primary material. The first to find these tablets were the young Austen Henry Layard and his assistant, an Assyrian Christian called Hormuzd Rassam, as they tunneled in search of Assyrian sculpture through the remains of the 'Palace without Rival', a royal residence built by Sennacherib, Ashurbanipal's grandfather. Three years later Rassam returned on behalf of the British Museum and uncovered a second trove in Ashurbanipal's own North Palace. Rassam is something of an unsung hero in Assyriology. Much later, in 1879-82, his efforts provided the British Museum with tens of thousands of Babylonian tablets from such southern sites as Babylon and Sippar. Neither Layard nor Rassam was able to read the tablets they sent back from Assyria, but of the find he made in what he called the Chamber of Records Layard wrote, 'We cannot overrate their value.' His words remain true to this day, not least for the Gilgamesh epic. The huge importance of the royal libraries found at Nineveh by Layard and Rassam first became widely known in 1872 when, sorting through the Assyrian tablets in the British Museum, the brilliant George Smith came across what remains the most famous of Gilgamesh tablets, the best-preserved manuscript of the story of the Deluge.

(訳として)

「ニネヴェの王立図書館のそれは 1850 年から 1853 年にかけての楔型文字の粘土板の最初の発見例となっており、そして、大英博物館に蒐集・集積されることとなった粘土板群の核となっているものである。それらはアッシリア学(アッシリオロジー)分野がそのうえにて定立されたところの礎石であり、それら粘土版らはより進んでの調査のために最も重要な第一線の史料に留まり続けているとのものである。粘土板発見の発端は若きオーステイン・ヘンリー・レイヤードと彼の助手でアッシリア東方教会の信徒であったホルムズ・ラムサン、彼らが

[敵う者無しの宮殿(パレス・ウィズアウト・ライバル)]



すなわち、アッシュールバニパル王の祖父にあたるセンナケリブ王によって造成されたその居住地の遺構を通じアッシリア建造物調査の掘削をなしたことに求められる。

その三年後、両者のうちのラムサンは大英博物館を代表して遺構に戻ってき、アッシュールバニパル王自身によって造成された北面の宮殿より第二の遺物を発掘発見した。ラムサムはアッシリア学における[(世間にて)語られることなき英雄]のような存在になったのだ。それよりかなり後の1879年から1882年、彼ラムサムの努力は大英博物館にバビロニア、シッパルのような南方の発掘地に由来する「数万点の」バビロン粘土版を提供することになった。レイヤードおよびラムサムらは双方ともに彼らがアッシリアより後送したそれら碑文を読み解くことができなかつたわけだが、彼が[記録区画]と呼んだところにて発見したものに対してレイヤードが書いていたところは「我々はそれらの値打ちを過剰評価することができない」とのものであった。そうもした彼の言葉は『ギルガメシュ叙事詩』を除外する限り今日に至るまで真たるものに留まっている。ニネヴェにてレイヤードとラムサムによって発見された王立図書館のとてつもない重要性は1872年、大英博物館の整理作業の折、才気溢れるジョージ・スミスが極めて保存状況の良いギルガメシュ関連の[洪水伝承]関連の最も有名な粘土版にたまたまか出会った折に広く知れ渡るようになった

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※—)

(※バビロニア学の権威とされる Andrew R. George に由来する『ギルガメシュ叙事詩』の現代英訳版、その解説部にあつての申しようを引いてのここ引用部では[19世紀中葉になってニネヴェにて発見された粘土版の値打ちは1872年にギルガメシュ叙事詩が洪水伝承関連のものとして訳出されるまで発見者にすら控え目に表されていた]とのことが記述されている、すなわち、ギルガメシュ叙事詩の内容が(解読によって)知れ渡るようになったのは1872年以降であることが記述されている——さらに一例を挙げれば、英国の大衆日刊紙ガーディアンのサイト([theguardian.com](http://theguardian.com))の中の書評紹介ページ、タイトルに Fragments of majesty | Books | The Guardian と付されたページによると、It wasn't until 1853 that the first fragments were discovered among the ruins of Nineveh, and the text wasn't deciphered and translated for several decades afterward. (訳として)「ニネヴェの(王立図書館の)遺跡から碑文が発見されたのは1853年が初であり、そのテキストが解読・翻訳を見たのも数十年を経ての後のことである」と記されており、なんにせよ、「問題は、」今日われわれが確認できるギルガメシュ叙事詩の中身を確認できるようになったのは一八七〇年以降であるということである——)。

(付記の部はここまでとする)

(出典(Source)紹介の部 59 はここまでとする)

さてもってして、

『ギルガメシュ叙事詩』(19世紀中葉以降に発掘されたとのもので1872年にその洪水伝承関連の内容が解説されるに至ったとされるもの)→(「直接的」影響を及ぼす)→ミルトン『失樂園』

との物言いは常識的の手柄でなせるようなことではない(：「常識の通じぬところについての話」)に関しては、である。日本のネット上などにて往々にして「目立つ」ようになっている一群の相応の人間ら——大学院生の数学談義に[小学生並みの算数知識](慣性の法則の作用を知らずに天動説に固執する人間が地動説を一切容れないといった[思考の幅]、宗教勢力(カルト)の人間に宗教(カルト)教義と矛盾する方向を一切合財否定せんとする力学の中で許された[思考の幅]などとしてもいいが)でずかずかと入り込んで、わいわいがやがやと騒ぎ立て、適正解を求めようとの流れを台無しにしようといった筋目の相応の類らでもいい——が[都市伝説]や[噂話]といったガラクタ(ノイズ)を「物事を変えられない(ようにする)方向にて」「有害にも」流布するといったかたちでそちら[常識の通じぬところの議論]を占拠占有せんとしている節「も」ある。といった[常識の通じぬところについての話]にまつわる世間的事情というものを見たいうえで書くが、「何かと缺は使いよう」ともいった確信犯的なやりようとも通じるように見えるところでの「悪貨は良貨を駆逐する」との式での相応の人間らによる情報の流通経路をノイズ撒布にて壟断しようとしているとのその挙とは一線を画するとの式、そう、[知的水準の高き大人向けの話柄で客観的にはきと指し示せる領域]、それでいて、[常識の通じぬところの領域]にこそ、我々人類にとって[向き合ねばならぬ重要事]が存するというを具体的客観的に示すのが本稿趣意となっており、ここでの微に入っただけの話も[そうした方向]に帆を向けるための一手順であること、汲んでいただきたいものである——「ちなみに、」に留まっただけのこととして手前の観察しているところについて述べておくが、広くもの言論動態の問題としては[本稿を公開することにしたサイトの一つ]で従前より公開しているような筆者の別著書(調査に数ヶ月、執筆に三ヶ月をかけたとの『人類と操作』という著作/英国のデヴィッド・アイクという論客のことを「彼の主張は虚偽情報に立脚しているが、重要なところで真を穿っているように見受けられる」とのかたちで留保条件付けながらも高くも評価しすぎたことを反省するに至っているとの著作でもある)が商業出版されようとしていたとのその折あたりから馬鹿噺の類をそうしたものとしてわざとらしくネット上などに流布するとのやりようが国内では「一層加速している」ように見繕っている(2010年年初あたりから馬鹿噺の流布性向が一層拡大している節があると見繕っている)。といった流れを脇目に申し述べておくが、筆者は客観的にはきと指し示すとのかたちで[常識の通じぬ領域]のことを問題視し、それを世の共通認識とする、[世の潮流としての共通認識]とすることこそが今最も必要なることであるはずであると強くも考えながら、本稿をものしている——)。

直上の段にて言われようを引いたところの『ギルガメシュ叙事詩』、『失樂園』執筆のジョン・ミルトンの時代には未だ「再」発見がなされていなかった(それが発見されたのは19世紀である)との同『ギルガメシュ叙事詩』に関しては

### 「ウトナピシュティムという人物にまつわる洪水伝説」

がその断片の部にて含まれていることがよく知られている。

およそ下のような内容のものとして、である。

[ギルガメシュが不死を求めての旅に出た際に不死の秘密を知る、  
[大洪水の選別者にして生き残り —要するにシュメール・アッカド版のノア— のウトナピシュテム]

より[不死の秘密としての不死の靈薬としての薬草]の場所を聞き出す。

だが、その靈薬を入手したところでギルガメシュはそれを蛇に横取りされ、盛者必滅の理の下に生きざるをえぬ状況に追い込まれる(ただし、それは[限りあり命を全うすることの意義を達観しての道に至ることをも意味していた]などとも形容される)]

表記のことについては下の出典紹介部をご覧ください。

出典 (Source) 紹介の部 60

# SOURCE

## 60



ここ出典 (Source) 紹介の部 60 にあつては

[ギルガシュが大洪水の生き残りたるウトナピシュテムから不死の靈薬の在処を聞き出すも取得した靈薬を蛇に横取りされたとの粗筋が『ギルガメシュ叙事詩』に現出している]

このことの典拠を紹介することとする(ジョン・ミルトンが『失樂園』執筆に際して『ギルガメシュ叙事詩』の類似物「すら」目にする機会がなかったと判じられる論拠はよリモって後の段にて詳述するとして、さしあたり、『ギルガメシュ叙事詩』の洪水伝承と関わる下り)につき原典重視のソースよりの引用をなしておくこととする)。

(直下、『ギルガメシュ叙事詩』(岩波書店)p. 135 にてのギルガメシュ叙事詩を収めた碑文のうち、第 11 の書版と振られた出土碑文の内容の要約を扱った箇所(発掘碑文の和訳を書籍で提示しているとの学究が日本語で解説をなしているとの部)より原文引用をなすとして)

[ギルガメシュの懇望にまけて、ウトナピシュテムは自分が神々に列せられた経緯を語って聞かせる。神々が人間を滅ぼそうとして地上に洪水を送ったとき、知恵の神エアの指示により、彼は方舟を建造し、地上のすべてを粘土に帰した洪水からいのちあるものの種を救ったが、洪水を起こしたエンリル神はそれを知って怒った。しかし、最後は、エアに説得され、彼に神々のような不死を与えたのである、と。この後、ウトナピシュテムはギルガメシュに、七日間、寝ずにいる試練を課すが、ギルガメシュはこれに耐え得ない。ウトナピシュテムはギルガメシュを自分の町に送り返そうとする。ところが、同情あふれる妻の言葉があ

り、ウトナピシュティムはギルガメシュに「若返りの草」のありかを教える。この草を得たギルガメシュは勇躍歓喜して、ウルクに戻ろうとするが、途中、泉の水で身をきよめている間、その草は蛇に持ち去られてしまう]

---

(引用部はここまでとする)

旧約聖書『創世記』に見られる、

[[大洪水][ノア方舟]にまつわるエピソード]

と際立っての類似性を呈しているとのことで(新約聖書のみならず先達のユダヤ教から受け継いだ旧約聖書をも重んじているとの)キリスト教が人々の思考の規定し続けてきた欧米圏で取り立てて物議を醸した上記のことと同様の内容を取り上げているとの他のギルガメシュ解説本(欧米権威筋(Andrew R. George)の手になる著作)よりの抜粋もなしておく。

(直下、Penguin Classics 版の **THE EPIC OF GILGAMESH A NEW TRANSLATION** の Tablet XI. Immortality Denied (第 11 碑文要約、[拒否されし不死])の部よりの抜粋として)

---

Gilgamesh asks Uta-napishti how he gained eternal life, and hears how Utanapishti survived the Deluge and was given immortality by the gods as a result. Uta-napishti suggests Gilgamesh go without sleep for a week. Gilgamesh fails the test and realizes in despair that if he cannot beat Sleep he has no hope of conquering Death. Uta-napishti commands his ferryman to have Gilgamesh bathe and dress himself in more kingly garments, and to escort him back to Uruk. Uta-napishti's wife counsels him to give the departing hero the customary present for his journey. Uta-napishti tells Gilgamesh how, deep under the sea, a plant-like coral grows that has the property of rejuvenation. Gilgamesh dives to the sea-bed and retrieves it. He and Ur-shanabi leave for Uruk. Stopping at a welcoming pool, Gilgamesh bathes in its water, and a snake seizes on his inattention to steal the precious 'plant'. Knowing that he will never rediscover the exact spot where he dived, Gilgamesh realizes at last that all his labours have been in vain.

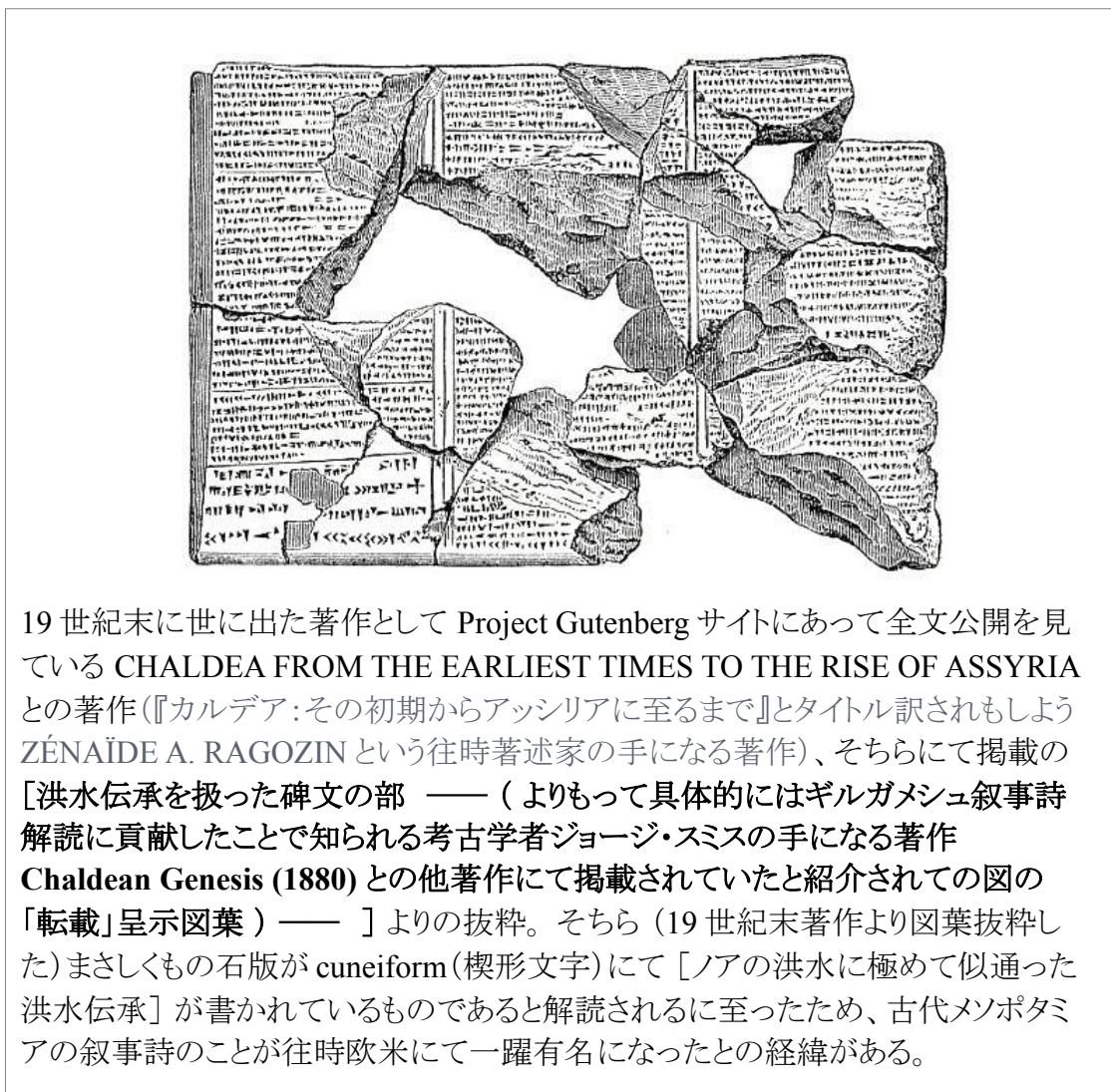
(拙訳として)

「ギルガメシュはウトナピシュテムに彼がいかにして不死を得たのかを尋ね、(の中で)、彼ウトナピシュテムがどのように洪水を生き延び、そして、結果として神々に不死を与えられたのかを聞くこととなった。ウトナピシュテムは(肝要なところの不死の秘訣を聞きたいというならば、とのことで)ギルガメシュに睡眠を取らずに一週間を過ごすことを課した。ギルガメシュはこの試練を成し遂げることに失敗し、[眠りさえも克服できぬというならば、死を克服する希望なぞおよそもちえまい]と失意のうちに悟ることになる。ウトナピシュテムは彼の元で働く船頭に指示し、ギルガメシュに入浴なさしめて(垢を落とさせ)王者の風格にさらにもって相応しき衣服をまとわせうえでウルク(訳注:ギルガメシュが王者として君臨していた都市国家)に送り届けさせることとした。ウトナピシュテムの妻はウトナピシュテムに今まさに出立せんとしている英雄に旅立ちに際しての慣習上の贈答をなすように助言、ために、ウトナピシュテムはギルガメシュに海の奥深くに「若返りの性質を有する草木のような珊瑚」がいかにして生成を見ているかを伝える。ギルガメシュは海底に向けて飛び込み、それを回収する。そのうえでギルガメシュとウルシャナビ(船頭)はウルクに向け出立する。道中、ギルガメシュは心地よさそうな水場を発見、その水につかることとした折、一匹の蛇が彼の意表を突くかたちでかけがえのない「草」を掠め取った。自身が素潜りした海底にあっての(不死の材が生ずる)正確な場を決して再度発見



することができないとのことを悟り、ギルガメシュは結局、彼の努力が水泡に帰したことを悟る」

(訳を付しての引用部はここまでしておく)



19世紀末に世に出た著作として Project Gutenberg サイトにあって全文公開を見ている CHALDEA FROM THE EARLIEST TIMES TO THE RISE OF ASSYRIA との著作(『カルデア:その初期からアッシリアに至るまで』とタイトル訳されましよう ZÉNAÏDE A. RAGOZIN という往時著述家の手になる著作)、そちらにて掲載の [洪水伝承を扱った碑文の部 —— (よりもって具体的にはギルガメシュ叙事詩 解読に貢献したことで知られる考古学者ジョージ・スミスの手になる著作 **Chaldean Genesis (1880)** との他著作にて掲載されていたと紹介されての図の「転載」呈示図葉) —— ] よりの抜粋。そちら (19世紀末著作より図葉抜粋した) まさしくもの石版が cuneiform (楔形文字) にて [ノアの洪水に極めて似通った洪水伝承] が書かれているものであると解読されるに至ったため、古代メソポタミアの叙事詩のことが往時欧米にて一躍有名になったとの経緯がある。

(出典 (Source) 紹介の部 60 はここまでとする)

以上引用なしたのがギルガメシュ叙事詩にての

[ナンバー 11 が考古学関係者に振られての碑文] (タブレット・イェブンと分類されての碑文)

にて主として扱われている内容だが、着目すべきは

「ギルガメシュが洪水伝承と結びつく存在 (ウトナピシュテム) にその在り処を訊き出した不死の靈薬 ([若返りの草; plant of immortality] ないし [草のような格好を呈する若返りの珊瑚 coral of immortality]) を蛇に奪われる」

との粗筋をそこにて見出せることである。



さて、顧みて、(ここまで問題視してきたミルトン『失樂園』がそれを主たるモチーフとしているとの)[エデンよりの追放]に関しては

[次のような表記]

「も」がなせるところとなっている。

「アダムとイヴらは蛇に[禁じられた知恵の樹の実]を食すように唆されてそれを実行したがゆえに神の永遠の樂園であったエデンより追放の憂き目を見た。

その追放の理由につき、神がアダムとイヴが知恵の木の実を食べた際に不死であれば神に近いき存在になってしまうがためそれを忌んでアダムらを罰したとの記述が聖書にみとめられるわけだが( [本稿[出典(Source)紹介の部 54]にもそこより抜粋した日本聖書協会『旧約聖書』創世記第3章 22－24節よりの再度の原文抜粋として] “主なる神は言われた、「見よ、人はわれわれのひとりようになり、善悪を知るものとなった。彼は手を伸べ、命の木からも取って食べ、永久に生きるかも知れない」。そこで主なる神は彼をエデンの園から追い出して、人が造られたその土を耕されせらた。神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎを置いて、命の木の道を守らせた”(引用部はここまでとする))、他面、アダムらはその放逐以前にはエデンの中央に植えられている[知恵の樹の実]以外のすべてを食してもいいと言われていた。

そこには当然に

[生命の樹の実]

も入っていると考えられるようになっている(同様に[日本聖書協会『旧約聖書』創世記第2章 16節－17節よりの再度の原文抜粋として]:主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう(引用部はここまでとする))。

以上の部にあっての聖書の論理構造につき触れるが、

[生命の木の実をすでに食していた存在が新たに知恵の樹まで食べたから不死と知性の両立を好ましく思わなかった神に追放された]→[アダムとイヴは蛇の誘惑にて不死を失った(結果的に蛇によって不死を奪われるかたちとなった)]

との関係式が導出されるところである( :申し述べておくが、そういうものを見方をなすのは無論、筆者だけではない。たとえば、Project Gutenberg のサイトにて全文ダウンロード出来るとの19世紀著作、**Plant lore, legends, and lyrics (1884)**、『植物にまつわる伝承伝説そして詩』とでも訳せよう著作、そこにての The Tree of life の節よりの一文を抜粋して呈示するが、“Adam was told he might eat freely of every tree in the garden, excepting only the Tree of Knowledge; we may, therefore, suppose that he would be sure to partake of the fruit of the Tree of Life, which, from its prominent position “in the midst of the garden,” would naturally attract his attention.” (訳として)「アダムは[知恵の樹]以外のエデンの園にてのすべての樹を自由に食してよいと言われていた。したがって、彼アダムはエデンの園の中核にあり、また、自然に注意を引くとのものであった生命の樹の実を確実に食べていただろうとの想定も我々がなせるところとなっている」(訳はここまでとする)といった見方が呈示されている。さらに世人の目につき易いとのところで述べれば、たとえば、英文 Wikipedia [Immortality] 項目にて現行、(そちらより引用なすところとして) “Christian theology holds that Adam and Eve lost physical immortality for themselves and all their descendants in the Fall of Man, although this initial “imperishability of the bodily frame of man” was “a preternatural condition.”

(訳として)「人間にての肉体構造にあっての原初的不死性が[超自然的なるもの](ありうるものではないもの)であるとしても、キリスト教神学にてはアダムおよびイヴは彼ら自身およびその子孫らにての物理的不死性を[人間の墮落]にて失ったとの解釈がなされている」(引用部はここまでとする)との記載がみとめられるところとなっている。ちな

みに聖書では楽園追放(失楽園)を見たアダムは[930歳]で没したとの「設定」になっている。日本聖書協会『旧約聖書』創世記第5章3-5節よりの原文抜粋するところとして、アダムは百三十歳になって、自分にかたどり、自分のかたちのような男の子を生み、その名をセツと名づけた。アダムがセツを生んで後、生きた年は八百年であって、ほかに男子と女子を生んだ。アダムの生きた年は合わせて九百三十歳であった。そして彼は死んだ(引用部はここまでとする)と記載されているところとして、である)

上もてお分かりだろうが、旧約聖書の創世記のアダムとイヴの楽園喪失の物語——すなわち、ジョン・ミルトンが『失楽園』にてそこより材を取ったとの物語——は

### **[蛇に騙されて[不死(を実現する生命の樹の恩恵)]を失いながら楽園追放された者たちの物語]**

「とも」置き換えられるのである(：ただし、ユダヤ教・キリスト教の教義を多く踏襲しているイスラム教ではヤハウエによる楽園の追放は[知恵の樹の実]を食したのではなく、[生命の樹の実]を食したとのことに求められるようになっており(コーランにそのように記載されている)、ここでの置き換え式はイスラム教に関しては成り立たない——イスラム教徒がエデンの樹をいかように見ているかについては英文 Wikipedia [ Tree of life ] 項目にての [Islam] の節にて(引用するところとして) “ The Tree of Immortality is the tree of life motif as it appears in the Quran. It is also alluded to in hadiths and tafsir. Unlike the biblical account, the Quran mentions only one tree in Eden, also called the tree of immortality, which Allah specifically forbade to Adam and Eve. Satan, disguised as a serpent, repeatedly told Adam to eat from the tree, and eventually both Adam and Eve did so, thus disobeying Allah. The hadiths also speak about other trees in heaven. However, according to the Ahmadiyya movement in Islam, Quranic reference to the tree is symbolic; eating of the forbidden tree signifies that Adam disobeyed God.” と現行記載されているようなところからも容易に確認なせるようになっている—— )。

以上のよくも呈されている聖書の解釈論、[蛇に唆された楽園追放の過程で人間の祖が不死を失った]との解釈論が直近の

### **[ギルガメシュが蛇に不意をつかれて[不死を実現する霊薬]を失ったこと]**

と記号論的に近いものであることは論ずるまでもなからう。

ここで振り返るが、

「ミルトン古典『失楽園』にあつての失楽園のプロセス(要するにエデンからの追放のプロセス)、そこに見る[罪]と[死]の浸潤形態が——(出典(Source)紹介の部 55 から 出典(Source)紹介の部 55 (2) を包摂する箇所にて詳しく述べているように——「どういうわけなのか」今日の視点で見てのブラックホール特性と通じるものを登場させながら[黒海洪水伝承][黄金の林檎にて滅したトロイアの崩壊]との接合性を観念させるものともなっていることを問題視してきた」

というのが本稿のここに至るまでのパートの内容である(出典(Source)紹介の部 56 から 出典(Source)紹介の部 58 (4) を包摂する部位がその複雑な話の詳説部となっている)。

翻って、ギルガメシュ叙事詩にあつての直近紹介なしたところの、

### **[ギルガメシュが蛇に騙されて[不死を実現する植物]を失ったエピソード]**

というものは、と同時に、

### **[洪水伝承の生き残り(選別者にして不死者のウトナピシュテム)にまつわるエピソード]**

となっている（上にて抜粋の岩波書店より出されている『ギルガメシュ叙事詩』邦訳版の該当パート記述箇所を参照のこと）。

上のことから、(論理構造の問題として述べ)、

ミルトン『失樂園』 → (具備) → [(旧約聖書『創世記』に依拠しての)[サタン(エデンの蛇)の姦計による樂園追放の物語]にして[不死の喪失とも接合しうる物語]としての側面] / [死と罪の浸潤プロセスに関して[黒海洪水にも接合するところ(黒海洪水発生ポイント)の複合的言及をなしている]と解されるパートを含む物語]としての側面 — (同じくものところは黒海洪水伝承・黒海洪水仮説にてボスポラス海峡がゼロから構築されたことを想起させるようにボスポラス・ダーダネルス海峡にての通路貫通に言及しているとの側面でもある) — ]

『ギルガメシュ叙事詩』の問題となるパート → (具備) → [[蛇による[不死喪失]の物語]かつ[聖書『創世記』にみとめられるノアの洪水伝承関連の物語と際立っての類似性を呈する物語]としての側面]

との共通要素 — (旧約聖書『創世記』にみとめられるところのものとしての)[蛇による不死の略取との筋立て]および[洪水伝承と関わる筋立て]との共通要素 — がそこに存在していると見ることが出来るようになってきているわけである(※)。

(※しかも[聖書の神]が人間が[知恵]と[不死]の両立を忌んでいる存在にして、後、人間に肅正としての洪水をお見舞いした存在となっている一方で、『ギルガメシュ叙事詩』の神(エンリルという名のシュメール・アッカド神話体系に見る往古の神)にもウトナピシュテム — ギルガメシュ第十一碑文に登場してくる洪水の生き残り — に[不死]を付与することに反対した神であるとの[設定]が伴っており、かつ、シュメール・アッカド神話の同じくもの神(エンリルという多神教にあつての神の石柱)に関してはキリスト教の神が樂園追放された人間の子孫に洪水をお見舞いしたのと同様に人間に洪水をお見舞いしているとの[設定]「も」が存在しているとのことがある(ギルガメシュ伝承に見る神が[ウトナピシュテムに不死性を与えることに反対した神]であり、また、[洪水を引き起こした存在]であるとされることの典拠として:本稿にての先の段、[出典\(Source\) 紹介の部 60](#)の部にて引用なしたところ、『ギルガメシュ叙事詩』(岩波書店)p. 135より再度の原文引用をなすと(以下、再度の引用部として) “ギルガメシュの懇望にまけて、ウトナピシュテムは自分が神々に列せられた経緯を語って聞かせる。神々が人間を滅ぼそうとして地上に洪水を送ったとき、知恵の神エアの指示により、彼は方舟を建造し、地上のすべてを粘土に帰した洪水からいのちあるものの種を救ったが、洪水を起こしたエンリル神はそれを知って怒った。しかし、最後は、エアに説得され、彼に神々のような不死を与えたのである、と” (引用部はここまでとする) と第11の碑の内容要約が記載されているところである)

(以降の部に進む前に)先立って述べてきたことを整理するための図解部を — 多く繰り返しを含むところとながら — 設けておく。

本稿では

[古のトロイア城市が滅びるそもそもの契機となったのは[黄金の林檎]であるといえる]

[ [黄金の林檎を巡ってのパリスの審判] と [エデンの園の誘惑] の間には

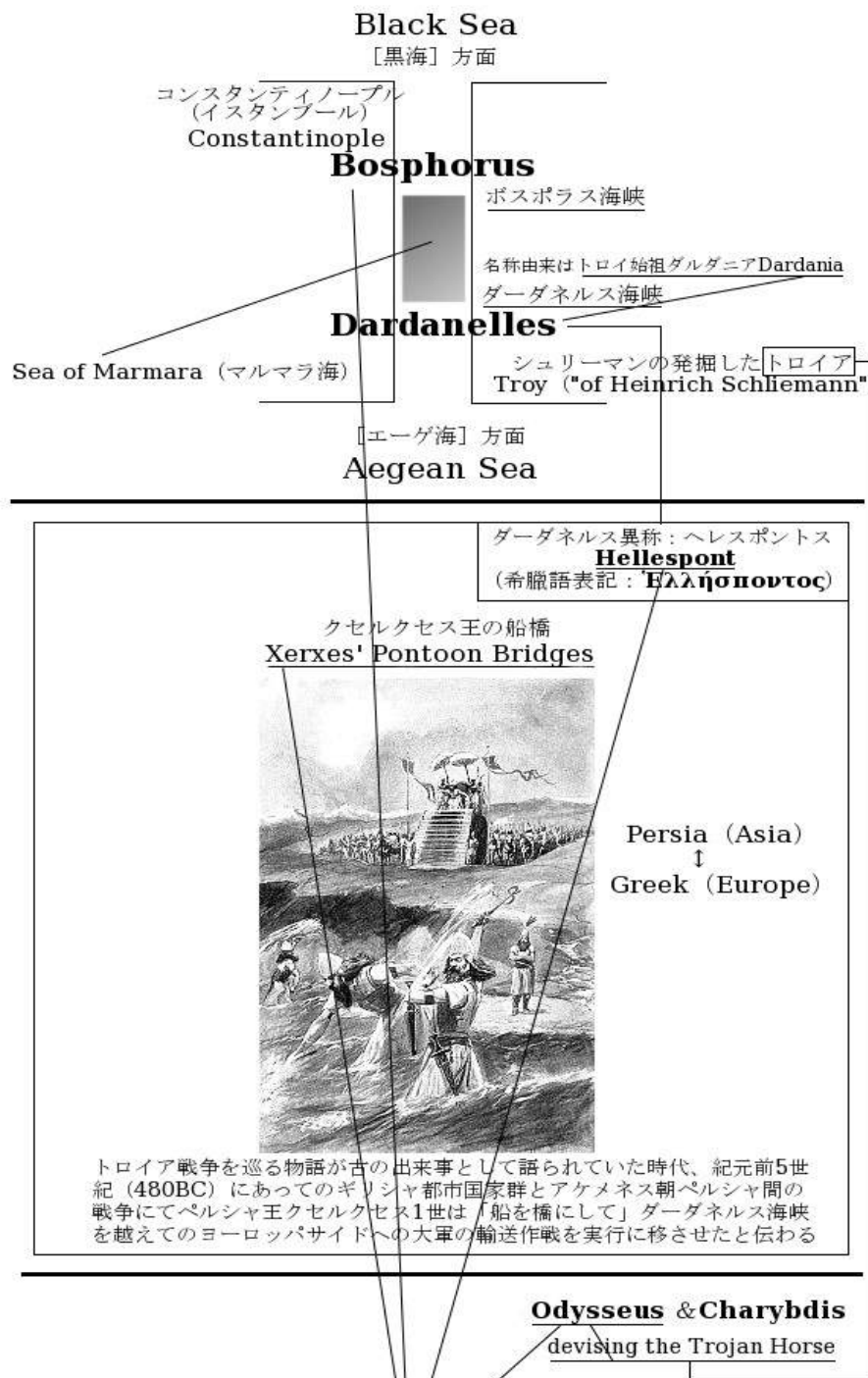
多重的接合性が存在する]

[ミルトン『失樂園』は「禁断の果実としての林檎」によるサタンのエデンの誘惑が描かれる作品である ——そして、誘惑の過程にして結果が「地獄」と「エデンの領域」を繋ぐ【深淵;アビス(ブラックホール近似の描写が複合的になされているとのことを詳述してきた『失樂園』にて重きをもって描かれる場)横断路としての橋梁】と結びつけられている作品である—— ]

とのより先立って詳述なしてきたとのことを前提に

[ミルトン『失樂園』では ——誘惑の過程にして結果と結びつく—— アビス横断路にまつわって(黄金の林檎にて滅んだ)トロイア城市のこと、そして、往古の黒海洪水のことを想起させる地理的描写が多重的になされている]

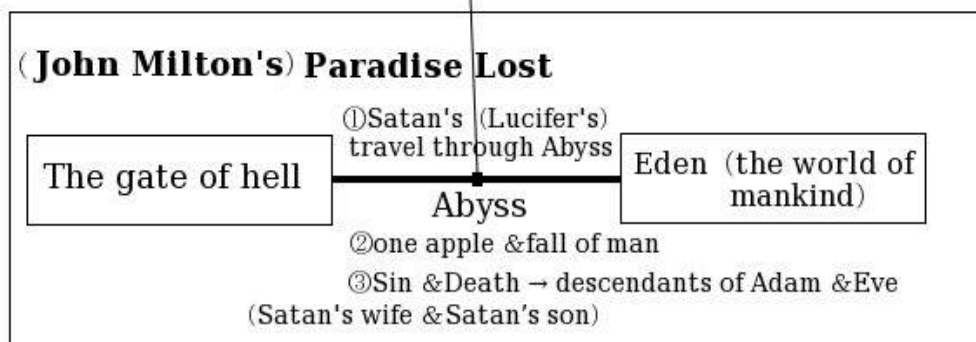
とのことを指摘してきた(概要としての下の図を参照されたい)。





( [ 文献的事実 ] の問題 ( 個人の主観や解釈論の問題ではなく文献字面にどういう表記がなされているかという [ 記録的事実 ] の問題 ) として線を引いた各要素は古典『失樂園』の中にて関係づけられている )

connected ( philological truth )



ジョン・ミルトン『失樂園』にてはルシファーが新発の人類を墮落させるために地獄門の先にある [ アビスの領域 ] を越えてエデン ( 人間の世界 ) に単身飛行をなすとの話が展開する。

そこに見る、

[ アビスからエデンに向けてのルシファーの単身飛行 ] が [ 文献的事実 ] の問題として、

[ ポスポラス海峡 ] / [ ヘレスポントス ( ダーダネルス海峡 ) ] / [ ダーダネルスからヨーロッパに向けての往古の侵略作戦 ( クセルクセス船橋構築 ) ] / [ トロイアの木馬の考案者の艱難辛苦の船旅 ]

らにひとところにて仮託されているとすることがある。

そのこと、 [ ポスポラス海峡 ] [ ダーダネルス海峡 ] [ ダーダネルス海峡を媒介にしての侵略 ] [ トロイアの木製の馬の考案者の旅 ] らがひとところにて結びつけられているとのことに関しては、トロイアがダーダネルス ( トロイア始祖に由来しての名を冠する地 ) 近傍に存在していたと伝わっていることに鑑み、 [ 古典『失樂園』に見るルシファーのエデンにての林檎の誘惑は [ トロイア陥落 ] と隠喩的に結びつけられている ] のだと解されることである。

以上指摘したうえで書くが、ルシファー誘惑の後、アビスを介して [ 罪 ] ( 擬人化されてのルシファーの妻 ) および [ 死 ] ( 擬人化されてのルシファーの息子 ) がアダムとイヴの子孫 ( 人類 ) に襲いかかる道筋が構築されたなどと『失樂園』にて描写されていること、そのことの意味を『失樂園』に見る [ 地獄門の先にあるアビスの特性 ] 、すなわち、

[ [ 時間 ] と [ 空間 ] が意を失う領域 ] ・ [ [ 自然の祖 ] たる領域 ] ・ [ 無限の闇の領域 ] ・ [ ルシファーをして一度呑み込まれれば、無に帰せられるしかない領域と言わせしめる不帰の領域 ] としての特性 ( 全て本稿にての先行する引用部を介して古典字面にあってそのように表記されていること、指し示しているところの特性 )

や [ 他古典に見る地獄門の先の領域の描写形態 — ダンテ『地獄篇』の [ 地獄門の先の重力中枢としてのルシファー領域 ] にまつわる描写形態 — ] に関する顧慮から重んじているのが本稿である。

以上のようにまとめもできることに「も」関わるところとして本稿にあっては都市トロイアがその [ 滅亡 ] にまつわって [ アトランティス洪水崩壊伝承 ] と結びつく指摘してきたわけだが ( トロイアは木製の馬で住民が皆殺しに遭った後、城郭そのものを包囲勢のギリシャ軍諸共、神罰にて滅せさせしめられた都市と伝わるが、 [ 黄金の林檎の園 ] とも同一視されることがあるアトランティスもまた戦争状態にあったギリシャ遠征軍諸共、洪水にて滅んだ都市と伝わっている )、本稿ではトロイアが、と同時に、 [ 創建 ] もまた [ 洪水伝承 ] と密接に結びついている都市であるとのことをもまた摘示してきたとすることがある ( 下の図解部を参照されたい ) 。



トロイアについてはその創建伝承からして「洪水伝承」との結びつきが観念できるようになっている。しかもそこにて結びつきが観念される伝承は20世紀末にて注目を集め出した「黒海洪水「仮説」」(先述)のことを露骨なまでに意識させるとのものとなっている。同点委細についてはダーダネルス海峡の命名由来にもなっているトロイア市創建者ダルダネスにまつわるところの伝承を紹介している著作、前世紀初頭に世に出たジェイムズ・フレイザー(著名な『金枝篇』の著者)の手になる洪水伝承蒐集著作よりのものとして下にて(再度の)引用をなしているところを参照すれば理解できるようになっている。

本稿にての「出典(Source)紹介の部58(3)」および「出典(Source)紹介の部58(4)」にて紹介した出典内容の再掲として

" From his home in the highlands of Arcadia, the emigrant Dardanus is said to have made his way to the island of Samothrace. According to one account, he floated thither great flood on a raft ; but according to another version of the legend, the great flood overtook him, not in Arcadia, but in Samothrace, and he escaped on an inflated skin, drifting on the whence he face of the waters till he landed on Mount Ida, where he escaped to founded Dardania or Troia. "

——James Frazer (Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law [CHAP. IV] )

(ジェイムズ・フレイザーの洪水伝承蒐集論稿たる Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Lawの(紙幅の都合なのか全訳ではない抄訳したものたる)訳書『洪水伝説』(国文社、訳者は英文学者の故・星野徹)に於ての原著抜粋箇所に対応する部分を抜粋する。該当部は61ページに於ての下の部分となる)

「アルカディアの高地帯に於た故郷から、移住者ダルダノスはサモトラケ島へと移っていたと言われる。一つの説明によると、彼は筏に乗ってそこへ漂っていった。だがもうひとつの版の伝説によると、大洪水がアルカディアでなくサモトラケにおいて彼に追いついたので、彼は空気でふくらせた皮袋に乗って避難し、海面を漂ったあげくにイーダ山に上陸して、その土地に彼はダルダニア、またはトロイアを建設した」

" The causes which the Samothracians alleged for the inundation were very remarkable. The catastrophe happened, according to them, not through a heavy fall of rain, but through a sudden and extraordinary rising of the sea occasioned by the bursting of the barriers which till then had divided the Black Sea from the Mediterranean. At that time the enormous volume of water dammed up behind these barriers broke bounds, and cleaving for itself a passage through the opposing land created the straits which are now known as the Bosphorus and the Dardanelles, through which the waters of the Black Sea have ever since flowed into the Mediterranean. "

——James Frazer (Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law [CHAP. IV] )

(上と同様に訳書『洪水伝説』(国文社)に於ての原著抜粋箇所に対応する部分を抜粋する。該当部は62ページに於ての下の部分となる)

「(洪水にあたって)生存者は高山に逃げのびたということだった。

(中略)

この高山があるためにいまでもサモトラケ島は北エーゲ海の最も目立つ

## Studies in Comparative Religion, Legend and Law [CHAP. IV]

(上と同様に訳書『洪水伝説』(国文社)にあつての原著抜粋箇所に対応する部分を抜粋する。該当部は62ページにあつての下の部分となる)

「(洪水にあつて)生存者は高山に逃げのびたということだった。

(中略)

この高山があるためにいまでもサモトラケ島は北エーゲ海の最も目立つものの一つとなつており、よく晴れた日にはその山々がトロイアからはっきりと見えるのである。海は逃げのびていく彼らをおも追いかけてきたので、彼らは神々に救ってくれるようにと祈つた。そして救われると島の周囲に、ここから自分たちが救助されたのだというしるしの境界線をつくり、また祭壇を築いてのちのちまで欠かさず犠牲を捧げてきた。

(中略)

サモトラケ人が、氾濫を引き起こした原因だと考えたものは、非常に注目すべきものであつた。彼らによれば、大変動は豪雨のためではなく、黒海と地中海とをそのときまで分離していた障壁の陸地の崩壊によって海が突然異常に隆起したためであつた。そのときこの障壁の背後に堰き止められていた膨大な量の海水が常軌を逸脱し、海水自体の力で堰き止めていた陸地に水路を切り開き、いまではボスポラス海峡とダルダネス海峡として知られる海峡をつくつた」



頭部欠損を見た、著名なサモトラケ島出土の勝利の女神ニケの像。同ニケ像が出土した

[サモトラケ島]

に由来するものとして[黒海洪水仮説]とほぼ同じくもの内容を有した伝承が存在していること、しかも、それが

[トロイア創建伝説]

と関わっているとのことを先にて指摘している(トロイア創建者ダルダノスがいかにトロイアに辿り着いたのか、という式にて、である)。

尚、ニケはアテナ神の「随神」とであるとされるわけだが(それがためにパルテノン神殿の著名なアテナ神像の手の上にも翼を生やしたニケ神が乗せられている)、そちらアテナ神というのは

[黄金の林檎](エデンの果実と対称性をなす果実)

を巡る美人コンテストに敗れた、トロイア王子のパリスへの取崩工作が失敗して敗れたために、トロイア戦争ではトロイア滅亡に向けて手を尽くし、トロイア崩壊につながった木馬の計略も彼女がオデュッセウスを手助けしたものであるとの伝承が伴う女神ともなる。「肝心要の部が欠けている」サモトラケのニケではないが、といったことに[我々人類の限定された視界には表立っては入らぬとの皮肉]が表出しているようにすら見えることも本稿を読みとく課程で理解いただけるだろう。

さて、

[『ギルガメシュ叙事詩』→(影響を及ぼす)→ミルトン『失樂園』]

との「直接的」関係性が成立「しえない」(普通に考えれば、成立「しえない」と見受けられるとの理由についてはせんだって記したところである。『ギルガメシュ叙事詩』が発掘・解読を見、そういう旧約聖書創世記の粗筋に非常に似通ったパートを含むものが往古にて叙されていたと物議を醸したのは[19世紀中葉以降]であるとされることがあるのである(先の**出典(Source)紹介の部 59**にて詳説)。

では、ミルトン『失樂園』と『ギルガメシュ叙事詩』を  
[「複合的な意味合いで」類似内容を有するもの]  
となさせしめている、

[他の事由]

があるのではないか、と思われるかもしれない(当然であろう)。

そう、[ギルガメシュ伝承]と[ミルトン『失樂園』執筆背景にある語られぬところの参考資料](のようなものが「あれば」だが)とを結ぶ「他」伝承があると考え向きもあるかもしれない。

グラハム・ハンコックのような人間が大ヒットを見た **Fingerprints of Gods『神々の指紋』**——[人間という種族を舞台裏から操作する力学の介在]の可能性論に極力触れないで[人間の営為の賜物](太古の「神がかった」人間、失われた文明 **Lost Civilization** にての **Godmen** と表現されるような存在の英知の類の賜物)の介在ばかりを強調しているとの点からしてタイトルに[偽り]ありの風を伴う著作だが、そうした側面を差し引いて「も」興味深い指摘を相殺して、なお、マイナスの部が増さってしまうといった按配の多くの誤りや誇張表現を含むとの指摘がなされてきたとの著作——、(批判能力を有さぬ向きから見れば、そうではないと映ろうが、検討をなした識者にあってはそうように見られがちな)信用の置けぬと見られるような著作(**Unreliable Source**)で強弁しているような、

[共通基盤となる文明(滅亡した文明)]

あるいは、そうした大仰なものではなくとも、

[結節資料となる類似要素をすべて含む中間地点の古典]

のようなものが存在しており、それがギルガメシュ伝承およびミルトン『失樂園』執筆参考資料の双方に影響を与えていたのだらうと考える向きもあるかもしれない。

だが、普通人以上に色々なことを探査・研究して知っているとのこの身——(筆者のことを[識者の振りをしている紛い物ら]と一味同仁の類と見れるか否か、筆者識見の程度を本稿全体の内容からご判断いただきたい)——でも[そのようなもの](ギルガメシュ叙事詩とミルトン著作の間のミッシング・リンクの離隔を見事に埋めきるとの古典の類)があることにつき把握「できない」でいる。

それらしいもの、そう、ミルトンに影響を与えていた洪水伝承のアーキタイプ(原基)といったものとして想定でき「そんな」ものは確かにある(※ルーマニア出身の神話学の大家リチャ・エリアーデ、[(毒にも薬にもならぬとの)常識的なこと]ばかりを放言していた同男などは人類の歴史にあって共通の基盤となるようなものがあるとしてそれを[アーキタイプ(原基)]などと評しているが、ここではその語法に倣(なら)わせてもらった)。

たとえば、ミルトンの時代へと連綿として続かたちにての知識としての相伝を見ていた可能性があるところとして、キリスト教、ローマ帝国を[奴隷の宗教]からの台頭の過程で乗っ取り、中世暗黒時代の精神的世界の支柱となっていたキリスト教のサイドにて重用されていた初期キリスト教にての識者ら(教父チャーチ・ドクターと評される一部のギリシャ語ないしラテン語で記録を遺すだけの程度を有していた識者ら)のうちの一人として伝わっているエウセビオスという人物に由来する著作に、

[バビロニア時代(ギルガメシュ叙事詩が生まれたメソポタミアにて隆盛を見た文明)の洪水伝承]

への言及が[近代に入ってよりの遺跡発掘による古代のギルガメシュ叙事詩の「再」発見]前から見受けられるとのことが——出典も続く段に挙げるところとして——ありもする(今日、エウセビオスの著作にあってバビロニアの洪水伝承への言及がなされていることは一部でよく知られている)。

については、初期キリスト教勢力の知識階級、教父(チャーチ・ドクター)の一人に数えられるエウセビオスの著作、オンライン上からも英文版の内容を確認できるとの著作にて



「(著者エウセビオスから見ての)古代の学者が書き残しているところによると、」

との[聞き及ぶところ(仄聞)を紹介するとの形式]にて、

「古バビロンにて洪水がクシストロス Xisuthrus 王(別記載では Sisithrus 王)の時代の発生して、その洪水前に[クロノス神](ギリシャ系の記録者がシュメールの神を表しているのでクロノスとのギリシャ系の名前となっているとも「とれる」)が王の夢見に現れて滅亡の洪水より逃げ延びるための方舟を建造するように指示した」

といった記述が認められることが確かに[文献的事実]の問題としてあるにはある(出典(Source)紹介の部 48)の部にてその内容を引いた古書、オンライン上よりその全文を捕捉できるところの『福音の備え』、ラテン語にて **Praeparatio Evangelica** (英語にて **Preparation for the Gospel**) の E.H. Gifford という人物の手になる 1903 年英訳版よりの抜粋をさらに下の段にてなす)。

その点、初期のキリスト教圏サイドの識者エウセビオス ——その著作の内容をジョン・ミルトンが捕捉して「いうる」から問題になるとの識者—— の書きようにまつわるところとして

「ギリシャ人学者にあつての記録がそれ以前の間人たる Berosus(ベロソス)の事跡につき書き残しており、ベロソスによると洪水伝承がメソポタミアに伝わっていた」

とのこととなっている、より具体的には

「[それ以前のバビロン史につき記した史家にしてギリシャ語に通じたマルドゥク神殿神官]であつたとの人物(ベロソス)が洪水伝承につき記録している」

とのこととなっているとの講学的な解説が諸所にて見受けられるようになっているのだが、そちら内容、

[クロノスの夢見にての [洪水より逃れよ] とのバビロニア王クシストロス Xisuthrus に対する警告とのかたちで残置・伝存している洪水伝承]

にみとめられる内容と

[近代になって「再」発見されたウトナピシュテムの洪水伝承およびギルガメシュの物語]

にみとめられる内容の間には同一性が認められない程度に質的差異がある(下に細やかな解説をなすが、エウセビオス古典に見る洪水伝承にあつては[蛇による「不死」の薬草の奪取][ウトナピシュテムという人間の不死を厭うた神のありよう]といった特有の神話的モチーフをギルガメシュ伝承と共有していない ——が、ノアよろしく方舟に命あるものの種を救うべくも動物らを載せたとの式ではエウセビオス古典に見る洪水伝承はギルガメシュ叙事詩に認められるウトナピシュテムやりようと内容を一にするものではある(そちらについて「も」下に解説する)——)。

であるから、初期的キリスト教識者著作からミルトン時代に伝わっていた可能性があるバビロン洪水伝承(の一つ)よりミルトンがギルガメシュ洪水伝承と似たような側面を有するものを [黒海洪水説を想起させるモチーフ] を用いつつ書き記したと述べることはできない(これ以降の出典表記部を参照のこと)。

# SOURCE

## 60(2)



ここ出典(Source)紹介の部60(2)にあつては、

[バビロニア由来の洪水伝承が教父エウセビオスを介して伝わる[ベロソス]という人物の記録によるものである]

とのことがいかなうことなのか、まずもって、基本的なところからの引用をなしておくこととする。

エウセビオス —— 初期キリスト教の識者階級たる教父—— がそちら記録について扱った資料を仄聞したとのかたちにて今日にバビロニア由来の洪水伝説を語り継いでいるとの話、そこに見る[元となった記録]の作成者たるベロソス(ベロソス)について扱ったウィキペディア記述内容を引くことから始める。

(直下、英文 Wikipedia [Berossus] 項目よりの原文引用をなすとして)

---

Berosos was a Hellenistic-era Babylonian writer, a priest of Bel Marduk and astronomer who wrote in the Koine Greek language, and who was active at the beginning of the 3rd century BC. Versions of two excerpts of his writings survive, at several removes from the original.

[...]

The Armenian translation of Eusebius and Syncellus' transmission (Chronicon and Ecloga Chronographica respectively) both record Berossus' use of "public records" and it is possible that Berossus catalogued his sources. This did not make him reliable, only that he was careful with the sources and his access to priestly and sacred records allowed him to do what other Babylonians could not. What we have of ancient Mesopotamian myth is somewhat comparable with Berossus, though the exact integrity with which he transmitted his sources is unknown because much of the literature of Mesopotamia has not survived. What is clear is that the form of writing he used was dissimilar to actual Babylonian literature, writing as he did in Greek.

Book 1 fragments are preserved in Eusebius and Syncellus above, and describe the Babylonian creation account and establishment of order, including the defeat of Thalath (Tiamat) by Bel (Marduk). According to him, all knowledge was revealed to humans by the sea monster Oannes after the Creation, and so



Verbrugge and Wickersham (2000:17) have suggested that this is where the astrological fragments discussed above would fit, if at all.

Book 2 describes the history of the Babylonian kings from creation till Nabonassaros (747-734 BC). Eusebius reports that Apollodorus reports that Berossus recounts 432,000 years from the first king, Aloros, to Xisouthros and the Babylonian Flood. From Berossus' genealogy, it is clear he had access to king-lists in compiling this section of History, particularly in the kings before the Flood (legendary though they are), and from the 7th century BC with Senakheirimos ( Sennacherib, who ruled both Assyria and Babylon). His account of the Flood ( preserved in Syncellus ) is extremely similar to versions of the Epic of Gilgamesh that we have presently. However, in Gilgamesh, the main protagonist is Utnapishtim, while for Berossus, Xisouthros is probably a Greek transliteration of Ziusudra, the protagonist of the Sumerian version of the Flood

(日本語に即しての訳をなすとして)

「ベロソスはヘレニズム期ギリシャ語での著述をなしたとのヘレニズム期著述家となり、また、マルドゥク神の神官にして天文家ともなっており、同ベロソス、その活動年代が紀元前3世紀初頭となっているとの人物となる。彼ベロソス著作はうち二作品が逸文・抄録、すなわち、[原典から幾分の剥落を見ているのかたち]にて(他者にての引用形態で)残存を見ている。

…(中略)…

エウセビオス(4世紀にてのキリスト教の識者階級、教父)およびシュンケロス(訳注:英文ウィキペディアにも一項目が設けられている8世紀から9世紀にかけて生きたビザンツ帝国の歴史編纂家 George Syncellus のこと)によって伝わっているところのアルメニア語による伝存文書(各々、エウセビオスの手になる Chronicon とシュンケロスの手になる Ecloga Chronographica)の双方では「ベロソスが[公的な記録]を使用した」

との記録が見て取れ、ベロソスはその典拠となる(マルドゥク神神官としての職掌として)目録化していた可能性がある。これはベロソスという史料元を信頼に値するものたらしめるに足りるものではないが、彼ベロソスが史料に対して入念であり、その彼の神職としての[(古代の)聖なる記録に対する接触可能]という立ち位置が彼をして他のバビロニア人(訳注:アレキサンダーが東征によってギリシャ世界と中東を結合させてのヘレニズム期にてのコスモポリタン化してのバビロニア人といったニュアンスであろう)ができなかったことをなさしめた可能性はある。

彼ベロソスが資料として伝存をなさしめた記録の正確性は(他の)メソポタミア文物の過半が今日に現存していないのであるから不分明なのではあるが、我々がメソポタミア神話に関して把握するに至っていることはベロソスのそれ(逸文とのかたちで残置している記録)と若干ながらも比較可能ではある。明らかなのは彼ベロソスが書きとどめた折の記録の[形態]が[現実のバビロニア文物]と異なるものとなっており、それは「ギリシャ語で」彼が記録化をなしていたとのこととなる。

(ベロソスに由来する)[巻の1]と称される記録の断片は上述のエウセビオスおよびシュンケロスの文書にて言及されているのかたちで今日に遺っているものとなり、そして、そこにては

[バビロニアの創造神話にあつての説明]

[マルドゥクによるティアマトの打倒を含むところの秩序の定立の式]

が記されている。

彼ベロソスによると創造の後の人間の全ての知識は海の怪物オアンネスによって明かされたものであるとのことになっており、(最近の)Verbrugge および

Wickersham の二人の学者による(21 世紀に入っの)2000 年の申しようではこれは占星術を扱っての断片的記録として論じるのによく適合するもののである。(抄録・逸文とのかたちで他に引用されるとの式で伝わっている)ベロツソスの遺したとされる記録の内、[巻の 2]とされているところでは[社稷(国体)創建から紀元前 747 年から紀元前 734 年にかけて在位していたナボナッサロス王に至るまでのバビロニア王らの事績]が描写されている。それにつき、(ベロツソスの記録を今日に伝えた初期キリスト教サイドの知識人の)エウセビオスの報告しているところでは[バビロニアの最初の王たるアロロスからクシストロス、そして、バビロニア大洪水に至るまでの 43 万 2 千年の記録をベロツソスが説明しているとの旨、アポロドーロスが書き遺している]とのことである。

ベロツソスの家系(の職掌)からすれば、ベロツソスが(大洪水伝承にまつわる)関連部にての『王名表』(シュメールの歴史記録)に接することが出来た、殊に[大洪水前の王ら](彼らは伝承上の存在であったわけだがそうした王ら)以降の歴史、および、アッシリアとバビロンの双方を治めたセンナケリブ君臨の紀元前 7 世紀以後の歴史編纂の中で(『王名表』に)接することが出来たのは明らかではある。(エウセビオスと共にベロツソスのことを今日に伝えている識者として先述の)シュンケロスが書き残しているところの洪水伝承にまつわるベロツソスに関する説明では我々が今日知るギルガメシュ叙事詩と非常に似通った箇所が認められる。しかしながら、ギルガメシュ叙事詩では主要人物はウトナピシュテムであるのだが、ベロツソスのそれではクシストロス ——(訳注:ベロツソス版のこのクシストロス Xisouthros の伝存するところの物語については「本稿の内容に関わるところとして」それがいかようなものなのか、後述する)—— がシュメール版の洪水伝承のジウスドラのギリシャ版の訳となる存在として現われている」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

**重要であるにとらえているがために付すところの脇に逸れての付記**

脇に逸れて書き記せば、直上引用部がそれにまつわるものとなる、

[エウセビオスの手になるベロツソス関連の記録のあり方]

からしてこの世界そのものの胡散臭さ ——『**枢要部を記号論的に命名規則を割り振ることを常とする人工知能に構築でもさせたのか**』といった(人形でなければ疑念視もしようとの) **按配の胡散臭さ**でもいい—— **が見てとれる**とのことがある。

その点、上にて既述のようにエウセビオスによると

[**(ギリシャ人たるアポロドーロスから伝わるとされるところにて)古代神官ベロツソスは 432000 年分の[大洪水]に至るまでのシュメールの歴史にアクセスできたと伝わっている]**

とのことだが(“ Eusebius reports that Apollodorus reports that Berossus recounts 432,000 years from the first king, Aloros, to Xisouthros and the Babylonian Flood. ” と

の表記を引いての部)、そも、そこに見る

[432000]

との数値(際立ってのユニーク・ナンバーであろう?)および単位系(年)はインドはヒンズー教世界観に見る、[悪魔カリによる邪悪が善を凌駕する最期の時代のサイクル]、いわゆる、[カリ・ユガ](Kali-yuga)の432000年分と「まったく同一のもの」となっているとのことがある(Kali Yugaのサイクルについては(いくらでも確認するソースはあるわけだが)目立つところとして英文 Wikipedia[Kali-Yuga]にて“Kali Yuga is associated with the apocalyptic demon Kali, not to be confused with the goddess Kālī. The "Kali" of Kali Yuga means "strife", "discord", "quarrel" or "contention".....The Kali Yuga is sometimes thought to last 432,000 years, although other durations have been proposed.”(訳として)「カリ・ユガは終末の悪魔カリ、女神カーリーと混同されるべきではないとのそちらカリに関連づけられるものである。カリ・ユガのカリは闘争・不和・諍いあるいは論争を意味している。(中略)カリ・ユガは他の延長を観念する見立でも呈されているが、432000年続くとされている」と記載されているとおりである)。

偶然か?

正気の人間ならば、同一の[432000]との数値が単位系(年)を同一にして組上にのぼっている時点で[偶然]とは「無条件には」思うまい(それらが双方共々【終わるに通ずるサイクル】と結びついているのならば、である)。正気の人間であれば、『何らかの文化伝播(trans-cultural diffusion)があつてそうもなっているのではないか?』

と考えるところであろう(それが脳が腐ったゾンビ人間のそれではない[健全な知性]の自然なる働きか、とは思ふ)。

にまつわって本稿筆者は一步進んで次のようなことらまで「識つ」ており、通常ありうべき[文化伝播]の問題で済まされぬ程に[ことは奇怪である](加えて述べれば、「そして、またもって危険ですらある」と見立てるにまで至っている)。

**第一。**繰り返す。エウセビオスによると(アポロドーロスから仄聞されるところとして)ペロソスは初代王から大洪水に至るまでの432000年分の歴史記録にアクセスできたとされているが(無論、40万年越えなど古代人の年代感覚が破綻を見ているナンセンスな書きようと当然に判じられるところだが、本稿をきちんと読まれている向きには年代記法における子供じみた途方もなさなどは話の論点になっていないこと、お察しいただけることかとは思ふ)、そも、エウセビオス記録が[432000年の終端]に位置する[大洪水]をクロノスというギリシャの神と繋げているとのことがあることが重きをもってくる(：これよりの典拠紹介部、そして、本稿の[出典(Source)紹介の部41(5)]にてもかかる程度に触れて解説していることだが、ペロソス曰くのところとして[クロノス神]が往時のバビロニアの王の夢見に現われて洪水の警告を発したことになっている)。

さて、そこにいうところのクロノス神 Cronus だが、[ローマ表記がサターンとなるとの土星の体現存在]であるとのことが一般的教養の問題として知られている(英文 Wikipedia [Cronus] 項目にて“ In the most classic and well known version of Greek mythology, Cronus was the leader and the youngest of the first generation of Titans, divine descendant of Uranus, the sky and Gaia, the earth. He overthrew his father and ruled during the mythological Golden Age, until he was overthrown by his own son Zeus and imprisoned in Tartarus..... Cronus continued to preside as a patron of harvest. Cronus was also identified in classical antiquity with the Roman deity Saturn.”(訳として)「最も古きに遡る部類の、そして、よく知られているところのギリシャ神話ではクロノスとは天空神ウラヌスと大地ガイアの間産まれたタイタンらの第一世代の中でのリーダーにして最年少者である。彼は父ウラヌスを廃した後、自身の息子たるゼウス神にタルタロスの領域に落とし込まれるまでの黄金時代を統治した神でもある。(中

略) クロノス神は収穫の守護神格であり、古典古代にあつてはローマの神サターン神と同一視されていた存在である」と記載されているように一般教養の問題である) のと同時に「時の神 Chronos (希臘語表記 Χρόνος)」と同一視される存在「でも」ある——基本的なところから引けば、英文 Wikipedia[Chronos]項目にて“During antiquity, Chronus was occasionally interpreted as Cronus, according to Plutarch the Greeks believed that Cronus was an allegorical name for Chronos.” (訳として)「古代時代にあつてからして(時の神たる)クロノス Chronos 神はタイタンの首魁であつた Cronus と同一視されており、プルタルコスによるとギリシャ人らは「タイタンのクロノス Cronus」とは寓意的な式での「時の神たる Chronos」の名と信じていたとされる」との解説がなされているところである(ちなみに欧州では中世よりの図像化形式のありようとして目立って「時の翁」と「土星神格サターン旧呼称クロノス」とが混同されている(後にて図示もなす))——。

432000 年の後にある大洪水の警告のために王の夢に現われたと伝わるクロノス神(タイタンのリーダーであつたとも伝わる Cronus) と同一視されもする[時の神]たるクロノス神(Khronos ないし Chronos)の方だが、ここで問題視しているカリ・ユガとは「時の」サイクルであり、[時間]を媒介にしての繋がり合いがまずもって想起される(そこからして[こと]が尋常ではないと受け取れるのだが、話はそれにとどまらぬ)。

**第二。**インドはヒンドゥー体系の天文観、カリ・ユガの由来たる[悪魔カリ]はヒンドゥーの有名な女神カーリーとは別の由来を持つ神だと一般には説明されているが(上に英文 Wikipedia[Kali-yuga]項目より“Kali Yuga is associated with the apocalyptic demon Kali, not to be confused with the goddess Kālī. The "Kali" of Kali Yuga means "strife", "discord", "quarrel" or "contention".” (訳として)「カリ・ユガは終末の悪魔カリ、女神カーリーと混同されるべきではないとのそちらカリに関連づけられるものである。カリ・ユガのカリは闘争・不和・諍いあるいは論争を意味している」と表記されているところを引いたとおりである)、両者[(カリ・ユガに通ずる)終末の悪魔カリ]と[女神カーリー]の[響き]・[綴り]・[関連するところの意味合い]が近いとのこともが**[時間の終焉]( End of Time Cycle )**

との観点で問題になる(とのことがある)。

その点、女神 Kālī の語源はインド御当地ではよく知られているらしいところとして**[時間][闇]**

を意味するとのものである(:目立つところでは非常に解説が細々となされている英文 Wikipedia[Kālī]項目にて現行、(長くもなる同項目の記述を極々掻い摘まんで引くとして)“Kālī, also known as Kālikā (Sanskrit: कालिका), is the Hindu goddess associated with empowerment, shakti. She is the fierce aspect of the goddess Durga (Parvati). The name Kali comes from kāla, which means black, time, death, lord of death: Shiva ...

[Etymology] Kālī is the feminine form of kālam ("black, dark coloured"). Kāla primarily means "time" but also means "black" in honor of being the first creation before light itself. Kālī means "the black one" and refers to her being the entity of "time" or "beyond time." Kālī is strongly associated with Shiva, and Shaivas derive the masculine Kāla (an epithet of Shiva) to come from her feminine name.” (訳として)

「Kālikā との名前でも知られる女神カーリーは女神ドゥルガーの憤怒相としての存在であり、その語源は Kāla カーラ、[黒][時間][死の君主]を意味する同語に由来するとされている。(中略) [語源] Kāla は kalam[黒・暗色がかつた]との語の女性形であり、Kāla は時間、そして、最初の光の生成を祝しての闇であるとされている。Kālī はまた、と同時に、シヴァ(ヒンドゥー教主要神格の一柱たるシヴァ神)とも関係があり、シヴァは Kāla の男性系に端を発している存在である」と[Etymology](語源)の問題とし



て記載されているとおりである)。

いいだろうか。(カリ・ユガのカリの由来たる悪魔カリとは別存在と一般に語られるが、悪魔カリと響き・綴りは際立って近いとの「時に通ずる」女神カーリーにあっての語源として重きをなす) [時間] である。翻って大洪水に至る[432000年サイクル]の終端も「時の神」と同一視されるクロノスと結びつけられている。ここにて[時のサイクル]たる Yuga との絡みでよりもって話が接合すること、理解いただけたかとは思(くどいが、女神カーリーと終末の悪魔カリは別存在であると喧伝されるが、両者、[कलि]とのサンスクリット表記がなされるという [カリ・ユガ] の命名由来たる悪魔 káli と[कालिका]とのサンスクリット表記がなされるという [黒] [時間] [死] と結びつく破壊の女神 Kālī の双方は[語の綴り]・[語の響き]・[意味論的側面] (時 Time の神格化にまつわる意味論的側面) で近いところがある存在である)。

ここまで申し述べれば、何をもってして

『枢要部を記号論的に命名規則を割り振ることを常とする人工知能に構築でもさせたのか』

といった按配の側面を感じるとの胡散臭さが感じられると述べているか、心ある向きには多く理解いただけるかとは思(くどいが、) — ※その点、さらに一歩進んで[意味合いの問題]につき述べれば、である。[クロノス(時の神と同一視される存在)の警告を伴っての大洪水]と[432000年]との「際立っての」ユニーク・ナンバーおよび単位系(年)を介して結びつきもする[悪鬼の時のサイクル](カリ・ユガ)のことを(響き・綴りの近さから)想起させる[時の神格化存在]でもあるカーリーが[黒][死][時間]を意味する語たる Kāla カーラと結びついていることからして【ブラックホール】との兼ね合いで問題になる「とも」筆者は「当然に」見立てているとのことがある。何故か。[黒][死][時間]は[永遠に時間が止まっているとのありようを呈する暗黒領域たるブラックホール] (出典 (Source) 紹介の部 55 および 出典 (Source) 紹介の部 55(3)) のことを想起させるうえ、なおかつ、最前の引用部にてそう表記されているところを引いたように (カーリー由来の) [Kāla カーラ]の男性系であるとの言われようがなされているヒンドゥーの破壊神シヴァ、カーリーが[Kāla カーラ]の女性系とされている一方でカーラの男性系とされるそのシヴァ(日本国内の愚劣で醜悪なドゥームズデイ・カルト、オウムが意味も分かっているなかろうとの式で教団の守護神として奉じていた神でもある)の彫像をこともあろうに [ブラックホールを生成する可能性がある」とされるに至っている CERN(欧州原子核研究機構)]が [ナタラージャ]との相(ダンシング・シヴァの相)との格好にてジュネーブのそちら本部に掲げているとのことがあるからである (そこからカーリーが[黒][死][時間]を意味する語たる Kāla カーラと結びついていることが問題になると見立てている (ちなみに CERN がカーリーと結びつく[Kāla カーラ]の男性系であるとのシヴァ神像を目立つように掲げていることについては英文 Wikipedia[Nataraja]項目にて “ In 2004, a 2m statue of the dancing Shiva was unveiled at CERN, the European Center for Research in Particle Physics in Geneva. The statue, symbolizing Shiva's cosmic dance of creation and destruction, was given to CERN by the Indian government to celebrate the research center's long association with India. ” (訳として)「2004年頃、2メートル大のシヴァ神像がジュネーブにての欧州原子核研究機構こと CERN でお披露目を見た。同彫像はシヴァの宇宙の創造と破壊のダンスを体現するものとなり、永年、インドと関係があつた同研究機関を祝するために贈呈された



ものである」との表記がなされている)。

尚、直上、言及したところ、

**[初期キリスト教会教父エウセビオスの伝えるペロソス洪水伝承に見る  
432000年との際立つての単位とカリ・ユガの432000年の一致性]**

を問題視しているのは筆者だけではない。というより、むしろ、筆者は432000関連の  
一致性について他の欧米圏識者の著作より教えられたとの者となる。

については本稿筆者が探求の過程で多読・乱読してきた著作群のうちの一つ、  
著名な米国神話学者である Josef Campbell (故人) の手になる The Masks of God に  
あっての一部をなす Volume 3, Occidental Mythology にあって以下のような記述がな  
されているとのことがある。

(直下、オンライン上よりも表記テキストを確認できるようになっているところのジョセフ・  
キャンベルの手になる Occidental Mythology『西洋の神話』、その Chapter 9  
EUROPE RESURGENT よりの原文引用をなすとして)

I have discussed this interesting figure in Oriental Mythology, where it  
appeared that in the Germanic deity Odin's warrior hall there were 540  
doors through each of which 800 warriors fared to the "war with the Wolf"  
at the end of the cosmic eon.  $540 \times 800 = \underline{432,000, \text{ which is the sum of}}$   
**years ascribed, also, in India to the cosmic eon.** The earliest appearance  
of this number in such an association, however, was in the writings of the  
**Babylonian priest Berossos, c. 280 B.C., where it was declared that**  
**between the legendary date of the "descent of kingship" to the cities of**  
**Sumer and the date of the mythical deluge, ten kings reigned for**  
**432,000 years.**

(拙訳として)

「わたしはオリエント(中近東)の神話にあってのこの興味深い数(432系統  
の数)について[ゲルマンの神オーディンの戦士達のホールにて悠久の宇  
宙の終末にあっての狼(注記:フェンリル・ウルフという北欧神話の怪物)と  
の戦いに際して(戦士)800人づつが540の扉に控えるものとして存在して  
いる」との式でそれが現われているところについて議論したばかりだ。  
(オーディンの戦士のホールに見る)540(の扉)×800(人)=432000とのこ  
ととなり、それはインドにあって悠久の宇宙に対する年数合算で出てくる単  
位でもある(訳注:お分かりか、とは思いますが、ここではカリ・ユガのことを指し  
ての表記がなされている)。そうもした関係性にあってのこの数の最も初期  
の具現化は、しかしながら、紀元前280年に生きたバビロニア領域の神官  
ペロソス由来の書物にみとめられるところとなり、(そこでは)伝説上の  
シュメール都市群に対する始祖王権の頃から神話上の洪水に至るまで10  
人の王が統治したというのが432000年とされている」

(引用部はここまでとする)

以上、引用したように【同じくもの数値規則が作用しているとの情報】(北欧神話にお  
ける終末局面にもかかわる43200)があるのならば、それは当然に学者 —ジョセフ・  
キャンベルのようなよく知られた学者— が話柄として然るべきところである。そのこと  
をお含みのうえで読み手におかれては筆者が主観が先行しすぎての非建設的な話  
をなしているなどとゆめ誤解なさないようにしていただきたいものである。



### Fenrir Wolf and Ragnarök

#### 540 (doors) × 800 (warriors) ↔ End of Time

上の図は Project Gutenberg のサイトにて全文公開されているとの 20 世紀初頭に世に出た著作 **Myths of the Norsemen From the Eddas and Sagas(1909)**にて掲載されている [北欧神話にて終末に解き放たれるとされる狼の怪物 Fenrir (フェンリル・ウルフ) がグレイプニルという魔法の紐で(終末の刻まで)縛れるさまを描いた画] である。さて、決定論的世界観が極めて色濃くも見受けられる — 一たとえば、滑稽なことに神自身が自分の遠未来の死に様を「克明に」自己言及するとの詩が伝存を見たりしている—— との北欧神話にあつて[(図に見る)フェンリル・ウルフ — 北欧神話にあつて主催神たるオーディンを呑み込んで殺すとされる狼— との終末の最終決戦] に関わるナンバーが 432000 であるとのことを指摘している — 正確には 540 の扉から 800 人の戦士が立ち現れ、総計が 432000 となるとのことを指摘している—— のが直上にてその著作より引用をなしたとのジョセフ・キャンベルであるが (: 同ジョセフ・キャンベルの指摘に間違いはない. たとえば、本稿筆者が内容検討した『エッダー—古代北欧歌謡集』(新潮社刊)にあつて(その p.257[ギルヴィたぶらかし]の収録部よりの引用をなすとして)“すると、ハールが答えた。「なぜ、ヴァルハラにはいくつ扉があるか、どれくらいの大さの扉かとたずねないのかな。もし、それをきいたら、誰でも好き勝手に出入りできなければ不思議だというに違いない。そして、中に入るより、中で席をとる方が楽だということは事実どおりといっておかなくてはなるまい。グリームニルの歌にこう歌われている。/ヴァルハラには五百と四十の扉があらん/狼との戦に赴くとき/八百人の戦士 一つ扉より/一度に打って出るなり(グリームニルの歌(二三))” (引用部はここまでとする)と表記されているとおりで、そこに見る

[終末局面と結びつく 432000 とのユニーク・ナンバー]

と「洪水伝承」絡みで関わるクロノスのありようについてはよりもって問題となると

ころについて後の段にて補足表記する所存である。

脇に逸れての付記はここまでとしておく

(直上までの長々と脇に逸れての表記から引き戻して)

さて、バビロニア洪水伝承というものは

[ベロツソスの伝える洪水伝承] (初期キリスト教知識人エウセビオスの著作などを介して「もしかたしらは、」ミルトンの耳に入っていた可能性もあるとの洪水伝承)

となっているのだが、その内容それ自体は

[蛇による不死の薬草の奪取とのモチーフと結びついたギルガメシュ伝承とは「異質なものである」]

とのことを示す典拠を続けて挙げておく。

まず、著作権が切れている文献の公開に注力しているとの Project Gutenberg の媒体を通じてオンライン上より誰でも容易に確認できる(検索エンジンへの文書タイトル入力などを通じ捕捉・ダウンロードできる)ところの、

### **The Babylonian Story of the Deluge as Told by Assyrian Tablets from Nineveh**

とのタイトルの論稿 (『ニネヴェより出土のアッシリア碑文らにて語られるところのバビロン洪水伝承』とでも訳せよう論稿 / その著者たる E. A. Wallis Budge ウォーリス・バッジが 19 世紀から 20 世紀にて権威筋に位置していたエジプト学・中近東研究の「実務的」専門家となる論稿) の内容を引く。

誰でも後追いできるとのかたちでオンライン上から全文確認できるものであるから(本稿の信用性担保のためにも)そこよりの引用をここにてなしているとの著作たる表記の論稿 (**The Babylonian Story of the Deluge as Told by Assyrian Tablets from Nineveh**) には

[ **The Legend of the Deluge According to Berosus** ] (そのものずばりで [ベロツソスに由来する洪水伝承])

との節にて次のような記載が認められるようになっている (:オンライン上より表記のテキスト入力で[文献的事実]の問題として裏取りできるところとして次のような記載が認められるようになっている)。

(直下、考古学者ウォーリス・バッジの手になる **The Babylonian Story of the Deluge as Told by Assyrian Tablets from Nineveh** にあつての **The Babylonian Story of the Deluge as Told by Assyrian Tablets from Nineveh** より引用をなすとして)

---

"After the death of Ardates, his son Xisuthrus reigned eighteen sari. In his time happened a great Deluge; **the history of which is thus described. The Deity, Cronus, appeared to him in a vision, and warned him that upon the 15th day of the month Daesius there would be a flood, by which mankind would be destroyed. He therefore enjoined him to write a history of the beginning, procedure and conclusion of all things; and to bury it in the city of the Sun at Sippara; and to build a vessel, and take with him into it his friends and relations; and to convey on board everything necessary to sustain life, together with all the different animals, both birds and quadrupeds, and**

**trust himself fearlessly to the deep.**

(訳として)

「先王 Ardates の死後、継承者 Xisuthrus クシストロス王は 18sari の期間、統治をなした。彼の治世の折、大洪水が発生したとされ、(ベロツソスに由来する)歴史はこのように描写している。

[クロノス神が Xisuthrus の幻覚の中にて現れ、Daesius の月、その 15 番目の日に洪水が発生するとした。従って、王は始期・中途経過・結末の歴史を書かしめることに注力し、それを Sippara に在する[太陽の都市]に埋めさせしめた。そして、洪水をしのぐための乗り物を建造、彼と一緒に彼の友人係累縁者、そして、ありとあらゆる種類の動物ら、鳥類・地を這う獣らとともに命をつなぐに必要なすべてを荷として運びこみ、彼自身をして恐れもなくその深部に委ねた]。

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上のようにベロツソスが記録して今日に伝わっているところの洪水伝承とは

[クロノスが夢見に現われて王 Xisuthrus に洪水の発生を警告、ノアよろしく動物ら収容の方舟を造って避難すべしと伝えた]

とのものであるとの記載がウォーリス・バッジ(前世紀前半、大戦期前まで大英博物館の長を勤めながら考古学界に影響力を誇っていた権威筋の学者)、その著作にあってなされている(:その点、ここでウォーリス・バッジ著作の解説を紹介している[ベロツソスについて言及しているとのエウセビオス著作]あるいはそれについて扱った諸文献については **The Chaldean Chronicle, Xisuthrus, Chronos** ([文書名][洪水伝承にまつわる王の名][洪水発生を伝えたクロノスの名])などと英文にてグーグル検索エンジンにを入力すれば該当文書特定できるものである)。

さらに引用を続ける。次いで、洪水伝承がいかようなものであったのか、エウセビオス著作それそのものよりの引用をなす、具体的には Edward Hamilton Gifford との識者によって近代、英訳がなされている版、

**Eusebius of Caesarea: Praeparatio Evangelica ( Preparation for the Gospel ) —E.H. Gifford (1903)**

とのかたちで検索エンジンを動かすことで「オンライン上より文書内容を捕捉できる」との4世紀のキリスト教教父(キリスト教初期知識階級)たるエウセビオスの手になる著作『福音の備え』(ラテン語での表記は **Praeparatio Evangelica**。羅語ではなく英語での表記は **Preparation for the Gospel**。本稿にての**出典(Source)紹介の部 48**の部にて[金星の象徴神格としての女神ビーナスに対する中世期「前」の人間の理解]を示す著作として引用なした著作でもある)よりの引用をなすこととする。

**Praeparatio Evangelica** の20世紀初頭(1903年)になる訳出版、その巻9の部には注記として原文抜粋するところとして次の記述が含まれている。

(直下、**Preparation for the Gospel** (1903)にての book9 の部より引用するとして)

---

ABYDENUS] 14 'After him reigned among others Sisithrus, to whom Kronos foretold that there would be a great rain on the fifteenth day of Desius, and commanded him to hide everything connected with literature at Heliopolis in the country of the Sippari.

'And when Sisithrus had accomplished this, he straightway sailed up towards Armenia, and immediately what God had predicted overtook him. But on the



third day, when the rain had abated, he proceeded to let loose some of the birds, to try whether they saw land anywhere that had emerged from the water.

(大要訳として)

「(エウセビオスはその表記を参照しているところの ABYDENUS というギリシャ人史家に由来するところとして) Sisithrus 王(訳注:クシストロス王に定置される王であろう)に対してクロノス神が予告したところでは Desius の月の 15 番目の日にて大量の雨が降るので、(記録を後世に遺すため)、シッパル地方のヘリオポリスに文献的記録らのすべてを隠せとのことであった。そして彼 Sisithrus 王はこれを全てなし終えアルメニアに向けて漕ぎ出したところ、突然、神が予見したところの洪水が彼を襲うことになった。しかし、三日目にして大雨は止み、彼はそれらが水面から陸地を垣間見ることがあるか試すために鳥らのうち何匹かを離した」

---

(引用部はここまでとする)

以上、引用なしたことから理解いただけようが、エウセビオスが今日に伝える(ベロツソスに由来するとされる)バビロニア洪水伝承には

[クロノスの夢見による予知とのかたちでの洪水への言及] (ノアの方舟伝承とつながる側面)

[動物の種を後世に遺すべくもの方舟への生物の搭載への言及] (ノアの方舟伝承とつながる側面)

は見出せても、『ギルガメシュ叙事詩』に含まれるところの、

[蛇による「不死」の奪取と結びついているとの側面]

[神(の一部)が人間(ウトナピシュテム)の不死化を —— (エデンにて知恵の樹の実を取って食らった人間が生命の樹の実まで食することに難色を呈してエデン追放を決定した旧約聖書『創世記』の神の言行のように) —— 認めようとしなかったとの側面]

はなんら見出せない(ただし、『ギルガメシュ叙事詩』の方にあつての方舟の選別者、ウトナピシュテムもまた[動物の種を後世に遺すべくもの方舟への生物の搭載]をなしている —— (本稿の **出典(Source) 紹介の部 60**にて『ギルガメシュ叙事詩』(岩波書店) p. 135より引用なしたところとして) “ギルガメシュの懇望にまけて、ウトナピシュテムは自分が神々に列せられた経緯を語って聞かせる。神々が人間を滅ぼそうとして地上に洪水を送ったとき、知恵の神エアの指示により、彼は方舟を建造し、地上のすべてを粘土に帰した洪水からいのちあるものの種を救ったが、洪水を起こしたエンリル神はそれを知って怒った”(引用部はここまでとする)と言及されているとおりである—— との式ではエウセビオスが今日に伝えるバビロン洪水伝承はギルガメシュ伝承のそれと共通性を有していることになる)。

**出典(Source) 紹介の部 60(2)**はここまでとする)

---

ここまでにて

[「ミルトン時代に伝わっていたと見受けられるバビロン洪水伝承」と[「どういふわけなのか」ミルトン『失樂園』との接合性が観念できるようになっているギルガメシュ叙事詩に見る洪水



伝承(19世紀に発見された伝承)]の質的差異]

について説明なしたところで「さらに」解説しておくが、

[ヘレニズム期(アレクサンダーの東方征服によって地中海世界と中近東以東の世界が融合していた紀元前4世紀以降の世界)にあつてメソポタミア地域の洪水伝承を語り継いでいたとのベロツソスのギリシャ語記録内容を後のキリスト教識者サイド(教父エウセビオス)が引用とのかたちで遺していたとのことで知られている記録]

の他「[こも]メソポタミア界隈の大洪水にまつわる伝説が[ギルガメシュ叙事詩]以外のところで存在しているとのことが明らかになつてもいるとのことはあるにはある。

その点、ギルガメシュに不死の秘密を伝授した[ウトナピシュティム]の質的同質存在として、

[ジウスドラ Ziusudra] (ジウスドラというのはベロツソスがそちら内容を見ていたのではないか、とされる再発見されての遺物、シュメールの王の事績につき触れた碑文 **Sumerian king list**『シュメール王名表』に登場する洪水伝承で選別され生き残つたと伝わる男で、同ジウスドラ、[エデンの園]に比べ見られるとの **Dilmun**[ディルムン]、神話にては[人類創造の地]であり、かつ、神々が不死を約束する桃源郷]として、他文脈にては[交易上の物資集散地域]としてメソポタミア文献に記されている理想的なる土地に招待されたことが和文ウィキペディア[大洪水]項目にすら言及されているとの人物となる)

[アトラハシス Atrahasis] (アトラハシスというのはアッカドに由来する **Epic of Atrahasis**『アトラハシス伝承』に登場する洪水伝承の生き残りのことを指し、また、ギルガメシュ叙事詩のウトナピシュティムの別名存在に比定されている碑文上の人物でもある)

らの両者に関わる場所のメソポタミア洪水伝承が存在している(と明らかになっている)とのこと「も」がある。

だが、文明の揺籃地メソポタミアにあつてのそれら洪水伝承——ベロツソスとエウセビオスを通じて伝わつたもの「ではない」ジウスドラやアトラハシスの物語——にまつわる記録がミルトンに直接的に影響を与えていた可能性はギルガメシュ叙事詩同様「ない」と述べられるところとなっている。

ジウスドラの事績について記した **Sumerian king list** の中の一節が発見・解読を見たのは近代になってからであるとされており、また、アトラハシスの事績について記した **Epic of Atrahasis** が発見されたのも近代になってからだというのが考古学者ら言いよつたところとなっている、門外漢でも容易に同定捕捉なせるとのそれら伝承の再発見経緯となつているとのことがあるからである(直下、目立つところの言われようを紹介しての部を参照のこと)。

---

(ジウスドラ伝承・アトラハシス伝承がミルトンに参照されていたとは時期的に見て、考えられないようになってきているとのことにまつわる典拠について)

まずもつてジウスドラについてからだが、英文 Wikipedia[Ziusudra]項目にての記述をピックアップすることからはじめる。

ウィキペディア同項目にあつては

**In the WB-62 Sumerian king list recension, Ziusudra, or Zin-Suddu of Shuruppak is recorded as having reigned as both king and gudug priest for 10 sars, or periods of 3,600.**

と記載されているが、意を示せば、

「WB-62 系統のシュメール王名表に対する[分析的見地に立つての分類]

(rencension)にてジウストラ、ないし、ジン・スドゥ(Zin-Suddu)が古代メソポタミア都市シュルツパクにて君臨していたとの記述が記録されていた」ということである。そこに見る[WB-62 系統シュメール王名表]とは名門の一族より出た城持ちの人物にして考古学者でもあったとのことである Herbert Weld Blundell ハーバート・ヴェルド・ブルンデルの頭文字(WB)をとってのものとなり、ためにジウストラの事績が記されているシュメール王名表に対しての研究が進捗を見たのは同ハーバート・ヴェルド・ブルンデル活動年代、要するに、**20世紀前半と判じられる** (については英文 Wikipedia[ Sumerian King List ]にも “The last two sources (WB) are a part of the "Weld-Blundell collection", donated by Herbert Weld Blundell to the Ashmolean Museum.” (訳)「シュメール王名表の最後の二つの構成資料(WB 分類のもの)はハーバート・ヴェルド・ブルンデルによってアシュモレー博物館に提供されたヴェルド・ブルンデル・コレクションに属するものである」と記載されており、シュメール王名表のその伝と結びつく命名由来が簡潔に示されている —— 同点については考古学者でもあったとのことである Herbert Weld Blundell のやりようを扱った情報としての In 1921-1922 he presented the Weld Blundell Collection to the University of Oxford といった事績も参照されたい—— )。

加えて述べれば、英文 Wikipedia[Ziusudra]項目にてはジウストラの物語が刊行された年次につき 1914 年である、published in 1914 by Arno Poebel であるとの表記もがなされてもいる。

以上、ジウストラの物語が(有力者一族の出の者の保有していた、発掘されし『王名表』に対する解説から)世に明らかになったのは 20 世紀前半のことであると判じられるようになっているわけである。

さらに、(ジウストラと並んで)、**アトラハシスのことをミルトンが知りえなかった**とのことについては英文 Wikipedia[Atra-Hasis]項目にての **“Its fragments were assembled and translated first by George Smith as The Chaldean Account of Genesis; the name of its hero was corrected to Atra-Hasis by Heinrich Zimmern in 1899.”** (訳として)「アトラハシス関連の伝承断片はカルデア人版の創世記(のノア伝承の)説明としてジョージ・スミス(訳注: **19世紀活躍のアッシリア学者でギルガメシュ叙事詩翻訳も同男の手になるとされる**)によって収集・翻訳され、そこにみる英雄の名は[アトラハシス]とのものであるとの方向に 1899年、ドイツ人ハインリヒ・ツィンメルンによって正されることとなった」との現行記述の引用で足りることであろうと思う)。

---

以上取り上げたところで、さらに述べておくも、ミルトン以後の 19 世紀末から 20 世紀前半にその内容が明るみになったとの、

[『王名表』に見るジウストラ伝承]  
[アトラハシス碑文に見るアトラハシス伝承]

以外にも類似の伝承が存する。メソポタミアにではなくギリシャにも、

[共通の伝承発生源が観念できるところの類似の伝承]

が存するのである。

すなわち、

[デウカリオン洪水伝承] (デウカリオンという男がアルカディア人の所業に怒った人類粛清のためのゼウスの洪水から(プロメテウスの忠告によって)生き残り、人類の種を後の世に繋いだとの筋立ての洪水伝承)

というものが存在しており、そちらの方については(きちんと記録に残り続けたものとして)ミルトンが参照していても何らおかしくはないものとなっている。

先に取り上げた、

[黒海洪水伝承]

を伝えていたとのサモトラケの近縁領域(ギリシャ界限)の洪水伝承に親和性高いものとしてそちらデウカリオン洪水伝承の方がミルトンの耳に入っていたものであった可能性は「十二分に」ある、というのも、ローマ時代のオーヴィッドことオヴィディウスがものした *Metamorphoses* 『変身物語』という著作、その『変身物語』にあってからして[デウカリオン洪水伝承]への言及がなされており、同著『変身物語』が活版印刷にかけられたうでミルトン「前」時代の英国、その場にて成立を見たシェイクスピア戯曲などにも材源として影響を与えていたとのことは[英文学に本当に詳しい人間]ならばよく知っていそうなどころだからである——ローマ期文人オヴィディウスが著した *Metamorphoses* 『変身物語』が後世文物らに与えた影響については英文 Wikipedia に[ *Cultural influence of Metamorphoses* ] ( [『変身物語』の及ぼした文化的影響] ) と題されてのそれ専門の一項目が設けられているぐらいの通用性が伴ってのこととなる(シェイクスピア戯曲との兼ね合いでは『夏の夜の夢』や『テンペスト』などがオヴィディウス著作の影響下にあることがよく知られている)——。

しかし、文人ミルトンも当然に知るところであったと十二分に考えられるそちらギリシャ由来の洪水伝承、デウカリオン洪水伝承より材を取って、ミルトンが『失樂園』の中に

[「蛇に横槍を入れられて」「不死を見失った」人間についての物語]

に[洪水伝承]の比喩を入れ込んだとは考え「られない」ところである。

というのも、デウカリオンの洪水伝説「にも」問題となる要素、『ギルガメシュ叙事詩』のウトナピシュテムの物語に見るような

[蛇による不死の略奪]

との筋立ては含まれて「いない」からである。

その点、[デウカリオン洪水伝承]とは

[アルカディアの地の住人の狼藉に激怒したゼウスが大洪水を起こして人類粛清をなそうとしたのをプロメテウスの助力でデウカリオンだけが命をつなぎとめた(方舟を建造して生物をその中に満載して未曾有の大難を切り抜け、命の種を次代に繋ぎ止めた)]

との伝承であり、そこに[蛇による不死の略奪]との筋立ては反映されて「いない」のである——和文ウィキペディア[デウカリオン]項目にて(引用するところとして)“リュカーオンの息子たちは22名とも50名ともいうが、その悪行の噂はオリンポス山にも知れ渡っていた。ゼウスは貧しい旅人に身をやつしてリュカーオンの息子たちのもとを訪れた。彼らは旅人に臍物入りのスープをすすめたが、スープには、羊や山羊の臍物だけでなく、彼らの兄弟の一人ニクティーモスの腸が混ぜてあった。ゼウスはこれを見破ってリュカーオンの息子たちを狼の姿に変え、ニクティーモスだけは生き返らせたという。別説では、息子たちが殺したのはニクティーモスではなく土地の少年であり、ニクティーモスが生き残ったのは、ガイアがゼウスを止めたからであるという。ゼウスはこれらのことで人間に嫌気がさし、絶滅させてしまおうと、地上に大洪水を起こした。南風とともに豪雨が起り、恐ろしい速さで海の水かさが増した。沿岸や平野にあるすべての都市が流され、世界はわずかな山の頂以外は水浸しとなった。しかし、デウカリオンは父プロメテウスから警告を受けていたので、いち早く方舟を作って食料を積み込み、妻ピュラーとともに乗り込んでいた”(引用部はここまでとする)と記載されているとおりのよく知られた伝承である——。

ここまでにてミルトンがギルガメシュ叙事詩と同様に内容を把握することができなかつたろう[ジウストラ伝承][アトラハシス伝承]は無視すべきである、ミルトンがその内容を把握しえたとも十二分にとらえられるものの内容の不一致性より[ギリシャのデウカリオン洪水伝承][も]同様に無視すべきであるとの話

をなした。

そのうえで、エウセビオス経由の洪水伝承（先述したところの [クロノス神の王に対する警告] を内容としているとの洪水伝承）と直近言及の洪水伝承らを除き、顧慮に値する洪水伝承は存在しない——ゲルマン神話にあっても巨人ユミル死骸をオーディンらが解体して血潮による世界創世の洪水を引き起こしたなどもされるが、あるいは、ヘブライ語伝承にて神への叛逆天使らグリゴリらが地上人と交わって造りだした巨人らネフィリムが洪水で滅せられたとも伝わりもする（ノア伝承の亜種）がそうしたものらも諸共、[一致性の不備]から顧慮に値しない——と解されるようになってもいること、強調しておきたい（：[対象が「ない」]との否定的事実を指し示すのは（「あるかも「しれない」]とのことを含めての）[否定の事実の指し示し対象の広さ]から[悪魔の証明]などと呼ばれるぐらいに指し示しが困難なことが知られているが、といった側面につながりうるところにて「他にめぼしい伝承はない」と強調をなせるだけの資格、十全十二分なる識見というものをこの身が保有しているのか疑念符を付けたいとの向きもあるかもしれない。だから書いておくが、（翩々へんぺんたる才子ぶったやりようをとかく忌み、「浅学非才」「愚見」を強調するのも日本なりの美風であるとのことを敢えて忘れもしての話として）、当該領域についても色々と調べて見識を深めた（中国に伝わる蛇の神・伏羲らに結節するところの洪水伝承の調査を入りに色々と調べて見識を深めた）者としての筆者がジェイムズ・フレイザーが著した **Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law** との著作にての洪水伝承絡みのパート（抄訳版も国内にて出されているとのパート）の原著および訳書よりの原文引用を本稿ここまでの段で適宜なしてきただけの識見を蔵してもいるとのこと、何卒、忘れないでいただきたい）。

以上より述べられることは——多分にくどくも繰り返しての話とはなるが——次のようなことである。

ジョン・ミルトンの『失樂園』の特定部パート——罪と死が人間に襲いかかることになったとのプロセスを描いての部——は、

[洪水伝承との関連性「も」が観念されるとの（トロイア界限通路構築への）言及をなしているとの側面]（すなわち、[ボスポラス海峡のゼロからの構築とワンセットの黒海洪水伝承・黒海洪水仮説の舞台たるトロイア近傍にまつわるところでボスポラス・ダーダネルス近辺 [通過] [通路構築] に対する多重言及をなしているとの側面] / [トロイア攻囲勢たるギリシャ勢の過半が洪水に飲まれたとの（『トロイア戦記』に見る）末路をマイクロ・スケールのありようとして呈しているとの（ホメロス伝承の中の）[オデュッセウス一行の渦潮の怪物カリュブディスとの遭遇の部] に対する言及をなしている側面]）

[蛇による不死の争奪のエピソードを描いているとの側面]

との観点で『ギルガメシュ叙事詩』（の洪水伝説を収めた 11 番目の碑文）に特有のストーリーに見る、

[神の肅正を生き残った男（ウトナピシュテム；洪水を引き起こし、人間の不死化を厭いもした神の一柱の反対があったものの不死化された存在）の洪水伝承にまつわるエピソードとしての側面]

[蛇による不死の争奪のエピソードを描いているとの側面]

と——そも、時期的に類似の要素の参照・被参照の関係が想起されるところではない（先述）との[奇怪なかたち]でながら——接合性が「観念される」ところのものとなっている。

そう、聖書『創世記』、[知恵の具備と不死化の両立を厭うた神によるアダムとイブのエデンの園からの追放]や[ノアの方舟と人類に対する神の肅正]が描かれているとの聖書『創世記』の内容に通ずるところで接合性が「観念される」ところである（：ここにて



は『上にあつての『失樂園』にあつての洪水伝承にまつわる側面というものに穿ちすぎな風が感じられなくもない』と見られるようなところがいまだ払拭されていないとの観点から「観念される」ところである」との言いまわしを用いているわけだが、そちら「観念される」ところである」との言いまわしが「ヘラクレス第 11 功業に見る黄金の林檎関連のエピソードとエデンの園での誘惑との多重の接合性」および「同じくものヘラクレス第 11 功業とギルガメシュ伝承の多重の接合性」の指し示しでもってそれ（「観念される」ところである」）では済まされないとのもの、「関係性の環の密なることから（異様な執拗性・「非」人間性を伴っての）「恣意」の賜物であろうと「見ざるをえない」」とのものたることを示さんというのが本稿の後の段の流れともなる——ここでは「前段階として」「観念される」ところである」との表現を用いているにすぎない——）。

筆者の上の申しようについて[奇怪性]を完全に否定せんとする、完全に[的外れである]と理知的・理性的に、理の白刃にて一刀の下に叩き伏せんとする向きは反対論拠、そう、たとえば、「全てはミルトンの人間レベルの知識の幅の問題で済まされる」といった論拠を呈示するうえで

[隠れた[動因]]

の介在を顧慮しなければならないとのことになるだろう（[動因]との語については辞書に載せられているように「ある物事を直接的に」引き起こすもの」との意味合いで用いている——といった[隠れた[動因]]の介在を想起せずに「偶然であろう」と言下に否定するのは理知的・理性的やりようではないうえ、筆者の方より追加の具体的論拠が呈示されるとき(事実これよりそうする)にあつてそうしたやりようをとることは一層もって愚人・狂人の挙の如くものにすぎないとのことになるとのこと、強調しておきたい——）。

そちら議論帰趨を決する、「ただの偶然である」といった論法をこり押しするようなやりよう(完全にではなく、不完全なる反駁にしかならぬとのやりよう)などなす必要もなかろうとのかたちで決するとの

[隠れた[動因]]

というものは筆者の指摘のありよう・やりようを「不適切」として完全に斥けたい者にとって摘示が必要であろうとのものであると同時に、また、筆者サイドよりも別のかたちで摘示する必要があると見ているものである(筆者としても自身の指摘に「偶然であろう」の言い分で逃げを打たれる余地があるのは望ましくはないと考えているのでそうした論理の成立を許さぬだけの[動因]の呈示が必要と判じている)のだが、そちら大別すると次のようなところとなるものである。

[「未発見の古典」あるいは「発見されているも本稿筆者が識見不足より言及しそこねている古典」に対するミルトンの把握があつた]（:筆者の指摘を的外れとして斥けたい向きが材料呈示すべきであろうところの動因）

[「ミルトンの伝承理解「以外」の他のことが（関係性の環を描かせしめるとの格好で）不可解に作用していると指し示せるだけの根拠がある]（:筆者の方が問題ありようについてなんら言い逃れを許さぬ式での訴求をなすために呈示する必要があると判じているところの動因）

につき、後者、「ミルトンの伝承理解以外の他のことが作用していると述べるだけの根拠」としての[隠れた[動因]](ここまで言及しなしていなかった[物事を直接的に引き起こしている力学]の片鱗を示す材料)が存在しているとのことの摘示でもって

[偶然の一致や通り一通りの文化伝播問題では済まされないとの尋常一様ならざる側面がそこにある]とのことを指し示すことに本稿ではこれより注力する（事前に断っておくも、その尋常一様ならざる側面の指し示し、最終的には「ギルガメシュ叙事詩にての洪水伝承」と「ヘラクレス 11 功業の黄金の林檎の探索の物語の多重の接合関係」に向けて展開していくとの指し示しは従前の内容の振り返り・整理の部も含めて「相当長いもの」ともなる）。



これよりの証示の内容に関わるところの[布石]の部として

## 432000 Year (extremely) "unique"

つい最前の段にて

[カリ・ユガに見る数値規則とバビロニア洪水説話に見る数値規則(432000とのユニーク・ナンバーが[年]との単位系を同一にして登場してくるとの数値規則)に際立っての一致性がみとめられること]

に注意を向けました。そのことにまつわっての「さらにもって脇に逸れての別枠付記の部をここに設けておく — 「きわめて長くもなるも、」と申し添えての部として設けておく— 。

Saturn (Cronus)



Father Time  
( Grim Reaper )



Symbolism

図は[ローマの神格サトルナス Saturnus] (英語表記サターン Saturn) および[時の神クロノス Chronos]とが結びつけられていることを強調し、そして、彼ら[サトルナス]および[クロノ

ス]が

[死と時間の象徴] ([作物の収穫と命の刈り取りと結びつく鎌] [砂時計])

と往々にして結びつけられていることを示すためのものとなる。

まずもってして上掲図にあっての[上の段]にて挙げている図らの出所と概要の紹介をなすこととするが、それら図らは左右とも英文 Wikipedia の[Saturn (mythology)]項目 —[サターン(神話)]項目— に現行もって記載されているとのものとなり、[左側(の図)]の方が

[16世紀頃に製作された(とのことである)ローマの豊穡の神サトルナスを描いたものとして(当該の英文ウィキペディア項目にあって)紹介されている版画]

となり、対して、[右側(の図)]の方が

[18世紀から19世紀に活動したロシア人画家である Ivan Akimov との人物の手になる1802年製作の Saturn Cutting off Cupid's Wings with a Scythe 『キューピッドの羽を鎌で刈り取るサターン神』との題の画]

となる。

以上、上の段の図葉らでもってからして[ローマのサターン(サトルナス)神]が[羽が生えた鎌持つ老人]との似姿で描かれることはよくお分かりいただけることか、とは思うが(Saturn Cutting off Cupid's Wings with a Scythe との画題でまさにそうした似姿のサトルナスを描く絵画が存在している)、そうしたサターンの似姿、[羽が生えた鎌持つ老人]は

[時の翁 Father Time]

との名で欧米圏にて認知されている[[時間]の体現存在の似姿]そのものの似姿「でも」ある。

そのことを示すために挙げもしたのが上掲図にあっての[下の段の図]である。そちら図の出所も同文に目につくところとしての英文 Wikipedia [Father Time]項目([時の翁]項目)に掲載されての図、

[ワシントンD.C.にての議会図書館(ライブラリ・オブ・コングレス;日本の国会図書館の米国版で世界最大の図書館)の存するジェファーソン・ビルディングに敷設のジョン・フラナガンという19世紀美術家の手になる[時計]に供されての像]

となる(:表記の[時の翁]の米国議会図書館敷設の時計に見る像については英文 Wikipedia[ Father Time ]項目、“Father Time is the anthropomorphized depiction of time. [...] Father Time is usually depicted as an elderly bearded man, dressed in a robe and carrying a scythe and an hourglass or other timekeeping device (which represents time's constant one-way movement, and more generally and abstractly, entropy). This image derives from several sources, **including the Grim Reaper and Cronus, the Greek Titan of human time, reaping and calendars, or The Lord of Time.**”(訳として)「時の翁(ファーザー・タイム)は時の擬人化存在である。時の翁は通例、ローブを纏い、鎌と砂時計、そして、あるいは他の時間計測用具(時間が一方向的なものであること、より包括的・抽象的な式ではエントロピー(の増大)それそのものを示すもの)を手を持った姿で描かれる。この[時の翁]の似姿ありようはいくつかの材源、[グリム・リーパー(死神)] および [人間の時間を司る大いなるギリシャのタイタンであるクロノス]、[刈り取りと暦]、言うならば、[時の君主]との材に由来するものである」との説明にてはじまる同 Wikipedia[ Father Time ]項目にあって“Detail of Father Time in the Rotunda Clock (1896) by John Flanagan, Library of Congress Thomas Jefferson Building, Washington, D.C.”と紹介されているものでもある)。

上掲図の一目もってしての検討で瞭然としたかたちでお分かりいただけることかとは思いますが、時の体現存在、[[命と時間を刈り取る鎌]と[砂時計]を手を持っている時の翁(ファーザー・タイム)]が[ローマのサターン]の描画形態そのものの格好をまさしくも呈している(とのことがある)。

直上図解剖でもってして

[ [ローマの神サターン] (サトルナス) と [時の体現存在] (ギリシャの時の神クロノスとほぼ同じくもの存在) の接合 ]

がいかように堅い話なのか、ご理解いただけたか、とは思う。

では、何故、そうしたことをくださと紹介なしたのか。聴くなければ(あるいは知的気風を有していなければ)、そも、このような解説にまで目を向けまいかと思うので、きちんと検討されているとの向きの[理解]は早いとは思いますが、一義的にはそれは先立って言及なした

[ [カリ・ユガ] と [クロノス(ローマにてのサトルナス)登場のバビロニア由来の洪水伝承として欧州にて伝わっているエウセビオス資料] の奇怪なる一致性の問題 ]  
(432000 との 6 桁の[「実にもって」のユニーク・ナンバー] にまつわる一致性)

に関わることであるからであるが、より根本なところとしては

「この世界の [人為構築物としてのありよう] に同文のことが深く関わると見える」

のみならず

「この世界の [結末の付け方] にも同文のことが関わっている節がある」

とのことがある (と判じざるをえない) からである。

にまつわってはこれ以降の A. および B. の解説を順々に検討いただければ理解なしていただけるであろう。



フリーメイソンの外部の人間、しかも、非事情通にはおよそ識られているようなことではないが(本稿筆者もフリーメイソンの外部の人間だが、色々と思うところがあって彼らのことを精査していくなかで事情には多少、詳しくもなった[つもり]ではある)、彼らフリーメイソンには「命を刈り取る鎌」「砂時計」「髑髏」を彼らの「瞑想の根本」と結びつけるカルチャーがある。確として根深くもある。

フリーメイソンにあつての

[沈思熟考の部屋] (英語表記は Chamber of Reflection となる)

とのかたちで【イニシエーション】の局面なども込みで利用されている空間、そして、彼らの位階シンボルは

[命を刈り取る鎌] [砂時計] [髑髏]

と濃密に結びつけられているとのことがあるからである ( : 無慈悲なる刈り取り手たる [グリム・リーパー; 死神] [時の翁] [サトルナス] の象徴そのものとメーソンの象徴体系は結びつけられている —フリーメイソンが [瞑想の部屋] や [位階シンボル] にいかように [命を刈り取る鎌] [砂時計] [髑髏] を用いているかは、そう、皮相的な解説から深いところの解説まで Chamber of Reflection や Weeping Virgin といったキーワードで検索なして表示されてくる英語媒体などを参照することでよく理解いただけることか、とは思 ( : ただし、[相



応の者達ら] (質的に狂っているか頭の具合が過度によろしくはないかのどちらかであるとのことをそればかりが目立つように撒布している (似非) 神秘主義者や同文にシステムが好むような情報操作個体ら) の手仕事として [賢き向き・真摯誠実を求む向きには軽侮反応しかきたさぬように調整されている節ある煙幕] ばかりしか出てこない日本語のオンライン上情報 (正確には情報未満のジャンクラ) は度外視してそうも述べる) —— )。

さて、フリーメーソンにはサタン崇拝 (サトルナスことサターン崇拝ではなく [悪魔の王] たるサタンの崇拝) の陰謀「論」 Conspiracy Theory がつきまとっている (頭の具合もよろしくはない、人間的気風もよろしくはないとの陰謀論者の言辞ばかりが目立つがゆえに [陰謀「論」がつきまとっている] とここでは表している)。

本稿の後の段で詳説することになるが、フリーメーソン自身は

**「自分達の神は [グレート・アーキテクト・オブ・ユニバース] ( Great Architect of Universe こと GAOTOU) であってサタンでもなければ、ルシファーでもない」**

と強弁し、彼ら自身、一自己欺瞞の問題もあつてか— そうした論法を信じきっている節もあるのだが、ここではきと述べ、フリーメーソンの枢要な象徴がそれ絡みの象徴「とも」になっているとのローマの神サターン (サトルナス) は現実には悪魔の王サタンと結びつく、純・記号論的に次の観点 (i. から iv. と分けても呈示していく観点) から悪魔の王サタンと結びつく存在であるとのことが「ある」 (勘違いいただきたくはないのだが、ここでは「フリーメーソンは悪魔崇拝団体である」などとの陰謀論を鼓吹・主張したいの「ではない」。「問題は、質的・記号論的にそうも表せられるようになってきているとのことであり、そして、そうしたかたちで人間操作がなされているところの背景・背面にある意図が奈辺にあるかとのことである)。

(以下、何故、サトルナスが悪魔の王のサタンと結びつくのかの理由を i. から iv. と振って順々に挙げていく)

i. ローマのサトルナスに対する英語呼称サターン Saturn と悪魔の王の英語呼称サタンは綴り・響きの面から近いところがある (読み手たる貴殿が [サターン] (日本にてはテレビゲーム産業のやりようとしてゲーム機の名前にも用いられているサトルナスによって象徴されてきた天体、[土星] の呼称でもある) および [サタン] との名詞を耳にしてそれらが響きとして近くはないというのならば、そうとらえればいいが、とにかくも両者の [響き] が近いと述べることになんら無理はない)。

ii. [冬至] の折、現代社会にてはキリスト降誕祭、要するに、クリスマスと呼称される行事が執り行われているその [冬至] の折にてローマ時代、[サトルナリア Saturnalia] との祭りが催されていたとのことが知られている (については和文ウィキペディア [サトルナリア祭] 項目や英文 Wikipedia [Saturnalia] 項目程度のものでもかなり込み入った解説がなされているところとなる — ちなみにサトルナリア祭では主従転倒、大量の奴隷に支えられての社会構造となっていたローマにて主人が奴隷に礼儀を尽くすとの慣行が見られたとされるが、それはフリーメーソンの理念と一般的に鼓吹されていもするもの、[自由]・[平等]・[友愛] に相通ずる慣行でもあると言えなくもなかろう—— )。

ここで臆面もなく言及するが、何故なのか、著名な複数絵画を接合させて見ることで

[冬至にて祝祭が実施されるキリスト降誕] (サトルナリア祭が行われていた [冬至] にてクリスマスと呼ばれる祝祭行事が今日実施されているとの

## キリスト降誕)

と

[黙示録の悪魔の王 (七つの頭を持つ赤い竜) のにじりより]

の構図がそのままにオーバーラップするようになっている

とのことが「ある」——本稿を公開しているサイトの一(現行、どういうわけなのか、「極めて」表示されにくくもなっており、また、さして閲覧されている節もないとのサイト)でも細かくも解説しているが、具体的には美術史にあつて著名なる15世紀の画家であるFilippo Lippi(フィリッポ・リッピ)のAdoration in the Forestとの画題の絵画(現行、英文のWikipediaにあつては同絵画のためだけの一項目が設けられているとのかなり有名な絵画)に見る構図と彼なくして欧州美術史は語れないといったほどに著名なる15世紀末から16世紀初頭にかけての版画芸術の巨匠アルブレヒト・デューラーの手になる版画[黙示録]シリーズの一葉を重ね合わせることで[キリスト誕生を祝う聖母マリアの構図]が[黙示録にて悪魔の王がにじりよってくる構図]がオーバーラップするようになっているとのことが「ある」(下の段に、にまつわつての図解も付しておくこととする)——。

そうもして

[赤い竜との形態をとる悪魔の王のにじみより]

と視覚的に歴史的絵画の中で対応するように「させられている」(解説図は下に挙げるが、とにかくも、そも「させられている」とのキリスト降誕の折、降誕際たるクリスマス——赤い竜との描写が聖書・黙示録にてなされている[サタン]のアナグラム(綴り入れ替えことば)としても成立している[サンタ]なる存在が来訪するなどの[設定]が付されての行事でもある——は本来的には異教の祭、

[サターン神に捧げるものとしてのサトルナリア祭]

のキリスト教サイドによる習合・踏襲がなされて今日にあつて実施されているものであると広くも指摘されているものとなっている。

(:例えば、本稿執筆時現行時点では和文ウィキペディア[サトルナリア祭]項目にての[クリスマスとの関係]の節にて次のような記載がなされているところとなる→(以下、引用なすとして)紀元1世紀ごろの初期のキリスト教徒がイエス・キリストの誕生日を知っていたという歴史的証拠はない。実際、当時のユダヤ人の法律や慣習では、誕生日は全く記録されなかったと見られている。World Book Encyclopedia(第3巻、p416)によれば、初期のキリスト教徒は誕生日を祝う習慣は異教徒のものだと見なしていた。実際イエスが自分の生涯について何らかの記念に類することを命じたのは、死に際してのことだけだった(ルカによる福音書、22:19)。クリスマスに類する祝祭が初めて記録に見られるようになるのは、イエス・キリストの死後数百年後のことである。…(中略)…この祝祭には現代のクリスマスと同様に贈り物をしたりご馳走を食べる習慣があった(引用部はここまでとする)。また、同じくもの極めて基本的かつ目につくところとして英文Wikipedia[Saturnalia]項目にての[Influence on Christmas]の節には次のような記載がなされているところとなる→(以下、引用なすとして) “A number of scholars, including historian David Stephens from the University of Central Florida and Professor Parker-Ducharme from Tulane University, view



aspects of the Saturnalia festival as the origin of some later Christmas customs, particularly the practice of gift giving, which was suppressed by the Catholic Church during the Middle Ages.” (訳として)「セントラルフロリダ大の歴史家 David Stephens およびトウレイン大の Parker-Ducharme を含めての一群の学者らがサトルナリア祭が後のクリスマスの習俗の起源となっている、殊に中世の間、カトリック教会に抑圧されていたところの贈り物の授受の実施といった点でクリスマス習俗の起源となっていると見ている」

表記の如しで「キリスト教の降誕際(クリスマス)のひとつの淵源はサターン神の祝祭であるサトルナリアにあり」とも指摘されている)。

iii. 上の ii. の点に加えて、である。キリスト降誕祭としての[冬至]にて実施されるクリスマスがサートウルナーリア祭と同じくローマ時代に執り行われていた[ミトラ教]の祭儀よりの習合・踏襲がなされてのものであるとの指摘もがなされていることもあり、そのことがまたサターン(サトルナス)という存在が悪魔の王サタンと結びつくことと関係していると述べられるだけの事由がある。どういふことかと述べれば、一先立ってそれにまつわる図をこれより呈示することも申し述べたわけだが—「[キリストの降誕の画]と[悪魔の王のにじりよりの画]の視覚的対応関係」などが極めて著名な作品らにあつて見受けられるとこの世界にはありもし、またもつてして、同じくもの不快なる人を食ったような対応関係の環には往古ローマのミトラ教の遺物との接点もがみとめられるとのことまでもが「ある」のだ(それがゆえに繰り返すが、「キリスト降誕祭としての[冬至]にて実施されるクリスマスがサートウルナーリア祭と同じくローマ時代に執り行われていた[ミトラ教]の祭儀よりの習合・踏襲がなされてのものであるとの指摘がなされていること、そのことがサターン(サトルナス)という存在が悪魔の王サタンと結びつくことの判断に関わる」ことになりもする。詳しくは下に呈示の図解部を参照されたい)。

(:[キリスト教の冬至の折の祭り(クリスマス)と往古ローマのミトラ教祭儀の関係]については極々基本的なところより「それで充分であろう」と判じて引用するが、英文 Wikipedia [ Mithras in comparison with other belief systems ] 項目 ([ミトラと他の信仰体系の比較] 項目)にあつては次のような記載がなされている、多少、[ミトラ教に対するキリスト教の踏襲見解]に批判を呈するようなかたちでながらも次のような記載が「現行」なされている→ “ **It is often stated that Mithras was thought to have been born on December 25. But Beck states that this is not the case. In fact he calls this assertion "that hoariest of 'facts'". He continues: "In truth, the only evidence for it is the celebration of the birthday of Invictus on that date in Calendar of Philocalus. Invictus is of course Sol Invictus, Aurelian's sun god. It does not follow that a different, earlier, and unofficial sun god, Sol Invictus Mithras, was necessarily or even probably, born on that day too." Unusually amongst Roman mystery cults, the mysteries of Mithras had no 'public' face; worship of Mithras was confined to initiates, and they could only undertake such worship in the secrecy of the Mithraeum. Clauss states: "the Mithraic Mysteries had no public ceremonies of its own. The festival of natalis Invicti [Birth of the Unconquerable (Sun)], held on 25 December, was a general festival of the Sun, and by no means specific to the**

Mysteries of Mithras.” (訳として)「ミトラ神はよく12月25日に産まれた(キリスト降誕祭が催される[冬至]の折にて誕生した)とよくも言われている。が、ベック(訳注:英文 Wikipedia にて出典表記されている資料の著者となる Roger Beck という人物)は「これは問題にならぬ」という。事実として彼ベックはこのミスラにまつわる世間的断定のありようをして[事実群の中の極めて言い古されたもの]と表している。に続けて、彼ベックは「実際、『フィロカルスの暦』(訳注:4世紀成立とされる装飾写本、The Chronography of 354 にて収録の暦)にあつてのインビクタス神の祝祭にまつわる記述にしか(同じくものことの)典拠がない」とも言う。この場合のインビクタスとは無論、(ローマにて崇められていた)アウレリアヌス帝期の太陽神ソル・インビクタスのことを指す(訳注:アウレリアヌスは3世紀のローマ皇帝であるから、キリスト降誕の折より後の存在とのことでキリスト教降誕祭との一致性は問題にならないとの文脈であろう——だが、このレトリックには問題がある。というのも、初期キリスト教勢力にて何時、冬至の祭りが祝われ出したのが模糊としており、また、キリスト降誕の日付上の証跡がなんらないことに変わりはなんらないからである——)。これはソル・インビクタスと異なる、より初期のローマの非正規の太陽神たるソル・インビクタス・ミトラが必ずしも、あるいは、多分の問題として同じくもの日に生まれたとのことに当てはまることではない。ローマ人の間にあつての秘儀実施カルトの[ミトラ神の密儀]にあつては公的な顔というものが無い。ミトラの崇拝は一部の秘儀参加者に限定されており、ミスラ教関連施設(ミスライウム)にての崇拝に限られていたことである。対してクラウス(注記:表記ウィキペディア項目にて出典表記されている著作の著者としての Manfred Clauss という人物)は「ミトラ教は何ら公的な祭儀を持っていなかった。冬至の折に催される[征服されざりしところの太陽]に対する祝祭(注記:日照の力が弱化的極を見て、それより回復に転ずるとの一般的な冬至の折柄に対する理解に因るところの祝祭かとは思われる)はミトラ教のそれに固有のものではなくより一般的なものであった」と述べている(引用部はここまでとする)といったかたちでの解説が現行にては講じられているところとなる)

繰り返す。

キリスト教降誕祭がミトラ教祭儀との習合しているとされてきた(この際、どちらが本地(オリジナル)でどちらが垂迹(オリジナルから影響を受けてのもの)かの別は問題ではない)とのその一事がサトルナスと悪魔の王サタンとの接合性問題に何故もってして相通するののか。

直上にてても委細省きながらも言及したところとして

[美術史にあつて著名なる Filippo Lippi(フィリッポ・リッピ)の Adoration in the Forest との絵画(現行、英文 Wikipedia にあつて同絵画のためだけの一項目が設けられているとの有名な絵画)に見る構図と著名なるアルブレヒト・デューラーの手になる版画[黙示録]シリーズの一葉を重ね合わせることで[キリスト誕生を祝う聖母マリアの構図]が[黙示録にて悪魔の王が首をもたげてくる構図]がオーバーラップするようになっている]

とのことがあるだけではなく(それ自体からして実にもって[奇っ怪]とのことではある)、ミトラ教遺物(にての神棚のように様式化された構図ととれるもの)を介して

[ **Fra' Filippo Lippi**(フライヤー(修道士)たるフィリッポ・リッピ)の**15世紀絵画 Adoration in the Forest**との絵画に見る構図(現行、英文 **Wikipedia** にあって同絵画のためだけの一項目が設けられているとの有名な絵画)にて描かれるキリスト降誕の構図が(画家フィリッポ・リッピがそれを目にしていたとは考えがたいとの)[**蛇の杖を掲げる異教神ミトラの典型的レリーフ**](発掘によって再発見されたレリーフ)と視覚的に重なるようになっている]

とのこと「も」があるからである。そちらもまた本稿を公開することにしたサイトの一(どういうわけなのか「極めて」検索エンジンに表示されにくくなっており(煮詰める過程でどういう料簡でどういう筋目の輩がそういうことに助力しているのかは不快な広告産業領域に配置された相応の家畜との兼ねあいでおおよそ推し量りがなせるとのありようとなっている)、またもってして、顧みられることもないと判じているとつい先ぞの段で述べもしたとのサイト) にても具体例挙げて解説していることとなりもし、

[ [**古代ミトラ教の再発見された典型的レリーフ構図にての蛇の杖を掲げる異教神の構図**] と [**ルネサンス期の著名絵画 Adoration in the Forest**] にてみとめられる構図がそのままにオーバーラップするようになっている]

とのことがあるのだ(細かくもは下の図解部を参照されたい)。



**Adoration in the Forest**  
(Filippo Lippi / 1459)  
フィリッポ・リッピの聖母子像



**The Apocalypse**  
(Albrecht Durer / 1498?)  
アルブレヒト・デューラーの版画  
『黙示録』に掲載の構図



**【前掲図左】:**美術史にあつて著名なる15世紀の画家である Filippo Lippi(フィリッポ・リッピ)の Adoration in the Forest との画題の絵画 (同画、現行、英文の Wikipedia にあつては同絵画のためだけの一項目が設けられているとのかなり有名な絵画となる —英文 Wikipedia[ Adoration in the Forest (Lippi) ]項目にあつて “Adoration in the Forest is a painting completed before 1459 by the Carmelite friar, Filippo Lippi, of the Virgin Mary and the newly born Christ Child lying on the ground, in the unusual setting of a steep, dark, wooded wilderness. **It was painted for one of the wealthiest men in Renaissance Florence, the banker Cosimo de Medici.** In later times it had a turbulent history.” (大要)「絵画 Adoration in the Forest はカルメル会の修道士である画家フィリッポ・リッピによつて1459年に作成されたとの画となり、通常とは異なる式で暗い鬱蒼とした森にての聖母マリアと、横たわる新生児たるキリストを描いた作となる。同絵画はルネサンス期フィレンツェの最も富裕なる銀行家コジモ・デ・メディチのために描かれたものとなり、後の日に同絵画は苦難の道を進むことになった」と記載されている画ともなる—)。

**【前掲図右】:**彼なくして欧州美術史は語れないといったほどに著名なる15世紀末から16世紀初頭にかけての版画芸術の巨匠アルブレヒト・デューラーの手になる版画[黙示録]シリーズの一葉。

以上、呈示の両図像を重ね合わせることで[キリスト誕生を祝う聖母マリアの構図]が[黙示録にて悪魔の王(多頭の竜ないし多頭の蛇であるサタン)がにじりよつてくる構図]とオーバーラップするように「なつている」とのことがある。



**"rediscovered"**  
Mithraic relief  
(2-3th century AD?)  
往古に潰え再発見されたミトラ教のレリーフ。(捏造物ではないと看做されており)2-3世紀作成のものとは推定されている

英文 Wikipedia[ Mithraic mysteries ]項目にも同様のレリーフが呈示されているところの往古ローマ時代にて信仰された異教、ミトラ教の典型的なレリーフ。どれくらい呈示のレリーフが汎用的な構図であったのか、また、そちら発掘されて「再」発見されたとされる遺物が既に15世紀のフィリッポ・リッピ(の作者)やアルブレヒト・デューラー(の作者)の目に入るようなかたちでも「再」発見されていたのか、そして、異教シンボルたる同ミトラ教レリーフをわざわざ模倣してここで取り上げもしている作品ら —絵画 Adoration in the Forest および木版画 the Apocalypse series— を芸術家リッピやデューラーが構築する必要がそもそもあったのかが問題になる。



**The Adoration, with the Infant Baptist and St. Bernard**  
**(Filippo Lippi / 1459)**  
 フィリッポ・リッピの聖母子像



**The Apocalypse**  
**(Albrecht Durer / 1498?)**  
 アルブレヒト・デューラーの版画  
 『黙示録』に掲載の構図



**Mithraic relief**  
**(2-3th century AD?)**  
 往古に潰え再発見されたミトラ教のレリーフ。(捏造物ではないと看做されており) 2-3世紀作成のものだと推定されている

**Details**

【構図上部】



【構図左下部】



問題としたきは  
 (図に見てとれるように)





**[delivered or only-co-incident?] question arise .**

(問題となる構図上の類似性をまとめもしての図。起点となる視覚的類似性を呈しての[後光が射している神](ミトラ教の神およびローマ帝国滅亡後、それに取って代わったキリスト教の神)を軸にして画中の人物が似たようなセクションに配されている中で【救世主誕生をもたらした処女懐胎のマリア】←→【救世主ににじみよる多頭の爬虫類としてのサタン】／【救世主誕生をもたらした処女懐胎のマリア】←→【絡み合う蛇の杖を掲げるミトラ教の神格】←→【救世主ににじみよる多頭の爬虫類としてのサタン】との構図的類似性が[記録的事実]の問題として見てとれるようになってい

iv. [冬至]にあつてのサートウルナーリア祭が同神を祝してのものであるとのサトルナス(サターン)は悪魔の王サタンと記号論的に相通ずる側面を有してもいる。

第一。サターンというのは古代ローマにて[文明の恩人]として崇拝されていた存在である(時間の費消を厭い、極々皮相的なところから引けば、和文ウィキペディア[サートウルヌス]項目にて(現行記載内容より引用するところとして)クロノスと同一視された後の神話では、ユーピテルにオリンポスを追放された彼は地上に降り立ち、(サトルナスは)カピトリヌスの丘に一市を建設してイタリアの王となった。そして当時、未開野蛮の民だった人々に農業やブドウの木の剪定などを教え、法を發布して太古の黄金時代を築いたという(文化英雄)(引用部はここまでとする)と記載されているところである)。他面、サタンをエデンの誘惑の蛇と比定する見解から見れば、また、サタンたるエデンの蛇は人間に[知恵と文明を授けた存在]となりもする。

第二。サトルナス(サターン)は天の主催神となった神(自らの息子たるゼウス神)との戦いに敗れて[地の奥深くものタルタロスの領域]にて幽閉されていると神話が語る存在である(英文 Wikipedia[サートウルヌス]項目にて(現行記載内容より引用するところとして) “ In a vast war called the Titanomachy, Zeus and his brothers and sisters, with the help of the Hecatonchires, and Cyclopes, overthrew Cronus and the other Titans.

Afterwards, many of the Titans were confined in Tartarus, however, Atlas, Epimetheus, Menoetius, Oceanus and Prometheus were not imprisoned following the Titanomachy.” (訳として)「ティタノマキアと呼ばれる規模すさまじい戦争にてゼウスと彼の兄弟姉妹らはヘカトンケイル、サイクロプスらの援助あってタイタン・クロノス(注:ローマにおけるサトルナス)と他のタイタンらを放伐した。結果、多くのタイタンらがタルタロスの領域に繋ぎ止められることになったが、アトラス・エピメテウス・オケアヌス・プロメテウスらはティタノマキアに連座して獄に繋がれることはなかった」と記載されているところである)。他面、サタンは一子なる主催神との戦いか父なる主催神との戦いかに差分もあるのだが— 神に敗れて[地の底たる地獄]に幽閉されているとの設定が伴っている悪魔の王である(本稿こここれに至るまで聖書の黙示録にあっての同じくものことにまつわっての記述を引いているとおりである)。

(何故、サトルナスが悪魔の王のサタンと結びつくのかとのこと理由にまつわっての i. から iv. と分けもしての部はここまでとする)

【ローマのサトルナス(サターン)神】(フリーメーソンのシンボル体系と結びつく髑髏・砂時計・鎌にて表象されもする時の体現神格クロノスと同一視されもする存在、それがゆえに[432000年の終末サイクル]を呈示する洪水伝承とも接合する存在)と【悪魔の王サタン】を結びつける事由について i. から iv. と振っての解説をなしてきたとして、である。

以上の流れからご察しいただけるかとは思うのだが、

[サトルナスの象徴]

と結びつけての組織構築・運営がなされている(先述)とのフリーメーソンに

[サタン崇拜]

にまつわっての陰謀論がつきまとっていることは

(ここまで指摘してきた)

[サトルナスのサタンとの多重的結びつき]

を顧慮してもできすぎている(：だがもってして—(愚劣な、知的程度が異常異様に低いとの意味で愚劣な虚偽欺瞞を含んでの陰謀論的言辞の撒布者に言論を汚されぬようにとの配慮もあって)繰り返しておくが— 本稿それ自体では「フリーメーソンが悪魔主義陰謀団である」などとの陳腐なる陰謀論(ととられよう話)を唱導・鼓吹しようというわけではない。同じくも繰り返しておくが、「この際、[人形・駒としての範疇に留まってる者達がなにをどう考えているか(できあがった頭で崇拜している気になっているか)]は問題にならない、代わって、どうしてそのようなことがあるのか、そのことが何に通じているかとのことこそが問題になりもする(と強調したい)」。



サターン(土星)を体現し、ギリシャの時の神にも接合するローマのサトルナス神に悪魔の王サタンとの記号論的結びつきがあるとして、である。

[サターンことサトルナスが元来、蛇崇拜の神である、さらに言えば、その延長線上にサタンとつながるアバドンという存在との結びつきがある]

との観点がフリーメーソンの成員ともされる向きの手仕事ともされる近代の著作からして(後述するように「他の先賢著作よりの出典明示せじもの剽窃」の臭いも如実に伴うのだが)言及されていることがある。

下の引用部を参照されたい。

(直下、Project Gutenberg にて全文公開されている著作 OPHIOLATREIA, OR SERPENT WORSHIP『オフィオラレイアすなわち蛇崇拜』(1889年に出版されての著作)よりの原文引用をなすとして)

The ancients had a notion that when Saturn devoured his own children, his wife Ops deceived him by substituting a large stone in lieu of one of his sons, which stone was called Abadir.

[...]

Abadir seems to be a variation of Ob-Adur, and signifies the serpent god Orus. **One of these stones, which Saturn was supposed to have swallowed instead of a child, stood, according to Pausanias, at Delphi. It was esteemed very sacred, and used to have libations of wine poured upon it daily; and upon festivals was otherwise honoured. The purport of the above was probably this: it was for a long time a custom to offer children at the altar of Saturn; but in process of time they removed it, and in its room erected a stone pillar, before which they made their vows, and offered sacrifices of another nature. This stone which they thus substituted was called Ab-Adar, from the deity represented by it. The term Ab generally signifies a father, but in this instance it certainly relates to a serpent, which was indifferently styled Ab, Aub, and Ob. Some regard Abaddon, or, as it is mentioned in the Book of the Revelation, Abaddon, to have been the name of the same Ophite god, with whose worship the world had been so long infected. He is termed Abaddon, the angel of the bottomless pit—the prince of darkness. In another place he is described as the dragon, that old serpent, which is the devil, and Satan. Hence the learned Heinsius is supposed to be right in the opinion which he has given upon this passage, when he makes Abaddon the same as the serpent Pytho.**

(細かくも補いもしての拙訳として)

「古代人らは

[サターン(サトルナス)が我が子らを喰らった折、彼の妻たるオプス神(注:ギリシャ神話にあつてのタイタン・クロノスの妻となっているレアー神に対応するローマの大地母神)が彼サトルナス(タイタン・クロノス)をたばかって[石]を子と思わせて子の代わりに食べさせた]

との観点を有している。

…(中略)…

そこにみる[石]は Abadir と呼ばれるものとなっている。この場合の Abadir とは Ob-Adur の派生語とも受け取られ、その Ob-Adur は(往古の)蛇の神オラスを示すもの「でも」ある。

サターンが我が子と思つて呑み込んだこれら[石]のひとつはパウサニアス(注:ローマ期(2世紀)にあつてのギリシャ出身の著名な地理学者/主著は日本語にも訳され刊行されている Description of Greece『ギリシャ案内記』)によるとデルフィにて存在しているとのことである。それはとても神聖なるものとして祝されていたものとなり、御神酒(おみき)としてのワインを常日頃注がれ、いざ祭りとなれば、よりもつて祝されたものとなっている(とされる)。そのことに鑑みるに、おそらく、サトルナスが呑み込んだとされる[石]がゆえにこのような



ことがなされていた(のであろう)。「土星の座として子供らをそこに(生け贄として)供する慣習が長期にあってそこにあった。だが、それを除く過程で彼ら(古代デルポイのギリシャ住人)は別の石の柱を建立し、その前で誓約をなして他の自然の産物を生け贄へ供することとなった。この(サトルナスことギリシャ神クロノスの呑み込んだ石に)代わって建立されることになった石はそれが表象する神に由来するところとして「アブ・アダール(Ab-Adar)」と呼ばれるものだった。そこに見るAbとの語は一般的に「父」を表象するが、この場合にてはおそらく「蛇」、違ひなくもAbあるいはAubそしてObと表されての蛇に由来するところのものであろう。幾人かの向きはこれをしてアバドン(「Abaddon)、すなわち、新約聖書にあっての黙示録に登場する長らくも世界がその崇拜風潮に冒されていたとの蛇崇拜の神と同じくもの神の名前ととらえている。アバドンとの語を与えられての同存在は闇の皇子、底無し穴の天使の名となる(訳注:実際に聖書の黙示録9章11節にアバドンという存在が「底無し穴の王」として登場しているとのことがある)。別の場所では同存在は童あるいは古き蛇たる悪魔、サタンとして形容されてきた存在である。そのうえで教養を有していたハインシウス(Heinsius)はアバドンをしてピュートン(訳注:デルポイで崇められていた蛇の怪異)と同じ存在であるとの意見を呈していたことは正しいであろうと思われる」

(以上、補つても訳を付しての引用部とする 一※一 )

(※直上引用部にまつわたの「長くなつての」補足表記として

→

表記の著作 **OPHIOLATREIA, OR SERPENT WORSHIP**、正式名称は極めて詰め込み過ぎの風がある、

**Ophiolatreia: an account of the rites and mysteries connected with the origin, rise, and development of serpent worship in various parts of the world, enriched with interesting traditions, and a full description of the celebrated serpent mounds & temples, the whole forming an exposition of one of the phases of phallic, or sex worship**

との表題の著作はアマチュアの比較神話学者にして性的文学の挿絵家・著者などをもやっていたとのことが英文 Wikipedia にて一項設けられて紹介されている Edward Sellon との向きになる著作なのか、あるいは、同文に Wikipedia に一項設けられて紹介されている Freemason として知られていたアマチュアの比較神話学者である Hargrave Jennings の著作なのか、版權の問題として判然としないとのことがある(望見するに Edward Sellon に由来するオリジナルとなった著作をフリーメーソンの Hargrave Jennings が前者の死後に(改訂を加えてか)刊行したものと解される)。

そして、著者からして模糊としているとのものであることを差し引いて見て「も」同じくもの著作には問題がある。

第一点目。同・引用元著作に関しては[蛇崇拜]の多くを古代の男性器崇拜の問題に帰着させ、結局のところ、蛇崇拜にまつわる怪奇性をその程度の問題で説明しきらんとしている側面が如実に伴っており、そこからして自ずとしての限界が透けて見えるとのことがある(穿てば問題を矮小化せるとのそのこと自体が狙いともとれる)。

第二点目。言い様の典拠として歴史的著述家(パウサニアスやハインシウス)の名が同著にては挙げられているのだが、それが果たして文献的事実の問題なのか、情報収集に慣れていないとの一般人には後追い確認しづ

らいとのことがあり(現代社会でも後追い確認しがたいのものばかりを典拠にしている節がある)、ゆえに、[調査意欲ある向きにとっても信憑性との点で[曰く言い難い.]と受け取られかねない]とのことが同著にはある("seems" unreliable because of lack of philological evidences との問題が伴う)。

フリーメーソン手仕事とされる表記著作には以上二点の如き欠陥性の介在「も」観念されるのだが、ただしもって、である。表記の著作(OPHIOLATREIA, OR SERPENT WORSHIP)にあってのここで引用なして問題視しているとの、

「クロノス(サターン)が自分の子だと思って[石]を喰らっていた→その[石]は[Abdir]とも呼ばれ、それは蛇の神 Orus の派生語[Ob-Adur]と相通ずる蛇崇拝と結びつくものである→サトルナスが喰らったその[石](Abdir)のひとつはパウサニウスによると(古代ギリシャの)[デルポイの蛇崇拝]の(かつての)御神体と関わるものである→[デルポイの蛇崇拝]の対象となるパイソンについては蛇崇拝・そして、Abとの蛇を意味する言葉を介してアバドンともサタンと相通ずるようになっている(との解釈がなされているし、それは妥当と解される)」

との流れでの記載内容については信憑性との面で重きもって見て然るべきとの側面が伴う。

他に同じくものことを記載している真つ当な古典が存するとのことがあるからである。につき、(極めて悪質なことに表記著作の中それ自体では出典紹介されて「いない」わけだが)、たとえば、同文に Project Gutenberg より全文ダウンロードできるとの著作である、

#### [A New System or Analysis of Ancient Mythology との著述]

(同著著者は Jacob Bryant、英文 Wikipedia[ Jacob Bryant ] 項目表記によると 18 世紀から 19 世紀にあって他を逸して屹立していた碩学であったともされる( "the outstanding figure among the mythagogues who flourished in the late eighteenth and early nineteenth centuries" と表記される) 神話学を専門にしていた近代スコラ学分野にての大家のヤコブ・ブライアントという人物となる)

にあって [ほぼ同文のこと] が記載されているとのことがありもすることが重んずべきこととしてあるのだ(:はきと述べ、ここで問題視していることが表記されての部に関しては著者さえも模糊としている(筆名が用いられているとのことではなく著作権・帰属関係すら模糊としている)とのこと、先述した OPHIOLATREIA, OR SERPENT WORSHIP との著作にあって[出典を挙げないで先賢手仕事となる A New System or Analysis of Ancient Mythology(1807)との著作をそのまま文言大量流用するとの式で[剽窃](plagiarism)をなしている]とのやりようが具現化している。日本の大規模カルトの成員とこれまた同様に[相応の道](何ら自分の頭で考えないとの途)を歩むだけの内面しか有していないと透けて見える、空っぽの多くのフリーメーソンの成員に本質的なところでは本当の創造的・自律的思考など期待しようがないからこそ、多く他より盗み奪うことしかなさぬような筋目の「彼ら」には深く考えることなぞおよそ出来ないからこそ、そうした団体の成員の輩の手になる(とされる)著述としてそうもなっているのではないかと私的にはとらえているのだが、それは置く)。



同じくものことについて  
(以下、Project Gutenberg サイトより全文ダウンロードできるところ  
の A New System or Analysis of Ancient Mythology Vol.II.  
(1807) にての OB, OUB, PYTHO, SIVE DE OPHIOLATRIA に  
ての節より引用なすところとして)

“ But Ops, and Opis, represented here as a feminine, was the serpent Deity, and Abadir is the same personage under a different denomination. [464] Abadir Deus est; et hoc nomine lapis ille, quem Saturnus dicitur devorasse pro Jove, quem Græci βαϊτυλον vocant.—Abdir quoque et Abadir βαϊτυλος. Abadir seems to be a variation of Ob-Adur, and signifies the serpent God Orus. One of these stones, which Saturn was supposed to have swallowed instead of a child, stood, according to [465] Pausanias, at Delphi. It was esteemed very sacred, and used to have libations of wine poured upon it daily; and upon festivals was otherwise honoured. The purport of the above history I imagine to have been this. It was for a long time a custom to offer children at the altar of Saturn: but in process of time they removed it, and in its room erected a στυλος, or stone pillar; before which they made their vows, and offered sacrifices of another nature. This stone, which they thus substituted, was called Ab-Adar, from the Deity represented by it. The term Ab generally signifies a [466]father: but, in this instance, it certainly relates to a serpent, which was indifferently styled Ab, Aub, and [467]Ob. I take Abaddon, or, as it is mentioned in the Revelations, Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. He is termed by the Evangelist [468]Αβαδδων, τον Αγγελον της Αβυσσου, the angel of the bottomless pit; that is, the prince of darkness. In another place he is described as the dragon, that old serpent, which is the devil, and Satan. Hence I think, that the learned Heinsius is very right in the opinion, which he has given upon this passage; when he makes Abaddon the same as the serpent Pytho. [469] ”

との式での[ほぼ同文のこと]が

[事細かな典拠]

を挙げながらも遙かに真つ当な著述 —神話学の大家にして近代スコラ学の大家とされるヤコブ・ブライアントの著述— に典拠付で解説されている([464]から[469]は「ギリシヤ語表記の事細かな典拠(Source)の紹介番号となる」とのことがある(ことまで筆者の方で調査して特定しているところとしてある。ただし、以上引用部については即時訳に面倒が伴う、時間の費消に過ぎると判じたために「先にての OPHIOLATREIA, OR SERPENT WORSHIP よりの引用部とほぼ同文のことが記載されているところの」表記引用部に対する訳は付さないこととする)。

また、語るに足りる真つ当な読み手が後追い確認するとの可能性も微々たるものとしてながらあるかとも顧慮しながら述べておくが、意図してそこよりの引用をなしているとの問題著作

OPHIOLATREIA, OR SERPENT WORSHIP にあつては

[アレクサンダー大王の母オリュンピアスが蛇崇拜の中、蛇と乱交するとの凄まじい儀式を行っていた]

とのことにまつわつての微に入つての表記など「も」他になされてい

る(そちらはスコラ学大家たるヤコブ・ブライアント著述よりの剽窃ではない)。その点、この世界ではといったことからして、一信じがたい話と向きによっては考えるだろうも—ある程度、信用に値する、すくなくとも、文献的典拠を伴っている記述であると後追いできるものとなっている(について「も」 **OPHIOLATREIA, OR SERPENT WORSHIP** それ自体には出典表記が十全になされていないから疑義が生じるのだが、それはこの際、問題にならない)。その点、メデューサないしゴルゴンの顔が描かれた鎧を纏(まと)ってのアクメイネージャン・ペルージャ、ペルシャ帝国(のダレイオス3世)との戦い(ガルガメラの戦い)の遺物などが今日に遺っているアレキサンダー大王ことアレクサンドロス3世の母オリュンピアスが(ディオソニス崇拝のカルトにそういう信仰形態があるとされるなかで)[蛇と契っていた]などとされることは比較的知られているところとなり(英文 Wikipedia などにもすぐに確認できる場所としてアレギザンダー・ザ・グレート(の)母オリュンピアスが下半身蛇に変じてのゼウスと交わろうとしているとの厭な臭いがする淫猥なる16世紀絵画などが挙げられていたりする)、同じくものことについては、たとえば、戦前期日本の知的巨人、南方熊楠などもそれ絡みの[派生伝承]につき解説していることもある。につき、現況、青空文庫を介して全文オンライン上にて公開されているとの熊楠の手になる『十二支考 蛇に関する民俗と伝説』にあつては(以下、引用するところとして)“蛇が人に化けた例は諸国甚だ多く、何のために化けたかと問うと、多くは『平家物語』の緒方家の由緒通り、人と情交を結ばんとしてである。また人が蛇に化けて所願を遂げた例もありて、トランスカウカシアの昔話に、アレキサンダー大王はその実偉い術士の子だった。この術士常にマケドニア王フィリポスの后オリムピアスを覬覦(きゆ)したがその間を得ず、しかるに王軍行して、后哀しみ懐(おも)う事切なるに乘じ、御望みなら王が一夜還るよう修法(しゅほう)してあげるが、蛇の形で還っても構わぬか、人の形ではとてもならぬ事と啓(もう)すと、ただ一度逢わば満足で、蛇はおろかわが夫が真実還ってくれるなら、糞蛆(せっちむし)の形でもこちゃ厭(いと)やせぬと来た。得たり賢し善は急げと、術士得意の左道を以て自ら蛇に化けて一夜を后と偕(とも)に過ごし、同時に陣中にある王に蛇となって后に遇う夢を見せた。軍(いくさ)果て王いよいよ還ると后既に娠(は)らめり。王怪しんでこれを刑せんとす。后いわく、爾々(しかじか)の夜王は蛇となって妾と会えりと。聞いてびっくり菫萱道心(かるかやどうしん)なら、妻妾の髪が蛇となって鬪(む)うを見て発心したのだが、この王は自分が蛇となった前夜の夢を憶い出して奇遇に呆れ、后を宥(ゆる)してまた問わず”(引用部はここまでとする)と同じくものことについて実に細かくも書かれているとのことがある(以上引用なした熊楠書籍に見る文語記載を現代語に訳して紹介することは煩瑣なのでなさない。また、要らぬところでさらにもって脱線する風があるが、[女性が蛇と契る]などとのグロテスクな行為態様については拙著(自分で思考もできなからう奴原であろうと見立てている下らぬ連中らの[剽窃]に遭うなどしながら望ましくもの商業出版が妨げられたと「私事ながらもの要らぬところでありつつも」一言申し添えたいとの拙著でもある)の執筆にあたり手前がかつてその内容を検討精読したとの著作、草莽の民俗学者の吉野裕子女史(物故

者)の手になる『蛇』(講談社学術文庫)にも[日本にての巫女儀礼にも当てはまる]との記述がなされているところともなる))。

とにかくも、である。ここにて指摘している、  
[学者といった筋目の人間からは後ろ指を指されようとの  
**OPHIOLATREIA, OR SERPENT WORSHIP『オフィオラテレイ  
アすなわち蛇崇拝』**との著作に伴う欠陥性]  
を顧慮したうえでも直上、引用なしたところの書かれよう —(クロ  
ス神転じての)サターン神にはデルポイ蛇崇拝を介してのアバドン  
やサタンとの接合性が観念されもするようになっているとの書かれよ  
う— については【古文獻・古人の言及がなされていることである】  
【古代の習俗習慣に関わる】との意では信憑性が伴うとの旨、再  
度もってして強調しておく(ヤコブ・ブライアントというスコラ学者によ  
る19世紀初頭刊行の他著作 *A New System or Analysis of  
Ancient Mythology Vol.II.*におけるより希臘語文献の事細かな出典  
が挙げられてのほぼ同文の書かれようから「ある程度信憑性が担保  
されているところであろう」と判じられるとのことである)

直上、引用部にまつわっての補足表記が長くもなったが、蛇崇拝関連著作よりの引用部  
にみとめられることより問題になるのは

「サターンことサトルナス(の吐きだしたその象徴たる石)が蛇崇拝の思潮と  
結びつくとの指摘、かつ、そのサターン・サトルナス(に由来する石)にまつ  
わっての[蛇崇拝の思潮](デルポイにて実施されていた蛇崇拝の思潮)が  
—デルポイの蛇崇拝とアバドンという黙示録登場の悪魔との接合性などあっ  
て— [サタン]と結びつくとの指摘までもがなされていた」

とのことである(ローマの土星の体現神格サターンが悪魔の王サタンと結びつくとの指摘は  
まったくもって見受けられないのだが、表記の引用部にあつてはそのことに通ずることが異  
彩を放つところとして言及されている)。

上のような引用部にみとめられもする観点については —同じくものがいかほどまでに  
一般性を有しているのかには疑義もある中でながらも、そして、キリスト教的思考法にどっぷ  
り首まで浸った向きらによる古代ギリシャの神らを悪魔の類と結びつけようとする意図が介在  
している可能性も否定しきれはしない中ながらも— 「はきと言える」ことがある。そう、同観点  
が(ここ B. の段に入る前に) A. の段にて挙げていた i. から iv. のことら —(ローマ神格サ  
トルナス(サターン)と悪魔の王サタンの間の(明示的繋がり合いではない中ながらも)視覚  
的繋がり合いについて解説してきたとの i. から iv. のことら)— とびたりと符合するようになっ  
ている、「各々、別側面にて成立している」ことながらも「びたりと符合するようになっている」  
とのことが「はきと述べられる」ようになっているとのこと、そのことが問題になるのだ (A の  
段、i. から iv. にて言及してきたことと直上までにて引用してきたことは根拠の面で完全に別  
個のものとして成り立っているわけではあるが、帰結の面では同一方向に収斂している)。

従って、たかだかもその程度のことからして「よりもって」多角的にサターンことサトルナス  
と悪魔の王サタンの間の繋がり合いが観念されることにあいなる (と述べても当然に差し障り  
なからうとのことになりもする)。そして、[サタンに比定される蛇によるエデンの誘惑]のプロ  
セスがいかようにして [洪水伝承] と接合しているのか、そのことを仔細に解説しようというの  
が本稿これ以降の段の流れとなる。

仮に (この段階ではまだ便宜的に「仮に」付きでの表記をなす) [サタンに比定される蛇  
によるエデンの誘惑]のプロセスが多角的に [洪水伝承] と接合しているとのことがあるのなら  
ば、である。クロス神、すなわち、サタンとの接続性について直上の段まで言及してきた

とのサトルナスのギリシャ版たるクノロスがバビロニア洪水伝承に登場している —カリ・ユガのピリオドである 432000 とのぴたりとしての一致性が問題になるとのところでも登場している—とのその記録的事実が極めて問題になることになる。

筆者のような人間をして(現実とは逆に) [悪魔の如き存在の従僕]とでもしたい、看做させしめたいといった按配の手合いや力学ならば、その意味をついぞ適正に判じない、あるいは、判じさせないとの相応の努力をなす(e.g.ここでの話をも彼ら由来の[偽りだらけの陰謀「論」]や[反対話法]に挿げ替えんとすることとなる)と見るが、記録的事実としてそこにあることは「これ重篤。」としか表しようがないことに通ずる。

についてはまずもって「偶然か否かの問題」で偶然とは思えないとのことがある(ただし強調しておくが、偶然か否かの判断は複線的なる証拠の顧慮でもってなすべきであろう)。そして、次いで、証拠を重んじる科学的精神が偶然とは判断できない、反面、そこに「恣意」の問題 —この際、それが人間業とは思えない操作の片鱗を感じさせるものであるかどうかはそちら「恣意」に関しては顧慮しないこととする— が介在していると判断せざるえないとの中でその「恣意」の行き着く方向性が憂慮されるところとなりもし、ここでの話に関しては同じくもの伝で行き着く方向性が我々人類という種族に対する根深い詐害意図と絶滅戦争の完遂の身内間意思表示(のようなもの)と結びついていると判じられるだけの事由ら・要素らが山積しているとのことがある(実際にそうした事由ら・要素らの実在を示していくのが極めて長大なものとなっている本稿の趣意である)。

そのようなありように抗いもしない、のみならず、そうしたありようをもたらす力学に家畜のまま従い続けるというのならば、それは生き残るに値する種族のやりようではないと容易に判じられるところである。そのように強調せざるをえないのだ(その強調が妥当なりしものなのかは本稿をよく吟味していただき、判断いただきたいものである)。

以上をもってしてこれよりの指し示しの[布石]をも兼ねての付記の部を終えることとする。

ここまで来たところで、である。[整理]と[注意喚起]のための部を設けておきたい。すなわち、[[ミルトン『失樂園』]と[同『失樂園』に数千年単位で先行する『ギルガメシュ叙事詩』(一端、歴史の闇に埋もれて「再」発見された古典)]との間に記号論的類似性が —参照・被参照の関係などありようもないのに、そして、他に媒介となる要素(つなぎとなる別「類似」古典)などなんら特定できるようなことではないようになっているにも関わらず— 成立している]

とのことがあることについて、それが

「単なる偶然では済まされない」

とのことを明瞭に示すものである[論拠 —「恣意」の介在を示す[隠れた[動因]]としてこれより摘示なすと申し述べたもの— ]を挙げることにするその前に「まずは」ここまでの本稿の内容(本段に関わるところの内容)の要約をなしておく、[整理]と[注意喚起]かたがたなしておくための部を設けておきたい。

以上、申し述べたうえで

[英国 17 世紀の文豪ジョン・ミルトンの『失樂園』という作品 —欧米圏キリスト教文学にあつての重要作品と位置付けられている古典— に関して何を問題視してきたのか、整理と注意喚起のための要約表記]

を最初になす(そのうえで、次いで、ミルトン古典内容を問題視するに至ったそもそもの背景が何なのかについての振り返り表記をもあわせてなしていく)。



それでは以降、振り返りの部に入る。

---

ミルトン『失樂園』では作品主題たる [エデンの誘惑と人間の墮落] がまさに完遂されんとしているところにて

[叛逆天使の長(ルシファー)変じてのサタンが [アビス] を横断して [地獄門] から [人類の祖を禁断の果実で籠絡させることになったエデン] を結びつけるとのかたちで 開通させたとの [[罪]と[死]の通用路]]

が登場を見ているわけだが、そちらが

[ボスポラス海峡にての通路構築]

に仮託され、と同時に、

[オデュッセウス(木製の馬の計略でトロイアに引導を渡した武将)が [渦巻きの怪物] カリュブデスに苦しめられた航海の難所の突破]

に仮託されているとのことがある。

また、同じくもの通用路構築プロセスにあつて [罪]と[死] (サタンの擬人化された妻子としての [罪]と [死]) が盤石なる橋を架けようとしたとの挙が描かれ、その挙が

[古代ペルシャ王クセルクセスが(ギリシャの自由を束縛しようとして) ヘレスポント海峡 —トロイア創建者ダルダネスと名前・由来を一にしているボスポラス海峡南方の ダーダネルス海峡— に突破しようとしたこと]

に通ずると殊更に表されているとのこともある(：その点については本稿 出典(Source) 紹介の部 55(2) にてオンライン上よりも確認できるとのミルトンの Paradise Lost 近代刊行版該当部位よりの原文引用をなし、かつまた、同原著引用部に対応するところの邦訳版表記よりの引用(国内で流通している岩波文庫版『失樂園』記載内容よりの引用)をもなしている)。

以上のような描かれ方をしているミルトン『失樂園』にあつての [エデンの園にての誘惑] と [[罪]と [死]のための通用路構築] を巡るパートが

[トロイア崩壊プロセス] (そしてトロイアと結びつく[(黒海)洪水伝承])]

と接合していると指摘できもする。以下の理由からである。

第一。地理上の近似性。[ミルトン『失樂園』に見る死と罪の通用路の構築ポイント]たる[ボスポラス海峡]および[ヘレスポント海峡:ダーダネルス海峡]は[トロイア近傍] (ボスポラス海峡)および[歴史上のトロイア比定地そのもの] (ダーダネルス海峡)となっている(：出典(Source) 紹介の部 56 から 出典(Source) 紹介の部 56(2) を包摂する部位を参照のこと)。

第二。意味上の近似性。[死と罪の通用路の構築ポイント]は[オデュッセウスが[渦巻きの怪物]カリュブデスに苦しめられた航海の難所]にもミルトン『失樂園』作中にて仮託されているとのことがあるのだが、オデュッセウスとはトロイア戦争に木製の馬の計略で引導を渡した武将となり、同オデュッセウスに関しては[トロイアからギリシャへの帰路]にて大渦のカリュブデスに遭遇していると伝わっている(その故事をミルトン『失樂園』は引き合いに出している)、それゆえ、(上記位置の問題に加えて)、トロイア崩壊のエピ



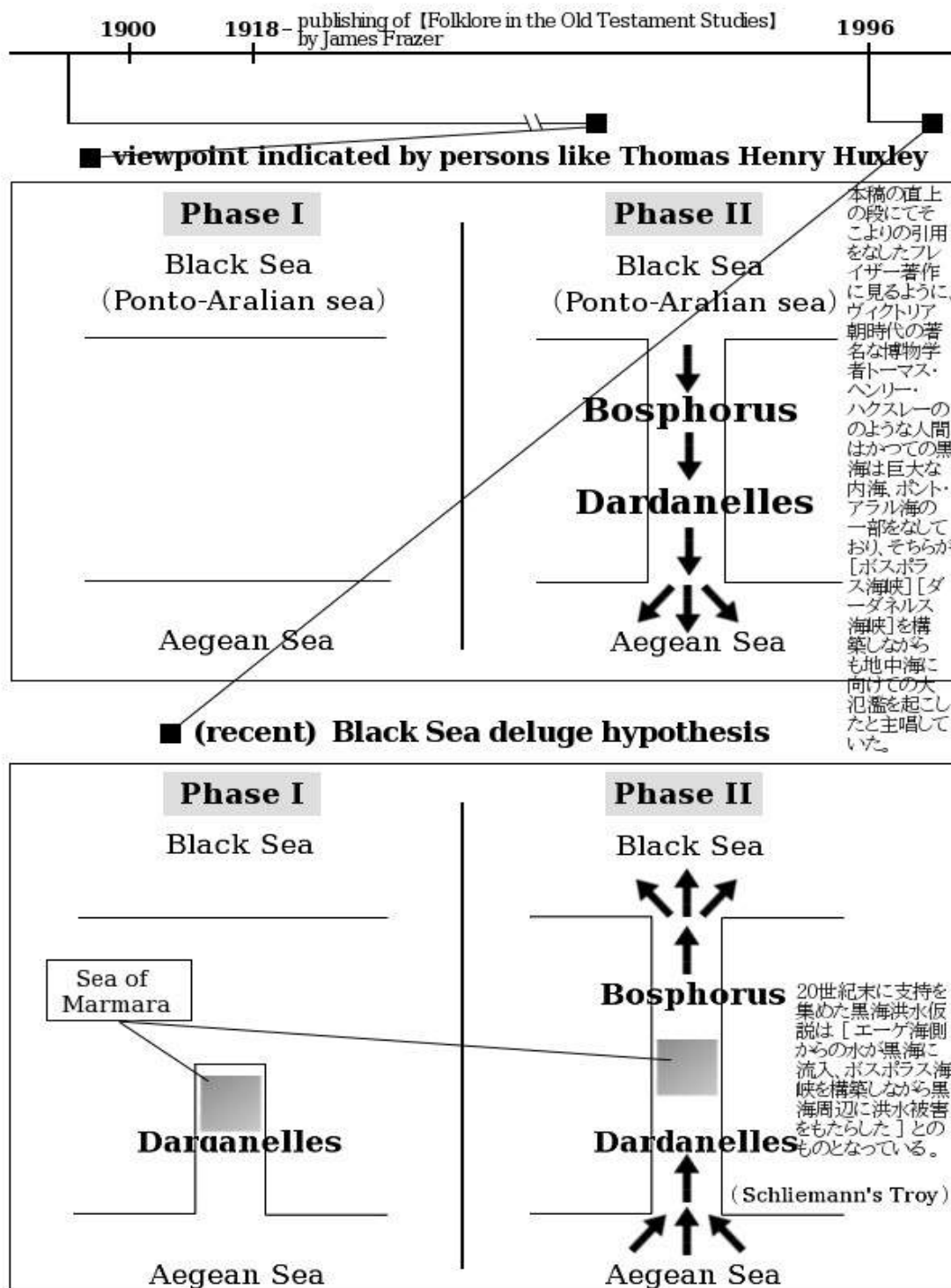
ソードのことがよっても濃厚に想起させられるとのことがある(：本稿にての**出典 (Source) 紹介の部 44**および**出典 (Source) 紹介の部 44-2**を参照のこと)。

第三。今日まで伝存を見ていた大洪水発生「伝承」および近年呈示された大洪水「仮説」を介しての関係性のこともが問題になる。トロイア創建の地はトロイア創建者ダルダネスが大洪水より逃げて都市を構築したとのかたちで[洪水伝承]と結びついているとのことがあり(**出典 (Source) 紹介の部 58**から**出典 (Source) 紹介の部 58(3)**を参照のこと)、ミルトンは[[罪]と[死]が用いる橋]と結びつけてそちら洪水伝承と結びつくダルダネスの脱出ポイント、[ダーダネルス海峡;ヘレスポントス](トロイア創建の地)を引き合いに出している。

他面、[トロイアそのものの位置]([ダーダネルス海峡近傍])ではないというのが一般的理解となるのであるも、トロイア近傍の[ボスポラス海峡]は近年(1996年)より呈示された[黒海洪水仮説]という科学仮説にて[ノアの洪水やギルガメシュ叙事詩にみる洪水伝承の元となった古代の大洪水、黒海の大規模氾濫にて構築された海峡である]と地理学的論拠に基づき主張されており(**出典 (Source) 紹介の部 57**を参照のこと)、ミルトンはそちら[ボスポラス海峡](を貫く道筋構築)のことも[アビス横断に際しての突貫プロセス]として(ダーダネルス海峡へのそれとは別に)[人類の悲劇に向けての悪魔らの通路構築の筋立て]の中で引き合いに出している(：さらに述べれば、近年呈示された黒海洪水[仮説]とは別に黒海洪水[伝承]とでも形容すべき伝承が伝存を見ており、近代にあつて英国の知識人トマス・ハクスレーなどに[ほぼ同文のこと]が往時(近代)の観点で主張されていたとのそちら伝承にあつてはトロイア創建と関わるところで[ボスポラス・ダーダネルス海峡の「両」海峡を生み出した大激流]のことが言及されており、その絡みで[ボスポラス海峡にての貫通プロセス][ダーダネルス海峡の突破プロセス]へと[深淵(アビス)領域の突破]が仮託されているとのミルトン『失樂園』粗筋)のことが想起されるとのことがある——先立つての**出典 (Source) 紹介の部 58(4)**にて James Frazer の Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law よりの原文引用をなしながら指摘していることである——)。

また、(第三の理由の表記を続けるとして)トロイアはその創建が(創立者ダルダネス属性との兼ね合いで)洪水と関わる地であるとされている一方で[トロイア崩落]もまた大洪水と結びついている。トロイアに関してはオデュッセウスの木製の馬の計略によって住民皆殺しにあった後、主を失った都市として攻城戦に参加していた包囲側のギリシャ勢諸共、洪水によって滅亡を見た都市であるとも伝わっていることがある(：Posthomeric こと『トロイア戦記』に認められる記述として本稿にての**出典 (Source) 紹介の部 44-3**および**出典 (Source) 紹介の部 44-4**にあつて原典引用をなしているところである——ホメロス以外の文献(『トロイア戦記』)を介して[攻城戦に参加してのギリシャ勢は戦後、渦を巻く海水にほぼ全員呑まれた]と伝わっているとのことがある。さらには同『トロイア戦記』ではそうしたギリシャ方の末路が[古のデウカリオンの洪水伝承]のようなさまを呈していたことに対する言及もなされている——)。そして、そちら異伝でのトロイアの消滅と運命を共にしたギリシャ勢の末期のありよう、地上および船上で洪水・渦巻きに呑まれての末期のありようをマイクロ・スケールで体現したようなことがトロイア戦争後、艱難辛苦の船旅を強いられたとのオデュッセウスら一行(木製の馬でトロイア戦争に決着をつけた武将とその配下の一行)の渦潮の怪物カリュブディスの領域——すなわち、ミルトンが失樂園にてボスポラス・ダーダネルスとあわせて引き合いに出しているとの領域——での座礁・オデュッセウス以外の船旅の同道者ら全員溺死であったとも受け取れるところ「とも」なっている(本稿にての**出典 (Source) 紹介の部 44-2**を参照。尚、[オデュッセウスら一行が艱難辛苦の船旅を強いられた]のはギリシャへの帰路にて海神ポセイドンの息子のキュクロプスの目を潰したこと、そして、そうした中で[オデュッセウスら一行が渦巻きの怪物が荒れ狂う航海の難所で破滅を見た]のは太陽神の牛を逗留地

にて勝手に食したがゆえに神の怒りを買ったからであると描写されており、木製の馬の計略で主を失ったトロイア城塞の洪水による最期、及び、トロイアからギリシャの故地へ向けて帰還しようとしていたギリシャ勢の洪水・渦巻きの種類による潰滅の描写などはホメロス古典それ自体では見られないのだが(描写はホメロスの後に成立した『トロイア戦記』にみとめられるところである)、その点については置く。



以上のことから —直上再掲しての第一から第三の理由— からミルトン『失樂園』描写は(トロイアに通ずるところで)[[トロイア崩壊プロセス](そしてトロイアと結びつく[(黒海)洪水伝承]]のことを想起させるもの「とも」なる(:疑わしきにおかれては本稿にての**出典(Source)紹介の部 58(2)**から**出典(Source)紹介の部 58(3)**を包摂する部位、トロイアを創建したダルダネスと洪水伝承の関係について扱ったジェイムズ・フレイ

ザーの洪水伝承蒐集論稿たる Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law (及びその抄訳をなしての国内流通訳書)よりの引用部なども参照されたい——ミルトン『失樂園』は命令に服しなかった人間に神がエデンで神罰を与えるとの話でもあるのだが、そのことが描かれる「同じくも」の旧約聖書『創世記』ではミルトンによってモチーフとされた失樂園(樂園喪失)の後に[アダムとイヴの「子孫」]らが神罰を食らうことになり、[ノアの洪水]が起こると描写される。対して、トロイア攻囲戦後の洪水も(一神教の神ではなく多神教の神々の)神罰の賜物なぞと描写されている(トロイア戦記)。そこより洪水伝承との絡みでは[神罰]と形容される側面の共有も観念されるところではある——)。

上の第三の点に関わるところとして、仮にもし、ミルトン『失樂園』が(ジェイムズ・フレイザー著作などに見る)黒海洪水伝承に「確信犯として」隠喩的やりようにて言及したものであると「仮定」したとしても(そのような仮定も「人間レベルの恣意の問題として」可能である、というのも、ミルトンの時代に[逍遙(しょうよう)学派ストラトンの伝による黒海洪水伝承が伝わり、ミルトンが(視覚を失っていたとされる身ながらも聴覚を介して)直に耳聞目睹(じぶんもくと)し、似たようなことを反映させたが無理矢理考えることはできるにはできるからである)、

(洪水伝承との一致性を問題視するとの中で)

[ミルトン『失樂園』は「蛇による不死の剥奪」[洪水伝承との関係性]との点で(ミルトンが参照できたはずがない)『ギルガメシュ叙事詩』の内容とも奇怪に結びつくものへと化ける]

とのことになるのになんら異同はない(本稿のつい先だつての段で「奇怪に結びつくものとなる」との理由を詳説してきたところでもある)。

とにかくもの問題は、ここまでの段階からして

[『失樂園』という作品にあつての「[罪]と[死]の通用路」にまつわる記述箇所]

にて

[トロイアとの結びつき]

が強くも想起される格好となっていることに相違はないと指摘できることが問題である(：古のトロイアと位置的に結びつけられているポイント(トロイア創立者ダルダニアに由来するダーダネルス海峡ことヘレスポントス海峡界隈)を引き合いに出し、あわせて、同じくもの一連の段にてトロイア崩壊をもたらした英雄オデュッセウスのトロイア陥落後の難行のことを引き合いに出している)のであるから、そちらについては——洪水伝承との結びつきのように「他に」問題となりうることを論じなければ[うがち過ぎになる]ようなところとは異なり——「飛躍はない」と言えるところであろう)。

以上のこと、指摘なしううえで書くが、本稿の先の段では

[トロイア崩壊の原因たる黄金の林檎] ↔ (同一視されるに足りる要素らが存在している) ↔ [(ミルトン『失樂園』でサタンが人間に対する死と罪の通用門を構築するための手段となった)エデンの園にて用いられた誘惑の果実]

との関係性(にまつわる見立て)が成り立ちもし、そうした[黄金の林檎]と[エデンの園の誘惑の果実]との関係性を傍証・裏書きするが如き識者視点が歴年呈されてきたとのこともまた[「争いの余地のない」事実]となっていることを指し示してもおり(本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 51](#)を包摂する部位を参照のこと)、また、と同時に、



[トロイア崩壊の原因たる黄金の林檎「の園」] ↔ (同一視する視点が存在している) ←  
→ [洪水で滅亡したとのアトランティス]

との関係性もが「争いの余地のない」事実の問題として存在していることも指摘している(本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 40](#)から[出典\(Source\)紹介の部 45](#)を包摂する部位を参照のこと ——(ここでは[黄金の林檎の園と海中に没したと伝わるアトランティスを関連づける]との特定の見解が長らく存在しているとのことまでは事実であることを問題視しているのであり、その見解自体の適切性自体を問題視しているのではない)—— )。

に関しては以下の部を参照されたい。

---

整理のための話の中にあって重疊的に入れ込んでの振り返り表記として

(くどいこと承知のうで)再言及しもするが、属人的主観など問題になるところでもなく、指し示しも容易なところとして、  
[[黄金の林檎]と[エデンの誘惑の果実]の間]  
には次のような関係性が成立しているとのことを本稿の先立つ段にて入念に入念に摘示してきたとの経緯がある。

( [黄金の林檎を巡る「パリスの審判」] と [林檎ともされる禁断の果実を巡る「エデンでの誘惑のプロセス」] を主として念頭に置いての [黄金の林檎] と [エデンの果実] の関係性として )

1. [黄金の林檎にまつわる誘惑] および [エデンの園にての誘惑] の双方ともに [女という性を用いての誘惑] が主軸をなしているとのことがある(一方はヘレン、もう一方はイーヴという女という性を用いての誘惑がなされている⇒同じくものこと、トロイアありようにまつわる古典上の典拠は [出典\(Source\)紹介の部 39](#) にて紹介している)。
2. [黄金の林檎にまつわる誘惑] および [エデンの園にての誘惑] の双方ともに [誘惑が破滅的事態をもたらした] との結末が付きまっしているとのことがある(片方が [フォー・オブ・トロイア; トロイア陥落]、もう片方が [フォー・オブ・マン; 人類の墮落・失樂園] との結末に通じている⇒同じくものこと、トロイアありようにまつわる伝承上の典拠は [出典\(Source\)紹介の部 39](#) にて紹介している)。
3. [黄金の林檎にまつわる誘惑] および [エデンの園にての誘惑] の双方ともに誘惑にてその授受が争われたのは [林檎] および [林檎と歴史的に同一視されてきたもの] となっているとのことがある(聖書にては [エデンの禁断の果実] ことフォウビドウン・フルーツが [林檎] であるとの明示的表記がみとめられないわけであるが、それが歴史的ありようとして林檎と看做されてきたとのことがあり、本稿ではその点についても解説している —— [出典\(Source\)紹介の部 50](#) を参照されたい —— )。
4. [黄金の林檎の果樹園] は百頭竜ラドンに守られているとされる。そして、ギリシャ・ローマ時代における竜とは [巨大な蛇] のようなものであるとされる ([出典\(Source\)紹介の部 50](#) の後に続けての部で典拠紹介のこと)。他面、[エデンの園の誘惑] は蛇によってなされたと伝わるものである。従って、[黄金の林檎] および [エデンの園の禁断の果実] の双方ともどもに [ (蛇たる) 爬虫類とのつながり ] があいが見てとれるとのことになる。
5. [黄金の林檎にまつわる誘惑] および [エデンの園にての誘惑] の双方ともにあつて

[金星の体現化存在]が誘惑者となっているとすることがある(片方は金星の体現存在たる女神アフロディテを誘惑者としており、もう片方では金星(明けの明星)の体現存在たるルシファーことエデンの蛇と同一視されるサタンを誘惑者としている — [出典 \(Source\) 紹介の部 48](#) および [出典 \(Source\) 紹介の部 49](#) — )。また、誘惑者が金星と結びつくだけではなく、黄金の林檎というのはそれが実る果樹園からして[金星]と親和性が高い存在となっているとすることがある。すなわち、黄金の林檎を果樹園で管掌するとされるヘスペリデスらが金星こと[宵の明星]と非常に近い存在であるとのことがある(ヘスペリデス Hesperides という黄金の林檎の管掌者らは [金星=宵の明星] と同義のローマ名を持つ Hesperus を父親とするとも言われ、その構成単位ないし母親を Hesperis とするとも言われる存在とのことになり、Hesperides という [Hesper] との語句と結びつく黄金の林檎の管掌者らがいかに日没にて輝く金星と結びつくか推し量れもするとのことがある — [出典 \(Source\) 紹介の部 49](#) などを参照のこと — )。

6. [黄金の林檎の園]および[エデンの園]の双方は「互いに関係があるもの」として欧州人に「歴史的に」隠喩的・明示的な式で結びつけられてきたものらとなる。隠喩的な式とのことでは、ルネサンス期画家のルーカス・クラナッハ・ジ・エルダーの絵画に両者関係性を示唆するが如きものが存在しているとのことがある(その[具体例]を本稿の先の段、[出典 \(Source\) 紹介の部 51](#) で挙げている)。他面、明示的な式で関係づける式とのことでは、近代知識人らの著作にあつて[神に不死を約束するネクターと結びつく黄金の林檎の園]と[不死と知恵の果実が実るエデンの園]とを関連づける表記がなされている(そちらも原文引用を[出典 \(Source\) 紹介の部 51](#) でなしている)。

上の 1. から 6. とナンバリングしての関係性に加えもして、

[[伝説上のアトランティス←→黄金の林檎の園][アメリカ←→伝説上のアトランティス]との視点がそれぞれ別個に欧州識者にて呈されてきたこと] ([出典 \(Source\) 紹介の部 41](#) および [出典 \(Source\) 紹介の部 52](#) を参照のこと)

を前提に置いての[黄金の林檎とエデンの果実の関係性]として次のこともが挙げられる。

7. アトランティスと定置されもしてきた(したがって黄金の林檎の園との接合性も観念される)とのアメリカ大陸にて崇められてきた[ケツアルコアトル]という存在と[エデンの誘惑の蛇]の間には次のような側面での多重的類似性が見てとれるようになっている。

- [双方とも[蛇]としての存在となっている — [人語を解するエデンの誘惑の蛇]と[羽毛の生えた蛇としてのケツアルコアトル]とのことで両者とも蛇である — ]
- [双方ともある種の[文明の促進者]とでもいべき存在となっている — [ケツアルコアトルにあつての神話に見る文化的英雄としての描写]と[エデンの知恵の樹の実による「裸体を恥じるような」知恵と文明の向上の接受]との観点で接合性が観念できる — ]
- [双方とも[金星]と結びつく存在ともなる — [エデンの園の蛇]の場合は明けの明星の体現存在としてのルシファーと見た場合に[金星]の体現存在となる。[ケツアルコアトル]は金星の体現神格として神話が語り継いでいる存在となる — ]
- [双方とも信ずるものを裏切り、破滅的結果をもたらした存在となっている — [エデンの蛇]にあつては旧約聖書にあつての『創世記』の内容および新約



聖書の『黙示録』の内容が背信・裏切りの所在を示している。他面、[ケツアルコアトル]については(それが征服者のスペイン・サイドにいかようなる脚色がなされていようと)[一の葦の年(1519年)にてのケツアルコアトル帰還伝承]が[コンキスタドレス(スペイン征服者ら)征服活動]を容易ならしめ、それに付随しての土地収奪と疫病の流布による人口の激減が具現化を見ているとのことがある(※)—— ]

(※1:より幅広くも見れば、[ケツアルコアトルの信徒らに破滅を進呈した]のが[キリスト教徒](たるスペインの征服者ら)となっていること、[サタンの薬籠中になった会衆に(新約聖書の黙示録で描写されるところとして)打ち勝った]のが[キリスト教徒]となっていること「にも」相似形を見出せるようになっている)

(※2:[スペインがアステカ文明圏に破滅的改変を強いた]なかで疫病 —— 新大陸の人間が免疫を持っていなかった旧大陸(欧州)由来の天然痘 —— の猖獗(しょうけつ)が戦乱と共に現地人を容赦なく殺していったとされる。対して、聖書黙示録 —— [古き蛇にして赤い竜としてのサタン][偽預言者][偽りの獣]がその会衆を破滅に誘(いざな)うとの記述がなされている聖書の末尾におさめられている文書たる黙示録 —— では[黙示録の四騎士(なる存在)が究極的破滅(墮地獄)に至る前段階にて人間に災厄をばらまく]との記述も認められ、[戦乱]と[疫病]との伝でのアナロジー(一致性)の問題もアメリカ大陸の出来事と『黙示録』の間にはみとめられるとのことがある)

以上の多重的類似性 —— 出典(Source)紹介の部 53(2)から出典(Source)紹介の部 54(4)にて典拠をひたすらに細かくも示してきたところの相関性 —— は([アメリカ⇄アトランティス⇄黄金の林檎の園と定置されもする伝説上の存在]との関係性から)[黄金の林檎の園と比定されてきた場にて崇められてきた「裏切り・背信の」蛇]と[エデンの園の「裏切り・背信の」誘惑の蛇]の間の多重的類似性の問題にも記号論的に変換できるようになっている(黄金の林檎とエデンの禁断の果実はそうした伝「でも」結びつくことになる)。

(重畳的に入れ込んでの振り返り表記の部はここまでとする)

ここまでに1. から7. と振って振り返りもしてきたことから、ミルトン『失樂園』につき、  
[できすぎている]  
ととらえられるのは、

[ミルトン『失樂園』に見る、禁断の果実を用いてのエデンでの誘惑とワンセットになった、[サタンが開通させた[罪]と[死]のための道]] ↔ [黄金の林檎で滅ぶことになった[トロイア]との兼ね合い「でも」結びつきが観念されると先述なしたところの道] ↔ [(「どういうわけなのか、」の問題としてのそういう側面が現出しているものとしての)今日的に見たブラックホールと類似するもの — 「時間」と「空間」が意味をなさなくなる底無し暗黒領域としてのアビス — を描写しているパートに関わるところの道]

との関係性もが成立しているとのことがあることであり(異質な話であるからこそ論証に注力しているとの同じくものことについて詳しくは本稿にての出典(Source)紹介の部 55から出典(Source)紹介の部 55(3)を包摂する箇所、解説文量にして数万余字を割いての部位を参照されたい)、また、と同時に、そちらミルトン『失樂園』を介し「も」

[今日、ブラックホールを生成するとの可能性が取り沙汰されている LHC 実験] ←  
→ [トロイア関連の事物([黄金の林檎]関連の事物)をも命名規則として使用している実験]

との関係性が成立していると述べられてしまうようになっているとのことである([殺されることがほぼ確定しているような状況]でも現実を見たがらないような人間は『まさか冗談であろう?』などと考えるかもしれない事実関係の「あまりにもよくできた」重なり度合いを示す話ともなるが、残念ながら、同じくもの話、すべて[客観的に摘示可能な事実関係]に依拠してのものとなる(※))。

(※LHC 実験に関しては極微領域にテラエレクトロンボルト単位のエネルギーを集中させるとの状況にてブラックホールの類を生成する可能性がここ数十年で問題視されるようになり、そちら含んだうえで「科学の発展に資する望ましき極微ブラックホール群の観測がなされる可能性がある」などと関係者らに肯定的に主張されるにも至っている(本稿の冒頭部より、すなわち、[出典\(Source\)紹介の部 1](#)から[出典\(Source\)紹介の部 3](#)を包摂する部で具体的典拠にのみ基づいての詳述詳説を講じていることとなる)。

そうした LHC 実験に関しては — 本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 35](#)から[出典\(Source\)紹介の部 36\(3\)](#)を包摂するパート、[出典\(Source\)紹介の部 46](#)を包摂するパートにて解説しているように — [事実]の問題として、

[ (LHC 実験では) ミルトン『失楽園』の問題視しているパートにても登場を見ている渦潮の怪物カリュブディス — トロイアに木製の馬の奸計で引導を渡すことになったオデュッセウスらをトロイアからの帰路、諸共、海の藻屑と化さしめんとした渦潮の怪物カリュブディス — の名を冠するブラックホール・ジェネレーター(極微ブラックホールの生成・消滅をシュミレートするためのツール)としての CHARYBDIS が使用されている]

[ (LHC 実験では) エデンの園の禁断の果実と同様のものと看做されるだけの要素を具備していることにつき先述の「黄金の林檎」の場所を把握している存在であるとギリシャ神話が語り継ぐ巨人の名アトラスの名称が「ブラックホール生成イベントを観測しうる」(その観測が科学の発展に望ましいなぞと「中途より」強弁されるに至ったブラックホール生成イベントを観測しうる)と主張されての検出器の[ATLAS]に流用されている]

[ (LHC 実験では) 「黄金の林檎の園と同一物である」と一部識者に歴史的に見られてきたアトランティスの名称がブラックホール観測挙動まわりの命名規則に流用されている、すなわち、ブラックホール生成イベントも観測しうるとされるイベント・ディスプレイ・ツールたる ATLANTIS の名称へと流用されている]

とのことらがある)

以上、ここまでの「整理のための」再表記事物からして、

「多くのことが結びつきすぎている」

こと、強くも指し示すものらである — ちなみに、ミルトン『失楽園』に接合するところの同じくもの「多くのことが結びつきすぎている」との関係性がさらにもって問題となると受け取られる理由として本稿では ミルトン当該古典に「ダンテ古典『地獄篇』とのつながり」があることも問題視しもしてきた。すなわち、

ダンテ『地獄篇』にあつてのミルトン『失樂園』と共通の要素を帯びてのパート、[地獄門の先にある領域] および [ルシファーに起因する災厄の領域] を扱っているとのパート「にも」[今日的な意味で見たブラックホールの特質と通ずる描写] が非常に奇怪にも認められることがあるとのことをも問題視してきた（本稿にての[出典\(Source\) 紹介の部 55](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 55\(3\)](#)を包摂する箇所を参照のこと。読み手たる貴殿が[重力の中枢]かつ[光が囚われた領域]かつ[不帰の領域]かつ[外側からの観測者(生者)と内側の観測者(死者)の視点の差異を示しているような動的かつ静的なる粉碎劇が繰り広げられているとの領域]をしてブラックホールと一切関係ないと理も知もなく断じたいのならば、そうすればいいとも思うのだが（筆者としてもそういう[限定された思考しかなせぬもの]が[運命に抗う力]を有しているとは思わない）、何にせよ、ダンテ『地獄門』描写に見る特質が専門家ら（そうした者達がたとえ[内面空っぽの役者]でも世間的には[専門家]と呼称されている人種ら）に規定されるブラックホールなるものと多重的接合性を帯びているとのことが現実に「記号論的に」指摘可能となつていもする）——。

（ここ本段までをもつてしてミルトン『失樂園』に関して何を問題視しているのかについて振り返つての部とする）

---

直上の段までで

[ミルトンの『失樂園』という作品に関して何を問題視しているのか、(くどくもながらもの)、説明講じるための「整理のための」話をなした]

として、さらにもつての振り返り表記をなしておく。

その点、ミルトン『失樂園』(及びダンテ『地獄篇』)にまつわる話をなす前に本稿にあつては大要、次のようなことらを指し示してきたとのこともある。

(ミルトン『失樂園』の話に入るまえに本稿にて(都度、図示なしながらも) 摘示に努めてきたことらとして)

[ [古代アトランティスに対する蛇の種族による次元間侵略] との内容を有する(一見すれば妄言体系としての) 神秘家由来の申しようが今より70年以上前から存在している——(所詮はパルプ雑誌に初出の小説『影の王国』(1929)の筋立てをその言い回し込みにして参考にしたのであろうと解される形態でながら前世紀、第二次世界大戦勃発の折柄(1939年)から存在している)—— とのことがある] (:[出典\(Source\) 紹介の部 34](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 34-2](#)を包摂する解説部を参照されたい)

→

[ (上にて言及の) [アトランティスに対する蛇の種族の次元間侵略] との内容と類似する側面を有しての [恐竜人の種族による次元間侵略] という内容を有する映画が [片方の上階に風穴が開きつつ] [片方が崩落する] とのツインタワー — (恐竜人の首府と融合するとの設定のツインタワー) — をワンカット描写にて登場させながら1993年に封切られているとのことがある(子供向け荒唐無稽映画との体裁をとる『スーパーマリオ魔界帝国の女神』がそちら作品となる) ] (:[出典\(Source\) 紹介の部 27](#)を包摂する解説部を参照されたい)

→

[ある種、911の先覚的言及をなしているとも述べられるような性質を伴っての上記映画は「他世界間の融合」といったテーマを扱う作品ともなっていたわけだが、そうした内容（「異空間同士の架橋」との内容）と接合する「ブラックホール」「ワームホール」の問題を主色として扱い、また、同じくものところで「911の事件の発生に対する先覚的言及とも述べられる要素」をも「露骨」かつ「多重的に」帯びているとの著名物理学者由来の著作——BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作——が（申し分としては無論、頓狂に響くところなのだが）原著1994年初出のものとして「現実」に存在しているとのことがある]（：疑わしきにおかれては（羅列しての表記をなし）本稿にての**出典(Source) 紹介の部 28**, **出典(Source) 紹介の部 28-2**, **出典(Source) 紹介の部 28-3**, **出典(Source) 紹介の部 31**, **出典(Source) 紹介の部 31-2**, **出典(Source) 紹介の部 32**, **出典(Source) 紹介の部 32-2**, **出典(Source) 紹介の部 33**, **出典(Source) 紹介の部 33-2**を包摂する解説部を参照されたい。表記の部にてはBLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という1994年初出の作品が「双子のパラドックス(1911年提唱)の機序の利用による二点間時差の応用」／「91101(2001年9月11日を意味する数)との郵便番号で「はじまる」地を実験に対する「空間軸上の始点」に置いてのタイムワープにまつわる解説」／「2000年9月11日⇒2001年9月11日と接合する日付けの実験に対する「時間軸上の始点」としての使用」／「他の「関連」書籍に見るブラックホール⇔グラウンド・ゼロとの対応付け」を「僅か一例としての思考実験」にまつわるところで「すべて同時に具現化」なさしめ、もって、「双子の塔が崩された「2001年の」911の事件」の前言と解されることを事件勃発前にいかようになしているのかについて（筆者の主観など問題にならぬとの客観事実に関わるところとして）仔細に摘示している。また、それに先立つところ、本稿にての**出典(Source) 紹介の部 29**から**出典(Source) 紹介の部 30-2**を包摂させての解説部ではその前言問題に関わるところの「双子のパラドックス」(1911年提唱)というものと結びついているとのことがよく指摘される浦島伝承(爬虫類化身と人間の異類結婚譚との側面も初期(丹後国風土記)では有していた浦島子にまつわる伝承)が欧州のケルトの伝承と数値的に不可解な一致性を呈していることを解説、その「伝承伝播では説明がなしがたい」ような特異性についての指摘「も」なしている)

→

[[加速器]および[(時空間の)ゲート開閉に関わる要素]および[爬虫類の異種族の侵略]らの各要素のうち複数を帯びているとの作品らが従前から存在しており、の中には、カシミール・エフェクトといった後に発見された概念(安定化したワームホール構築に必要と考えられるようになったエキゾチック・マターという物質の提唱に関わっている概念)につき尋常一様ならざるかたちにて先覚的言及をなしているとの1937年初出の作品『フェッセンデンの宇宙』——人工宇宙にての爬虫類の種族による人類の皆殺しが描かれているとの作品——も含まれている]（：疑わしきにおかれては**出典(Source) 紹介の部 22**から**出典(Source) 紹介の部 26-3**を包摂する一連の解説部を参照されたい)

→

[CERNのLHC実験は「実際の命名規則の問題として」1990年代の実験プラン策定段階にての1992年（米国にて2004年に放映されていたテレビドラマ『スターゲイト・アトランティス』といったものを包摂する一連のスターゲイト・シリーズの嚆矢たる映画作



品『スターゲイト』が1994年の公開にて世に出ることになった折より2年程前) から [アトラス ——ヘラクレスの11功業にて登場した「黄金の林檎」の在在を把握すると伝わる巨人—— ]と結びつけられており(ATLAS ディテクターという[「後の」2000年代よりブラックホール観測「をも」なしうるとされるに至った検出器]にまつわる名称が1992年に確定したとも)、また、同LHC実験、後にその[アトラス]と語義を近くもする[アトランティス]ともブラックホール探索挙動との絡みで結びつけられるに至っているとのことがある(そのうえ、同LHC実験にあつてブラックホールの生成を観測しうるツールと銘打たれているイベント・ディスプレイ・ツールのATLANTISについてはプラトン古典『クリティアス』記述から再現できるところの古のアトランティスの城郭構造を意識させるようなディスプレイ画面を用いているとの按配での堂の入りよう「とも」なっている)。**CERNのLHC実験と結びつけられての巨人アトラスは「黄金の林檎の在在(ありか)を知る巨人」として伝承に登場を見ている存在でもあるが、そこに見る「黄金の林檎」は「トロイア崩壊の原因」となっていると伝わるものである。**とすると、CERNがATLAS検出器でブラックホールの観測 ——その観測が「科学の発展に資する」と中途より喧伝されるに至った即時蒸発を見る極微ブラックホールらの観測—— をなしうると後に発表するに至ったことは[黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)の在在を知る巨人]によってブラックホール探索をなさしめていると呼ばわっているに等しい] (:疑わしきにおかれては**出典(Source)紹介の部35**から**出典(Source)紹介の部36(3)**および**出典(Source)紹介の部39**を包摂する解説部を参照されたい)

→

[「古の陸塊アトランティスの崩壊伝承」は「古のトロイアに対する木製の馬の計略による住民無差別殺戮「後」の洪水による城郭完全破壊伝承」(Posthomerica『トロイア戦記』)と同様の側面を伴っているものとなる(アトランティスおよびトロイアの双方とも[ギリシャ勢との戦争の後]、[洪水]による破壊を見たとの筋立てが採用されている)。また、[巨人アトラスの娘]との意味・語法での女神「アトランティス」——(アトランティスという語は[古の陸塊の名前]以外に Daughter of Atlas との響きを伴う語ともなり、そうした名詞がLHCのATLAS検出器に供されているイベント・ディスプレイ・ツールに供されているATLANTISの名にも転用されている)—— については「トロイア崩壊の原因となった果実たる黄金の林檎の園が実るヘスペリデスの園」とも「史的に結びつけられてきた」とのことがあり、といった絡みから、「黄金の林檎の園」は(アトラスと共にCERNのLHC実験の命名規則とされているとの)[伝説上の陸塊アトランティス]の所在地と結びつけられもしていたとのことがある] (:疑わしきは**出典(Source)紹介の部40**から**出典(Source)紹介の部45**を包摂する一連の解説部を参照のこと)

→

[「ヘラクレスの11功業」というものは[「アトラス(1992年よりLHC実験関連事項としてその命名が決せられたATLASと同じくもの名を冠する巨人)』および「黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)』と関わるもの」となるが(**出典(Source)紹介の部39**)、先の911の事件の前言と解せられる要素を「多重的に」含む特定作品らがそうした「ヘラクレスの11功業」と濃厚に関わっていると指摘出来るとのこと「も」がある。

具体的には(ヘラクレス第11功業と911の事件の関係性を示すべくもまずもって挙げたところの作品としての)『ジ・イルミナタス・トリロジー』という70年代にヒットを見た小説作品が

[ニューヨーク・マンハッタンのビルの爆破]



[ペンタゴンの爆破] (時計表示を 180 度回転させて見てみると時針の 911 との数値が浮かび上がってくるとの 5 時 55 分にペンタゴンが爆破されたと描写 —— [180 度反転させることで 911 との数値が浮かび上がってくる数字列] をワールド・トレード・センター (の崩落) などと結びつけている文物「ら」は (複数形で) 他にもあり、本稿でそれらの特性について解説することになってもある中での一例としての描写となる —— )

[「ニューヨーク象徴物」と「ペンタゴン象徴物」の並列配置シンボルの作中にての多用] [米軍関係者より漏洩した炭疽菌の災厄の描写] (現実の 911 の事件では事件後間もなくして米軍関係者と後に判明したブルース・イヴィンズ容疑者の手になるところの炭疽菌漏洩事件が発生しているが、そちら現実の状況と照応するような [米軍関係者より漏洩した炭疽菌の災厄] との筋立ての具現化)

[関連作品でのツインタワー爆破・ペンタゴン爆破描写]

との要素らを内に含みつつもヘラクレスの第 11 功業と接合していると摘示できるとのことがある (『ジ・イルミナタス・トリロジー』という作品ではヘラクレス第 11 功業に登場する [黄金の林檎] が作品の副題に付されていたり、黄金の林檎を描いたものとされるシンボルが何度か図示までされて登場してきているといったことがある) ] (:疑わしきにおかれては [出典 \(Source\) 紹介の部 37](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 37-5](#) を包摂する一連の解説部、オンライン上より全文現行確認できるようになっているとの原著よりの原文抜粋および国内で流通している訳書よりの抜粋をなしつつ「どこが」「どのように」[911 の事件に対する奇怪なる前言と呼べるようなパート] となっているかにつき事細かに解説してもいるとのそちら一連の解説部を参照されたい)

→

[上にて言及の『ジ・イルミナタス・トリロジー』は

[蛇の人工種族を利用しての古代アトランティスの侵略がなされる]

[アトランティスと現代アメリカのペンタゴンが破壊されたことによるのそこに封印されていた [異次元を媒介に魂を喰らうべくも介入してくる存在] の解放がなされる]

といった作中要素を内に含んでいる小説作品「とも」なる —— そこに見る [蛇の人工種族を利用しての古代アトランティスの侵略] という筋立ては一見すると先述の神秘家話柄 (蛇の種族によるアトランティスに対する異次元間侵略) と同様により従前より存在していたロバート・エルヴィン・ハワードという作家の小説『影の王国』をモチーフにしていると解されるところでもあるのだが、であろうとなかろうと、奇怪なる先覚性 (ナイン・ワン・ワンの事前言及) にまつわる問題性はなんら拭 (ぬぐ) えぬとのことがある —— 。

といった [異次元との垣根が破壊されての干渉の開始] との筋立ては上述の著名物理学者キップ・ソーンに由来する著作、BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作が (異次元との扉にも相通ずる) [ブラックホール][ワームホール] の問題を主色として扱い、また、同じくものことで [911 の事件に対する前言とも述べられる要素] をも「多重的に」帯びているとの作品として存在しているとのことと平仄が合いすぎる程に合う] (:疑わしきにおかれては [出典 \(Source\) 紹介の部 37](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 37-5](#) に加えての [出典 \(Source\) 紹介の部 38](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 38-2](#) を包摂する一連の解説部の内容、そして、[出典 \(Source\) 紹介の部 28](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 33-2](#) を包摂する解説部の内容を参照されたい)

(振り返りの部はここまでとする)

上に見る ——( [ダンテ『地獄篇』 およびミルトン『失樂園』の古典内特定部記述内容 ] について取り上げる前に本稿で摘示なしてきたとの) —— 関係性にあつては

[粒子加速器に[アトラス]([エデンの禁断の果実と質的に結びつく論拠を振り返り表記もなしてきたところの黄金の林檎]の在処を知るとされる巨人) および[アトランティス]([大洋の彼方の黄金の林檎の園]とも同一視されてきた古の陸塊)を用いての命名規則が[ブラックホール]「とも」係るところで用いられている]

とのこともが問題視される場所として挙げられるようになっているわけだが、その点につき、

『では、(LHC 実験にあつての)アトラス実験グループに冠されての ATLAS の命名の決定時点(1992年)でアトランティスとの密接なつながりをもたせるべくもの実験関係者なりの意図があつた。スターゲイト・アトランティス(2004年初出)といったスピニング・アウト作品を生み出した映画『スターゲイト』(1994年公開)の登場前であつたが、加速器が[スターゲイト]よろしくの何らかの時空間の歪みを生み出すとの潜在的認識が実験関係者らに存在しており、従前神秘家が発してきたような妄言 —— 「蛇人間(爬虫類の異種族)によってアトランティスが[影の王国]より侵略されたとのより従前よりあるパルプ雑誌掲載小説の筋立てを踏襲してのものに過ぎぬ」と人によっては看做すであろう「史的論拠が伴わない」妄言 —— に影響を受けての側面「も」介在して、そういう命名規則が用いられているのではないか( : すべては実験関係者の意中の問題で話が済む)』

と(そうしたものが呈されうると見た)常識的観点をこちらより呈示もすることを先になしている。

しかしながら、

「(誠に残念ながら)それでは済まないのである」

とのことを多重的に呈示なしもしてきた(※)。

---

※本稿にての後の段にてもさらに切り込んでの話をなす所存だが、

「それでは済まないのである」

との直上にて言及しての点について「第一義的には、」

[粒子加速器によるブラックホール生成が取り沙汰されるようになったのはここ「十数年」のことであり、プランク・エネルギー規模のエネルギーを極小領域に投下するとのおよそ人間には絶対に出来ないことをなすのならば格別、それまでは[ブラックホール生成など人為でなせることと見られていなかった]と科学界にて発表されてきたとの経緯があり、従って、時期的に見て、[特定の命名規則]の使用でもってして警告をなそうとの意図が実験関係者レベルで働いていたとは考えがたい]

とのことが問題になる(本稿の前半部では一方で奇怪なる予見的言及がなされていることを指摘しつつも、他方で、現実にはそういう経緯があるとのことの指し示しに注力してきた)。

同文のことについて「第二義的には、」

[1998年に初出を見た新規理論(ADDモデル)による新たな帰結

を受けて2001年より科学界で目立ってブラックホール大量生成可能性を現実視する見立てがなされるようになった後、  
**「加速器がブラックホール生成をなしうると考えられるようになったが、であったとしても、そちらは科学の進歩に資する安全な極微ブラックホールの生成だから問題はない」**

との申しようがなされるようになったとのことがあり(こちら本稿にての前半部にて折に触れて細かくも典拠挙げながら解説試みていることである)、そうした、

**【「安全で」「科学の進歩に資する」ブラックホール生成についての申しよう】**

が科学界にての満場の賛成を得ているとの状況下でLHC実験が現実開始を見、同実験が継続実施される、これより出力拡大がさらに試みられながらも継続実施されていくとの流れが[確たるもの]として(現行、目立っての実験停止の力学が顕在化することは何らなく)具現化しているとのことがある。

といったなかで相応の認識を大音声で呼ばわってきた実験機関を下支えする科学界サイドにて警鐘・警世をなす意図が今日まで感じられることなどありはしないとのことがある——そこからして勘違いする向きも多いのだが、LHC「実験」を通じてのブラックホール生成は望ましきことと看做されても[特異点の中での人類の破滅に通ずる究極の愚挙]とは科学界のメインストリートでは見られていない。そちらを実験関係者のホームグラウンドで彼らが流布している論法の粗探しに注力しながら「弱くも」問題視しているのは一部の批判者ら、そして、あやまてることを放言しているにすぎない陰謀「論」者(水準が異様に「低い」、頭の具合が正常ではないといった按配でよろしくはないとの筋目の「論」者)らだけである(うち、人類のためになる方向を褒め殺して台無しにでもしたいのかといった有象無象の陰謀論者らではない批判家がどういう論法をどういう風に持ち出してきたかは海外裁判資料の引用などなしがらもの若干の解説を本稿の前半部でなしてもいる(出典(Source)紹介の部17から出典(Source)紹介の部17-4を参照のこと)。また、LHC実験に関しては明示的批判ではなく、隠喩的批判「とも」とれるものが大衆文化現象に存在している、サブ・カルチャー作品などに実験動向を暗に諷刺しているように「見える」ものも含まれているとのことがあることを含んで申し述べておくが、一見にして批判風を吹かせているサブ・カルチャーなどの存在は良くて[批判精神の持ち主]の精神安定剤、悪くて[何にも分かっていないとの大概の思考力なき人間ら]を勘違いさせる材料になりはしても[フィクション][綿飴]として現実世界の流れを変える力など何ら有していないと受け取れもする状況になっている(：本稿前半部にて書いているように筆者は[「ためにしての」LHC関連の行政訴訟]を提訴、[権威の首府](国内に在する組織ながらも国際

的加速器実験構想推進機関との権威の首府)を向うにまわして法廷で一審からして数年越しに国内で戦ってきた(結果的に[真なる訴求事項]に満足に耳を傾ける人間もおらず時間的無為無駄も甚だしい空回りの挙となってしまった節があるのだが戦ってきた)ことまでやった、そうしたことをやらざるをえないと判ずるに至ってやったとの人間として当該問題についての[言論動向]のありようを余念なくも調べており、人間一般の関心度合いについても「細評」なせるだけの識見を蔵しているつもりである(LHC やブラックホールという言葉でどれだけの回数、国内外で検索エンジンが動かされているのか、また、そうしたことにまつわっての論評をなしている者達の[程度](潜在的現実改変能力)はいかほどまでなのか、とのことも無論、深くも分析し、[人間の盲点]の問題によくも通暁するに至っている)——。

とにかくも、今日に至るまでの科学界の論調およびそのやりよう— 本稿前半部解説を参照されたい— にまつわる状況を望見することで、実験機関にての命名規則決定に参加する者達が  
[アトラス・アトランティス・トロイア]

といったことらにまつわる命名規則を用いて、そう、普通人にはま  
ずもって気づけぬかたちでの同じくもの式での高度な命名規則を  
用いて警告・警世をなそうとの良性の意図を発露させていたなど  
とのことを観念することは[マインド][やりよう]の問題から何ら期す  
ことなどできないようになっている(本質的なところとしては[アト  
ラス・アトランティス・トロイアにまつわるところのフィクション][ブラック  
ホールらにまつわる文物]で[911の事件の予見描写]をなすが如  
くことを具現化させることが「我々人間の側の力で」可能か不可能  
か、また、それが良性のものと言えるか否か、深耕してみることで  
見極めがつくようになっているのだが、そうした側面らを「敢えて」  
脇に置いての話としてもなんら善なところが観念できないように  
なっている)]

とのことが問題になる。

---

ここまでをもってして続く部へと話を繋げるべくもの長くもなつての[振り返つての部]とする(：以上もつてしての[振り返つての部]の内容としては、である。まず最初にミルトン『失樂園』について何を述べてきたかについて(そうしたことを筆者が取り上げた問題意識が奈辺にあるのか示しもしつつ)振り返りをなし、次いで、[ダンテ古典・ミルトン古典の相互に関連する特定部の奇怪なる描写]について言及なしはじめる「その前に」本稿にてどういったことの指し示しに注力をなしてきたかについての振り返りをなした。そして、さらにもつて直近の段までではそうもして振り返つてきたことに一面でどういう批判が呈されうると考えられるのか、また、その考えられるところの批判が斥けられるようなものとなつているところの理由は何なのかについての「再度」申し述べての表記をなした)。

直前頁までにあって振り返り表記をなしたとして、である。

次いでもってしてこれ以降の段では

〔ミルトン『失樂園』の特定部描写(アビスを横断しての罪と死の通用路の確立にまつわる描写)が〔トロイア崩壊〕のみならず(ミルトンが目にするにはできなかつたはずの)『ギルガメシュ叙事詩』「とも」結びつきもすると何故、述べられるのか、また、そのことが何故、問題になるというのかについてのさらに突き進んでの説明〕

をなすこととする(何故問題になるのかとの点が〔隠れた動因〕との絡みで重んずべきところとなる)。

その点もってして本稿の先立っての段では

「エデンの園で蛇(に変わってのサタンともされる存在)がアダムとイヴより〔不死を奪った〕との見方が出来るとのこと、そして、それがギルガメシュ叙事詩(のウトナピシュテムの洪水伝承にまつわる部)で蛇がギルガメシュより〔不死を奪った〕パートとの接合性を観念できるところの描写となっている」

とのことを解説なしもした(：一致性の機微を指摘するにあたっては『ギルガメシュ叙事詩』にまつわる専門の学者による叙事詩解説媒体よりの引用をなし、また、エデンの園での誘惑ありようについて論じた識者媒体よりの引用をなし( Project Gutenberg にて公開されている 19 世紀末の書籍から引用をなし)、同じくものこと、解説してきた)。

他面、本稿ではよりもって先立つところにて、

「〔黄金の林檎がやりとりされ、トロイア崩壊の原因になったパリスの審判〕と〔禁断の果実が誘惑の具とされたエデンの園の誘惑〕には尋常ならざる接合性が見てとれる」

とのことを(属人的主観が問題になるようなことではなくにも、の)記号論的多重的一致性に関わるところとして指摘もしていた(：そちら〔黄金の林檎を巡るパリスの審判と禁断の果実を巡るエデンの誘惑の一致性〕についてはほんのつい先程の段でもくどくもの従前内容の振り返り表記をなしているところである)。

上のことらは ——「ここまでの内容のみを顧慮するのならば」だが—— 次のような問題性を帯びていると批判されようもの「でも」ある。

i. 「(蛇による不死の略取との側面が介在していても)〔ギルガメシュ叙事詩〕と〔エデンからの追放の物語〕はそれら全体が密接につながっているわけではない。であるから、両者の一部類似性を過度にピックアップして立論展開をなすのは良心的なやりようではない」

ii. 「〔パリスの審判〕と〔エデンの園〕の誘惑の方は確かに複合的な接合性を呈しているようだが、ただし、パリスの審判での林檎が〔誘惑者の取得目標物〕であったのに対して、エデンの園の誘惑にての禁断の果実(林檎とも見られることがある果実)は〔誘惑の具〕となっているものである。〔目標〕と〔手段〕との差異があるところで同一性を問題視するものどうかととれるところである」

以上のようなかたちで呈されうる批判的見地の存立根拠を無効化し、かつ、

〔『ギルガメシュ叙事詩』から(黄金の林檎にて滅んだトロイアと悪魔の誘惑が濃厚に結びつけられている古典である)ミルトン『失樂園』に至るまでの多くのことが〔黄金の林檎〕(およびヘラクレスの 11 功業)に結合するようになっている〕

ことを示すべくもの指摘をこれよりなしていくこととする。



ここで申し述べるが、直上呈示の、

ii. 「[パリスの審判]と[エデンの園]の誘惑の方は確かに複合的な接合性を呈しているようだが、ただし、パリスの審判での林檎が[誘惑者の取得目標物]であったのに対して、エデンの園の誘惑にての禁断の果実(林檎とも見られることがある果実)は[誘惑の具]となっているものである。[目標]と[手段]との差異があるところで同一性を問題視するのともうかととれるところである」

との批判的見立てに対しては次のようなことが[再反論]として述べられる。

「本稿にて[際立っての要素]を持つ代表的古典として問題視しているミルトン『失樂園』ではサタンが[林檎]としての誘惑の果実(知恵の樹の実)で人間を墮落させた描写されるわけだが、そのやり方を罰するとかたちで神がサタンらをして[林檎の中毒者]に仕立て上げた描写されて「も」いることがある。すなわち、墮地獄を見たサタン(ルシファー)を長(おさ)と戴く墮天使らは[林檎を用いての人類の始祖の墮落促進]の罪過を問われるかたちにて[林檎(知恵の樹の実)なくして生きて行けぬ身体]に神にされたなどと古典『失樂園』には描写されているとのことがある — 直下にての原文抜粋部を参照のこと — (:知恵の樹の実、フォウビドン・フルーツが林檎であるとの表記すら見当たらない聖書本文とは無縁なるそのようなアレンジ — 知恵の樹を用いて誘惑をなした者が知恵の樹の実の中毒者に罪過として仕立て上げられたなどというアレンジ — がどうしてキリスト教文学の金字塔などと称されてきた『失樂園』にてなされているのか、そう、[何故なのか]の問題は置き、とにかくもそういう描写がなされているとのことがある)。  
林檎は[誘惑の具]であると同時に悪魔らにとり[神に強いられるの渴望の元]にも変じていると『失樂園』で描かれているわけであるが、それはパリスの審判にて(「明けの明星」ルシファーよろしく金星と結びつく)アフロディテが黄金の林檎を是が非でも取得しようとしていたと描写されていること、また、(後述するところとして)北欧神話にて[黄金の林檎]が神々に不死を約束するためのなくてはならぬ常食とされていたことと話が接合するところである」

---

直上にて言及なしたこと、[林檎が[墮天使]変じての[悪魔]らの常食と化したとイングランドの代表的古典であるジョン・ミルトン『失樂園』にて描写されている]とのことにつき、原典の記述を引いておくこととする。

(以下、『失樂園』にて[蛇に変じての林檎による誘惑]を奏功させたサタンことルシファーが仲間に演説をなし、その後どうなったのかとのことにまつわる記述を岩波文庫版『失樂園』(平井正穂訳)にある原著第10巻の部を納めたパート(P. 182-p. 187)より — **出典(Source)紹介の部 54(2)**の部にて既に抜粋なしていたところから再度の引用をなすとかたちで — 引くこととする)

そこでわたしは陰謀をめぐらしてその人間を誘惑し、創造主(つくりぬし)から引き離してやった。——しかも、驚くことなかれ、そのために用いたのは、僅か、一個の林檎にすぎなかったのだ！そして、笑うことなかれ、それを怒った創造主(つくりぬし)、自分の愛する人間とそのすべての世界を悉く『罪』と『死』の餌食として、われわれの餌食として、抛(ほう)り出してしまったのだ！

…(中略)…

いかにも神はわたしをも裁いた、というより、わたしのかわりに、わたしが人間を騙した際に姿を借りたあの動物、つまり蛇だ、あれを裁いたというわけだ。

…(中略)…

そう言ったあと、恐らく自分の耳を聳(ろう)するばかりの講堂の喝采と称賛の声

が忽(たちま)ちあがるものと思ひ、期待に胸をふくらませ、暫時佇立(ちよりつ)していた。ところが意外にも、四方八方から彼の耳を襲ってきたものは、無数の舌、舌、舌から漏れてくる不気味なしゅっしゅっという声であった!どうしたことか、と異様さに驚いたが、次の瞬間、こんどは自分自身の異様の變化にさらに驚いた。

…(中略)…

そこには腹這いになったまま必死に、だが空しく、もがいている一匹の巨大な蛇の姿があった。より大いなる力が今彼を圧倒し、裁きに従って、彼が罪を犯した当時の姿にその姿を変えて、彼が罪を罰したのだ。

…(中略)…

彼の大胆不敵な叛乱の共犯者として、誰も彼も同じように蛇に姿を変えられてしまっていた。大広間のあちらこちらから発せられるしゅっしゅっという声は、凄絶な響きをあげていた。あらゆる所で、頭と尾が絡み合った怪物の群れがのたうちまわっていた。蠍(さそり)や毒蛇や恐ろしい両頭蛇(アンピスバイナ)や角蛇(ケラスケス)や水蛇(ヒドロス)や海蛇(エロツプス)や飢渴蛇がそこにいた(ゴルゴンの血が滴り落ちた例の土地でも、蛇島(オフユーザ)でも、これほど多数の蛇が蝟集し蠢いたことはかつてなかった)。しかし、やはりなんといつても、その中で最も巨大だったのは、今や巨竜(ドラゴン)に変じていたサタンであった。彼は、かつて太陽の熱によってピュートの谷間の泥の内に生じた、あの巨大な錦蛇(ピュトン)よりも、さらに巨大であった。大きさの点に劣らず、力もまた依然として儕輩(せいはい)を凌(しの)ぐものを保持している様子であった。

…(中略)…

警備のために、或(あるい)は閲兵をうけんものと、意気軒昂として整列し自分たちの榮ある首領が颯爽として出てくるのを、この目で見ようと息をのんで待っていた。やがて彼らは見た、——だが全く意外な光景であった!それはぞろぞろと這いながら出てくる醜悪な蛇の大群だったのだ。

…(中略)…

同じように次々に彼らに感染していった。

…(中略)…

この彼らの変身と時を同じくして、突如としてすぐ近くの地中から森が一つ姿を現していた。これこそ彼らに対する懲罰をいっそう厳しくしようとする神の御意志(みむね)から出たものであった。そこには美しい果実が、あの誘惑者サタンがイーヴを惑わす際に好餌(こうじ)として用いた、楽園(パラダイス)の例の果実そっくりの美しい果実が、たわわに実っていた。この異様な光景を見て、こんな風にあの一本の禁断の樹のかわりに夥(おびただ)しい禁断の樹が生じたのは、もしかしたら自分たちをいっそう苦しみ辱めるためかもしれぬ、と想いながら、彼らはまじまじとそれを凝視していた。だが、焼けつくような渴きと激しい飢えとに苛まれ、この果物が自分達を欺くために送られたかもしれぬとは思いつつも、どうにも我慢出来なくなり、続々と這い上がり樹によじ登った。

…(中略)…

何度も何度も食べようとした。そのつど吐気を覚え、どうにも我慢できぬ味の悪さに辟易して、口じゅう煤と灰だらけになったその顎(あぎと)を歪めるだけであった。こんな風にして彼らは何度も同じ迷妄に陥った。そこが、彼らに征服されて一度だけ過ちを犯した人間とは違うところであった。

…(中略)…

やがて神に許されて …(中略)… 或る日数に限ってこのような恥ずべき蛇の姿に身を窶(やつ)すことを彼らに命じ給うたという

(国内で流通を見ている訳書よりの引用部はここまでとする —※— )

(※尚、ここにて引用の訳書記述に該当する原著表記はオンライン上より確認可能となっており、その部についての引用もなしておくこととする(疑念疑義があるとの向きにして、かつ、見識あるとの向きにあって[文献的事実]か否かの問題につき確認いただきたくも原著よりの引用をなしておく)。それでは、以下、Henry Walsh との人物を編者として著名な挿絵家 Gustave Dore の手になる挿絵が付されているとの Internet Archive 公開版あるいは Project Gutenberg 公開版(それぞれ確認する気があるのならば全文ダウンロードできましようとの版)の PARADISE LOST 原著にての BOOK X.より引用なすこととする。→ “ Made happy. Him by fraud I have seduced / **From his Creator; and, the more to increase / Your wonder, with an apple. He, thereat / Offended worth your laughter hath given up / Both his beloved Man and all this world, / To Sin and Death a prey, and so to us,** / [ . . . ] / True is, me also he hath judged, or rather / Me not, but the brute serpent, in whose shape / Man I deceived. / [ . . . ] / So having said, awhile he stood, expecting / **Their universal shout, and high applause, / To fill his ear; when, contrary, he hears, / On all sides, from innumerable tongues, / A dismal universal hiss, the sound / Of public scorn. He wondered, but not long / Had leisure, wondering at himself now more. / His visage drawn he felt to sharp and spare, / His arms clung to his ribs, his legs entwining / Each other, till, supplanted, down he fell / A monstrous serpent, on his belly prone, / Reluctant, but in vain ; a greater Power / Now ruled him, punished in the shape he sinned,** / [ . . . ] / Alike, to serpents all, as accessories / To his bold riot. Dreadful was the din / Of hissing through the hall, thick-swarmed now / With complicated monsters, head and tail, / Scorpion, and Asp, and Amphisbaena dire, / Cerastes horned, Hydrus, and Ellops drear, / And Dipsas not so thick swarmed once the soil / Bedropt with blood of Gorgon, or the isle / Ophiusa — but still greatest he the midst, / **Now Dragon grown, larger than whom the sun / Engendered in the Pythian vale on slime, / Huge Python, and his power no less he seemed /** / [ . . . ] / Sublime with expectation when to see / In triumph issuing forth their glorious chief. / They saw, but other sight instead — a crowd / Of ugly serpents! Horror on them fell, / And horrid sympathy for, what they saw, / They felt themselves now changing. / [ . . . ] / Cast on themselves from their own mouths. / **There stood / A grove hard by, sprung up with this their change, / His will who reigns above, to aggravate / Their penance, laden with fair fruit, like that / Which grew in Paradise, the bait of Eve / Used by the tempter. On that prospect strange / Their earnest eyes they fixed, imagining / For one forbidden tree a multitude / Now risen, to work them further woe or shame. / Yet, parched with scalding thirst and hunger fierce, / Though to delude them sent, could not abstain ; / But on they rolled in heaps, and up the trees / Climbing, sat thicker than the snaky locks** / [ . . . ] / Their appetite with gust, instead of fruit / Chewed bitter ashes, which the offended taste / With spattering noise rejected. Oft they assayed, / Hunger and thirst constraining; drugged as oft, / With hatefulest disrelish writhed their jaws, / **With soot and cinders filled; so oft they fell / Into the same illusion, not as Man / Whom they triumphed once lapsed.** [ . . . ] / Thus were they plagued, / And worn with famine, long and ceaseless hiss, / Till their lost shape, permitted, they resumed, / Yearly enjoined, some say, to undergo / This annual humbling, certain numbered days, / To dash

their pride, and joy for man seduced.” (オンライン上より確認可能な原著よりの引用部はここまでとする/ちなみに『失樂園』は叙事詩形態の著作として頻繁に改行がなされている作品ともなるわけだが、そこから改行部についてはスラッシュで表した))

上にての引用なしでの部、そこにては

「中途半端なかたちでしか知恵の樹の実を味わっていない人間に比べて十二分に知恵の樹を味わっている自分達は同時に知の苦さも知っている」

とのかたちでの相応の存在の見立てを代弁しているようにもとれる側面があると本稿筆者などは穿(う)がっている——それは植民地運営機構(あるいはナチスの絶滅収容所のような収容所ないし[畜舎]の運営機構とした方が適切か)の係官が手ずから押しつけた荒唐無稽宗教、カーゴ・カルトが如きものを奉じている[知]の欠如を見た操作対象種族、自分達の菓籠中(かごちゆう)にしていると我々人間を馬鹿にしながらも発している[戯言]のようなものともとれる——のだが、とにかくも、ミルトン古典『失樂園』(のサタンがアビスを横断して[罪と死が押し通る通用路]を構築するとの部)には

「天使の姿を保っていたものの、一時的に蛇に変じて人間を騙した神への叛乱者サタンは」

「人間を林檎によって罪と死の餌食にしたとのことを仲間に誇る——結果的に神がそうした結果を追認することになったとのことで誇る——ための演説をなそうとした瞬間に」

「同類の仲間の反逆墮天使ら共々、エデンでの蛇に変身しての誘惑を咎めるかたちにて爬虫類の類に変じさせられ」

「そのうえで人間を騙したのに用いた林檎(知恵を約束する禁断の果実)を口に苦いものとしてながらそれに依存するような立ち位置へと神によって追い込まれた」

との記述が——直上引用部にあつて見てとれるように——[文献的事実]として認められるわけである。

#### [天使らと悪魔らの古典上の図像化形式について]

ミルトンの描くサタンことルシファーは人間を林檎で騙すことに成功する——先述のように多重的にブラックホール近似物描写となっていると講述したところの【深淵;アビス】の領域を越えてのエデンへの単身飛行(それは【トロイア崩壊譚;黄金の林檎にて滅んだとの都市の崩壊譚】と[地理的描写]や[オデュッセウスの道程]に対する言及などで通ずるように調整されている風が如実にあるとの単身飛行でもある)に次いで林檎を用いての墮落化の奏功する——まで([神に歯向かって地獄に落とされた墮天使]とはいえ)[天使であった頃の似姿をある程度、保持している]ようにも描かれているとのことが「ある」。

たとえば、ギュスターブ・ドレ、19世紀にて著名だった同挿絵家がミルトン『失樂園』の近代刊行版に付した挿絵で描かれるサタンの姿がどれも「翼こそ蝙蝠のようなものに代えて描写されている」とはいえ天使に近しき姿で描かれているとのことがある、そうしたことよりも確認できることとして、である(オンライン上より容易に確認できるのところだが、ギュスターブ・ドレ作品群については下にもその一部を呈示しておく)。





Satan's metamorphose  
(of John Milton's Paradise Lost)



Angels & Demons



上掲図にあつての上の段は



[ミルトン『失樂園』の近代刊行版に芸術家ギュスターブ・ドレ ( Gustave Doré ) が提供した挿絵らを挙げているとの部]

となり、そこにて呈示の画らはそれぞれ

[サタン(ルシファー)が叛逆天使として天より放逐される場面を描いている画] (左上)

[サタン(ルシファー)が天使然とした姿にて(ローマの万神殿パンテオンのもじりとしてミルトンによって生み出された造語として知られるとの)[地獄の万魔殿; パンデモニウム]で共に墮天使らに対する演説をなしている場面を描いた画] (右上)

[サタン(ルシファー)が人間の墮落のためにエデンに向けて単身飛行をなした先にて蛇の姿を目に留める場面を描いている(と思しき)画] (左下)

[サタン(ルシファー)が蛇に変じてアダムとイヴを誘惑する場面を描いている(と思しき)画] (右下)

となる。

ミルトン失樂園に見るサタンはそれらのギュスターブ・ドレ挿絵に見るように天使然とした存在から次第次第にステレオタイプ然とした古き蛇、悪魔としての特性を帯びてゆくさまが描写されるとの存在である(：最終的に同サタンは同輩の墮天使らが蛇、爬虫類の怪物に変化させられる中、人間を墮落させたとの行為の代償に[巨大な竜]に変じさせられたと描写される —— 最前の段にてその下りは原文引用なしとおりでである —— )。

対して、上掲図にあつての下段では

[19世紀アカデミズム絵画の巨匠の一人として知られるウィリアム・アドルフ・ブーグロー ( William-Adolphe Bouguereau ) が描いた天使らをモチーフにしたの画] (下段左)

および

[('意味深い'と筆者が受け取っていることに)ミルトン『失樂園』近代刊行版と並んでダンテ『地獄篇』近代刊行版に「も」挿絵を提供していたとの画家ギュスターブ・ドレがダンテ『地獄篇』にあつての[地獄の獄卒(監視兼拷問役)の悪魔ら似姿]を描きだした画] (下段右)

を挙げもした。

以上の図像らに視覚的に見てとれる、

[天使らの変じての悪魔ら]

との設定。そこから両者[天使][悪魔]が「表裏」一体の存在である —— 神学(セオロジー)に見る墮天使が悪魔であるといった観点を特段顧慮せずとも元来からして一体の存在である —— との見立てが強くなると筆者はとらえている(要らぬところながら属人的目分量につき言及すれば、偽善・まやかしだらけの世界にあつて殊に欺瞞性が色濃くも現われているとの[宗教]の領域に関することとしては「相応しい特性であろう」とも筆者はそれにつきとらえもしている)。

ここで

ii. 「[パリスの審判]と[エデンの園]の誘惑の方は確かに複合的な接合性を呈しているよう

だが、ただし、パリスの審判での林檎が[誘惑者の取得目標物]であったのに対して、エデンの園の誘惑にての禁断の果実(林檎とも見られることがある果実)は[誘惑の具]となっているものである。[目標]と[手段]との差異があるところで同一性を問題視するのめどうかととれるところである」

とのありうべき申しように対するところとして筆者より応じて呈示したいとしたこと、

「本稿にて[際立つての要素]を持つ代表的古典として問題視しているミルトン『失樂園』ではサタンが林檎としての誘惑の果実(知恵の樹の実)で人間を墮落させたと描写されるわけだが、そのやりようを罰するとのかたちで神がサタンらをして「林檎への依存者」に仕立て上げた描写されて「も」いることがある。すなわち、墮地獄を見たサタン(ルシファー)を長と戴く墮天使らは[林檎(知恵の樹の実)]なくして生きて行けぬ身体に神にされたなどと描写されているとのことがある(聖書には見られないとのそのようなアレンジがどうしてなされているのか、そう、[何故なのか]の問題は置き、とにかくもそういう描写がなされているとのことがある)。

林檎は誘惑の具であるのと同時に悪魔らにとり[神に強いられての(常態的などといった式での)渴望の対象]にも変じていると『失樂園』で描かれているわけであるが、それはパリスの審判にて([明けの明星]ルシファーよろしく金星と結びつく)アフロディテが黄金の林檎を是が非でも取得しようとしていたと描写されていること、また、(後述するところとして)北欧神話にて[黄金の林檎]が神々に不死を約束するためのなくてはならぬ常食とされていたことと話が接合するところである」

にあつての

「北欧神話にて[黄金の林檎]が神々に不死を約束するためのなくてはならぬ常食とされていたことと話が接合するところである」

との部についての解説を講じておくこととする。

ミルトンの『失樂園』にあつては、(先にての抜粋部に見るように)、[天使より爬虫類の妖異らに変じた者達](サタンら墮地獄の墮天使の面々)もまたエデンの誘惑を咎としての追罰を科せられるかたちにて

[ [知恵の実たる林檎] に骨まで依存しきつての状況に陥った ]

と記されているわけだが、北欧神話では[黄金の林檎]は欠かすことの出来ぬ[ (多神教の) 神々の常食 ]と描写されている。

につき、リヒャルト・ワグナー戯曲、Der Ring Des Nibelungen、英語圏ではただ単純に The Ring [リング]とだけ呼称されること多い同『ニーベルングの指輪』(の中の[ラインの黄金]の部)にあつては

[ [黄金の林檎] が [神々がそれに依存しきり[常食]とする不死を約束する食べ物] として描写されている ]

とのことがよく知られているとのことがある ( :たとえば、リヒャルト・ワグナー『ニーベルングの指輪』については、である。オンライン上から容易に確認できるところとして和文ウィキペディア[ラインの黄金]項目にあつて「現行にて」(一文のみの引用なして)フライアの作る若返りのリンゴが食べられなくなった神々は若さを失い始める。意を決したヴォータンは、ラインの黄金を手に入れるためにローグを伴って地下に降りてゆくと記載され(注:ワグナー叙事詩ではフライヤ Freia だが、現実の北欧神話ではイドゥン Iðunn という女神が同じくもの役割を担う)、英文 Wikipedia [ Das Rheingold ]項目にて(全くもって同じところとして)現行にて “ **Freia's golden apples had kept the Gods eternally young; in her absence, they begin to age and weaken. In order to win Freia back, Wotan resolves to follow Loge**

down into the earth, in pursuit of the gold.”と記載されているとおりである)。

黄金の林檎 ——本稿の先立っての段にてエデンの果実との接合性を入念に解説してきたとの伝説上の果実—— については北欧神話ではギリシャ神話における[アンブロシア](不死を約束するギリシャ神話の神々の食物)と同等のものとしての設定が付されてもいるわけである。

---

## 補足表記の部

### 補足表記として [1]

北欧神話にあつて神々が[黄金の林檎]としての[若返りの林檎]を常食しているとされている(和文ウィキペディア[黄金の林檎]項目程度のものにも、引用せれば、“北欧神話では、黄金の林檎は神の不老不死の源とされる。これはギリシア神話におけるアムプロシアーに当たる。女神イズンが林檎の管理に当たっており、林檎と最も関連付けられる”(引用部はここまでとする)と記載・解説されているようなところである)ことについてであるが、その黄金の林檎、ときにワグナー(『ニーベルングの指輪』ことThe Ringを生み出したリヒャルト・ワグナー)の歌劇『リング』ならぬところでも「リング」と結びつけられるようなもの「でも」ある。

その点、「[円形]加速器」としての巨大なリング、ラージ・ハドロン・コライダー(本稿にてその特質を専らに問題視しているとのブラックホール生成をなしうるとされてきた装置でリヒャルト・ワグナーならぬウォルター・ワグナーのような人物にブラックホール生成の可能性が目立って問題視されだした(本稿前半部にて解説を講じている訴訟に関わるところで目立って問題視されだした)との装置)がそのような構造をとる[リング]と[黄金の林檎]の結びつきにつき述べれば、例えば、次のようなことがある。

---

### 出典(Source)紹介の部 60(3)

# SOURCE

## 60(3)



ここ出典(Source)紹介の部 60(3)にあつては

[北欧神話にての一部エピソードが[黄金の林檎]と(リヒャルト・ワーグナーの近代歌劇の内容を想起させるような)[魔法の指輪]を結びつけているものとなっている]

ことにまつわる出典を挙げおくこととする。

(直下、Project Gutenberg より誰でも入手できるとの H. A. Guerber という前世紀前半まで活動の英国人史家の手になる **Myths of the Norsemen From the Eddas and Sagas** (『エッダからサガに至るまでの北欧人種の神話』とでも訳せよう著作)にての The Wooing of Gerda との節に見る『スキールニルの歌』というエッダ収録詩に対する解説部よりの引用をなすとして)

---

To induce the fair maiden to lend a favourable ear to his master's proposals, Skirnir showed her the stolen portrait, and **proffered the golden apples and magic ring**, which, however, she haughtily refused to accept, declaring that her father had gold enough and to spare.

(補ってもの訳として)

「(スキールニルという男が自身が北欧の神フレイの恋の仲介役を演じることになったとのその相手方の巨人族の乙女ゲルズの説得に際し)輝く金髪乙女の耳をば自分の主人の提案へと傾けさせるため、スキールニルは主人の肖像を見せ、そのうえで、**[黄金の林檎]と[魔法のリング]を(彼女がフレイ神と結ばれる対価に、と)提示したが**、彼女は[彼女の父は十分に余りあるほどの黄金を持っている]とたからかに述べ、その申し出を容れることを拒んだ」

---

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※— )

(※ちなみに上にて magic ring [魔法のリング]とされているのは Draupnir ドラウプニルという固有名詞が与えられているものとなる。同ドラウプニルについては日本ではアームブレスレット(腕輪)と表されもすることがあるものだが、[オーディンの金の「リング」]であると表現されることが英語圏では多いものとなり、たとえば、英文 Wikipedia [Draupnir] 項目などには “ **In Norse mythology, Draupnir is a gold ring possessed by the god Odin with the ability to multiply itself: Every ninth night eight new rings 'drip' from Draupnir, each one of the same size and weight as the original.[ . . . ] It was offered as a gift by Freyr's servant Skirnir in the wooing of Gerdr, which is described in the poem Skirnismal.** ” (訳として)「北欧神話における[ドラウプニル]とはオーディンに保有されている**[増殖能力を帯びての黄金の「指輪」 a gold ring]**となる。9夜毎に元となったものと同じサイズ・同じ重量の新たなドラウプニルがドラウプニルからドリップ、滴り落ちてくる…(中略)…同リングは『スキールニルの歌』にて表されるところ、ゲルズへの求婚に際してフレイ神の従僕スキールニルより贈り物として呈示されたものとなっていた」との記載が見受けられるところとなっている)

(**出典(Source) 紹介の部 60(3)** はここまでとする)

---

以上、引用元著作( Project Gutenberg にて公開されている **Myths of the Norsemen From the Eddas and Sagas**)に見るように、黄金の林檎は

[魔法の指輪] ([腕輪]とされることもあるが、[指輪]とも表されるドラウプニル)

とセットとなるかたちにて[神の求婚に際しての贈答品](婚儀確約とはあいなっていないわけだから、結納の品とはここでは記さない)とされている、そう、北欧神話の[黄金の林檎]は[リング]と(ワグナー戯曲『ニーベルングの指輪』ことザ・リング以外のところでも)結びつけられるようなもの「とも」になっている。

## 補足表記として [2]

何故、そうした話をここで「敢えても」なすのか、よく慮(おもんばか)っていただきたいのだが、

[ビデオテープに映し出された井戸から現われてビデオを見た人間達を時限爆弾よろしく一定期間経過後に正確に殺していく亡霊]

を登場させたことで「かなり有名な」日本の小説作品群としてリング・シリーズという作品がある(同リング・シリーズは邦画としての映画化のみならず[皆既日食]が印象深くも描かれてのハリウッド映画化版も世に出ており、欧米圏でもある程度の商業的反響を得ている)。

「唐突な、」と当然に思われるところか、とも思うが、上にて言及したそちらリング・シリーズの一連の物語の結末を描いた続編作として

『ループ』(1998年初出 / 『リング』に同じくも作家の鈴木光司の手になる小説作品)

という作品が世に出されてもいる。

同『ループ』の中では

[リング・シリーズの中でテレビ画面(ビデオが再生されてのテレビ画面)から登場して被害者をくぶり殺していく[貞子]という[怨霊]](正確には[怨霊]と「されてきた」存在)

のやりように対して「そうきたか.」といった按配の[サイエンス・フィクション]的な説明が付されている。次のようなかたちにて、である。

→

[ビデオテープの中の井戸から立ち現れ、時限性の爆弾か何かのように正確にビデオテープを視た者を殺していくとの[貞子](ダビングされれば、複製分のビデオテープの数だけ「増殖」する存在でもある)が登場する世界は実は仮想現実世界、「リアル・ワールド」としてのアメリカで構築された仮想現実世界であった。そのような世界だから[貞子]という存在が世界シュミレートに際してのバグ、増殖して破滅をきたす存在として仮想世界に生まれ落ちることになった——(小説『リング』の世界では被害者も加害者も皆、仮想現実の中で生み出された実体なき存在であるなどとの話の展開を見るに至っている)—— ]。

上に見る仮想世界がどういう風にシュミレートされていたかだが、リング・シリーズ最終作の小説『ループ』の中では——ほとんどディーテルに対する描写がない、それがゆえにテーマ性がかえって強くも感じられるとの式で——

[元々の「巨大な加速器」施設遺構の設備が利用されてのシュミレートがなされた仮想世界 [ループ]]

こそが[井戸から登場する亡霊](の名を冠したシステムのバグ)が猛威を振るうことになったまさしくの世界であるとの[設定]が導入されてもいる——疑わしきにおかれては『ループ』(角川書店)を直に購入するなり借りるなりして確認してみるとよからうが、当方の手元にある『ループ』(平成12年9月10日



発行の「文庫」版)の「第二章ガン病棟」p.140からp.141より抜粋するところとして次のような記載がなされているところである。(以下、原文抜粋部とするとして)“打って変わって、画面には広大なアメリカの砂漠地帯が映し出されてゆく。はるか以前に計画は中止され、使われなくなった直径五十キロにも及ぶ超伝導加速器の航空写真による外観から、その内部の模様を、カメラはとらえていた。無用の長物と化したリング状の巨大研究施設の内部には、膨大な数の超並列スーパーコンピューターが並んでいる。砂漠の地下に眠るコンピューターの数は実に六十四万台、まさに圧巻の光景であった。場面は突如、超高層ビルが林立する東京へと変わった。カメラは地下へと潜ってゆく。現在は使われなくなった地下鉄のトンネルが蜘蛛の巣のように張り巡らされた地下の迷宮……。そこにもまた六十四万台の超並列スーパーコンピューターが設置されている。一年を通して温度差が少なく、湿気も少ない地下という環境は、コンピューターを設置するのに最適である。日米合わせて百二十八万台という想像を絶する数の超並列スーパーコンピューター群が、『ループ』を支えるのだ”(抜粋部はここまでとする)とありとおりである——(加速器とくれば、(ただのホラー小説に留まっていた段階の小説『リング』とも通ずる)『リング』状形状を呈しているわけだが、その点からして、「恣意性」を感じさせもするところである)。

整理すれば、

[加速器設備の遺構(に据え置かれたコンピューター群)の中でシュミレートされた世界にあって[エラー]として生まれ落ちた存在、亡霊と呼ばれる貞子なる存在が(彼女が猛威を振るうことになった仮想現実世界の住人から見れば)[地に開いた穴(井戸)から現われて[人々に絶対死亡の状況を正確に与える時限性の殺人マシン]たる増殖性・拡散性を呈しての存在]としての姿を呈している]

との設定が採用されているわけである(普通に考えれば、どうしてそうした設定が出されたのか、不可思議にも思われもしようとの「設定」ではある)。

につき、

[加速器(小説『リング』表題と結びつく『リング』でもいい)遺構にてシュミレートされた世界(作中、ループ世界と呼称)]  
[加速器遺構にてシュミレートされた仮想世界(作中、ループ世界と呼称)で猛威を振るう亡霊による時限性の絶対死]  
[加速器遺構にてシュミレートされた仮想世界(作中、ループ世界と呼称)で亡霊の現われてくる地に開いた穴(井戸)]  
[加速器遺構にてシュミレートされた仮想世界(作中、ループ世界と呼称)での亡霊の増殖プロセス]

との兼ね合いで何が述べたいのかは、そう、[増殖・拡大すれば人類に破滅を進呈することになるだろう加速器(リング)に由来するブラックホール生成]との兼ね合いで何が述べたいのかは——先行するところで[黄金の林檎]について何を述べてきたのかお含みいただければ——お分かりいただけるところか、とは思う。

ここで「奇怪なのは、」後に映画化されもしたリング・シリーズの続編たる『ループ』という小説の初版が世に出たとの、

[1998年]

という折柄は

[加速器とブラックホール生成の可能性が何ら結びつけられて「いなかった」時である]

とのことがあることである(その意で時系列の問題は重んずるに足りる)。

加速器とブラックホール生成が結びつけられるようになったのは、(本稿の前半部でその指し示しに注力しているように)、ウォルター・ワグナー申しようが巷間に問題視されるようになった(だが、「当初」、加速器運営機関はブラックホール生成の可能性について完全否定していた)との「1999年」以降

となり、対して、リング・シリーズにあって「そうきたか、」との落ちをつけた『ループ』が世に出た1998年——同1998年、ADDモデルという加速器によるブラックホール生成可能性肯定に「後に」つなげられることになった理論が世に出た年でもある——という時節はその1999年に先立つこと1年前のこと、そう、物見高い向きも「加速器とブラックホール生成の関係性」といったことをおよそ着目できていないとの折であったとのことが「ある」。

それがゆえに、  
「[先覚性]が気がかりなところとなる」  
と述べたいのである（:この馬鹿げた世界では[たかだかもその程度の予見性]のことを問題視する人間さえ存在しないわけだが（筆者のような人間がこうも書くとオンライン上に同文のことを[実にもって頭の具合のよろしくはない]との筆致、軽侮を招くが関の山であろうなといった筆致が目立って書き、かつ、といった筋目の類に由来する馬鹿げた言いよりの伝ばかりが目につくようになるとのこともありうる）見るわけだが（そういうふざけたありよりの兼ね合いでは[前例]として思い当たるところが山とある）、取りあえず「現行は」その程度のことを問題視する人間さえ存在しない）、小説『ループ』の帰結、それが「貞子というシステムのバグが引き起こしたガン化プロセスが仮想世界を越えて現実世界への侵襲」となり、小説『リング・シリーズ』では「システムの中で運用される人類の遠からずもの破滅」が作中示唆されたりするというのもあわせて筆者などは「非常に不気味である」ととらえているところである。

そして、リングとくれば、  
[黄金の林檎]  
との兼ね合いで直近引き合いに出したリヒャルト・ワグナーの戯曲『ニーベルングの指輪』のよく知られた英語版通称 **The Ring (先述)** を想起させるものであるとのこともある ——※[繋がらぬところを無理矢理に繋いでいる]との認識は元よりこの身、筆者にはない。 第一。ワグナーの Der Ring des Nibelungen 『ニーベルングの指輪』の通用化しての英文呼称は The Ring だが（英文 Wikipedia [ Der Ring des Nibelungen ] 項目冒頭部にて現行、“ It is often referred to as the Ring Cycle, Wagner's Ring, or simply **the Ring**.” と記載されているとおりである）、それと全く同じタイトルの The Ring 『ザ・リング』が小説『リング』（1991年初出/その続編が年に1998世に出た加速器遺構による世界シュミレートを描く『ループ』）を映画化してのハリウッド映画化版の『リング』タイトルとなっているとのことが「ある」（2002年に皆既日食と紐付くかたちでハリウッド映画化版『ザ・リング』が世に出ている）。 第二。小説『リング』シリーズも戯曲『ニーベルングの指輪』も「加速器」との接点が重きをなす作品となっているとのことが「ある」（前者については直近にて表記したとおりである（貞子なる存在の発生源が加速器の遺構にて構築されたグリッド・コンピューティング環境であったとされている）。また、後者については「黄金の林檎（ワグナー歌劇でもモチーフとされるもの）」[アトラス][アトランティス]を介しての関係性について何度も何度も本稿にて解説してきたところである）。につき、（飛躍に次ぐ飛躍のように感じるとの向きもあるかもしれぬが）、小説『リング』シリーズの映画化に関与してきた中田秀夫という映画監督がいる。有名所にも数えられる同映画監督がメガホンを取った作品として『MONSTERZ』という邦画作品が本稿本段を書き記している現時点から見て「ここ最近」、公開開始されているのだが（2014年5月公開／筆者が二年間続いた国内初かつ唯一のものであったLHC裁判第一審を終え、その控訴人として激昂させられることになったここつい最近のことである）、[興味深い内容であろう]と前宣伝文句から判じ、映画館に足を運んで視てみた同映画、ラスト的一幕では『ニーベルングの指輪』（中のドイツ語タイトルオペラ Die Walküre 『ワルキューレ』）が演じられているとの「日本文化会館」（「文化会館」とはそこに集う創価学会会員にはお馴染みの呼称であろう）で「マリオネットと化した人間を操る男」と「操られない男」の死闘が繰り広げられることになっているとの描写がなされていた。 そのようなところからしてワグナーの「ニーベルングの指輪」（本稿を公開しているサイトの一などで今よりかなり前から問題視してきた作品でもある）と「井戸から時限性の致死性かつ増殖性の亡霊が現れてくるリング・シリーズ」が「同じくもの映画監督」を通じて結びついていると見受けられるようになっている。その点、筆者が『この世界の[現実]の縮図か』と不快に思ったのは同映画『MONSTERZ』にて主人公（操られない男）と「人間をまるで触手かなにかのように操る男」の闘いの中で人間を操る男の方が『ニーベルングの指輪』が演じられての日本文化会館ホールでの死闘にて「ここにいる連中は何も分

かっていない。思い出すことさえできない(だから殺されていだけだ)」「どっちが勝つか。多数の俺と一人のお前と」などと自我のない「駒」人間らを心底軽侮しながら、かつ、実際に芥子粒のように扱って(文化会館に集まった)「彼ら」をただの戯れに自殺させたりしながら、「彼ら」を[マス;集団]として主人公にけしかけ、肉薄させしめ(集団と化し自主的思考能力を喪失したゾンビ人間らが主人公によってたかって取りつかんとするシーンは不気味さ・迫真性という意味で並みのゾンビ映画を凌駕すると筆者などは私的に見ている)、といった死闘が極まったの中、最期は[[創価学会系タレントとしてよく知られている女優]に足を引っ張られる主人公]と一緒にそちら[人間を操る男]が[螺旋階段]に真逆さまに落ちて行く描写がなされていたりもするシーンも当該の映画の中には含まれているとことがある(残念ながらそこからして露骨なメタファーとして成立している節がある)。が、といったことはここでは行き過ぎの申しようにとらえてもらってもいい。しかし、この世界には「然りの如し」で多くのことに関連性が成立するようになってしまっていることは[闘う能力を有した人間](そういう向きがそうそうにいるのかとさえ現時、悲観的にならざるをえないと判じているが、とにかくも、いたれば、のといった向き)には把握いただきたいとも考えている(「問題は、」そうしたことが表出しているのが[偶然]で済むか、[恣意性の賜物]なのか、そして、恣意の賜物ならば、の先に何が控えているのか、であるとしつつも、である)—— )。

(補足としての話をしたためての部はここまでとしておく)

直上付記の部では国内サブカルチャー作品(小説『リング・シリーズ』)などを引き合いに行き過ぎもしていると思われかねない話をなしましたが、とにかくも、である。

ii. 「[パリスの審判]と[エデンの園の誘惑]は確かに複合的な接合性を呈しているようだが、ただし、パリスの審判での林檎が[誘惑者の取得目標物]であったのに対して、エデンの園の誘惑にての禁断の果実(林檎とも見られることがある果実)は[誘惑の具]となっているものである。[目標]と[手段]との差異があるところで同一性を問題視するものどうかととれるところである」

とのかたちで呈示したありうべき反論に対しては、

「本稿にて[際立つての要素]を持つ代表的古典として問題視しているミルトン『失樂園』ではサタンが林檎としての誘惑の果実(知恵の樹の実)で人間を墮落させたと描写されるわけだが、そのやりようを罰するとのかたちで神がサタンらをして[林檎への依存者]に仕立て上げたと描写されて「も」いることがある。すなわち、墮地獄を見たサタン(ルシファー)を長と戴く墮天使らは[林檎(知恵の樹の実)]なくして生きて行けぬ身体に神にされたなどと描写されているとことがある(聖書には見られないとのそのようなアレンジがどうしてなされているのか、そう、[何故なのか]の問題は置き、とにかくもそういう描写がなされているとことがある)。

林檎は誘惑の具であると同時に悪魔らの[神に強いられての(常態的などといった式での)渴望の対象]にも変じていると『失樂園』で描かれているわけであるが、それはパリスの審判にて([明けの明星]ルシファーよろしく金星と結びつく)アフロディテが黄金の林檎を是が非でも取得しようとしていたと描写されていること、また、(後述するところとして)北欧神話にて[黄金の林檎]が神々に不死を約束するためのなくてはならぬ常食とされていたことと話が接合するところである

との方向性での再反論がなせるとここまでに示した( [目標]と[手段]の接近性が見て取れる)。

さて、対して、もうひとつ筆者物言いに対してそうした反論がなされてもおかしくはないとのことで(筆者よりありうべき批判を代弁するかたちでながら)挙げもしたこと、

i. 「(蛇による不死の略取との側面が介在していても)[ギルガメシュ叙事詩]と[エデンからの追放の物語]はそれら全体が密接につながっているわけではない。であるから、

両者の一部類似性を過度にピックアップして立論展開をなすのは良心的なやりようではない」

との申しようについてだが、直近まで述べてきたこととあわせもしてそちら「も」また斥けられる、しかも、その斥けのための指し示しによって本稿本段にあって主軸として問題視していること、

「ギルガメシュ叙事詩およびミルトン『失樂園』が結合するようになっている（しかもその結合性がブラックホールにまつわる事物らとの兼ね合いで「も」際立っての多重性を呈しているが如くものとなっている）」

とのことまでもが指し示される場所となっているとのことがある（それだけ聞く限りは無論、[奇態]を越えて[意味不明なる話]とはなるうか、とも思うのだが、物事を偶然の一致や通り一通りの文化伝播の問題で済まそうとの論法を斥ける上での [隠れた動因] の摘示との絡みで重要ととらえていることである）。

ここでのギルガメシュ叙事詩とエデンの追放（を描いた失樂園）を濃密に接合させることについての話で問題となるのは

「黄金の林檎」（ヘラクレス 11 番目の功業にて登場し、また、トロイアの破滅の原因になった —[出典\(Source\) 紹介の部 39](#)— との伝説の果実）

である。

またもやの黄金の林檎を介在させての関係性、その点について以降の段では（続けて表記の）a. から c. の流れで訴求をなすことにする。

具体的には、直下、示すような a. から c. と振つての流れに基づき [黄金の林檎を介しての『ギルガメシュ叙事詩』とエデンの追放（を描いたジョン・ミルトン『失樂園』）の濃密なる接合関係] について —ミルトンとギルガメシュ叙事詩の記号論的接合問題が決して軽々に扱えぬことを示す、接合性類似性をきたしうとの通り一通りの「常識的」文化伝播の問題ではそも済まされぬものである、入念に計算された上でのわざとの挙動（しかもやらせがかったの挙動）であるとの [隠れた動因] にまつわるところとして — 解説を講ずることとする。

---

a.

[（既にそちらにまつわる神話伝承の多重的連結関係は本稿で論じているところとなるのであるも「さらにもって」の話として）黄金の林檎にまつわる話は多くの神話・伝承を「不可解に」結節させるものである]

b.

[上の a. に関わる場所として 「ギルガメシュ伝承にあっての洪水伝承および蛇の不死の略奪に関わるパート」（考古学者らに第 11 番目の石版と振られている『ギルガメシュ叙事詩』の特定パート）に関して「も」「黄金の林檎の取得が目標となっているとのヘラクレス第 11 功業」との顕著な純・記号論的連続性が認められることが現実に摘示可能となっている]

c.

[上の a. 及び b. (なかんずく b.) の [黄金の林檎] に関しての話は [エデン



での誘惑]とも密接に連結するものとなっている(につき、黄金の林檎とエデンの果実の関係性については本稿にてのより先立っての段で細かくも論じてきたこととなる)。

既に指し示してきたところの

### [黄金の林檎とエデンの禁断の果実の関係性]

が見てとれる中で(上のb.にて新たに呈示なしのように)[洪水伝承][蛇による不死の略取]に関わるところでのギルガメシュ叙事詩内容までもが黄金の林檎にまつわる伝承と接合するとのことは[エデンの園からの追放][蛇による不死の略取][要素としての)トロイア崩壊との多重の接合性][洪水伝承との接合性を「感じさせる」側面]を多層的に帯びているとのミルトン『失樂園』が

### [洪水伝承]

### [蛇による不死の略取]

との双方の要素を帯びているギルガメシュ叙事詩特定パート(考古学者らに第11番目の石版と振られているパート)と——くどいが、かねてより摘示してきた[黄金の林檎]と[エデンの果実]の関係「も」あり——「多重的に」接合する、割り符のパーツが見事に噛み合うように接合していることに等しい。

そこより、

[[蛇による不死の略取の物語]とも言い換えられるミルトン『失樂園』—黄金の林檎と関わるエデンの果実を用いての誘惑のプロセスが描かれる物語—にあっての(黒海にて周囲に災厄を引き起こし海峡が構築されたとの)[洪水伝承]とつながり「うる」との(従前論じてきた)側面]

が

[つながり「うる」]

で済まされないようなものとの観点がでてくる。

また、

[[黄金の林檎]の在処を把握すると神話が語る巨人アトラス]

[[黄金の林檎]の園の同等物とも考えられてきた領域、[洪水]で滅した伝説のアトランティス]

[[黄金の林檎]が原因ではじまった戦争にて住民皆殺しに遭った後、[洪水]で消滅したとの伝承が存するトロイア]

と結びつくとの側面を「どういうわけなのか」複合的に帯びているとの今日のLHC実験とミルトン『失樂園』との関係性もが同じくものことより「よりもって重層的なるかたちで」問題になるとのこと「も」ある(：ミルトン『失樂園』にあっては[トロイア][黄金の林檎を巡ってのパリスの審判と多重の類似要素を帯びてのエデンの誘惑][ブラックホール類似要素]とひとところにて接合するありようからしてLHC実験との接合性は指摘できるようになっているとの時点にて問題になりはするのだが——ミルトン『失樂園』の[トロイア(含む:大渦潮の怪物カリュブデイスの寓意使用)との結合][黄金の林檎を巡ってのパリスの審判と多重の類似要素を帯びてのエデンの誘惑をメインモチーフとしているとのありよう][ブラックホール類似要素をエデンでの誘惑成就プロセスにて描写しているとのありよう]との各要素らはLHC実験にての[トロイア崩壊の因たる黄金の林檎の在処を知る巨人ATLASの名の[ブラックホール検知可能性と結びつく検出器]の名称への転用][黄金の林檎の園とも同一視されてきたアトランティスのEvent Display ウェア]名称への転用(ブラックホール生成イベントを観測しようとされるイベント・ディスプレイ・ツールATLANTISへの転用)[大渦潮の怪物カリュブデイスのブラックホール・イベント・ジェネレーターCHARYBDISへの名称転用][科学の進歩に資するなどとされてのありうべきブラックホール生成]との各要素らと揃いも揃って相通ずるようになっていながら——、そこにかて



て加えて、[黒海洪水伝承][古代叙事詩(エピック・オブ・ギルガメシュ)]を媒介にしての[黄金の林檎]との接合性「も」が問題になる]

直上にて呈示の a. から c. のうち、

a.

[ (既にそちらにまつわる神話伝承の多重的連結関係は本稿で論じているところとなるのであるも「さらにもって」の話として) 黄金の林檎にまつわる話は多くの神話・伝承を「不可解に」結節させるものである ]

についての解説からはじめる。

さて、本稿では大要、次のことがまとめて申し述べられるだけの典拠を従前、呈示してきたとことがある。

[黄金の林檎を巡っての誘惑に関わる女神アフロディテ] (ギリシャの美の女神、ローマ版はヴィーナス/古代メソポタミアの女神[イシュタル]との類似性もが取り上げられてきたことも先述なしてきたところの女神)

[エデンの誘惑の蛇に比定されるルシファーことサタン] (ダンテ『地獄篇』およびミルトン『失樂園』の双方にあって [現代的な観点で見てのブラックホール特性と類似するものが「どういふわけなのか」登場している [地獄門の先]の領域] にて人類に悲惨をもたらしていると設定付けられている存在)

らの間には記号論的關係性が存在している。

すなわち、両者[アフロディテ]および[ルシファー]に関しては

[各々、[金星の体現存在]になっており]

[ルネサンス期絵画(ルーカス・クラナッハ・ジ・エルダーのルネサンス期絵画)にあって両者の間に —— ([アフロディテ(ヴィーナス)] [エデンの園の誘惑の蛇(ルシファーことサタンの体現物とする見方が呈されての存在)] が視覚的に対応するように別作品にて描写されているとの式で) —— 照応関係が観念されるようにもなってもおり]

[ [アフロディテが誘惑者になったとの黄金の林檎を巡ってのパリスの審判] と [ルシファーに比定される蛇が誘惑者となつてのエデンの誘惑] の間にて「多重的」接合性が存する]

との式での記号論的關係性が存在している(出典(Source)紹介の部 49 から出典(Source)紹介の部 51 を包摂する部で詳説をなしてきたところと通ずることである)。

その点、[アフロディテ]と[ルシファー]との間の上記の關係性は

[ [黄金の林檎を巡っての取引] と [エデンでの禁断の果実を巡ってのやりとり] との關係性]

と相通ずるものとなるが、[[黄金の林檎]と[エデンの禁断の果実]との關係性]とのことで述べれば、

・[伝説のアトランティス]を[アトラスの娘らが管掌する大海の果てにある黄金の林檎の園]であるととらえる見方が存する(そして、黄金の林檎の園については

それをエデンの園と看做す見方が存する)

・[伝説のアトランティス]の正体を[(コロンブス到達前の)アメリカ大陸]であるとする見方が存する

・[アトラスの娘らに管掌される黄金の林檎の園] = [アトランティス] = [大海の果てにある陸塊] = [アメリカ大陸]との観点が存することを念頭に置いた上で言及するところとして、アメリカ大陸のアステカ文明で主として崇められていたのは[羽毛の生えた蛇の神]としてのケツァルコアトルとなっている。そちら蛇の神ケツァルコアトルについてはエデンの蛇との記号論的接合性が指摘可能となっている存在となる

との側面から

[ケツァルコアトル信仰]

と接合することになりもする(出典(Source)紹介の部 53 から出典(Source)紹介の部 53(4)を包摂する段にての解説部、そして、出典(Source)紹介の部 54 から出典(Source)紹介の部 54(4)を包摂する解説部にて論拠挙げながら問題視してきたとのこととなる)。



Venus & Cupid  
(Aphrodite)



Works of Lucas Cranach the Elder



Lucifer



( John Milton's Paradise Lost )





細々と輪抱挙げながら指桶してきたようにギリシャの女神アフロディテは  
 [金星の体現存在]  
 [黄金の林檎にまつわる誘惑に関わっている存在]  
 [ファム・ファタールとなることになった女 (ヘレン) を誘惑に用いた存在]  
 となっている。  
 他面、ルシファーは  
 [金星 (明けの明星) と結びつく存在]  
 [林檎ともされる果実にまつわる誘惑に関与した蛇の実体とされる存在]  
 [ファム・ファタールとなることになった女 (イヴ) を蛇としての誘惑に利用したとされる存在]  
 である。  
 問題はそうして類似性を呈する両存在の誘惑に関わるところの果実、[エデンの園の果実]と  
 [黄金の林檎の園の林檎]に相関関係が観念できるようになっていること、それがゆえに類似性  
 の問題がよりもって重さを持つてくることである。

## Serpent deities of Aztec

(Mesoamerican civilization)

黄金の林檎の園とアト  
 ランティスが接合する  
 ことを示すのにも  
 力点  
 を置  
 きもしてきたのが本稿  
 である。

Francis Bacon's  
 New Atlantis

Great Atlantis civilization

the garden of Hesperides  
 & Golden Apple



Coatlicue (Teoyamiqui)

フランシス・ベーコンの古典にあって大アトランティスであるとされているアメリカで栄えたアステカ文明、そこでは蛇の神々が崇められていた (左上図は大地母神コアトリクエの発掘彫像の模写、右上はコアトリクエの息子、主要神ケツアルコアトルの古写本内似姿)



Quetzalcoatl



Milton's Lucifer (Satan)



the morning star  
 Planet Venus

黄金の林檎の園と同一視されることもあるエデンの園、その場にての誘惑を奏功させたサタンは

[知の接受者 (善悪の樹の実を食べさせての知の接受者)] / [人類を裏切って破滅にいたった存在 (エデンでの策略、および、黙示録の描写)] / [蛇としての似姿を持つ存在] / [金星の体現存在 (ルシファーとしての側面)]

としての特性を持つ存在である。

他面、黄金の林檎の園と同一視する視点があるアトランティス、その場にも比定されてきたアメリカ大陸での崇拜対象であったケツアルコアトルは

[知の接受者 (文明発達の恩人としての神)] / [信徒を裏切って破滅にいたった存在 (ケツアルコアトルの再臨をスペイン征服者に見たアステカ帝国の破滅のプロセス)] / [蛇としての似姿を持つ存在] / [金星の体現存在]

としての特性を同様を持つ存在である (⇒ 文献的根拠の指し示し箇所としては本稿にての [出典 (Source) 紹介の部53] から [出典 (Source) 紹介の部53 (4)] を包摂する解説部、そして、 [出典 (Source) 紹介の部54] から [出典 (Source) 紹介の部54 (4)] を包摂する解説部を参照のこと)。

直上言及の流れで本稿にて既に書き記していたことに見る、

[アフロディテによるトロイア崩壊につながった黄金の林檎にまつわる誘惑のプロセス]  
[ルシファーによる林檎とも定置される果実をもってしての人類の始祖に対する原罪添付のプロセス]  
[新大陸アメリカにて信仰されていたケツァルコアトル(羽毛を持った蛇)の崇拜体系がその会衆に破滅をもたらしたプロセス]

との要素らに関わるところの話として

---

## a.

[ (既にそちらにまつわる神話伝承の多重的連結関係は本稿で論じているところとなるのであるも「さらにもって」の話として) 黄金の林檎にまつわる話は多くの神話・伝承を「不可解に」結節させるものである ]

## b.

[ 上の a. に関わるところとして [ ギルガメシュ伝承にあつての洪水伝承および蛇の不死の略奪に関わるパート ] (考古学者らに第 11 番目の石版と振られている『ギルガメシュ叙事詩』の特定パート) に関して「も」[ 黄金の林檎の取得が目標となっているとのヘラクレス第 11 功業 ] との顕著な純・記号論的連続性が認められることが現実に摘示可能となっている ]

## c.

[ 上の a. 及び b. (なかんずく b. ) の [ 黄金の林檎 ] に関しての話は [ エデンでの誘惑 ] と密接に連結するものとなっている (につき、黄金の林檎とエデンの果実の関係性については本稿にてのより先立っての段で細かくも論じてきたこととなる)。

既に指し示してきたところの

[ 黄金の林檎とエデンの禁断の果実の関係性 ]

が見てとれる中で (上の b. にて新たに呈示なしのように) [ 洪水伝承 ] [ 蛇による不死の略取 ] に関わるところでのギルガメシュ叙事詩内容までもが黄金の林檎にまつわる伝承と接合するとのことは [ エデンの園からの追放 ] [ 蛇による不死の略取 ] [ (要素としての) トロイア崩壊との多重的接合性 ] [ 洪水伝承との接合性を「感じさせる」側面 ] を多層的に帯びているとのミルトン『失樂園』が

[ 洪水伝承 ]

[ 蛇による不死の略取 ]

との双方の要素を帯びているギルガメシュ叙事詩特定パート (考古学者らに第 11 番目の石版と振られているパート) と —— くだいが、かねてより摘示してきた [ 黄金の林檎 ] と [ エデンの果実 ] の関係「も」あり —— 「多重的に」接合する、割り符のパーツが見事に噛み合うように接合していることに等しい。

そこより、

[ [ 蛇による不死の略取の物語 ] とも言い換えられるミルトン『失樂園』 — 黄金の林檎と関わるエデンの果実を用いての誘惑のプロセスが描かれる物語 — に

あつての(黒海にて周囲に災厄を引き起こし海峡が構築されたとの)[洪水伝承]とつながり「うる」との(従前論じてきた)側面]

が

[つながり「うる」]

で済まされないようなものとの観点が出てくる。

また、

[[黄金の林檎]の在処を把握すると神話が語る巨人アトラス]

[[黄金の林檎]の園の同等物とも考えられてきた領域、[洪水]で滅した伝説のアトランティス]

[[黄金の林檎]が原因ではじまった戦争にて住民皆殺しに遭った後、[洪水]で消滅したとの伝承が存するトロイア]

と結びつくとの側面を「どういうわけなのか」複合的に帯びているとの今日のLHC実験とミルトン『失樂園』との関係性もが同じくものことより「よりもって重層的なるかたちで」問題になるとのこと「も」ある(：ミルトン『失樂園』にあつては[トロイア][黄金の林檎を巡ってのパリスの審判と多重的類似要素を帯びてのエデンの誘惑][ブラックホール類似要素]とひとところにて接合するありようからしてLHC実験との接合性は指摘できるようになっているとの時点にて問題になりはするのだが——ミルトン『失樂園』の[トロイア(含む:大渦潮の怪物カリュプティスの寓意使用)との結合][黄金の林檎を巡ってのパリスの審判と多重的類似要素を帯びてのエデンの誘惑をメインモチーフとしているとのありよう][ブラックホール類似要素をエデンでの誘惑成就プロセスにて描写しているとのありよう]との各要素らはLHC実験にての[トロイア崩壊の因たる黄金の林檎の在処を知る巨人ATLASの名の[ブラックホール検知可能性と結びつく検出器]の名称への転用][黄金の林檎の園とも同一視されてきたアトランティスのEvent Display ウェア)名称への転用(ブラックホール生成イベントを観測しうるとされるイベント・ディスプレイ・ツールATLANTISへの転用)][大渦潮の怪物カリュプティスのブラックホール・イベント・ジェネレーターCHARYBDISへの名称転用][科学の進歩に資するなどとされてのありべきブラックホール生成]との各要素らと揃いも揃って相通ずるようになっていながら——、そこにかてて加えて、[黒海洪水伝承][古代叙事詩(エピック・オブ・ギルガメシュ)]を媒介にしての[黄金の林檎]との接合性「も」が問題になる)

---

にあつての、

---

a.

[(既にそちらにまつわる神話伝承の多重的連結関係は本稿で論じているところとなるのであるも「さらにもって」の話として)黄金の林檎にまつわる話は多くの神話・伝承を「不可解に」結節させるものである]

---

にまつわる場所として「ここにて新たに付け加えての」初出のものとしてなすこととする。

さて、アフロディテというギリシャ神話の女神はイシュタルないしイナンナという古代メソポタミア神話体系に見る女神との接合性が問題視されてきた女神ともなる。

アフロディテが「美と愛の女神」「金星の体現存在」であるのならば、古代メソポタミアにて信仰されていた女神らイシュタル・イナンナも「美と愛の女神」「金星の体現存在」であるとの式にて、である(：につ



いてはアフロディテが金星の体現存在となっていることを専らに示すべくも設けていた本稿 **出典 (Source) 紹介の部 48** の中で (英文 Wikipedia [Aphrodite] 項目にての現行にあっての記述を引くのかたちで) “ In native Greek tradition, the planet had two names, Hesperos as the evening star and Eosphoros as the morning star. The Greeks adopted the identification of the morning and the evening stars, as well as its identification as Ishtar/Aphrodite, during the 4th century BC, along with other items of Babylonian astrology, such as the zodiac (Eudoxus of Cnidus). ” (訳として) 「ギリシャにあっての本来の伝統にあってはその星 (金星のこと) は二つの名を持っていた、すなわち、宵の明星としての Hesperos と明けの明星としての Eosphoros である。ギリシャ人らは紀元前 4 世紀のバビロニア占星術、たとえば、エウドクソスの黄道十二宮概念のようなものらの他事項を傍目にイシュタル (バビロニアの女神) / アフロディテに対するのと同様に明けの明星と宵の明星の意味付けをなした」 (訳を付しての引用部はここまでとする) との物言いを引いていたところでもある —— アフロディテとイシュタルの接合性についてはさらなる典拠となるところを続いての段にて引いておくこととする —— )。

金星に仮託されて崇拝されていたとのそちら古代メソポタミアのイシュタルという女神については — さらに述べれば、イシュタルとメソポタミア神話体系にあっての質的同等物たるイナンナという女神については —

#### **[冥界にエレシュキガルという死を司る双子の姉妹を持つ女神]**

とされているとのことがある。

対して、アステカ帝国で信仰されたケツアルコアトル (アステカ帝国と同時期、いまだ存在していたマヤ文明のバージョンでは [ククルカン] と呼称) にも全く同様の要素が伴っている、とのことがある。すなわち、ケツアルコアトル、[羽毛を持った蛇] との語感と結びつくと同神は

#### **[金星の体現存在]**

にして

#### **[死の世界と関わる双子の兄弟神ショロトル (Xolotl) を持つ神]**

となっているとのことがある。

論拠となるところは直下呈示するとして、まとめれば、イシュタル (イナンナ) もケツアルコアトルも双方、

#### **[金星の体現存在]**

にして

#### **[死の世界と関わる「双子の」神を持つ神]**

となっているとのことがある。

---

#### **出典 (Source) 紹介の部 61**

# SOURCE

## 61



ここ出典 (Source) 紹介の部 61 にあつては歴史の闇に姿を消した文明にて崇拝されていた [古代メソポタミアのイナンナ (イシュタル) 神] と [コロンブス到来前のアステカ帝国にてのケツアルコアトル神] が双方共々、[金星の体現存在] にして [死の世界と関わる「双子の」神を持つ神] となっていたことの典拠を挙げておく。

イシュタル —— 本稿にての出典 (Source) 紹介の部 48 および出典 (Source) 紹介の部 49 を包摂する段で金星体現神格として古代メソポタミアにて崇拝されていたとのこと、言及なしていたところの女神—— について同女神が冥界にエレシュキガルという双子に相当する姉妹を有しているとされることの出典をまずもって挙げる。

(直下、英文 Wikipedia [Ereshkigal] 項目よりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

---

In Mesopotamian mythology, Ereshkigal was the goddess of Irkalla, the land of the dead or underworld. [...] Ereshkigal was the only one who could pass judgment and give laws in her kingdom. The main temple dedicated to her was located in Kutha. The goddess Ishtar refers to Ereshkigal as her older sister in the Sumerian hymn "The Descent of Inanna" (which was also in later Babylonian myth, also called "The Descent of Ishtar"). Inanna/Ishtar's trip and return to the underworld is the most familiar of the myths concerning Ereshkigal.

(訳として)「メソポタミア神話にあつてエレシュキガルは地下世界にての死者の王国たる Irkalla の女神となっている。…(中略)…エレシュキガルは彼女の冥府の王国にて審判を下し、法を適用する権限を持った唯一の存在である。彼女を祭つての主たる神殿は Kutha の地にて存在していた。女神イシュタルはエレシュキガルをして[自身の姉である]とシュメールの讃歌、『イナンナの下降』にて言及している。[イナンナ・イシュタルの冥界への旅]とそこよりの復帰の話はエレシュキガルにまつわる最も膾炙されての神話となっている」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上にてエレシュキガルがイシュタルの姉であると表記されているが、エレシュキガルは金星体現存在

(イシュタルあるいはイナンナ)の「双子としての」姉妹となっていると目立って言及されることもあり(双子の姉と目立って言及されることもあり)、については、下のようなかたちでオンライン上にて言及されていることとなる。

(直下、英文 Wikipedia [Inanna] 項目にての Interpretations of the Inanna descent myth  
([イナンナ下降神話の解説])との部位にてよりの引用をなすこととする)

---

Additionally, the myth may be described as a union of Inanna with her own "dark side", her twin sister-self, Ereshkigal, as when she ascends it is with Ereshkigal's powers, while Inanna is in the underworld it is Ereshkigal who apparently takes on fertility powers, and the poem ends with a line in praise, not of Inanna, but of Ereshkigal.

(訳として)「付け足せば、(イナンナ冥界下降の)神話はイナンナと彼女のダーク・サイド、彼女の「双子の」姉妹エレシュキガルとの結合として叙述されてのものであるようにもとれ、イナンナが冥界にあっての折には(イナンナの属性たる)豊穰の力を明らかに帯びることになったのはエレシュキガルであり、イナンナが冥界より上昇した折にはエレシュキガルの力と共にあったとのことにもなり、シュメールの詩はイナンナではなくエレシュキガルに対する賛辞でもって終わっている」

---

(引用部に対する訳はここまでとする)

また、記述不変なところで目につくところのソースとして双子としてのエレシュキガルについて扱ったソースも挙げておく。

(直下、Project Gutenberg のサイトにて全文公開されているとの Encyclopaedia Britannica, 11th Edition, Volume 9, Slice 7 (ブリタニカ百科事典第 11 版)にての [ERESHKIGAL] 項目よりの掻い摘まんでの原文抜粋をなすこととして)

---

ERESHKIGAL, also known as Allatu, the name of the chief Babylonian goddess of the nether-world where the dead are gathered. Her name signifies "lady of the nether-world."

[...]

It is evident that it was originally a goddess who was supposed to be in control of Irkalla, corresponding to Ishtar in control of fertility and vegetation on earth. Ereshkigal is therefore the sister of Ishtar and from one point of view her counterpart, the symbol of nature during the non-productive season of the year. As the doctrine of two kingdoms, one of this world and one of the world of the dead, becomes crystallized, the dominions of the two sisters are sharply differentiated from one another.

(訳として)「Allatu との名にても知られるエレシュキガルというのは死者が集められる冥界にまつわるバビロニアにあっての主だつての女神である。彼女の名前は冥界の女神との意味合いを有している。…(中略)…彼女エレシュキガルがイシュタルが地上にての豊穰と植生をコントロールする女神であるのに対して原初的に Irkalla (冥界の地 / イシュタルが冥界下りをなした場) をコントロールする女神であることは明らかである。従って、エレシュキガルはイシュタル姉妹であり、一つの視点からは  
[イシュタルと対をなす存在 counterpart]

となり(訳注: counterpart とは辞書的に述べれば、a person having the same characteristics as another「他と同様の特徴を帯びての人物」あるいは[copy]そのもののことを指す)、また、一年を通じての非生産的な季節、その自然にあつての体現存在でもある。この世界(現世)と死者の世界の二つの王国の教義が明確化を見るがゆえに、彼女ら姉妹の支配権は互いにはきとした違いをなすのである(以下略)」

---

(引用部に対する訳はここまでとする)

以上のような記載らからイシュタルとエレシュキガルが現世とあの世をそれぞれに体現する一対の女神達、双子の女神としての性質を帯びているとされていることが確認できるようになっている)

次いで、ケツァルコアトル — 本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 53](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 53\(4\)](#) を包摂する段にての解説部、そして、[出典\(Source\) 紹介の部 54](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 54\(4\)](#) を包摂する段にての解説部にて論拠挙げながら[エデンの誘惑者]と純・記号論的な意味での相似性を呈しているとのこと、説明してきたところのスペインに滅ぼされるまでのアステカ帝国で主権神となっていた神—— について同神が冥界にショロトルという双子の姉妹を有しているとされることの出典を挙げることにする。

(直下、英文 Wikipedia[Xolotl] 項目よりの抜粋をなすこととして)

---

Xolotl was also the god of fire and of bad luck.He was the twin of Quetzalcoatl the pair being of the virgin Coatlicue,and was the dark personification of Venus, the evening star.He guarded the sun when it through the underworld at night. He also assisted Quetzalcoatl in bringing humankind and fire from the underworld.

(訳として)「ショロトルは火と不運の神でもある。彼は処女としてのコアトリクエ(筆者注: コロンブス到来前のアメリカで崇められていた蛇の大地母神)に由来するケツァルコアトルの双子にして[金星のより暗い方面での人格化存在]、宵の明星である(筆者注: 金星を明け方にあつて見れば、明けの明星モーニング・スター、夕方にあつて見れば、宵の明星イブニング・スターとなるとの観点に立つての申しようがなされている)。彼はまた、それが夜間、地下の冥界を通り過ぎるとき、太陽を守護する役目を果たしている。彼はまたケツァルコアトルが人間を運ぶのを助け冥界よりの火にくべる存在でもある」

---

(引用部はここまでとする)

(直下、冥界と結びつくショロトル特性について和文ウィキペディア[ミクトラン]項目(アステカ神話にての[冥府の最下層]にまつわる項目)にあつての現行記述より一部引用をなすこととして)

---

戦で死んだ者、雷で死んだ者、出産で死んだ女、子供のうちに死んだ者以外は全てこのミクトランに向かう。その旅は困難で4年の年月を要するが、死神であるショロトルがそれを助ける

---

(引用部はここまでとする)

上よりケツァルコアトルの双子たるショロトルという存在が冥界と結びつく神としてよく知られていること、理解してもらえるものか、と思う。

---

※ケツァルコアトルの双子がショロトルとされている点についての付記として

Quetzalcoatl ケツァルコアトルに付されての coatl をして[蛇][双子]を意味とするとの指摘が一般になされている。

については本稿にての **出典(Source) 紹介の部 53(2)** の段にて挙げていた資料、Project Gutenberg のサイトにてダウンロードできるとの 19 世紀往時にて令名高かった米国人考古学者 ( Daniel Garrison Brinton ダニエル・ガリソン・ブリントン) がものした、

### **AMERICAN HERO-MYTHS. A STUDY IN THE NATIVE RELIGIONS OF THE WESTERN CONTINENT (1882)**

の The Return of Quetzalcoatl CHAPTER III. THE HERO-GOD OF THE AZTEC TRIBES. §1. The Two Antagonists.より先にてなした引用部にあつて

“ The latter part of the name, coatl, has in Aztec three entirely different meanings. It means a guest, also twins, and lastly, as a syncopated form of cohuatl, a serpent. ” (訳として)「Quetzalcoatl の後の部の名コアトルはアステカ人にとり、三つの意味を有しており、[客人]そして[双子]、最後に、cohuatl との語と同義扱いされながらの[蛇]の意である」

と記載されているところとなり、また、次のようなこと「も」(同様にオンライン上より容易に裏取りできるところとして)同じくものことを扱っている。

(英文 Wikipedia[Coatl] 項目の現行にての記載内容より抜粋するところとして)

“ Coatl ( also spelled cohuatl, couatl, or cuatl ) is a Nahuatl word meaning "serpent" or "twin". It is the name of one of the day-signs in the Aztec Calendar.「cohuatl, couatl,」(訳として)「あるいは cuatl と綴られるコアトル coatl は[蛇]ないし[双子]を意味するナワトル語となり、同語はアステカ暦にての日付供用サインの一つの名ともなっている」

そのこと、ケツァルコアトルの[コアトル]が双子との意味合いとなっているところと結びつくように当然に解されるところとして、Project Gutenberg のサイトにて誰でもオンライン上より取得可能な 20 世紀前半に書かれた文書、

**The fundamental principles of Old and New World civilizations** (1901 年刊 / 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての比較的専門家筋ではよく知られていたらしい米国の女流考古学者の Zelia Nuttall ゼリア・ヌッタールとの向きの手になる論稿—スワスティカ紋様(鉤十字紋様)の天文事象と結びつく由来などについて著者の興味深い見解もが記されていたり古代アメリカ文明に対する豊富な情報を含んでいたりすることでも目を引く著述である— )



にあつて

(以下、The fundamental principles of Old and New World civilizations の Footnotes の部の 3 と振られた箇所にての記載内容より引用なすところとして)

“Besides the word coatl=twin, the Mexicans had another term to express some thing double, in pairs. A plant with two shoots was named xolotl. Double agave plants, or maize when occasionally met with, were regarded with superstition and named me·xolotl.”  
「コアトルという語が双子との語となることに加えて、メキシコ人には何か一対となっている二つのものを指すものとしての他の語法があった。[二つの枝を持つ植物]は[ショロトル]と命名されていた。重弁の(あるいは八重咲きの、か)の竜舌蘭(リュウゼツラン)系の植物ら、しばしば、トウモロコシと同一視されるそれらは迷信にあつてはメ・ショロトルと命名されている」(引用部訳はここまでとする)

と表記されてもいる。

といった風にケツァル「コアトル」の双子の兄弟が[ショロトル]とされていることについては —その[因]によるところなのか、[果]によるところなのか、どちらなのかは筆者寡聞にして明確には述べられないが— [語法]からして「も」伺い知れるようになってもいる。

---

(出典(Source)紹介の部 61)はここまでとする)

---

さて、女神イシュタル(往古にて崇められていた女神イナンナがアッカド語表記されての女神)とケツァルコアトルが共に

### [金星の体現存在]

となっているとの側面だけではそう、両者の間に際立った類似性があるとは述べられなからうが、なおかつ、

### [冥界に双子の神を持つ存在]

となると類似性が際立っていることになると受け取れる。

その点、[エデンの誘惑者]に比定され、また、[金星]と強くも結びつくルシファー (Lucifer がいかように金星と結びつくとされるかについては本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 49](#) および [出典\(Source\)紹介の部 54\(3\)](#) を参照のこと) と多重の相関関係を呈すると先述してきたところのアフロディテ、より具体的には[ルネサンス期の[林檎の園]を描いた絵画の熊様][トロイア崩壊に至るパリスの審判とエデンにての失樂園の複合的連結関係]などを顧慮することで Lucifer と多重の相関関係を呈すると先述してきた ([出典\(Source\)紹介の部 49](#) から [出典\(Source\)紹介の部 51](#) を包摂する解説部にて先述してきた) ところのアフロディテという女神の起源がそこに存すると指摘されているのがメソポタミアの女神イシュタル(イナンナ)ともなっている。以下、あらためての典拠紹介部を参照されたい。

# SOURCE

## 61(2)



ここ出典 (Source) 紹介の部 61 (2) には

[(直上の段でケツァルコアトルとの際立つての記号論的類似性について指摘してきた)イシュタルという女神がギリシャのアフロディテ神と結びつく女神と歴年語られてきた存在である]

とのことにまつわる典拠を挙げておくこととする。

その点、本稿にあって先述の出典 (Source) 紹介の部 48 には (エウセビオスの著作 The Chaldean Chronicle の具体的内容を抜粋するに先立ち) オンライン上より容易に確認できる話として英文 Wikipedia [Aphrodite] 項目にての次の記述を紹介していた。

(くどくも再引用するところとして)

“ In native Greek tradition, the planet had two names, Hesperos as the evening star and Eosphoros as the morning star. The Greeks adopted the identification of the morning and the evening stars, as well as its identification as Ishtar/Aphrodite, during the 4th century BC, along with other items of Babylonian astrology, such as the zodiac (Eudoxus of Cnidus). ” (訳として) 「ギリシャにあっての本来の伝統にあってはその星 (金星のこと) は二つの名を持っていた、すなわち、宵の明星としての Hesperos と明けの明星としての Eosphoros である。ギリシャ人らは紀元前 4 世紀のバビロニア占星術、たとえば、エウドクソスの黄道十二宮概念のようなものらの他事項を傍目にイシュタル (バビロニアの女神) / アフロディテに対するのと同様に明けの明星と宵の明星の意味付けをなした」 (再度の引用部はここまでとする)

上では足りぬか、とも見、さらに、ここでは (便宜的に 出典 (Source) 紹介の部 61 (2) として)

[イシュタルとアフロディテの起源にあっての同一性]

についてさらなる出典紹介をなしておくこととする。

についてはオンライン上より容易に全文確認できる出典として Project Gutenberg にて全文ダウンロードできるとの著作を挙げることとする。

具体的には

## THE RELIGION OF ANCIENT PALESTINE (1908) 『古代パレスティナの宗教』

という著作、20世紀初頭に Stanley Arthur Cook というヘブライ学専門の学者——英文ウィキペディアにも同人物にまつわる一項目が現行設けられているとの学者——がものした同著の特定部記述を引くこととする。

(直下、THE RELIGION OF ANCIENT PALESTINE (1908) にての CHAPTER VII THE PANTHEON より引用をなすとして)

---

The phonetic equivalent of Ishtar in old Arabia was a god ( so perhaps also in Moab, ninth century ), and Ishtar herself appears in Assyria with a beard and is likened to the god Ashur, thus finding a later parallel in the bearded Aphrodite ( Astarte, Venus ) of Cyprus.

(拙訳として)

「古代アラビア界限(メソポタミア)にてのイシュタル、その発音に即しての同等物はモアブ地方の前9世紀にての神となり、同イシュタルはアッシリアにてあごひげをたくわえた姿でアッシュール神と結びつくかたちで現われもし、そうして、[あごひげをたくわえたキュプロスのアフロディテ](アスタルテないしヴィーナス)との相似形を後に見出せることとなった存在でもある」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上にての専門の学者解説よりの引用にてお分かりいただけようかと思うが、イシュタルとアフロディテ(ヴィーナス)は歴年、学者らによって同一視されるべき存在であるとの見方が提示されてきた女神らとなっている——古代宗教ありようにつき多少なりとも詳しく向きにあつてはイシュタルといった女神にまつわる話となると[巫娼]、すなわち、[その聖域で春をひさぐことを強いられての神殿娼婦ら]にまつわる淫風と結びつく妖しく淫らな女神という印象が強くもあることかとは思いますが、さらに詳しく専門家にはイシュタルやアフロディテはバイ・セクシャル的な存在「とも」見られているようである。直上にての引用部に見るように[あごひげをたくわえたイシュタル]や[あごひげをたくわえたアルロディテ]の像が存在していることがその理由となる(につき、ギリシャ・アフロディテの同等物たるローマ・ヴィーナスに関わるところとして英文 Wikipedia[ Venus Barbata ]項目にあつて “ Venus Barbata ('Bearded Venus') was a surname of the goddess Venus among the Romans. Macrobius also mentions a statue of Venus in Cyprus, representing the goddess with a beard, in female attire, but resembling in her whole figure that of a man (see also Aphroditos). ” (訳として)「あごひげを生やしたヴィーナスを意味する Venus Barbata はローマ人の間にてのヴィーナスの名となっている。マクロビウス(訳注:ローマのサトゥルナリア祭に材をとった作品を遺していることで知られる5世紀初期に生きた文人)が言及しているところとして[キュプロス島にてのヴィーナス](訳注:直前にてそこよりの引用をなした THE RELIGION OF ANCIENT PALESTINE (1908)で言及されている存在)はあごひげをもった女神としての姿を呈しており、女物の服装なししているなかで全体として男としての似姿を呈していたとされる」(引用部はここまでとしておく)——。

とにかくも、アフロディテ・ヴィーナスとイシュタルは地続きの存在であると歴年指摘されてきた「両者ともどもにも金の星体現存在」となっているとこのことがあるわけである。

(出典(Source)紹介の部 61(2)はここまでとする)

ルシファーと接合する側面が複合的に存する —— (繰り返すが、[ルネサンス期の「林檎の園」を描いた絵画の熊様]・[トロイア崩壊に至るパリスの審判とエデンにての樂園喪失の多重的連結関係]などを顧慮することで浮かびあがるとのかたちにてルシファーと接合する側面が複合的に存する) —— とのアフロディテの原初的存在となっているとのこともが指摘されている同イシュタル(イナンナ)が

[金星体現存在] (出典(Source)紹介の部 48)

[冥界に一对となる双子の神を持つ存在] (出典(Source)紹介の部 61)

となっており、他面、アステカ文明のケツアルコアトルが

[金星体現存在] (出典(Source)紹介の部 53(3))

[冥界に一对となる双子の神を持つ存在] (出典(Source)紹介の部 61)

となっていることからして[尋常一様ならざる関係性の環]に連なるような話である(と指摘するところである)。

先述のようにケツアルコアトルとルシファーの間には

[ケツアルコアトル]

→

[羽毛を持った蛇との語感の名前の神となっている] (出典(Source)紹介の部 53(2))

[金星の体現存在となっている] (出典(Source)紹介の部 53(3))

[文明の恩人となっている] (同出典(Source)紹介の部 53(3))

[同神を崇拝していた地域の住民の期待を裏切ることになったとの神となっている] (出典(Source)紹介の部 53(4))

[ルシファー]

→

[蛇であるという存在となっている] (出典(Source)紹介の部 54)

[ある種の文明の促進者とでもいふべき存在となっている] (出典(Source)紹介の部 54(2))

[金星と結びつく存在ともなっている] (出典(Source)紹介の部 54(3))

[エデンの住人とその子孫の期待を裏切ることになったと描写される —— 旧約聖書の創世記および新約聖書の黙示録にてそうも描写される —— 存在となっている] (出典(Source)紹介の部 54(4))

(※1:より幅広くも見れば、[ケツアルコアトルの信徒らに破滅を進呈した]のが[キリスト教徒](たるスペインの征服者ら)となっていること、[サタンの薬籠中になった会衆に(新約聖書の黙示録で描写される)ところとして)打ち勝った]のが[キリスト教徒]となっていること「にも」相似形を見出せるようになっている)

(※2:出典(Source)紹介の部 53(4))にて示さんとしてきたように[スペインがアステカ文明圏に破滅的改変を強いた]なかで疫病 —— 新大陸の人間が免疫を持っていなかった旧大陸(欧州)由来の天然痘 —— の猖獗(しょうけつ)が戦乱と共に現地人を容赦なく殺していったとされる。対して、聖書黙示録 —— [古き蛇にして赤い竜としてのサタン][偽預言者][偽りの獣]がその会衆を破滅に誘(いざな)うとの記述がなされている聖書の末尾におさめられている文書たる黙示録 —— では[黙示録の四騎士(なる存在)が究極的破滅(墮地獄)に至る前段階にて人間に災厄をばらまく]との記述も認められ、[戦乱]と[疫病]との



伝でのアナロジー(一致性)の問題もアメリカ大陸の出来事と『黙示録』の間にはみとめられるとのことがある)

との相似形が成立しているとのことがあり、そこに

[ルシファー] ↔ ([黄金の林檎を巡ってのパリスの審判]および[エデンの禁断の果実を巡ってのエデンの誘惑]を介しての複合的接合関係) ↔ [アフロディテ] ↔ (原初的存在としての見立てが存在) ↔ [イシュタル] ↔ (金星体現存在/冥界に双子の片割れを持つ神) ↔ [ケツアルコアトル]

との[イシュタル]を媒介項にしての連結関係「も」が呈示できるようになるとの式で

[さらにもつての複合的連結関係の環] (黄金の林檎に関わるところのさらにもつての複合的連結関係の環)

が浮かびあがってくるというわけである。

---

補足として

ここで[補足]としてさらにもつて遠洋に泳いでいって申し述べるが、ロバート・シルヴァーバーグという作家(多作で知られるサイエンス・フィクション分野、ノン・フィクション分野双方にあつて著名な作家)に由来する作品として青少年層を対象としてもものした冒険小説として、

### The Gate of Worlds『多元世界の門』(1967)

とのフィクションが今より半世紀近く前、60年代に世に出ているとのことがある。

同フィクション(The Gate of Worlds『多元世界の門』(1967))の中では

[アメリカ大陸のアステカ文明(要するにケツアルコアトルを崇める文明)が滅ぼされずに生贄の儀式をも辞めて列強として君臨しているとのパラレルワールドにあつての世界像が描かれており、そこでは、他面、欧州世界は[黒死病](ペスト)の流行で世界に覇を唱える力を失っている]

との設定が採用されている(:シルヴァーバーグという作家は同じくものパラレルワールド作品に[落ち]を付けていなかったか、と思うが、[多元世界の門]とはそうしたパラレルワールド世界とこの世界を結ぶ登場人物の観念の中に登場する夢想的な門のことを指す)。

何故、そうした荒唐無稽フィクションの粗筋のことを(細々とした話ながらも)ここ補足の部にて持ち出したかと述べれば、「問題となる場所として、」同じくもの小説のパラレルワールドで

[世界的に影響力を行使するに至ったアステカ帝国が君臨するアメリカ大陸]

をして Hesperia [ヘスペリア]、要するに、[黄金の林檎の園]に名称淵源を持つ存在として描いているとのことに着目せざるをえないだけの理由が「その他のところに」あるからである(※)。



(※特定フィクションにあつてアメリカに対して[ヘスペリア]との名称が用いられているとしたが、本稿出典(Source)紹介の部 45 にも部分的に問題視した[Hesperia]とは  
(英文 Wikipedia[Hesperia]程度のところでも目立つように書かれているところとして)

Hesperia as "western land", a term sometimes applied to Italy and sometimes to the Iberian Peninsula ([西の地]を意味する語でイタリア、ないし、しばしばイベリア半島)との意味合いを有している言葉である。

につき、ヴェルギリウス Virgil、本稿にて先述のダンテ『地獄篇』にあつてはダンテと共に案内役として地獄を経巡ったとの設定が付されているそちらローマ期の代表的詩人が今日に遺る叙事詩『アエネーイス』にてイタリアを[ヘスペリア]と表していることは欧米の古典に精通している人間には比較的知られていることである(と見受けられる)。

本稿にての先の段、出典(Source)紹介の部 45 でもジョヴァンニ・ヴィッターニという 14 世紀の人間の『新年代記』(Nuova Cronica)という著作の内容を問題視した際に若干言及したこととなるが、ヴェルギリウス叙事詩『アエネーイス』、[ローマの起源がトロイアを追われた人々の入植にある]とのことを述べていることで知られる同ローマ期古典にては  
[オデュッセウスの木製の馬の奸計にて陥落したトロイア、そのトロイアからの落人の一団のリーダーであった主人公アエネーイスらが[ヘスペリア]と呼称されてのイタリアを目指しての旅をなしている]

と描写され、しかも、その[イタリアとしてのヘスペリア]については(『アイネーイス』主人公アイネアスが[夢見の神託]で得た知見として)

「[トロイア人始祖たるダルダネスら(流浪の果てに後の世にて木製の馬で劫掠されることになったトロイアを創建したとの男(先述))の出身地]であり、それゆえ、トロイア人の真の故郷はイタリアである」

とのものと当該の古典にて描写されている(であるから彼らは先祖の地を目指している)とのありようが見受けられる(:同じくものことについては英文 Wikipedia[Dardanes]項目、トロイアの始祖たる[ダルダネス]にまつわる同項目にて A different account by Virgil in his Aeneid (3.163f), has Aeneas in a dream learn from his ancestral Penates that "Dardanus and Father Iasius" and the Penates themselves originally came from Hesperia, afterwards renamed as Italy. (訳として)「(ダルダネス故郷にまつわる)ヴェルギリウス『アイネーイス』による他の説明は[アイネアスが夢にて彼の祖霊(ローマの祖先崇拝の対象たる存在ペナーテース)からダーダネルスおよび同様に父祖たるイーアシオンそして祖霊ペナーテース自体が原初、ヘスペリア、後にイタリアと呼ばれるところから(トロイアの地へ)やってきた存在であると学んだ」とのものとなっている」と記載されてもいるところである)。

それにつき文献的な根拠をさらに把握したいとのことであれば、Hesperia,Italy であるとか、Hesperia, Aeneid であるとか、そういうキーワードの検索ですぐに解説英文媒体を捕捉できるようになっ

ているのでそちら参照なせばよかろうと申し述べておく)

「問題視されるべきところととらえるのは、」日本ではあまり知られぬ作家ロバート・シルヴァーバーグ ——(ただし仕事(執筆)のスピードが異常に速いことでも知られている同ロバート・シルヴァーバーグは[ただのやくざな物書き]ではなくインターネットすら存在しない中で弛まざる努力をなす勉強家としての側面を發揮して、専門外のことでありながら考古学関係のノンフィクション関連著作をも著し、そちらもヒットさせているとの一流の識者として「も」知られている)——にそういうアイディア、蛇の神々を崇めていたアメリカ旧文明圏をして[ヘスペリア]と[黄金の林檎の園]と表させしめたとのアイディアの源泉となることの事情(個々人の胸中を軽んじて見れば、[歴史的力学]でもいいが)があったと解されることである。

それに関しては

『ヘスペリアは[西方の地]としての意味を持つからただ単純に作家ロバート・シルヴァーバーグが[アステカ帝国が世界の覇権を握っているパラレルワールドのアメリカ]を欧州世界から見ての[西方の地]、ヘスペリアと呼んだだけではないのか』

とも当然に考えられるわけだが、本稿では先に次のことをも指し示している。

「新大陸アメリカは[アトランティス]と結びつけられて欧州人に見られてきた領域でもある(先に[出典\(Source\) 紹介の部 52](#)にて原文抜粋した古典『ニュー・アトランティス』内の記述やその他古地図にそうした欧州人の見方を反映しての描写がなされている)。そして、アメリカと結びつけられもしていたアトランティスを[黄金の林檎の園](トロイア崩壊の原因たる果実が実る場:ヘスペリアとの語と結びつくヘスペリデスの園)と同一視する視点が存在している(また、そうして[アメリカ][黄金の林檎の園]と結びつくアトランティスは複合的に[トロイア]とも結びつく側面を帯びての伝説の陸塊でもある)」(本稿にての[出典\(Source\) 紹介の部 40](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 45](#)を含む一連の解説部を参照のこと)

とすれば、

[アメリカ → 黄金の林檎(トロイア崩壊の原因でもある果実)の園 → 黄金の林檎の園の管理者たるヘスペリデスと結びつく語としてのヘスペリア → アメリカをヘスペリアと呼称するロバート・シルヴァーバーグやりよう]

との流れ「も」また成立するように見える。

作家、アステカが覇権国家となったパラレルワールドを描く作品にてアメリカを[ヘスペリア]と呼称したロバート・シルヴァーバーグにどこまで以上のことに対する認識があったかは作家の知人でもない本稿筆者には[忖度]以上のことはできないが、にまつわって着目すべきは(ようやくここ本段が本論に対する補足の部として意をなすことになるところとして着目すべきは)

[ケツアルコアトル崇拜のアメリカ・アステカが滅ぼされもせずに覇

権を握っているとのパラレル・ワールド、そこに見るケツアルコアトル崇拝]

が[エデンの園の誘惑者]と複合的に結びつくとのことがあり(直近再述の通り)、さらに述べれば、その[エデンの園]を[黄金の林檎の園]と結びつけるとの欧州人視点があったとのことがあり (出典(Source)紹介の部 51)にて19世紀にての権威筋であった Alexander Stuart Murray の手になる Manual of Mythology の “ The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were far-famed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods : it was another Eden.” (訳として)「黄金の林檎が実るヘスペリデスの園は大洋にあってのどこかの島に存在する、あるいは、アフリカ沖から北ないし西に向かった先にあると考えられている。それらは古典古代の時代にあつて[ゼウス寝所のそばにて流れるネクター(神々の不死の飲料のこと)の発する場]にして[この地上にあつて神々の最も得がたき祝福が施された場]として非常に有名であつた。すなわち、ヘスペリデスの園はもう一つのエデンであつた」との記述を引いて示したようなことがある)、であれば、**[ [アメリカで崇拝されたケツアルコアトル] と [エデン(⇔黄金の林檎の園とも見做される場)の誘惑者] の関係性 ]** と複合顧慮することで際立つその伝でも「あまりにも、」物事が複合的に接合するとのことである。

(補足の部はここまでとする)

さて、ここより、直近の補足部にて、

[ヘスペリア(イタリア別称にして黄金の林檎の園を管理するヘスペリデスのうちの一名)をパラレルワールドにての [アステカ君臨のアメリカ大陸] の呼称として用いていた特定作家(ロバート・シルヴァーバーグ)のやりよう]

を引き合いに出し出した所以ともなるところ、より重みをもって問題となることとしての [次の関係性] についての説明を講ずることとする(そちら関係性は [黄金の林檎を巡ってファム・ファタール(男を破滅させる筋目の女)とでもいうべき女(ヘレン)を誘惑の具に用いたアフロディテ] と [イシュタル] の間に接合関係が存在していること —— 先の段にて指し示したこと —— の意味性をさらに増大させしめるとのものともなっている)。

「大洋の彼方にある[黄金の林檎の園]にて黄金の林檎を管理するヘスペリデスらの出生については

[彼女達はアトラスの娘である(Atlantides; アトランティデスである)]

と語られもする(出典(Source)紹介の部 40) 以外に、

[彼女達は夜の神ニュクスが一人で産んだか、ないし、原初の地下の神エレボスとの間に産みだした存在である]

[彼女達は黄昏の神ヘスペロスの娘らである]

といった異伝・異説が存在している。

そのように複数ある出生説らの中の特定のものでヘスペリデスらの父親とされる[ヘスペロス]については

[宵の明星(イブニング・スター)の体現存在]

[ルシファーとの呼称と結びつく存在]

であるとの見解が歴年呈されてきた存在でもある(続いての**出典(Source)紹介の部 62**を参照のこと)。

さて、[明けの明星]こと[金星]についてはルシファーのみならずアフロディテ・イシュタル・ケツアルコアトルらと(ここまで問題視してきた複合的一致性の中の一要素として)結びつく天体である。

加えて、ヘスペリデス姉妹らにあつてのヘスペリデスという語句自体が、(その[黄昏と宵の明星の神]ヘスペロスとの響きとの類似性からもおもんばかれるところなのでもあるが)、宵の明星たる金星との接合性を歴年指摘されてきた存在ともなっているとのことがある(同文に下にての**出典(Source)紹介の部 62**を参照のこと)。

端的に表記すれば、

[黄金の林檎を管掌するヘスペリデス ↔ [語源的接続性・ヘスペロス神(宵の明星の体現存在)の娘らとの話が伴う存在] ↔ [金星体現存在] ↔ [金星と結びつく特質を[ルシファー・アフロディテ・イシュタル・ケツアルコアトル]らと共有する存在]との関係性「も」が成立していることになる]

直上表記のことにまつわつての典拠紹介をなすことから始める。

**出典(Source)紹介の部 62**

# SOURCE

## 62



ここ**出典(Source)紹介の部 62**にあつては黄金の林檎の園を管掌する存在として伝承が語るヘスペリデス姉妹らの父親が(ここまで紹介してきたところとしての)巨人アトラスではなく [Hesperus ヘスペロス] という [宵の明星の体現存在] であるとの異説が存すること、また、その [Hesperus] が [ルシファー] (という名称)と親和性高い存在であることに言及しているとの出典を多少細かくも挙げておくこととする。



メジャーどころとして一世紀以上にわたって米国人の神話理解のための標準書となっていたとされるトマス・ブルフィンチ(日本でもその騎士道ロマンスにまつわる書籍などが岩波書店から翻訳・刊行されているとの19世紀米国の代表的文人)の手になる書、

**THE AGE OF FABLE** (『伝説、その時代』とでも直訳できようタイトルの著作で訳書も講談社学術文庫や岩波書店と出版元を異にし、また、邦題を異にし、複数版刊行されているとの書籍)

の記述を引くこととする。

(直下、Project Gutenberg のサイトにて誰でも全文ダウンロードできるとの Rev. E. E. Hale との人物の編になる現代訳版 BULFINCH'S MYTHOLOGY THE AGE OF FABLE の Chapter XII Hercules. Hebe and Ganymede[十二章 ヘラクレス、ヘーベ、ガニメデ]の部より引用をなすとして)

---

The most difficult labor of all was getting the golden apples of the Hesperides, for Hercules did not know where to find them. These were the apples which Juno had received at her wedding from the goddess of the Earth, and which she had intrusted to the keeping of the daughters of Hesperus, assisted by a watchful dragon. After various adventures Hercules arrived at Mount Atlas in Africa. Atlas was one of the Titans who had warred against the gods, and after they were subdued, Atlas was condemned to bear on his shoulders the weight of the heavens. He was the father of the Hesperides, and Hercules thought might, if any one could, find the apples and bring them to him. But how to send Atlas away from his post, or bear up the heavens while he was gone? Hercules took the burden on his own shoulders, and sent Atlas to seek the apples. He returned with them, and though somewhat reluctantly, took his burden upon his shoulders again, and let Hercules return with the apples to Eurystheus. Milton, in his "Comus," makes the Hesperides the daughters of Hesperus and nieces of Atlas:

"... amidst the gardens fair /

Of Hesperus and his daughters three, /

That sing about the golden tree." /

The poets, led by the analogy of the lovely appearance of the western sky at sunset, viewed the west as a region of brightness and glory.

(かなり細かくも補っての拙訳として)

「どこにて入手できるか分からなかったがために(ヘラクレスの12の)功業の中でヘラクレスにとり最も困難であったのがヘスペリデスの黄金の林檎を取得することであった。黄金の林檎はユーノー(訳注:ギリシャのヘラ神のローマ表記)が彼女の婚儀に際して大地の女神(ガイア)から受け取ったものとなり、彼女はそれを

**[ヘスペロス神(Hesperus)の娘達]**

に彼女らの助けとなる童を配しての中で管理委託した。様々な冒険を経てヘラクレスはアフリカ大陸にあるアトラス山に辿り着いた(訳注:本稿にての**出典**(Source)紹介の部39に続いての段ではアトラスのいる場所、ヒューペリオンの地をアトラス山脈があるアフリカと単線的に同一視しない見方があると申し述べたが、他面、ヒューペリオンの地をアフリカであるとの見方もなせ、ここにて引用をなしている THE AGE OF FABLE 著者ブルフィンチはそうした視点に立っての書きようをなしている)。

アトラスは神々に対して戦を仕掛けたタイタンの一人であり、そして、戦乱の平定後、その双肩に天を背負うことを余儀なくされたとの存在であった。彼は



[ヘスペリデスの父親]であり(訳注:ブルフィンチはヘスペリデスについて[ヘスペロス(宵の明星)の娘]としている一方で[アトラスの娘]であるとの見立てを両建てで提示しているように受け取れる)、ヘラクレスはそれができるのならば、アトラスこそが黄金の林檎を彼の元に持ってこれると考えた(訳注:本稿にての**出典(Source)紹介の部 39**ではアポロドーロス著作『ビブリオテーケー』を出典にして[アトラスに頼んでのヘラクレスの元への黄金の林檎の送り届けの着想]には前段階としてプロメテウスの[アトラスのところに行くべきであろう]との提案があったことを引きもしたが、ブルフィンチはそのような過程を割愛してなのか、別解釈に拠ってなのか、ここにて[ヘラクレスがアトラスに黄金の林檎取得を頼むとの考えを一人で導き出した]ような書きようをなしている)。

しかし、アトラスを彼の役割から解放して林檎を取りにやらせるのならば、誰が代りに天を担ぐというのか。ヘラクレスはその肩にて天を担ぐとのことをなすことにし、アトラスに林檎を取りにやらせた。アトラスは林檎を持って戻ってきて、幾分、逡巡するところがあったが、再度、自身の肩に天を担ぎ(訳注:神話類型にあってはアトラスがヘラクレスに天を担がせたまま逃げることを考えたとの言い伝えもあるが、ここではそうした理解があることにブルフィンチは言及しないで though somewhat reluctantly「幾分、逡巡するところがあったが」とだけ付している)、そして、ヘラクレスがそれら林檎を持って(彼に功業を依頼していた)エウリュステウスの元に戻ることを許した。

(さて、)ミルトンは彼の戯曲『コムス』(訳注:Comus/『失樂園』を代表作とする文豪ジョン・ミルトンが1634年、20代前半の若かりし頃に発表した戯曲)にて(黄金の林檎を管理する)ヘスペリデスをして

[ヘスペロス Hesperus (宵の明星)の娘達]

[アトラスの「姪」ら —— (daughters 「娘」らではなく nieces 「姪」ら) —— ]  
としている。

(『コムス』よりの記述より引けば)

[美(うつく)しの庭の中、… amidst the gardens fair]

[ヘスペロスの三なる娘らが Of Hesperus and his daughters three,]

[黄金なる樹について唄う That sing about the golden tree.]

と。

詩人(ジョン・ミルトン)は西方、その夕焼けの空の情感そそる景観との類似性に揺り動かされるところがあって、西方(ヘスペリア)を[輝き]および[栄光]の領域と見ていたのである

---

(引用部はここまでとする)

以上のようにブルフィンチの流通している解説本にあってからして

「ヘスペリデスには [アトラスの娘ら] 説と [宵の明星としてのヘスペロスの娘ら] 説の複数が存在しており、『失樂園』をものしたジョン・ミルトンは後者の立ち位置に立っている(そして、ヘスペリデスをアトラスの「姪」らとしている)」

との記載がなされている(尚、付記しておくが、ブルフィンチの同じくもの THE AGE OF FABLE にては本稿のすぐ上の段にて問題視したこと、ヘスペリアが [イタリア] と同義となっていることについての言及もその他所にてなされている。抜粋をなせば、( Chapter XXIV Adventures of Aeneas The Harpies Dido Palinurus の節よりの抜粋をなせば)、 “ They arrived at Crete, and began to build their city, but sickness broke out among them, and the fields that they had planted failed to yield a crop. In this gloomy aspect of affairs, Aeneas was warned in a dream to leave the country, and seek a western land, called

Hesperia, whence Dardanus, the true founder of the Trojan race, had originally migrated. To Hesperia, now called Italy, therefore, they directed their future course, and not till after many adventures and the lapse of time sufficient to carry a modern navigator several times round the world, did they arrive there.”  
「アエネイウス一行がクレタに到達した折、彼らは自分たちの都市を建設したが、彼らの間に疫病が蔓延り、そして、彼らが作付けした大地が作物を实らすこともなかったとの状況に陥った。こうした出来事にもなつての沈鬱なる様相の中、アイネイアスは夢見にてそこより去ることを(女神によって)警告され、ヘスペリアと呼ばれる西方の土地——トロイアの氏族の真の創設者たるダルダノスが元来そこに住んでいた土地——を求めて動くようにと告げられた。したがって、現在、イタリアと呼ばれるヘスペリアに向けて彼らアエネイウス一行は進路を定め、そして、現代の航海者(ブルフィンチが THE AGE OF FABLE を執筆した 19 世紀中盤の航海者)が何度も世界中を回るのに十分相当するといった冒険と時の経過を経て、アエネイウス一行はそこイタリアに辿り着いた」(引用部訳はここまでとする)とのところが該当部となる)。

さらに、ヘスペラス Hesperus が「宵の明星」の体現存在であり、ルシファーという言葉とそれがゆえに親和性高くもなっている存在であることの出典を挙げておく。

(直下、17 世紀前半、1637 年に記されたとのジョン・ミルトンの手になる戯曲『コムス』、そちらに注釈をつけての近代訳版(19 世紀末刊行版)として Project Gutenberg のサイトにて全文ダウンロードできるようになっている MILTON'S COMUS WITH INTRODUCTION AND NOTES (1890) — William Bell との人物の編になる版— の注釈部(Note)の記載を抜粋することとして)

---

93. star ... fold, the evening star, Hesperus, an appellation of the planet Venus: comp. Lyc. 30. As the morning star ( called by Shakespeare the 'unfolding star'), it is called Phosphorus or Lucifer, the light-bringer. Hence Tennyson's allusion:  
"Bright Phosphor, fresher for the night,... Sweet Hesper-Phosphor, double name." —  
In Memoriam, cxxi.

(上は注釈番号 93 とされているところだが、その内容を逐語訳ではなく意識なせば、次のようになる)  
「(注記番号 93 の星)宵の明星[ヘスペラス]、金星(ヴィーナス)の名称:シェイクスピアが[打ち明けの星](アンフォールディング・スター unfolding star)と呼んだ星、[フォスフォラス](訳注:英語では鉱物の燐リンの名となるギリシャにての明けの明星(およびその体現神格)の表記)ないし[ルシファー]、そして、[光をもたらすもの]と呼ばれる星となる。加えて、テニスン(訳注:ヴィクトリア朝期英国の著名な詩人アルフレッド・テニスンのこと)が「輝く明けの明星、夜空にあって新鮮なるもの、甘き宵の明星、二重の意を持つもの」とその『イン・メモリアム』にて述べている存在となる」

---

(意識付しての引用部はここまでとする)

直近抜粋部をもってしてもいかに [ヘスペリデスの父⇒ヘスペラス] が [ルシファー](という言葉)と結びつくとされてきたのか、——本稿にて重んじている[文献的事実]の問題として「結びつく」と述べられてきたのか—— ご理解いただけたのではないかと思う( :さらに述べれば、本稿にての **出典** (Source) 紹介の部 49 で同様に Project Gutenberg にて誰でもダウンロードできるとの著作として挙げていたもの、ASTRONOMICAL LORE IN CHAUCER (1919)『チョーサー(カンタベリー物語の作者の 14 世紀詩人ジェフリー・チョーサー)に見る天文知識』より原文引用しているところとして “ all the

planets, that most often mentioned by Chaucer is Venus, partly, no doubt, because of her greater brilliance, but probably in the main because of her greater astrological importance; for few of Chaucer's references to Venus, or to any other planet, indeed, are without astrological significance. Chaucer refers to Venus, in the classical manner, as Hesperus when she appears as evening star and as Lucifer when she is seen as the morning star.” (訳として)「チョーサーに言及されている全ての天体の中で最も多く言及されているのは疑いもなくビーナス(金星)であるとのことになっており、については、金星の輝度の高さ、しかし、主たるところではその天文学における重要性にある(と解される)。チョーサーのヴィーナス(金星)への言及、そして、他の天体への言及のどれをとっても本然的に天体に重きを置いてのことなくして成り立つようなものではない。チョーサーがヴィーナス(金星)に言及するとき、そのやりようは古典的なところから従っており、金星が[宵の明星](イブニング・スター)として現われての折については[ヘスペロス Hesperus]として金星につき言及し、[明けの明星](モーニング・スター)として金星が認められるときには[ルシファー Lucifer]と言及している」との記載からもそうした理解がなされていることは伺い知れるようになっていく)

(※本稿の先立っての段にて先述なしていたことを繰り返しておく → ここまで述べてきたような Hesperus ヘスペロスの娘達ともされる[ヘスペリデス]についてだが、英文 Wikipedia [Hesperides] 項目にあつての Etymology [語源] の節にては the name means originating from Hesperus, the evening star Venus, equivalent to vesper (訳として)「(Hesperides との名前の語源としては) [ヴェスパール] という語に等しき宵の明星としての金星、ヘスペロスに端を発する存在を意味している」と表記されもしており、そも、[黄金の林檎]を管掌する娘達を指してのヘスペリデスという語自体が[金星]と結びつくとの説明が付されてもいる —— [黄金の林檎の管理者ら]を指す呼称は Atlas の娘達を Atlantides と表するような観点(先述の観点)から離れもして、ヘスペリデスは[金星]から名付けられての Hesperides となっているとされているとのことがある—— )

(※上と同文に本稿の先立っての段にて先述なしていたことを「さらに」繰り返しておく → ヘスペリデスのアトラスと並んでの別解釈での父親が Hesperus ヘスペロスとなっている一方で

[彼女ら Hesperides の母親の複数候補のうちの一人名前]

や

[彼女ら Hesperides の単数形ないし構成単位と結びつく名前]

が [Hesperia] ヘスペリア (父親候補 [Hesprus] とは異なるが [Hesperus] と同様に Hesperides と非常に似たような響きの名たる Hesperia ヘスペリア) とされているとのこともある。

そちらについては本稿の先立っての段でそちらよりの原文引用をなしたところのブリタニカ百科事典で最も著名なる版 THE ENCYCLOPAEDIA BRITANNICA A DICTIONARY OF ARTS, SCIENCES, LITERATURE AND GENERAL INFORMATION ELEVENTH EDITION にあつての VOLUME XIII SLICE IV にて次の如き表記がなされているところである。

“ HESPERIDES, in Greek mythology, maidens who guarded the golden apples which Earth gave Hera on her marriage to Zeus. According to Hesiod (Theogony, 215) they were the daughters of Erebus and Night; in later accounts, of Atlas and Hesperis, or of Phorcys and Ceto ( schol. on Apoll. Rhod. iv. 1399; Diod. Sic. iv. 27). They were usually supposed to be three in number—Aegle, Erytheia, Hesperis ( or Hesperethusa ); according to some, four, or even seven. They lived far away in the west at the borders of Ocean, where the sun sets. Hence the sun (according to Mimnermus ap. Athenaeum xi. p. 470) sails in the golden bowl made by Hephaestus from the abode of the Hesperides to the land where he rises again.” (幾分か委細省いての訳として)「ヘスペリデスはギリシャ神話にて大地神が女神ヘラのゼウスとの婚礼に際して贈り与えた黄金の林檎を守護する乙女らとなる。ヘシオドス『神統記』によれば、彼女らはエレボス神と夜(の体現神格)の

娘らであるとされ、より後の説明では、アトラス(父)およびヘスペリス神[Hesperis](母)の間の娘ら、あるいは、ポルクユスとケートーの両神の間の娘らであるとされている(ロドス島のアポロニウスらの言いようの特定部による)。彼女らは通例、アイグレー・エリュテーイア・ヘスペリス[Hesperis](またはヘスペレトウーサ)の三人よりなるとされている。他の説明によるところでは4人、あるいは、7人であるされることもある。彼女らは[遙か西方の大洋の果て]、[日が沈むところ]にて住まうとされる。それゆえに、(ミムネーマスによる古典によれば)太陽はヘパイトスにて鑄造された黄金の鉢状の容器に入っの式にてヘスペリデス住まいから彼が再び昇る場へと航海をなしていくとされている」

(長くもなったが、**出典(Source)紹介の部 62**はここまでとする)

直上にあつて

[黄金の林檎との神話上の存在が [(ルシファーとの語と結びつく)金星] といかように結びつくか]

とのことについて示したとして、である。

ここまでの内容をまとめれば、次の通りとなる。

[アメリカ(コロンブス到来時点ではアステカ文明・後期マヤ文明・インカ文明が南北に渡って隆盛を極めていた大陸)] ↔ [(フランシス・ベーコン著作に見る)アトランティス] ↔ [(プラトンのアトランティスにも仮託されてきた)黄金の林檎の園] ↔ [(黄金の林檎の園と同一視されるだけの要素を伴い、また、実際に一部にて黄金の林檎の園と同一視する見立てが呈されてきたとの)エデンの園] ↔ [誘惑者たる蛇] ↔ [サタン・ルシファーに比定される存在] ↔ [金星との語源的結びつき] ↔ [ヘスペリデス] ↔ [黄金の林檎の園] ↔ [アメリカと看做されもしていたアトランティスのひとつの顔としての側面](回帰)

との関係性が存在していると指摘出来てしまう(その指摘を典拠呈示と共になしてきたのが本稿である)とのことである。

そうもした中で

[ケツアルコアトル(「アメリカ」アステカ文明にての崇拝対象)] ↔ (記号論的一致性が存在) ↔ [ルシファー(「エデンの園」誘惑の蛇)]

との関係性が

[金星の体現存在]

[文明の触発者と定置されるような側面]

[蛇]

[期待を裏切つての破滅をもたらす存在としての側面] (崇拝者の破滅はキリスト教徒によってもたらされる／崇拝者の破滅が疫疾と結びついている、とされることもある)

との各側面より指摘できるところとなっている(**出典(Source)紹介の部 53**から**出典(Source)紹介の部 54(4)**)。

そして、そうしたケツアルコアトル(羽毛の生えた蛇)およびルシファーの記号論的なる結びつきについては

[アトランティス] ↔ (同一視する視点の存在) ↔ [黄金の林檎の園] ↔ (同一視する視点の存在) ↔ [エデンの園]

[アトランティス] ↔ (間接的に同一性が問題となるような側面が存在) ↔ [エデンの園] ↔ (アトランティスと同一視されてきもしたアメリカに伴う属地的特性やルシファーを介しての記号論的なる接合性存在) ↔ [アメリカ大陸にて崇められていたケツアルコアトル] ↔ (記号論的なる一致性; [双方が金星の体現神格と伝わる/双方が冥界に双子の片割れを持つ]との一致性存在) ↔ [古代メソポタミアにて崇められていたイナンナ・イシュタル] ↔ (起源を辿れば同一視される存在であったとの観点が存在) ↔ [ギリシャの美の神アフロディテ] ↔ [アフロディテによってなされた黄金の林檎の取得のための誘惑(パリスの審判にてのヘレンの贈呈)] ↔ (多重的類似性) ↔ [エデンの園での誘惑](回帰)

との多重的な関係性の環が呈示できるようになっているとの意で「あまりにもできすぎている」(：「金星の体現存在たる」ケツアルコアトルは冥界にあって双子ショロトルを持つとされるわけだが、([エデンの誘惑]と通ずる[パリスの審判]にての誘惑者たるアフロディテ属性を介してルシファーと記号論的連続性を多層的に呈してもいるとの)「金星の体現存在たる」メソポタミアのイシュタル・イナンナもまた冥界にあっての双子エレシュキガルと結びつくとされている。そして、イシュタル・イナンナは冥界のカウンターパートたるエレシュキガルにまみえるのかたちで冥界下りをなしている(を参照されたい)わけだが、ルシファーも地獄落ちとの観点で冥界落ちをなした存在とも述べられる。そうしたことからして「も」「あまりにもできすぎている」)。

上のようにまとめられることも念頭に置いてさらに続けての部ではミルトン『失樂園』と話が結節する — [偶然性] や [通り一通りのただの文化伝播] の問題を否定する(執拗性と共にある恣意性について訴求する) 上での[隠れた動因]との絡みで結節する — ところの [ギルガメシュ伝説とヘラクレス第11 功業(黄金の林檎の園を求めての功業)の接合性] について証示なししていく所存である。

(関連するところの図示)

フランシス・ベーコンの著作ではアメリカはグレート・アトランティスと呼称されている

**Atlantis ⇔ America**

[太平洋に浮かぶ広大な陸地]と伝わるアトランティスは[アトラスの娘ら]に管掌される[西の果てにあっての果樹園]たる[黄金の林檎の園]と同一視されることがある

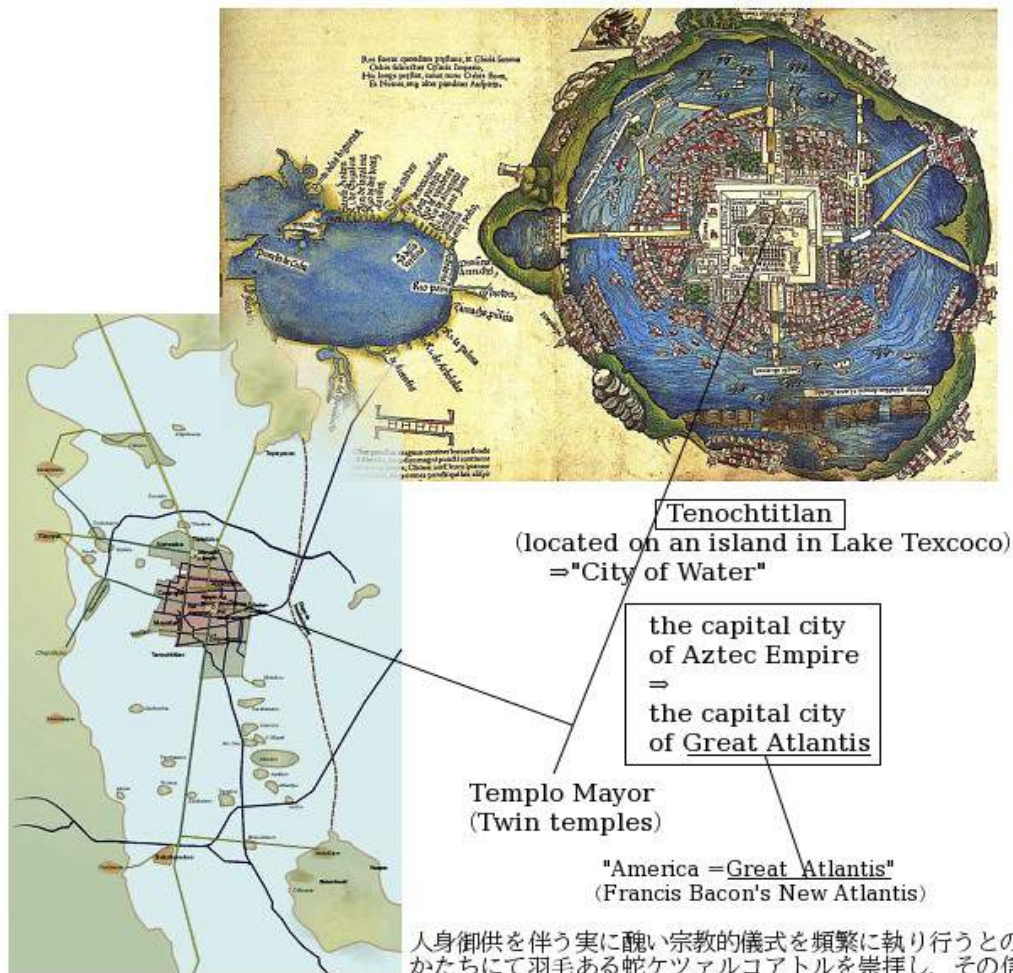
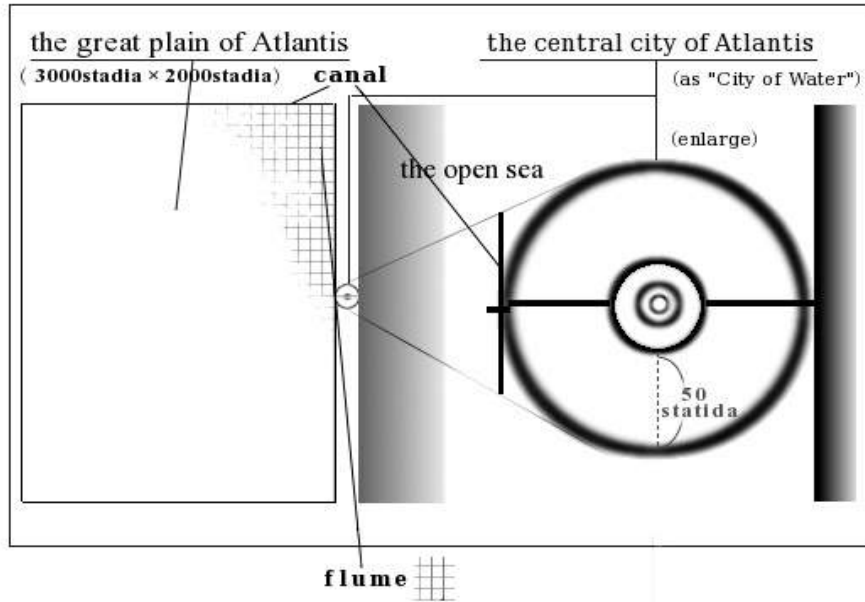
**Atlantis ⇔ the garden of the golden apple**

黄金の林檎の園はエデンの園とも同一視されることがあった場所となる

**the garden of the golden apple ⇔ the garden of Eden**



# Atlantis of Plato's Critias



人身御供を伴う実に醜い宗教的儀式を頻繁に執り行うとのかたちにて羽毛ある蛇ケツアルコアトルを崇拝し、その信仰に徹底的に裏切られたとの民らの文明、旧大陸で栄えたアステカ文明にて首府として栄えたのはテスココ湖の湖上にてうちたてられた水上都市テノチティトランである(：上記図らはそのテノチティトランのありし日ありようを描いたとの記録図上及び再現図上の構図となる——無論、図らは著作権との兼ね合いで二次利用をなしても問題ないものと権英文Wikipedia [Tenochtitlan] 項目にて著作権放棄の表記が伴っているものとなる——)。

さて、テノチティトランは水上都市であるわけだが、双子状の二棟の伽藍を特徴とした寺院(テンプロ・マヨール)を中心としていたとの同都市を首府とするアステカ文明が栄えた旧大陸は後に欧州人に[アトランティス]と定置する見方が生じた大陸である。そのアトランティス、往古よりプラトンの手になるものとして伝わっていた古文獻『クリティアス』では水上都市としての色彩が強くも現われている運河地帯と連結する中枢部を擁していたと表記されている国家のことでもある。ここで考えるべきはテノチティトランが(文化的に断絶した世界に由来する)プラトン『クリティアス』を参考に構築された都市であるわけがないととらえられる14世紀開府の都市であるのに、話がアトランティスと水上都市との文脈「でも」接合してしまうとのことである(きちんと本稿内容を理解しておられるとの向きであられるのならば、一連の話で最も重みをもってくるのは[アトランティス]⇔[黄金の林檎の園]⇔[エデンの園]⇔[蛇の誘惑の物語]⇔[ケツアルコアトル(アステカ主要神)]にも伴う相応の色合い)との関係性であるわけだが、そうした関係性に関わりそうなところを引き合いに出せば、取ってもここにて挙げていようなこともまた問題になりうると筆者はとらえている)。



# Serpent deities of Aztec

(Mesoamerican civilization)

黄金の林檎の園とアト  
ランティスが接合する  
とのことを示すのにも

Francis Bacon's  
New Atlantis

力点を置 Great Atlantis civilization

きもしてきたのが本稿  
である。

the garden of Hesperides  
& Golden Apple



Coatlicue (Teoyamiqui)



Quetzalcoatl

フランシス・ベーコンの古典にあって大アトランティスであるとされているアメリカで栄えたアステカ文明、そこでは蛇の神々が崇められていた (左上図は大地母神コアトリクエの発掘彫像の横写、右上はコアトリクエの息子、主要神ケツアルコアトルの古写本内似姿)



Milton's Lucifer (Satan)



the morning star  
Planet Venus

黄金の林檎の園と同一視されることもあるエデンの園、その場にての誘惑を奏功させたサタンは

[知の接受者 (善悪の樹の実を食べさせての知の接受者)] / [人類を裏切って破滅にいざなった存在 (エデンでの策略、および、黙示録の描写)] / [蛇としての似姿を持つ存在] / [金星の体現存在 (ルシファーとしての側面)]

としての特性を持つ存在である。

他面、黄金の林檎の園と同一視する視点があるアトランティス、その場にも比定されてきたアメリカ大陸での崇拝対象であったケツアルコアトルは

[知の接受者 (文明発達之恩人としての神)] / [信徒を裏切って破滅にいざなった存在 (ケツアルコアトルの再臨をスペイン征服者に見たアステカ帝国の破滅のプロセス)] / [蛇としての似姿を持つ存在] / [金星の体現存在]

としての特性を同様に持つ存在である (⇒ 文献的根拠の指し示し箇所としては本稿にての [出典 (Source) 紹介の部53] から [出典 (Source) 紹介の部53 (4)] を包摂する解説部、そして、 [出典 (Source) 紹介の部54] から [出典 (Source) 紹介の部54 (4)] を包摂する解説部を参照のこと)。

---

「長くもなつての、」補足として

さらに続けての話に入る前に「長くもなつての」補足を外挿しておく。

さて、上にてはアメリカにてのケツアルコアトル崇拜もがまた[奇怪なる多重的相関関係]の環の中に含まれているとのことを指し示さんとしているわけだが、その点、アメリカがアトランティスに仮託される側面があった(先述のようにフランシス・ベーコン著作『ニュー・アトランティス』にその顕著なる一例を見るように欧州では数百年も前からアメリカがアトランティスに仮託される側面があった)とのことにも関わるところとして

**[アメリカと結びつくアトランティスが蛇の種族の[影の王国]より次元間侵略されたとの内容を有している]**

とのことで先の**出典(Source)紹介の部 34-2**にて紹介をなしたのがモーリス・ドリールという神秘家がアメリカにて「発見」(実態は「捏造」であろう)したという、

[第二のエメラルド・タブレット]

となる(：モーリス・ドリールが発見したと「主張」している [第二のエメラルド・タブレット]なるものについてはより以前から存在していたパルプ雑誌掲載小説『影の王国』より文言を含めての剽窃をなして捏造された一品であると解されるとの論拠も先立っての段、**出典(Source)紹介の部 34-2**にて呈示している)。

その点、たとえ、神秘家という人種が彼らに相応しき[捏造]をなしているとの問題を複合顧慮したうえでも、「全てができすぎている」と述べられることに相違はない。そう、神秘家という人種が唾棄すべき捏造をなして犯行現場を荒らすが如くことをなしているとしても、確たる犯行の証跡が残っている、そのことが[誰でも後追い可能な事実関係の集積]から指し示せてしまうことになっているからである(直近までの話はそういった性質の話である)。

などとの申しようを(多少くどくもの感ありのこととしてながら)なしても、

[この世界の奇怪なる側面につき考えたことが何もないとの人間]

あるいは

[この世界の奇怪なる側面につき感度鋭くとも「そればかりが目立つ」[相応の紛いもの]ばかり摂取しているとの人間]

は「批判的に」次のように思うかもしれない。

『では、何か。この者(筆者)はジョン・ミルトンのような文豪から相応の神秘家に至るまでの多くの人間が[爬虫類人(と呼ばれるような存在)のようなもの]の薬籠中の存在だった、あるいは、人間のフリをしているそうした存在に脳を乗っ取られた存在だと述べたいというのか。デービッド・アイク(本稿にての**出典(Source)紹介の部 34**を包摂する部位より主張内容を紹介しているとの英国発の物議を醸す超陰謀論者)のような向きが目立ってその介入につき述べているような爬虫類人のような存在の薬籠中の輩がミルトンであったとでも述べたいのか。「やはり」そちら系の陰謀「論」を殊更に持ち出している、そういう手合いか?』

につき、本稿直近までの話だけでもってしては上にいうところの爬虫類人類支配説の



真実性をして証するに足りるものであるとは筆者は考えて「いない」し、また、——（[爬虫類人類支配説]の類を「傍証」するような事例については本稿のここまでの段にでも取り沙汰してきたし本稿のこれよりも段で同じくものをさらに呈示することにもなるわけだが）—— 本稿にては同異説を証明することそれ自体を専らの目的としているわけ「ではない」（：本稿の目的とのことで述べれば、である。[機序]はともかくも人類に対してどういう帰結を用意しているのかという[身内間の意思表示]が存在していること、そのことを[証拠の山]によって指し示す、それによって、語るに足りる向きら —— そういう向きがそうそうにいるかどうかは別問題として、とにかくも、語るに足りる向き—— に対して「運命を制御されてそちら方向にいざなわれるとのことでいいのか」と問う、それこそが本稿にての使命であると考えもして我が身は本稿をものしている）。

ここで強調しておきたいが、[常識よりの偏差]、常識では説明できないとのことながらも、

「現状、実に危険な状況にある」

とのことを[必要性認識]に依拠して訴求するというのが本稿の趣意ではあるが、そこにいう危険な状況を指し示す兆候らの元凶となっているところの存在が

[爬虫類人 —— 約 6500 万年前、メキシコはユカタン半島にて落下した隕石の影響で絶滅したとの理解がなされている恐竜が(ここではない場所で)進化すればそうになっていたであろうとも表されるような[ダイノサウロイド]のような存在—— ]

であるとのことを専らに([証明]以前に)「訴求」しようというのが(他面での)本稿の趣意となっているわけではないのである。

につき、人類を藁籠中のものとしてきた存在が[爬虫類人]と呼称されるような存在であることにまつわる[直接的証拠](この場合、[間接的証拠]というものが、たとえば、示唆材料にまつわるものであるとすれば、[直接証拠]とは捏造不可能なる映像記録や信をおかざるをえないような自白記録のようなものであると解していただきたい)が存在しているとは筆者は思っていないし、仮にそうした異説が「真」であるとするれば、そうしたことの[直接的証拠]が、

[本当に信頼のおけるもの] ([相応の偽物]らが用いられての駄法螺ではないとの本当に信頼のおけるもの)

として目立って巷間にて披瀝される、それを引くに足りることとして巷間にて披瀝されることは(余程のことがない限り)ほぼないことか「とも」見ており、そして、といった中で妥当・適正なることを述べようと努めることも困難かつ無意味なることである「とも」考えているとのことがあるため、同異説を[主要テーマ]にすることは現行すべきではないと判じているのである —— (勘違いしていただきたいくはないが、臆病者、敵地あるいは家畜小屋(のようなもの)にあっての支配者に媚びようとする類)(自分の種族を売り払ったが如く輩)としてここにて表記のようなことを述べているのではない。筆者は(この世界が完全に[家畜小屋]のようなものであるとしても)家畜小屋の支配者に媚びることなど決してせぬ、その不条理・嗜虐的やりように死命を賭して挑むことにしたとの人間、今こそがそこまで賭ける局面であると考えに至った人間であるつもりだが、敢えてもここにて表記のようなことを述べているのである—— )。

本稿にての[テーマの選別]とのことに関して述べれば、である。

「本稿は[機序(操作作用原理)具現化の裏側で糸を引いている力学の具体像]に至らずとも[相応の機序の介在]の摘示「だけで」十分であろうとの性質

のことを一意専心して書き記しているものである」

と申し述べておく(先にも述べたことである)。

そして、同じくものことについては

『そうしたことが「生き死にに関わるところ」で明瞭に摘示されてなお我々人類が物事を変ええぬような性質の種族ならば……(そういう状況に甘んじているとのことを是とする種族ならば……)』

との性質のものともなること、納得いただきたい次第でもある(：「銃口を突きつけている者達」の実体としての具体的容姿(背格好などとの側面を越えて来歴・面構えなど)は判然としなくとも銃口を突きつけられ、また、そこに殺意が存在していることを示せば、それで十分であろうとの観点にてである)。

---

[付記(補足部の中の付記)]として

現行、爬虫類人類支配説の[直接証拠]として提示されているものら、たとえば、魔女狩りよろしく「著名人の誰それが爬虫類人である」といった、[社会を広くも深くも知らぬとの層の向き]をたばかるような[映像]などが流布されているとのことがある(：幻聴・幻覚といったかたちで「科学的に」惹起されえる「属人的知覚操作の賜物」(本当に高度な文明が人間世界の操作に「別世界から」与しているのならば、脳機能の操作による幻影の人工的投影のようなこととてありうるかとほとらえていない)としてではなく「客観的記録媒体」に落とされたと自称されての「映像証拠」なるものが流布されている)。

それにつき「誰それが爬虫類人である」ことを示す映像記録などが検索エンジンにての入力で表示されてくるように流布されているとのことすらもが現行あると観察するに至っているが(ただしそうした状況がこれよりも残置残存を見るかは不分明である)、といった状況に対する筆者自身の意見は——(本稿で重要視しているとの[論証]それ自体から離れての[脇に逸れての部にて提示している意見]にすぎぬものとして押しつけはなさないが)——本稿の先の段でも申し述べているところとして、

(繰り返すも)

「そうしたものら(爬虫類人存在の[直接証拠]なるものら)はなんら信頼に値するものではない」

と判じている(ノンリニア編集、動画を構成する静止画を切り分けて(それらをアニメーションの要領で繋げる再処理をなす前に)静止画面画像毎に下手なものなれども追加の写真加工をなして「これぞ爬虫類人の顕在化である」などとしているが如くの[子供騙しの映像]が性質の悪きものとして目につくようになってきているようだと先の段にても述べているところである——その程度の映像加工はプロではなくとも容易になせるところであると聞き及ぶ——)。

個人的にはそうした紛い物と見受けられるものが[真実を晦ますための煙幕]として「軽侮反応さえきたせばそれで良い」との意図の者たち——自分達の奉仕している存在の実体が相応のものと質的に正しくも指し示されることを忌避せんとしているような相応の心性の[手先]としての類ら——



— によってばら撒かれているのではないか、あるいは、(先立っての段にて述べたことを繰り返しも)、二〇〇四年に封切られて大こけした邦画、実写版『デビルマン』の劇中にも認められる「悪魔側の手先による人間の間の不和を煽る計略」「無知で視野角も狭く社会のことがよく分かっていないとの人間に物事の本質を見誤らせる計略」が介在しているのではないかと考えている(同じくもの事を考えている向きも当然にいるのだろうが、筆者も当然にそう見ているとのことである)。

そのように述べると、

「あいつはこの世界の実態につき否定をなそうとする爬虫類人間だ。変身するような存在だから眼前にある[直接証拠]を否定しようとしているのだ」(あるいは「悪魔の爬虫類人の血流だから(以下略)」でもいい)

なぞと相応の人間ら —— 漢字一字の罵倒語は使わない —— にラベリングがなされるかもしれないと見てもいる(殊に自分達や自分達の属する組織体(カルト宗教でもいい)の実体を吐露する、あるいは吐露するものへと進化・深化を見うる説が[幼稚なもの]であり続けることを良しとするような者達、そして、類似するところの説から取り合うに値するところを抽出、批判を重ねての洗練化を図ろうとの人間が[幼稚な説]に対して「建設的」批判をなした際にその人間をして[類似するところの説自体を全否定する者]であると見られるが如く風潮が存在していることを良しとするような者達 —— 相応の精神的気風および知能程度の人間らが澱(おり)のように集まった勢力でもいい —— からはそういうラベリングが「人間レベルの組織的機序としても」なされうるかと強くも危惧懸念するところである)。

以上のようなラベリングがなされるかもしれないが、だが、さらにもって強くも述べねばならぬと思うところとして、オンライン上にばらまかれている「自称の証拠」が劣悪な紛い物ばかりであると見受けられることがあるうえに、

「[荒唐無稽であろうとその説自体の全部ではなく一部は真実に近い可能性があるかもしれぬ]なかにあってながらも、現況、爬虫類人人類支配説を主唱するような者達は —— 属人的な悪意の有無はさておきも —— お世辞にもきちんとした者達とは見えないし、その話柄として引き合いに出されているところも「馬鹿げている」といったものばかりである」

とのこともある(たとえば、である。委細は省くが、比喩の問題としてではなく現実的状况に関わることであるとの[体裁]で[英国王室の面々が血を吸う巨大な爬虫類人に変身、生贄の虐殺パーティに興じている]などとの[伝聞]を[取り上げるに足る材料]として呈示するやりよう(爬虫類人人類支配説の旗手、デヴィッド・アイクがとったようなやりよう)は「やりようとしてどうなのか」と見えると述べたいのである。そういう材料が出されるだけの力学があるとのこと —— (たとえば、デヴィッド・アイクなどがイングランド王室の面々が血を吸う爬虫類人に変ずるなどという話をクリスティン・フィッツジェラルドという故ダイアナ妃と関わっていた霊媒師に由来する証言としてマルチ・プレーで世に出しているといった力学が介在しているとのこと) —— 自体からして「問題とは見える」のだが(その背面に何があるのか、という意味で、である)、いずれにせよ、不審視せざるをえないところである)。

さて、(くどくも続けて書くが)、直近述べたように[重要事たりうること]が相応の向きらによって[欠陥あるところ]に(悪意の有無はさておきも)浮き上がらないように落とし込まれている可能性があるとのことを脇に置いたうえで、他面、

「元来からして我々人間の社会では視野狭窄さが際立ち、言われた方向しか見ない・考えられないとの向きで満ち満ちているといったところもあり、といった中で、  
[正気と狂気の分水嶺さえまともに同定できないようにするとの力学]  
が介在していると見受けられるようになってもいるとのことが(情報・言論の発信者ではなく情報・言論の受け手側に関わるころとしての問題として)指摘できるようになっている」

とのことが ——多くの人間が知るところ、そして、多くの人間に諦観を強いるところとして—— ある、確としてある、と見てもいる。

今日の文明の主軸となるところがそこより発しているとの欧米圏でさえいまなおもって[処女懐胎]といった非科学的ドグマを強制する勢力の狂質が社会を規定しているの何故か。そして、その一方でそうしたことを認めない科学的視野を蔵した人間が[別の意味で常識外れ]と受け取られるところを口にすることで狂人とラベリングされたりもするのは何故か。

そうした[狂気と正気を曖昧化(ときに逆転化)させる力学]の発するところの勢力が[異端者扱いした者達]を物理的に排斥してきたとの歴史的潮流が残置しているのが人間の世界である(世情に疎い向きにとっては信じられないかもしれないが、サウジアラビアでは未だ国家公認の機関が魔女狩りを行っている)。

そこまで理解して  
『この世界ではどんな不条理でも黙過されるし、他面、この世界で生きる者にはどんなに不合理(非理性的)なことでも受け入れさせられるとの節がある。それだけの原因がある』  
との自然(じねん)として考えている向きらも極めて多かろうかとは思う。

そうした諦観、発信者にも問題があるのならば、受け手側にも問題があるとの諦観が満ちているなかで「悪質なことに、」一部の建設的な内面を持ちうる受け手側を迷妄に陥らせるために、

[不条理を攻撃する体裁をも取る、だが、その実の(理性の声を破壊すべくも)アップロードされた反理性・反知性の輩の手管]

もが用意されているのだろうと ——[爬虫類人支配説を巡る褒め殺しのやりよう]より—— 筆者なぞは見ている(自分が相応の者達に起因するやりようを観察して不快なる思いをさせられたとの実体験に根差してそうも見ている)。

そうした流れもあってのこととして、  
[何々某(筆者のような人間)の述べていることは信頼に値しないことである]  
といった印象操作行為の一貫として

[何々某(筆者のような人間)は[真実を破壊する者](爬虫類

人のような類かその手先) である]

ないし

[何々某(筆者のような人間)は[馬鹿げた爬虫類人類支配説]のようなシンパとしての妄念の虜(とりこ)である]

などという[まったくもって実体と乖離する(と当然に強調したい)こと]を巧妙にすり込むような方便が(各々、「反対方向からの」印象操作行為として)[相応の者達]によってなされうると危惧懸念しもするのである。

その点、[宗教]が根絶された、従って、[魔女(とラベリングされた向き)][異端者(とラベリングされた向き)]はもういなくなっていた、また、イデオロギー上の色分けもきっちりなされた、従って、最早、[ブルジョアの手先(とラベリングされた向き)]もいなくなった、との状況にあつての旧ソ連の権力筋は自分達の政敵や自分達にとり都合の悪い人間を[「狂気」がゆえの異分子]とラベリングして[精神病院]に率先して追放していたような種別の人間らによって構成されていたとのことがよく知られている——(英文 Wikipedia[Political abuse of psychiatry in the Soviet Union]項目にても[ソ連の精神病院病床数が政治的理由との社会環境に応じて急カーブで増大していった]との解説がなされているようにソ連式では[反体制派は出入りの自由のない精神病院に放逐する]やりようが頻繁にとられていた。ディストピア・ソ連では有名なところとしてルイセンコ論争というものが行われ、後天的ラマルク主義と総称される観点、生物の後天的形質変化を支持するとの観点に依拠しての[誤謬に基づき全く実りない農業開発]がなされた経緯があるのだが、多くの餓死者を出したとのそのやりように反対した生物学者など(有名所としてのジョレス・メドヴェージェフ(ロシアの同姓の後の首相とは関係ないようである)といった人物など)が狂人として精神病院に[追放]されたとされることに見るように[全体主義(を支える一派閥や力学)]にとって都合の悪い者はすべて狂人である]との論理の下での[精神医学]なるものの[活用]がなされていた)——。

(話が冗漫冗長にもなっていると自身見ているところだが、話を続けて)

旧ソ連に好例を見出せるとの式でそうまでして人間社会に[敵意]と[対立]と[排斥]が歴年もたらされてきたとのことに鑑(かんが)みれば、[相応の者達]によって[部分的に真実を衝いている可能性が伴っている]との爬虫類人類支配説(およびそちらに対する批判)の類すら「も」が悪しき方向に逆利用され、相応の者達にとり[都合の悪い(とインプットされた)人間の排除]に逆利用されることになりうるとも見ている(というよりも既にそうなっている節がある、あるいは、はなからそのような計算がなされて説の流布がなされたと見ている——説流布の背景として別側面では帝政ロシア下での秘密警察オプラーナ、後にソ連の秘密警察チェーカー(ソ連でのジェノサイドを実現した筋目の組織)に多くの人員を供給することになった同組織がガス抜きのためにゲオルギー・ガポン神父なる反体制の象徴人物に資金供与して[本質的解決には至らぬ目先だけの社会改善の運動]を同ガポン(世界史の教科書にも載せられている歴史上の著名人)になさせていた、といった歴史理解(司馬遼太郎のヒロイック歴史小説『坂の上の雲』などにも書かれていたものだったことかとは思いますが、欧米圏ではよく知られた歴史理解)が広くもなされているところに相通ずる力学があるかもしれないとは見ているのであるも、それはここでは置く——)。

人間的な意味での[弱さ]あるいは[くだらなさ]がゆえに悪魔(と呼称さ

れるような存在)との契約に捺印、憑かれたが如くに「上方の存在」(教祖でもいいし神でもいい)の言うことを目がな四六時中聞いているとの種別の人間ら、自己都合と上方にある力学を同一視することが自身の安寧と幸福につながると相応の内面で合点しもして「都合の悪い存在はすべて孤立化させ社会的な破滅を進呈しようとのインプット」が相応の方向からなされればそれに何の疑義挟むこともなくそれを至上のものとして動くとの種別の人間らによって敵対者の排斥行為が(上方の存在の特性を「一面で露骨に示す」側面を帯びている可能性が如実にあると述べたきところの)爬虫類人類支配説の逆利用によってなされるし、実際になされている節があるとも筆者などは見ている。

すなわち、伝統的な[異端者]や[魔女]と接合するところの[悪魔(蛇人間)そのもの]ないし[悪魔憑き]との式でのレッテルが「不適切・不穏当なところで」貼られる可能性がある(述べておくと、筆者は至当なところとして[悪魔(蛇人間や蜥蜴人間)そのもの]ないし[悪魔憑き]といった呼称が相応しかろうといった[内面]を有した輩もこの世界にはとくにいて見ているが、ここでは「不適切・不穏当なところでの」レッテル貼りのことを問題視している)、あるいは、[狂人]に対する枠付けに接合するところの[馬鹿げた側面での爬虫類人類支配説を馬鹿げたやり方で受け入れているとの相応の人間]との式でのレッテルが貼られる可能性もある——目立つところのマスとしての主張動向それ自体の問題から「あの者は少しアタマの具合がね」とのレッテルが貼られる、世間的傾向の問題性を踏襲しないように問題となるところだけ剝(くり)り抜いての主張内容を世間的傾向にすり替えての「馬鹿げたことをくっちゃっべっている」といったレッテルが貼られる可能性もある——と手前は考えているのである。

のような中で——「証拠否定に躍起になっている悪鬼羅刹の類(ないしその薬籠中の存在)である」ないし「馬鹿げた論理のシンパとしての取るに値しない手合いである」なぞと相応の種別の人間に見なされかねないことを承知のうえで——はきと意見呈示するところとして筆者は

「現行、表立って流布されている爬虫類人類支配説の[直接証拠]とされるものは(それに代替するより真つ当なところが呈示可能であるにも関わらず)相応のジャンクばかりである。だが、しかし、**circumstantial evidence**、[間接証拠][状況証拠]の類を顧慮すると同異説の一部内容を言下に切り捨てることはできない」

とまでは敢えても強調したいとのスタンス明示をここにてなしておく(※)。

(※ちなみに「憑かれたように「酷薄な」人間ら」(異常殺人鬼のような類)・「憑かれたように服従的な人間ら」(世界的に有名な[北九州監禁殺人事件]の「被害者家族らのような向き)も散見されるとのこの世界、目を掩(おお)いたくなるような悲惨であふれたこの世界にあつて

「誰それが悪魔の血流(遺伝的に[悪魔憑きの類]となり易き特異なる血統)である」

といった見方も「爬虫類人類支配説」とワンセットにされて(殊に欧米圏で)流布されて目に付くとの背景がある。

爬虫類支配説主唱者として知られるデービッド・アイク(既述)という男が

同理論([悪魔の血流理論])をフリッツ・スプリングマイヤーという元[エホバの証人]であったとの陰謀論者の陰謀史観(エホバの証人自体を否定しつつもその実のキリスト教善性体現史観に基づいての陰謀史観)からキリスト教の臭気を取り除いて主張なしてきた、そして、有象無象の相応のシンパらが似たようなところのコピーとなる主張を繰り返しているとの背景があるがためにそうなっていると見受けられるところとして、である。

に対しては、[日本の犬神筋などをめぐる歴史的経緯]らにもその典型例を見るように

[特定の間人間の紐帯が卑しいものとして切り分けられる中で、他面、といった者らの紐帯が富・権力・影響力を得るに至るとの[賤民資本主義]が隆盛を見てきた]

といった「古」「今」「東」「西」にての人類史のありようや

[伝統的エスタブリッシュメントとしての貴顕らが「尊い」なぞとされつつもその実態は人殺し稼業の世襲・特権化集団となっている]

といった人間社会ありようの問題も作用しているのとらえている(武士階級の魂とされる刀も怨嗟をもって人斬り包丁と影ながら擲揄されてきたとの歴史的背景を顧慮すべきである)。

そして、筆者は

「そうした背景を偏向解釈して出てきているものともとれる[悪魔の血流理論](悪魔崇拜トピックとはまた性質が違う)のようなものは多く本質を見ずして皮相のみを見ている、しかも、誤って皮相のありようを見ているところの紛い物、陰謀論を広めている者達自身の空虚なる特性にも関わるところの紛い物であるととらえるに至っており、といった見方は結局は我々人類という種族を[愚劣さ]が際立ったかたちでの[相互不信]によって滅亡させることに通ずるものとなりかねない」

と見てもいる ——(：「この世では汚いこと、尊厳を踏みにじる行為でも現益(現世利益)に直接的に通ずることをやった者が勝ちだ」との視点をあまねくも滲透させ、そうした[尊厳の蹂躪]と[利益の向上]が正比例するとの力学(「金と埃は積もれば積もるほど汚い」との諺を地で行くような力学)、人間社会に望ましい発展をもたらさないような[罪障]と[相互不信]の枷(かせ)を課「さしめる」ためだけの力学が作用している(作用させられている)……、本質・実体は多く「ただそれだけに過ぎぬ」ように見えるところにあつて殊更に[悪魔の血流「理論」]なるものを導入、[累代・歴代の神秘的特性]を強くも潤色して付して社会的不信感を増さしめんとするやりようとも「とれる」からこそ「性質が悪い」と見ている。(手遅れならざれば)「最期のチャンスかもしれぬ」とこの時代にあつて的外れにもこの力学の介在を実態以上に社会的な上下階級の形成機序へと導入、実態は没落もあれば興隆もあるとのなかで、人間を下卑たかたちにて色分けしながらもの相互不信感を広めるようなかたちで潤色して付そうとのやりようが介在しているかもしれぬととれるからこそ「性質が悪い」と見ている。につき、より細かくも述べれ



ば、である。[質的に優れた社会・存続に値する社会]ならばそういう種別・性質の者達の好き勝手にはさせはしまい、正しき方向に訓示なそうとするか、それが駄目ならば、格差を次代に持ち越さぬようにしながらも相応の領域に囲い込もうするといった対象としての[平然と他の尊厳を踏みにじるような一群の者達]が場所と時代を変え選り分けられながら強固な閥を構成しもしてきたとの力学が働き(イタリア・マフィアの原初的形態が弱きを踏みにじるシチリアの不在地主の農地管理人にあるとされるように暴力装置としての荘園管理者たる原初的なる武士階級とて元を辿ればそういった風に構築されてきたと筆者は見ている。そして、尊厳を踏みにじる道を選んだか選ばざるをえなかった者達が社会を掌中に収めることになったとの例にて最も忌むべき例が[世界が終わるまで何も変え得ぬし変わり得ぬだろうといった按配での[相互不信]と[尊厳軽視]]で満ちた諦めの国たるインドにてカースト制度が土着民とアーリア系などとされてきた北方よりの流入民の間の確執の中で生み出されてきた経緯であるともとらえている)、そうした[平然と他の尊厳を踏みにじるような一群の者達]が[ブリーディング](養殖)にて[人間集団]としての長期の固着化・固定化を見るなかで、そこに属する者達がときに忌むべき鶏鳴狗盗の輩としての[賤民]、ときに崇敬されるころの富と権力を有した[選民]ともなってもきた[賤民資本主義]が成り立ちもしてきた本当の[動機](いいだろうか、[動機]である)こそを問題視すべきところを、(相応の者達、実体として最期まで軽侮され愚劣にも振る舞おうとの種別の人間らを用いて)、上流・下流の別それ自体(の偏向解釈してのありよう)を取り立てて問題視しようとの悪魔の血流理論なるものが今更もって広められんとしている節がある、そこからして「性質が悪い」と述べたいのである)――。

だがしかし、である。一応述べておけば、上述の[悪魔の血流理論]的な見方が支持されうる側面が「一面では」ある、とも思う(但し、それは悪魔の血流理論のおどろおどろしき側面というより[悪魔崇拝方式]とでもいうべき[社会的装置の特定の冷徹なる構築手法]として、である)。

それにつき、人間の歴史にはおよそ説明なしがたい[奇怪な一致性問題](本稿を公開しているサイトの一つで同様に公開してきた自著『人類と操作』にて不十分ながら説明講じているようにローマ帝国の為政者の在位年代と事績ありようが[繰り返し]で満ちているといったこと等等)で満ちているとのことがあり、といったところから、我々人間の社会は

[どこからでも何時でも容易に用立てられる使い捨てのロボット人間ら]

および

[ロボット人間らを結線させての内実空っぽの組織]

に起因するところにこそ[不幸の根]が胚胎している可能性もがまた如実にあるわけだが、の中にあって、

[ロボット人間の中の特定の個体らを取り立ててブリーディングしつつ、強力な一族ないし派閥を形成なさしめ、彼ら一族ないし派閥に(と述べても数代単位かもしれないが)[特定の嗜好・指向]を継承させたとの側面もありうるか]

と ――可能性論として―― 筆者は見てもいるのである(:につき、欧州貴顕の特定の血筋に異常者としての嗜虐性向が見られたり([吸血鬼伝承に通ずるドラクル(竜公)とドラゴンの不気味な連結]を示すようなところはある)、現代社会でも厭な臭いを感じさせる名士クラブ(一部の名士が集まっているクラブ)が存在していることを本稿を公開しているサイトの一で問題視している))

(筆者がそれなりの評価を下している爬虫類人類支配説に取り込まれつつある思考形態についての言及を直近にてなしたうえで、ここ補足の部を「長くなるも、」さらに続けるとして)

本稿でその純・記号論的特性 ——純・記号論的に見て他の文化事象と複合的につながっているとのことが指摘可能であるとの特性—— から意図して問題視してきた、

[アトランティスの蛇の種族による乗っ取り]

とのことに通ずる話を 1930 年代末葉より持ち出していた、あるいは、持ち出させられていたとのモーリス・ドリールのような神秘主義者(馬鹿げていると歴史を知るところの普通人には思われるだろう[古代アトランティスの碑文]なる捏造物を贗造したとの神秘主義者)の[妄言]では済まされないだろうとの見立てにつき先述なしてきたところの爬虫類人類支配説、そして、その直接的証拠なるもの(映像記録など)が同説自体が[胡散臭くも、]との印象を招くようなかたちで下手に流布されていることがあったとしても言下に切り捨てることはできないだろうとも先述してきたところの爬虫類人類支配説については次のようなことをもここに強調しておきたい次第である。

**「一部の者(デヴィッド・アイクのような者)は爬虫類人なる存在が「物理的実体」を伴ってこの世界に進出していると強弁しているが、**

**[トロイアを滅したが如くの木製の馬など必要ない状況であるとの異説肯定の視点]**

と本稿にて具体的事実関係によってこれより指し示していく所存であるとの、

**[その実、トロイアを滅したが如くの木製の馬 ——伝承では城壁の内側の住民に皆殺しの結果をもたらしたされる木製の馬——に露骨に仮託されているものが構築されていると指し示せる状況となっている]**

とのことの間**の**矛盾関係について心ある向きはきちんと煮詰めるべくであろう ——当初、多少なりとも共感を持って筆者が見ていたデヴィッド・アイクのような人間に対して[彼に性質の悪いやらされ人(事実や真実を虚偽を大量に織り交ぜての「自称の」真実で破壊せんとするといった性質の悪い人間)としての側面があるとするれば、その原因はそこか]と考えるに至ったことも同じくものことを筆者自身が煮詰めた結果による—— 」

([相応の者たち]に起因する言論流通動態のありようからありうべきと見た弊を及ぼされぬように、と長々と補足をなす必要を感じていたとのことゆえに、ではあるが、長くもなりすぎたとの[補足の部]はこれにて終える)

---

(直近直上の段にての補足の部がバランスを失するように長くもなってしまったが、そちら付記部に先立ってなしてきたところの[イナンナ・イシュタル、アフロディテ、ケツアルコアトル、ルシファーらの[黄金の林檎]に関わる多重的関係性にまつわる指し示し内容]を受けてものこととして述べるところとし)

ここまでで

---

## a.

[(既にそちらにまつわる神話伝承の多重的連結関係は本稿で論じているところとなるのであるも「さらにもって」の話として) 黄金の林檎にまつわる話は多くの神話・伝承を「不可解に」結節させるものである]

---

とのことについて解説してきたところで、先に言及したところの a. から c. 、すなわち、

---

## a.

[(既にそちらにまつわる神話伝承の多重的連結関係は本稿で論じているところとなるのであるも「さらにもって」の話として) 黄金の林檎にまつわる話は多くの神話・伝承を「不可解に」結節させるものである]

## b.

[上の a. に関わるところとして[ギルガメシュ伝承にあつての洪水伝承および蛇の不死の略奪に関わるパート](考古学者らに第 11 番目の石版と振られている『ギルガメシュ叙事詩』の特定パート)に関して「も」[黄金の林檎の取得が目標となっているとのヘラクレス第 11 功業]との顕著な純・記号論的連続性が認められることが現実に摘示可能となっている]

## c.

[上の a. 及び b. (なかんずく b. )の[黄金の林檎]に関しての話は[エデンでの誘惑]とも密接に連結するものとなっている(につき、黄金の林檎とエデンの果実の関係性については本稿にてのより先立っての段で細かくも論じてきたこととなる)。

既に指し示してきたところの

**[黄金の林檎とエデンの禁断の果実の関係性]**

が見てとれる中で(上の b. にて新たに呈示なしてのように)[洪水伝承][蛇による不死の略取]に関わるところでのギルガメシュ叙事詩内容までもが黄金の林檎にまつわる伝承と接合するとのことは[エデンの園からの追放][蛇による不死の略取][要素としての)トロイア崩壊との多重的接合性][洪水伝承との接合性を「感じさせる」側面]を多層的に帯びているとのミルトン『失樂園』が

**[洪水伝承]**

**[蛇による不死の略取]**

との双方の要素を帯びているギルガメシュ叙事詩特定パート(考古学者らに第 11 番目の石版と振られているパート)と ——くどいが、かねてより摘示してきた[黄金の林檎]と[エデンの果実]の関係「も」あり—— 「多重的に」接合する、割り符のパーツが見事に噛み合うように接合していることに等しい。

そこより、

**[蛇による不死の略取の物語]**とも言い換えられるミルトン『失樂園』 —黄金の林檎と関わるエデンの果実を用いての誘惑のプロセスが描かれる物語— に

あつての(黒海にて周囲に災厄を引き起こし海峡が構築されたとの)[洪水伝承]とつながり「うる」との(従前論じてきた)側面]

が

[つながり「うる」]

で済まされないようなものとの観点が出てくる。

また、

[ [黄金の林檎] の在処を把握すると神話が語る巨人アトラス]

[ [黄金の林檎] の園の同等物とも考えられてきた領域、[洪水]で滅した伝説のアトランティス]

[ [黄金の林檎] が原因ではじまった戦争にて住民皆殺しに遭った後、[洪水]で消滅したとの伝承が存するトロイア]

と結びつくとの側面を「どういうわけなのか」複合的に帯びているとの今日の **LHC 実験とミルトン『失樂園』との関係性**もが同じくものことより「よりもって重層的なるかたちで」問題になるとのこと「も」ある ( :ミルトン『失樂園』にあつては [トロイア] [黄金の林檎を巡ってのパリスの審判と多重の類似要素を帯びてのエデンの誘惑] [ブラックホール類似要素] とひとつとところにて接合するありようからして LHC 実験との接合性は指摘できるようになっているとの時点にて問題になりはするのだが — ミルトン『失樂園』の [トロイア(含む:大渦潮の怪物カリュブデイスの寓意使用)との結合] [黄金の林檎を巡ってのパリスの審判と多重の類似要素を帯びてのエデンの誘惑をメインモチーフとしているとのありよう] [ブラックホール類似要素をエデンでの誘惑成就プロセスにて描写しているとのありよう] との各要素らは LHC 実験にての [トロイア崩壊の因たる黄金の林檎の在所知る巨人 ATLAS の名の [ブラックホール検知可能性と結びつく検出器] の名称への転用] [黄金の林檎の園とも同一視されてきたアトランティスの Event Display ウェア) 名称への転用 (ブラックホール生成イベントを観測しようとされるイベント・ディスプレイ・ツール ATLANTIS への転用)] [大渦潮の怪物カリュブデイスのブラックホール・イベント・ジェネレーター CHARYBDIS への名称転用] [科学の進歩に資するなどとされてのありうべきブラックホール生成] との各要素らと揃いも揃って相通ずるようになっているのだが—、そこにかえて加えて、[黒海洪水伝承] [古代叙事詩(エピック・オブ・ギルガメシュ)] を媒介にしての [黄金の林檎] との接合性「も」が問題になる ) ]

---

とのことらにあつての、

---

**b.**

[上の a. に関わるどころとして [ギルガメシュ伝承にあつての洪水伝承および蛇の不死の略奪に関わるパート] (考古学者らに第 11 番目の石版と振られている『ギルガメシュ叙事詩』の特定パート) に関して「も」 [黄金の林檎の取得が目標となっているとのヘラクレス第 11 功業] との顕著な純・記号論的連続性が認められることが現実に摘示可能となっている]

---

の部の指し示しに歩を進める。

それにつき、続けての出典紹介部らにあつては

「重要なことであると見ているので典拠紹介に力を入れる」

と申し述べ、順々に



[ギルガメシュとヘラクレスの間には [ [ビジュアル面] 含めての存在としての特性] にあって共通性が見てとれるようになっている]

[伝承に見る、ギルガメシュ・ヘラクレスの両存在の「特定の」冒険とその冒険にての取得目標物には際立っての共通性が見てとれるようになっている]

とのことらについての典拠紹介をなしていくこととする。

それでは、まずもってそこより始めるとして、ここよりは

[ギルガメシュとヘラクレスの間には [[ ビジュアル面] 含めての存在としての特性] にあって共通性がある]

とのことについての解説をなすこととする。



上掲図にあっての左側にて挙げているのは Project Gutenberg のサイトにて全文公開されている **CHALDEA FROM THE EARLIEST TIMES TO THE RISE OF ASSYRIA (1893 年刊)** にて掲載 (p.306 及び p.307 掲載) の初期 [Izdubar] と呼ばれていたギルガメシュの似姿を描いた図となる。

対して、右側にて挙げているのはルネサンス期イタリアにて画家アントニオ・デル・ポッライオーロ Antonio del Pollaiuolo によって 15 世紀に描かれた絵画、そこに見るヘラクレス像となる。

以上、左右に見てとれるギルガメシュとヘラクレスの両雄の間の際立っての類似性につき以降、順々に解説していく。

すぐに典拠紹介なすところとして以下のことが [ギルガメシュとヘラクレスの類似性] として指し示せるようになってもいる。

ギルガメシュは



[獅子を難なくいなす怪力]

の存在として偶像化され(図を挙げてそのことを示しておく)、今日にその似姿を留めている存在である。加えてギルガメシュはその叙事詩の中で

[ライオンの皮を被っている者]

と形容され、また、その獅子の皮かぶりにつき自己言及している存在ともなる(直下、[出典\(Source\) 紹介の部 62](#)を参照のこと)。

対して、ヘラクレスは

[ネメアの獅子という存在をその第十二功業の冒頭の第一功業で斃(たお)した存在]

として知られており、そうして誅したとのそのネメアの獅子を毛皮を防具とするに至ったとの存在、すなわち、

[獅子の皮かぶりをなしている存在]

とのかたちでよく偶像化されているとの存在ともなっている(直下、[出典\(Source\) 紹介の部 62](#)を参照のこと)。

典拠は直下挙げるが、まとめれば、ギルガメシュもヘラクレスも「獅子をいなし」「獅子の皮を被っている」存在となっている。

---

[出典\(Source\) 紹介の部 63](#)

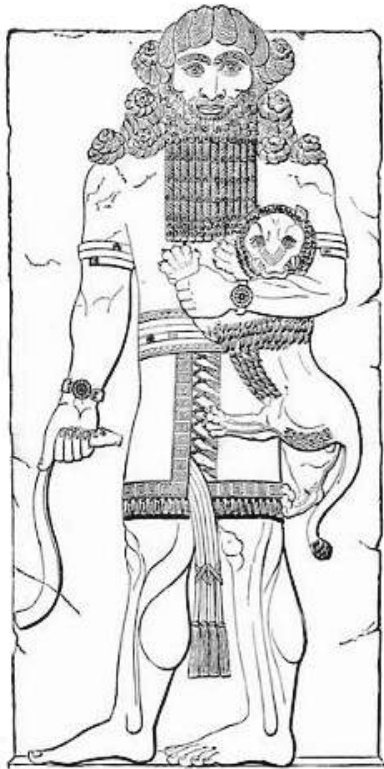
# SOURCE 63



ここ[出典\(Source\) 紹介の部 63](#)にあつては

[ギルガメシュとヘラクレスの [獅子をいなす英雄] [獅子の皮かぶりの英雄] との特質]

にまつわる典拠を挙げることにする。



Gilgamesh



Heracles

上掲図[左側]は Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロードできるとの 19 世紀末 (1893 年) 刊行の **CHALDEA FROM THE EARLIEST TIMES TO THE RISE OF ASSYRIA** (訳せば、『その草創期からアッシリアの台頭までのカルデア』となろうとの著作) にて掲載されている初期 Izdubar と呼ばれていたギルガメシュ似姿を彫った遺物の模写となる (同図については英文 Wikipedia [Gilgamesh] 項目にあつては **The Chaldean Account of Genesis (1876)** 『カルデア人の創世記に対する説明』という他の Project Gutenberg 公開著作にて掲載されているものとして挙げられている図となりもする)。

上掲図 [右側] はその確度・真偽の問題はさておきも紀元前 6 世紀 (前 520 年から前 500 年) の作として英文 Wikipedia [Nemean lion] 項目に掲載されている [ネメアの獅子と闘うヘラクレス像を描いたオイノコエ (水差し) に見る画] となる。

(→上の如き偶像化様式に見てとれるところとして、ギルガメシュおよびヘラクレスが **「獅子を素手にいなす英雄」** として描写されていること、理解いただけたか、とは思う)

以下にあつてはギルガメシュが (**「獅子をいなす存在」** として偶像化されての似姿が発掘されている存在であるだけでなく) **「獅子の皮かぶりの英雄」** と字面にて叙述されていることの典拠を挙げておくこととする。

岩波書店より出されている邦訳版『ギルガメシュ叙事詩』 (岩波書店 / 訳者はアッシリア学者の月本昭男立教大教授) の [第 10 の書版] と振られた出土碑文の内容が訳され掲載されているとの箇所、そこにて見受けられる、

[シドゥリという神 (ギルガメシュに死すべき者としての理想的生活につき論じたとのことで知られる女神) とギルガメシュのやりとり]

の段にてギルガメシュは次のように記載されているとの存在ともなる。

(直下、岩波書店より出されている邦訳版『ギルガメシュ叙事詩』p.138 よりの原文引用を  
なすとして)

- 
- 43 あなたの顔は[遠い道のりを行く者のようです。]  
44 あなたの顔は[暑さと寒さで]焼けついている。  
45 あなたは[ライオンの毛皮を纏って、]荒野をさまよう。  
46 [ギルガメシュは酌]婦[シドゥリに語った。]  
47 「[なぜ、わが頬がやせこけ、顔が落ち込まずにあり得よう。]」  
48 [わが心が憔悴し、わが姿が消沈せずにより得よう。]  
49 [悲嘆がわが胸に押し寄せずにより得ようか。]  
50 [わが顔が遠い道のりを行く者のようになくあり得ようか。]  
51 [わが顔が暑さと寒さで焼けつかずにより得ようか。]  
52 [わたしがライオンの毛皮を纏って、荒野をさまよわずにより得ようか。]
- 

(引用部はここまでとする)

上の碑文解説表記に見るようにギルガメシュは[獅子の皮をまとった英雄]としての側面を持つ存在である。

その点、上にて引用したような書版上の記述がなされている背景には

[ギルガメシュが親友エンキドゥの死に際会して「獅子の皮を被って」の姿で野山を遍歴するに至った]

との背景がある(と伝わる)。

については THE EPIC OF GILGAMESH 『ギルガメシュ叙事詩』英訳版としてオンライン上にて PDF 文書形式で流通している版 —— 文書タイトルの THE EPIC OF GILGAMESH と同組織名をあわせて検索すれば、文書特定できようとの [ Assyrian International News Agency ] ことアッシリア文化の促進団体としての組織体より刊行されている版 ——、その ISHTAR AND GILGAMESH, AND THE DEATH OF ENKIDU (イシュタルとギルガメシュ、そして、エンキドゥの死) と付された部、p.13 にての表記を原文抜粋との形態で引いておくこととする。

(直下、[ Assyrian International News Agency ] ことアッシリア文化の促進団体としての組織体より刊行されている版にての THE EPIC OF GILGAMESH 『ギルガメシュ叙事詩』英訳版よりの引用をなすところとして)

---

When Shamash heard the words of Enkidu he called to him from heaven:  
‘Enkidu, why are you cursing the woman, the mistress who taught you to eat bread fit for gods and drink wine of kings? She who put upon you a ‘magnificent garment, did she not give you glorious Gilgamesh for your companion, and has not Gilgamesh, your own brother, made you rest on a 'royal bed and recline on a couch at his left hand? He has made the princes of the earth kiss your feet, and now all the people of Uruk lament and wail over you. When you are dead he will let his hair grow long for your sake, he will wear a lion's pelt and wander through the desert.'

(補ってももの訳をなすとして)

「シャマシュ(メソポタミアの太陽神)が死せるエンキドゥの声を聞いたとき、彼シャマシュは天よりエンキドゥに語りかけた。[エンキドゥよ。なぜ、汝はそうも女

を、汝に神々に相応しきパンを食すこと、そして、王に相応しきワインを飲むことを教えたとの女を呪詛するのか。彼女は壮麗なる着物を汝に着せ、栄光あるギルガメシュを汝の道連れとさせなかったというのか(訳注:エンキドゥは当初、神よりギルガメシュを討伐するために送られた存在であったが、神殿娼婦に籠絡される中で人間性に目覚め、かつ、ギルガメシュの友になった、そういう設定が付された獣人といった存在である)。汝自身の莫逆の友たるギルガメシュは王族の寝台にて汝が休むことを許さしめもし、また、王の長椅子の左に汝の休まる場を用意しなかったというのか。ギルガメシュは地にあつての姫らをして汝の足下に口付けさせるがごとくをなさしめ、いまやウルク(訳注:ギルガメシュを王として戴いていた都市国家)の全市民が汝の死を受けて嘆き悲しんでいる。汝が死したとき、ギルガメシュはその髪を汝がために伸ばすにまかせ、そして、ライオンの生皮をば被り、砂漠への放浪へと赴かんとしているのだぞ」

---

(引用部はここまでとしておく)

---

※補足表記として

ちなみに、ギルガメシュは親友エンキドゥが没したことによって獅子の皮かぶりの狂態で野を彷徨することになったと(上の抜粋部に見るように)発掘碑文に記載されている存在であるわけだが、そも、ギルガメシュ親友エンキドゥが死亡した原因は

[女神イシュタルとギルガメシュの確執が極まったがためであった]

とも伝わっており、そちらエンキドゥ死亡の結果が[親しき者の死にて死を恐れるに至ったギルガメシュが不死を求めての旅に出た]理由であるとされている(ここでは目立つところとしての和文ウィキペディア[ギルガメシュ叙事詩]項目の現行にての記載内容より、表記のこと——[女神イシュタルとギルガメシュとの確執]がエンキドゥを殺し、獅子の皮を被ったギルガメシュの彷徨・不死を求めての旅をもたらしたとされること——にまつわる部を(多少なりとも本稿にての指し示し事項に関わるとの認識から)引用しておくこととする。(以下、掻い摘まんでの引用をなすとして)“ギルガメシュは暴君であったため、神はその競争相手として粘土から野人のエンキドゥを造った(写本そのものが粘土板から作られていることにも注意)・・・(中略)・・・その後、ギルガメシュとエンキドゥは力比べをするが決着がつかず、やがて2人は友人となり、さまざまな冒険を繰り広げることとなる・・・(中略)・・・このギルガメシュの姿を見た美の女神イシュタルは求婚したが、ギルガメシュはイシュタルの気まぐれと移り気を指摘し、それを断った。怒った女神は「天の雄牛」をウルクに送り、この牛は大暴れし、人を殺した。ギルガメシュとエンキドゥは協力して天の雄牛を倒すが、怪物を殺したこととイシュタルへの侮辱に神は怒り、エンキドゥは神に作られた存在ゆえに神の意向に逆らえず死んでしまった。ギルガメシュは大いに悲しむが、自分と同等の力を持つエンキドゥすら死んだことから自分もまた死すべき存在であることを悟り、死の恐怖に怯えるようになる。そこでギルガメシュは永遠の命を求める旅に出て、さまざまな冒険を繰り広げる”(以上、たかだかものウィキペディアよりの引用部とした)。

につき、エンキドゥの死を惹起し、ギルガメシュに不死を求めての旅に出た原因を与えたとされるイシュタルという女神がどういう存在であるかと述べれば、同女神は

[黄金の林檎を巡るパリスの審判で重要な役割を果たしたギリシャの女神アフロディテと(縁起由来の問題として)接合するとされる女神]

ともなり、また、

[エデンの禁断の果実 —— 黄金の林檎との類似性を本稿にて細かくも解説してきたとの禁断の果実—— を誘惑の具に用いた蛇、そちらエデンの蛇と同様の特質を帯びていると先述のアステカ文明の蛇の神(ケツアルコアトル)と結びつだけの特性を伴っている女神]

ともなっている(古代メソポタミアのイシュタルもアステカのケツアルコアトルも[金星の体現神格][冥府に双子の片割れを持つ存在]としての特性を共有している)ことを本稿にて先述なしてきたとの存在でもある(出典(Source)紹介の部 48 および出典(Source)紹介の部 49 および出典(Source)紹介の部 61)。

となれば、

[類似存在を介して[黄金の林檎]と結びつだけの要素を帯びている女神イシュタルとの確執] → [エンキドゥの死亡] → [友人の死を嘆き悲しみ、また、死を恐れるに至ったことによるギルガメシュの獅子の皮を被っての狂態、そして、それに次ぐ不死を求めての旅立ち]

との関係が成立していると述べられること「にも」なる(：ただし、そうした関係性にまつわる視点を介在させなくとも[ギルガメシュの不死を求めての旅]と[ヘラクレスの黄金の林檎を求めての旅]が結びつくと述べられるとの論拠らがあり、それら論拠らについてはこれより続いての段にて書き記していくこととなる)。

(補足の部はここまでとする)

---

続いて、

[ (ギルガメシュの方に対して) ヘラクレスの方が獅子の皮を被った存在となっていることについての典拠]

を挙げることとする。

(ギルガメシュと獅子の皮被りの話に次いで同文のことがヘラクレスにも当てはまる典拠を挙げるとして)ヘラクレスが討伐したネメアの獅子の毛皮を被った存在として彫像化・描写されてきたことは先に挙げた図像らの右側、ルネサンス期絵画描写形態やその他諸々のオンライン上より確認できる遺物にてみとめられるヘラクレス似姿などを通じ視覚的にも容易に理解できるようになっている —— 先の段にあって Hercules and the Hydra と題された 15 世紀絵画(ルネサンス期芸術家のアントニオ・デル・ポッライオーロ Antonio del Pollaiuolo の手になる作)を挙げている —— わけではあるも、同じくものことについては例えば、次のような説明がなされている。

(直下、英文 Wikipedia[ Nemean lion ]項目にての The First Labour of Heracles[ヘラクレス])



スの第一の功業]の節にあつての現行記載内容よりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

---

The first of Heracles' twelve labours, set by King Eurystheus (his cousin) was to slay the Nemean lion.[ . . . ]After slaying the lion, he tried to skin it with a knife from his belt, but failed. He then tried sharpening the knife with a stone and even tried with the stone itself. Finally, Athena, noticing the hero's plight, told Heracles to use one of the lion's own claws to skin the pelt.[ . . . ] The Nemean lion's coat was impervious to the elements and all but the most powerful weapons. Others say that Heracles' armour was, in fact, the hide of the lion of Cithaeron.

(訳として)「エウリュステウス王(ヘラクレス親戚たる王)よりヘラクレスに申し渡されたヘラクレス12功業のうちの最初のもはネメアのライオンを誅伐することであった・・・(中略)・・・同ライオンを(苦闘の末に)殺傷した後、彼ヘラクレスはベルトからナイフを取り出してその皮を剥ごうとしたが、失敗した。そこで彼は研ぎ石でもってナイフを研ぎながら、そして、研ぎ石そのものを用いながら、皮剥ぎを試もした(が皮を剥ぐことに失敗した)。しまいには、女神アテナが英雄苦境を見かねもし、ヘラクレスにライオン自身の爪を獅子の外皮を剥ぐのに使うようにと助言した・・・(中略)・・・ネメアの獅子の皮はもっとも強力なる武器でなければ貫くことは出来ぬとのものであった。(それがため)人々は「ヘラクレスの鎧とは実際はキタイローン(訳注:ネメアのライオンが暴威を振るっていた一帯)の獅子の皮であった」としている」

---

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

([ギルガメシュとヘラクレスの[獅子をいなす英雄][獅子の皮かぶりの英雄]との特質]とのことにまつわたる出典(Source)紹介の部63はここまでとする)

---

(ギルガメシュとヘラクレスの類似性にまつわる表記を続けて)

獅子とワンセットに描かれることが多かった存在、そして、獅子の生皮を被って砂漠を放浪したとのギルガメシュについては

「バビロンの都市ウルクの王子としてウルク王と女神の子供として生を受けた」

と遺物が語っている存在、要するに、神の血を引く[半神](デミ・ゴッド)としての属性をもった存在であるとされる。

他面、獅子の毛皮を被った姿でよくも図像・彫像化されてきたヘラクレスについてもゼウスの血筋を受けての半分神の存在であると神話が語っている存在である。

冒険譚に登場を見ている神の血を受けた英雄、そういう観点でもギルガメシュとヘラクレスには接合性がある。

---

出典(Source)紹介の部63(2)

# SOURCE

## 63(2)



ここ出典(Source)紹介の部 63(2)にあつては[ギルガメシュおよびヘラクレスが神の血を引いている存在(半神・デミゴット)となっていること]についての典拠紹介をなしておく。

まずもってギルガメシュが神の血を引くデミ・ゴッド(半神)であつたとのことについては——即時即座に確認できるところの——英文 Wikipedia[Gilgamesh]項目の前半部の現行記述を引いておくこととする。

(直下、英文ウィキペディア[Gilgamesh]項目より引用をなすとして)

---

In Mesopotamian mythology, Gilgamesh is a demigod of superhuman strength who built the city walls of Uruk to defend his people from external threats, and travelled to meet the sage Utnapishtim, who had survived the Great Deluge. He is usually described as two-thirds god and one third man.

(訳して)「メソポタミア神話体系にてはギルガメシュはその庇護下にある民を外敵から守るためにウルクに都市城壁を築いたとの超人的な力を有した [半神](demigod) とされており、また、大洪水を生き残びたとの賢人ウトナピシュテムに会うための旅に出た存在であるともされている。彼は定例として [三分の二が神、三分の一が人間である] と形容されている存在である」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする —※— )

(※同じくもの点に関して和文ウィキペディアでは —[ギルガメシュ叙事詩]項目にての現行記述内容より原文引用するところとして— ウルクの王ギルガメシュは、ウルク王ルバルバンダと女神リマト・ニンスンの間に生まれ、3分の2が神で3分の1が人間と言う人物であつた(引用部はここまでとする)と表記されている。それにつき基本的なことなのでたかだかものウィキペディア程度の媒体よりの引用にとどめたが、引用部記述については[その通りとされている]ことにつき、折り紙を付ける、(内容が散漫としていて引用なしづらところながらも)ギルガメシュ叙事詩の内容につき、和文・英文双方で具体的中身の検討をなしている(その点からして疑わしきにおかれては出典(Source)紹介の部 60の内容などを確認されたい)人間として折り紙を付ける

次第である)

他面、ヘラクレスが「半分神」の存在であったと伝わっていることについては同じくも英文 Wikipedia[Hercules]項目程度のものから引くだけで十分かと判断、そうしておくこととする。

(直下、英文ウィキペディア[Hercules]項目より引用をなすとして)

---

Hercules is the Roman name for the Greek divine hero Heracles, who was the son of Zeus (Roman equivalent Jupiter) and the mortal Alcmene.

(訳として)

「ハーキュリーズとは [(ローマにてのジュピターたる)ゼウス神] と [死せる運命を背負った(人間の)アルクメネ] の子であったギリシャの神聖帯びての英雄ヘラクレスのローマ語呼称となる」

---

(引用部に対する訳はここまでとしておく —※— )

(※につき、ヘラクレスが浮気してのゼウス神と人間のアルクメネとが設けた子供となっていたことにゼウス神の妻たるヘラ神が愠気(嫉妬心)を催し、赤子の折のヘラクレスを殺さしめるために蛇らを送りつけたが、逆にその蛇らが怪力の赤子ヘラクレスにくびり殺されることになったとのことはよく知られた神話上の一挿話となっているとのことがある—— )

(出典(Source)紹介の部 63(2)はここまでとする)

---

ここまでにて

**[ギルガメシュとヘラクレスの間には[[ビジュアル面]含めての存在としての特性]に共通性が見てとれるようになっている]**

とのことについての典拠紹介をなし終えたとして (一言要約すれば、ビジュアル的にギルガメシュもヘラクレスも**[獅子を易々といなす存在]**として視覚描写され、伝承文言とのことでは、双方共々、**[獅子の皮を被った存在][半分、神の血を引く存在(半神;デミゴッド)]**として伝わっていることにつき示したとして)、これよりさらに指摘するところの類似性、

**[伝承に見る、ギルガメシュ・ヘラクレスの両存在の「特定の」冒険とその冒険にての取得目標物にあって顕著な多重的類似性がみとめられるようになっている]**

との側面が —その[できすぎ具合]と[意味性]より— 本来ならば等閑に付すべきではないところであると強調するところとなる。

さて、それこそが問題となると強調したいところの、

**[伝承に見る、ギルガメシュ・ヘラクレスの両存在の「特定の」冒険とその冒険にての取得目標物]**

に関しては

[ギルガメシュとヘラクレスが(特定の冒険にて)それぞれ同じく「大洋を渡って」「地の果て」に赴いた —大洋の先にあつての辺土に赴いた— と述べられること]

[ギルガメシュとヘラクレスの(特定の冒険にての)冒険対象地に「洪水伝承」と結びつくととの側面を伴っていること]

[ギルガメシュとヘラクレスの(特定の冒険にての)取得目標物に不死と結びつくととの側面が伴っていること]

[ギルガメシュ・ヘラクレスの(特定の冒険にての)冒険目標物を巡って爬虫類の存在との衝突が生じているとの側面が伴っていること]

との各要素がみとめられもするようになっている(要するに、である。彼らの特定の冒険 —すぐに出典紹介部にあつて言及するが[ギルガメシュの不死を求めての冒険]と[ヘラクレスの黄金の林檎を求めての第11功業]ら— は多重的に際立つての類似性を帯びているということである)。

それでは以下、表記のことについての典拠紹介を順を追ってなしていくこととする。

---

出典(Source)紹介の部 63(3)

# SOURCE

## 63(3)



ここ出典(Source)紹介の部 63(3)にあつては

1. [ギルガメシュとヘラクレスが(特定の冒険にて)それぞれ同じく「大洋を渡って」「地の果て」に赴いた —大洋の先にあつての辺土に赴いた— と述べられること]

2. [ギルガメシュとヘラクレスの(特定の冒険にての)冒険対象地に「洪水伝承」と結びつくととの側面を伴っていること]

3. [ギルガメシュとヘラクレスの(特定の冒険にての)取得目標物に不死と結びつくととの側面が伴っていること]



4. [ギルガメシュ・ヘラクレスの(特定の冒険にて)冒険目標物を巡って爬虫類の存在との衝突が生じているとの側面が伴っていること]

との各要素がみとめられることについての典拠紹介を順々になしていくこととする。

まずもっては

1. [ギルガメシュとヘラクレスが(特定の冒険にて)それぞれ同じくも「大洋を渡って」「地の果て」に赴いた —大洋の先にあつての辺土に赴いた— と述べられる]

とのことの典拠紹介をなすこととする。

同じくものことに関しては本稿にての先の段でもその内容を引いて問題視してきたところのジェームズ・フレーザー(一個の学問領域を呪術信仰に対する分析を通じて開拓していったともされる学究)の手になる著作、Internet Archive のサイトなどオンライン上より誰でもその PDF 版をダウンロード可能となっているとの、

**Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law**  
(同著、直訳すれば、『旧約聖書に見る伝承:比較対象としての宗教・伝承・法則にまつわる研究』とでも訳されよう著作となり、うち、[世界中の洪水伝承を蒐集・紹介・分析したパート]が完訳版ではなく、そこだけ切り取つての訳がなされてとの抄訳版『洪水伝説』として国内でも刊行されている(版元は国文社という出版社)との著作となる)

からの原文引用をなすこととする。

(直下、オンライン上にて確認可能なる 1918 年著作権表記がなされての FOLK-LORE IN THE OLD TESTAMENT の p.112—p.113 よりの引用をなすとして)

---

The hero of the poem, Gilgamesh, has lost his dear friend Engidu by death, and he himself has fallen grievously sick. Saddened by the past and anxious for the future, he resolves to seek out his remote ancestor Ut-napishtim, son of Ubara Tutu, and to inquire of him how mortal man can attain to eternal life. For surely, he thought, Ut-napishtim must know the secret, since he has been made like to the gods and now dwells somewhere far away in blissful immortality. A weary and a perilous journey must Gilgamesh accomplish to come at him. He passes the mountain, guarded by a scorpion man and woman, where the sun goes down: he traverses a dark and dreadful road never trodden before by mortal man: he is ferried across a wide sea: he crosses the Water of Death by a narrow bridge, and at last he enters the presence of Ut-napishtim.

(拙訳として)

「英雄叙事詩にてギルガメシュは彼の親友エンキドゥを失い、重大な心の闇を抱えることになった。過去あったことへの悲嘆、そして、将来に対する憂えから彼は彼の遠い祖先にあたる男、ウトナピシュティム —ウバラ・トウトの息子— を探し求め、そして、彼にいかんにして死すべき運命を背負つた人間が永遠の命を得ることができるのか問う、とのことをなさんと考えた。の際、疲弊・苦難に満ちた旅の全うが成し遂げるべくものとしてギルガメシュに求められ、彼は蠍男(スコープオン・マン)と蠍女に守られた日の沈むところの山を越え、従前、死すべき運命の人間に踏破されたことなき暗く恐ろしい道を横切つた。そして、彼は大洋を船で通過、狭き橋を渡つて「死の水」の領域を越え、遂にウトナピシュティムのいるところにまで辿り着いた」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)



端的にまとめれば、ギルガメシュは「死すべき運命の人間にかつて踏破されたことなき道を越え」そのうえで「大洋を越えて( he is ferried across a wide sea )」目的物に到達している(との内容の粘土版が出土している)。

換言すれば、それは  
[未踏の辺土としての海の果て](にある大洪水を生き残った者の領域)  
に辿り着いたとのことである。

以上、ギルガメシュの不死を求めての冒険に対して、

[ヘラクレスの「ヘスペリデスの黄金の林檎の園」を求めての冒険 —— 英文 Wikipedia [ Labours of Hercules ] 項目にての [ Eleventh Labour: Apples of the Hesperides ] の節にて現行、 “After Hercules completed his first ten Labours, Eurystheus gave him two more claiming that neither the Hydra counted (because Iolaus helped Hercules) nor the Augean stables (either because he received payment for the job or because the rivers did the work). The first of these two additional Labours was to steal the apples from the garden of the Hesperides. ” (訳として)「ヘラクレスが(当初それだけこなすことを求められていた)10の功業を終えた時、エウリュステウス王は「ヒドラ退治(の功業)はイオラオスからの助力を受けたために無であり、アウゲイアースの家畜小屋(の掃除の功業)は仕事の対価に報酬を受けている、あるいは、川の流れをもってして助けとしたために無である」と主張しつつも彼にさらに二つの功業を課した。それら追加の功業(第11功業と第12功業)のうちの最初のもはヘスペリデスの園から(黄金の)林檎を掠め取ってくるように、とのものであった」(訳付しての引用部はここまでとする)と記載されているとおりの第11功業—— ]

に関して「も」同文のことが述べられていたとのことがある。以下を参照されたい。

(直下、Project Gutenberg のサイトにて公開されている(すなわち現行、誰でもインターネットを介して閲覧できるようになっている)19世紀末の講演(Lecture)記録としての Prehistoric Structures OF CENTRAL AMERICA. WHO ERECTED THEM? 『先史時代の中央部アメリカの構図。誰がそれらを作図したのか』(Martin Ingham Townsend という弁護士にして政治家であったとの人物に由来する講演録)よりの引用をなすとして)

---

2. Let us look for a moment at some of the things which the ancient Greek and Latin authors have said indicating their knowledge of the existence of a western continent. Crates, a commentator on Homer, is quoted by authority of Strabo, a very learned author of the century before Christ, as saying that Homer means in his account of the western Ethiopians the inhabitants of the Atlantis or the Hesperides, as the unknown world of the west was then variously called.

(急場を縫っての拙訳として)

「少しの間、古代ギリシャと古代ラテン世界の著述家らが[西方の大陸]の存在にまつわる彼ら知識を示しての物言いをなしていたとのことにまつわってのいくばくかのところに目を向けてみよう。クレイトス、ホメロスの注釈家たる同クレイトス(Crates of Mallus)についてはキリスト生誕以前にてとてつもなく識見が深いことで知られていたストラボンの権威ある筆によるところとして、「エチオピア西方に対する説明としてホメロスが意味せんとしているのは様々な呼称で呼ばれているところの未知の世界としての[アトランティス]あるいは[ヘスペリデス(の園)]の住民のことである」と述べていた(と伝わっている)」

---

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

(続いて直下、同じく Project Gutenberg のサイトにて公開されている 20 世紀初頭にて世に出た STORIES OF OLD GREECE AND ROME (1913) との著作よりの引用をなすとして)

When the ancients looked each evening at the glowing west, they pictured it as a far-distant country, more wonderful than any ever seen by mortal eyes. Here in this land of heart's desire lay the Garden of the Hesperides, where a dragon guarded the golden apples that grew on a wonderful tree which had sprung up miraculously to grace the wedding of Jupiter and Juno. In this far-off sunset land were also the Isles of the Blest, where mortals who had led virtuous lives were transported without ever tasting of death.

(急場を縫っての拙訳として)

「古代人は(黄昏時にて)輝く西方に目を向けた折、そこに [死すべき定めを追った人間の目(モータル・アイズ)が見ることができるなによりも素晴らしきものたる、遙か彼方の地] を描いていた。といった中、心中の渴望の地の中心に横たわっていたのが [ジュピター(ゼウス)とユーノー(ヘラ)の婚姻を祝すものとして奇跡の如く急成長したとの不思議の樹に実るとの黄金の林檎、その黄金の林檎の番を竜がしているとのヘスペリデスの園] であった。この遙か日の沈む先にある島は [祝福の島]、有徳の生を送っても生ある者らが「死の味をかみしめることなくしては」そこに至れないとの地ともされていた」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※— )

(※尚、[ヘスペリデスの園]については先行するところの [出典\(Source\) 紹介の部 40](#) の部に続けての段、そこにての注記の部にて紹介しているように [キュレネ] (注:リビアに建設された元ギリシャ系植民都市)あるいは[ベンガジ] (注:これまたリビアに建設された元ギリシャ系植民都市)の近傍ないし世界を取り囲むオケアノス(注:古代ギリシャの世界観にあつての世界を取り囲む大洋)の縁にあるとの見立てが存していたとのこともあるのだが、といった中で以上、引用なしたような見方が呈されてきたとのことがあります)

上のことから航海描写がよくもなされてのヘラクレスの黄金の林檎の園への旅路は [\[大海の先に向かつての辺土を目指してのプロセス\]](#) とも言い換えられるようになっている。

(:ヘスペリデスの園へ向かうための大洋渡航とのことで述べれば、本稿の先の段で Project Gutenberg のサイトを通じてダウンロード全文ダウンロード可能となっているところのブリタニカ百科事典の最も著名なる版、Encyclopaedia Britannica, 11th Edition より次の表記を引いていたところに通ずることともなる。(以下、Encyclopaedia Britannica, 11th Edition, Volume 13 にての Hesperides 項目よりの再度の引用をなすとして) “ HESPERIDES, in Greek mythology, maidens who guarded the golden apples which Earth gave Hera on her marriage to Zeus. According to Hesiod (Theogony, 215) they were the daughters of Erebus and Night; in later accounts, of Atlas and Hesperis, or of Phorcys and Ceto (schol. on Apoll. Rhod. iv. 1399; Diod. Sic. iv. 27).[ . . . ] They lived far away in the west at the borders of Ocean, where the sun sets. Hence the sun (according to Mimnermus ap. Athenaeum xi. p. 470) sails in the golden bowl made by Hephaestus from the abode of the Hesperides to the land where he rises again. ” (幾分か委細省いての訳として)「ヘスペリデスはギリシャ神話にて大地神が女神ヘラのゼウスとの婚礼に

際して贈り与えた黄金の林檎を守護する乙女らとなる。ヘシオドス『神統記』によれば、彼女らはエレボス神と夜(の体現神格)の娘らであるとされ、より後の説明では、アトラスおよびヘスペリス神の娘ら、あるいは、ポルクユスとケートーの両神の娘らであるとされている(ロドス島のアポロニウスらの言いようの特定部による)。…(中略)…彼女らは「遙か西方の大洋の果て」、「日が沈むところ」にて住まうとされる(注:言うまでも無いことかとは思いますが、日は東から昇って西に沈む)。それゆえに、(ミムネーマスによる古典によれば)太陽はへパイトスにて鑄造された黄金の鉢状の容器にはいつての形にてヘスペリデス住まいから彼が再び昇る場へと航海をなしていくとされている」(訳を付しての引用部はここまでとする)

ここまでにて

### 1. [ギルガメシュとヘラクレスも「特定の冒険にて」それぞれ同じくも大洋を渡って地の果てに赴いたと述べられる]

とのことの典拠紹介とした。

次いで

### 2. [ギルガメシュ・ヘラクレス双方の特定の冒険にての冒険目標物が洪水伝承との結びつく]

とのことの出典紹介をなすこととする。

ギルガメシュが不死の秘密を探るために会いに行ったウトナピシュティム(ギルガメシュに不死の霊薬—若返りの草(ないし草状の珊瑚)—の場所を教えた存在)が[大洪水の生き残り]であるとされることについては本稿出典(Source)紹介の部60の部で次のように出典紹介をなしていたとおりである。

(直下、『ギルガメシュ叙事詩』(岩波書店)p. 135にてのギルガメシュ叙事詩を収めた碑文のうち、第11の書版と振られた出土碑文の内容の要約を扱った箇所(発掘碑文の和訳を書籍で提示しているとの学究が日本語で解説をなしているとの部)より「再度の」原文引用をなすとして)

---

[ギルガメシュの懇望にまけて、ウトナピシュテムは自分が神々に列せられた経緯を語って聞かせる。神々が人間を滅ぼそうとして地上に洪水を送ったとき、知恵の神エアの指示により、彼は方舟を建造し、地上のすべてを粘土に帰した洪水からいのちあるものの種を救ったが、洪水を起こしたエンリル神はそれを知って怒った。しかし、最後は、エアに説得され、彼に神々のような不死を与えたのである、と。この後、ウトナピシュテムはギルガメシュに、七日間、寝ずにいる試練を課すが、ギルガメシュはこれに耐え得ない。ウトナピシュテムはギルガメシュを自分の町に送り返そうとする。ところが、同情あふれる妻の言葉があり、ウトナピシュテムはギルガメシュに「若返りの草」のありかを教える]

---

(引用部はここまでとする)

(続けて直下、THE EPIC OF GILGAMESH A NEW TRANSLATION『新訳版ギルガメシュ伝承』(イギリスの老舗出版社ペンギン社より出されている Penguin Classics 版、Andrew R. George というバビロニア学の権威との学者によって訳が付されているバージョン)

ン)にあつての Tablet XI. Immortality Denied(第 11 碑文要約、[拒否されし不死])の部よりの「再度の」引用をなすとして)

---

Gilgamesh asks Uta-napishti how he gained eternal life, and hears how Utanapishti survived the Deluge and was given immortality by the gods as a result. Uta-napishti suggests Gilgamesh go without sleep for a week. Gilgamesh fails the test and realizes in despair that if he cannot beat Sleep he has no hope of conquering Death.

(訳として)「ギルガメシュはウトナピシュテムに彼がいかようにして不死を得たのかを尋ね、彼がどのように「洪水」を生き延び、そして、結果として神々に不死を与えられたのかを聞くこととなった。ウトナピシュテムはギルガメシュに睡眠を取らずに一週間を過ごすことを(不死を得るための試練として)課した。ギルガメシュはこの試練を成し遂げるに失敗し、眠りさえも克服できぬというのならば、死を克服する希望なぞおよそちえまいと失意のうちに悟ることになる」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上をもってギルガメシュ冒険 —— 第 11 の石版 Tablet XI と学者らに銘打たれている粘土版に描かれている冒険 —— が洪水伝承と結びついていることを示す典拠とした。

他面、ヘラクレスがその第 11 功業にて求めた黄金の林檎の園たるヘスペリデスの園 —— アトラスの一群の娘達(アトランティデス)に属するヘスペリデスの管理管掌する大海の果ての領域 —— が [アトランティス] に同定され、そのアトランティスが洪水で滅していると伝わっている存在であることにまつわる典拠を挙げておく。

ヘラクレスの黄金の林檎を求めての冒険の目標地(ヘスペリデスの園)が[アトランティス]と結びつくことされてきたものであるとの点については本稿の先の段、[出典\(Source\)紹介の部 41](#)以降の段にての一連の解説部で説明を講じてきた。につき、たとえば、本稿[出典\(Source\)紹介の部 41](#)では Project Gutenberg などのサイトを通じて現行、全文ダウンロードできるようになっているとの 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて物議を醸していた著作 Atlantis: The Antediluvian World 『アトランティス大洪水前の世界』(1882)にての CHAPTER VIII. THE OLDEST SON OF NOAH の章、その p.453 よりの抜粋として(以下、再度の引用をなすとし) “ Agriculture. — The Greek traditions of "the golden apples of the Hesperides" and "the golden fleece" point to Atlantis. The allusions to the golden apples indicate that tradition regarded the "Islands of the Blessed" in the Atlantic Ocean as a place of orchards. And when we turn to Egypt we find that in the remotest times many of our modern garden and field plants were there cultivated. ” (拙訳)「農業について——[ヘスペリデスの園の黄金の林檎] および [金羊毛皮] にまつわるギリシャ伝統はアトランティスの方向を指し示すものである。黄金の林檎に対する言及は果樹園の場としての [大西洋の祝福されし島] にまつわる伝承のことを想起させる。そして我々がエジプトに立ち戻った時、往古にて我々の今日の果樹園や栽培種の多くがそこにて栽培されていたことを見出すのである(訳注:ここでは『アトランティス大洪水前の世界』著者イグナティウス・ドネリーはアトランティスとして同定できるものがギリシャから欧州やアメリカ先史時代に農業的な影響を与えていたとの式での申しようをなしている)」(再度の引用部に対する訳はここまでとする) といった記述を引いたりもしていた次第である —— ちなみに本稿筆者は Atlantis: The Antediluvian World の内容を「言論流通動態の問題」として引きもしもするが、その著者たるイグナティウス・ドネリーの主張を全面的に容れているわけでもなく、また、イグナティウス・ドネリー主張が正しかろうとそうでなかろうと本稿の内容には影響

を与えることでもない従前の段より断っている ( my point of view: Whether viewpoints seen in ATLANTIS THE ANTEDILUVIAN WORLD ( by Ignatius Loyola Donnelly's ) are proper or not, it makes no difference.と断っている)ことも一応、付記しておく—— )。

対して、アトランティス ——直上にて再言及のようにヘラクレスが探し求めていた[黄金の林檎の栽培地ヘスペリデスの園]にも仮託される場—— が洪水で滅尽を見たときとされることについては先の [出典 \(Source\) 紹介の部 36](#) の段にて次の通りの引用をなしているとおりでである。

(直下、プラトン全集 12(岩波書店刊行)『ティマイオス』収録部の p.22—p.23 より以下、中略をなしつつもの「再度の」引用をなすとして)

---

というのは、あの大洋には——あなた方の話によると、あなた方のほうでは「ヘラクレスの柱」と呼んでいるらしいが——その入口(ジブラルタル海峡)の前方に、一つの島があったのだ。そして、この島はリビュアとアジアを合わせたよりもなお大きなものであったが、そこからその島の他の島々へと当時の航海者は渡ることができたのであり、またその島々から、あの正真正銘の大洋をめぐっている、対岸の大陸全土へと渡ることができたのである。

…(中略)…

さて、このアトランティス島に、驚くべき巨大な、諸王国の勢力が出現して、その島の全土はもとより、他の多くの島々と、大陸のいくつかの部分に支配下におさめ、なおこれに加えて、海峡内のこちら側でも、リビュアではエジプトに境を接するところまで、また、ヨーロッパではテュレニアの境界に至るまでの地域を支配していたのである。実にこの全勢力が一団となって、あなた方の土地も、われわれの土地も、否、海峡内の全地域を、一撃のもとに隷属させようとしたことがあったのだ。

…(中略)…

しかし後に、異常な大地震と大洪水が度重なって起こった時、苛酷な日が出て来て、その一昼夜の間に、あなた方の国の戦士はすべて、一挙にして大地に呑み込まれ、またアトランティス島も同じようにして、海中に没して姿を消してしまったのであった。

---

(国内流通訳書よりの引用部はここまでとする —※— )

(※尚、表記の引用部にあつてのオンライン上より全文確認可能な英訳版表記は( Project Gutenberg サイトより全文ダウンロードできるとの英訳版 TIMAEUS by Plato ——19世紀にあつてのオクスフォードのプラトン翻訳家となる Benjamin Jowett との向きによって訳がなされている版—— より掻い摘まんでの「再度の」原文引用をなすとして) “ The most famous of them all was the overthrow of the island of Atlantis. This great island lay over against the Pillars of Heracles, in extent greater than Libya and Asia put together, and was the passage to other islands and to a great ocean of which the Mediterranean sea was only the harbour; and within the Pillars the empire of Atlantis reached in Europe to Tyrrhenia and in Libya to Egypt. This mighty power was arrayed against Egypt and Hellas and all the countries bordering on the Mediterranean.[ . . . ] A little while afterwards there were great earthquakes and floods, and your warrior race all sank into the earth; and the great island of Atlantis also disappeared in the sea. This is the explanation of



the shallows which are found in that part of the Atlantic ocean.' ”との部位が該当するところとなる)

ここまででもってして

## 2. [ギルガメシュ・ヘラクレス双方の特定の冒険にての冒険目標物が洪水伝承との結びつく]

とのことの典拠紹介とした。

(出典(Source)紹介の部 63(3)を続けるとして)

次いで

## 3. [ギルガメシュ・ヘラクレス双方の特定の冒険にての取得目標物が「不死」と結びつく]

とのことについての典拠を紹介しておく。

ギルガメシュの目標が不死であったことについてはここでも和訳された版の『ギルガメシュ叙事詩』の梗概部(要約部)の原文引用などを通じて何度も何度も紹介してきたことであるのでそちらを参照されたい。

(:たとえば本稿にての直上直近の部にてても出典(Source)紹介の部 60にてなしたところの引用を「再度」なせば、(『ギルガメシュ叙事詩』(岩波書店)p. 135にてよりの原文引用として)“ギルガメシュの懇望にまけて、ウトナピシュテムは自分が神々に列せられた経緯を語って聞かせる。神々が人間を滅ぼそうとして地上に洪水を送ったとき、知恵の神エアの指示により、彼は方舟を建造し、地上のすべてを粘土に帰した洪水からいのちあるものの種を救ったが、洪水を起こしたエンリル神はそれを知って怒った。しかし、最後は、エアに説得され、彼に神々のような不死を与えたのである、と。この後、ウトナピシュテムはギルガメシュに、七日間、寝ずにいる試練を課すが、ギルガメシュはこれに耐え得ない。ウトナピシュテムはギルガメシュを自分の町に送り返そうとする。ところが、同情あふれる妻の言葉があり、ウトナピシュテムはギルガメシュに「若返りの草」のありかを教える。この草を得たギルガメシュは勇躍歓喜して、ウルクに戻ろうとするが、途中、泉の水で身をきよめている間、その草は蛇に持ち去られてしまう”(引用部終端)といったことが古代碑文に記されているとされる)。

他面、ヘラクレスの求めた黄金の林檎が不死と結びつくことについては

[ [「不死」の理想郷であったエデンの園] と [黄金の林檎] の結びつきを示すことが同じくものことを示すことにも通ずる]

[黄金の林檎に関しては北欧神話にての不死の飲食物としての来歴が伴っていることを示すことが同じくものことを示すことにも通ずる]

と見ているのでそれらの点についての本稿従前内容の確認を直下、なしておくこととする。

本稿出典(Source)紹介の部 51では

「アメリカの先史文明がアトランティス(と呼称されるような文明)の名残を受けてのものである」との異端説を展開していたとのイグナティウス・ドネリーの手になる Atlantis: The Antediluvian World という古書の内容を引き、そのうえで同著作にて紹介されているとの往時(19世紀)、令名を馳せていた歴史学者(英文 Wikipedia にも一項設けられているとのアレギザンダー・ムーレイ Alexander Murray)の手になる Manual of Mythology との著作 — 著作名の検索エンジン上での入力で内容が容易に確認可能となっている著作 — の次のような記述を引いていた。

The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were far-famed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods : it was another Eden.

(訳として)「黄金の林檎が実るヘスペリデスの園は大洋にあってのどこかの島に存在する、あるいは、アフリカ沖から北ないし西に向かった先にあると考えられている。そこは古典古代の時代において「ゼウス寝所のそばにて流れるネクター(神々の不死の飲料のこと)の発する場」にして「この地上にあって神々の最も得がたき祝福が施された場」として非常に有名であった。すなわち、ヘスペリデスの園はもう一つのエデンであった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上の記述よりお分かりだろうが、[黄金の林檎の園]は

**[人間(人の始祖たるアダムとイヴ)がそこより追放されたために不死を失ったともされる、[不死を約束する生命の樹]と[知恵の樹]の実が実っていた場としてのエデンの園]**

と結びついているとされる——(本稿**出典(Source)紹介の部 54**にてもそこよりの引用なしとの日本聖書協会『旧約聖書』創世記第3章22-24節よりの再度の原文抜粋をなすとして)[主なる神は言われた、「見よ、人はわれわれのひとりようになり、善悪を知るものとなった。彼は手を伸べ、命の木からも取って食べ、永久に生きるかも知れない」。そこで主なる神は彼をエデンの園から追い出して、人が造られたその土を耕させられた。神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎを置いて、命の木の道を守らせた](聖書よりの引用はここまでとする)との言われようのエデンの園と結びついているとされる——との観点で「まずもって」不死と結びつく。

また、ヘラクレスが求めた黄金の林檎については[不死の桃源郷たるエデンの園]との関係性だけではなく、北欧神話にて

**「女神イドゥン(イズン)が管理する神々を老いから解放し、彼らに不死を約束する食物]**

として登場するようなものであることもあり、それがゆえ、

**[多重的に不死の関係が想起されるようになっているもの]**

ともなる。

北欧神話の不死の象徴たる林檎を管掌する女神イドゥンについては(以下、英文 Wikipedia [Idunn] 項目の現行記載より「まずもっての」引用をなすとして)“ In Norse mythology, Idunn is a goddess associated with apples and youth. Idunn is attested in the Poetic Edda, compiled in the 13th century from earlier traditional sources, and the Prose Edda, written in the 13th century by Snorri Sturluson.” 「北欧神話にてイドゥンは林檎および若さと関連する女神である。彼女イドゥンはより時代遡ってのところで13世紀編集となっている『詩文エッダ』にてその存在が示されている女神、そして、13世紀にスノッリ・ストゥルルソンによってもなされた『散文エッダ』においてその存在についての記載がなされているとの女神となる」と記載されているといったかたちでよく知られる存在となっている。

その点、北欧神話にあっての[不死を約束する黄金の林檎]の登場例については

**[「オーディンの魔法の指輪ないし腕輪:リング・ドラウプニル]と結びつけられる[黄金の林檎]**について本稿にての先の段、便宜的に**出典(Source)紹介の部 60(3)**と振った段でも言及をなしていたところでもある。

具体的には Project Gutenberg にて誰でも入手できるとの H. A. Guerber という前世紀前半まで活動の英国人史家の手になる *Myths of the Norsemen From the Eddas and Sagas*、『エッダからサガに至るまでの北欧人種の神話』とでも訳せよう同著作にての *The Wooing of Gerda* [ゲルズへの求婚] との節にあつての『スキールニルの歌』というエッダ収録詩にての解説部より

(直下、Project Gutenberg サイトにて公開の著作、*Myths of the Norsemen From the Eddas and Sagas* よりの「再度の」引用をなすところとして)

---

To induce the fair maiden to lend a favourable ear to his master's proposals, Skirnir showed her the stolen portrait, and proffered the golden apples and magic ring, which, however, she haughtily refused to accept, declaring that her father had gold enough and to spare.

「(スキールニルが自身が北欧の神フレイの恋の仲介役を演じることになったとのその相手方の巨人族の乙女ゲルズの説得に際し)輝く金髪乙女の耳をば自分の主人の提案へと傾けさせるため、スキールニルは主人の肖像を見せ、そのうえで、[黄金の林檎]と[魔法のリング]を(彼女がフレイ神と結ばれる対価に、と)提示したが、彼女は[彼女の父は十分に余りあるほどの黄金を持っている]とたからかに述べ、その申し出を容れることを拒んだ」

---

(訳を付しての引用部はここまでとする)

との記述(解説)がなされていることを(脇に逸れての話の中で)取り上げてもいた。

さて、同『スキールニルの歌』では[「11の」黄金の林檎](ヘラクレスの功業でも第「11」功業が黄金の林檎を求めてのものとなっていること、本稿にて何度も言及してきた)が[魔法の指輪ないし腕輪(ドラウプニル)]と共に恋の仲介役たるスキールニルによって乙女ゲルズに[フレイヤとの婚姻対価]として提示されていたと叙述されているとのことが極一部の北欧神話研究者の間で知られているとのことがある。

につき、『スキールニルの歌』は「和訳版の」北欧神話エッダ紹介書籍にも収録されているものとなり、当該訳書、新潮社より出されているとの『エッダ——北欧歌謡集』(初出1973年、訳者は北欧文学を専攻していたとのことである谷口幸男元広島大学教授)にあつての『スキールニルの歌』注釈部には次のような記載がなされている。

(直下、筆者が探求の一環として読したところの『エッダ——北欧歌謡集』(新潮社、1973年刊)p.67、『スキールニルの歌』注釈にあつての部より原文抜粋するところとして)

---

[林檎を十一:十一という数はおかしい。九が古代ゲルマンでの神聖な数である。epli ellifo 林檎を十一は、epli elle-lyf 若返りの林檎の書き誤りではないかという説がある。スノリの「ギェルヴィたぶらかし」にもあるように、ブラギの妻イズンは、神々が年をとったときに食べる若返りの林檎をとねりこの箱にしまっている。イズンの黄金の林檎について九世紀のスカルド詩人スィョゾールヴ・オール・フヴィーニが書いているものによると、イズンはあるとき、その林檎ともども、ロキのために、巨人スィアチの手におちた。アース神は年をとりはじめ、ロキはイズンと林檎をとり戻さねばならなかった。彼は鷹の姿に身を変えて巨人の国へ飛び、イズンを胡桃(くるみ)に変えて首尾よくつれかえった]

---

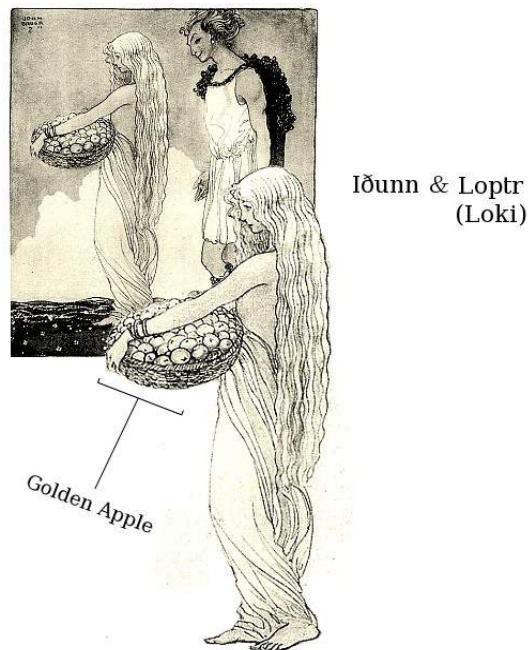
(引用部はここまでとする)

上に見るように、

[ [若返りの林檎] と結びつけられる北欧神話にあってのイズン(イドゥン)の [黄金の林檎] が [11] という数と結びつけられて『スキールニルの歌』に関わる場所として登場を見ている]

と国内の北欧文学研究者に解説されているようなことがある ( :さらに述べれば、『エッダ —— 北欧歌謡集』(新潮社より1973年にてより刊行)にての表記引用部では[[11]という数はゲルマンの神聖なる数[9]「ではない」ので、『スキールニルの歌』に見る黄金の林檎と[11]の結びつき( epli ellifo )は[若返りの林檎]( epli elle-lyf )の誤りではないのかとの説もある) と北欧文学研究者(谷口幸男元広島大学教授)にあって言及されているとのことにつき、のようなことをくくだと言及・解説しているのは筆者が訓詁学などといったものに興味・関心があるからでは毛頭なく、先の「9」「11」の事件の発生を「どうい  
うわけなのか」事前言及しているが如く特定文物が存在しており、それらが「黄金の林檎」とも密接に関わっているとの知識があるからである ——うち一例については既に出典(Source)紹介の部 37 から出典(Source)紹介の部 37-5 にて解説してきた—— )。

上のこと、北欧神話関連の古エッダ収録詩にあって黄金の林檎が 11 と結びつくことはヘラクレスの黄金の林檎を求めての冒険が「第 11 番目の功業」( the eleventh labour of Hercules )となっていることと平仄が合いもすることである ( :無論、それだけ述べれば、こじつけがましきことになるところでもあるが、同じくもの件が先に発生した 911 の「予見」事象らといかにかに多重的に関わっているのか、それがゆえにいかにかに問題になるのか、とのこと「も」本稿の後の段で具体例挙げ連ねながら事細かな解説をなしていく所存である)。



Þjazi & Loptr  
(Tjasse)

前掲図は  
[北欧神話にて黄金の林檎を管掌する女神イドゥン]  
および  
[イドゥンを取り巻く北欧神話上の存在]  
を挙げたものとなる。

図にあっての上の段では John Bauer という画家によって描かれた 20 世紀初頭の画 (1911 年作成の著作権の縛り無く Wikipedia に公開されているとの画でイドゥンとイドゥン伝承に関わってくるロキ (別表記:ロプト) が併せて描かれているとの画) からの抜粋をなした。

図にあっての下段では Project Gutenberg のサイトにて全文閲覧・ダウンロード出来るとの書、スウェーデン人著述家 Viktor Rydberg の手になる Teutonic Mythology (『チュートン人の神話』/1889) との著作に掲載されているとの画 ([イドゥンの黄金の林檎を欲した巨人スィアチとロキ (ロプト) の中空上でのやりとりを描いたもの]) を挙げたものとなる (: 下段の画に見るような局面にて怪鳥に変じたスィアチという巨人によって「黄金の林檎を取ってくるように」と北欧神話の騒動誘発者 (トリックスター) として知られる神たるロキが脅されたと伝承は語り継いでいるところとなっている — 表記著作 (Teutonic Mythology) にて “Thjasse was known as the storm-giant who having been born in deformity was ever seeking golden apples from Idun to cure his ugliness. Upon one occasion assuming the form of an eagle he interrupted a feast of Odin, Honer and Loke and when the latter attempted to strike the voracious bird with a stake found himself fastened to both stake and eagle and was borne away shrieking for mercy. Thjasse promised to release Loke if he would bring to him Idun and her golden apples. [ . . . ] Idun, who possesses "the Asas' remedy against old age," and keeps the apples which symbolise the ever-renewing and rejuvenating force of nature, is carried away by Thjasse to a part of the world inaccessible to the gods. The gods grow old, and winter extends its power more and more beyond the limits prescribed for it in creation. ” (拙訳として) 「スィアチはゆがみをもったかたちで生まれ落ちたとの嵐の巨人となり、彼は自身の醜さを取り除くためにイドゥンから黄金の林檎を求めようとしたとの存在となる。ある機会にてそのスィアチがオーディン・ヘーニル・ロキらの供宴を鷲の姿にて遮らんとした折、三者の内のロキがその食欲なる (鷲の姿に変じたスィアチであったとの) 鳥を棒にて打ち払おうとした際、その棒諸共、鷲にくくりつけられるかたちで連れ去られる格好となりもし、(空中にて) 金切り声にて慈悲を請うことになった。スィアチはもしロキが彼の元にイドゥンおよび彼女の黄金の林檎を持ってくれば、解放してやろうと請け合った… (中略) …イドゥン、[アサ神族 (アース神族) の老いに抗する対処策] を保持し自然にての絶えず生まれ変わる力、若返る力を象徴しての林檎を管理していたとの彼女がスィアチによって神々の到達不可能なる世界へと略取されることになる。神々は老いはじめ、自然創造の理にて規定されていた上限を超えて冬がその勢威を強めていくことになる」(訳はここまでとする) と記載されている— ) 。

画のロキと巨人のやりとりに見るように北欧神話では [黄金の林檎] がときに争いの元となっていると描写されながら、  
**[神々に不死を約する果実]**

として神話上の存在ら、神々ら・巨人らに非常に重要視されているところとなっている (: 黄金の林檎を失うと途端に神々は老化することになると伝承が語り継いでいることとワンセットである。その点、巨大な猛禽類に姿を変じたスィアチにイズンと黄金の林檎を奪われた際にも (上にての Teutonic Mythology 『チュートン人の神話』と題された著作よりの引用部に見るように) 神々は急激に老化し始めたとして描写されている)。

そうした不死を約するもの、神にとり欠かすことの出来ぬ常食としての [黄金の林



橋]と同文に[エデンの林橋]が  
[悪魔らにとっての依存の対象]  
となっているさまが描かれているのがミルトン『失樂園』であるとのことをも本稿の先の  
段にては解説していた(『失樂園』にて[誘惑に用いられた林橋]がそれを誘惑に  
用いた悪魔にとっての[欠かせぬ依存の対象]となっているとの描写が認められると  
のことについては本稿にての**出典(Source)紹介の部 54(2)**でも該当部原文引用に  
て指し示しているところである)。

そういった意味合い「でも」[黄金の林橋]と[エデンの果実]とは同質性・連続性  
を呈している——(そうした意味合い「でも」としている点について「でも」付きの原  
因となるところ、[[黄金の林橋]と[エデンの禁断の果実]とがいかにどのように**多重的  
に結びつくのか**]については本稿にての先の段、**出典(Source)紹介の部 48**から**出  
典(Source)紹介の部 54(4)**を包摂する長大な解説部にあつて[パリスの審判や複  
数神格にまつわる一致性問題]についてのこととして詳説に次ぐ詳説を加えてきた  
との経緯もある)——。

そうした[黄金の林橋]は北欧神話あらためギリシャ神話では  
[ヘラクレス 11 番目の功業にての目標物]  
にして

[トロイア崩壊の元凶]  
となっているものともなり(**出典(Source)紹介の部 39**がその史料上の典拠紹介  
部となる)、「かてて加えて」(性質悪きことが加わってのところとして)、同[黄金の林  
橋]、先述のように  
[911 の事件に関連する事物ら]  
と複合的に結びつくもの「とも」なっているものでもある(その点に関しては本  
稿にてのさらに続いての段で関連するところの話をさらにさらに突き詰めてなしてい  
く所存だが、本稿にての**出典(Source)紹介の部 37**から**出典(Source)紹介の部 37  
—5**を包摂する解説部で「まずもって」「差しあたり」言及していたところとして[黄金の  
林橋]との副題を持つ小説が奇怪極まりない**多重的な意味での 911 の事前言及小  
説**となっていることについての摘示をなしてきたとことがある)。

また、[黄金の林橋]については(本稿にての**出典(Source)紹介の部 35**から**出典  
(Source)紹介の部 36(3)**を包摂する解説部にてはじまり、本稿にての**出典(Source)  
紹介の部 46**を包摂する部位に至るまで関連するところにつき解説しているように)  
[粒子加速器を巡る問題]([ブラックホール生成を巡る問題]でもいい)とも複合的に  
結びついていてのことが摘示できるようになっているとの果実「とも」なる——再  
三再四強調するが、個人の属人的目分量の問題など一切関係ないところで「911 に  
まつわる奇怪なる予見事象とも結びついていて」との[黄金の林橋]は[加速器実験]  
とも「その動機・意図が当然に問題になろうところ」との按配で「複合的に」結びつ  
いていて・結びつけられていると摘示できてしまうところの伝説上の存在となっている  
(そうしたことの**意味性・露骨に窺えるところの動機**について突き詰めんとしているの  
が本稿である)——。

(図解部はここまでとする)

(直近までの図解部が長くなったも、) これにて

### 3. [ギルガメシュ・ヘラクレス双方の特定の冒険にての取得目標物が「不死」と結びつく]

とのポイントについての典拠紹介を終える。

が、同一の出典紹介部は続けもし、次いで、

### 4. [ギルガメシュおよびヘラクレスの特定の冒険にての冒険取得目標物 —— それぞれ洪水伝承と結びつく要素を伴っている「不死の草」と「黄金の林檎」—— に「爬虫類絡みの存在(蛇の類)との確執」の問題が関わってくる]

とのことの出典を直下、挙げておくこととする。

まずもって、ギルガメシュが「蛇に不死を約する若返りの草を奪い取られた」との碑文上の記載が再発見されたとのことがあるわけだが、についての出典としてはここまでに挙げてきた文書ら内容を参照されたい(出典(Source)紹介の部 60)にて Penguin Classics 版の THE EPIC OF GILGAMESH A NEW TRANSLATION の Tablet XI. Immortality Denied (第 11 碑文要約、[拒否されし不死])の部よりの抜粋として “ Uta-napishti's wife counsels him to give the departing hero the customary present for his journey. Uta-napishti tells Gilgamesh how, deep under the sea, a plant-like coral grows that has the property of rejuvenation. Gilgamesh dives to the sea-bed and retrieves it. He and Ur-shanabi leave for Uruk. Stopping at a welcoming pool, Gilgamesh bathes in its water, and a snake seizes on his inattention to steal the precious 'plant'. Knowing that he will never rediscover the exact spot where he dived, Gilgamesh realizes at last that all his labours have been in vain.” (訳として)「ウトナピシュテムの妻はウトナピシュテムに今まさに出立せんとしている英雄に旅立ちに際しての慣習上の贈答をなすように助言、ために、ウトナピシュテムはギルガメシュに海の奥深くに「若返りの性質を有する草木のような珊瑚」がいかにして生成を見ているかを伝える。ギルガメシュは海底に向けて飛び込み、それを回収する。そのうえでギルガメシュとウルシャナビ(船頭)はウルクに向け出立する。道中、ギルガメシュは心地よさそうな水場を発見、その水につかることとした折、一匹の蛇が彼の意表を突くかたちでかけがえのない「草」を掠め取った。自身が素潜りした海底にあっての(不死の材が生ずる)正確な場を決して再度発見することができないとのことを悟り、ギルガメシュは結局、彼の努力が水泡に帰したことを悟る」といった部よりの引用をなしていたとおりである。

さらにヘラクレスが黄金の林檎を巡ってラドンという百の頭を持つ竜(蛇のような多頭竜とも)と闘ったとされることについて、下の典拠を引いておく。

(直下、本稿の出典(Source)紹介の部 39)より引き合いに出しはじめ、度々引用なしてきたところとしてアポロドーロス『ギリシャ神話』(当方所持の文庫版第 61 刷のもの) p. 99-p. 102 よりの原文引用を「再度」なすとして)

---

エウルステウスは…(中略)…第一一番目の仕事としてヘスペリスたちから黄金の林檎を持って来るように命じた。これは一部の人々の言うようにリビアにあるのではなく、ヒュペルボレアス人の国の中のアトラスの上にあったのである。それを大地(ゲー)がヘーラーと結婚したゼウスに与えたのである。テューポーンとエキドナから生れた不死の百頭竜がその番をしていた。それとともにヘスペリスたち、すわなちアイグレー、エリュティア、ヘスペリアー、アレトウーサが番をしていた。

---

(引用部はここまでとする —※— )

(※上に見る[不死の百頭竜たるラドン]については英文 Wikipedia[Ladon (mythology)]項目にて“Ladon was the serpent-like dragon that twined and twisted around the tree in the Garden of the Hesperides and guarded the golden apples. He was overcome by Heracles.”(訳として)「ラドンはヘスペリデスの園にての樹木に巻き絡みついていたとの[蛇のような竜]となり、黄金の林檎を守護していた。彼はヘラクレスによって打ち負かされた」と端的に表記されているような存在、「半ば蛇」としての竜となる。ちなみに、[竜]にまつわる言い伝えが初期、[蛇](次いで[蜥蜴])にまつわる伝説と近接していたと「されている」ことについても本稿の先の段で若干ながら筆を割っていた。たとえば、オンライン上にての青空文庫サイト(和製版 Project Gutenberg としての著作権喪失著作を公開しているサイト)でダウンロード可能であるとの「国内では」古今にあって並ぶ者なき博識人と評されていたところの南方熊楠の手になる著作『十二支考 04 蛇に関する民俗と伝説』(岩波文庫)より次のような記述を引いたりしながら、同じくものことについて若干ながら筆を割きもしていた次第である。(『十二支考 04 蛇に関する民俗と伝説』より再度の引用をなすところとして)“故にフィリップやクックが竜は蛇ばかりから生じたように説いたは大分粗漏ありて、実は諸国に多く実在する蜥蜴群が蛇に似て足あるなり、これを蛇より出て蛇に優まされる者とし、あるいは蜥蜴やがくが蛇同様靈異な事多きより蛇とは別にこれを崇拜したから、竜てふ想像物を生じた例も多く、それが後に蛇崇拜と混合してますます竜譚が多くまた複雑になったであろう”(引用部終端/ここでは豊富・浩瀚なる読書量に支えられてのことが一目にてうかがい知れる熊楠の例証の類は割愛する))

また、ヘラクレスが追い求めた同じくもの[黄金の林檎]については[エデンの林檎による誘惑の物語]をも介して爬虫類の蛇とつながっていると述べられることがあり、については、本稿のここに至るまでの内容にて十全に指し示してきたとの認識がこの身、筆者にはある(であるから、疑わしきにおかれてはエデンの林檎と黄金の林檎の同質性を論じているとの本稿にての先の段の内容を確認されたい)。

上をもってして

4. [ギルガメシュおよびヘラクレスの特定の冒険にての冒険取得目標物 —それぞれ洪水伝承と結びつく要素を伴っている「不死の草」と「黄金の林檎」— に「爬虫類絡みの存在(蛇の類)との確執」の問題が関わってくる]

とのことの出典を終える。

以上、ここまでもってして特定の冒険ら(「ギルガメシュ叙事詩の今日に伝わる第11碑文(タブレットXIと考古学者に振られての碑文)」に見る不死を求めての冒険」および「ヘラクレスの第11功業における黄金の林檎を求めての冒険」)にあって

1. [ギルガメシュとヘラクレスが(特定の冒険にて)それぞれ同じくも「大洋を渡って」「地の果て」に赴いた —大洋の先にあるの辺土に赴いた— と述べられること]

2. [ギルガメシュとヘラクレスの(特定の冒険にての)冒険対象地に「洪水伝承」と結びつくとの側面を伴っていること]

3. [ギルガメシュとヘラクレスの(特定の冒険にての)取得目標物に不死と結びつくとの側面が伴っていること]

4. [ギルガメシュ・ヘラクレスの(特定の冒険にての)冒険目標物を巡って爬虫類の存在との衝突が生じているとの側面が伴っていること]

との類似性が複合的にみとめられることの典拠紹介を終える。

### [ギルガメシュ・ヘラクレスの一致性問題についての補足として]

英文ウィキペディアにも長々とした同男にまつわっての一項目が設けられているとの人物、イングランドにてオガム文字(古代アイルランド文字)の権威・小説家・評論家といった顔を持ち、多才なる知識人として担がれることが多かったとのロバート・グレイヴズという主流派・権威筋の論客(前世紀70年代まで活動の論客)がその著書、

**The Greek Myths** (日本でも紀伊國屋書店から[権威の外套]を羽織っているとの装丁での訳書が出されている『ギリシャ神話』との書)

にあって

### [ギルガメシュとヘラクレスの一致性問題]

について持説を披露しているとのことがあるのだが、そちら比較的目立つところのロバート・グレイヴズ言い様は却(かえ)って、ギルガメシュとヘラクレスの両者の間に一致性があると看做す見方を[信憑性足りぬ言い分]に貶めるようなやりようとなっているとのことがある(：残念だが、著名人による褒め殺しがなされているような格好となってしまう、としてもいい)。

いかようにしてか。

ロバート・グレイヴズ申しようにあっては(どうして目立つ著名人がそうした見解を披露する必要があったのか理解に失するが)

[こじつけましき側面]

にして、

[正しさに欠けるところの側面]

が目立つようになっているのである。

などと述べても、具体的文言に依拠しての解説をなさないにご納得いただけなからうから、[反面教師]として目立つところのロバート・グレイヴズ申しようを下に引いておくこととする——※[文献的事実]を問題としないかたちにて権威サイドの知識人が古典に対する行き過ぎた推論をなしている、そういったありように際会した際に『何故、こういうオーソドックスなことに言及しないで、こういった凝った、なおかつ、的外れな推論が出てくるのか』といった心証を覚えることが筆者などには往々にしてあるが、下にて[参考にできぬ、不適切な例]として紹介するロバート・グレイヴズの著者の記述などによって[ギルガメシュとヘラクレスの結びつきを指摘すること]が同文の式でのやりよう、[こじつけがましきやりよう]と見られてしまうとの余地を残したくはない、可及的に残したくはないと筆者はとらえもしている——。

(直下、far-fetched(こじつけがましき)かつ invalid(不適切)な申しようとしての Robert Graves の手になる The Greek Myths —1960年版、現行、オンライン上よりダウンロードできるようにされているとの著作— よりの引用をなすとして)

It may be assumed that the central story of Heracles was an early variant of the Babylonian Gilgamesh epic which reached Greece by way of Phoenicia. Gilgamesh has Enkidu for his beloved comrade, Heracles has Iolaus. Gilgamesh is undone by his love for the goddess Ishtar, Heracles by his love for Deianeira. Both are of divine parentage. Both harrow Hell. Both kill lions and overcome divine bulls; and when sailing to the Western Isle Heracles, like Gilgamesh, uses his garment for a sail. Heracles finds the magic herb of immortality as Gilgamesh does, and is similarly connected with the progress of the sun around the Zodiac.

(訳として)

「ヘラクレスの冒険譚の中心部はフェニキアを通じてギリシャに伝播していたと考えられる[より昔に遡ってのギルガメシュ叙事詩の変種]と考へてもよいかもしれぬ。ギルガメシュは親愛なる同志といった按配のエンキドゥを伴っており、ヘラクレスはイオラーオスを伴っていた。ギルガメシュは女神イシュタルに対する愛情ゆゑに破滅 **undone** させられ、ヘラクレスはディアネイラに対する愛情がゆゑにそうなった(訳注:ヘラクレスはデイラネイアという自身の妻の愚計が原因で毒に塗れて死亡することになったと伝わる存在となっている)。両者ともども神を親に持つ存在である。両者ともども地獄の領域に鍬を入れるがごとくことをなした。両者ともどもライオンらを殺傷し、聖なる牡牛に打ち勝った。そして、ヘラクレスが西の島に船出したとき、彼はギルガメシュのように己が扮装を利用した。ヘラクレスはギルガメシュがそうしたように不死の魔法の靈薬を発見したし、両者の間には黄道十二宮を巡る太陽の進行形態と結びつくととの相似性がある」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

「不適切な例」として引いているとの上の部についてはまずもって、

[ギルガメシュがイシュタル神に対する愛ゆゑに破滅(ないし人格荒廢)させられた  
“ Gilgamesh is undone by his love for the goddess Ishtar ” ]

というのは

[およそ[文献的事実]に合致していない( without philological evidences )]

あるいは

[的外れな比較をなしている]

との意で誇張を伴っての記載(不適切なる記載)となる。

(:ギルガメシュは女神イシュタルの求愛を拒んだために神から攻撃されたもののそれを「斥けた」との存在となっており(たかだかもの英文 Wikipedia[Ishtar]項目なぞにて “She (Ishtar) asks the hero Gilgamesh to marry her, but he refuses, citing the fate that has befallen all her many lovers ” と表記されているとおりである)、イシュタルの愛ゆゑに破滅とのニュアンスをそこに認めるのは困難である ——イシュタルの求愛を拒んだために[天の牡牛]がギルガメシュ討伐に送られた、そして、ギルガメシュと友人エンキドゥがそれを斥けたとの記述は和文ウィキペディア[ギルガメシュ]項目の如きものにも記載されているとおりではあるが、筆者は同文のことにまつわるギルガメシュ叙事詩の英文解説書籍・論稿らをも検証しており(それら資料名らも本稿にて挙げている)、そこよりイシュタルの愛が原因でギルガメシュが[破滅]したとの記述は全く見受けられないことを把握している——。但し、**undone** とのロバート・グレイヴスの(引用テキストに見る)言いまわしを[破滅させられた]としてではなく[人格荒廢させられた]との意でとらえれば、[イシュタルの愛が原因でギルガメシュがその友人エンキドゥを亡き者にさせられ、結果的に人格荒廢を見ることになった](本稿にて先述のこととなる)との式でそこに妥当性があるように「見え」もするのだが [人格荒廢を見た] ことと [ヘラクレスがその妻デイラネイアの愛が原因で「死亡」とのかたちで破滅 **undone** させられた] が如くことを並列して比較することは比較方式として妥当なやりようとはならない([人格荒廢]と[死亡]は類義のこととならない)。すなわち、ロバート・グレイヴズのその部にてのいいようは何れにせよ妥当な物言い「ではない」)。



また、同じくものロバート・グレーヴズ著作にあっての抜粋部に認められる、

[ギルガメシュは親愛なる同志といった按配のエンキドゥを伴っており、ヘラクレスはイオラーオスを伴っていた Gilgamesh has Enkidu for his beloved comrade, Heracles has Iolaus]

という著者申しようからして実にもって far-fetched [こじつけがましきもの]である。

(:ここまでもその点について古典内記述を引いて示してきたようにエンキドゥは[ギルガメシュの運命そのものを変えた莫逆の友]との描写のされ方の存在となっている。対してヘラクレスの従者イオラーオス(ヘラクレスの双子の兄弟の息子)については[ヘラクレスの冒険に時たま助力していると描写がなされている程度の存在]となっており、また、エンキドゥがそのような存在として描かれているように[物語の次なる展開につながる重要な役割を担った者]でもなければ、物語主人公より先に死亡してもおらず(ギルガメシュ叙事詩ではギルガメシュより先にエンキドゥは死亡している)、同イオラーオス、ヘラクレスよりも長生きしている。

従って、ヘラクレスの旅の道連れイオラーオスとギルガメシュの旅の道連れエンキドゥを対置させて挙げるが如く挙は[物語の脇役としての目立たぬ従者]と[物語の主要登場人物としての主人公の無二の親友]を同様の重み付けが与えられた存在として挙げるが如く挙に等しい(重み付けに対する顧慮もなせぬ・なさぬとの頭の具合のよろしくはないやりようないし「どうせ何も分かっていないのだから」と読み手の無知につけ込んでの性質悪きやりようでもいい)

ロバート・グレーヴズ Robert Graves については ——同男がいかにも[「これぞ権威」と担がれていた知識人]であったとしても—— そのようにほとんどつながらないもの(エンキドゥとイオラーオス)を結び付けているがゆえに「も」性質が悪い向きと解されるわけだが、といったロバート・グレイヴズの主張内容だけを(グレイヴズ本人の具体名すら挙げずに)批判する、ギルガメシュとヘラクレスの結びつきを問題視することを同じくもの論法で批判する英文ページもがオンライン上にあつて目に付くとのことがある(すぐ後にて具体例紹介する)。ロバート・グレイヴズの悪辣性に気付いているというのか、あるいは同男がはなから

[特定の観念を否定するためにわざと負けるべくも用意された闘犬にの「弱い犬」](目立つように用意された噛ませ犬、アンダードッグ Underdog)

[ユースフル・イディオット](矛盾を胚胎しての問題ある社会システムの維持にとり都合の良いことしか言わぬ、ないしは、本質から見ればどうでもいような下らぬことをそれが「さも重要なること」であるように目立って論じたてるとの類が[虚名]を与えられて重宝がられているとのケースにての[露出する(自称・他称の)識者]を、そも、ユースフル・イディオット「役に立つ愚者」と表することもある)

のような者として世を渡っていた(そういう類はテレビを点ければ、いや、ありとあらゆる教育現場や説教の現場などですぐに目に入るわけだが、とにかくも、のような者として世を渡っていた)とのこともありうる中で、そうした人間を[運用]する意向に沿って[弱い犬]を間接的に攻撃する動機でもあったのか、ロバート・グレーヴズそのもの「ではなく」同男主張内容と同じくものことを目立って否定するが如く英文ページがオンライン上にて目につくようになっているとのことがあるのである(ロバート・グレーヴズの名を明示的に挙げずに同男の不適切なる主張の中身を叩き、「ギルガメシュとヘラクレスの一致性を問題視するのはこじつけがましいことである」ように述べているとの英文オンライ

ンページ「も」どういうわけなのか目につくとのことがある)。

オンライン上にて ——[ギルガメシュ Gilgamesh] と [ヘラクレス Hercules] の両者  
名称を双方英文入力して検索すると現行目立つように表示されてくる質問・回答形式  
ページとして——、

[ヘラクレスとギルガメシュの類似性につき「なぜなのか」問いあわせているとの  
質問に回答するとの[体裁]にてのメジャーどころの英文質問サイト]

の内容が「現行」、目につくとのことがある、の中では、

「ギルガメシュとヘラクレスの[冒険の相棒]を介したつながりはない」

といった[普通に考えれば、日常生きるうえでは問題視する必要「もない」こと]を意図  
不明に挙げ連ねての回答者回答が「わざわざ」なされていたりもするのである ——※  
そうしたページの残置残存に関してはなんら請け合えないが、すくなくとも本稿執筆時  
現行にては What is a difference between gilgamesh and hercules? 「ギルガメシュとヘラ  
クレスの相違点は?」との質問が Yahoo! Answers (日本にて質問者質問に回答を与え  
ている Yahoo 知恵袋の海外版)の Web site に挙げられ、そちらが [ギルガメシュ][ヘラ  
クレス]の複合検索にての検索エンジン検索にて目につくようになっている中で、  
“Gilgamesh had a best friend and companion who shared his adventures; Hercules had  
several companions but no long-term, exclusive one.” 「ギルガメシュは彼と冒険を共に  
した無二の共にして道連れを伴っていたが、ヘラクレスについては複数の旅の道連れ  
を伴っていた中でただ一人を除いて長期の連れはいなかった」などとの表記が回答者  
によってなされ、[重要ながらその同定・捕捉にはある程度の知識が要されるとの際  
立っての一致性問題が捨て置かれたうえでの 相違点ばかりを挙げ連ねるとの式での  
論法]より導き出されている [ギルガメシュとヘラクレスの物語は結びつかないとの帰  
結]が強くも前面に押し出されていると見受けられるようになっている(繰り返す  
が、ギルガメシュとヘラクレスとの両語をもってして Search Engine を動かすことで出  
てくるサイトにてそういう言い分・言いようがなされている)。につき、筆者なぞは『Robert  
Graves (の死骸の皮の如くもの)なぞを不適切なること甚だしくもの [Underdog] (闘  
犬にての弱い犬)として[運用]すればそういう物言いもなせよう』と解している——)。

この世界で目立つ[知識人]、(故)ロバート・グレイヴズのやりようとのことでさらに述  
べれば、

[ヘラクレス本人が不死の霊薬としての若草を発見した Heracles finds the magic herb  
of immortality as Gilgamesh does. (先にての引用部を参照のこと)

などという Robert Graves 書きようは[誤り](incorrect)、すくなくとも、[文献的事実では  
ない](without philological evidences)であるためにそのようなことをヘラクレス・ギル  
ガメシュの一致性の問題の論拠として持ち出しているのは良くて「不適切」、悪くて「論  
外」であると考えられるとのこともある ——ただし、同じくもの点に関してはヘラクレス  
が乞い求めたゴールデン・アップルにあっての北欧神話などに見る「不老不死を約す  
る果実」との特質と結びつけて見れば、話は別である——。

「さらに」に「さらに」を加えてのくどくもの話をなせば、ロバート・グレイヴズがギル  
ガメシュとヘラクレスが黄道十二宮にあっての[太陽の運行]と双方結びつく存在であ  
るように(先にて引用した部で)書き記していることも不穏当であると受け取れるよう  
なところがある(はきと不穏当であるとは断じられないものの、である)。ヘラクレス 12 功業  
が黄道十二宮のいくつかの星座の由来として言及されていることがあっても(殊に[蟹  
座]や[獅子座]や[射手座]の由来はヘラクレスの 12 功業の中にて求められてもいる)  
[ギルガメシュ神話と共通のもの]として両雄「ともども」が太陽の運行と結びつくとの申  
しようが深くも理に適った式でなされているのか、とのことについては判断が難しく首を

かしげざるをえないところであろうととらえられるようになっているのである。

(:以上のことすべてを顧慮したうえでのこととして「権威筋の」よく知られた論客——日本では紀伊國屋書店などがさも[一級の知識人]であるようにそのギリシャ神話関連の書籍の邦訳版を刊行しているとのロバート・グレーヴズ——に由来する[悪質なやりよう]であるととらえている。

それにつき、

「世間にては

[論証したきことがまず先にあつてその論証したきことを適正・十二分に指し示すためにそれをなす]

という、

[本来そうあるべきかたちでの [引用] ]

をなす、そういうことすらも満足に出来ないとの人間が多い」(なかんずく[本来的には空虚なるものに過ぎぬ紛い物]が[有識者][思考力ある人間]の「フリ」をしているとの[双方の類]らのやりように関して述べれば、[引用]がなされていてもそこに脈絡が何らない、なぜ、どうして引用をなしているのか、引用をなす必要もないところで[引用]がなされながら結局、[無意味・無価値なる属人的印象論]が導出されるだけに終わっている ([引用]でもって「自慢高慢馬鹿のうち」といった程度の浅薄なる知識でもひけらかしたいのか、あるいは、[隙間を埋めるべくもの間に合わせ存在][アンダードッグ]ながらもの存在自体を目立つように前面に押し出す意図でもあるのか、といった按配での[本当に何かの建設的作用をきたす可能性]が伴っていない——[立証][論証]でもなければ無論、[告発]ですらない——との[無意味・無価値なる属人的なる印象論]に終わっている) といった側面すらもが見受けられる)

とのことがありもするなかで

「ましてや、引用なす者にあつてはその引用の元とすべきか検討の俎上に載せての学者の申しようが正しいか正しくはないかとのことを引用対象史料の検証までなして分析する人間に至ってはよりもって少ない」

とのことがあると筆者「も」見るに至っている(そういうことを大学時代の教授の慨嘆の言として聞いたことがある。その教授は暗に「権威の外套を纏(まとう)学者とて平然と偽りをなす」と述べたかったのかもしれないが)。そうした見方をなしている人間として「強くも」申し述べておくが、

「本稿にあつての筆者の [引用] に対するスタンスは

[引用をなす際には引用元が[権威]由来のものであるかどうかの別なくその正確性に注意を払っており、自身が論証したきことを「適正に」指し示すことに最深の注意を払っている]

とのものである」

とのこと、よくご理解いただき、是非とも、その通りか否かの批判的検討を請いたいものである——それにつき、筆者とて[過度に憶説がかつての内容を有しての文物][多くの誤りを胚胎している(と見立てている)文物]より引用をなすこともあるわけだが、そういうことをなす場合には「それが世間から相応の評価を受けているものですよ」「こういう誤り・欠陥を伴っていますよ」と断りつつもの引用ないし内容紹介をなすことにしており、そう

もしつつの引用をなしている場合は『劣悪なるものから取り合うに値する部分を抽出(救出)できる』と考えているケース、ないしは、「こういう視点すらもある」「欠陥性それそのものが問題になる」とのその材料呈示のために留めてのケースに限られる(本稿の「批判的」内容確認でもってして読み手となる向き自身でご確認いただきたいのだが本稿にて筆者には[適正さ]を指向する確固たる意図がある)。対して、である。[相応の類ら]はサブ・プライム問題(金融危機)を引き起こした住宅ローン担保証券流通システムに見る「ような」やりよう(サブ・プライム・ローンのといった側面につきご存知なければ『インサイド・ジョブ 世界不況の知られざる真実』とのドキュメンタリー映画を見ているとよい)、[劣悪なるもの](正当なる裏付けがないもの)と[正しいもの](正当なる裏付けがあるもの)を[不正確な、あてにならぬ基準]でもって混ぜあわせる、責任感もなんらなしとの式で両者を十把一絡げに混ぜあわせるとのことをなし、[周囲(広く見れば世間)に害しか及ぼさぬとの紛い物]を構築するようなことばかりをなしていると見受けられる。心ある読み手にあっては世の中に充満しているそうした紛い物に惑わされず正しい道を道究めてもらいたいものである(読み手が行為動態に対する前もっての目分量さえ有しておれば、そう、[機械のような存在](運命を与えられるだけの存在)としてではなく[思考なせる人間](運命を切り拓かんとする者)として同じくもの視点で[対象]を注視するだけの前もっての目分量さえ有しておれば、本来ならば、[相応の存在]を見極めることができ、紛い物なぞに騙されることもないだろうとも筆者は思ってもいるからそうも強くも申し述べている(ただ、そうしたことは万人に期待できることではないともあわせて見ている。そも、我々人間の世界では賢愚の別も甚だしく、また、魂の抜けきった木偶のような者らで満ちた我々人間の世界では[理]も[知]もない宗教ドグマに嵌まっているないし嵌まっている振りをしているが如き者らが(諺に曰く)「固まり法華に徒党門徒。」とのマス・ゲーム式で[理]と[知]の領域を「彼らの」都合で破壊しようとしている様も目に付く、であるから、同じくものことを万人に期待できるはずもなかろうと見ているわけである。しかし、であっても、[生き残るためにあがく]、すなわち、[死地から抜け出んとするだけの潜在力を有している]との向きらのためにものしている本稿にあってはそのような注記を取ってもなしている)——)

(ロバート・グレーヴズ『ギリシャ神話』を引き合いに出してのギルガメシュ・ヘラクレスの  
一貫性問題についての補足はここまでとする)

(極めて長くもなったが、[出典\(Source\)紹介の部 63\(3\)](#)はここまでとする)

---

直近直上の部までにて典拠示してきたようにギルガメシュとヘラクレスの冒険譚の間には

[大洋を渡っての辺土 一地の果てといった辺土— に向けての冒険との側面]  
[冒険目的地が洪水伝承と結びつくこととなっているとの側面]  
[冒険にての取得目標物(ギルガメシュ:不死の草、ヘラクレス:黄金の林檎)が[不死]と結びつくとの側面]

【冒険取得物にまつわり【爬虫類の存在(蛇と接合する存在)との確執】との要素が関わってくるとの側面】

との共通性が見てとれるとのことがある。

はきと述べるが、双方ともに

「獅子と結びつく形で偶像化されてきた(獅子を御し、獅子の皮をまとった姿にて偶像化されてきた)」

存在にして、双方ともに

「半神(デミゴッド)との属性を有している」

との存在らにあつての特定の旅の物語——片方は伝説の大洪水の生き残りウトナピシュテムを探し求めてのギルガメシュの旅の物語、片方は(かのアトランティスと同一視されてきた)黄金の林檎の園を求めてのヘラクレスの旅の物語——にあつて、

【大洋を渡つての辺土—「地の果て」といった辺土—に向けての旅との側面】

【旅の目的地が洪水伝承と結びつくこととなっているとの側面】

【旅にての取得目標(ギルガメシュ:不死の草、ヘラクレス:黄金の林檎)が【不死】と結びつくとの側面】

【取得目標にまつわり【爬虫類の存在(蛇と接合する存在)との確執】との要素が関わってくるとの側面】

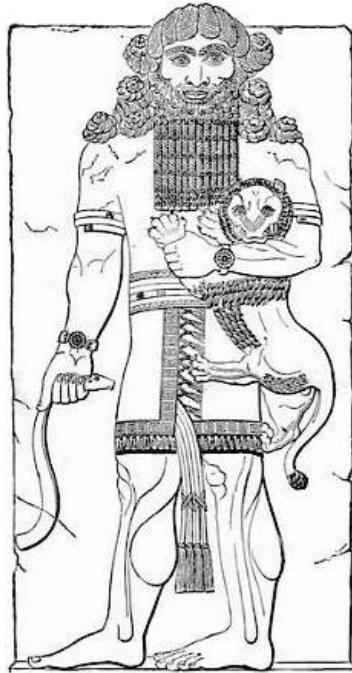
との一致性が(くどいが、それぞれ一単位の特定の冒険の間にて)具現化を見ていることをして

【ただの偶然の一致である】

などと決めつける(断じきる)のは愚かなやりようであると明言したい次第である(言い方を換えれば、ここまで述べてきたような多重的一致性があるところにて偶然である云々といった申しようをなすのは「正気ではない」といった具合に頭の具合がよろしくはないことであると明言したい次第である;おかしいことを言っているつもりはない。要するに【明示的に指し示される場所の多重的一致性】から何らかの事情あつてギルガメシュ・ヘラクレスの両者の物語は結びつくようになっていると明言したいのである。それにつき、—先の段にて言及したことを再言及するとして—【ギルガメシュが不死を求めてウトナピシュテムの地に旅立つ原因(エンキドゥの死)をそもそものところとしてもたらした】のがイシュタルという女神となっており、同女神イシュタルについてはギリシャの女神、【黄金の林檎を是が非でも求めんとしたアフロディテ】と同一視されもする存在、【金星体現存在】【美と愛の女神】【彫像化の熊様】(鬚を生やした奇怪なるイシュタル像と鬚を生やした奇怪なるヴィーナス・アフロディテ像との言われようについて先述)とのありようから【黄金の林檎を是が非でも求めんとしたアフロディテ】と同一視されもする存在となっていること「も」またある——あまりにもってよくできているところではある。実に悪い意味で、だが——)。



(最前の段までにて以下、図示なす通りの関係性について指し示してきた)



Gilgamesh



Heracles

- demigods
- lion hunters (& <sup>source53</sup>lion's pelt wearers) (Norse mythology & Iðunn)
- targets of voyages & immortality  
⇒ Plant of immortality & Golden Apple
- targets of voyages  
⇒ Plant of immortality & [Golden Apple → Forbidden fruit]  
; loss of immortality & surpent's trick
- destinations of voyages related with deluge myths  
⇒ (Utnapishtim legend, Garden of Hesperides ⇒ [Atlantis])

• "The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were far-famed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods: it was another Eden."  
—Alexander Muray

Eye & Forbidden fruit (depicted as an apple)

• [Paris ⇒ Aphrodite; Venus] → [Adam ⇒ Satan (personification of the planet Venus)] "Fall" connection  
femme fatale (Helen) & Golden apple

Francis Bacon's New Atlantis

• [the garden of Hesperides = Atlantis ⇒ America] → [Quetzacoatl (divine personification of the planet Venus) & betrayal] → [Satan] "Fall" connection

"Adam was told he might eat freely of every tree in the garden, excepting only the Tree of Knowledge; we may, therefore, suppose that he would be sure to partake of the fruit of the Tree of Life, which, from its prominent position "in the midst of the garden," would naturally attract his attention." — Plant lore, legends, and lyrics (1884)

- ここでの関係図で伝えんとしていることは  
[ギルガメッシュとヘラクレスの両雄] (半分、神の血を受け継ぐ半神との設定の存在ら) については次のような類似性が成立しているとのことである。
- 両雄共々、獅子を屠った英雄として偶像化されている。
  - 両雄共々、獅子の皮を被った英雄との話が伴っている。
  - 両雄共々、[世界の果てに向けての旅]をなし、その目的物が不死伝承と結びついているとの存在である (かたや不死を約する薬草ないし珊瑚、かたや黄金の林檎)。
  - 同じくもの [世界の果てに向けての旅] にあつての目的物が [蛇による不死略取] の物語と接合するとの側面を有している (Edenとの接合性を媒介とする)。
  - 同じくもの [世界の果てに向けての旅] にあつての目標地点が [洪水伝承] と結びついているとのことがある (Atlantis伝承との接合性を媒介にする)。

さて、ここまでで

---

## b.

[上の a. に関わるところとして [ギルガメシュ伝承にあつての洪水伝承および蛇の不死の略奪に関わるパート] (考古学者らに第 11 番目の石版と振られている『ギルガメシュ叙事詩』の特定パート) に関して「も」[黄金の林檎の取得が目標となっているとのヘラクレス第 11 功業] との顕著な純・記号論的連続性が認められることが現実に摘示可能となっている]

---

とのことにまつわる解説をなし終えた、としてである。

次いで、(a. から c. と振っての一連の段にての)

---

## C.

[上の a. 及び b. (なかんづく b.) の [黄金の林檎] に関する話は [エデンでの誘惑] とも密接に連結するものとなっている (につき、黄金の林檎とエデンの果実の関係性については本稿にてのより先立っての段で細かくも論じてきたことともなっている)。

既に指し示してきたところの [黄金の林檎とエデンの禁断の果実の関係性] が見てられる中で (上の b. にて新たに呈示なしてのように) ギルガメシュ伝承までもが黄金の林檎にまつわる伝承と接合するとのことはミルトン『失樂園』の主題そのもの (エデンからの追放) が

[洪水伝承]

[蛇による不死の略取]

との双方の要素を帯びているギルガメシュ叙事詩特定パート (考古学者らに第 11 番目の石版と振られているパート) と ——かねてより摘示なしてきた [黄金の林檎] と [エデンの果実] の関係「も」あり—— 多重的に接合することに等しい。

そこより、

[[蛇による不死の略取の物語] とも言い換えられるミルトン『失樂園』 —黄金の林檎と関わるエデンの果実を用いての誘惑のプロセスが描かれる物語— にあつての (黒海にて周囲に災厄を引き起こし海峡が構築されたとの) [洪水伝承] とつながり「うる」との (従前論じてきた) 側面]

が

[つながり「うる」]

で済まされないようなものとの観点が出てくる。

また、

[[黄金の林檎] の在処を把握すると神話が語る巨人アトラス]

[[黄金の林檎] の園の同等物とも考えられてきた [洪水] で滅した伝説のアトランティス]

[[黄金の林檎] が原因ではじまった戦争にて住民皆殺しに遭った後、[洪水] で消滅したとの伝承が存するトロイア]

と結びつくとの側面を「どういわけなのか」複合的に帯びているとの今日の LHC 実験とミルトン『失樂園』との関係性もが同じくものことより「よりもって重層的なるかたちで」問題になるとのこともある (:ミルトン『失樂園』にあつての [トロイア] [黄金の林檎を巡っての] パリスの審判と多重的類似要素を帯びてのエデンの誘惑) [ブラックホール類似要素]

とひとところにて接合するありようから LHC 実験との接合性は指摘できるようになっている——ミルトン『失樂園』に関しては [アトラス] [アトランティス] [トロイア崩壊をもたらした木製の馬の計略の考案者らを飲み込んだ渦潮の怪物カリブデイス] らをすべて [ブラックホール生成] に通ずるところの命名規則として用いている LHC 実験との接合性を指摘できるようになっている—— とのそのことが問題になる]

とのことについてだが、そちらについては本稿にて既に詳述を重ねてきていることであるの本稿のまじめなる検討者に対しては今更解説を繰り返すようなことでもないことか、と思う。

であるから、それが (属人的主観などが問題もなる余地もなく) そのようなものであると摘示できるとのことについては「既述の」出典紹介部の呈示をもってして解説に代えたいと思う。

[c. を構成する各要素]の典拠となる部について (c. の部の構成要素を全てカバーするように細分割して、のうえで、網羅的に [ 関連するところの典拠紹介部] を列挙しておく)

・ギルガメシュ伝承が「蛇による不死の略奪」との内容を有し、また、同じくもの内容が「洪水伝承」と関わるものともなっていることについて

⇒

同じくものことについては先立っての **出典 (Source) 紹介の部 60** を包摂する解説部を参照されたい

・ギルガメシュ伝承 (にての「洪水伝承」「蛇にての不死の略奪」を扱っての部) が「黄金の林檎を巡るヘラクレスの第 11 功業」と記号論的に「多重的に」結びつくものであることについて

⇒

同じくものことについてはつい先立っての段、**出典 (Source) 紹介の部 63** から **出典 (Source) 紹介の部 63 (3)** を包摂する解説部を参照されたい

・「エデンの誘惑」がいかにして「(ヘラクレスがその第 11 功業にて求めたものの) 黄金の林檎」と接合しているかについて

⇒

同じくものことについては本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 48** から **出典 (Source) 紹介の部 51** を包摂する一連の解説部 (パリスの審判を介しての関係性にまつわる解説部)、および、**出典 (Source) 紹介の部 52** から **出典 (Source) 紹介の部 54 (4)** を包摂する一連の解説部 (ケツアルコアトルとアメリカに対する位置付けを介しての関係性にまつわる解説部)、**出典 (Source) 紹介の部 61** を包摂する解説部 ( [アフロディテが登場するパリスの審判] と [ケツアルコアトル] がイシュタルというバビロニア女神を通じて接合することを指摘しているとの解説を参照されたい

・「エデンでの誘惑」が「蛇による不死の喪失」に通ずる内容を有していると解されることとなっており (そちらについては Project Gutenberg より全文ダウンロードなせるとの 19 世紀著作、Plant lore, legends, and lyrics (1884)、『植物にまつわる伝承伝説そして詩』とでも訳せよう著作、同著にての The Tree of life の節よりの一文を先に抜粋したようなところとして、“Adam was told he might eat freely of

ここでぐぐり  
くも『ギルガメ  
シュ叙事詩』な  
どの内容のことを  
筆者が問題視し  
ているとのことを  
もってして、

「何をこれ狭  
隘にも古典、  
しかも、とおの  
昔に滅した文明  
の (近代になっ  
て発掘された) 古  
典の内容のことを  
細々延々と問題  
視しているのか  
、そのような古  
典が現代に生き  
る我々に関係が  
あると述べるこ  
となどおかしい  
ではないか」

と (当然に) 疑念  
視する向きもあ  
るかと思う。

であるから、こ  
れ以後の内容に関  
わるところとし  
て、次のことを  
強くも念頭にお  
いていただくこ  
と、求めました  
い。

1. 後にてその  
点についての解  
説も (引用しな  
がらも) なすが、  
ここ本段でその  
中にあるのブ  
ラックホール近  
似物に関わる描  
写の『ギルガメ  
シュ叙事詩』と  
の接合性——エ  
デンの園の果  
実・黄金の林檎  
に関わるところ  
での接合性——  
を指摘している  
とのミルトン古  
典『失樂園』は  
欧州の代表的古  
典の一に数えら  
れるものである  
(ミルトン『失  
樂園』は著名性・  
影響力が極→

→めて伴っているとの重要古典となる。またもって『ギルガメシュ叙事詩』との、ブラックホール近似物に関わる描写にまつわるところでの、接続性を指摘しているそちらミルトン古典『失樂園』、そのパラダイス・ロスト(同文にもブラックホール近似物描写に関わるありよう)で) 多重的に接合すると先に指摘したダンテ『神曲;地獄篇』にいたっては欧米基準古典 — Western Canon と呼ばれる一群の最重要古典 — の中核にあるものであるとまで言われている最も著名な古典となっている。そうしたことから、ここ本段で『ギルガメシュ叙事詩』にまつわっての解説をなしていることについては — 現代にまで強くも影響を与えている表通りにて拡散されている文物ら(とすれば人間世界の多くの向きの内面ありよう、言動ありようを規定してきたとの作品ら)の異様な描写に通ずることを取り扱っているとのその意で — 「無為に細々としたことを論じているわけではない」との観点が(書き手には)ある。

2. 『ギルガメシュ叙事詩』それ自体の重要性のこともある。ご存知の向きも多かるうが、『ギルガメシュ叙事詩』がはぐくまれた古代メソポタミア文明は人類の最古の農耕・都市型文明との見方が伴っているものである。そして、野を走り回り穴居しての半獣性を帯びていたとされる →

every tree in the garden, excepting only the Tree of Knowledge; we may, therefore, suppose that he would be sure to partake of the fruit of the Tree of Life, which, from its prominent position “in the midst of the garden,” would naturally attract his attention.” (訳として)「アダムは[知恵の樹]以外のエデンの園にてのすべての樹を自由に食してよいと言われていた。したがって、われわれは、彼アダムはエデンの園の中核にあり、また、自然に注意を引くとのものであった(不死を約束する)生命の樹の実を確実に食べていただろうと想定するものである」(訳はここまでとする)といった見方が呈されるころでもと解説していた)、かつ、[エデンの誘惑による楽園喪失]を描く『失樂園』という著名古典が[(黄金の林檎が原因で滅した)トロイア城市]、そして、[トロイア近傍で発生した洪水にまつわっての往古よりの黒海近辺洪水[伝承]および最近呈されるようになったとの黒海洪水[仮説]]との関係性をも呈してもいるとのことについて

⇒

同じくものことについては本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 56** から **出典 (Source) 紹介の部 58 (4)** を包摂する解説部を参照されたい(ちなみに本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 57** では [ギルガメシュ叙事詩にあつての洪水伝承と関わるパート] が [1996 年より呈示された(エポックメイキングなものとされる)黒海洪水仮説についての学者ら物言い] といかように結びつけられているのかを指し示すものともなる媒体よりの引用をなしてもいる — オンライン上より誰でも特定できるところの Geologists Link Black Sea Deluge To Farming's Rise 『地理学者らが黒海の洪水をもって農業の隆盛と結びつけた』との題名振られての 1996 年 12 月 17 日付け (Published: December 17, 1996) の The New York Times 記事より掻い摘まんで抜粋をなしたところとして(再度の引用をなすとして) “ Other geologists familiar with the work seem to have no quarrel with the basic reconstruction or the timing. But Dr. Ryan and Dr. Pittman have taken their interpretation of the flood's possible consequences a tentative but bold step further, two geologists treading on the turf of archeologists. The rumblings of controversy, like the beginnings of the Bosphorus cascade, can already be heard. Could it be, Dr. Ryan and Dr. Pittman speculate, that the people driven from their land by the flood were, in part, responsible for the spread of farming into Europe and advances in agriculture and irrigation to the south, in Anatolia and Mesopotamia? These cultural changes occurred around the same time as the rise of the Black Sea. **Could it also be, they ask, that the Black Sea deluge left such enduring memories that this inspired the later story of a great flood described in the Babylonian epic of Gilgamesh? In the epic, the heroic warrior Gilgamesh makes a dangerous journey to meet the survivor of a great world flood and learn from him the secret of everlasting youth. If a memory of the Black Sea flood indeed influenced the Gilgamesh story, then it could also be a source of the Noah story in the Book of Genesis.** ”

(拙訳として)「同研究(黒海洪水説に接合するところの研究)に通じている他の地学者らは(研究結論につき)[基本的再現手法]および[時期同定]につき議論の余地なしと見ている節がある。しかし、(黒海洪水説の主唱者たる)考古学者の領分に踏み入った二人の地理学者らたるライアン博士とピットマン博士の両氏は洪水のありうべき帰結に関する彼ら解釈をして暫定的な(最終的ではない暫定的な)、しかし、勇気が要されるとの「さらに先への」一歩であるととらえている。(提唱された黒海洪水仮説に見る)ボスポラス海峡が出来上がったときのさまのように議論のさざめきが既に聞こえてきている。地域にて人々が洪水によって彼らの土地よ



→ 我らが祖先がはじめて文明を構築したとされる一帯（メソポタミア）で極めて重きをもって語られていたらしい（一説によると人間の文明における最古最大の物語とも）との叙事詩が『ギルガメシュ叙事詩』となり、同叙事詩、いわば人類における最古の夢のかたちとも述べられる。そうした（古いとの意で）人類文明の根この部に関わるところのものが「ブラックホール近似物に関わる描写」と通ずるところでキリスト教世界の重要文物（ミルトン『失楽園』）と接合しているとのことを指摘することはこれまた無為ではないとの観点（書き手には）ある。

3. 『ギルガメシュ叙事詩』とミルトン古典の記号的連続性の橋渡しをする黄金の林檎、および、ヘラクレス 12 功業説話もまたもってして「人類文明における根っこをなす」との意で極めて重きをなすものである。今日の欧米文明の根幹にあるのは（ほぼ常識上のことかと思うが）ギリシャ・ローマ文明からの承継物となっており、ヘラクレス伝承はギリシャ・ローマ期にあって極めて重きをなすものであったことが知られている（ローマ時代に入ってもヘラクレスを崇めるヒーロー・カルトなどというものが隆盛を見ていたとのことが知られてもする。ローマ期のヘラクレスに対する信仰形態については英文ウィキペディア程度のものにおける [ Hercules in ancient Rome ] 項目などで →

り追われ、ヨーロッパでの農業の広がり、他の農業的進歩、アナトリアそしてメソポタミアから南方に向けての灌漑にかかずらう立ち位置に追い立てたというのか？ライアン博士とピットマン博士は思いを巡らしている。これら文化的変化は黒海の水面上昇と時を同じくして発生している。また、黒海にての洪水が風化に耐える記憶、バビロニアのギルガメシュ叙事詩に見る大洪水伝承の元となったものとしての不朽の記憶を遺したということはあるのか？両博士は問うている。叙事詩にて英雄的戦士であるギルガメシュは世界的大洪水の生き残りとして出逢うべくもの危険なる旅をなし、彼より永遠の若さの秘密を聞き出す。仮にもし本当に黒海洪水の記憶がギルガメシュの物語に影響を与えているのだとすれば、それはまた聖書創世記に認められるノアの物語の源泉ともなりうる」（再度の引用部に対する訳はここまでとする）のかたちにて、である——）

・[黄金の林檎の園] がいかにして巨人アトラスと結びつくかについて

⇒

同じくものことについては本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 39](#) を包摂する解説部を参照されたい

・[黄金の林檎の園] がいかにしてアトランティスと結びつくか、また、欧米識者に結びつけられてきたかについて

⇒

同じくものことについては本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 40](#) および [出典 \(Source\) 紹介の部 41](#) を包摂する解説部を参照されたい

・[黄金の林檎が原因で滅んだトロイア] がいかにして「多重的に」アトランティスと結びつくかについて

⇒

同じくものことについては本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 40](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 45](#) を包摂する一連の解説部を参照されたい

・[LHC 実験にあっての(ブラックホール生成とも通ずるところとなっているものらの)命名規則] がいかにして「黄金の林檎」「アトラス」「アトランティス」「トロイア関連事象」らと結びつくものとなされているのかについて

⇒

同じくものことについては本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 35](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 36 \(3\)](#) および [出典 \(Source\) 紹介の部 46](#) を包摂する一連の解説部を参照されたい

・ダンテ『地獄篇』とミルトン『失楽園』にあっての「地獄門の先に存在する領域」「ルシファーの災厄に起因する領域」との双方の特性を帯びている領域がいかにして今日的な観点で見るとブラックホールのものとなされているのかについて

⇒

同じくものことについては本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 55](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 55 \(3\)](#) を包摂する部にての解説を参照されたい（同出典紹介部では「今日的な観点で見ると」ブラックホール像が A. 「一度入ったら二度と出れない」（事象の地平線）領域の先にある場 / B. 「重力の源泉となっている場」



→そちら形態の一覧表記が現行なされているところである( )。であるから、その意「でも」不必要に細々としたことを論じているとの認識はない。

以上、1. から 3. のことが現実世界に対していかように重きをもってくるのか、【人間存在の今後に関わるものとして長期具現化してきた相応の意図の発露】とのこととの絡みでいかように重きをもってくるのかは本稿の続く段の内容の検証をもってしてご理解いただけることかと思う。

／ C. [外側(生者)から見れば(静的描写として)被吸引者が「時が止まったような状況」になりつつも(動的描写として)その被吸引者本人(死者と化した者)から見れば「粉碎され尽くしている」との場] ／ D. [[「光さえもが逃がられぬ」とされる場] ／ E. [底無しの暗黒領域] ／ F. [時空間の法則が破綻する(「時間」と「空間」が本来通りの意をなさなくなる)領域] ／ G. [それをもって自然の祖であるとする観点が存する場] との A. から G. に見る特性と共に語られているのに対して [ルシファーによる災厄] [[地獄門]の先にある破滅への通路] を描く作品たるダンテ『地獄篇』(13 世紀末葉から 14 世紀初頭、すなわち、今よりおよそ 700 年程前に成立の作)およびミルトン『失樂園』(17 世紀中葉、すなわち、いまよりおよそ 350 年程前に成立の作)との両古典にてはまさしくものその [ルシファーによる災厄] [[地獄門]の先にある破滅への通路] との要素と関わる部において A'. [「一度入ったらば「悲嘆の」領域に向けて歩まざるを得ず、希望を捨てねばならない」との [不帰の領域]にまつわる隻句(『地獄篇』地獄門隻句)を目にしたところから入って最終的に到達した「悲嘆」を体現した地点(『地獄篇』コキュートス)／ B'. [重力 —— 古典『地獄篇』それ自体にて **To which things heavy draw from every side** [あらゆる方向から物の重さが引きつけんとする地点] と表されているところ(地球中心)に作用している力—— の源泉となっている場(『地獄篇』コキュートス) ／ C'. [(「悲嘆の」川コキュートス)にて(静的描写として)罪障がゆえに「凍りついた」者達が、と同時に、(動的描写として)「粉碎され続けている」との地点(『地獄篇』コキュートス)においての亡者の世界の最奥を本来的なる生者たるダンテが垣間見もした地点) ／ D'. [「光に語源を有する存在」(ルチフェロ)が幽閉されている地点(『地獄篇』コキュートス) ／ E'. [果てなき(底無し)の暗黒領域(『失樂園』アビス) ／ F'. [大きさ・「時間」・「場所」が無意味となる領域(『失樂園』アビス) ／ G'. [自然の祖(『失樂園』アビス) との A' から G' の各要素が具現化見ていることを解説している —— ちなみにミルトン『失樂園』ではなくダンテ『地獄篇』の方に関しては幾人かの名が知れた物理学者らが彼ら著作にて当該古典をブラックホールと結びつけるような記述をかれら著作に「極めて不徹底に」なしているとのことがあり、に関して「も」本稿にての **出典(Source)紹介の部 55** にあって引用なしながら紹介している—— )

([c. を構成する各要素]の典拠となるところについての紹介はここまでとしておく)

これにて

a.

[既にそちらにまつわる神話伝承の多重的連結関係は本稿で論じているところとなるのであるも「さらにもって」の話として) 黄金の林檎にまつわる話は多くの神話・伝承を「不可解に」結節させるものである

b.

[上の a. に関わる場所として [ギルガメシュ伝承にあっての洪水伝承および蛇の不死の略奪に関わるパート] (考古学者らに第 11 番目の石版と振られている『ギルガメシュ

叙事詩』の特定パート) に関して「も」[黄金の林檎の取得が目標となっているとのヘラクレス第 11 功業] との顕著な純・記号論的連続性が認められることが現実には摘示可能となっている]

## C.

[上の a. 及び b. (なかんずく b.) の[黄金の林檎]に關しての話は[エデンでの誘惑]とも密接に連結するものとなっている (につき、黄金の林檎とエデンの果実の關係性については本稿にてのより先立っての段で細かくも論じてきたことともなっている)。

既に指し示してきたところの[黄金の林檎とエデンの禁断の果実の關係性]が見てとれる中で(上の b. にて新たに呈示なしのように)ギルガメシュ伝承までもが黄金の林檎にまつわる伝承と接合するとのことはミルトン『失樂園』の主題そのもの(エデンからの追放)が

[洪水伝承]

[蛇による不死の略取]

との双方の要素を帯びているギルガメシュ叙事詩特定パート(考古学者らに第 11 番目の石版と振られているパート)と ——かねてより摘示してきた[黄金の林檎]と[エデンの果実]の關係「も」あり—— 多重的に接合することに等しい。

そこより、

[[蛇による不死の略取の物語]とも言い換えられるミルトン『失樂園』 —黄金の林檎と關わるエデンの果実を用いての誘惑のプロセスが描かれる物語— にあつての(黒海にて周囲に災厄を引き起こし海峡が構築されたとの)[洪水伝承]とつながり「うる」との(従前論じてきた)側面]

が

[つながり「うる」]

で済まされないようなものとの観点が出てくる。

また、

[[黄金の林檎]の在処を把握すると神話が語る巨人アトラス]

[[黄金の林檎]の園の同等物とも考えられてきた[洪水]で滅した伝説のアトランティス]

[[黄金の林檎]が原因ではじまった戦争にて住民皆殺しに遭った後、[洪水]で消滅したとの伝承が存するトロイア]

と結びつくとの側面を「どういふわけなのか」複合的に帯びているとの今日の LHC 実験とミルトン『失樂園』との關係性もが同じくものことより「よりもって重層的なるかたちで」問題になるとのこともある(：ミルトン『失樂園』にあつての[トロイア][黄金の林檎を巡つてのパリスの審判と多重の類似要素を帯びてのエデンの誘惑][ブラックホール類似要素]とひとところにて接合するありようから LHC 実験との接合性は指摘できるようになっている ——ミルトン『失樂園』に關しては[アトラス][アトランティス][トロイア崩壊をもたらした木製の馬の計略の考案者らを飲み込んだ渦潮の怪物カリブデイス]らをすべて[ブラックホール生成]に通ずるところの命名規則として用いている LHC 実験との接合性を指摘できるようになっている—— とのそのことが問題になる)

---

との各事項についての説明を終える。

以上、説明してきたことによつて、先述したところ、もう紙幅としてかなり離れての前のこととはなつてしまつてしまつているが先述したところの想定される反論のうち、

ii. 「[パリスの審判]と[エデンの園]の誘惑の方は確かに複合的なる接合性を呈して

いるようだが、ただし、パリスの審判での林檎が「誘惑者の取得目標物」であったのに対して、エデンの園の誘惑にての禁断の果実(林檎とも見られることがある果実)は「誘惑の具」となっているものである。「目標」と「手段」との差異があるところで同一性を問題視するのめどうかととれるところである」

とのことのみならず、

i. 「(蛇による不死の略取との側面が介在していても) [ギルガメシュ叙事詩] と [エデンからの追放の物語] はそれら全体が密接につながっているわけではない。であるから、両者の一部類似性を過度にピックアップして立論展開をなすのは良心的なやりようではない」

との批判に対してすら本稿がさらされるいわれがないこと、また、反対に本稿での指し示しの方向がそれだけ至当であること、当然に強調する次第でもある

さて、これ以降の段にあっては

「本稿の位置づけ上、極めて重要。」

と定置していること ([1] から [4] と振ってのことら) を順々に摘示していくため、一本稿筆者のことをやっつけてやろうとの批判的視座・批判的心境でもってしてもいいので— それらのことにつき、きちんと検討いただくこと、切に願いたい次第である。

[1]

先に本稿では

既にもってして本稿では【1999年初出作品であるにもかかわらず2001年9月11日とのそのものびしゃりの目付を僅か数秒のカットで登場させている作品】(日本では1999年「9月11日」に封切られている映画 The Matrix / DVD での秒単位での再生箇所の提示をなすとの式での容易なる確認方法は本書 p.477 を参照されたい) や【9とツインタワーを11 状に並べて911との数値を全く蓋然性なく(極めて不自然に) ツインタワー絡みで描出させている作品】(1997年に世に出ている The City of New York Vs. Homer Simpson / 本書 p.476 を参照されたい) や【片方が崩れ、片方の上階に風穴が開くとツインタワーを飛行機と描いている作品】(1993年に世に出ている映画 Super Mario Bros. / 容易なる予見描写確認方法を込みに本書 p.354 - p.356 を参照されたい) のことを紹介してきたわけだが、そうした【911の予見「的」事物】と比肩するところの【他例として露骨なもの「ら」】(いいだろうか、複数形である) がいかようにしてヘラクレス11 功業と結びつくのかについての解説を本稿の後の段(かなり後の段)で仔細になす。

「911の事件の予見描写といったありようを呈する要素を含む作品が存在しており、そこに「ヘラクレス第11番目の冒険」とのつながりが見てとれる」

とのことを申し述べ、「まずもっての一例として」原文引用をなしながら特定文物の「問題となる特性」について取り上げていた。

すなわち、——「[イルミナティ]などという言葉を目立って用いるとの陰謀論者には陋劣な輩が多いようであると手前は見ている」と申し述べたうえでのこととして——『ジ・イルミナタス・トリロジー』こと『イルミナティ三部作』という作品(語感的には「光をあたえられし者、イルミナタスの三部作」とでもなるう作品なのだが国内では「イルミナティ三部作」との呼称の方が通用化しているように見受けられる「表層面では、」もの荒唐無稽小説作品)、70年代に欧米で大ヒットを見、集英社から遅まきに邦訳版が2007年に刊行されたとの同小説作品が「文献的事実」の問題(字面として誰でもそうだと容易に確認できるようになっている記載事実の問題)として

「ニューヨークのマンハッタンのオフィスビル爆破」より話がはじまる(出典(Source)紹介の部37)、

クライマックスに向けて魔的封印を解くとの目的で「ペンタゴンの爆破・部分倒壊」が作中にて描かれる(出典(Source)紹介の部37-2)、

現実世界にての911以後の米軍炭疽菌漏洩事件(にあってのブルース・イビンズ容

疑者を巡る帰趨)のことを想起させるように「米軍科学者から漏出した炭疽菌改良株が大災厄をもたらしかねないとの状況に至った」ことが描かれる(出典(Source)紹介の部 37-3)、

同作スピンアウト・カードゲーム作品(スティーブ・ジャクソン・ゲームズ製の[カードゲーム・イルミナティ])が[崩されるツインタワー][爆破されて粉塵をあげるペンタゴン]とのイラストの持ち出ししているとの式で911の事前言及物であると問題視されている(出典(Source)紹介の部 37-4)、

[合衆国国防総省のペンタゴン(911の事件で攻撃対象とされたバージニア州アーリントンにある国防総省庁舎)の体現物と当該小説内作中それ自体で明示されている五角形]と[ニューヨーク体現物(911の事件で攻撃対象とされた地域)との判断がなせるようになっている黄金の林檎]を対面並置させての独特なるシンボリズム]が図示までされて作中にて「頻出」を見ている(出典(Source)紹介の部 37-5/マンハッタンにてのビル爆破およびペンタゴン爆破をモチーフにしている作品で[そういうこと]が見てとれる)

との各要素を伴っている——さらに述べれば、ペンタゴン爆破の時刻の時計時針との兼ね合いで911との数値のことが想起されるとのことがある、とのことや、作品付録部にて[9]と[11]との数値を想起させる言いまわしが不自然なかたちで用いられているとのこと「も」ある——との意味で

[911の予見的描写を含んだ小説作品](はっきり述べて、911の事件発生的事前言及作品でもいい)

とあいなっていることを論じていた。

(:ちなみに『ジ・イルミナタス・トリロジー』という作品に関しては次のようなかたちで[海外での反響呈し度合いについての概括の弁]がなされるような作品「とも」なっていることを先立っての段で紹介していた⇒(以下、集英社より遅まきに—原著が出たのが70年代だったところを2007年まで邦訳されなかったとの意味合いで遅まきに—四分冊で邦訳・刊行されたとの文庫版『イルミナティI ピラミッドからのぞく目(下巻)』284ページにあつての同作邦訳版訳業に携わった邦訳者の作品に対する解説を引くとして)“あの幻の伝奇小説の古典 ILLUMINATUS!の刊行をとうとうスタートすることができました。…(中略)…といっても、多くの読者のみなさんには、これがどれほど大変な事件なのかおわかりいただけないかもしれません。…(中略)…ロバート・アントン・ウィルソンとロバート・シェイの二人がアメリカのデルという出版社から三部作として発表し、たちまち百万部のベストセラーとなり、全世界でカルト的人気を博した、究極の陰謀小説ともいわれ、多くの流行語まで生み出した大傑作なのです。そればかりではなく、ミュージカルになり、大きな賞をとる傑作ゲームになり、ロックのさまざまな名曲を生み出し、いかがわしい秘密結社を描くトンデモ本の大流行まで招いた、一つの社会現象になった作品です”(引用部はここまでとする)。

以上のような伝で反響呈し度合いが指摘される小説作品ではあるが、さはさりながら、[イルミナティ]などという陰謀「論」者が好むワードを表題に含む作品であるために本稿筆者としては次のような断り書きを先立っての段でなしていたとのことも申し述べておく⇒(restating) **Although this long paper deals with [ foretelling problems ] which are related with masonic symbolic system deeply , I don't cling to point of view that such organizations as Freemasonry (or "legendary" Illuminati) are chief conspirators behind**



significant incidents. As an author of this evidence-based paper, I never intend to maintain "self-belief-system" avoiding the sterile land of conspiracy theorists who persist in conspiracy "theories" such as [ NWO conspiracy theory ], [ Illuminati (that organisation can't be identified exactly) conspiracy theory ] or [(fictional?) power obsessed human elite circle conspiracy theory]. 「長くもなるとの本稿にあっては[フリーメイソンのシンボル体系と濃厚に接合する「前言」事物]らがあまりにも露骨に多数存在しているとの問題についても取り扱うが(具体的事例を多数挙げながらも取り扱うが)、だが、だからと言って、(本稿それ自体にて)フリーメイソンのような組織体が重要な出来事の背後背面に控えるフィクサーとしての陰謀団であるとの見立てを押し売りしたいわけではない。フリーメイソンのシンボリズムを異常異様なることに流用する力学があるとは具体的事実を挙げ連ねて指摘なすが、チェス盤上の駒が陰謀の立役者であるなどとは考えていないし、そのようなことを目立って訴求するつもりもない。またもってして筆者は陰謀論者よろしく[新世界秩序陰謀論][イルミナティ(という実体不明瞭なる組織体)に関連する陰謀論][「人間の」権力それ自体に固執するエリート・サークル(架空存在たりうる)による陰謀論]に固執するような人間でもない」。

いちいち以上のことを再度申し述べたうえで強調しておくが、「問題となるのは、」どぎつい小説のどぎつい内容それ自体ではなく[客観的に見受けられる記号論的特性およびそれら記号論的特性に伴う[予見性]との意での不可解性]である)

本稿にての先立っての段では小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』作中にて頻繁に言及されて重んじられている——図示なされながら頻繁に言及され、かつ、小説副題にもされている——との[黄金の林檎]が伝承上は[ヘラクレス第11番目の目的物]となっているとのことがあるために同小説作品が

### 〔911の予見的描写を含んだ作品〕にして〔ヘラクレス第11番目の功業と際立って結びつく作品〕の一例たるもの

であろうと述べていた(それについては本稿にての先立っての段では「[911の予見的描写を含んだ作品]であり、なおかつ、[ヘラクレス第11番目の功業と際立って結びつく作品]とのものらについて他例を本稿の後の段で挙げる」とも申し述べており、同じくものことに関してはよりもって露骨なるもの「ら」について後の段で入念に解説していく所存であると申し述べてきた)。

さて、表記の小説作品にてその作中、図像化されながらも登場してくる[黄金の林檎]、

[ペンタゴンと並列描写されている黄金の林檎]

については(作品それ自体にはその旨への明示的言及が「ない」のであるが)[ニューヨークの質的仮託物]となっていると—単線的な事由だけからではなく—さまざまな事情の複合顧慮にて述べられるようになっているとのことがあり、その点についても本稿では(部分的なるものながらも)かなり込み入った解説を—基本的情報を補いながらも—なしもしていた(：[出典\(Source\)紹介の部 37-5](#)を包摂する部を参照のこと。尚、同じくものことについては本稿にての後半部にあってもくどくもの解説をなす所存である)。

そうした、

〔911の前言小説にしてヘラクレスの第11番目の冒険(に登場の黄金の林檎)に係る作品〕

にても



## [古代アトランティスに対する蛇人間が関与しての侵略]

との要素が（より以前のパルプ雑誌掲載小説『影の王国』内容や神秘主義体系を踏襲したからだとの説明が容易になせるところながら）作品モチーフとされているとのことがある。

同点についてもすでにもってしてページ数指定しての訳書および原著よりの原文引用を本稿の先の段にてなしているところである（疑わしきにあつては本稿の[出典\(Source\)紹介の部 38](#)の原文引用部を確認すればいい、また、さらに疑わしきにあつても該当文物、『ジ・イルミナタス・トリロジー』の訳書ら（『イルミナティI ピラミッドから覗く目(上・下巻)』『イルミナティII 黄金の林檎』『イルミナティIII リヴァイアサン襲来』との題名で集英社を版元としての文庫版として広くも流通しているとの訳書ら）との同じくものページ数指定引用部との比較検証をなすか、オンライン上より全文確認可能となっているとの原著英文テキストの内容（こちら先立っての段で原文引用なし）を確認すればいいだけである）。

# [2]

上の段にて『ジ・イルミナタス・トリロジー』が

[\[911の前言小説にして、その前言作品としての特質に関わるところでヘラクレス第11番目の功業に登場の黄金の林檎が重きをなしてくる作品\]](#)

かつ

[\[古代アトランティスに対する蛇人間が関与しての侵略との作中要素が見受けられる作品\]](#)

であることに(委細は先の段に譲るとのかたちで)再言及した。

その点、[ヘラクレス][蛇の種族]との観点で述べれば、

「ヘラクレスは[メデューサ殺しのペルセウスの子孫]にして[多頭の蛇の眷族を多数屠ってきた存在]と伝わっている存在となる」

とのことがある（:しかも因果は巡るとの式で[ヘラクレスが屠った蛇の眷属]には[エキドナという蛇女の眷属]の他に[ヘラクレス祖先ペルセウスが倒したメデューサの血族]であるとの神話的設定が採用されている化け物(ゲーリュオーン)も含まれているとのことがあり、また、メデューサをはじめとしたゴルゴーンら自体が——そちらは通説的理解ではないのだが——（ヘラクレスが多数そちら眷族を屠ってきたとの）[蛇女エキドナの眷族]であるとの見解もが呈されていたりする。要するにペルセウスとその子孫のヘラクレスは累代にわたって[同じくもの蛇の血脈の妖異ら]と死闘を演じていたとのことも神話的[設定]の問題として述べられるようになってきているとのことである）。

# SOURCE

## 63(4)



ここ出典(Source)紹介の部63(4)にあつては

[ペルセウスがメデューサ退治の英雄として知られていること]

[ヘラクレスがペルセウスの子孫と伝わっていること]

[ヘラクレスが多数の(多頭の)蛇の眷族を屠ってきた存在であると伝わっている存在であること]

について解説なしておくこととする。

### [ [ペルセウス] が [メデューサ退治] の英雄であることについて ]

ペルセウスがゴルゴン姉妹のメデューサを討伐したことは極めてよく知られた神話上のエピソードとなっている。については、ギリシャ古典——たとえば同じくもの伝承について記述しているとのヘシオドス『神統記』のような(現代語訳も流布されているとの)ギリシャ古典——の内容をいちいち挙げずとも和文および英文のウィキペディア[ペルセウス][アイギス]項目程度に載せられている記述を引くだけでも十分であろうと考えている。

(直下、(媒体性質より記載内容の変転を見る可能性もあるが)、和文ウィキペディア[ペルセウス]項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

---

ペルセウスはセリーポス島で成長したが、やがて、ディクテュスの兄でセリーポス島の領主であるポリュデクテースがダナエーに恋慕するようになり、邪魔になるペルセウスを遠ざけるためにゴルゴーンの一人メドゥーサの首を取ってくるように命じた。ペルセウスはアテーナーとヘルメースの助力を受け、アテーナーの楯、ヘルメースの翼のあるサンダル、ハーデースの隠れ兜などを身につけた。そして居場所を聞くためにゴルゴーンの妹であるグライアイ三姉妹の元に行った。彼女たちは生まれつき醜い老女で、三人でたった一つの眼と一本の歯しか持っていなかった。彼女たちが居場所を教えてくれないために、この眼と歯を奪って脅すことで無理やり聞き出した。そして死者の国の洞窟の

中でゴルゴーン姉妹を発見し、顔を見ないようにしながら剣でメドゥーサの首を取ることに成功した

---

(引用部はここまでとしておく ー※ー )

(※尚、同じくものことについてローマ時代のギリシャ人著述家アポロドーロスによってもものされたビブリオテーケー(BIBLIOTHEKE)、日本では『ギリシャ神話』と題名訳されての訳書が岩波書店より出されているとのギリシャ神話網羅的紹介著作では次のような表記がなされている。(以下、岩波文庫版『ギリシャ神話』(当方所持の岩波文庫版第61刷のもの)にての p.81 より引用なすとして) “ゴルゴーンたちはステノー、エウリュアレー、メドゥーサである。メドゥーサのみが不死でなかった。それゆえにペルセウスはこの女の首を取りにやられたのである。ゴルゴーンたちは竜の鱗でとり巻かれた頭を持ち、歯は猪のごとく大きく、手は青銅、翼は黄金で、その翼で彼女らは飛んだ。そして彼女たちは見た者を石に変じた。ペルセウスは彼女らが眠っている上に立ちふさがって、アテーナーに手を導かれ、面をそむけつつ、それによってゴルゴーンの姿を眺める青銅の楯の中を眺めながら、彼女の首を切った” (引用部はここまでとする)と表記されているところとなる)

(直下、(媒体性質より記載内容の変転を見る可能性もあるが)、和文ウィキペディア [アイギス] 項目 (ペルセウスがアテナより預かり受けた防具たる[アイギス]にまつわる項目)にての現行記載よりの引用をなすとして)

---

ペルセウスはメドゥーサの首を持ち帰る際、いくつかの局面(巨神アトラスに会った時、ケーペウス王の娘アンドロメダーを救出するために怪物を倒す時、アンドロメダーとの結婚の祝宴中に乱闘が発生した時など、ただしこれらについては諸説ある)においてメドゥーサの首を使って相手を石化させている。アテーナーはその首をアイギスに取り付けることで、アイギスをより優れた防具にしたという。なお、ペルセウスがメドゥーサを討伐する際、彼がメドゥーサの姿を見て石化するのを防ぐため、アテーナーはペルセウスに、青銅鏡のように輝く楯を貸した。ペルセウスは眠っているメドゥーサに忍び寄る時、楯を利用してメドゥーサの姿を直接見ることなく近づいたため、石化することなく首をはねることに成功した(近づく時の方法は、楯を通してメドゥーサを見ながらだとも、楯の表面に映るメドゥーサを見ながらだとも、それ以外の方法だったとも言われる)。この時に使われる楯がアイギスだと言われることもある。

---

(引用部はここまでとしておく)

[ [ヘラクレス] が [ペルセウス] の子孫(曾孫)であると伝わっていることについて ]

ヘラクレスがペルセウスの子孫であるとされていることについてだが、そちらもすぐもって確認できるようなこと、かつ、異伝異聞の類も介在しないようなことであるので通俗的解説媒体よりの引用をなすとの式をとることとする。

(直下、(媒体性質より記載内容の変転を見る可能性もあるが)、目に付くところの和文ウィキペディア [ヘラクレス] 項目、同項目にての [ヘーラクレスの生い立ち] と付されての節にての現行記載よりのワンセンテンス引用をなすとして)

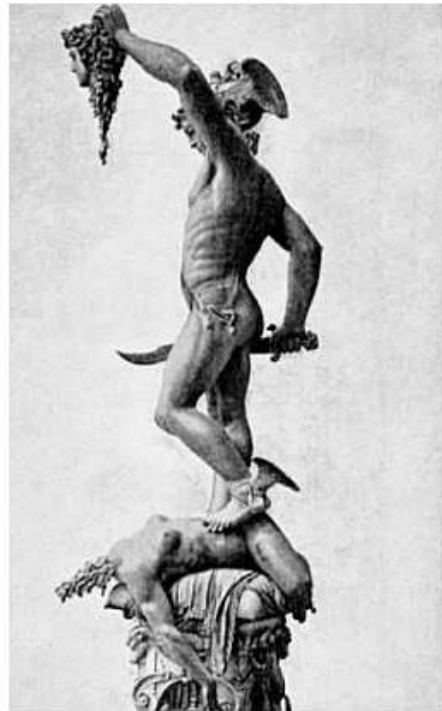
---

「ヘーラクレスはゼウスとアルクメーネー (ペルセウスの孫にあたる) の子。」

---

(引用部はここまでとする —※— )

(※直上、目に付きやすき媒体たるウィキペディアより一文のみ引きもしたところに見るようにヘラクレスの母である[アルクメーネー]には[ペルセウスの子たるミュケナイ王エーレクトリュオーンの娘(ペルセウスの孫)]としての由来があり、調べてみれば、ヘラクレスが[ペルセウスの曾孫]であると伝わっていることが[文献的事実]となっている——そういう記述が文献にて認められるということが事実である——との点につき、すぐに理解いただけるであろう——につき、「ウィキペディアなどよりはいまひとつましである」との媒体、有為転変しないものとしての当代ならぬ先代の識者らの手になる不変なる申しようを確かめるうえで有意義なる Project Gutenberg にて全文公開されているとの著作より申しようを引けば、である。たとえば、“ **The Myths and Legends of Ancient Greece and Rome** との著作にあつて **Heracles, the most renowned hero of antiquity, was the son of Zeus and Alceme, and the great grandson of Perseus.** ” (訳として) 「ヘラクレス、古代にて最も名を馳せし同英雄はゼウスとアルクメネの息子、そして、ペルセウスの曾孫である」といった記載がなされていたりすることもその気があれば、オンライン上より同定できるところとなっている(ここにの引用元著作や引用テキストをそのまま検索エンジンにて検索するなどのこともその範疇に入る)。ちなみに英文 Wikipedia[Heracles] 項目にては「現行」、 “ Heracles (/ˈherəkliːz/ HERR-ə-kleez; Ancient Greek: Ἡρακλῆς, Hēraklēs, from Hēra, "Hera", and kleos, "glory") (Illyrian or Albanian: Herakliu), born Alcaeus (Ἀλκαῖος, Alkaios) or Alcides (Ἀλκείδης, Alkeidēs), was a divine hero in Greek mythology, the son of Zeus and Alceme, foster son of Amphitryon and great-grandson (and half-brother) of Perseus. ” (訳として) 「 [ヘー神 Hera の栄光 Kleos; glory] との語義を有するヘラクレスは[アルカイオス]あるいは[アルキデス(アルケイデス)]との名で当初生を受けたとのギリシャ神話上の神性を帯びた英雄となり、ゼウス神とアルクメネの息子にして アムピトリュオーンの養子、そして、ペルセウスの曾孫(にして異母兄弟)となる存在である」(訳はここまでとする)とヘラクレスが[ペルセウスの曾孫]にあたるだけではなくゼウスを共通の父とする [ペルセウスの異母兄弟]にあたることへの言及もが現行なされている( **great-grandson (and half-brother) of Perseus** とあるのはヘラクレスの父親もペルセウスの父親も不死なる存在、ゼウス神であるとの神話的設定が存在していることによる)—— )



## Perseus & Medusa

上はペルセウスがメデューサの首を切り取ったとの瞬間を写實的に具現化したとのことでよく知られるルネサンス期 16 世紀(1554 年)の作品、  
[ベンヴェヌート・チェッリーニ ( Benvenuto Cellini ) の手になるフィレンツェ



在のシニョリーア回廊に据え置かれているペルセウス像]

を写し取った写真よりの抜粋をなしたものである(:抜粋元は左の段のそれが Project Gutenberg にて著作権喪失著作としてパブリックドメイン化、全文公開されているとの **Stories of Old Greece and Rome(1913)**との著作、右の段が同文に Project Gutenberg にて公開されているとの **Myths of Greece and Rome(1921)**との著作となる)。

芸術作品のモチーフに歴年なされてきたように[ヘラクレスの曾祖父たるペルセウス]に由来する[多頭の蛇の頭髪を持つメデューサの退治]は極めて有名な伝承上のエピソードである。

### [「ヘラクレス」が「蛇の血族の怪物」を屠ってきた存在(多くの多頭の蛇の眷属を屠ってきた存在)であることについて]

ヘラクレスが多数の蛇の眷属の怪物を屠ってきたことについては以下のウィキペディア項目をもってしても容易に確認できる。

[和文および英文のウィキペディアにあつての[エキドナ]項目]

上項目にあつてはエキドナが上半身美女、下半身蛇の蛇女である——要するに蛇女たる彼女の子供は蛇の血族とのことになる——との記述がなされている。そして、同[エキドナ]項目では和文・英文版ともに

[エキドナの子供達]

が一覧表記されており、そこにて一覧表記されている怪物たちの内、

[ケルベロス](ヘラクレス第12番目の功業にて冥界から地上に引きづり出された存在。尾が「蛇」の三つの頭を持つ冥界の番犬)

[ラードーン](ヘラクレス第11番目の功業にて討伐された存在。黄金の林檎の園の番人たる百の頭を持つ怪竜ないし怪蛇)

[オルトロス](ヘラクレス第10番目の冒険にて大洋の先の島にて討伐された怪物。尾が「蛇」の双頭の犬の怪物)

[ヒュドラ](ヘラクレス第2の功業で討伐された9つの頭を持つ多頭の怪蛇)

[ネメアの獅子](ヘラクレスの第1番目の功業にてヘラクレスに討伐されてその皮を剥がれた存在。獅子だが、蛇女エキドナの息子とされる)

がヘラクレスの12功業の中で討伐されているエキドナ血脈として知られている。

(⇒上記怪物らが表記のヘラクレス各功業にて討伐されている[エキドナの血筋]であることはオンライン上の諸種媒体で「容易に」確認できるようになっている。

それにつき、さらに一歩進んでの話として、

[ヘラクレスの「蛇の眷属」の退治についての[古典]としての解説文書]

にも言及しておくが、そちらについては例えば、

[ヘラクレスの12功業関連の伝承を含むヘラクレス事績]

についてまとめたの表記をなしているとのローマ期古典、——本稿で先に(出典(Source)紹介の部39との段で)挙げているとの著作ともなるが——ローマ期ギリシャ人著述家アポロドーロスの著作たるビブリオテーケー、岩波文庫から広く流通しての邦訳版が出されている『ギリシャ神話』の第二巻(のVと振られた部)などが容易かつ廉価

にて入手できる裏付け資料となるようなものとして挙げられる（当方手元にある版のアポロドーロス『ギリシャ神話』文庫バージョンで 89 ページから 102 ページがヘラクレス 12 功業を論じた該当頁となる —— につき表記のアポロドーロス『ギリシャ神話』該当頁内では [ネメアの獅子] が [ティポーン(足が蛇であるとの怪物)の子] であること、[オルトロス] が [エキドナの子] であること、[百頭竜(ラードーン)] が [エキドナの子] であることなどが一言のみだが言及されている—— )。

また、和文 Wikipedia ではなく現行英文 Wikipedia[Echidna] 項目の方にあつては(ヘラクレスに皮を剥がれてヘラクレス防具へと転用されることとなった)存在たる [ネメアのライオン] がエキドナの子であるとの表記はなされていないが、それでも確かにネメアの獅子は(獅子であるのにもかかわらず)蛇女エキドナの子供であると伝わっている。例えば、メジャー所の出典としてはヘシオドス、極めて著名な同ギリシャの著述家の遺した Theogony『神統記』でもそうした記述が認められる。

同点、ネメアの獅子が獅子ながらエキドナの子であるとされていることについては Project Gutenberg や Internet Archive のサイトにて著作権喪失を見たものとして公開されている、すなわち、誰でも全文ダウンロードできるようになっているとの Evelyn White という人物が訳を付している THE WORKS OF HESIOD と付されての流通版 THEOGONY『神統記』の 20 世紀初頭英訳版、その中の記述として(直下、流布版 Theogony『神統記』より原文引用なすところとして)

“ Echidna was subject in love to Orthus and brought forth the deadly Sphinx which destroyed the Cadmeans, and the Nemean lion, which Hera, the good wife of Zeus, brought up and made to haunt the hills of Nemea, a plague to men. ” (訳として)「エキドナはオルトロス(エキドナの子でケルベロスの弟)との恋愛感情に浸り、Cadmeans(オイデュプス王がスフィンクスと対峙したテーバイの地のこと)を破壊したとの有害無比なるスフィンクスを生み出し、ゼウスの良き伴侶であったとのヘラが養育なしたうえでネメアの丘陵部に放ち人間にとり疫病神となったとのネメアの獅子を産みだした」(引用部はここまでとする)

と記載されているようなことがある —— とすると、ヘラクレスは[蛇女の子たるネメアの獅子]の毛皮をかぶって戦いを繰り返していたことになる—— )。

また、  
[ペルセウスに退治されてのメデューサ(よく言われるところではポセイドンの恋愛対象が変じての怪物)を含むゴルゴン]  
らもがエキドナの子であるとの [異聞・異説( different view )の類] があるとのことも知られる。

についてはローマ期に成立したとの『神話集』(Fabulae) という著作、ガイウス・ユリウス・ヒュギーヌス(Hyginus)という人物の手になる著作に実際にそういう記載があることが知られている。英文 Wikipedia[Echidna] 項目にてのエキドナ子息一覧にて The Gorgon - According to Hyginus, the Gorgons are the children of Echidna. と現行記載されているのはそちら受けてのこととなり、そういう [異説] をしてそれが [異説] ではないように語り継いでいるとの文物も 19 世紀、近代以後の欧米圏にあつても流通していた —— 例えば、筆者が捕捉しているところとしては Project Gutenberg のサイトにて公開されている **1000 Mythological Characters Briefly Described** との著作(『1000 なる神話的存在の簡潔なる解説』とでも訳せよう著作/1895 年初出とも)にあつては “ Echidna (Echid'na). A woman having a serpent's tail. She was the reputed mother of Chimaera, and also of the many-headed dog Orthos, of the three-hundred-headed dragon of the Hesperides, of the Colchian dragon, of the Sphinx, of Cerberus, of Scylla, of the Gorgons, of the Lernaean Hydra, of the vulture that gnawed away the liver of Prometheus, and also of the Nemean lion; in fact, the mother of all adversity and tribulation. ” (訳として)「エキドナ、彼女は蛇の尾を持っていた女である。彼女エキド

ナはキメラ、多頭の犬オルトロス、三百の頭を持つヘスペリデスの園の竜（訳注：ラドンというそちら存在については[100の頭を持った竜・蛇の類]以外に300の頭を有した爬虫類との異説もあるようである）、コルクスの竜、スフィンクス、ケルベロス、スキュラ、「ゴルゴン」、レルネーのヒドラ、プロメテウスの肝臓を啄んでいた秃鷹ら、そして、ネメアの獅子らの母親と評されてきた存在、事実上のすべからくもの災厄・苦難の母親とされてきた存在である」（訳はここまでとする）と[ゴルゴン]もエキドナの子供であるように記載されている（ちなみに表記の19世紀初の引用元著作では[スキュラ]までもがエキドナの血族とされているが、スキュラという存在については一般には[ニンフが呪いにて変じた（エキドナ血族とは無縁なる）怪物]であると伝わっていることも一応、表記しておく――）。

さらにヘラクレスが誅伐したとされる蛇系統の「他の」怪異らとしては以下表記のような存在が伝わっていることについても労せずを確認できるようになっている。

[二匹の蛇]（ヘラクレスが生まれたての赤ん坊であった折にゼウス私生児であった彼を厭わしく思っていたゼウスの妻ヘラが彼を殺そうと送ったとの[二匹の蛇]、それらを赤ん坊ヘラクレスが怪力でくびり殺していたとの話は和文および英文のウィキペディア[ヘラクレス]項目にも現行、記載されているようによく知られた話となっている――要するにヘラクレスは人生の初めからして蛇殺しの存在であった――）

[ゲーリュオーン]（ヘラクレスの第10番目の功業にてエキドナ血族オルトロスと共に殺害されたのが同ゲーリュオーンとなるのだが、[三人の男がシャム双生児のようにつながったとの似姿]、およそ蛇とは無関係ともとれる格好で描写される存在ながらも、同ゲーリュオーンについては[メデューサの孫]であると伝わっている――和文ウィキペディア[ゲーリュオーン]項目にてもアポロドーロスの『ギリシャ神話』（当方所持の岩波文庫版（第六一刷との重版に重版が重ねられてのもの）では98ページ）にもゲーリュオーンが[クリュサオールの子供]であると表記されている。そこに書かれている[クリュサオール]というのが[メデューサがペルセウスに殺されたその瞬間に生首から生まれ落ちとされる（黄金の剣を帯びての）妖異としてのポセイドンとメデューサの子]であると神話が語る存在となっている――英文 Wikipedia[Chrysaor]項目にて “In Greek mythology, Chrysaor (Greek: Χρυσάωρ, Khrusaōr; English translation: "He who has a golden armament"), the brother of the winged horse Pegasus, was often depicted as a young man, the son of Poseidon and Medusa. Chrysaor and Pegasus were not born until Perseus chopped off Medusa's head. [...] Chrysaor, married to Callirrhoe, daughter of glorious Oceanus, was father to the triple-headed Geryon,”と記載されているとおりの言い伝えの伝がある―― ために、ゲーリュオーンは[メデューサの孫]ということになる）

[ギガース]（ギガース・ギガンティスらはヘラクレスが計12の功業をすべて終えた後にゼウスに召集された戦った一大決戦、オリンポスの神々とガイア（大地母神）の子供である巨人らの一大決戦（ギガントマキア）の相手方としての[下半身竜・蛇の存在]となる（単数形はギガース、複数形はギガンティス）。同点については和文ウィキペディア[ギガントマキア]項目（あるいは英文 Wikipedia[Giant]項目にての現行にての Gigantomachy の節）より確認できるが、さらにすすんでの出典紹介もなしておくこととする。その点、国内にても広く流通を見ているアポロドーロス『ギリシャ神話』（岩波文庫版）、第61刷との重版に重版が重ねられての当方所持の版の同著 p.36 ページから p.38 ページには次のような記載がなされている：（以下、アポロドーロス『ギリシャ神話』より掻い摘まんでの引用をなすところとして）“大地（ゲー）はティーターンたちのために憤って天空（ウーラノス）によって巨人（ギガース）たちを生んだ。身体の巨大なことでは彼らを凌駕するものではなく、力においては無敵、姿は見るも恐ろしく、頭と顎より濃い毛を生やし、足は竜の鱗よりなっていた。…（中略）…神々に対して、巨人たちはいずれ

も神々によっては滅ぼされ得ないが、誰か人間が味方となれば退治されるという予言があった。大地(ゲー)はこれを知り、人間の手によっても滅ぼされ得ないようにするために薬草を求めていた。しかしゼウスは曙と月と太陽とに現れることを禁じ、薬草を自ら機先を制して切り取り、ヘーラクレースをアテーナーを通じて味方に招いた。…(中略)…ゼウスが雷霆を投じ、ヘーラクレースは矢で射て彼を殺した。残余の巨人どものうちエピアルテースの左眼をアポローンが、右眼をヘーラクレースが射た”(引用部はここまでとする)。以上、引用なしのようにヘラクレースは[ネメアの獅子]や[ヒドラ]や[オルトロス]や[ラドン]や[ケルベロス]といった[蛇女エキドナの血族]を誅伐していた12功業を終えた後も[蛇(竜)との属性を帯びての巨人達](ギガンティスら)と死闘を繰り広げていたと伝わっている存在となっているわけである)

ここまでの内容からお分かりいただけていることか、と思うが、古今東西にあつてヘラクレース程、蛇の妖異の眷属を殺した神話上の英雄は「いない」とのありようになっている(少なくとも古今東西の神話について網羅的な検討をなしているとのこの身の知る限りではそうである)。

まとめれば、

[ケルベロス] (蛇女エキドナ子息)

[ラードーン] (蛇女エキドナ子息、百頭竜こと百の頭を持つ大蛇 ——ギリシャ神話に見る[竜]は欧州中世以降図形化されてきたドラゴン状の存在ではなく、大蛇としての側面強き存在であるとのことに通ずる話も先になしている—— )

[オルトロス] (蛇女エキドナ子息、ケルベロスの弟)

[ヒュドラ] (蛇女エキドナ子息、九つの頭を持つ蛇)

[ネメアの獅子] (蛇女エキドナ子息)

[二匹の蛇] (ヘラクレースが赤ん坊の時に殺傷したヘラクレース憎しのヘラ神から送られた刺客)

[ゲーリュオーン] (メデューサの孫)

[ギガスら] (下半身竜・蛇の大地母神の子としての巨人ら)

らがヘラクレースによって殺された蛇の眷属たちとして挙げられる。



幼少のみぎりよりヘラに送られたとの蛇を殺していたとのヘラクレース、そのありようを具

現代化したとの彫刻を収めた写真(ソースは Project Gutenberg にて公開されているとの前世紀初頭の著作 **STORIES OF OLD GREECE AND ROME (1913)**)。同様の構図をテーマにした別の彫像、赤ん坊としての折より蛇をくびり殺していたとのヘラクレスを彫ったとの別の彫像が英文ウィキペディアなどにも掲載されていることに見受けられるようにヘラクレスは生まれてからギガントマキア(オリンポスの神々と巨人族ギガスの間の決戦)に参戦するまで「蛇の眷族の仇敵」としての位置付けを通貫して与えられていた神話上の存在である。

そうしたヘラクレス、その死もまた蛇の眷族との縁が仇になって引き起こされたとの存在となり、愛用の矢の鏃(やじり)に塗って用いていたとの  
[ヒドラの毒]

で殺されることになったと伝わっている存在でもある。すなわち、その妻デーイアネイラが性質悪きケンタウロスに夫婦仲回復の薬であると騙されて同男下着に塗りつけた[ヒドラの毒]によって皮膚焼け爛れての状況の中で苦しみ悶え、自らの殺傷を請うて死んでいったとの最期が伝わっている存在がヘラクレスとなる(そのこともウィキペディアなどに記載されているよく知られた神話上の一エピソードである——ヘラクレスが自身が殺したヒドラ、その毒によって苦悶の死を迎えることになったとのことについては本稿のかなり後の段にあって細密を心がけての式で取り上げることとする。何故か。同じくもの神話上の一エピソードが[ブラックホール生成予見文物(際立っての予見文物)に相通ずる話]と「どういうわけなのか」純・記号論的にあいなっているとのことがあるからである——)。

(出典(Source)紹介の部 63(4)はここまでとする)

## [3]

先行するところの [1] の段にあっては

『ジ・イルミナタス・トリロジー』

という小説作品が

「ヘラクレスの 11 番目の冒険にてその取得対象となっていた「黄金の林檎」をペンタゴン表彰物とされる五角形シンボルと真向いから並置させてのシンボル、そちらを多用しているとの作品にして、なおかつもっての、911 の事件の発生にまつわる先覚的言及をなしているといった特性を帯びている作品」

「アトランティスに対する蛇の種族の種族の侵略をも筋立てとしている作品」

であるとのことを(よりもって従前の内容を振り返って)指摘した。

以上のことをまとめもして、申し述べられること、

[「黄金の林檎」と濃厚に結びつき、また、「アトランティスに対する蛇の係累の侵略」との内容を有している作品が 911 の前言作品ともなっているとの側面が垣間見れる]

とのことはおよそ無視していいようなことではない(そうしたものだからこそ[強調なしての意思表示の問題]がより強く観念される、でもいい)。



同じくものはこれまた同文に本稿の従前にての摘示事項に基づいて指し示せるところとしての直下、呈示の

[ $\alpha$  (alpha)] [ $\beta$  (beta)] [ $\gamma$  (gamma)] [ $\delta$  (delta)] [ $\epsilon$  (epsilon)] (とのギリシャ文字) を頭に振ってのことら)

との兼ね合いでおおよそ無視していいようなことではないのである。

(以下、[1] から [4] と振っての一連の流れの中にあつての [3] の部をさらに  $\alpha$  から  $\epsilon$  と区切って細分化表記するとして)

$\alpha$

→

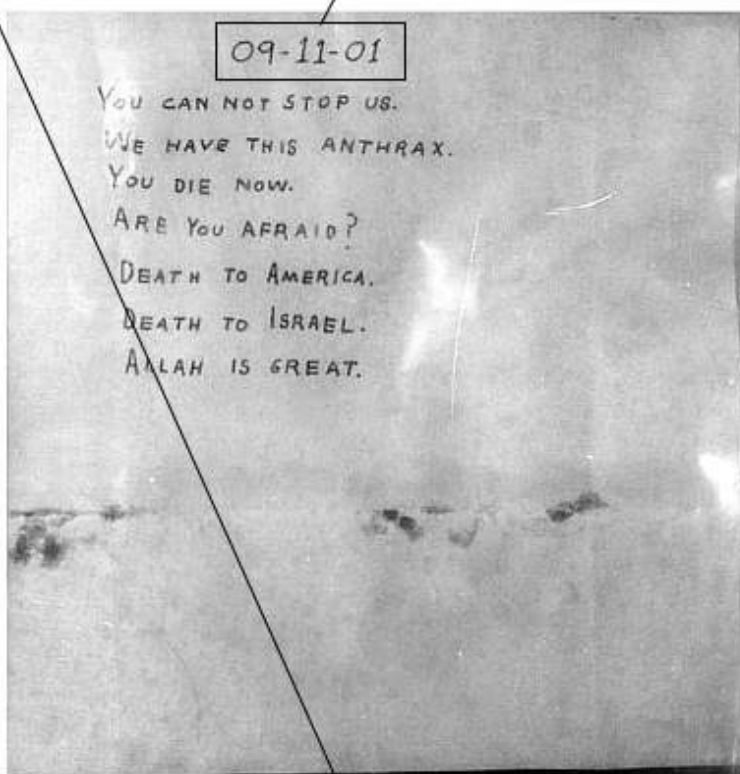
本稿の先の段にては物理学者キップ・ソーン ( Kip Thorne ) の極めて有名な思索、  
[通過可能なワームホール]  
について取り扱ったものとして極めて有名な思索に対する解説を含む著作たる **BLACK HOLES&TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』** にあつて[911 の前言]と解される要素が「多重的」に含まれているとのあると「具体的典拠にのみ基づいて」指摘していた —— (その点、[荒唐無稽陰謀論取扱い小説]との体裁を「表向き」とるものながら、ヘラクレスの 11 番目の冒険の目的物たる黄金の林檎を 911 の事件の前言と解される部にて用いているとの意で存在自体が奇怪なる一品となっているところの先述の小説作品、『ジ・イルミナタス・トリロジー』がそうであるようにキップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にも記号論的かつ客観的に指し示せるところとして多重的に [911 の事件の前言作品としての側面] が含まれていることを先立つ段にて問題視していたとのことがある (※下にての復習としての解説部を参照のこと) ) —— ]

(※『どうしてそういうことが?』の問題(原因・機序の問題)については扱うことはなさずにながら、「後追い容易なように、」と) ページ数指定なしながらも原文引用を通じての出典明示にひたすらに注力してきたところとして本稿ではキップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』の訳書及び原著にあつて[911 の事件]との絡みで何がどう問題となるのか、  
[以下のことら]

につき事細かに指し示してきたとの経緯がある ( : 細かくは本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 28](#), [出典 \(Source\) 紹介の部 28-2](#), [出典 \(Source\) 紹介の部 28-3](#), [出典 \(Source\) 紹介の部 31](#), [出典 \(Source\) 紹介の部 31-2](#), [出典 \(Source\) 紹介の部 32](#), [出典 \(Source\) 紹介の部 32-2](#), [出典 \(Source\) 紹介の部 33](#), [出典 \(Source\) 紹介の部 33-2](#) の内容を参照いただきたい )

[原著は1994年に刊行を見、邦訳版は1997年に刊行を見たとのキップ・ソーン著書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(邦訳版版元は白揚社)という著作にあっては[仮説]を支えるための[机上のシュミレーション(思考実験)]が「目立って911の事件とつながるような数値および意味上の規則を伴って」持ち出されているとのことがある。につき、まずもって述べれば、物理学者キップ・ソーンとその妻が「郵便番号91101」(こちら91101という数値は20「01」年「9」月「11」日を米国にてのIDカード日付表示などにて911/01とのかたちで指し示す日付表記たりうるものでもある — (英文Wikipedia [Calendar date] 項目にて9「月」11「日」(20)01「年」表記に通ずる Gregorian, month-day-year [グレゴリウス方式: 月: 日: 年] とのフォーマットについて This sequence is used primarily in the United States. 「こちら ([月] [日] [年] の順番での) 日付表記法は主として合衆国にて用いられるものである」と記載されているようなところとしてそうもなっている —)、すなわち、米国郵便番号に該当するZIPコードが91101ではじまる地域で[「双子のパラドックス」に依拠したワームホール型タイムマシン生成挙動]を開始したとの思考実験(現時点での人類文明にあっての実現不可能技術を前提にしての思考実験)が同著にあって登場を見ているとのことがある。そちら思考実験につき、問題と見えるポイントは[双子]との言葉を含む[双子のパラドックス]と結びつく思考実験を「91101」というかの事件、[双子の塔が崩壊させられたかの事件]を想起させる郵便番号の地番ではじまる地域(英語圏表記で01年9月11日の略記数値列でもある91101で郵便番号がはじまるパサデナ)を「始発点として」実施しているとのことである]

Second anthrax note



(From Wikimedia Commons)

炭疽菌テロの容疑者 (suspect) としてのBruce Ivins 容疑者が書いたとされる犯行声明書(英文 Wikipedia掲載のものよりの転載)。同犯行声明文については(本稿の後半部にて意図して)後にも問題視する所存だが、ここで注目いただきたいのは犯行声明文に見る「91101」というナンバー、米国記述式で2001年9月11日を指すものとして用いられているとの同ナンバーがパサデナという地区のジップコード(郵便番号)の開始番号となっていることに「こだわらざるをえぬ」との奇怪な相関関係が現出していることである。

[上にて表記の BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』に認められる[ソーンが郵便番号91101ではじまる一面(Pasadena)にてなしはじめたとの設定のシュミレーション(思考実験)]にあってその原理が利用されている「双子の」パラドックスというものだが、その提唱年は前世紀初頭「911」年であると一般に認知されている(出典も無論、先に挙げている)。それにつき「問題となるのは、」(「それなくしてはキップ・ソーン著作に見る表記の思考実験、すなわち、[ソーンが郵便番号91101ではじまる一面にてなしはじめたとのシュミレーション(思考実験)]が語れないとの按配になっている)そちら[「双子の」パラドックス]の提唱年が「911」年であることより「双子の」塔が崩された日付(9月11日という日付)が想起されもするということである]



[ソーンは自著『ブラックホールと時空の歪み』にて[「双子の」パラドックス]にまつわるシミュレーション、[パサデナにて「空間軸上の」始点を置くワームホールタイムマシン生成挙動]たるシミュレーションに言及する前に「また別の」思考実験、[パサデナを走行する自動車の上で爆竹を順次爆発させるとの設定の思考実験]を——双子のパラドックス(上述のように1911年に提唱された概念)に通ずる時間の相対性の説明との絡みで——引き合いに出すとのことをなしている。そこにいる他の思考実験にあって「も」認められる[パサデナ]とは(繰り返すが)郵便番号「91101」が最も若い番号(地区にての筆頭郵便番号)として割り振られている一画となる。であるから、[通過可能なワームホール]にまつわる思考実験の議論の前提として持ち出されている思考実験からして[「双子の」パラドックス(「1911」年提唱)]、[パサデナ(空間軸上の開始ポイントで郵便番号にして91101から地番表記されているとの一画)]、[(車上)爆竹の「順次」起爆 firecrackers detonation]との観点で二〇〇一年九月一日に起こったツインタワー崩落事件(「時間差を呈して」崩落したツインタワー以外に計七棟のビル群がワールド・トレード・センターにて崩れ去った事件)のことを想起させるとのことがある]

[先述のように(ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』にあっての)パサデナを始点とする——郵便番号91101ではじまる地域区画を始点とする——シミュレーション(思考実験)は[双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成挙動]として言及されているものであるが、同じくものソーン著作(原著1994年刊行)ではその思考実験開始年次につき[2000年1月1日午前9時]との明示がなされている(：ややこしいととらえられるところだろうが、1994年に刊行の書籍の中で双子のパラドックス(1911年提唱)を応用しての思考実験がパサデナ(地番91101ではじまる地区)を「空間軸上の」始発点にし、なおかつ、2000年1月1日9時を「時間軸上の」始発点として開始されたとの設定が採用されているわけである)。その開始年次、2000年1月1日午前9時につき時間の単位として若い順番、[時刻→日付→年次]との順番で配置するとの一般的で「はない」方法で並べかえすと「9」「1」「1」「2000」とのかたちとあいなるものである。かの911の事件の発生時(「9」「1」「1」「2000」と差分が1年しかない日付け表記を意識させる数値が出てくる——それ単体だけについて述べれば、牽強付会(こじつけがましき論法)と見做されかねないだろうが、ソーン著書の兼ね合いでは[パサデナ郵便番号問題][双子のパラドックスにまつわる意味的問題]が全く同じところで問題となっていることに留意すべきである——]

[直近にて言及のようにソーン著書『ブラックホールと時空の歪み』にて取り上げられる[双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成挙動]の開始時期は2000年「1月1日午前9時」であるとされているわけだが、2000年という時期は[2000年紀のはじまり](ニュー・ミレニアムの開始時期)として[2001年]と混同されるとの一般的理解が存し、その点について扱った科学読み本——チャールズ・サイフェ Zero: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』——よりの引用も本稿の先の段でなしているとのことがある。そして、その2000年に原著が刊行されたその問題となる他著作、2000年と2001年という年度が[どちらがニュー・ミレニアムの始点か]との観点で混同されているとのことに言及しているとの著作——チャールズ・サイフェ『異端の数ゼロ』——からして911の事件が発生する前よりブラックホールとの言葉を[グランド・ゼロ]と結びつけているとのことをなしているとの著作となり、また、キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み』に挿絵提供しているのと同様のイラストレーターの手になる独特な画風のイラストレーションを[通過可能なワームホール絡みの図像]として挙げているとの著作とすらなっている(であるからあまりにもできすぎている)。その点も加味して、キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』の時間の単位を若い順に挙げての「9」「1」「1」「2000」とのワームホール・ゲート構築開始時期は「9」「1」「1」「2001」と混同されるものとしての重み付けをなすべきである——片方で「9」「1」「1」「2000」と結びつく日付け表示がなされているかと思えば、それと同じイラストレーターの手による挿絵を[同じくものトピック]にまつわる挿絵(通過可能なワームホールにまつわる挿絵)として採用しているとのもう一方の他の著作が「2000年と2001年のニュー・ミレニアム始点としての差分は曖昧模糊としている」とのことを述べている著作であるとのこと、その意味を重んずべきである——]

まとめれば、

「問題となる1994年初出の(幅広く流通しての書籍化を見ている)科学解説書  
BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと  
時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』では

[通過可能なワームホール; traversable wormhole]

にまつわる思考実験が掲載を見ており、まさしくものそちら思考実験にあつての「空間軸上の始点となるポイント」、そして、「時間軸上の始点となるポイント」、その双方で「先に発生した911の事件を想起させる数値規則」が用いられており、かつまた、そちら思考実験で用いられるメカニズムからして「『1911年に提唱された』双子のパラドックス」、要するに、「911と双子を連想させるもの」となっている。だけではない。そちら思考実験、[通過可能なワームホール]にまつわる思考実験のことが叙述される前の段で同じくもの1994年初出の著作『ブラックホールのと時空の歪み』にあつては他の思考実験のことが挙げられており、その実験(通過可能なワームホールのタイムマシン化に向けての応用の前提となる[時間の相対性]のことを説明するために挙げられている思考実験)からして[空間軸上の始発点]を[地番スタート番号との兼ね合いで911と結びつく地域]に置いており、また、同実験、[時間差爆発]を取り扱っているものともなる(「911との数値」と「時間差爆発」との兼ね合いでかの911の事件を想起させもする)。

加えて、である。そうした思考実験らを掲載している著作とまったく同じテーマ(通過可能なワームホール)をまったく同じイラストレーターになるところとして扱っている「他の」著作 Zero: The Biography of a Dangerous Idea 『異端の数ゼロ』からして[911の事件とブラックホールの繋がり合い]を想起させるものとなつてもいる(2001年に911の事件が発生する前、2000年に世に出た「他の」著作からしてそうしたものとなつている) 」

とのことがある、「現実に」ある (以上、冗談のように聞こえるかもしれないが、すべて「文献的事実「のみ」より導き出せるところ」の特性について客観的に述べられる点らを摘示しているにすぎない。その点につき細かくは本稿の先の段の内容を印刷していただくなどして腰を据えての形にて検討なしていただければ、難なくお分かりいただけることか、と思う)。

さて、上のことが ——(本稿にての先の段にての[オンライン上よりも容易に裏取りできると式での原文引用に(確認いただきたい)も)力点を置いている部]より)—— [事実]であると確認された場合には、である。「それ自体は論拠を抜きにして語れば、正気を疑われるような奇矯なることとなるも、」の表記のことが「現実に存在している」とのことについて、何がどう前言事象となるのか、そして、そのこととの絡みで何がどう問題になるのかは「当然に」お分かりいただけようか、とも思う(少なくとも[正気の人間]を想定した場合には、である)。

(上の段でのキップ・ソーン著作にまつわる復習を経てのこととして、問題としたきことらの箇条表記を続け)

## β

→

キップ・ソーン著書『ブラックホールと時空の歪み』は他の時空間との結節路となりもするとされるワームホールを人工物として構築、その生成ワームホールの通過可能性を問題視するとのものであるが、同様のこと、[時空間の接合]をよりフィクションがかつたもの、[他世界への扉]として登場させている作品として『スーパーマリオ魔界帝国の女神』という映画作品があり、同作がまたもつて[911の前言作品]となつているとのことがあり、なおかつ、[爬虫類の種族の異空間よりの浸潤]をテーマにしているものとなつているとのことがある(先に詳述していることである。[一九九三年にて上階に穴が開き

崩落していくツインタワーを描写するとの映画] (表記の映画) が予見映画となるとの申しように対していかようなる反論が呈示されえるか、そして、そのような反論にいかようなる再反論がなせるか、ということも含めて、である)。

Y

⇒

上の[β]の段にて言及した『スーパーマリオ魔界帝国の女神』は「爬虫類の異種族の侵略」をテーマとしている作品となるわけだが (『下らぬ話であろう』と人によっては笑われるかもしれないが、同点についても「問題となる要素を蔵する」特定映像作品にまつわる内容として細やかな言及を先になしている)、先の段で述べてもいるように「**加速器と(極めて間接的な式で)結びつく事物**」と「**爬虫類の異種族の侵出**」を一緒くたにして扱っているとのサブカルチャー作品らが(相当昔から)存在しており、ここにも「**奇怪な前言作品**」としての要素を見出すことができるとのことすらある。

その点、「**加速器と結びつく事物**」と「**爬虫類の異種族の侵出**」を一緒くたに描いている作品としてここまでには『フェッセンデンの宇宙』(1937年初出) および『スキズマトリックス』(1985年初出) というサイエンスフィクション小説らを挙げてきた (本稿のさらに後の段にあって『リアンの剣』という悪質さという意味で目を引く1950年代の作品のことも紹介する所存であるが、「ここまでの、」とのことであれば、「**加速器と結びつく事物**」と「**爬虫類の異種族の侵出**」を一緒くたに描いている作品として『フェッセンデンの宇宙』および『スキズマトリックス』のことを挙げてきた)。

復習を兼ねての再言及をなしておくが、まずもって前者 (『フェッセンデンの宇宙』) については1937年という時期に初出を見ていた作品であったにも関わらず10年以上後にあって実施されたカシミール効果測定実験(1948年実施)の「**動態**」と(そして重要なことに)「**結果**」に通底するとの行為、

「**二枚の金属プレートを向かい合わせて、結果、その間の[重力]を中和するとの行為**」

が「**宇宙創造挙動**」として描かれている作品となる(：[出典\(Source\)紹介の部 22](#)及び[出典\(Source\)紹介の部 22-2](#))。

その点、くだんのような式で宇宙創造が描かれている1937年初出のフィクションたる『フェッセンデンの宇宙』に対して1948年に実施されたカシミール効果測定実験とは

「**二枚の金属プレートを向かい合わせてその場にて通常の[重力作用]に逆行する[反重力]とでも称されるものを発生させる負のエネルギーの領域を発生させた実験**」

となる(：[出典\(Source\)紹介の部 23](#)を参照のこと —— ※それゆえに『フェッセンデンの宇宙』に認められる「**宇宙創造挙動**」と『フェッセンデンの宇宙』登場より10年以上も後に実施されてその結果が物議を醸した「**カシミール効果測定実験**」の間には「**二枚のプレートを重ね合わせをなし**」(行為動態)、「**その場に重力の作用を改変するとの状況をもたらす**」(結果)とのかたちでの共通性がある——)。

そうした小説『フェッセンデンの宇宙』がどうして「**加速器関連事物**」と関わるかだが、「**宇宙創造挙動**」という行為が

「**極微領域に超高エネルギーを詰め込み極微領域にてビッグバン直後の状況 —— すなわち宇宙創造の状況 —— を再現する**」

との加速実験の行為態様の「**表されよう**」と通底するとのことがある —— ただし、「**表されよう**」の問題であって実際に行われている行為は1937年小説に見る「**荒唐無稽(?)なる宇宙創造方式**」とは(字面からもお分かりいただけようも)無縁ととれるところではある —— (：[出典\(Source\)紹介の部 24](#)を参照のこと)。

さらには、「**カシミール効果測定実験**」(直近言及のように『フェッセンデンの宇宙』の宇宙創造行為と同様の行為動態で実施された実験)で史上初めて捕捉されたものとしての「**負のエネルギー**」が



[加速器実験の結果、生成されうるとされるワームホール]

の安定化と結びつくと80年代より考えられるに至ったとのこともある(：[出典\(Source\)紹介の部 24](#)を参照のこと。通過可能なワームホール ——二〇〇一年の事件の予見描写を「多重的に」含んでいたとのことを本稿で詳述のキップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』の中心テーマはその通過可能なワームホールである—— を構築するには[負のエネルギー]を持つエキゾチック・マターが必要であるとキップ・ソーンらに分析・主張されるに至ったとのことがある。 とすると、[加速器実験に対しての表されようと同じくもの行為(宇宙創造)]にして[加速器実験生成事物たりうるワームホールの安定化に必要なもの(負のエネルギーの特定行為)]を一緒くたにして描いている、それも1937年に世に出た小説として描いているのが『フェッセンデンの宇宙』であると述べることもできる)。

ここで申し述べるも、『フェッセンデンの宇宙』では「二つの金属プレートを重ねあわせ重力を中和しながら」(要するに[後にて行われてマイナスのエネルギーを発見したとのことで物議を醸したカシミール効果測定実験の態様と結果を想起させる行為]が実行されながら)生成された宇宙にあって、

**[人為的に無理矢理に接合された爬虫類の種族の惑星と人類の種族の惑星で戦争が起こり、爬虫類の種族によっての人類に似た種族の皆殺しが敢行される]**

との筋筋が採用されているとのことがある(：先の[出典\(Source\)紹介の部 25](#)にあって河出書房新社より刊行の1937年版『フェッセンデンの宇宙』収録短編集(『フェッセンデンの宇宙』掲載部はp.9からp.34となっているとの短編集)p.25—p.26より原文引用なしたところとして次のような記載がなされている。(以下、再度の引用をなすところとして)“それは黄色い太陽で、四つの惑星がその周囲をめぐるっていた。そのうちの二つは大気がない世界だったが、残りのふたつは異なる生態の生物が棲息していた。片方は人間に生き写し、もう片方は爬虫類によく似ており、それぞれが自分の世界に君臨していた。…(中略)…両者のあいだには接触も通信もなかった。ふたつの惑星が、遠くへだたっているからだ。「さて、気になっているんだが」とフェッセンデンが、興味津々といった顔でいっていた。「あのふたつの種族が接触したら、どういう結果になるだろう。まあ、じきにわかるさ」彼はそういうと、もういちど針に似た装置のほうへ手をのばした。またしてもか細い糸のような力線が、極小宇宙のなかへすっつと伸びた。わたしは望遠鏡ごしにその効果を目のあたりにした。力線の命中したはずみで、片方の惑星が軌道を変えはじめたのだ。…(中略)…間髪をいれずに、狭い淵を渡って片方の世界から船が飛びはじめた。通信が確立された。するとたちまちふたつの世界のあいだに戦争が勃発した。人間に似た種族と爬虫類に似た種族の闘いである。…(中略)…闘いの帰趨は爬虫類に似た種族にかたむいた。彼らの侵略軍団が、人間に似た種族をひとり残らず血祭りにあげた” (引用部はここまでとする)。

ここまででもってして『フェッセンデンの宇宙』という作品との絡みで[加速器関連事物] (「宇宙の創造」と銘打たれての加速器実験態様/ここ最近になってワームホール生成とてありうる理論動態の変遷から指摘されるに至っている加速器実験ありよう)、そして、[爬虫類の種族の侵略] (最近になって通過可能なワームホールの生成手法とも結びつけられるにも至った負のエネルギーの測定につながっているカシミール効果測定実験同様の行為で宇宙が拓かれるなどとの設定が「どういうわけなのか」採用されている小説、その小説に見る人造宇宙での[爬虫類の種族による神(に見紛う科学者)の介入を受けての侵略])にまつわって何が述べたいのか、おもんばかりいただけるか、とは思う。

(『フェッセンデンの宇宙』についての話はこれまでとして)

次いで、後者(1985年に世に出た『スキズマトリックス』)についてであるが、同作、[ローンチ・リング]という、

[加速器と同様の機序(あるいは加速器そのもの)が関わるころの円形のトンネル構造物 ——本稿で問題視しているLHCは円形構造をとる加速器である— ]

にての死闘が主人公らによってなされている最中に爬虫類の種族と人類の文明圏のファースト・コンタクトがなされるとの筋立ての作品である。

以上、『フェッセンデンの宇宙』『スキズマトリックス』の内容を望見したうえでそこに気付いて然るべき

ところは 一きちんとここまでの内容を検討している向きにはご察しいただけていることか、とも思うのだが――

「[通過可能なワームホールをテーマとしている著作]として有名なキップ・ソーン著書『ブラックホールと時空の歪み』が[911の前言]と結びついている述べられるようになっているとことがある([α])一方、他面、そのソーン著作に見る[通過可能なワームホール]の「作用」を荒唐無稽にしたものとしての[他世界との扉]を登場させている映画作品として『スーパーマリオ魔界帝国の女神』という映画作品が存在しており、同映画作品がソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』のように[911の前言作品]となっており、また、[爬虫類の異種族の侵出]を扱っている作品とあいなっている([β])とことがある、そうした関係性にまつわる話が多くを結びつける」

とのことである。

にまつわって、押し広げて述べられるところに言及すれば、

「『フェッセンデンの宇宙』が[ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』にて中心テーマとして扱われている[通過可能なワームホール]と結びつくもの]([通過可能なワームホールの生成に必要な負のエネルギーの捕捉につながっているとの点につき既述のカシミール実験]のことを指す)を「時期不相応に」登場させている作品となっており、なおかつ、[爬虫類の異種族の侵出]を扱う著作「とも」になっているとのことは[911の事件への(奇怪なる)事前言及作品としての特性を帯びていること]のみが、そう、そののみがソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』と映画『スーパーマリオ魔界帝国の女神』の両者を結びつける結節点であるとの言いようを「越えての」こととなる。[爬虫類の異種族の侵出]・[ワームホール生成挙動(行為動態はともかくも加速器実験と表されようは同じの宇宙創造行為)]・[通過可能なワームホールを実現しうるとされるワームホール安定化要素(負のエネルギー)]に通ずる特色を具備している小説にして後の科学実験(カシミール効果測定実験)に対する予見的側面を帯びていた小説でもある『フェッセンデンの宇宙』を介しての関係性もが――[通過可能なワームホール][911の先覚的言及]との特性を帯びている『ブラックホールと時空の歪み』と[ワームホールのことを想起させる次元間融合][911の先覚的言及][爬虫類の異種族の侵略]との特性を帯びている『スーパーマリオ魔界帝国の女神』の関係性の絡みで――問題になる」

ということになる。

## δ

⇒

上の段([γ(ガンマ)]の段)にあつては双方共々に[911の事件の前言作品]となっているとすることで――常識よりの偏差との観点から――その特質が問題視して然るべきものとなると強調してきたところの作品ら、キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』([α])および『スーパーマリオ魔界帝国の女神』([β])の両作品の間の結びつきが

「[加速器実験に関わる事物]と[爬虫類の異種族の侵出]の双方に関わる作品ら(『フェッセンデンの宇宙』『スキズマトリックス』)をも媒介項に「さらに」問題になる」

とのこと、指摘した。

さて、そうした[γ]の段にて問題視した[加速器実験と関わる事物]に[通過可能なワームホール]関連の事柄が含まれているとのことがある点につき、

## [LHC 実験]

のことが問題となる。LHC 実験が[ワームホール]を生成する可能性があるところつい最近より考えられるに至っているために、である(細かくも出典を挙げて既述のことである。また、同様に既述のこととして枢要なる実験関係者セルジオ・ベルトリッチによって — どういう意図でか、どれほどのまじめさをもってかは判じかねることであるが—、「実験によって何かを送れたり送られてくる状況になりうる」との発言がなされているとのことすら「も」がある — そうした点らにつき細かくは本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 18](#) および [出典\(Source\)紹介の部 19](#) を包摂する解説部や [出典\(Source\)紹介の部 21-2](#) を包摂する解説部を参照のこと—— ) ]、

## ε

⇒

上の段 ( [δ(デルタ)] の段 ) にて

## [LHC 実験]

との兼ね合いで [通過可能なワームホールの安定化要素(負のエネルギー)] に通底する側面を帯びた宇宙創造をテーマにしての小説作品 (『フェッセンデンの宇宙』) のことを問題視したことについて「牽強付会である(こじつけがましい)」と述べる人間もいることか、とは思う。

というのも、LHC 実験で[ワームホール]が生成されうるとしても (「何かを送ったり送られたりするとの状況になりうる」との一部実験関係者申しようはさておき) それが [通過可能なワームホール]

とまでは目立って述べられていないこと「も」あるし、また、問題となる小説作品に見る [宇宙創造挙動] (金属プレートの重ね併せと重力作用の無効化の挙動) が加速器のそれ — 極微領域に兆単位の電子ボルトのエネルギー (マクロスケールではせいぜい蚊が飛ぶにすぎないとのエネルギー) を一点集約・投入して [ビッグバン直後の状況を極微スケールで再現する] と銘打たれての加速器の挙動 — とは異質なるものとなっていること「も」あるがゆえに、である。

だが、次のような観点 (「甲」「乙」「丙」「丁」方式で羅列の観点) まで加味すると問題となる連結関係が [尋常一様ならざる多重性] をもって成立していること、明確に伺い知れることとなっている。

甲: 「(既述のように) LHC 実験は [\[トロイア\]](#) [\[アトランティス\]](#) と結びつくようになってい

っている」 (委細は本稿の先の段に譲る。ATLANTIS や CHARYBDIS と  
いったブラックホール生成挙動と関わるところで用いられているディスプレイ・  
ツールやシュミレーターの命名規則のことがその話に関わってくる ⇒ 出典: [出典](#)  
(Source) 紹介の部 35 から [出典\(Source\)紹介の部 36\(3\)](#)、および、[出典](#)  
(Source) 紹介の部 46 )

乙: 「LHC 実験にもその実験命名規則との兼ね合いで影響を与えていることが  
摘示可能となっているとの [\[トロイア\(陥落\)\]](#) [\[アトランティス\(沈没\)\]](#) は —  
[\[\(巨人アトラスがその在り処を知るとされる\) 黄金の林檎\]](#) という媒介項を介しつ  
つも — [\[911 の事件の前言事象\]](#) とともに — 「極めて異常なことながら」 —  
関わっているとのことがある」 (「差し当りの一例」として [トロイア崩壊の原因た  
る黄金の林檎] を登場させているとのトリロジー (三部作) 構成の不快な 911 前  
言作品としてのありようについて先の段にて事細かに紹介している ⇒ 出典: [出](#)  
[典\(Source\)紹介の部 37](#) から [出典\(Source\)紹介の部 37-5](#) )



丙：「[トロイア陥落]と[アトランティス沈没]についてはそれら自体が相互に記号論的に結びつくことを指摘できるようになって「も」いるとのことがある——そこから[トロイア陥落]と[アトランティス沈没]の間の結びつきについて講学的に論拠主導方式での解説を試みる人間は欧米圏にもおよそ見受けられない(おそらく[そうした類似性をわざわざもって問題視する意味性に対する視点の欠如]が原因であろうと思われる)のだが、現実には両者[トロイア陥落][アトランティス沈没]が記号論的に結びつくことを指摘できるようになって「も」いるとのことがある——」(疑義があるとの向きにあっては本稿のここに至るまで典拠呈示を事細やかに試みながらも展開してきたところの[黄金の林檎の園とアトランティスの関係性][クイントス『トロイア戦記』内容に見るトロイアと結びつく洪水伝承]らをテーマとしての解説部につき検証をなしていただきたい⇒出典:[出典\(Source\)紹介の部 40](#)から[出典\(Source\)紹介の部 45](#))

「また、[[アトランティス沈没の寓意]および[トロイアの崩壊]の双方と結びつく[黄金の林檎]の寓意(さらにはそのゴールデン・アップルと結びつくと指し示せるし実際に密に指し示してきたところの[エデンの林檎]の寓意)が[蛇の種族による侵襲・侵略]という[物語の類型]を媒介項としても(20世紀より)結びつくようになされていると見受けられるとのこと「も」がある」([アトランティス崩壊と蛇の種族の侵略の物語の関係]との絡みでは[モーリス・ドリールという神秘家が1930年代末葉に出版した文書の中で具現化させていた捏造神秘主義体系(アトランティスが蛇の種族の「影の王国」に次元間侵略されたとの神秘主義体系)の内容]および[アトランティス接合地域にての王国が蛇の種族の[影の王国]より介入・支配されているとの1929年初出の小説『影の王国』に認められる内容]および[アトランティスに対する人工の蛇人間を用いての侵略という粗筋を有している三部作(トリロジー)構成をとる1970年ヒット小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』の内容]を本稿ここまでにて挙げてきた。対して、[トロイア崩壊と蛇の種族の侵略の関係]については——[アトランティスの沈没の寓意と蛇の侵略の物語の関係]と重複するところだが——[三部作(トリロジー)構成をとる911予見作品でもある1970年ヒット小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』に認められる[黄金の林檎](トロイア崩壊の因)を作中主要モチーフに据えているとの内容]が問題となる⇒出典:[出典\(Source\)紹介の部 34-2](#)および[出典\(Source\)紹介の部 38](#))

丁：「[アトランティス][トロイア]、そして、([α(アルファ)]から[δ(デルタ)])の部までの内容をも顧慮し[アトランティスの蛇の種族による崩壊]との言いよりの伝が[911の前言作品ら]を媒介項としながら[ワームホール]の問題とLHC実験を結びつける材料となって「しまつてもいる」」

以下、甲から丁にて述べたことより申し述べられることを[一問一答をなす]との形式にて整理する——(詰まるところ、その[問答をなす]との形式にての整理しての内容が([1]から[3]と分類しての一連の流れの中にあつての[3]の中にてさらに小分けしてそうも振つての話をしてきたところの[α(アルファ)]からここ[ε(エプシロン)]と振つての部に至るまで述べてきたことの[まとめ]へと通ずるところとなる)——。

(すでに回答となることについての説明を事細かになしてきたなかでわざと問いを発するとして)

(i.問い)「LHC実験がアトラス・アトランティス・トロイアとそれぞれ結びつくのは事

実か?]

⇒

(i.回答)「(詳説なしで来た)実験関係者に起因するところの命名規則の問題から「事実である」と誰でも極めて明確に断じられるようになっている」(疑わしきは主観など介在する余地もないとの出典(Source)紹介の部 35 から出典(Source)紹介の部 36(3)、および、出典(Source)紹介の部 46 を見よ)

(すでに回答となることについての説明を事細かになしてきたなかでわざと問いを発するとして)

(ii.問い)「LHC 実験が [ワームホール生成と結びつく] と真つ当な科学者に言われているのは事実か?」

⇒

(ii.回答)「(詳説をなしで来たことから)「事実である」と明確に断じられるようになっている」(疑わしきは主観など介在する余地もないとの出典(Source)紹介の部 18、および出典(Source)紹介の部 19 を包摂する部や出典(Source)紹介の部 21-2 を包摂する部を見よ)

(すでに回答となることについての説明を事細かになしてきたなかでわざと問いを発するとして)

(iii.問い)「 [ワームホール生成とピック] が 【 [911 の前言] や [蛇の種族の侵出] といった特性と結びつく作品ら】 と時期的に不可解なことながら「純・記号論的に」結びつくというのは事実か?」

⇒

(iii.回答)「(話はエキセントリックながらもここまで論拠を入念に呈示しながら指し示してきたように)「事実である」との返答が明確になせるようになってしまっている(「否、そのようなおかしなことはない」と述べたいのはやまやまだが、表記のような返答をなさざるをえぬように純・記号論的接合性の問題としてなってしまう、でもいい)」(疑わしきは直上にての [α] にて呈示の出典紹介部および YouTube 動画サイトや検索エンジン上より行き着ける Super Mario Bros, 1993, 911 とのキーワードと紐付いた動画らを見よ — ただし、の際には、屑のような類(人類の裏切り者か、あるいは、人間としての実質を有していない手合いら)由来の媒体にての [出鱈目とチャンポンにされたガセ情報] に振り回されないように。 — )

(すでに回答となることについての説明を事細かになしてきたなかでわざと問いを発するとして)

(iv.問い)「 【 [911 の前言] や [蛇の種族の侵出] といった特性と結びつく作品ら】 が [アトランティス]・[トロイア] ともそれぞれ結びつくなどということもが事実なのか?」

⇒

(iv.回答)「(ここまで論拠を入念に呈示しながら指し示してきたように)「事実であ

こちら 1993 年公開の映画のシーンが尋常ならざるものであるところとしては(本稿にての出典(Source)紹介の部 27 で市中流通 DVD を通してのその旨の確認方法を紹介しているように)【片方が崩れ、片方の上階に風穴が開くとツインタワーのありよう】などといったものが飛行物体(画面にては小さいがゆえに旅客機か戦闘機か、どういふものとして入れ込まれているか判然とせぬ飛行物体)のツインタワーの合間の中空横切り描写と結びつけられているとことで「も」ある。そうもした描写がワームホールのことを連想させる異世界間の結びつけとリンケージしている(爬虫類の種族の侵襲とのテーマにまつわるところでリンケージしている)とこのことを【他の不快なる事物ら】の呈示に先んじて問題視してきたのが本稿である



る」との返答が明確になせるようになってしまっている」(疑わしきはここ本段に至るまで数多く挙げてきた出典紹介部を好きなだけ精査せよ)

以上の問答 i から iv の流れにてどういったことが問題になるのか、(事細かな検討をなす「前」の向きには真偽について未だ納得しかねるとのことがあるであろうも)、自明であろう。

(これにて ([1] と [4] と振っての部の中の [3] に包含させての) [α アルファ] [β ベータ] [γ ガンマ] [δ デルタ] [ε イプシロン] と分けたいうでの従前内容振り返っての表記を終えるとして)

ここまでの [α] から [ε] に分けて振り返りもしたことから次のことを複合顧慮すると [問題の根の深きところ] がさらにもって浮き彫りになるようになっている (本来ならば直下内容からしてくどさに辟易させられるようなものか、とも思うのだが、重要なこと、また、複雑なところであるため、「くどくどとした重複訴求を厭わずに、」もの表記をなしておく)。

[アトラス・アトランティス・トロイアらにまつわる寓意 —— 要するに LHC 実験「とも」関わる事物らにまつわる寓意でもある —— を相互に結びつける共通要素が [ヘラクレス 11 番目の功業の取得目標物] たる [黄金の林檎] となっている] (: 現行、[3] の部にあつての話をなしているわけだが、先立つ [1] と [2] の部、および、さらに遡っての本稿の解説部を参照のこと)

[ [ヘラクレス 11 番目の功業の取得目標物] となっている [黄金の林檎] については [エデンの林檎] と結びつくだけではなく (ビッグアップルことニューヨークにも仮託されるものにして) [911 の予見的物事] [911 の事件の前言事象] と関わってくる] (: 本稿 **出典 (Source) 紹介の部 37** から **出典 (Source) 紹介の部 37-5** の内容を参照のこと。うち、**出典 (Source) 紹介の部 37-5** に関わる部が「 [黄金の林檎] が [ニューヨーク] および [ツインタワーと共に被災を見たモニュメント] と関係している」ことを論じた部となる —— 尚、本稿にてのよりもって後の段で「911 の事件の予見物事の類がいかように黄金の林檎と関わるのか」 [黄金の林檎がいかようにして 911 の事件周辺領域に関わるのか] についての「より突き詰めての解説」を相当数の文量を割き、また、典拠となるところをさらに入念に挙げながら、解説していく所存である —— )

[11 番目の冒険にて [黄金の林檎] を求めたヘラクレスは [爬虫類 (蛇・竜) の種族] を最も屠ってきた英雄であると伝わっているとの文献的事実が存する —— ヘラクレスが黄金の林檎を求めての第 11 番目の功業からして [百の頭を持つ竜 (蛇の類とも) たるラドン] が登場を見ているとのことがある —— ] (: **出典 (Source) 紹介の部 63 (4)** を参照のこと)

ここまでも何がどう問題になるのか (「実にくどくも、」の繰り返しも多くなつての話の中ながら) ご理解いただけているのではないか、と思う。

以上、極々端的に振り返ったところでここ本頁では ([1] から [4] と振ってのここのうちの) [4] の部についての話に入る。

# [4]

こここれに至るまでの多分に本稿従前内容を振り返っての話 — (先行するところの[1]から[3]には[よりもって従前の本稿内容の振り返り・整理をなす]との側面が強くもあった) — に加え、さらに重ねての振り返りを下になす。

「14世紀前半成立の作たるダンテ『地獄篇』( Divine Comedey こと『神曲』を構成する『地獄篇』『煉獄篇』『天国篇』三パートの内の最初の部たる『地獄篇』)および17世紀成立のミルトン『失樂園』の人間の苦悩の根源・罪の中枢を描く両古典にあつては【「地獄門の先の領域にまつわる描写」かつ【ルシファーに起因する災厄にまつわる描写】

として双方共に

【「現代的観点から見た」場合のブラックホールに類似・近似するもの】

を登場させているといった特質が見受けられる」

(:上の部にあつて枕詞として「現代的観点から見た」との言い方を付しているのは「今日的ブラックホールにまつわる理解がアインシュタインの相対性理論登場前に呈示される素地が「あつたはずがない」と常識的に述べられる」からである)

「ミルトン『失樂園』には

【エデンの誘惑】(黄金の林檎に複合的に通ずる林檎による【エデンでの誘惑】)

をして

【サタン(ルシファー)の擬人化された妻子たる[罪]と[死]が人間に襲いかかる筋道の確立のプロセス — 地獄門の先にある[アビス(深淵)]を横断しての人間の領域に対する[罪]と[死]の通用路の確立のプロセス —】

との形容がなされている(そして、それは出典(Source)紹介の部58(4)に付しての補足の部にて先述のように神(キリスト教唯一神)の追認を受けてのプロセスであるようにも当該古典内にて表記されている)。

そちらミルトン『失樂園』にての【エデンの誘惑】、すなわち、

【地獄門の先にある[アビス(深淵)]を横断しての人間の領域に対する[罪]と[死]の通用路の確立のプロセス】

にあつての【アビス】に関して

【ブラックホール類似物としての特性】

を見出せるとのことがあり(ミルトン『失樂園』アビスは【時間と空間が意味をなさなくなる, 底無しの, 暗黒領域】と形容されるが — 17世紀人ミルトンが「時間と空間」を一体として見るアインシュタイン的な世界像を理解していたとは思えないものの —

【時間と空間が意味をなさなくなる, 底無しの, 暗黒領域】とは「アインシュタイン以後の」今日的見方を見たブラックホールにあつての特性でもある)、それがゆえミルトン『失樂園』版【エデンの誘惑】は

【地獄門の先にある[ブラックホールに類する特性を帯びてのもの]を横断しての蛇の係累たる[罪]と[死]が人間に襲いかかる通用路の確立のプロセス】

と言い換え可能なもの「とも」になっている」

(:奇矯な申しようであることは論を俟たないが、ミルトン『失樂園』のアビス、【「空間」のみならず[時間]もが意をなさなくなる領域】にして「底無しの暗闇の領域」であり、かつ、「自然の祖となっている領域」と形容されている場)たるそのアビスに【ブラックホールに近似する特性】を見出せることに相違はない。ここでの話は類似の特性を帯びている、【そのように表現できるようにもなっている】との意味での【記号論】的変換の問題

であり、筆者の主観は話柄の取舍選択以上には介在していない)。

「ミルトン『失樂園』にての

**[地獄門の先にあるアビス(深淵)を横断しての [罪] と [死] (作品中にあつて蛇に変じたサタンの変人化されての妻子) の通用路の確立のプロセス]**

先行する摘示事項に依拠して換言すれば、

**[地獄門の先にある「今日的な観点で見れば、」ものブラックホール類事物を横断しての [罪] と [死] が人間に襲いかかる通用路の確立のプロセス]**

を描いているパートに関しては — 先の段にても詳述のこととして —

**[トロイア崩壊に通ずる表現]**

が 一文献的事実の問題として — 多層的に用いられてもいるとのことがある (出典 (Source) 紹介の部 55 (3) および 出典 (Source) 紹介の部 56)。

そして、同じくものパートに関しては

**【[黒海洪水仮説] および [黒海洪水伝承] に通ずる属地的特性にまつわる言及】**

をなしている部である「とも」述べられるようになっている (出典 (Source) 紹介の部 57 から 出典 (Source) 紹介の部 58 (4))。

ここで当該の部にまつわって「奇怪なのは、」

**[エデンにての林檎を用いての蛇による誘惑のプロセス]**

すなわち、

**[地獄門の先にある [ブラックホール類事物] を横断しての [罪] と [死] が人間に襲いかかる通用路の確立のプロセス]**

を描いているとのミルトン『失樂園』のそちら特定パートが古代にあつて成立、19 世紀になって「再」発見されたとの『ギルガメシュ叙事詩』に認められる、

**[洪水伝承とも関わる [蛇による不死を約束するうえでの縁(よすが)たるものの略奪] のプロセス]**

とも「記号論的に」接合していると申し述べられるように「なっている」とのことである。

固有の特質・ユニークさを伴つての『ギルガメシュ叙事詩』の筋立てを

**[ミルトンが参照することはできなかったはずである]**

との時期的背景がある (出典 (Source) 紹介の部 60 (2) に前後する部) なかでミルトン

『失樂園』と『ギルガメシュ叙事詩』との間には — (細かくは延々ひたすらに 出典 (Source) 紹介の部 59 以降の部にて解説してきたところを参照いただきたいが) —

**[黄金の林檎] (ヘラクレスが第 11 功業にて求めもしたとの黄金の林檎) のことを合間にはさんでのこととして、「次のような」共通性が「確として存在している」とのことがある。**

(以下、ミルトン『失樂園』と『ギルガメシュ叙事詩』の連続性問題についての本稿従前内容を振り返つての箇条表記をなすとして)

・[エデンの園からの追放] (旧約聖書創世記に見る筋立て・ミルトン『失樂園』モチーフ) は[蛇による不死の喪失]と通じてもいるとの解釈が成り立つものである。他面、『ギルガメシュ叙事詩』は[蛇による不死の略取]を描くものである。

・『ギルガメシュ叙事詩』は[蛇による不死の略取が関わるパート] (出土タブレット 11 の部) にて (旧約聖書創世記に見る) [ノアの大洪水の物語] のように [大洪水の生存者 および大洪水から種の保存をなすための方舟] を登場させているとのものとなる。他面、ミルトン『失樂園』にあつては [(ボスポラス海峡の構築に相通ずる) [黒海洪水仮

説]および[黒海洪水伝承]に伴う属地的特性に相通ずる言及]をなしているとの作ともなる(ボスポラス海峡・ダーダネルス海峡を突貫しての通路構築に対する多重言及をなしているとの部がそうである)。そして、ボスポラス海峡の構築について取り扱っている黒海洪水仮説についてはそれが『ギルガメシュ叙事詩』に認められるような[往古にての洪水伝承]の元となったものであるとの見方が色濃くも呈されているとのものともなっている(出典(Source)紹介の部 57)。

・『ギルガメシュ叙事詩』の[不死の手段]を求めての冒険譚は多重的に【[黄金の林檎]が取得目標物となつてのヘラクレスの第 11 功業】と接合しているとのことがある(本稿にての出典(Source)紹介の部 63 から出典(Source)紹介の部 63(3)でもって古典・抜粋遺物より文言抜粋しながらひたすら細かくも解説を心がけていることである)。他面、ミルトン『失樂園』にあつての主要モチーフたる[エデンの誘惑]もまた([パリスの審判]といったものを介しての接合性やその他の相関関係を介して)多重的に[黄金の林檎]と接合するようになっている(とのことを事細かに論じてきたのが本稿である)。それゆえ、『ギルガメシュ叙事詩』とミルトン『失樂園』の特定パート——[ブラックホール近似物(アビス)]横断路が構築されるとの特定パート——にあつては[黄金の林檎]を介しての接合性が強くも観念されるようになっている。

・ミルトン『失樂園』の特定パート——[ブラックホール近似物](アビス)横断路が構築されるとの特定パート——はトロイア崩壊に通ずる言及を多層的になしているパートともなる。トロイアとは[黄金の林檎]が原因で滅んだ(黄金の林檎が原因で勃発した戦争にて最終的に木製の馬で引導を渡されることになった)都市である(出典(Source)紹介の部 39)。そして、古のトロイアに関してはその創建も末期——木製の馬で住民皆殺しにあつた後の遺構の破壊にまつわる末期——も[洪水]が関わっているとの伝承が伴っている(出典(Source)紹介の部 44-3 および出典(Source)紹介の部 44-4、そして、出典(Source)紹介の部 58 および出典(Source)紹介の部 58(2)の部)。トロイアにまつわる[ギリシャ勢との戦争の後に(ギリシャ勢を巻き添えにしながらも)洪水によって滅亡を見る]という筋立ては【アトランティス(本稿にて先述のように[黄金の林檎の園]にも仮託される場)の最期】とも通底するところのものだが、とにかくも、[黄金の林檎]が原因で滅んだトロイア末期との兼ね合いからして、(ミルトン『失樂園』の特性;トロイアに関わる多層的言及をなしているとの特性に鑑みもし)、古代の大洪水にまつわる洪水伝承・洪水仮説——トロイアが存在していたとされる黒海近傍にての洪水伝承・洪水仮説——との関わりあいが指摘出来てしまう(そしてヘラクレスの[黄金の林檎]が求められての第 11 功業との記号論的連続性が摘示できるようにもなっている)との『ギルガメシュ伝承』特定パートとミルトン『失樂園』特定パートの接合性が観念できるところとなる」

以上のこと——ミルトン『失樂園』に関する話——とここまでの[1]から[3](にて内容の振り返りをしてきたこと)を複合顧慮することで話の奇怪性(「偶然でのありえなさ」でもいい)がさらに増すことになる。

(※ここでくどくもながらものこととして、先行する[1]から[3]にて振り返り表記してきたことのお復習(さら)いをなしておく。

[1]では[911の前言作品(と述べられようもの)]のうち、トリロジー(三部作)構成の70年代ヒット小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』にあつて[アトランティスに対する蛇の侵略の寓意][ヘラクレス11番目の冒険の取得物となっている黄金



の林檎]の寓意が含まれていることを振り返った。

[2]ではヘラクレスが

[蛇の妖異ら —— ([アトランティスを侵略した蛇の種族]なるものを登場させていた 1930 年代末葉にあつての馬鹿げた神秘主義者申しよう、そして、そちら神秘主義者申しように[具体的文言]込みで影響を与えていたであろうとの節が如実にあるとのより以前(1929 年)から存在していたパルプ雑誌掲載小説『影の王国』に見るような凶悪な存在であるといった按配での蛇の妖異ら) —— ]

を数多屠ってきた存在であると伝わっていることについての指し示しをなした。

[3]では([1]に言及の)小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』に認められるが如き 911 の前言の類が[偶然]で済まされないものであるばかりか常識よりの偏差より際立って着目に値するものであると強調、そのうえで、

【[通過可能なワームホール]を扱った有名な物理学書物にも [偶然とは思えぬ多重性] [常識よりの偏差] との観点で無視できぬ [911 の発生の先覚的言及文物としての特色] が伴っていること】

【[ワームホール的な他空間をつなぐ時空間の扉]および[爬虫類の種族による侵略]を扱っているとの「同様に奇怪なる」[911 の事前言及作品]といった要素を帯びての映画作品が存在していること】

【サイエンスフィクション分野の作品に「時期的に奇怪な折に」といった意味合いのものも含めて [加速器] [爬虫類の種族の侵出] を結びつけて扱っているとの小説作品らがあり、そのうち一作品が [通過可能なワームホール] に(カシミール効果観測実験との類似性との絡みで)関わるものであること】

【LHC 実験は(ブラックホールばかりではなく) [ワームホール生成]をもないうるものであるとされており、また、同実験が「どういわけなのか」アトラス・アトランティス・トロイアにまつわる命名規則 —— [アトラス] (黄金の林檎を把握する巨人)・[アトランティス] (黄金の林檎の園の同一物とも見做されてきた伝説上の陸塊)・[トロイア] (黄金の林檎が原因で滅んだ伝説上の都市)にまつわる命名規則とのことで、要するに、[黄金の林檎に関連するものら]と通ずる命名規則 —— と結びつけられていること】

についての問題視をなしていた)

( [ミルトン『失樂園』に関する話とここまでの [1] から [3] (にて内容の振り返りをしてきたこと) を複合顧慮することで話の奇怪性がさらに増す] とのことがどういうことかについて以下、くどくも指摘する)

「ミルトン『失樂園』に見る [エデンにての林檎の誘惑] によって実現を見た描かれ【アビス(ブラックホール類似物としての特性を帯びての領域)横断路構築プロセス】にまつわるパートが「純・記号論的」観点から

【 [黄金の林檎で滅したトロイア崩壊譚] 及び [黒海洪水伝承] 】

の両者「とも」通ずるような式で不可解にも

【 [蛇による不死の略取] にて終わる『ギルガメシュ叙事詩』の洪水伝承と密接につながる特定パート】

と接合しているということは、である。

・([『失樂園』に見る)ブラックホール類似物をまたいで横断路の形成]

→ [LHC 実験にてのブラックホール生成可能性のことを想起]

・[トロイア] → [ブラックホール生成可能性伴っての LHC 実験にまつわるトロイア関連の命名規則を想起]

・[黄金の林檎] および [洪水崩壊伝承] → [黄金の林檎の園の同等物ともされる、大洪水にて滅したとされるアトランティス] → [ブラックホール



## 生成可能性伴っての LHC 実験にまつわるアトランティス関連の命名規則を想起]

との各[想起]「をも」たらずものとなる（すくなくとも脳が正常に機能しているのならば、そして、前提となる情報を押さえきれているのならば、そういう想起が自然(じねん)としてもたらされるようなところとなっている)。

のみならず、ミルトン『失樂園』の[エデンにての林檎の誘惑]による[アビス(ブラックホール類似領域)横断路構築プロセス]が[『ギルガメシュ叙事詩』に見る[蛇による不死の略取]で終わる特定パート]と[黄金の林檎]を介してつながっているとのことは、である。

- ・[黄金の林檎]([エデンの禁断の果実]との関係性が観念されてきたとのことを先述しもしてきた神話上の果実)を作中にて重要なモチーフとし、[アトランティスの蛇の種族による陥落]とのテーマを扱っているとの三部作(トリロジー)構成をとる小説作品——『ジ・イルミナタス・トリロジー』——が[911の事前言及要素]を伴って存在していることを想起]
- ・[フォームホール的な他空間をつなぐ時空間の扉]および[爬虫類の種族による侵略]との要素を具備しており、かつ、[911事前言及作品]としての要素を帯びているとの映画作品——『スーパーマリオ魔界帝国の女神』という「額面上は、」の児童向け荒唐無稽映画——が存在していることを想起]

との各[想起]「をも」さらにもたらずものである」

以上のような想起がもたらされる(もたらされるように「なっている」でもいい)ことについては、

「確率論——(確率論については本稿末尾にて大学で確率論を学んだ向き(そして確率概念についての深い省察をなしたことがあり、かつ、数式を理解できるとの向き)がそも考えようとのやりよう([ベイズ推定]を応用してのやりよう)を高校生レベルの知識水準で理解出来るとのものにグレードダウンして[付録]と位置付けての話をもなす所存でもある)——の観点から見ても[人為][恣意](執拗な[意志]の顕在化としての[人為][恣意])によってそうなっていると考えすることはできても、[偶然]によってそうなっているとはおよそ考えられるようなものではない」

とのものである([およそ考えられるようなものではない]との点について—行為者として生きる意志があるのかを確認すべくも—[絶対にそうは考えられない]とのところまで話をもっていく、そのための典拠を完全に、遺漏なくも呈示していくのを本稿の使命と筆者はもって任じているのだが、この段階からして[およそ考えられるようなものではない]と申し述べる)。

---

### 付記の部として

確率論については長大なものともなる本稿の末尾にて初学者を想定しての事細やかな解説をなすとして、(数学云々を無視しての)[直感的なる側面]で見ても上のような観点、「ことは[人為][恣意]による賜物であっても[偶然]の賜物ではなかろう」との観点が出てこようとのことを取り上げているのがここでの話となる。

そうしたことに言及したうえで述べておくが、ここでなしている話は追加で述べるべきことが山と存在しているとのことがある。

につき、本稿の先の段、**出典(Source)紹介の部 55**から**出典(Source)紹介の部 55(3)**を包摂する部にて(ここでの話に関わるところのミルトン『失樂園』に見る[アビス横断路

構築]に関わるところとして)「既に」次のことを指摘してきた。

ダンテ『地獄篇』にあつての、

[今日的な理解にあつてのブラックホール近似物の描写(於て:コキュートス)]

とミルトン『失樂園』にあつての同じくもの、

[今日的な理解にあつてのブラックホール近似物の描写(於て:アビス)]

は双方別個に別々の側面からブラックホールとの近似性を呈するとのものであるが、「極めて奇怪なことに」双方共に

[ルシファーによる災厄]

[地獄門の先にある破滅・悲劇に関わる通路]

と結びつけられているとのことがある。

それにつき、まとめれば、『地獄篇』および『失樂園』との両古典を合算して見た際に、

[ [ルシファーによる災厄]および[地獄門(と描写されるもの)の先にある[破滅][悲劇]への通路]との両要素と結びついたポイント]

に関わるところで

A. [[不帰の領域]にまつわる隻句(『地獄篇』地獄門隻句)を目にしたところから入って最終的に到達した「悲嘆」を体現しての地点] (『地獄篇』コキュートス)

B. [重力の源泉と「際立って」描写されている地点] (『地獄篇』コキュートス)

C. [(静的描写として)外側から見た際に罪障がゆえに「凍りついた」者達がそこに横たわっている、と同時に、(動的描写として)当事者から見れば「永劫に粉碎され続けている」との地点] (『地獄篇』コキュートスの中枢ジュデッカ)

D. [[光に語源を有する存在](ルチフェロ)が幽閉されている地点] (『地獄篇』コキュートスの中枢ジュデッカ)

E. [[果てなき(底無し)の暗黒領域] (『失樂園』アビス)

F. [大きさ・「時間」・「場所」が無意味となる領域] (『失樂園』アビス/17世紀成立の『失樂園』の刊行時には時間と空間を有機的の一体と見る相対性理論に通ずる発想法は無論、なかった)

G. [自然の祖たる領域] (『失樂園』アビス)

との要素らを「全て兼ね備えての」ありようが具現化していると述べられるようになっており、そうしたありようが現代物理学の発展にて呈示されるようになったとの[「今日的な観点で見ての」ブラックホール像]と共通性を呈している、すなわち、

A. [「一度入ったら二度と出れない」との(事象の地平線の先にての)領域] (ブラックホール内側)

B. [重力の源泉となっている場] (ブラックホール)

- C. [(静的描写として)外側(生者)から見れば被吸引者が「時が止まったような状況」になっているとのことがありつつも(動的描写として)その被吸引者本人(死者と化した者)から見れば「粉砕され尽くしている」との場] (ブラックホール)
- D. [(「光さえもが逃がられない」とされる場] (ブラックホール内側)
- E. [底無し]の暗黒領域] (ブラックホール)
- F. [時空間の法則が破綻する(「時間」と「空間」が本来通りの意をなさなくなる)領域] (ブラックホール)
- G. [それをもって自然の祖であるとする観点が存する場] (ブラックホール)

との特徴を全て兼ね備えたものとしての「[今日的な観点で見ての]ブラックホール像」と共通性を呈していると摘示できるように「なっている」とのことがある。

(※ダンテ『地獄篇』の最終ゴールたる氷地獄コキュートスに

- B. [重力の源泉となっている場]
- C. [(「悲嘆の」川コキュートスにて(静的描写として)外側から見た際に罪障がゆえに「凍りついた」者達がそこに横たわっている、と同時に、(動的描写として)当事者から見れば「永劫に粉砕され続けている」との地点]

との側面が伴うのに対して、現代的観点で見た際のブラックホールに

- B. [重力の源泉となっている場]
- C. [(静的描写として)外側(生者)から見れば被吸引者が「時が止まったような状況」になっているとのことがありつつも(動的描写として)その被吸引者本人(死者と化した者)から見れば「粉砕され尽くしている」との場]

との特性が伴っているとのまさしくものそのことに関わる場所としてブラックホール(と今日、呼ばれるに至ったもの)は初期、

**Frozen Star**[凍った星](ダンテ『地獄篇』の[重力の中枢にあつての氷地獄]のようなものとしてのフローズン・スター)

とも形容されていたとのこと「も」先立っての段で解説した —— そちら Frozen Star の現行、Wikipedia にての関連表記は[ Black Hole ]項目、その History の節にての “ **This is a valid point of view for external observers, but not for infalling observers. Because of this property, the collapsed stars were called "frozen stars", because an outside observer would see the surface of the star frozen in time at the instant where its collapse takes it inside the**

**Schwarzschild radius.** ” 「この見方は外側の観測者ら(訳注:ブラックホールの外側の観測者ら)にとっては適正なる見方だが、ブラックホールに落ちこむ観測者らから見れば、適正なる見方ではない。こうもした属性がゆえに[縮退星](訳注: collapsed star はブラックホールという言葉が生み出される前にブラックホールを指して用いられていたところの一呼称)は Frozen Stars [フローズン・スターズ(凍り付いた恒星)]とも呼ばれていた、というのも[外側の観測者]はその星がシュヴァルツシルト半径の内側へ向けて崩壊していくまさにその場、その瞬間を「凍り付いた恒星の外側」とのかたちで見ることになるからである」との部位となる —— )

上はここまでその問題性について振り返っての表記をなしてきたところの、[ミルトン『失楽園』に見る [アビス横断路構築] にまつわるパート]

がいかにして

[ダンテ『地獄篇』]

と ——今日的な観点で見てのブラックホール(的なるもの)との接合性との絡みで——関わっているかについて言及しているとのところとなるが、そも、そこに見る、

[ダンテ『地獄篇』]

からしてヘラクレスの12功業の後半部 ——黄金の林檎を探し求めてのものたる第11功業を包摂する第10功業から第12功業の部—— と「密接に」結びつけられていると摘示できてしまうようになっているとのことがある。

まさしくものそのことこそが

「さらに追け加えて [証示] なすべくもの重要なことである」

と申し述べたいところである。

同じくものことについては本稿の後にての段で詳述をなす所存だが、そちらが「真たり」と(指し示し未了の段階ながらも)前提に置いて判ずれば、である。関係性の環の緊密化、[ヘラクレス功業(に見る黄金の林檎)]を要素として共有しての関係性の環のさらなる緊密化が想起されるとのことになり、ますますもって[執拗さ]の問題が首をもたげてくることになる(そうした「さらにも、」追加で述べるべきことを顧慮すれば、よりもって[人為か偶然かの選り分け問題]もより鮮明化を見ようと受け取れるところとなる)。

ここまでをもってして付記の部とする

---

さて、ここまで延々と振り返って述べてきたことにつき、

「確率論 ——(繰り返すが、確率論については本稿末尾にて大学で確率論を学んだ向き(そして確率概念についての深い省察をなしたことがあり、かつ、数式を理解できるとの向き)の発想法をハイスクールのティーンの数学知識水準で理解できるとの水準に落とし込んでの「付録」と位置付けての説明をなす所存でもある) —— の観点から見て [人為] [恣意] によってそうになっていると考えることはできても、[偶然] によってそうになっているとはおよそ考えられるようなものではない」

と述べられるのだと強調したい、と申し述べた上でのこととして、である。

多くの人間がこの世界の実体につき識ったうえで「臆病ゆえにか」、あるいは、「認識の有無にかかわらず制御下にあつて脳機能が特定のアウトプットしかなせないとのか」(であれば、救いようのないありさまではある)、とにかくもってして、[そうであろう]と結論したがるようなところ、

「〔関係性現出の背景にあることが [偶然] ではないとしても)人間レベル —「この」地球にて文明の唯一の担い手となっていると世で言い切られもする我々人類— の恣意の問題としてそうもした [相応の関係性] が現出しているにすぎない」

との式で上のようなことが成り立っているとの説明を付けるためにはいくつかの [仮定] ら(下にての呈示の [仮定1] から [仮定5]) を置かなければならないことになる(であろう)。

(「[たかだかも人間の恣意] で上述してきたことが成り立っていると観念した際に」、それら全部ないし過半の充足を想定しないと物事の事理に対する説明がなしがたいところの [仮定] を [仮定1] から [仮定5] とし、それらを羅列表記することとする)

[仮定 1]

「文豪ミルトンは『ギルガメシュ叙事詩』の内容を把握していた。さらに、文豪ミルトンは人間一個の知識として[黒海洪水伝承]のことまでを把握しており、また、[エデンの園]と[黄金の林檎の園]が[アトランティス]と結びつく——同[アトランティス](洪水伝承と関わる陸塊にして黄金の林檎の園と結びつきうる陸塊)・[トロイア](黄金の林檎にて滅んだ都市にして創建伝説や攻囲戦後の破壊が洪水伝承と結びつく都市)の接合問題「にも」関わる場所として結びつく——ことにまでに着想が及ぶだけの知識水準を有してもいた。それがゆえに、

[蛇による不死の略取] [洪水伝承] [黄金の林檎]

を複合的な意味での媒介項目にしつつ『ギルガメシュ叙事詩』と結びつく[楽園喪失]の物語を「確信犯的隠喩を込めた」ものとして構築することができた——以上が[人間レベルの恣意性の介在]を十二分に証するうえでその充足が求められる[仮説]のひとつとなるわけだが、ミルトンの時代には『ギルガメシュ叙事詩』は歴史の闇に埋もれており、それがアッシュールバニパル王に由来するとされるニネヴェ(アッシリア首府)の図書館遺構から「再」発見されたのは19世紀後半にてのこと、ミルトン時代にはそちら『ギルガメシュ叙事詩』のプロットが伝わっていなかったと解されるようになっていたとある(出典(Source)紹介の部 59)／それについては[ジウストラ][アトラ・ハニス]にまつわるメソポタミア由来の洪水伝承について「も」同文のことが当てはまると本稿で解説済みである)。その点、[往古にての洪水神話]との兼ね合いではミルトンの時代には確かに古代キリスト教著述家たるエウセビオス経緯で[クロノス神(と表される存在)より警告がなされてのバビロニア洪水伝承]の方は伝わっていたとの節があり、また、ローマ期文人のオヴィディウス『変身物語』印刷版などに見るギリシャ洪水神話([デウカリオンの物語])の方に至ってはミルトン活動年代近辺の欧州文人ら(込み:数十年前に活動のウィリアム・シェイクスピア)が幅広くも知るところとして「確実に伝わっていた」とのことがありもすることが容易に摘示できるようになっている(出典(Source)紹介の部 60(2))に先後しての部を参照のこと。[近代まで発見されておらず再発見に伴いその筋立てが問題になった碑文ら]と[ミルトン時代にまで活版印刷にかけられるとの形態で残置していたとの伝承]の差分の問題ともなる)。だが、それでも、[クロノスの警告がなされてのバビロニア洪水伝承]および[デウカリオン伝説]らと『ギルガメシュ叙事詩』の内容の差異は埋められるものではない([蛇による不死の略取]といった要素はギルガメシュ伝承にユニークなものと解されるようになっていた)／出典(Source)紹介の部 60(2)に後続する部を参照のこと)。また、他面、文豪ミルトンが人間一個の知識として[黒海洪水伝承]のことまでを把握していた可能性についてであるが、そちらは確かに「ありうる」とのことになっている。というのも、逍遙学派の哲人(ストラトス)のマイナーな言行録、そちらにサモトラケ界隈の伝承・黒海洪水に通ずる部が含まれていると解されるようになっていたりするからである(出典(Source)紹介の部 58(4))にて引用のジェイムズ・フレイザーの著作 Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law (完訳ではなく抄訳なされての邦訳版タイトルは『洪水伝説』(国文社))の内容による——」

[仮定 2]

「ミルトンがダンテと同様に[地獄門の先にある領域でのルシファーの災厄]がらみで[(今日的な意味で見た場合の)ブラックホール類似物]について描写しているのは[ただの偶然]である」



[仮定 3]

「[911の前言]といった要素を多重的に含む文物らが世に存在していることについては——それが恣意的な挙動であると解されるとの理由については先にも挙げ連ねているが(そして本稿のこれよりの段でも[追加となる論拠らの束]をいやと言うほどに挙げ連ねていく所存であるが)——すべて[偶然の賜物]に起因するところとしてそういう外観が呈されていたか、あるいは、一部にてそういうことが起こされることを知らされていた相応の人間らがいたうえでの[人間レベルの(人間だけによる)陰謀]で片が付くことになる」

[仮定 4]

「CERNの[実験]が(先述の1992年のアトラス実験グループ名称策定の折から)[911の前言]といった要素を複合的に含んでいる作品ら]と結びついているのは[ただの偶然]である。あるいは、そうではなく、[恣意]であるとしても人間レベルの思惑に留まるものである。また、CERNの[実験]が[アトラス・トロイア・アトランティスとの寓意]と結びつけられているの「も」(「そうする必然性は理解しがたいところだが」)全て人間レベルの相応の恣意の賜物である」

[仮定 5]

「実験当事者機関の発表動向では「2001年から、」(1998年の理論動向の変遷を受けて)ブラックホールの人為生成が[現実的なもの]として観念されることになったとされている(先に詳述のことである)。それ以前は現行および将来の加速器のエネルギーではブラックホールは生成されるとは認められていなかったし、関係者の口の端に上ることもなかった(本稿の前半部、[出典\(Source\)紹介の部 1](#) および [出典\(Source\)紹介の部 2](#)を包摂しての詳説部を参照のこと)。にも関わらず、「ブラックホール生成問題の寓意と結びついているとのことがある」先覚的かつ隠喩的な言及が——アトランティスやトロイアに関わるようなところとして——多数作に渡っての[共通コンテキスト]より見出せるようになってきているとのことがあるのは[偶然の賜物]か[一部の物理学者に「そういう」認識があったのにも関わらずそれが表に出なかったこと]に由来している」

以上の[仮定1]から[仮定5]の過半が[真実]であるとのことにならなければ、本稿にてのここまでの段にあって述べてきたとの奇怪性は払拭されるものではない——さらにもって述べれば、「たかだかもってしての本稿にてのここまでの段にあって述べてきた奇怪性「からして」払拭されるものではない」とのことでもある。本稿にては「よりもって」問題となるところの束、束、束をこれよりもって紹介し、詳説を加えていく所存であるとしつつも、申し述べておくところとして、である——。

につき、(唐突とはなるが、)筆者は普通人以上に社会の上も下も、表も裏も知っている人間であるとのつもりである。

そのようにもって任じているとの筆者だが、といった身として望見、次いで、深々と諸方面を観察してきた限り、我々人間の社会にては

[ロボットのように唯々諾々と何でもするような人間]

[ロボットのように自分で主体的に何かを知ろうとしたり考えたりする能力を「そもそももって」持

ち合わせていない(奪われている)との人間]

が「あまりにもたくさんいる」との心証を得るに至っている。

そして、といった中にて、

[先覚性との点で明らかに不自然であるとの事物の山]

がロボットのような存在へと墮しているようである向きの背後にある、

[(一切語られざるものとしての)「本当のところの」機序]

によって導出されているとの心証を得るにも至ってもいる(たとえば、文明社会で求められる事理弁識能力をはなから有していない、基本的なことを知らぬし、考えぬであろうといった按配の未開人が[高度な科学的トピック]に言及している、それも彼ら知見では導き出せないとの[高度な科学的トピック]につき非常に隠喩的かつ非常に凝った式で言及しているとのことがあれば、[不自然なることである](背後に自然ならざる情報伝達の事情が存する)、そう思って然るべきところであろう)。

といった心証を得るに至っているとの者としての本稿筆者は

[多くの「普通の」人間が[ア・プリオリ(先覚的認識の領分)]あるいは[知らずともよしの領域]のこととして[呑み込んでいる]ことの「背面の」問題]

を徹底検証しようとしてきたとの者、[ロボット人間]を動かす機序、[ロボット人間]が絶対に自分自身で煮詰めようとしないうし、見もしないだろうとの機序の問題をできる範囲で徹底検証しようとしてきたとの者「でも」ある(：につき、筆者がその動きに不快な思いを幾度となく覚えさせられもしてきたとのロボット人間ら、とのことで述べれば、である。[主体的に何かを考えることを放棄する生き方を強制されているないし承諾しきっているカルト宗教の徒ら]あるいは[低劣な環境に置かれていたがゆえに思考能力など獲得できなかったとの社会的状況の囚人 一生育環境上、知的能力も共感能力も得られなかったような向きの]にとどまらず、ナロー・サイド・ビュー、視野角狭くも毎日定刻にて電車にて通勤し、『付ける必然性もなかりうに』と手前なぞが見立てているような[マスク]越しに時にもごもごと口を動かしながら窮屈な生き方を強いられているとの[社会の成員]らも[「あれなければこれなし」との制約を徹底的に受けているとの向きの]、[ロボットのような生き方を強いられている人間たち]の範疇に入ることか、とも見ている——[凄まじい[慣性]の力]([日常という名の現状]に対する社会維持の力)を感じもさせる朝の通勤ラッシュにての人の流れ、海魚の魚群が如き人の流れを一步引いて見た際に、そこに[ロボットのような生き方を不変なるものとして強いる力学]を感じる向きも多いのでなかりうか、と手前などは見てきたのだが、「常識的に」述べれば、そういうことにも通底することである——)。

そうした経緯から本質的問題——我々人間の社会が「物」「心」両面で枠をはめられてのロボット人間で溢れかえっているとのこと——がそこに「ある」とらえもするに至っている中で、「常識(と規定されての枠組み)に基づいて」回っていくように見えもしつつもの人間社会の現状を脇目にしつつも、

**「[仮定1]から[仮定5]がいずれかが成り立たないのであるならば——(その点、初等数学で問題となるような記号論(初等数学でもその把握を強いられるとのド・モルガンの法則と接合する記号論)に立脚しての言いようをなせば、[[仮定1]から[仮定5]のすべてが成り立つ]の[否定的状況]は[[仮定1]から[仮定5]のいずれかが成り立たない]とのことになる)——、あるいは、それらのうちいずれかが成り立たないのであろうと[自然に解される]とのことがあるのであれば、[偶然]ないし[恣意]で物事を本件に片付けることはおよそできない」**

との訴求をなしているのがここでの話である(：[仮定1]から[仮定5]はそのどれかがなりたないだけで異様さが際立つとの論拠を本稿にてのここまでの段で呈示してきたことでもある。そして、それは[偶然]ないし[恣意]で片付けられないならば、[要・対策]ということになるとの性質の話ともなる。にも関わ

らず、[対策]をなんらなさぬのであれば、[暗君騒乱で殺されようとも同情する者なし]の結果を — 自分で何かを考えることもせず、それがゆえに、建設的に[こと]を起こそうなどとするのはついでないとの意志薄弱なる暗君が「自由度を奪う魂の領域での呪い」や「教育」や「システム」にて造られた存在でも — 「至当なること」と看做されることになってしまうだろうと手前なぞも考えるところである（のような中、無念でならぬのは [暗君にて象徴される社稷(国家)というものが騒乱にて滅するときに民が不可避免的に巻き添えを食らう] ように自身および自身の守らねばならぬと見るものらも [すべて道連れになる流れ] があるという知識・情報(本稿にて多く論拠に基づき呈示のもの)が手前手元にある、そして、にも関わらず圧倒的無力の領域に放逐されている節があるとのことである)。

(ここまでに [1] から [4] (うち、[3] では  $\alpha$ (アルファ)から  $\varepsilon$ (エプシロン)に分割しての振り返りまとめ表記をなし、直前[4]の部では[仮説 1]から[仮説 5]との本稿内容に反する仮説 — 仮にそれが計数的観点を伴っての分析の対象となると見た場合には、帰無仮説、「本稿のここまでの段にあつて呈示してきたところに由来する」懸念を無に帰す仮説とも表せようものたりうる仮説 — を呈示した) と振ってのことに一区切りを付けることとする)

以上をもってして「長大な」本稿をおおよそにして三パートに分けてのものと見た場合の前半部とする(続けもして、本稿これまでの段にて述べてきたことに伴う(【偶発性】の対極にあるとの)【恣意性】の濃厚さ、それは悪意の濃厚さでもあるが、について遺漏なくも典拠となるところを多角的に指し示すべくもの中段部に入る)。



## 本稿摘示事項を支える各【典拠紹介部】ら、それら掲載頁の一覧 (全巻共通表記部)

### 第一巻 (vol.1) にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典 (Source) 紹介の部 1 : p.39－p.52	出典 (Source) 紹介の部 17-4 : p.213－p.217
出典 (Source) 紹介の部 2 : p.53－p.59	出典 (Source) 紹介の部 18 : p.228－p.231
出典 (Source) 紹介の部 3 : p.59－p.70	出典 (Source) 紹介の部 19 : p.234－p.236
出典 (Source) 紹介の部 4 : p.72－p.81	出典 (Source) 紹介の部 20 : p.236－p.240
出典 (Source) 紹介の部 5 : p.84－p.90	出典 (Source) 紹介の部 20-2 : p.244－p.249
出典 (Source) 紹介の部 6 : p.98－p.105	出典 (Source) 紹介の部 20-3 : p.252－p.256
出典 (Source) 紹介の部 7 : p.105－p.114	出典 (Source) 紹介の部 20-4 : p.259－p.262
出典 (Source) 紹介の部 8 : p.115－p.118	出典 (Source) 紹介の部 20-4 (2) : p.263－p.265
出典 (Source) 紹介の部 9 : p.119－p.123	出典 (Source) 紹介の部 21 : p.271－p.274
出典 (Source) 紹介の部 10 : p.133－p.147	出典 (Source) 紹介の部 21-2 : p.275－p.276
出典 (Source) 紹介の部 11 : p.157－p.163	出典 (Source) 紹介の部 21-3 : p.277－p.279
出典 (Source) 紹介の部 12 : p.172－p.175	出典 (Source) 紹介の部 21-3 (2) : p.280－p.281
出典 (Source) 紹介の部 13 : p.175－p.177	出典 (Source) 紹介の部 21-4 : p.287－p.289
出典 (Source) 紹介の部 14 : p.177－p.184	出典 (Source) 紹介の部 21-5 : p.292－p.294
出典 (Source) 紹介の部 15 : p.186－p.189	出典 (Source) 紹介の部 21-5 (2) : p.295－p.297
出典 (Source) 紹介の部 16 : p.193－p.195	出典 (Source) 紹介の部 22 : p.319－p.320
出典 (Source) 紹介の部 17 : p.199－p.200	出典 (Source) 紹介の部 22-2 : p.320－p.322
出典 (Source) 紹介の部 17-2 : p.203－p.205	出典 (Source) 紹介の部 23 : p.323－p.325
出典 (Source) 紹介の部 17-3 : p.209－p.212	出典 (Source) 紹介の部 24 : p.328－p.333

出典(Source)紹介の部 25 : p.337—p.339	出典(Source)紹介の部 37-3 : p.559—p.562
出典(Source)紹介の部 26 : p.344—p.346	出典(Source)紹介の部 37-4 : p.569—p.571
出典(Source)紹介の部 26-2 : p.347—p.350	出典(Source)紹介の部 37-5 : p.572—p.575
出典(Source)紹介の部 27 : p.352—p.356	出典(Source)紹介の部 38 : p.596—p.598
出典(Source)紹介の部 28 : p.362—p.363	出典(Source)紹介の部 38-2 : p.598—p.602
出典(Source)紹介の部 28-2 : p.363—p.365	出典(Source)紹介の部 39 : p.611—p.619
出典(Source)紹介の部 28-3 : p.366—p.369	出典(Source)紹介の部 40 : p.624—p.626
出典(Source)紹介の部 29 : p.412—p.416	出典(Source)紹介の部 41 : p.629—p.631
出典(Source)紹介の部 30 : p.416—p.417	出典(Source)紹介の部 41( 2) : p.638—p.639
出典(Source)紹介の部 30-2 : p.418—p.419	出典(Source)紹介の部 41( 3) : p.642—p.643
出典(Source)紹介の部 30-2 (2) : p.420—p.422	出典(Source)紹介の部 41 (4) : p.644—p.645
出典(Source)紹介の部 31 : p.436—p.437	出典(Source)紹介の部 41 (5) : p.646—p.648
出典(Source)紹介の部 31-2 : p.437—p.439	出典(Source)紹介の部 41 (6) : p.648—p.649
出典(Source)紹介の部 32 : p.441—p.443	出典(Source)紹介の部 42 : p.654—p.657
出典(Source)紹介の部 32-2 : p.443—p.446	出典(Source)紹介の部 43 : p.658—p.662
出典(Source)紹介の部 33 : p.452—p.456	出典(Source)紹介の部 44 : p.667—p.668
出典(Source)紹介の部 33-2 : p.459—p.462	出典(Source)紹介の部 44-2 : p.669—p.670
出典(Source)紹介の部 34 : p.501—p.503	出典(Source)紹介の部 44-3 : p.671—p.673
出典(Source)紹介の部 34-2 : p.504—p.506	出典(Source)紹介の部 44-3 : p.674—p.677
出典(Source)紹介の部 35 : p.529—p.533	出典(Source)紹介の部 45 : p.680—p.687
出典(Source)紹介の部 36 : p.535—p.538	出典(Source)紹介の部 46 : p.695—p.701
出典(Source)紹介の部 36( 2) : p.538—p.540	出典(Source)紹介の部 47 : p.702—p.710
出典(Source)紹介の部 36(3) : p.543—544	出典(Source)紹介の部 48 : p.721—p.723
出典(Source)紹介の部 37 : p.552—554	出典(Source)紹介の部 49 : p.723—p.726
出典(Source)紹介の部 37-2 : p.554—p.558	出典(Source)紹介の部 50 : p.728—p.731



出典(Source)紹介の部 51 : p.739—p.744	出典(Source)紹介の部 57 : p.879—884
出典(Source)紹介の部 52 : p.747—p.755	出典(Source)紹介の部 58 : p.886
出典(Source)紹介の部 53 : p.756—p.758	出典(Source)紹介の部 58(2) : p.887—p.888
出典(Source)紹介の部 53(2) : p.758—p.760	出典(Source)紹介の部 58(3) : p.889—p.890
出典(Source)紹介の部 53(3) : p.761—p.764	出典(Source)紹介の部 58(4) : p.891—p.894
出典(Source)紹介の部 53(4) : p.765—p.768	出典(Source)紹介の部 59 : p.908—p.911
出典(Source)紹介の部 54 : p.769—p.770	出典(Source)紹介の部 60 : p.913—p.915
出典(Source)紹介の部 54(2) : p.771—p.774	出典(Source)紹介の部 60(2) : p.924—p.935
出典(Source)紹介の部 54(3) : p.775—p.780	出典(Source)紹介の部 60(3) : p.983—p.984
出典(Source)紹介の部 54(4) : p.780—p.783	出典(Source)紹介の部 61 : p.996—p.1001
出典(Source)紹介の部 55 : p.801—p.825	出典(Source)紹介の部 61(2) : p.1002—1003
出典(Source)紹介の部 55(2) : p.831—p.835	出典(Source)紹介の部 62 : p.1009—p.1014
出典(Source)紹介の部 55(3) : p.839—p.847	出典(Source)紹介の部 63 : p.1031—p.1036
出典(Source)紹介の部 56 : p.861—p.865	出典(Source)紹介の部 63(2) : p.1036—p.1038
出典(Source)紹介の部 56(2) : p.868	出典(Source)紹介の部 63(3) : p.1039—p.1059
出典(Source)紹介の部 63(4) : p.1072—p.1080	

第二巻 (vol.2) にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典(Source)紹介の部 64 : p.11—p.12	出典(Source)紹介の部 64(8) : p.30—p.32
出典(Source)紹介の部 64(2) : p.13—p.14	出典(Source)紹介の部 64(9) : p.33—p.34
出典(Source)紹介の部 64(3) : p.14—p.15	出典(Source)紹介の部 64(10) : p.38—p.39
出典(Source)紹介の部 64(4) : p.16—p.18	出典(Source)紹介の部 65 : p.60—p.61
出典(Source)紹介の部 64(5) : p.18—p.20	出典(Source)紹介の部 65(2) : p.65—p.66
出典(Source)紹介の部 64(6) : p.20—p.23	出典(Source)紹介の部 65(3) : p.76—p.82
出典(Source)紹介の部 64(7) : p.25—p.27	出典(Source)紹介の部 65(4) : p.83—p.89

出典(Source)紹介の部 65 (5) : p.103—p.108

出典(Source)紹介の部 65 (6) : p.110—p.115

出典(Source)紹介の部 65 (7) : p.118—p.121

出典(Source)紹介の部 65 (8) : p.123—p.125

出典(Source)紹介の部 65 (9) : p.134—p.137

出典(Source)紹介の部 65 (10) : p.150—p.154

出典(Source)紹介の部 65 (11) : p.165—p.166

出典(Source)紹介の部 65 (12) : p.166—p.167

出典(Source)紹介の部 65 (13) : p.168—p.171

出典(Source)紹介の部 65 (14) : p.177—p.180

出典(Source)紹介の部 65 (15) : p.180—p.181

出典(Source)紹介の部 66 : p.191—p.198

出典(Source)紹介の部 67 : p.220—p.228

出典(Source)紹介の部 68 : p.232—p.234

出典(Source)紹介の部 69 : p.234—p.238

出典(Source)紹介の部 69 (2) : p.239—p.244

出典(Source)紹介の部 70 : p.244—p.252

出典(Source)紹介の部 71 : p.253—p.261

出典(Source)紹介の部 72 : p.263—p.269

出典(Source)紹介の部 73 : p.278—p.281

出典(Source)紹介の部 74 : p.286—p.288

出典(Source)紹介の部 75 : p.289—p.293

出典(Source)紹介の部 75-2 : p.294—p.295

出典(Source)紹介の部 75-3 : p.301—p.305

出典(Source)紹介の部 75-3 (2) : p.305—p.307

出典(Source)紹介の部 76 : p.329—p.331

出典(Source)紹介の部 76 (2) : p.334—p.335

出典(Source)紹介の部 76 (3) : p.341—p.342

出典(Source)紹介の部 76 (4) : p.345—p.349

出典(Source)紹介の部 76 (5) : p.352—p.353

出典(Source)紹介の部 76 (6) : p.358—p.360

出典(Source)紹介の部 76 (7) : p.361—p.363

出典(Source)紹介の部 77 : p.369—p.373

出典(Source)紹介の部 77 (2) : p.375—p.377

出典(Source)紹介の部 77 (3) : p.378—p.383

出典(Source)紹介の部 78 : p.411—p.413

出典(Source)紹介の部 78 (2) : p.414—p.416

出典(Source)紹介の部 79 : p.423—p.425

出典(Source)紹介の部 79 (2) : p.426—p.430

出典(Source)紹介の部 80 : p.473—p.475

出典(Source)紹介の部 80 (2) : p.480—p.484

出典(Source)紹介の部 80 (3) : p.484—p.490

出典(Source)紹介の部 81 : p.502—p.505

出典(Source)紹介の部 82 : p.554—p.555

出典(Source)紹介の部 82 (2) : p.568—p.571

出典(Source)紹介の部 82 (3) : p.571—574

出典(Source)紹介の部 82 (4) : p.576—578

出典(Source)紹介の部 82 (5) : p.579—p.581

出典(Source)紹介の部 82 (6) : p.586—p.602

出典(Source)紹介の部 83 : p.622—p.624

出典(Source)紹介の部 84 : p.627—p.643

出典(Source)紹介の部 85 : p.654—p.659

出典(Source)紹介の部 86 : p.661—p.665

出典(Source)紹介の部 87 : p.686—p.691

出典(Source)紹介の部 87 (2) : p.699—p.705

出典(Source)紹介の部 87 (3) : p.721—p.723

出典(Source)紹介の部 87 (4) : p.725—p.728

出典(Source)紹介の部 87 (5) : p.749—p.752

出典(Source)紹介の部 88 : p.861—p.864

出典(Source)紹介の部 89 : p.924—p.926

第三巻(vol.3)にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典(Source)紹介の部 90 : p.18—p.24

出典(Source)紹介の部 90 (2) : p.26—p.32

出典(Source)紹介の部 90 (3) : p.36—p.42

出典(Source)紹介の部 90 (4) : p.45—p.48

出典(Source)紹介の部 90 (5) : p.50—p.52

出典(Source)紹介の部 90 (6) : p.54—p.56

出典(Source)紹介の部 90 (7) : p.59—p.61

出典(Source)紹介の部 90 (8) : p.61—p.65

出典(Source)紹介の部 90 (9) : p.65—p.67

出典(Source)紹介の部 90 (10) : p.78—p.80

出典(Source)紹介の部 90 (11) : p.85—p.92

出典(Source)紹介の部 91 : p.142—p.145

出典(Source)紹介の部 92 : p.145—p.149

出典(Source)紹介の部 93 : p.157—p.168

出典(Source)紹介の部 94 : p.170—p.174

出典(Source)紹介の部 94 (2) : p.174—p.176

出典(Source)紹介の部 94 (3) : p.178—p.183

出典(Source)紹介の部 94 (4) : p.186—p.189

出典(Source)紹介の部 94 (5) : p.192—p.195

出典(Source)紹介の部 94 (6) : p.196—p.201

出典(Source)紹介の部 94 (7) : p.202—p.207

出典(Source)紹介の部 94 : p.231—p.235

出典(Source)紹介の部 95 (2) : p.236—p.243

出典(Source)紹介の部 95 (3) : p.244—p.248

出典(Source)紹介の部 95 (4) : p.255—p.259

出典(Source)紹介の部 95 (5) : p.260—p.263

出典(Source)紹介の部 95 (6) : p.265—p.269

出典(Source)紹介の部 95 (7) : p.270—p.279

出典(Source)紹介の部 95 (8) : p.281—p.292

出典(Source)紹介の部 95 (9) : p.301—p.309

出典(Source)紹介の部 96 : p.311—p.320

出典(Source)紹介の部 96 (2) : p.322—p.324

出典(Source)紹介の部 97 : p.354—p.371

出典(Source)紹介の部 98 : p.414—p.417

出典(Source)紹介の部 99 : p.462—p.468	出典(Source)紹介の部 104 : p.690—p.695
出典(Source)紹介の部 100 : p.540—p.542	出典(Source)紹介の部 105 : p.696—p.721
出典(Source)紹介の部 101 : p.545—p.553	出典(Source)紹介の部 106 : p.731—p.736
出典(Source)紹介の部 102 : p.559—p.562	出典(Source)紹介の部 106 (2) : p.736—p.738
出典(Source)紹介の部 102 (2) : p.562—p.564	出典(Source)紹介の部 106 (3) : p.738—p.742
出典(Source)紹介の部 102 (3) : p.565—p.568	出典(Source)紹介の部 106 (4) : p.751—p.753
出典(Source)紹介の部 102 (4) : p.569—p.577	出典(Source)紹介の部 106 (5) : p.754—p.755
出典(Source)紹介の部 102 (5) : p.577—p.587	出典(Source)紹介の部 106 (6) : p.761—764
出典(Source)紹介の部 102 (6) : p.592—p.599	出典(Source)紹介の部 107 : p.771—774
出典(Source)紹介の部 102 (7) : p.600—p.601	出典(Source)紹介の部 107 (2) : p.774—p.777
出典(Source)紹介の部 102 (8) : p.603—p.609	出典(Source)紹介の部 108 : p.784—p.788
出典(Source)紹介の部 102 (9) : p.618—p.623	出典(Source)紹介の部 109 : p.892—p.895
出典(Source)紹介の部 103 : p.635—p.637	出典(Source)紹介の部 109 (2) : p.897—p.900
出典(Source)紹介の部 103 (2) : p.638—p.642	出典(Source)紹介の部 109 (3) : p.900—p.902
出典(Source)紹介の部 103 (3) : p.642—p.652	出典(Source)紹介の部 109 (4) : p.905—p.908
出典(Source)紹介の部 103 (4) : p.652—p.654	出典(Source)紹介の部 109 (5) : p.917—p.935
出典(Source)紹介の部 103 (5) : p.654—p.657	出典(Source)紹介の部 109 (6) : p.939—p.942
出典(Source)紹介の部 103 (6) : p.658—p.676	

第四巻 (vol.4) にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典(Source)紹介の部 110 : p.19—p.33	出典(Source)紹介の部 110 (5) : p.63—p.74
出典(Source)紹介の部 110 (2) : p.39—p.43	出典(Source)紹介の部 110 (6) : p.76—p.81
出典(Source)紹介の部 110 (3) : p.49—p.52	出典(Source)紹介の部 110 (7) : p.86—p.95
出典(Source)紹介の部 110 (4) : p.57—p.58	出典(Source)紹介の部 110 (8) : p.104—p.105

出典(Source)紹介の部 111 : p.119—p.121

出典(Source)紹介の部 116 : p.609—p.612

出典(Source)紹介の部 112 : p.183—p.190

出典(Source)紹介の部 117 : p.661—p.662

出典(Source)紹介の部 113 : p.241—p.244

出典(Source)紹介の部 117 (2) : p.664—p.668

出典(Source)紹介の部 113 (2) : p.290—p.295

出典(Source)紹介の部 117 (3) : p.668—p.672

出典(Source)紹介の部 114 : p.357—p.360

出典(Source)紹介の部 118 : p.677—p.680

出典(Source)紹介の部 115 : p.554—p.557

※ 本稿にあって区分けの上で多くの紙幅をそこに割いているとの補説部、そちら補説部各部の記載頁についてもここに表記しておく

出典(Source)紹介の部 115 (2) : p.561—p.562

補説 1 の部 : p.9—p.213 ,vol.2

出典(Source)紹介の部 115 (3) : p.563—p.568

補説 2 の部 : p.234—p.927,vol.2

出典(Source)紹介の部 115 (4) : p.600—p.602

補説 3 の部 : p.8—p.537 ,vol.3

出典(Source)紹介の部 115 (5) : p.603—p.607

補説 4 の部 : p.537—p.1035 ,vol.3



【典拠紹介部ら一覧に付しもしての表記として】

上掲図は

【ギリシャ神話に見るケンタウロスと戦争をなすに至った部族ラピス族(の男)とケンタウロスの戦いを象(かたど)った彫刻】を挙げもしてのものとなる。

同・彫刻作品 — Centaur and Lapithとの題の彫刻作品— にてモチーフとされている半人半馬の存在、

【ケンタウロス (Centaur)】

があまりにも異様な予見的言及に通じているとのことがある。

具体的にはケンタウロスのうちの固有名詞付きの著名な存在、【ケイロン】および【ネッソス】という存在が

【妻を陵辱しようとしたケンタウロス (の【ネッソス】) を殺害するに至った著名なるギリシャ神話英雄たるヘラクレスありよう】

を介して重篤なる予見的文物 — 後の日にあっての加速器関連の「ブラックホール生成にまつわる」リスク論議の細かきありようという往時にはどんな専門家も予見できなかったはずであるとのことを「克明に」予見しているとの1980年初出文物 — の内容に、そして、ブラックホール生成可能性が問題視されることになった史上最大の科学実験とされるLHC実験そのものに悪質な式で関わっているとのことが指摘できてしまう、【現象】としてはきとそこにあることとして指摘できてしまうとのことがありもし、本稿ではそのことの遺漏無くもの摘示に努めている (：直前出典紹介部一覧にてそちら掲載ページ数も無論にして呈示しているとの典拠紹介部 110 から典拠紹介部 110 (8) との出典紹介部を包摂する部の内容、四巻構成の本稿における第四巻 (vol.4) におけるp.19からp.116の内容が【自身を欺き、妻を陵辱しようとしたケンタウロス・ネッソスを殺害するヘラクレス】がブラックホール生成にまつわる克明なる予見文物に何故もってして関わっているのかの【多重的論拠】を仔細に呈示せんと心掛けての部となる)。

以上表記のこと — いいだろうか、異様な先覚性を帯びての加速器によるブラックホール生成にまつわる予見事物、そして、後にブラックホール生成が取り沙汰されるに至ったLHC実験というものそれ自体の双方が (ギリシャ神話英雄たる)ヘラクレスにまつわる【特定の属性】とはきと結びついているとのことが「ある」のである — がどうして「極めてもってして問題になる」のかについては本稿の内容をきちんとご検討いただければ、ご理解いただけるであろうとのこと、ここに請け合わせていただく次第である。



— 生きようとする人の意志に —

## 【著者および著作権について】

はきと述べて自身このありようなどどうでもいい、売名行為も「ビジネス」(なるもの)の範疇に入るのだろうとの種別の人間、あるいは、他の何らかの理由がゆえに名をなさんとする(鼻につく虚栄心であれ、英雄願望であれ、生き方それ自体をおのが作品としたいとの芸術家の美意識のあらわれであれ名をなさんとする)との願望を持ち合わせている向きよろしくおのれのことを知ってもらいたくてこの身は本稿の公開・頒布を試みているわけ「ではない」(その点からして勘違いしないでいただきたい)。

本稿 — (都度もってしての改訂を試みながら作製してきた **Entities that physicists refer to as Black holes , already fulfilled many extraordinary Predictions , and firm Guilty Intent『物理学者の類がブラックホールとよびならわしている存在ら、既に実現を見てきた異様な予見的言及、そして、確たる他害意志の介在問題について』**と(内容そのままに題しての)本稿) — の節々の記載内容をもってして[悟性]伴った向きにはお分かりいただけることか、と思うのではあるが、筆者は自身および自身が守るに値するのとらえた向きらが物理的に生き残る術、

### 【環境変化によって「物理的に」生き残る術】

を模索して本稿の指摘事項の適正なる拡散を試みているのであってそこにあつてはサーカス小屋と自身が目しきるに至ったこのような世界で「システムの翳間(太鼓持ち)・大道芸者・サーカスの子供ら」がそうするように矮小なる名を売ろうなどの意図・観点はない(この身は多くの虚偽・偽善が平然とまかりとおるこの世界にて表舞台にて見得を切っている[名をなしての富貴なる者・権勢ある者・学識(なるもの)を伴った向き]ら、そして、彼らとときに紐付いている社会貢献・慈善活動(なるもの)をして[状況がなんら分かっていないところ]に産がある、誰も永らえることができない死刑場における囚人の楽観主義がごとくところから発しているようではある、しからずんば、非人間的な空虚さに根があるやもしれぬとの意で胡散臭く見ているとの筋合いの人間である。そうした見方をなしている人間として本稿を世に[名] — 死ねば所詮は無であるのもの — や[道徳観点;善や良俗にまつわる自己の偏波な価値観]を押し売りせんとする観点でもしているわけ「ではない」。よくよく斟酌いただきたいところとして、本稿執筆の背景にある「思考」とのことでは、我々が暮らすこの地球という水槽が人の住めぬものになったならば、おのれ・縁者も死ぬし、人間存在 — 羊のような従順さ・ロボットのような空虚さ・見え透いた愚昧さ・陋劣さが後天的に亢進させられている節も濃厚にあるように見受けれるとの式での碌でもないありようばかりが目につく種族ながらも我が属する人間存在 — のうちの徹々たる美風の体現者らも諸共滅びましょう、そうしたことが危惧される(下らぬ宗教的観点などではなく【具体的現象】【具体的兆候】に依拠してのこととして危惧される)中でただただ「物理的生き残り」を図るとの原始的本能に依拠しての観点でもって本稿を作製(十二分に練れたものとして作製)、その中身・指摘事項を世に適正に広めんと試みているにすぎない)。

直上にてそうも述べているようにシステムの用意したサーカスの子供らよろしく名を売ろうとする意図などこの身にはないのではあるが、ただ、(そこは踏むべきかと判じた)[節度]および(社会的にはなく物理的に生き残らんとする上での)[合理的観点]をもってして表記するところとしての筆者(たる大森健史という男)のありようについては、である。

「【情報の体系】(いわばもってしての[ミーム]とでも表すべきもの)を拡散するため、ただそれだけのために時間も最早なかりと考えつつながらも自身が設立した会社(名利嚙蠟出版株式会社という会社)のウェブサイト — (従前訴求事項を反映させるとの式で2012年前半期よりサイト公開をし出したとの社用媒体、本稿を公開することにしたオンライン媒体の一でもあるとの手前が代表を務める会社・名利嚙蠟出版株式会社における社サイト/この身が相応の結末・最期を迎えぬ限りは存続するとのかたち(現行)するつもりであるとのサイト) — にてその点についての最低限の表記をなしているので、そうしたこと、手前ありようなどにも関心がある — すなわちもって、どういった者が問題となることを(それなりの媒体を作製して)指摘しているのかとの意で関心がある — との向きにおかれてはそちらを参照いただきたい」

とまでは申し述べておく。

またもってして、本稿にあつては【著作権表示】を施してもいるが(当頁下部参照のこと)、この期にあつて著作権にまつわつての表示などを取ってもせせこましくもなしているのは

[バンダー(供給者)・供給チャネルを偽りながらも改悪・言論土壌汚染行為](馬鹿げた陰謀論ないしそうしたもののバンダーであるとの相応の手合いらと十把一絡げにしての供給チャネル偽装行為・露骨な劣化言論作出の類を(先後関係など偽りながら)なして情報供給チャネルと情報それ自体に対する印象操作をなし、厳然とある事実関係、その指摘を晦(くら)まし・枉(ま)げるといったやりよう / 上より情報封殺が完遂できない局面におけるオプションととれるやりよう)

などが相応の人間の心性欠如の者ら — 本来ならばそうする理由もないところで[説得力乏しき劣化言論]を目立って拡散なしもしようとの空虚な者ら — によって「そればかりが目立つ」式でなされる可能性を可及的に抑止するための配慮がある(被害妄想がかかっていて信じ難くもあろうが、この身には訴訟をなしていた折より同じくものことの経験がある)がゆえであつて、(そうも著作権表示などなしているのは)なにも「死に往く者」が知的財産権などに対する拘りをこれ滑稽にも呈しているわけでないとのこと、一応もってして断っておく(第三者にその共感を求めるのは一難事かととらえているのだが、自身を「死に往く者」と表しもしての[時間的切迫性]とのことでは、である。「人の将(まさ)に死なんとする、その言や善し」(教条的ではないつもりではある(児孫死滅に通ずる不正に心底からの罵詈雑言などはあるが教条主義的に人に内観や教えといったものを押しつけるようなことはしたくない)、そして、胸中まだ若くあるつもりであるとの人間が引くのは何ではあるかと思うのであるもの儒教というものとの徒・曾子の言として世に知られる言 / 死なぬために本稿の内容を問うつもりではあるとの人間ながらもそうした赤裸々さもまた他面であるとの意で引き合いに出しているとの英語で言うところの「ア・ダイニング・パースン・スピークス・トルルー」)との観点を[状況捕捉を真に望む向きら]に求めたいぐらいに時間的切迫性の問題が見え隠れしている、我が命とていくばくもない、健康面による事由ではなく、また、その他ありとあらゆるマイクロレベル(個人個人レベル)の災難ですらなくいくばくもなろうと当然に判じるだけのことが「ある」のだとここにあつてからして申し述べておきたい — 私はことによっては極近々【人災】(非力なる羊のような者らにとっては神為などと受け取られもするかもしれぬ【人災】)によって「吞まれて」死することとて大いにありうると見ている、自身があと数年、安閑に永らえることに対してすらなんら希望的観測を抱いていない(そうした【人災】と紐付いた「時間的切迫性」にまつわる危惧に通じている「数多の」論拠ら(具体的【現象】に依拠しての「数多の」論拠ら)は本稿にて厭となる程に呈示しているので、理なくしての獣声よろしくの否定、「愚者の否定」(情動的・条件反射的「拒絶」)をなすとの式ではなくにこの身を否定してやりたいと考えもしている向きらにはそれら論拠ら理非を検討いただきたい) — )。